

戦姫絶唱シンフォギアST～Scratched thunder～

兵頭アキラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

フィーネが開発不可能と匙を投げた聖遺物、『ケラウノス』。それとある夫婦が偶然完成させてしまったところから物語は動き出す。

家族を失い、虐待によつて自身を『疫病神』だと思い込む少女、轟雷（トドロキアズマ）。

親友の響や未来に支えられながら人間として、装者として成長していく。

## 目次

ST\Scratched thunder\編

壊れ行く日常

1

雷は、未来へと響き渡る

6

無印編

轟き始める雷鳴

11

雷光を纏いし者

18

家族が残した遺産

24

突きつけられる刃

31

仲たがいする心

35

癖と本音

40

恐怖が生んだもの

46

謝る言葉と防人の意思

51

決意と隠し事

57

翼の目覚め

64

完全聖遺物の力

68

ただ、普通の日曜日

75

違うようで、似てる二人

80

二人の真実、そして・・・

85

不思議な懐かしさ

91

フイーネ怒りの独白

97

決定的な亀裂

102

本当は・・・

106

仲直り、新たな決意、変わらぬ決意

112

違和感のある恋バナ

124

戦いの向こう側にあつた物

夢を守るために

少女の転機

その手は何のために

大人と親友の戦い

殺意の化身

蹂躪、それは無慈悲にも……

雪の夢、翼の思い

友情が生んだ奇跡

勝機を掴め

三人の約束

雷の課金事情と罰ゲーム

雷の設定と初期設定

### G編

頭脳派転じて単純明快

フィーネを継ぐもの

非現実的な要求

稲妻の逆鱗

建前で心に言い訳を

懐かしい夢

少しずつ変わっていった一週間

祝福する太陽

無からの奇襲

疑われるシロ

幸せな歌

決闘の申し込み	279
絶望への入り口	286
ココロ、ホウカイ	292
かつての自分のように	299
盲執、執着、依存	304
全てほどけた繋いだ手	310
例え、傷つけるとしても	318
汚したくないから	324
解決の糸口	328
願わぬ再開	334
魔を祓う光、闇へと堕ちて	340
約束の少女くAppleく	346
目覚めし雷	352
フロンティア起動	358
肥大化する欲望	364
思いをのせて	370
鎌と鋸・剣と銃・稲妻と巨人	376
七人の戦姫がそろうまで	382
先輩の矜持、後輩の叫び	388
復活の撃槍	395
世界を繋ぐ歌	401
歌を束ね、想いを重ね、奇跡を為す	407
宝物庫、開門	413
歌が紡ぐもの	420
独房の中で	428

G X 編

新たなる戦いの影

嵐の前の静けさ

未知なる襲撃者

事は同時に、複数に

力の名は錬金術

歌の鎧は崩れ落ち

陽動陽動また陽動

拭えぬ敗北

オートスコアラ―全機起動

雷の推理

胸の中から消えた歌

漆黒の烈槍と黄金の神雷

自分にはないもの

Project IGNITE

ルシフの力

悩み、考え

時を稼げ

届かぬ一步、届いた一步

錬金術師のシンフォギア

ダインスレイフの闇

呪いの旋律を身に纏い

夏の日差しの中で

白銀の左腕は漆黒に染まる

強さとは、自分らしくある事

贅沢な悩みと深刻な悩み	591
守りたいのに守られて、恩返ししたいのに守られて	597
責任を背負うとは	605
自身の闇に、屈服し	614
深き闇に差す光	619
シンカ	625
キーピースの奪い合い	634
剣を冠す者	640
計画の分水嶺	645
翼は風を鳴らして夢へ飛ぶ	650
虫籠の中で蝶は舞う	656
既に制された毒	662
B Y H	667
計画始動	674
父と娘	680
チエツクメイトを打つ者は	688
英雄の名	693
奇跡、降臨	698
手を伸ばせ	705
明日へ	714
X M H   6 6 6	721
I F 雷とウエル	723
戦姫絶唱シンフォギアDENOVA	
AXZ編	
バルベルデ	726
欧州の闇	732

パヴァリアの錬金術師たち	738
取り返しのつかないミス	746
少女たちは諦めない	752
回り始める歯車	760
無敵破りの証明	765
亜空間の檻	771
人よりも国を	778
トマトの味	784
破滅の極光	791
賢者の闇払い	799
到達まであと一歩	804
人とギアとを繋ぐもの	810
消耗戦の先に	818
絆が繋ぐ愛の力	826
明日を開くは何方の拳か	831
二つの一歩一歩	837
賢者に対する愚者	844
ピンチを招かぬように	851
乙女のゲンコツ、漢の矜持	858
独りよがりな戦い方	869
女の勘	875
心の壁を越えて	881
ティマイオス作戦	890
戦姫と錬金術師の共同戦線	897
顕現する神の力	909



神殺しと雷帝

友を守りし防人として

命を懸けた、想いの炎

完全神造生命アダム

全ての想いを背負ってここに

ベランダの語らい

## XV編

極点のタイムカプセル

君が誰かを傷つけるなら

七色の弾丸

かの日の歌

その心、ここにあらず

遺骸をめぐって

手折られる刃

裏側に潜むもの

血を求める者たち

卑しき赤と売国奴

腕輪の起動

知っている不協和音

明日に咲く黄金の華

狙いすました介入

いえない言葉

曇天に響く叫び

大人の仕事

罪なき者たち

変革の予兆	1086
復活の前触れ	1109
オートスコアラ―全機再起動	1101
奇跡の殺戮者	1109
鎧袖一触	1181
フォニツクゲイン	1241
DEA NOVA	1321
造られた命	1391
強き者と弱き者	1451
舞い戻る翼	1541
最後の戦いの始まりの始まり	1601
人類神話	1661
月遺跡への侵入	1721
革命の音楽	1791
恩返し of 勇気と人類の叡智	1851
私達の帰る場所	1911
Star Teardrop	1961
未来を奪還	2041
黎明	2141
ST\Star Teardrop\編	
私の居場所	223
戦姫絶唱シンフォギアXD 世界を壊す瞳	
ST\After S	
tory\	
プロローグ	1229
新たな戦いの序曲	1231

PROJECT・B	1237
ミュニアースの朝	1243
紅蓮の炎	1248
紺碧の海	1255
飛翔する光／宣戦布告	1261
それは正義か悪か	1266
戦う理由	1273
自分らしく	1279
エレクライト解析完了	1285
煉獄への入り口	1291
ミハルの目	1297
否定する重圧と定めた決意	1302
不思議な同盟	1309
ミノタウロスの迷宮	1314
海流の時間	1319
守るものの価値	1324
フランカの覚悟	1330
ミュニアース襲撃	1335
不死鳥の少女	1340

壊れ行く日常

第一開発計画

聖遺物名『ケラウノス』

開発コード シンフォギアシステム第一号

開発主任 櫻井了子

開発結果 開発不可

備考 聖遺物そのものが雷であるため、ギアとして開発することが不可能と判断、この計画を第二開発計画へと回し、次の聖遺物をシンフォギアシステム第一号とする

新・第一開発計画

聖遺物名『天羽々斬』

開発コード シンフォギアシステム第一号

開発主任 櫻井了子

開発結果 成功

備考 このシンフォギアシステムの開発成功により、『櫻井理論』によるギア開発の目的が立つ事となった

第二開発計画

開発主任 轟瞳 轟斗真 夫妻

開発対象『ケラウノス』

開発結果 成功

備考 雷そのものたるケラウノスをギアにするのではなく、ギアをケラウノスにするという逆転の発想をついた理論、『轟理論』にて開発された

適合者 不明（一名該当者がいたが、何者かによって削除。櫻井博士の手をもってしてもサルベージは不可能と判断された）

○○○

私の日常はあの日を境に、音を立てて壊れ始めた。

小学6年生の最後の修学旅行。研究者の両親を持つ私、轟雷（トド

ロキアズマ）は自分の通う小学校の校庭に立ち尽くしていた。

時刻は午後9時。仕事の都合上、いつも遅れてくる両親だったが来ないことは一度もなかったのに。私は階段に座り込んで友達がお父さんやお母さんと帰っていく姿を後ろから黙って見ていることしかできなかった。

先生方も最初のほうは残っていてくれたが、学校を閉める時間になつてはそうはいかない。

結局、迎えに来てくれなかった両親に恨み言を呟きながら、頭の中では帰ったらどんな話をしようかとか、お土産喜んでくれるかな。などの思いで一杯になりながら夜の道を重い荷物をしよって立ち上がる。

もしかしたら弟の出海が病気になつて付きつきりになっているかもしれない。

「すみません先生。私、歩いて帰ります」

「こんな暗いけど、大丈夫？」

「大丈夫です！いざとなれば叫びますんで！」

先生を説得して私は家に向かって歩き始めた。

啖呵を切つたはいいものの、怖がる自分を鼓舞するためにお父さんとお母さんが今年の誕生日プレゼントにくれたアメリカで発掘したらしい赤い石柱みたいなペンダントを握りしめて、お母さんがよく歌つてた「apple」という歌を歌いながら帰路についた。

家の前に着くと、窓から光が漏れていた。やっぱり出海が病気になつたのかもしれない。

仕方ないとはいえ、こんな時間になつても娘を迎えに来ないのかと少しお小言を言うつもりで玄関の扉を開けた。

「お父さん！お母さん！ただいま！こんな時間になつても娘を迎えに来ないってどういうつもり?!」

家中に響くように叫んだが返事が返つてこない。電気が付いているから家にいるはずなのに……。そう思いながら靴を脱いでカバンを玄関に置き、リビングに足を進める。

自分の家なのに、知らない人の家に足を踏み入れた気がした。私は

リビングへの扉を開いた。

「お父さん！お母さん！出海！ただいまって言ったんだから返事ぐらいし……?!?!」

リビングは凄惨な状況だった。白かった壁は家族の血で真っ赤に染まり、カーペットが吸収しきれないほどの血だまりが出来ていた。

その血だまりの中に両親と出海の死体が転がっていて、素人目にも死んでいることが理解できる。

それでも私は服が血まみれになることも構わずに家族の安否を確認した。

「お父さん?!お母さん?!出海?!すっかりして！えええつとこういうときってどうすれば……そ、そうだきゅつ、救急車！あ、あと警察も！」

現場にきた救急車に乗ってた人からは家族はすでに死亡していること。警察の人からは集団自殺、ようは一家心中で命を絶つたらしいことを聞かされたけど、急過ぎて涙は出てこなかった。心はとても悲しいのに。

その日を警察署で過ごした私は家族が死んだことを今になって実感し、大声で泣いた。次の日、私は母がたの叔父と叔母に引き取られることになった。

迎えに来た叔父と叔母は優しそうな人たちで、安心しきった私は叔父の車の中で泣きつかれて眠ってしまった。

次に目を覚ましたのは背中に激しい衝撃が襲ってきたからだだった。肺の中の空気が一気に押し出され、呼吸が出来なくなる。

痛みと急な目覚めによる混乱で頭が回らなかつたが、叔父が私を冷たい目で見降ろしているのだけは理解できた。下はフローリング、私は叔父に背中から床に落とされたらしい。

痛みのにのうち回る私を叔父が上から踏みつぶし、口を開いた。

「お前の家族は、お前が殺したんだよ」

「……どういう……ことですか？」

叔父が私を踏む足にさらに力を籠め、叫んだ。

「そのまんまの意味だ！お前を育てるのにうんざりしたから死んだん

だよ！」

「そんなの嘘だ！」

踏んでいた足を上げると思いつきり腹に向かって蹴りを入れてきた。腕でガードして直撃は防げたが背中から壁に叩きつけられる。

「嘘なものか！ 私たちも壊す気だろう！ この疫病神め！」

その日は一日中暴行が続いた。食事は与えられるわけもなく、鍵付きの部屋に閉じ込められた。空腹はバックに入っていた家族のお土産用に買っていたお菓子でしのぐことにした。

この日から私の地獄のような日々が始まる。

殴る蹴るは当たり前。タバコの火を腕や足に当てられたり、ナイフを自分で体に刺せと言われたりしたし、泣いたり言うことを聞かなかったら風呂に頭を沈められた。さすがに死ぬかと思った。

1週間ぐらいいたったところ、お菓子も尽きて空腹が限界になったので100回ぐらい叔母さんに土下座して、殴られても蹴られても爪をはがされても頼み込んだら何とか食事に取りつけるようにしてもらえた。仏さんぐらいの量だったけど食べれるだけありがたかった、飢え死にすることはなくなつたから。

「おまえは生きている意味がないんだ」とか、「これはお前が疫病神にならないための教育なんだ」とか言われ続けたけど、じきに慣れる、大丈夫。

痛くて眠れない日や泣きたくなつた日はペンダントを握りしめて耐えた。私は学校に行くときは身体中の痣やけがを隠すために包帯でぐるぐる巻きにして登校するようになった。そのことを心配そうに聞いてくる先生や友達を騙すのはつらかったが、バレたら風呂に沈められるので何とか隠し通した。

クリスマスは叔父たちに連れられてレストランで立派な夕食を食べることになり、久しぶりにおなか一杯に食べられると私は心の中で喜んだ。

でも最初に出てきたサラダを飲み込んだ時に私は思い知らされることになる。突然おなかに激痛が走ってトイレに全部吐き出してしまった。その時私は実感した、もう普通の生活はできないんだと。

帰ってから「せつかくお前のような奴を連れて行ってやったというのに」って殴られた。

・・・私をこんな体にしたくせに。

結局、この虐待は中2になるまで続いた。私の怪我を不審に思った先生や、近所の住民が警察に通報したのだ。

明日から私はおじいちゃんとおばあちゃんに引き取られて、近くの中学校に転校することになる。やっぱり私は疫病神だ。



## 雷は、未来へと響き渡る

県立天音中学校2年1組。その教室の黒板の前に雷の姿があった。転校生である彼女の姿にクラス中が騒然としている。何故なら、手足や額を痛ましいほどに包帯でぐるぐる巻きにし、左手をギブスで吊っているからだ。くすんだ金色をした瞳には厭世的な雰囲気か漂っている。そんな彼女は吐き捨てるかのように自己紹介をした。

「轟雷です。よろしく」

「それだけ?! もっと他にないの?」

「ありません」

先生の制止を振り切って開いている机に一直線に向かい、着席する。隣席のオレンジ色の髪をした少女は、机に落書きをされ、教科書等をぼろぼろに切り刻まれていた。

恐らくいじめられっ子なのだろう、先生から無視されているというとは「公認」されているあたり筋金入りだ。雷は小さくため息をつくと、戸惑いの目を向ける担任に授業を始めると目で合図を出す。

「雷さんが怪我をしているのは引越してきてすぐに交通事故に遭ってしまったからです。皆さん、雷さんが困っていたら助けてあげてください」

担任の余計な一言と共に、転校して第一回目の授業が始まった。

○○○

休み時間に入ると、面倒な質問責めに会う前に教室を後にする、後ろから聞こえてくる声は20回ほど無視したところには聞こえなくなっていた。

面倒ごとを振り払って適当に校内をフラフラしていると、どこからか女の子のすすり泣く声が聞こえてくる。気になったので声が聞こえる方へ向かってみたら、隣の席のオレンジ髪のいじめられっ子と黒髪の女の子が抱き合っていた。如何やら泣いているいじめられっ子を女の子が抱いて慰めているらしい。

そう思っていると、偶然黒髪の女の子と雷の目が合う。彼女は私を見てギョツとしていたが、そんなことは無視して雷は善意から彼女に

忠告する。

「いじめられっ子と仲良くしていると君も標的になるんじゃないの？」

その一言に女の子はいじめられっ子を庇うように立って雷に対して怒りの表情を向け、いじめられっ子はおびえたような顔をしている。そして黒髪の女の子は怒気を含んだ声で雷に話しかける。

「今日転校して来たばかりなのに轟さんまで響をいじめるともりなのね」

「へえ、彼女響って名前なの。私は周囲の状況から響さんがいじめられてるのを知っただけで初対面の子をいじめるともりなんてないし、逆に何でそんなことされてるのかをこっちが知りたいくらいよ。あと、ただ私はそんな風に扱われてる子に関わってたら君までそううちやうんじゃない？って忠告しただけ、大きなお世話だったみたいだけど」

正直にすべてを話した雷に対して黒髪の女の子は疑惑の目を向けるが、抱きしめられていた女の子、響は安心した目を向けている。響が女の子に口を開いた。

「未来、雷さんは多分だけど・・・大丈夫だと思う」

「・・・響がそう言うなら・・・」

黒髪の女の子、未来が抱きしめていた腕をほどき、雷と響は向かい合う形になる。雷のほうが少し背が低いため軽く見上げるような状態で、響の口から今に至る経緯が語られる。

事の発端はツヴァイウイングのライブでノイズが大量発生し、多くの死亡者が出た事件から始まる。彼女は未来と二人でライブを見に行く予定だったが、未来が家の都合でドタキャン。結局響一人でライブに行くことになったその日、ライブ中に突如としてノイズが発生し彼女は死の淵をさまよったが生存する。しかし、将来を有望視されていたサッカー部の少年がこの一件で死亡、取り立てて取り柄のない響が生き残り、その少年が死んだのが一人の女子生徒によって糾弾されて現在に至る。ということだった。

「なるほど、理解した。まあ、何されても笑って見返してやればいいんじゃない？生きてることに文句を言われる奴なんて私以外必要ない

よ」

カラカラと笑う雷を見て、最後の一言が気になった二人であったが向かい合って苦笑いをそろって浮かべる。

「ねえ、轟さんの事なんて呼んだらいいかな？」

「私の事は雷って呼んで、そっちの方が他人行儀じゃなくていい」

「わかったよ、雷」

「うん！雷ちゃん！」

「ちゃん付けかー。まあいいやー」

この日から雷、響、未来の三人で行動するようになった。

○○○

響と未来の二人は雷の異常性に向き合うことになる。

三人で行動するようになって一か月がたったころ、その事件は起きた。

ナイフを持った複数の男子生徒が三人の下校途中に姿を現した。恐らくナイフで脅迫し、金を盗るなり身ぐるみ剥いで犯すなりするつもりだったのだろう。生徒の一人がナイフの先端を響に向ける。彼女は体を硬直させ、未来は反射的に響を庇うように立つ。そんな中、雷だけがナイフを向ける少年に向かって歩いていく。そして目の前に立ちほだかり、光を失った金の瞳で少年の目を見つめ返しながら、口を開く。

「そのナイフは何のためにある？標的を脅し、必要とあらば殺すためだろうか？標的が君に危害を加えようとしているぞ？ほら、刺してごらんよ」

「・・・うつ・・・う・・・」

「危ないよ雷！下がってー！」

「雷ちゃん?!」

響と未来が叫ぶ。しかし、雷は聞く耳を持たずにナイフを持った手を握りしめて自身の腹に突き刺させる。制服には赤色が滲んでいき、手から血が滴り落ちる。恐怖のあまり少年はナイフを手放し、地面に尻もちをつく。後ろにいた残りのメンバーはもういない、雷の体にナイフが刺さった時点で蜘蛛の子を散らすように逃げ出したようだ。

呆れと期待外れだというような目線を向けた後、尻もちをついた少年の顔面に回し蹴りを叩きこんで気絶させ、その場にへたりこむ。

「雷ちゃん！すぐ救急車呼ぶから！」

「雷！どうしてこんなことするの?!」

「ごめんね、二人とも。．．私、疫病神だから」

刺さっていたナイフを抜き取ると、それを握りしめたまま右足に何度も何度も突き刺し始めた。

「ふふふ。疫病神はツ．．こうやってツ．．罰を受けないとねツ．．」

「やめて雷ちゃん！そんなことしちやだめだよ！」

「しっかりと雷！正気に戻って！」

ナイフを振り下ろそうとする右腕を響が抑え、未来が正面から体をゆすつて訴えかける。結局、この状態は救急車が到着するまで続いた。

○○○

雷が手術を受けている間にこの事件は傷害事件として扱われ、警察沙汰となった。雷の凶行を見た響と未来の二人は、彼女のことを警察から知らされることになる。

家族が死んで親戚に引き取られ、そこでひどい虐待に遭ってまともな食事がとれなくなったこと。後に祖父母に引き取られ、食生活こそ治った物の虐待の影響で自分が疫病神だと思い込み、何か身の回りで悪いことが起きたら自分のせいだと思い込んで自傷行為を始めること。そんなことに周りを巻き込まないように自殺未遂を繰り返していることが告げられる。手術は無事終了し、二人はすぐに雷のもとに駆け込む。そんな二人の姿を雷を認めると、申し訳なさそうにして口を開く。

「ごめんね。怖い思いさせちゃって、．．私とはもう関わら「駄目！」嫌だよ！」．．え？」

雷の言葉を遮って、響と未来は叫ぶ。

「雷ちゃんのおかげで私は前向きになれた！だから、今度は私が雷ちゃんを疫病神じゃなくしてみせる！」

「辛いこととか嫌なことがあったら私達が雷を支えるから！だから自

分の体をもつと大切にしてい！」

「・・・そんなこと・・・言わないでくれよ・・・。そんなこと言われたら私、・・・一緒にいたくなっちゃうじゃないかあ・・・」

雷はシーツを握りしめて俯き、目から流れ出る雫と一緒に言葉をこぼす。響と未来は優しく彼女を抱きしめる、胸元で赤いペンダントが夕日を反射してキラリと輝いた。

結局、中学を卒業しても雷の自傷癖や自殺衝動が治ることはなかったが、雷、響、未来の三人の関係が壊れることはなく、未来の進学する高校に一緒に行くことになった。

私立リディアン音楽院。この場所から、さらなる物語が幕を開ける。

## 無印編

### 轟き始める雷鳴

私立リディアン音楽院高等科の入学式を終え、同じクラスとなったいつものように包帯まみれの雷と未来の二人は自身の机に座って、顔合わせの挨拶が始まるまで話し合っていた。話題は今ここにいない響のことだった。

「ところで未来、響はどこ行ったの？」

「響なら木に登って降りられなくなった子猫を助けに行ったわ」

「・・・クラス会が始まるまでに戻ってこれればいいけど・・・」

「大丈夫よ・・・たぶん・・・きつと・・・」

雷の言葉に苦笑いを浮かべながら返事をする未来だったが、だんだんとその言葉尻が弱くなっていく。少し目をそらした未来だったが、雷の首の周りについた痣を見て彼女の目がスツと座る。さつきまでとは異なる平坦な口調で未来は雷に話しかける。

「ねえ、雷。その首の周りの痣、何？」

「?!え、えつとこれはあ・・・ね、寝てる間に携帯の充電コードがあ、その、絡まつちやって・・・」

「ソレ、縄の模様が見えるんだけど・・・」

「ウソお?!すっかりとタオルを挟んであとが残らないようにしたのに?!・・・あつ」

「雷あ・・・」

未来が雷に詰め寄る。彼女は表情こそ笑っていたが、目は笑っていなかった。雷はいつもの自殺衝動が起きて縄で首を吊ろうとしたが、長さの調整を失敗し、呼吸が出来ずに暴れていたところを倒したはずの椅子の上に立つことが出来てしまったために今回も未遂で終わった。・・・もしも、生き残ってしまった時に響や未来に心配をかけないように縄目をつかないようにしているあたり、今までよりも進歩しているとと言えるのだが。

「雷。私、何時も言ってるよね? 私も響も、雷がいなくなったら悲し

むって」

「う、うん。だ、だから失敗した時のためにあとが残らないようにタオルを挟んで・・・」

「そういうこと言ってるんじゃないの！失敗した時とかそんなんじゃないで、そもそもこんなことしないですよ！」

「ご、ごめん、なさい。で、でも私がいたら二人が不幸になっちゃうかもだし・・・」

その言葉を聞いて未来はさらに雷に詰め寄る、灰色と黒色の前髪が触れ合うほどだ。緑色の未来の瞳が雷の金の瞳を見つめる。

「私達は一緒にいるっていう、あの日の約束は忘れちゃったの?!」

「忘れられるわけないよ！でも・・・だからこそ怖いんだ・・・。私が、私なんかが、こんな幸せでいいのかなんて・・・」

首にできた痣を撫でながら、雷は振り絞るかのように言葉をこぼす。未来が口を開こうとするが、先生が教室に入って来たことで話が中断される。しかし、小さく雷にだけ聞こえるように呟いた。

「寮に帰ったら響にこのこと、話すから」

雷の体が小さくびくりと跳ね、未来に懇願するかのように小さく話しかける。かつて同じく雷が自殺しかけたときに響がその行為を目撃、その時の表情や泣き声が雷の頭の中でリフレインする。響は自分を前向きにしてくれた雷がそんなことをすることを未来以上に悲しむのだ。

「そ、それだけは勘弁して・・・。お願いだから・・・」

「ちゃんとした理由じゃなくて、死んで私たちから離れようとした雷が悪い」

「そんなあ・・・」

結局、響はこのクラス会に遅刻した。

○○○

すでに寮への引越しを完了させていた雷は放課後、響と未来の部屋に呼び出されていた。部屋の真ん中で正座する雷に、目に涙をためた響がもう逃がさないと言うように抱きしめる。ついさつきまで響に思いつきり泣かれていたのだ。

「雷あ、自殺なんてしないでよお」

「ゴメンって、もう二度としないから」

「その言葉、今回で五十二回目だよ・・・」

「うっ・・・。あつ、そうだ！翼さんの新作CD、明日発売なんだって？響が聞いたら私にも聞かせてよ」

「うん！分かった！」

「・・・逃げた」

雷の発言に未来は逃げたと判断したが、響は明日の生きる理由を雷が見つけたと解釈して体を離すと机の上に置かれていた雑誌を手にとって、二人に見えるように掲げる。

「やっぱカツコイイよね。翼さんは」

「翼さんにあこがれて、リディアンに進学したんだもんね。大したものだわ」

「ホント、私と未来がつきつきりで勉強教えた甲斐があつたよ」

「その節はどうも、ありがとうございました。・・・だけど、影すらお目に掛かれなかった」

響が落ち込むが、当たり前前だと言うように雷が応える。

「そりゃあ、トップアーティストなんだから、仕方がないよ」

その言葉に響は少し考えるような顔を見ると、胸の傷を眺める。あのライブの日、雷どころか未来にも話していない秘密が響にはあるのだ。

その日、響と未来は雷がまたやらかさないように彼女を自分の寮室に返さず、挟むようにして眠った。

○○○

三人は食堂で集まって、そろって食事をとっていた。響は大盛りのご飯を中心に男の目線から見ても多めといえる量を、未来は普通、そして雷は女の目から見ても少ない量だった。だいたい未来の六分の一程度の量しか食べていない。

雷はかつて、一週間に一度、しかも仏さんに出すような量の食事を虐待によって二年間続けさせられ、固形物が食べれなくなっていたのだ。それを現在の育て親である祖父母が何とか改善させようとした



努力の結果、中学卒業間際によく固形物だけの食事が出来る様になったのだ。

スマホで昨日のニュースを見ている未来がノイズ関連の話題を読み上げる。

「自衛隊、特異災害対策機動部による避難誘導は完了しており、被害は最小限に抑えられた。だって」

未来のスマホを雷は覗き込むと、発生現場の所在が書かれたところをタップする。

「ここからそんなに離れてないね」「うん」

すると食堂が突然ざわめき始める。入り口を向いて座っていた雷と未来は翼の姿を確認し、大の翼ファンの響はガタツと立ち上がると何故か茶碗と箸を持ったまま振り返る。憧れのトップアーティストを前に、行動したはいいものの緊張のあまりガタガタと震え始め、橋が茶碗とぶつかってカチャカチャと音が鳴る。すると突然、翼が自分の口元を指さす。その意味に気づいた雷は小声で響に声をかける。

「響！口元、お弁当ついてる！」

「へっ?」

○○○

放課後、未来はノートを取り、雷はスマホで新作の小説情報を確認し、響は昼食の時のことで落ち込むという三者三様の姿を見せていた。机にへばりつくように落ち込んでいた響が口を開く。

「ああもう駄目だあ。翼さんに完璧おかしな子だと思われたあゝ」

「いつものことでは?」

「間違っていないんだからいいんじゃない?」

「未来はともかく、雷に言われるのだけは釈然としない・・・」「言えてる」

響への返事で雷が自爆する。雷はむっとした顔をするが冗談だと分かっているので怒りはしない、まあ、冗談だと思ってるのは雷だけなのだが。

ノートをとっている未来に響が話しかける。

「・・・それえ、もう少しかかりそう?」

「うん。・・・ん?そっか、今日は翼さんのCDの発売日だったね。でも、今時CD?」

「初回特典の充実度が違うんだよ」

「そう!わかってるね雷くん!」

「だとしたら、売り切れちゃうんじゃない?」

未来の言葉に響ががたりと立ち上がる。

「雷!一緒に行こう!」

「ゴメン、私今日発売の本買いに行くから、途中までしか一緒に行けない」

「そっかあ、帰ってきたら一緒に聞こうね!」

「うん。じゃあ未来、また夜にね」

「二人とも、気を付けてね」

雷と響はモノレールに乗って同じ駅に降りると、途中まで翼談議で盛り上がり、雷は本屋へ、響はCD屋に足を運ぶために分かれる。

雷は手早く本を購入すると、帰って三人でCDを聞くために寮に戻ろうとする。その時、黒い粉のようなものが宙を舞った。炭素だ、つまり、ノイズが出た。普段なら死ぬるので大歓迎だが、昨日二人に絞られ、帰ってから一緒に聞く約束をしていたのですぐにシエルターに向かうために走り出すが、近くで女の子の泣く声が聞こえてきた。急いで探し出し、手をつないで走る。

「大丈夫!お姉ちゃんがついてる!」

「・・・うん!」

根拠のない大丈夫だったが、何とか泣き止んでくれたようだ。しかし、女の子を探している間にシエルターから遠ざかってしまったので、体力の続く限りノイズから逃げ回る。結局、気づいたところには周囲は暗くなっていて、虐待の影響で限りなくゼロに近かった体力は底をつき、女の子もろとも地面に崩れ落ちる。周囲はすでにノイズに囲まれていた。

「私達、しんじやうのかなあ?」

「・・・ごめんね。私、疫病神だからさ・・・。でも、こんな私だけど、君だけは、何とか守ってみせるよ」

女の子をノイズから守るために、ふらふらになりながら立ち上がる。時間稼ぎにもならないだろうが守ってみせるという気概が雷の中に生まれた。その瞬間、雷の胸の中に歌が流れた。彼女はそれを、無意識に口ずさむ。

「V o l t a t e r s   k e l a u n u s   T r o n (ヴォルターズ  
ケラウノス トロン)」

それを唱えた瞬間、家族の思い出の詰まった赤いペンダントが輝き始め、金色の光で雷の体を包み込んだ。

○○○

一方、特異災害対策機動部二課と呼ばれるところでは、二つのノイズとは異なる高質量エネルギーを検知していた。

「波形を照合！急いで！」

シンフォギアシステムを開発した天才、櫻井了子がオペレーターに声をかける。

「まさかこれって、アウフヴァツヘン波形?!」

二つのうちの一つが解析され、聖遺物名がモニターに表示される。

「ガングニールだとお?!もう一つの聖遺物の解析はまだか！」

二課の指令、風鳴弦十郎が驚きの声を上げ、翼が驚愕の表情を浮かべる。しかし、もう一つの聖遺物が解析できない。それを了子が天才的なひらめきから別のアプローチで一から解析を開始する。

そして、解析した聖遺物に息が詰まる。何故ならそれは、存在するはずのない聖遺物だったからだ。異変に気付いた弦十郎は彼女に声をかける。

「どうした?!了子君?!」

「・・・解析結果、出たわ・・・」

モニターに聖遺物名が表示され、二課全体がどよめく。それは稀代の天才、櫻井了子がシンフォギアシステムとして開発不可能と断じた聖遺物だったからだ。しかし、波形が確認されているということはそれが機能していることを意味する。弦十郎はガングニールをも超え

る驚きに声を震わせながら言葉を発する。  
「・・・ケラウノス・・・だと?!」

## 雷光を纏いし者

特異災害対策機動部にかでは二つの聖遺物の起動により、混乱に包まれていた。何せ、片や GANG ニールは『元々の装者が死亡し、行方が分からなくなっていた』聖遺物、片やケラウノスは『稀代の天才たる櫻井了子が開発を諦め、計画から破棄された存在するはずのない』聖遺物だったからだ。その事実により了子が声を震わせる。

「新たな適合者に・・・、ケラウノス・・・」

「一体どうしてこの二つが・・・」

起動した二つの聖遺物の片割れ、GANG ニールに対して存在しないはずのケラウノスの衝撃以上のものを感じているものが一人だけいた。かつて GANG ニールの所有者だった天羽奏の相棒、風鳴翼だ。

(そんな・・・！だってそれは・・・奏の・・・！)

彼女はモニターに映る GANG ニールを纏った少女を凝視していた。

○○○

「何・・・これ・・・」

雷の体を包んでいた光は着ていた制服を分解し、素肌の上から白と黒、グレーに金が配色されたインナースーツと鎧に変化していた。腕と脚、腰に装着された金色のユニットが展開し、そこから稲妻が少しだけ放出された後、格納される。放出された稲妻は女の子を狙っていたノイズに直撃し、粉々に吹き飛ばした。稲妻の鳴らした轟音にびつくりして雷の体は小さく飛び跳ねる。

「うええええ?! ノイズが吹っ飛んだあ?!」

「お姉ちゃん、すっごーい!」

女の子が雷に対して希望を抱いた眼を向ける。そんな目を裏切れるほど雷は薄情な少女ではない。鎧からはシンセサイザーのような電子音が鳴り響き、胸の中に歌が浮かんできた。それを口ずさむと、不思議と底をついたはずの体力が回復した気がする。女の子に手を差し伸ばしその手を握りしめて、抱きしめる。

(この子だけは絶対に守る! 守り抜いて見せる!)

ここから離れるため、ビルの壁に向かって走り出す。何故かはわか

らなかつたが、この鎧に包まれている間は出来る気がしたからだ。壁を駆けあがり、勢いそのままにビルの天井を駆け抜けてジャンプする。しかし、想像以上のジャンプ力に姿勢を崩してしまい、着地の瞬間にバランスを崩してしまう。女の子は守ることが出来たが、すぐにノイズに囲まれてしまった。

「大丈夫?! ケガはない?!」

「う、うん!」

怪我がないことを確認した瞬間、ノイズが攻撃を始めた。反射的に右腕で防御姿勢をとる。その時、右腕の金色をしたユニットが展開し、電光が右腕を中心に円形に広がっていく。その電光にノイズが触れると、はじき返されると同時に炭素へと姿を変えた。

(もしかして・・・これなら!)

「しっかり掴まってね」

女の子に語り掛けると、小さくうなずき返してくれる。この鎧のことはよくわからないが、使い方はわかる。お父さんとお母さん、出海が心の中で教えてくれる気がしたから。

左からくるノイズの攻撃に素早く反転すると右腕を腰だめに構える。さつき展開した円形の電光が肘から後ろに迸り、腕がちぎれ跳びそうな勢いで発射される。ノイズの一体にその拳が直撃すると、衝撃波で周囲のノイズまで粉碎した。しばらく逃げながら戦っていると、超大型ノイズが現れた。女の子に自力で掴んでもらい、右腕に加えて左のユニットも展開する。バチバチと稲妻が迸り、それが固まりを形成すると女の子を振り落とさないように超大型ノイズに投げつけた。するとそれを喰らったノイズは空間に引っ張られるかのように貼り付けられ、身動きが取れなくなる。

そこで雷の体に限界が来た。

「ガッハッ! ゲホッ!・・・ハア・・・ハア・・・」

「お姉ちゃん大丈夫?!」

女の子を抱えたまま膝から崩れ落ち、息を切らす。すると突然、貼り付けられていたノイズに巨大な剣が突き刺さり、真っ二つにする。その上には、青い鎧を着た翼が立っていた。

「翼……さん……?」

上空でヘリのローター音が聞こえ始め、雷はふらふらと立ち上がるがすぐに倒れかけてしまう。その瞬間、誰かが雷の体を抱きかかえた、響だった。黄色の鎧を身にまとって雷の体を支える彼女は首に手を回させると、近くにあった小さい箱に雷を座らせる。二人は真つ先に思った疑問を口にする。

「響、その鎧何?」

「雷、これ何?」

「……」

二人して同じ疑問を抱いていたことがおかしくなり、雷は疲れ切っていることすら忘れて笑い合う。笑い合っていると若い制服を着た女の人が紙コップに入れた温かそうなドリンクを差し出してくる。

「あの、あったかいもの、どうぞ」

「あったかいもの、どうも」

雷と響の二人はドリンクを受け取ると、ゆっくりと飲んでいく。ゆったりと気が緩んでいき、疲れた体を癒してくれる。その瞬間、二人の鎧が輝きだし、雷のは元の赤いペンダントに、響のは粉々に砕け散り、その衝撃でドリンクを落としてしまう。

衝撃でバランスを崩した響だったが、後ろから抱きとめられる、翼だ。

「ありがとうございます!」

感謝を述べる響だったが、顔を上げたときに翼が助けてくれたのを確認すると、大慌てでもう一度感謝を述べる。

「あつ、ありがとうございます!実は、翼さんに助けられたのは……これで、二回目なんです!」

「響、前にも翼さんに助けられたことがあるの?!」

「うん!」

驚く雷と小さく二回目……と呟く翼。

少し離れたところで、ママという声が二つ上がった。雷と響が助けた女の子に迎えが来たのだ。制服を着た女の人が二組の親子に様々な制限の話をしているのを見て、二人は向かい合って苦笑いを浮かべ

る。

「じゃあ・・・私たちもそろそろ・・・」

「お暇させて・・・」

再び顔を前に向けると周囲を黒服にサングラスと、いかにも人たちに囲まれていた。その中心で腕を組んでいる翼から言葉が発せられる。

「あなた達をこのまま返すわけにはいきません」

「なんでですか?!」

雷と響の聲がハモる。

「特異災害対策機動部二課まで、同行していただきます」

翼の声で、二人の両腕に電子ロック付きの手錠がかけられ、黒服の一人が申し訳なさそうに二人に声をかける。

「すみませんね、あなた達の身柄を拘束させてもらいます」

そのまま複数の黒服に車の中に連れ込まれ、行先も告げられぬまま連行される。

○○○

連行先はリディアンだった。

「ここ、リディアンですよね?」

「なんで、学院に?」

返事は返ってこない。そのまま下ろされると、リディアンの中、先生たちのいる中央棟に黒服の一人と翼に先導され、雷と響はそこにあるエレベーターに連れ込まれる。黒服が携帯のようなものを何かにかざすと、電子音と共に扉はロックされ、手すりのようなものが出てくる。

「さ、危ないから掴まっててください」

「へっ?」

「危ないって、どういう・・・」

黒服に促され、二人は大人しく手すりに掴まる。その瞬間、エレベーターは本来進める方向ではない地下に向かって猛スピードで降り始めた。雷と響はそろって絶叫を上げ、慣れてきたところで響は愛想笑いを浮かべ、胃腸の弱い雷は何とか吐くまいと踏ん張っている。



「愛想は無用よ」

翼に短く拒絶されて響は落ち込むが、雷には落ち込むだけの余裕がない。

ある程度降りたところで、壁のところどころに何かの模様が描かれた場所を通過する。愛想笑いを浮かべていた響に対して翼が語り掛ける。

「これから向かう場所に、微笑みなど必要ないから」

若干青くなつた顔で雷はもう既に微笑む余裕などない！と叫びたかつたが、口を開くと吐きそうだったので心の奥にしまい込んだ。

一番下の階に到着してすぐに、雷はトイレに駆け込んで今まで耐えていたものを吐き出す。響に背中をさすつてに貰つて全部吐き出し、ぐったりとしたまま引つ張られて目的の部屋の前にたどり着く。黒服が心配そうな顔をする。

「大丈夫ですか？」

「はい……。胃腸が弱くて、ですね」

ゆつくりと、重い扉が開く。扉が開いた瞬間、クラッカーの破裂音と拍手の音、そして垂れ幕には『熱烈歓迎!!立花響さま☆轟雷さま☆』と書かれていた。テーブルにはたくさんの料理が並び、目の前で赤いワイシャツにシルクハットをかぶつた弦十郎が歓迎のあいさつを述べる。そこは、微笑みどころか笑顔しかない場所だった。

「ようこそ！人類守護の砦。特異災害対策機動部二課へ！」

そんな状況に響はポカンとした顔をし、翼は頭を抱え、黒服は苦笑い、グロッキー状態の雷は翼のほうを向いて小さく、草と呟く。そして雷と響の前に了子が現れる。

「さあさ、笑って笑って〜！お近づきのしるしにスリーショット写真〜」

「ごめんなさい。今、笑える自信ないので」

「い、いやですよ。手錠をしたままの写真だなんて、きつと悲しい思い出として残っちゃいます。それに、どうして初めて会う皆さんが私たちの名前を知ってるんですかあ？」

弦十郎がシルクハットをかぶりなおしながらその疑問に答える。

「我々二課の前身は、大戦時に設立した特務機関なのでねえ。調査な

どお手の物なのさ」

杖を鼻に変えるという小粋なマジックを披露している横で、了子がカバンを二つ持って近づいてきた。調査というのはカバンの中でするものらしい。復活した雷と響が叫ぶ。

「ああ〜！私のカバン！なにが調査はお手の物ですかあ！カバンの中身、勝手に調べたりなんかして！」

「はっはっは！雷くん、その年で遺書の書き方指南なんて読むんじゃないぞー！」

「まっ、返してくださいそれ！」

「それは捨ててもいいです！」

「ちよ、ちよつと響！そんな顔しないで！お願い！未来には黙っていて！何でも言うこと聞くからあ〜！」

そんな惨状に翼はため息をつき、黒服、緒川に後を任せる。

緒川の手で二人の手錠が外される。

「あ、ありがとうございます」

「ど、どうも」

「いえ、こちらこそ失礼しました」

「では、改めて自己紹介だ」

「この責任者の弦十郎と、出来る女こと了子の自己紹介を聞いた後、本題に入る。

「君たちをここに呼んだのは他でもない、協力を要請したいことがあるのだ」

## 家族が残した遺産

大の大人、しかも特務機関が前身の特異災害対策機動部二課が、まだ子供である雷と響に協力を要請していることが理解できなかった。しかし、二人の纏っていた灰色と黄色の鎧のことだとすぐに思い至り、弦十郎と了子にあれは何なのかを質問する。

「教えてください。あれはいったい何なんですか？」

「ノイズと戦えるようになる・・・みたいですけど」

弦十郎と了子は軽く顔を合わせると、彼女が笑顔で頷き、二人に歩み寄る。そして指を三本たててから、口を開く。

「あなた達の質問に答えるためにも、二つばかりお願いがあるの」

「だったら何で指を三本たててるんですか？」

「・・・話の腰を折らないで。・・・気を取り直して。一つは、今日のこととは誰にも内緒。そしてもう一つは・・・」

了子は両方の手を雷と響の腰に回してだきしめ、耳元で語り掛ける。

「とりあえず脱いでもらいましょうか」

耳元で語られたとんでもない言葉に二人は赤面し、叫ぶ。

「なあんでえええ?!」

「ここですかああ?!」

○○○

雷と響の二人はふらふらになりながら未来の待つ寮室へと戻っていく。本来なら雷の寮室は別なのだが、一日の大半を響と未来のところで過ごしていたため、過ごしていくうちに三人一緒に住むことにしたのだ。ちなみに、寮室からは雷の体と精神の安定に貢献しているため、あえて見過ぎされている。未来がこれの手回しをしたのは言うまでもない。もう既に色々とはばっている雷に肩を貸しながら、響はドアの鍵を開ける。

「たあだいまあゝ・・・」

すでに私服に着替えた未来が玄関に向かってくる。

「響、雷。もう・・・こんな時間までどこ行ってたの?!」

雷を支えるのにも限界が来た響は部屋の真ん中に倒れ込むように寝転がる。丁度雷が上から覆いかぶさっている形だ。

「ゴメンナサイ・・・」

「ごめん。・・・雷あく、重い」

「この状態で倒れ込んだ響が悪いんだろお。・・・ぐえ」

響の上から転がり落ちるように離れる。どさりという音と共に雷は仰向けに寝転がる。

それでも未来の心配そうな声は収まらない。

「近くでまたノイズが現れたって、さつきもニュースで言ってたよ」

「うん・・・。でも、もう大丈夫だから」

「心配しないでいいよお」

疲れ切った表情で苦笑いを浮かべる。その時、ニュースで翼が別のレコード会社に移籍するという話が出てきた。大ファンの響は体を起こし、雷は仰向けのまま首を動かして画面を凝視する。そんな二人の状態に未来は頬を膨らませて呆れている。

夜、三人そろって二段ベットの上で川の字になって眠る。今回は雷の要望で未来を挟んだ形だ。仰向けで眠る未来に背を向けたまま、響が口を開く。

「・・・あのね、未来・・・。ううん、何でもない」

しかしすぐに了子と約束したことを思い出し、すぐに話を切り上げる。

「私は・・・なんでもなくない」

未来の言葉に雷と響は小さく振り返る。

「二人の帰りが遅いから、ホントに心配したんだよ？」

「ごめん、心配かけちゃって。でもありがとう・・・。私達の事ちゃんと心配してくれるの、未来だけだから」

今度は雷が未来に答える。それと同時に雷は未来の腕を抱きしめ、響は肩を抱きしめる。

「やっぱり未来ってあったかい」

「小日向未来は私達にとっての陽だまりなの。未来のそばが一番あったかいところで・・・」

「私達が絶対に帰ってくるどころ」

「これまでもそうだし、これからもそう」

「私みたいな疫病神でも、幸せを感じれるから」

両方から自分の大切な人に挟まれた未来は、顔を赤くしながら思いのたけを口にする。

「・・・あのね、響、雷。私ね・・・」

「くー・・・」

「すう・・・すう・・・」

両方から安らかな寝息が聞こえてくる。軽く左右を見ると、雷は体を丸ませるように頭を未来の体に押し付け、響は未来と並ぶように眠っている。二人を起こさないように小さく体を起こすと、自由の利く右手で雷の顔にかかった髪を軽くかき上げ、響に布団をかけなおす。

「お休み。二人とも」

○○○

次の日の放課後、雷と響の二人は友人の安藤創世に誘われる。

「ビツキー、ライライ。これからフラワーに行ってみない？」

「フラワー？」

「なに？それ」

二人して首をかしげると、寺島詩織がどんな所か説明する。

「駅前のお好み焼き屋さんです。美味しいと評判ですよ」

二人は軽く苦笑いしながらやんわりと断る。

「・・・ごめん、いけないや」

「今日は別の用事がはいつちやつてるんだ」

二人の発言に板場弓美が茶々を入れる。

「また呼び出し？あんた達ってアニメみたいな生き様してるわね」

「仕方ない。また今度誘ってあげるね？」

未来は二人に用事があったと一緒にいられないことに落ち込んだが、その場で気付くものは一人としていなかった。未来を含む四人と別れ、教室に雷と響の二人が残される。

「私、呪われてるかも」

「私のせいだ、私が疫病神だから・・・」

「ちよ、待って！雷のせいじゃないから！」

響は雷がカバンから取り出したハンマーで手の骨を砕こうとするのを阻止する。すると不意に、響が頭を上げる。それにつられて振り上げていた腕を下し、目線を追う。そこには翼がいた。

「重要参考人として、再度本部に同行願います」

〇〇〇

二人そろって電子手錠をかけさせられ、エレベーターに連れ込まれ、地下へと降りる。また雷がグロッキーになったが、二度目だから前回よりも早く回復した。

二人はメデイカルルームに連れ込まれ、壁際の長いすに腰掛けさせられる。了子が指さし棒をもって笑顔で話し始める。

「それでは、先日のメデイカルチェックの結果発表！まずは響ちゃんからねえ」

モニターに雷と響のバイタルと顔写真が表示される。

「初体験の負荷は若干残ってるものの、ほぼ見られませんでしたあゝ！雷ちゃんは包帯の下の怪我や首周りの痣を除けば響ちゃんと同じねえ」

「ほぼ・・・ですか」

「うんそうねえ。あなた達が聞きたいのはこんな事じゃないわよねん」

意を決して響が口を開く。

「教えてください。あの力のことを・・・」

雷が頷き、弦十郎は翼に目で指示を出す。ゆつくりと翼が胸元から赤いペンダント、雷の持つペンダントと同じものを取り出す。

「あぁー！それ、私のと一緒?!なんで?!」

興奮する雷を手で制し、弦十郎が口を開く。

「天羽々斬。翼の持つ、第一号聖遺物だ」

「聖遺物?」

二人並んで首をかしげる。すかさず了子が説明を入れる。

「聖遺物とは。世界各地の伝承に登場する、現代では製造不可能な異

端技術の結晶の事。多くは遺跡から発掘されるんだけど、経年による破損が著しくって、かつての力を秘めたままのものはホントに希少な  
の」

「この天羽々斬も刃のかけら、ごく一部に過ぎない」

「かけらにほんの少し残った力を増幅して、解き放つ唯一の鍵が特定  
振幅の波動なの」

「特定振幅の波動？」

「つまりは歌。歌の力によって、聖遺物は起動するのだ」

「歌？」

「胸の中から聞こえてきた歌の事、ですか？」

「うむ」

弦十郎が頷き、翼は顔を顰める。呑み込めたと了子が説明を続ける。

「歌の力で起動した聖遺物を一度エネルギーに還元し、鎧の形に再構成したものが、翼ちゃんや響ちゃん、雷ちゃんが身にまとうアンチノイズプロテクター、シンフォギアなの」

突然翼が声を上げる。

「だからとて！誰の歌、どんな歌にも、聖遺物を起動させる力が宿っているわけではない！」

しばしの間。その間を打ち破るかのように弦十郎が声を上げる。

「聖遺物を起動させ、シンフォギアを纏う歌を歌えるわずかな人間を我々は、適合者と呼んでいる。それが翼であり、君たちなのだ！」

了子が雷と響の前に歩いてきて、理解できたか、質問はあるのかと聞いてくる。今まで難しい顔をしていた響は手を上げる。それを先生が生徒を当てるかのように了子が質問を促す。

「どうぞ響ちゃん！」

「じえんじえんわかりません・・・」

周囲の大人たちは、だろうなど分からなくて当たり前の顔をしている。そんな中、雷だけが聞くかどうか思い悩んでいる顔を浮かべている。それに気づいた弦十郎は雷に語り掛ける。

「どうした？何でも聞いていいんだぞ？」

雷は少し悩んでから、口を開く。

「それって……櫻井理論……ですか？」

その言葉に部屋中の、雷と響を除いた全員が驚愕する。了子が雷に慌てて駆け寄り、肩を掴む。

「そ、その言葉、どこで知ったの?!」

「え、えっと……両親の研究ノートで見かけたもので……」

「……そう、やっぱりあなた、轟博士夫妻の娘なのね」

「りよ、両親を知ってるんですか?!」

自分の両親を知る子に対し、逆につかみかかる。

「ええ、知っています。あの二人は、もう一つのシンフォギアを作り出す技術『轟理論』の提唱者よ。そしてその技術で作られた唯一のシンフォギアが、あなたの持つそのケラウノス」

「ケラ……ウノス……」

「そう、櫻井理論じゃ作ることが出来なかった唯一の聖遺物。」

モニターに二つの研究データが表示される。タイトルは、第一開発計画と新・第一開発計画。

「かなり古いデータだったから、探し出すのに苦労したわ」

「この研究に……両親が……」

「ええ、私達はまず最初にギリシヤから借金の肩代わりする引き換えに入手した、その時一番最初にあつた聖遺物、ケラウノスの開発に当たったわ。でも結果は失敗。ケラウノスはまさに稲妻そのもの、欠片から構築する櫻井理論じゃ手も足も出なかった。そこでこの計画を破棄し、天羽々斬を第一号聖遺物にしたの」

「ここまでは理解できたわね?と言うように了子が雷の目を見つめ、返事のために小さくうなづく。

「それでもあきらめきれなかった二人の科学者がいた。それがあなたのご両親よ。二人は私とは全く別の方法でシンフォギアを作り上げた。それが轟理論。欠片からシンフォギアを作るのではなく、シンフォギアの基本ベースを構築してからその中にケラウノスを封じ込めたの。もしもケラウノスを私達ふうと呼称するなら、天羽々斬以前に存在していた聖遺物と、存在していなかった、という意味を込めて



「第零号聖遺物……かしら」

「第零号聖遺物……。そして轟理論、そんなものがあつたのか……」  
「知らなくても当然よ、あれはケラウノスのような形を持たない聖遺物から作り出すための技術。どうしてもマイナーになってしまうの。でも、あの二人はまごうことない天才だったわ。……ご両親は今どこに？」

たわいもない了子の質問に対し、雷は俯いてペンダントを握りしめる。そんな彼女の代わりに響が応えた。

「雷の家族は……。もういないんです。心中してしまつて……」

「そう……。もう一度会つてあいさつしたかったのだけど……」  
暗くなった空気を弦十郎が持ち直す。

「こんなところで暗くなつても仕方ない！次は響君のだ！」

「そうね……。さて！何で響ちゃんは聖遺物を持ってないのにシンフォギアを纏えるのか！」

モニターに響のレントゲン写真が投影される。そこには心臓付近に何かのかけらが見えていた。響が言うには、二年前のライブの時に負つた怪我らしい。つまり、この破片こそがかつてのガングニールの所有者、奏が纏つたものが砕け、心臓付近に複雑に突き刺さつた物なのだ。その事実には直面し、翼はふらふらと部屋を退室する。

未来に隠し事をしたくない雷と響は弦十郎に質問する。

「このことを、誰かに言つたらダメなんですか？」

この質問に帰ってくる答えは一つ、何者かに知られば、周りの親しい人間に危害が及びかねない。それだけだった。

二人は未来に隠し事をしたくない心と、傷ついてほしくない心に板挟みになつてしまった。

## 突きつけられる刃

隠したくない心と傷つけない心、その二つに挟まれた雷はペンダントを握りしめ、響は軽く俯く。頭の中では一緒に過ごした未来との記憶が巡る。二人の表情を察した弦十郎は口を開く。

「我々がまもっているのは機密などではない、人の命だ。その為にも、この力のことを隠し通してもらえないだろうか」

「あなた達に秘められた力は、それだけ大きなものだということを、分かかってほしいの」

「人類ではノイズに打ち勝てない。人の身でノイズに触れることは、即ち炭となって崩れることを意味する。そしてまた、ダメージを与えることは不可能だ。たった一つの例外があるとすれば、それは、シンフォギアを身に纏った戦姫だけ。日本政府、特異災害対策起動部に課として、改めて協力を要請したい。立花響君、轟雷君。君たちが持つシンフォギアの力を、対ノイズ戦のために、役立ててはくれないだろうか」

二人は軽く顔を合わせ、頷き合う。響が意を決して口を開く。

「私達の力で、誰かを助けられるんですよね？」

弦十郎と了子が頷く。それを見て、響が答える。

「分かりました！私、翼さんに報告してきます！」

「失礼しました」

「雷君、少し待っててくれないか？」

「へ？」

意気揚々と翼のもとに行こうとした二人だったが、雷が弦十郎に呼び止められる。響に先に行つといて。と促し、メイカルルームに残る。了子が重々しく口を開いた。

「雷ちゃん。その体中に撒かれた包帯の下、普通の女の子ならまず負うはずのない傷や痣があるわ。一体どうしてそんな風になったの？」

「え、えつとお・・・そのお・・・言わなきや、ダメですか？」

「できる限りの答えてくれると、こちらとしてはうれしいんだが・・・」

雷はしどろもどろに答えた後、弦十郎の返事に対して顔に影を落と

す。

「あの……、せめて私が話したくなる時まで、待っていて……くれませんか?」

「……信用が、必要なわけだな?」

うつむいたまま、コクリと頷く。それに対して頭を軽く掻いた後、膝を軽くたたいて弦十郎が笑顔で答える。

「二日三日しかたつてないのに、体のことを聞いたこっちが不躰だったな。すまない。雷君が話したくなったら、何時でも言ってくれ」

「ありがとうございます!」

雷の顔に笑顔をが戻る。その瞬間、基地内にアラートが鳴り響いた。弦十郎についていく形で雷も指令室にたどり着く。少し遅れて、響と翼も到着した。オペレーターがノイズの発生を報告する。それを聞いてすぐに、弦十郎が判断を下す。

「本件を、我々二課で預かることを一課に通達!」

「出現位置特定!座標出ます!……リディアンより距離二百!」

「近いな……」

「迎え撃ちます!」

翼が反転し、指令室の外に飛び出す。少し遅れて、お互いに頷き合った雷と響も飛び出す。それを弦十郎が声で制しようとする。

「待つんだ二人とも!君たちはまだ……」

「私達の力が誰かの助けになるんですよね?!シンフォギアの力でないと、ノイズと戦うことはできないんですよね?!だったら行きます!」

「疫病神な私でも、誰かのためにできることがあつたんです!だから、行かせてください!」

二人は駆けだして、ドアをくぐる。

「危険を承知で飛び出して行くなんて、あの子たち、いい子ですね」

オペレーターの言葉に疑問を浮かべる。

「果たしてそうだろうか?翼のように、幼いころから鍛錬を続けているわけではない。ついこの間まで、日常の中に身を置いていた少女が、誰かの助けになるというだけで、命をかけた戦いに赴けるというのは、歪なことではないだろうか……」

「つまり、あの子達もまた私たちと同じ、こつち側ということね」  
「それに雷君の言っていた、疫病神という言葉……。体中の傷と、関係あるのかもしれないな」

○○○

町中に避難警報が発令され、間に合わなかった人たちのなれの果てが大気中に舞う。舗装された道の真ん中で、制服姿の翼がノイズの群体と向き合っていた。ノイズの群れが溶け合い、一つの大型ノイズへと姿を変える。翼がシンフォギアを起動する。

「Imyuteus Amenohabakiri Tron（イミュテアス アメノハバキリ トロン）」

翼のペンダントが光り輝き、制服を分解して青のシンフォギア、天羽々斬を纏う。大型ノイズが体についた羽状のパーツをカッターのように飛ばす。それを翼はジャンプで避けると、足についたブレードを展開し、反転したカッターを迎撃する。着地と同時に手に持つ刀を巨大化させる。

その瞬間、背後から雷の両腕のユニットで構築された塊が大型ノイズに着弾し、ノイズが竜巻のように展開された稲妻によって空間に引つ張られ、固定された。

『超電磁トルネード』

叫び声と共に響が飛び蹴りを入れる。雷の技で空間に固定されているため、ノイズは衝撃を逃がすことが出来ず、そのまま翼が一閃を放つ。

『蒼ノ一閃』

翼の攻撃が身動きが取れないノイズに直撃し、両断、爆発する。翼のもとにギアを纏った響が駆け寄る。

「翼さんー！私達、今は足手まといかもしれないけれど、一生懸命頑張ります！だから、私達と一緒に戦ってください！」

笑顔で話しかける響に、翼がそうね、と小さく答える。少し遅れて雷が到着した。素の身体能力が平均的に低いため、ギアを纏っていても響より遅いのだ。雷が呼吸を整えている間に、翼がゆっくりと響と向き合い、口を開く。

「あなたと私、戦いましょうか」

「えっ……」

「ハア……ハア……ふう。……何事？」

「翼が手に持つ刃を響に突きつけた。」

## 仲たがいする心

ギアを纏った翼の刃がノイズを切り捨てる。響は逃げまどいながら時折攻撃を喰らって吹っ飛ばされる。雷はそんな響を無視しながら、稲妻でノイズをチリへと変える。モニターに映された三人の様子を見て、弦十郎がつぶやく。

「ひと月立っても、噛み合わないか・・・」

〇〇〇

自室にて未来は、今度三人で見に行くこと座流星群の情報や、お弁当に丁度いいメニューなどを調べ、雷がベットで寝転がりながら読書をしている中、響は学校のレポートと格闘していた。響はノイズのことについて追試回避のためにペンで書き記している。ふいに未来が顔を上げると、響が目をつぶり、うつらうつらと舟を漕いでいるのを目にとめる。

「ん・・・ん・・・」

「響、寝たら間に合わないよ？」

「・・・」

未来の言葉で響が目を覚ます。響と異なり、雷は装者として動きながら学業をおろそかにすることはなく、点数も中間ぐらいを維持していた。

「そのレポートさえ提出すれば、追試免除なんだからさ」

「・・・」

響は消しゴムで舟を漕いでいる間に崩れたところを消そうとするが、レポートごと破いてしまい、そのまま机の上でうつ伏せになる。

「だから、寝ちゃダメなんだって」

「・・・寝てないよお、起きてるよ。ちよつと目をつぶってるだけ・・・」

「・・・」

未来がもう一度聞かせるように響に言うが、響はそれをあしらう。雷は響と顔を合わせようとしてもしない。

「最近なんか疲れてるみたいだけど・・・」

うつぶせたまま響が返す。

「平気・・・へっちやら・・・」  
「・・・」

そうしているうちに、響の顔が何かに悩み始めた。未来は、その原因と思われる雷に話しかける。

「・・・雷、どうしたの？一か月前から響と目すら合わさないで。喧嘩でもしたの？響、かなりストレスになってると思うよ？」

「・・・何でもない」

ぶつきらぼうにさういうと、本をたたんで未来や響に背を向けて眠り始めた。一か月ほど前から雷は響のことを無視している。今まで二段ベットの側で三人一緒に寝ていたのが、雷一人だけ側で眠るようになったのだ。

そんな親友二人の状況に、未来はため息をついた。

○○○

・・・一か月前・・・。

息を整えた雷の横で、翼が響に向けて刃を向ける。指令室では翼の突然の行動に、弦十郎が驚愕する。

「な?!何をやっているんだ!あいつらは!」

「青春真っ盛りって感じね」

こんな状況でも自由な子は軽口をたたく。無言で弦十郎はエレベーターに乗り込む。オペレーターの一人が問いかける。

「指令、どちらへ?」

「誰かが、あの馬鹿者どもを止めなきゃいかんだろうよ!」

ドアが閉じ、エレベーターが上昇を始める。

「こつちも青春してるなあ。・・・でも、確かに気になる子達よねえ・・・。放っておけないタイプかも?」

オペレーターたちは刃を向けられている響以外の、雷も含んだ「達」という表現に内心疑問に思ったが、すぐに自身の業務へと戻っていく。

響は、刃を向けるという意味不明な行動をとる翼に対して、意味を説明する。

「そ、そう意味じゃありません。私たちは、翼さんと力を合わせて・・・」

「分かっているわ！私はそんなこと・・・」

響の言葉を、語気を強めた翼が遮る。その答えに、さらに響が当惑する。いまいち状況が読み込めていない雷は、二人の間でオロオロすることしか出来ない。

「だったらどうしてえ・・・」

「私があなたと戦いたいからよ」

「ちよ、何でそんなことになってるんですかあ?!」

ついに状況が理解できなくなった雷は叫ぶが、その声は誰にも聞き取られることはない。雷のほうを一瞥もせず、翼は刃を向けたまま言葉が続ける。

「私はあなたを受け入れられない。力を合わせ、あなたと共に戦うことなど、風鳴翼が許せるはずがない。あなたもアームドギアを構えなさい。それは、常在戦場の意思の体現。あなたが、何物おも貫き通す無双の一振り、ガングニールのシンフォギアを纏うのであれば、胸の覚悟を構えてごらんなさい！」

翼は響の事、さらに言えばガングニールのシンフォギアを持つ響のことしか見えていないことを雷は理解する。相対する響の声が震える。

「か、覚悟とか、そんな・・・。私、アームドギアなんてわかりません・・・。わかってないのに構えろなんて、それこそ、全然わかりません！」

その言葉を聞いた翼は刃を下し、二人に背を向けて、歩き出す。

「覚悟を持たずに、ノコノコと遊び半分に戦場に立つあなたが、奏の・・・奏の何を受け継いでいるというの！」

そう叫び、空高くジャンプする。最大高度にまで到達した翼は、手に持つ刀を雷に当たaraぬよう響に投擲する。投擲した刀は、壁と身がまうようなひと振りの巨大な剣となり、足のスラスタで加速した翼がその剣を蹴り込む。

### 『天ノ逆鱗』

「響下がって！」

「雷?!」



嬉々として自分を痛めつけようとするときと同じような目をした雷は、響のギアの首根っこを掴んで放り投げて位置を入れ替わると、右腕と右腰のユニットを即座に展開する。右腕を腰だめに構え、腰のユニットからは空間がゆがむほどのエネルギーを持った稲妻が右腕にまとわりつき、腕のユニットからは肘から後ろに電光が迸り斥力力場を形成する。

「でやあああー！」

『雷刃拔拳・桜花』

膨大なエネルギーと速度は雷の拳は、腕がギアを纏ってなお、ちぎれ飛ぶような痛みを伴いながら翼の技を迎え撃つ。その直前だった。

「おうらああー！」

「おじさまッ?!」

「ッ?!」

「はああああー!...たあッ!」

弦十郎が両者の間に介入にはいる。衝撃波が技を相殺し、地面が広範囲にわたってえぐれ飛ぶ。

バランスを崩した翼は背中から落下し、雷はそのままの体勢で響とそろって自分たちの技を受け止めた弦十郎に目を丸くする。水道管が衝撃で破裂し周囲に雨のように降り注ぐ。雷と響、翼のギアが解除され、制服姿に戻る。

「あくあ、こんなふうにしちまって。何やってるんだお前たちは...この靴、高かったんだぞお」

「す、すいませんでした」

「一杯何本の映画を借りられると思ってるんだあ...?」

弦十郎が翼に歩み寄る。

「らしくないな、翼。ロクに狙いも付けずにぶっ放したのか、それとも。おお?お前泣いている...」

「泣いてなんかいません!涙なんて...流していませんッ」

弦十郎の目には、翼が涙を流しているように見えたが、翼は泣いてなどいないと気丈にふるまう。

「風鳴翼は、その身を剣と鍛えた戦士です!だから...」

「翼さん……」

弦十郎が翼を抱え、立ち上がらせる。響が声を震わせながら言葉を口にす。

「私、自分が全然ダメダメなのはわかってます。これから一生懸命頑張って、奏さんの代わりになってみせま……ッ?!」

翼が振り向くよりも前に、『パァンッ』という音が響いた。響がすべてを言い切る前に、雷が響の頬を濡れた包帯まみれの手で叩いていたのだ。怒りの表情を浮かべ、その目は涙で溢れている。雷が叫んだ。

「君が……君がそれを言うのか!立花響!」

「……へ?!」

雷が肩を震わせながら、響に訴えかけるように話し始める。かつて、響に自殺をしかけたところを見られた光景がフラッシュバックする。

「私に……ほかの人は雷の代わりにはなれないんだよ!」って泣きながら言ってくれたのは嘘だったのか?!誰よりも理解しているはずの響が、響がそれを言うのか?!」

最後のほうは響の肩を掴みながら、すがるように泣きついた。響は呆然と立ち尽くすことしか出来ない。その日以来、雷は響と会話はおろか、目を合わせることもすらしなくなった。

## 癖と本音

夜、翼は自らの屋敷で火を灯した蝋燭に囲まれながら瞑想していた。しかし、今までにも何度も出てきた自身の弱さが引き起こした奏の事、そして一か月前に起きた、ある少女のことが頭から離れない。(あの子・・・轟とか言ったか？私の技は立花を狙っていた。にもかかわらず彼女は立花の代わりに、あろうことか私を迎え撃とうとした・・・。あの時、おじ様が間に合ってくれたからよかつたものの、もしも彼女の技が私の技よりも弱かった場合、よくて腕、最悪命を落とされていたかもしれない。ついこの間まで日常に身を置いていた少女がなぜ、臆することなく即座に行動できたのか・・・)

翼の技、天ノ逆鱗は攻撃が当たるまでに若干のタイムラグがある反面、巨大かつ強力だ。しかし、その巨大な剣に今まで日常を過ごしていた雷がそれを恐れることなく、その隙をついて響を守ることが出来たのか。その僅かな違和感が翼を悩ませていた。

(そして立花の「代わりになる」という言葉に反応した轟の表情・・・私と同じようなものを背負っていたのだろうか・・・)

迷いを振り切るようにそばに置いていた刀を抜き、目の前の蝋燭の火を切ろうとする。しかし、剣先がぶれ、火にあたる直前に翼は刀を止める。迷いを認識した翼は刀を鞘に納め、部屋を静かに後にする。蝋燭の火は、翼の迷いを表すかのように静かに揺らめいた。

○○○

三人の寮室にて雷、響の携帯のアラームが鳴る。その音を聞いて雷がゆっくりと目を覚まし、響はどう言い訳しようかと顔を歪める。気になった未来が二人に声をかける。

「何？まさか、二人とも朝と夜を間違えてアラームセットしたとか？」  
伸びをして、まだ少し眠そうな目をこすりながら雷が口を開く。

「んっ・・・ふう。私は、この時間に予約してた新しく発売される本を受け取りに行くだけ・・・」

「雷、本好きだもんね。気を付けて行ってらっしゃい。門限とかはこっちで何とかする」

「うん。行ってきます」

軽く洗面所で顔を洗って制服に着替え、靴を履いて二課へと向かった。

まだ答えを出していない響のほうに未来は体の向きなおす。響が頭に手を当てながら言い訳を考える。

「いやあ、えっと……」

「こんな時間に用事？」

「あつははは……」

響は力なく笑うことしか出来ない。

「夜間外出とか、門限とかは雷みたいに私で何とかするけど」

「うん……。ゴメンね……」

未来は流れ星の動画を映したパソコンの画面を響に向け、ニコニコしながら口を開く。

「こっちの方は、何とかしてよね」

「あつ……」

「三人で流れ星を見ようって約束したので、覚えてる？山みたいにレポート抱えてちゃあ、それもできないでしょ？」

「うん！何とかするから！だからごめん……」

「もう……。それまでに雷とも仲直りしてよ？何があつたのかは聞かないけど、私も二人がぎくしゃくしてるのは限界なんだから」

服を脱ぐのにもたついている響に歩み寄る。

「……ほら、万歳して」

「……私って駄目だよねえ……。しっかりしないとイケないよね……今よりも。ずっときつともっと」

○○○

「遅くなりました！」

ドアが開いて響が入室する。弦十郎に了子、翼、そして雷が既に部屋に集まっていた。響が了子に頭を下げる。

「すみません」

それを咎めず、頷いて了子が説明を始める。

「それじゃあ、全員揃ったところで、仲良しミーティングを始めま

しよ」

その言葉を聞いて、響の顔が雷と翼のほうを向く。雷は本から目を上げず、翼は目をつむってドリンクを飲んでいいる。モニターにノイズの発生地点がマーキングされたマップが表示される。弦十郎が響に質問する。

「どう思うっ？」

響がモニターに目を向ける。

「いっぱいですねー！」

弦十郎が笑い、雷は本で顔を隠しているが肩が震えているので笑っているのを耐えているのがまるわかりだ。

「はははーまったくその通りだ。コレは、ここ一か月にわたるノイズの発生地点だ。ノイズについて二人が知っていることは？」

弦十郎は雷と響の二人に話すを振るが、二人はそろって授業やニュースで聞いたところを伝える。それを聞いて、了子がノイズについて特別講義を始めた。ノイズははるか大昔から存在していたこと、ノイズの発生件数はそんなに多くなく、今の状態が異常だということ。つまり、ノイズの発生には何らかの作意が入っていることを説明する。

「作為？・・・ノイズって操れるの？」

「中心点はこちら、私立リディアン音楽院高等科。我々の真上です。サクリスト？、デュランダルを狙って、何らかの意思がこの地に向けられている証左となります」

「あの、デュランダルっていったい？」

オペレーターが口を開く。

「デュランダルはここよりもさらに下層、アビスと呼ばれる最深部に保管され、日本政府の管理下にて我々が研究しているほぼ完全状態の聖遺物。それがデュランダルよ」

「翼さんの天羽々斬や、雷ちゃんのケラウノス、響ちゃんの胸のガングニールのような欠片は、装者が歌って、シンフォギアとして再構築させないとその力を発揮できないけれど、完全状態の聖遺物は、一度起動した後は百パーセントの力を常時発揮し、さらには装者以外の人間

も使用できるであろうと、研究の結果が出ているんだ」

そこで了子が振り返り、自信満々に声を上げる。

「それがあ→私の提唱した櫻井理論！だけど完全聖遺物の起動には、相応のフォニックゲイン値が必要なのよねん」

雷は両親のノートを記憶していたおかげでついていくことが出来たが、響は理解できていないようだった。

弦十郎が口を開く。

「あれから二年・・・今の翼の歌であれば、あるいは・・・」

翼の表情が曇る。オペレーターたちが起動実験の話の後ろでしている間、雷は本を壁にしながら、響は横眼で翼を見つめる。翼がカッブを握りつぶした。響が俯き、雷が慌てて本に目を戻す。

「風鳴指令」

「そうか、そろそろか」

デュランダルや、米国政府の話をしている中に緒川が割って入る。

「今晚は、これからアルバムの打ち合わせが入っています」

「んえ？」

響が素っ頓狂な声を上げる。緒川が外していた眼鏡をかけ、響に話しかける。

「表の顔では、アーティスト風鳴翼のマネージャーをやってます」

雷と響の二人に名刺を差し出し、二人は目を輝かせて受け取る。

「ふおおお！名刺をもらったのなんて初めてなんです！」

「私もです！コレはまた結構なものをどうも」

翼と緒川が退室する。その日は二課の敵がノイズだけでなく、人間であることも確認した日だった。

○○○

響が学校を歩く翼に目を奪われて先生に怒られ、それを未来が心配し、昼食をとっている間も「私は呪われている！」と、叫ぶ何時もの日常が送られる。ただ、一つ違うのは響に対して雷が無視を決め込んでいることだ。

放課後、レポートを提出した響の様子を見に、未来が職員室の前で待機する。未来の制服の袖が軽く、後ろに引っ張られる。後ろを確認

すると、グレーの長髪をした女の子が俯いて、両手で未来の袖をつまみながら立っていた。雷だ。

「わかった、あとで話を聞くね？」  
「……」

雷は何も言わず、こくと頷く。いまいち距離感を掴むことが苦手な雷が誰か一人だけに話を聞いてほしいときにする癖なのだ。扉が開き、響が姿を現す。如何やら時間を過ぎていたがレポートは許してもらえたようだ。響と未来は喜び合い、雷は未来の背中に隠れる。

「雷も心配してきてくれたんだ！」  
「……」

響がのぞき込み、雷がフイツと顔を横に向ける。響が雷がとつている行動を見て、未来に声をかける。

「未来、雷の話、聞いてあげてね」  
「うん。わかってる。ここで待ってて！響のカバン、取ってくるから！」

未来は雷の手を取って響のカバンを取りに行く。その時に雷の話聞くつもりなのだ。二人は教室に入ると、未来がドアの鍵を閉める。誰も入ることは出来ない。窓から入る夕日が二人を照らす。未来が優しく抱きしめながら聞き出す。

「どうしたの？」

頭を撫でていると雷がしゃくり声を上げながら言葉をこぼす。

「わ、私、やっぱり壊れてるよ……。響と未来に、い、いつも心配かけて、何回、ちゅ、注意されても自傷とか、じ、自殺衝動とか収まらなくて、も、申し訳ないと思うたびに、自殺したくなって。で、でも響が私と約束したことをや、破ったら怒って、ほ、ホントは怒りたいのは二人だって同じはずなのに、きよ、境遇のせいで躊躇させちゃって、……ホントに最低だよ、私」

「ううん。そんなことないよ。雷は響が約束を破ったから一か月も怒ってたの？」

こくと頷く。

「さ、最初は、自分が収まったらす、すぐに謝ろうと思ってたんだ……」

で、でも一日無視してたら、じ、自分でも收拾がつかなくなって、響がこつちを見たり、話しかけてくれるたびに無視して、こ、心がいたくなつて、美味しそうに私の食べれない量を食べてたり、友達と笑うのを見るたびに、そ、それを共有できないことがつらくて……。未来う、私……。どうしたらいいかなあ……。？」

未来に抱きしめられながら涙を滝のように流す。「大丈夫、大丈夫」と、頭を撫でながら背中をポンポンと叩く。

「だったら今日、一緒に流れ星を見ながら仲直りをしようよ。私が星にお祈りをするからさ、ごめんなさい、しよ？」

「うん……。うん」

未来の提案に、泣きながらうなずく。

「もう、大丈夫？」

「だ、大丈夫！」

未来が雷から体を離し、ポケットから取り出したハンカチで顔を拭いてあげる。その時、携帯が鳴った。着信音は二課からだ。雷は悲しそうな顔で携帯を見ると、響のカバンを持った未来に申し訳なさそうに話しかける。

「ごめん。先、行つといて……。」

「うん。わかった」

響のカバンを持った未来を、教室から見送る。雷は携帯を強く握りしめ、通話ボタンを押した。



## 恐怖が生んだもの

未来が部屋に響が帰ってきていないことを確認すると、彼女から電話がかかってくる。すぐに通話ボタンを押して通話に出る。

「響！あなた……」

『ごめん……。急な用事が入っちゃった、今晚の流れ星、一緒に見られないかも……。』

「えっ……。？また……。大事な用……。なの？」

『うん……。』

「わかった、なら、仕方ないよ。部屋の鍵開けとくから、あまり遅くならないで」

『ありがとう。ごめんね』

未来は落ち込んだ顔をしながら、響との通話を切る。何か嫌な予感が出て、電話帳から雷の電話をコールする。一回もならないうちに、雷が通話に出た。如何やら向こうも掛けるつもりだったらしい。申し訳なきように、どもるような声が聞こえてくる。

『み、未来、ゴメン。星、み、見れなくなっちゃった……。きゅ、急な用事が入っちゃって、響と二人で行ってきて……。』

「ううん、響もね、いけないんだって」

『?!……わ、私が原因、だよな。私が、み、未来と一緒に見に行くから、い、いなくなっちゃったんじゃない……。』

如何やら雷は自分が未来と星を見に行くから、自分がいるから響がいかないと思っっているらしい。彼女の頭は動転して、同じ装者として戦っていることなどすっぱりなくなっているようだった。

「響に限ってそれはないよ。あの時一緒にいたときに響、とっても嬉しそうだったじゃない。あ、そうそう。部屋の鍵開けとくから、あまり遅くならないようにね？」

『う、うん。ごめん……。なさい』

雷との通話を切る。未来はそのまま床に座り込み、膝に頭を沈めた。

未来との通話を終えた雷は、頭の中を申し訳なきでいっぱいになりながら地下鉄の中に密集しているノイズへと視線を向け、聖詠を口ずさむ。

「Volta t e r s   K e i l a u n u s   T r o n」

着ていた制服と包帯が分解され、グレーと金のシンフォギア、ケラウノスを纏う。ノイズに向けて両腕のユニットで生成した稲妻を矢のように形成し、ギアから流れる音楽に合わせて歌い、叫びながら乱射する。

「私のせいだ！私のせいだ！私のせいだアツ！」

『雷乱神楽』

ケラウノスのアームドギアに形はなく、雷そのもの。故に、装者たる雷のイメージによってさまじまな形へと変化するのだ。乱射される稲妻の矢にノイズは串刺しとなり、チリへと姿を変えた。戦いながらも雷の心と頭の中には響や未来のことで頭がいっぱいになっている。それを振り切るように今度は両足のユニットを展開し、電光が迸る。まさしく稲妻がごとき速度で地下鉄内を駆けまわりながら走った際に発生するプラズマと膨大な熱量でノイズを破壊していく。

『電光刹那』

それでも雷の中にある思いが消えることはない。減少するどころか、だんだんと思いが増えてくる。ついに雷の足が止まった。体力がなくなってきたというのものもあるが、それ以上に精神的に追い詰められているのだ。瞳孔は開き切り、ぶつぶつと眩き始める。ノイズが群がってくるが、気にしている余裕は雷にはない。

本部はその様子をしっかりとモニターしていた。

○○○

オペレーターが声を上げる。

「轟雷！行動を停止しました！」

モニターに表示される雷の様子を見て、弦十郎が指示を出す。

「藤堯！友里！雷君のバイタルとギアのチェックだ！」

「とつくにやってます！」

指示が飛ぶよりも前にオペレーター、藤堯の前にはバイタルが、友

里の前にはギアの状態がモニタリングされている。了子が雷の様子を見て通信機の收音機能を最大にし、ノイズの声だけを取り除く。指令室に雷の音が響き渡る。

『私のせいだ．．．私のせいだ．．．私がいるからこうなったんだ．．．。自分を守れないくせに響が約束を破ったら怒って、一か月も無視して．．．未来はああ言ってくれたけど、心の中では私の事を煩わしく思ってるに決まってる．．．。嫌われちゃったかな．．．？い、嫌だ！二人に嫌われたくない！き、嫌われたら私、立ち直れなくなる．．．。怖いよ、お願いだから私を一人にしないで．．．。怖い．．．怖い．．．怖い怖い怖い怖いッ!!』

ついに叫び声をあげた雷に対して、弦十郎が叫ぶ。

「落ち着くんだ雷君！心を乱すな！」

『だ、誰?!怒らないで．．．』

今までとは異なる取り乱し方に唸り声をあげることしか弦十郎は出来ない。藤堯が慌てて声を上げる。

「轟雷のバイタル、急激に低下！このままではギアが解除されます！」  
「ぬぐう．．．」

もたらされた情報に、二課内で衝撃が走る。このままでは、装者が一人失われるという組織としての痛手だけでなく、少女の尊い命まで失うことになるのだから。しかし、その状況はもう一人のオペレーター、友里の発言で一変する。

「なに．．．これ。指令！ギアの出力、装者のバイタルと反比例してものすごい速度で上昇していきます！」

「なんだとお!」

今まで灰色だった部分が黄金に輝くと、両手足や腰のユニットのように電光を放ち始め、全身を覆うように斥力フィールドが展開。それによって周囲を取り囲んでいたノイズが弾き飛ばされ、放出され続ける稲妻によって貫かれる。

### 『雷帝顕現』

その状況を見て、了子が何とか冷静さを保ちながら解析したデータを弦十郎に説明する。

「これはケラウノスのアームドギアである雷のエネルギーが臨界を超えた状態になっているわ。識別コード的には『雷臨状態』と言ったらいいのかしら？数値的には適合係数にもよるけど、絶唱と変わらないエネルギーを纏っているわ」

「すると、つまり・・・」

「ええ。シンフォギアシステムではない、ケラウノスが固有で持つ決戦機構・・・こうなるわね。ただ、エネルギーが臨界を超えているから、今のギアは地獄の釜、とてつもない熱量で雷ちゃんの体を焼き続けていくはずよ」

それを証明するかのように雷のバイタルに火傷によるダメージが表示される。その状態のまま雷は一步目を地下鉄の線路上で踏み込む。

「駄目だ！その先には響君が！」

弦十郎の声は届くことなく、雷の姿は消失した。

○○○

暴走した響は、目の前で追いかけていたブドウ型ノイズが稲妻の槍で地上へと吹き飛ばされるのを目にし、それを行った張本人、雷が電光を放ちながらゆっくりと響のほうに歩いてくる。

暴走した響と、自身に恐怖を与えるものを粉碎していく雷は一触即発状態に陥るが、シンフォギアが雷の体に限界を感じたのか強制的にギアが解除される。元の制服姿に戻った雷を認識した響は暴走前の状態に戻り、気絶した雷を抱きかかえて雷が開けた穴を通って地上へと戻っていく。打ち上げられたノイズを蒼ノ一閃で斬り裂いた翼が少し離れたところで着地した。

気絶した雷を抱きかかえながら、響が声を上げる。

「私だって、守りたいものがあるんです！だから・・・！」

翼は聞いているのか聞いていないのか、よくわからない表情で沈黙している。

「だからあ？んでどうすんだよお」

どこからか少女の声が響いてくる。月を覆っていた雲が晴れ、少女の姿を照らす。その少女は銀の鎧を身に纏っていた。

「ネフシユタンの・・・鎧?！」

ただの鎧ではない。それはかつて、ライブ会場の惨劇を引き起こした完全聖遺物、ネフシユタンだった。

## 謝る言葉と防人の意思

指令室のモニターに少女の纏う完全聖遺物、ネフシユタンが表示され、弦十郎が声を上げる。

「バカな?! 現場に急行する! 何としても、鎧を確保するんだ!」  
了子が返答として頷く。

○○○

「ネフシユタンの・・・鎧?」

翼が驚きの声を上げる。ネフシユタンを纏った少女が煽るように言葉を放つ。

「へえ? てエことはアンタ、この鎧の出自を知ってた?」

「二年前、私の不始末で奪われたものを忘れるものか! 何より! 私の不手際で失われた命を忘れるものか!」

翼の中に二年前の事件の事、ネフシユタンの事、そして、天羽奏のことが蘇る。手に持つ大剣を構え、少女は杖のようなもの展開する。(奏を失った事件の原因と、奏の残したガングニールのシンフォギア。時を経て、再びそろって現れるというめぐりあわせ。だがこの残酷は! 私にとって心地いい!)

少女を睨む翼のそばに、気絶した雷を抱えた響が駆け寄る。

「やめてください翼さん! 相手は人です! 同じ人間です!」

「戦場で何を馬鹿なことを!」

響の言葉を、敵対し合う両者が同時に一蹴し、二人は向き合いニヤリと笑う。

「むしろ、あなたと気が合いそうね!」

「だったら仲良くじゃれ合うかい?!」

ネフシユタンから延びる鞭を少女が振るう。翼は抱きかかえられた雷ごと響を突き飛ばし、戦場から遠ざけると自身は跳躍する。その時の衝撃で雷の体は地面に叩きつけられ、目を覚ます。彼女は状況を慌てて理解すると、大慌てでギアを纏う。少なくとも生身でいるよりは安全だろう。

翼は上空から大剣を振り下ろす。

『蒼ノ一閃』

ネフシユタンから伸びた鞭で翼の放った蒼き斬撃の横つ腹を叩くことで逸らす。この時点で少女にはそれ相応の実力があることがわかる。そらされた斬撃はそばにあった森で爆散する。爆光の中、少女はニヤリと笑った。

そのことに驚愕した翼は着地を決めるとすぐに少女に向けて連撃を決める。しかし、その攻撃は全て、バク転を使った回避や、鞭による防御で阻まれてしまい、逆に鳩尾に蹴りを叩きこまれてしまう。

(これがっ！完全聖遺物のポテンシャルっ?!)

その翼の内心は、少女の一言で粉碎される。

「ネフシユタンの力だなんて思わないでくれよなあ？あたしの天辺は、まだまだこんなもんじゃねえぞお！」

少女は言ったのだ。身に纏うものの力ではなく、ただの実力差であると。ネフシユタンから延びる鞭は翼を追いかけて周囲一帯を薙ぎ払い始める。響がたまらず声を上げた。

「翼さん！」

「お呼びではないんだよお。こいつらでも相手しッ?!」

少女はどこからともなく杖を取り出し、響へとそれを向けた瞬間。さつきまで響の横にいたはずの雷が雷光と共に杖と響の直線上に姿を現した。気絶している間と、シンフォギアを纏っていたことも相まって体力を回復していた雷は杖を抜いた瞬間に電光刹那で接近していたのだ。

「響はやらせない！」

「自分が喰らうのは考慮外なのかよ?!」

すでに腰のユニットを展開し、今のわずかな体力で打てる最大威力の技を至近距離から不意打ちで少女の杖を構えた右の横つ腹に直撃させるために、稲妻を纏った左足が斥力によって空間から強引に弾かれ、残光が三日月のような軌跡を描く。

『雷刃拔拳・滅神』

軽度とは言え火傷を負った身で自身への最も反動が強い技を放った雷は痛みで失神しそうになるが、歯をくいしばって耐える。杖を構

えたおかげで防御が出来ず、現状攻撃技として最大速度、最大火力の滅神を受けたネフシユタンの右わき腹の装甲が砕け散る。

少女が叫ぶ。

「ネフシユタンが砕かれた?! てんめえ!」

雷が食いしばった隙について少女がネフシユタンから伸びた鞭で首を縛り上げて響のほうへ放り投げ、地面に叩きつけられる前に何とか彼女を受け止める。少女の体にネフシユタンが食い込み、再生していく。脳内麻薬が出ているのか、痛みはないようだ。

「ぐっ?!・・・雷! だいじょうぶ?!」

「そこで仲良ししてなあ!」

再び杖を構えた少女は二人に向けて光弾を発射し、ノイズを召喚する。

「ノイズが・・・操られて」

召喚されたノイズは雷を受け止めた体勢のままの響を粘液で拘束し、身動きをとれなくした。

「その子らにかまけて、私を忘れたか!」

翼が接近し体験を振り下ろす、少女は鞭でそれを受け止めるが翼が右足で少女の左足を払い体勢を崩す。その瞬間に、足についたブレードで二段蹴りを入れるが、一発目は回避され、二発目は受け止められる。

「お高く留まるなあ!」

そのまま少女は翼の足を掴み放り投げ、地面に叩きつけられながら吹き飛んでいく。速度が落ちたタイミングで少女が翼の頭を足で踏みつける。

「のぼせ上がるな人気者お・・・誰もかれもが構ってくれるなどと思うんじゃないねえ!」

翼は少女の顔を睨みつけることしか出来ない。さらに口を開く。

「この場の主役と勘違いしてるなら教えてやる。狙いはなっからこいつと、こいつのギアをかつさらうことだあ」

親指で拘束されている響と雷を指さす。恐らく、こいつとは響の事、ギアとはケラウノスのことを指すのだろう。それを聞いて、響が



驚愕し、歯を食いしばった雷の周りには小さく静電気が音を立て始める。

「鎧も仲間も、あんたにや過ぎてんじゃないのかあ？」

「繰り返すものかと！私は誓ったッ！」

手に持つ大剣を天に構え、空から幾千本の剣が降り始める。

### 『千ノ落涙』

それを少女は距離をとって回避し、場所を変えて戦闘が再開された。今だノイズに拘束されている響は振り払おうとアームドギアを展開しようとし、雷はだんだんと放出している稲妻が太くなっている。受け止められた時と同じ体勢のまま、雷は響に話しかける。彼女にとつて、今しかないと思っただのだろう。

「・・・響、ごめんなさい」

「えっ？」

「こんな状況で言うのもアレだし、本当は三人で星を眺めながら謝るつもりだったんだけどね、今言わないと私、おかしくなりそうだから・・・。だから、ごめんなさい」

「こつちもごめん。雷の前であんなことはもう言わない」

「・・・私の事、ホントは煩わしく思ってたたりしない？」

「しないよ。大丈夫」

「私を置いて、どこかに行ったりしない？」

「私が雷のそばを離れるわけじゃないじゃない」

「・・・よかったあ・・・」

雷は響に向かった満面の笑みを浮かべる。その笑みを浮かべたまま全身のユニットが展開し、放出された稲妻が拘束していたノイズを貫き、粘液を焼き尽くした。二人は意識を切り替えて立ち上がる。

「じゃあ二人で、翼さんを助けに行こう！」

「うん！」

いつの間にか目の前に戻ってきていた翼と少女の戦いで、少女が鞭の先端に禍々しいエネルギー体を形成する。その発動を阻止するために雷は右腕のユニットで雷の槍を形成し、思いつきり投擲する。

「当たれえええ！」

『天槍霹靂』

投擲した雷の槍は球体に直撃し、エネルギーの暴走で少女が吹き飛ばされる。その隙にボロボロになった翼が少女と雷、響の影にクナイを投げる。

『影縫い』

今までに負った怪我でふらふらになりながら絞り出すように話し始める。

「この身を一振りの剣と鍛えたはずなのに、あの日、無様に生き残ってしまった。出来損ないの剣として、恥をさらしてきたッ！だが、それも今日までの事。奪われたネフシユタンを取り戻すことで、この身の汚名をそそがせてもらおう！」

「そうかい。腕がせるものなら腕がしてッ?!何?!こんなもので、あたしの動きを!・・・まさか、お前?!」

影に突きささったクナイが少女の動きを止める。それは、同じくクナイが影に刺さっている雷と響も同様だった。響がもがくが、一向にとれる気配がない。少女の取った反応に違和感を感じた雷が叫んだ。「翼さん!何をやる気ですか?!」

「月が覗いているうちに、決着をつけましょう・・・」

「歌うのか・・・絶唱をッ?!」

「翼さん!」

響が叫ぶが、振り返った翼がそれを超える声量で宣言する。

「防人の生きざま!覚悟を見せてあげる!」

手に持つ剣を響へと向ける。

「あなたの胸に!焼き付けなさいッ!」

向けていた剣を天へと掲げ、歌い始めた。絶唱と呼ばれる、滅びの歌を。そして少女の目の前で歌い切った。その歌は周囲一帯のノイズを消滅させ、至近距離で喰らった少女が吹き飛び、ネフシユタンも所々粉碎されている。鎧の再生能力が体を蝕んでいるのか、激痛が走っているらしい少女は撤退していく。そこには、絶唱の影響でズタボロの翼と、そばに駆け寄った雷と響、到着した弦十郎と車に乗った子が集まっていた。弦十郎が叫ぶ。

「無事か?!翼!」

「私とて、人類守護の務めを果たす防人……。こんなところで、折れる剣じゃありません……。!」

振り返った翼からは、目や鼻、口からおびただしい量の血を流し、静かにその場に崩れ落ちた。弦十郎がそばに駆け寄る。

「翼さああんツ!!」

雷は目をつむって顔をそらし、大量に流れる血を見慣れていない響は絶叫した。

## 決意と隠し事

絶唱を発動した翼は二課直営の病院へすぐさま担ぎ込まれ、緊急手術の結果、絶対安静、予断を許さない状況になっていることが分かった。弦十郎は執刀医に頭を下げ、ネフシユタンの捜索へと当たる。

近くのソファアールで雷と響の二人は座り込んでいた。そこへ、緒川が歩いてきて、携帯で自販機のドリンクを買いながら口を開く。

「あなた達が気に病む必要はありませんよ。翼さんが自ら望み、歌ったのですから」

「緒川さん……」

自販機がカップにドリンクをそそぐ音を聞きながら、話を続ける。

「ご存じとは思いますが、以前の翼さんはアーティストユニットを組んでいました」

「ツヴァイウイング……ですよね」

注ぎ終わったドリンク、その三つのうちの二つを雷と響に差し出し、同じくソファアールに座る。如何やら、二人はココア、緒川はコーヒーのようだ。雷は家庭の事情でツヴァイウイングのことを良く知らなかったし、響の事情ということを知ったので、黙ってココアを啜る。

「その時のパートナーが、天羽奏さん。今はあなたの胸に残る、ガンガンニールのシンフォギア装者でした。二年前のあの日、ノイズに襲撃されたライブの被害を最小限に抑えるため、奏さんは、絶唱を解き放つたんです」

「絶唱……。翼さんも言っていた……」

緒川が絶唱とはどういうものかを説明していく。

「装者への負荷をいとわず、シンフォギアの力を限界以上に打ち放つ絶唱は、ノイズの大軍を一気に殲滅せしめましたが、同時に奏さんの命を燃やし尽くしました」

「それは……。私を救うためですか？」

その質問に緒川さんは答えず、一度コーヒーを啜ってから一拍置いて話を再開する。

「奏さんの殉職、そしてツヴァイウイングは解散。一人になった翼さ

んは、奏さんの抜けた穴を埋めるべくがむしやらに戦ってきました。同じ世代の女の子が知ってしかるべき恋愛や遊びも覚え、自分を殺し、一振りの剣として生きてきました。そして今日、剣としての使命を果たすため、死ぬことすら覚悟して歌を歌いました」

ゆつくりと朝日が昇り、夜が明ける。

「不器用ですよ。でもそれが、風鳴翼の生き方なんです」

響は体を震わせ、頬を涙が伝う。雷は飲み干したカップを握りつぶし、歯を食いしばる。

「そんなの・・・ひどすぎる・・・」

「そして私は、翼さんのことを何も知らずに、一緒に戦いたいだなんて・・・奏さんの代わりになるだなんて・・・」

泣き震える響を雷が抱き寄せ、自分が泣いたときにいつもしてくるように頭を撫でる。それを見ながら、緒川が話を続ける。

「僕も、あなたに奏さんの代わりになってもらいたいだなんて、思っはけません。そんなこと、だれも望んではいません。雷さんなんか特にそうです。聞きましたよ、代わりになると響さんが言ったあの日、とても怒っていた、と。雷さんにはどのような経緯があったのかは聞きませんが、代わりになる、が何を意味するか、分かっていたのでしよう」

緒川が身を乗り出す。

「ねえ、響さん、雷さん。僕からのお願いを、聞いてもらえますか？」

「へ・・・」

「お願い・・・ですか」

二人は顔を上げて、緒川を見つめる。

「翼さんの事、嫌いにならないでください。翼さんを、世界に一人ぼっちになんて、させないでください」

「はい・・・！」

響が返事し、雷が頷く。

〇〇〇

屋上で二人はベンチに並んで座っている。

「代わりだなんて」

俯いた響がボソツと呟き、火傷のせいで包帯が増えた雷は目を閉じて軽く上を見ている。何か考え事をしているのだろう、時折「うーん」と唸っている。響の中に会議のことが蘇ってくる。

弦十郎が話題を切り出す。

「気になるのは、ネフシユタンを纏った少女の狙いが、響君と雷君のギアだということだ」

了子がタブレットをいじりながら返事をする。

「それが何を意味しているのかは全く不明」

「いや、個人を特定しているならば、我々二課の存在を知っているだろうな」

「内通者・・・ですか」

了子の答えを弦十郎が否定し、藤堯が補足した。

「なんで、こんなことに」

雷に慰められ続けている響は、内海着ながら声を上げる。

「私の至らないせいです。シンフォギアなんて強い力を仕えても、雷みたいに強くないから・・・私自身が至らないせいで・・・！」

響がゆっくりと立ち上がりながら言う。

「・・・翼さん、泣いていました。翼さんは強いから戦い続けてきたんじゃないかもしれません。ずっと、泣きながらも、それを押し隠して戦ってきました。悔しい涙も、覚悟の涙も、誰よりも多く流しながら、強い剣で、あり続けるために。ずっとずっと、一人で・・・！」

涙を流しながら、響が勢い良く振り返って、叫ぶ。

「私だって守りたいものがあるんです！だからっ！」

響が目を開ける。となりでは未だに雷が目をつぶってうんうん唸っていた。昨日の少女のことと、データで見たライブの事件のことを想起しているのだ。

（ノイズはあの杖を使えば操れる・・・ネフシユタンが奪われたときのライブで大量のノイズが現れた。で、あの子が鎧をまとっていたことを鑑みるに人為的なものと考えるのが妥当。見た感じの年齢的に彼女はやってない、先兵的な感じかな？その少女の狙いは響と、ケラウ

ノス……。響はよくわからないけど、天羽々斬じゃなくてケラウノスなのは轟理論を使っているから？でも、鎧と杖を使い方を知っているあたりそういうのに明るい人がバツクにいるのかな：たしか、轟理論の根幹は櫻井理論と同じだから、ケラウノスを狙っているのは櫻井理論を知っている人……)

一人だけ該当者がいたが、あり得ないだろう。と、首を振って頭から考えを追い出す。

「二人とも！」

「未来……」

「おはよ、未来」

横から未来が声をかけてきた。

「おはよ、雷。最近二人でいることが多くなったね？今まで仲たがいでた分くつついてるのかな？」

あわてて響が未来に答える。

「そ、そうかもしれないね。一か月分の雷との触れ合いをまとめて補給してるんだよ！ほ、ほら！それに雷って未来とは別の方向で賢いじゃない？今までできなかつた触れ合いついでに相談にのつてもらってたんだ！」

雷が拘束で頷いていると、未来が雷と響の間に座って両方の手を握ってきた。

「やっぱり未来に隠し事は出来ないや」

「だって響、無理してるんだもの」

二人そろって観念したような顔をする。

「でもごめん。もう少し二人で考えさせて。……これは、二人で一緒に考えなきゃいけないことなんだ」

「……わかった」

未来は一拍置いて返事をする、重ねていた手をほどき、しっかりと握りしめる。

「ありがとう、未来……」

少しの間そうしていると、未来が手を放し、立ち上がった。

「あのね、響、雷。どんなに悩んで考えて、出した答えで一步前進した

としても、響は響のままできてね。変わってしまうんじゃない、響のまま成長するんだったら、私も応援する。だって、響の代わりはどこにも居ないんだもの、いなくなって欲しくない。雷は、今響の力になれるのは雷だけなんだから、響がほかのだれにもならないように導いてあげて」

響がはつとした顔で立ち上がり、病院のを見つめる。座ったままの雷が未来と小声で話す。

「わかった。ありがとう、未来。やっぱすごいや、私じゃ何とか変わらないようにさせるのがやつとなのに、未来が言ったら前に進めるんだもの」

「そんなことないよ。私は最後の一押しをただけ、そこまでもっていつてくれたのは雷だよ?」

響が二人のほうを向いて、手を握りしめる。

「ありがとう。雷、未来。私、私のまま歩いて行けそうな気がする!」それを聞いて二人はにっこりと笑う。そして未来がふと思い出したかのようにポケットからタブレットを取り出した。

「そうだ!…こと座流星群見る?動画でとっておいた」

「ホント!」

雷と響は二人で、頬がくつつくほどの距離で画面を見るが、そこには何も映ってない。

「…壊れちゃった?」

「…光量不足だって」

「駄目じゃん!」

二人は未来にツツコミを入れ、おかしくなって三人そろって笑う。響の顔に涙が流れ、それをぬぐいながら話し始める。

「おつかしいなあ、もう。涙が止まらないよ。今度こそは三人一緒に見よう!」

「約束、次こそは約束だからね?」

「わ、わかってるよ」

三人をそよ風が撫でる。

(私だって、守りたいものがある!私に守れるものなんて小さな約束



だったり、何でもない日常くらいなのかもしれないけれど、それでも、守りたいものを守るように、私は、私のまま強くなりたい！」

響が決意を新たにしていると、雷の耳元で未来がささやいた。

「流れ星にしっかりと、二人が仲直りできますようにって祈ったからね」

「ありがとう。だったら仲直りできたのは未来のおかげだね」

〇〇〇

「たのもー!!!」

とある和風屋敷の前で雷と響の二人は叫ぶ。

「うおお?!なんだ、いきなり」

「私に、戦い方を教えてくださいー!」

「私は、私の体のことを伝えに来ました!そのうえで、私も鍛えてくださいー!」

「この俺に・・・君たちが?」

「はい!弦十郎さんなら、きつとすごい武術なんか知ってるんじゃないかと思つて!」

その家の主は風鳴弦十郎。二課の指令にして人類最強の男である。

その男が腕を組み、少し考えてから口を開く。

「オレのやり方は、厳しいぞ」

その言葉に雷と響の二人は顔を合わせ、もう一度弦十郎の顔を見て返事をする。

「はい!」

返事を聞いて、弦十郎は目を細めて二人に質問する。

「時に二人とも、君たちはアクション映画などはたしなむ方かな?」

「へ?」

「タブレットで、洋画を少し・・・」

雷は体のことを響に支えてもらいながら弦十郎に話し、無理のない程度の特訓メニューが組まれた。雷は体力と防御、回避を中心に、響は全体的に鍛え上げるのだ。弦十郎と二人の厳しい特訓が始まった。

〇〇〇

三人でリディアンに登校しているとき、響が未来に何も映ってない流れ星の動画を見せてもらおうとしたので、雷も便乗する。

「雷も？やっぱり二人は変わった娘」

「そんな私達と付き合ってる未来はもっと変わった娘」

にんまりと笑った雷が未来に振り返って言う。その時、未来の足が止まった。

「あ、あのね二人とも」

「何？」

「うん？」

神妙な顔で未来が口を開く。

「流れ星の動画をとっていたこと、響と雷に黙っているのは、少しだけ苦しかったんだ。二人にだけは、二度と隠し事したくないな」

雷と響を見てにつこりと笑う。そんな未来に、二人は苦笑いするこ  
としか出来ない。

「私だって・・・」

「・・・未来に隠し事なんて・・・しないよ」

## 翼の目覚め

早朝、異変に気付いた未来が目を覚ます。いつも自分の左側で並んで寝ている響と、その間でどっちかの腹に頭を押し付け、丸まって寝ている雷が居ないのだ。

「響・・・雷・・・？」

そこで未来は、枕元に置いてあった置き手紙を発見する。何やら雷と響の二人の面影があるイラスト付きだ。

『修行。ガツコーお休みします。先生によりしく言っついてね！』

「なんなの・・・これ？」

〇〇〇

弦十郎宅。そこには弦十郎指導の下、サンドバックにパンチを打ち込む響と、謎のマシン相手に回避や防御の特訓をしている雷が居た。腰の入っていない響のパンチに弦十郎からの指導が入る。

「そうじゃない！稲妻を喰らい！雷を握りつぶすように打つべし！」

「それは・・・稲妻を使う私への当てつけですか?！」

「そんなつもりはない！」

ジャージをボロボロにした雷が茶々を入れる。最初は時折回避や防御のことが頭から抜け落ちていた彼女も、今ではそれらを織り込んだ状態で同じようなことが出来る様になっていた。体力面も改善し、余程のことが無い限りへばることはないだろう。

響はそんな雷に対して焦ることはなく、自分のまま強くなるために自分のペースで努力している。長い間弦十郎のもとで特訓しているが、それでも時々彼の言っていることがよくわからない時がある。

「言ってる事全然わかりません！でも、やってみます！」

グローブをはめたこぶしを握り締め、心臓の鼓動に合わせた一撃をふるう。それはサンドバックに突き刺さり、その衝撃で吊り下げている枝が折れ、後ろにあった池に落下する。響のほうを見ながらも、しっかりと攻撃を避け続ける雷が感嘆の声を上げる。

「すつこい・・・」

「こちらにも、スイッチをいれるとするか」

〇〇〇

「立花さん！轟さん！轟さんはともかく、立花さんはいつものお節介でまた遅刻ですか?!」

先生の怒鳴り声に対し、二人のルームメイトの未来が手を上げて答える。

「先生！響・・・立花さんは、雷・・・轟さんが通学中に道路に飛び出してしまって、その付き添いに行きました!」

(ゴメン雷!)

未来は雷のことを言い訳の材料にしたことに罪悪感を感じたが、二人を休みに対する言い訳がこれ以外思いつかなかったもので、それを口にし、心の中で彼女に謝罪した。先生はどうやら納得したようである。

「はあ・・・なら仕方ないですね・・・」

普通は二人掛けなのだが、学校側の配慮で特別に三人掛けになった自分の隣の開いた二つの椅子、雷と響の椅子を見て頬を膨らませ、小さくつぶやいた。

「ウソつき」

一方そのころ。特訓を一時中断した雷と未来は二人そろって二課のソファアに倒れ込み、弦十郎が反対側のソファアにどっかりと腰を下ろす。

「ふあく。朝からハードすぎますよ」

「流石あの鬼隊長が科すだけのことはある・・・めっちゃしんどい」

「頼んだぞ！明日のチャンピオン達!」

友里が二人にドリンクを持ってくる。

「はい。ご苦労様」

「すみません!」

「ありがとうございます!」

それを受け取ると、二人はゴクゴクの飲んでいく。その時、ふと思いついた疑問を響が弦十郎に投げかける。

「あの、自分でやると決めたくせに申し訳ないんですけど、何もうら若き女子高生に頼まなくってもノイズと戦える武器って他にないんで

すか？外国とか・・・」

「うーん・・・お父さんとお母さんの書いてた研究ノートにはシンフォギアのことしか書いてなかったけど・・・。それは私も気になります」  
両親のノートの中身を思い出しながら雷が同調する。

二人に視線を向けられた弦十郎が答える。

「公式にはないな。日本だって、シンフォギアは最重要機密事項として完全非公開だ」

「やっぱり、ですか」

「えええ・・・。私、気にしないで結構派手にやらかしているかも・・・」

雷はノイズ対策が進んでいないことに落ち込み、響は機密事項を派手に振り回していることを心配した。友里がフォローを入れ、藤堯が念を押す。

「情報封鎖も二課の仕事だから」

「だけど、時々無理を通すから、今や我々のことを良く思っていない閣僚や省長だらけだ。特異災害対策起動部二課を縮めて『突起物』って揶揄されてる」

「情報の秘匿は、政府上層部の指示だったのに・・・やりきれない」

「いずれシンフォギアを、有利な外交カードにしようと思論んでいるんだらう」

「EUや米国は、何時だって改定の期を窺っているはず。シンフォギアの開発は、基地の系統とは全く異なるところから発生した理論と技術によって成り立っているわ。日本以外の他の国では到底まねできないから、猶更ほしいのじゃね」

「確か、アメリカに研究施設があるって聞いてますけど・・・。今の状況をみるに進んでませんよね、研究」

雷も会話に参加し、味方が居なくなった響はソファアに寝そべって言葉をこぼす。

「結局やっぱり、いろいろとややこしいってことですよね・・・」

そこで雷が誰かが居ないことに気づき、弦十郎に質問する。

「アレ？弦十郎さん、了子さんはどこに？」

「永田町さ」

「永田町？」

「政府のお偉いさんに呼び出されてね。本部の安全性、および防衛システムについて関係閣僚に対し、説明義務を果たしに行っている。仕方のないことさ」

「ホント、何もかもがややこしいんですね」

「ルールをややこしくするのはいつも、責任を取らずに立ち回りたい連中なんだろう。それでも、広木防衛大臣は……了子君の戻りが遅れているようだ」

弦十郎は腕時計を確認し、了子が時間になっても帰ってきていないことに疑問を持つ。どこかで彼女がくしゃみをしたが、そんなことを二課が知る由もない。

○○○

病院で翼が目を覚ます。周りの医師たちが周囲を駆けまわり、翼はそれを気にせずに思う。仕事や任務以外で学校を休んだこと、そのことで皆勤賞は取れないことを思い、自分の中にいる奏に真面目じゃないからぽつきり折れたりしないことを伝える。

彼女の頬を涙が伝った。

## 完全聖遺物の力

「大変長らくお待ちさせましたあー！」

「了子君！」

基地内の緊迫した雰囲気とは裏腹に、了子は謎のテンションで帰還する。広木防衛大臣が暗殺されたのだ、ついさっきまで彼にあつていた了子を心配するのも当然だろう。手にトランクを持つているあたり、別れた後に襲われたのだろう。複数の革命グループから犯行声明が出ていて、詳しいことは全く理解できていない。

「目下全力で調査中だ」

「了子さんに連絡が取れないからみんな心配してたんです！」

「んえ？」

了子がポケットから携帯端末を取り出して確認し、苦笑いを浮かべる。

「・・・壊れてるみたいね」

その報告に弦十郎と響は安心した顔を浮かべるが、雷だけはげげんな顔をしていた。

（こういうところで使われている端末ってそんな簡単に壊れるのか？ それに恐らく狙いはそのトランク……。大臣の通るルートは分かるのに、受け渡しの時間が分からないのが引つかかる・・・）

「どうしたの？何か気になる？」

「ツ?!い、いえ、なにも！」

思考中にいきなり了子に詰め寄られ、今まで考えていたことが霧散する。彼女はトランクをソファアに置き、中からチップを取り出した。

「政府から受領した機密指令も無事よ。任務遂行こそ、広木防衛大臣の弔いだわ」

そのトランクの死角に大臣の血がついていることは、誰も気づくことが出来なかった。

デュランダル移送計画。その計画に響は了子と共に車での護衛、雷はケラウノスが遠距離攻撃能力を持つためにヘリからの上空支援が

充てられた。

○○○

リディアン寮内。自分たちの寮室に戻った二人は未来からの説教を受ける。

「ちよつと！朝からどこに行つてたの?!いきなり修行とか言われても！」

「あああくと、えーと、その・・・つまり・・・」

「なんつて言つたらいいのかな」

二人そろつて誤魔化そうしていると、未来が詰め寄ってくる。

「ちゃんと説明して！」

「あははは！もう行かなくっちゃー！」

「未来・・・。話せるようになってたら話すから、今は許して・・・」

響は慌てて、雷は申し訳なさそうに謝罪を言いながら玄関から飛び出す。その後ろ姿を未来は見つめることしか出来ない。

「心配もさせてもらえないの・・・?」

未来のつぶやきは、誰にも聞かれることはなかった。

○○○

二課の通路で雷と響の二人はソファアに座り込んでいた。

「絶対未来怒らせちゃったよね・・・」

「問題を先送りにして逃げてきちゃったもんね、私達」

こんな気持ちで寝られるわけもなく、目の前に置いてあつた新聞を手に取り、開く。そこには年頃の少女にとっては過激な写真が載せられていた。咄嗟に新聞と顔をそらす。

「うひゃあ?!」

「お、男の人って、こういうのとかスケベ本とか好きだよね・・・」

「う、うん」

そう言いながらもそのページをチラ見する二人、別のページには翼が過労で入院しているとの記事が載せられていた。

「情報操作も、僕の役目でして」

「緒川さん・・・」

上から声をかけられた。緒川だ。彼は翼のマネージャーも兼任し



ているため、二課の装者として動く翼との整合性を保つためにも行動しているのだ。

「翼さんですが一番危険な状態を脱しました。ですが、しばらくは二課の医療施設にて安静が必要です」

彼の報告に二人は笑顔を浮かべるが、その後が続いた言葉に表情を曇らせる。緒川もソファーに座る。

「月末のライブも中止ですね。さて、ファンの皆様はどう謝るか、二人も一緒に考えてくれませんか？」

響が落ち込み、雷が頭を撫でる。翼が絶唱を使って意識不明の重体になってしまったのは自分が至らなかつた所為だと思っっているからだ。慌てて緒川が謝罪する。

「ああ、いや……。そんなつもりは……。ごめんなさい、責めるつもりはありませんでした。伝えたかつたのは、何事も、たくさん人間が少しずつ、いろんなところでバックアップしているということですから。だから響さんも、もう少し肩の力を抜いても、大丈夫じゃないでしょうか」

「優しいんですね、緒川さんは」

「……。いや、こんな人に限って内面は鬼畜かもしれないよお」

「あ、雷さん！からかわないでください！ひ、響さん僕は……」

「分かってますよ、雷がからかうっていうことは優しい人ですので」

「響いく、バラすなよお」

からかう雷に心外だと言わんばかりに訂正を入れようとするが、雷のことを良く知っている響は逆に安心する。内心をばらされた雷は口をとがらせてぶつくさ言っているが、これも信頼しているからこそである。急に緒川が真面目な顔をする。

「……。怖がりなだけです。本当に優しい人は他にいますよ」

雷と響は立ち上がった緒川に礼をする。

「少し楽になりました。ありがとうございます。私、張り切って休んでおきますね！」

「あと、からかってごめんなさい」

二人は緒川を置いて通路を駆けていく。一人残った緒川がつぶや

いた。

「翼さんも、響さんや雷さんぐらい素直になつてくれたらなあ」

〇〇〇

明朝五時、移送作戦、了子曰く『天下の往来一人占め作戦』が開始され、響は了子、デュランダルと共に車へ、雷は弦十郎と共にヘリへと乗り込む。大臣殺害犯を検挙する名目で検問を敷き、一気に駆け抜ける作戦だ。ルートの選択は了子が担当したようだ。

移送中、橋の一部が崩れ、四台の護衛の車のうち一台がそれに巻き込まれる。弦十郎がレシーバーで報告する。

「敵襲だ！まだ確認できていないがノイズだろう！」

『この展開、想定していたよりも早いかも?!』

市街地へと突入し、マンホールがしたからものすごい勢いで跳ね上がって車を一台吹き飛ばした。

「下水道だ！ノイズは下水道を伝って攻撃してきている！」

さらにもう一台が吹き飛び、デュランダルを守る車は一台だけになつてしまった。

『弦十郎君、ちよつとヤバいんじゃない？この先の薬品工場で爆発でも起きたら、デュランダルはツ・・・』

「分かっている！雷君、狙えるか？」

すでにケラウノスを纏った雷は雷の矢を展開し、すぐに射出できるようにしているが肝心のノイズの姿が見えないので打つことが出来ない。

「姿が見えないので、何とも・・・」

「そうか・・・。さつきから護衛車を的確に狙い撃ちしてくるのは、ノイズがデュランダルを損壊させないよう制御されていると見える！狙いがデュランダルの確保なら、あえて危険な地域に滑り込み、攻め手を封じるって算段だ！」

『勝算は?!』

「思い付きを数字で語れるものかよお！雷君は了子君たちが薬品工場に滑り込んだら、彼女たちに合流してデュランダルの防衛に当たってくれ！」

「はいッ！」

すると突然マンホールからノイズが飛び出し、護衛車に取り付く。乗っていたエージェントたちは車から飛び降り、制御を失った車はタンクにぶつかって爆発した。ノイズはデュランダルの損壊を恐れているのか襲ってこない。

『狙い通りです！』

響が喜ぶのもつかの間、彼女らの乗った車はノイズによってひっくり返ってしまう。響と了子は車から這い出るが、周囲をノイズに囲まれてしまった。

「南無三ツ！雷君！」

「はいッ！」

雷がへりから飛び降り、両腕から展開された雷の矢をノイズに向けて乱射する。

『雷乱神楽』

矢が多数のノイズを貫くがそれ以上に数が多く、車への攻撃を許してしまい、爆発する。爆風でデュランダルを抱えた響と了子が吹き飛ばされる。

「二人とも！」

間髪入れずに行われるノイズの攻撃に対し、了子は立ち上がると右腕からエネルギーバリアのようなものを展開した。それにノイズが触れると、シンフォギアに攻撃されたように粉々に砕け散った。

「なにそれ?!・・・二課の人たちにとってはこういうのが普通なのかな?」

雷は驚いた後に翼と自身の攻撃を受け止めた弦十郎のことを思い出し、強引に納得する。

「しようがないわね。あなたのやりたいことを、やりたいようにやりなさい」

その言葉に響は意を決した。

「私、歌います！」Balwisyall Nescell Gungnir Tron(バルウイシャル ネスケル ガングニール トロン)』

ガングニールを纏った響は、弦十郎との特訓で身に着けた格闘技の構えをとり、歌う。ノイズの攻撃を避けるがヒールが邪魔をし、うまく動くことが出来ない。ノイズを殴り貫きながら雷が叫ぶ。

「響！ヒール外して！」

「わかってる！」

地面に当ててヒールを蹴り外し、構えを改める。そこへ突っ込んできたノイズを正拳突きで衝撃で破壊し、続いて打ち下ろしてもう一体のノイズを粉碎する。雷も今までのような防御や回避のことを考慮しない戦い方から、それらのことを考えながら今まで通りに戦うスタイルへと進化している。響からは戦う力が感じられ、雷からは危うさが無くなっていた。

二人の歌に反応し、デュランダルを保護していたケースのロックが解除される。その時、ネフシユタンの少女が鞭で響を狙ったが、事前に「あり得るだろう」と予測していた雷が稲妻を放ち、弾く。

「やっぱり来た！」

「今日こそはモノにしてやる！」

「ぐうッ?!」

鞭の攻撃こそ弾かれたものの、少女の蹴りが響の顔面に直撃する。すると突然デュランダルがケースを突き破り、空中で静止すると、金色に輝き始めた。

「覚醒?!:起動?!」

「こいつがデュランダル」

少女はほくそ笑み、デュランダルを奪取すべく飛び上がる。それを雷は妨害すべく飛び上がり、車輪のように回転しながら稲妻を纏った踵落としを背中に思いつき叩きこんだ。衝撃で少女の体は地面に叩きつけられ、雷が叫び、響が呼応する。

「響！」

「渡すものかああ！」

響がそれを掴んだ瞬間、光が一層増して輝き始める。その光は輝きを超え、一筋の光の帯となる。その光の奔流の中でデュランダルは元の形を取り戻し、本来の力を解き放った。

「こいつ、何をしやがった?!」

鎧の少女が驚きの声を上げ、了子のほうを一瞬だけ向いた。彼女は取り付かれたような笑みを浮かべている。確定的な証拠を雷は響に気を取られて見逃してしまふ。

「そんな力を見せびらかすなあ!」

「君も似たようなのを使ってるじゃないか!」

杖を構えた少女に対して咄嗟に動いた雷が相對し、杖を使うのを阻止する。それに反応したのか、デュランダルを構えた響が振り向き、剣を振り下ろした。

「響?!」

雷は電光石火で回避し、少女は一瞬臆したがすぐに直線上から回避する。響の振り下ろした光の奔流は、直線上にあつたすべてのものを破壊していく。それは工場そのものをも巻き込み、大爆発を引き起こした。

雷はその衝撃と爆炎を全力で展開した斥力フィールドで防御し、絶した響は了子の謎のエネルギーバリアで守られている。そんな響を見て、了子はほくそ笑む。

「まさか、デュランダルの力なのか!」

へりで弦十郎がつぶやいた。

○○○

「響!響!!」

雷の声で響が目を覚ます。体を跳ね起こして周囲を見渡す、そこには響を抱きしめる雷と髪を結いなおしている了子、そして手にはデュランダルとそれによって生み出された瓦礫の山が出来上がっていた。「コレがデュランダル。あなた達の歌声で起動した、完全聖遺物よ」

「あの、私……。それに了子さんの、アレ……」

「私も見ました。あれは……」

髪を結び終わった了子はヒビの入った眼鏡をけけなおして言う。

「いいじゃないの。三人とも助かったんだし!ねっ!」

突然了子の携帯が鳴り、それに出る。二人は顔を見合わせて、同時に首を傾げた。

## ただ、普通の日曜日

とある山岳地帯にある屋敷、その近くにある湖の棧橋にて一人の少女がソロモンの杖と呼ばれる完全聖遺物を手に持って佇んでいた。ネフシユタンの鎧を纏っていた少女は薬品工場でのことを思い出す。(完全聖遺物の起動には、相応のフォニックゲインが必要だとフィーネは言っていた。あたしがソロモンの杖に半年もかかずらったことを、あいつらはあつという間に成し遂げた。そればかりか、無理やり力をぶっ放して見せやがった)

少女は齒を食いしぼり、言葉をこぼす。

「バケモノどもめっ!」

手に持つソロモンの杖を握りしめ、それを見下ろしながら愚痴を呟く。

「このあたしに身柄とギアの奪取なんてさせるくらい、フィーネはあいつとあのギアにご執心という訳かよ」

脳内に今まで自分の身に起きたことが想起される。そよ風が憐れむかのように少女の髪を揺らす。

「そしてまた、あたしは一人ぼっちになるわけだ」

朝日が昇り、少女の顔を照らしていく。不意に後ろを振り返ると金髪の女性が立っていた、おそらく彼女がフィーネと呼ばれる存在だろう。少女がフィーネに宣言する。

「分かっている。自分に課せられたことぐらいは、こんなものに頼らなくてもあんたの言うことくらいやってやらあ」

そう言って手に持っていた杖をフィーネに放り投げ、それを難なくキャッチする。少女は握りこぶしを作り、叫んだ。

「アイツ等よりもあたしの方が優秀だつてことを見せてやる。あたし以外に力を持つ奴は、全部この手でぶちのめしてくれ!そいつが、あたしの目的だからなッ!」

その言葉に、フィーネは満足そうに微笑んだ。

○○○

目を覚ました翼は点滴をつけたまま、松葉づえをついて院内を歩き

回っていた。奏の見た戦いの向こう側にあるものを見て、自分も同じところに立つたためにはどうしたらいいのかと考えるたびに彼女の中に焦りが生まれる。通りかかった看護婦に見つかってしまおう。

「翼さん、ICUを出たばかりなんです。これ以上は・・・」  
「ッ！・・・すみません・・・」

看護婦が翼に手を触れた瞬間、痛みのみならず窓にもたれかかってしまう。窓の外にはトラックを走る響と、その後ろを弦十郎との特訓で人並みの体力をつけた雷が走っていた。翼はそれを、眺めることしか出来ない。

一方トラックを走る響は、この間振るったデュランダルを思い返していた。

（暴走するデュランダルの力。怖いのは、制御できないことじゃない。ためらいもなく、雷とあの子に向かって振りぬいたこと。私が、何時までも弱いばかりに・・・）

未来が足を止めて休むが、それを後ろから抜き去っていく。雷は鍛えたとはいえ胃腸は強くなっておらず、今にも腹の中に入っているものを吐き出しそうだ。未来と同じく足を止め、顔を青くしている。

（私は！ゴールで終わっちゃだめだ！もつと遠くを目指さなきゃいけないんだ！もつと遠くへ！遠くへ！）

未来は吐きそうな雷を介抱しながら、そんな響のことを見つめていた。

三人は汗を流すためにそろって入浴する。雷と響が湯船に腰掛け、未来が使っている形だ。雷はすでに吐き出してきたのかすつきりとした顔だ。未来が響に対して注意するように言う。

「もう！張り切りすぎだよ！」

「ごめん。考え事してたらつい・・・」

「響も私と同じで考え事していると周りが見えなくなるくらいがあるよね」

「雷の言う通りだよ。やっぱり響は変わった娘」

「・・・まって！それ私も変わった娘扱いされてる?！」

「雷ほど変わった娘はそうそういないよ」

一呼吸入れて響が申し訳なきそうに言う。

「日曜の朝なのにごめんね、付き合わせちゃって」

「気にしないで、私達と響の仲じゃない。・・・吐いちゃったけど」

「私も、中学時代を思い出して気持ちよかったー!」

雷が微笑み、未来が伸びをして答える。未来の答えに響が驚き、雷は頬を引きつらせる。

「あれだけ走ったの?! やっぱ流石だよー、元陸上部」

「うわー・・・。私には無理な世界だ・・・」

その瞬間、未来が響の隣に腰掛ける。丁度雷の真反対だ。

「なんか、リディアンに入学してから変わったね」

「あ、それは思う! 前は何か頑張ったりとか好きじゃなかったもんね」

「うーん、そうかなあ? 自分じゃ変わったつもりはないんだけど」

「響、それを進歩っていうんだよ」

未来が話題を切り出し、雷がそれに同調する。未来は隣に並んだ二人の友人の体を見て驚きの声を上げる。

「あれ? 少し筋肉がついてるんじゃない? よく見たら傷だらけじゃないの。雷も健康的な体つきになってるし」

「やめて止めてやめて止めてー!」

「まって! 未来! くすぐったいってばあ!」

未来は二人の体の隅々をまさぐっていき、あまりのくすぐったさに浴槽で足をばたつかせる。風呂から上がって下着姿になった未来は、同じような恰好の二人に提案した。

「ねえ、今度フラワーで好み焼き奢ってよ。日曜に付き合ったお返しということだ」

「・・・響は自分の分が一番お金払うんじゃないかなあ・・・」

響が了承し、契約が成立した。因みに、好み焼きだと雷は小玉の半分ぐらいしか食べれないので、一人で食べる方が実は損していたりするのだ。

○○○

学校内で緒川から連絡が来た。雷と響にしか頼めないようなのだ。



未来が近くに来ていることに気づいた雷は響に合図して、慌てて電話を切る。

「未来、どうしたの？」

「うん、今日これから買い物に行くんだけど、二人も一緒に行かない？その後にフラワーによつてね」

「・・・ごめん。たった今、用事が入っちゃって。せつかく誘ってくれたのに、私、呪われてるかも」

「うん・・・。私も・・・なんだ。私の・・・所為なんだ」

「まって！ストップ！雷、ストップ！」

階段の手すりに雷が頭を打ち付けようとするのを響が羽交い絞めにして阻止する。最近安定していた分、いきなりのもので驚いてしまつて反応が遅れ、三回ほどすでに打ち付けた後だった。雷の額が赤くなっている。未来が暴れる雷を落ち着かせながら残念そうに言う。

「じゃあ、また今度ね」

「うん・・・」

「気にしないで！私も、図書室で借りたい本があるから、今日はそつちにする」

「ごめんね」

「ごめん二人とも・・・もう大丈夫だから・・・」

未来は元のさっぱりとした性格に戻った雷から離れ、走っていく二人を見送ると、階段を上つていった。

○○○

額に保冷剤を当て、包帯でぐるぐる巻きにした雷と響の二人は花束とフルーツの盛り合わせをもつて、とある一室の前で深呼吸していた。意を決してドアのロックを解除する。

「失礼します・・・！」

ドアを開けた瞬間、室内の状況に手に持つかばんをとり落としてしまふ。二人は愕然としながら声を震わせる。

「まさか、そんな・・・」

「翼、さん・・・」

「何をしているの？」

隣で何者かの声がした、翼だ。二人は振り返って、安否の確認をする。

「翼さん大丈夫ですか?! ホントに、無事なんですか?!」

「どこか怪我とかしていませんか?!」

「入院患者に無事とか、怪我がどうか聞くってどういうこと?」

翼が怪訝な顔をする、当たり前だ。しかし、二人の心配は収まらない。

「だって、これは!」

響が部屋の中を指さす。そこには脱ぎ散らかされた服や下着、ゴミの類が散らかっていた。その部屋の今の主、翼が自分のした事に引いている。

「私たち、翼さんが誘拐されちゃったのかと思って、二課の皆さんがアメリカとかが陰謀を巡らせてる可能性があるって言ったので・・・!」

まくし立てるような雷の言葉に、だんだんと翼が顔を赤くする。実は途中で気付いていたのだが、なんか面白くなってきたので続けたのだ。ついに響が気付いた。

「えっ? あー・・・えっと・・・」

二人して、散らかった翼の病室を掃除することになった。

違うようで、似てる二人

翼の病室にて雷と響の二人は彼女の私物を掃除していた。今まで足の踏み場もなかったような病室は見違えるようにきれいになり、おり、響が洋服を、雷がそれ以外を担当している。翼は二人に背を向けて、顔を赤くしている。恥ずかしそうに翼が口を開いた。

「もう・・・そんなのいいから」

もう掃除もほとんど終わっていて、「すぐく手遅れな気がする」と雷は思っていると、響が掃除の手を一旦止めて答えた。

「私達、緒川さんからお見舞いを頼まれたんです。だからお片づけさせてください」

翼がさらに顔を赤くして、そっぽを向きながら続ける。

「私は・・・その。こういうところに気が回らなくて」

「意外です。翼さんて、なんでも完璧にこなすイメージがありましたから」

「苦手なこともあるって知れて、親近感がわきました!」

「・・・私は完璧なんかじゃない。戦うことしか知らないのよ・・・」  
自虐的に翼がつぶやき、その言葉に雷は首をかしげる。

「・・・戦うなら猶更、いつ死ぬかもわからないんだから身辺整理ぐらいできるようになるべきでは?」

「やめて雷!雷が言うとしゃレにならないよ!」

「そう?しゃレじゃないんだけど」

「猶更悪いよ!」  
「?」

雷の自殺癖を良く知っている響は慌てて言葉を返すが、よく知らない翼は首を傾げている。

因みに雷の持ち物は基本的に整理整頓されており、何ならノートに段ボールのどこにしまえばいいのかまで記されているレベルだ。雷曰く、「いつ死ぬかわかんないんだし、こういうのは必要だよね」とのこと。

空気を変えるように響が手を叩き、宣言する。

「はい！おしまいです！」

「すまないわね……。いつもは緒川さんがやってくれるんだけど……」

二人の顔が真っ赤に染まり、叫ぶ。

「ええええ！男の人に、ですかあ?!」

翼はその言葉にハッと気づいて俯く。何か思うところがあるのだろうか。

「た、確かに、いろいろと問題ありそうなんだけど、それでも、散らかしっぱなしっていうのも、よくないから、つい……」

「……翼さん、気づいてください。年頃の女の子の部屋をマネージャーとは言え男の人に掃除させるなんて、スキヤンダル物ですよ……」  
ますます翼の顔が赤くなる。二、三度咳払いをすると、赤くした顔のまま話を切り出した。

「い、今はこんな状態だけど、報告書は読ませてもらってるわ」「え?!」

「私が抜けた穴を、あなた達がよく埋めているということもね」  
響が慌てて訂正を求める。

「そ、そんなこと全然ありません！いつも二課の皆に助けられっぱなしです」

そんな響を見てクスリと翼が笑い、すぐに真面目な顔を作る。

「そう、だからこそ聞かせてほしいの。あなたの戦う理由を」

話の矛先が響だと気づいた雷は「 GANG ニール案件だな」と思いながらズレてきた保冷剤を直し、一歩後ろへ下がる。

「え……」

「ノイズとの戦いは遊びではない。それは、今日まで死線を超えてきたあなたならわかるはず」

「よくわかりません……。私、人助けが趣味みたいなものだから、それで……」

「それで、それだけで……?」

翼は響の言ったことを反芻する。さらに話を続ける。

「だって、勉強とか、スポーツは誰かと競い合って結果を出すしかないけど、人助けってだれかと競い合わなくていいじゃないですか。私に

は特技とか、人に誇れるものがないから。せめて、自分のこと  
でみんなの役にたてればいいかなーって……えへへ、へへへ、へえ……」  
段々と笑い声から力が抜けていく。そして真面目なトーンで話し  
始める。

「きっかけは、きっかけはやっぱり、あの事件かもしれません……。  
私を救うために、奏さんが命を燃やした二年前のライブ。奏さんだけ  
じゃありません、あの日、たくさんの人がそこで亡くなりました。で  
も、私は生き残って、今日も笑ってご飯を食べたりしています。だか  
らせめて、誰かの役に立ちたいんです。明日もまた笑ったり、ご飯食  
べたりしたいから」

窓を向いていた体を翼のほうに向け、満面の笑みで笑う。

「人助けをしたいんです！」

その答えに翼は納得したように目をつぶる。

「あなたらしいポジティブな理由ね。だけど、その思いは前向きな自  
殺衝動かもしれない」

「自殺衝動?!」

咄嗟に響は雷のほうを向くが、目線で顔を戻せと指示される。しか  
し、その顔は元に戻らない。

「誰かのために自分を犠牲にすることで、古傷の痛みから救われたい  
という自己断罪の表れなのかも。……何故轟のほうを向いているの  
?」

慌てて雷が言い訳をする。

「いえー!何でもありません!別に……なにも……」

その歯切れの悪い言葉を皮切りに、翼が今まで気になっていたこと  
を口にする。

「……ところで、初めて会ったところから気になっていたのだけど。轟  
さんの包帯って、何か怪我でもしてるの?見ようによつては私よりひ  
どいと思うんだけど……」

「あはは……。看護婦さんにも心配されました」

翼が雷の体中に巻き付けられた包帯を指さす。額に当てられた保  
冷剤を固定するものの他に、雷臨時の火傷を治す薬を落ちないように

するためのものと、その他打撲などのシッポ固定などのものだ。

「聖遺物の研究をしていた両親と弟が私を一人残して心中しちゃって、叔父と叔母に引き取られたんです。でもそこで、「心中した家の子なんて悍ましい」とか、「うちも同じようにするんだろう、この疫病神め！」って言われて虐待され続けました……。結局、あの人たちは警察に捕まって今も服役しています。だから、あの人たちの家庭をつぶした私は疫病神なんです！叔父や叔母の言った通り、これは私が疫病神にならないようにするための罰なんです……」

雷が響の力を借りながら説明すると、翼も弦十郎と似たような苦々しい表情をしていた。そんな顔をしてくれたことに雷は安心を覚える。そのおかげか、精神は安定したままだ。

「そう……そういうことだったの……。なんであんな戦い方をしていたのか合点がいったわ」

「戦い方、ですか？」

「そんなのあったっけ？」

実は弦十郎は特訓において何故回避や防御を重点的にやっていたのかを雷にあえて伝えていないため、雷はそこが出来ていないからだと強引に解釈している。最も、出来ていないどころか考えてすらいないのだが。因みに伝えてない理由は、意識しすぎると逆に出れなくなると思ったからである。

「気にしないで、こっちの話だから。それにしてもあなた達、違って見えるのに似てるのね」

「!?」

二人同時に首を傾げた。

○○○

三人は屋上に出てきて話を続ける。デュランダルの事、アームドギアの事、響が雷と二人で考えていたことを翼に打ち明ける。太陽を背にし、翼が口を開く。

「力の使い方を知るということは、即ち戦士になるということ」

「戦士……」

三人の間を風が通り抜ける。

「それだけ、人としての生き方からは遠ざかるといふことなのよ。すでに使っている轟さんはともかく、立花さんに、その覚悟はあるのかしら」

「私はもう戦士カウントなんですわね・・・」

「そうよ」

どうも雷はすでにアームドギアたる稲妻を使いこなしているのだから戦士としてカウントされているらしい。少し悩んで響が答える。

「守りたいものがあるんです。それは、何でもないただの日常。そんな日常を大切にしたいと強く思っているんです。だけど、思うばかりで空回りして・・・」

「戦いの中、あなたが思っていることは?!」

その言葉に響は表情を引き締める。

「ノイズに襲われている人がいるなら、一秒でも早く救い出したいです！最速で！最短で！真っ直ぐに！一直線に駆け付けたい！そして・・・もしも相手がノイズではなく誰かなら・・・、どうしても戦わなくちゃいけないのかっていう胸の疑問を、私の思いを、届けたいと考えています！」

翼がが笑みを浮かべる。

「今あなたの胸にあるものを、出来るだけ強くはつきりと思い描きなさい！それがあなたの戦う力、立花響のアームドギアに他ならないわ」

翼の言葉に響は拳を握りしめ、雷は自分の悩み事が解決したかのように笑った。そんな光景を、一番の親友に見られていたことなど二人は知らない。

二人の真実、そして・・・

夕暮れ時、未来はたった一人で親友二人が翼と一緒にいたことを思い返しながら「ふらわー」へと足を運んでいた。自分の隣を仲のよさそうな三人組が通つていく。それをしり目に見ながら何故、私の横に二人はいないんだろうと表情を曇らせる。

リディアンからずっとその調子で、ふと顔を上げるといつの間にか店の目の前に到着していた。がらがらと今時珍しいガラス戸を開けると、顔なじみになったおばちゃんが包丁を動かしていた手を止めて声をかけてくれる。

「いらっしやい」

「こんにちは」

「おや？いつも人の三倍は食べる子と小玉の半分も食べない子は、一緒じゃないの？」

「今日は・・・私一人です」

「そうかい」

何時もの子とは、言うまでもなく響と雷だ。いつも三人で、しかも個性的な集まりだからセットで覚えられていたのだろう。カウンター席に座つてベーシックなお好み焼きを注文すると、おばちゃんが背を向けて鉄板で調理を始める。

「じゃあ、今日はおばちゃんがあの子たちの分まで食べるとしよかねえ」

「食ばなくていいから焼いてください」

「あらっ、あははは！」

気分の沈んでいる未来を励まそうとしているのだろう。小粋なジョークを交えて話を振る。未来が下を向きながら言葉をこぼす。

「お腹空いてるんです。今日はおばちゃんのお好み焼きを食べたくて、朝から何も食べてないから」

その言葉を聞いておばちゃんがお好み焼きの調理を再開しながら未来に言い聞かせるように言う。

「お腹空いたまま考え込むとね、嫌な答えばかり浮かんでくるもんだ



よ」

おばちゃんの言葉に今までの雷と響に対する自分の行動が思い返される。

(そうかもしれない……。私が勝手に思い込んでるだけだもの。ちゃんと話せば、きつと……。)

「ありがとう、おばちゃん」

自分をその考えに至らせてくれたおばちゃんに感謝を述べる。おばちゃんはうれしそうに笑う。

「何かあったら、またいつでもおばちゃんのところにおいで」

「はいー」

来た時とは打って変わって、未来の顔には晴れやかな笑顔が浮かんでいた。

○○○

病院の屋上で雷と響、翼の三人はベンチに腰かけて会話に花を咲かせていた。雷や響は言わずもがな、翼からは今まで感じていた見えな壁のようなものが消えて距離が縮まったようだ。その証拠に、二人のことを呼ぶときに名字から「さん」が消えている。先ほどから響が「うーん」と唸りながら考え事をしている。いきなり雷が響のほうを見ていた顔を翼に向けて叫んだ。

「翼さん下がって！響の頭が爆発する！響の頭は長いこと考えると爆発するようにできてるんです！」

「えっ?! そうなの?!」

「雷?! 翼さん！私の頭そんな風になりませんよ?!」

雷の冗談を翼が真に受けてあわてて響に確認する。再び雷が響のほうに顔を戻してにんまりと笑いながら話を戻す。

「で、何を考えてたの?」

考えていた時と同じ顔に戻して響が答える。

「アームドギアの事。使い方がすぐに思いつかなくて……。」

長い鍛錬で刀を使いこなす翼や、形のない稲妻をイメージで動かしている雷と違っていきなり槍を使い、といわれてもそんな簡単に使い方が思いつくわけがない。響が翼に詰め寄る。

「知ってますか翼さん！お腹空いたまま考えても、ロクな答えが出せないってこと！」

「何よそれ？」

『「ふらわー」ってお好み焼き屋のおばちゃんを受け売りなんです」

「そう！掛け値なしに名言ですよ！」

響は両手を銃の形にしてポカンとした表情の翼に向け、雷の手を取って勢い良く立ち上がって足踏みをし始める。

「そうだ翼さん！私達、『ふらわー』のお好み焼きをお持ち帰りしてきます！お腹いっぱいになればギアの使い方もひらめくと思いますし。翼さんも気に入ってくれると思います！」

「私は胃腸が弱くてそんなに食べれないんですけど、ほっぺが落ちるほどおいしいんですよ！」

「え、あ、ちよ！待ちなさい！立花！轟！」

翼の制止を無視して響と手をつながれた雷は下に降りる階段へと駆け出していく。その二人の後姿を見て、翼は楽し気に微笑んだ。

二課でネフシユタンの少女が観測されたため、周囲への避難勧告と雷、響の装者二名に現場に急行することが通達された。その連絡を受け、「ふらわー」に行く事を中断して二人は現場に走っていく。

「響——！雷——！」

「未来……」

「ッ?!」

「お前らあ！」

二人に手を振る少女がいた、未来だ。横からの敵意に二人は咄嗟に振り向き、駆け寄ってくる未来に大声で伝える。

「来ちゃだめだ！ここは……ッ！」

「未来——」

二人と未来の間を少女の鞭が通り抜け、その衝撃で地面がえぐれ、未来が吹き飛ばされる。少女が鞭を戻しながら言葉をこぼす。

「しまった！あいつらの他にもいたのか！」

吹き飛ばされた未来の頭上に、ボロボロになった車が落下してくる。雷と響が同時に歌った。

「V o l t a t e r s   K e l a u n u s   T r o n」

「B a l w i s y a l l   N e s c e l l   G u n g n i r   T r o n」

「未来を・・・！傷つけたなあああ！」

『雷刃拔拳・桜花』

「ぐうッ！」

ギアを纏った雷の怒りと稲妻を乗せたこぶしが未来を傷つけた少女に突き刺さり、響は未来に落下してくる車をはじき返す。未来はそんな二人に呆然としている。

「響・・・。雷・・・」

「ごめん・・・」

そう言い残し、響は少女を攻撃し続ける雷に少し遅れて合流する。安定しない精神状態で未来を傷つけないように距離を取っていたようだ。未来が無事だと伝えたら怒りが収まったあたり、如何やら完全に不安定になってるわけではなく、軽度のものだっただけらしい。

二人は領き合い、市街地から離れるために走り始め、ネフシユタンの少女がそれを追撃する。ある程度距離をとったところで二人は足を止めて少女と対面する。鞭による攻撃を響がクロスガードで防いだ。

「どんくせえのがやってくれる！」

「どんくさいなんて名前じゃない！」

響が少女の反応なんて気にせず反論する。

「私は立花響、十五歳！誕生日は九月の十三日で、血液型はO型！身長は、この間の測定では一五七センチ！体重は・・・もう少し仲良くなったら教えてあげる！趣味は人助けで好きなものはご飯アンドご飯！あと・・・彼氏いない歴は年齢と同じい！・・・ほら雷も！」

「え、私もお?!わ、私の名前は轟雷、年齢は響と同じ！誕生日は六月の五日で血液型はAB型！身長は一五五センチで体重はまだ秘密！趣味はじしよ「それ以外で！」・・・読書で好きなものは胃腸に優しいもの！彼氏は今は別に求めてません！・・・これでいい?!」

「うん！大丈夫！」

響のテンションに乗せられて雷も自分のプロフィールを盛大に暴露する。かなり恥ずかしかつたのか顔が真っ赤だ。そんな二人の様子に少女が引いたまま口を開く。

「な、なにをトチ狂ってやがるんだお前ら・・・」

「私達はノイズと違って言葉が通じ合えるんだからちゃんと話し合いたい！」

「なんて悠長！この期に及んでえッ！」

少女が二人に鞭をふるい、二人は跳んで避ける。そんなことが何度も繰り返される。

（こいつ！ケラウノスはともかく GANG ニールの動きが変わった！覚悟か?!）

「話し合おうよ！私達は戦っちゃいけないんだ！だって、言葉が通じていけば人間は・・・！」

響が訴えかけ、雷は何があってもいいように戦闘態勢を維持している。少女が絶叫した。

「うるせえッ！分かり合えるものかよ人間が！そんなふうに来てい  
るものかあッ！気に入らねえ！気に入らねえ！気に入らねえ！わ  
かっちゃいねえことを知ったふうに口にするお前があッ！・・・お前  
とギアを引きずってこいと言われたがもうそんなことはどうでもい  
い！お前らをこの手で叩きつぶす！今度こそお前らのすべてを踏み  
にじってやるうッ！」

「私だってやられるわけには！」

「吹っ飛ベッ！」

『NIRVANA GEDON』

響がネフシュタンの鞭の先から発生した球体を受け止める。それを見越していたのかももう一発を打ち込む。

「もってけダブルだあ！」

「響下がって！」

「！わかった！」

先にはなった球体と二発目が接触し、大爆発が起こる。しかし、その爆発から雷の展開した斥力フィールドが二人を守りきった。一度

響が受け止めたのは響が入るフィールド範囲を増やした分、展開に時間がなかったからだ。

「お前なんかがいるから！私はまた・・・！ツ?!」

「はああああー!」

爆発で待った土煙の中、響がアームドギアを構築するエネルギーを貯めるが制御しきれず吹き飛んでしまう。

「響ー!」

「大丈夫!」

吹き飛んだ響を雷が受け止める。響は拳を握りしめ、どうすればアームドギアを展開できるか考える。そして、エネルギーを雷の稲妻みたいにそのままぶつけるという解決策を思いつき、右手にエネルギーを集中させる。

「この短期間に、アームドギアまで手にしようってのか?!させるかよおー!」

それを阻止すべく放った少女の二本の鞭を右腕一本で受け止め、握りつぶしながら思いつきり引つ張る。その勢いで少女の体が引つ張られて宙に浮くと、響が腰のブースターを点火する。頭の中に弦十郎の教えと自分の心情が重なり合う。後ろから雷の援護が入る。

「行くよ響ー!」

「うん!」

『超電磁トルネード』

強力な磁気を放つ稲妻の嵐によって空間に少女の体が固定され、響の拳が胸に突き刺さる。固定されているので後ろに吹き飛ばず、衝撃を逃がすことが出来ない。ネフシユタンの鎧が完全に粉碎された。

○○○

「響・・・。雷・・・」

二人の戦う姿に、未来は涙をこぼした。

## 不思議な懐かしさ

ネフシユタンの鎧が砕け散り、拘束していた稲妻の嵐から解放された少女がその場で崩れ落ちる。が、その目は殺意と戦意を保ったままだ。雷は稲妻を放っていたユニットを格納し、響は目をつむって追撃の意思がないことを示す。そんな二人の姿に少女が吠える。

「お前らッ！馬鹿にしているのか?!あたしを！雪音クリスを！」

ネフシユタンが破壊され、全裸になった少女。クリスの名前を知れて二人は満足そうな顔をする。

「そっか、クリスちゃんて言うんだ」

「雪音クリス・・・うん、綺麗な名前だ」

「ッ?!」

響が笑顔で、雷がクリスの名前を復唱して一人頷く。響が口を開いた。

「ねえ、クリスちゃん。こんな戦い、もうやめようよ。ノイズと違って私たちは言葉を交わすことが出来る。ちゃんと話をすれば、きつと分かり合える！だって私達、同じ人間だよ！」

「響は頑固だぞ。今しとかなないと、話をするまで追いかけて回されることになるからね」

響の訴えかけに雷が茶々を入れる。だがクリスは俯き、はらわたが煮えくり返るような思いと共に叫ぶ。

「お前らしくせえんだよ・・・。嘘くせえ・・・！青くせええ！」

「クリスちゃん・・・」

「・・・響、少し警戒した方がいい」

クリスの叫びに響が愕然とする。雰囲気の流れが変わったことを感覚的に察した雷が警告し、格納していた両腕のユニットが展開され、周囲に電光が迸る。クリスが歌った。

「Killter Ichaiival Tron (キラター イチイヴァル トロン)」

「この歌って?!」

「シンフォ・・・ギア・・・」

「見せてやる。イチイバルの力だ！」

状況を把握していた二課のモニタに『イチイバル』の文字が表示され、弦十郎が驚きの声を上げる。

「イチイバルだとお?!」

「アウフヴァツヘン波形検知！」

「過去のデータとの照合完了！コードイチイバルです！」

イチイバルの名を聞いて弦十郎の顔が険しくなる。

「失われた第二号聖遺物までもが、わたっていたというのか……！」

シンフォギアを纏った時の衝撃で砂ぼこりが舞い上がり、雷と響の視界を覆う。

「クリスちゃん……私達と同じ……！」

「歌わせたな……！あたしに歌を歌わせたなッ！……教えてやる！あたしは歌が大っ嫌いだ！」

「……歌が嫌い？」

クリスが深紅のシンフォギア、イチイバルを纏う。雷が記憶の中にある両親の研究ノートからギアに関する情報を引っ張り上げた瞬間、イチイバルの腕部装甲が変形し、ボウガンの形をとる。

「響！クリスのギアは、遠距離特化型……ッ?!」

雷が響に叫ぶが、それよりも早くクリスがボウガンの一撃を放つ。両腕のボウガンから放たれた合計五本のエネルギーの矢は二手に分かれて回避行動をとる二人を追尾する。響の背後で起きた爆風によってバランスを崩した響は、クリスの蹴りをもろに受けてしまう。

クリスは両腕のボウガンをガトリング砲にさらに変形させて二人を同一射線上に捉え、ハチの巣にすべく乱射する。

『BILLION MAIDEN』

「響！私の後ろに！」

「大丈夫?!」

「多分ね……！」

雷が響を背にして斥力フィールドを前面に展開し、ガトリングの弾を弾いていく。しかしクリスは顔色一つ変えずに斉射しながら腰の

バインダーを展開し、フィールドのない側面にミサイルを叩きこむ。

『MEGA DEATH PARTY』

「しゃらくせえッ！」

「走って！」

響を後退させ、雷もフィールドの展開を解除して後に続く。が、それ以上にミサイルは早く、直撃を受けてしまう。

そのまま舞い上がった土煙によって視界が見えなくなった後も、手当たり次第に周囲に弾をばらまいていく。ガトリングの弾が切れ、土煙が晴れていく。目の前には青い盾がそびえたっていた。いきなり現れたソレにクリスは目を丸くする。

「盾・・・？」

「剣だッ！」

青い盾。いや、剣の柄に当たる部分に青い髪を風になびかせて翼が刃を構えて立ちはだかる。そんな翼をクリスが煽る。

「死に体でおねんねと聞いていたが、足手まといどもを庇いに現れたかあ？」

「もう何も、失うものかと決めたのだ！」

新たに胸に秘めた決意を言葉にした時、弦十郎から通信が入る。

『翼。無理はするな』

「はい・・・！」

一発目のミサイル以外のすべてを翼が防いだおかげでほとんど負傷のない雷、響の二人は翼を見上げ、そんな二人を翼は軽く振り向いて見下ろす。

「翼、さん・・・」

「気づいたか、立花、轟！だが私も十全ではない。力を貸してほしい」「はい！」

予想外の翼の答えに一瞬反応が遅れたが、立ち上がりながら返事を返す。クリスがガトリングの斉射を再開し、翼が巨大な剣から飛び降りる。跳躍している間も空を舞うように弾を避け続け、クリスの懐に入り、視線を誘導するように頭上を跳び越え、頭を刈りに行く。

間一髪でそれを避けたクリスだったが、翼の手に持つ刃の柄でガト



リングを殴られ、バランスを崩してしまふ。何とか体勢を建て直し、正面に顔を向けるがそこにはすでに翼の姿はなく顔の横から刃が突き出された。背中合わせになった形だ。前回と全く異なる翼の動きにクリスが焦る。

(この女、以前と動きがまるで・・・！)

「翼さん、その子は・・・」

「分かっている」

「チッ！」

「やらせない！」

ガトリングで翼の刃を外し、有利な射程を取ろうとするクリスだったがすでに動いていた雷の電光を纏った下段後ろ回し蹴りが足を掬う。右足を取られたクリスだったが、残った左足で強引に跳躍して体を一回転させて距離をとる。雷はすぐさま立ち上がると、刃を構えた翼と並ぶ。

(刃を交える敵じゃないと信じたい。それに、十年前に失われた第二号聖遺物のことも正さなければ)

(響の願いはかなえない。でもその前に、彼女のバックが何故『コレ』を、轟理論を狙うのか問い詰める)

雷と翼の二人にクリスがガトリングを向ける。その瞬間、空から三体の航空型ノイズが体をドリルのように回転させ、二丁のガトリングを破壊、残りの一体がクリスを狙うが響のタツクルによって破壊される。

「立花！」

「響！」

「お前何やってんだよ！」

「ごめん・・・。クリスちゃんに当たりそうだったから・・・。つい・・・」

響は勢いそのままクリスに受け止められ、クリスはその場でしゃがみ込む。雷と翼の二人は響とクリスを守るように構える。クリスが顔を赤くしながら響に叫ぶ。

「バカにして！余計なおせっかいだ！」

どこからともなく、どこかで聞いたことのあるような女性の声が響

いてきた。

「命じたこともできないなんて、あなたはどこまでワタシを失望させるのかしら?」

声の響いてきた方からは、ノイズを操る杖、ソロモンの杖を携えた金髪の女性が髪を風に舞わせながら欄干にもたれかかっていた。

「フィーネ?!」

(フィーネ……?終わりの名を持つもの!)

(クリスのこの口ぶり……彼女、フィーネが恐らく大本!)

雷はクリスの口ぶりからフィーネが黒幕であることを推察し、問いただそうとする直前でクリスが響を突き飛ばして叫んだ。響は咄嗟に動いた翼が支える。

「こんなやつがいなくたって、戦争の火種ぐらいあたし一人で消してやる!そうすれば、あんたの言うように人は呪いから解放され、バラになった世界なった世界は元に戻るんだろお?!」

フィーネは何も言わず、ため息だけつく。そして心底失望した子のように言葉をこぼした。

「もうあなたに用はないわ」

「ツ?!……なんだよそれ!」

フィーネは左手を掲げてバラバラになったネフシユタンを粒子に変換し、目の前で一か所に集めると、そのままどこかに転送する。欄干から体を離すと、正面を向いて杖を構えた。その瞬間、雷が叫んだ。「フィーネと言ったな!何故ケラウノスを、『轟理論』を狙う?!」

フィーネの両目が雷を捉え、笑みとも怒りとも取れる表情をする。

「轟雷……。忌々しいあいつらがお前を残したのもよくわかる。ワタシが姿を現す前からクリスに後ろ盾がいるのを看過していたな?分らなかったのは名前と正体だけか……。いや、考えはしたんだろうなあ」

「『あいつら……。誰のことだ!』」

フィーネは雷の問いに答えず、さらに言葉を続ける。

「轟雷。一つ教えてやろう。『科学において、あり得ないは存在しない』忌々しいワタシを三度も出し抜いたあいつらの言葉だ。覚えてお

くどいい」

「何?!」

それ以上フィーネは何も答えず、雷たちにノイズを差し向けて姿を消す。

「待てよ！フィーネエ！」

ノイズをすべて処理した雷たちだったが、クリスはギアを纏ったままフィーネを追いかけていった。雷の中に、フィーネの言葉がどこか懐かしさを帯びて響いていく。その懐かしさを、雷は思い出すことが出来なかった。

## フイーネ怒りの独白

指令室ではイチイバルの少女、雪音クリスの詳細をたどっていた。

「反応ロスト、これ以上の追跡は不可能です」

「こっちはビンゴです」

藤堯がメインモニターにクリスのことが書かれた記事を投影する。彼女はかつてギアの装者候補生だったが失踪し、行方をくらませているのだ。

「あの少女だったのか・・・」

「雪音クリス。現在、十六歳。二年前に行方知れずとなった過去に選ばされたギア装着候補者の一人です」

「うむ・・・」

過去に何かあったのだろう、弦十郎の表情が曇る。メインモニターに表示された別のウインドウには三人の黒服に守られ、戸惑いを隠せない未来が映し出されていた。

○○○

二課のメデイカルルームにて、雷と響の二人は了子の診察を受けた。雷のほうはすでに終了しており、響が今しがた終わったところだ。検査結果の表示されたタブレットを見ながら了子が結果を告げる。

「二人とも外傷は多かったけど、深刻なものがなくて助かったわ」

「つまり、すっかり平気ってことですよね」

「・・・」

「・・・雷ちゃんは別のほうが深刻そうね。まあでも、響ちゃんのほうは常軌を逸したエネルギー消費による、いわゆる過労ね。少し休めば、またいつも通り回復するわよ」

「じゃあ、わたし・・・」

ふらついた響を了子が支える。雷は珍しくそんな響に目もくれず、フイーネの残した言葉「科学においてあり得ないは存在しない」の意味を軽く上を向いて、目を瞑って思考し続けている。

（あの言葉・・・いったいどういう意味なんだ？フイーネの言っていた

『あいつら』というのも気になる。私を知っている人だろうか？…駄目だ！不明瞭な情報が多すぎる！いったん考えるのやめて未来のことを考えよう』

了子が興味深そうな目で自分を見ていたことなど知る由もなく、頬を軽くたたいて思考を切り替える。二人の心配事を見抜いた了子が安心させるように伝える。

「心配しないで大丈夫よお。緒川君たちから事情の説明を受けているはずだから」

「そうですか…」

「今から胃が痛い…」

「機密保護の説明を受けたら、すぐ解放されるわよ」

「はい…。わかりました…」

了子の言葉の意味は何方かといえば事務的なことで、二人の心配事にはかすりもしていないのだが、そんなことを了子が知る由もなく、意気揚々と説明した。雷と響の表情が曇るが、指令室へ行かねばならないので強引に表情を作る。

途中で翼と合流し、四人そろって入室する。如何やら相手がシンフォギアを持っていることとこちらの優位性が無くなった。という話をしていたようだ。弦十郎と藤堯、友里の表情が暗い。

「深刻になるのは分かるけど、シンフォギア装者は三人とも健在。頭を抱えるにはまだ早すぎるわよ」

「翼！まったく、無茶しやがって…」

「独断については謝ります。ですが、仲間の危機に臥せっているなどできませんでした！」

「へ？」

「お？」

つばさから出た予想外の言葉に二人は驚きの声を上げる。

「轟はともかく、立花は未熟な戦士です。半人前ではありませんが、戦士に相違ないと確信しています」

「翼さん…」

「よかったね、響」

一度軽く拳を握り、笑顔で響のほうへ振り向く。

「完璧には遠いが、轟もいる。立花の援護ぐらいなら、戦場に立てるかもな」

「私、頑張ります！」

翼は何も言わず、ただ目線だけで答えた。

「響君と雷君のメデイカルチェックも、気になるところだが・・・」

「別に問題はないそうです」

「ご飯をいっぱい食べて、ぐっすり眠れば元気回復です！」

そう言った直後に響の表情が曇り、その意味をすでに理解している雷は顔を青ざめさせ、誰にも聞き取れないほどの小さきで「私のせいだ・・・」と、つぶやき続ける。不意に、響の胸を了子がつついた。

「んなあああ！なんてことおお！」

「んひい?!」

乙女にあるまじき声を上げた響に驚いて雷も変な声を上げてしまう。しかしソレのおかげか、雷は不安定な状態から回復する。

「響ちゃんの心臓にあるガングニールの破片は、前より体組織と融合しているみたいなの。驚異的なエネルギーと回復力はその所為かもね」

「融合ですか？」

「大丈夫よ、あなたは可能性なんだから」

「よかったあ」

（聖遺物との融合・・・。ネフシユタンの鎧と何か関係があるのかな？）

雷の頭の中に、クリスの纏っていたネフシユタンが想起される。何故なら、あれは損傷した時に装着者の体を蝕むように再生していったからだ。体を蝕むはずの融合を嬉しそうに話す了子にフィーネの面影が重なり、その考えを『あり得ない』と頭を振って追い出す。

○○○

その夜、寮に戻った二人は自分たちの寮室のドアの前にいた。響は深呼吸を繰り返して、雷はさつきまでとは打って変わって顔を青くして体を震わせ、響にしがみついている状態だ、そうしないと立つことすらままならないのだろう。響が静かにドアを開けた。

「ねえ、未来。なんていうか、つまり、その・・・」

「た、ただ・・・いま・・・」

「・・・おかえり」

言葉を濁す響とどもりながら言葉を口にする雷を、未来は冷たく一蹴する。

「あ、うん。ただいま」

「は、入っても、いい、いい、ですか?」

「どうぞ。あなた達の部屋でもあるんだから」

「ひい?!」

読んでいる雑誌から目を上げず、何時もなら名前を呼んでいるところを「あなた」と呼んだことで更に雷がガタガタと震え始め、目に涙を貯めながらさらに響にしがみつくと逆効果だと分かっているからか、自傷行為は行っていない。それだけが幸運だった、もししていたらさらに関係を悪化させていた事だろう。響の後にくつついたままついていく。

「あ、あのね・・・」

「なに? だいたいこの事なら、あの人たちに聞いたわ。いまさら聞くことなんてないと思うけど」

「み、未来う・・・」

「嘘つき! 隠し事をしないって言ったくせに!」

未来の言い放った言葉に響は愕然とし、雷は掴まる力すらなくなつたのかその場で崩れ落ち、俯きながら「ごめんなさい・・・」と繰り返す言が続ける。響はそんな雷を何とか着替えさせ、二人並んで未来と対面する。

静かになつた雷だが、未来の目を見ようとししない。時折顔を上げては怯えたように伏せるの繰り返しだ。ついに響が切り出した。

「未来! 聞いてほしいんだ。私」

「どうせまた嘘つくんでしょ!」

未来はそれだけ言って立ち上がり、その言葉に雷の体はびくりと跳ね、響にしがみつくと。そして未来は雷がかつて怒っていた時に使っていた二段ベットの二段に入っていた。雷は響に支えてもらいなが

らベツトを覆っているカーテンを軽く開け、一緒に謝罪する。

「ごめん」

「ご、ごめん・・・なさい・・・」

未来からの返事はなく、カーテンを閉じて二人は立てかけてある一つの写真に目を移す。その写真は中学の時に三人そろって撮った写真だ。二人はさらに表情を曇らせた。

〇〇〇

二課の研究室で一人、その部屋の主たる了子がコーヒーを飲みながら聖遺物のことについて頭を巡らせていた。

（轟理論。私ですら開発できなかった聖遺物、ケラウノスをシンフォギアとして構築することに成功した轟夫妻の考案した理論・・・。私が出す直前でケラウノスと理論、適合者のデータをすべて抹消しサルベージできたのは元々私が関わっていた開発計画の資料のみ。それ以降のあいっらの動向は不明、唯一分かっていたのは日本に住んでいることだけ。二年前にあいっらを自らの手で尋問しながら目の前で息子を殺し、理論の全貌を聞き出そうとしたが口を割らず、その技術の結晶たるケラウノスは紛失、証拠隠滅のために家族全員殺害、一家心中したように見せかけてケラウノスの捜索に当たった・・・。それから二年後、忌々しいあいっらの娘、轟雷がケラウノスの起動に成功。名字が同じだけの赤の他人かと思ひ、質問すると娘であることが確定した。つまりワタシを、ケラウノスを託した娘がいないタイミンに狙わせて襲わせたのだ！このワタシが！このフィーネが！三回も、三回もだ！ただの人間に出し抜かれたのだ！しかも轟理論には、私の理論にはない特殊機能が備わっている。絶唱に匹敵するそのエネルギーを身に纏い、制限時間こそあるものの絶大な力を発揮する決戦機能！必ず手にして見せる。あいっらの娘らしくワタシの正体にも恐らく到達しているのだろう。残したのも癪だが領ける。幸い、轟雷からケラウノスを奪う算段は整っている。手に入れた時が楽しみだ）

びつしりと貼られた響と雷の写真に囲まれ、了子、いや、フィーネが高笑いした。それを聞いたものは、誰もいない。



## 決定的な亀裂

リデイアンの歴史の授業にて、雷と響、未来の三人掛けの机から普段とは異なる異様な雰囲気が漂っていた。響がよそ見をし、雷が机に突っ伏している。しかし問題は、普段ならよそ見や居眠りをしている響を注意し、不安定になった雷を落ち着かせたりしているはずの未来が彼女らに見向きもしないのだ。雷は時折未来のほうを向いてはすぐに戻すを繰り返し、響は響で未来のほうを注視している。先生もこの状態の雷のことは把握しているため、叱るようなことはしない。だからその矛先は特に何もないのに授業を聞いていない響のほうへと向いた。

「立花さん！」

「は、はい！」

「教科書の続きを読んでごらんなさい！」

響はいつものごとく二人に助け舟を求めるが未来はそれを無視し、雷は教科書すら開いていない。響は顔を正面に戻した。

「すみません・・・ぼんやりしてました・・・」

「最近ひどくなってませんか？遅れているレポートも、今日の放課後までには提出するように！いいですね?！」

「はい・・・すみません・・・」

未来の表情はピクリとも動かず、そのことに雷は悲しくなって小さく嗚咽した。

○○○

食堂で食事をとる未来に、小さなパンとスープといういつも食べているプレートを持って、ラーメンを持った響の後ろを小さくなってついていく。授業のことを引きずっているのか、まだ少ししゃくりあげている。

「(っ)・・・いいかな?」

「・・・」

響の問いに未来は答えずただ食事を取り続けている。二人は未来と対面するように座り、雷はパンを手に取り、響は箸を持っているに

もかかわらず手を付けようとしな。響は正面から、雷は俯きながら未来を見つめている。

「あのね、未来。私・・・」

「なんだか、何時もと雰囲気が違うのですが？」

「ひい?!」

いきなり聞こえてきた声に雷の体がびくりと跳ね、さらに体を縮ませる。

「ちよつと、この状態の雷にいきなり声かけたらだめだつて。でもどゆこと?よくわからないからアニメで例えてよ」

「コレはきつとビツキーが悪いに違いない。またライライをびくつかせちゃつて、ごめんね——未来、この子馬鹿だから許してあげてね」

今回は雷もなのだが、何時もの素行からサラつと怒られ役になる響。

「そう言えば、レポートのことを先生がおっしゃつてましたが・・・」  
「提出してないのあんた一人だつてねえ。この状態の雷でも提出できるつてのに何やつてんだか」

「あははは・・・」

響が力なく笑い、雷が何か言いたそうにしているが声を出す勇気が出ない。

「ビツキーつてば内緒でバイトとかしてるんじゃない?」

その言葉に今まで無反応だった未来の動きが止まる。

「えく?!響がバイト?!」

「それつてナイスな校則違反では?!」

急に未来が音を立てて立ち上がり、その音にびくりにした雷がまた少し縮こまる。そのまま何も言わず、未来は食堂の外へと走つていった。

「未来!」

「み、未来う!」

響はすぐに、雷は少し遅れて未来を追いかけていく。如何やら屋上に行ったようだ、階段を大急ぎで登る。前までならこんな速さで登ればすぐに息切れを起こしていた雷が響に遅れることなくついて行け

る。いつもならうれしい変化なのに、いまはそれが嫌だった。

(私のせいだ!あの日、本なんて買いに行つたから!ケラウノスなんて起動したからこうなつたんだ!)

心の中で叫びながら未来に対する罪悪感と自分への戒めから無意識のうちに左腕を右手の爪でえぐるうとしてしまい、それを意志の力で何とか抑え込む。そうしている間に屋上へと到達した。

「未来!ごめんなさい!」

「ご、ごめん．．．なさい．．．」

駆けあがつてきた階段を出てすぐのところ、未来はいた。二人に背を向けたまま、未来は口を開いた。

「どうして、響と雷が謝つたりするの?」

「あ．．．み、未来は．．．わ、わたつ、私達に．．．」

「未来は、私達に対して隠し事しないって言ってくれたのに、私達は未来にずっと隠し事してた。私達は．．．」

「言わないで」

段々舌の回らなくなつてきた雷にそでを引つ張られ、響が代わりに答える。それを未来が遮つて髪を風に揺らされながら二人に振り向き、目の前まで歩いてくる。

「これ以上．．．」

未来の頬を涙が伝う。

「私は、二人の友達でいられない．．．!ごめん．．．!」

未来は涙を散らしながら二人の間を通り過ぎていく。二人は何も言うことが出来ず、ガチャンという階段へと続く扉が閉じる音だけが響いた。

「どおして．．．こんな、嫌だ。いやだよお．．．」

「ひ、ひびきい．．．。どうしよう．．．み、未来に、き、嫌われちゃつたよお．．．」

響はその場で、雷は響にしがみついて涙を滝のように流した。

○○○

フイーネの館の扉が勢いよく開かれ、クリスが叫ぶ。

「あたしが用済みつてなんだよ!もういらないつてことかよ!あんた

もあたしを物のように扱うのかよ！頭ん中ぐちやぐちやだあ！何が正しくて何が間違ってるのかわかんねんだよお！」

フィーネが黙って電話を切り、けだるそうにつぶやく。

「どおして誰も、ワタシの思い通り動いてくれないのかしら・・・」

フィーネは振り向きざまにクリスの周囲にソロモンの杖でノイズを召喚する。消すつもりだ。クリスは震えながらイチイバルのペンダントを握りしめるが、震えて歌うことが出来ない。

「流石に潮時かしら。そうね、あなたのやり方でじゃ、争いを無くすことなんてできはしないわ。精々一つ潰して、新たな火種を二つ三つばら撒くくらいかしら」

「あんたが言ったんじゃないかあ！痛みもギアも、あんたがあたしにくれたモノだけが・・・」

クリスの言葉を冷淡なフィーネの声が遮る。

「ワタシの与えたシンフォギアを纏えながらも、毛ほどの役に立たないなんて。そろそろ幕を引きましょうか」

フィーネの右手に青白い光が集まり、クリスが息をのむ。何故ならフィーネがネフシュタンの鎧をまとったからだ。

「ワタシも、この鎧も不滅。未来は無限に続いていくのよ。カ・ディングルは完成してるも同然。もうあなたの力に固執する理由はないわ」

「カ・ディングル・・・。そいつは・・・」

「あなたは知りすぎてしまったわ」

フィーネは杖を構え、ノイズにクリスの抹殺を指示する。間一髪で攻撃を避け、屋敷の外に逃げ出すクリスだったが、足がもつれて倒れ込んでしまう。扉を挟んで、フィーネが残忍な笑みを浮かべた。クリスは悔し涙を流して叫んだ。

「チキシヨウーちくしよおおおー！」

クリスの叫びは夕焼けに染まるそれに消えていった。

本当は・・・

深々と雨の降り続ける早朝に未来は目を覚まし、二段ベッドの下の階から這い出て、雷と響そして自分の写った写真を一瞥する。その表情はこの間の友達でいられない宣言を後悔し、何でもなかった写真と同じ時に戻りたいという思いでいっぱいな胸の内を如実に表しているようだ。写真から目を外してパジャマを脱ぎ、着替え始める。

ベッドから這い出たときの音で、響と頭を彼女の腹に押し付ける形で丸まって寝ていた雷は目を覚ます。寝ている間も泣いていたのだろう、雷の瞼が腫れ、頬には赤い線が出来ている。二人は何も言うことが出来ず、ただ静かにしていることしか出来なかった。

○○○

何とかイチイバルを纏い、フィーネの差し向けたノイズをすべて塵へと変えたクリスだったが、今までの連戦に次ぐ連戦で疲労が限界にきており、服が雨で濡れるのも構わず座り込んでしまう。

そこに傘を差し、浮かない表情でリディアンへと登校している生徒がいた。未来だ。未来は不意に人の気配を感じ、横にある路地のほうを向くと赤い服を着たクリスが座り込んでいるのを目撃する。赤の他人であり、故意ではないとはいえ自分の命を奪いかけた相手を、誰に似たのか一番近くにあった顔見知りの店『ふらわー』に運び込んだ。

○○○

雨がやみ、雲から青空がのぞく。そんな朝一番のリディアンの第一フロアにて、雷と響の二人は弦十郎からノイズの出現を聞かされた。「ノイズですか・・・」

『そうだ。市街地第六区域に、ノイズのパターンを検知している。未明ということもあり、人的被害がなかったのが救いではあるが・・・、ノイズと同時に聖遺物、イチイバルの反応パターンも検知したのだ』  
二課の指令である弦十郎を相手にするのだ、あの日以来不安定なままの雷は何か踏ん張って安定した状態に持ち直す。口調は安定しているが顔は青く、脂汗がだらだらと流れてくる。そんな雷を、響は心配そうな目で見つめる。

「ということとは弦十郎さん、クリスがノイズと戦ったってことです。たぶんですけどフィーネから用済みだって言われていました。フィーネがノイズを操る杖を使っていたので、口封じのためにノイズを放ったのではないかと」

雷の意見に弦十郎は通信機越しに「そうかもな・・・」と小さくつぶやいた。

『この件については、こちらで捜査を引き続き行う。響君と雷君は指示があるまで待機してほしい』

「はい、わかりました」

「了解です」

「・・・雷、大丈夫？これ使って」

「あ、あり、がと・・・」

通信を切ったとたん、雷は膝に手を突いて荒く乱れた呼吸を深呼吸で整え、響が差し出してくれたタオルで汗を拭きとる。五分ほどだろうか、元の不安定な状態のままとは言え、行動できるようになった彼女の手を引いて響が教室へと入っていく。

そこで違和感に気づいた響が雷に声をかける。

「雷・・・未来が来てない」

「ま、まさか、た、ただ、退学するなんてみ、未来言わないよね?!ねえ!」

「そ、それはないと思うけど・・・」

どこまでもネガティブに考えてしまう雷の後ろから創世と詩織、弓美の三人組がやって来た。今回は雷を怖がらせないように一度ワンクッション置いてから話しかける。

「未来さん、お休みなんですか?」

「私達より先に登校したはずなんだけど・・・」

如何やら彼女たちも知らないようだ。創世が二人の前に出て手を合わせ、謝罪の意を表した後、二人の手を取る。

「こないだはごめん、茶化しちゃって。これでも責任感じてるんだ」

「うーん・・・。こんな時アニメだったらどうすんだっけ・・・」

「ちよつと、真面目に考えて」

「もー・・・」

そんな三人組の何時ものやり取りに二人の頬が緩む。が、すぐに雷の表情は暗くなり、響は視線を下に落とす。二人の胸の内は、このままじゃ嫌だ、という思いでいっぱいだった。

〇〇〇

そのころ、『ふらわー』では未来がうなされて眠っているクリスを甲斐甲斐しく看病していた。何度目かのタオルを変えた時、ふいにクリスが跳ね起きるかのように目を覚まし、二度三度状況を飲み込もうとしてあたりを見渡す。未来が笑顔で話しかける。

「よかったあ、目が覚めたのね。びしょ濡れだったから着替えさせてもらったわ」

「か、勝手なことをしてー」

今の状況を未来の言葉で理解したクリスは『小日向』と書かれた体操服のまま立ち上がる。その瞬間、未来の顔が朱に染まり、それが理解できないクリスは未来に問い詰める。

「な、何でだ?!」

「流石に、下着の替えまでは持つてなかったから・・・」

顔を背けながら未来は説明し、クリスは布団にくるまって身を隠す。クリスの顔は恥ずかしさで赤くなっていた。そんな二人の横からおばちゃんが声をかけ、未来がそれに答える。

「未来ちゃん。どう?お友達の具合は」

「目が覚めたところですよ。ありがとおばちゃん、布団まで貸してもらっちゃって」

「気にしないでいいんだよ。あ、お洋服、洗濯しておいたから」

「私、手伝います」

「あら、ありがと」

「いえ」

最初はいぶかしげな表情を浮かべていたクリスだったが、未来とおばちゃんの会話にきよとんとした顔になる。完全に置いてけぼりにされていた。

少し汚れていたクリスの体を、未来がぬれタオルで拭いていく。

「あ、ありがとう」

「うん」

痣だらけのクリスの背中と親友の傷と痣だらけの背中が重なる。不意にクリスが口を開いた。

「何にも、聞かないんだな・・・」

「うん・・・。私は、そういうの苦手みたい。今までの関係を壊したくなくて、なのに・・・、一番大切なものを壊してしまった・・・」

「それって、誰かとケンカしたってことなのか？」

「・・・うん」

的を射たクリスの言葉に、未来は静かに答えた。

○○○

リディアンの上屋に雷と響の姿があった。響は授業の時以外雷と手をつないでいる、雷が不安定になった時に響か未来のどちらか一人、または二人一緒にすることで自殺に走ったりするのを防ぐためだ。そんな状態で、響が柵によりかかる。

「未来・・・、無断欠席するなんて一度もなかったのに・・・」

「うん・・・」

ガチャンと下に降りる階段の扉が閉じる音がしたので二人そろってそつちを見ると、松葉づえをついて歩く翼がいた。

「翼さん」

「つ、翼、さん」

雷、響、翼の順番でベンチに座る。雷と響は手をつないだままだ。

「私、自分なりに覚悟を決めたつもりでした。守りたいものを守るため、シンフォギアの戦士になるんだって、でもだめですね・・・。小さなことに気持ちちが乱されて。何も手につきません。私、もつと強くならなきゃいけないのに、変わりたいのに」

その話を聞いて雷がギュツと響を握る手に力を籠める。

「わ、私もです・・・。私、こんなふうにならないように、た、大切なものを守るために強くなりたいのに。強くなるうとしてか、変わろうとして、で、でも進歩できなくて・・・」

二人の言葉を聞いて、翼がゆっくり口を開く。



「その小さなものや大切なものが、立花と轟の本当に守りたいものだとしたら、今のままでもいいんじゃないかな。二人は、きつと二人のまま強くなれる」

「翼さん……」

「つ、翼、さん……」

翼は顔を赤くして落ち込む。

「奏のように人を元気づけるのは、難しいな」

「いえ、そんなことありません。前にもここで、同じような言葉で親友に励まされたんです。その時は、私だけが悩んでいたんですけど……私、また落ち込んだんじゃない。ダメですよ〜」

「あ、あの時は響だっ、だけだったけど。こ、今回は私も、ダメダメです……」

そんな二人に翼は優しく微笑んだ。雷が話題を切り出す。

「つ、翼さん。ま、まだい、痛むんですか?」

「大事を取っているだけ、気にするほどではない」

「そ、そうですか……。よかった、です」

翼の顔が引き締まる。

「絶唱による肉体への負荷は極大。まさに他者も自分も、すべてを破壊しつつ滅びの歌。その代償と思えば、これくらい安いもの」

絶唱のことを聞いて雷が目キラキラさせ、響がそれを「駄目だからね」と咎め、シユンとなった雷の手を握ったまま立ち上がる。

「絶唱、滅びの歌、でもですね翼さん。二年前、私がつらいリハビリを乗り越えられたのは、翼さんの歌に励まされたからです!翼さんの歌が、滅びの歌だけじゃないってこと、聞く人に元気をくれる歌だったこと、私は知っています!」

「立花……」

「だから早く元気になってください。私、翼さんの歌が大好きです」

「わ、私も!です……」

二人の言葉に翼は目をつむり、微笑んだ。

「私が励まされてしまってるみたいだな」

「へ?」

「？」

雷は言葉の意図が分からず首を傾げ、響は頭をかき、照れた様に笑った。

## 仲直り、新たな決意、変わらぬ決意

『ふらわー』で体を療養していたクリスが回復し、未来が貸していた体操服を返却して洗濯してもらっていた服に着替え、彼女の話にぶつきらぼうに答えていた。

「ケンカか……。あたしにはよくわからないことだな……」

「友達とケンカしたことないの?」

「……友達いないんだ」

「えっ?」

クリスの返事に思わず声が出る。

「地球の裏側でパパとママを殺されたあたしはずっと一人で生きてきたからな。友達どころじゃなかった」

「そんな……」

未来の脳裏に中学で転校してきた親友の姿がクリスと重なる。もしも私達と出会っていなければ、彼女もこんなふうになっていたのかもしれないと未来は思った。クリスの独白は続いていき、聞けば聞くほど親友の姿と重なっていく。ただ違うのは怒りを抱くか恐怖を抱くか、それだけのことだった。クリスの過去を思い出させてしまったことに未来は謝罪する。

「ごめんなさい……」

「なあ、お前そのケンカの相手ぶっ飛ばしちまいな」

「へ?!」

「どっちがフーのかはつきりさせたらそこで終了。とつとと仲直り、そうだろ?」

「出来ないよ、そんなこと……」

「フン。わっかんねーよなあ……」

未来の返事にクリスはそっぽを向き、『ふらわー』から出ていこうとする。不意に未来が後ろから声をかけてきた。クリスは振り返る。

「ありがとう」

「ああん?あたしは何もしてないぞ」

膝にのせていた体操服を横に置いて立ち上がる。

「ううん。ほんとに、ありがとう。氣遣ってくれて。あ、ええと……」  
そう言えば名前を聞いていなかったことを思い出し、何と呼んだらいいかと言葉を詰まらせる未来に対して、どうしてもよさそうにクリスは名前を伝える。

「クリス。雪音クリスだ」

「優しいんだね、クリスは……。やっぱり、あの子にそっくり……」  
「なっ……。そうか……」

最後のほうは小さくて聞き取れなかったが、未来の言葉を聞いたクリスが恥ずかしそうに後ろを向く。そんな彼女に未来がそばによって手を握る。

「私は小日向未来。もしもクリスがいいのなら、私はクリスのお友達になりたい」

一度動揺したクリスだったが、未来の手を振り払って距離をとる。

「あたしは、お前たちにひどいことをしたんだぞ」

「うん？」

クリスの言葉の意味が分からず、未来は目を丸くするがいきなり鳴り響いたサイレンに意識を持っていかれてしまう。

○○○

「翼です。立花、轟の両名も一緒にいます」

翼が二課の通信機に入ったコールにでて指示を受け取る。相手は弦十郎だ。それに続いて雷と響も通信に出る。

「ノイズを検知した！ 相当な数だ。恐らくは、未明に検知されていたノイズと関連があるはずだ」

「了解しました！ 現場に急行いたします！」

「駄目だ！」

翼が勇んで行動しようとするが、弦十郎がそれを通信越しに遮る。

「メデイカルチェックの結果が出ていないものを、出すわけにはいかない！」

「ですが！」

それでも出ていこうとする翼の前に、響と翼との話で少し安定した雷が並び立つ。

「翼さんはみんなを守ってください。だったら私、前だけを向いていきます」

「ありがとうございます。翼さん。翼さんのおかげで私、戦えます」  
二人の成長に、翼は息をのんだ。

〇〇〇

未来とクリス、おばちゃんの三人は店の扉を開けて避難しようとするが、逃げ惑う人々にクリスは困惑する。

「おい、一体何の騒ぎだ?!」

「何って、ノイズが現れたのよ!警戒警報知らないの?!おばちゃん、急ごう!」

「ああ・・・」

すつとんきようなクリスの言葉に未来は驚愕する。今までのことが頭の中を駆け巡り、クリスは歯を食いしばって避難する人々とは逆の方向、ノイズのいる方向へと突っ走っていく。

「あ、クリス!」

それに気づいた未来が振り返って叫ぶも、クリスの耳に届くことはなかった。人ごみをかき分けてノイズのほうへ向かって行くクリスの中に焦りが生まれる。

(馬鹿だ!あたしってば、何やらかしてんだ!)

商店街を駆け抜け、膝に手をつけて呼吸を整える。あたりに人の姿はなく、クリスしかその場にはいない。

「ハア・・・カフツ・・・。あたしのせいで関係のない奴らまで・・・。ツ、うわあああッ!」

天に向かって咆哮する。地面に膝をつき、目から涙があふれ出る。「あたしがしたかったのはこんな事じゃない・・・。けどいつだってあたしのやることは・・・。いつもいつもいつもおッ!」

そんなクリスの周りにノイズが群がってくる。クリスは静かに立ち上がり、ノイズに向かって吠える。

「あたしはここだあ!だから、関係ない奴のどこになんて行くんじゃねえ!」

ノイズが攻撃を開始し、クリスはそれを避けながら歌う。が、のど

の調子が悪いのかせき込んで歌うことが出来ない。航空型ノイズの攻撃がクリスに当たりそうになった時、突如地面がめくりあがってノイズの攻撃を防ぎ、さらに何者かの拳でめくりあがった地面が砕け、その破片がノイズの群れに襲い掛かった。

弦十郎はクリスを守るように立ちふさがると、再開されたノイズの攻撃をさっきのように地面で受け止め、クリスを抱きかかえて安全なところまで跳び上がる。近くの建物の屋上に着地した弦十郎は抱きかかえたクリスに対して安否を確認する。

「大丈夫か？」

「ッ！」

安心したのもつかの間、航空型ノイズが二人の上に昇ってきた。クリスは弦十郎の腕を振り払って歌い始める。

「Killter Ichival Tron」

赤いシンフォギア、イチイバルを纏ったクリスは腕部装甲を変形させた二丁のボウガンによって放たれたエネルギーの矢で航空型ノイズを撃墜していく。行動で無事を示したクリスは弦十郎のほうを向く。

「御覧の通りさ！あたしのことはいいから、ほかの奴らの救助に向かいな！」

「だが・・・」

「こいつらはあたしがまとめて相手をしてやるって言ってるんだよ！」

再び正面を向いたクリスは両手のボウガンをガトリング砲に組み替えて飛び上り、落下しながら弾をばらまいていく。

「ついてこいクズどもお！」

『BILLION MAIDEN』

ガトリング砲から放たれる無数の弾丸がノイズをチリへと変えていき、上空にいるノイズも次々と落としていく。

「おれは・・・、またあの子を救えないのか・・・」

弦十郎のつぶやきは誰にも聞かれることはなかった。

クリスはガトリング砲から使い勝手のいいボウガンに戻すと河原に着地し、ノイズの攻撃を踊るように避けながら的確に射撃を当てて

いく。クリスの暴れっぷりに町中のノイズが集まって来ていた。

○○○

学校からノイズとの戦いに下りてきていた雷と響は、近くの廃ビルから聞こえてきた女性の叫び声を聞いて救助に駆け付けていた。

「誰か！誰か今・・・ッ！」

「無事だったら返事して・・・?!」

二人の叫びは上からの攻撃で遮られ、足場を砕かれてしまう。しかし、弦十郎との特訓で体を鍛えた二人は下の階に身をひねらせて着地し、攻撃を仕掛けてきたタコのような中型ノイズに思わず声を上げそうになるが、横から伸びてきた手によって口をふさがれてしまう。慌てて二人は手の伸びてきた方向を向くと、未来が口に指をあててそこにいた。

指示の通り静かにしていると、未来がポケットからスマホを取り出して何か文字を打ち始め、それを二人に向ける。

『静かに。あれは大きな音に反応するみたい。あれに追いかけられて、『ふらわー』のおばちゃんここに逃げ込んだの』

雷と響はシンフォギアを纏うと逆に二人を危険にさらすことを理解し、未来の出してきたスマホにかかれた言葉に大慌てで二人はスマホを取り出して答える。それを三回ほど繰り返した後、未来が二人のスマホに手を添えて返事を書く動きを止めさせる。おばちゃんが目を覚まし、その時の声に反応してノイズが動き始めた。

未来が二人の耳元でノイズにばれないようにささやく。

『私、響と雷にひどいことした。今更許してもらおうなんて思っけない。それでも、一緒にいたい。私だっけ戦いたいんだ』

『だめだよ・・・。未来・・・』

『お願い・・・。未来は傷ついちゃダメ・・・』

『どう思われようと関係ない。響と雷の二人に背負わせたくないんだ・・・』

二人から顔を話して立ち上がり、叫んだ。

「私、もう迷わない！」

その声に反応してノイズが矛先を未来に向けて連続で攻撃を開始

し、未来はそれに触れないように廃ビルの外に駆けだすと、ノイズも未来を追って外へと身を乗り出す。雷と響の二人は未来の決意を無駄にしないために倒れているおぼちゃんのほうへ駆け寄って無事を確認すると、シンフォギアを起動させる。

「Volters Kelaunus Tron」  
「Balwisyall Nescell Gungnir Tron」

雷の体が金と灰色の、響の体がオレンジと黄色のシンフォギアを纏う。響がおぼちゃんを抱えて跳び上がり、雷が未来のほうへと駆け出す。

ちようど来ていた緒川の車におぼちゃんを預けて響も雷に合流し、二人で未来の行方を捜す。二人の脳裏にスマホでのやり取りが蘇る。「二人とも聞いて。私が囹になってノイズの気を引くから、その間におぼちゃんを助けて」

『駄目だよ。そんなこと未来にはさせられない！』

『そんなことしなくても私がノイズを倒すよ！だから逃げて！』

『元陸上部の逃げ足だから何とかなる。それにこれは私の覚悟なんだ、だからやらせて』

『何ともならない！』

『そんな覚悟、未来がする必要ないよ！』

『じゃあ、何とかして』

思ってもみなかった未来の返しに二人は詰まらせる。

『危険なのはわかってる。こんな覚悟、普通に生きていけばする必要のないことぐらいわかってる。だからお願いしてるの。私の全部を預けられるの、響と雷の二人だけなんだから』

戦っているのは雷や響だけじゃなく、未来も戦っていること。助ける側だけじゃなく、助けられる側も一生懸命なこと。本当の人助けは自分一人の力だけではないことを理解する。

遠くから未来の叫び声が聞こえてきた。

（そうだ。私が誰かを助けたいという気持ちは惨劇を生き残った負い目なんかじゃない！二年前、奏さんから託された・・・私が受け取っ



た！気持ちなんだッ！)

決意を新たにした響の脚部装甲が変形してアンカージャッキを構築し、空中で稲妻を纏った雷の右足へと体を預ける。

(まだ私は自分への罰のために戦ってる……。でもッ！誰かのために、私の大切な人のために……。私が大切だと思うもののためにッ！戦う決意は変わらない！)

強烈な斥力によって弾かれた稲妻を纏った雷の右足が、響を上にもせても変わらない速度で振りぬかれる。

『雷刃拔拳・滅神』

完全に振りぬかれる直前にアンカージャッキが起動し、伸び切っていたアンカーが雷の足を叩きつけ、それを足に展開されている斥力フィールドがさらに押し出す形で響を弾き飛ばす。

「響はノイズを！未来のことは任せて！」

「わかった！」

ミサイルのように射出された響を確認した後、地面に着地した雷は左足のユニットも展開してプラズマを発生させながら猛スピードで未来のいる方へ駆け出す。

『電光刹那』

響はノイズの攻撃で崩れた地面から落下する未来を確認すると、右腕のバンカーを伸ばしてノイズを勢いをそのままに殴り抜き、それによって発生した衝撃波でノイズを粉碎する。猛スピードで駆け抜けてきた雷は落下する未来の真下にやってくると、ジャンプして空中で受け止める。

三人そろって真つ逆さまに落ちていく中、響はアンカージャッキを起動し、雷は未来に被害が出ないように両足のユニットを弱く起動させ、磁力場を形成して減速する。

「うわ?!ちよ、響！そんな勢いで落ちたら……。うわあ?!」

「へ?・・・待って！」

「え?何が・・・」

「「きやああああ?!」」

が、響の着地の衝撃で磁力場が乱れ、雷と彼女に抱きかかえられた

未来は先に着地していた響を巻き込んで芝生の坂を転がり落ちる。最初は三人の悲鳴だったが途中からおかしくなってきたのか笑い声が混じっていく。すでにギアが解除され、雷と響の二人は制服姿へと戻っている。

「いたた……」

「いたい……」

「ううう……」

「……」

「「ぷっ……、アハハハ！」」

三者三様に打ったところをさすっていたが三人そろって顔を突き合わせ、また笑い始める。響がスカートについた汚れを払いながら立ち上がる。

「かつこよく着地するって難しんだなあ」

「ちよとお。かつこよく着地できなかったのは響だけでしょ。せつ

かく未来を抱えて着地出来たってのに……」

「あはは……ゴメンゴメン」

響の言葉に雷が立ち上がり、口をとがらせる。そんな二人の間に未来が体を入れる。

「まあまあ。あつちこつち痛くて生きてるって気がする。ありがとう。響と雷の二人なら絶対に来てくれるって信じてた」

「ありがとう。未来なら最後まで絶対にあきらめないって信じてた。だって、私達の友達だもん」

「友達なんだから、これからもずっと一緒にいよう？」

響の言葉からまだ友達同士であること、雷の言葉から今まで通りの関係でいようという言葉に未来は目に涙をためて二人に抱き着き、そのまま後ろに倒れ込む。未来は「怖かった……」と泣きじやくっている。それにつられて雷と響の二人も涙を流す。

「私も、怖かった……」

「うん……うん……。私も怖かったあ……」

「私、二人が黙っていたことに腹を立ててたんじゃないの……。誰かの役に立ちたいのはいつもの響だし、自分を傷つけても誰かを守ろう

とする雷だから……。でも……。最近はつらいこと苦しいこと全部背負い込もうとしてたじゃない……。私はそれがたまらなく嫌だった……。！また響が大きながをするんじゃないかって、また雷が自殺まがいのことをするんじゃないかって心配してた……。だけど……。！それは二人を失いたくない私の我が儘だ……。そんな気持ちに気づいたのに、今までと同じようにできなかった……。」

「未来……。それでも未来は私の……。あははは！」

「何？……。ぶ、あははは！」

「へ？」

響が涙をぬぐって未来の顔を見た瞬間に大笑いを始める。それが気になった雷も涙をぬぐい、同じく大笑いする。状況を飲み込めていない未来がポカンとした顔をする。

「髪の毛さばさばで涙でぐちゃぐちゃ、なのにシリアスなこと言ってるし！」

「こ、こんなの……。うくくつ、笑うしかないよ……。ッ」

「もう！二人だつて似たようなものじゃない！」

未来は頬を膨らませてそっぽを向く。気になって雷と響はお互いの顔を見合わせてまた笑い始め、二人とも自分の顔が気になって未来に鏡を要求する。

「未来！鏡貸してえ！」

「小さいのでもいいからあ！」

「ええ?!鏡はないけど、これで撮れば……。」

未来はポケットからスマホを取り出して三人そろって撮ろうと提案する。

「ああ、もうちよつと……。！」

「ちよつと響、私見切れてる！」

「わわゴメン！もう少し詰めるね！」

「撮るよ二人とも……。」

三人で撮った写真をみて、口々に感想を言い合う。

「うおお……。すごいことになってるう、コレは呪われたレベルだ……。！」

「私も想像以上だった」

「私のせいだあああ！」

「駄目だよ雷」

「じよ、冗談だよ……」

「冗談に聞こえないんだよ雷のは」

「そうそう」

全く冗談に聞こえない冗談に突っ込んだ二人の圧に雷が気押しされてしまう。そしてまた、三人そろっておかしくなって大笑いを始めた。

「帰って一緒にお風呂入ってまた三人で寝よう！久しぶりに未来とくっついて眠れるう。響の体では固くってさあ」

「うん！……て、えええ?!それどういう意味?!」

「そのまんまの意味だよ」

「ふふっ。わかった、三人一緒に寝よ！」

「やった！」

雷がガッツポーズをし、そんな雷に響が「どゆこと?ということおゝ！」と叫ぶ。未来はそんな二人を見て、また笑い始めた。

○○○

完全に日が暮れて雷と響、未来の三人は商店街にいた弦十郎と緒川のもとに来ていた。緒川が未来にカバンを手渡す。

「はい。『ふらわー』さんから回収しました」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

カバンを受け取っている未来の横で、雷と響は弦十郎に申し訳なきように話し始める。

「あの、弦十郎さん……。私達、未来……。この子にまた戦つてるところを一から十まで目の当たりにされてしまつて……」

「すみません……」

しよぼくれる二人と弦十郎の間に未来が口をはさむ。

「違うんです！私が首を突っ込んでしまつたから……」

「ふむ……。詳細は後で報告書という形で聞く。まあ、不可抗力とい

うやつだ。それに、人命救助の立役者に、うるさいことは言えんらうよ」

「やった！」

「よかったあー！」

「うん！」

頭をかきながらそう言った弦十郎の言葉にハイタッチを決める。すると突然、ピンク色の車がドリフトしながら突っ込んできた。了子が車から降りてくる。

「主役は遅れてご登場よ！さて、どこから片付けましょうかね！」

そんな了子に五人そろって呆れ、弦十郎が再び口を開く。

「あとは、頼りがいのある大人たちの出番だ。響君たちは帰って休んでくれ」

「はい！」

友里からドリンクを受け取っている間に離れた弦十郎に未来が詰りめ寄る。

「あの一！避難の途中で友達とはぐれてしまつて、雪音クリスと言うんですけど……」

「なっ?!……うむ。被害者が出たとの知らせも受けていない。その友達とも連絡が取れるようになるだろう。心配ない」

「よかつたあ……」

未来は安堵の表情を浮かべ、一礼して雷と響のほうへと駆け出す。

○○○

未来と、今までの反動で未来に抱き着いたままの雷と響は三人そろつてベットのの中に入る。

「おやすみ〜」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

「ぐ〜」

「へ?!早い！」

「どれだけ疲れてたんだ……」

ベットに入った瞬間にいびきをかき始めた響に二人は驚くが、悪

戯っぽい笑みを浮かべた響にそろって嬉しそうにじやれつく。新しい写真立てには、三人で撮った服も髪も顔も汚れた今日の写真が入れられていた。

## 違和感のある恋バナ

件の『ミノムシの刑』を解かれた未来は、雷と響に連れられて二課内の通路をキョロキョロとあたりを見ながら歩いていく。

「うわあ。学校の真下にこんなシェルターや地下基地が・・・」

「ふふっ。すごいでしょ」

「は！翼さくん！」

自分の物でもないのになぜか雷は得意げだ。すると突然、未来や一般の人にとっては雲の上の存在であるはずの翼の名前を叫びながら響が駆け出していった。その声に気づいた翼が答える。

「立花、そして轟か。そちらは確か・・・協力者の」

「こんにちは。小日向未来です」

「えっへん。私達の一番の親友です！」

「なんでそんな偉そうなの。確かに自慢の親友だけど」

翼に対して未来が頭を下げ、響が親友自慢をし、雷がそれにツッコミを入れながら自慢に便乗する。そんな三人を見て、翼が何故かダメな子を持つ母親のような顔をする。

「轟はともかく。立花はこういう性格故、いろいろと面倒をかけると思うが支えてやってほしい」

「いえ。響は残念な子ですし、雷もこう見えてあまりしつかりしていないので。ご迷惑をおかけしますが、よろしく願います」

「ええ何？どうゆうことお？」

「そういうところなんだよねえ・・・。ハア、私も治したいんだけどなあ・・・」

『残念な子』である響は二人の会話が理解できず、『あまりしつかりしていない子』の雷は話は理解できたが自分のしつかりしていない部分が治せていないことにため息をつき、緒川がよくわかっていない響に一言で説明する。

「響さんを介してお二人が意気投合しているということですよ」

「はぐらかされた気がする・・・」

響は頬を膨らませるが、実際その通りなのでだれも口を挟まない。

そんな響を見て未来、雷、翼の順番に笑みがこぼれる。響が背中を掻く真似をしながら口を開く。

「でも未来と一緒にここにいるのは、なんかこそばゆいですよ」

「そう？ 私は未来に隠し事が無くなったからうれしいんだけど」

雷が包帯に巻かれた腕を組んで自分の意見を言い、翼が未来の現状を伝える。

「小日向は外部協力者として二課に異色登録させたのは、指令が手を回してくれた結果だ。それでも、不都合を強いるかもしれないが」

申し訳なさそうにする翼だったが、未来が何でもないように答えた。

「説明は聞きました。自分でも理解しているつもりです不都合だなんてそんな」

響が何かに気づいたように翼に質問する。

「そう言えば師匠は・・・」

「確かに弦十郎さんいませんね。何かあったんですか？」

「私達も探しているのだが・・・」

雷と響の質問に翼は首を振る。つまり、わかっていないのだ。

「あら、いいわね。ガールズトーク」

後ろから聞こえてきた了子の声に振り返り、緒川が困惑する。

「どこから突っ込めばいいのかわかりませんが、僕を無視しないでください」

そんな緒川の声は誰にも届くことなく、三人の興味は了子のほうへと向いてしまっていた。翼が緒川に同情のまなざしを向ける。

「了子さんもそういうの興味あるんですか?!」

「モチのロン！私の恋バナ百物語聞いたら夜眠れなくなるわよ」

「まるで怪談みたいですね・・・」

「・・・それって、百回フられてるってことでは?」

雷の一言に興奮気味だった響が了子に何とも言えない視線を向け、了子は唇を尖らせて雷に文句を言う。どうも雷はフィーネとあった時から了子に抱いていた違和感を強めているらしく、バレない程度に軽く挑発しているのだ。



「ホントにあなたは、もう・・・」

「あははは・・・。スミマセン」

「コホンと一度咳ばらいを入れ、話を再開する。

「遠い昔の話になるわね。こう見えて呆れちゃうくらい一途なんだから」

「「おお〜！」」

「意外でした。櫻井女史は恋というより、研究一筋であると」

「昔の恋に引つ張られてると婚期を逃しますよ?・・・いたい!」

雷の頭に了子のチョップが炸裂し、二度話を再開した。

「私が聖遺物の研究を始めたのも、そもそも・・・」

「うんうん、それで?!」

響と未来は話完全に食いつく。雷は了子の言葉に引つかかりを覚えるが、そこで話が中断された。そのことにさらに雷が違和感を抱く。

「ま、まあ。私も忙しいから、ここで油を売ってられないわ」

「自分から割り込んできたくせに・・・うおわっ!」

「緒川さん?!」

口をはさんだ緒川の顔面に了子の裏拳が直撃し、へたり込んでしまう。翼がそんな緒川を残念なものを見るような目で見つめる。

「とにもかくにも、出来る女の条件はどれだけいい恋してるかに尽きる訳よ。ガールズたちも、いつかどこかでいい恋、なさいね。んじゃ、ばっはっはーい」

去っていく了子の後姿を見ながら響と未来は恋バナを聞きそびれたことを残念そうにしているが、雷は目をつむって上を向き、さつき感じた違和感を整理していく。

（うーん、何で恋バナに聖遺物が出てくるんだ?相手は研究者・・・珍しい研究をして注意を引くため?いや、過去に研究職同士での婚約はあれどそれほど聞かないし、選択肢として資産家なら別に聖遺物でなくてもいい・・・。もしかして・・・かつて聖遺物を持っていた人とか?!・・・ナイナイ。流石にそれはないよ私、いくら何でも紀元前に生きていた人に恋してるなんて『あり得ない』よ）

「雷、どうしたの？大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ！」

響が勇んでいてもうんともすんとも言わない雷を心配して未来が声をかけ、それに慌てて返事をする。何か一番大切なものを忘れている気がするが、気付くことが出来なかった。すでに了子の姿はそこにはない。

○○○

了子いや、フィーネが廊下を歩きながら、らしくないことをしたさっきのことを思い返す。

(・・・聴いあの子なら気付いたかしら？少なくとも計画の目的は知れたはず、あいつらの『言葉』を思考に組み込んでいればの話だけど) 雷に気づいてほしいのかほしくないのか自分でもよくわからないまま、一向に進んでいない轟理論の解析のために自身のラボへと戻っていった。

## 戦いの向こう側にあった物

雷や響、未来、翼と緒川の五人は通路の間にある休憩所のソファーにてたわいもない雑談をしていた。緒川が自身の腕時計を確認する。「指令、まだ戻ってきませんか」「ええ、メデイカルチェックの結果を報告しなければならぬのに・・・」

「次のスケジュールが迫ってきましたね」

「もうお仕事入ってるんですか」

緒川の言葉に響が身を乗り出す。翼が仕事など苦でもないように答える。

「少しづつよ。今はまだ、慣らし運転のつもり」

「じゃあ、以前のような過密スケジュールじゃないんですね？」

それを聞いた雷が未来の耳元でささやいた。

「ねえ未来。私、響が何を言いたいかわかった気がする」

「奇遇ね雷。私も」

二人がそろって苦笑いを浮かべている間に、響が翼に提案する。

「だったら翼さん！デートしましょ！」

「?!デート?!」

「ほら来た」

響のいきなりの提案に翼が驚き、雷が「やっぱり」と言うようににたりと笑う。四人で出掛けるデートの日は、翼のレッスンのない次の週末に決まった。

○○○

デートの日、老若男女を問わずにぎわっている公園で翼は時計を見て、集合時間に遅れている三人に軽く腹を立てながらここに流れる川の赤い橋のそばで待っていた。

「あの子たちは、何をやっているのよ」

「はあ・・・はあ・・・。すみません翼さん！」

「遅いわよー」

「申し訳ありません！」

「カヒツ・・・ハア・・・ハア・・・ふ、二人とも、は、早いよ・・・うわあ?！」

響、未来が到着し、遅れてフラフラと雷が追い付いてくる。雷が足を纏れさせて倒れそうになる。

「危ない！」

「す、すいません・・・」

いくら弦十郎のもとで鍛えたとはいえ、元々体力ゼロの雷に聖遺物と融合して超人的な体力回復能力を持つ響と、元陸上部の未来を比べるのは酷というものだろう。

響と未来は膝に手を突き、雷は倒れかけたところを翼に支えてもらいながらカバンからお茶とタオルを取り出して水分補給を行い、汗を拭く。

未来が息を整えながら弁明する。

「お察しの事とは思いますが、響の何時もの寝坊が原因でして・・・」

「時間がもったいないわ、急ぎましょ」

響と未来は体を起こし、雷は翼から離れて彼女のいでたちに目を丸くする。完全にノリノリの服装である。

「すっごい楽しみにしてた人みたいだ・・・」

「私、今すぐ朝食を抜いた判断を評価したいよ」

雷は響が寝坊した瞬間に朝食を取らないことを選択したのだ。その結果、雷は翼の服を自身の吐き出したもので汚すことはなかった。まあ、響が寝坊しなければそんなこと考える必要もないのだが。

二人の眩きが聞こえたのか、翼が顔を赤くしながら振り返る。

「誰かが遅刻した分を取り戻したいだけだ！」

三人はいきなり大声に首をすくめる。

「・・・翼イヤーは何とやら」

こうして、四人のデートが始まった。

何でもあると有名な巨大ショッピングモールに到着した三人は、特に目的があるわけでもなく、ただ気の赴くままに様々な店に入っていた。

小物売り場では雷が持ってきた珍妙な置物に三人が困惑し、感動モ

ノの恋愛映画に四人そろって涙を浮かべ、ソフトクリーム屋で購入したソフトクリームを食べ歩き、洋服屋では四人だけのファッションショーが開かれ、翼の存在をかぎつけたファンから逃げ回り、見事に撒いたことに四人そろって笑みを浮かべる。

ゲームセンターにあるクレイゲームにて、響が翼が狙っているぬいぐるみを取ってあげようと意気込んでいる。

「翼さん御所望のぬいぐるみは、この立花響が必ずや手に入れて見せますー！」

「期待はしているが、たかが遊戯に少しつき込みすぎではないか？」

「翼さん。食費までは無課金です」

「え、それはマズくないか？轟」

「・・・私が管理しているので・・・」

「そ、そうか・・・」

つばさの隣でグツと親指を立てる雷はソシヤゲ廃課金ユーザーであった。流石に食費云々は冗談であり、課金用と日常生活用の資金は未来が分けてあるのだ。破滅主義者な面があるため、雷はお金やその他の事をあまり考えていない。未来の言う『あまりしつかりしていない』のはそういうところだ。そうこうしているうちに響がクレイゲームにさらに投資し、操作ボタンを力強くたたく。

「キエエエー！」

「変な声出さないでー！」

「うるさいー！」

響の唐突な怪鳥音に雷と未来の二人は耳をふさぎ、翼は体をのけぞらせる。結果、響の気合がたつぷりとこもったクレイは目当てのぬいぐるみを掴むことはなかった。

「このUFOキャッチャー壊れてる！私呪われてるかもお！・・・どうせ壊れてるならこれ以上壊しても問題ないですよね?!シンフォギアを身に纏ってえー！」

「ああー！こらー！平和的に解決しろー！」

「この怒りに身を任せればアームドギアだつてえー！」

「大声で喚かないで！そんなに大声出したいのなら、いいところに連

れてってあげるから！」

「響。未来の譲歩で言うことを聞かないのなら今度の課題、一人でやってね？」

「うぐつ?!わ、わかりましたあ・・・」

雷に完全にとどめを刺された響は、おとなしく大声を出せるところ、『カラオケ街』へと足を運んだ。

「おおお！すごい！私達つてばすごい！トップアーティストと一緒にカラオケに来るなんて！」

翼とカラオケにこれたことに大興奮する響をよそに、予想外の和風なメロディーが流れ始める。タイトルは『恋の桶狭間』。

いきなりのことに三人は選曲者が誰か、お互いに指をさし合う。そんな三人に対して翼が冷静にマイクを取ってお辞儀をする。選曲者は翼だった。

「一度こういうの、やってみたいのよね」

「渋い・・・」

未来のつぶやきに二人が頷く。翼が歌い始めた。そんな翼に三人は大興奮だ。

「わあ〜」

「かつこいい〜！」

「現代アーティストなのに何で演歌が似合うんですかあ〜！」

因みにその後、二番手を雷に振られた響はとんでもないプレッシャーの中で歌ったそうなの。

○○○

「翼さん」

夕焼け空の下、響の翼を呼ぶ声が聞こえてくる。今日一日慣れないことをした所為か、珍しく翼の息が切れている。たった今、雷が階段を上りきったところだ。

「どうしてそんなに元気なんだ？」

「私はへとへとです・・・」

雷が手すりに体を預けて答える。

「翼さんがへばりすぎなんですよ〜」

「今日は慣れないことばかりだったから」

翼が階段を登り切った。

「防人であるこの身は、常に戦場にあつたからな」

周囲を見渡すと、そこは小さな公園だった。木の枝を優しくそよ風が撫でる。

「本当に今日は、知らない世界ばかりを見てきた気分だ」

「そんなことありません」

「お、おい?!立花何を?!」

響が翼に駆け寄つてその手を取り、引つ張つていく。連れて行つた先は町が一望できる場所だった。響がいろいろな場所を指さしていく。

「あそこが待ち合わせした公園です。みんなと一緒に遊んだところも、遊んでないところも全部翼さんの知ってる世界です!昨日に翼さんが戦つてくれたから、今日にみんなが暮らせてる世界です。だから、知らないなんて言わないでください」

雷が後ろからゆつくりと翼の隣に歩いてくる。

「今までも見えていたんです。知っていたんです。ただ、翼さんには見えずらかつたってだけです!翼さんはこれまでわき目もふらずに守つてきたんですから、少しぐらい立ち止まつて、一休みして、自分の本当にしたいたいことを考えたりしてもいいんじゃないですか?」

翼は、雷と響の言葉で奏の話してくれたことの意味を理解する。今はいいない彼女のことを思いながら呟いた。

「そうか……。これが奏の見てきた世界なんだな……。」

そこには悩んでいた昔の翼の顔はなく、答えを見つけた笑顔があつた。

次の日の学校で、屋上に三人を呼び出した翼は、三枚のチケットを手渡した。

「へ?!復帰ステージ?!」

「ああ。アーティストフェスが十日後に開催されるのだが、そこに急遽ねじ込んでもらったんだ」

それは、翼の復帰ステージのチケットだった。

「なるほど」

「さすが翼さん！」

「倒れて中止となったライブの代わりというわけだな」

響がチケットの裏側を向けると、かつてノイズに襲われたステージの名前が記載されていた。脳裏に当時のことが想起される。

「翼さん。ここって……」

「立花にとっても、つらい思い出のある会場だな……」

「ありがとうございます！翼さん！」

翼の予想に反して、響の声が明るい。驚いて響に顔を向ける。

「響……」

未来が静かに呟き、雷がにこやかに笑みを浮かべる。

「いくら辛くても、過去は絶対に乗り越えていけます。そうですよね?!翼さん！」

その言葉に翼は顔を背ける。その視線の先に、二羽の白い鳥が止まった。翼が響に向きなおす。

「そうありたいと、私も思っている」

その瞳は力強く輝いていた。



## 夢を守るために

翼の出演するアーティストフェスのチケットをもらった雷だったが、家庭科の授業の調理実習で同じ班の子がひっくり返した熱い味噌汁からとっさにその子を庇った時に火傷を負い、その治療のために保冷材を固定する包帯が腕に追加されたまま、フェス会場に向かって走っていた。

「ま、まさかあんなに二人に怒られると思っただけ……」

服でもなんでも引つ張って班の子をどかせばいいものを、深層心理にある自罰精神がその子を体で守るという方法を選択させてしまっていた。その結果、響と未来に袖を捲られ、冷たい流水で腕を冷やされながら咎められていたのだ。人並みに戻ってきた体力で、走りながら落ち込むという器用なことをする。

「どうしてこんな選択しちやっただのかなあ……。ハア……」

自分の愚かさにため息が出る。

「響もなんか遅れるみたいだし、途中で合流できればいいけど」

同じく集合時間に遅れている響のことを案じていると、不意に二課との連絡に使っている携帯端末が鳴った。つまり、ノイズが出たのだ。丁度響にも連絡が行っていたのか、同時に通信がつながる。

『はい、響です』

「こちら雷です。ノイズですか?」

『雷君の言う通り、ノイズの出現パターンを検知した』

雷の予想が的中し、通信に乗らないように頭の中で舌打ちをする。

『翼にもこれから連絡を……』

『師匠!』

『どうした?!』

弦十郎の言葉を響が遮る。雷はすでに響が次に何を言うかが分かっているで口をはさむという野暮な真似をしない。

『現場には、私一人をお願いします……!』

「んぐ?!」

自分も出ようとしていたところを響の言葉で止められてしまい、

さつきまでの考えを撤回する。

「ちよ?!待って響!私も行く!」

『でも雷。腕火傷してるから駄目だよ』

「死んでないなら安いつて!」

『雷の場合死んでも安いつて考えるからなあ……。私と同じで、言い出したら聞かないもんね。絶対に無理しないでね?』

「分かってるよ」

『オホン。二人とも、話を戻してもらっていいかな?』

『『スイマセン……』』

響は「ほんとかなあ」と、少し心配になった。火傷のことはすでに二課にも報告が行っており、症状は許容範囲内だが響が過剰に心配しているのだ。

『今日の翼さんは、自分の戦いに臨んでほしいんです。あの会場で、最後まで歌い切つて欲しいんです!お願いします!』

響の進歩に弦十郎は目を丸くし、頬を緩ませてから直ぐに引き締める。

『やれるのか?』

『はい!』

雷と響、二人の装者の声が重なった。

○○○

ギアを纏った二人はノイズの出現地点であるコンビナートへと向かう。ケラウノスの脚部ユニットによる超加速が空気の圧縮でプラズマを発生させ、雷の駆けた跡が痕跡のように残る。今回、効率を上げるためにコンビナートの西を響が、東を雷が受け持ち、最終的に合流するという流れだ。

報告によって二体存在している要塞のような大型ノイズの内の一体を雷が受け持つことになった。大型ノイズを守るように群がる小型ノイズと雷が接敵する。

「まとめて吹き飛ばす!」

脚部ユニットを格納し、逆に両腕と両腰のユニットを展開して腰だめに構え、向かってくるノイズ群を迎え撃つ形で連撃が放たれた。

『雷刃拔拳・神風』

「でいやあぁあッ！」

最もバランスのいい『桜花』と同等の火力を出すためには十発以上必要な『神風』だが、その圧倒的な連射速度は発生する衝撃波よりも速い。

要塞型の前まで到達したところで拳を止め、突破してきたところ以外から迫りくるノイズは『神風』の発生させた衝撃の塊を喰らい、まとめて塵となる。要塞型の放つ砲撃を回し蹴りで迎撃し、軸足のユニットを展開して斥力の足場を形成、天高く跳躍する。

「装甲の間をッ！抜いてッ！貫くッ！」

雷の脳が要塞型ノイズの装甲の繋ぎ目をロックオンし、展開した右腕のユニットから雷の槍が形成される。ノイズの砲撃を足場にしながら回転を加え、落下していく。

『天槍霹靂』

雷の槍を携えた右の拳が装甲の間を殴りぬいたその瞬間、槍がゼロ距離から圧倒的な速度で持って放たれる。間から潜り込むように侵入した槍はノイズの体内で爆散し、塵と化した大型ノイズの破片をばらまいていく。

遠くから聞こえてくる轟音を耳にし、響もノイズを撃破したことを確信する。結局ライブを見ることは出来なかったが、その顔には晴れやかな笑みが浮かんでいた。

「さて、響と合流しよう」と

ギアを解除して響のもとへと向かう途中、緒川からメールが届いた。どうも二課全体に通達されているらしい。雷が内容を確認するとそこには翼が海外で歌うことが記されていた。

「いやったあー！」

雷が飛び跳ねて喜んでいると、響が猛スピードで駆け寄ってきて抱き着いてくる。彼女もメールを確認したようだ。二人は我がごとのように喜び合う。その喜びの中には翼が海外でも歌うことに対する喜びと、自分たちが翼の夢を守ったという達成感もあった。

「やったね雷！翼さんの夢、守れたよ！」

「うん！うん！結局聞けなかったけど、最高の一日だよ！」

大興奮で雷を振り回していた響だったが、急に真面目な顔に戻って真剣な口調で話し始める。

「ねえ、雷。未来との埋め合わせ、どうしよつか？」

「……心配、かけてるよねえ」

雷も真剣な顔をする。未来も彼女たちの事情が事情ゆえ仕方ないと理解しているのだが、それでも心配をかけているには変わりない。それに加えて、三人で楽しむはずだったライブにも行けてないのだ、何か埋め合わせが必要というものだろう。

「買い物、はこないだ翼さんで行ったし……」

「動物園……とか？」

「そうしよつか」

未来との埋め合わせは動物園デートに決まった。

「あ、そうそう。クリスマスちゃんとあったよ！一緒に戦ってくれたんだ！」

「時々聞こえてきた爆発音ってやっぱりクリスマスだったんだ。教えられたやり方が過激なだけで私達と根っこは同じなのかもね」

「そうかもね！」

二人は肩を並べて再び笑い合う。

後日、動物園デートで未来に許してもらった二人は、それはそれで大いに動物園を楽しんでいた。

## 少女の転機

職員室から学級日誌を受け取った雷と響、未来の三人は音楽室から聞こえてくる合唱部の歌声を聞きながら廊下を歩いていく。曲はよく三人が耳にするリディアンの校歌だ。不意に響が立ち止まって目を閉じ、歌声に合わせて鼻歌を歌う。

「何？合唱部に触発されちゃった？」

「わりと響って何かに影響されること多いよね」

雷と未来の問いかけに、響がうーんと少し考える。

「リディアンの校歌を聞いてるとまったりするっていうか、凄く落ち着くっていうか……みんながいるところって思うと、安心する！自分の場所って気がするんだ。入学して、まだ二か月ちよつとなのになえ」

響がうれしそうに言う。

「でも、いろいろあった二か月だよ」

未来の言葉に、雷が苦笑いを浮かべる。

「いくら何でもいろいろありすぎだよ。普通の人の一生分のいろいろを体験した気がする」

「そうだね」

同じように響と未来も笑う。

雷が校歌や制服による人間の帰属意識の心理を響に冗談交じりに語りながら、三人そろって自分たちの教室へと戻っていった。

○○○

クリスは何かに呼び出されたかのようにフィーネの屋敷へと駆け込んでいく。大広間へと到達した彼女が見たものは、米国特殊部隊員の無残な死体だった。フィーネの姿はすでにない。

「何が……どうなってやがんだ……」

確認するように歩を進めていると、後ろから物音がする。驚いて振り返ると、そこには少し前に助けてもらった時と変わらない服装の大柄な男がいた。思わず後ずさる。

「違う！あたしじゃない！やったのは……！」

最後まで言い切ることなく、拳銃を構えた黒服の男たちが侵入してくる。クリスは身構えるが、男たちは最初からクリスがやっていないと分かっているかのように行動し、そんな彼らに拍子抜けする。目の前に大柄の男、弦十郎がやってきて、クリスの頭を安心させるかのように優しくなでる。

「誰もお前がやったなどと、疑ってはいない。すべては、君や俺たちのそばにいた彼女の仕業だ」

弦十郎の脳裏に数日前の出来事が蘇る。数日前、彼は雷に呼び出されていたのだ。周囲に誰もいないことを確認した雷は、弦十郎に話し始める。

「すみません。忙しいときに……」

「ああ、かまわんとも。子供の話に耳を傾けるのも大人の務めさ」

弦十郎の答えに雷はほっとした顔を見ると、すぐに真剣な顔つきに戻る。

「単刀直入に言います。フィーネの正体は了子さんです」

「ふむ、その根拠は？雷君のことだ、根拠もなくそんなことを言う訳じゃないだろう？」

「はい」

頭ごなしに否定することをせず、自身の調査が到達した答えと同じ考えを持つ彼女が一呼吸入れて心を落ち着かせるのを待つ。

「フィーネの目的と了さんの条件が一致しすぎてるんです」

「確か、フィーネの目的は響君の誘拐と、ケラウノスの奪取だったか」

「はい。響のことはよくわかりませんが、ケラウノスを奪うということとは轟理論を奪うこととはほぼ同様の意味です」

「データも何も残っていない轟理論の唯一の成功例だからな。そういううことになる」

つまり、轟理論を解析したければケラウノスを解析しなければならぬのだ。それを口にする、雷が頷く。

「そして、櫻井理論と同じシンフォギアシステムを使用している轟理論は逆説的に櫻井理論を知り尽くしていないとまったく意味のない理論になります。つまり……」

「世界で唯一櫻井理論を知り尽くしている人物、了子君がフィーネであると確信したのだな？」

「他にもいろいろありますが、最も信憑性が高いのはこれです。あの……仲間を疑うのはアレだと思うんですけど……その……」

さつきまでの自分の考えを確信しているかのような自信のあるしゃべり口がだんだんと弱くなっていき、最終的に俯いて、消え入りそうな声になっていく。そんな彼女の頭を弦十郎は優しくなでる。

「安心しろ。俺たちの行った調査でも同じ結果が出ている。雷君のおかげで俺の考えにも自信が持てるようになった」

その言葉を聞いて、雷の顔がパアッと明るくなる。弦十郎は一番の疑問を雷に投げかけた。

「……ところで、何時から気付いてたんだ？」

「あの、ネフシユタンの女の子、クリスが来た時に。その時はフィーネの名前は知らなかったんですけど、了子さんがバックにいるのかなあって……」

自分たちが調査に乗り出すよりも早く気づいていたことに弦十郎は目を丸くする。彼女のことだ、嘘を言うような子ではないだろう。今まで言わなかったのも彼女の性格を鑑みれば仕方ないことだ。

「ハハッ。俺でもそんなに早く気づけなかったぞ。流星は、かの轟夫妻のご息女だな！」

「そんなことないですよお〜」

口ではそう言っているが頬を緩め、両親を褒められてまんざらでもなさそうだ。この日、弦十郎は了子がフィーネであると確信した。

「風鳴指令！」

「おお」

一人の黒服の声に弦十郎は呼び戻される。その時、黒服が特殊部隊員に貼られていた置き手紙をはがした瞬間、そこら中に仕掛けられていた爆弾が起動する。

爆発によってばらばらになった屋敷の中から服こそ汚れているものの無事な黒服たちと、クリスを抱き寄せ、右腕一本で上から落下してきた瓦礫を受け止めている弦十郎がそこにいた。そんな惨状に思

わずクリスが言葉をこぼす。

「どうなつてんだよ……コイツは……!」

「衝撃は発勁でかき消した」

「そうじゃねえよ!」

クリスは弦十郎の腕を振りほどいて距離をとり、彼を睨みつける。

「なんでギアも纏えない奴があたしを守つてんだよ!」

支えていた瓦礫を下ろして振り返る。

「俺がお前を守るのはギアのある無しじゃなくて、お前よか少しばかり大人だからだ」

「大人?!」

クリスが吐き捨てるかのように言う。

「あたしは大人が嫌いだ!死んだパパとママも大嫌いだ!とんだ夢家で臆病者!あたしはあいつらと違う!戦地で難民救済?!歌で世界を救う?!いい大人が夢なんか見てるんじゃないやねえよお!」

「大人が夢を、ね」

「本当に戦争を無くしたいのなら、戦う意志と力を持つ奴らを片っ端からぶっ潰していけばいい!それが一番合理的で現実的だあ!」

黙つてクリスの叫びを聞いていた弦十郎が口を開いた。

「そいつがお前の流儀か。なら聞くが、そのやり方でお前は戦いを無くせたのか?」

「ッ……。それは……」

弦十郎の問いにクリスが言葉を詰まらせる。

「いい大人は夢を見ないと言ったな。そうじゃない、大人だからこそ夢を見るんだ。大人になつたら背も伸びるし、力も強くなる。財布の中の小遣いだってちつとは増える。子供のころはただ見るだけだった夢も、大人になつたら叶えるチャンスが大きくなる。夢を見る意味が大きくなる。お前の親は、ただ夢を見に戦場に行ったのか?違うな。歌で世界を平和にするつて夢を叶えるため、自ら望んでこの世の地獄に踏み込んだんじゃないのか?」

「なんで……そんなこと……」

「お前に見せたかつたんだろう。夢はかなえられるという、揺るがな



い現実をな」

その言葉を聞いてクリスが息をのむ。

「お前は嫌いだと吐き捨てたが、お前の両親はきつとお前のことを、大切に思っていたんだろうな」

弦十郎はクリスに歩み寄り、抱きしめる。その温かみ、そのやさしさにクリスは涙を流した。

〇〇〇

調査を終え、黒服と弦十郎は車に戻っていく。弦十郎にクリスは声をかける。

「やっぱり、あたしは……」

「一緒には来られない、か？」

クリスが俯く。

「お前は、お前が思っているほど一人ぼっちじゃない。お前が一人道を行くとしても、その道は遠からず、俺たちの道と交わる」

「今まで戦ってきたもの同士が、一緒になれるというのか？ 世慣れた大人が、そんな綺麗ごとと言えるのかよ」

弦十郎が呆れたように言う。

「ほんと、ひねてんなお前。ほれ」

何やら携帯端末のようなものをクリスに投げ渡し、それを胸元で受け止める。

「通信機？」

「そうだ。限度額内なら公共交通機関を利用できるし、自販機で買い物もできるシロモノだ。便利だぞ」

そう言っつて車のエンジンを入れると、クリスが口を開いた。

「カ・デインギル！」

思わずクリスのほうを向く。

「フィーネが言っつてたんだ。カ・デインギルって。それが何なのかわからないけど、そいつはもう完成してるみたいなこと……」

「カ・デインギル……」

弦十郎は復唱するように呟くと、正面を睨みつける。

「後手に回るのはしまいだ。こちらから打って出てやる！」

黒服たちの乗った車と共に、弦十郎はフィーネの屋敷を後にする。残されたクリスは、彼から受け取った通信機を見つめ、確かめるように握りしめた。

## その手は何のために

本部に戻った弦十郎は雷と響、翼の三人に通信を入れる。三人は問題なく出てモニターに顔が表示される。

『翼です』

『響です！』

『雷です』

雷と響は同じ場所において別々の通信機を使っているものだからお互いの返事が被る。そんな様子に少し苦笑いを浮かべながら要件を彼女たちに伝える。

「収穫があった。了子君は……」

「まだ出勤してません。朝から連絡不通でして」

「そうか……」

オペレーターの友里に姿の见えない了子のことを聞くがよくわかっていないらしい。響が暢気な声で言う。

『了子さんならきつと大丈夫です。何が来たって、私を守ってくれた時のようにどがーんとやってくれます』

それを聞いて翼が口をはさんだ。

『いや、戦闘訓練もろくに受講していない櫻井女史にそのようなことは……』

『でも私も見ましたよ？なんかエネルギーバリア？みたいなのでノイズの攻撃から響を守ってたの』

余計な混乱を避けるため、弦十郎がほかの人間に了子がフィーネだという考えを話さない、という言いつけを雷はしっかりと守っているらしい。何も知らないかのように雷が響の話に便乗する。すると音声通信で了子からの連絡が入る。

『やあつと繋がった。ゴメンね、寝坊しちゃったんだけど通信機の調子がよくなかった』

弦十郎と雷の目が鋭くなる。

「無事か？了子君そっちに何も問題は」

『寝坊してごみを出せなかったけど、何かあったの？』

『よかったあ』

響が安堵の声を上げる。

「ならばいい。それより聞きたいことがある」

『せっかちなね、なにかしら〜』

弦十郎は了子に本題を話し始める。今朝の調査で発覚した新しいワードだ。

「カ・デインギル。この言葉が意味するものは？」

『カ・デインギルとは、古代シュメールの言葉で高みの存在。転じて天を仰ぐほどの塔を意味しているわね』

それを聞いて雷の表情が変わり、弦十郎はそれを確認してから話を再開する。

「何者かがそんな塔を建造していたとして、何故俺たちは見過ごしてきたのだ？」

『確かにそう言われちゃうと……』

「だが、ようやくつかんだ敵のしっぽ。このまま情報を集めれば勝利も同然、相手の隙にこちらの全力を叩きこむんだ。最終決戦、仕掛けるからには仕損じるな」

『『了解ですー』『』』

三人の通信が切れる。

『ちよつと野暮用を済ませてから、私も急いでそつちに向かうわ』

了子との通信が切れた後、弦十郎は自分の通信機で雷に繋ぐ。彼女も分かっていたようで、ノータイムで通信に出る。

「雷君、何かわかったようだ。君の考えを聞かせてくれ。もちろん、響君たちに聞かれないようにな」

『わかっています。私の考えでは、もしかすると地下にあるのではないかと』

「地下？」

『はい。天を仰ぐくらいの高さの塔を隠すにはそれくらいしか思いつかなくて……すみません』

「いや、助かった。感謝する」

そう言って弦十郎は通信を切り、オペレーターたちにカ・デインギ

ルにまつわる情報をかき集めさせる。雷の考えとは異なった場合にも問題なく動けるようにしているのだ。すると突然、ノイズの出現を告げるアラートが鳴り響いた。藤堯が思わず叫ぶ。

「飛行タイプの超大型ノイズが一度に三体！いえ！もう一体出現！」  
装者三人に報告する。

〇〇〇

通信をつないだ雷と響は現状を確認する。

「今は人を襲うというよりも、ただ移動していると。はい、はい！」  
「了解しました！」

「響……雷……」

未来が心配そうに二人に声をかける。

「平気！私と雷、翼さんで何とかするから！」

「大丈夫、響の手綱はしっかりと握っておく」

「うんうん、雷がしっかりと私の……って、ええ?!」

「だから未来は学校に戻ってて」

「リディアンに？」

「ちよつとお?!無視しないでえ！」

雷の言葉に未来が驚く。あまり効果はなかったが未来を緊張からほぐすための冗談だと分かっている響は真面目な顔にもどって説明する。

「うん、雷の言う通りだよ。いざとなったら地下のシエルターを開放してこの辺の人たちを避難させないといけない。未来にはそれを手伝ってもらいたいんだ」

「う、うん。わかった」

少し不満そうだが了承してくれたようだ。

「ごめん、未来を巻き込んだんじゃって」

「ううん。巻き込まれただなんて思っていないよ。私がリディアンに戻るの、例え二人がどんなに遠くに行っただとしてもちゃんと戻ってこられるように、響と雷の居場所、帰る場所を守ってあげることでもあるんだから」

未来の言葉に響が言葉をこぼす。

「私の……帰る場所……」

「言つてたもんね、リディアンは私の居場所だつて。なら未来と響がいるところが私の居場所かな？」

「そう、私達が雷の居場所。だから行つて？私も二人みたいに大切なものを守るくらいに強くなるから」

未来が微笑む。そんな未来の左手を雷が、右手を響が握る。二人は笑顔を浮かべる。

「小日向未来は私にとっての陽だまりなの！未来のそばが一番あつたかいところで……」

「私達が絶対に帰つてくるところ」

「これまでもそうだし、これからもそう！」

「私みたいな疫病神でも、幸せを感じれる最高の居場所」

「だから私達は絶対に帰つてくる！」

「響……雷……」

雷と響はにっこりと笑う。

「一緒に流れ星見る約束、まだだしね！」

「今度こそ一緒に見よう！」

「うん」

未来の返事を聞いて満面の笑みを浮かべると、手を放して駆け出していく。

「じゃあ、行つてくるよ！」

「未来も気を付けてね！」

走つていく二人の背中を見て、笑顔だった未来が心配そうな顔になる。何か、嫌な予感がしたから。

○○○

ノイズのもとへと駆けていく雷、響の通信機に二課から新たな情報が入ってきた。四体の超大型ノイズは東京スカイタワーに向かっているとのことだった。その情報に二人は足を止める。

「東京スカイタワー？」

東京スカイタワーには二課の情報を統括制御を持つ、それを守るために弦十郎は三人にスカイタワー防衛を命令した。

「スカイタワー……」

「いくらなんでもここからじゃ……」

二人のいるところはスカイタワーから遠く、それに徒歩でもあるために遠すぎるのだ。そうこうしているうちに上から二機のヘリのローター音が聞こえてきた。それが起こす風に危うく吹き飛ばされそうになる。

『何ともならないことを何とかするのが、俺たちの仕事だ!』

通信機から弦十郎の頼もしい声が聞こえてくる。

スカイタワーに四体の超大型ノイズが集結し、無数の子型ノイズをばらまいていく。雷と響を乗せた二機のヘリはそれぞれノイズの上を取り、装者の二人が飛び降りながらギアを起動する。

「Volters Kelaunus Tron」

「Balwisyall Nescell Gungnir Tron」

響が右腕のバンカーユニットを引き延ばして落下の勢いそのまま殴りぬき、雷が右足の電撃発生ユニットを起動して踵落とと同時にになった雷撃がノイズを貫く。二体のノイズが爆散し残り二体となる。翼も到着し、ギアを纏うと同時に手に持つ剣を大剣へと変形させる。

『蒼ノ一閃』

その一閃は無数の航空型ノイズを斬滅するが、超大型ノイズには届くことが無かった。その結果に翼は歯を食いしばる。そんな翼に雷と響は駆けよる。

「相手に頭上にとられることが、こうも立ち回りにくいとは!」

「ヘリを使って、私達も空から!」

「それは無理みたいだよ……」

上を向いてつぶやいた雷につられて二人も空を見上げる。そこにはノイズの攻撃を受け、爆発する二機のヘリがあった。こうなっしまえば響の案は使えない。

「そんな?!」

「よくも!」

航空型ノイズの攻撃を響と翼は避け、雷はカウンターで拳を入れて撃破する。避けた二人を狙うように残りのノイズが襲い掛かるが、響は拳で、翼は剣で問題なく迎え撃つ。未だに超大型ノイズは小型ノイズをばらまき続けている。

「空飛ぶノイズ、どうすれば……」

「私の雷撃も流星に射程外……」

「臆するな立花、轟。防人が後ずされれば、それだけ戦線が後退するとうことだ！」

射程外にいる超大型ノイズにてんてこ舞いになっていると、航空型ノイズに向けて大量の弾がばらまかれ、撃破していく。その攻撃に三人は見覚えがあった。振り向くとそこにはイチイバルを纏い、ガトリング砲を展開したクリスが立っていた。クリスは通信機を握りながら悪態をつく。

「こいつがぴーちくぱーちくやかましいから、ちよつと出張ってみただけ。それに勘違いするなよ、お前たちの助っ人になったつもりはねえ！」

『助っ人だ。少々到着が遅くなったかもしれないがな』

「助っ人？」

通信機から聞こえてきた弦十郎の言葉にクリスの顔が赤くなる。それを聞いて響が満面の笑みを浮かべ、雷が嬉しそうに手を合わせ、翼が思わずつぶやく。

『そうだ。第二号聖遺物、イチイバルのシンフォギアを纏う戦士、雪音クリスだ！』

「クリスちゃん！ありがとう！絶対に分かり合えるって信じてた！」

「この馬鹿！あたしの話を聞いてねえのかよ?!」

響が駆け寄ってクリスを抱きしめ、雷がそんな響を見て自分も抱き着こうか抱き着くまいかと体を揺らし、そんな雷に困惑したまま翼はクリスに歩み寄る。

「とにかく今は、連携してノイズを！」

クリスは響の拘束を振りほどき、距離をとると宣言する。



「勝手にやらせてもらおう！邪魔だけはすんなよな！」

「ええええええ?!」

両腕部装甲をボウガンへと変形させて上空にいるノイズの大群へと放ち、次々と撃破していく。

「空中のノイズはあの子に任せて、私達は地上のノイズを！」

「は、はい！」

翼の背中から出てきた雷も出てきてノイズの群れを雷の雷撃が、響の拳が、翼の剣が蹴散らしていく。翼が後ろの建物に跳び上がったアイミングと同時にクリスも跳び上がり、背中からぶつかってしまう。クリスがガトリング砲を戻しながら怒鳴った。

「何しやがる！すっこんでな！」

「あなたこそいい加減にして！一人で戦っているつもり?!」

クリスの物言いに翼が顔をしかめる。

「あたしはいつだって一人だ！こちら仲間となれ合ったつもりはこれっぽっちもねえよ。確かにあたしたちが争う理由なんてないのかもなあ。だからって、争わない理由もあるものかよお！この間まで殺り合ってたんだぞ。そんなに人と人がッ！」

響がクリスの振り上げた手を握る。

「出来るよ。誰とだって仲良くなれる」

そう言ってもう片方の手で翼の手を取る。

「どうして私にはアームドギアがないんだろうってずっと考えてた。いつまでも半人前はヤだなくって。でも、今は思わない。何もこの手に握ってないから二人とこうして手を握り合える、仲良くなれるからね」

「立花……」

響の言葉を聞いて、翼は剣を地面に突き刺してクリスに手を差し出す。ゆっくりとクリスの差し出した手を翼は握るが、すぐに振りほどかれてしまう。

「この馬鹿にあてられたのかあ?!」

「そうだと思う。そして、あなたもきつと」

「冗談だろ……」

「冗談なんかじゃないよ」

そう言つて翼を振りほどいたクリスの手を雷が両手で握る。不安定な状態じゃないため、響の様子やクリスの表情から距離感を理解する。ニコニコとした笑みを浮かべてクリスのほうを見ると、そんな雷から目をそらしているようだ。そっぽを向いている。そんな四人を超大型ノイズの影が覆う。

「親玉をやらないとキリがない」

クリスが手を腰に当て、不敵に笑う。

「だったら、あたしに考えがある。あたしでなきゃできないことだ。イチイバルの特性は長射程広域攻撃、派手にぶっ放してやる」

「まさか、絶唱を……」

「バーカ。あたしの命は安物じゃねえ！」

「ならばどうやって」

「ギアの出力を引き上げつつも放出を押さえる。行き場のなくなったエネルギーを臨界までため込み、一気に解き放ってやる」

「そして、身動きの取れないチャージ中は私達が守る……と」

「うん！やろう！できるよ、私達なら！」

雷と響の『守る』という言葉にクリスは自分が一人ではないことを実感する。翼のほうを見てみれば、彼女も不満を持った顔をしている、確実にやり遂げると言った顔だ。

ノイズの大群にクリスを守るため、彼女を除いた三人が立ち向かう。

（頼まれてもないことを。あたしも引き下がれねえじゃねえか！）

誰にも言われることなく戦う三人の背中を見ながら、『約束』を守るためにクリスが歌う。今、自分の心の中にある初めて感じた思いをのせて。

（誰もが繋ぎ、繋がる手を持っている。私の戦いは、誰かと手をつなぐこと！）

響の拳が、蹴りが、ノイズを砕き、粉碎していく。

（私のギアは形のない雷だ。だからアームドギアも雷なのかもしれない。でも、武器の形をしていないのは私が、響みたいに誰かと手をつ

なきたいって思いからきているなら、うれしいな)

雷の発した稲妻がノイズを貫き、焼き払う。

(砕いて壊すも、束ねて使うも力。立花らしいアームドギアだ!)

翼の剣がノイズを切り裂いていく。

クリスのチャージが完了し、エネルギーが限界まで高まっているのを感じる。

「託したー!」

三人の声と共に背中のユニットが四本のミサイルを、両腕部装甲はガトリング砲、腰からは無数のミサイルポットが展開され、空中にいるノイズに向けて放っていく。

『MEGA DEATH QUARTET』

二体の超大型ノイズに二本ずつ突き刺さり撃破、小型ミサイルとガトリング砲で航空型ノイズを撃墜していく。地上では雷と響、翼の三人がすべてのノイズを倒したところだった。

「やった、のか……」

「たりめえだあ!」

クリスの言葉を証明するかの如く、ノイズを撃破した証である炭素が空から舞い落ちる。彼女のもとに響が駆け寄って抱き着く。今回は雷も一緒にだ。

「やったやったあ!」

「すごいよクリスう!」

「やめろ馬鹿ども!何しやがるんだ!」

クリスが二人を引くはがすと同時にギアが解除され、雷と響は制服姿、翼はそれにライダージャケットを羽織り、クリスは赤い服に戻る。雷の包帯だらけの姿にクリスはギョツとするが事故にでもあったのだろうかと解釈する。

「勝てたのはクリスちゃんのおかげだよ!」

「もつと勝利を分かち合おうよ!」

再び二人がクリスに抱き着き、そんな状況を翼は微笑ましそうに見つめる。

「だからやめろと言ってるだろうが!いいか?!お前たちの仲間になっ

た覚えはない！あたしはただフィーネと決着をつけて、やっと見つけた本当の夢を果たしたいだけだ！」

「夢?!クリスマスちゃんの?!どんな夢?!聞かせてよ〜！」

三度響が抱き着く。今度は流石に学習したのか雷は抱き着いていない。

「うるさい馬鹿！こいつは学習したつてのに！お前本当の馬鹿！」

じゃれ合っていると、響の通信機が鳴り始めた。

「はい」

相手は未来だった。

『響?!雷もそこにいるの?!学校が！リディアンがノイズに襲われッ』  
通話が強制的に切断される。雷と響の帰る場所が、襲われた。

## 大人と親友の戦い

無数の大型ノイズガリディアンを強襲する。自衛隊も携行火器や戦車で迎え撃つが相手はノイズ、効くようなそぶりも見せずに逆に戦車を破壊し、小型ノイズを生み出して蹂躪していく。雷や響の言う通りに未来は二課の関係者として一般生徒の避難誘導を手伝っている。「落ち着いてー！シエルターに避難してくださいー！落ち着いてね……」

「ひなー！」

「みんなー！」

創世と詩織、弓美の何時もの三人組が未来に声をかける。全員無事だったようだ。その表情に不安の色が見える。

「どうなってるわけ?!学校が襲われるなんてアニメじゃないんだからさあ……」

「みんなも早く非難をー！」

自分も不安がいっぱいだが避難誘導を手伝っている手前、表には出さずに胸の中にしまい込む。

「小日向さんも一緒にー！」

「先に行つて。私、ほかに人がいないか見てくるー！」

「ひなー！」

詩織の提案を振り切つて自分の、雷と響の帰る場所を守る戦いを続ける。創世に呼び止められるが、それを振り切つて走っていく。

「君たちー！急いでシエルターに向かってくださいー！校舎内にも、ノイズがツ?!」

三人に声をかけた自衛隊員が天井を突き破つて侵入したノイズの攻撃を受け、目の前で分解されていく。目の前で起きた出来事に耐えきれなくなった弓美の絶叫が、校舎内に響き渡った。

○○○

三人と別れた未来は、廊下を走りながら取り残された人がいないか声を発し続けている。

「誰かー！残っている人はいませんかあー！きゃッ！」

少し離れたところで爆発が起き、地響きが発生する。かつてのり

ディアンは見る影もなくノイズの大群に破壊しつくされていた。

「学校が……！二人の帰ってくるところが……！」

ガラス窓を破壊して三体の小型ノイズが校内に侵入する。未来は恐怖のあまり足を動かすことが出来ずにノイズの攻撃を受けてしまっているが、間一髪で飛び込んできた緒川に押し倒されて避けることに成功する。

「緒川さん?!」

「ギリギリでした。次、うまくやれる自信はないですよ。……走ります！」

「うええええ?!」

ノイズが手足をはやして立ち上がるのを確認すると、緒川は未来の手を取って走り出す。ノイズに追いつかれたら一卷の終わりだ。

「三十六計逃げるにしかずと言います！」

二課へと続くエレベーターへと飛び込むが、扉を突き破って内側へと侵入する。しかし、もう少しで未来にノイズが触れようとしたところでエレベーターが動き出し、何とか逃げ延びることに成功する。未来は自分の命があることにほっと一息を突いた。緒川が通信機で弦十郎に連絡を取る。

「はい！ディアンへの破壊は依然拡大中です！ですが、未来さん達のおかげで被害は最小限で抑えられています。これから未来さんを、シェルターまで案内します」

「分かった、気をつけろよ」

『それよりも指令！』

「ん？」

『カ・ディンギルの正体が判明しました！』

「なんだと?!」

『物証はありません！ですが、カ・ディンギルとは恐らく……?!』

通信機越しに同乗している未来の叫び声とエレベーターが破壊される音が聞こえてくる。

「どうした?!緒川！」

二人は今、金色に染まったネフシユタンの鎧をまとった女、フィー

ネに強襲されていた。フィーネの右手が緒川の首を絞めつける。

「こும்早く悟られるとは、轟とかいう娘がきつかけか？」

「?!」

家族のように親しい彼女の名前が出てきたことに未来は肩を震わせる。

「……雷さんは言っていました。天を仰ぐほどの高い塔を誰にも見つからずに建造するには地下に作るしかない。その言葉をヒントに調査した結果、そんなことが行われているのは特異災害対策起動部、そのエレベーターシャフトこそがカ・ディングル……!そして、それを可能とするのは……!」

「やはりあの小娘か……。フツ、親が親なら子も子だな、よくもまあワタシを出し抜いてくる……」

エレベーターの扉が開くと同時に緒川がフィーネの拘束を振り切り、反転しながら拳銃を三発、心臓のある左胸に打ち込む。が、弾は貫くどころか表面で受け止められ、先につぶれた弾が音を立てて床に転がる。

「ネフシユタン……!」

フィーネの指の動きと共に鞭がしなり、緒川を締め上げて彼の体をたやすく持ち上げる。

「うぐあああッ!」

「緒川さんっ!」

「未来さんッ……!逃げ、てッ……!」

未来はなけなしの勇気でフィーネに体当たりをするが、体を揺らしただけでダメージは入っていない。逆にフィーネの注意を引いてしまった。未来の顎にフィーネが手を添える。

「麗しいなあ。お前たちを利用してきたものを守ろうというのか」

「利用……?!」

「何故、二課本部がリディアン地下にあるのか。聖遺物に関する歌や音楽のデータを、お前たち被験者から集めていたのだ。その点、風鳴翼という偶像是生徒を集めるのによく役立ったよ」

初めて明かされた事実未来は身動きが取れず、フィーネは笑いな

がら離れていく。未来が意を決して叫んだ。

「嘘をついても！本当のことが言えなくても！誰かの命を守るために、自分の命を危険にさらしている人がいます！私は、そんな人を……。そんな人たちを信じてる！」

「チッ！」

フィーネが未来の頬を叩き、よろけたところをさらに襟首をつかんで持ち上げ、さらにもう一発叩く。床に倒れた未来を見下ろしながら吐き捨てる様に言う。

「まるで興が冷めるッ！」

そのままフィーネはゆっくりとデュランダルのもとへと向かう。了子の持つ通信機でドアのロックを解除しようとするが、後ろから緒川の放った弾丸がそれを破壊する。

「デュランダルのもとへは、行かせません！この命に代えてもですッ！」

拳銃を投げ捨てて構えを取り、それをフィーネが煩わしそうに見、鞭をならせる。

「待ちな、了子」

どこからか声が聞こえてきた。すると突然、天井を突き破って声の主、弦十郎が降ってきた。フィーネが不敵に笑う。

「ワタシをまだ、その名で呼ぶか……」

煙の中から弦十郎が立ち上がり、構える。

「女に手を上げるのは気が引けるが。二人に手を出せば、お前をぶっ倒す！」

「指令……」

フィーネに相対したまま、弦十郎が口を開いた。

「調査部だって無能じゃあない。米政府の……丁寧な道案内で、お前の行動にはとっくに行きついてた。あとはいぶりだすため、あえてお前の策に乗り、シンフォギア装者を全員動かして見せたのさ！」

「陽動に陽動をぶつけたか……食えない男だ。だが、このワタシを止められるとでも?!」

「おおともーひと汗かいた後で、話を聞かせてもらおうかあ！」



弦十郎は一步目を踏み出し、フィーネは鞭で迎撃する。それをたやすく避けると、もう一本の鞭を弦十郎に向けて放つがそれを跳躍して回避し、天井にある梁を掴んで軌道を変え、拳を振りぬく。それを避けたフィーネだったが、弦十郎の拳は拳圧だけでネフシユタンにひびを入れる。

「何ッ?!」

ネフシユタンは問題なく再生するが、フィーネにいら立ちが募る。  
「肉をそいでくれるッ!」

二本の鞭を勢いよく放つが弦十郎は逆にそれを掴み、引つ張る。あまりの力にフィーネの体が引き寄せられ、弦十郎は彼女の鳩尾に渾身の力でアツパーを叩きこんだ。フィーネが床に落下する。

「完全聖遺物を退ける……。どういふことだッ?!」

「知らないでか! 飯食って映画見て寝る! 男の鍛錬は、そいつで十分よお!」

「なれど人の身である限りはあッ!」

「させるかあッ!」

ノイズを操るソロモンの杖を構える。が、それを許す弦十郎ではない。床を踏み碎いた衝撃で浮き上がった破片をフィーネの手に蹴り込み、その衝撃で杖が天井に突き刺さる。

フィーネの視線がソロモンの杖に向いた隙に弦十郎が殴りかかる。

「ノイズさえ出てこないのならあッ!」

「弦十郎君!」

「ッ?!」

情に訴えかけるフィーネの行動にひるんでしまい、その隙を突かれ、鞭が弦十郎の体を貫く。

「指令……」

倒れた弦十郎のポケットから通信機を取り出す。

「抗うも、覆せないのが定めなのだ」

突き刺さった杖を鞭で回収し、弦十郎に向ける。

「殺しはしない。お前たちにそのような救済など施すものか」

遂にドアのロックを解除し、フィーネがデュランダルのもとへと

至った。未来と緒川が弦十郎のもとへと駆けよる。

「指令！指令！！」

デュランダルの目の前でフィーネはキーボードを投影し、それを手にするべく操作する。

「目覚めよ天を突く魔刀。彼方から此方まで現れいでよ！」

デュランダルの輝きが増していく。

最後の戦いが始まろうとしていた……。

## 殺意の化身

ノイズの群れを相手取る装者三人の状況をモニタリングしている指令室に、腹を貫かれて項垂れた弦十郎の肩を支えながら未来と緒川がやってくる。友里が真っ先に気づいた。

「指令?!」

「応急処置をお願いしますー!」

弦十郎をソファーに寝かせ、包帯で患部を止血していく。応急処置を進める友里の代わりに緒川がオペレーターの任につく。

「本部内に侵入者です。狙いはデュランダル! 敵の正体は……櫻井了子!」

「なっ?!」

「そんな……」

指令室が驚きの色に染まる。組織の根幹にいた人物が敵だったのだ、その驚きも当然だろう。となりに立つ未来に声をかける。

「響さん達に回線をつなげました!」

未来が一步前に進む。

「響、雷! 学校が! リディアンがノイズに襲われてるの! ……へ?!」  
急に通信が切断される。

「なんだ?!」

「本部内からのハッキングです!」

「こちらからの操作を受け付けません!」

「こんなこと、了子さんしか……」

必死にブロックを掛けていくがそれを上回る速度で侵入されていく。その現実が、相手が了子であることを叩きつけていく。

「響、雷……」

未来の声が小さく響いた。

しばらくして、停電した指令室で弦十郎が目を覚ます。

「指令……」

「状況は」

友里の表情は暗い。

「本部機能のほとんどは制御を受け付けません。地上及び地下施設内の様子も不明です」

「そうか……」

○○○

赤い満月の下、自らの足で学校に戻ってきた雷と響、翼にクリスの四人はリディアンの惨状に息をのむ。

「未来……」

「未来——みんな——」

返事が返ってこず、響は膝から崩れ落ち、雷は呆然と立ち尽くしている。翼が言葉をこぼした。

「リディアンが……。あつ?!」

翼が人の気配を感じて上を見上げると、壊れた校舎の上に了子が立っていた。

「櫻井女史?!」

クリスが声を荒げる。

「フィーネ！お前の仕業かあ！」

「フフフ、フハハハ！」

その声に了子が高笑いをし、雷が意識を取り戻す。

「フィーネ?!やっぱり、了さんがフィーネだったのね……」

翼が問いたです。

「そうなのか?!その笑いが答えなのか?!櫻井女史！」

「アイツこそ、あたしが決着をつけなきゃいけないくそつたれ！」

「フィーネだ！」

了子が眼鏡を取って髪をほどいた瞬間、体中を青白い光が包み込み、その中からネフシユタンを纏ったフィーネが姿を現す。

「嘘……。嘘ですよね?そんなの嘘ですよ?!だつて了子さん、私を守ってくれました」

「あれはデュランダルを守っただけの事。希少な完全状態の聖遺物だからね」

「?!」

雷はフィーネの言葉はそれだけではないことを読み取るが、それが

何なのかが理解できない。

「嘘ですよ。了さんがファイネというのなら、じゃあ、本当の了子さんとは？」

「櫻井了子の肉体は、先だって食い尽くされた。いや、意識は十二年前に死んだと言っている。超先史文明期の巫女、ファイネは遺伝子におのが意識を刻印し、自身の血を引くものがアウフヴァツヘン波形と接触した際、その身にファイネとしての記憶、能力を再起動する仕組みを施していたのだ。十二年前、風鳴翼が偶然引き起こした天羽々斬の覚醒は、偶然立ち会った櫻井了子のうちに眠る意識を目覚めさせた。その目覚めし意識こそが、私なのだ」

「あなたが、了さんを塗りつぶして……」

「まるで、過去から蘇る亡霊！」

翼の言葉に笑いで答えながら、さらに続ける。

「ファイネとして覚醒したのは私一人ではない。歴史に記される偉人、英雄、世界中に散った私たちは、パラダイムシフトと呼ばれる、技術の大きな転換期にいつも立ち会ってきた」

「シンフォギアシステム……！」

「それが、櫻井理論！」

該当するものに思い至った雷と翼は声を上げる。が、即座にファイネによって否定される。

「そのような玩具。為政者からコストをねん出するための副次品に過ぎない」

「お前の戯れに、奏は命を散らせたのか！」

「あたしを拾ったり、アメリカの連中とつるんでいたのも、そいつが理由かよ！」

「そう！すべてはカ・ディンギルのため！」

ファイネがそう宣言すると同時に両手を広げた瞬間、地響きが発生する。そして、二課のエレベーターシャフトがあると思われる位置から様々な色や文様で彩られた塔が地面を貫いて伸びてくる。まさにそれは、天へと届かんばかりの高さだった。ファイネは満足げな表情になる。

「これこそが！地より屹立し、天へと届く一撃を放つ過電粒子砲『カ・デインギル』！」

雷が息をのむ。

「まさか、塔じゃなくて大砲だったなんて……」

「こいつで、バラバラになった世界が一つになると?！」

フィーネは赤い月を見上げて口を開く。

「ああ……。今宵の月を穿つことよってな！」

「月を?！」

「穿つと言ったのか?！」

「なんでだ！」

「月は古来より不和をつかさどっている……。それと関係があるのか?！」

四人の声が聞こえてないかのようにフィーネは一人呟く。

「ワタシはただ、あのお方と並びたかった。その為に、あのお方へと届く塔を建てようとした。だがあのお方は、人の身が同じ高みにあることを許しはしなかった……。あのお方の怒りを買って、雷霆に塔が砕かれたばかりか、人類はかわす言葉まで砕かれ、果てしなき罰。バラルの呪詛をかけられてしまったのだ」

そこでフィーネは雷を指さした。

「そんな小娘が言ったように何故月が不和の象徴と伝えられてきたか、それは！月こそがバラルの呪詛の源だからだッ！人類の相互理解を妨げるこの呪いを！月を破棄することで解いてくれる！そして再び、世界を一つに束ねるッ！」

フィーネが月に向かって伸ばした手を握りつぶすかのように動いた瞬間、カ・デインギルがうなりを上げる。

「呪いを解く?それは、お前が世界を支配するってことなのか?!安い！安さが爆発しすぎてる！」

クリスの言葉に怒りを含めた笑みを浮かべ、雷のほうを向く。

「永遠を生きるワタシが余人に歩みを止められることなどありえない……。ごく一部を除いてな。そうだろう?轟の娘」

「私?」

急に言葉を突きつけられた雷の頭が混乱する。構わずにフィーネが言葉を続ける。

「フィーネとして覚醒した後、ワタシは塔を破壊した雷霆と同じ意味を持つケラウノスから手を付けた。当然、シンフォギアシステムを隠れ蓑にしたものだが、ワタシの展開した櫻井理論では完成させることが出来ず、半ばというところで政府に取り上げられ、天羽々斬の開発へと移行させられた……。どうせワタシ以外に聖遺物の解析など不可能、そう高をくくっていた。だがッ……！」

フィーネの表情が険しくなる。

「お前の両親、轟両博士が展開した理論、轟理論で研究を成功させた！私ですら不可能だったことをだ、今でこそギアの開発はワタシの理論がメインだが、ワタシはただの人間ごときに負けたのだ！ワタシはケラウノスとその適合者、ワタシを出し抜いた轟理論のデータを奪い、自らのものにしようとした。しかしッ！奴らはワタシが何か嗅ぎまわっていたのかを知っていたのか、全てのデータを復旧不可能なレベルまで破壊していたのだ！」

雷には理解できない。

「当然ワタシは追いかけた。唯一残された手掛かりは日本に住んでいることだけ、何とか探し回り遂に見つけ出した。轟両博士とその息子をな。私は息子を奴らの目の前で斃り殺し、吐かせようとした」

「へ……？ 斃り……殺した……？ 出海を？」

「ッ！雷、しつかりして！」

「耳を貸すな轟！」

雷の瞳から光が抜け落ち、彼女を正気に戻させようと響が体をゆすり、翼が話を遮るが一向に効果がない。そんな雷を視界に入れつつ話を続ける。

「最終的に両博士を交互に斃っていったが結局吐かずじまい、ケラウノスと轟理論は紛失した。しかし、私も見捨てられてはいなかった、なにせ二か月前に紛失したと思っていたケラウノスが適合者を連れて私の手元に帰ってきたのだからなあ！だがそれは、ワタシが三度出し抜かれたことを意味する。ワタシは奴らにケラウノスを奪われ、そ

のデータを破壊され、そして絶対に奪われないタイミングで襲わせたのだ！」

雷の体がガタガタと震える。

「私の家族は……自殺じゃなくて、殺された？あなたに？」

「そうだと。当然自殺に見せかけたが、ワタシが殺したのだ」

フィーネは言う。これがもし、自らの両親がフィーネの立場で、それを彼女が止めたならば納得は出来ずとも理解はできる。しかし、そうではない。フィーネは自らの欲望、願いのために雷の家族を惨殺したのだ。そればかりか、自分の人生すら滅茶苦茶にされた事実。雷は俯き、歯を食いしばって涙を流す。

「フィーネてめえ……！」

クリスが怒る。

「まあ、余人の分際でワタシを出し抜いた「黙れ……！」……ほう？ワタシを超えて見せるか、轟の娘」

その声を発した者は雷だった。彼女は過剰なほどの殺意によって意識が朦朧としながらも俯いたままギアを起動させる。

「V o l t a t e r s   K e l a u n u s   T r o n ……！」

灰と金のシンフォギアを纏っていく。響と翼、クリスもあわててギアを纏う。そして雷はただ一言、心の中にあるすべての思いを詰め込んだ一言を言い放つ。

「殺すッ……！」

その一言と共にギアの灰色の部分が黄金に変わっていき、元々電撃発生ユニットだったところから周囲に絶唱をはるかに凌駕するフォニックゲインを持った稲妻が放出され、半径十メートル以内にあるものすべてを強大な斥力フィールドが弾き飛ばしていく。それは、ギアを纏った三人も例外ではない。

「くッ……！」

「くそつたれッ……！」

「近づけないッ！」

雷を正気に戻すために近づこうとする三人だが、前に進むどころかその場に立ち止まることすらできない。



「素晴らしいッ……！・忌々しい轟理論によつて構築されしケラウノスだけが持つ決戦機能ッ！」

不敵に笑うフィーネだが内心は違う。発動時の余波だけでコレなのだ、もしも真正面から激突したとして、ネフシユタンの再生能力を凌駕されてしまう可能性もある。まったくもつて未知の力なのだ。

『雷帝顕現』

全てを破壊しつくす稲妻を操る『殺意の化身』が、ここに顕現した。

蹂躪、それは無慈悲にも・・・

余剰分の稲妻を放出し終えたユニットが格納され、周囲を覆っていた斥力フィールドが解除される。発生し続ける熱がギアの防御力を超え、雷の体を蝕んでいく。その証拠に体からは煙が上がっていた。

雷は歌う。今までのようなトランス系ではなく、全てを破壊しつくすような賛美歌を。近づけるようになったおかげで響は雷に大急ぎで駆け寄る。

「雷落ち着いて！ 私たちも一緒に戦う！ だから……ッ?!」

「消えた?!」

「どこに行きやがった?!」

空間すらも粉碎するかのような轟音と共に雷の姿が消失する。その瞬間、フィーネは左胸、心臓に当たる位置に違和感を覚える。気になって自分の胸を見ると、背中から腕が貫通していた。

「はっ..」

気付いたのもつかの間、その腕を中心に斥力フィールドが展開され、内側から体を引き裂かれてバラバラに吹き飛ばされる。この間、約一秒。いや、一秒もたっていないかもしれない。それを実行したのは他でもない、雷だ。ネフシユタンの力で雷から最も遠い部分を中心に再生し、鞭を渾身の力で放つ。が、すでに雷はそこにおらず、既にフィーネの顔面を鷲掴みにしていた。

「なッ?!」

落雷を思わせるほどの速度で二メートルにも満たない高さから地面に叩きつけられ、あまりの衝撃に頭蓋が砕け散り、脳漿がぶちまけられる。ネフシユタンはこれも問題なく再生する。発動から今まで約五秒。既にコレは戦闘でも、殺し合いでもない。蹂躪だった。響と翼、クリスはこの惨劇を呆然と見ることにしか出来ない。

「自爆覚悟ならッ..」

『NIRVANA GEDON』

ゼロ距離で放った再生すること前提のフィーネ渾身の一撃は両者の間で炸裂する。フィーネが再生した時、そこにいたのは全身を覆う

斥力フィールドによって守られ、さつきまでと変わらず無傷の雷だった。彼女は何でもないとようにフィーネの首に手を伸ばし、そのままへし折ると近くにあった手ごろな瓦礫に投げつける。まだ一分もたっていない。

「三分間、三分さえ耐えきればいいのだッ！」

『ASGARD』

フィーネは自分を奮い立たせ、雷との間に五層の壁を鞭で構築する。しかし、雷は『天槍霹靂』のような稲妻の槍を作り出し、たった一発ですべて粉碎する。

「ッ！」

バラバラになって離脱することや時折抵抗されるのが面倒になったのだろう。腕を軽く振って『超電磁トルネード』と同じ、しかしソレをはるかに上回るような竜巻を発生させ、フィーネを拘束する。

「くッ！まさかこれほどの力とは……！」

それからは暴力的な磁場にとらわれたまま、その場で一方的に攻撃され続ける。その攻撃は全て、人体の急所と呼べる部分に集中していた。そして三分が経し、ついにネフシユタンの再生能力を超えることが出来なかった。強制的にギアが解除される。

「耐えた……！この瞬間を待っていた！」

倒れ込む雷の首をフィーネが鞭を伸ばし、締め上げながら引き寄せる。既に彼女の意識はない。ネフシユタンの再生能力を超えることこそできなかったが、破壊個所の再生が追いついておらず、未だに破壊している所がある状態だ。

「何をやる気だ！」

「その手を放しやがれ！」

一方的な蹂躪から現実に戻された翼とクリスは、フィーネから雷を取り返そうと攻撃をかける。が、フィーネはそれをもう片方の鞭でいなしていく。そして雷の首からペンダントに戻ったケラウノスを引きちぎる。

「フハハハハ！ついに手に入れた……！忌々しき理論で形作られたケラウノスを……！ずいぶんとやってくれたな、お前にもう用はない」

何故か一瞬残念そうな顔をした後、生身の彼女の腹部に蹴りを叩きこんだ。当然、内臓などが破裂する。雷の体はカ・ディングルに向かって吹き飛んでいった。

「ッ……?!」

響が声にならない叫びをあげる。その様子は、すでにモニタリングされていた。

〇〇〇

未来を含む二課のメンバーは何とか本部にアクセスできる回線を発見し、すでにそこにいた創世と詩織、弓美の三人組に二課の事を話している間に藤堯が接続する。装者の、特に雷の状態を見て叫んだ。

「轟雷！雷臨状態への変化を確認！」

「なんだとお?!」

雷臨状態は圧倒的な戦闘力を得ると引き換えに三分しか使えず、もしもそれまでに敵を倒せなければどうなるかは想像に難くない。

未来が雷の行動を見て弦十郎に聞いたです。

「雷がどうしてこんな！雷はこんなことが出来る子じゃ……」

「俺だってわかってている……。雷君のこの状態は雷臨状態と呼称され、負の感情が極限まで高まった時に発生すると考えられている。恐怖であれば彼女に恐怖を与えるものを攻撃する」

「雷臨……状態……」

未来にとっては初めて聞く言葉だ。

「この戦い方を見るに、おそらくは殺意だろう。雷君の両親、轟両博士と何か変わりがあるというのだろうか……ッ?!不味い！」

「へ?」

雷臨状態が解除され、フィーネによって拘束されている雷がモニターされていた。ケラウノスが奪われ、生身の腹部に蹴りが叩きこまれる。藤堯が雷のバイタルが表示された画面へと移す。そこには『内臓破裂、早急に手当しなければショック症状により死亡する可能性大』と表示される。

それを見て、未来が叫んだ。

「いやああああッ！」

未来の叫びを天は聞きとどけることなく、バイタルの文字が無慈悲にも更新される。そこにはこのように表示されていた。

『失血性ショックによる多臓器不全、および心肺の停止により死亡』と……。

## 雪の夢、翼の思い

翼とクリスの二人がフィーネと交戦を開始する。響は雷の『雷帝顕現』による変わりようと、目の前で起きた出来事を受け入れることが出来ずにギアを纏ったまま項垂れていた。

「はあああッー！」

翼の剣と剣のように硬質化させたフィーネの鞭が火花を散らす。フィーネの右手には雷から奪い取ったケラウノスのペンダントが収まっている。罅迫り合いを行っていた二人だが、剣のように固くなっていたフィーネの鞭が鞭としてのしなやかさでもって翼の剣を絡めとり、その手から弾き飛ばす。

「なッ?!」

横薙ぎに払われる鞭をバク転で回避し、脚部のブレードを展開しながら逆立ちの体勢のまま、コマのような高速回転による連撃をフィーネに浴びせかかる。しかし、それに合わせてフィーネは手に持つ鞭を回転させることでいなす。

「ッ?!」

突然、フィーネがバランスを崩した。雷との戦闘で負った怪我や損傷がまだ回復しきっておらず、翼の攻撃によってかかった過剰な負荷が招いたのだ。その隙を逃すクリスではない。

「本命は、コッチだあ！」

背部装甲が変形した二機の大型ミサイルの内の一発をフィーネに向けて発射する。

「ロックオンアクティブ！スナイプ！」

精密追尾機能を付与されたミサイルが空中を動き回るフィーネを追いかけていく。その隙をついてもう一発のミサイルをカ・ディングルに向けて発射した。

「アストロイイイ！」

「させるかああ！」

直撃寸前のところでフィーネの鞭がミサイルを切断する。が、カ・ディングルに狙いをつけていたミサイルに気を取られ、最初に発射さ

れたミサイルを見失ってしまう。

「もう一発は?!……ハッ?!」

発見したソレは既にカ・ディンギルのはるか上空へと飛翔していた。クリスと共に……。思わずうつろな表情のまま、響が空を見上げる。

「く、クリス、ちゃん……?」

「何のつもりだ?!」

「くっ!だが!あがいたところで所詮は玩具!カ・ディンギルの発射を止めることなどっ!」

カ・ディンギルの砲身がターゲットである月を捉えたその瞬間、はるか上空、天と見まごう高さから歌が聞こえてくる。クリスが絶唱を発動したのだ。

「ハッ?!」

「この歌……まさか?!」

「絶唱……」

ミサイルから飛び下りたクリスは月に背中を預け、腰部ユニットからリフレクターを展開し、手に持つ二丁の拳銃からビームを発射、それをリフレクターが反射し、加速していく。加速したビームがクリスを中心にまるで蝶を思わせるような形となる。絶唱を歌い終わると同時に拳銃を超大型ロングライフルへと変形し、その二つを合体させる。

地上から月を穿つカ・ディンギルの砲撃が発射され、それを迎撃するため最大まで貯めたイチイバルの一撃が衝突した。リフレクターによつて加速したビームがライフルのビームに対してジャイロ回転を与え、それによつて月を穿つ砲撃を拮抗状態へと持ち込む。

「二点収束?!押しとどめているだ?!」

フィーネの驚愕とは裏腹に、すでにイチイバルには限界が訪れようとしていた。

(あたしは、パパとママのことが……大好きだった。だから、二人の夢を引き継ぐんだ!)

リフレクターを展開している腰部装甲に入ったヒビがだんだんと

広がっていく。

(パパとママの代わりに、歌で平和を掴んで見せる)

遂に拮抗状態が破られ、カ・ディンギルの砲撃に押し負け始める。

(あたしの歌は、そのために……!)

クリスを膨大な光が飲み込む。彼女の脳裏には、在りし日の両親と手をつなぐ自分の姿があった。

月へと放たれた砲撃はクリスによってコースをそらされ、破壊には至らなかった。フィーネが叫ぶ。

「し損ねたツ?! わずかに逸らされたのか?!」

「雪音……」

クリスの体が天から落ち、森の中へと落下する。大切な親友の雷に加え、通じ合えると信じていたクリスを失ってしまった響は再び、声にならない叫びをあげた。

「ツアアアアア!」

そして叫びは、涙へと変わる。

「そんな……ずつと一緒だと思つてたのに……せつかく仲良くなれたのに……。こんなの……嫌だ……。嘘だよ……」

地面を手で握りしめ、肩を震わせる。心臓が強く脈打つ。

「もつとたくさん話したかつた……。話さないとケンカすることも、今よりもつと仲良くなることも出来ないんだよお……!」

さらに心臓が強く脈打つ。涙が地面を濡らしていく。

「クリスちゃん……。夢があるって、でも……。私クリスちゃんの夢聞けてないままだよ……」

砲撃を防がれたにもかかわらず、ケラウノスをうつとりと見つめながらフィーネが口を開いた。

「自分を殺して月への直撃を阻止したか……。ハッ! 無駄なことを「ツ!」

「見た夢もかなえられないとは、とんだ愚図だなあ……。そこに転がっているのもだ。怒りのあまりに我を忘れて獣に成り下がるとは、心底失望したぞ」

響の体が怒りのあまり漆黒へと染まっていく。だんだんと心臓の



鼓動が強くなる。

「笑ったか？命を燃やして、大切なものを守り抜くことを！家族の仇を打つことを！お前は無駄と、せせら笑ったか?!」

翼は剣をフィーネに突きつける。

「それが……!」

突然の気配に翼は目を見開く。

「ユメごとイノちヲ……かゾクを……ニギリつぶシタヤツノいうことかああ!」

響が怒りにのまれて暴走を始め、フィーネは余裕の笑みを浮かべた。

「立花……?!おい!立花!」

翼の声は響に届かない。

「融合した GANG ニールのかけらが暴走しているのだ。制御できない力に、やがて意識が塗り固められていく」

翼の脳裏に胸の GANG ニールについて響に説明した了子の姿が蘇る。

「まさかお前。立花を使って実験を……?」

「実験を行っていたのは立花だけではない。見てみたいとは思わんかあ? GANG ニールに翻弄されて、人としての機能が損なわれていく様を……」

「お前はそのつもりで立花を!奏を!」

響がフィーネに向かって跳躍する。

「立花ッ!」

響の攻撃をその場から動くことなく、鞭でたやすくさばっていく。そんな響をフィーネが嘲笑する。

「もはや人にあらず。もはや人の形をした破壊衝動。……だが、轟の雷臨のほうが強力とは……面白みのない」

響の跳び蹴りに対して防御姿勢すら入れずに受け、体の三分の一が引き裂かれるが、復旧したネフシユタンによる再生機能が元通りに再生させる。

翼が叫ぶ。

「もうよせ立花！これ以上は、聖遺物との融合を促進するだけだッ！」  
その声に反応して響が翼にとびかかるが、それを肘打ちでカウンターすること防ぐ。翼の悲痛な声が響く。

「立花ア！」

○○○

「どうしちゃったの響！元に戻って！」

雷の死を何とか無理やり受け入れた未来がモニター越しに叫ぶ。その横で弓美がつぶやいた。

「もう終わりだよ……あたし達……」

「え?!」

「学院がめっちゃめっちゃになって、雷が死んじゃって、響もおかしくなっ  
て」

「終わりじゃない！響だつて、私たちを守るため……」

「あれが私達を守る姿なの?!」

未来が励まそうとするが弓美が叫ぶ。モニターには口元に血の跡を残したままカ・ディングルにもたれて座っている雷と、漆黒に染まり、暴走した響が写っていた。

創世と詩織が不安がる中、未来が不安を隠して毅然と言い放つ。

「私は響を信じる。雷もそう信じることを信じてるはずだから」

弓美の目からはとめどなく涙が流れ出る。

「私だつて響を信じたいよ……。この状況を何とかなるって信じたい  
……。でも……。でも！」

不安と恐怖のあまり弓美は膝から崩れ落ちてしまう。

「もう、嫌だよお……。誰か何とかしてよお……。怖いよお！死にた  
くないよお！助けてよ……。響い！」

○○○

暴走した響との戦闘によるダメージでギアが碎けていく。既に肩で息をしている状態の翼に対して、響は融合によって体力に底がないのかいまだに余裕そうだ。

「どうだ？立花響と刃を交えた感想は？お前の望みであつたなあ。」

カ・ディングルに再度エネルギーがチャージされ、輝きを帯び始め

る。

「まさか?!」

「そう驚くな。カ・デインギルがいかにも最強最大の兵器だとしても、只の一撃で終わってしまうのであれば兵器として欠陥品。必要がある限り何発でも打ち放てる。そのために、エネルギー炉心には不滅の刃デュランダルを取り付けてある。それは尽きることのない無限の心臓なのだ」

「だが、お前を倒せばカ・デインギルを動かすものはいなくなる!」

フィーネが目を閉じ、露骨に白惚れているのを翼が遮った。響が唸り声を上げながら立ち上がる。

「立花……」

翼は刃をフィーネに向けたまま静かに目を閉じ、しばし考えてから目を開けて響に語り掛ける。カ・デインギルのエネルギーは限界まで高まっていた。

「立花……。私はカ・デインギルを止める。だから……」

翼の言葉に耳を貸さずに響が跳びかかる。右腕のバンカーを起動させ、それを使って殴りぬくつもりだ。

翼は剣を地面へと突き刺し、響の攻撃を真正面から受け入れる。ギアの一部が粉碎され、血が飛び散っていく。そして、響を逃がすまいと両の腕で抱きしめた。自らを攻撃した手を掴んで優しく語り掛ける。

「コレは、束ねてつなげる力のはずだろ?」

左足のバインダーから小刀が射出され、それを受け止めると響の影に投げ、突き刺した。

『影縫い』

影を縫い付けられた響の動きが止まり、その横を翼が歩きながら語り掛ける。その声色には悲しさがあつた。

「立花……。奏から継いだ力を、そんな風に使わないでくれ……」

響が静かに涙を流す。

覚悟を決めた翼は正面を睨みつけると、確かな足取りで前へと歩を進める。

「待たせたな」

「何処までも剣ということか」

鞭が戦闘態勢をとり、翼は『天羽々斬』を握りしめる。

「今日日、折れて死んでも。明日に人として歌うために！風鳴翼が歌うのは、戦場ばかりでないと知れ！」

「人の世界が剣を受け入れることなど！ありはしない！」

意思を持つかのようになごめく二本の鞭が翼へと襲い掛かる。それを跳躍して回避すると、脚部ブレードを展開して追撃してくる鞭を弾き飛ばし、手に持つ剣を大剣へと変形させる。蒼のエネルギーを纏った斬撃をフィーネに放つ。

『蒼ノ一閃』

フィーネの鞭がその一閃を真正面から粉碎し、爆発。それを目くらましに着地し、フィーネが放った二本の鞭、ソレの弱点たる間隙へと身を躍らせて一気に間合いを詰めにかかる。渾身の斬撃がフィーネに直撃し、カ・デインギルの外装に吹き飛ばす。勝機と掴んだ翼は大剣を元の剣に戻し、跳躍後にフィーネに向けて投擲、さらに巨大な剣へと姿を変え、翼の持つ技の中で最大の威力の一撃をかける。

『天ノ逆鱗』

フィーネはすぐさま三層の防壁を展開して攻撃を防ごうとする。しかし、それは悪手だった。防壁と巨大な剣を足場に翼は二本の剣を手にとって炎を纏って翼のごとく跳躍する。

『炎鳥極翔斬』

「初めから狙いはカ・デインギルかッ！」

フィーネの鞭が翼に襲い掛かる。何とか振り切ろうとするが鞭のほうが速く、直撃を喰らってしまう。そこで翼は、奏と再会した。

『翼。あたしとアンタ、両翼そろったツヴァイウイングなら、どこまでも遠くへ飛んでいける』

奏が差し出してくれた手を、翼は握り返す。

(そう。両翼そろったツヴァイウイングなら！)

再び炎を纏い、カ・デインギルのフレームを足場に跳躍する。口元に笑みを浮かべながら……。

(どんなものでも、超えて見せる！)

赤い炎は蒼い炎へと変化し、さらに火の鳥へと姿を変える。ファイ  
ネの追撃を振りぬき、回避し、何度攻撃を喰らっても飛翔し続ける。  
翼が叫んだ。

「立花アアアッ！」

その叫びと共に周囲一帯が光に包まれる。

遂に翼はカ・デインギルの破壊に成功した。

## 友情が生んだ奇跡

三人の散り際をモニタリングすることしか出来なかった二課のメンバーは自らの無力さに震えている。

「天羽々切、反応途絶……」

藤堯の声は震え、弦十郎は拳を握りしめる。友里はモニターから目を背け、声を殺して涙を流していた。

「身命を賭してカ・ディングルを破壊したか翼……！お前の歌！世界に届いたぞ……！世界を守り切ったぞ……！」

一層強く量の拳を握りしめ、その力のあまり腕が振るえる。そんな惨状を見て、弓美がフラフラと後ずさって叫ぶ。

それは平穩を、只変わらぬ日常を営んできた少女の思いのたけだった。そんな彼女には今起きていることは異常すぎた。

「分かんないよ……。どうしてみんな戦うの?!痛い思いして!怖い思いして!死ぬために戦ってるの?!」

「分かんないの?!」

同じく非日常に巻き込まれ、しかもその渦中に親友がいる未来が涙を流しながら力強く遮った。弓美の肩を掴んで正面から彼女の顔を見つめる。

「分からないの……?」

未来に諭され、弓美は大声で泣き叫んだ。

弓美が何とか落ち着きを取り戻した直後に複数の足音と呼吸する音が通路の中を反響する。出入り口のほうを見ると、無事な避難者を連れた緒川が立っていた。

「指令！周辺区画のシェルターにて、生存者、発見しました」

「そうか！よかった……！」

小さいがようやく入ってきた朗報に弦十郎は安堵する。地上はあんな惨状なのだ、生存者がいただけでも幸運だろう。その生存者たちの中にいた二人の女の子がモニターを見て声を上げた。

「あ！ママ！かっこいいお姉ちゃんだ！」

「包帯のお姉ちゃんもいる！」

母親の制止を振り切って子供特有の無邪気さでモニターのもとへと駆けよる。

「すいません……」

「ビツキーとライライのこと、知ってるんですか？」

母親同士の声が重なる。創世が「お姉ちゃん」を差すであろう友達のことを聞く。母親二人は以前の情報制限のために発言可能な部分を反芻してから話し始める。

「詳しくは言えませんが、うちの子はあの子に助けをいただいたんです」

「うちの子もなんです」

「へ？」

「自分の危険を顧みず、助けをいただいたんです。きっと、ほかにもそういう人たちが……」

二人がどんな様子で助けたのか、容易に頭の中に浮かび上がる。響が日常的にやっている人助け、雷が見せる自分を顧みない姿勢が未来の言っていた答えとして浮かび上がる。

「かつこいいお姉ちゃん、助けられないの？」

「包帯のお姉ちゃんに元気を分けて上げたい！」

二人の女の子が眉を八の字に曲げ、未来たちのほうを向く。詩織が答えた。

「助けようと思ってもどうしようもないんです。私達には何もできないですし、雷さんは……」

その暗い声色に対し、女の子たちの顔と声は明るい。

「じゃあ一緒に応援しよ！」

「応援するとね、元気になるの！」

「ねー」

顔を合わせて笑顔で笑い合い、響に助けられた方の女の子が藤堯に聞く。

「ねえー……ここから話しかけないの？」

「出来ないんだよ……」

プロの力でもってして映像を持ってくることしか出来なかったの

だ、音声を送るのは不可能と言えた。しかし、未来が新たな発想に目を見開き、打開策を弦十郎から聞き出す。

「ここから響に、私達の声を、無事を知らせるにはどうすればいいんですか?! 響を助けたいんです!」

「助ける?」

藤堯が提案した。子供の発想力に掛けたのだ。

「学校の施設がまだ生きていれば、リンクして、ここから声を送れるかもしれません」

そして緒川の案内のもと、響を助けたいという思いを胸に少女たちが行動を起こした。

「この奥に切り替えレバーが?」

「こちらから動力を送ることで、学校施設の再起動ができるかもしれません」

「でも、緒川さんだとこの隙間には……」

元々リディアンの下地に二課本部があったのだから出来ないことはないだろう、しかし接続が切られていないとは言えない。これほどまでにズタボロなのだ、可能性の低い賭けだった。しかも、頼みの大入では中に入ることが出来ない。

そんな状況に立ち往生していると、弓美が自分なりの勇気を振り絞って言った。

「あ、あたしが行くよ!」

「弓美……」

「大人じゃ無理でも、あたしならそこから入っていける。アニメだったらさ、こういう時、体のちっこいキャラの役回りだしね。それで響を助けられるなら!」

弓美の暴論ともいえる提案に未来は反対する。

「でもそれはアニメの話じゃない!」

「アニメを真に受けて何が悪い! ここでやらなきゃ、あたしアニメ以下だよ! 非実在青少年にもなれやしない! 雷に顔向けできないし! この先、響の友達だって胸を張って答えられないじゃない!」

弓美自身の思いのたけに、さつきとは打って変わって未来が安堵の



笑みを浮かべる。少なくとも自棄になったわけではなかったのだ。

「ナイス決断です。私もお手伝いしますわ」

「だね。ビツキーが頑張ってるのに、その友達が頑張らない理由はな  
いよね」

「みんな……」

ただの少女たちが、友達のために戦うことを選んだ。

中に入った四人は制御室の中でピラミッドを組み、一番軽い弓美を  
天辺にして奮闘していた。限界まで踏ん張って、何とか動力の切り替  
えに成功する。動力が生きていた。切り替えた拍子にバランスを崩  
し、四人ともつぶれたように倒れ込んでしまうが成功を喜び合う。

臨時二課では学校施設の再起動を確認し、声を届けるためのスピー  
カーが使用可能となった。

○○○

そのころ、自らの鬱憤を響にぶつけていたフィーネが遂に彼女にと  
どめを刺すべく鞭を突き立てようとしていた。その瞬間、どこからと  
もなく響には聞き覚えのある歌が聞こえてくる。それはリディアン  
の校歌だった。フィーネは苛立つ。

「耳障りな！何が聞こえている?!」

響に生きる気力がわいてくる。

「何だこれは……?!」

その歌には未来の、みんなの思いがこもっていた。『私たちは無事  
だ。だから、負けないで』と。

「何処から聞こえてくる?!この不快な、歌……歌、だと?!」

「聞こえる……みんなの声が……」

祝福するかのように朝日が昇り始める。

「よかった。私を支えてくれるみんなはいつだってそばに、みんなが  
歌ってるんだ。だから……!まだ歌える!頑張れる!戦える!」

復活した意志と共に響はギアを展開してフィーネを弾き飛ばし、立  
ち上がる。その事実フィーネは驚愕する。

「まだ戦えるだ?!何を支えに立ち上がる?!何を握って力と変える?!  
鳴り渡る不快な歌の仕業か?そうだ、お前が纏っているものはなんだ

?!心は確かに居り砕いたはず。なのに！何を纏っている?!それはワタシが作った物か?!お前が纏っているそれはなんだ?!なんなのだ……?!」

響の呼応するように森の中から赤い光が、カ・デインギルの残骸からは蒼い光が伸び、そして、ファイネが握りしめているケラウノスのペンダントが電撃を放つ。

「ッ?!」

ファイネの腕を吹き飛ばしたそれは金の粒子へと姿を変え、すでに息絶えた雷のもとへと流れていく。粒子の一部が雷の体内に侵入し、損傷した内臓と停止した心臓を復活させる。バイタルの変化は臨時二課でもしつかりとモニターされていた。

「轟雷の生命反応復活！内臓も、心臓も正常です！」

「なんだとお?!」

喜びのあまり未来が涙を流す。そして響と、復活した雷を応援するために涙を拭いて歌う。

意識を取り戻した雷はゆっくりと立ち上がり、ケラウノスが生み出した灰色と金色の光を纏って飛翔する。それは響や翼、クリスも同じだった。

XDモードになり腰には灰の、背中には金のエネルギーウイングを展開して三人と共に空を飛ぶ。その瞬間、響が心の底から叫んだ。

「シンツフオギアアアアアア!!」

絆のつながりが奇跡を生んだ。

## 勝機を掴め

XDモードへと変化し、純白のギアを纏った四人が飛翔する姿が臨時二課でも確認されていた。

「お姉ちゃんたちカツコイイ！」

「やっぱ、あたしらがついていないとダメだな！」

「助け助けられてこそ。ナイスです！」

「私達も一緒に戦ってるんだ！」

泣き止み、目を赤くはらした未来が確信するように静かに頷いた。

○○○

白き四人の戦姫が空を舞い、地上のフィーネに対して戦闘態勢をとる。だんだんと太陽が昇ってくる。再び立ち上がった四人を朝日が祝福しているかのようだ

「みんなの歌声がくれたギアが、私に負けない力を与えてくれる。雷や翼さん、クリスちゃんにもう一度立ち上がる力を与えてくれる。歌は戦う力だけじゃない……命なんだ！」

「高レベルのフォニックゲイン……こいつは二年前の意趣返し？」

『んなことどうでもいいんだよ！』

クリスが口を動かすことなく、直接脳内に言葉を発する。限定解除されたギアの機能だ。

「念話までも……。限定解除されたギアを纏って、すっかりその気か！」

ソロモンの杖から緑色の光線が放たれ、着弾地点からノイズが出現する。クリスが念話で叫んだ。

『いい加減芸が乏しいんだよ！』

『世界に尽きぬノイズの災禍は、全てお前の仕業なのか?!』

翼の問いにフィーネも念話で回答する。

『ノイズとは。バラルの呪詛にて、相互理解を失った人類が同じ人類のみを殺戮するために作り上げた自律兵器』

『人が、人を殺すために……?!』

『自律兵器とは言え、何でこんな節操なしに……』

人と手をつなぐことを良しとする響が困惑し、学術的興味から自律兵器とは言え、見境なく現れては人間を攻撃するノイズに雷は違和感を覚える。その疑問にフィーネは答えた。

『バビロニアの宝物庫は、扉が開け放たれたままだな。そこからまろび出る十年一度の偶然を、ワタシは必然と変え、純粹に力として使役しているだけの事……』

『またわけわかんねえことを……！』

召喚されたノイズが一斉に装者たちに攻撃を開始し、それを四人は難なく回避する。その隙に杖のエネルギーを限界までチャージしたフィーネが頭上にそれを突き上げ、緑色の輝きの中、叫んだ。

「怖じろッー！」

「ッ?!」

気付いたときにはすでに遅かった。さつきとは比べ物にならないほどの輝きを持った光線が発射され、空中で拡散、町中に降り注いだ光線から無数のノイズが召喚される。大型中型関係なく、もはやもともと住んでいた人口よりもノイズの数のほうが多いほどだ。

フィーネがほくそえみ、四人が背中合わせになって周囲を見渡す。

「あっちこちから……！ー！」

「よっしやあー！どいつもこいつもまとめてぶちのめしてくれろー！」

「翼さん……。私、翼さんに……」

真っ先にクリスが飛び出し、それを見て翼が頼もしそうに笑う。響が申し訳なさそうにしている。暴走状態とは言え、攻撃してしまったのだ、そのことを謝りたいのだろう。響のそんな顔に対して、翼は優しく言う。

「どうでもいいことだ」

「へ?」

「立花は、私の呼びかけに答えてくれた。自分から戻ってくれた。自分の強さに、胸を張れ」

「翼さん……」

「それよりもだ、轟」

「私?」

死んでいた間の話だったので全くついていくことが出来ず、その場にどどまっていた雷に翼が話を振る。

「あれほどの重傷を負って平気か？問題があつたならすぐに言ってくれ」

「気を失つてて、痛みはなかったので大丈夫です！なので何も問題はありません！」

「そうか、頼むぞ」

実際には重症程度では済まないのだが、無事を確認した翼は二人に語り掛ける。

「一緒に戦うぞ。立花、轟」

「はいー！」

翼と共に飛び立とうとする響のガントレットを雷がそつとつまむ。それに気づいた響が振り返って聞いた。誰かと二人で話が見たいときの雷の癖だからだ。その様子を察した翼が動きを止め、少しだけ距離を取った。

「どうしたの雷？」

「ご、ゴメンね。あんまり覚えてないけど、迷惑かけちゃって、怖かった……よね？」

『雷帝顕現』を発動している間、強大な負の感情で自我を失っているため記憶はほとんど残っていないのだが、翼の言葉でどのような状況になっていたかを察し、その様子を見て最も心配したであろう響に謝罪する。

さつきまでの様子とは打って変わってびくびくと震えている様子だが、響は雷を優しく抱きしめる。

「大丈夫。びっくりしたけど、家族のために戦っているのは分かったから……」

「あり、がと……」

「帰ったら未来にも言っておいてね、私以上に心配したと思うから」

「怒ってないかなあ……？」

「無事だと知って喜ぶんじゃないかな？」

響は抱きしめた雷の灰色の髪を優しく撫で、それに安心したのか顔

を赤くしながら静かに肩に顔をうずめる。少したつて翼が咳払いをした。

「んん。二人とも、そう言うのは家に帰ってからやってくれ」

「家ならいいのかよー!」

先に行っていたクリスが大声でツツコミを入れ、それに二人は苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、行こっか」

「うん、行こう」

町中に存在するノイズを殲滅するために光の尾を引いて空をかける。最初に装者の中で最速を誇るケラウノスのギアを纏った雷が稲妻を纏って先行する。

『でいやあぁッ!』

左腕を前に突きだして構えてユニットから放出された電撃を球体状に構築し、雷刃抜拳の応用で加速させた右手でそれを殴りぬくことで射出。

『弾雷牙櫛』

サイズを問わず、無数のノイズを焼き払いながら一直線に突き進んでいく。もう一度ユニットから稲妻が球体に発射され、臨界を迎えたエネルギーが暴走し爆発、内部から電撃が拡散してノイズを巻き込んだ。

響がバンカーを起こし、大型ノイズを一直線に貫いていく。撃破されたノイズに巻き込まれて小型ノイズが誘爆した。

クリスはアームドギアをまるで乗り物のように変形させ、ビームを拡散照射して空中に存在する航空型ノイズを撃墜していく。

『MEGA DEATH PARTY』

腰部装甲から放たれたホーミングレーザーが逃げまどうノイズを貫通し、さらに追撃をかける。

『やっさいもっさいッ!』

『すごい!乱れ撃ち!』

『全部狙い撃ってんだあ!』

『ホントお?』

『なんで嘘つかなきゃなんねえんだよ!』

響と雷のボケにクリスがツツコミを入れ、自分も負けていられないと響が両腕のバンカーを起動させる。

『だったら、乱れ撃ちだあッ!』

バンカーから放たれる衝撃波が地上にいるノイズの群れを乱れ撃って粉碎する。

翼は大型航空ノイズを高度で上回り、剣を大剣に変形させてエネルギーを貯める。

『蒼ノ一閃』

通常状態で放つソレとはレベルの違う速度と威力で大型ノイズの一体ではとどまらず、その後ろにいたもう一体の大型ノイズをも貫通した。

雷の稲妻が焼き払い、響の拳が貫き、翼の剣が切り裂き、クリスのビーム撃ち抜いて町中に存在したノイズを殲滅する。

土煙の届かぬ空中で四人は臨戦態勢のまま、背中合わせで油断なく構える。

「どんだけ出ようが、今更ノイズ!」

「ッ?!」

異変に気付いた翼がリディアンのほうを向く。そこには、ソロモンの杖を自らの腹に突き立てようとしているフィーネの姿があった。

彼女は不敵に笑って杖で腹を貫くと、ネフシユタンがフィーネの体だと杖を認識したために同化していく。杖を自由に思考でコントロールする力を得たフィーネは生き残ったノイズ全てを自らのもとに集め、さらにノイズを生み出して異形のバケモノへと変質していった。

「ノイズに……取り込まれて……?!」

「そうじゃねえ、あいつがノイズを取り込んでんだ!」

「ネフシユタンの特性で杖を掌握したのか!」

異形の塊となったフィーネの一部が伸び、四人に襲い掛かる。それを回避した瞬間、フィーネが叫んだ。

「来たれ! デュランダル!」

異形の一部がカ・ディングル内に侵入し、エネルギー炉心となつていたデュランダルを取り込む。無限のエネルギーを吸収したファイネの姿は肉塊のような姿から竜の姿へと変化し、頭部を思わせる部位からレーザーを照射した刹那、大爆発が発生した。強烈な爆風に防衛姿勢をとる。

「ッ?!……町が!」

目を開けた瞬間、焼き払われた町の姿が飛び込んでくる。背後から声が響いた。

「逆さ鱗に触れたのだ……。相応の覚悟は出来ておらうな?」

竜の胸部に当たるところにデュランダルを持ったファイネが笑い、再び頭部から、今度は装者たちに向かってレーザーが放たれる。

「ぐうッ……!」

回避には成功するも、あまりの熱量と威力に吹き飛ばされてしまう。クリスは即座にアームドギアを展開してバレルロールすることで熱線の勢いをそらし、ファイネに対してビームを発射。しかし、シャツターのようなものでソレを防ぐと翼状の部分からホーミングレーザーを発射し、回避を試みるクリスに直撃する。

「はああッ!」

『蒼ノ一閃』

大型ノイズを瞬殺した翼の一閃も一部を損傷させるだけに留まり、ネフシユタンの再生能力が難なく損傷を再生させた。

「二でやああッ!」

雷の電撃も、響の拳も大したダメージにならない。あざ笑うかのようにはファイネが念話で言い放つ。

『いくら限定解除されたギアであっても、所詮は聖遺物のかけらから作られた玩具!完全聖遺物に対抗できるなどと思うてくれるな』

雷がファイネの念話を聞いてハツとした表情を浮かべ、もう一度悩むようにした後、意を決して口を開いた。

「一つだけ策があります。確率の低い賭けですが……やりますか?」

「乗った!」

「しかし、その為には……」



「?……えっと、やってみます!」

如何やら同じ策を考えていたようだ。クリスが同意し、翼が響のほうを向いて不安個所を言外に挙げた。当の響はよくわかっていないようだったが、想いを向けられていると知って覚悟を決める。

フィーネの放つ熱線を避けながら雷と翼、クリスの三人が肉薄する。

「私と轟、雪音が露を払う!」

「手加減なしだぜ?!」

「全力でお願いします!」

「分かっている!」

クリスを先行し、翼が手に持つ大剣をさらに大型化させ、雷が全身のユニットを展開してエネルギーをチャージしていく。

「はあッ!」

『蒼ノ一閃 滅破』

翼の渾身の一撃がシャッターを破壊し、再生までの間を縫ってクリスが内部へと侵入する。

内部でレーザーをばら撒き、内部が煙で充満する。煙を排出するためにフィーネがシャッターを開けた瞬間、視界に稲妻を纏った雷が飛び込んできた。

「エイヤアアアッ!」

『雷竜降罅撃』

跳び蹴りを放つ雷の背を追うように稲妻の竜がその罅を開き、デュランダルを持つフィーネの右半身を彼女が展開したシールドごと食い破る。蹴りの衝撃によってデュランダルがフィーネの手元から離れ、空中へと身を躍らせた。

「そいつが切り札だ!勝機をこぼすな!掴み取れ!」

足りない飛距離はクリスが拳銃で弾き上げる。

「ちよっせえ!」

覚悟を決めた響が、ここにいるすべての思いと共に完全聖遺物、デュランダルをその手に掴み取った。

### 三人の約束

響がデュランダルを掴み取った瞬間、彼女の体内にあるガングニールのかげらが反応し、漆黒の暴走状態へと移行する。あまりの衝撃に地下にある臨時二課までもが地震のように揺れた。未来が駆け出していく。

「未来さん！どちらへ?!」

「地上に出ます!」

彼女の言葉に中にいる生存者たちがざわめきだす。当然、友里が引き留めた。

「無茶よ！危ないわ!」

「響は、響のままできてくれるって、変わらずにいてくれるって。だから私は、響が闇にのまれないよう応援したいんです!」

自分の思いのたけをぶつける。

「助けられるだけじゃなく、響の力になるって誓ったんです!」

響は自らの黒い破壊衝動にのまれないように踏ん張っている。地下のシエルターに通ずるゲートが破壊され、そこから二課のメンバーを含む生存者全員が姿を現した。衝動にあらがう響を激励する。

「正念場だ！踏ん張りどころだろうが!」

師匠と仰ぐ弦十郎の声に気づいた響がゆっくりと顔を向ける。

「強く自分を意識してください!」

「昨日までの自分を!」

「これからなりたい自分を!」

（み、みんな……!）

雷と翼、クリスが支えるように響に寄り添う。雷が背中を、翼が右肩を、クリスが左肩をだ。

「屈するな立花！お前の構えた胸の覚悟を、私に見せてくれ!」

「お前を信じ、お前に全部かけてんだ！お前が自分を信じなくてどうするんだよお!」

必死に抵抗する響だが、だんだんと飲まれ始める。だが、それでも

あきらめずに声をかけ続ける。

「あなたのお節介を！」

「あなたの人助けを！」

「今日は、私達が！」

自らを倒す手段を手に入れた者を生かしておくほどファイネは有情ではない。破壊された箇所が再生し、妨害するべく触手を伸ばす。「姦しい！黙らせてやる……！」

が、装者たちを覆うエネルギーバリアがその攻撃を防ぎ切った。そしてついに響の体が完全に破壊衝動に染まり切ってしまう。

その瞬間、雷が心の奥底にまで届くように額を彼女の背中に押し当てて優しく語り掛け、未来が意識を叩き起こすように叫んだ。

「響……」

「響ー!!」

(っ！)

二人の声が奥底にある響の自意識へと到達する。

(そうだ……。今の私は、私だけの力じゃない……。！)

未来が地上で響のこゝろを見つめ続ける。

(そうだー！この衝動に！塗りつぶされてなるものかあッ！)

思いが届き、黒い破壊衝動を自らの意思で逆に塗りつぶしていく。

胸の奥にあるガングニールが輝いた。

デュランダルが輝きを増し光の刃が伸びる。その極光が少女たちを包み込んだ。

「その力！何を束ねた?!」

「響き合うみんなの歌声がくれた！シンフォギアだアツ！」

光の刃となったデュランダルをファイネに振り下ろす。

『Synchro gazer』

装者たちの刃とファイネの赤き竜が激突し、無限のエネルギーと無限の再生能力が対消滅を起こす。光が消滅し、ファイネの竜が崩壊を始めた。

(どうしたネフシユタン！再生だ！この身、砕けてなるものかあッ！)

あまりのエネルギーに形を保つことが出来ず、大爆発を引き起す。

朝日が昇り切り、ズタボロになった街を太陽の光が優しく照らした。シエルターにいた人々も続々と地上に戻ってくる。

敵であるはずのフィーネに肩を貸した響がみんなのもとに歩いてきた。翼やクリスはまた雷が暴走しないかどうか内心ドキドキしていたが、安定しているときと変わらない落ち着いた表情をしている。

「お前……何を馬鹿なことを……」

「このスクリューボールが……」

「それが響だからね」

クリスが呆れたように言い、雷がどこかうれしそうにしている。

フィーネを近くの瓦礫に座らせて、響が言う。

「みんなに言われます。親友からも変わった娘であつて。……もう終わりにしましょう？ 了子さん」

「ワタシはフィーネだ……」

「でも、了さんは了さんですから」

響はさも当然のように答えた。

「きつと私達、分かり合えます」

「ノイズを作り出したのは、先史文明期の人間……。統一言語を失った我々は……手を繋ぐことよりも相手を殺すことを選んだ」

フィーネは立ち上がり、朝日に向かって歩を進める。諦めているかのぶとく言う。

「そんな人間が分かり合えるものか……」

「人が……ノイズを……」

「だからワタシは、この道しか選べなかったのだッ！」

「おいー」

フィーネが鞭を握りしめとことに反応し、クリスが前のめりになるのを翼が手で制する。

しばしの静寂が訪れる。

「人が言葉よりも強くつながれること、わからない私達じゃありません」

響がその静寂を破った。

フィーネは一度目を閉じ、一気に見開いて握りしめた鞭を投げ放つ。

「ッ?!」

装者の中で最速を誇る雷の拳が響と共に放たれるが、それはギリギリのところまで停止する。何故ならその鞭は響に放たれたものではないからだ。ぐんぐんと天高く上っていく。

「ワタシの勝ちだあッ!」

鞭の先端が月のかけらへと突き刺さり、ネフシユタンが崩壊するのもしとわずにフィーネは一気に引き寄せる。重力に引つ張られて地球に落下し始めた。

「月のかげらを落とすッ!」

フィーネの声で翼とクリスが月の方向を向く。

「ワタシの悲願を邪魔する者はここでまとめて叩いて砕くッ!この身はここで果てようと、魂までは絶えやしないのだからなあッ!聖遺物の発するアウフヴアツヘン波形がある限り、ワタシは何度だって世界によみがえる!どこかの場所、いつかの時代!今度こそ世界を束ねるために、アハハハハ!私は永遠の刹那に存在し続ける巫女!フィーネなのだあ!」

崩壊をつづけるフィーネの胸に優しく二つの拳が当たり、響と雷が真っ直ぐにフィーネを見つめる。

「うん、そうですね。どこかの場所、いつかの時代……蘇るたびに何度でも私の代わりに、みんなに伝えてください。世界を一つにするのに、力なんて必要ないってこと。言葉を超えて、私達は一つになれるってこと。私達は、未来にきつと手をつなげられるということ!私には伝えられないから、了子さんにしか出来ないから」

「お前……まさか……」

「了子さんに未来を託すためにも、私が今を、守って見せますね!」

「ホントにもう……ほおっておけない子なんだから」

了子が目をつむり、雷が口を開いた。

「私は今でも、あなたのことが許せません」

「え……？」

響と了子が雷に対して目を見開く。

「あなたはお父さんの、お母さんの、出海の仇です。家族の仇です。だから今度は壊すんじゃないかって……私みたいになっちゃった子や、なりそうになっっている子を助けてあげてください。了子さんならできますよ。あなたの心は何千、何万と言える年月を経ても人間のような思いの力でしたから」

「……雷ちゃん……」

雷は了子を指さして笑った。

「両親みたいにああなたを出し抜いたら！月のかけらを破壊できたなら約束してくれますか？」

そんなことを言う雷を了子がつこりと笑って言う。心の底から嬉しそうだった。

「分かったわ……。轟両博士みたいに私を出し抜いて見せなさい」

両手の人差し指で二人の胸を軽く突く。

「胸の歌を、信じなさい」

その言葉を最後に了子の体は風と共に消えていった。

落下してくる月を見上げながら雷と響の二人が前へと歩き始める。

「響……雷……」

未来の言葉に静かに答えた。二人の目が未来の姿を見つめる。

「何とかする。ちよおつと言ってくるから、生きるのを諦めないで」

「安心して。両親の置き土産を取ってくるだけだから」

そのまま黙って駆けだし、月のかけらを破壊するために空へと飛び去って行った。

送り出した未来の頬を涙が伝う。

飛翔する二人は笑顔で笑い合うと絶唱を発動し、空に終わりの歌が響き渡る。宇宙に出た瞬間、後ろからクリスの声が頭の中に響いてきた。

（そんなにヒーローになりたいのか？）

（こんな大舞台上で挽歌を歌うことになるとはな。二人には驚かさねばなしだ）

(翼さん、クリスマスちゃん……)

(なんで来ちやっただんですか……)

雷と響は速度を落とす、翼とクリスマスに並ぶ。

(来ちや悪いのかよ……。まあ、一生分の歌を歌うにはちょうどいいんじゃないのか?)

雷と響が嬉しそうに笑い、四色の光の尾を引きながら月に向かって手をつないで並び飛ぶ。

(それでも私は、立花や轟、雪音ともっと歌いたかった)

(ごめんなさい……)

(バーカ、こういう時はそうじゃねえだろ)

(あの言葉だよ響、想いを伝えるあの言葉)

(ありがとう、二人とも!)

四人はブースターを点火し、さらに加速する。

(解放全開! いっちゃえ! ハートの全部でツ!)

(みんなが夢をかなえられないのは分かっている。だけど、夢を叶えるための未来は、みんなに等しくなきやいけないんだ……!)

(命は尽きて終わりじゃない。尽きた命が残したものを受け止める、次代に残していくことこそが人の営み……。だからこそ、剣が守る意味がある……!)

(たとえどれだけの不幸があっても、大切な人と笑っていれば幸せになれる。うれしくなる。家族が守ってくれたこの幸せを、今度私が守る番……!)

(たとえ声が枯れたって、子の胸の歌だけは絶やささない! 夜明けを告げる鐘の音奏で、鳴り響き渡れ!)

四人は手を放し、四方向から全力の攻撃をぶつける。

(これが私達の、絶唱だああッ!)

翼は今までで最も巨大な大剣に変形させ、クリスマスは最も多くのミサイルを構築し、雷は全身のユニットから最も高出力の稲妻の塊を構築、響は両手足のバンカーを大型化させて今までで一番長い距離を伸ばす。

全力の一撃を月のかけらに叩きつけ、破壊に成功した。

地上では未来が静かに一步を前に踏み出し、膝から崩れ落ちる。破壊された月の破片が流れ星のように燃え尽きていく。

「流れ星……」

いつか三人で見ようと約束した流れ星を思い出し、未来は大声で涙を流した。

〇〇〇

しばしの時が流れ、未来が花束を持ちながら雨の降るバス停を傘もささずに佇んでいた。

（あの日から三週間、響たちの搜索は打ち切られることになりました。弦十郎さんからは、作戦行動中の行方不明から死亡扱いになると聞きました。郊外にお墓が建てられましたが、そこに二人はいません。機密の関係上、名前も彫られてません。外国政府からの追及をかわすためだと言われましたが、私にはよくわかりません）

ずぶ濡れの未来を乗せたバスが復興する街の間を走っていく。

（私が弦十郎さんに渡した写真が飾られていれば、それだけが立花響と轟雷の墓標であることを示す、寂しいお墓です）

バスが未来の目的地である墓地に停車した。

（それでも私は、二人のたどった軌跡の執着に言い詰めている……）

未来は二人の墓の前で泣き崩れる。

「会いたいよ……。もう会えないなんて……。私は嫌だよ……。ひびきい……。あずまあ……。私が見たかったのは二人と一緒に見る流れ星なんだよ……。？」

雨は一層強くなる。まるで未来の心象を表すかのように。遠くで女性の助けを求める悲鳴が聞こえてきた。未だにノイズの勢いは衰えておらず、たびたび姿を現しては人間に襲い掛かるのだ。未来は女性の手を取って一緒に駆け出す。

（諦めない！絶対に！）

あの日響とした約束を忘れることなく走り出す。体力の限界か、女性が苦しそうに膝をついた。

「私……。もう……」

「お願い！諦めないで！え……」



周囲をノイズの囲まれ、雷のように自分を顧みずに女性を守るために前に立つ。その瞬間、衝撃波と電撃が目の前のノイズを一掃した。「……………え?」

驚いてそれが発せられた方を向くと、光の中から何時もの制服姿の響と雷、翼にクリスがいた。

「ごめん、いろいろ機密を守らなきゃいけない。未来にはまた、ホントのことが言えなかったんだ」

未来の頬を涙が伝う。

「三週間も一人にしちやっただから、その分を取り返さなくっちゃね!」

喜びのあまり二人に向かって未来が駆け出す。そのころには雨がやみ、太陽が顔を出していた。

いつかの夜、約束の通りに三人はそろって夜空を流れる流れ星を見上げた。

## 雷の課金事情と罰ゲーム

三週間分の課題を片付けた響は親友たちと住んでいる寮室の鍵を開ける。雷は持ち前の頭脳でさっさと課題を片付けて帰宅しており、未来は二人の無事を祝うために創世たちと買い物に出て行っているのだ。

部屋にいるはずの雷に声をかける。

「ただいま。もうへとへとだよお……雷はどうだっ……うええ?!」

雷の様子に思わず言葉が詰まる。何故なら彼女の周りには数十枚は超える一万円のリンゴカードが散乱していたからだ。テーブルには好んでやっているソシヤゲのガチャ画面が表示されており、画面の『十連ガチャ』ボタンを指で押しながら突っ伏している。

その状態のまま雷が覇気のない声で答えた。

「お帰りいゝ響いゝ」

「どうしちゃったの雷……」

「出ないんだよお、私の推しキャラが出てくれないんだよお」

顔を見せないが鼻声になっているあたり、あまりの運のなさに泣いていたのだろう。響は「廃課金勢って怖いなあ……」と思いながら雷の背中を撫でて慰める。

その姿はついこの間世界を救った少女たちだとは思えない。

突然、雷が何か思いついたらしくガバツと勢いよく起き上がり、振り向いてさっきまで自分の背中を撫でていた響の手を両手で掴んだ。

目が潤んで赤くなっている。

「うわあ?!」

「響が引いてみてよ! たぶん物欲センサーとかなんかなんだよきつと!」

グイグイと響の両手を握ったまま彼女に詰め寄っていく。響は勢いに軽く引きながら苦笑いを浮かべる。

「わ、わかったよ……。えっと、このボタンを押せばいいの?」

「うんうん! そう! 行っちゃって! 最短で真っ直ぐに一直線に推しのところへ!」

響の名言をとんでもないところで使う少女がここにいた。

響は言われるがままボタンを押し、その隣で雷が神頼みをし始めた。

「神様仏様響様ア！次こそ来てくださいお願いしますッ！」

迫真である。いつそノイズを倒すときよりも気合が入っているかもしれない。

そしてついに確定演出と共に雷の推しキャラが排出された。

雷が響に抱き着いて喜ぶ。

「キツタアア！ありがとう響！大好き！」

「私への大好きが聞けたのはうれしいけど、それがゲームのキャラクターを介して出てきたってのが釈然としない……」

「はあああ……いい声……耳が妊娠しそう……」

響の嘆きはスマホにイヤホンを差してセリフボタンを連打している雷には届くことはなかった。とてつもなくならしめない笑顔で無数のリングカードの上を転げまわっている。

「ッ?!うぐあああ……!」

「いたそー……」

あまりに節操なく転がっていたため小指をダンスの角にぶつけて体を縮こまらせる、それでも顔がニヤついているあたり筋金入りだろう。少したつてまた、ならしなく笑顔を浮かべている。

ガチャツとドアの開ける音が聞こえた。未来が帰ってきたのだ。

雷は片方のイヤホンを耳につけたまま大慌てで立ち上がり、響にお願いをする。

「響！一生のお願いだから、このカード全部処分しておいて！お願い！」

「え?!これ全部?!」

「そう！」

困惑する響を置いて未来のもとへと駆け出していく。買い物で買った重い荷物を持つことで機嫌を良くしようと思っているのだ。実にセコい。

「お帰り未来！荷物重いでしょ？私がつよ」

が、その目論見は即座に粉碎される。未来が軽く俯いたまま何でもないように口を開く。

「弓美に聞いたんだけどね？今日、雷のやってるゲームで新しいキャラクターが出たんだって」

「う、うん……そうだけど……」

いきなり出てきたワードに雷は動揺を隠せない。未来は俯いたままさらに雷を追い詰めていく。

「実は私ね、雷の通帳の場所と口座のパスワード、知ってるんだよ？」

「え、えつとお……そのお……」

「それを聞いて帰ってくる途中で確認したの。千円単位以上が無くなっていったんだけど、これで何度目だったっけ？さて、どういうことかな？」

「ご、ごめんないしいー！」

雷が手に持っていたスマホを取り落とし、未来に土下座するかのようになり廊下に泣き崩れる。未来はそれを見てにっこりと笑い、響は「仕方ないよね」と呆れ顔だ。当然、カードの掃除などしていない。

「響、これお願い」

「うん、キッチンでいい？」

「いいよ。雷はそこに正座」

「ひゃい……」

リビングで未来は散らばっている無数のカードを見てさらに笑顔で雷を見つめ、彼女を思いつきり震え上がらせながら正座させる。

未来がゆつくりと口を開く。

「あのね？私達は雷の事情を知ってるし体のことも知ってる。その時の影響でご飯がほとんど食べれなくて私達に比べて食費がほとんどないからお金が余ってるのもわかる」

未来が雷に語り掛けるように優しく言う。

「だけど、いつかあなたの体が元に戻るかもしれないでしょ？その時に今の金銭感覚のままじゃ飢え死にすることになるよ？それでもいいの？」

フルフルと雷が横に首を振るのを見て、未来がさらに続ける。

「今度同じようなことをしたら雷のカードと通帳は私が預かります。お金が欲しい時は欲しい金額を私に言っただけね？おろしてくるから」

「今度から……だよね……？」

雷が念を押して確認をする。未来が首をかしげながら笑った。

「今からがいい？」

「今度からでお願いしますう！」

それを聞いて「うーん」と未来が悩むようなそぶりを見せ始め、響に尋ねた。

「ねえ響。雷の罰ゲーム、何がいいと思う？」

響が天井を向いて悩み始める。

「うーん、前はお風呂場でくすぐりの刑だったでしょ？何がいいかなあ……」

「できれば軽いやつでお願いします……」

「だめだよ。今度はこちらと約束を守るような罰ゲームにしなきゃ」

「そんなあ……」

雷の懇願はすげなく却下された。

すると突然、未来が何か思い出したかのように部屋の奥に跳んでいき、黒いハチマキのようなものとヘッドホンを持ち出してきた。

「今度から雷が何かしでかしたらこうしようよ」

そう言っただけで目隠しをするように雷にハチマキをして視界を奪い、ヘッドホンをつけて音を聞こえなくした。

何も分からなくなった雷が弱々しく叫んだ。

「響？未来？……ここにいるんだよね……？」

「えいつ」

響が雷の脇腹をちよんつと突つついた。

「ひゃん?!誰?!誰え?!」

雷の体がびくりと跳ねる。未来がヘッドホンをそつと外して耳に息を吹きかけてからささやく、雷の背筋がゾクゾクと震えた。女の子がしてはいけないような顔をしている。

「今度のもつと色々するからね？」

「ひゃ、ひゃいいい……」

今度から雷の罰ゲームは視覚と聴覚を奪ってからのイタズラに決まりましたとさ。

## 雷の設定と初期設定

名前

性別

・轟 雷（トドロキ アズマ）

女

プロフィール

・年齢 15歳

・誕生日 6月5日

・血液型 AB型

・身長 155cm

・BWH 86／52／88

・趣味 自傷・自殺（結果的には未遂）

・好物 胃腸に優しいもの（特に湯豆腐が好み）

メインカラー

・グレーor金

容姿

・ところどころ跳ねた腰まであるグレーの長髪に金の瞳をした少女。少し目にかかっている前髪をヘアピンでとめている。基本的に垂れ目だが思考を回しているときや、戦闘時など気を引き締めているときは釣り目。度重なる自傷と自殺未遂によって、傷や痣、火傷だらけの体中を包帯でぐるぐる巻きにしている。時折ギブスや松葉杖姿になることもある。

精神状態

・正常な時は基本的にさっぱりとした感じで思慮深い面が目立つが、不安定になるとそれらの面が鳴りを潜め、臆病で自罰心の高い面が出てくる。

正常な面（冗談を言う、よく笑う、頭が回る他）

←

不安定な面（よくどもる、泣き虫になる、自殺・自傷に走る他）

今まで体のことをばらさないようにしていたので友人関係を作っておらず、そのことからくる対人関係の弱さからいざこざに陥ったりする。

正常な面の時は出来ることも、不安定になると急にできなくなる。因みに、深層心理は不安定寄りで、元々は正常な方の性格だったが、叔父や叔母にそういう風に調教されてしまっている。寝てるときはそれが顕著で、丸まって頭を押し付けて眠るのは自分の身を守るためと、信頼する人から守ってもらえるという安心感を得るためである。

使用ギア

ケラウノス

轟理論で開発された唯一のギア。

二課のデータベースにギアと理論の情報がほとんどなく、『かつて開発計画があった』程度の記録しか残っていない。その為存在しないものとして扱われていたが、雷が起動したことにより、表舞台へと飛び出すことになる。(おそらく雷が起動しなかった場合、形見のペンダントとして扱われていたであろうことは想像に難くない)

アームドギアは稲妻。形がないため雷のイメージによって形を変化させることが出来、応用で磁場や斥力を展開することも可能。弦十郎の教えを反映して基本は徒手空拳で扱われる。

音楽ベースはシンセサイザーのような電子系。

技名カッツインは稲妻のエフェクトと共にエレキギターが鳴り響く。

まだまだ秘密があるようだが・・・？

使用楽曲

・『神雷 ケラウノス』 基本的に歌われる曲。

・『破滅への子守歌』『雷帝顕現』時に使用。あの状態で子守歌は完全に皮肉。讚美歌っぽく歌う。

・『ミッシング・デュオ』響とのデュエット時に使用。『存在しない』ケラウノスと『失われた』ガングニールのデュエット。

初期設定

名前

性別

・轟 雷 (トドロキ アズマ)

女

プロフィール

・年齢 15歳 (無印時点で)



- ・誕生日 6月5日
- ・血液型 AB型
- ・身長 155cm
- ・BWH 86／52／88
- ・趣味 ケンカ・単独行動
- ・好物 美味ければ好し
- メインカラー
- ・グレイor金

#### 容姿

・ところどころ跳ねた腰まであるグレイの長髪に金の瞳をした少女。つまり包帯を巻いていない雷。

#### 精神状態

・何故か自分の情報がばれることを極端に嫌うディアボロ系女子。行動に発生する痕跡は生理的なもの以外になく、二課の捜査力ですら特定できないほど。普段はおしとやかだが面白そうだからという理由で痕跡を残すことなくフイーネの思惑に介入する。

#### 使用ギア

- ・同じくケラウノス。

ただし戦闘スタイルは異なっており、基本的に我流のケンカ殺法。何でもありでかなり実践的。システマや合気道、剣術に棒術、果てにはマンガなどで登場する架空の格闘術を混成させたもの。要は指令の漫画版。

#### その他

・リディアンにこそ所属しているが響たちとの面識は全く、二課にすら所属していない。G編の最終回の後に加えさせるつもりでした。

## G編

### 頭脳派転じて単純明快

雷雨の中、無数の航空型ノイズの襲撃に遭いながら装甲列車が疾走する。

搭載された機関砲で攻撃を開始するがノイズの持つ位相差障壁によって大したダメージを与えることが出来ず、逆に火器管制を担当していた乗組員が攻撃を喰らい、その衝撃で爆発が発生した。

アラートが鳴り響く中、爆発の衝撃によって完全聖遺物『ソロモンの杖』の護衛を担当していた二課の一人、友里が転倒してしまう。

「うわっ?!」

「大丈夫ですか?!」

ソロモンの杖を守るためのケースを抱えながら米国の研究機関から出向してきた科学者、ウエル博士が声をかける。

友里は立ち上がり言った。

「平気です！それよりウエル博士はもっと前方の車両に避難してくださいー！」

列車の連結部を繋ぐ扉が開き、私服姿の雷に響、クリスが駆け込む。

「大変です！すごい数のノイズが追ってきます！」

「連中、明らかにこっちを獲物と定めていやがる。まるで、何物かに操られてるみたいだ」

「やっぱりそれが狙いなのかな？だんだん爆発音が近づいてきてるし……」

雷がウエルの抱えるケースを指さしながら耳を澄ませて言う。

ノイズの攻撃によって発生する爆発音が杖に向かってきてきているのだ。

「急ぎましょうー！」

友里の声で全員が行動を再開した。

風雨に打たれながら前方の車両に移っている最中、二課から通信が入る。

「はい、はい。多数のノイズに交じって移動する反応パターン？」

「三か月前、世界中に衝撃を与えたルナアタックを契機に日本政府より開示された櫻井理論。そのほとんどが、まだ謎に包まれたままとなっけていますが、回収されたこのアークセプター、『ソロモンの杖』を解析し、世界を脅かす認定特異災害ノイズ対抗しうる新たな可能性を模索することが出来れば……」

轟理論はデータそのものが存在せず、成功例がケラウノスたった一つだけというのもあって公開されることはなかった。

クリスはその場に立ち止まり、拳を震わせながら杖の危険性をウエルに忠告する。杖を起動させ、その力を、脅威を知る者として。

「そいつは……ソロモンの杖は……簡単に扱っていいもんじゃねえよ」

「クリスちゃん……」

「クリス……」

「最も、あたしにとやかく言える資格はねえんだけどな……」

顔を背けたクリスの両手を雷と響の二人が掴む。

唐突なことにクリスは動揺する。

「わ、わあっ馬鹿ども！お前らこんな時に……！」

「大丈夫だよ」

「私達もいるからね！」

「お前らホントの馬鹿……」

そっぽを向いたクリスの顔がかあつと紅くなる。

「了解しました。迎え撃ちますー！」

本部と連絡を取っていた友里が通信機をしまい、拳銃を懐から取り出して弾を確認した。

その様子を見てクリスが意気込む。

「出番なんだよな？」

友里が頷くことでそれに答えた瞬間、天井に複数のノイズが突き刺さる。

ウエルが腰を抜かし、友里が攻撃するために実体化しているノイズに対して発砲するが、有効打にはなっていない。

「行きます！」

響の声にクリスが頷き、雷が顔を引き締めることで返事とする。

「Volters Kelaunus Tron」

第0号聖遺物『ケラウノス』のシンフォギアが雷の歌声で起動し、着ていた服を分解した。

一糸まとわぬ姿となった雷はグレーを基調にしたインナースーツを身に纏い、両手両足に金色の電撃発生ユニットが装着される。頭に稲妻を模したヘッドギアが展開され、四肢より少し大型のユニットが稲妻を放ちながら腰に装着。雷が体をクルリと一回転することで放たれていた稲妻がグレーのマントに変化した。

腰のマントはギアのロックが一部解除されたことで発現したものだ。

「でやあつー！」

ギアを纏った三人が列車の天井を突き破り、外へと身を躍らせた。響とクリスのギアも雷と同じく一部が変化している。

「夜雀どもがうじゃうじゃと」

「光に群がる羽虫の間違いでしょ」

クリスが軽口をたたき、雷がユニットから電撃を発生させながら煽る。

「どんな敵がどれだけ来ようと今日まで訓練してきたあのコンビネーションがあれば！」

「あれはまだ未完成だろ。実戦でいきなりぶっこもうなんて、おかしなこと考えんじゃねえぞ」

「今回ばかりは弦十郎さん譲りの「思い付きを……」は無しだからね、響」

響が笑顔で答えた。

「うん！取っておきたい、とっておきだもんね！」

「ふん。わかってんなら言わせんな」

クリスが目をつむりながら腕部装甲をボウガンに変形させ、二人に背中を向けて構える。

「背中が預けたからな」

「預かりました!」

「任せて!」

クリスが矢をノイズに向けて斉射。それを逃れたものを雷の電撃が、響の格闘術が撃破していく。背中からくる敵意に一切反応していないあたり、クリスの二人に対する信頼関係が見て取れる。

上から強襲してくる三体のノイズのうち二体を響の拳が砕き、もう一体をサマーソルトで粉碎した。

空を飛び交うノイズに対して雷が稲妻の塊を射出し、天から降らせることでまとめて焼き払う。

『雷轟招来』

雷に負けじとクリスもボウガンと矢を大型化させ、発射。放たれた矢は空中でクラスター弾がごとく分散、重力に従って雨の様に落下することでノイズの大群を撃ち抜いていく。

『GIGA ZEPPELIN』

爆炎の中を高速で飛翔するステルス戦闘機のようなノイズを発見した。

「あいつが取り巻きを率いてやがんのか」

クリスが腰のアーマーから小型ミサイルを展開し、ノイズを撃墜すべく発射する。

「うおおおッ!」

『MEGA DEATH PARTY』

ノイズは巧みな軌道で追尾ミサイルのコースをそらし、同士討ちさせながら振り切ってしまう。

「だつたらあッ!」

『BILLION MAIDEN』

オートがだめならマニュアルで。と言うようにボウガンをガトリング砲へと変化させ、高速飛行するノイズに弾をばら撒いていくが一向に当たる気配がない。

それどころか堅牢な装甲で弾を弾きながらクリスのもとへと突撃を敢行する。

「クリスちゃん!」

響が右腕のバンカーを起動して真正面から迎撃するが、正面装甲を気づづけることなく、逸らすだけにとどまっていた。

クリスのガトリング砲と雷の雷撃でノイズはその数を減らしているが、生き残っているものはそれ以上に残っており、高速飛行する強敵もいまだ健在だ。

ある種の目的を持ちながら行動するノイズに雷は疑問を持ち、クリスが減らないノイズに愚痴を言う。

(ソロモンの杖以外にノイズをコントロールする方法が？あるのならまだいい、杖で介入できる。でも、もしなければ……)

「あんどきみたく空を飛べるXDモードなら、こんなやつにいちいちおたつくことなんてねえのに！」

「ふ、二人ともお！」

後ろを振り向いた響のすつとんきような声に思わず振り向く二人の目の前にはトンネルが迫っていた。

「え？」

「へ？」

「「うわあああ?!」」

響はクリスを抱えて屋根を踏み抜き、雷は響が開けた穴を使って避難する。

「ギリギリセーフ！」

「わりい助かった」

「あつぶなかつたあ……」

「くそ。攻めあぐねるとはこういうことか！」

悔しそうに拳を手のひらにぶつけるクリスに対し、あごに手を当てて考え事をしていた雷が提案する。

「飛んでるのが嫌なら捕まえちやえばいいんだよ！」

「馬鹿！それが出来れば苦労しねえよ！」

「出来るよ！ノイズの特性と、弦十郎さんの戦術マニュアルを使えば！」

響がピンと来たようだ。

「列車の連結部分を壊してぶつけるアレだね！」

「そう！あれならいけるよ！」

クリスが呆れた様に言う。

「あのなあ、おっさんのマニュアルってば面白映画だろお？そんなものが役に立つものかあ……。大体、ノイズに車両をぶつけたって、あいつらは通り抜けてくるだけだろ」

雷がニヤリと笑いながら口元で人差し指を振る。

「チツチツチのチ。通り抜けるまでのタイムラグにこっちの一番をぶつけるんだよ！」

「任せて雷！一番をぶつけちゃうよ！」

「？」

阿吽の呼吸で二人の間に作戦が展開される。

雷は頭脳派ではあるが、必要とあらば脳筋側にもなるのだ。

「トンネルを抜けるまでが勝負だよ！」

「本当にこんなんでいいのかよ……」

「行けるって行けるって！響！向こうで構えてて！」

「了解！」

響をトンネルの外で待機させ、クリスと雷は連結部の破壊を担当する。

クリスがジョイントを撃ち抜き、雷がその間に体を滑り込ませて分離に成功する。

分離した車両をノイズが通り抜けようとしていると、トンネルの外で待ち構えていた響が変形したバンカーのブースターを点火して一直線に突っ込んでいく。

ナツクルガードを展開し、真っ先に突破してきた装甲ノイズの鼻っ柱に拳を叩きこむ。バンカーユニット内のドリルのように回転するパーツの生み出した衝撃が放たれ、列車もろともトンネル内にいたノイズ全てが爆発に巻き込まれる。

策がうまくいって隣で大笑いする雷と、一撃でその策を実行して見せた響を見てクリスが驚愕する。

(閉鎖空間で相手の機動力を封じたうえで、遮蔽物の向こうから重い一撃……。こいつら、どこまで……)

「響ー！回収するよー！」

「おねがーい！」

『超電磁アンカー』

雷の右腕のユニットから放たれた超電磁を纏った稲妻が響を拘束し、磁界を使って思いつきり引き寄せることで回収する。

結構勢いよく飛んでくる響を雷が受け止めた。

「よいしょっと。どうだった？」

「けっこうしびれるんだね、これ」

「すごいでしょ？」

雷に受け止められた状態のまま、若干ろれつの回っていない返事をして響が笑う。クリスはそんな二人を見て、少しでも感心したことを軽く後悔した。



## フイーネを継ぐもの

友里が米軍のタブレットに電子判子を押すことで無事に『ソロモンの杖』搬送任務を終了する。

「これで、搬送任務は完了となります。ご苦労様でした」

「ありがとうございます」

仕事を共にしたものとして友里と米軍基地司令は握手を交わす。

雷と響、クリスの三人は任務を無事達成したことに満足げに笑い合う。それは事がうまくいったときに浮かべるただの少女の顔だった。

そんな三人にウエルが話しかけてくる。

「確かめさせてもらいましたよ。皆さんが、ルナアタックの英雄と呼ばれることが伊達ではないとね」

「英……雄……」

「英雄?! 私達が?! いやあく普段誰もほめてくれないので、もつと遠慮なくほめてくださ〜い。むしろ、褒めちぎってくださ……あいたあ!」

「この馬鹿。そういうところが褒められないんだよ」

英雄と褒めたたえられたことに響は喜ぶが、雷は逆に表情を曇らせる。歴史や物語において英雄はロクな最期を迎えていないからだ。

そもそも、彼女は英雄の存在を信じていない。昔の自分を誰も助けてはくれなかったのだから。

クリスが浮かれる響の頭にチョップを叩きこんだ。

ウエルが一人語り始める。

「世界がこんな状況だからこそ、僕たちは英雄を求めている。そう! 誰からも信奉される! 偉大なる英雄の姿を!」

「そしてその英雄は、世界が危機を脱した瞬間に不要になる。誰かの願いのために戦い、そして最後は疎まれ、殺された英雄、ジークフリートのように」

腕の包帯を撫でながら雷が冷や水を浴びせるように答えた。

ウエルの表情の奥深くがゆがむ。だが、彼はそれをおくびにも見せることなく反論した。

「それは物語の中の話です。現実とは……」

「同じですよ。物語も現実も」

「現実とは違う」とウエルが言いかけたところで雷が遮った。

「かつて崩壊しかけたドイツを建て直し、人々によってトップに選ばれたとある男が居ました。彼は間違いなく英雄です。国を建て直したのですから。だけど彼が最終的に今も何と呼ばれているのかご存じでしょう? 『歴史上最悪の独裁者』ですよ」

言外に英雄は存在しないと断言する雷を見て、ウエルは顔を引く突かせながらも平静を装う。

「皆さんが守ってくれたものは、僕が必ず役立てて見せますよ」

その振る舞いには彼の雷に対する嫌悪感や微塵も出ていなかった。

「ふつつかなソロモンの杖ですが、よろしくお願いします!」

「頼んだからな……」

「英雄ではなく、ただ一人の人間として、よろしくお願いします」

響が元気よく頭を下げ、クリスが心の底から頼み、雷が英雄を信奉する彼に言い含めるように答える。

三人の答えは文字通り三者三様だった。

「無事に任務も完了だあく。そしてっ……」

「うん!この時間なら、翼さんのステージにも間に合いそうだ!」

「ファングッズも手に入れなきやね!」

基地を出て雷の機嫌もすっかり良くなったようだ。

友里が通信機を手にとって三人にご褒美をプレゼントする。

「三人が頑張ってくれたから、指令が東京までへりを出してくれるみたいよ」

「マジっすかあ?!」

響が喜んだ次の瞬間、後にしたはずの米軍基地が大爆発を起こした。爆炎の中から大型ノイズが姿を現す。

「マジっすかあ……」

「マジだな!」

「マジだね」

ノイズに唯一対抗可能なシンフォギア装者の三人が駆け出す。

米軍の奮戦もむなしく次々に炭素へと変えられていく兵士たち、三人が駆け付けたときにはすでにノイズの姿はなく、ソロモンの杖も消滅していた。

〇〇〇

『世界の歌姫』マリアとのステージを控えた翼。そのマネージャーの緒川に弦十郎からの通信が入る。

その連絡とは当然、ソロモンの杖が姿を消したことだ。

「状況はわかりました。それでは翼さんを……」

『無用だ。ノイズの襲撃と聞けば、今日のステージを放り出しかねない』

ステージに立つものである以前に防人と身を定めている翼にとって、優先順位はステージよりノイズなのだから弦十郎の言うことは容易に想像がつく。

「そうですね……。では、そちらにお任せします」

ステージのために意識を集中していた翼が目を開けて緒川に尋ねる。

「指令からはいったい何を？」

それに対して緒川はかけていた眼鏡を懐にしまいながら答えた。

「今日のステージを全うしてほしいと……」

「ハア……」

眼鏡をはずした緒川の言葉に翼はため息をつきながら不機嫌そうに立ち上がる。翼は彼の胸を指さし、意図に気づいた緒川はさされた胸を押さえて動揺する。

「眼鏡をはずしたということとは、マネージャーモードの緒川さんではないということですよ。自分の癖くらい覚えておかないと、敵に足元をすくわれ……」

「お時間そろそろです。お願いしまーす」

「はーい。今行きます」

緒川へのお小言は現場スタッフの声に遮られた。

その隙に緒川は自身が思う今翼がすべきことを伝える。それも満面の笑顔で。

「傷ついた人の心を癒すのも風鳴翼の大切な務めです。頑張ってくださいー!」

「不承不承ながら、了承しましょう。詳しいことは後で聞かせてもらいます」

○○○

マリアのステージ、その特別席で未来と創世を始めとする三人組が両手にサイリウムを持ちながら興奮を隠せないでいた。

未だ到着しない親友たちを心配して時計を確認する。

「まだビツキーたち、まだ来ないの?メインイベントが始まっちゃうよ?」

「うん……」

未来が肩を落とした。

「せっかく風鳴さんが招待してくれたのに、今夜限りの特別ユニットを見逃すなんて」

「期待を裏切らないわね、あの子たちだったら」

弓美が言い終わったとたんステージの明かりが落ち、観客たちが一斉に翼とマリアのカラーのサイリウムを灯らせていく。

リフトの上で専用衣装に着替えたマリアが同じく着替えた翼に問いかける。

「見せてもらうわよ。戦場に冴える、抜身のあなたを!」

「……」

翼の沈黙をもってこれを了承とし、今夜限りのデュエットソングを歌う。それは剣を模したマイクと演出に使われる炎のグラフィックを全部使ったまさに、『剣の舞』であった。

『ありがとうみんな!』

観客たちに手を振り、翼は来てくれたことに感謝を述べる。また一つ熱が上がった。

『私は、何時もみんなからたくさんの勇気を分けてもらっている。だから今日は、私の歌を聞いてくれる人たちに少しでも、勇気を分けて上げられたらと思うている!』

歓声が上がリ、マリアが続いた。

『私が歌う全部、世界中にくれてあげてあげる！振り返らない、全力疾走だ。ついてこれる奴だけついてこい！』

その宣言は世界中に生中継され、インド人は涙まで流している。

『今日のライブに参加できたことを感謝している。そしてこの大舞台に日本のトップアーティスト、風鳴翼とユニットを組んで歌えたことを』

『私も素晴らしいアーティストに巡り合えたことを光栄に思う』

二人は静かに手を差し出し、握手を交えた。

『私達が世界に伝えていかなきゃね、歌には力があるってこと』

『それは、世界を変えていける力だ！』

マリアは翼の手を放し、彼女に背を向けて歩き出しながらマイクに言葉をのせる。

『そして、もう一つ』  
「？」

マリアが衣装のスカートを翻した瞬間、ステージの下、客席に無数のノイズが召喚される。

人類の敵、ノイズの出現に観客は逃げまどう。翼は動揺を隠すことが出来ない。

マリアが叫んだ。

『うろたえるなッ！』

その一声で騒ぎ立てられていた観客たちが静まり返った。

ノイズは人を襲うことなくその場に立ち尽くしているだけだ。

動揺は特別席にいる未来たちにも広がっていた。

「アニメじゃないんだよ?!」

「なんでまたこんなことに……」

「響……雷……」

○○○

雷と響、クリスをのせたヘリが現場に急行する。

「了解です。装者三名と共に状況介入までに四十分を予定。事態の収拾にあたります」

通信を切り、装者たちのほうを振り向いた。

「聞いての通りよ。火を置かすの三連戦になるけど、お願い」

友里の言葉に三人は静かに頷く。

クリスがうっとおしそうに言う。

「またしても操られたノイズ!」

「詳細はまだわからないわ。だけど……」

「だけど?」

「ソロモンの杖を狙った襲撃と、ライブ会場に出現したノイズが全くの無関係とは思えない」

「行方不明になったウエル博士と杖の行き先も気になりますね。あのケース博士しか開けられないはずですし」

暗にウエルが暗躍していることを仄めかしながら発言する雷。

ヘリのモニターには渦中の翼とマリアが映されていた。

翼が自身のギア、それが変化したペンダントを露出させる。

「怖い子ね。この状況にあっても私にとびかかる気を窺っているなんて」

マリアが挑発とも牽制ともとれる発言をする。

「でもはやらないの。オーディエンスたちがノイズからの攻撃を防げると思ってる?」

「くッ」

「それに……」

マリアが全世界生中継されてるモニターに目線をやった。

「ライブの様子は世界中に中継されているのよ? 日本政府はシンフォギアに関する概要を公開しても、その装者については秘匿したままじゃなかったかしら? ね? 風鳴翼さん?」

「甘く見ないで貰いたい。そうとでも言えば、私が鞆走るのをためらうとでもおもったか?!」

翼がマリアにマイクを突きつける。

それを見てマリアが笑った。

「あなたのそういうところ、嫌いじゃないわ。あなたのように誰もが誰かを守るために戦えたら……世界は、もう少しまともだったかもしれないわね」

「なん……だと……?」

動揺と共に、翼はマイクを下す。

「マリア・カデンツァヴナ・イヴ……。貴様はいったい……」

「そうね。そろそろ頃合いかしら」

剣のようなマイクを回転させ、世界中に届くように宣言する。

『私達は！ノイズを操る力をもってして、この星のすべての国家に要求する！』

「世界を敵に回しての口上?!コレはまるで……」

それは世界に対しての宣戦布告であった。

『そして……』

マリアはマイクを天高くへと投げ上げ、歌った。

「G r a n z i z e l B i l f e n G u n g n i r Z i z z  
l」

「まさか?!」

二課でも反応が検知される。メインモニターに表示された聖遺物の名を見て弦十郎が叫んだ。

「ガングニール……だとお?!」

奏が所有し、響に託した『ガングニール』のアウフヴァツヘン波形を発するギア、即ち、『ガングニール』をマリアが纏う。

その色は響とは異なり紫を基調にした黒、そしてマフラーの代わりにマントがたなびいていた。

あまりのことに翼を始めとした装者たちは驚愕する。

同じギアを纏う響がつぶやいた。

「ガングニール……」

黒いガングニールを纏ったマリアが再びマイクを掴んで宣言した。

○○○

『私は、私達はファイネ。そう……終わりの名を持つものだ!』

その宣言を、雷は聞いた。聞いてしまった。

体中からは冷や汗が噴き出し、瞳孔が開き切っていて、呼吸も荒くなっている。目からは涙があふれ出てくる。

「ファイネ……?私の……響の……約束が、破られた……?な、なんで

「? どうして?」

「ツ?! おいお前! しつかりしろ! あいつらがフィーネなわけないだろ?!」

「落ち着いて! 了子さんと約束したでしょ?! 大丈夫だよ! 了子さんは約束を破るような人じゃないって雷も知ってるでしょ?!」

響とクリスが必死に呼びかけるが雷は聞く耳を持たない。さつきから「なんで? どうして?」の繰り返しだ。

彼女の頭の中に家族を殺され、歩んできた過去の恐怖と、約束を破られたことによる怒りと殺意がこみ上げ、ごちゃ混ぜになる。

自らを抱きしめるようにして、体をガタガタと震わせる。

「ツ……………!」

雷は声にならない叫び声を上げた。



## 非現実的な要求

状況の把握に努める二課指令室に防衛相からの通信が入る。

モニターにはそばを啜っている老人がいた。

「柴田事務次官?！」

『厄ネタが暴れてるのはそつちだけじゃなさそうだぜ。少し前にさかのぼるがな』

柴田はそばを啜りながら新たな敵、武装組織フィーネに関するであろう情報を弦十郎に話し始めた。

曰く、米国の聖遺物研究機関でトラブルが発生し、今まで解析してきたデータがだめになったばかりか保管していた聖遺物までもが失われた。と言うのだ。

「こちらの状況と連動している?！」

柴田はそばを啜りながら弦十郎の言葉を肯定する。食事しながらの連絡だが、次官としての腕は確かだ。

○○○

黒のガングニールを纏ったマリアは、カメラが向けられていて翼がギアを纏えないことを良いことにマイクで要求内容を告げる。

『我ら武装組織フィーネは各国政府に対して要求する。そうだなあ……差し当たっては、国土の割譲を求めようか!』

「馬鹿な……」

翼の発言を無視してマリアは続ける。

『もしも二十四時間以内にこちらの要求が果たされない場合は、各国の首都機能がノイズによって無然となるだろう……』

各国の首脳たちの反応は千差万別。慌てるものもいれば、断固たる態度で受け止めている者もいる。

「何処までが本気なのか……」

マリアが翼のほうを向いた。

『私が王道を敷き、私達が住まうための楽土だ。素晴らしいと思わないか?』

その様子を見ていた柴田が鼻で笑いながら言う。

「しやらくせえなあ、アイドル大統領とでも呼べばいいのかい？」  
ともにそれを聞いていた二課のオペレーター、藤堯が現実的な意見を述べる。

「一両日中の国土割譲なんて、まったく現実的ではありませんよ！」  
藤堯の言葉を聞きながら組織のトップとして柴田に告げる。

「急ぎ、対応に当たります」

『おう。頼んだぜ』

柴田からの通信が切れ、新たに友里からの通信が入った。

音声の中に錯乱した雷の叫び声が介入している。

「どうした?!」

『彼女たちがフィーネと名乗ったことによって……』

「雷くんの精神が不安定になったか……」

『はい……』

状況から雷に関することだと推測し、友里に鎮静剤を打つことを許可する。コレは雷のために用意されたもので、もしものために持たされてきたのだ。

しばらくして雷の叫び声が静まり、同乗している響とクリスの「よかったあ」という安堵の声が聞こえてきた。

これからの事を友里に伝える。

「現場に到着するまでに安定していれば任務に投入、不可能だと判断すれば外しても構わん」

『了解しました』

通信が切れる。

（家族と未来をフィーネによって奪われたのだ。こうなっても仕方がない……か）

弦十郎は雷の置かれている状況を黙って案じた。

○○○○

「何を意図しての語りか知らぬが……」

「私が語りだと?」

翼が静かに言う。

マリアはそれを挑発と取ったようだ。

「そうだ！ガングニールのシンフォギアは、貴様のような輩に纏えるようなものではないと覚える！」

天羽々斬を纏うために歌い始める翼だったが、それはインカムから入ってくる緒川の忠告によって止められる。

『待ってください翼さん！』

「っ?!」

『今動けば、風鳴翼がシンフォギア装者だと全世界に知られてしまいます』

「でも、この状況で！」

今すぐにもマリアを止めたい翼と、装者だとバレるのを避けたい緒川の意見。周りが見えなくなっている彼女を緒川がなだめる。

『風鳴翼の歌は！戦いの歌ばかりではありません。傷ついた人を癒し、勇気づけるための歌でもあるのです』

その言葉に翼は落ち着きを取り戻し、顔を引き締めて正面からマリアを見据える。

「確かめたらどう？私の言ったことが語りなのかどうか」

二人の間の静寂が訪れる。

「なら……」

その拮抗状態を破るべく、マリアが観客たちに告げた。

『会場のオーデイエンス諸君を開放する！ノイズに手出しはさせない。速やかにお引き取り願おうか！』

「何が狙いだ？」

自ら有利な状況を放棄した彼女に対し、翼は何か裏があるのでは？と勘繰る。

「ふん」

『何が狙いですか？こちらの優位を放棄するなど、筋書にはなかったはずです。説明してもらえますか？』

ギアに搭載された通信機から老いた女性の声が聞こえてきた。声の主が如何やらこの事件の首謀者のようだ。

「このステージの主役は私……。人質なんて、私の趣味じゃないわ」「血に汚れることを恐れないで。……はあ、調と切歌を向かわせてい

ます。作戦目的をはき違えないようにおやりなさい」

「了解マム。ありがとう」

マリアが女性との通信を切った。

観客たちの避難は順調に進み、残すは世界中にこの様子を中継しているカメラを止めるだけとなった。

雷と響を待っていた未来も、友人たちに促されて特別席を後にする。

ステージに向かうへりの中で響たちは現状を聞かされる。

「よかったー！じゃあ観客に被害は出てないんですね?!」

少しうつろな状態の雷も響に膝枕してもらいながらその報告を聞いて頬を緩ませる。彼女は鎮静剤の副作用によって筋肉が軽く弛緩し、力が入らない状態になっているのだ。この副作用は体調にもよるが、基本的に五分ほどで抜けるようになっていく。

現在二課ではもう一振りの撃槍、ガングニールの詳細を調査しているようだ。

○○○

緒川は翼を映すカメラを止めるために制御室へと駆けていた。

（今翼さんは、世界中の視線にさらされている……。その視線の檻から、翼さんを解き放つには……）

すると緒川の視界の端、階段を上った先に手をつないで物陰に隠れる少女達の姿がチラついた。

逃げ遅れたのか、怖いもの見たさで隠れている子供だろうと緒川は避難を促すために優先順位を変えて階段を上る。

「やっべ。あいつこっちに来るデスよ?!」

「いざとなったら、切ちゃん」

黒髪をツインテールにした小柄な少女が、表情を変えぬまま胸元からシンフォギアのペンダントを取り出す。それを「切ちゃん」と呼ばれた金髪の少女が慌てて引っ込めさせる。

「ふわはっは?!調べてば、穏やかに考えれないタイプデスカあ?!」

「どうかしましたか?」

「ふえっ?!」

調と呼ばれた少女の胸元にペンダントをしまい切った瞬間、彼女たちにとってはギリギリのタイミングで緒川が声をかけてきた。

「早く非難を！」

「うわあ！ええつとデスね……」

「ジ——……」

ツインテールの少女、調が緒川を黙って見つめるのを金髪の少女、切ちゃんこと切歌が笑顔を取り繕いながら遮る。

「この子があ！急にトイレ、とか言い出しちゃって「ジ——……」……つてデスね。あははは……」「ジ——」参ったデスよお」「え？」

調が避けて緒川を見つめ続けるのを何とか遮る。その動きは明らかに不自然だった。

緒川は避難誘導のために少女たちに提案する。

「ああ、じゃあ用事を済ませたら非常口までお連れしましょう」

「心配無用デスよ！……ここらでちゃちゃつと済ませちゃいますから大丈夫デスよ！」

「分かりました。でも、気を付けてくださいいね？」

少女たちを信じて、緒川は自身の本来の目的のために再び制御室へ向かった。

「あ、はいデス……ハア、何とかやり過ぎしたデスかね……」

緊張が解けたのか切歌が肩をがっくりと落とす。後ろから調が「ジ——」つと今度は切歌のことを見つめ続ける。

「どうしたデスか？」

「私、こんな所で済ませたりしない……」

「さいデスか……」

どこかズレている調の言葉に、切歌はさらに肩を落とした。

少し呆れながら切歌は続ける。

「まったく、調を守るのは私の役目とは言え、毎度こんなじゃ体が持たないデスよ？」

「いつもありがと。切ちゃん」

切歌は調の肩を叩いて連れ添って歩き出した。

「それじゃっ、こっちも行くとしますデスカね！」  
二人はマリアのもとに向かうためにアリーナの奥へと向かって  
いった。

## 稲妻の逆鱗

無人となったアリーナを一陣の風が吹き抜ける。

マリアは観客席のほうを向き、翼はそんな彼女を警戒し続ける。

「帰るところがあるというのには、羨ましいものだな……」

「マリア……貴様はいつたい……」

マリアが翼のほうを向く。

「観客はみな退去した。もう被害者が出ることはない。それでも私と戦えないということは、それはあなたの保身のため。あなたは、その程度の覚悟しかないのかしら？」

覚悟の決まりきったテロリストの言うことだ、聞き流せばいいものを翼の防人としてのプライドがそれを拒絶する。

自らの存在を主張するかのようにペンダントが煌めいた。

マリアはガングニールのアームドギアを抜かず、剣を模したマイクを構え、翼に斬りかかる。

「フッ！」

ギアの有無というハンディキャップを追いながらも、剣を扱うものとして翼は互角の立ち回りを演じる。

しかし、ギアを纏うマリアはマントをブレードのように扱い、翼のマイクを切断する。翼はギリギリのところを回避し、バク転で距離を取った。

もう使えないマイクを翼は投げ捨てる。

二課のヘリでもそれは確認されていた。

雷を膝枕しながら叫ぶ。

「中継されてる限り、翼さんはギアを纏えない！」

「おい！もつとスピード上がらないのか?！」

「あやくひあないとまにああない！（早くいかないと間に合わない！）」

雷は鎮静剤の副作用がまだ抜けきっておらず、話すことは出来ても言葉が舌足らずになってしまう。

クリスの怒鳴りに友里が答えた。

「あと十分もあれば到着よ！」

響が雷の手を強く握りしめる。

モニターには剣を失ったとしてもマリアの攻撃を回避し続ける翼の姿が写っていた。

「つばひやひやん、やつぱりしゅごい……（翼さん、やつぱりすごい）」

ギアがなくなるともマリアと互角に戦っている翼を見て雷が感服する。が、カメラから一瞬姿が写らなくなったと思ったその時、マリアの攻撃を喰らったのかノイズのいる客席に吹き飛ばされていた。

ノイズがゆつくりと翼の落下地点へと向かう。

「翼さんツ！」

「ツ！」

響が絶叫する。

その目には涙を浮かべていた。その一滴が雷の頬に落ちる。

「翼さんが、歌を捨てるつもりで……」

『聞くがいい！防人の歌を！』

音声として拾えるほどの音量で翼が宣言した。その瞬間、中継されていたすべての映像が消失する。

響がモニターを掴んでガタガタと揺する。

「ええ〜?!なあんで消えちゃうんだよお！翼さん！翼さあーん！」

「現場からの中継が遮断された?!」

「おがやさんがやったんらよ！（緒川さんがやったんだよ!）」

雷の副作用もだんだんと抜けてきている。言葉がしっかりとってきた。

クリスが我が意を得たり、というようにこぶしを手のひらに打ち付ける。

「てことはつまりい……?」

「ええ！」

「え?ええ?」

理解できていない響に膝の上から簡潔に響に伝える。

「ぎあがまとえるようになったんだよ、ひびき」

「なるほどお〜！」



〇〇〇

意を決した翼が歌う。

「Imyuteus Amenohabakiri Tron」

シンフォギアが翼の着ていた衣装を分解し、その際に発生したエネルギーバリアが真下にいたノイズを塵へと変える。

蒼き剣のシンフォギア『天羽々斬』を翼が纏い、位相差障壁からノイズを無理矢理引きずり出しながら剣による斬撃で次々と両断していく。

当然、雷や響と同じくXDモードの影響でロックが外れ、少し形が変化している。

翼の剣が大剣へ姿を変えた。

『蒼ノ一閃』

ロックが外れたことで強化された一閃がノイズの群れを切り裂く。さらに翼は逆立ちのまま開脚し、両足のブレードを展開してコマのように回りながらノイズを殲滅する。

『逆羅刹』

マリアが異常に気付いた。

「中継が中断された?!」

間一髪で緒川が間に合ったのだ。

肩で息をしながら二課のエージェントとして、翼のマネージャーとして言う。

「シンフォギア装者だと世界中に知られて、アーティスト活動が出来なくなってしまうなんて、風鳴翼のマネージャーとして許せるはずがありません!」

すべてのノイズを殲滅した翼はマリアの待つステージに舞い戻り、剣を構える。

二人の装者がにらみ合う。

先に動いたのは翼だ。

「いぎゃー押してまいるー!」

翼の連撃をマリアは舞うように回避する。彼女のマントによる攻撃を翼は剣で払うがそれでも止まることなく攻撃が入る。

翼は何とか逆手でマントを弾き、その衝撃で距離を取った。

一連の動きで確信する。

「この GANG ニールは、本物?!」

「ようやく御墨をつけてもらった。そうだ。これが私の GANG ニール。何物をも貫き通す、無双の一振り!」

マントを刃のように振るい、それを翼は受け止めていく。

「だからとて! 私が引き下がる通りなど、ありはしない!」

『マリア。フォニックゲインは現在、二十二パーセント付近をマークしています』

(まだ七十八パーセントも足りてない?!)

再び聞こえてきた女性の声にマリアが動揺する。

そしてそこを見逃すほど防人たる翼は甘くない。マリアの攻撃を弾き、両大腿部から二本の両刃剣が射出され、それを受け止める。

「私を相手に気を取られるとは!」

両の刃を連結させた瞬間、刃が炎を纏い、それを翼は高速で風車のごとく振り回す。印を結び、脚部と腰部のブースターを点火してマリアに高速で炎の一撃を与えた。

『風輪火斬』

「話はベッドで聞かせてもらおうツ!」

もう一撃を加えようとしたその時、空から無数ののにぎりぎりが翼を襲った。それをギリギリで防ぐ翼だがその攻撃を放った者、ピンクのギアを纏ったツインテール少女、調が追撃をかける。

『α式・百輪廻』

翼の動きを固定させ、その背後から緑のギアを纏い、大型の鎌を構えた金髪の少女、切歌が出現する。彼女は鎌の刃を分裂させ、ブーメランのように投擲する。

「行くデス! ハアツ!」

『切・呪りeTTお』

その場に固定されていた翼に死角からの挟撃は対応出来ず、ダメーシを追ってしまう。

少女たちはマリアのもとに並び立つ。

「危機一髪……」

「まさに間一髪だったデスよ！」

翼が体を起こしながら驚愕する。それは姿を見ていた緒川も同様だった。

「装者が……三人?!」

「あの子たちは、さっきの?!」

不敵な笑みを浮かべながらマリアが翼に歩み寄る。

「調と切歌に救われなくても、あなた程度に後れを取る私ではないんだけどね?」

「貴様みたいなのはそうやって……!見下ろしてばかりだから勝機を見落とす!」

「上か!」

へりから雷を除く装者たちが真上から攻撃を仕掛ける。

クリスがガトリング砲を作り出し、空中から弾をばら撒いて先制攻撃を行う。

「土砂降りのお!十億連発!」

### 『BILLION MAIDEN』

調と切歌は左右に散会することで真上からの弾丸を回避し、マリアはマントをシールドにすることでそれを受け止める。

続いて響の繰り出した拳を回避する瞬間にマントで一撃を繰り出す。しかし、響はそれを翼を抱きかかえて回避しながら距離を取る。

三対三、両者が並び立ち、相打つ形となった。

雷が居ないことが気になった翼が響に尋ねる。

「立花。轟はどうした?」

「雷はフィーネの名前を聞いて、その……」

「そうか……」

「様子を見て、どうか決めるみたいですけど……」

雷はへりの中でヘッドホンを装着して響たちの状況を把握しながら、副作用の一つである筋肉の弛緩が抜けたことで行動可能かどうかを確認していた。相手がフィーネの名を冠していることによる錯乱は鎮静剤のおかげで緩和されているが、もう一つの副作用の思考の鈍

化は抜けていない。

『やめようよこんな戦い！今日であった私達が争う理由なんてないよ！』

「外れたとはいえ一発殴っておいてそれはどうかと思うけど……。響らしいや」

ヘッドホンから入ってくる響の声を聴いて、雷が頬を緩ませた。

『そんな綺麗ごとを！』

『へ?!』

『綺麗ごとで戦うやつ这种事なんか、信じられるものかデス！』

クリスの時のように真っ向から否定される響の言葉。

『そんな。話せばわかり合えるよ！戦う必要なんか……。』

『偽善者……。！この世界には、あなたのような偽善者が多すぎる……。！』

ピンク色のギアを纏う少女、調の発言を聞いて雷の中で何かが切れた。

雷は無表情のまま友里に耳に当てていたヘッドホンを手渡す。

「大丈夫みたいなので……。行ってきます、友里さん」

「あ！ちよつと！」

装者同士の激突に備えるために、響達が降下した時よりも高く飛んでいたヘリから、雷はギアを纏いながら飛び降りた。

## 建前で心に言い訳を

調が響に対して嫌悪感を吐き出し、ツインテール部分に装着されたアームドギアから無数の小型鋸を射出しよう構えた瞬間、空が極光に包まれた。

思わずその場にいた装者全員が頭上を見上げる。

それは稲妻を迸らせながら降来する竜だった。マリアは思わず叫ぶ。

「ドラゴン?!」

「お前がご執心だった稲妻だ!」

竜はその罅を開き、その体内からローレンツ力によって加速された雷が叫びながら神速の跳び蹴りを放つ。

『雷竜降罅撃』

受け止めることが出来る威力ではないと判断したマリアと切歌、調は全速力でその場から離脱する。雷の蹴りがステージへと突き刺さった。

マリア達の判断は正解と言えた。攻撃の着弾地点は崩壊し、さらにその周囲を雷竜の罅がその熱と破壊力で焼き噛み千切ったのだ。

「雷!大丈夫なの?!」

雷は響の声をあえて無視して攻撃の威力に動揺しているマリアの懐に侵入する。これまでの会話を聞いて彼女が頭だと判断し、斬首戦術を行う。

「お前は響の背中を押したはずだ!なのに偽善者と吐き捨てるのかッ!」

「何を言って……ッ?!」

『雷刃拔拳・桜花』

速攻で懐に潜り込んだ雷の攻撃に対応し、マントで稲妻の拳を受け止める。しかし、衝撃までを受け止め切ることが出来ず、ステージ奥のモニターに吹き飛ばされてしまった。

「ぐうッ!!」

「マリア?!」

「よくもマリアを！喰らえデス！」

切歌が自身のアームドギアである鎌の刃を分裂させ、ブーメランのように投擲する。

『切・呪りeツTお』

二振りの刃が雷を挟み込むように襲い掛かる。が、拘束されてもいないのにそれを悠長に待つようなことはせず、調の対角線になるように切歌に突撃する。

調の得意射程は中遠距離、切歌は中近距離を得意としている。

そのため調からの場合なら近距離担当の切歌が介入できるが、逆の場合は調が切歌に対して誤射をする可能性から介入できないのだ。

さつきまで雷が居た場所に鎌の刃が突き刺さった。

「雷やめて！私達は戦っちゃダメなんだ！」

響の叫びは『響のために』戦っている雷の耳には届かない。

「誰かのために戦って、未来を勝ち取った響を馬鹿にするなああッ！」  
右足と腰のユニットが起動し、三日月型の電光を放ちながら切歌の意識を刈り取るべくハイキックで顎を狙う。

『雷刃拔拳・滅神』

「そんな見え見えの攻撃、当たらないデス！」

切歌はニヤリと笑うと鎌の柄を使って防御姿勢をとる。これで少なくとも意識が刈り取られることはない和高をくくっていた。彼女は知らないのだ、雷という少女が自分へのダメージを負うことにまったく考慮していないということ。

雷の蹴りが柄によって防がれそうになった瞬間、その一撃は踏ん張っていた切歌の左大腿部に落下した。急なコース変更に彼女の足の筋肉が耐えきることが出来ず、ぶちぶちと嫌な音を立てた。

「グギッ?!」

「ッ！」

その一撃を受けて切歌は自らの体を支えることが出来ず、鎌を杖代わりにして膝をついている。

雷は自身の体内から感じる肉のちぎれる感覚と痛みを歯をくいしばって耐え、ほぼ使い物にならない右足を基点にして体を回転させ、

膝をついて顔の位置が下がった切歌の顎を後ろ回し蹴りで打ち抜く。「切ちゃんッ！」

調が叫ぶも、当然のごとく切歌は意識を失った。

雷は動かない右足を引きずりながら調のもとへと歩を進める。彼女の怒りと憎しみ、そして恐怖の入り混じった表情から調は目を離すことも、足を動かすこともできない。

攻撃を避けることすらできないように見えるにもかかわらずだ。

「調はやらせないッ！」

戦線に復帰したマリアが雷と調の間に立ちはだかった。

激痛のあまり冷や汗を流しながら雷は光の抜け落ちた金の双眸でマリアを睨みつける。それは憎悪をぶつけているようにも、敵わない敵に対する最後の抵抗をしているようにも見えた。

それを知ってか知らずかマリアは調に指示を出す。

「調、今のうちに切歌を回収しなさい。ママから引き上げ命令が出たわ」

「了解ッ……！」

調が悔しそうに歯を食いしばりながら切歌のもとに駆け寄り、抱きかかえる。

その瞬間、アリーナの中心から増殖分裂型ノイズが出現した。

「何あのでつかいイボイボ?！」

響がこぼす。それは、今まで見たことが無いほどの異形の姿だった。

睨みつけるだけの雷の目の前でマリアは両腕のガントレットを連結させ、ガングニールを象徴する槍のアームドギアを構築する。

「アームドギアを温存していただと?！」

その矛先を雷にいったん向け、そしてノイズのほうへと向けた。

雷の体がびくりと跳ねる。

そしてその矛先が展開し、ノイズに向けてエネルギー砲を発射した。

### 『HORIZON†SPEAR』

その砲撃をまともに喰らったノイズは爆散し、その破片をアリーナ

中にばらまいていく。

「おいおい！自分たちで出したノイズだろ?!」

その際に発生した閃光を目くらましにマリアと切歌を抱きかかえた調が撤退する。

「待て！逃げるなッ！」

顔を青くし、立っていることすらギリギリの雷が叫ぶ。が、そんなことを聞く彼女たちではなく、小さく調が「絶対に許さない……」と言ったのが聞こえてきた。

「せっかく温まって来たところでしたっぽを巻くのかよ」

「っ?!ノイズが?!」

周囲を見渡して響が叫んだ。何故ならバラバラになったはずのノイズはその状態のまま増殖し、さつきまでよりも大きくなっているのだ。

「ハッ！」

翼が大剣に変形させて攻撃するが、さらに切り口から分裂し、増殖する。

「こいつの特性は増殖分裂」

「ほおっっておいたら際限ないってわけか……。そのうちここからあふれ出すぞ?!」

制御室に残っていた緒川から装者たちに通信が入る。その声は焦りに満ちていた。

『皆さん聞こえますか?!会場のすぐ外には、避難したばかりの観客たちが居ます！そのノイズをここから出すわけには……』

響の頭の中に未来や友達の顔が思い浮かぶ。

「観客?!みんなが……」

「迂闊な攻撃では、いたずらに増殖と分裂を促進させるだけ……」

「どうすりゃいいんだよ?!」

答えが出ないことに焦りが募る。

そんな時に響が最後の手段を提案した。

「絶唱……絶唱です！」

「あのコンビネーションは未完成なんだぞ?!」



響のとおきにおきにクリスが苦言を呈する。

「うん」

響が小さくうなずいた。

「増殖力を上回る破壊力を持つて一気殲滅。立花らしいが、理にはか  
なっている」

「オイオイ本気かよ?!」

その間にもノイズは増殖を繰り返し、体の一部を破裂させて個体数  
を増やしていく。

「どうこう言っではいられなくなった。」

「雷!とっておき、やるよ!……雷?」

響が雷を呼ぶが反応がない。

彼女は膝から崩れ落ち、自らを抱きしめるようにして震えだした。

「まさか、鎮静剤が切れたのか?!」

「ウソだろこのタイミングでかあ?!」

翼の言う通り雷に打ち込まれた鎮静剤の効果が切れたのだ。

いや、効果は最初から切れていた。恐怖で折れそうな心を響を罵つ  
たことに対する怒りで支えていたのだ。が、調の一言でその支えも折  
れ、今の彼女の思考はフィーネに対する恐怖で埋め尽くされている。

「三人でやるしかない……!行きます!S2CA・トライバースト!」

三人の装者は手をつなぎ、絶唱を響が束ね、調律する。雷が動けな  
い今、最大威力のペントラストライクは使えない。三人で行けるのか、  
それが不安要素だった。

絶唱の威力が収束し、三人を輝きが包む。

「スパークソングツ!」

「コンビネーションアーツツ!」

「セツトツ!ハーモニクスツ!」

バラバラだった絶唱が響の手をつなぐ力、束ねる力のもとに一つの  
絶唱となる。

その余波だけでノイズがはじけ飛んでいく。

響を離さないよう、握る手の力を強くした。

「耐えろ、立花!」

「もう少しだッ！」

絶唱が放つエネルギーがアリーナの外まで漏れ出ている。

「響……雷……」

未来は中で戦っている二人の親友の無事を祈る。

ノイズの肉をすべてそぎ落とし、本体が露出した。

「今だ！」

「レディッ！」

響のギアの各部位装甲が解放され、ガントレットを組み合わせることで絶唱のエネルギーを収束させる。

内部のドリルユニットが回転し、エネルギーを加速していく。

「ぶちかませえ！」

「これが私達のお！絶唱だアア！」

腰のブースターを点火し、骨のような姿になった分裂増殖型ノイズにアップercutをきめる。

大型化したガントレットに搭載されたブレードが展開し、ドリルユニットと高速回転し始める。そしてバンカーユニットが起動し、竜巻のように高速回転する三人分の絶唱を一気に叩きこんだ。

渾身の一撃は雲を裂き、ノイズを完全に消滅させる。

その一部始終をマリア達は見ていた。

「綺麗……。見える？切ちゃん……」

「こんな化物もまた、私達の戦う相手……」

気絶し、調に抱きかかえられた切歌を一瞥し、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。

ノイズの塵だけとなったアリーナで響は崩れ落ちてしまう。脳裏に偽善者と自分のことを罵った調の姿がよぎる。

そんな響のもとにクリスが、恐怖に震える雷には翼が駆け寄る。

武装集団フイーネとの最初の戦いは、二課の装者二人の心にとつもなく大きな傷を叩きつけたのだ。

○○○

彼女たちの様子をアリーナの裏で人影が動いた。

ソロモンの杖を保有し、英雄になろうとする白衣の男、ウエルの口

が歪な笑みを浮かべていた。

## 懐かしい夢

モニターだけが光源の暗い研究室にて、車椅子の老いた女性が表示されたキーボードを滑るように叩いていく。彼女こそマリアに指示を出していた人物、ナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ。彼女たちから『ママ』と呼ばれている。

『スパープソングッ！』

『コンビネーションアーツ！』

『セツトツ！ハーモニクスッ！』

モニターには彼女たち武装組織フィーネが引き起こしたアリーナ襲撃事件、その際に二課の装者たちが行った戦術『S2CA』の録画映像が映されていた。

（他者の絶唱と響き合うことでその威力を増幅するばかりか、生体と聖遺物のはざまに生じる負荷をも低減せしめる……。櫻井理論によると、手にしたアームドギアの延長に絶唱の特性があると言うが……。誰かと手をつなぐことに特化したこの性質こそ、まさしく立花響の絶唱……。）

ナスターシャが映像を停止した。

（降下する月な欠片を砕くために絶唱を口にしても尚、装者たちが無事に帰還できた最大の理由。絶唱の三重奏ならばこそ計測される、爆発的なフォニックゲイン……。）

映像が切り替わり、無数の文字列が画面を走ったのち、卵とも顔とも取れる物体が表示される。

そしてコードが撃ち込まれた後、檻の中で暴れる異形のバケモノの映像へと変わった。

（それをもってしてネフィリムを、天より堕ちた巨人を目覚めさせた。覚醒の鼓動……。）

バケモノの名は完全聖遺物『ネフィリム』。

天より堕ちた巨人、その全ての融合体であるその存在は、聖遺物にして生命のように行動する。自律性を持つ異色の聖遺物であった。

突然、ナスターシャは再びライブ映像、それも『S2CA』発動前

の物を画面に映し出し、とある人物を映しながら親し気に目を細める。

「大きくなったみたいですね。彼らも元気にやっているでしょうか……」

そう小さくつぶやき、モニターの電源を落とした。

〇〇〇

フィーネとの決戦で基地機能を喪失した二課は、新たな本部建設までの間、次世代型潜水艦内へと拠点を移していた。

その艦内をギアを解除し、メデイカルチエックを終えた装者たちが歩いていく。

雷もそのころにはすっかり精神も安定し、足のけがは翼の助けを借りている状態だ。

「すいません翼さん……。こんな事させちゃって……。・」

翼は事も何気に言う。

「案ずるな轟。お前とフィーネの間にある関係は私も理解しているつもりだ。あのような行動に出たとしても仕方がないだろう。だが……」

「おっさんのお説教は受けないな！」

「あははは……」

にやにやとしながら雷のほうを見るクリス。

そう、弦十郎から自分の身を蔑ろにするなど厳命され、そうしないように特訓を重ねてきた雷は、少しでもそれを破ると彼から雷を落とされるのだ。因みにこれは未来からの頼みでもある。

雷が顔を青くしているうちに指令室の前に到着していた。

「装者一同、無事帰還しました」

ドアがスライドし、四人は入室する。

目の前には明らかに不機嫌そうな弦十郎が立っていた。

「俺が何故、怒っているのかわかるな？雷くん……」

「はい……」

返事が尻すぼみになる。

その答えを聞いて弦十郎はため息をつきながら答えた。

「分かっているのならいい。だが、君の体が君だけのものでないことをしっかりと覚えておくように」

「分かりました……」

罰として反省文を書くように言われ、用紙を受け取る。

隣に立っていた緒川が雷のけがの状態を説明する。

「雷さんのけがの状態は痛みや見た目に反してそこまでひどいものではありませんでした。普通の治療で二、三日。うちの治療カプセルを使えば半日で治るでしょう。よかったですね、雷さん」

緒川がにつこりと笑う。

「よかったあ〜！」

「ちよ?! 響！ 痛いって！」

「わわ！ ゴメン雷、でもよかったです」

響が雷に抱き着く。それも左側から結構勢いよく抱き着いたため、けがをした右足で踏ん張る羽目になってしまった。

「じゃあ師匠！ 私、メデイカルルームから松葉杖取ってきます！」

「待ちたまえ響君」

雷の松葉杖を手に入れるために指令室を出ようとした響を弦十郎が止める。

「雷君には特別にうちの治療カプセルを使わせてあげよう。幸いなことに明日は休日だからな。未来君には申し訳ないが雷君は帰れないと言っておいてくれないか？」

「はい、師匠！」

響と弦十郎が熱血師弟関係をしている間に緒川が雷をカプセルに案内する。

「雷さんは僕についてきてください」

「分かりました。じゃあ響、また明日ね」

「うん！ また明日！」

「翼さんもお疲れさまでした。クリスもまた学校で」

「ああ」

「おう」

全員に別れを告げ、雷のために歩く速度を遅くした緒川の後をつい

ていく。

目立った会話こそなかったが、静かでも安心できる空気があったおかげで気まずさはない。そう思っているうちに目的地に到着した。

「僕はカプセルの準備をしておくので、雷さんはこれに着替えてください」

そう言われて渡されたのは病院などで着るような甚平型の患者服だった。緒川がカプセルの準備をしているうちに別室で着替え、楽な姿勢で待機する。

ノックが聞こえてきたので返事を返す。

「準備が出来たのでこちらへどうぞ。ゆっくりで構いませんよ」

「はい」

痛くならないようにゆっくりとドーム型のカバーがついたベッドに寝転がる。緒川がスイッチを押し、カバーが下りて雷を包み込んだ。

カバー越しに緒川の声が聞こえてくる。

「もしも何かあった時には脇にあるボタンを押してください。指令が僕が駆け付けますので。それではお休みなさい」

「何から何までありがとうございます。おやすみなさい」

「気にしないでください。雷さんも二課の仲間なんですから」

緒川はにっこりと笑って電気を消し、メデイカルルームを後にした。

暗くなり、一人になった雷は静かに瞼を閉じる。カプセルの効能に寝入りを良くする効果があるのだろうか。

雷の意識は奥深くまで落ちていった。

○○○

その日雷は夢を見た。まだ幸せだったころの夢を。

あの日が来るまで毎年三回ある春休み、夏休み、冬休みは日本で研究している両親が幼い雷をアメリカの研究施設に連れて行ってくれたのだ。

そこで四人の同年代の女の子に出会う。

母親に紹介され、雷はすぐに彼女たちと仲良くなった。二年目は一

生懸命に勉強し、英語を覚えた。母親無しでも話が出来るように。「ねえ■！今度の休みはあなた達がこっちに来なよ！いいとこいっぱい教えてあげるよ？」

グループのリーダーらしき少女に雷は問いかける。が、その少女は少し悲しそうな顔で首を振った。

「ゴメンね雷……。私達、病気だから出れないんだって……」

■の答えを聞いて、雷が子供らしい無邪気さでにっこりと笑う。

「そっか！じゃあ、治ったら来てね！案内するから！約束だよ？」

「うん！約束！」

■は悲しそうだった顔を笑みに変え、頷いた。彼女の妹の■が勢い良く手を上げる。

「私も行っていい?！」

「いいに決まってるよ。■に■も、来ていいからね？」

「ほんとデスか?！」

「やった……」

雷のことを「あず姉ちゃん」「あず姉さん」と呼び、いつもワンセットでいる快活な■と引つ込み思案で物静かな■の二人も招待する。雷にとって大切な妹分だ。

「じゃあ、今日は何しよつか！おしゃべりもいいけど、それはベッドに入ってからにしましょ」

■が話題を切り出し、全員がさんせーつと声を上げる。

「うーん……。オセロ大会はこの間やったし……」

少女たちが考える中、雷一人だけが不敵に笑う。

「どうしたのあず姉さん。お腹痛いの？」

「そんなことないよ■。実はですね……今回は日本のおもちやを持ってきているのです！」

一拍置いて少女たちは歓声を上げる。一度でいいから雷の故郷の遊びをしてみたかったのだ。

もう彼女たちの顔も名前も思い出せない。それに会えたとしても向こうも覚えていないだろう。お互いに成長しているのだから。

ただ覚えているのは■から母親を通して教えてもらった歌であ



る「Apple」だけだ。  
そんな悲しくて、でも楽しいかった思い出の夢だった。

少しずつ変わっていった一週間

潜水艦内に設営された仮設二課では、依然フィーネの行方を追っていた。ライブ会場襲撃事件から今日で一週間になる。

藤堯がキーボードをタイプしながら言葉をこぼした。

「ライブ会場襲撃から今日で一週間ですね……」

「ああ、何もないまま過ぎた一週間だった」

弦十郎も同調する。

友里は入手した情報を確認するように述べる。

「政府筋からの情報では、その後フィーネと名乗るテロ組織の一切の恣意行動や、各国との交渉も確認されていないとのことですが……」

「つまり、連中の狙いはまるで見えて来やしないということだ」

フィーネが行動を起こさなかったため、分かっている情報は一週間前のままなのだ。

「傍目には、派手なパフォーマンスで自分たちの存在を知らしめたくらいです。おかげで、我々二課も即応出来たのですが……」

「ことをたくらむ輩には、似つかわしくないやり方だ。案外、狙いはそのあたりだろうが……」

『風鳴指令』

「おっ」

今この場にはいない緒川から通信が入ってきた。

彼は様々な手掛かりを自らの足で探っていたのだ。

「緒川か。そっちはどうなってる」

『ライブ会場付近に乗り捨てられていたトレーラーの入手経路から遡っているのですが……』

通信に無数の怒号が入っているあたり、ヤクザの事務所か、それに類するところにいるのだろう。緒川は銃や短刀を向けられていながらも、落ち着いた声色で調査結果を報告し始める。

『「この野郎！」たどり着いたとある土建屋さんの出納帳に「こいつ忍法を使うぞ?!」架空の企業から大型医療器具や医薬品、計測機器が「体が動かない……?!」大量発注されている痕跡を発見しまして』

「ん？医療機器が？」

弦十郎が顎に手を当てて引つ掛かったワードを追求する。

『日付は、ほぼ二か月前ですね。反社会的なこちらの方々、資金洗浄に体よく使っていたようですが……』

事務所の金庫から目的の書類を取り出し、弦十郎に報告する。

彼が無事に連絡できているあたり、反社会的な方々がどうなっているのかなど、言うまでもないだろう。

『この記録、気になりませんか？』

「ウーム……。追いかけてみる価値はありそうだな」

フィーネに対する最初の切り口が決まった。

○○○

フィーネとの戦いにおいて崩壊したりディアンであったが、廃校になった学校を政府が買い取ったことで新生することとなった。

生徒数も六割程度まで減少しているものの、徐々に混乱も収まっており、今では新生活の活気が見え始めている。

学校の一室。そこで雷は響と未来に挟まれ、前と変わらぬ席配置になつていた。が、雷は天井を見上げ、響は窓の外を見つめてとそれぞれ上の空だ。

（武装組織フィーネの連中であつてから一週間、あれから毎晩同じ夢を見る……）

名前も顔も覚えていない同年代の少女たちに囲まれて笑い合う幼い自分。何度その夢を見ても彼女たちが誰なのかが思い出せないでいた。

恐らく年下の二人組からは姉扱いされていたが、直接呼ばれでもない限り分かることはないだろう。

最近ではそれが悪夢のようにも感じられ、あまり眠れていないために目の下にはうつすらと隈が出来ている。

（手口からしてフィーネじゃない……。頭ではわかっているんだけど……）

心がわかってくれない。

フィーネによって与えられた大切なものを失う恐怖、それによって

ゆがめられた自身の未来。心に植え付けられた潜在的な恐怖が理性で分かっているにもかかわらず抑えられない。

事実、あの日以降大きな物音や、何かしらの悲鳴を聞くたびに体がすくみ上るか響や未来、雷の思う大切なものの盾になる行動をとってしまう。

「はあ……」

雷と響がそろってため息をつき、一週間ずっとそんな調子の二人を未来が心配そうに見つめる。

先生が雷たちの席まで歩いてきた。

「響、雷……！二人とも……！」

未来が小声で気付けようとするが二人の耳に届くことはない。

ついに先生が目の前にまでやってきていた。

「立花さん……轟さん……。何か悩み事でもあるのかしら？」

「はい……とつても大事な……」

「どうしたらいいのか……よくわからなくて……」

「秋ですものねえ……。二人にもきつと思うことがあるんでしょう……。例えば私の授業よりも大事な」

「へ？あれえ？」

「あつちやあ……」

先生の『授業』というワードでようやく二人が現実に戻される。

教室一帯に微妙な空気が広がっていった。

「新校舎に移転して、三日後に学祭も控えて、誰も皆新しい環境であたりしい生活を送っているというのに。立花さんときたら相も変わらずいつもいつもいつも……」

段々と勢いが悲壮感を帯びていく。

響がいきなり立ち上がった。

「でも先生！こんな私ですが、変わらないでいてほしいと言ってくれる心強い友達も、案外いてくれたりするわけですよね……」

「プツ！ツクツクツク……」

まるで見当違いの言い訳をする響を見て雷が噴き出し、肩を震わせる。

先生が矛先を雷に変えた。

「轟さん?!」

「は、はい!」

「あなたの頭の良さは私も認めているところですよ。正直なところあなたの成績は間違いなくトップでしょう……。ですが! 授業を怠けていいわけではないのですよ?!」

「すみませんでしたあ!」

装者として戦い始めた最初のほうこそいきなりの二足のわらじで成績が下がっていたが、慣れてきたのか最近では点数を戻し、学年どころか学校でトップの成績を誇っているのだ。

因みに今の授業は雷曰く、寝てても満点を取れるらしい。

「……ばか」

叱られている二人を見て未来が小さくつぶやいた。

○○○

武装組織ファイネは現在、地下のとある施設を拠点にしていた。一週間がたち、切歌の怪我もすでに治っている。

シャワールームで調と切歌の二人がシャワーを浴び、切歌が調に話題を振っているが反応がない。

「でね! 信じられないのは、それをご飯にぎっば! とかけちゃったわけですよ。絶対におかしいじゃないですか! そしたらデスよ?」

「……まだ、あいつらの事……デスか?」

二人が思い返すのは響の事。そしてどこかで聞いた事のある声と名前、見たことのある顔をした少女、雷の事だった。

「何も背負ってないあいつが、人類を救った英雄だなんて。私は認めたくない」

「うん……本当にやらなきゃいけないことがあるなら、たとえ悪いと分かっているでも背負わなきゃいけないものだって……」

そう言ってシャワーの元栓を閉じ、調は思いっきり壁を殴りつける。

その表情は怒りにあふれていた。

「困っている人たちを助けるというのなら、どうして……」

切歌は黙って調の壁を殴った方の手を優しく包み込む。

「あず姉ちゃんもどこかであたしたちを見ていてくれるはずデス」

「うん……。あず姉さんとの約束、まだだしね」

二人はにつこりと笑い合う。今はもう、記憶の中の彼女のことは自分たちの呼んでいた愛称以外覚えていない。

「そうね。彼女との約束を守るためにも、迷って振り返ったりする時間なんて、残されていないのだから」

マリアがシャワーを浴びながら諭すように呟く。

その瞬間、アラートと共に施設内の隔壁がとてつもない勢いで起動し、完全聖遺物ネフィリムを完全に隔離する。

それを起動させたナスターシャがため息をつきながらモニターに表示されているネフィリムを見る。

（あれこそが伝承にも絵がかかれし共食いすらいとわぬ飢餓衝動……。やはりネフィリムとは、人の身に過ぎた……）

「人の身に過ぎた、先史文明期の遺産……とかなんとか思わないでくださいよ？」

暗闇の中から白衣の男、ウエルが姿を現す。

「ドクターウエル……」

構わずウエルは続ける。

「たとえ人の身に過ぎていても、英雄たるものの身の丈にあつていれば、それでいいじゃないですか」

そう言い終わった瞬間、ドアが開いて簡単なものを着たマリア達が駆け付ける。

「مامー！きつきの警報は……っ！」

マリアはウエルがいることに顔を顰める。

「次の花は未だつぼみゆえ、大切に扱いたいものです」

「心配してくれたのね？でも大丈夫。ネフィリムが少し暴れただけ、隔壁を下ろして食事を与えているから、じきに納まるはず」

衝撃が施設を揺らす。

「な！……مامー！」

「対応措置は済んでいるので大丈夫です」

「それよりも、そろそろ視察の時間では？」

「フロンティアは計画遂行のもう一つの要……。起動に先立って、その視察を怠るわけにはいきませんが……」

ウエルが何かたくらんであるのを疑うほどの満面の笑みを浮かべる。

「こちらの心配は無用。留守番がてらにネフィリムの食糧調達の算段でもしておきますよ」

「では、調と切歌を護衛につけましょう」

「こちらに荒事の予定はないから平気です。むしろこちらに戦力を集中させるべきでは？」

彼の発言は理にかなっており、ナスターシャもそれに目を細めて同意する。

「分かりました。予定時刻には帰還します。あとはお願いします」

車椅子を操作し、マリア達と共にラボを後にする。

(さて、まいた餌に獲物はかかってくれるでしょうか……)

ドアが閉じた瞬間、ウエルがゆがんだ笑みを浮かべた。

## 祝福する太陽

夕暮れ時、リディアンの校舎内でクリスは逃げ回っていた。もしも捕まってしまうは一巻の終わりだ。

曲がり角にて、走っていたせいか急に止まることもできず、そこを紙袋を抱えて歩いていた生徒とぶつかってしまう。

「わき見しつつ廊下を駆け抜けるとは、あまり感心できないな……」

そのぶつかってしまった生徒とは翼だった。

「雪音。何をそんなに慌てて……」

「奴らが……奴らに追われてるんだ……もうすぐそこにまで！」  
「何?!」

クリスの言葉を信じると、状況はかなり切迫しているようだ。聞こえてきた足音に反応してクリスが壁の影に逃げ込む。

身構える翼だったが三人の生徒が走っていったぐらいだ。

「?……とくに不審な輩など見当たらないようだが……」

「そうか……うまく撒けたみたいだな……」

クリスは安堵の溜息をつくが翼は何が何だかよくわかっていない。追っ手とはだれの事なのか、クリスに質問する。

「奴らとは、一体?」

「ああ、なんやかんやと理由をつけて、アタシを学校行事に巻き込もうと一生懸命なクラスの連中だ」

遠くからクリスを探す声が聞こえてきた。

翼はぶつかった拍子に落としてしまった道具を紙袋にしまいながらクリスの話を聞く。

「フイーネを名乗る武装集団が現れたんだぞ。あたしにそんな暇は……って、そっちこそ何やってんだ?」

今度はクリスが翼に問いかける番だ。

「見ての通り、雪音が巻き込まれている学校行事の準備だ」

翼の言う通り、リディアンの学校行事として秋桜祭と呼ばれる学祭がある。残すところ三日となったその準備のために日が傾いた今でも残って作業をしているのだ。



色とりどりの出店が並んでいる。

「それでは、雪音にも手伝ってもらおうかな」

「なんでだ?!」

唐突な翼の申し出にクリスが突っかかる。

「戻ったところでどうせ巻き込まれるのだ。ならば少しぐらい付き合ってくれてもいいだろう。あの人一倍フィーネの話題に敏感な轟ですら学祭の手伝いをしているんだぞ?」

雷を引き合いに出され、後退できなくなったクリスは洩々翼の頼みを了承した。

今は彼女の教室で飾り付けに使う花の飾りを作っている。

「まだこの生活になじめないのか?」

翼の問いに心底めんどくさそうにクリスが答える。

「まるでなじんでない奴なんかに言われたきやないね」

「ふふ、確かにそうだ。しかしだな、雪音」

「そう言い切った瞬間、教室のドアが開いた。」

「あ!翼さん!良かった」

「材料取りに行ったらまま戻ってこないから、みんなで探してたんだよ?」

「でも心配して損した。いつの間にか可愛い下級生連れ込んでるし」

「みんな、先に帰ったとばかり……」

如何やら翼の同級生のようだ。かなり親しげに話しているあたり仲はいいのだろう。

「だって翼さん。学祭の準備が遅れてるの、自分のせいだと思ってそうだし」

「だから私達で手伝おうって」

「私を……手伝って……?」

翼はポカンとしているがクリスはどうやら察したようだ。

「案外人気ものじゃねーか」

翼の同級生三人も加入し、五人体制で飾りの花を作っていく。

彼女たちの話を聞いてもう少し同級生との関係を頑張ってみよう

と思ったクリスマスだった。

〇〇〇

夜、とある廃病院に装者たち四人の姿があった。

調査によればこの建物の中に武装集団フィーネが潜伏しているらしい。翼を中心として行動する。

『いいか！今夜中に終わらせるつもりでいくぞ！』

『明日も学校があるのに、夜半の出勤を強いてしまい、すみません』

弦十郎が雷たちに気合を入れ、緒川が今回の出勤が明日に響いてしまいかもしれないと謝罪する。

「気にしないでください。これが私達、防人の務めです」

翼が勇ましく返す。

「町のすぐはずれに、あの子たちが潜んでいたなんて……」

「灯台下暗しって、こういうことを言うのかもね……」

『ここはずっと昔に閉鎖された病院なのですが、二か月前から少しずつ物資が搬入されてるみたいなんです。ただ、現段階ではこれ以上の情報が得られず、痛し痒しではあるのですが……』

「しつぽが出ていないのなら、こちらから引きずり出してやるまでだッ！」

クリスが腕を組んで不敵に言っ駆け出し、翼、響、雷の順番で同様に走り出す。

二課が雷たちの同行を補足する。

「シンフォギア装者、建物内へと踏み込みます」

弦十郎は友里の報告を聞き、腕を組んで静観する。

彼女たちの行動を補足しているのは二課だけではない。

施設内にいたウエルもだ。

「おもてなしと行きましよう……」

彼はキーボードのボタンを一つ押し、ダクトから特殊なガスを散布する。

それが散布された場所に装者たちは到達していた。

「やっぱり、元病院つてのが雰囲気だしてますよね……」

「お化け屋敷でも定番の一つだよね」

響は及び腰だが、なぜか雷はテンションが高い。フィーネとあった時に心が折れにくいように、今のうちから気持ち盛り上げてるのだ。

クリスが響をからかう。

「なんだあ？びびってるのか？」

「そうじゃないけど、なんだか空気が重いような気がして……」

「空気が重い？」

「……意外に早い出迎えだぞ」

常に注意を怠らなかつた翼が真つ先にノイズの群れを発見する。

雷は響の発言に何か引つかかるものを感じた。

ノイズと戦うため、装者たちはギアを纏う。

「Killter Ichaiaval Tron」

クリスが深紅のギア『イチイバル』を纏い、シンフォギアがノイズの位相差障壁を調律、こちらの世界に強制的に引きずり出す。

両腕部装甲をガトリング砲に変形させ、無数のノイズを塵へと変えていく。

『BILLION MAIDEN』

雷も負けじと腕部ユニットから発生させた稲妻を矢状に構築し、乱射する。

『雷乱神楽』

ある程度のノイズは減らせたが、後続からどんどんとノイズが現れ、先ほど撃破した数がチャラになってしまった。

装者四人がギアを纏って並び立つ。

「やっぱり、このノイズは……！」

「ああ、間違いなく制御されている」

「ウエル博士が敵対の可能性が大……やっぱ確実かな」

ノイズの群れへと雷たちは飛び込んでいく。

「立花は雪音のカバー！轟は私と共に来い！」

「はいー！」

前衛の翼の剣が切り裂き、雷の稲妻が焼き尽くし、後衛のクリスは踊るように弾を命中させ、彼女に近づく敵を響の拳法が吹き飛ばす。

が、いくらノイズを倒してもすぐに復活、翼の『蒼ノ一閃』であってもそれは同様だった。

装者たちの息が上がるのに対し、ノイズはその数を減らすことなく数の暴力で彼女たちを圧殺しようとしている。

「なんでこんなに手間取るんだッ?!」

「ギアの出力が落ちている……?!」

その以上は二課でも確認され、結果は翼が出した結論と同様だった。

何とかノイズを全滅させるも四人ともすでに肩で息をしている状態だ。

突然、暗闇の中から異形のバケモノが響に襲い掛かった。

「ッ?!三人とも気を付けて!」

咄嗟に響が拳で迎撃し、再び襲い掛かってきたそれを今度は翼が迎え撃つが大したダメージは入っていないようだ。

「アームドギアで迎撃したんだぞ?!」

「なのになぜ炭素と砕けない?!」

「まさか……ノイズじゃ、ない?」

「聖遺物由来の物……とか?」

「まさか! 奴は生物だぞ?!」

雷の考えをクリスが一蹴する。聖遺物が生き物など考えられないからだ。

バケモノの奥で手を叩く音が聞こえてきた。それも男が手を叩くときに発生する音でだ。

「へえ?!」

「ウエル博士!」

「やっぱりアンタか……」

雷を除く三人が驚愕し、彼女は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべる。

異形のバケモノは彼の持ってきたケージの中に入り、ウエルが口を開く。

「意外に聡いじゃないですか」

「そんな。博士は岩国基地が襲われたときに……」

「行方が分かかっていないだけで死亡確認はしていない……!」

「つまりノイズの襲撃は全部……!」

「はい。明かしてしまえば単純な仕掛けです。あの時既にアタツシユケースにソロモンの杖はなく、コートの内側にて隠し持っていたんですよ」

未然に防げたにも関わらず、それが出来なかったことに雷は歯噛みする。

「ソロモンの杖を奪うため、自分で制御し、自分に襲わせる芝居を打ったのか?!」

ウエルが杖を取り出し、展開する。

「バビロニアの宝物庫よりノイズを呼び出し、制御することを可能にするなど、この杖を置いて他にありません」

さらに追加でノイズを召喚していく。

「そしてこの杖の所有者は、今や自分こそがふさわしい。そう思いませんか?!」

「思つかよッ!」

「同意見だ英雄かぶれがッ!」

ウエルが本性を現し、英雄を否定する雷と杖の威力を知っているクリスが否定し叫ぶ。

雷が稲妻を槍状に形成し高速で発射、クリスが腰部装甲から小型ミサイルを展開し激痛と共にノイズを貫き、爆散させた。

「ぐあッ!」

「ぐううッ!」

雷とクリスを襲った痛みは、急激に下がった適合係数によってギアのバックフアアアが発生しているのだ。

爆炎をウエルはノイズを盾にすることで避ける。

痛みによってまともに立つことが出来ず、雷は響に、クリスは翼に支えてもらっている状態だ。

「クツソ……!何でこっちがズタボロなんだよ……!」

「相手はギアも纏ってないって言うのに……!」

(この状況で出力の大きな技を使えば、最悪の場合、身に纏ったシンフォギアに殺されかねない……)

クリスと雷は愚痴を呟き、翼が冷静に分析する。

「あれは?!」

空から聞こえてくる奇怪な音の方向を響が向くと、ネフィリムの入ったケージを移送する気球のようなノイズの姿があった。

「ツ！ノイズがさっきのケージをもって……!」

ノイズは海に向かって進んでおり、そのままネフィリムを移送する算段となっている。

(さて。身軽になったところで、もう少しデータを取りたいところだけど……。ん?)

響が雷を地面に下ろして拳をウエルに構え、翼もクリスを座らせる。

ウエルが両手を上げ、降参の意を示した。

「立花！その男の確保と、二人を頼む!」

翼はネフィリムを輸送するノイズに向かって跳躍する。

剣を抜刀し、ノイズに一直線に駆け出す。

(天羽々斬の機動性なら……!)

瞬間速度ではケラウノスに一步譲る天羽々斬だが、それ以外の速度ではこのギアは二課保有のシンフォギアの中で最も高い。その機動力を利用してノイズを追跡する。

『翼さん！逃走するノイズに追いつきつつあります！ですが……!』

『指令ツ!』

『そのまま！飛べツ！翼ア!』

弦十郎の声がヘッドギアの通信機を通して聞こえてくる。

(飛ぶ?)

『海に向かって飛んでください！どんな時でもあなたはツ!』

意を決し、これ以上先のない道路から跳躍、脚部のスラスタを使って飛距離を伸ばし、飛翔する。

「仮設本部！急速浮上ツ!」

指令の掛け声と共に海中から二課仮設本部たる潜水艦が浮上し、そ

の船体を利用して更に飛ぶ。

ノイズが乱切りにされて炭素と化し、ケージが重力によって落下する。

響はウエルを捕らえ、雷とクリスはダメージが回復したため一人でも立てる状態だ。

翼がケージに手を伸ばし、もう少しで届く……というところで文字通り横槍が入り、その衝撃によって翼は弾き飛ばされ、海に落下してしまう。

「翼さんッ！」

「ごめんクリス……！少し……抱きしめ、させて……」

「しようがねえ……」

響が叫び、横槍を入れた者を理解し、震え始めた雷がクリスを抱きしめる。誰かがそばにいてくれないと折れそうなのだ。

槍は海上で停止し、その上に襲撃者は降り立つ。落下してくるケージを受け止め、その背を朝日が照らした。

「時間どおりですよ。フィーネ……」

「フィーネだと？」

ウエルのフィーネという言葉に反応し、一層強くクリスに寄り纏る。

構わずウエルは続ける。

「終わりを意味する名は、我々組織の象徴であり、彼女の二つ名でもある」

「まさか……じゃあ、あの人が……？」

「新たに目覚めし、再誕したフィーネです！」

朝日は再誕したフィーネ、マリアを祝福しているようだった。

## 無からの奇襲

新たに分かった武装組織フィーネに関する情報を記録していく。「つまり、異端技術を使うことからフィーネの名を組織になぞらえたのではなく……」

「蘇ったフィーネそのものが組織を統率しているというのか」「またしても先史文明期の亡霊が、今に生きる俺たちに立ちはだかるのか……。俺たちはまた戦わなければならないのか……。了子君……！」

緒川とは別の、弦十郎の右腕として共に行動した彼女の名を呟く。また、彼女によって運命をゆがめられた少女、雷のことを思う。

基地の外では、フィーネを名乗るマリアと雷たち二課の装者のにらみ合いが続いていた。

雷は自分の心に渴を入れることで、なんとか一人で立つことが出来る状態だ。

そんな彼女をさつきまで支えていたクリスが案ずる。

「……もういいのか？」

「うん……。何とかね……」

そうは言うものの、いまだに膝は笑っている。

響も動揺を隠せないようだ。

「嘘、ですよ……。だってあの時、了子さんは……」

自分たちの目の前で自分と雷を激励したのだ。そんな彼女が再び敵になるなど考えられない。

「リインカーネイション……」

「遺伝子にフィーネの刻印を持つものを魂の器とし、永遠の刹那に存在し続ける輪廻転生システム……！」

「そんな……じゃあ、あのアーティストだったマリアさんは？」

「本当なら、フィーネに取り込まれてるはずだよ……」

「さあどうでしょう？それは自分も知りたいところですので」

ウエルは答えをはぐらかす。

槍を足場に洋上を浮いているマリアはこの状況を打破する方法を



考えていた。

(ネフィリムを回収できたのは僥倖。だけどこの盤面、次の一手を決めあぐねるわね)

突然、水柱が上がり、その中から翼が現れる。

彼女は着水すると、脚部のスラスターでホバークラフトのように海面を突き進み、マリアに斬りかかった。

「はあああッ！」

「ッ！」

マリアは紙一重で首への一撃を避け、上空へと跳び上がった翼を見上げる。

「甘く見ないで貰おうかッ！」

剣を大剣へと変形させ、マリアに斬撃を見舞う。

『蒼ノ一閃』

マリアはその一撃を冷静にマントで防ぐ。

「甘くなど見ていない！」

再び斬りかかってきた翼をマントで弾くのではなく受け止め、その横っ腹に蹴りを入れて吹き飛ばす。

そのまま翼は二課の船体に衝突し、威力を殺して立ち上がる。

そしてマリアは手に持つケージを上空へ投げ上げ、それが消えるのを確認すると同時に翼と同じく船体に着地する。彼女が手を掲げた瞬間、洋上に浮いていたアームドギアがその手に吸い込まれた。

マリアが宣言する。

「だからこうして、私は全力で戦っているッ！」

マリアは跳躍し、本来のガングニールのアームドギアたる槍を叩きつける。翼はこれをはじめ返すが、その反動を利用して更にマリアはもう一撃を加えた。

翼はこれも防ぎ、両者は距離を取る。

「たあああッ！」

翼はマントの妨害をかくぐり、マリアの懐へと接近する。しかし、槍の遠心力を利用した攻撃を剣では防ぎきることが出来ず、弾き飛ばされてしまう。

マリアは槍を掲げ、それに沿わせるようにマントが回転し、小型の竜巻を形作る。

その竜巻は側面からの攻撃が通らず、『台風の目』と呼ばれる最も弱いところを突くべく剣を突き立てるように飛び上がる。が、マリアはそれを予測しており、逆に槍を突き上げることによってこれを阻む。マントが回転をやめ、刃のように翼に襲い掛かる。それを転がるように避けるものの、先ほどの罠によって適合係数が下がった影響が残っているのか息が上がっている。

艦内では船体の損傷を知らせるアラートが鳴り響き、モニターには損傷個所が表示された。

「被害状況出ました」

「船体に損傷、このままでは潜行機能に支障が出ます！」

「翼！マリアを振り払うんだッ！」

弦十郎の指令を遂行するべく翼はマリアを倒すのではなく振り払うに目的を変更し、剣を大腿部のバインダーにしまう。

逆立ちの姿勢で脚部のブレードを展開し、コマのように回転することで連続して斬りかかる。勝機を窺っているのだ。だが……

「勝機……！」

「ふざけるなッ！」

マントで回転を受け流し、翼を転倒させる。

難なく着地するが左ひざに痛みが走り、バランスを崩してしまう。

「マイターンッ！」

その隙をマリアが見逃すわけもなく、追撃をかける。

翼も咄嗟に剣を取り出し、逆手でカウンターをかけようとするがマリアのほうが速く、痛烈な一撃を負ってしまう。

翼の強さを知っているクリスが驚愕する。

「アイツ、何を?!」

「最初に貰ったのが効いてるんだ！」

「なら、ここから撃つ！」

雷は右腕のユニットから稲妻の槍を構築し、腕全体をボウガンにすることで遠距離攻撃を行う。

(では、こちらもそろそろ……)

雷が狙いを定めているタイミングで上空から無数の鋸が飛来し、彼女たちに襲い掛かる。

その鋸は響とウエルの間を割って入り、彼を自由にする。

「あの二人組かよッ！……でやッ！」

雷は槍を解体して斥力フィールドで腕全体を包み込み、再度襲い掛かってきた鋸を全て叩き落す。自分の腕が切り飛ばされる可能性を考えていないあたり、かなり追い詰められた状態で戦っている。

「なんと、イガリマアッ！」

切歌が鎌を展開してクリスに襲い掛かる。

片腕をソロモンの杖で塞がれているため、満足に迎撃することが出来ない。

雷、響の二人には調が脚部で展開した鋸をローラースケートのようにして接近し、ツインテールから展開した無数の小型鋸を浴びせかける。

響にその迎撃を任せ、雷は一気に距離を詰める。それに対して調は脚部の鋸を車輪のように展開し、真正面からぶつかり合う。

『非常Σ式・禁月輪』

「アリかよそんなのッ?!」

雷は斥力フィールドを展開することで受け止めるが、適合係数の低下と質量差、精神面で力が入っていない影響から押し負けてしまう。

「ぐあッ！」

後ろにあつた壁に激突し、それと同時に切歌の攻撃がクリスの杖によって不自由な左の横っ腹に直撃して吹き飛ばされ、倒れ込む。

「雷?!クリスちゃん！」

「私よりもクリスを！」

「でも……！」

「私の事なんて二の次でいいッ！」

「ッ！……クリスちゃん！大丈夫?!クリスちゃん！」

一瞬雷に駆け寄りそうになった響を制し、クリスのもとに向かわせ

る。

クリスは意識を失っており、調に杖を奪われてしまった。杖を片手にウエルのもとへと向かう。

「時間ピツタリの帰還です。おかげで助かりました……。むしろ、こちらが少し遊び足りないぐらいです」

「助けたの、あなたのためじゃない」

調はバツサリとウエルの言葉を切り捨てる。

「いやあ、これは手厳しい」

ウエルが声を笑わせながら言う。

響がクリスに肩を貸し、雷が自力で歩いて並び立つ。

「くそつたれ……。適合係数の低下で体がまともに動きやしねえ……」

「でも、一体どこから……?」

「光学迷彩か何かか? 聖遺物ならできなくもないだろうけど……」

二課の技術を使っても切歌と調の出現時に観測されたアウフヴァツヘン波形以外の証拠を見つけないことが出来ない。コレは異端技術無くして出来ぬことだ。

マリアと交戦している翼は負傷した膝を押さえ、マリアは先ほど一撃をもらったところを押さええている。そこは翼によって装甲を切り裂かれていた。その結果が優位に立っているはずのマリアに焦りを生んでいる。

(こちらの一撃に合わせるなんて……。この剣、可愛くない……。!)

(少しずつだが、ギアの出力が戻っている……。行けるか?)

翼は手を握っては開くを繰り返し、ギアの出力を確認している。

調子を取り戻し始めた翼に対し、マリアの呼吸が荒くなっている。適合係数が落ちてきたのだ。

(ギアが重い……)

『適合係数が低下しています。ネフィルムはもう回収済みです。戻りなさい』

「ッ! 時限式ではここまでなの?!」

どこからか入ってきたナスターシャの通信に対し、マリアは叫ん

だ。

「まさか……奏と同じ、リンカーを？」

マリアの言った『時限式』という言葉は、翼の記憶の中から奏を想起させるには十分だった。

## 疑われるシロ

逆光の中、調と切歌、ウエルが雷と響、クリスに向かい合う。

クリスは響に肩を借りてる状態で、雷はところどころ汚れてはいるが何とか無事だ。

「あなた達はいったい何を?!」

響が聞いただす。

「正義では守れないものを、守るために」

「ある人との約束を守るためにデス」

「え……?」

その問いに対し、調と切歌は何でもないように答える。

そしてローターから発せられた強風が三人をあおり、風の発生源であるエアキャリアからロープが下ろされた。

切歌がウエルを抱えて、調はソロモンの杖を保持して跳躍し、ロープの先端部分に捕まることで離脱する。

「チイツー!」

クリスが響を振り払い、ボウガンをロングライフルに変形させ、ヘッドギアをスコープのようにすることで狙撃体勢に入る。

### 『RED HOT BLAZE』

ヘッドギアに搭載されたカメラから情報を収集し、それを目の部分に展開されたスコープに表示、エアキャリアに狙いを定めた。

「ソロモンの杖を返しやがれ……!」

ロックした瞬間、キャリアが聖遺物由来の謎のステルス機能を起動し、消失する。二課の全能力を使っても見つけられないのだ、イチイバル一つだけでは発見できるわけがない。

完全に見失ってしまった。

「何だと……」

「クリスちゃん……」

「何の聖遺物を使っているんだ……」

同じく見失ってしまった二課にも動揺が走る。

「反応……消失……」

「超常のステルス性能……これもまた、異端技術によるものか……！」  
ナスターシヤの操縦するエアキャリアのコックピットには、赤い石柱のようなペンダント、つまり聖遺物がコンソールにセットされていた。

（神獣鏡の機能解析の過程で手に入れたステルステクノロジー……。私達のアドバンテージは大きくても、同時にはかなく、脆い……）  
そう思ったところでナスターシヤは急にせき込み、口元を押さえ

る。  
手のひらを見てみると、赤い鮮血がこびりついていた。恐らくもう長くは生きられないだろう。

「急がねば……はかなく脆いものは他にもあるのだから……」

一方そのころ、キャリアの胴体部分ではウエルが切歌に殴られていた。

「ツッ！」

ウエルの胸ぐらをつかみ上げる。

「下手打ちやがって！連中にアジトを押さえられたら、計画実行までどこに身を響めればいいんデスカ！」

「おやめなさい。こんなことをしたって、何も変わらないのだから」

マリアが切歌をたしなめる。

「胸糞悪いデス！」

「驚きましたよお、謝罪の機会すらくれないのですから」

切歌が手を離し、ウエルが皮肉を言う。

小型モニターからナスターシヤの映像が入る。

『虎の子を守れたのが勿怪の幸い。とは言え、アジトを押さえられた今、ネフィリムに与えるエサがないのが我々にとって大きな痛手です』

調がネフィリムのほうを向いて言う。

「今は大人しくしてても、いつまたお腹を空かせて暴れだすかわからない……」

「持ち出した餌こそ失えど、全ての策を失ったわけではありません」  
白衣の襟を正してウエルが立ち上がる。

彼は彼女らの付けた胸元のペンダントを見て、怪しげに笑った。

〇〇〇

海上航行を続ける仮設二課の船体に装者たちは座り込んでいた。雷は日ごろの夢に悩まされている影響でうつらうつらとしている。

「無事か！お前達！」

弦十郎が潜水艦の出入り口を開けて姿を現す。真っ先に心配するのが少女たちの状態というあたり、信頼のできる良い大人だ。

弦十郎の声で雷は目を覚ました。

「師匠……。了子さんと……。たとえ全部わかり合えなくとも、せめて少しは通じ合えたと思っていました。なのに……」

「通じないなら、通じ合うまでぶつけてみる！言葉より強いもの、知らぬお前達ではあるまい！」

「言ってること、全然わかりません。でも、やってみます！」

よくわからないことを言う弦十郎に少し呆れるが、全員がとりあえずやってみることに、挑戦することを選択する。

ただ一人、暗い顔をする雷を除いて。

しばらくたって、柴田事務次官から武装組織ファイネの新たな情報伝えられた。例によってそばを啜りながらである。

「では、自らをファイネと名乗ったテロ組織は、米国政府に所属していた科学者たちによって構成されていると？」

『正しくは、米国聖遺物研究機関『F. I. S.』の一部職員が統率を離れ暴走した集団ということらしい』

「ソロモンの杖と共に行方知れずとなり、そして再び現れたウエル博士も、F. I. S. 所属の研究者の一人……」

柴田が一拍置いた。

『こいつはあくまでも噂だが、F. I. S. については日本政府の情報開示以前より存在しているとのことだ』

「つまり、米国と通謀していた彼女が、ファイネが由来となる研究機関ですか？」

『出自が、そんなだからな。連中がファイネの名を冠する道理もあるのかもしれない』



再びそばを啜る。

『テロ組織には似つかわしくないこれまでの行動。存外、周到に仕組まれているのかもしれないな』

「うーむ……」

弦十郎が唸っていると柴田が何かを思い出したかのように話し始めた。

『そう言えば……確かファイネに殺害された轟博士夫妻、彼らもF・

I・S・に名を連ねていたな』

「な?!」

弦十郎が驚愕する。何せ自分たちの組織に属する少女が武装組織ファイネと関係者なのかもしれないのだから。

『詳しくは非常勤だがな。彼らの娘も恐らくファイネの構成員に接触したことがあるはずだぞ?』

「わかりました。こちらでも情報を集めます」

柴田との通信が切れる。

記録で確認できる最新の接触は六年前、轟夫妻が殺害された年の夏だ。そこから今までの間に雷には様々な厄災が降りかかっているが、連絡を取り合っていた可能性も無きにしも非ず。柴田はそう言いたいのだろう。

思わず弦十郎は緒川に問う。

「緒川、お前はと思う?」

「雷さんが内通者かもしれないということですか?僕はそうとは思いません」

「愚問だったな。俺もそうは思わん。しかし……」

お上はそう思わないだろう、その言葉を彼は飲み込んだ。

当然緒川も察している。

自分たち二課は『轟雷』がどのような少女なのかを知っているため疑うことなどしない。が、それを知らない政府の連中はどうか?世界中を混乱に陥れたテログループ、その唯一の対抗手段を持つと言える組織に敵の関係者が潜んでいる可能性だってあるのだ。

情報は全てに勝る。金さえ動かせるのだから当然だろう。それが

相手に筒抜けになっている、と言うのは耐え難い恐怖なのだ。

「雷くんがシロであることを証明せねばどのような強硬手段で来るか……」

「日本政府だけならいざ知らず、米国政府は自らの汚点を払しょくすることを考えるでしょうね」

日本政府なら柴田を通して回避することは難しいが可能だろう。しかし、これが米国ならばわからない。

奴らはフィーネを暗殺しようとしたように秘密裏に行動して雷を誘拐。監禁して知りもしない情報を吐くまで拷問、凌辱し続けるだろうことは容易に想像できた。

「雷くんの身の安全は二課のエージェントが守り、身辺調査は未来くんを頼りにするしかない……か」

「未来さんに親友を疑わせるというのは心が痛みますが……」

「それはオレも分かっている……分かっているのだが……」

そんな答えしか用意できない自分を恨みながら未来へ通信を繋げる。

子供を疑わねばならないというのは大人にとって苦痛だ。

三回ほどのコールで通話がつながる。

『どうしたんですか弦十郎さん。……まさかまた響が……』

「違うんだ未来くん。……君に頼みがあるんだ」

事のあらましを分かりやすく未来に伝える。

『そんな！雷がフィーネの内通者だなんて！そんなのあり得ません！』

未来が叫ぶ。当然のことだ、大切な親友が疑われているのだから。

「俺だってそうだ。たとえ過去に繋がりはあつたとしても、今は関係ない。少なくともそういう関係ではないと信じているッ……！だが、政府の人間はそうは思わんのだ……」

声の節々から悔しさがにじみ出ている。それを未来は察した。

『私、どうすればいいんですか?!どうすれば雷の疑いを晴らすことが出来るんですか?!』

「出来る限り雷くんから目を離さないで上げてほしい……。もしも疑

わしきところがあればすぐに報告してくれ、こちらでまとめ。不測の事態に対応できるようにこちらのエージェントを護衛につかせる。極力視界に入らないようにするから安心してくれ。……親友を疑わせるような真似をさせて、すまない……!」

『わかりました……。弦十郎さんや緒川さん、二課の皆さんが雷のことを信じてくれて安心しました。任せてください!雷の疑いは私が晴らして見せます!』

「本当にすまないッ……」

未来との通話を切り、深くため息をつく。

実害が出るまでにこの事態を收拾せねばならない。

## 幸せな歌

リディアンでは秋桜祭が開催され、在校生のみならず親や友人などでにぎわっていた。

出店の客引きの声が響き、広告のチラシも配られる。そもそも学校自体が大きいので小さな祭りよりも人が多い。

そんな中、目の下にひどい隈を作った雷は響と共に手すりに体を預けて人だかりを眺めていた。眠気からか雷の体は今にも崩れ落ちそうだ。連日続くよくわからない夢に加え、フィーネが別次元のステルス性能を持っていることが彼女の精神に負担をかけている。いつどこかで自らの恐怖の元凶が急に襲い掛かってくるのかわからないのだから当然だろう。

軽く舟を漕ぎだしたタイミングで横から声をかけられた。雷と響の日常の象徴ともいえる少女、未来だ。

「ふくたりっとも」

「未来」

「どうしたの?」

思わず響が未来に聞き返してしまう。

「どうしたの? じゃないわよ。もうすぐ板場さん達のステージが始まる時間よ?」

「ええ?! もうそんな時間だっけ?!」

「時間がたつってはいっやい……」

雷が自分の時計を見てつぶやいた。記憶にあるステージの予定と照らし合わせて確認する。

未来が雷の手を握る。響と未来で挟む形だ。

「いっこう。きつと楽しいよ」

「うん。ありがと、未来」

「時計持ってるんだったら確認しとけばよかったね、私……」

予定を確認していなかった雷は自らを責めるが、未来が優しくたしなめる。

「こうやっていっしょに行けるんだから結果オーライだよ」

「……そうだね。いつもありがと、未来」

「どういたしまして」

未来が二人の間ではなく雷を挟むように手を握ったのは、このことを予想して雷に自傷をさせないようにしているのだ。

三人は笑いながら講堂へと走っていく。

講堂には多くの人が既に集まっており、満席の状態だ。スポットライトに照らされたステージにアニメのコスプレをした弓美や詩織、創世が上がってくる。

司会が盛り上げる。

「さて！次なるは一年生トリオの挑戦者たち！優勝すれば、生徒会権限の範疇で一つだけ望みがかなえられるのですが……彼女たちは果たして、何を望むのか?!」

ヒロイックなコスプレをした弓美がマイクを取る。

「もちろんー！アニソン同好会の設立です！あたしの野望も伝説も、全てはそこから始まります！」

正直こんなことをせずとも頼み込めばイケそうな気もするが気にはならない。所々で歓声が上がリ、弓美は気前よく手を振っている。

「ナイスですわ〜コレっぽちもぶれてませんもの」

「ああ……なんかもうどうにでもなれえ……」

詩織はノリノリだが、カマキリのような奇妙な恰好をした創世は投げやりになっている。

講堂に到着した雷たち三人はあいていた四つの席のうちの三つに座った。

「まだこれから見たい」

「うん」

「何なんだろう、あのカツコ……」

どうも曲名は『電光刑事バン』というらしい。日曜の朝にやっていそうな勇ましいイントロが流れてきた。

が、だんだんと盛り上がり、曲がサビに差し掛かったところで鐘が一つなった。つまり失格である。

消化不良を起こして弓美が嘆く。

「ええー！まだフルコーラス歌ってない！二番の歌詞が泣けるのいい〜！なあんでき〜！」

弓美が項垂れ、会場が笑いに包まれる。

隣で笑う雷と響の二人を、未来が微笑ましそうに見つめる。

（やっぱり、二人にはいつも笑ってほしい……。だって、それが一番響と雷らしいもの）

そう思い、この間の弦十郎に頼まれたことを思い返す。

雷がテロ組織の内通者である可能性……。今まで一緒にいてそんなそぶりを見なかった未来は、今は忘れようと、軽く頭を振って二人に笑顔を向けた。

○○○

そんな中、リディアンに侵入し、二課の装者が持つギアのペンダントをフィーネにこれ以上マリアの魂を奪われないように、代わりに奪取しようとしている調と切歌の二人は秋桜祭を満喫していた。

切歌は任務を覚えているのか不安なほどにたこ焼きをぱくついている。

「楽しいですなあ……。何を食べてもおいしいデスよお」

「じー……」

私服に眼鏡と、本当にそれで欺けているつもりなのかと疑いたくなるが、案外ばれないものだ。

目線で調に咎められているのに切歌が気付いた。

「あう、なんデスカ。調……」

二人は場所を移し、校舎裏のさらに木の裏に身を隠す。

「私達の任務は学祭を全力で満喫することじゃないよ。切ちゃん」

「わ、分かっているデス！これもまた、捜査の一環なのデス」

「捜査？」

あまりに突飛な返しに調は首をかしげる。

「人間だれしも美味しいものに引き寄せられるものデス」

ポケットから入るときに配布された『うまいもんMAP』を取り出し、笑顔を浮かべる。

「学院内のうまいもんMAPを完成させることが、捜査対象の絞り込みには有効なのデス」

切歌の言い分に調はジト目になり、頬を膨らませて詰め寄る。完全に疑っている顔だ。

流石の切歌も調にそんな顔をされたら冗談は言えない。MAPをしまう。

「心配しないでも大丈夫デス」

真面目な顔で調を見つめ返す。

「この身に課せられた使命は、一秒だって忘れていないデス。……とはいった物の、どうしたらいいかデス……」

使命は忘れていないものの、証拠が見つからず、捜査は行き詰まってしまう。

そんな時、調が何かを指さしてパツと笑顔を浮かべる。

「切ちゃん鴨葱ー」

二課の装者の一人、翼がいたのだ。

はやる調を切歌は腕を掴んで止め、引つ張った時の反動でバランスを崩した彼女を抱きとめる。

声はバレないように小声だ。

「作戦も心の準備もできてないのに鴨もネギもないデスよ！」

切歌の言葉を信じて、調はこっそり翼の後をつけることを選択する。

階段を上った翼に見つからないように柱の陰に身を響める。

「？」

何者かの気配を感じて翼は振り返るが、調と切歌は慌てて引つ込める。

「こっそりギアのペンダントだけ奪うなんて土台無理な話デス」

「あず姉さんが言った。困難は大体力づくで何とかなるって」

「そんなこと言ってないデスよ?!」

後ろに注意を向けていた翼は前のドアから曲がってきたクリスと正面衝突してしまう。

「痛って〜……」

「またしても雪音か。何をそんなに慌てて……」  
「追われてるんだ！さつきから連中の包囲網が少しづつ狭められて……」

「雪音も気づいていたか……。先刻より、こちらを監視しているような視線を私も感じていたところだ」

翼は調と切歌、クリスは同級生のことを言っているのだが、二人はその食い違いに気づいていない。

「気づかれていたデスか……」

「見つけた！雪音さん！」

クリスの同級生が彼女を囲うように構える。

「お願い！登壇まで時間がないの！」

歌唱大会が開かれている講堂は大盛り上がりだ。その舞台はしにクリスの姿があった。マイクを手に持ち、同級生に頼み込まれて此処に立っているのだ。

「さて！次なる挑戦者の登場です！」

司会の声を聴いてクリスの背中を同級生たちが押す。そのせいでステージの上に出てしまった。

「二人とも、あれって！」

「うそお！」

「雪音だ」

翼が三人の隣に座る。

「明日は雨……。いや雪かな……」

「私立リディアン音楽院。二回生の雪音クリスだ」

クリスの頬は恥ずかしさで赤くなっている。

美しいイントロが流れ、歌唱パートに入るが緊張しているのか歌えていない。会場内にどよめきが走る。

「クリスちゃん……！」

「クリス……」

思わず同級生たちのいる舞台はしをチラ見する。するとそこには笑顔で自分を応援してくれる彼女たちがいた。

クリスは意を決し、歌う。



その歌の美しさに感嘆の声が所々から上がっている。

同級生たちがクリスマスに歌ってほしいと頼んだ理由はただ一つ、「すごく楽しそうに歌うから」ただこれだけ、だから壇上に上がった。

歌っていると一緒にいてくれたみんなの顔が思い浮かぶ。

(楽しいなあ……あたし、こんなに楽しく歌を歌えるんだ……)

歓声上がる。

(そっか……ここはきつと、あたしが居てもいいところなんだ……)

○○○

スポットライトがクリスマスを照らす。

「勝ち抜きステージ、新チャンピオン誕生！さあ！次なる挑戦者は?! 飛び入りも大歓迎ですよ！」

司会は参加を募るが、あれほどの歌を歌われては参加者もいない。誰もがそう思っていたその時、二人組の少女が手を上げた。

「やるデス！」

「あいつら！」

「チャンピオンに……」

「挑戦デス……！」

ステージで驚愕するクリスマス以上に驚愕……いや、殺意を向けている者がいた。

「こ、こんなところにまでえッ！」

「落ち着くんだ轟。ここで事を荒立てるな……！」

席から飛び出そうとする雷を翼が何とか抑え込む。

彼女の声には怯えも含まれていた。

## 決闘の申し込み

調と切歌の登場で雷の心が叫びをあげた。

今すぐにも飛び出してしまいそうな自らの体を翼の力も借りて何とか抑え込み、歯を食いしばって折れそうな理性を何とか持ちこたえる。座席の手すりに爪を突き立て、目だけで相手を殺さんとばかりにらみつける。

「何つでッ！わ、私たちの日常にまでッ……！」

豹変した雷の様子を見て未来が響に問う。

「響！あの子たちを知ってるの!?雷の様子がおかしいよ！」

「う、うん……。あのね……。未来……」

翼が雷を抑えながら言いよどむ響に代わって答えた。

日ごろ鍛えているからか、雷が自分である程度抑えられているからかはわからないが、額に汗を浮かべている程度で済んでいる。

「彼女たちは世界に向けて宣戦布告し、私達と敵対するシンフォギア装者だ」

「じゃあ、マリアさんの仲間なの?!ライブ会場でノイズを操って見せた……もしかして?!」

合点がいったと表情を変えた未来に対し、翼は頷く。

「ああ、マリアは自らをフィーネと名乗った……。それ故に轟の精神に負担をかけているのだ」

それを聞いて必死で自分を抑えている雷に視線を落とす。

未来は自分の無力さに泣きたくなかった。そして、ここまで追い詰められている彼女を疑わねばならない自分を恥じ、心の中で涙を流した。

○○○

どこかにある波止場の倉庫にエアキャリアを隠し、マリアは一人、物思いにふけていた。

思い返されるのは調と切歌が言っていた「マリアがフィーネに塗りつぶされる」という言葉。彼女は自らの選択が間違いなのでは?と疑心暗鬼になっていた。

堂々巡りになっている思考をナスターシャが遮った。

「後悔しているのですか？」

マリアは顔を上げ、しばらく間を置いてから横に首を振る。

「大丈夫よmam。私は、私に与えられた使命を全うして見せる」

突然アラートが鳴り響いた。

弾かれたようにマリアが立ち上がり、ナスターシャは素早くコンソールを起動する。

モニターには彼女らを捕らえる、もしくは殺害するために送り込まれた米国の特殊部隊が倉庫内に侵入していたのだ。

ナスターシャは冷静に状況を分析する。

「今度は本国からの追手……」

「もうここが嗅ぎつけられたの?!」

マリアは驚愕するがナスターシャは何でもないうように答える。

「異端技術を手にしたと言っても、私達は素人の集団……。訓練されたプロを相手に立ち回れるなどと思えば、あがるのは虫が良すぎます」

その声色はどこかマリアを咎めているかのようだ。

「どうするの？」

ナスターシャは当然のことのように答えた。

「踏み込まれる前に攻めの枕を取りましょう。マリア、排撃をお願いします」

マリアは後ずさる。

「排撃って……。相手はただの人間、ガングニールの一撃を喰らえば……」

「そうしなさいと言っているのです」

聖遺物の力をもってすれば人の命を奪うことなど造作もないだろう。

「ライブ会場の時もそうでした。マリア……。その手を血で染めることを恐れているのですか？」

「mam……。私は……」

マリアの目を、ナスターシャは静かに見つめ返した。

「覚悟を決めなさい。マリア」

倉庫内で爆発が発生した。特殊部隊が動き始めたのだ。

○○○

飛び入り参加という宣戦布告をした調と切歌はステージへと続く通路を進む。

切歌が壇上にいるクリスマスに向けてあつかんべーをした。それに危うくクリスはとびかかりそうになる。

落ち着いて調が切歌をたしなめる。

「切ちゃん。私達の目的は？」

「聖遺物の欠片から作られたペンダントを奪い取る事デエース」  
どこかふてくされている。

「だったら、こんなやり方しなくても……」

「聞けば、このステージを勝ち抜けると、望みをかなえてくれるとか。このチャンス逃すわけには……」

「おもしれえ。やり合おうってならこちとら準備は出来ている！」

「はあく……」

明らかに生徒会権限を越えている気がするのだが、そんなことは彼女たちの脳内に存在しない。

「特別に付き合っただけ。でも、忘れないで。コレは……」

調の言葉を切歌が遮った。

「分かってる！首尾よく果たして見せるデス！」

司会がアナウンスを始める。

「それでは歌ってもらいましょう！……ええと……」

ステージに立ち、スポットライトに照らされた二人が自らの名前を名乗る。

「月読調と……」

「暁切歌デス！」

「オツケーイー！二人が歌う『ORBITAL BEAT』！もちろんツヴァイウイングのナンバーだあ！」

講堂に曲のイントロが流れ始めた。

その曲名、曲調に響きたちが驚愕する。雷は興奮していて最初は理解できなかったが、イントロの途中で気付いた。

「この歌?!」

「翼さんと奏さんの……!」

「何のつもりなの当てこすり?!挑発のつもりか?」

「……?!」

ぎりつと歯をかみしめる雷。その目には怒りが満ちていた。

○○○

ナスターシヤがマリアに決断を迫っていたその時、特殊部隊員が次々と炭素となって崩れ落ちる。つまり、ノイズが現れたのだ。懸命に抵抗するが通常兵装でノイズを倒せるわけもなく、即座に分解されてしまう。

その様子をマリアはカメラ越しに確認していた

「炭素分解……だと?!」

今この世でノイズを操ることが出来る人間はただ一人。

「ドクターウエル?!」

爆炎の中、ソロモンの杖を構えたウエルが囲まれているにもかかわらず余裕をもって答える。

「出しゃばりすぎとは思いますが、この程度の相手に新生フィーネのガングニールを使わせるまでもありません。僕がやらせてもらいますよお」

ウエルに向けて発砲するが、その射撃は全てノイズによって阻まれてしまう。

彼は残虐な笑みを浮かべて次々とノイズを召喚、使役して特殊部隊員を炭素の塊へと変えていく。

最後の一人が倉庫の祖手へと脱出するが、ノイズに追いつかれてしまい、同じように炭素へと分解されてしまう。その光景を不幸にも三人の野球少年が目撃してしまった。

「おやあ〜?」

顔を歪にゆがめ、ゆらゆらとウエルが歩き出る。

『やめろウエル!その子たちは関係ない!やめろおおツ!』

マリアの叫びを無視し、ウエルは無慈悲にノイズを召喚する。少年たちがどうなったかは言うまでもない。

彼女は膝から崩れ落ち、慟哭した。

○○○

調と切歌が歌い終わり、講堂が拍手で包まれる。

「チャンピオンととうかうかしてられない、素晴らしい歌声でしたあ。コレは得点が気になるところです！」

司会は審査員に目をやる。クリスがかみついた。

「二人がかりとはやってくれるー！」

その瞬間、二人にナスターシャから通信が入った。

『アジトが特定されました。襲撃者を退けることは出来ましたが、場所を知られた以上、長居は出来ません。私達も移動しますので、こちらの指示するポイントで落ち合いましょう』

「そんな?!あと少してペンダントが手に入るかもしれないのデスよ?!」

切歌が反抗するがナスターシャは取り付く島もない。

『緊急事態です。命令に従いなさい』

それだけを言い残して通信が切れる。

「さあ!採点結果が出た模様です！」

「おい!ケツを捲んのかあ?!」

調がいまだに残ろうとする切歌の手を引いて壇上から駆け下りる。

「調！」

「マリアがいるから、大丈夫だと思う。でも、心配だから……」

状況を鑑みて、翼が立ち上がる。

「追うぞ。立花!轟!……轟?」

そこにはもう、雷の姿はなかった。通信機を抑えた動作で状況を把握し、真っ先に行動に移したのだ。

「先に行ったか……。問題だけは起こしてくれるなよ！」

翼が雷に続く。

響は心配そうな顔を浮かべる未来に真剣な声色で言う。

「未来はここにいて。もしかすると、戦うことになるかもしれない……!」

「う、うん……」

「安心して。雷は私が必ず連れ戻すから」

そう言い残し、響は翼の後を追った。

調と切歌は逃走するが、通路をクジラのオブジェが通過し、立ち往生してしまう。

切歌が地面を踏みつけた。

「クソ！どうしたものかデス?!」

「ッ?!」

「調ッ?!」

「動くなッ！動けばこいつの喉を潰す！」

突然、調の襟首が何者かによつて掴まれ、そのまま地面に引き倒されてしまう。その人物は雷だった。

彼女は即座に掴んだ襟と対角線上になるように袖をつかんで締め上げて拘束し、のど元に膝を押し当てる。心は恐怖に震えているが、なぜか頭は冷静だった。

すると後ろから響の声が聞こえてきた。

「雷離して！私達きつと分かり合える！」

「ッ?!分かった……」

響の思いを尊重したい雷は大人しく拘束を解く。

雷が調から離れた瞬間、切かが彼女に駆け寄つて「大丈夫デスか調?!」と声をかけている。何度かせき込んだ後、調は冷静に切り出した。「四対二……数の上ではそっちに分がある。だけど、ここで戦うことであなただが失うもののことを考えて」

そう言つて生徒たちのほうを見やる。

「おまえ、そんな汚いこと言うのかよ！さつき、あんなに楽しそうに歌ったばかりで……」

クリスの言葉に一瞬切歌が調を視界の端に入れ、口を開く。

「ここで今戦いたくないだけ……。そうデス！決闘デス！然るべき決闘を申し込むのデス！」

「どおして?!会えば戦わ……」

「フイーネを殺す……。ただそれだけでいい……」

「雷……」

響の言葉を雷が俯きながら遮った。流石の響も、彼女の思いを知ってるだけに反論できない。

「決闘の時はこちらが告げる。だから……」

調は切歌の手を引いてリディアンを後にした。

二課からの通信が入ってきた。

『四人ともそろっているか？ノイズの出現パターンを検知した。ほどなくして反応は消失したが、念のために周辺の調査を行う』

「はい」

「ああ」

「了解……」

「はい……」

響の表情は沈み、雷は静かな殺意を燃やしていた。



## 絶望への入り口

仮設二課では確認されたノイズの出現パターンを解析していた。現場のこれまでもとは異なる状況に弦十郎は顎に手を当て、思考を回す。

（遺棄されたアジトと、大量に残されたノイズ被災者の痕跡……。これまでと異なる状況は、何を意味している……）

「指令！」

藤堯の声で弦十郎は一旦今まで考えていたことを隅に置く。

「永田町深部電算室による、解析結果が出ました。モニターに回します！」

モニターに響のガングニールと、マリアの黒いガングニールのアウフヴァアツヘン波形が表示される。この二つの波形の照合結果が出たのだ。

その誤差は無し。つまり同一のものであることが確認されたのだ。響が胸に手を当てる。

「私と……同じ……」

「考えられるとすれば、米国政府と通じていた了子さんによってガングニールの一部が持ち出され、作られたものではないでしょうか？」

藤堯の意見に続いてキーボードをタイプしながら友里も口を開く。

「櫻井理論に基づいて作られた、もう一つのガングニールのシンフォギア」

「だけど妙だな」

その間にクリスが割って入る。

「米国政府の連中は、フィーネの研究を狙っていた。F・I・S.なんて機関があつて、シンフォギアまで作っているのなら、その必要はないはず……」

「政府の管理から離れ、暴走しているという現状から察するにF・I・S.は、聖遺物に関する技術や情報を独占し、独自判断で動いているとみて間違いないと思う」

そんな中、この中で最も頭の回るはずであろう雷は黙って俯き、拳

を開いたり閉じたりしている。例の決闘に思考を回しているのだ。

そして彼女の置かれている状況を知っているからこそ、弦十郎たちは話題を振るような真似をしない。

弦十郎がため息をついた。

「F. I. S. は自国の政府まで敵に回して、何をしようとたくらんでいるのだ」

〇〇〇

エアキャリアのステルス能力でもって調と切歌を回収するために町の上空を通過する。

ナスターシャはコックピットに変形した車椅子のスイッチを一つ押し、格納庫にあるネフィリムを映し出す。

（ついに本国からの追手にも補足されてしまった……。だけど、依然ネフィリムの成長は途中段階。フロンティアの機動には遠く至らない……）

一度目をつむり、カメラの映像をマリアのいるブリーフィングルームに移す。

彼女は妹のギアのペンダントを握りしめていた。

（セレナの遺志を継ぐために、あなたは全てを受け入れたはずですよ。マリア。もう迷っている暇などないのです）

マリアは記憶の中にある妹、セレナの最後の記憶を思い返している。彼女は暴走するネフィリムを抑え込むために絶唱を発動し、命を落としたのだ。もう顔も思い出せない少女との約束を果たせずに……。今はいない少女達とのつながりは、記憶の他に『Apple』という歌しか残っていない。

スピーカーからナスターシャの声が響く。

『まもなくランデブーポイントに到着します。いいですね？』

「OKマム……」

そう言ってマリアは静かに立ち上がった。

そのポイントとは、かつてのフィーネが作り上げた荷電粒子砲『カ・ディングル』の跡地だ。エアキャリアが着陸し、岩場の影から調と切歌が姿を現した。

降りてきたマリアに駆け寄る。

「マリア！大丈夫デスか？」

「ええ……」

二人は安堵の表情を浮かべ、調がマリアに抱き着く。

「よかった……！マリアの中のフィーネが覚醒したら、もう会えなくなってしまうから……」

「フィーネの器となっても、私は私よ。心配しないで」

それを聞いて切歌も抱き着いた。

車椅子を動かしながらナスターシャが話しかける。

「二人とも無事で何よりです。さあ、追いつかれる前に出発しましょう」

切歌がナスターシャに駆け寄る。

「待つてママ！私達、ペンダントを取り損なってるデス！このまま引き下がれないデスよ！」

調が後に続いた。

「決闘すると、そう約束したから……うツ?!」

「ママツ……ぐっ?!」

ナスターシャが勝手な行動を起こした二人の頬を叩く。

切歌は叩かれた頬を抑え、調は切歌の服を掴んでいる。

「いい加減にしなさい！マリアも貴方たち二人も、この戦いは遊びではないのですよ！」

「そのくらいにしましょう。まだ取り返しのつかない状況ではないですし……ねえ？それに、その子たちの交わしてきた約束、決闘に乗ってみたいのですが……」

それはウエルの、この世で最もいらぬ便乗だった。

○○○

仮設二課内にノイズ発生のアラートが鳴り響く。

「ノイズ発生パターンを検知！」

「古風な真似を。決闘の合図に狼煙とは！」

翼がつぶやく。

藤堯が素早く出現位置を特定した。

「位置特定。ここはッ?!」

「どうした!」

藤高の驚き様からしてただ事ではないことが理解できる。

「東京番外地、特別指定封鎖区域!」

雷の顔が歪な笑みを浮かべ、それ以外の三人が驚愕する。

弦十郎が叫んだ。

「カ・デインギル跡地だとお?!」

出発した四人はカ・デインギルへと向かっていた。

すでに太陽は沈み切り、空には星空が瞬いている。雷は一人先行して迷惑をかけないようにと厳命されており、はやる気持ちを抑えている。

「決着を求めるのにおあつらえ向きの舞台という訳か……」

すでにウエルがソロモンの杖を構えて待ち構えていた。

「やろお!」

杖から緑色の光線が発射され、ノイズが姿を現す。

それに対抗するために雷たちはシンフォギアを纏うべく起動聖詠を歌う。

「B a l w i s y a l l   N e s c e l l   G u n g n i r   T r o  
n」

四人の装者が一齐にギアを纏い、ノイズ蹴散らしていく。

雷が脚部ユニットを起動して高速で駆け抜け、発生したプラズマがノイズなど眼中にないと言わんばかりに焼き払っていく。

『電光剎那』

続く雷撃と組み合わせた拳法でノイズを吹き飛ばしながら雷がウエルに向かって叫ぶ。

「あいつらはどこだアッ!?!」

「あの子たちは謹慎中です。だからこうして私が出張つて来てるのですよ。お友達感覚で計画遂行に支障をきたされては困りますので」

逆羅刹でノイズを切り裂いた翼はそれを解除し、問いたです。

「何を企てる! F. I. S. !」

「企てる? 人聞きの悪い。我々が望むのは、人類の救済!」

ウエルの指が月を指し示した。

「月の落下にて損なわれる無辜の命を可能な限り救いだすことだ！」

「「月を?!」」

四人がそろって驚愕する。

翼が今現在分かっている情報を突きつけた。

「月の公転軌道は、各国機関が三か月前から計測中！落下などと結果が出たら黙っているわけ……」

「黙っているに決まっているじゃないですかあ」

翼の言葉をウエルが遮る。

「対処方法の見つからない極大災厄など、さらなる混乱を招くだけです。不都合な真実を隠ぺいする理由など、いくらでもあるのですよお！」

クリスがノイズをボウガンの矢で吹き飛ばす。

「まさか！この事実を知る連中つてのは、自分たちだけ助かるような算段を始めているわけじゃ?!」

「だとしたらどうしますう？あなた達なら。対する私達の答えが、ネフィルム！」

ウエルが拳を握りしめて自信満々に言ったその瞬間、クリスの真下の地面が割れ、廃病院で強襲を仕掛けてきた生物ネフィルムが彼女を吹き飛ばしながら姿を現した。

クリスは地面に叩きつけられ、意識を失ってしまう。

「クリスッ！」

「クリスちゃん！」

「雪音！」

翼が駆け寄った瞬間、ダチヨウのようなノイズから放たれた粘着液で二人ともからめとられてしまう。

「くっ、このようなもので……！」

抵抗するが抜け出すことが出来ない。

「人を束ね、組織を編み、国を建てて命を守護する！ネフィルムはそのための力！」

身動きの取れない翼たちにネフィルムが襲い掛かる。しかし、その

頭部を横から響が蹴りぬき、それに合わせて胴体に雷の拳が炸裂する。

ウエルしか居ないと分かって雷は幾分か落ち着きを取り戻していた。

「響はこいつを！私は翼さん達を何とかする！」

「任せたよー！」

響にネフィリムを任せ、雷は粘着液を出しているノイズを撃破して引きはがす作業を開始する。

その間にもネフィリムに響は連撃を叩きこんでいく。

「ルナアタックの英雄よ！その拳で何を守る！」

両腕のバンカーユニットを引き出し、右の拳がネフィリムに突き刺さると同時に起動。その巨体を吹き飛ばした。さらにブースターを点火し、左腕のもう一発を叩きこむために接近する。

ウエルが両者の間にノイズを召喚する。

「そうやって君は！誰かを守るための拳で、もっと多くのだれかをぶつ殺して見せるわけだあ！」

その瞬間、響の脳内に調の『偽善者』という言葉が響き、一瞬動きが止まってしまう。すぐに拳をネフィリムにぶつけようとしたが、もう遅かった。

「へ？」

ネフィリムが響の左腕を噛み千切ったのだ。理解を超えた出来事に気の抜けたような声が出る。思わず翼が叫んだ。

「立花あッ！」

その血飛沫が雷の頬にかかる。それを手に取った瞬間、目の前で起こった出来事に彼女の脳はフリーズしてしまった。

「え？何……これ……」

「ッ?!轟!見るなあッ！」

咄嗟に雷にも叫ぶが間に合わなかった。既に彼女らの脳は現実を理解し始めていたのだ。

二人の絶叫が夜空に響く。

雷の灰色の装甲が金色に輝き始めていた。

## ココロ、ホウカイ

目の前でおきた響の左腕をネフィリムが噛み千切るという現実が雷の心を粉碎しにかかる。

「あ、あ？ああ……」

「轟！心をしっかりと持て！」

心は必死に受け入れまいと抵抗するが、彼女の理性はその思いに反して情報として処理し続ける。その結果、ギアの灰色の装甲が金色の輝きを放ち始め、その際に発生した電撃が翼たちを絡めとっていた粘着液を焼き払う。自由になった翼はすぐさま本部へと通信を繋いだ。

「指令！鎮静剤の使用許可をッ！」

『使用を許可するッ！雷くんを安全距離まで退避させるんだッ！』

当然使用許可が下りる。鎮静剤は強力ゆえに弦十郎の許可なしでは使えないのだ。

強力な斥力フィールドが展開されるまでに打ち込まねばならない。翼はバインダーから鎮静剤が充填された圧力式の注射器を取り出し、装甲のない、肌の露出したところへと打ち込む。

今回が目的である『雷臨状態の抑制』に対しての初の実戦使用であるため、成功確率は不明だ。

「うまくいってくれ……！」

目をつむり、成功を祈る。

段々と輝きが収まり始め、元の灰色へと戻っていく。ギアは解除されていらない。成功したのだ。鎮静剤の作用によって雷の意識が暗転し、地面に倒れ伏した。

これから起きる出来事を、彼女は知らない。

○○○

暗闇の中、雷は目を覚ました。

ギアを纏っておらず、制服姿に戻っていることから戦闘状態でないことだけは理解できたが、時間や場所などの情報が一切理解できない。

取り合えず情報を集めるために周囲の散策を始めた。

「ここ、どこなんだろう？ただの広い空間なのかな？」

歩いてみて分かったのは壁がなく、どこへ行っても地面が平面であることだけだった。少なくとも雷の主観的にはそう感じ取れる。

歩いてもらちが明かないので叫んでみることにした。

「誰かいませんかー！いたら返事してくださいー！」

自分の声だけが反響するだけで、返事はない。やっぱり駄目か、と気を取り直して歩き出そうとしたとき、後ろからなじみのある声が聞こえてきた。

「おーい！無事か？バカ二号」

「何さバカ二号つてえ。私クリスより成績いいんだからね」

「馬鹿は馬鹿だ」

「何だとおく……でもよかった、クリスにあえて」

その相手はクリスだった。雷は見知った顔に安堵する。

一人ではないことに安心した雷はクリスと共に周辺の散策を再開する。一人の時は心細かったから、クリスと手をつないでだ。

「でもよかった。クリスにあえて」

「あたしもだ。一人には慣れちゃいるが、何も無い暗闇に放り込まれると意外ときついもんだな」

奥のほうでキラリと何かが輝いた。

「出口かもしれない！行こー！クリス……クリス？」

クリスの手を引いて輝いたところに向かおうとするが、手を握っているにも関わらずさつきまでと比べて軽い。どうしたのかと戻ってみれば、彼女の体は鋸のようなもので真つ二つに両断されていた。今握っているのは彼女の手首から先だけ。

「……へ？」

理解が出来ない。壊れた人形のように輝いたほうを向くと、がりがりと何かを削るような音が響いてきた。

「何と鋸」

「ッ?!」

その音の正体はギアを纏った調が脚部の鋸をローラーのようにしたときに地面を削る音、見えた光の正体はは彼女が飛ばした鋸の輝き



だった。咄嗟の事で自身のギアを起動することが出来ず、本能的に彼女と逆方向へ必死に駆け出す。

暗闇の中だから何か目的があるのかはわからないが、何とか撒くことに成功する。

握ったままだったクリスの手を抱きしめ、その場にしゃがみこんでしまう。ぽろぽろと涙がこぼれた。

「クリス……クリスう……」

「どうした?! 雪音がどうかしたのか?」

現れたのは翼だった。

「つ、翼さん……これ……」

「まさか?! コレが……雪音だともいうのか?!」

コクリと頷く。翼は苦虫を噛み潰したような顔をした後、雷の手を掴んで引き上げ、抱きしめた。

「雪音のことは残念だが、まずは脱出することが先決だ。そして、出た後にしっかりと吊ってやろう」

「はい……」

まずは脱出しないと。と、気持ちを切り替えて翼の体から離れた瞬間、翼の胸から緑色の刃が突き出てきた。

切歌の鎌だ。

「デエース」

「かはッ?!」

急所を貫かれ、息も絶え絶えな翼は最後の力で雷を突き飛ばした。その衝撃で尻もちをついてしまう。

「に、逃げろ……。轟……」

「は、はっはい!」

床に這いつくばりながらも雷は今回も逃走に成功した。顔はもう涙やいろいろなものでぐしゃぐしゃになっている。

そんな彼女に、なぜかギアを纏った響と制服姿の未来の二人が手を差し伸べていた。

「雷!」

「どうしたの雷? ひどい顔だけど……」

「響い……未来う……」

雷は響の力を借りて立ち上がると、今まで起きたことを事細やかに説明した。二人の顔が悲痛に歪む。そして拳を握り、未来が雷を優しく抱きしめる。

「未来は雷をお願い。私が二人を守るから」

「うん……」

雷は未来に抱かれながら三人で暗闇の中を歩き始めた。雷の話を聞いて、響は油断なく気を張り巡らせる。三人の間に会話は無い。時々未来が「大丈夫？」と雷に声をかけるぐらいだ。

突然響が叫んだ。

「二人とも伏せてッ！」

「ッ?!」

響の声を聞いて未来が雷ごと伏せ、彼女が何かを弾き飛ばした。

「マリアさん?!」

「ええ、よくわかったわね」

マリアの声、つまりガングニールの槍を響が弾き飛ばしたのだ。

マリアに相對したまま響が叫んだ。

「私が何とかする！だから今のうちにッ！」

「うん！」

未来が雷を抱えたまま走り出した。後ろのほうからギアのぶつかり合う音が聞こえてくる。そして何度かそれが聞こえた後、響の断末魔が雷の耳に届いた。咄嗟に塞ぐが頭にこびりついて離れない。

頼れるのはもう未来だけになった。彼女の胸元に顔をうずめる。

「みんな死んじゃった！どうしよう！こんな私に関わっちゃったから……。みんな死んじゃう！遠いところに行っちゃう！」

「大丈夫だから……私はどこにも行ったりしないよ……」

「未来う……未来もつらいのにゴメンね……」

少しの間が空く。雷にとってその間が何時間にも感じられた。

「むしろうれしいぐらいだ。ワタシがお前を殺せるのだから」

「?!離せ！離してよお！」

未来ではない声と口調に気づいて離れようとするが、彼女は雷の体

を痛いほどに抱きしめて離そうとしない。雷は地面に押し倒されてしまう。

雷の金の瞳を未来の金の瞳が映す。彼女の顔が歪な笑みを浮かべる。

「ひっ?!」

「我が名はフィーネ。久しいな?轟の娘よ」

自身の恐怖の象徴ともいえる存在の瞳に体がすぐみ上り、凍り付いたかのように動けなくなる。

「な、んで……フィーネはマリアなんじゃ……?」

そう、フィーネの魂はマリアの中にあるはず。その考えをフィーネはたやすく否定する。

「ワタシの力をもってすれば器を変えるなど造作もない」

「まさか、みんなもお前が!」

自分を見つめる金の瞳に泣き叫ぶがフィーネは微笑むだけで答えは返ってこない。両手でゆっくりと雷の首を閉めにかかる。

(だ、だれか、たす……けて……)

必死に抵抗するが力及ばず、雷の意識は再び暗転した。

○○○

「ッ?!」

二課のメデイカルルーム。ガングニールの浸食がすすみ、人間でなくなってきたている響とは別の部屋で雷は目を覚ました。首の周りを撫でまわすが痛みはない。如何やら夢だったようだ。

ネフィリムとの戦闘から数日が経過している。鎮静剤の効果が元々あった重度の睡眠不足と重なった結果、このような事態に陥ってしまったのだ。

日数が立っているからか病院服ではなく、いつも寝るときに使っている黒のパーカーと半ズボンをはいていた。包帯は外され、足や袖をめくった腕には大量の生傷が露出している。寝ている間に掻いたのだろう、大量の汗が体を濡らしていた。

緒川が部屋から出ていった気がするが頭がぼおつとしてよくわかっていない。しばらくたって未来を含めた響以外の全員が流れ

込んできた。

「雷、目を覚ましたの?!」

「もう大丈夫なのか?!」

「ったく、心配かけやがって」

雷が目覚めたというようやく訪れた吉報に全員が安堵し、喜ぶが、それはすぐに凶報へと変わった。

「……せ……」

「どうしたの雷?」

「未来を返せえ!」

突然雷が未来にとびかかって馬乗りになり、首を絞め始めたのだ。咄嗟の事に誰も反応できない。

「誰も傷つけさせやしない!みんなは私が守るんだ!もう大切な人を失いたくないッ!」

「やめッ……雷ッ……離しッ……」

未来はもがくが雷に抑え込まれているので振りほどくことが出来ない。復活した弦十郎が雷を羽交い絞めにして引きはがした。

「やめるんだ雷くん!どうしたというのだ!」

「離せ!離せよ!あいつはフィーネだ!みんな殺されちゃう!」

「けほっ……はあ、はあ……」

「大丈夫ですか?!」

雷は暴れるが、弦十郎との圧倒的な力の差で抑え込まれ、せき込む未来を緒川が介抱している。雷の目には未来の姿は写っておらず、夢の中の続き、未来の中に生まれたフィーネの姿が写っていた。翼が錯乱している雷に歩み寄ってその頭を掴み、叫んだ。

「彼女の名前は小日向未来!轟の親友だ!フィーネはマリア!断じて彼女がフィーネなわけがない!」

雷は暴れるのをやめ、目を白黒させている。

「え……?私……何を……?」

雷が正気に戻ったのを確認すると、弦十郎はゆっくりと彼女を床に下ろした。自分の手と緒川に介抱されている未来を交互に見ている。

ぼさぼさになった自分の頭をかきむしり始め、カタカタと震えだし

た。

「わ、私は大切なものを、ま、守りたくて……で、でも、それを、私がか、こ、壊そうとした？」

「お、おい……。しつかりしろよ……」

「……あは、あはは！アハハハハハハハハ！」

「「?!」」

クリスが混乱しながらも優しく声をかけるが、今の雷には届かない。彼女は涙を流しながら狂ったように笑い始め、項垂れたままゆっくりと立ち上がる。

「……やっぱり私……疫病神だ……」

突然笑うのをやめると、ぼそりと小さく呟いて部屋から飛び出して行った。あまりの豹変っぷりに全員の動きが止まってしまう。

「あず、ま……」

未来が弱々しくつぶやく。全員が元に戻った時にはすでに雷の姿はどこにもなかった。

ケラウノスの装者、轟雷は、ペンダントを持ったまま、この日を境に姿を消した。

かつての自分のように

新たな隠れ家である湖畔のある森の中でマリアは、湖の周りをナスターシヤの車椅子を押し散策していた。体の悪い彼女にとってこの自然の綺麗な空気は、密閉されたエアキャリアの物よりもさぞ心地よいことだろう。

そんな中、マリアはナスターシヤに自分の心のうちを話していた。「これまでの事で、よくわかった……。私の覚悟の甘さ……決意の甘さを……」

「……」

ナスターシヤは口を開くことなく、静かに聞いている。

「その結末がもたらすものが何なのかも……」

車椅子の持ち手から手を放し、座っている彼女と対面する。

「だからねママ。私は……!」

「その必要はありません」

「え……」

マリアの決意が完全に口から出切る前にナスターシヤが遮り、目をつむって話し始めた。

「あなたにこれ以上、新生フィーネを演じてもらう必要はありません」

「ママ!何を言うの?!」

「あなたは、マリア・カデンツァ・イヴ……。フィーネの魂など宿していない……。ただの優しいマリアなのですから」

木の影で、英雄を信奉する男。ウエルが聞いているとも知らずにナスターシヤは組織の根幹にかかわることを告げる。

「フィーネの魂は、どの器にも宿らなかった……。ただそれだけの事」

ウエルは静かにほくそ笑んだ。

○○○

同時刻、スーパーに買い物に来ていた調と切歌の二人は、両手にいっぱいに入った買い物袋をもって現在の隠れ家へと帰ろうとしていた。

前回、雷が意識を失っていた時に起きた響との戦闘の際、ウエルの

独断によってリンカー、ギアとの適合係数を上昇させる薬剤を追加投与され、その副作用が抜けるまでは戦闘から外されているのだ。

買い出しの荷物が多いことに切歌は愚痴をこぼす。

「楽しい楽しい買い出しだって、こうも荷物が多いとただの労働ですよ」

「仕方ないよ。過剰投与したリンカーの副作用を抜き切るまでは、おさんどん担当だもの」

「?……持つてあげるデス!」

調の異変に気づいた切歌が彼女の前に回り込み、買い物袋の一つを持つて楽をさせようとする。

「調ってば、なんだか調子が悪そうデスし」

「ありがとう。でも平気だから……」

意外と強情な調に対して切歌は切り口を変えた。

「じゃあ、少し休憩していくデス!」

その誘いに、調は頷いた。

買い物帰りに休憩をしている調と切歌の二人は近くにあった遺棄された工事現場の廃材に腰掛け、買ってきたパンをおやつにしていた。

「嫌なことたくさんあるけど、こんなに自由があるなんて。施設にいたころには想像もできなかったデスよ。まあ、ここにあず姉ちゃんがいれば完璧なんデスけどね?」

「うん……そだね……」

調の返事が弱々しい。自分の分のパンを袋から開けてすらいない。暢気にパンを食べていた切歌が視線を落とし、沈んだ声で話し始める。

廃ビルを支えていた骨組みがぎしぎしと音を立てた。

「フィーネの魂が宿る器として、施設に閉じ込められていたあたし達。あたし達の代わりに、フィーネの魂を背負うことになったマリア……。自分が自分でなくなるなんて怖いことを、結果的にマリア一人に押し付けてしまったあたし達……」

最後の一口をご機嫌そうに頬張る。

調は大量の汗をかき、息も荒い。重度の風邪の症状に思えた。

「調?! ずっとそんな調子だったデスか?!」

「大丈夫……ここで休んだからもう……」

そう言って立ち上がるが、足元がおぼつかない。

「調ッ!」

切歌が慌てて手を伸ばすが時すでに遅し、調は近くに立てかけてあった廃材に倒れ掛かってしまう。その結果、元々不安定だった骨組みが連鎖的に崩壊し、二人を押しつぶさんと落下してきた。

それはとてつもない音をたて、土煙を巻き上げる。

「ッ……い・あれ?」

痛みはなく、死んですらいない。ただ、防衛本能から突き出した切歌の右腕から発生していたバリアのようなものが二人を守っていた。

「何が……どうなってるデスか?!」

〇〇〇

その日の夜は彼女、雷の心を表しているかのような雨だった。

飛び出してきた時と変わらない黒のパーカーと短パンに簡単なスリッパしか履いていない。目には生気が宿っておらず、雨によつてずぶ濡れだ。

「……私は疫病神……。疫病神は幸せになっちゃいけない……。幸せを感じちゃいけない……。だって……壊しちゃうから……」

うつろな瞳でぶつぶつと呟きながら、雨の町中をフラフラとした足取りで歩いていく。傷だらけの体が人の目を引いた。傘などの雨具を使っていないのもあるだろう。何せ、朝の天気予報から夜は雨になると言われていたのだ、この時間帯に出歩くなら持つていない方がおかしい。

急に人の流れが止まった。歩行者側の信号が赤に変わり、車道側の信号が青に切り替わる。雷は周りが見えておらず、変わらずフラフラとした足取りで赤信号を渡り始めた。

「おい君! 危ないから戻りなさい!」

「……」

会社帰りなのだろう、親切なサラリーマンが雷に叫ぶが彼女の耳に



は届かない。

雨、しかも黒い服を着ているため道路と雷の姿は簡単に見分けがつかない。結果、自動車と衝突してしまう。

小柄な雷の体はたやすく吹き飛ばされ、雨に濡れた道路の上を転がる。運転手が咄嗟に急ブレーキをしてハンドルの切ったのが功を奏し、命は無事だ。だが、右腕とろつ骨が折れ、様々なところに擦り傷と打撲を負ってしまう。

どこかで女性の叫び声が上がった。

運転手の男性が車から降り、倒れ伏している雷に駆け寄る。

「君！大丈夫か?!今救急車を呼ぶから……」

「……いい」

「どうした?!どこか痛むのか?!」

携帯を取り出そうとした男性の腕をつかみ、うつろな瞳を彼に向け、歪に笑いかけた。

「私が死ぬまで引いてください」

「ば、馬鹿なことを言うな!」

笑みを引つ込め、心底失望したと言うような顔をする。

「そう……ですか……」

打撲だけで済んでいる左腕でゆっくりと立ち上がり、男性の静止を聞きとめることなくその場を後にした。

（自分でやるんじゃないだめだ、きつとどこかで手加減しちゃう……。誰か私を殺してくれないかな……）

そんなことを考えているうちに、人気のない裏路地にやってきていた。

（よくドラマとかでならこういうところで見つかるよね、死体）

こういうところをたまり場に行っている不良とか何かいないかな。と、痛む体を引きずりながら歩いていく。そして都合よく、鉄パイプなどを持ったいかにもな不良グループと遭遇した。にんまりと歪な笑みが自然と浮かぶ。

（強姦殺人とかいいよね。殺してもらえらうえに尊厳も踏みにじってもらえらうか最高）

フラフラとそのグループのほうへと向かう。

当然、怒声が飛んだ。

「てめえ！俺らのナワバリに入るとは何モンだ?!」

「……」

ただの威嚇だと無視して足元にあつたまだ中身のあるコーラの缶を拾い上げ、一番目立つ奴の目の前に立ち、頭の上にぶちまけた。

顔面に鉄パイプが横殴りに叩きこまれて額が切れ、熱い液体が流れ出した。

「くひッ」

口から変な声が出る。

殴る、蹴る、自分の体と意識が『死』へと近づいていくのを実感するたびに変な笑みがこぼれる。色々なところから血が流れ出て、体中を鈍痛が襲う。

雷の体がゴミ袋の上に倒れる。

「なあ、こいついいカラダしてるしき、輪姦そうや」

「いいねえ」

「意義ナ―シー！」

不良どもは欲求のはけ口を見つけて大盛り上がりだ。雷は小さく笑みを浮かべる。

雷の望み通りの展開になっていく。この後にしつかりと殺してくれば完璧だ。だが、現実はそううまくいかないもので、誰かが通報したのだろう、遠くからこっちに向かってパトカーのサイレンが聞こえてきた。

「やべえ！サツだ！逃げるぞ！」

リーダーと思わしき男が声を上げ、雲の子を散らすように姿を消した。因みに、雷がコーラをぶっつけたのがリーダー役だ。

被害者である雷は病院で治療を受け、ベッドの上で事情を聴かれた後、唯一の彼女の保護者である祖父母、轟鍊治と轟千代に引き取られることになった。

## 盲執、執着、依存

病室で事情聴取（といってもかつての傷害事件の被害者常習犯だった雷の精神状態を警察も理解していたため、形だけのものだったのだが）を受けた雷は唯一の保護者である彼女の祖父母、轟錬治と千代に連れられて病院を後にした。

折れた右腕には治療用のギブスが装着されており、まだ肋骨の痛みが残っているものの日常生活に困るほどの事ではない。

二人に連れられて車に乗り込んだ。後部座席で俯いて座っている雷に助手席の千代が話しかけてきた。その声色は心の底から心配している。

「急にどうしたの雷ちゃん。高校に上がってからは落ち着いたと思っただけけれど……、もしかして響ちゃんたちとケンカしちやったの？」

「……」

俯いたままフルフルと首を横に振る。千代が困ったように頬に手を当てた。

「そう……ケンカじゃないのね？ だったらどうし「ばあさんや」どうしたの？ おじいさん」

千代の言葉を車を運転している錬治が遮った。仏頂面のまま彼は落ち着いた調子で口を開く。

「雷。今お前が抱えてる問題が自分でどうにかならないのならば待て。そういう時はもがけばもがくほどドツボにはまるものだ。自分の力を過信してはならんぞ？ 今はお前のそのささくれだった心を丸めることだけを考えておればよい」

「……」

雷が顔をゆつくりと上げた。

錬治の言葉は昔からいつも頭ではなく心に響く。しわだらけの強面な顔でニヤリと笑った。

「なあに、心配するな。お前が犯罪にさえ手を染めなければお天道様はその機会を与えてくれるはずだ」

そしていつもの仏頂面に戻り、ハンドルを切る。それ以降会話はなかったが、空気が少し良くなっていた。

彼らの家に到着し、利き腕が利かないために少しバランスを崩しながらも車から降り、ゆっくりとした足取りで玄関に向かう。既に二人は鍵を開けて中に入っていた。

「……」

「雷！何か言うことはないのか！」

「っ?!」

黙って家に入ろうとする雷を錬治が怒鳴った。急な大声に肩がびくりと跳ねる。

「おじいさんー！」

「ばあさんは黙っている。雷、お前の心が今は荒れているのはよく理解している。……だがな、誰も一人では生きていけないのだぞ」

錬治は腕を組み、雷を扉の外に立たせたまま彼女をしっかりとつける。彼は今時珍しい『かみなりおやじ』と呼ばれるタイプの人間で、近所の子供たちからはよく怒る怖い老人であり、その父兄の少数は彼のことを嫌っているものの、大多数は人生の先生として尊敬の目を向けられているのだ。

怯えながらもこの説教が優しさからきていることを良く知っている雷は一步、踏み込んだ。

「お、お邪魔します……」

錬治がため息をついた。

「はあ……。ここはお前のうちでもあるんだぞ？そんな他人行儀でどうする」

「た、ただ、いま……」

「うむ、よろしい。おかえり、雷」

「おかえりなさい。雷」

今度はよかったようだ。錬治はさつきまでとは打って変わって優しく雷を出迎えた。

○○○

次の日の昼頃、白いワンピースに深緑のカーディガンを羽織った雷

は近くにある河川敷に訪れていた。

彼女がここに引き取られてから心が不安定になるたびにここを訪れ、そこで遊ぶ幸福な人たちと不幸な自分を比べていることがよくあったのだ。なぜなら祖父母の家は凶器になり得そうなものは鍵で取り出せないようになっていたり、外で何かしようなものなら錬治を慕う大人たちによって止められてしまうためだ。そのおかげで地元にいる方が自傷や自殺に走ることが出来ず、けがを負う可能性が低かったりする。

ほおを撫でるそよ風が少し肌寒い。雷はカーディガンを羽織ってきてよかった、と思った。

(私って幸せになってもいいのかな……)

それは祖父母と会うたびに考えさせられる思いだった。

どれだけ離れようとしても優しく、時に厳しく包み込み、いまはもう昔となった『家族』とはどういうものなのかを再認識させられる。彼らは雷が何をしてもしも彼ら自身から離れることはなく、どんな時でも優しく受け止めてくれるのだ。

(響や未来とでもいつしよにいられるのかな……)

だが、それ故に響や未来のところに帰るのが怖かった。自分から壊してしまつたつながり、彼女たちには血のような確固としたつながりはなく、ただ心や絆というあいまいなものによって繋がっているだけだ。血のつながりがあれば例えどのような状況に陥つても迎え入れてくれるが、それ以外のつながりに確証はなく、何時でも切ることが出来る。それが雷は怖かった。

(もう……無理だよね……。あんなことしちゃったんだもの、もうみんなには会えないよ……)

目の奥が熱くなり、涙があふれ出てくる。決壊したかのように雷は叫んだ。

「別れたくない！ずっと、ずっと一緒にいたいよ！でもこわしちゃう、未来は響の大切な陽だまり、私にとってもそうだった！だけでもうあそこにはいられない、こんな奴なんか居ていいところじゃなかったんだ！」

左手で乱暴に涙をぬぐう。そして小さく呟いた。

「……こんな別れ方、したくなかったなあ……」

涙をぬぐいながらとぼとぼと帰路についた。

「……ただいま」

「おかえりなさい。今日のご飯はあなたの大好きな湯豆腐ですよ」

千代が台所から優しく出迎える。

「ごめんおばあちゃん。あまりお腹空いてないんだ……」

「あらそう。……水炊きに変えようかしら……」

泣きつかれた雷は和室に怪我が痛まないように倒れ込み、そのまま気絶したかのように眠った。

○○○

雷は夢を見た。

それは母親の胸の中で眠る自分の夢だった。

(いいにおい……)

もつとそばに寄りたいた顔をさらに押し付ける。母親がおかしそうに優しく笑った。

「あらあら、まったく甘えんぼさんなんだから」

(甘えん坊でいい……。ずっとここにいたい……。ここなら幸せになれる……)

雷の髪を弟の出海がそつとすいた。最後に見た幼い姿のまま、悪戯っぽい笑みを浮かべて櫛をもっている。

「こーら。やっと雷が寝たんだから。起こさないの」

「はーいー!」

子供らしく元気に返事をするが、口元に指を立てた母親を見て静かになる。ぱしやりとどこからかシャッター音が鳴った。

「いやー、雷はやっぱりかわいいなあ……。僕達の自慢の娘だな」

「お父さん!雷が可愛いのは分かりますけど急に写真を撮らないでください!びっくりしちやっただじやないですか」

父親が頭をかいた。

「あはは……。ごめんごめん」

(お父さんたら……。お母さんに迷惑かけちゃだめじゃない……)

しかし、幸せを感じているのもつかの間、段々と景色が白んでくる。  
(覚めないで！起きたくなんかない！ずっとここにいたい！)

雷は夢の中で必死に抵抗するが効果があるはずもなく、ついに目が覚めてしまった。

「ッ?!」

あたりが暗くなっているのを見て慌てて時間を確認する。既に時計の針は零時を回っており、祖父母も眠っている時間帯だ。そして、何か自分がかかっているのを見つけ、それを手に取った。ふわっと懐かしいにおいがした。

それはこの家に引き取られたときに持ってきたケラウノスと同じく幼少期に使っていた思い出のこもった毛布であり、体を冷やすと悪いと思った千代が引つ張り出してかけてくれたのだ。夢で感じたものと同じにおいをもつと感じたいと毛布に顔をうずめる。

そうしていると幸せになっっているように感じたから。

その日から雷は一步も外に出ず、頭から毛布をかぶって生活するようになった。

数日が経ち、テレビでスカイタワーがノイズに襲われたというニュースが流れ、それを雷が毛布をかぶったまま集点の合わない目で眺めていた時、ピンポンとインターホンが鳴った。

「はーい！今行きまーす！」

千代がいくつか会話を交わした後、雷のもとにやって来た。

「雷。お客さんみたいよ」

返事は返ってこない。毛布をかぶったあの日からずっとこのままなのだ。錬治はこの状態を心の成長過程において必要なこととらえているために何も言わない。千代は抜け殻のような雷を引き起こし、鍵を開けて戸を開いた。その瞬間、ジャージ姿の四人組のうちの一人が雷に跳びついてきた。

「雷！迎えに来たよ！」

「……」

「あず……ま……っ？」

返事が返ってこないことに響は戸惑う。

雷の心は過去の妄想にとらわれ、依存し、『今』を見てはいなかった。



## 全てほどけた繋いだ手

雷が失踪したその日の夜、機械的に増幅された神獣鏡の光ではフロンティアを開放できないという事実を目の当たりにした武装組織ファイネはその問題を解決すべくスカイタワーの会議室へと足を運んでいた。

ナスターシヤの車椅子を押すマリアの脳内に湖畔で告げられた言葉が蘇る。

「ママ、あれはどういう……?」

「言葉通りです。私達がしてきたことはテロリストの真似事に過ぎません。真になすべきことは、月がもたらす災厄の脅威を如何に抑えるか……違いますか?」

「つまり……今の私達では世界を救えないと?……ッ!」

会議室の前に到着し、自動ドアが開く。中には数名の黒服を着た男たちが待ち構えていた。

思わずマリアはナスターシヤに問いかけた。

「ママ！コレは……?!」

その問いに冷静に返す。

「米政府のエージェントです。講和を持ち掛けるため私が招集しました」

「講和を……結ぶつもりなの……?」

「ドクターウエルには通達済みです」

マリアに話しながら車椅子のハンドルを起動し、それを操作して会議用のテーブルに席をつける。

「さあ、これからの大切な話をしましょう」

マリアの頬を汗が伝った。

○○○

時を同じくしてスカイタワーの別の階、水族館にやってきていた響は水槽の前に立ち、頭の中では二つ出来事が反響していた。一緒に来ている未来は飲み物を買に行っている。

一つは自分の命に関する事。胸のガングニールが自らの体を内

側から食いつぶし、やがて死ぬ、そうでなくとも人として生きているとは言えない状態に陥る事。

もう一つは雷が失踪したということだ。未来や装者たち、弦十郎らの話を総括すれば、追いつめられた彼女の精神が未来がフイーネに塗りつぶされたという幻影を見、彼女に襲い掛かったのだという。そして正気に戻った雷は自らのしたことに耐えきれず、ケラウノスを持つたまま姿を消したらしい。

藤堯曰く「ギアを持つているのだから起動さえしてくれば追跡できる」らしいが彼女の事だ、起動することはあり得ないと言つてもいい。

今現在、二課の総力を挙げて雷を搜索していて今すぐには解決できないため、まずは自分の問題から解決すべく考え始めた。

(戦えば死ぬ。考えてみれば当たり前の事……。でも、いつかマヒしてしまってそれはとても遠いことだと錯覚していた。戦えない私つて、誰からも必要とされない私なのかな……)

突然、深刻に考えていた響の頬に冷たい缶ジュースが当てられた。さつきまでとは打って変わってすつとんきような声が出る。そこには缶ジュースを二本持ち、首には雷によってつけられた首を絞めた痕を隠すためにストールを巻いた未来がいた。

かなり声が大きかったのか周りの客がざわめいた。

「大きな声を出さないで」

「だっ、だだだだだだっってえ……。こんなことされたら誰だっって声が出ちゃうっってえ……」

「響が悪いんだからね」

未来の言葉に思わず気の抜けた声が出る。

「私？」

「だって、雷とまた一緒に来るための下見ついでに遊びに来てるのに、ずっとつまらなそうにしてるから。響が楽しんでくれないと私も楽しくないし、雷って響と感性は似てるから三人で来た時にどう回ったら楽しんでくれるかわからないんだもん」

「あはは……ゴメン。心配しないで、雷が居ないのは残念だけど今

日は久しぶりのデートだもの。三人で来た時にどこを回ったら楽しいかも考えてるし、楽しくないわけないよ」

「響……」

カラ元気のような響の様子に未来の脳裏に弦十郎の言葉が蘇った。それは響の GANG ニールの抑制と、雷の精神の安定には未来との穏やかな日常が必要だということだ。

雷の追い詰められた声が耳から離れず、響の前では見せないが彼女の両親が元 F・I・S・に所属していたために様々なことを疑われているという事実と共に「どうすれば雷が安心した日常を送れるのか？」とたびたび悩まされている。

表情の曇った未来の手を響がとった。

「せっかくのスカイタワー、丸ごと楽しまなきゃー！」

〇〇〇

マリアの手によって異端技術のデータが記録されたメモリーが黒服の一人に手渡された。

「異端技術に関する情報、確かに受け取りました」

そう言っただけにメモリーをしまい、マリアがナスターシャのそばへと戻る。

「取扱いに関しては、別途私が教授いたします。つきましては……」

その話を遮るようにナスターシャに拳銃が向けられた。それも一人ではない、全員にだ。

「ママ?!」

「あなたの歌よりも、銃弾ははるかに早く、躊躇なく命を奪う」

「ッ?!」

「初めから足り引きに應じるつもりはなかったのですか?」

「必要なものは手に入った。あとは unnecessary なものを片付けるだけ」

すると窓の外に航空型ノイズが現れ、ガラスを通り抜けて黒服たちに襲い掛かった。人型ノイズも天井を通り抜けて姿を現す。

そしてそのノイズを統制する完全聖遺物、『ソロモンの杖』を所有するウエルは隣のビルでスカイタワーに襲い掛かるノイズの群れをしり目に呟いた。

「どいつもこいつも勝手なことばかり……」

静かにコーヒーを飲む。

「Gran ziz el Bilfen Gungnir Zizz  
l」

拳銃を構えた黒服という目下の障害を切り抜けたマリアは漆黒の  
ガングニールを纏い、ターゲットをマリア達に変えたノイズにアーム  
ドギアである槍をふるって退路を開くために殲滅する。

その過程で発生した爆発の衝撃が響たちの階にまで響いた。

「なに?」

「あれ、ノイズじゃないか?!」

響が警戒する。次いで窓の外に現れたノイズの姿に人々が逃げま  
どう中、響は戦うために駆けだそうとするが未来によって手を引つ張  
られ、止められる。

「行っちゃダメ!行かないで!」

「未来?!だけど行かなきゃ!」

「この手は離さない!響を戦わせたくない!遠くに行つてほしくない  
!」

必死に響を引き留める。雷だけでなく響までどこかに行つてしま  
うのはもう限界だった。子供の泣き声が聞こえた。

「お母さんどこおく……。お母さん、怖いよおく……」

一度子供のほうを向いた後、二人はお互いに向きなおす。

「胸のガングニールは使わなきゃ……。大丈夫なんだ!このままじゃ

……」

「響……」

その手を放すと響は子供のほうへ駆け出し、未来はその後を追う。

マリアはギアのヒールでメモリーを踏み砕いた。そして怒りの表  
情をにじませた後、脱出すべくナスターシヤを抱えて通路を駆ける。  
襲い掛かるノイズの群れを槍の一振りで薙ぎ払う。後ろで爆発が起  
きたが気に留める暇はない。スカイタワー展望室各所で同様の爆発  
が起き、それをウエルが隣のビルから窓に顔を当て、食いつくように  
見ていた。

エレベーターの中から武装した特殊部隊がマリア達を抹殺すべくなだれ込んでくる。

発射される弾丸をマントを盾代わりにすることで防ぎ、そのまま叩きつけることで二人を、同じくマントで弾を防ぐ手段のないナスターシャを守り、そのまま接近して飛び蹴りを喰らわせることで一人を戦闘不能に追い込む。

担がれているナスターシャが策を出した。腹を肩に圧迫されているからか声がかすれている。

「マリア、待ち伏せを避けるために上の階からの脱出を試みましょう……」

階段へとつながる扉を蹴り飛ばし、上へと向かう。

響と未来は泣いていた子供と手をつなぎ、避難経路である階段へと向かっていった。

「ほらほら、男の子が泣いてちゃみつともないよ?」

「みんなと一緒に避難すればお母さんにもきつと会えるから大丈夫だよ」

「大丈夫ですか?!早くこっちへ、あなた達も急いで」

スタッフの男性が子供を抱き上げ、響たちにも避難を促す。二人が顔を合わせて避難しようとしたその時、上の階をノイズが攻撃し、その爆発によって天井が崩れ、落下する。

「危ない!」

「うわっ?!」

落ちてきた天井から響を守るために未来は背中から体当たりで突き飛ばし、自分もその勢いのまま倒れ込んだ。

マントを盾にして攻撃を防いでいたマリアだったが、彼女の目の前で関係のない一般人が巻き込まれ、命を落とした。防いでいたマントで叩きつけ、気絶させる。

目の前にいながら命を待てる事が出来なかった自分に愕然と立ち尽くした。

「マリア……」

軍人たちが続々とやって来てはマリア達に銃を向ける。

「私のせいだ……。すべてはフィーネを背負いきれなかった私のせいだアアッ！」

咆哮と共にマントを叩きつけて一人を撃破し、残りの視線を自身から外す。マリアの跳び蹴りが顔面に直撃、ギアを纏った一撃によって沈黙。続いて着地するや否や回し蹴りで蹴り飛ばす。

「アアアアッ！」

残りには槍を叩きつけて二人まとめて吹き飛ばした。

返り血が点々と GANG ニールを彩る。刺し貫いていないあたり良心の叱責がの追っているのだろう。涙を目もとにためて唇をかみ、その体はかすかにふるえていた。

未来によつて押し倒された響は避難経路である階段を瓦礫によつて塞がれてしまったものの、命は無事だった。

「ありがとう未来……」

「うん……。あのね、響……ッ?! うあっ?!」

突如として起きた揺れにバランスを崩してしまふ。展望台の一部が崩落し、その重みが無くなったことで響たちのいるところが跳ね上がったのだ。

「うわわあっ?!」

「響いッ！」

その拍子に響の体が後ろ、何もない空中に投げ出されてしまい、未来が咄嗟に手を伸ばして彼女の手を掴む。響は宙ぶらりんの状態になる。未来の体は響の体を一人で支えるのと自分が落ちないように踏ん張るのとでギリギリの状態になっていた。

すべての軍人を撃破したマリアは肩で息をしながら隅で震えている人々に発破をかける。通路には撃破した軍人たちの血で赤く染まっている。

「嫌あ……。助けてえッ……。助けてえッ……。!」

「うろたえるなッ！」

「ひいっ?!」

明らかにこの惨劇を生み出したマリアに怯えていたが構わず続ける。

「うろたえるなッ！行けッ！」

逃げ出していったのを確認し、真つすぐに正面を見据える。ステージで放った言葉の意味を思い返す。

（あの言葉は他の誰でもない、私に向けて叫んだ言葉だ！）

「マリア……」

マリアはナスターシャを抱え、槍を天井に向けて掲げた。

「もう迷わない！一気に駆け抜けるッ！」

槍が高速回転し、マントも回転に合わせることでドリルのように天井を突き進む。

宙づりになっている響が自らの手を掴む未来に叫んだ。

「未来……ここはもう持たない！手を放して！」

「駄目！私が響を守らなきゃ！」

「本当は雷も守ってあげなくちゃいけなかったのに……」という思いを胸に隠し、未来は叫んだ。その思いは言わずとも響に伝わっている。

「未来……」

大切な親友まで巻き込まないために、響は口を開いた。

「いつか、本当に私や雷が困ったとき、未来に助けてもらおうから……。今日はもう少しだけ、私に頑張らせて……」

未来の目から涙がこぼれる。響は掴んでいた手の力を抜き、その手を放したくない未来はそれ以上に力を入れた。

「私だって……守りたいのに……」

未来の手から響の手が離れた。

「響いーッ!!」

未来の叫びとともに落下する響はガングニールを起動すべく聖詠を歌う。

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro  
n」

ギアを纏った状態で着地し、衝撃によって地面が砕け、沈み込む。ギアから負荷を軽減した蒸気が放出された。

響は立ち上がり、未来のいた場所を見据える。

「未来！今行く！」

だが、大爆発が発生し、爆炎によってその場所は吹き飛ばされる。  
「未来うーッ!!」

響の叫びが響いた。



例え、傷つけるとしても

響が先ほどまでいたところ、つまり、未来がいたところが爆炎に包まれた。

「未来……」

失踪して居場所が分からなくなっている雷に加えて彼女の日常の象徴である未来までもいなくなってしまう。

今までの記憶がよみがえり、膝から崩れ落ちてしまう。

「なんで、こんなことに……」

ギアが金色の粒子へと形を変え、消滅する。ギアが形を維持することが出来ないほどに心が沈み込んだ響は肩を震わせ、涙を流した。ノイズはそんな彼女のことを気にするわけもなく襲い掛かる。

煙から飛び出し、槍のようになった数体の航空型ノイズが地面に突き刺さった。だが、響を狙った一体が赤いエネルギーの矢に貫かれて塵と化し、別のノイズは蒼き一閃によって両断される。

「立花ッ！」

「そいつは任せたッ！」

翼とともに現れたクリスが跳躍して二人の前に降り立ち、腰部装甲から小型ミサイルを展開して発射する。

『MEGA DEATH PARTY』

攻撃を仕掛けてきたノイズの群れを爆発が襲うが数体を取りこぼし、突破を許してしまう。

(少しずつつ何かが狂って、壊れていきやがる。あたしの居場所を蝕んでいきやがるッ！)

クリスはノイズの攻撃を横に走ることで回避し、アームドギアのボウガンでガトリング砲に変形させた。

『BILLION MAIDEN』

ガトリング砲の砲身が回転し、圧倒的な数の弾をばら撒いていく。イチイバルによる長距離射程攻撃ははるか上空にいるノイズの群れをたやすく撃ち抜き、撃破していった。

(やってくれるのは何処のどいつだッ！お前かあッ?!)

上に視線が集中していると判断したのか低空を飛行するノイズに突進し、跳躍して上を取るとガトリングが火を噴き、ハチの巣にする。(お前らかッ?!)

着地と同時に横薙ぎに降り注ぐとするノイズの群れに両腕の砲口を向けて撃破していく。続いて腰部からミサイルを展開し、まるで人間砲台がごとき火力で焼き払う。

(ノイズッ! あたしがソロモンの杖を起動させてしまったばかりにッ! ……なんだ。悪いのは全部あたしのせいじゃないか……。あたしが……。ッもう逃げなああいッ!」

叫びと共に大型ミサイルを二機構築して点火し、発射する。

『MEGA DEATH FUGA』

空中に存在する二体の大型航空ノイズにミサイルは向かって行き、爆発。その威力によって大型ノイズの周囲にいた小型ノイズも巻き込んで誘爆していった。

全力を出したクリスは膝をつき、滝のような汗をかいて肩で息をすする。その表情には後悔がにじみ出ていた。

すべてのノイズを撃滅し、この事態の收拾のために二課と警察が合同で動き出した。

レシーバーで指示を出していた弦十郎のもとに緒川が歩いてきた。

二、三ほどの言葉を交わす。

「米国政府が?」

「間違いありません。F. I. S. と接触し、交渉を試みたようです」  
「その結果がこの惨状とは、交渉は決裂したと考えるのが妥当だが……」

緒川がボロボロになったスカイタワーを見上げ、弦十郎のほうに顔を戻して言う。

「ただ、どちらが何を企てようと人目につくようなことは極力避けるはず」

「F. I. S. と米国が結びつくのを良しとしない第三の思惑が、横紙を破ったか……」

弦十郎が目を伏せる。そして何かを思い出したかのように緒川が

口を開いた。

「そうでした。このような事態が起きてしまったので言いそびれてしまいました。一つ朗報があります」

「朗報だと？このタイミングでか？……まさか！」

少し悩んだ後、はっとした顔で緒川の顔を見る。その通りですと言うようにニヤリと笑う。

「彼女の足どりがつかめました」

雷に続いて未来までいなくなってしまった響は二課の車の中で自分で自分の手を握っていた。未来の顔が蘇り、自然と手を握る力が強くなる。

（絶対に離しちゃいけないかったんだ……。二人とつないだこの手だけは……）

「あつたかいものどうぞ。少しは落ち着くから」

友里が空いた窓からドリリンクを差し出してきた。

それを受け取り、両手でもつ。悲しさから体が震え、それが伝わって中のドリリンクに波紋を生んだ。目じりに涙がたまる。

「響ちゃん？」

「でも、私にとって一番あつたかいものは、もう……」

車内に響の嗚咽が響いた。

その日の夕方、近くの河川で二課の所有する通信機が緒川の手によって回収された。

○○○

ファミリールレストラン『イルズベイル』にクリスと翼の姿があつた。クリスは口元の汚れを気にせずパスタを口に入れ、何も食べようとしない翼に「奢るから何か食えよ」と催促する。

「夜の九時以降は食事を控えている」

「そんなんだからそんなんだよ」

口に物を入れたまま翼を煽った。

翼がテーブルを叩いて立ち上がり、クリスを怒鳴る。

「何が言いたい！様がないなら帰るぞ！」

「怒ってるのか？」

「愉快でいられる道理がない。F. I. S. の事、轟の事、立花の事。そして、仲間を守れない私の不甲斐なさを思えばッ……」

目を閉じて再び席に座り、クリスはそんな翼に構わずパスタを口に含んだ。テーブルはクリスの食べ方が汚いせいで汚れている。

「呼び出したのは、一度一緒に飯を食ってみただけさ。腹を割っている話し合うのも悪く無いと思つてな」

フォークを皿に置いてつま楊枝を手にとって話し始める。

「あたしは何時からこうなんだ？ 目的は同じはずなのに点でバラバラになつちまつてる。もつと連携を取りあつ……」

「雪音……」

真剣な声色で翼がクリスの話を遮った。

「腹を割つて話すなら、いい加減名前ぐらい読んでもらいたいものだ」  
「はあ?! そつ、それはあ……おめえ……」

クリスの頬が赤く染まり、答えを言いよどんでいるうちに翼がヘルメットをもつて店を出て行つてしまった。

「あーちよつ……。はあ……結局話せずじまいかあ……。でもそれによかつたのかもな……」

アンニユイんな表情でコーヒーを啜る。底から張り付いていたパスタの麺がポトリと落ちた。

「につがいなあ……」

その言葉は今のなにもかもを表しているようだった。

○○○

月明かりに照らされているエアキャリアの一室に集まったF. I. S. のメンバーとウエルに不穏な空気が漂っていた。不穏の出所は原因はマリアがフィーネでないことと、フロンティアの情報を米国政府に渡そうとしたことについてだ。

「مام、マリア、ドクターの言っている事なんて嘘デスよね?」

「本当よ。私がフィーネでないことも、人類救済の計画を一時棚上げにしようとしたこともね」

「そんな……」

マリアは腕を組んで続ける。

「ママはフロンティアに関する情報を米国政府に供与して、協力を仰ごうとしたの」

調と切歌がナスターシャのほうを向いた。

「だって、米国政府とその経営者たちは自分たちだけが助かろうとしてるって……」

「それに！切り捨てられる人たちを少しでも守るため、世界に敵対してきたはずデースー！」

「あのまま講和が結ばれてしまえば、私達の優位性は失われてしまう……。だからあなたは、あの場にノイズを召喚し、会議の場を踏みにじって見せた……」

ナスターシャに名指しされたウエルのメガネが光を反射し、小さく笑った。ソロモンの杖を肩に担ぐ。

「嫌だなあ、悪辣な米国の連中からあなたを守って見せたというのに！……このソロモンの杖で……！」

杖の先端をナスターシャに向けたことにより、調と切歌が警戒態勢をとる。

すると突然、 MARIA が二人とウエルの間に割って入り、彼を庇った。その事実二人は動揺する。

「MARIA?! どうしてデースか?!」

「ふははは！ そうでなくっちゃあ！」

ウエルが嬉しそうに笑いだす。

「偽りの気持ちでは世界は守れない。セレナの思いを継ぐことなんて、『あずま』との約束を守ることなんてできやしない。すべては力。力を持って貫かなければ、正義をなすことなんてできやしない！世界を変えていけるのはドクターのやり方だけ！ならば私はドクターに賛同する！」

二人は警戒を解いた。 MARIA がウエルに付いたという驚きのあまり『あずま』が誰なのかが頭の中でつながらない。

ウエルが不気味に笑う。

「そんなの嫌だよ……。だってそれじゃあ、力で弱い人たちを抑え込むってことだよ……」

切歌が調のほうを向き、また正面に戻した。

月を雲が覆う。

ナスターシャが静かに口を開いた。その手に自分も決心を決めたと  
言うように力が入る。

「分かりました……。それが偽りのフィーネでなく、マリア・カデン  
ツアヴナ・イヴの選択なのですね？」

マリアはその問いに黙って見つめることで肯定とする。

突然、ナスターシャは口を抑えてせき込んだ。思わずマリアは駆け  
寄りそうになるが決意が崩れる気がして踏みとどまる。

「大丈夫デスカ?!」

「……」

調と切歌がナスターシャのそばに駆け寄る。

ウエルがドアを開け、口を開いた。

「後のことは僕に任せて、ナスターシャゆっくり静養してください。  
さて、計画の軌道修正に忙しくなりそうだあ。来客の対応もあります  
からねえ」

計画を自分の思い通りに動かせるという喜びが隠しきれしていない。  
ウエルが部屋を後にした。

汚したくないから

マリアが約束の少女、雷のことを思い出したのには未来の存在があった。

スカイタワーの爆発に巻き込まれる直前にマリアによって回収され、その時の衝撃などの様々な要因から気を失っていたものの命に別状はなく、エアキャリアに運び込まれていたのだ。抵抗されたとしても問題なく抑え込めるが念のために牢を起動し、閉じ込めた直ぐ後に未来が目を覚ました。

マリアの姿をみとめると、怒りの感情をこめて叫んだ。

「雷を返してー!」

「雷?……ああ、ケラウノスの装者の事か。生憎だが、私は君から彼女を取り上げてはいない」

対外的には自らをフィーネだと名乗っているため、マリアは冷徹にフィーネを演じる。その答えに未来は悔しさと悲しさに表情を歪め、歯を食いしばった。ぎりつと歯の擦れる音がする。

涙が頬を伝った。

「忘れたなんて言わせない!響と……あなたが人生を奪った雷の約束を破って!心を壊しておいて約束を忘れたなんて!」

「私には何を言っているのかわからないわ……。そうそう、その檻に触れると火傷じやすまないわよ?」

エネルギーでできた檻に顔が触れそうになるまで近づいて吠えた。マリアは内心心を痛めながらあくまでも冷徹にフィーネを演じる。もともと、何故未来が荒れているのか皆目見当もつかないのが事実なのだが。

未来はマリアの答えに座り込み、項垂れた。さつきまでどうって変わって弱々しくなっている。

「……あなたにとって……雷はその程度の子だったんですか……?」

「……」

マリアはその問いに答えず、静寂が訪れる。

その静寂を破ったのは、自動ドアの開く音と共に現れたナスター

シヤだった。調と切歌は連れてきていない。ゆつくりと口を開く。

「そんなはずはありません。ですが……フィーネとの約束が分からないというのは本当です」

「ママ?!」

マリアはフィーネではない。暗にそういうナスターシヤにマリアは詰め寄るが、それを手のひらで制した。未来に言った理由としては、たかだか少女一人が「マリアはフィーネではない!」と声を上げたとしても誰も聞きはしない。というのもあるが、隠す意味もないというのがほとんどだった。

「雷とフィーネに何のつながりがあるのか、出来る限りでいいので聞かせてくれないでしょうか? 私達には必要なことです。辛くなったら途中でやめていただいても構いませんから」

混乱する頭を何とか制御した未来は、ややためらいがちに話し始めた。

家族の事、体の事、フィーネとの因縁、そして今。自分が分かるところはすべて話した。改めて自分の親友が歩んできた人生を認識し、心が痛む。それはナスターシヤも同じだ。

「そうですか……ありがとうございます。雷にフィーネとの因縁がここまでのものとは思いませんでした……。彼らと連絡がつかなかったのはそういう理由で……」

ナスターシヤは今までの行動が雷を無意識に追い詰めていたとは知らず、後悔の思いで一杯だった。だが、それとは別に思考は冷静そのもの。コレは研究者という人種ゆえだろう。

マリアはナスターシヤがなぜそこまで雷という少女を案ずるのか理解できない。

「ママ、どういうこと? ケラウノスの装者と私達が何の関係があるというの?」

「あなたが自責の念によってつぶれるかもしれませんよ?」

「それほどの事なの?」

「それほどの事です」

マリアは唾をのみ、沈黙をもって肯定とする。ナスターシヤの口か



ら放たれた言葉は衝撃的なものだった。

「マリアに調、切歌の思い出である約束、その約束を交わした少女こそ轟雷。私達と敵対したケラウノスの装者です」

「え……」

ナスターシャが何を言っているのかが理解できない。

思考を介さずに言葉が口から出てきた。

「ママは……最初から知っていたの?」

「もちろんです。我々が二課と初めて戦った時から知っていました」「なっ?!」

今知ったのであれば分かった、だが、初めて戦闘した時から知っていたとなると話が違う。「何故知っていたのなら教えてくれなかったのか?」という言葉が口から出ようとした瞬間、ナスターシャが口を開いた。

「私が雷の存在をあなた達に伝えてしまえばためらいが生まれ、まともにも戦うことは出来なくなると分かっていたからです。そうなれば真実は米国によって黙殺されてしまう。私はそれを危惧したのです」流石にフィーネと名乗ったこと自体が間違いだったとは思ってもりませんでした。と彼女は付け加えた。

深刻そうな話をしている二人の間に未来が割って入る。

「雷のことを大切に思っているのなら、今すぐこんなことやめてください!もう雷を苦しませないで!」

ナスターシャは目をつむって言う。

「私達はもうフィーネと名乗るつもりはありません。その為に先ほどまでスカイタワーにいたのですから」

「どういうことですか?」

未来が首を傾げた。

「米国と講和を結び、ともに問題を解決するのが目的でした。結果は惨憺たるものになってしまいました」

未来はさっきまでいたスカイタワーの惨状を思い出す。その時、マリアは肩震わせ、自らの拳を握りしめるのを見ながら呟いた。

「もう後戻りはできない。私は前に進む!たとえそれが雷を傷つける

結果になったとしてもだ！私は私達だけの約束よりも、人類を守ると  
いう大義をとる！」

「マリア……」

「そんな?!」

(それに……私の手は血で汚れている……。こんな手で雷に触れるこ  
となんてできない……)

マリアは心の中にある思いを「うろたえるな」という言葉の仮面で  
隠す。この時、決意が揺らがないようにナスターシャではなく、ウエ  
ルに付くことを決めた。

F・I・Sの主導権がナスターシャからウエルに移り変わる少  
し前の話である。

## 解決の糸口

エアキャリアの中、檻に捕らえられた未来のもとにマリアとウエルが姿を現した。

未来はマリアに対して変わらず憎悪の目を向けている。そんな彼女を気にすることなくマリアは、

「この子を助けたのは私だけど、ここまで連行することを指示したのは貴方よ。いったい何のために？」

「もちろん、今後の計画遂行の一環ですよ」

ウエルが檻に近づき、座り込んだ未来に視線を合わせた。未来は憎悪の対象であるマリアと異なり、いきなり登場した見知らぬ優男である彼を警戒する。

「そんなに警戒しないでください。少し、お話でもしませんか？きつとあなたの力になってあげられますよ」

そう言つて優しく微笑んだ。

○○○

切歌の脳内に落下する鉄骨を防いだ、フィーネの力が引き起こした光景がフラッシュバックする。

暗い表情で彼女は干していた洗濯物を腕に掛けながら、

(マリアがフィーネでないのなら、きつと私の中に……。怖いデスよ……)

「マリア、どうしちゃったんだろう……？」

「へ？」

不意に聞こえた調の声が彼女の思考を遮る。調は切歌と共に洗濯物を取り入れながら、

「私は、マリアだからお手伝いがしたかった……。フィーネだからじゃないよ……」

「う、うん。そうデスとも」

「身寄りがなくて、泣いてばかりの私達に、優しくしてくれたマリア。弱い人たちの味方だったマリア。いつか、あず姉さんとの約束を守るために、走り回っていたマリア。なのに……」

あの時のマリアの姿が臉に映る。

「調は怖くないデスか？」

「？」

切歌が話を切り出した。

彼女は上を向き、少し考えるようにしながら、

「マリアがフィーネでないのなら、魂の器として集められたあたしたちがフィーネになってしまいかもしれないんデスよ？」

不安げな目を調に向ける。調は俯き、

「よく、分からないよ……」

「それだけ?!」

切歌は驚愕に目を見開く。調は彼女を不思議そうに見つめ、

「どうしたの？」

「っ」

「切ちゃん?!」

切歌は調の問いに答えず、逃げ出すように駆け出していった。そんな彼女の背中を、調は後ろから見つめることしか出来なかった。

○○○

行方がつかめなかった親友、雷は『今』にいなかった。響は何度も雷を自分の顔に向けようとするがその目はどこか別のところを見ているように虚ろだ。肩をゆすつても、声をかけても、何をしても反応が返ってこない。彼女は毛布をかぶったまま、失った過去のことをうわごとのように繰り返している。

響は悲痛な表情を浮かべ、目に涙を貯めながら、

「雷……、ねえ……こっちを向いてよ……」

「……」

さつきと変わらず反応はない。

「立花……」

「つばさ、さん……」

たまらず翼が響の肩に手を置き、首を横に振る。

クリスは雷の変化についていくことが出来ず、呆然としていた。

弦十郎は一人の大人として対応すべく、なぜこのようになってし

まったのかを彼女の祖父母に聞き出そうとした。

彼はきつちりと礼儀として頭を下げ、

「すみません。私は雷さんの所属する部活の顧問をしている風鳴弦十郎と申します。何故、彼女がこのようになってしまったのか、お聞かせ願いたいのですが……」

「あ、どうも……。えっと、それは……」

雷の祖母、千代が返答に困っていると、

「わしが話をする。来なさい」

「おじいさん……」

ゆつくりとした足取りで祖父、鍊治が姿を現した。彼はそれ以上口を開くことなく、再び家の奥へと戻っていった。

「……どうぞ」

「失礼します」

「「お邪魔します」」

「……」

そして千代に促され、弦十郎の他、雷を含む装者たちは彼女の家の玄関をまたいだ。

居間に案内された弦十郎は、しかめっ面で座っている鍊治と相対する形で席に着く。装者たちは雷の部屋に案内され、何とか彼女を元に戻そうと奮闘していた。

「お茶をお持ちしました」

「すみません」

「ん」

二人は茶を一口すすり、鍊治が厳格な口調で切り出した。

「お前はあの子が中学の途中まで虐待を受けていたことを知っているな？」

「ええ、雷さんの口から聞かせていただきました」

弦十郎の中に響と共に稽古をつけてほしいと頼みに来た時の光景がよみがえる。

その答えを聞いて鍊治は、

「うむ。あの子から聞いたのであれば信用しよう」

「ありがとうございます」

粛々と頭を下げる。

また一口すすり、

「分かりやすく簡潔に言おう。あの子があんなったのは今回が初めてではない」

「初めてではない?」

オウム返しに聞き返す。

「そうだ。あの子は自分の心を守るため、重度のストレスがかかった時にあなる。うちに来た時もそうだった」

「その時は、虐待から心を守るために……ですか?」

「恐らくな。あの時はうちに来てしばらくすれば治っていた。根本的な解決ではないが、ストレスを与えるものを排除すればあの子は元に戻る」

「本当ですか?」

「ああ、本当だ。この状態をあの子が乗り越えてこそ、雷の心は一つ成長する。それに、自分から自身の境遇を話したんだ。お前たちに任せてみよう。それに今回はここに居ても問題が解決しないだろうしな」

「ありがとうございます……!」

その言葉を聞き、弦十郎は額が机に着くほど頭を下げた。鍊治は彼の近年稀にみる礼儀正しさを気に入ったのかニヤリと笑い、

「今度は別の件で来なさい。雷との様子を見る限り彼女たちもいい子なのだろう。雷の保護者として歓迎させてくれ」

「はい!」

そう言つてグツと茶を飲み干してから席を立ち、湯呑をシンクで洗う。

「お茶、ごちそうさまでした」

「いえいえ、雷をよろしくお願ひします」

「分かっています」

深々と頭を下げる千代にしっかりと返事をし、

「帰るぞお前達!」

すでに千代が呼んでいたのだろう、居間の前で待機していた響と

翼、クリス、そして雷に声をかけ、家を後にした。自分で歩こうとしない雷は弦十郎に背負われている状態だ。

「お前達、話は聞いていたな？」

「ハイー！」

「おう」

「ええ」

三者三様に答えが返ってくる。ならばこれ以上言うことはない。自分たちのすべきことは分かっているはずだからだ。

〇〇〇

二課に戻ってきた響たちは、雷が失踪していた間にまとめられていた『鎮静剤』に関する報告を聞いていた。緒川が言うには『鎮静剤』としての働きは十全に果たしていたが、その時の雷の状態がまずかつたのだという。

「あの時、雷さんに打ちこまれた鎮静剤は用法も問題なく、万全の状態で効果を発揮しました。コレは間違いのない事実です」

「ええ、説明を受けていた通りの効果は出ていたはずです」

緒川の言葉を裏付けるように翼が頷く。彼女が一番近くで効果を見ていたからだ。

彼はですがと前置きを置いて、

「雷さんの体にはイレギュラーが発生していました」

「イレギュラーあ？」

クリスが足と腕を組み、眉を顰める。

緒川が頷き、

「はい。重度の睡眠障害です」

「雷が言っていました！目を閉じるのが怖いつて」

響の声と表情は曇っていない。雷と未来のために自分が何をすればいいか、彼女がしつかりと理解しているからだ。

「彼女の全てを奪ったフィーネに対する本能的な恐怖。それに対して雷さんは可能な限り眠らないことで対処していました」

「つまりPTSDになっていたわけですね」

藤堯が腕を組み、あごを撫でながら言った。

「そういうことです。少なくとも近い状態にはなっていたでしょう。彼女が長い間目を覚まさないかったのは、その状態で鎮静剤を打ち込まれた結果ということですよ」

「どうして目覚めた時、あんなに錯乱していたんですか？」

友里が疑問を口にする。

緒川はタブレットのページをめくり、それがモニターに反映されたのを確認すると、

「雷さんの心の傷は深く、夢の中。つまり無意識の世界でも彼女を攻撃続けました。普通であれば目を覚ますことで逃れられたそれは、鎮静剤の効果で逃れることが出来なかった。要はノーガードで攻撃を受け続けていたんです」

「そして前触れもなく目が覚め、夢と現実の境が分からないまま未来くんの首を絞めた……」

弦十郎の言葉に緒川は頷いた。

「すでに薬の使用項目にはこの結果を反映した注意項目を追加しておきました。このようなことは今後、あつてはならないですからね」

そう言って彼はにっこりと笑った。

今、雷には一室が与えられている。彼女の事情は二課の全員が理解しているが、聖遺物をもって失踪したという事実がある以上罰を与えないわけにはいかず、弦十郎にとつても苦肉の策だという。因みに、その部屋は鍵こそかけられているがすぐに開けるようになっていたため、これが禁固処分と言えるのかはグレーなところである。

「……」

念のため自殺・自傷行為を防ぐ電子手錠を掛けられた雷は、手首につけられたそれに一瞥もしない。ただただ毛布を頭からかぶり、うわごとを呟きながら虚ろな瞳を中空に向けていた。



## 願わぬ再開

響は二課の仮設ベッドで仮眠をとろうとしていた。寝返りを打ちながら今はいない親友のことを思う。

(雷は帰ってきた。だからもう少しだけ待っててね、未来)

「ッ?!」

突然体に激痛が走る。体内のガングニールの欠片が彼女の肉体を侵食しているのだ。響はその痛みを歯を食いしばり、必死に耐える。

響に残された時間は、あと少ししかない。

決戦の日は近い。

○○○

深海の奥深くにあるというフロンティアに向け、エアキャリアは海洋を飛行していた。

機体のかじを取るマリアに向け、切歌がナスターシャの容態を聞く。

「マムの具合はどうなのデスか……?」

マリアは正面を向いたまま、

「少し安静にする必要があるわ。疲労に加えて、病状も進行してるみたい」

「そんな……」

その答えを聞いて、切かと調は不安げに眉を顰める。

そんな彼女たちの横から、F. I. S. の主導権を握ったウエルが尊大な言い方で壁に背を預けながら、

「つまり、のんびり構えていられないということですよ。月が落下する前に、人類は新天地にて、一つに結集しなければならぬ。その旗振りこそが、僕たちに課せられた使命なのですから!」

二人のウエルを見る目には不満の色がありありと浮かんでいる。

そんな時、エアキャリアのレーダーが反応を示した。全員の注意がそちらに映る。

「これは……」

モニターに映ったのは、

「米国の哨戒艦艇デスか?!」

切歌が思わず声を上げる。

ウエルが哨戒艦を映すモニターに歩み寄り、

「こうなるのも予想の範疇。精々連中を派手に葬って、世間の目をこちらに向けさせるのはどうでしょう?」

提案しているような文面だが、言い方から完全に行動を強制している。

「そんなのは弱者を生み出す、強者のやり方」

「世界に私たちの主張を届けるには、恰好のデモンストレーションかもしれないわね」

かつてのF・I・S.の砲身に反するやり方に調は反発するが、マリアはそれを食い気味に拒絶する。

「マリア……」

「私は、私達は……ファイネ。弱者を支配する強者の世界構造を終わらせるもの。この道を行くことを恐れはしない」

わずかにファイネを名乗ろうとしたとき言葉に詰まったが、マリアはそれを振り切った。

彼女と調の間に亀裂が入っていく。

○○○

エアキャリアを追跡するために海中を航行している二課の潜水艦がノイズの反応を検知する。

「ノイズのパターンを検知!」

「米国所属艦艇より、応援の要請!」

藤堯、友里を中心としたオペレーター陣が迅速に対応し、速やかに要請を受けた艦艇をモニターに表示する。F・I・S.が狙いを定めたものと同じの船だ。

弦十郎が指示を飛ばす。

「この海域から遠くない!急行するぞ!」

「応援の準備に当たります!」

もつとも経験を積んでいる翼がいち早く行動に移す。

「翼さん!私も……ッ?!」

後に続こうとした響はクリスによって強制的に引き留められ、ネクタイを掴まれる。

彼女は怒気を含んだ声で、

「死ぬ気かお前！」

そして響の身を案ずるように心配そうな顔で、

「ここに居ろって、な？お前はここから、いなくなっちゃいけないんだからよ。絶対、あのバカ二号も同じことを言うさ」

バカ二号とは雷の事だ。

クリスは響のネクタイを正し、

「頼んだからな」

そう言って指令室を飛び出して行った。

〇〇〇

アメリカ兵の決死の奮闘もむなしくノイズの蹂躪は続いている。こちらの攻撃は全く意味をなさず、逆に向こうの攻撃は死に直結するというまさに一方的な蹂躪だった。

一人、また一人と炭素の塊へと分解される。

マリアはその光景を見つめることしか出来ない。怒りのあまり彼女の唇は噛み切られ、出血している。

そんな彼女に調は歩み寄り、

「こんなことが、マリアの望んでいることなの？弱い人たちを守るために、本当に必要なことなの？あの時の約束破ってまで、するようになるのかなの？」

「ッ」

調の問いに、マリアは答えない。

その反応を見て、調は決心を固めた。彼女は振り返り、エアキャリアの扉を開ける。後ろから切歌の引き留める声がした。

「調ッ?!なにやってるデスか!」

「マリアが苦しんでいるのなら、私が助けてあげるんだ」

そう言って、調は空中に身を躍らせた。

「調ッ!」

「Various Shul Shagana Tron」

調は落下しながら彼女のギア、シウルシヤグナの機動聖詠を歌う。そして呼応するように彼女のペンダントが光り輝き、服を分解して黒とピンクの装甲とボディスーツのシンフォギアを纏った。

「調ー!」

後に続くこうとする切歌の肩を後ろからウエルが掴む。

「連れ戻したいのなら、いい方法がありますよ」

それは悪魔の誘いだっただ。

調は落下しながらツインテールの様に接続したバインダーから無数の小型鋸を展開する。

『α式・百輪廻』

発射された鋸は雨のようにノイズに降り注ぎ、狙いを違うことなく直撃する。続いて調は足の裏から小型の鋸を展開し、ローラスケートの要領でノイズの群れに切り込んでいく。そして両のバインダーそのものを展開し、身の丈ほどの大型鋸を形成。自身も高速回転することで一つの超大型鋸となる。

ブドウ型ノイズの発射する弾をもともせず距離を詰め、切り刻む。

ノイズなどギアの前では塵芥。そう思っていたところを背後から奇襲を喰らいかけるが、緑の鎌がそれを阻止する。

ギアを纏った切歌が降下してきた。鎌は彼女が投擲したのだ。

「切ちゃん、ありが……。何を……?」

頬を緩め、安心しきった表情で切歌のもとに歩み寄る。が、首筋に当てられた注射器によってアンチリンカーを投与された。これは切歌がウエルに渡されたものだ。

「ギアが……馴染まない……ッ?!」

体がふらつき始める。アンチリンカーによって適合係数が急速に落ちて言っているためだ。ついにギアが強制解除される。その副作用で調は肩で息をしている状態だ。

切歌は彼女に目を背け、すがるような声で、

「あたし、あたしじゃなくなってしまうかもしれないデス! そうなる前に、何か残さなきゃ! 調に忘れられちゃうデス。約束が守れなく

なっっちゃうデス」

「切ちゃん……う？」

切歌が調に手を差し出す。

「たとえあたしが消えたとしても、世界が残れば、あたしと調の思い出は残るデス！だからあたしは、ドクターのやり方で世界を守るデス！もう、そうするしか……?!」

海中からミサイルが勢いよく姿を現し、彼女たちを揺らす。

二課の潜水艦から発射されたソレは空中で解体し、中からギアを纏った翼とクリスが飛び出した。跳躍した二人のうち翼は切歌と交戦し、クリスはギアを纏っていない調の回収に動き出した。

出会いがしらの翼の一撃を回避した切歌は鎌による一撃を与えるが、それを紙一重で回避した翼は流れ

るように突きを繰り出す。

バク転でそれを避けた切歌は、

「邪魔するなデス！」

大ぶりな一撃は翼の跳躍によって回避され、逆に長物である鎌に落下の重さをのせた一撃を受けてバランスを崩してしまう。

一方、アンチリンカーによって身動きが自由にとれない調はクリスに拘束されていた。首を固められ、腕を捻じりあげられている。

「切ちゃん……」

「おい、ウエルの野郎はここに居ないのか！」

調は答えない。

クリスは拘束を強くし、

「ソロモンの杖を使うアイツはどこに居やがる！」

丁度翼たちの戦いも決着がついた。切歌のど元に翼の切っ先が突きつけられている。

「翼さん！」

戦いを見守っていた響が声を上げる。

「切歌！」

「ならば傾いた天秤を元に戻すとしましょうよ。出来るだけドラマティックに……」

同じく戦いを見守っていたマリアに続いてウエルが怪しげに笑いながら言う。

そしてコンソールを操作し、

「出来るだけロマンティックに……」

彼の意図に気づいたマリアは驚愕の表情を向け、

「まさか、あれを?!」

その瞬間、エアキャリアから紫の輝きが歌を伴いながら落下した。

「Rei Shen Shou Jing Rei Zizzl」

高速で落ちてきたそれは、船の先端部分を破壊し、煙を巻き上げる。

煙が止み、そこにいたのは……、

「未来……?」

響がつぶやいた。

○○○

同時刻。

常に俯き、何も写さなかった雷の目から涙が一筋、流れ落ちた。

## 魔を祓う光、闇へと堕ちて

神獣鏡を纏った未来が降下した艦艇の上空をエアキャリアが旋回する。そのコックピットにベッドから起きたナスターシャが下からせりあがる形で車いすごとやって来た。

「神獣鏡をギアとして、人に纏わせたのですね……」

「مامー！まだ寝てなきやー！」

「あれは、封印解除に不可欠なれど、人の心を惑わす力……」

彼女はウエルを睨みつけ、

「あなたの仕業ですな、ドクター……」

「ふうん。使い時に使ったまでの事ですよ」

彼の脳裏に未来との会話が想起される。

『そんなに警戒しないでください。少しお話でもしませんか？きつとあなたの力になってあげられますよ』

『私の力？』

雷とは異なるものの、彼女も彼女で精神を摩耗していた。未来もこの状況を何とかしようと思死に足掻いているのだ。藁にもすがら思いでウエルの提案に乗る。

『そう。貴方の求めるものを手に入れる、力です……』

そう言つて握っていたペンダント。つまり神獣鏡のシンフォギアを差し出す。赤い色が怪しく輝いた。

「マリアが連れてきたあの娘は、融合症例第一号。そしてフィーネによつてすべてを奪われ、存在しないとされた聖遺物の適合者の級友らしいじゃないですか」

「リディアンに通う生徒は、シンフォギアへの適合が見込まれた装者候補たち……。つまりあなたのリンカーによつて、あの子は何もわからんまま無理矢理に……」

ナスターシャの言葉にウエルは額を抑え、

「んっん。ちよつと違うかなあ。リンカー使つてホイホイシンフォギアに適合できれば、誰も苦労しませんよ。装者量産し放題ですよ」

未来の纏った神獣鏡の脚部フライトユニットが展開され、鞭が意志を持つかのように伸縮する。

どのようにして未来が適合したのか、その絡繰りが理解できないナスターシヤは思わずウエルに聞いた。だす。

「ならば、どうやってあの子を?!」

「愛!ですよ」

「何故そこで愛ツ?!」

展開したフライトユニットによって未来の体が宙に浮かぶ。

「リンカーがこれ以上級友を戦わせたくないと願う思いと、これ以上何も失わせたくないと思いを神獣鏡に繋げてくれたのですよ!」

神獣鏡の腕部からアームドギアである扇が構築される。

ウエルが狂喜に叫んだ。

「ヤバいくらいに美しいじゃないませんかツ!」

このギアの特徴であるダイレクトフィードバックシステムが状況を適切に判断し、未来の脳に直接情報を出力する。

「うあああああツ!」

未来の咆哮。

「小日向ツ?!」

「なんで、そんなカッコしてるんだよツ?!」

クリスに拘束されている調が、

「あの装者は、リンカーで無理矢理に仕立てられた消耗品。私たちが上に急ぐしらえな分、壊れやすい……」

「ふざけやがって……!」

翼があくまで冷静に、動揺している内心を隠して報告する。

「行方不明となっていた、小日向未来の無事を確認。ですがツ……」

『無事だとお?!あれを見て無事だということのかツ?!だったらアタシらは、あのバカ共になんて説明すればいいんだよツ?!』

二課の指令室のモニターに映る未来の姿に響は呆然としたまま動くことが出来ない。

友里が心配して、

「響ちゃん……」



「F. I. S. ……、何てことを……」

神獣鏡のヘッドギアが閉じ、戦闘態勢へと移行。そしてフライトユニットの生み出す推力を利用して加速する。

クリスは仕方ないと調の拘束を解き、

「こういうのはアタシの仕事だ！」

両腕部の装甲を展開し、ボウガンへと変形させる。

「ああああッ！」

未来の持つ閉じた扇の先端から紫色のレーザーが発射される。が、それを跳躍してかわし、ボウガンを三段に変形させ、上空から放つ。

『QUEEN, s INFERNO』

雨あられと降り注ぐ矢の雨を算出された予測にそって回避し、海上に飛び出す。通常のギアであれば行動不能に陥るが、神獣鏡は飛行を可能にしていた。故に立派なバトルフィールドの一つとなっている。

「隙ありデス……ッ?!」

相対する翼がクリスの動きに気をとられていると判断した切歌だったが、彼女の目にもとまらぬ速さで再び刃を突きつけられる。

「じゃないデスね……」

翼は眉を顰める。

(すまないッ……雪音ッ！)

海上を滑走する未来の動きを止めるため、船から船へと飛び移りながら攻撃を加えていく。着地と同時にボウガンをガトリング砲へと変形させ、弾幕の密度を上げる。

『BILLION MAIDEN』

未来もレーザーで応戦するが密度の上がった弾幕を回避し続けることが出来ず、少なくとも数の直撃を受けてしまう。

この戦いを高みの見物続けるウエルが、

「脳へのダイレクトフィードバックによって、己の意思とは関係なくプログラムされたバトルパターンを実行！流星は神獣鏡のシンフォギア！それを惑わせる僕のリンカーも最高だあ！」

「それでも偽りの意思では、あの装者たちには届かない」  
「っ！」

思わずマリアは顔を背ける。

モニタリングを続ける二課の指令室では藤堯が、

「イチイバル、圧倒していますー！」

「これなら……！」

響は親友の変わり果てた姿にモニターを直視できない。

（ごめん……ごめんね……！）

ポンと響の頭を弦十郎が安心させるように撫でる。

「ししよお……」

戦いを続けるクリスだが、相手が未来だけあつてやりづらさがぬぐえない。

（やりづれえー！助けるためとは言え、あの子はアタシの恩人だツ！）

艦隊を一周して戻ってきた未来に対し、同じく戻って来たクリスが腰部のミサイルラックを展開し、発射する。

『MEGA DEATH PARTY』

ミサイルを回避するためにプログラムされた動きをトレース。弾道から逃れるために距離を詰めるが、クリスのガトリングによつて阻まれ、空中で失速し爆炎に包まれる。

「未来……」

響がつぶやいた。

がれきに埋もれた未来にクリスが手を伸ばす。が、ギアのスピーカーからウエルの声が聞こえてきた。

「女の子は優しく扱ってくださいね。乱暴にギアを引きはがせば、接続された端末が脳を傷つけかねませんよ」

再び未来が動き始め、アームドギアの扇を展開。そこに取り付けられた鏡から光を放つ。

「避けるー！雪音ッー！」

『閃光』

ギリギリでクリスは直撃を避け、距離をとる。

「まだそんなちよせえのをー！」

未来は展開した扇をたたみ、浮遊。そして鞭の先端と脚部ユニットを接続し、展開することで一つの巨大な鏡を形作る。

クリスは背後に射線上に調がいることを確認し、苦虫をかみつぶした顔をする。

鏡に紫の燐光が集中しはじめ、その輝きは直視できないほどになっていく。神獣鏡の力を最大限使うため、未来が歌う。

「だつたらあッ！」

腰部のユニットを展開し、リフレクターを散布する。そして神獣鏡の輝きが照射された。

### 『流星』

「リフレクターでえッ！」

リフレクターが極太のレーザーを曲げ、後ろへと逸れていく。その威力は艦艇の装甲をえぐり、爆発させるほどだ。それでもレーザーの照射は止まない。

「ぐうッ！」

「調ッ！逃げるデス！消し去られる前に！」

クリスの背後から動こうとしない調に切歌が叫ぶ。

その言葉に翼が反応する。

「どういうことだッ?!」

（イチイバルのリフレクターは、月をも穿つ一撃すら偏光できる！そいつがどんな聖遺物から作られたシンフォオギアか知らないが、今更つどんなのぶつ込まれたところでッ……何で押されてんだッ?!）

イチイバルのリフレクターが極光に照らされたところから分解されていく。

「無垢にして苛烈、魔を退ける輝きの奔流。これが、神獣鏡のシンフォオギア！」

「ッ?!リフレクターが、分解されていくっ?!」

光の圧にクリスの体が押され始め、そしてリフレクターの防御限界に到達。光を受けたギアの装甲が泡立っていく。

クリスの体が輝きに包まれようとしたその時、空から大剣が飛来し、盾となる。

大剣を放った翼はクリスと調を回収し、全速で離脱する。

「惚けなあッ！」

最大速度で離脱しながら大剣を盾にすることで脱出を試みるも、大剣を障壁にするたびに分解され、その意味をなしていない。

(横に躲せば、減速は免れない！その瞬間に巻き込まれる！)

「追いつかれるッ！」

「翼あッ！」

歴戦の防人である翼が即座に解決方法を見つけ出す。直進方向に大剣を突き刺し、

「どん詰まりッ?!」

「しゃべっていると、舌をかむッ！」

ほぼ直角の壁を脚部スラストのジェット噴射で滑走し、上に逃げることで回避する。

魔を祓う光、その光を放つ鏡は、歪んだ英雄の手に落ちた。

## 約束の少女くAppleく

神獣鏡のヘッドギアが爆炎の中の翼とクリス、調の姿を正確にとらえる。再度攻撃をしようとしたその時、横から切歌が、

「やめるデェス！」

バイザーに覆われた未来の視界が彼女を捕らえる。

「調は仲間！あたし達の大切な……！」

『仲間と言い切れますか？僕たちを裏切り、敵に利する彼女を。月読調を、仲間を言い切れるのですか？』

切歌の言葉はウエルによって遮られる。

「違う……。あたしが調にちゃんと打ち明けられなかったんデスツ……。あたしが、調を裏切ってしまったんデスツ」

肩と声が震えている。

「切ちゃんっ……！」

「っ」

背後から調の呼ぶ声がした。切歌は顔を上げ、振り向く。

担がれていた翼の肩からゆっくりと下り、

「ドクターのやり方では、弱い人たちは救えない……！」

神獣鏡のスピーカーからウエルの声が響く。

『そうかもしれない。何せ我々は、かかる災厄にあまりにも無力ですからぬ』

「ツ!?」

思わず翼とクリスの体が前に出る。

ウエルはエアキャリアのドアを開け、ソロモンの杖を構えてそのギリギリに立ち、

「シンフォギアと聖遺物に関する研究データは、こちらだけの専有物ではありませんから。アドバンテージがあるとすればあ……、せいぜいこのソロモンの杖ツ！」

杖の中央にある紫色の宝石から、緑色の光線が放たれる。その光線が艦隊を薙ぎ払うように照射され、光跡にノイズが召喚される。海に召喚されたノイズは船の外壁を上り、そのシステムに従ってアメリカ

軍を襲い始めた。聖遺物でない通常兵器では歯など立つはずもなく、容赦なく、次々に炭素の塊へと変えられてしまう。

惨状を見て、翼が叫ぶ。

「ノイズを放ったかッ?!」

「くそつたれがッ!」

ノイズを迎え撃つため、クリスが駆け出す。

(ソロモンの杖がある限りは、バビロニアの宝物庫はあきつばなしつてことか!)

クリスは一息に跳躍。腕部装甲からガトリング砲を、腰部装甲から小型ミサイルを展開し、反動を利用して回転することで空に存在する航空型ノイズを一網打尽にしていく。

「デアアイツ!」

「くッ!」

調を取り返そうとする切歌の鎌による一撃を、翼は刀で防ぐ。

「こうするしか、何も残せないんデス!」

背後では再び『流星』を放つべく、神獣鏡の巨大な鏡が光を集め始めている。だんだんとその輝きが強くなっていくが、

『そうそう、そのまま抑えていてください。後は彼女の仕上げを御覧じろ』

ウエルの通信を聞いて未来は鏡を格納し、船を飛び降りて海上を被告する。

攻撃を抑えている翼が、

「このまま手をこまねいているしかないのかッ?!」

と叫んだその時、戦闘海域に二課の潜水艦が浮上した。友里が正確に情報を伝える。

「未来ちゃん、交戦地点より移動! トレースします!」

「未来……」

響が心配そうに言葉をこぼし、

「ノイズの殲滅はクリス君に任せろ! 俺たちは、人命の救助に回るんだ!」

弦十郎が的確に指示を飛ばす。

未だ膠着状態に陥っている翼は、

(振り切ることはたやすい。だが、そうするわけにはツ……！)

目だけで背後の調を見やる。確かに振り切るのはたやすい、しかしその後には調がどうなるかなど簡単に想像がつく。杖に動くことが出来ないので。

そう思考していたその時、海中から巨大な水柱が出現した。艦艇の高さを優に超えるそれに両者の視線がうつる。

そして水柱はほどけ、その中から印を結んだ緒川が姿を現した。素早く降下した彼は調の肩に手をのせる。

「調！」

「緒川さん?!」

脇の下に腕を通し、軽く拘束して答えた。

「人命救助は僕たちに任せて！それよりも翼さんは、未来さんの捕捉を！」

そう言って調を拘束したまま、残像が残るほどの速度で離脱する。

「緒川さん！お願いします！」

いなな否や鎌を弾き飛ばし、即座に脇腹に蹴りを叩きこむ。その一撃はクリーンヒットし、切歌から空気が抜けるのをこらえるような声が聞こえる。そして蹴り脚を一步目とし、バク宙。カタパルトに着地するとすぐに刀で突き刺し、強引に起動させる。

「あああッ！」

加速の勢いを利用して引きはがされた分を一気に取り返すべく跳躍する。

「調……！」

切歌は調の事に一瞬気をとられるが、すぐに翼を追いかけるために駆け出した。

「切ちゃん……！」

海上を目にもとまらぬ速さで走る緒川に抱かれながら、道を違えた親友の名を口に出した。

「月読調さん……ですよね？」

「……！」

緒川の問いに調は答えない。が、頷くことで肯定する。彼は続けて、

「あなたに、会って欲しい人がいます」

「会って……欲しい人？」

緒川は正面を向きながら、頷く。

「はい。この行為が吉となるか凶となるか、僕たちにはわかりませんが、こうしなければ状況は動かない。彼女は目覚めることはない……そう思うんです」

「？」

調が首をかしげる。だが分かるのは、彼の言う『彼女』に会えば状況が変わる。そんな気がした。

〇〇〇

未来の乗った船の横に潜水艦をすすませる。そして響は甲板に立ち、

「雷も帰ってきた。だから一緒に帰ろう、未来」

「帰れないよ……」

未来は響のほうを向き、バイザーを開く。

「だって、私にはやらなきゃならないことがあるもの」

「やらなきゃならないこと？」

響の問いにうつすらと笑みを浮かべて、

「このギアが放つ輝きがね、新しい世界を照らし出すんだって。そこには争いもなく、誰もが穏やかに笑って暮らせる世界なんだよ」

「争いのない世界……」

「私は響に戦ってほしくない。雷が恐怖に怯えてほしくない。だから響が戦わなくていい世界、雷が安心して眠れる世界を作るの……」

思わず響の言葉が詰まる。ここにはいない雷のことを思いながら、  
「だけど未来。こんなやり方で作った世界は、暖かいのかな？ 私達が一番好きな世界は、未来がそばにいてくれる、暖かい陽だまりなんだ」  
「でも、響が戦わなくていい世界だよ？ 雷が怯えなくていい世界だよ？」

「たとえば未来と戦ってでも、そんなことさせない！」



力強く断言する。

「私は響を戦わせたくないの」

「ありがとう。だけど私、戦うよ！」

こぶしを握り締める。

「B a l w i s y a l l   N e s c e l l   G u n g n i r   T r o  
n」

機動聖詠を歌い、ガングニールを纏う。

少女を取り返す戦いが、始まった。

○○○

響と未来が戦っている間、潜水艦に収容された緒川と調はとある一室に向け、歩みを進めていた。既にペンダントは緒川の手に移っているが、電子手錠はつけられていない。出来るだけ普通の姿で会わせたという緒川の配慮だ。

「会わせたい人って、誰なんですか？」

「調さんのよく知っている人です。ナスターシャ教授やマリアさん達も」

「私達のよく知る人？」

ますますわからないと言うように首をかしげる。

彼女の隣を歩く緒川は真剣な表情で、

「もうそろそろです」

と、言った。すると突然、か細く、消え入りそうな声だったが、歌が聞こえてきた。

「歌？」

聞き覚えのある歌に声だ。わずかに眉を顰める。如何やら目の前の部屋から漏れているようだ。さらに耳を澄ます。

「りんごは浮かんだお空に……りんごは落つこちた地べたに……」

「ッ?!」

体に電流が走るような感覚を覚えた。思わず駆け出してしまおう。緒川は追いかけることなく、その場に立ち止まった。部屋の鍵はすでに開けてある。

「星が生まれて、歌が生まれて……」

約束の歌『Apple』を歌う人物がいる部屋のドアを勢い良く開けた。

「ルルアメルは笑った、常しえと……」

かなり勢いよく開けたため大きな音が聞こえたが、部屋の主は毛布を頭からかぶったまま気にした様子もなく歌い続けている。

体格からして同年代の少女だろう。調は肩で息をしながら少女に詰め寄り、襟首をつかんで押し倒した。

白いワンピースに深緑のカーディガンを羽織った少女は、それでも歌い続ける。

「星がキスして歌が眠って……」

「どうしてその歌を知ってるのッ……?」

襟をつかんだまま少女の上に馬乗りになり、揺する。

「かえるところはどこでしょう……?」

「私達の他に、あず姉さんしか知らないはずなのに!どうしてあなたが知ってるの?!」

歌うことをやめない少女の顔を隠す毛布を引きはがす。そこには、

「ケラウノスの……装者……?」

「……」

これまで誰とも会わなかった雷の目線が調の目と結びつく。そして彼女はほんのりと、優しい笑みを浮かべ、

「大きくなったねえ、しらちゃん。どうしたの?そんな難しい顔して……」

「ッ?!……私をそんな風に呼ぶ人は、一人しかいない……。でもっ、何で……」

約束の少女はずっと敵として目の前にいたのだ。なんで気付くことが出来なかったのか。そんな思いで頭がいつぱいになり、目から涙が零れ落ちる。

そんな調を見て、雷は彼女の頬を優しく撫でた。

## 目覚めし雷

雷は調の頬を優しく撫でながら、視線だけを左右に振り、

「切ちゃんはどうしたの？いつも一緒なのに……」

彼女の問いに調の呼吸が詰まる。調は軽くしゃくりあげながら、

「喧嘩、しちゃったの……。切ちゃんと……」

その言葉を聞いた雷は自身の胸に調を優しく引き倒し、抱きしめた。これがこんな状況でなければ調は喜んで受け入れることが出来たが、今はこの優しさが彼女の心を苦しめていた。

同じくらしいの背丈の調の頭を撫でながら、

「そっか、喧嘩、しちゃったんだ。でも、きつと大丈夫だよ」

「どうして、そんなことが言えるの？」

調は胸にうずまっていた顔を上げる。因みに、雷の背丈はクリスマスより少し高い程度なのだが、バランス的には彼女と同じくらい胸が大きい。故に調の顔の半分は胸で隠されている状態だ。

「確証はないよ。でも、きつと大丈夫。自分の全てをぶつければ、向こうも返してくれる。それが出来ると、また仲良くなる。そうやって人間の関係は深く、濃くなっていくなだよ」

「……よく、分からない」

「なら一度、やってみよう？」

調は再び雷の胸に顔をうずめる。そんな彼女の前髪を、雷は優しくかき上げた。

雷はそうだ。というような顔をして、

「マリアとセレナに聞けばよくわかるんじゃないかな？姉妹だし、それなりに喧嘩してると思うよ？そのたびに仲直りして、今に行きついてると思うから」

「……マリアとも、喧嘩、しちゃったの……」

雷は少しだけ目を丸くして、

「ならマリアともぶつからなきゃね。じゃあセレナは？優しいから、今頃オロオロしてると思うけど、大丈夫かな？」

雷はクスリと笑う。

ここで調は気づいた。何故緒川が会って欲しいと言ったのか。今自分と話しているのは『今』のあず姉さんじゃない、『かつて共に過ごした過去』のあず姉さんなのだ。だから自分の事にもすぐ気づいたし、戦っていたことに対して何の反応もしないのだ。

彼女が元に戻れば、私達と約束した『雷』はいなくなるかもしれない。正直なところを言えば、このまま戻って欲しくない。でも、このままだとマリアも切ちゃんも元に戻らない、そんな気もする。

自分の前髪をかき上げる彼女の包帯で包まれた腕を見る。私達に会えなかった空白の期間に何があったのかわからない。姉さんのためを思えば言わない方がいいかもしれない。胸の奥がチクチクする。さつき言われた姉さんの言葉を思い返す。「喧嘩したなら、全力でぶつかる。その後、仲直り」。大丈夫、姉さんならわかってくれる。

調は覚悟を決め、

「セレナは、死んじゃったの……」

グツと目を瞑り、絞り出すように言った。

調からは見えないが、雷の目は白黒している。彼女は苦笑いを浮かべ、冷や汗を流しながら、

「だ、ダメだよしらちゃん。そんなの、冗談にしても悪質すぎるよ……」

「冗談じゃ、ないの……」

「う、嘘だよ……」

「本当なの……」

調の言葉によって、雷の記憶、思い込んでいる現実との齟齬が生まれはじめる。彼女は両手で顔を覆い、

「嘘だよ、嘘だよ、嘘だ、嘘だ、嘘だッ！セレナが、死んだ……？」

雷の体から脂汗が噴き出し始める。そして彼女の脳内で、死が家族の死。即ち、フィーネへと直結した。雷の瞳孔は小さくなり、

「嫌あ……。フィーネが、フィーネが来る……。殺される、殺されちゃうよお！私の大切な人、大事な物、思い出、全部壊される。殺される……！」

「姉さんッ！」

涙を流し、暴れまわる雷を何とか調が押さえつける。身長が近いからこそ何とかなっているが、この拮抗状態はすぐに崩れるような脆いものだ。調の額にも脂汗が浮かび、限界が近づいてきていた。両腕がけいれんしてきたその時、黒スーツの腕が背後から調の代わりに雷を抑えた。

彼は焦った声で、

「すみません遅れました！フロンティアの浮上に気をとられていました。抑えるのは僕が変わります！ですので調さんは説得を！」

汗をぬぐいながらコクリと頷く。

そして雷の顔に覆いかぶさるようにして、優しく語りかける。

「大丈夫だよあず姉さん……。フィーネはもういないの……。ホントはマリアの中にも居なかった……。だから大丈夫、もうフィーネはいないの。だから目を覚まして、お願い……」

調の涙が雷の顔に流れ落ちていく。叫び声が止んだ。

「あず、姉さん……？」

調が呼吸を荒くしながら雷の名前を呼んだ。彼女は涙を目いっぱい貯め、頬を上気させ、肩で息をしながらか細い声で、

「ほん、とう……？」

雷の全身の筋肉が急速に弛緩していく。調は涙を流しながらうなずき、

「本当、だよ。もう、フィーネはいないの」

「……」

雷は十分ほど、放心していた。そして光の宿っていなかった瞳に、段々と強い理性の光が宿っていく。

そんな彼女に調はもうしわけなさそうに、

「ごめんなさい、姉さん……。知らず知らずのうちに、大切な姉さんのことを傷つけてた……」

「気にすることないよ、しらちゃん」

さつきとは異なる、『今』を見る優しい目で調の頭を撫でる。

「気づかなかったのはお互い様だし、敵である以上は嫌がることを全

力でするのは常套手段。私だって、不意打ちでマリア殴っちゃったし、切ちゃんの事しらちゃんの攻撃を防ぐ盾にしたし」

「で、でも……!」

「私がいいって言ってるんだから、しらちゃんはこれ以上気にしちやだーめ。わかった?」

調はあつけにとられたまま、黙ってうなずいた。

「マリアも、切ちゃんも、許してくれるの?」

「そんな心配しないでよ。全力でぶつかって、仲直り。そしたらもちろん許しますとも」

ニヒヒ、と昔のように笑った。

「それよりも私は、私より響に謝ってほしいかな」  
「響?」

「そ、私の親友。ほら、ガングニールの装者」

そう言うのと、調は力強く頷いて、

「わかった。全力でぶつかってみる」

「うん!私が言うのもただけど、しらちゃん一応捕虜扱いでしょ? どう思われても仕方ないから、一旦独房?でいいのかな?で、一人の時間を作って、どうやってぶつかるか、考えてみて」

「うん!……でも、会えるかな?私捕虜だし……」

雷は顎に手を当て、

「緒川さん、状況の説明、お願いできますか?」

「構いませんよ」

緒川の話を一言一句聞き逃すことなく聞き取り、

「ありがとうございます」

そして調のほうを向いて、

「大丈夫だよ、あの英雄かぶれならネフィリムとフロンティアを使ったマツチポンプをするはず。この二つで未曾有の大災害を引き起こし、自分が無辜の民を救うことで英雄となる……。そんなシナリオを描いているはずなんだ」

「なんでそう言い切れるんですか?」

緒川が小さく手を上げて問うた。

「アレは自分が英雄になることに固執しています。ネフィリムとフロンティアがどんな力を持つかはまだわかりませんが、少なくともその大きさからしてとんでもないことが出来るのは確かですから。後は勘です」

「勘、ですか……」

少し苦笑いを浮かべるが、それを差し引いてもかなり信憑性のある話だ。指令に伝えよう。そう思い、緒川はさっきの内容を頭のノートに書き留める。

「話を戻しますね」

「遮ってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、大丈夫です。さて、こんなことを防ぐなら装者は多い方がいい。しらちゃん、後は分かるよね？」

「分かった……」

不安そうにしている調の頭を撫でる。

「大丈夫、響なら分かってくれるから」

調は少し黙るがゆっくりと頷いた。

「全力でぶつかってみる」

「がんばれ！」

雷がにっこりと笑うのにつられて調も笑う。

調がエージエントの一人に電子手錠をつけられ、独房へと歩いていくのを見送った後、雷は顔を引き締め、

「緒川さん」

「どうしました？」

「次の作戦、私も出ます」

緒川はフツと笑い、

「分かりました。ですが、病み上がりなんですから、無理はしないでくださいいね？それよりも……」

「分かってます。響と未来にはずいぶん心配かけちゃったから、さっそく会ってきますー！」

そう言って立ち上がり、ワンピースとカーディガンの裾をはためかせながらスタスタと走っていった。

雷が、再び轟き始める。



## フロンティア起動

モニターが浮上したフロンティアを捉える。

「これがF・I・S.の求めていたフロンティア……！」

「海面に出ている部分は、全体から見てほんの一部。フロンティアと呼ばれるだけのことはありますね」

藤堯が解析したフロンティアの全貌を見て言う。

その時、警戒音が鳴る。

「新たな米国所属の艦隊が接近しています」

「第二陣か……」

丁度、日本政府から通信が繋がってきた。ここに連絡をしてくる政府の人間など、斯波田を覗いて他にはいまい。前と同じようにそばを囁っている。

「まさか、アングル・サムは落下する月を避けるためフロンティアに移住する腹じゃあるめえな？」

「我々も急行します」

そう伝えた。

○○○

潜水艦のメデイカルルーム、そこで神獣鏡から解放された未来は治療を受けていた。目立った外傷はなかったが、念には念を入れてだ。スライドドアの開く音がして、彼女の親友の一人が駆け込んできた。

「未来ツ——！」

そして彼女に抱き着く。流石の未来もこれには少し驚いたようだ。続いてクリスからの銃撃を受け、頭に包帯を巻いた翼と、タブレットを持った友里が歩いて入室した。

「小日向の容態は？」

「リンカーの洗浄も完了。ギア強制装着の後遺症も見られないわ」

「よかったあ！ほんとに良かったあ〜」

響の喜ぶ顔を見て、未来の頬が緩む。翼も軽く微笑んだ。

「響……その怪我……」

「うん」

響は何でもないので答える。

「私の……私のせいだよね……!」

未来は口元に手を当て、涙を流す。結局大切な人を傷つけてしまった。しかし、塔の響は彼女を責めるようなことはしない。

「うん! 未来のおかげだよ」

「へ……?」

顔を上げ、響のほうを見る。

「ありがとう、未来!」

「響……?」

首を横に振り、

「私が未来を助けたんじゃない、未来が私を助けてくれたんだよ!」

すると、友里がタブレットを操作し、モニターに響のレントゲン写真を映し出した。

「これ、響……?」

以前の写真では GANG ニールの欠片が彼女の体を侵食している様子が映されていたのだが、今写っている写真にはそういった物が一切見られない。体内に残っていた欠片ごと消滅していた。

なぜこのようになったのか、友里が理由を説明する。

「あのギアが放つ輝きには、聖遺物由来の力を分解し、無力化する効果があったの。その結果、二人のギアのみならず、響ちゃんのを蝕んでいた GANG ニールの欠片も除去させたのよ」

「ふえ……?」

「小日向の強い思いが、死に向かって疾走するばかりの立花を救ってくれたのだ」

「私がホントに困ったとき、やっぱり未来は助けてくれた! ありがとう!」

そう言って両手で未来の手を握る。

「私が……響を……」

曇っていた彼女の顔にパッと笑顔が花開く。

「うん!」

(でも、それって……)

事の結果を理解した未来は、暗い表情で俯く。

「だけど、F. I. S. は遂にフロンティアを浮上させたわ。本当の闘いはこれからよ」

「F. I. S. のたくらみなど、私一人で払って見せる。心配など無用だ」

「一人？」

未来が周囲を見渡し、

「そういえば雷とクリスは？」

全員の表情が曇り、翼は軽くそっぽを向く。翼に銃撃を加え、寝返ったのだから。

響が俯いたまま、

「雷は……まだ……」

戦えない。そう言おうとした次の瞬間、友里の持っていたタブレットからピコン！と音が鳴った。全員がそれに目を向ける。友里がメールを確認し、一瞬だけ目を丸くした。それと同時に廊下からけたましい音を立てながら、誰かがこつちに向かって疾走してきていた。

友里以外の全員が急に聞こえてきた足音に驚き、扉に目をやる。そして扉が開き、そこにいたのは、

「はあっ……はあっ……ふう……。響！未来！ただいま！」

膝に手を当て、深く深呼吸して呼吸を整えている雷だった。そして呼吸を整えた後、彼女は満面の笑みで二人に跳びついた。

「あ、雷?!」

「目が覚めたの?!」

「うん！心配かけてごめん！」

翼も目を丸くして、

「轟……もう、大丈夫なのか？」

「はい！心配をお掛けしました！」

そう答えた後、雷は二人から体を離す。そして、真剣な顔をして、  
「未来、ごめんなさい」

頭を下げた。

「へ?!」

「一番傷つけたくなかったのに、あんなことしちゃって。その後も連絡とらないで、逃げてたから……」

頭を下げたまま謝罪を続ける雷の体を、今度は未来が優しく抱きしめた。

「未来?」

「ううん。大丈夫、私は気にしてないよ。あの時一番しんどかったのは雷だから、追いつめられちゃうのは仕方ないよ」

「許してくれてありがとう。未来」

未来よりもさらに怪我人らしい包帯の捲かれた腕で未来の体を抱き返す。

「ごめん、もつとこうしていたいけど、響に言いたいことがあるんだ」

「私?」

「うん。いいよ」

そう言つて雷は未来の体から離れ、響と相対する形で向き合う。

「今度の作戦で、やってほしいことがあるんだ」

「やってほしいこと?」

「うん。だから耳を貸して……」

響の耳元で雷がささやいた。

「……ツ?!ほんとに、いいの?」

心配そうにしている響に対して自信満々の笑みをたたえ、

「私を信じてよ」

そう言い切った。

○○○

F. I. S. とクリスはエアキャリアをフロンティアに着陸させ、その中枢へと向かおうとしていた。

「こんなのが海中に眠ってたとはな……」

「あなたが望んだ新天地ですよ」

そう言つてクリスはフロンティアを見上げた。脳裏に翼を打った時のことが蘇る。

『仲間を裏切って、あたしたちに着くというのデスか?』

拳銃に変形させたアームドギアをチラつかせ、

『こいつが証明書変わりだ』

切歌は困惑し、

『しかしデスね……』

『力を叩き潰せるのは、さらに大きな力だけ……。アタシの望みは、これ以上戦火を広げないこと。無駄に散る命は一つでも少なくしたい』  
しぐさや声色を見る限り、その言葉は本物だ。切歌はクリスを正面から見据え、頷いた。

フロンティアの中をクリスを先頭にして進んでいく。敵側から裏切ったのだ、先頭を歩かせて罠がないかを確認するのは当然と言える。

そんな彼女にマリアが問う。

「本当に私達と戦うことが、戦火の拡大を防げると信じているの?」

クリスは目だけで後ろを向いて、

「フン。信用されてねえんだな。気に入らなければ、鉄火場の最前線で戦うアタシを、後ろから撃てばいい」

「もちろん、そのつもりですよ」

クリスを矢避けにして進むうちに、フロンティアの中枢へと到達する。

ナスターシャが、

「着きました。ここがジェネレータールームです」

「何デスかあれは……?」

紋様が描かれた石でできた球体を見て切歌が言った。

ウエルがネフィリムの心臓部に入ったトランクケースをもって足早に進んでいく。そして球体のもとに近づくと、ケースから心臓を取り出し、球体に押し付けた。すると、心臓部から血管のようなものが伸び、ジェネレーターが起動する。そして球体は宙に浮遊し、エネルギーを供給し始めた。金色の輝きが流れていく。

マリアが驚愕した。

「ネフィリムの心臓が……?!」

「心臓だけとなっても、聖遺物を喰らい取り込む性質はそのままだなんて……。卑しいですねえ……」

そう言ってウエルは邪悪に下卑た笑みを浮かべる。エネルギーを供給されたことでフロンティアには緑が現れはじめ、本来の姿を取り戻していく。

輝く球体の様子を見て、

「エネルギーが、フロンティアにいきわたったようですね……」

「さて、僕はブリッジに向かうとしましょうか……。ナスターシャ先生も、制御室にて、フロンティアの面倒をお願いしますよ」と、言って去っていった。

切歌の脳裏に、調の言葉が蘇る。

『ドクターのやり方では、弱い人たちを救えない』

「そうじゃ無いデス。フロンティアの力でないと、誰も助けられないデス！調だって助けられないんデス！」

広いジエネレータールームに、切歌の叫びが響いた。

## 肥大化する欲望

独房を映す監視カメラに、俯いた調の姿がうつる。

気が沈んでいるように見えるが、実際には雷の助言で響にどうぶつかるかを考えている。

「助けてほしい。そう言ったのか？」

そんな調の様子を見ながら、弦十郎は緒川からの報告を聞いた。調の言葉は、雷が目覚める前に聞いたものだ。彼はシユルシヤガナのペンドラントを弦十郎にわたす。

「はい。目的を見失って暴走する仲間たちを、止めてほしいと」

「うむ……」

そんな時に指令室のドアが開き、響と未来を先頭に雷と翼、友里が姿を現した。すでに目が覚めているのを緒川から聞いていたため、雷が居ることを驚いてはいない。当然、彼女の話したウエルの計画の読みも話している。しかし、未来がそこにいるのが問題だった。

「まだ安静にしてなきゃいけないじゃないか！」

「ごめんなさい。でも、いてもたっても居られなくて……」

「クリスちゃんがいなくなったと聞いたなら、どうしてもって……」

弦十郎は少女たちの主張にとりあえず納得し、

「確かに、響君とクリス君が抜けたことは、作戦遂行に大きな影を落としているのだが……」

「でも、翼さんに大事が無かったことが本当に良かった。致命傷を全て躲すなんて、流石です。それに雷ちゃんの目が覚めたのも、不幸中の幸いね」

友里の言葉を聞いて、翼が眉を顰める。

（躲した？あの状況で雪音の射撃を躲せるものか。だとしたら、あれは……）

そんな彼女の顔を、雷が横眼で見ながら予測を立てる。

（友里さんの話と翼さんの表情を見る限り……。案外早く決着がつくかもしれない）

だが、彼女はその予測にほとんど確信を持っていた。後は響が私を

信じてくれれば全てが万事解決する。そう思うと、口角が自然に上がってきた。ニヨニヨと不思議な笑い顔になっていたところを、藤堯の声が真剣な顔に戻した。

「フロンティアへの接近は、もう間もなくです！」

モニターがその威容を映した。

〇〇〇

フロンティアのブリッジにまでエレベーターのようなものでやって来たウエルとマリアは、ここの中心にある紋様の刻まれた球体のもとに歩を進めた。

ウエルが懐から薬液の入った注射器を取り出す。

「それは……？」

「リンカーですよ」

ことも何気に言い、自らの左腕の白衣を捲る。

「聖遺物を取り込む、ネフィリムの細胞サンプルから生成したリンカーです」

いびつに表情を歪めながら、ためらいもなくそれを打ち込む。ネフィリムの細胞を打ち込んだ彼の腕は、瞬間に異形の物へと変質する。ネフィリムと人間のはざまの腕へと変わり果てていた。

その手で球体に触れると、聖遺物であるフロンティアを取り込み、我が物へと変えた。パネルのようなところに文字の羅列が走っている。

「ふふへへッ……早く動かしたいなあ……。ちよつとくらい動かしてもいいと思いませんか？ねえ、マリア」

「っ」

パネルのようになっていいる石の一つから、アメリカ艦隊の映像が表示された。

丁度その時、ナスターシャは制御室でエネルギーのコントロールを行っていた。

(フロンティアが、先史文明期に飛来したカストディアンの遺産ならば、それは異端技術の集積体……。月の落下に対抗する手段もきつと……)



水晶のようなモニターに一つの情報が表示される。

「っ。これは……」

それと同時にブリッジからウエルの通信が届いた。

『どうやら、のっぴきならない状況の様ですよ？一つにつながることで、フロンティアのエネルギー状況が伝わってくる……。これだけあれば、十分にいきり立つう……』

ウエルは恍惚とした表情を浮かべる中、

『早すぎますッ！ドクターッ！』

ナスターシャの焦った声が聞こえてくるが、彼は耳を貸そうともしない。

「さあ、行けえーッ！」

ウエルの声に呼応するように、塔のようになっていた三本の柱それぞれ三つの光が伸び、雲を突き破って空中で一つとなる。そしてそれは巨大な腕となり、月へと到達。月を上から抑え込んだ。

「どっこいしょおーッ！」

その結果、フロンティアが、音を立てて浮上し始める。

それまで冷静だったナスターシャも焦りを隠せない。

「加速するドクターの欲望！手遅れになる前に、私の信じる異端技術で阻止して見せるッ！」

彼女のコンソールを操作する動きが、段々と速くなっていく。

○○○

巨大なフロンティアが浮上したことによって海流が攪拌され、潜航していた二課の潜水艦を大きく揺らす。

ものに捕まっていなければ、まとも立つことすらできない状態だ。

「一体、何が?!」

「フロンティアが浮上したんだ！多分！」

響の問いに雷が予想を口にする。藤堯が観測した結果を報告する。

「広範囲にわたって海底が隆起！我々の直下からも迫ってきますー！」

潜水艦が上昇してきた海底に着底する。

新天地フロンティア。その全容が、太陽の光を背に受けて浮上し

た。空中に浮遊している攻略対象に、アメリカ艦隊は困惑を隠せない。

「作戦本部より入電です！制圧せよと……」

「あんなのとは聞いてないぞ……」

艦砲射撃を行うが、有効打にはなっていない。第二次世界大戦期の戦艦ならば効果はあっただろうが、現代の艦艇による砲撃では傷一つ、着くことはないだろう。

そんな光景をモニターで見ながら、

「楽しすぎてメガネがずり落ちてしまいそうだあ……」

ネフィリムの腕を介して、ウエルがフロンティアに指示を出す。

島の底にある突起が光を放ち、航行していた艦艇を持ち上げ、空中で押しつぶした。圧壊し、耐えきれなくなった艦艇から爆発が起きていく。

その光景を満足げに眺めながら、

「ふうん……。制御できる重力はこれくらいが限度の様ですねえ……。フフハハハハ！」

(果たしてこれが、人類を救済する力なのか……?)

高笑いを続けるウエルの横で、マリアが思う。

「手に入れたぞ……。蹂躪する力を……。これで僕も英雄になれるう！この星のラストアクションヒーローだあく！」

彼は眼鏡をはずし、そう言った。既に彼はドクターでも、英雄でも何でも無い。下卑た笑い声をあげ、

「やったあーッ！」

高らかに叫んだ。

○○○

この出来事は、テレビ局によって世界中に中継されていた。

「御覧ください！大規模な地殻変動と発表された海域にて、軍事衝突です！米国所属の艦艇が一瞬で……。う、うわあああッ?!」

ヘリが全方位から潰され爆発。その言葉を最後に中継が途絶えた。ビルの巨大液晶の画面が切り替わる。

その中継の顛末を見ていた創世たちは、

「テラジ、こういう事件で……」

「まさか立花さん達も……」

「関係してたりして……」

画面の向こうにいる友人たちの無事を祈った。

○○○

既にフロンティアの領域内にいた二課は、艦艇やヘリの受けた攻撃の内側に逃げ込んでいた。自分を攻撃する武器などありはしない。

フロンティアの全容と潜水艦の状態を確認し、

「下からいいのをもらったみたいだ！」

響は未来を支え、翼が雷を支える形になっている。雷と未来は互いに支え合っている状態だ。

「計測結果が出ました」

友里がこの揺れの原因を突き止める。

「直下からの近く上昇は、奴らが月にアンカーを打ち込むことで……」

「フロンティアを引き上げた……?!」

「はい……！それだけでなく！」

「月を……引き寄せたのかッ……!」

雷の頬を冷や汗が伝う。流星の彼女もここまでの事とは予測できなかったらしい。そもそも、島が浮く。なんてことを想定に盛り込むなど、土台無理な話だ。

これを引き起こしたフロンティアのブリッジでは、ウエルが悪びれもなく「月を引き寄せた」と、言い切った。

そんな彼にマリアが詰め寄る。

「月を?! 落下を速めたのか!」

ウエルを押しつけて、コントロールしようと試みるが、

「救済の準備は何も出来ていない! このままでは本当に、人類は絶滅してしまう!」

そんな彼女の必死な思いとは裏腹に、球体が光を失ってしまう。もとよりネフィリムの力で取り込み、強引に動かしていたのだ。彼女に動かせるはずがない。

「どうしてッ?! どうして私の操作を受け付けないのッ?!」

「リンカーが作用している限り、制御権は僕にあるのです」

下卑た笑いを浮かべ、

「人類は絶滅なんてしませんよ。僕が生きている限りはね。これが僕の提唱する、一番確実な人類の救済方法です」

ウエルは両手を広げ、自らを誇示するように言う。

「そんなことのために、私は悪を背負ってきたわけではないッ！」

ウエルに詰め寄ろうとするがギアが無ければマリアとてただの女、男であるウエルに力で勝てるわけがない。右腕で振り払われてしま

う。  
「ここで僕を手をかけても、地球の余命が後僅かなのは変わらない事実だろう?!ダメな女だなあ!フィーネを気取ってた頃でも思い出してえ、そこで恥ずかしさで悶えてな」

マリアは打ちひしがれ、すすり泣くことしか出来なかった。

「セレナ……!雷……!私ッ……!」

「気が済むまで泣いてなさい。帰ったらあ、わずかに残った地球人類をどう増やしていくか。一緒に考えましょう」

そう言ってコントロールするための球体のもとへ向かって行った。

思いをのせて

翼はライダースーツを身に纏い、単騎でフロンティアへと攻撃を仕掛ける。雷も回復し、戦うことは出来るのだが、念のために検査を受けてからの出撃となるため、先に翼が出るのだ。

翼に弦十郎が声をかける。

「翼、行けるか！」

「無論です」

そう一言だけ言って、指令室を後にする。

「翼さん！」

出る直前、響が心配そうに声をかけた。翼は不敵な笑みをたたえながら、

「案ずるな。一人でステージに立つことは慣れた身だ」

それを聞いても響の不安はぬぐえていなかった。

潜水艦の先端部分、出撃用の通路をバイクで走る。その中央にあるジャンプ台でバイクごと跳躍し、

「Imyuteus Amenohabakiri Tron」

彼女の持つシンフォギア、天羽々斬の起動聖詠を歌う。ライダースーツは分解され、バイクにまたがったままシンフォギアを代わりに身に纏う。脚部のブレードが変形し、バイクの前方部分を覆うことで一つの剣となる。彼女は刀をとってギアを変え、速度を上げてノイズの群れへと切り込んでいく。その姿はまさしく現代の騎乗兵。

『騎刃ノ一閃』

彼女の状況を二課のモニターは捉えていた。

「流石翼さん！」

思わず友里が感嘆する。

「こちらの装者は現状ただ一人。この先、どう立ち回れば……」

雷が言っていた言葉が出た。と、響は思った。耳打ちされたときに、「誰かが装者の人数について言ったら、調がいるから彼女を推薦して」と言われたのだ。

響は一つ頷き、

「いえ、シンフォギア装者はまだいます」

「ギアのない響君を戦わせるつもりはないからな」

弦十郎を正面から見据える。

「戦うのは、私じゃありません」

「響……」

独房にいた調は緒川によって連れ出され、指令室にいた。

(あず姉さんの言う通りになった！やっぱり姉さんはすごい……)

そう思いながら、緒川によってロックが解除され、電子手錠のあったところをさする。少しだけ頬がほころんだ。後は姉さんの言った通り、あくまで冷静に、初対面の時と変わらぬ態度で、

「捕虜に出撃要請って……、どこまで本気なの？」

「もちろん全部！」

「あなたのそういうところ、好きじゃない。正しさを振りかざす、偽善者のあなたが……」

響は困ったように眉を八の字にして、

「私、自分のやってるのが正しいだなんて、思っけないよ……」

未来をはじめとする指令室にいる全員が、二人の会話を見守る。

「以前、大きなけがをした時、家族が喜んでくれると思っけてリハビリを頑張ったんだけどね。私が家に帰ってから、お母さんもおばあちゃんもずっと暗い顔ばかりしてた……。それでも私は、自分の気持ちだけは偽りたくない。偽ってしまったら、誰とも手を繋げなくなる」

そう言っけて自分の両手を見て、握りしめる。

「手をつなぐ……。そんなこと本気で……」

調の言葉を遮っけて、響が笑顔で言う。

「だから調ちゃんにも、やりたいことをやり遂げとほしい」

彼女は調の手を両手で握り、

「もし私達と同じ目的なら、少しだけ力を貸してほしいんだ」

「私の……やりたいこと……」

「やりたいことは、暴走する仲間たちを止めること、でしたよね？」

言葉に詰まる調に緒川がフォローを入れる。少しだけ恥ずかしくなっけて、調は響の手をほどいて後ろを向いた。

「みんなを助けるためなら、手伝ってもいい……」

響と未来の顔がパツと明るくなる。

「だけどそう信じるの？敵だったのよ？」

「敵とか味方とかいう前に、子供のやりたいことをさせてやれない大人なんて、カツコ悪くてかなわないんだよ」

弦十郎が立ち上がり、ポケットに片手を入れたまま大人の対応をする。

「ししょお〜！」

響が思わず言った。

弦十郎はシウルシャガナのペンダントを取り出し、調のもとにやって来て膝を曲げ、彼女に手渡す。

「こいつは、可能性だ」

調は指で涙をぬぐい、

「相変わらずなのね……」

「甘いのは分かってる、性分だ。うん……？」

どこか引つ掛かったが、気のせいかと割り切った。

テンションの上がった響が調の手を取り、

「ハツチまで案内したげる！急ごう！」

「わあっ……?!」

目を丸くしながら、階段を下りて行った。ハツチに到着すると、そこには検査を終えた雷が腕を組みながら待っていた。

「待ってたよ、二人とも」

「雷！検査はよかったの？」

「ばっちり全部問題なし！弦十郎さんにもしつかり通してある。……しらちゃん、ぶつかってみてよかったでしょ？」

笑顔を調に向け、彼女は少し恥ずかしそうに、

「う、うん。……姉さんの居場所って、暖かいね……」

「いいでしょ？」

何やら親し気に話す二人に響はついて行けてない。

「えええッ?!ふ、二人ってどういう関係なのお?!」

「その話は帰ってから。今はやることがあるでしょ」

響に手のひらを向け、ストップの意をもって説明を後回しにする。少し不満げな表情を浮かべた響だったが、気を取り直す。調がシンフォギアを起動し、鋸をタイヤ代わりにして発進した。

「あ。響ー。」

違和感に未来が真っ先に気づいた。

弦十郎は思わず立ち上がり、

「何をやっている！響君を戦わせる心算はないと言ったはずだ！」

響は調の肩の掴まりながら、

「戦いじゃありません！人助けです！」

「減らず口の上手い映画など、見せた覚えはないぞ！」

「行かせてあげてください！」

焦りを見せる弦十郎を未来がたしなめるように、響きに発破をかけるように、

「ッ?!」

「人助けは、一番響らしいことですから！」

『私からもお願いします！』

「雷君?!」

雷は響のお腹に手を回して掴まりながら、

『こういう無理や無茶、無謀を言うのは、子供の特権です！』

それを聞いて彼は頭をかきながら、

「それは本来俺の役目だったはずなんだがな」

「弦十郎さんも？」

「思わず未来が目丸くする。」

「帰ったらお灸ですか？」

彼はどこかうれしそうに笑顔を浮かべながら、

「特大のをくれてやる。子供のやりたいことを支えるのは、俺たち大人のやることだしな！」

「バックアップは任せてください！」

「私達のやれることでサポートします！」

指の関節をパキリと鳴らし、



「子供ばっかりに、いいカツコさせてたまるか」

少し離れたところで、翼が通信を聞いた。

「立花と轟、あの装者が一緒に、ですか？」

フツと嬉しそうに口角を上げ、

(想像の斜め上過ぎる)

すぐに表情を引き締め、

「了解です。直ちに合流します」

と言つて通信を切った。

「ノイズを深追いし過ぎたか……」

そう呟いた瞬間、上から無数の矢が彼女を襲った。翼はギリギリで気付き、何とか躲せたもののバイクは直撃を受け、爆発する。

「如何やら誘い出されたみたいだな」

彼女の視線の先には、

「そろそろだと思っていたぞ。雪音……」

アームドギアのボウガンを装甲に戻す。赤いシンフォギア、イチイバルを纏ったクリスが崖の上から見下ろしていた。

○○○

響に掴まりながらフロンティアを走っていた雷は、

「ごめんしらちゃん！ここで下ろしてくれないかな？」

「え？……うん。わかった」

「ありがと」

少しだけ不安そうな顔をした雷は、速度を落とした鋸から飛び下りる。

「それじゃ二人とも、頑張つて！」

それだけ言つて二人に背を向け、走り出した。

「どうしたのかな？」

「雷の事だから何か考えがあるんだよ。私達は先を急ごう」

「……うん」

調は鋸の回転速度を上げる。二人とも彼女に心残りがあったが、今は信じることにした。

「ここまでくれば、大丈夫かな？」

雷が振り返ると、すでにそこには二人の姿はなかった。  
彼女は深呼吸をして呼吸を整え、

「Voltaters Kelaunus Tron」  
ケラウノスを起動し、身に纏う。

(この状況を打破するには、フロンティアからネフィリムを引きはがすか、破壊するかしかない。ならッ！)

強引に引きはがせばいい。

彼女は胸に手を当て、目を瞑り、

「Gatrandis babel zinggurat eden  
al Emustolronzen fineel baral z  
izzil……」

絶唱した。

ケラウノスの絶唱特性は「感情の伝播」。故に、思いが強ければ強いほど、その出力は上昇する。二課のモニターが雷の絶唱を捉えた。

『雷?!』

『何をしている！今すぐやめるんだッ!』

未来や弦十郎は叫ぶが、当の本人は全く別のことを考えていた。

(このまま撃てば、フロンティアに少なくともダメージが入る。それをウエルが許すはずがない……)

詠唱を続けようとした瞬間、地面が大きく揺れた。

彼女の読みが、的中した。絶唱を中断し、後ろへ大きくバックジャンプで距離をとる。そして、揺れの発生地点から、巨大なネフィリムが姿を現した。

## 鎌と鋸・剣と銃・稲妻と巨人

雷の絶唱を、ウエルはブリッジで捉えた。計測した結果、その威力はフロンティアの機能を完全に損なわせる事が可能なほどだった。彼は苦虫をかみつぶしたような顔をして、

「僕を否定したあの娘ですか……！業腹ですが、背に腹は代えられません。フロンティアの操作が出来なくなるのは残念ですが、破壊されるわけにはいきませんからね……！」

幸いコアは直結している。あの娘を殺してからでも遅くはない。そう思い、彼はネフィリムを解き放った。

〇〇〇

雷を下した調は響に肩を貸しながら、フロンティアのブリッジ、その足元まで走破していた。

「あそこにみんなが？」

「分からない……。だけど、そんな気がする……」

「気がするって……」

曖昧に答える調に響は困惑を隠せない。すると彼女は突然進路を変え、速度を落として鋸を格納した。いきなりの事に響の体が対応できれず、バランスを崩してしまう。

「どうしたの?!」

問いかけに答えず、調は石でできた家のようなものを見上げている。響も同じように見上げると、そこにはマフラーをフードのようにして、風にはためかせている切歌がいた。

「切歌ちゃん?!」

「Zeios Iggallima Raizen Tron」

そして起動聖詠を歌い、調のシウルシャガナと対をなす緑のギア。イガリマを身に纏う。

「切ちゃん!」

「調、どうしてもデスか?!」

手に持っていたマイクのようなものを振り回し、回転させると巨大化、一振りの大鎌へと姿を変える。

「ドクターのやり方では、何も残らない！」

「ドクターのやり方でないと何も残せないデス！間に合わないデス！」

切歌の声に力がこもる。どこか本来の目的とは異なる、もう後がない、切羽詰まっているような感じがした。ぶつかり合う意志と意志、二人の考えは平行線。そんな二人の間で響は、

「二人とも！落ち着いて話し合おうよ！」

「戦場で何を馬鹿なことをッ！」

二人の声が重なり、響は気おされて肩がびくつと跳ねる。調は正面を向いたまま、

「あなたは先に行つて。あなたならきつと、マリアを止められる。手をつないでくれる」

「調ちゃん……」

「私とギアを繋ぐリンカーにだって、限りがある。だから行つて！」

響のほうに顔を向ける。彼女の瞳は、フィーネと同じような金の瞳をしていた。

「胸の歌を信じなさい……」

響の中で、かつてその言葉を残して消えたフィーネの姿が蘇る。響は一瞬呆けたが、すぐに領いて走り出した。

「させるもんかデス……ッ?!」

鎌を構え、響を刈り取ろうとするが、即座に打ち込まれた調の小型鋸を防御するために足止めを喰らってしまう。鎌を回転させてすべて弾いた。

自分の妨害をした調べに激高する。

「調！何であいつを！あいつは調の嫌った、偽善者じゃないデスカッ?!」

「でもあいつは、自分を偽って動いてるんじゃない。動きたいときに動くあいつが、眩しくてうらやましくて、少しだけ信じてみたい……。ぶつかり合つて、そう思った……」

声が高揚している。期待や希望、それらをのせた声色だった。ツインテール上のバインダーを展開し、高速回転する巨大な鋸が姿を現し

た。

「さいデスか……。でも、あたしだって引き下がれないんデス！あたしがあたしでいられるうちに、何かを形で残したいんデス！」

「切ちゃんでいられるうちに……？」

「調やマリア、ママ、あず姉ちゃんが暮らす世界に、あたしがここに居たつていう証を残したいんデス！」

「それが理由？」

鋸がけたたましく音を奏でる。

「これが理由デス……！」

鎌を一層深く構え、刃が三枚に分かれる。調のギアの脚部から小型の鋸がローラーのように現れた。二人の視線、旋律が交錯する。

「フッ！」

『切・呪りeツTお』

一息に跳躍し、分かれた三枚のうちの二枚がブーメランのように回転しながら調へと向かう。

「はあッ！」

『γ式・卍火車』

それに対して調はバインダーが変形したアームに保持していた巨大な鋸を射出する。空中でぶつかり合い、その間を縫って切歌が落下速度を重ねて距離を詰めた。それを迎撃すべく、二つのアームがさらに二つに割れ、四本となったアームの先端それぞれで巨大鋸が高速回転する。

『裏γ式・滅多卍切』

肩のブースターを使って空中を踊るように起動する切歌に対し、レンジの長さをフルで使って近づかせないようにする調。二人の力はまさしく拮抗していた。

調の連撃をバク転で回避し、もう一本の鎌を取り出して手数を増やす。

「この胸にッ！」

「ぶつかる理由がッ！」

「あるのならあッー！」

○○○

翼の斬撃を二丁拳銃を構えるクリスが銃身で弾き、もう一丁で攻撃を加える。弦十郎の見せた映画の影響だ。しかし、ただで攻撃を喰らう翼でない。確実に的確に銃弾を弾き、逆に一刀をふるう。

「ハッ！」

しかし、それをバク宙で回避し、今度はクリスが二丁同時に撃つ。そしてこの攻撃を翼が回避するという。まるで一つの生物のような連動した動きを見せていた。

鋭い振り下ろしを銃でいり防ぎ、弾くと同時に空中反転してからになつたマガジンを排出。そして腰部から代わりのマガジンが直接装填され、即座に戦闘を再開する。

「ハアアッ！」

脚部のブースターを点火し、クリスを中心に高速回転することで狙いを外しながら翼は距離を詰める。クリスも迎撃のために発砲するが、狙いがそれているために命中していない。

跳躍して間合いを詰め、刃を振り下ろすがギリギリでクリスに回避される。着地してすぐの足元を翼が狙うが、すぐに再び跳んで空中で発砲したクリスの反撃にあい、水たまりに着水する。しかし表情一つ変えることなく刀を握る手に力を込めた。

そんな二人を、ウエルが下卑た笑い声を上げながらソロモンの杖を片手に眺めていた。ネフィリムのほうは勝利は決まっていると断じて気にしていない。

○○○

絶唱を中断した雷はネフィリムと対面し、  
「倒せるか？……いや、死ななければ上々か」

とフツと笑みをこぼした。比較的小柄な雷から見てネフィリムは何倍もある。以前見かけた時よりもはるかに大きくなっていた。

「さてと……やるかッ！」

ギアからアップテンポのトランス音が流れはじめ、歌う。左腕を伸ばし、右腕を腰だめに構えるという独特の構えから踏み込み、一気にネフィリムの懐へと入り込む。

「せいッ！」

『弾雷牙檄』

左腕のユニットから構築された雷の塊が加速された右腕によってアッパーカットの要領で打ち上げられ、ネフィリムの顎に直撃。そして爆散し、その衝撃で一步後ろに後退させた。

その隙を逃すような彼女ではない。跳躍して頭を越し、腰のひねりを加え、稲妻を纏った蹴りを打ち下ろす。

『雷刃抜拳・滅神』

「グオツ?!」

低い唸り声を響かせながら、頭部がガクンと下に落ちる。

「なるほど、異形であれど動きは人体と変わらないか……」

蹴りの反動で更に空を跳び、右の拳を左で握る。右腕のユニットから放たれた雷を拳を介して左腕に流し込み、正拳突きのように突き出した。

『八卦乃雷電龍』

突き出した拳から稲妻でできた八尾の龍が召喚され、餌に群がるかのようにそれぞれ襲い掛かる。本来であればネフシユタンによって捕食されしまうのだが、ケラウノスのアームドギアは稲妻という自然界にも存在しているもののため、聖遺物として認識することが難しく吸収できないのだ。巨人を滅ぼしたというケラウノスの伝承の通り、雷のシンフォギアはネフィリム特攻を持っていると言えた。

「オオオッ！」

ネフィリムは腹に響く唸り声を上げながら腕を振るう。雷は後ろに跳ぶことで回避するが、龍の半分がそれにかき消されてしまった。完全にエネルギーを吸い切れていないというのもあるが、戦いは一方的に見えた。

「チッ！回復が速すぎるッ！」

雷は舌打ちをする。そう、彼女の与えるダメージよりもネフィリムの回復速度のほうが速い。よって、イタチごっこが発生しているのだ。

○○○

フロンティアのブリッジ、そこにあるモニターに表示される三組の戦いのうち、二つを見てマリアが膝をつく。

「どうして、雷がここに……！仲の良かった調と切歌までが……！私の選択はッ……こんなものを見たいがためではなかったのにッ……！」

自らの非力さに涙が出る。そんな時、

『マリア』

「ッ！マム！」

ナスターシヤの自分を呼ぶ声を聞いて顔を上げる。

『今、あなた一人ですね？フロンティアの情報を解析して、月の落下を止められるかもしれない手立てを見つけました』

『え……?!』

「最後に残された希望……。それには、あなたの歌が必要です！」

「私の……歌……」

息を切らしながら、響はマリアのもとへと走り続ける。調べに託されたのだ、諦めるわけにはいかない。ネフィリムを切り離され、ウエルがない今、彼女の走りを阻むものはいない。

（胸の歌が、ある限りいーッ！）」

響は叫ぶ。心の底から。

終わりを止める戦いの始まりまで、あと少し。



## 七人の戦姫がそろうまで

翼は剣を大剣へと変形させ、クリスの銃弾を弾く。そして間髪入れずに蒼ノ一閃を放った。それをジャンプで回避したクリスは、空中からの射撃でまだ体勢の整っていない翼を攻撃するが彼女は慌てることなく、冷静に大剣の幅を盾代わりにして防いだ。

大剣を元の剣に戻しながら、

「何故弓を引く！雪音ッ！」

翼の問いにクリスは答えない。

「その沈黙を、私は答えと受け取らねばならないのかッ！」

クリスは目を見開き、突撃を駆ける。翼の横薙ぎを直前で回避し、着地と同時に撃つがすぐに翼が距離を詰め、刃を振り下ろす。その一撃を拳銃のトリガーガードで受け止める。鏢迫り合いの状態だ。そんな状態で翼が、

「何を求めて手を伸ばしているッ！」

翼の力に押されたのか、クリスが引いたのかは定かではない。鏢迫り合いが崩れ、引いたクリスがもう一方の拳銃ですぐさま攻撃を仕掛けるが翼はこれを回避し、体を回転させながら再び振り下ろす。体重の乗った重い一撃を今度は二丁ではじき返し、銃口を向け、

「アタシの十字架をッ！他のだれかに負わすわけにはいかねえだろッ！」

「何……？……ッ?!」

翼の目に、クリスの首に巻かれたチョーカーのようなものがうつる。ちかちかと不穏気に点滅しているそれに気をとられた瞬間、クリスが発砲した。翼はギリギリで弾丸を受け止めるが、完全に力が入り切っておらず、勢いよく後方に吹き飛ばされてしまった。

別のところでは、鋸を展開した調と、鎌を構えている切歌が向き合っていた。

「切ちゃんが切ちゃんていられるうちにとって、どういうこと……?」

「あたしの中に、フィーネの魂が……、覚醒しそうなんです……」

切歌の脳裏に落下してくる鋼材をバリアで受け止めた光景がよみ

がえる。切歌は構えを解き、

「施設に集められたレセプターCHILDレンだもの……。こうなる可能性はあったデス！」

「だとしたら、私はなおの事切ちゃんを止めて見せる」「っ?!」

調の鋸が回転速度を上げ、唸り声のような音が鳴り響く。

「これ以上塗りつぶされないように、大好きな切ちゃんを守るために！」

切歌は鎌を振り回し、その先端を調べに向けて構え、

「大好きとか言うな！あたしの方が、ずっと調が大好きデス！だからッ！大好きな人たちがいる世界を守るんデス！」

「切ちゃんッ……！」

回転していた鋸の内側が肉抜きされ、プロペラのように変形。調の頭上と足元に移動し、彼女の体を宙に浮かせた。

『緊急の式・双月カルマ』

「調ッ……！」

切歌も肩のアーマーを変形させ、アームに保持した四つのネイルを展開する。

『封伐・PINO奇お』

「大好きだつてえ……！言ってるでしよーッ！」

鎌と鋸が空中で火花を散らした。

○○○

潜水艦のハッチにあるジープに弦十郎と緒川の二人が飛び乗った。ウエルを捕獲すべく、装者たちにネフィリムや敵対装者を任せ、行動を開始したのだ。

弦十郎は腕を組みながら、

「世話の焼ける弟子のおかげでこれだ」

「きっかけを作ってくれたと、素直に喜ぶべきでは？」

緒川がハンドルを握りながら、楽しそうに言った。「フッ」と弦十郎が口角を上げる。

指令室から通信が入った。

「ん？」

『指令！』

「なんだ！」

『出撃の前に、これをご覧ください！』

取り出したタブレットに、フロンティアのブリッジに居るマリアからの映像が映る。即興だからなのか、少しだけ音声が荒い。

『私は、マリア・カデンツァヴァ・イヴ。月の落下がもたらす災厄を最小限に抑えるため、フィーネの名をかたったものだ。三か月前……』  
『フロンティアから発信されている映像情報です。世界各地に中継されています』

「この期にF・I・Sは、何を狙って……」

緒川が当然の疑問を口にした。弦十郎は静かにタブレットの映像を睨み続けている。そして、悩むように眉を顰めた。

同時刻、世界中の人々が次々に暴かれていく真相にくぎ付けになっている。

放送を続けるマリアの脳裏に、ナスターシャとの会話が蘇る。

『月を、私の歌で……？』

『月は、地球人類より相互理解をはく奪するため、カストディアンが設置した監視装置……。ルナアタックで一部不全となった月機能を再起動できれば、公転軌道上に修正可能です……ッ?!』

彼女の体に限界が近づいている。ナスターシャは大量の血を吐き出した。

『مامツ?!:مامツ!』

マリアには映像では見えていないが、ナスターシャの苦しむ声が聞こえていた。しきりに首を振るが、状況を確認するすべは持ち得ていない。

口を抑え、かすれるような声で、

『あなたの歌で、世界を救いなさい……!』

世界中の人類に対して、マリアは胸を張り、声を張る。

「すべてを偽ってきた私の言葉が、どれほど届くか自信はない。だが、歌が力になるという真実だけは、信じてほしいッ！」

そして目を瞑り、

「Granzizel Billfen Gungnir Zizz  
l」

漆黒の GANG ニールを身に纏い、告げる。

「私一人の力では、落下する月を受け止めきれない……！だから貸してほしい！皆の歌を、届けてほしい！」

この星の人類を救いたいと言う思いを込めて、マリアは歌う。彼女の歌に共鳴するように、GANG ニールが赤く輝き始めた。

（セレナが助けてくれた私の命で、誰かの命を救って見せる。それだけが、セレナの死に報いられる！）

マリアの脳裏にセレナと同じ手を掴めなかった少女。いや、手を離してしまった少女である雷の姿が浮かぶ。

（そうだ、私は彼女を傷つけてしまった。ならせめて、目覚めた彼女に許しを請えるだけのことをするしかない！）

厚かましいかもしれないけれど……。自分を皮肉るように軽く笑った。だが、いつそう自分の歌に思いをのせる。

二課の潜水艦のハッチが開く。

「緒川！」

「分かっています！この映像の発信源をたどります！」

そう言っ緒川はアクセルを力強く踏み切り、一気に加速して飛び出した。

○○○

マリアのいるブリッジに向かって響が汗をたらしながら疾走する。

（誰かが頑張っている……！私も負けられない……！進むこと以外、答えなんてあるわけがない！）

すぐ近くで爆発が起きたが、わき目もふらず走り続ける。

クリスの銃撃を全て翼がさばいていく。その光景をウエルがソロモンの杖をいじりながら高みの見物を決め込んでいた。

『さっさと仕留めないと、約束のおもちゃはお預けですよ……？』

（ソロモンの杖……！人だけを殺す力なんて、人が持ってちゃいけないんだ！）

通信機から聞こえてくるウエルの声がクリスの焦りを生む。点滅するチャーカーのようなものを翼は睨み、

(あれが雪音を従わせているのかッ！)

たがいに構え、目を見据える。

「犬の首輪をはめられてまで、何をなそうとしているのかッ?!」

「汚れ仕事は、居場所のない奴がこなすつてのが相場だ。違うか?」

翼はフツと小さく笑い、

「首根っこ引きずつてでも連れ帰つてやる。お前の居場所、帰る場所に」

「っ」

思わずクリスは顔をそむけた。

「お前がどんなに拒絶しようと、私はお前がやりたいことに手を貸してやる。それが、片翼では飛べぬことを知る私の、先輩と風を吹かせるものの果たすべき使命だ!」

(そうだったよね、奏……)

(そうさ! だから翼のやりたいことは、あたしが、周りのみんなが助けてやる!)

翼の中に、共に行き、自分の目標となった天羽奏の姿がうつる。

クリスが涙を目にためながら叫んだ。

「その仕上がりで偉そうなことをッ!」

『何をしているのですか? その首のギアスが爆ぜるまでもう間もなくですよ?』

「っ」

ウエルの声に従わざるを得ず、背けた顔を正面に向け、翼を真っ向から見据えた。翼も刀を正面に構える。

「風鳴ッ……先輩ッ……」

「ッ?!」

クリスの口から出た「先輩」というワードに翼が反応する。

「次で決めるッ! 昨日まで組み立ててきた、あたしのコンビネーションだッ!」

「ならばこちらも真打をくれてやる!」

赤と青のシンフォギアが激突する。

○○○

雷の放った稲妻の槍がネフィリムの体を貫くが、即座に再生され、跡形もなく消えてしまう。肩から放たれたミサイルを斥力を利用してジャンプで空中回避していく。着弾した際に発生した爆風が彼女の長い髪を揺らした。

「流石と言うか、呆れるべきか……」

頬を流れる汗が爆炎によって蒸発する感覚を味わいながら静かに呟いた。こちらの攻撃はすぐに再生され、向こうの攻撃を喰らえばダメージとギリギリの綱渡りをさせられている気分になる。流石の彼女も覚悟していたとはいえ、少しだけ後悔していた。

「しらちゃんに残ってもらうべきだったかなあ……?」

すぐに首を振り、

「いや、響の輸送と切ちゃんを説得するために来てるんだから駄目だな。ケラウノスと相性が良かったのが不幸中の幸いか……」

一度距離をとるためバックジャンプするが、ネフィリムの腕が伸び空中にいる雷に襲い掛かる。

「ぜいッー」

『超電磁アンカー』

雷の腕から伸びたアンカーがネフィリムの腕を捕らえ、引き寄せることで腕に飛び乗り、

『電光刹那』

雷のごとき速度で腕を焼きながら駆けあがっていく。

彼女の勝利条件は、みんなが戻ってくるまで持ちこたえることだ。

## 先輩の矜持、後輩の叫び

三つの戦いのうち、一つに決着がつこうとしていた。クリスの『M E G A D E T H P A R T Y』と、翼の『千ノ落涙』が空中でぶつかり合い、大爆発を引き起こす。その爆炎の中に、二人は飲まれていった。

高みの見物を決め込んでいたウエルは杖を片手に咆哮し、「願ったり叶ったりいゝ。してやったりいゝ！」

遂には飛び跳ねてどす黒い自分の内面を吐露する。

ジープに乗っていた弦十郎と緒川の二人は友里から報告を聞いた。

『天羽々斬とイチイバルの反応……。見失いました……。』

「翼……。クリス君……」

二人の名を口にし、静かに目を閉じた。

○○○

調が空中からアームに繋がれた巨大な鋸を切歌に差し向けるが、彼女は鎌の外側を使ってそれを受け止める。自分の間合いを維持するため調は下がるが、そうはさせじと肩のネイルを自由自在に動かして間合いを詰めていく。距離を詰めたのならこつちからと言うように二本のアームに繋がった鋸を組み合わせ、タイヤの内側に調の体が入ったようになって逆に突撃を駆ける。

『非常式・禁月輪』

調の突撃に対して切歌は一对の鎌を組み合わせ、高枝切りばさみのように形作った。

『双斬・死nデRえら』

それと同時に肩のアーマーをアンカーのように射出して調のコースを限定、彼女の突撃をまさしく真つ向から受け止める。高速回転する鋸の刃と、はさみのようにした鎌の刃が火花を散らす。決め手にならないと判断した調は禁月輪を解除し、バインダーから無数の小型鋸を発射する。同じく切歌も死nデRえらを元の一对の鎌に分解し、面で放たれる鋸のうち、自分に当たりそうなものだけを破壊する。

彼女たちの実力、歌、全てが重なり合う。故に、全てにおいて決め

手に欠いていた。二人は向かい合い、

「切ちゃん……。どうしても引けないの……?」

「引かせたいのなら、力づくでやってみせると言いデスよ……!」

「……ッ。リンカー……」

どこからともなくリンカーを取り出し、調の足元に投げやる。勝負の決め手は、もはやこれしか残っていない……。

切歌は自分の頸に押し当て、

「ままならない思いは、力づくで押し通すしかないじゃないデスカ……」

一思いにトリガーを引き、中の薬液を一気に注入する。そして……。

「G a t r a n d i s   B a b e l   Z i g g u r a t   E d e n  
a l」

調も同じくリンカーを打ち込み、二人の絶唱が一つとなる。

「E m u s t o l r o n z e n   F i n e   E l   B a r a l   Z  
i z z l……」

フォニックゲインが高まり、切歌が告げる。

「絶唱にて繰り出されるイガリマは、相手の魂を刈り取る刃ツ!」

鎌の先端を地面に突き刺し、柄の部分が長く伸長していく。それと同時に刃も巨大化し、ブースターの推力をもって上昇する。

「分ならず屋の調から、ほんの少し負けん気を削ればッ!」

調のギアの装甲が延長、巨大化し、鋸を四肢とした巨人のようになる。

「分ならず屋はどつちッ……! 私の望む世界は、切ちゃんもいなくちやダメッ……! 寂しさを押し付ける世界なんて、欲しくないよッ……!」

切歌が突撃し、その攻撃を調が右腕のアーマーで払う。

「あたしが、調を守るんデス……! たとえフィーネの魂に、あたしが塗りつぶされることになってもッ!」

切歌の思いに呼応するようにイガリマのジェネレーターが高速回転し、緑色の炎を纏いながら円盤のように再び突撃する。



「ドクターのやり方で助かる人たちも……私と同じように、大切な人を失ってしまうんだよツ?!」

切歌の思いを受け止めようとするが、あまりの威力にアーマーが砕け散る。調は目じりに涙を貯めながら、

「そんな世界に残ったって、私は二度と歌えないツ……!」

「でも、それしかないデス!そうするしか無いですツ!……例え、私が調に……嫌われてもおおツ!」

叫びと共に振り下ろされる刃が調のギアの腕部装甲を破壊する。

「切ちゃん、もう戦わないでツ……!私から大好きな切ちゃんを奪わないでツ……!」

その声は届くことなく、切歌の一刀が調に振り下ろされる。その瞬間、調が両手をかざした場所に、ファイネのバリアが張られた。それはイガリマを容易く弾き飛ばし、切歌に驚愕を突きつけた。

「え……?」

「何……これ……」

自分でもどうやったのか、何なのかが理解できていないのか、調は両手を見て困惑の色を浮かべる。切歌は肩を落とし、

「まさか……、調、デスカ……?ファイネの器になったのは調なのに……、私は、調を……」

「切ちゃん……?」

「調に悲しい思いをしてほしくなかったのに、出来たのは調を泣かすことだけデス……」

切歌が涙ながらに手を横に差し向けると、彼女の思いをくみ取るようにイガリマが発光し、上空へと回転しながら飛翔した。

調は思わずそれを見上げてしまう。

「あたし、ホントにヤな子だね……。消えてなくなりたいデス……」

切歌の言葉、空高く飛翔した絶唱状態のイガリマ……。調はその意味をすぐに察した。

脚部のローラーを全力で回し、

「駄目!切ちゃんツ!」

切歌の真正面から突飛ばそうとするが、間に合わなかった。調の背

中に鎌の先端が突き刺さる。

「調……う？調ええええッ！」

切歌の叫びが虚空に響いた。

○○○

マリアの歌によつてフロンティアが輝き始めるが、月を何とかするにはまだ足りない。そんな輝きを放つ遺跡に、息を切らせながら走ってきた響が、ついに到着した。

ブリッジでマリアの歌うが、歌い終えた瞬間にその光が消滅した。

制御室ではナスターシャが、

「月の遺跡は依然沈黙……」

無情にも結果を呟いた。

この結果にマリアは膝をつき手をつき項垂れる。情けなさから涙がこぼれた。

「私の歌は、誰の命も救えないの……？？セレナツ……。雷ツ……」

日本でマリアの事を見ていた創世たちは、

「この人、ビツキーたちと同じだね……」

「うん、誰かを助けるために……」

「歌を歌うなんて……」

○○○

翼とクリスの戦闘で発生した爆発によつて穿たれた穴にウエルがやって来ていた。彼女たちを確実に始末するためだ。

「シンフォギア装者は僕の統治する未来には不要……！」

ゆつくりと慎重に下りてきた彼だが、足を滑らせ、情けない悲鳴を上げながら滑っていく。

「その手始め目にぶつけ合わせたのですがあ……！こうも、そうこうするとは……。チヨロすぎるう……はあ?!」

クリスが傷だらけのイチイバルを纏ったまま、ウエルの目の前に現れた。彼女の足元にはギアが解除された翼が横たわっている。

クリスは振り返り、

「約束通り、二課所属の装者は片づけた……。だから、ソロモンの杖をアタシに……」

ウエルに向けて右手を突き出す。だが、彼は約束を反故にする。その姿には英雄らしさのかけらもない。

「こんな飯事みたいな取引に、どこまで応じる必要があるんですかねえ?」

ポケットから『ギアス』の爆破スイッチを取り出し、それを押すがうんともすんとも言わない。何度も何度も押すが結果は同じだ。

「何で爆発しないッ?!」

クリスが首に巻かれた小型爆弾『ギアス』を破壊し、

「壊れてんだよ。約束の反故とは悪党のやりそうなことだ……」

クリスがウエルに詰め寄るが、腰を抜けた彼は恐怖のあまり声にならない悲鳴を上げながら杖を掲げる。杖は己の役割としてはめ込まれた紫色の宝石から緑色の光線と共にノイズを召喚し、クリスを包囲する。

「今更ノイズッ!……ッあ?!」

アームドギアを展開しようとするが激痛が走る。

「アンチリンカーは、忘れたところにやってくる……」

下卑た笑いを浮かべるウエルの思い通りにはならないと、クリスが叫んだ。

「ならッ……!ぶっ飛ベッ……!アーマーページだッ!」

イチイバルの装甲そのものを弾丸とした放つ。全方位に放たれるそれは、ノイズの群れを問答無用で撃砕した。

何とか免れたウエルがほとぼりが冷めたと思って顔を出すのが、緊急的な対処のため一糸まとわぬ姿となったクリスに距離を詰められ、悲鳴を上げながらソロモンの杖を手放してしまう。

「杖をッ?!」

だが、ノイズはすべて消え切ってはいなかった。杖が手元を離れ、制御の利かなくなったノイズはプログラムに従って人間、即ちクリス達に群がっていく。

「先輩……!」

先輩と啖呵を切っておいて後輩の助けを聞かぬものがいようか。少なくとも彼女は応える。翼は天羽々斬をアークシルエツトにダ

ウングレードして身に纏い、残存していたノイズを『千ノ落涙』で薙ぎ払った。

この事実にはウエルが驚愕する。

「そのギアは……！馬鹿な。アンチリンカーを抑えるため、あえてフォニックゲインを高めず、出力の低いギアを纏うだと……?!そんなことが出来るのかッ……！」

「できんだよ……。そういう先輩だ……！」

クリスは確信を持っていうようだった。

出力は落ちている。体も限界に近い……。だが、後輩が見ているのだ、先輩である翼が倒れるわけにはいかないと言葉をふるう。

なぜ確信できたのか。それは奇跡でも偶然でも何でも無い。これまで翼とクリスが積み上げてきた信頼と修練、目を瞑っていても可能なほどに練り上げられたコンビネーションだからこそ起きた必然だった。

翼の一振りがノイズを斬滅する。

「付き合えるかッ！」

ウエルが逃走を図る。

そんな彼には目もくれず、クリスの周囲を囲っていたノイズの群れを炎を纏った刃で焼き払った。それと同時に分解されていたクリスの制服が形を取り戻す。彼女の手のひらにはペンダントに戻ったイチイバルが握られていた。

翼も同様にギアを解除し、ライダージャケットを元った姿へと戻る。そしてクリスの前まで歩を進め、

「回収完了。これで一安心だな」

ソロモンの杖をクリスに手渡した。照れからか頬が赤く染まる。

「一人で飛び出して、ごめんなさい……！」

「気に病むな。私も一人は何も出来ないことを思い出せた。何より……！」

翼は一息溜め、

「こんな殊勝な雪音を知ることが出来たのは僥倖だ」

さらに頬が赤くなる。ファイとそっぽを向きながら、

「それにしたってよお……なんで、アタシの言葉を信じてくれたんだ？」

彼女の問いに翼はさも当然のように、しかし嬉しそうに、

「雪音が先輩と呼んでくれたのだ。続く言葉を斜めに聞き流すわけにはいかぬだろう」

「それだけか？」

「それだけだ。さ、立花たちと合流するぞ」

簡潔に言い切り、スタスタとその場を後にする。その背中を見ながら、

（まったくどうかしていやがる。だからこいつらのそばはどうしようもなく、アタシの帰る場所なんだな）

そんな先輩の後を、満足げにクリスはついて行った。

## 復活の撃槍

クリスと翼によってソロモンの杖を失ったウエルは、遺跡のエレベーターに乗りながら悪態をついていた。

「クソッ！ソロモンの杖を手放すとはッ……！こうなったらマリアをぶつけてやるッ！」

○○○

調は絶唱状態のイガリマの一撃から切歌を庇い、生死の境をさまよっていた。傷口はそこまで深くはないのだが、当たった場所とイガリマの絶唱特性―魂を刈り取る刃―によって見た目以上に深刻なダメージを受けていた。そんな彼女に切歌が涙を流しながら声をかける。

「調え……。目を開けて……！調え……！」

切歌の声に反して、調の意識は深い闇へと沈んでいつていた。だが、闇の中でも切歌の声は届き、調は目を開け、

「切ちゃん……。じゃない……。だとすると、あなたが……」

と呟いた。そして彼女のそばに、黒い霞がかかったような影が形を持つように集まり始める。まるで人のようになる、白いローブを纏った女性。フィーネが現れた。

「どうだつていいじゃない、そんなこと」

「どうでもよくない。私の友達が泣いている……」

フィーネは閉じていた目を開き、

「そうね……。誰の魂も塗りつぶすことなく、このまま大人しくしているつもりだったけれど……。そうもいかないものね……。魂を両断する一撃を受けて、あまり長くは持ちそうもないか……」

フィーネの体が光を反射する粒子のようなものに変わっていく。彼女の魂が消滅しようとしているのだ。

「私を庇って……。でも、どうして……」

「あの子に伝えてほしいの」

「あの子……？」

調の中であの子が誰なのかが浮かばない。だが、フィーネは懐かし

そうに眼を閉じ、

「だって、数千年も悪者やって来たのよ？いつかの時代、どこかの場所で、今更正義の味方を気取ることは出来ないって……」

彼女の言葉を聞いて、調は誰が『あの子』なのかを理解した。段々ファイネの体が透けていく。彼女は少し申し訳なさそうになってから笑顔を浮かべ、

「あと、轟の娘にも伝えておいてくれないかしら？あなたの幸せを、ご両親と同じくらい願ってるって」

今度は誰に言っているのか、調はすぐに理解できた。

その言葉を言い終えた後、彼女の姿は深い闇の中に霧散していくその直前、

「今日を生きるあなた達で何とかなさい……。いつか未来に、人が繋がれるなんてことは、亡霊が語れるものではないわ……」

そう激励し、ファイネの魂は完全に消滅した。

一向に目を覚まさない調に、切歌は大粒の涙を流しながら、縛りだすようにして、

「目を開けてよ、調え……」

「……あいているよ、切ちゃん……」

返ってこないはずの返答が返ってきたことに切歌は戸惑いを隠せない。さつきまで気付かなかったが、彼女の体から出ている金色の粒子のようなものがさらに戸惑いを加速させていた。そんな切歌とは反対に、調が静かに起き上がる。

「体の怪我が……」

切歌が驚いた理由はもう一つ。イガリマが刺さったはずの背中の怪我が無くなっていたのだ。それもきれいさっぱり、魔法のように。

「ジー……」

三重の戸惑いで動きを止めた切歌の目を、調が真っ直ぐ見つめる。「調え！でも、どうして……」

切歌はうれしさのあまり涙を流しながら飛びつき、抱きしめた。しかし、なぜ彼女が目を覚ましたのか、切歌にはトンと理解できないでいる。

しつかりとは分からないが、一番の可能性を口にする。

「多分、フィーネの魂に助けられた……」

「フィーネに、デスカ……？」

切歌は調から体を離し、正面から彼女を見据える。が、今度は逆に調が切歌に抱き着いた。彼女は目を瞑りながらしみじみと、

「みんなが私を助けてくれて……。だから切ちゃんの力も貸してほしい……。一緒にマリアを救おう？」

「あ……。うん……。今度こそ調と一緒に、みんなを……。助けるですよ……」

抱きしめている切歌には見えなかったが、調は微笑みながら、

「それにね、切ちゃん……。一緒なのは、私だけじゃないんだよ……」

「調だけじゃない……？」

切歌は困惑を隠せない。調の他にも誰かいるのだろうか。二課の装者はともかくとして、調がはぐらかすということは、自分もよく知る人物であるということとを推測するが、誰なのか分からない。すると突然、調が体を離れた。珍しく満面の笑みを浮かべている彼女を見てようやく理解した。

「まさか、姉ちゃん……。デスカ？」

「うん……。姉さんも手伝ってくれるの……！」

「やったデス！あず姉ちゃんに会えるデス！」

実は何回もあつてるのだけ……。飛び跳ねて喜ぶ切歌に、調は少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。

○○○

自分の歌では人類を救うことが出来ない。その事実を突きつけられたマリアはブリッジで涙を流していた。そんな彼女にナスタールシャが制御室から、

『マリア、もう一度月遺跡の再起動を……！』

「無理よ……。私の歌で世界を救うなんて……！」

『マリア……。月の落下を食い止める、最後のチャンスなのですよ……！』

マリアが駄々をこねているうちに、ウエルが苛立ちの形相を浮かべ



たままブリッジに戻ってきた。彼は謎の叫びを上げながらマリアの頬を裏拳で張り飛ばした。不意の一撃をまともに喰らってしまい、倒れ込んだ。

「月が落ちなきや、好き勝手出来ないだろうがッ！」

そう吐き捨て、機能の大半を割いているネフィリムの本体が雷とやり合っているため、ほとんど操作できなくなっている操作用の球体に向かう。

『マリアッ！』

「ああんツ?!」

マリアを気遣うナスターシャの声が耳障りだったのか、ウエルが声を荒げる。

「やつぱりオバハンか」

ネフィリムの力を持った左腕を球体にかざす。すると球体が輝きはじめ、操作可能になった。ナスターシャが焦ったように言うが、彼は耳を貸さない。

『よしなきいドクターウエル！フロンティアの機能を使って、収束したフォニックゲインを月へと照射し、バラルの呪詛を司どる遺跡を再起動できれば、月を元の起動に戻せるのですッ！』

不測の事態が積もりに積もり、自分の思い通りにいかなかったことにいら立ちが頂点へと達したウエルは怒気を多分に含んだ声をあげ、

「そんなに遺跡を動かしたいのなら！あんたが月に行ってくればいいだろッ！」

球体からフロンティアの遺跡に指示を出すと、ナスターシャのいた制御室のあった区画が煙を巻き上げながら月へと向かって上昇し始めた。

「マムッ！」

「有史以来、数多の英雄が人類支配をなし得なかったのは、人の数がその手に余るからだッ！」

彼は腕を組みながら、ご高説を垂れる。

「だったら支配可能なまでに減らせばいい！ボクだからこそ気付いた

必勝法！英雄にあこがれる僕が英雄を超えて見せる……！フハハハ！」

ウエルは気づいていない。そのことを分かっているとしても英雄だからこそ、その手段を最後まで なかったということに。英雄が英雄たりえる、その理由に。

「よくもママをッ！」

ガングニールのアームドギアである槍を形作り、構える。だが、ウエルは不遜な態度を崩さず、

「手に掛けるのか?!この僕を殺すことは、全人類を殺すことだぞッ！」  
「殺すッ！」

槍を振り上げ、ウエルに襲い掛かろうとする。彼はさっきの態度とは打って変わってな開けない声を上げた。そんな二人の間に響が手を広げて介入する。マリアの動きが止まった。

「そこをどけッ！融合症例第一号！」

「違うッ！」

響は胸の前で握りこぶしを作る。

「私は立花響十六歳！融合症例なんかじゃないッ！ただの立花響が、マリアさんとお話ししたくてここにきてるッ！」

「お前と話す必要はないッ！ママがこの男に殺されたのだッ！ならば私もこいつを殺すッ！世界が守れないのなら、私も生きる意味はないッ！」

響を無視して腰が抜けて動けないウエルに向かって槍を突き出す。が、その途中で響がその槍の刃を手で握り、受け止めた。痛みは歯を食いしばり、気合で耐えている。

「お前……！」

「意味なんて、後から探せばいいじゃないですか。だから、生きるのを諦めないでッ！」

その叫びに、マリアの動きが止まる。そして響は歌った。あるはずのない、消滅したガングニールの聖詠を……。

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro  
n」

最後のほうは彼女の叫びが混じっている。そしてその魂の叫びに、マリアのガングニールが応えた。ガングニールは光の粒子へと還元され、ブリッジを満たしていく。その輝きは、外からでも観察できた。「あれは……」

「マリアを助けるデス！」

調と切歌が、

「あのバカの仕業だな」

「ああ。だけど立花らしい」

翼とクリスが、

「やったね響！これで後はマリアだけ……！」

(セレナ……。マリアに力を貸してあげて……。)

そして、雷がネフィリムの攻撃を回避し、受け流しながら言葉をこぼした。

それだけではない。この奇跡に、世界中の人々が息をのんだ。

輝きの渦の中でマリアが、

「何が起きているの……。こんな事ってありえない……。融合者は適合者ではないはず！これは貴女の歌、胸の歌がして見せたこと……。あなたの歌って何ッ?!なんなのッ?!」

マリアが叫ぶ。

遠く離れた場所、二課の潜水艦の指令室とフロンティアの上で響の親友たちが同時に叫んだ。

「二行つちやえ響ッ！ハートの全部でッ！」

光の粒子が響のもとへと集まっていく。そしてそれは形を成し、響の体を包みこんでシンフォギアとなる。

そして、『胸の歌』を魂に乗せて叫んだ。

「撃槍ッ！ガングニールだああッ！」

## 世界を繋ぐ歌

ガングニールを身に纏った響の周囲に漂っていた、シンフォギア由来の粒子が完全に消失する。

マリアが驚愕に目を丸くしながら言葉をこぼした。

「ガングニールに、適合……だと?!」

その時、ウエルが叫び声を上げながら逃走する。

「こんなところでえッ……!」

焦りや自分の欲望が破壊されるという恐怖から階段を踏み外し、一気に転げ落ちてしまう。全身をしたたかに打ち付けたようだが、アドレナリンが出ているのか痛みを気にするようなそぶりを見せずに、  
「こんな、ところでえ……!終わるッ!ものかあッ!」

ネフィリムの力を得た左手でフロンティアに指示を下す。手の振れた部分に幾何学模様が浮かぶと、下の階へと続く穴がぼっかりと開いた。

「ああッ……!」

「ウエル博士!」

彼はあけた穴に落ちていく。ギアを纏った響は気を失ったマリアを支えるために動くことが出来ず、遺跡へと乗り込んでいた弦十郎と緒川は間一髪のところであつた間に合わなかった。

ウエルが入りきると同時に穴は閉じ、元の石の床へと戻る。

弦十郎と緒川は捕獲目標であつたウエルを逃がしたものの、すぐに敵陣へ生身で突っ込んでいた響に意識を向けた。

「響さん!そのシンフォギアはッ?!」

「マリアさんのガングニールが、私の歌に答えてくれたんです!」

緒川の疑問に答えたたん、フロンティアに地響きが起こった。新たに起きた出来事を、二課のオペレーターたちが観測し、結論を出す。

『重力場の異常を計測ッ!』

『フロンティア、上昇しつつ移動を開始ッ!』

「っ」

彼らの報告を聞いて、響は息をのんだ。ウエルへの怒りが収まっ

た。と言うよりは燃え尽きたように見えるマリアが膝をつき、俯きながら、

「今のウエルは……左腕をフロンティアとつなげることで、意のままに制御できる……」

ウエルは廊下を歩きながら、左腕を壁に当てて制御を維持したまま、

「ソロモンの杖がなくとも……僕にはまだフロンティアがある……！邪魔する奴らは……重力波にて、足元から引っぺがしてやるツ……！」

マリアはフロンティアの現状をゆつくりと話し始めた。それは懇願しているようだった。

「フロンティアのコアは、ネフィリムの心臓……！それを停止させれば、ウエルの暴挙も止められる……！お願い……。戦う資格のない私に変わって……お願いッ……！」

「調ちゃんにも頼まれてるんだ」  
「っ」

「マリアさんを助けてって。だから、心配しないで！」

分かっている。そう言うように声を躍らせながら言った。すると突然、何かが崩壊する音が階段の下、即ち弦十郎のいる方から聞こえてきた。見ると、彼は拳を床に当て、そしてそれを粉碎して大穴を開けていた。

「師匠ッ！」

「ウエル博士の追跡は、俺たちに任せろ。だから響君は……」

「雷と一緒にネフィリムの心臓を止めます！」

響は握りこぶしを作って答える。

彼は口角を上げ、

「行くぞッ！」

「はいッ！」

そう言って二人は破壊し貫いた大穴に飛び込んでいく。そして響は正面からマリアを見据え、

「待ってて〜！ちよおつと言ってくるから！」

マリアの横を駆けだしていった。マリアは彼女の背中を振り返って見つめている。無重力圏も近くなつて浮遊する瓦礫を足場にしながら跳躍し、翼たちのところに着地した。そこに雷の姿はなく、クリスが居心地悪そうにそっぽを向いた。

「翼さん！クリスちゃん！」

「立花！」

「もう遅れはとりません！だから……」

「ああ！一緒に戦うぞ！」

「はい！」

そこで響は、そっぽを向いていたクリスの手の中にあるソロモンの杖の存在に気づいた。

クリスの手を両手で握り、

「やったねクリスちゃん！きつと取り戻して帰ってくると信じてた！」

「おまつ、あ、たりめえだあ！」

照れから顔が赤くなっている。

丁度その時、弦十郎から通信が届いた。

『今雷君がネフィリムと交戦しているツ！さっきの話と、解析結果からそこにフロンティアの炉心、心臓部があることが確定した！装者たちは、本部からの支援指示に従って雷君に合流せよツ！』

通信が切れ、リーダーである翼が号令をかける。

「行くぞツ！この場で稲妻を助けられるのは槍と弓、剣を携えている私達だけだツ！」

雷のもとへと三人が向かう。

それをモニターで見ながら、ジェネレータールームで直接フロンティアのコア、つまりネフィリムの心臓に指示を出す。

「人んちの庭を走り回る野良ネコめ……！フロンティアを喰らって同化したネフィリムの力を、思い知るがいいツ！」

ネフィリムと交戦していた雷が薙ぎ払うような一撃を跳躍して回避する。すると突然、ごうごうとネフィリムが音を立てて巨大化していった。

「フロンティアを取り込んで?!……ッあ?!」

不意打ちで巨大化されたために避け切ることが出来ず、まともに一撃を喰らってしまう。ギリギリで斥力フィールドを張ったため、大きなダメージを負うことはなかったが、衝撃を殺しきることが出来ずに吹き飛ばされてしまった。

「雷ッ?!」

「轟ッ!」

「ッ?!」

丁度三人の目の前で雷の体が地面をバウンドする。倒れた彼女に慌てて駆け寄るが、すぐに立ち上がり、展開したユニットから電光を迸らせながら前傾姿勢をとる。

しかし、そこで響たちの姿をみとめたのか、歯を食いしばったような必死の形相をやわらげ、

「よかった……。何とか……持った……」

嬉しそうに、心底安心したように笑った。彼女の表情と連動しているのか、同時にユニットが格納された。が、すぐに吹っ飛ばされてきた方を真剣な表情で見据え、

「来ますッ!」

その叫びと同時に、ミサイルのようなものが雷たちに襲い掛かった。四人が跳躍して回避する。そしてその爆炎の中から巨大化したネフィリムがのっそりと現れた。

翼が叫ぶ。

「あの時の、自立型完全聖遺物なのかッ?!」

間髪入れずにネフィリムが口を開き、熱塊を吐き出す。反応に遅れたクリスがまともに喰らいかけるが、電光を纏った雷が横から彼女をかっさらうことで回避に成功した。

「大丈夫?」

「すまねえ……。いにしては張り切りすぎだッ!」

「同感! さっきまでとはけた外れの出力だよッ!」

ネフィリムの体内でジェネレータの輝きが増していく。

ウエルが歓喜するように、

「喰らい尽くせ……！僕の邪魔をする何もかもを……！暴食の二つ名で呼ばれた力をお！示すんだあ！ネフィリイームツ！」

彼の絶叫が薄暗いジエネレータールームに響いた。

○○○

放心状態のマリアが、ブリッジの階段をゆつくりと下りていく。

「私では、何もできやしない……。セレナの歌を……。セレナの死を……。雷の約束を……。無駄な物にしてしまう……」

無力さから、あふれ出た涙が彼女の頬を伝った。その涙に応えるように、

「マリア姉さん……」

「っ。セレナ……？」

「マリア姉さんがやりたいことは何……？」

輝きの中に現れたマリアの妹、セレナが問う。マリアは少し戸惑いながら、

「歌で、世界を救いたい……。月の落下がもたらす災厄から、みんなを助きたい」

と、答えた。すべてはこれを解決しなければ始まらない。

セレナはマリアに近づき、彼女の手を取った。

「生まれたままの感情も、隠さないで……？」

「セレナ……」

彼女は目を閉じ、歌った。その歌は彼女たちの歌。約束の歌。自分たちを繋げる始まりの歌だ。

「りんごは浮かんだお空に……」

マリアはセレナに続くように目を閉じ、

「りんごは落っこちた地べたに……」

「星が」「生まれ」「て歌が生まれて」

世界中の人々、人類の存続を願う人々から輝き。フォニックゲインが生まれ始め、フロンティアへと集まってくる。

「ルルアメルは」「笑った」「常しえと」

世界中の願いがつながっていき、一つの合唱となる。

「星が」「キスし」「て歌が眠って」



そしてその歌のエネルギーは、宇宙空間を漂っているナスターシャのいる制御室へと流れ込んだ。彼女は車椅子を変形させ、瓦礫の中から脱出した。

「世界中のフォニックゲインが、フロンティアを経由して、ここに収束している……。これだけのフォニックゲインを照射すれば、月の遺跡を再起動させ、公転軌道の修正も可能……！」

となればすぐに行動に移さなければならない。宇宙から地上へ通信を繋げる。

『マリア！マリア！』

「マムッ?!」

大急ぎで制御盤の球体に駆け寄る。

『あなたの歌に、世界が共鳴しています！これだけフォニックゲインが高まれば、月の遺跡を稼働させるには十分です！月は私が責任を持って止めますッ！』

「ッ?!マムッ!」

ナスターシャの真意をくみ取ったマリアが叫ぶ。彼女の目に涙が浮かんできた。ナスターシャは、そんなマリアを諭すように優しく、『もう何もあなたを縛るものはありません。行きなさい、マリア……。言って私に、あなたの歌を聞かせなさい……。』

「マム……」

マリアは覚悟を決め、

「OK、マム!」

その身を翻し、

「世界最高のステージの幕を開けましょうッ!」

世界に向け、そしてナスターシャに向けて、宣言した。

## 歌を束ね、想いを重ね、奇跡を為す

装者たちによるネフィリム攻略が開始された。

響が脚部のアンカージャッキを利用して宙を跳ね、刃を携えた翼が肉薄し、クリスが弾幕を張る。雷はと言うと先ほどまでの戦闘による疲労から一時的に前衛を離れ、体力の回復を主目的としたクリスの防御を担当していた。

「あああッー！」

翼は刀を大剣に変形させて腕の切断を試みるが刃は通らず、響の拳は内部まで破壊力を浸透させることが出来ない。

「ならッー！全部のせだあッー！」

アームドギアをガトリングに変形させ、腰部装甲からマイクロミサイルを発射する。圧倒的な弾幕が生み出す爆炎がネフィリムを包み込んだ。しかし、これほどの火力を叩きこんでもネフィリムはまだまだ健在であり、油断していたクリスめがけて熱塊を口から発射した。

「ッー！」

電光を纏った雷がクリスをお姫様だっこの形で抱え、着弾予想地点から高速で離脱する。熱塊の放つ高温が彼女の長い灰色の髪を焦がした。少しの間だったが、間違いなく動きに余裕を取り戻している。

翼が叫んだ。

「轟！無事かッ?!」

が、その声に反応したのかネフィリムがその剛腕を押しつぶすように上から落とす。間一髪でそれを避ける翼だったが、地面がえぐれるほどの威力に戦慄するとともに、XDが使えない今、ケラウノスがどれだけネフィリムに対する優位性を持っていたのかを確信する。今よりも弱体化していたとはいえ、彼女が復活してから今まで交戦を続けていたのだ。そう思っても仕方がないと言えた。

「翼さんッー！」

ネフィリムの背後にいるにもかかわらず、響めがけて伸長した腕が襲い掛かる。が、それは彼女に届くことなく緑色の鎖のようなもので締め上げられ、次いでレールのようなものが地面に突き刺さった。

そしてブースターの轟音が鳴り響き、

「デースッ！」

加速された刃がギロチンのように伸びた腕を両断した。間髪入れずに今度は鋸特有の回転音が空気を裂き、ネフィリムの腹部を切り裂く。

翼と共にクリスの介抱をしていた雷が、

「しらちゃん！切ちゃん！」

と目を輝かせながら叫んだ。しゃがんでいた彼女は直ぐに立ち上がり、

「シユルシヤガナと」

「イガリマ！到着デー……うおあ?!」

「あ、雷ッ?!」

並び立つ二人に跳びついた。珍しい彼女の行動に響が目を丸くしている。二人の頬に雷が自分の頬を擦りつけながら、

「しらちゃん、切ちゃん！待ってたよ……!」

「姉さん……。大丈夫？ケガしてない？」

「え?!姉さん?!しらちゃんって……。え?!」

「大丈夫だよ！しらちゃんこそケガしてない？」

困惑している切歌をわざと放置して調は少し目線を外し、

「……大丈夫、だよ？」

「良かった。切ちゃんは？」

「あたし……。デスか?!」

抱き着かれた状態のまま自分の鼻を挿す。調は知っているが、彼女からしたら同年代のさつきまで敵だった少女がいきなり抱き着いて来て大切な親友と姉妹のような関係となっているのだ。困惑するの当然と言える。

調は切歌のほうを向き、悪戯が成功した時の少し意地の悪い笑みを浮かべて、

「どつきり大成功……。彼女があず姉さんだよ。切ちゃん」

「え……。えええっ?!つまりあたし達は、約束をしたあず姉ちゃんと刃を交えていたって事デスか?!」

「うん。そうなる」

驚き叫ぶ切歌の問いに調は淡々と答える。そして切歌はアワアワと顔を青くして、

「ご、ごめんなさいデス！あ、あの時は姉ちゃんだと分からなくて……」

「怒ってないよ」

「え……？」

一層ぎゅつと抱きしめながら雷は優しく、

「敵だったんだから相手の嫌がることをするのは当たり前。あの時はアレが最適解だったんだから仕方がないよ。それに、私も切ちゃんに色々やっちゃったしさ……。お相子つてことで」

「ね、姉ちゃん……」

最後のほうをおどけたように言った。切歌が雷の肩に顔をうずめ、そして少ししてから顔を離してネフィリムのほうに顔を向ける。

「二人とも、動ける？」

「問題なし……」

「……とはいえ、こいつを相手にするのは、結構骨が折れそうデスよ……！」

再開したうれしさからかすでに雷の体力も回復し、ユニットから稲妻を迸らせる。彼女たちの背後から勇ましい女性の声が響いた。

「だけど歌があるッ！」

声に反応して全員が顔を向ける。そこには宙を漂う岩に仁王立ちするマリアの姿があった。彼女の顔にはもう迷いは見られない。

「マリア……！」

「マリアー！」

調と切歌に続き、雷もうれしそうな笑みを浮かべて跳躍する。響や翼、クリスも彼女たちが続いた。一つの岩に装者が集結する。

「マリアさん！」

「もう迷わない……！だって……ママが命懸けで、月の落下を阻止してくれている」

「ナスターシャさん……」

マリアに続いて宙を見上げた。

そんな時、薄暗いジエネレータールームでネフィリムを遠隔操作しているウエルが狂喜乱舞しながら、

「出来損ない共が集まったところで、こちらの優位は揺るがないッ！  
焼き尽くせッ！ネフィリムッ！」

彼の咆哮に応えるようにネフィリムが口を開き、熱塊を発射しようとする。今までで最も巨大なそれは、雷たちのいる岩に向かつて一直線に放たれた。そしてその一撃は見事に直撃し、爆発が少女たちを祝ごと包み込んだ。勝利を確信したウエルは高笑いをする。が、その高笑いは美しき歌声によってくじかれる。

「Seilien Coffin Airget-Lamh Tro  
n」

巻きあがった土煙を弾き飛ばし、ギアによって衣服を分解され、一糸まとわぬ姿となったマリアと、彼女に守られるように並び立った装者たちが姿を現した。

マリアの胸元で傷つき、損傷したアガートラムのペンダントが揺れる。

（調がいる……。切歌がいる……。ママも、セレナもついている。そして……）

自身を守るように正面に立つ、傷つけたくないという思いから傷つけてしまった小柄な少女を見下ろす。視線に気づいたのか、マリアの思いに気づいたのか定かではない。だが彼女は小さく後ろを向き、優しく微笑んだ。その笑みに、思わず微笑み返す。

（みんながいるから……。これぐらいの奇跡）  
「安いものッ！」

遺跡の中にいるウエルが現象を解析する。

「装着時のエネルギーをバリアフィールドにい?!だが、そんな芸当！  
いつまでも続くものではなああいッ！」

再びネフィリムから放たれた熱塊を前にして、響と雷が動く。

「セット！ハーモニクス！」

二人の声が重なり、応えるようにケラウノスと GANG ニールの装甲

が一部展開される。

「S2CA！」

「フォニックゲインを！」

「みんなの想いを！」

「二力に変えてーッ！」

響がガントレットを一つにして拳をぶつけ、雷が稲妻を右足に集中させて回し蹴りを叩きこむ。二人の一撃を受けた熱塊は爆散した。

S2CA・ツインブラスター。それは、響の絶唱特性である『他者と手をつなぎ合う』と、雷の『感情の伝播』を最大限に生かした絶唱の二重奏。

本来であれば響の特性上、手を繋がなければ発動不可能なS2CAだが、雷の想いを繋ぐ力によって手を繋がなくとも心を重ねることで発動が可能となる。

さらに二つの絶唱を束ねるだけでなく、想いの力が強ければ強いほど出力が上昇するため、理論上は無限の威力を誇る。さらに想いの伝播は手をつないだ、心を重ねた全員にかかり、それを束ねることによって威力は上昇する。

それを証明するかのように翼は、

「ひかれあう音色に、理由なんていらない」

「っ」

調がおおずとその手を取る。

クリスは少し自分に呆れながら、

「アタシも、つける薬が無いな……」

「それはお互い様デスよ」

切歌が同調するようにクリスの手を取った。

最後は二人だ。

「調ちゃん！」

「切ちゃん！」

雷と響はお互いの手を握り、雷は切歌の手を、響は調の手を取る。

「姉さんの信じるあなたのやっつてること、偽善でないと信じた。だから近くで私に見せて。あなたの言う人助けを……私達に……」

「うん」

ためらいなく響の頷きに笑顔で調が返す。

歌と想いが重なり響き合い、その力を高めていく。

(つないだ手だけが紡ぐもの、重ねた心だけが紡ぐもの……)

この光景を前にしてもまだ勝ちを確信しているウエルは、

「絶唱七人分……。たかだか七人ぼっちで、すっかりその気かあああツ?!」

彼はさらなる命令を下し、その命令に従ってネフィリムの全身から雷たちに向かって赤色黎明砲が照射される。

その威力は強力かつ絶大。圧倒的な破壊力にギアが耐えきれず、分解されていく。だが、誰一人として折れるものはいない。この心の強さが、想いの強さが、同じ想いを持つ全世界の人々の心を繋ぐ。

(七人じゃない……!)

(私達が束ね、重ねる歌は……!)

すべての歌が、心が、……一つとなる。

「七十億のツ！絶唱おとおおッ！」

束ね重なったフォニックゲインは七人の体を包み込み、シンフォギアの限定解除形態『エクストライブ』を発現させた。

光の翼と純白のギアを纏い、七人の戦姫は歌と想いと希望。その全てを背に受けて、

「響きあうみんなの歌声がくれたッ！」

「シンフォギアだあああッ！……」

七つの光と歌が宙を裂き、ネフィリムを跡形もなく貫く。束ね重ねた旋律の嵐が、天へと昇っていった。

## 宝物庫、開門

七十億の絶唱を受けて粉々に砕け散ったネフィリムを見て、ウエルが膝をついた。

「何……だと……?」

「ウエル博士!」

「はっ?!」

薄暗いジエネレータールームに弦十郎と緒川がやって来た。ここよりほかに逃げ場はなく、お縄に着く以外に道はない。

彼らは歩を進めながら、ウエルを追い詰めていく。

「お前の手に世界は大きすぎたようだな!」

手段を選んでいる暇はないウエルは、弦十郎たちを排除すべくネフィリムと同じ力を持つ左腕を制御盤に向ける。だがそれを見逃すような彼らではない。緒川は拳銃を振りぬくように発砲し、放たれた弾丸の軌道は弧を描くようにして伸びた左腕の影に突き刺さる。

『影縫い』

影が固定されたことによつて左腕も固定され、どんなに力を入れようともびくともしない。

「あなたの好きにはさせません!」

「奇跡が一生懸命の報酬なら……!」

固定された左腕に力を籠める。そのあまりの力に血管が浮き上がっては破裂し、計り知れない圧力によつて目から血の涙が流れている。

「僕にこそおおッ!」

尋常ではない欲望と歪み切った信念で緒川の影縫いを突破し、遂に制御盤に触れる。触れた先から幾何学模様が流れていく。

弦十郎は思わず、

「何をしたッ?!」

「ただ一言……。ネフィリムの心臓を切り離せと命じただけえッ……!」

「なッ?!」



背後のモニターでは、装者たちによって粉碎されたはずのネフィリムの心臓がまがましい輝きを放ち始めた。

「こちらの制御から離れたネフィリムの心臓はフロンティアの船体を喰らいッ！糧として暴走を開始する！そこから放たれるエネルギーは……！一兆度だああッ！」

ウエルは両手を広げ、高笑いを響かせる。

「僕が英雄になれない世界なんて、蒸発してしまえば……うわああッ?!」

いつの間にか目の前に来ていた弦十郎の拳によって、制御盤が粉々に破壊される。命令を出している物を破壊すれば暴走は止まると考えたが、暴走は止まらない。もう完全に切り離されていた。弦十郎は悔し気に歯を食いしばる。

「壊してどうにかなる状況じゃ、なきそうですね……」

遺跡の外では装者たちの目の前で心臓が更に輝きはじめ、ジェネレーターの残骸を強引に再建しながら暴走によって発生した余剰エネルギーを放出していた。だんだんとその鼓動は大きくなっていくが、臨界には達していないようだ。

リーダー格である翼が弦十郎からの指示を受ける。

「分かりました。臨界に達する前に対処します……っ?!」

まだ臨界には程遠い、誰もがそう思っていた。しかし、ここで予想外の出来事が発生してしまう。ネフィリムの鼓動が、フォニックゲインの集積していた遺跡の先端に到達してしまったのだ。

ウエルは電子手錠と足枷をはめられ、緒川の操縦するジープで二課に犯罪者として連行されていた。

彼はうなだれながら、

「確保だなんて悠長なことを……。僕を殺せば簡単なこと……ハッ?!」

彼らの頭上を影が覆う。ネフィリムの暴走によって遺跡の一部が吹き飛ばされ、それが巨大な落石となって隕石のように押しつぶそうとしていた。普通ならここでブレーキを掛けたりハンドルを切ったりするのだが、緒川は気にせずアクセルを踏み続ける。なぜならば

……、

「あああッー！」

弦十郎の拳が彼の何十倍の質量はあろう落石をたやすく粉碎する。そして、宣言した。

「殺しはしない……。お前を、世界を滅ぼした悪魔にも……。理想に殉じた英雄にもさせはしない……。どこにでもいる、ただの人間として裁いてやるッー！」

その言葉は、英雄を夢と見るウエルにとって何よりも聞きたくない言葉だった。彼は狂乱したように暴れ、喚きたてる。

「畜生ッ！僕を殺せえッ！英雄にしてくれえッ！英雄にしてくれよおおオオオッ！」

彼の嘆きは聞き入れられることなく、潜水艦に收容された。

七十億の絶唱のエネルギーを吸収し、遂に枷を全て解き放たれたネフィルムが目を覚ます。遺跡を破壊し、熱で抉り溶かしながら大熱量によって発生した暴風と共に姿を現した。

あまりの衝撃にエクストライブとなった装者たちも防御に専念せざるを得ない。

ウエルを独房に叩きこんだ弦十郎は直ぐに指令室へとやって来た。

そして開口一番に、

「藤堯！出番だ！」

「忙しすぎですよー！」

「ぼやかさないでー！」

オペレーター陣の迅速な行動と計算によって、正確に位置情報をプログラミングされたミサイルが潜水艦の後方から打ち上げられる。それは潜水艦に周囲に寸分たがわず着弾し、爆発。フロンティアの端のほうだったことも幸いし、下へ、即ち海へと落下する。

ここからは先は、装者たちの戦いだ。

暴走したネフィルムはフロンティアの根幹を全て取り込み、禍々しく巨大化していく。

「あれを見ろ……。あれが、指令の言っていた……。！」

段々と形を取り戻していく。まるで、胎児が形を成していくよう

だった。

そして完全に形を成したそれは、地球を背に、立ちほだかるようにして装者たちの前に再誕した。

「再生する……ネフィリムの心臓……!」

真つ先に調と切歌が動いた。

調の腕部装甲と脚部装甲、ツインテールのバインダーがパージされ、変形し、一つの巨大なロボットとなってそれに乗り込む。

『終Ω式・デイストピア』

切歌は三本の刃となった鎌を取り出し、高速回転させながら突撃を掛けた。

『終虐・Ne破aア乱怒』

鎌と鋸、二人の息の合った攻撃がネフィリムにダメージを与える……はずだった。

ネフィリムの特性はフロンティアを取り込んだことで更に強化され、聖遺物そのものだけでなくそのエネルギーまでも喰らうようになってしまった。彼女たちの攻撃は一切通らず、逆にダメージを負ってしまう。

「聖遺物どころか、そのエネルギーまでも喰らっているのかツ?!」

「しらちゃん!切ちゃん!」

雷が電光を迸らせながらエネルギーを吸われ、ギアにも少くないダメージを負ってしまった二人を回収する。

先行した三人を後から追いかける。

翼が焦りながらも冷静に、

「臨界に達したら、地上は……!」

「蒸発しちゃうツ!」

「バビロニアア……フルオープンだあツ!」

翼と響を追い抜き、クリスがソロモンの杖を構えて緑色の光線を照射した。フルオープンの宣言に違わず、これまでのどれよりも大きな門を開く。だが、エネルギーが足りないのか、完全に開き切っていない。

「バビロニアの宝物庫?!」

「エクストライブの出力で、ソロモンの杖を機能拡張したのかッ?!」  
「んぐううッ!」

それでもかなりの精神力と集中力を使うのだろう。クリスの口からうめき声が聞こえてくる。

装者たちとネフィリムは地球の引力に惹かれるようにゆつくりと降下しながら、

「ゲートの向こう、バビロニアの宝物庫にネフィリムを格納できればッ!」

「臨界を超えたエネルギーから地球を守れるうえに、ノイズの群れを殲滅できるッ!」

渾身の力を込めて、クリスが叫んだ。

「人を殺すだけじゃないってえッ! やって見せろよ! ソロモオオンッ!」

彼女の願いにこたえるように出力が上がり、完全に門が開き切る。だが、それに足掻くようにネフィリムが剛腕をふるった。

「避けるッ! 雪音ッ!」

翼が叫ぶが一寸遅く、クリスはもろに直撃を受けてしまい、杖を手放してしまふ。

「ぜいッ!」

『超電磁アンカー』

宇宙の彼方へと弾き飛ばされそうになっていた杖を雷が放ったアンカーがとらえ、

「マリア!」

巻き取って回収している間は間に合わないという判断から腕を振るってマリアへと投げ渡す。

雷から杖を受け取ったマリアはそれを正面に構え、

「明日をおおッ!」

叫びと共に放った光線は開いた門の大きさをさらに拡張する。

ネフィリムが鳴き声と共に腕を伸ばす。それを距離をとって避けるマリアだったが、先端から伸びた触手からめとられ、引きずり込まれてしまふ。

「「マリア?!」」

「格納後、私が内部よりゲートを閉じるッ！ネフィリムは私がッ！」  
切歌と調が叫ぶ。

「自分を犠牲にする気デスか?!」

「マリアアッ！」

マリアは引きずり込まれながら、目を閉じ、覚悟を決める。

「こんなことで、私の罪が償えるはずがない……。だけど、全ての命は私が守って見せる……！」

だが少女たちの絆は、そんな簡単に断ち切れるほど安っぽいものではない。横から声が聞こえてきた。思わず目を開け、声のした方を見る。

「せつかく再会できたのに、すぐいなくなるとか許さないよ？マリア」  
「それじゃ、マリアさんの命は、私達が守って見せますね」

頬を軽く膨らませた雷と、優しい笑みを浮かべた響がマリアに寄り添って飛んでいた。二人だけではない。調に切歌は言わずもがな、翼とクリスまでもが彼女の周りに集まってきた。全員が全員、口角を軽く上げ、やる気満々の表情を浮かべている。

「あなた達……」

「英雄でない私に、世界なんて守れやしない」

「どれだけ頑張っても手の届く範囲だけしか守れない」

「でも、私達。私達は……」

雷と響の声が重なる。

「一人じゃないんだ……！」

マリアが優しく微笑みを浮かべ、ネフィリムと共にバビロニアの宝物庫へと突入する。そして門が揺らぎ始め、完全に格納される。その光景を見て、未来が叫んだ。

「響いーッ！雷あーッ！」

「衝撃に備えてッ！」

友里の声が響き、それと同時に潜水艦の艦橋部分が射出される。宇宙を漂うフロンティアの制御室ではナスターシヤが、

「フォニックゲインの照射継続………つ?!」

血を吐き出してしまふ。彼女の体に限界が近づいてきていた。それでも、彼女は諦めることはない。娘のように想う少女たちと、彼女の友が遺した少女の約束を守るために。幼き日の、たった一つの我が儘を叶えるために……。

「月遺跡……、バラルの呪詛……。管制装置の再起動を確認……。！月軌道、アジャスト開始……。！」

フォニックゲインの漂う、今は遠き青の星を見上げる。

「星が……。音楽となつて……。！」

自らの戦いを完遂し、少女たちの為した奇跡を満足げに見上げながらナスターシャは逝つた。

戦いは最終局面へと突入する。

## 歌が紡ぐもの

宝物庫の中に飛び込んだ雷たちは中に巢食うノイズの群れを全滅させるため、各個で攻撃を続けていた。また、ネフィリムに拘束されたマリアの救出を妨害されるのを防ぐ目的もある。

槍の聖遺物であるガングニールを纏う響が右の腕部バンカーユニットを変形させ、槍の先端部分のようにした手甲を構築し、

「うおおおおッ！」

ブースターを点火して加速。

「行つけえええッ！」

文字通り一番槍となって直線上に存在するノイズのサイズを問わず刺し貫いていく。

翼は手に持つ刃をふるって一刀に切り伏せ、巨大なノイズには脚部のブレードを巨大化させてコマのように回転し、みじん切りにする。

クリスはアームドギアをさらに巨大化させ、自身の周囲を覆うように砲門を形成。前方に存在する無数のノイズに向けて一斉に発射し、爆散させていく。

雷は右のユニットに稲妻を収束させ、それによって形作られた八尾の龍を召喚してノイズの群れを喰い破らせる。彼女自身は目にも止まらぬ速さでネフィリムの放出する触手を切歌と共に誘導し、時に弾き飛ばしながら調がマリアを救出する時間を稼ぐ。

だが、聖遺物やそのエネルギーを捕食するネフィリムの攻撃はかすただけでも致命傷になりうる。故に彼女たちは姉妹のように息の合ったコンビネーションでお互いを守りながら戦っているのだが、流星にその集中力にも限界が来ていた。

二人が叫ぶ。

「しらちゃん！後どれぐらい?!」

「調！まだデスか?!」

見上げた先には調がロボットに変形させたアームドギアで触手を切り裂こうとしていた。無限軌道によって回転する刃は切歌や翼のような振って斬るのではなく、押し当てることで切断する。よって限

界まで押し当て続けることでアームドギアは損壊したものの、マリアを救出することに成功する。

「マリア……!」

「一振りの杖では、これだけの数を……制御が追いつかない……!」

二人のもとに雷と切歌が集まる。ネフィリムに超電磁の竜巻を叩きこんで動きを封じ込めながら雷が口を開いた。

「制御なんてしなくていい!門を開けるんだッ!」

「マリアさんは、杖でもう一度宝物庫を開くことに集中してくださいッ!」

「何ッ?!」

響が続く。マリアは意味が分からず、困惑を隠せない。

「外から開けられるのならッ!中から開けることだって出来るはずだッ!」

「鍵なんだよ!そいつはッ!」

翼が切り裂きながら、クリスが砲撃で吹き飛ばしながら叫ぶ。彼女たちの意図を理解したマリアは、

「セレナああッ!」

今ここに居ない、今の自分を残してくれた最愛の妹の名を叫びながら今までで最も大出力の光線を放ち、宝物庫を内側から開門する。

「脱出デス!」

「ネフィリムが飛び出す前に!」

「先に行つて!ギリギリまで止めておくからッ……!」

雷は額に汗を浮かべ、ネフィリムを拘束しながら促す。それに領き、動き出したマリアの後をついていくようにして調と切歌が飛翔する。

翼はデッドウェイトとなる脚部ブレードをパージし、そばで砲撃を続けているクリスに、

「行くぞ!雪音ッ!」

「おおっ!」

クリスもアームドギアをパージし、それぞれを砲弾として発射。その結果を見届けてから、翼に追隨する。



「不味いッ……！」

自身を拘束している超電磁の竜巻とて聖遺物。ネフィリムはそのエネルギーを喰らって無力化し、最も近くにいる雷を喰らうべくその手をふるう。

「雷ッ！」

「ごめん響……！逃がしちゃった……！」

そんなことはさせないと響が彼女に手を伸ばして離脱し、みんなと合流すべく飛ぶがネフィリムは膨大なエネルギーを持つ彼女たちを逃がすまいと門の前に立ちをはだかる。

七人は出口を前にしてたたらを踏み、

「迂回路は無しか……！」

「ならば、行く道は一つッ！」

「手を繋ごう！」

翼とクリス、そして響と雷が手を繋ぎ、調と切歌が手を繋ぐ。この出来事を中心人物であるマリアと両方に関係を持つ雷を挟んで並び立った。

「マリア」

「マリア……」

「マリアさん！」

調と雷が手を指しだす。同時にマリアは胸の宝石から両刃の剣を抜き放ち、二人と手を繋いで宣言した。

「この手、簡単には離さないッ！」

雷を中心に七人が並ぶ。そして手をつきあげ、

「二二最速で最短で！真っ直ぐに！」

刃が粒子へと変換され、装者たちを銀の輝きが包み込む。そして飛翔し、ケラウノス、ガングニール、そしてアガートラムの装甲が彼女たちから分離。ガングニールは金の右腕を、アガートラムは銀の左腕を形作り、両の拳を彼女たちの進行方向に組み構え、

「二二直線に——ッ！」

回転を加えながら突き進む。

彼女たちを捉えるためにネフィリムは触手を伸ばそうとするが、分

離されたケラウノスが稲妻そのものとなる。それは竜巻のように回転しながら装者たちの行く手を阻むネフィルムを拘束し、何物にも妨げられない一直線に行く道を作り出した。

七人の声と想いが重なり、正面から激突する。

『Vitalization』

束ね重なった圧倒的なエネルギーを持つその一撃はネフィルムをたやすく貫通し、勢い余って門の外へと叩きつけられる。杖は地面に突き刺さり、装者たちはあまりの衝撃に立ち上がる事が出来ない。「ツ……！杖が……すぐにゲートを閉じなければ……まもなく、ネフィルムの爆発がツ……！」

マリアはダメージを必死にこらえながら手を伸ばそうとするが、体は限界を迎えていた。それは全員が同じだ。だが、それでも、

「まだ……だ……」

「心強い仲間は、他にもツ……」

「仲間……？」

まだ仲間はある。そういう翼とクリスにマリアは思わず問いかける。その問いに雷と響が答えた。

「私達の……」

「親友だよ……」

二人の目線の先には砂浜を全力で走る未来の姿があった。彼女は砂に足を足られながらも走り続ける。

（ギアだけが戦う力じゃないって響が教えてくれた！私だって……戦うんだツ！）

彼女の手が杖に到達する。未来は一気にそれを引き抜き、全身の力を込めて門に向けて投擲し、叫んだ。

「お願いッ！閉じてー！」

エネルギーを吸収できなくなったネフィルムの体から光が漏れ始める。刻一刻と臨界へのタイムリミットが近づいてきていた。

「もう二人が……誰もが戦わなくていいような……世界に——ッ！」

ソロモンの杖が輝きを放ちながら加速し、ネフィルムの光があふれ出る寸前に飛び込み、門を閉じる。大爆発が起きたのが異空間であり

ながら、その膨大なエネルギーは現実世界にも視覚で確認できるほどだった。

未来は安堵に膝をついて息を吐き、雷と響は寝転がって目を閉じた。

〇〇〇

時間は流れ、すでに日は傾き、夕暮れ時となっていた。この事件を收拾するためにやって来たヘリのローター音が響く。

ウエルは銃を持った軍人に連行されながら、

「間違っている……。英雄を必要としない世界なんて……」

彼はまだ自分のことを英雄と思い込んでいるようだ。

緒川は事件の発生による影響を確認し、弦十郎に報告する。

「月の軌道は、正常値へと近づきつつあります。ですが、ナスターシヤ教授との連絡は……」

彼の報告を聞いて察した弦十郎は少女たちに目を向ける。

マリアや調、切歌に加えて過去に親しくしてもらっていた雷がオレンジ色に染まった空を見上げる。マリアの胸元のアガートラムは半壊し、文字通り半分だけとなっていた。

（マムが未来を繋げてくれた……。ありがとう……。お母さん……）」

「マリアさん……」

「っ」

後ろから響に声をかけられ、振り返る。すると彼女はガングニールのペンダントを差し出していた。マリアは少しだけ優しさと悲しきが入り混じった表情を浮かべ、

「ガングニールは君にこそふさわしい」

それを聞いて響は黙ってペンダントを握りしめる。そして再びマリアは月を見上げ、

「だが、月の遺跡は再起動させてしまった……」

「バラルの呪詛か……」

「人類の相互理解は、また遠のいたってわけかッ……」

クリスが悔しそうに言う。

「へいき、へっちやらです」

だが、沈んだ空気を響の明るい声が吹き飛ばした。思わずマリヤ達が目を丸くする。

「だってこの世界には、歌があるんですよ！」

「響……」

「そう言うと思った！」

未来は胸に手を当て、雷は楽しそうに笑い、翼とクリスはお互いに笑みを浮かべる。そして響は満面の笑顔を浮かべた。

切歌は反芻するように、

「歌……デスカ……」

「いつか人は繋がれる……。だけどそれは、どこかの場所でも、いつかの未来でもない。確かに、伝えたから」

「うん」

響は頷く。横からマリヤが声をかけた。

「立花響。君に出会えてよかった」

二人はお互いに見つめ合う。そして今度は雷のほうを向き、

「雷、元気で……」

「もう、そうじゃないでしょ？マリヤ……またね」  
「っ」

少しだけ頬を膨らませた後、笑顔を浮かべて言った。雷は再開を確信していた。確証はない、それでもマリヤは口に出したくなった。約束を叶えるために。また会うために。

「ああ。……またね」

そう言って彼女たちは緒川に連れられてへりに乗り込んでいった。

○○○

暫くしてフロンティア事変のほとぼりが冷めたころ。

雷はF・I・S.のスパイ疑惑によって遅れる形でマリヤの後を置いていくこととなったため、彼女の姿はない。このことに響や未来だけでなく翼やクリスも激しくうろたえたが、弦十郎たちが全力を尽くすという言葉に安堵し、今では万全とは言えないが落ち着きを取り戻していた。

響は未来と共に登校しながら翼とクリスの姿をみとめると、手を振

りながら小走りで近づいていった。

「翼さーん！クリスマスちゃん！」

未来が彼女の後をついていく。翼はどこか残念そうな表情を浮かべていた。逆にクリスマスは顔を赤くしながらそっぽを向く。

「聞いてくれ立花。あれ以来、雪音は私の事を先輩と呼んでくれないのだ」

「だーからー！」

顔を赤くしながらみつぐが、響がニヤニヤとしながら近づき、

「なにになにく。クリスマスちゃんてば翼さんの事先輩って先輩って呼んでるのお？」

「ちよつと響ったらあ……」

そんな彼女の物言いにクリスマスは眉を引く突かせながら、

「いい機会だから教えてやる。アタシはお前より年上で！先輩だつてことをー！」

未来と翼はそろつてため息をつき、二人を引き離す。未だクリスマスは「もつてけダブルだあ！」などと口走つていたが、

「二人ともそのくらいにしておけ……。傷もまだ言えてないというのに」

「ねえ響……。体、平気？おかしくない？」

心配そうに眉を顰める未来の前に回って彼女を抱きしめる。

「心配性だなあ未来は。私を蝕む聖遺物は、あのとききれいさっぱり消えたんだつて」

「響……」

「でもね……。胸のガングニールはなくなったけれど、奏さんから託された歌は、絶対に無くしたりしないよ」

翼が嬉しそうに笑い、クリスマスが微笑む。

「それに、それは私だけじゃない……」

そして響は太陽に手を伸ばし、まるでつかむように握って胸に当てる。

「きつとそれは、誰の胸にもある、歌なんだ……！」

響の胸に、星が音楽となったあの日が蘇る。そんな時、響の電話に

メールが届いた。

「誰だろ……?」

そう言ってアプリを開く。そこにかかれていた名前は……。

「……雷からだ!」

「ええ?!」

「どうした?!」

「なんて書いてんだ?!」

「ちよっ?!ちよつと待って……」

響の声に全員が反応する。いくら落ち着いていったと言つてもどうなるか不安だったのは皆同じだったようだ。

メールには仲のよさそうな四人の写真と共に、

『私もマリアもしらちゃんも切ちゃんもみんな無罪!いろいろな手続きとかしたらすぐに帰るから!』……だつて」

響が内容を読み上げた瞬間、自然と笑いがこぼれた。

「まったく、こっちの気も知らないで」

「帰ってきたらお灸をすえないとな!」

「心配させてえ……もう……」

響も笑いながら空を見上げる。同じ空の下、別の場所で、雷が同じように空を見上げていた。

## 独房の中で

フロンティア事変に関する裁判が米国の「世界中を混乱に陥れたのだから、日本国内ではなく国際的にせねばならない」という―自らの腹のうちで起きたことを隠滅したい意志が見え透いた―半ば強引な意見によつて、マリア達は国際裁判所へと移動することとなった。

彼女たちの間に重い空気が満ちる。

それはほぼ死刑が確定しているからではない。先ほど新しく独房の中へと放り込まれた『関係者』によつて引き起こされていた。

「……」

「……」

「……」一つ、いいかしら?」

長い沈黙に耐えきれなくなったマリアが小さく手を上げて口を開く。口元がひくひくと動いている。

「……何?」

新しくやつてきた少女がこれまた微妙な表情で先を促す。

「何で雷がここに居るの……?」またね」が、あまりにも早すぎやしないかしら」

調と切歌もこくこくと頷く。因みにマリア達が独房に入れられて直ぐ、五分もたたないうちに雷はやつて来ていたのだ。

雷は頬を掻きながら、

「言わないでよ。マリアの国際全裸放送並みに恥ずかしいんだから……」

「それは禁句よ。……で、何でここに居るのよ」

羞恥に顔を赤めながら膝にうずめる。調と切歌が視線を向ける中、雷は唇を突き出しながら、

「私の所属……」

「姉ちゃんのデスか……?」

雷の所属が何か関係しているのか……?彼女以外の三人がそろつて首をひねる。そして一番最初に調がはつと何か思い出したようだ。プルプルと小刻みに震えながら壊れたロボットのよう雷のほうを

向き、

「一応、元F・I・S……」

「あ……」

「そうなのよ……」

両手で顔を覆う。

フィーネにしっぱを掴まれないように両親によって完璧に削除されているのだが、彼らの親友であったナスターシャの個人端末には彼女の経歴が乗っていたのだ。

ヘリキャリアの中に残されたソレを、マリア達は母親代わりの遺品としてヘリに乗る前に目を通していた。そこには厳密に言えば異なるため一応ではあるものの、しつかりとF・I・S・所属の聖遺物適合者として幼い雷の情報が記載されていたのだ。

青い顔をしている三人に向けて雷が、

「長い間向こうにいなかったけど、関係性を持っていたことは知られてるからスパイ容疑を掛けられてるの……」

「え、でも私達戦ったわよね……?」

恐らくステージでの戦いのことを言っているのだろう。

マリアが少々納得がいかないという顔をしながら言うが、雷は冷静に、

「完全にスパイじゃなくて敵対していますよっていう見せかけだと思われてる」

「それ以外にも……」

「廃病院の時には戦ってないし、あったとしてもほんの少しだけ。学祭の時は激高したように見せかけて接触しての情報交換。私の問題で戦えなかったけど米国さんは対抗戦力を低下させながら情報を渡してたって思いこんでる……というかそうしたいらしい」

途中のほうであまりにも強引な解釈に呆れてきたのか目を泳がせていた。米国からすれば不都合な情報を持っているのが日本の聖遺物所有組織にいるというのが気に食わないのだろう。

「うわあ……」

「こつちがうわあだよ」



調の米国に対する引き気味の反応に、その被害者である雷が同調する。そんな彼女が自虐的な笑みを浮かべながら、

「さて、そんなこんなで再会したわけですが……」

「こんな再会の仕方、予想だにしてなかったデスよ……」

「やめてよ切ちゃん。私が一番そう思ってるんだから……」

世界を救ったのに何とやら、あの凛々しい少女たちの姿は影も形もない。というか雷の中での「またね」はトラウマになりつつあった。なんともパツとしないトラウマの増え方である。いや、トラウマの増え方にパツとしたも何もないのだが。

しかしいつまでも沈んでいるわけにはいかない。マリアがパンツと手を叩き、空気を変える。

「とりあえず今はいいことを考えましょう！雷、完全に冤罪なわけだけど何とかなるの？」

「こつちに来る前に弦十郎さん。……ああ、あのガタイのいい髪の毛ツンツンの男の人ね。が、全力を尽くすって言ってたから大丈夫だと思っ」

「……よかった。とりあえず姉さんは大丈夫なんだね」

調の言葉に首を傾げ、

「いや、あの人の全力の対象は私達全員の事だと思っよ？」

「……ほんとデスか？」

「あの人なら信じれるよ、切ちゃん」

調は弦十郎の人となりを知っていたので雷の言葉に同意する。切歌とマリアも疑ってはいたが、雷と調が信じていると言ったので追求することはせず、自分たちも信じてみることにした。

「まあ、国際裁判所への移送は三日後デスし、今日は寝るまでどうするデスか？」

「いいかな……？」

「どうしたの？」

雷がおずおずと手を上げる。彼女の言いたいことは全員がすぐに理解していた。

「セレナの事……聞かせてほしい……」

「そう言うと思ったわ」

マリアはその場にいなかった雷にもわかりやすいように伝える。彼女とも仲が良く、喧嘩した時には一緒に仲介役になったほか、意外とアグレッシブな彼女に振り回されたり、逆に振り回したりしていた。彼女の顛末を聞いて雷は涙を流すことなく天井を向き、

「そつか……みんなを守ったんだ……。セレナらしいや」

そうこぼして小さく笑った。

〇〇〇

雷たちは一緒に過ごした思い出話や来れなくなってからの事、フィーネとの戦いなど様々なことを話した。そうしていると、時計の針は天辺で重なっていた。流星にいい時間になったと判断したマリアは、

「さ、そろそろ寝ましょう」

「え〜早いデスよ〜」

「ぼやかないの」

ぶつくさと文句を言う切歌を調がたしなめる。そんな彼女たちを見てふと懐かしくなった雷は、

「ねえ、昔みたいに床で寝ようよ」

といった。独房とは言えベッドは用意されているのだが、F. I. S. 時代の時のようにみんなで固まって床で寝ようと提案する。

全員がそれに賛成し、

「場所はどうするデスか？」

「昔のままでもいいんじゃないかな？」

「……そうしましょうか」

昔の寝方。雷の両脇を調と切歌がはさみ、切歌の隣にマリアが布団をもって寝転がった。因みにセレナは調の隣だ。F. I. S. はアメリカにあるため普段はベッドなのだが、はじめて雷が来た時に彼女の要望とマリア達の興味からこの寝方になってから、雷が居る時にはこういう寝方になるといつの間にか決まっていたのだ。

暫くの間おしゃべりは止まなかったが、昼間の戦いの疲れから全員がいつも間にか深い眠りへと落ちていった。

朝、雷がいつも通りの寝方で調の腹に頭を押し付けている光景にマリア達が少々驚くという光景と、昔のように寝ぐせを四人で笑い合っているという気分のいい朝を迎えた。

三日後の国際裁判所への移送日に、一人の黒服が独房にやって来た。どうも二課の関係者ではないようだが、政府筋のようだ。彼が言うには、二課と事務次官の尽力によって全員の無罪が確定したのだという。

雷は彼に交渉して一時間だけ携帯の使用許可を出してもらい、全員の寝癖が治ったのを確認してから集合写真を撮る。そしてそろそろ登校時間になったのを見計らって響にメールを送った。

「送信つと……。これでよし」

「今度からは姉さんの後輩としてリディアンに通うんだよね？ 私達」

「手続きとかまだいろいろあるけど、そうなるね。……不安？」

「少し、不安デス……」

これから起きる未知の体験に切歌の言葉は尻すぼみに弱くなる。

だが、雷は不安そうな彼女たちに笑顔を向けて、

「大丈夫だよ。私や響、未来、翼さんやクリスが二人の事を支えてくれるよ」

「学校のこととは無理だけど、それ以外の事なら私が何とかするわ」

「マリアもこう言ってるしね！」

二人の表情が明るくなったのをみとめ、雷は太陽の輝く空を見上げた。

## G X 編

### 新たなる戦いの影

月から帰還するために大気圏に突入したシャトルだったが、ブースターを損傷し、コントロールを失ったことで適切な突入角を維持することが出来ず、空の藻屑になろうとしていた。

彼らと彼らの持ち帰ってきたものを救出すべく、二課が全力で動き始める。

解析を続ける藤堯が墜落予想地点を伝える。

「現在の墜落予想地点、ウランバートル周辺。人口密集地です！」

「安保理からの回答はまだか！」

弦十郎の問いに友里が素早く、

「外務省、内閣府を通じて再三打診していますが、未だありません！」  
表情は冷静そのものだが、その声には焦りが含まれていた。

モニターに通常ではありえない角度で大気圏に突入するシャトルの姿が映し出される。断熱圧縮された空気が船体を加熱し、限界が近づいてきているのが目に見えて分かる。

藤堯が、

「まさか、見捨てるつもりでは……！」

三度の打診をも黙殺されたのだ。そう思うのも当然と言えた。

「ラグランジュ点に漂うフロンティアの一区画から、国連調査団が回収した異端技術と、ナスターシャ教授の遺体……！」

「それが、帰還時のシステムトラブルなんて……！」

緒川がそう口にした直後、友里のモニターに安保理からのメッセージが送信された。彼女は振り返り、

「承認下りました！安保理の規定範囲で、我々の国外活動。行けます！」

報告を聞いた弦十郎は拳を手のひらに打ち付け、宣言した。

「よおおしッ！お役所仕事に見せてやれ！藤堯あ！」

「軌道計算なんてとつくにですよ！」

高速でキーボードをタイプしながら弦十郎に言われる前後は承認が下りるのを待っただけだったと言外に含ませながら最終段階に入る。

彼の管制でミサイルが発射され、海中から空中へ、そして空へと飛翔した。

そのころ、シャトルでは二人の宇宙飛行士が全力で軌道修正に当たっていた。しかし、すでに大気圏に突入したうえ、その損傷が船体の外であることから復旧は絶望的と言えた。

しかし、それでも彼らは諦めない。これは宇宙飛行士としての意地とプライドだ。

「システムの再チェック！軌道を修正し、せめて人のいないところに……！」

「そんなの分かってますよッ！」

経験を重ねたパイロットは修正を試みるが、いくら舵を切ってもシャトルは動かない。若いパイロットは焦りから言葉尻が強くなる。ここで更にエンジンが爆発したことで最悪の結末が彼らの脳裏に過る。しかも、背後からミサイルが迫っていることがその予想を強くした。

「ミサイル……?!俺たちを撃墜するために……?!」

「致し方なしか……！」

年上のパイロットが覚悟を決めるが、

『へいき、へっちゃらですー!』

突然聞こえた少女の声に目を見開く。

彼らの驚きをよそに、少女は続ける。

『だから、生きるのを諦めないで!』

ミサイルの後部が切り離され、外装がパージされた。そしてそこからシンフォギアを纏い、歌った響、翼、クリスの三人が星の海へと飛び出して行く。

クリスが大型ロケットを二本展開し、翼、続いて響がこれに飛び乗る。そしてミサイルを点火し、クリスも新たに生み出して飛び乗ることでシャトルとの距離を詰めていく。

翼はサーフボードの様に乗りながら、

「まるで、雪音のようなじゃや馬っぷり！」

「だったら乗りこなしてくださいよ。センパイ」

クリスが仁王立ちしながら言葉を返す。

三人はシャトルへと飛び乗り、船体を支えながらブースターを点火することで減速、軌道修正を敢行する。

二課ではその光景をモニターに捉えていた。

「装者取り付きました！減速を確認！」

「墜落地点再計測！依然、カラコルム山溪への激突コースにあります！」

独房のモニターで囚人服を着たマリアたち元F・I・S所属メンバーがナスターシャを乗せたシャトルの安否を見守る。雷も彼女たちの中に含まれていた。

「ママを……」

「お願いするデス……」

調と切歌の二人が祈るように言い、雷が心配そうな彼女たちを落ちて着かせるために後ろから抱きしめる。マリアが静かに目を瞑った。

シャトルに取り付いた装者たちは三者三様の方法で減速をかける。クリスがミサイルをブースター代わりにし、響がアンカージャッキで体を固定、バンカーユニットを展開。翼は剣を船体に突き刺し、脚部ブレードを巨大化させてスラスターに火を付けた。

彼女たちによって大気圏は無事に突破することは出来たが、カラコルムを超えるには高さが圧倒的に足りない。

緒川が、

「何とか船内に飛び込んで、操縦士だけでも……！」

彼の声を聞いた調は、

「それじゃママが……」

「帰れないじゃないデスカ！」

悔しさにマリアが目を背けるが、モニターから目を離さず、正面から見つめ続けている雷が迷いのない声色で口を開いた。

「このくらいじゃ諦めない……。それでしょ？」

『よくわかってるじゃねえか!』

クリスからの通信に雷は不敵に笑い、マリアは驚きに目を見開いた。彼女の言葉に翼たちが続く。

「人命と等しく、人の尊厳は守らなければならないもの」

「ナスターシャ教授が世界をも持つてくれたんですよ?なのに、帰ってこれないなんておかしいです!」

切歌と調は涙を目のため、彼女たちを抱く雷は嬉しそうに口角を上げる。

「何処までも……」

「欲張りデスよ……」

「畜生……。敵わないわけだ……」

「お?」

悔しそうにしながら、マリアは雷の後ろに回って四人でひと塊となる。「いつかマリアもなれるよ」そんな思いを込めて、彼女の胸に雷は頭を預けた。

何とか大気圏は超えたが、今度は助からないと若いパイロットは操縦桿を手放そうとしていた。だが、

「もう……」

「燃え尽きそうな空に、歌が聞こえてくるんだ!諦めるな!」

しかし、依然コースは変わらない。

「K2への激突コース、避けられません!」

「直撃まで一キロを切りました!」

目の前に山脈が迫って来ていた。コース変更は不可能。ならば、  
「行くぞバカアアアツ!」

クリスが響に向かって叫びながら走りだした。彼女に体に跳びつき、体を固定して腰部装甲を変形させる。

『MEGA DEATH SYMPHONY』

六つの大型ミサイルに火を入れ、発射。それは空中で分解し、散弾のようになってK2の山肌に突き刺さり、大爆発を引き起こした。

「ぶん殴れエエエツ!」

「ええええつ?!」

クリスが離脱し、なんだかよくわからないままクリスの言葉通りに響は拳を構え、フルパワーで脆くなった山脈を殴り抜いた。一瞬だけ山頂が宙に浮き、その間をシャトルが滑り込む。

この結果を藤堯は冷静に、

「K2の標高、世界三位に下方修正！」

この報告に弦十郎は満足げに笑みを浮かべ、緒川は呆れる。

「不時着を強行します！」

第一、第二と難所を超え、最終段階である不時着を開始する。

シャトルの船底が山肌の上を滑走し、加速しながら一気に滑り落ちていく。目の前の森林群に対し、翼が正面に立ち剣を構える。その剣の長さは瞬く間に伸び、同時に幅広く巨大な両刃の大剣となる。シャトルの滑る勢いと刃の切れ味が合わさり、容易く森林を切り開いていく。森を抜けると、目の前には溪谷が広がっていた。今度は響が前に出て拳をぶち当てることで強引にコースを変更する。

「次は左だ！立花ッ！」

翼の声に反応して素早く振り抜き、粉碎しながらもコースを変え、目の前にあった小山をクリスがミサイルで破壊した。彼女は体を固定する能力がギアにないため、翼に支えてもらっている状態だ。彼女たちの表情に余裕が見て取れるが、

「この調子でふもとまで行ければ！」

「ッ?!ヤバイ！」

「へ?！」

切羽詰まったクリスの声を聞いて気の抜けた声を出しながら響が前を向く。

「村がッ?!」

響が船体から飛び下る。

「馬鹿?!」

「なにを?!」

響は地面に着地し、足を踏ん張ってシャトルを止めにかかる。幸いなことにシャトルの進行方向にあったのが村の大通りだった。ブースターを点火し、最後の踏ん張りをかけた。



「立花あぁッ！」

これにはさすがの弦十郎も落ち着いてはいられず、

「南無三?!」

と思わず言った。

もう少しで公会堂に直撃する。その寸前にバンカーユニットを地面に打ち放ち強引に体を固定、スープレックスの要領でシャトルをぶん投げた。その巨大な船体が屋根を超えるが、まだ飛距離が足りない。若いパイロットが最後の力を振り絞ってジェット噴射をかけ、公会堂のすぐ後ろで直立した。

「ったはく……」

「任務、完了しました」

翼が剣を突き刺して固定し、逆の手でクリスの手を握る。この報告に二課では安堵の音が漏れる。切歌と調がハイタッチし、雷が上を向き、マリアが下を向くことで顔を見合わせ、お互いに笑顔を浮かべた。現場では響が地面に寝そべり、空を見上げていた。

翼とクリスが彼女にそばにやって来て、

「無事か?!立花」

翼の問いには答えず、響は嬉しそうに笑う。

クリスが戸惑いながら、

「おかしなところでもぶつけたか……?」

「私、シンフォギアを纏える奇跡がうれしいんです!」

心底嬉しそうに言う彼女にクリスが苦笑いを浮かべる。

「お前、本当の馬鹿だな!」

少しうれしそうにクリスが言った。

○○○

先のシャトルに関する出来事で二課は解体され、国連所属の超常災害対策機動部タスクフォース『S. O. N. G.』として再編されることとなった。幸いなことに扱うものの特殊性ゆえか人事の再編は起きていない。

藤堯はシャトルの一件の情報整理を行っていると、後ろから友里が、

「はい。温かいものどうぞ」

「温かいものどうも」

差し出されたコーヒーを受け取りながら答えた。

「珍しいね」

「一言余計よ」

そう言いながらコーヒーを口にする。友里が彼のまとめた情報を見て、

「シャトルの救出任務から、三か月になるのね……」

「あの事件の後、二かは国連直轄の『S. O. N. G.』として再編され、今は世界各国の災害救助が主だった任務……。このまま大きな事件もなく、定年まで給料もらえたら万々歳なんだけど……」

人それをフラグと言う。彼がそう言った瞬間、アラートが鳴り響いた。友里が自身のモニターを見て、

「横浜港付近に未確認の反応を検知！」

だが検知したのもつかの間、すぐにその反応は消失した。

「消失……?! 急ぎ、指令に連絡を！」

「了解！」

夜の横浜港。そこを走る一人のローブを纏い、フードをかぶった少女の姿があった。足元に銃弾のようなものを打ち込まれ、足をつんのめらせて地面に倒れ込んでしまう。公衆電話の影に隠れ、

(ドヴェルグⅡダインの遺産……。すべてが手遅れになる前に、この遺産を届けることが僕の償い……)

ドヴェルグⅡダインの遺産が封じられているルーン文字の刻まれた箱を抱えながら少女が走る。そんな彼女を、目をバックにポーズを決めたディーラー風の女性がとらえていた。

「私に地味は似合わない……。だから次は、派手にやる……」

次の戦いは、すぐそばまで近づいていた……。

## 嵐の前の静けさ

朝、リディアンに通う生徒たちが課題がどうか、新しいカフェがオープンしたとか、そんな他愛のないおしゃべりをしながら歩いて行く。そんな彼女たちの中に『S・O・N・G』所属のシンフォギア装者、雪音クリスがいた。

しかし、彼女の平穩ももうすぐに崩れ去る。何故なら、彼女の背後に忍び寄る影があるからだ。その影は背後から、

「クラリスちゃあああん！フガアっ?!」

が、このような簡単な奇襲にかかるようなクリスではない。カバンを振り回し、とびかかってきた影、響の脳天に思いつき叩きつける。丁度そこには彼女の親友である未来と雷。そして雷を調と切歌が挟む形でそばを歩いていた。

彼女たちはS・O・N・G内で『F・I・S・三姉妹』と称されて―仲の良さをからかわれて―おり、とくに調と切歌の二人はこの呼び名にまんざらでもない反応を返している。因みに雷は「合ってるんだけどなんか違う!」と最初はこの呼び名に不満があったのだが、調と切歌の喜びようを見て受け入れている。

響の頭を叩いたカバンを肩越しに背負い、

「アタシは年上で、学校では先輩!こいつらの前で示しがつかないだろ!」

すぐ近くにいた調と切歌を見やった。

彼女たちと一緒にいた雷が苦笑いを浮かべながら、

「せめて二人の前ではしつかりとしようよ、響」

「おはよう雷。調ちゃん。切歌ちゃん」

クリスに怒られた響の後ろから未来がやって来て二人に挨拶し、

「おはよ、未来」

「おはよう……!ごいいます」

「ごきげんようデース!」

「暑いのに相変わらずね」

雷は普段のように、調は少しきこちなく、切歌はバッグを振り上げ

るほど元気いっぱいに戻事をした。未来が切歌の元気っぷりに感嘆している、響とそろって三人のつないでる手に視線が集中する。それは恋人繋ぎと言えるものだった。

響が三人に近づき、

「いやあく暑いのに相変わらずだねえ〜……」

「いや〜それがデスね〜……」

切歌は照れながら、

「姉ちゃんと今まで会えなかった分の振り戻しと言いますか……」

「そのおかげで私は全身の包帯と相まって滅茶苦茶暑いです」

しらちゃんの手がひんやりしているのが救いかな。と付け加えた雷の頬を汗がつうつと流れた。しかし両腕を塞がれているため汗がぬぐえないことには変わらない。そんな彼女を見かねて、しかし手は離そうとせずに調が、

「姉さん」

「何？しらちゃん」

「切ちゃんのぷにっとした二の腕も、ひんやりして癖になるよ」

「それ、本当なの?!」

「ちよつと離していい？切ちゃん」

「だめデス!」

「しらちゃ 姉さんの頼みでも、これは聞けない」……さいですか」

いいこと聞いたと思った雷は直ぐに行動に移そうとするが、切歌が離す気配を全く見せない。調のほうにも頼むが、食い気味の拒否の返答を聞いてがっくりと肩を落とした。

雷がすさまじく羨ましそうな視線を向ける中、未来は響の二の腕をつまんだ。響はくすぐったそうに、

「いやあく〜やめて止めてやめて止めてあああく〜!」

そんな彼女たちに顔を赤くしたクリスは再び響の頭をカバンで叩き、

「そういうことは家でやれ……」

「家ならいいのか……」

と小声で言ったが雷に突っ込まれてしまった。響が叩かれた頭を

抑えながら雷のほうを向いて、

「そーいや雷って今翼さんのところで剣術習ってるんだよね？どんなことしてるの？」

「居合いだよ。翼さんが『轟の戦闘スタイルにもあってるだろう』って」

現在、雷は翼の指南を受けて剣術を習っていた。それは体を鍛えるというよりは、どちらかと言えば以前のように簡単に折れないために心を中心に鍛えているのだ。当然、戦闘にも使える様になっているのだが。

「はかま姿の姉さん。かなりカツコよかったよ」

「何と言うかこう……、サムライみたいな感じだったデス！」

「え、見に来てたの……？」

雷は首を傾げた。如何やら黙って見に来ていたらしい。あつけにとられていた彼女の横で、調と切歌の二人はぼわぼわと当時の光景を目を閉じて思い返している。

そんな二人を見て響は頭を抱え、

「あぁー！私も見に行きたかったあ！」

「行こうって言ったのに課題をしてなかったのが悪いんでしょ。私も行きたかったのに……」

未来が拗ねるように言った。未来も行きたかったようだが、響の課題を手伝わされたらしい。因みに雷にも学校を休んでいた分の課題、つまり響以上の量があったのだが、スパイ容疑で独房にいる間に頼み込んで取り寄せ、その中で済ませていたのだ。

雷が落ち込む二人を励ますように、

「まあまあ二人とも、また別の日に来ればいいよ。見られて恥ずかしいものでもないしさ」

と言った瞬間、予鈴のチャイムが鳴った。流石の調と切歌も雷の手を離し、それぞれの教室へと向かって行った。

○○○

雷たちのクラスの授業は水泳だった。といっても授業内容はほとんど終わっており、今は自由時間なのだが。

響と未来が創世たちとプールサイドに腰掛けながら三者面談について話し合っている。雷は過去の虐待のトラウマから―温水は何とか克服した―顔を水につけることが出来ず、体操服を着て少し離れた場所で話に交じっていた。

詩織が、

「進路についての三者面談、もうすぐですわね〜」

「憂鬱。成績についてのあれこれは、ママよりもパパに聞いてもらいたいよ〜」

「ビツキーとライライのそこは、誰が来るの？」

響は「うーん」と少し考え、雷は即座に、

「私のところはおじいちゃんが来る」

「雷はいいよお。学年トップだもん。怒られる要素がないよ」

「あはは……」

弓美が唇を尖らせ、雷が苦笑いを浮かべた。

そんな時に響が、

「うちは……おばあちゃんかな？お父さんいないし、お母さん日曜日も働いてるし……」

「そういうのよくあるみたいだよ？どこも忙しいって」

沈みかけた空気に未来が即座にフォローを入れる。

三人は、

「そっか」

「優しいおばあさまなのではないかしら？」

「じゃないとビツキーの成績じゃ……」

「とうっ！」

「「うわあっ?!」」

創世の言葉を遮って響が勢いよく飛び込んだ。三人に飛沫がかかったが、幸いにも雷のところまでは届いていない。

少し潜ってから響は水面から顔を出し、

「そんなことより泳ごうよ！今日の夜更かしに備えてお昼寝するなら、ちよつと疲れたくらいがよくないかなあ?!わお！自分で言ってる驚きのアイデアだね〜！」

「ちよつとビツキー！もう少してライライに水、かかりかけたよ！」  
そう言いながら創世たちはゆっくりと水の中に入る。

「あ、ごめん……。大丈夫だった？」

申し訳なきように眉をハの字にした響を見て目を細め、

「大丈夫。届いてないよ！」

「よかったあ〜」

にへつと表情を崩して泳ぎ始めた。未来はそんな響を見て、

「カラ元気の癖に……」

と呟いた。

○○○

まあ、そんなこんなで陸上よりもはるかに体力を使う水中で体を動かしたのだ。昼寝のためにと言っていた響がどうなったのか、想像に難くない。彼女は机に突っ伏し、よだれを口から垂らしながらいびきをかいて爆睡していた。

「響！起きて！響！先生きちやうつてばあ！」

「zzz……」

隣に座る雷が何度も体を揺すったり叩いたりしているがまったく反応が返ってこない。創世たちには先生の様子をうかがいながら、まったく目を覚ます気配のない響を必死に起こそうとする雷の姿が少しかわいそうに見えていた。

結局、彼女の必死の努力は水泡に帰した。先生が響の目の前で鬼の形相で立っているのだ。

「なるほど……」

「ああ……」

雷は諦めた。そんな彼女を未来が優しく慰めている。

「今夜夜更かしするために、私の授業を昼寝に当てると……。そういうことなのですね?!立花さん?!」

響に本日三度目の雷が落ちた。

## 未知なる襲撃者

夜遅く、とある理由のためにクリスの家に雷たちがやって来ていた。テーブルの上には色とりどり、種類豊富な菓子が並べられている。時間も時間なため、全員が先に入浴を済ませ、パジャマ姿でリビングに集まっている。クリスが来客用のコップをキッチンから持ってきて、眉をひくひくさせながら、

「で、どうしてあたしunchなんだ……？」

と、言った。こんな時間に同じ目的とは言え大人数が集まるのは流石に不満だったらしい。ナイトキャップをかぶったまま詩織が立ち上がり、

「すみません、こんな時間に大人数で押しかけてしまいました」

「ロンドンとの時差は約八時間！」

「チャリティロックフェスをみんなで楽しむにはこうするしかないわけです……」

詩織に弓美、創世が続く。詩織と創世はともかく、弓美などは悪びれもしていない。そんな少女たち返事にクリスは唇を尖らせるものの、響がそばにやって来て、

「ま、頼れる先輩ってことで！それに、やっと自分の夢を追いかけるようになった翼さんのステージだよ？」

「みんなで応援……、しないわけにはいかないよな！」

「そしてもう一人……」

未来の言葉を聞いて調たちが嬉しそうに、

「マリア……」

「歌姫のコラボユニット、復活デェス！」

「前は半端だったけど、今回はぶっ通し！」

そう言って雷は拳を握りしめた。

もうそろそろ開演の時間となったので立っていたクリスと響が席に着いた。テレビの中では照明が輝きを増し、ステージの主役たる二人をライトアップする。星天ギヤラクシイクロスの名を冠する歌の通り、ステージは星をイメージしたライトの演出、空を自由に飛び交



うように水上を滑るように歌う翼とマリアに全世界が魅了された。

興奮のヴォルテージが上限を突破し、ペンライトをぶんぶん振っている弓美が、

「こんな二人と一緒に友達が世界を救っただなんて、まるでアニメだねえ〜！」

「ああ……うん。ホントダヨ〜」

「ソウダネー……」

雷と響があいまいな表情で答えた。

○○○

すべての歌を歌い終わり、マリアがエレベーターに乗って下に降りると、二人の黒服がマリアを出迎えた。

「任務、ご苦労様です」

マリアは少し怒気を声に含ませながら、

「アイドルの監視ほどではないわ」

「監視ではなく警護です。世界を守った英雄を狙う輩も、少なくともないので」

言葉の裏が見え透いていた。そうにもかかわらず従うしかないマリアは黒服を引き連れながらステージを後にする。

元F・I・S・に所属していた彼女を良く知る切歌たちが憂う。

「月の落下とフロンティアに関する事件を収束させるため、マリアは生贄とされてしまったデス……」

「大人たちの体裁を守るためにアイドルを……文字通り偶像を強いられるなんて……」

「限られた、監視された自由。籠の中でさえずるカナリアに過ぎない……か……」

「そうじゃないよ」

暗くなっていく雷たちの間に明るい未来の声が響いた。思わず彼女のほうを向いてしまう。

「マリアさんが守っているのはきつと、誰もが笑っていられる日常なんだと思う」

「未来……」

「確かに、そう考えた方が楽しいか！」

「そうデスよね！」

「だからこそ、私達がマリアを応援しないと……！」

切歌と雷が嬉しそうに笑う。家族なのだから、と。

○○○

夜の帳が完全に落ち切ったところ、金のコインが回転しながら宙を舞った。それは空中で何かに弾かれたように勢いよくコースを変え、中にガソリンが大量に入ったタンクローリーに放たれる。数発放たれたソレは遂にタイヤに命中、破裂した結果ハンドルが利かなくなり、ガードレールを破壊して崖から転落。町のど真ん中でに横転したタンクローリーの開けられた穴からガソリンが流れ出し、運転手は命からがら逃げ出したもののエンジンの火が引火、爆発した。

雷と響、クリスのもとに通信が入る。相手は弦十郎だ。

『第七区域に大規模な火災発生。消防活動が困難なため、応援要請だ』

「了解！」

「はい！すぐに向かいます！」

「二人とも……」

「大丈夫。人助けだから！」

三人が立ち上がり、不安そうに言う未来を響が安心させる。次いで調たちが立ち上がり、

「私達も……！」

「手伝うデス！」

勇んで言うが雷が、

「二人は留守番！リンカーもないのに出すわけにはいかない。これはお姉ちゃん命令です！」

「むう……」

人差し指をビシツと立てて妹分である調と切歌に宣言し、飛び出して行く。姉のように慕う彼女からの命令とは言え、不満から頬を膨らませた。

また、マリア達のほうでも異変が発生していた。様々な衣装を着たマネキンが並ぶ廊下に風が吹いたのだ。ここは密室、空気の流れは

あつても風が吹くのはあり得ない。緊張が高まり、警戒態勢をとる。

「誰かいるの?!」

「……司法取引と情報操作によって仕立て上げられたフロンティア事変の汚れた英雄、マリア・カデンツァヴナ・イヴ……」

「何者だツ?!」

どこからか女性の声が聞こえてくる。しかし、姿は見えず、人形が並べられているために周囲に目を見やっても判別が出来ない。

すると突然、並べられた人形の中の一体、フラメンコドレスを着た女性が黒服の一人に襲い掛かる。そして右腕を彼の首に回して引き寄せ、強引に口づけを交わした。

「離れろッ!」

もう一人の黒服が銃を抜くが女は聞き入れようとせず、口づけを交わし続ける。

するとみるみるうちに黒服の髪の毛は白髪化し、四肢はだらんと力なく垂れ下がり、目からは生気が消えた。代わりに彼女のみどりの瞳が怪しく輝く。

唇を離し、もう用はないと言うように襟を首を掴んで床に落とす。それと同時に黒服が三発発砲した。しかし、女は微笑をたたえたままスカートを翻す。すると彼女の周りに竜巻のような暴風が発生。銃弾を跳ね返し、弾は三発とも黒服に命中した。そのうちの一発が眉間に直撃した。即死だ。

明らかに人知を超える力を示した彼女はフラメンコのステップを踏んでマリアと向き合う。その圧倒的な実力によりマリアが驚愕していると、

「纏うべきシンフォギアを持たぬお前に用はない……」

同時刻、日本では箱を抱えた少女が逃走を続けていた。ディーラー風の女性は何処からともなく指の間にコインを召喚し、

「踊れ、踊らせるがままに……」

フツと軽く放る。しかし、それは空中で加速し、まさに銃撃の様に少女に降り注いだ。近くにあった車のガソリンタンクに直撃。大爆発を引き起こす。その爆発によって少女の纏っていたローブが巻き

上げられ、盛大に吹き飛んでしまう。が、何とか道路を転がって受け身をとり、大急ぎで階段を駆け下りる。

燃え広がる建物を前にして、そっくり瓜二つの姿をした豪奢なローブを纏った少女が上から見下ろしていた。

雷たち装者に乗せたヘリが火災現場へと急行する。

弦十郎が詳細を説明していた。

『付近一帯の避難は、ほぼ完了。だが、このマンションに多数の生体反応を確認している』

「まさか人が……?!」

『防火壁の向こうに閉じ込められているようだ……。さらに気になるのは、被害状況は依然四時の方向に拡大していることだ』

あごに指をやりながら言った。雷が、

「まさか、人為的に……?」

「馬鹿猫が暴れていやがるのか?」

『響君は救助活動に、クリス君は被害状況の確認。雷君は救助活動を終えたのち、被害状況の確認にあたってもらう!』

「了解!」

「了解です!」

通常では出来ないことだが、最速のシンフォギアであるケラウノスだからできる荒業である。火災現場に到着し、響がヘリの後部ドアを開けて身を乗り出す。

「任せたぞ!」

クリスの声を背中に受けた雷と響はペンダントを掲げ、

「任せられた!」

「任せてよ!」

そして二人は一息に飛び下り、ケラウノスとガングニールの起動聖詠を口ずさんだ。

「V o l t a t e r s   K e l a u n u s   T r o n」

「B a l w i s s y a l l   N e s c e l l   G u n g n i r   T r o

n

フロンティア事変の際に発動したXDモードの限定解除の影響で

ケラウノスの姿が少し変質していた。ヘッドギアに元々あつた稲妻型の耳あての他に二本の稲妻型と細長いひし形の角がティアラのよ  
うに追加。更に首と肩の間に小型のライデンユニットが増設されて  
いる。

二人の装者が火災現場に降下した。

○○○

一方、マリアは謎の女と交戦していた。

女は剣を取り出し、マリアに振るう。しかしそれをバク転で回避し、振り下ろされた一撃を跳んで避ける。そして空中で首に蹴りを叩きこんだ。だが女はそれを苦にすることもなく逆にマリアの体を押し上げた。

「しまったッ?!」

女はフラメンコの様にスカートをはためかせ、剣を真っ直ぐに突き上げられた。

事は同時に、複数に

ケラウノスとガングニールを身に纏い、雷と響が火災現場であるマンションの屋根を蹴り破って内部に突入する。その瞬間に雷が増設されたヘッドギアの機能を利用して電磁波を飛ばし、周囲の被害状況を瞬時に把握する。

彼女のヘッドギア、その中央の角は斥力や電磁波、磁力などの彼女の発する稲妻の副産物をより正確にコントロールすることが出来る。煙などの火災そのものによる被害は甚大だが壁は脆くなつてはいないようだ。これならば壁を破壊しての救助作業も問題ないだろう。

確信と同時に友里から通信が入ってきた。

『響ちゃんの反応座標までの誘導、開始します！』

ガングニールにはこのような機能は搭載されていない。その為、友里からの通信を頼りにしなければならぬ。名指しで彼女が呼んだのはそれが理由だ。二人は領き合い、それぞれ別の方向へと走り出した。

電磁波を発しながら要救助者の捜索に当たる。しばらく駆け回っていると、複数の壁越しに複数の反応を検知した。電磁波の反響具合を確認する。如何やら防火シャッターが小さいが瓦礫によって完全に閉じ切っておらず、その隙間から煙が流れ込んでいるようだ。しかもその通路は完全に瓦礫によって塞がれており、脱出することもできなくなっている。

雷は拳を振り抜き、壁を一枚破壊した。

要救助者たちは煙を吸い込むまいとハンカチなどで鼻と口を抑えていたが、すでに限界が近づいてきていた。一部の物は体の末端部分が痙攣しているようだ。そこにいる全員に死という言葉が脳裏をよぎる。その時だった。少し遠くではあるが、何かを破壊する音と共に歌が聞こえてきたのだった。

「歌が……聞こえてくる……？」

青年はそう呟いた。最初は死に瀕した際の走馬灯や幻聴か何かかと思っていたが、破壊音がするたびに歌が近づいてくるのだ。否が応

でもそれが現実のものであると受け止める。勇ましさの中にどこか優しさのある歌。生きることへの気概が生まれてくる歌だった。その歌声にほかの人々も感化され、今まで漂っていた市の気配が遠くへと消え去っていく。

そんな時だった。防火シャッターが赤熱化し、熱した飴のようにどろりと溶けだしたのだ。そしてそこから現れたのは、稲妻を迸らせた右腕を正面にのぼした少女、雷だった。

「避難経路を作りました！光の点滅する方に落ち着いて向かってください！」

光、と言うより電光なのだが、それが等間隔に点在している。このような精密な操作も新たにつかされたギアの機能の一つだ。

歩くことが困難な者を背負い、最後の要救助者が歩いて行ったのを確認すると、再び電磁波を放った。もう周囲にはいないようだ。響の向かった方向に残りは集中している。それを確認すると、避難経路を真っ直ぐ駆け出していった。

マンシヨンの外に脱出し、救助者だった人々が生存の喜びを分かち合っている。その中をギアを解除した雷が重症者に肩を貸して救急車のほうに向かっていると、ガラガラとストレッチャーが移動する音が聞こえてきた。如何やら誰かが呼んできてくれたのだろう。後は救急隊に任せ、次の任務である被害状況の確認のため四時の方向を向く。すると突然マンシヨンから天高く、響が飛び出してきた。

雷は腰に手を当て、呆れたように彼女を見上げる。

「やっぱカッコイイなあ、響は。人助けしてるときは特に」

聞こえたのかはわからないが、少年を抱えた響が笑った気がした。

○○○

フラメンコドレスのような服を着た女性が落下するマリアに向けて剣を突き上げる。いかにしてこの窮地を脱しようかと思考を回すが、重力に従って彼女の体は落下する。もう少しで体が貫かれる。だが、女とマリアの間に蒼のシンフォギアを纏った翼が滑り込み、携えた刀で受け流しながら距離をとる。

マリアは思わず、

「翼ッ?!」

翼は着地してマリアを下ろし、刀を正面に構える。

「友の危難を前にして、鞘走らずいられようかッ!」

「待ち焦がれていましたわ……」

「貴様は何者だッ?!」

女は翼の問いにスカートのすそを掴み、フラメンコのようなポーズをとって答えた。

「オートスコアラ……」

「オートスコアラ……?」

翼自身初めて聞く単語だ。様々な書物を読んでいる雷であれば何か気付くだろうが今ここに居ない。それに倒してしまえば問題はな  
いと翼は即座に思考を切り替える。

女は切っ先を翼に向け、

「あなたの歌を聞きに来ましたのよ……?」

そう言つて女は一気に加速して突きかかってきた。鍛えれば人間にも可能な動きだが、それに対して明らかに女の体格は華奢すぎる。予想外の加速に面食らったが歴戦の防人たる翼は即座に行動に移した。正面から女の剣を受け止める。先に奪われた拍子を自らのものとするため、再度距離をとる。そして左のバインダーからもう一刀を射出し、二刀流となって攻勢を開始する。二刀の柄を連結し、双刀となすと同時に火遁の術で点火することで焰の刃へと変えた。脚部のブースターで一気に距離を詰め、女が着地する瞬間を狙う。印を結びながら刃を高速回転させ、

（風鳴る刃、和を結び、寡欲をもって切そぐう……）

刃の焰の温度が上昇し、蒼き焰へと変化した。

「月よ煌めけッ!」

回転の勢いをそのままに、振り下ろした。

『風輪火斬・月煌』

女の体は勢い良く吹き飛ばされ、重い荷物のかげへと突っ込んでいった。



〇〇〇

抱えていた少年を救急車に運んだ響に雷が笑顔で声をかけた。

「お疲れ様、響」

「お疲れ、雷。って雷は次があるんだったよね」

如何やら忘れていたようだ。苦笑いを浮かべながらどこか恥ずかしそうに頭をかいている。雷はため息をつき、

「そうなんだよねえ……。じゃ、クリスが頑張ってるのにサボるわけにはいかないからね。行ってくる」

「行つてらっしゃい。今日は帰ってくるんだよね？」

フロンティア事変以降、雷は今までの分を補填するように調や切歌たちのところで寝泊まりすることが多くなっていた。仕方ないと響たちもそれは容認しているが、やはり彼女がいた方が安心するのは確かなことだ。

雷は頷き、

「今日は響たちのところに帰るよ。未来も待つてるだろうしね」

「うん！じゃ、頑張つてね！」

「頑張るよー」

そう言つて再びギアを纏い、四時の方向に稲妻の輝きと共に跳躍しながら向かつて行つた。

「雷はすごいなあ……。何でもこなしちゃうんだもん」

目を細め、彼女の背中を追つて見上げる。その時だった。視界の端にとんがり帽子をかぶった小さな少女の姿が見えた。

炎を見つめる少女の脳裏に遠き過去の出来事が蘇る。成したこと全て『奇跡』と一括りにされ、あまつさえそれを悪魔の力だと父を罵る者たちの姿。悪魔を浄化するという名目で火刑に処された父の姿。そして泣き叫ぶことしか出来ない無力な自分の姿。そして思い返すのは父の残した『世界を知るんだ』という言葉。自然と炎を写す目に涙がたまり、こぼれた。

「パパ……」

少女はか細くこぼす。

「消えてしまえばいい思い出……」

「そんなところにいたら危ないよ！」

少女の思考は突然聞こえてきた響によって現実に戻される。少女は思わず振り向いた。下では響が、

「パパとママとははぐれちゃったのかな？そこは危ないから、お姉ちゃんが行くまで待つ……」

「黙れ！」

「うわあ?!」

少女の鋭い声が響きの言葉を遮る。そして右手で空中に円を描くようにすると緑色の紋章のようなものが現れた。するとその門所を中心に竜巻が発生し、響に向かってそれを放った。響は飛びのいて避けるが、さっきまでいた場所がえぐられている。それだけでこの竜巻がどれほどの威力を持っているのかが理解できた。

通信機から、

『敵だ！敵の襲撃だ！そっちはどうなってる?!』

『こっちはいない！急いでクリスのほうに向かう！』

「敵……?」

クリスからの通信に雷が割り込んだ。声色から両方とも切羽詰まってるのが見て取れる。響は二人の敵と言うワードをさつき攻撃を加えてきた少女に当てはめることが出来なかった。響を見下ろす少女は、緑色の科学の構造図とも取れる紋章を叩く掲げた。

○○○

勢いよく女を切り飛ばした翼に向けてマリアが叱責する。

「やりすぎだ！人を相手に……」

「やりすぎなものか……！手合わせして分かった……!」

確かにこの威力は人間には過剰だろう。但し、それは相手が人間であればの話だ。翼は気を緩ませることなく女の吹き飛んだ方向を見据える。

「こいつは、どうしようもなく……化物だツ！」

すると荷物が暴風で巻き上げられ、傷一つない女の姿が現れる。

「聞いてたよりずっとしよぼい歌ね。確かにこんなのじゃ、やられてあげるわけにはいきませんわ」

響と相対する少女が掲げた紋章から、複数の陣が展開される。

「キャロル・マールス・ディーンハイムの錬金術が……」

キャロルと名乗った少女が響に陣を向けた。四層の陣はそれぞれ独立して回転している。

「世界を壊し、万象黙示録を完成させる……！」

「世界を壊す……？」

響の疑問は当然だ。キャロルはさも当然のように、

「オレが奇跡を殺すと言っている！」

右手で生み出した陣の中に、左手で生み出した紋章を投げ入れた。それは四層全てに転写され、それらすべてが一つへと集約される。そして紋章陣は輝き、さつきとは比べ物にならない数と威力の竜巻を響に向けて撃ち込んだ。

## 力の名は錬金術

キャロルの放った竜巻は響に直撃することはなかったが、彼女の足元に命中した。その威力に地面がめくりあがり、響を吹き飛ばす。巻き上がった土煙が消え、その中から抉り壊された地面、そこに響が倒れ込んでいた。響はボロボロになりながらも顔を上げ、キャロルを見上げる。

「何故シンフォギアを纏わない……、戦おうとしない……」

キャロルが疑問をこぼした。

攻撃し、明確なダメージを与えた以上、自分は響の敵だ。少なくとも自分はそう認識する。しかし、彼女は戦うための武器であり、身を守るための鎧であるシンフォギアを纏うそぶりすらも見せない。

響は体を起こしながら、

「戦う……よりも、世界を壊したい理由を教えてください！」  
「っ」

キャロルは煩わしそうな瞳を響に向け、ゆっくりと、物理法則を無視した速度で飛び下りた。響の眼前にある大きな瓦礫の上に錬金陣を展開し、ゆっくりと着地する。

「理由を言えば受け入れるのか……？」

「私は……戦いたくない……！」

響の叫びにキャロルは歯噛みする。

「お前と違い……、戦ってでも欲しい真実がオレにはあるッ！」

キャロルの瞳に憎悪と嫌悪の焰が宿っていた。

○○○

家主であるクリスが任務に出て行ってしまったため、お泊り会はお開きとなり、未来たちは帰路についていた。調や切歌もはじめのほうは雷の言葉に納得がいかないと頬を膨らませていたが、今では笑顔を浮かべている。

「あーあ、せっかくみんなでお泊りだと思ったのに……」

「立花さん達が頑張っているのに、私達だけ遊ぶわけにはいきませんから」

「ひながキネクリ先輩の家の合鍵を持ってたからよかったけど……。でも、どおして持ってたの？」

追及されるとは思っていなかった未来は答えに詰まるが、

「え、そうだよね……。どうしてだろう？前に響から預かってたんだったかな？」

当たり障りのない回答でこの場を濁すと、切歌たちが前に出てきた。

「じゃあじゃあ先輩方ー。あたしらはこっちなのでース！」

「さそつてくれてありがとう。姉さんにもよろしく」

切歌は元気よく、調は静かに別れの挨拶を言いつた。そして切歌は調の手を取り、

「失礼するデース」

「ああ……?!切ちゃん！」

仲のいい二人に思わず微笑みがこぼれる。

「バイバーイ」

「気を付けてねー！……さて、コンビニでおむすびでも買っておこうかな？」

二人の後姿が遠くなってきたタイミングで未来が言った言葉に三人が振り向く。

「あらあら」

「まあまあ」

「てつきり心配してるのかと思ってたら……」

「響の趣味に人助けだから平気だよ。むしろ、お腹空かせて変える方が心配かもね」

そういう未来に創世は悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「おんや〜？そんなことをすればライライが嫉妬するんじゃない？」

「雷は食べ物よりも、抱きしめた方が喜ぶから」

三人がこりや敵わないや、と呆れた表情を浮かべた。

調と切歌は自分たちの家に帰るべく横断歩道の前にいた。二人の表情は沈んでいる。明るく振舞ってはいたが、雷の言葉が耳に残って

いるのだ。言われた時の光景がよみがえった。

調が言葉をこぼす。

「考えてみれば、当たり前前の事……」

「ああ見えて、底抜けにお人よしぞろいデスからね」

少し前、自分たちをドーナツをもって迎えに来てくれた響たちの笑顔が蘇る。因みに雷はF・I・S。でもあるので迎えられた側だ。

「フロンティア事件の後、拘束された私達の身柄を引き取ってくれたのは、敵として戦ってきたはずの人たちデス……」

「それが保護観察なのかもしれないけれど……学校にも通わせてくれて……」

初めて見た学校の前で立ち止まっていた二人の間を通過して姉として雷が手を取り、

「行くよ！二人とも！」

「おい！なにビビってんだよ！」

クリスが先輩として背中を押した。

二人が前を向くと、響たちが手を振り、温かく迎えてくれていた。そんな光景に放心してしまう。そして、それを思い返すたびに何かしたい、恩返しをしたい。という思いが強くなっていく。

「F・I・Sの研究施設にいたころには想像もできないくらい、毎日笑って過ごせているデスよ」

赤かった信号が青に変わるが、二人は脚を進めない。

「何とか、力になれないのかな……」

「何とか、力になりたいデスよ……」

切歌は胸のペンダントを取り出し、握りしめる。

「力は、間違いなくここにあるんデスけどね……」

「でも、それだけじゃ何も変えられなかったのが、昨日までの私達だよ。切ちゃん……」

力を持っていても力になれない。そんな焦燥感が少女達の身を焦がしていく。そんな時だった。不意に、切歌の携帯に電話の着信音が鳴る。

「誰デスカね……？」

「切ちゃん、忘れ物でもしちやっただの？」

「そ、そんなわけないデスよ……」

さつきまでの陰気な空気が霧散し、調の言葉に苦笑いを浮かべながら携帯を確認する。そこに書かれていた名前は、

「ね、姉ちゃん?!」

「嘘?!」

「ちよ、ちよっと待つデスよ……」

書かれていた雷の名前に取り乱し、大慌てになりながらスピーカーボタンを押す。そろって食い入るように画面を見つめた。

『切ちゃん?!しらちゃん?!聞こえてる?!』

「き、聞こえてるデスよー!」

スピーカー越しに雷の声が聞こえてきた。しかし、如何やらただ事ではないらしい。彼女の声色に焦りが見て取れる。

「姉さんどうしたの?!」

『今どこにいるの?!ニュースが見れるものがあつたら見てくれない?!』

雷はヘッドギアの通信機能で切歌の携帯に電話をかけていた。ビルの上を走って煙の上がっている港に向かっている。少し前にヘリが撃墜されたのだ。

如何やらニュースを確認できるところに来たらしい。切歌が、

『姉ちゃんたちが向かった火災のニュースが出てるデスよ!』

「ならその奥に、煙が上がってるの見えない?!」

『煙……?』

調たちがモニターを見上げる。注意深く確認していると、奥のほうでS・O・N・G所属の装者輸送ヘリが撃墜されるのが見えた。

「今の……?!」

「空中で爆発したデス!」

『見えた?!』

雷の声に慌てて答える。

『見えたデスよ!って、もしかして姉ちゃんが電話を掛けたのって……』

ビルを跳び越えながら雷は歯噛みする。自分と違って彼女たちがギアを纏うにはリンカーが必要だ。なくても纏えるかもしれないが、そうした場合負担は大きくなる。これから戦うのは未知なる敵。装者の中でも高い戦闘力を持つクリスが苦戦するような敵だ。

それらをすべて勘定に加えたうえで、彼女たちの姉としてではなく、戦うものとして、

「ヘリの墜落した港に向かって！ギアを纏ってもいい！」

『了解デス！』

『わかった』

通話が切れる。電話越したが、彼女たちの声が輝いている気がした。こんな言葉を出せる自分が嫌になる。

「何かあったら……私の所為だな……」

小さく呟き、クリスと合流するために加速した。

○○○

ディーラー風の女の戦闘をしていたクリスだったが、船を落としてくるといふ常識はずれな攻撃を避け、これからの戦法を考えるために草むらに避難していた。

「ハチャメチャしやがる……」

「大丈夫ですか……?」

「ああ……。つてえ?!」

背後から声をかけられ、返事しながら振り向く。しかし、少女の恰好を見て赤面し、思わず尻もちをついてしまった。少女の服装は体ですっぽりと隠す大きさのローブに下着が一枚だけ、あまりにも破廉恥な服装だった。クリスの反応をも無理もない。

「おまつ、その恰好……」

「あなたは……」

慌ててクリスは顔を隠し、

「わ、私はあ、快傑☆うたずきん！国連とも、日本政府とも全然関係なく、日夜無償で世直しを……」

「イチイバルのシンフォギア装者、雪音クリスさんですよね」

「その声、さつきアタシを助けた……」



まったく言い訳にも何にもなっていないクリスの言葉に、少女が口をはさんだ。少女の声はクリスが少し前に助けてもらった少女のものだ。

少女はフードをまくり、素顔を晒した。

「ボクの名前はエルフナイン。キャロルの錬金術から世界を守るため、皆さんを探していました」

「錬金術……だと……」

新たなワードにクリスは息をのんだ。

海中を航行する潜水艦、S. O. N. G. の本部ではローブの少女、エルフナインの錬金術の意味を解析していた。

「錬金術……。科学と魔術が分化する以前の、オーバーテクノロジーだった、あの錬金術の事なのでしようか……」

「だとしたら、シンフォギアとは別系統の異端技術が挑んできているということ……」

「新たな敵……。錬金術師……」

弦十郎は腕を組み、言葉をこぼした。

○○○

錬金術師、キャロルの姿をスマホで撮影する青年がいた。うまく撮影された映像を満足げに見ながら。

「こういう映像ってどうやってテレビ局に売ればいいんだっけえ？」

「断りもなく撮るなんて……」

「ッ!」

青年の横にはいつの間にか青いワンピースを着た少女が壁にもたれかかっていた。青年は反射的に飛びのく。だが少女は歩み寄り、

「しつけの程度がうかがえちゃうわね」

青年の顎に手を添え、口づけ強引に交わす。すると髪の毛が白髪化した。少女は舌なめずりをし、小悪魔的に笑った。

響はキャロルを見上げながら、

「戦ってでも欲しい真実……?」

「そうだ。お前にだってあるだろう? だからその歌で月の破壊を食い止めて見せた……。その歌で!シンフォギアで!戦ってみせたッ!」

「違うッ！そうするしか、無かっただけで……。そうしたかったわけじゃない……。私は、戦いたかったんじゃない！シンフォギアで、守りたかったんだ！」

響は訴えるが、キャロルは表情を歪め、

「それでも戦え……！」

彼女の足元に橙色の錬成陣が展開される。

「お前に出来ることをやって見せろ！」

「人助けの力で……。戦うのは嫌だよ……」

「ッ……。お前も人助けして殺される口なのかッ！」

キャロルは両腕を掲げ、頭上にも足元と同じ錬成陣を展開する。その様子をS・O・N・Gは捉えていた。

「高出量のエネルギー反応！敵を前にしてどおして戦わないんだ！」

藤堯の疑念はもつともだ。しかし、命の危機を前にしても戦えないのが響が響たるゆえんなのだ。我慢の限界が来ていた弦十郎は立ち上がり、

「救援を回せ！いや……。相手がノイズで無いならオレが出張るッ！本部を現場に向かわせろッ！」

「いけません！指令がないと指揮系統がマヒします！」

弦十郎の行動に友里が反対意見を出す。至極まっとうな反論に歯噛みしてしまう。

響は攻撃が来ることを理解していてもギアを纏わない。

「だって……。さっきのキャロルちゃん……。泣いてた……」

「ッ?!」

「だったら、戦うよりも、そのわけを聞かないと！」

キャロルの顔が怒りに歪む。それは響に対してか、自分に対してかもわからない。

「見られた……。知られた……。踏み込まれた……。世界ごとッ！」

叫びと共に指をパチンと弾く。すると紋章が浮かび上がり、錬成陣に刻印される。それと同時に錬成術が完成し、

「ぶつとべえええッ！」

周囲一帯の地面をえぐり、壊し、破壊した。響の体があまりの威力

に吹き飛び、悲鳴は破壊音にかき消される。

S・O・N・G. では予想を遥かにこえる出来事に混乱し、情報収集と響の安否を大急ぎで行っている状態だ。響は何か無事だった。近くにあった瓦礫に手をかけ、何とか体を支える。キャロルも怒りのままに錬金術を使ったからだろう。肩で息をしている状態だ。

響は、

「どうして……世界を……」

「父親に託された命題だ……。お前にだってあるはずだ……」

「え……。おとう、さんに……」

父親と言うワードが心の傷口に引つかかる。そんな二人を、さつき  
の青いワンピースの少女が、上にある渡り廊下から、

「めんどくさいやつですねぇ」

「ん……。見ていたのか……。性根の腐ったガリイらしい……」

如何やらキャロルの仲間のようなだ。ガリイと呼ばれた少女はひよ  
いっとためらうことなく飛び下りた。明らかに人間であれば足を痛  
めたりするような高さなのだが、彼女も人間ではないらしい。バレエ  
のように音もなく着地した。カラコロと可愛らしい音を鳴らしなが  
らその場で回転し、

「やめてくださいよお。そういうふうにしたのはあ、マスターじゃな  
いですかあ……」

心外だというような顔をしている。如何やら仲間内でも言われる  
ほど性根が腐っているらしい。

「思い出の採集はどうなってる」

「順調ですよお。でもミカちゃん、大喰いなので足りてませえん！」  
明らかにわざとらしくウソ泣きをしている。彼女たちが口づけを  
して集めていたのは思い出らしい。キャロルは分かっているため  
まったく反応せず、

「なら急げ、こちらも出直しだ」

「りようかあ〜い！ガリイ頑張りまあ〜す」

そう言っただ中に液体の入ったアンプルのようなもの―テレポ―ト  
ジェム―を取り出し、地面に投げつけた。するとそれは砕け、その場

所を中心に波紋が広がると錬成陣が輝いた。そこにガリイは立ち、「さよならあ〜」

と場違いなほど明るく、手を振りながらその場から消失した。次いでキャロルもレポートジエムを取り出し、

「次は戦え……。でない、お前のなにもかもをぶち碎けないからな……」

ガリイと同じようにしてキャロルも姿を消した。残された響はへたり込み、

「託された……。う。私には、お父さんからもらった物なんて……。なに、も……」

体に限界が訪れる。響は気を失い、地面に倒れ伏した。

## 歌の鎧は崩れ落ち

倒れ伏した響を救出するため、S・O・N・G・は早急に対応していた。他の装者たちにもその事実を通達する。弦十郎の頬を汗が伝う。

(なんだ……？この拭えない違和感は……！)

彼の疑念をよそに、事態は進展し続ける。

○○○

一方、ロンドンでは翼とマリアがオートスコアーと名乗った女から逃走すべく車へと向かっていた。火急の事態故、アイドル衣装から着替えてすらいらない。途中で黒服の一人が、

「エージェントマリア！あなたの行動は保護プログラムにて制限されているはず！」

「今は有事よ」

マリアはにべもなく一蹴し、

「車両を借り受ける」

車のそばに立っていたタクシーの運転手に断らせぬ勢いで告げた。黒服たちが一斉にピストルを向け、警告する。

「そんな勝手は許されない！」

「ッ」

ピストルを向けられ、マリアは歯噛みするが、彼らの後方から三回の発砲音が聞こえてきた。

「なんだ?!」

「体が、動かない?!」

マリアにピストルを向けたまま、黒服たちの体が固定されている。よく見ると彼らの影に弾丸が突き刺さっていた。緒川だ。

『影縫い』

「緒川さん?!」

緒川は黙ってうなずいた。如何やら何をしようとしているか理解しているようだ。翼は助手席に乗り、マリアは運転席に乗りながら、「悪いが翼は好きにさせてもらう！」

マリアはエンジンを点火し、一気にアクセルを踏み入れた。速度を上げていく車の後ろを見ながら、

「一体何が……」

と緒川はつぶやいた。

響が倒れたという連絡がエルフナインを連れたクリスの耳に入る。彼女は目を見開き、

「何だっってえ?!あのバカがやられた?!襲撃者に?!」

『翼さん達も撤退しつつ、体勢を立て直してるみたい何だけど……』

連絡係の友里の言葉にクリスが腹立たし気に歯を食いしばった。さつきまで交戦していたディーラー風の女の姿、バケモノじみた戦闘力を持つ錬金術師の姿が蘇る。

(錬金術ってのは、シンフォギアよりも強ええのかッ?!)

だが今はそれよりも優先すべきことがある。チラリとエルフナインのほうを向き、

「こっちにも252がいるんだ!ランデブーの指定を……ッ?!」

背筋に来るような攻撃の気配。クリスは咄嗟にエルフナインを抱えて飛び退いた。さつきまでいた場所が爆発する。よく見ると爆心地の縁が赤く発光し、そのあたりから同じく赤い粒子が漂っている。

「何だ……?コイツ……」

他の装者、当然雷にも響が倒れたという連絡が届いている。彼女は危うく取り乱しそうになるも気をしっかりと持ち、

「響は……無事なんですか……?」

『ええ。バイタルは安定しているわ……』

「ッ……わかりました。クリスの援護に向かいます」

自分がもう少し待っていれば響は傷つかなかったかもしれない。

雷は唇をかみながら「フーツ!フーツ!」と自分への苛立ちから荒く息を漏らしていた。恐らく通信で友里も聞こえていただろう。すぐに駆け付けたい衝動にかられたが、今戻っても彼女を傷つけた敵がいるわけではない。ならばと気持ちを何とか切り替え、さらに深く足を踏み込んだ。

○○○

翼たちはロンドンの街を車で逃走していた。電話越しに聞こえるかなり焦った声をした緒川が、

『翼さん！いったい何が起きていますか?!』

「すみません。マリアに何か考えがあるようなので、そちらはお任せします」

隣でハンドルを握るマリアはさつきから黙ったままだ。翼は通話を切り、

「いい加減説明してもらいたいところだ」

「思い返してみなさい」

「？」

マリアに言われた通り、さつきの女との戦闘を思いかえす。明らかに誘うような戦い方、待ち焦がれていたと言った彼女の言動。その全てを勘定に入れ、マリアは断言する。

「奴の狙いは他でもない、翼自身とみて間違いない」  
「っ」

「この状況で被害を抑えるには、翼を人混みから引き離すのが最善手よ」

「ならばこそ、皆の協力を取り付けて……」

翼は反論するが、

「ままならない不自由を抱えている身だからね……」

マリアの脳裏に死刑を回避した日、その条件を提示されて日のことが蘇る。

自身の高い知名度を生かし、事態を穏便に収束させるため、国連所属のエージェントとして聖遺物を悪用する組織に潜入捜査をしていた。というカバーストーリー。実は正義の味方だったアイドルがチャリティーコンサートを行うというプロパガンダ。

そんな提案を自分たちと行動してきた、一時的とはいえ協力した仲間たちの将来を人質に取られ、彼女は強制的にそれを受け入れさせられた。

マリアは悔しさに歯を食いしばりながら、

（それでも、そんなことが私の戦いであるものか……！）

表情を歪ませるマリアの横顔を翼が見つめる。そしてふと前を向くと、振り切ったはずのフラメンコドレスを着た女が目の前で剣を携えて待ち構えていた。

「マリアッー」

「っ」

マリアはブレーキを踏むことなく、アクセルをさらに踏み入れた。車は加速するが、女は避けるようなそぶりを全く見せず、剣を勢い良く振りぬいた。

それは車の上半分を真っ二つに切り裂いた。二人は咄嗟にリクライニングレバーを引き、その斬撃を回避する。まさに紙一重のタイミングと位置だった。

運動エネルギーに従って走り続ける車の中で起き上がる。翼がペダントを取り出し、聖詠を歌う。

「Imyuteus Amenohabakiri Tron」

青き剣のシンフォギア、天羽々斬を身に纏う。爆発する車からマリアを救出し、月をバックに跳躍した。そして着地後、マリアから手を離し、刀を大剣へと変形させて斬りかかる。女も剣で受け止めた。彼女は落ち着き払った声色で、

「剣は剣でも私の剣は剣殺し、『ソードブレイカー』……」

剣殺しの名の通り翼の大剣が粉々に碎け散る。大剣へと変形させる前の刀を構えたままバックステップで距離をとる。

すると女は赤い発光体の入った結晶を取り出し、自身の周囲にばらまいた。道路に当たって結晶が砕け、中の発光体が露出する。そしてその発光体は化学式のような陣を作り出し、そこから無数のノイズが召喚された。

「ああ、そんな……ノイズ?! どうして……?!」

ネフィリムの炎で焼かれたはずのノイズが目の前によみがえったのだ。マリアがうろたえるのも無理もない。

それは日本。クリスの前にも表れていた。

『クリスちゃん!』

「分かっているって。こっちも旧友と鉢合わせ中だ」



S・O・N・G.での解析の結果、やはり過去に出現したノイズと反応波形が一致する。藤堯には昨夜に検知した反応と今回のノイズ反応が一本線に繋がる。

「昨夜の未確認パターンはやはり……!」

「ソロモンの杖も、バビロニアの宝物庫も一兆度の熱量に蒸発したのではなかったのかツ?!」

弦十郎は自らの手に拳を打ち付ける。

そんな会話を雷はビルの上を駆けながら耳にしていた。

（一兆度で蒸発しない?!太陽よりも熱いのに?!まさか……でも……それがホントだとしたら……）

「情報が少なすぎる!」

思考を回すが、新たに現れたノイズを見ていない以上確証を掴めない。一つ舌打ちを入れた。

翼がノイズに刃をふるう。斬断されたノイズの残骸が赤い粒子へと姿を変える。

「あなたの剣、おとなしく殺されてもらえると助かります」

「そのような叶え出を、未だ私に求めているとはツ!」

次々に襲い掛かってくるノイズを切り裂いていく。再び刀を構え、

「防人の剣は可愛くないと、友が語って聞かせてくれた!」

「こ、こんなところで言うことか……!」

場違いだが翼は笑みを浮かべ、彼女の物言いにマリアは赤面する。雪崩かかってくるノイズの群れを一息に切り崩し、脚部のブレードを展開して逆立ちのままコマのように切り裂いていく。

### 『逆羅刹』

場所は違えどクリスも翼と同じくノイズの群れを一掃していく。そこには余裕が見て取れた。アームドギアをガトリングに変形させ、

「どんだけ来ようが今更ノイズ!負けるかよツ!」

ノイズを赤い粒子へと変えていった。

「間に合ったッ!」

そんな時、雷がようやくクリスのもとへと到着した。ビルの屋上から飛び出し、上空から再び現れたというノイズの姿を視認する。雷は

息を呑んだ。姿形は確かにノイズ。しかし、一部が異なっていた。個体によって場所は違えど必ず一つはある発光器官……。

嫌な予感がする。雷の背筋に寒気が走った。

「クリスッ！受けちゃだめだ、避けてッ！」

「ッ?!」

雷の叫びを耳にしたクリスだったがもう遅い。すでにノイズはクリスのアームドギアに触れていた。

時を同じくして翼の振るった刃の切っ先が武者のようなノイズの発光器官に触れる。すると本来はノイズに分解されないはずのシンフォギアが触れた場所から崩れ始め、赤い粒子へと変換されていく。  
(剣がッ?!)

ノイズはされに接近し、その発光器官がギアの心臓部、コンバーターユニットを傷つけた。そしてそこからひび割れていく。

「何……だと……?!」

「嘘……」

それはクリスも同じだった。予想を遥かに上回る出来事に思わず言葉をこぼした。

街灯の上でディーラー風の女がポーズを決めながら、

「ノイズだと、括った高がそうさせる……」

ノイズに対抗するために存在するはずのシンフォギアが、ノイズによって分解されていく。

「敗北で済まされるなんて、思わないことね」

S. O. N. G. では彼女たちと同じ、いや、それ以上に混乱に落

ちていた。

「どういうことだ?!」

「二人のギアが分解されています！」

突然雷からの通信が入る。

『あれはノイズなんかじゃありませんッ！ノイズの皮をかぶった別物ですッ！』

「ノイズでは……ない……?!」

別位相に存在する居城、チフォージュ・シャトー。その玉座にキャ

ロルは鎮座していた。

「アルカ・ノイズ……。何するものぞツ！シンフォギアアアアアアッ！」

彼女の絶叫がシャトー内部に響き渡る。新たに現れたノイズの名はアルカ・ノイズ。台座には目覚める前の、ガリイにミカと呼ばれた赤いオートスコアラー。

そして地下奥深くにあるチフォージュ・シャトーの心臓部。キャロルの計画に必要なこの城の動力源。

その中心部。紫の道化師のような恰好をしたオートスコアラーが、片手で逆立ちをしてポーズを決めながら、目覚めの時を待っていた。

## 陽動陽動また陽動

ノイズとは似て非なる存在、アルカ・ノイズによって翼のシンフォギア、天羽々斬が分解されていく。しかし、歴戦の防人である彼女は直ぐ様二の太刀をバインダーから射出。自身のギアを分解した侍のような見た目のアルカ・ノイズを両断する。

「はあッー……ッあー！」

「翼ッー！」

だが、それは苦し紛れの一撃。ギアが耐えきれぬはずもなく、ついには粉々に砕け散ってしまった。倒れ込む翼にマリアが駆け寄る。

女のほうを向く。彼女が召喚したアルカ・ノイズはまだ相当数残っており、ギアを持たぬマリアからすれば進退窮まった状態だ。もし持っていたとしても一歩間違えれば翼の二の舞となる。攻略は難しいだろう。

女は剣を持ち、ポーズを決めながら、

「システムの破壊を確認。これでお仕事はひと段落ね……」

そう言うって軽くステップを踏むと、彼女の足元に陣が形成される。それは一瞬だけだったが、次の瞬間にはアルカ・ノイズの群れが陣の中に消えていった。

○○○

一方、クリスのシンフォギアも限界を超え、完全に分解されてしまっていた。

「クリスさんー！」

倒れた彼女にエルフナインが駆け寄る。

「クリスさんー！クリスさんー！」

必死に声をかけるが反応が返ってこない。完全に気を失っていた。こちらでアルカ・ノイズを召喚した女が街灯から飛び下りる。

S・O・N・G. ではあまりの出来事に現実が受け止めきれない。  
ない。

「イチイバル……反応途絶……」

「ノイズに……嘘だろ……？だってシンフォギアが……」

「あの分解は、ノイズの炭素転換ではないのか……?!」

この事態には弦十郎すらも立ち尽くすことしか出来ない。そんな絶望的な空気が漂う中、一人の少女の声が通信から響いた。

『轟雷！交戦、開始しますッ！』

「無茶だ！相手はギアすらも分解するんだぞッ?!」

「そうよ！今はクリスちゃんと252を回収して撤退してッ！」

藤堯と友里が交戦を宣言した雷に反対意見を言う。当然だ。場所は違えどシンフォギアを二基も失い。ともすれば人命だって失ってしまうかもしれないのだから。だが、雷はその反論はすでに想定内と言うように間髪入れずに対応した。

『策はありますッ！それに、クリス達の事なら切ちゃんとしらちゃんを呼んでいますので大丈夫ですッ！』

『リンカーもなしに彼女たちを?!危険す……』

雷は強引に通信を切った。それは自分が一番よく分かっていると言う言葉を胸に秘め、今は前だけを向いた。

右の脚部ユニットを展開し、電光が足全体を覆う。体を横倒ししながら体をひねって回転を加え、女の脳天に向けて回し蹴りを叩きこんだ。

『稲玉落とし』

「でやあッ！」

「ッ?!」

完全な不意打ちだったが、女は咄嗟に両腕を頭上でクロスすることで何とか受け止める。蹴りを受け止められた際の反動で雷は地面へと着地する。その瞬間にクリスとエルフナインに向けて斥力フィールドを展開し、切歌たちが来るまでの時間稼ぎとした。

先手を打ち込んだ雷だったが、一二の手をすぐに打とうとはせず、動きを止めた。しきりに目を動かし、何やら脳内から該当する言葉を引っ張り題しているようだ。一撃を受け止められた際に引っかかるところがあつたらしい。

『改造人間……違う。……人造人間……これも違う。……自動人形……か?』

彼女の中で確信に至った。分かりづらいが人形のような球体関節。陶器のように固く、異様に白い肌。その全てが証拠として彼女の脳内に突き刺さった。

女は一瞬目を見開き、口元に微笑みをたたえ、

「地味だが慧眼だ。マスターが目をつけるだけのことはある」

正確にはオートスコアラーという呼び名があるのだが、一目で見抜いたことに敬意を抱き、あえて訂正はしなかった。

雷には「マスター」というワードが引つかかったが、今は優先すべきことではないとかぶりを振る。相手が人形ということが分かった以上、人体構造を超えた動きをする可能性がある。そのことを勘定に入れ、雷は距離を詰めるべく眼前にいるアルカ・ノイズに拳を叩きこんだ。稲妻を纏った拳がアルカ・ノイズを吹き飛ばし、赤い粒子へと姿を変えた。予想が確信へと変わる。

「発光器官以外は普通のノイズと変わらない……か」

試しに発光器官に向けて稲妻の矢を放つが、すげなく分解されていく。これで確定した。ならばやりようはいくらでもある。さらに一歩踏み込み、回し蹴りで邪魔をするノイズを蹴り飛ばしながら女の前へと躍り出た。

「っ」

女はコインをどこからともなく取り出し、雷に対して集中的に放つ。が、

「押し通るッ！」

『Assault・Force』

全身のユニットから強力な斥力フィールドが彼女の周囲に展開され、襟に追加されたユニットから稲妻がマフラーのように放出された。エネルギーのほとんどを防御と速度に振っているため、動きの一つ一つが加速する。そしてその機動力と防御力に物を言わせ、ばら撒かれるコインの弾幕を意に返さず一直線に突破した。

「派手に突破してきやがる……！」

「はあッ！」

「ッ……！」

懐に入り込んだ雷は拳を叩きこむが、女はコインをトンファーのようにしてそれを受け止める。女の体が少し後ずさった。

この状態では攻撃のために稲妻を使うことは出来ないが、生み出される加速力によってインパクトそのものの威力は上昇する。だが、決め手に欠けるのは事実。更に彼女の全身を覆う斥力フィールドは時間経過で減衰してしまうのだ。

このままではらちが明かない。しかし、もうそろそろだと雷はほくそ笑む。丁度その時、上のほうから声が響いてきた。

「姉ちゃん！待たせたデス！」

女の顔が切歌のほうを向いた。雷はその隙を見逃さず、前蹴りを入れて強引にクリス達から距離をとった。視界の端で見たが、なぜかヒーローのように体に旗のようなものを巻き付けていた。そして彼女は勢いよくそれをはぎ取り、

「Zeios Igalima Raizen Tron」

「取るなら何でつけてきたの……」

「それは言わないお約束デス！」

雷のツツコミを返しながらイガリマを纏い、鎌のブレードをブーメランのように投擲した。

『切・呪りeツTお』

雷の展開した斥力フィールドを突破しかけていたアルカ・ノイズを刈り取っていく。着地すると同時にリンカーを使用していない適合係数の低さから彼女の体に痛みが走る。

雷は女と相対しながら、

「切ちゃん！ノイズの発光器官に触れちゃダメ！ギアでも分解される！」

「了解デース！」

そう言つて鎌を勢いよく自分の体ごと振り回し、コマのようになってノイズの群れへと突入する。

『災輪・TいN渦あBエル』

ひとしきり切り刻んだ切歌は次なる目標へと跳躍した。

女は雷とにらみを利かせ合いながら、

「派手にやってくれる……」

「自慢の妹分だよ」

この状況をS・O・N・Gも捉えていた。

「切歌ちゃんが状況介入?!」

「リンカーを投与せずにか?!」

「雷ちゃんが言っていたのはこういう事だったのか!これでいければ……!」

少女に命をかけさせなければ状況を打破できないという現実には、弦十郎は悔し気に歯を食いしばった。

切歌がアルカ・ノイズの群れを斬滅していくが、それに気をとられているうちに完全にフィールドが解除されてしまった。

背後に忍び寄っていたアルカ・ノイズに気づかなかつたエルフナインは慌てて振り返る。だが、群れてきたノイズを無数の小型鋸が飛翔し、切り裂いていく。調も到着したのだ。彼女は一息に跳躍し、上空から面制圧を仕掛ける。

『α式・百輪廻』

「女神……ザババ……」

助けが来て緊張の糸が切れたのか、倒れかけたエルフナインを調が回収する。

「派手な立ち回りは陽動……?」

「その通り……だッ!」

『雷乱神楽』

雷は腕部ユニットから小型の矢を稲妻で形成し乱射、目くらましとして調と共に離脱する。切歌も同じくして脱ぎ捨てた旗を回収し、それで一糸まとわぬ姿のまま気絶しているクリスの体を包み込んでから離脱した。

「陽動もまた陽動……」

調は鋸を車輪のようにして道路を疾走する。途中でアルカ・ノイズが向かってきたが、それを難なく引き切り裂いた。が、調も切歌と同じくリンカー不使用の適合係数の低さから体に激痛が走り、痛みから展開を解除してその場で停止する。



(やっぱり、私達の適合係数では、ギアをうまく扱えない……！)

切歌が街灯の上に着地し、雷が調の横に並んだ。

「調！」

「しらちゃん……」

「大丈夫！今はそれよりも……」

「分かってるデス！」

「ごめん……」

切歌は威勢よく返事をし、雷は申し訳なさに謝罪を口にした後、夜明けの迫る街を駆けて行った。

雷と相對した女、レイアが独り言のように誰かに話しかける。

「予定にない闖入者。指示をください」

通信の相手、マスターことキャロルはサイズの合わない玉座に鎮座しながら、

「追跡の必要はない……。帰投を命ずる……。フアラも十分だ」

「分かりました……。ではその様に……」

ロンドンで翼たちと相對したオートスコアラの女、フアラはテレポートジェムを地面に落とし、一瞬で姿を消した。

○○○

チフオージユ・シャトー内でキャロルは足を組み、起動している三体目のオートスコアラ、ガリイに指示を出した。

「ガリイ。ルシフを起こせ」

「いいんですかマスター？ミカちゃんだけで十分な気がしますが」

「構わん」

「りようかい」

キャロルの言葉にガリイはニマアっといやらしい笑みを浮かべ、カラコロと可愛らしい音を立てながらシャトーの最奥へと下りて行った。

## 拭えぬ敗北

雷、調、切歌の装者三人が離脱していくのをS・O・N・Gは確認していた。

「雷ちゃんと言ちゃん、切歌ちゃん離脱。クリスちゃんや保護対象の無事も確認しています」

「装者との合流と回収を急ぎます！」

藤堯が冷静にデバイスを操作していく。拭いきれない敗北感が漂っており、弦十郎の目は保護対象の少女、エルフナインを捉えていた。

(錬金術師キャロルと、同じ顔の少女……)

疑念が深くなっていく。

○○○

時刻はすでに月が沈み、太陽が顔を出していた。朝日が海を青く輝かせる。

三人は沿岸部を疾走していたが、調の足が止まった。それに合わせて雷と切歌が彼女のもとにやってくる。リンカーもなしにシンフォギアを装着しているため負荷も高いはずなのに、二人はおくびにも出していない。そんな二人に雷は耐えきれなくなつて俯きながら、

「ごめん……二人とも……。リンカーが無かつたら命だつて危ういの無理言っちゃって……。こんなんじゃ……。お姉ちゃん失格だよね……」

声を震わせながら言う彼女の物言いに切歌はむつとして、

「リンカーがなくなつて、あんな奴に負けるもんかデス！」

「切ちゃん……」

「分かつてるデス……！」

調だつて切歌の言いたいことはよくわかっている。

自分たちのせいで姉と慕う雷にこんな表情をさせてしまっていることに対する憤り。彼女を笑顔にし、自分たちに自由をくれた組織に貢献したいという気持ち。そんな思いが頭の中でごちゃ混ぜになつてこんな言い方になつてしまったのだ。

だから、

「私達、どこまで行けばいいのかな……」

「行けるとここまで……デス……」

「でもそれじゃ、あのころと変わらないよ？」

「っ」

雷の息が詰まる。

彼女自身F・I・Sの聖遺物適合者として記録はないものの籍を置いていたが、言ってしまうえば部外者ではない。しかも彼女たちがシンフォギアに関する実験をしていた時期と、自身の記録が抹消された―ケラウノスに適合した―時期は重なっていない。

そのため雷は調や切歌、他のレセプターチルドレンの苦しみを本当の意味で理解できていない。彼女たちがどんな思いで、どんな痛みを背負ってここまで来たのかを知らないのだ。

再び走り始める。

「ママやマリアのやりたいことじゃない。あたし達が、あたし達のやるべきことを見つけられなかったから、あんなふうになってしまったデス」

「目的もなく、行けるところまで行っただころに、望んだゴールがあるなんて保障なんてない……。がむしやらただけではダメなんだ……」

切歌が立ち止まり、それに合わせて雷たちも立ち止まる。

「もしかして姉ちゃんがあたし達を向かわせたのって……」

「二人が道に迷ってるなら、私が道を指し示せばと思っただけだ……。結局、私もまだ幼かったよ……。結果的に良かったけど、一歩間違えれば死なせてたかもしれない……」

近くにあった壁に自らの腕を無意識で叩きつけた。腕が壁にめり込む。ギアを纏っているためにダメーჯこそなかったが、もしも生身であったなら腕の骨は容易に砕けていただろう。突然のことにびつくりしながらも調達は雷のもとにより、

「姉さんのおかげで私達も先が見えた……。だから自分を責めないで……」

「ッ……ごめん。わかった……」

深呼吸して自分を落ち着かせる。

そんな時、雷のぶつけた拳の音が効いたのかクリスがうめき声を上げた。

「あ……」

「よかった」

「大丈夫デスか?!」

彼女は怒りのままに、

「大丈夫なものかよッ!」

三人は顔を見合わせる。

(守らなきゃいけない後輩に守られて、大丈夫なわけないだろッ……!)

怒りと情けなさがクリスを襲った。

○○○

天羽々斬を破壊されたため翼は一糸まとわぬ姿になってしまっていたが、マリアの衣装の一部を使って応急的に隠している状態になっていた。

ボロボロになったペンダントを見つめながら、S・O・N・G・に通信を入れていた。

「完全敗北、いえ、状況はもつと悪いかもかもしれません。ギアの解除に伴って、身に付けていた衣服が元に戻っていないのは、コンバーターの損壊による機能不全であるとみて間違いないでしょう……」

「まさか、翼のシンフォギアは……」

「絶刀・天羽々斬が折られたということだ……」

たしかに天羽々斬は折られてしまった。しかし、翼の中の剣は折れてはいない。だが、それでも全くよくないのが現状だ。

「クリスちゃんのイチイバルと、翼さんの天羽々斬が破損……」

「了さんがいない中、一体どうすればいいんだ……」

記録やデータとしては残っているが、治すための腕が存在しないのであれば意味がない。重い空気が漂い始める。

弦十郎が、

「響君の回収はどうなっている」

『もう平気です。ごめんなさい……。私がキャロルちゃんときちんと話が出来ていれば……』

「話を……だと……？」

すぐに響から返答が返ってきた。話すという思いもよらなかった言葉に面を喰らうてしまう。

ロンドンでは規定を遥かに超えた行動をしたマリアを捕縛するために複数の黒服を乗せた車がマリア達を囲った。更に彼らは拳銃を向け、

「状況報告は聞いている。だがマリア・カデンツァヴナ・イヴ、君の行動制限は解除されていない」

だがマリアは冷静に翼のもとへと歩みより、彼女の耳から通信機を取り外した。そしてそれを自分の耳に当て、

「風鳴指令。S. O. N. G. への転属を希望します」

「マリア……」

「ギアを持たない私ですが、この状況に、偶像のままではいられません」

そう言つてマリアは、マムの逝った場所である月を見上げた。

○○○

少し時は立ち、リディアン。

雷たちは家庭科の授業でグループを組み、ビーフストロガノフを作っていた。レシピを完全に覚えていた雷だったが、響たちが目分量と勢いで作り始めてしまったため、「もうどうにでもなれ」と言わんばかりにすべてを投げ出してしまっていた。そんな時、唐突に創世たちが歌い始めた。その歌のタイトルは「ビーフストロガノフの歌」だ。

雷は三人にジト目を向け、

「気前良く歌つてますがねお三方。それでできるのはビーフストロガノフじゃなくてビーフストロガノフ的なサムシングですからね」

「ハハハ……」

そんな物言いは未来以外に聞き入れられることなく結局勢いで作ることとなってしまった。

響は包丁で牛肉を切りながら、

「いや、ビーフストロガノフって名前なのに、よもや牛肉以外でもオツケーとは恐れ入ったね。ロシア料理の懐は広大だよ」

「あんまりおしゃべりしていると、食べる時間が無くなっちゃうよ？」

響は未来のほうを向いた。だが、包丁を止めず、

「だいじょうぶだつてえ、あ痛てえっ」

「響！よそ見してちゃ……ああ……」

雷が止めるも一足遅く、響は自分の指を包丁で切ってしまった。未来がすぐに絆創膏を巻く。その時に雷が取り乱し、それを創世たちが取り押さえるというトラブルがあつたが、比較的直ぐに収まっている。

未来が救急ポーチを持ちながら、

「包丁を扱つてるときにうつかりしてるんだからあ」

「そうだよね……。お料理の道具で怪我をするなんて、良くないことだよね……」

「響がなんか難しいこと言ってる……。珍し……」

雷が茶化すが、響が何を思って言ったのかを理解していた。響の眉が悲し気に沈む。

（シンフォギアは、みんなを守る人助けの力なんだ……。その力で誰かを傷つけるなんて、したくない……）

（私からすれば、みんながどうかよりも響に傷ついてほしくないんだけどな……）

誰にも気づかれないうちに、雷は小さくため息をついた。

響の様子を不安に思った未来は、

「この間の出勤で何があつたの？調ちゃんとか切歌ちゃんも検査入院してるんでしょ？」

「ちよつと……無茶しちゃつてね……」

その問いには雷も対象に含まれていた。二人をこんな目に遭わせたのは自分の所為だと内心落ち込む。流星にもう彼女たちに止められているので自傷には走らないが、それに雷の中で切歌が「退屈デース！」と雑誌を放り投げ、調が「病院食は……味が薄い……」と文句

を言っている光景が鮮明に映し出されていた。複雑だがあまりにもしていきそうな行動と言動だったため、少しだけ苦笑いを浮かべる。

ふと未来のほうを見ると、頬をむくれさせていた。どうしたのか気になって響のほうを向く。すると響は黙ったまま俯いていた。そして両者の顔を交互に見た後、響の肩を慌てて揺すり始めた。

「ちよ?!響!未来がすごい顔になってるから!」

「へっ?」

「そこまですんごい顔にはなってますん!」

未来に言われて雷は一步あとずさり、響が慌てて取り繕い始める。

「ああ!うん!でも心配しないでえ!話し合えばきつとわかってもらえるから!」

そう言つて後ろを向いた。未来はまだ頬を膨らませながら、

「いっつもそう!」

そう言つて未来は俯き、表情を曇らせる。

(新しい敵がどうかより、まずはこの二人だよなあ……)

雷は鍋の中に切った食材を適当にぶち込んだ。レシピはもうとつくの大昔に無視している。

## オートスコアラ―全機起動

翼とマリアは日本へ帰国すべく専用のジェット機に乗っていた。天羽々斬がノイズに破壊されてしまうという本来なら在り得ない事態に直面したうえ、襲撃者、ファラの実力が自分よりも強いという事実が翼の表情を暗くさせる。

彼女の中でロンドンを発つ直前のトニー・グレイザーとの会話が蘇る。

「日本に戻ると?」

「世界を舞台に歌うことは、私の夢でした。ですが……」

胸の前で拳を握り、決意する。それを見てトニーは、

「それが君の意思なら尊重したい。だが、いつかもう一度自分の夢を追いかけると、約束してもらえないだろうか?」

「それは……」

この先の戦い、どうなるか翼自身もよくわからない。勝つことが出来れば御の字だが、負けてしまうかもしれない。もしそうなれば自分の命などありはしないだろう。というよりもすでに命をとって戦うなど承知の上、覚悟の上だ。結局、彼に返答することが出来ず、あまいな返事でロンドンを出立した。

そんな彼女をマリアが見つめていると、ジェット機のアナウンスが鳴った。もうそろそろ日本へと到着する。戦いは避けられない。

緒川に荷物を預け、暗い表情のまま空港内を歩いて行くと、

「翼さーんー! マリアさーんー!」

と、響の元気な声が聞こえてきた。相も変わらず元氣そうに腕をぶんぶん振っている。彼女を見ると、翼のこわばった頬も自然とほころんだ。

○○○

雷たち装者全員がS・O・N・G基地である潜水艦にそろっていた。彼女たちお前で弦十郎は腕を組み、

「シンフォギア装者勢ぞろい……とは、言い難いのかもしいないな」

モニターに破壊されたギア二基のコンバーター、その詳細が表示さ



れる。

「これは……？」

「新型ノイズに破壊された、天羽々斬とイチイバルです」

「ひどい……」

実物を見なければさらに細かいことは分からないが、一目見ただけでかなりの損壊があることが見て取れた。思わず雷がつぶやいてしまふ。

藤堯が補足する。

「コアとなる聖遺物の欠片は無事なのですが……」

「エネルギーをプロテクターとして固着させる機能が、損なわれている状態です」

マリアがフロンティア事変で完全に損傷したアガートラムを取り出し、

「セレナのギアと同じ……」

「もちろん治るんだよな？」

クリスが腰に手を当てて言うが、彼女の横で真つ先に雷が首を振る。

「櫻井理論は世界に開示されてるし、そうでなくても私が覚えているから理論上では可能だよ。でも私には了子さんやお母さんみたいな腕がない……。技術的に不可能なんだ……」

彼女の両親はシンフォギアであるケラウノスを開発した人物だが、彼らは得意分野で仕事を分担していた。母親である瞳がギアそのものを構築する技術者として、父親である斗真が理論を構築した科学者として夫婦でタッグを組んで活動していたのだ。

雷自身は何方かと言えば父親である斗真似で理論の構築―戦闘の際にも役立っている―は得意だが、それなりの技術はあるものの瞳の域、即ちギアの開発が出来るほどの技術に至っていない。

彼女の言葉で更に空気が重くなる。

「現状、動ける装者は響君と雷君の二人のみ……」

「私達だけ……」

だが、それに反論する者がいた。切歌と調だ。

「そんなことないデスよ！」

「私達だつて……！」

「駄目だ！」

「ッ」

「雷……」

弦十郎が水を差す。雷は歯を食いしばって俯き、両の拳を握りしめた。あまりに力みすぎているため腕が小刻みに震え、手のひらから赤い血がにじみ出てきている。彼女たちにこんな自信をつけさせてしまったのは自分だと言わんばかりに自分を責める。そんな彼女の肩に響がそつと手を置く。

「どうしてデスか?!」

「リンカーで適合値の不足値を補わないシンフォギアの運用が、どれほど体の負荷になっているのか……」

「君たちに合わせて調整したリンカーがない以上、無理を強いることは出来ないよ……」

実際、昨夜の戦闘データを確認すると、二人の体に少くない負荷がかかっているのは見て取れた。情もあるだろうが、合理的にも間違っていない。

「何処までも私達は、役に立たないお子様なのね……」

「メデイカルチェックの結果が思った以上に良くないのは知っているデスよ……。どれでも……」

自分たちの不甲斐なさが情けなく感じる。だが、

「こんなことで仲間を失うのは、二度とごめんだからな」

「その気持ちだけで十分だ」

先輩たちがフォローをいれた。

○○○

キャロルの居城、チフォージユ・シャトーの玉座の前。そこに起動する前のミカと、シャトーの最奥にある動力部からこちらも起動前のルシフが運び込まれていた。

まずミカの前にガリイが立ち、

「いきまあす」

彼女はミカに口づけを交わし、自分たちオートスコアラーのエネルギーである思い出を譲渡する。エネルギーを入れたミカは古いブリキのロボットのようになぎこちない動きでその場にへたり込んでしまった。まだ完全に馴染んではいけないらしい。

「最大戦力となるミカを動かすだけの思い出を集めるのは、存外時間がかかったようだな」

「嫌ですよお。これでも頑張ったんですよお？なるべく目立たずに、事を進めるのは大変だったんですからあく〜ん」

目立たずにと言っているが、人通りの少ない夜中とは言え町中で暴走族の思い出すべてを吸い取るのはその後かなり目立つだろう。

だが、

「まあ問題なからう……」

と区切りをつけ、中央で片手で逆立ちをして機能を停止しているルシフに向けて、

「ルシフ！起きろ、目覚めの時間だ！」

叫んだ。本来、機能停止したオートスコアラーを動かすにはミカにやった通り思い出を摂取させねばならない。だが、彼女は違う。ルシフの行使する錬金術の特性により、彼女は思い出を必要としないのだ。その為、彼女はキャロルの声ですぐに目を覚まし、

「O☆？ボクを呼びましたかマスター☆？出番ですKA☆？」

片手逆立ちの状態から腕だけでぴよんと飛び起き、キャロルの前で仰々しくお辞儀をする。彼女の道化師のような恰好も相まってサーカスのピエロのようだ。

キャロルは立ち上がり、

「これで、オートスコアラーは全機起動。計画を次の階段に進めることが出来る……」

「ふあああ……、ああああ……」

満足に腕を上げることすらできないミカが気の抜けるような声を上げた。そんな彼女にルシフははじけるようなステップを踏みながら近寄り、

「どうしたんですかミカちゃんNN☆？おなかでも空いたんですKA

☆？ボクと違って思い出がないと満足に動けないなんて不便ですN  
E☆」

あざ笑うようにミカに顔を近づけた。当然それで不機嫌になった  
ミカはクマのような腕を振るイルシフに攻撃するが、彼女はひよいと  
体をのけぞらせて回避する。

そんな彼女たちの間にキャロルが割って入った。

「不必要に優等性を主張するなルシフ。それでミカ、どうした？」

「悔しいけどコイツの言った通り、お腹が空いて動けないゾ……」

ミカの言葉を聞いて彼女から距離をとっていたルシフがニヤニヤ  
と笑みを深くする。そんな彼女を無視してキャロルはガリイに命令  
した。

「ガリイ……」

「ハイハイ……。ガリイのお仕事ですよねえ……」

「ついでにもう一仕事、こなしてくるといい……」

するとガリイは振り向き、

「そう言えばマスター、エルフナインは連中に保護されたみたいですよ……」

「把握している……」

キャロルは片目を閉じて言った。そしてしばらくすると彼女はニ  
ヤリと笑みを浮かべ、

「ほう……？？鋭いやつがいるじゃないか。言ってくれ……」

と一人、楽しげにつぶやいた。

## 雷の推理

S・O・N・G 基地内のとある一室。

そこでエルフナインからもたらされるキャロルの詳細や、その他もろもろを聴取していた。弦十郎と装者全員が彼女の話に聞き入っている。

因みに雷は両掌から出血していたため、先にメデイカルルームで治療を受けていた。何かわかったことや、違和感を彼女の話から感じたらすぐに話すようにと弦十郎から言われている。

包帯やガーゼの具合を確認しながら他のメンバーと同じく話に耳を傾けた。

「僕は、キャロルに命じられるまま、巨大装置の建造に携わっていました。ある時アクセスしたデータベースより、この装置が世界をバラバラに解剖するものだとして知ってしまい、目論見を阻止するために逃げ出してきたのです」

能動的ではなくあくまで受動的……。雷は脳内でノートに書き記した。ただそれだけのことだが、この少しの違いだけで相手方、キャロルへの対応も変わるのだ。

クリスが疑念を持ちながらも、

「世界をバラバラにたあ穏やかじゃないな……」

エルフナインが頷く。

「それを可能とするのが錬金術です。ノイズのレシピを元に作られたアルカ・ノイズを見ればわかるように、シンフォギアをはじめとする万物を分解する力は既にあり、その力を世界規模に拡大するのが建造途中の巨大装置、チフォージュ・シャトーになります」

「装置の建造に携わっていたということは、君もまた、錬金術師なのか？」

翼の問いにエルフナインは、

「はい……。ですが、キャロルのようにすべての知識や能力を統括しているのではなく、限定した目的のためにつかられたにすぎません……」

「作られた……う？」

「装置の建造に必要な、最低限の錬金知識をインストールされただけなのです」

「インストールと言ったわね？」

「必要な情報を、知識として脳に転送・複写することです」

エルフナインは眉をハの字にして俯き、

「残念ながら、僕にインストールされた知識に計画の詳細はありません……。ですが、世界解剖の装置、チフォージュ・シャトーが完成間近だということは分かります！」

彼女は身を乗り出し、感情的に、

「お願いです！力を貸してください！そのために僕は、ドヴェルグⅡダインの遺産をもつてここまで来たのです！」

そう言つてエルフナインは手に持つ匣に目を向ける。その匣の中に、複数のルーン文字によって封印された、非常に強力、もしくは危険な何か閉じられているのだろう。

「ドヴェルグⅡダインの遺産……？」

「アルカ・ノイズに、錬金術師キャロルの力に、対抗しうる聖遺物……。魔剣・ダインスレイフの欠片です……！」

エルフナインは匣の蓋を開け、聖遺物、ダインスレイフの刀身の欠片と思わしきものを取り出した。

ひとしきり聴取を終え、エルフナインの身体情報を確認しようとしてリッジに移動していた弦十郎だったが、雷に呼び止められた。

「すみません、弦十郎さん」

「ん……。すまんが先に向かつておいてくれ！」

「分かりました」

装者たちを先に向かわせ、雷と共にエルフナインのところに戻っていく。他のところでもいいはずだが、エルフナインにも聞かせた方がいいと言うのだ。流石にさつき出て言っただけなだけにすぐに戻ってきた二人にエルフナインが面食らっている。

「ど、どうしたんですか？」

「少し、雷君が話があるようなんでな……」

雷は深呼吸して調子を整え、

「結論から言います。すべてはキャロルの手のひらの上です」

「ッ?! ということだ?!」

「そんなはずありませんッ! キャロルの放った追手から、命からがら逃げだしてきたんですよ?!」

衝撃的な彼女の発言に弦十郎が驚愕し、あり得ないとエルフナインが詰め寄る。

だが、雷は首を振り、

「君がキャロルの計画をデータベースから見つけ、ダインスレイフを持って逃げ出し、ここに收容されること。たぶん、その全てがキャロルの計画の一部なんだ」

「ッ」

エルフナインが言葉を詰まらせ、項垂れる。何せ自分のしてきたことすべてがキャロルの計画に入っていたのだ。そうなるのも無理はない。

弦十郎は腕を組み、唸り声を上げながら、

「そう結論に至った根拠は? 君の事だ、当然理由があるのだろうか?」

はい。と雷は頷き、

「正直なところ、逆算なので運がよかったところもあるのですが、筋は通つてると思います。まず一つ。追っ手の戦闘能力です」

そう言つて一本、指を立てた。

「戦闘能力?」

「はい。エルフナインを追っていたオートスコアラ。あれはクリスと拮抗する程度、少なくとも彼女以上の戦闘力があります」

エルフナインを追っていたオートスコアラ、レイアはクリスと互角の戦闘を繰り広げるほどの力がある。それは勝利条件が異なっていたとはいえ、交戦した雷も身に染みて理解していた。

話を続ける。

「それだけの力を持っているにもかかわらず、君の殺害、および捕獲をしなかった……」

「なるほど、確かにそうだ……」

弦十郎があぐに手を当てた。

「二つ目。エルフナインが計画に触れたのが受動的だということですよ」

そうやって二本目の指を立てる。

「受動的？」

「データベースを閲覧してその計画を知った、ということ自体がキャロルの手中にあるんだよ。重要な計画なら自分の頭の中だけにとどめるか、データベースに置くとしても誰にも解けないようなセキュリティのもとに置いておくはずなんだ」

エルフナインがはっと顔を上げる。思い当たる節があるらしい。

「それを僕が見れたということは……！」

「キャロルが意図的に見せたという方がつじつまが合うし、その計画を打破するためにはダインスレイフが必要……。というふうに見せることが出来る」

なぜダインスレイフなのかは流石にわからないが、重要なのはそこではない。その聖遺物は向こう側から意図的に提供された、というのが重要なのだ。

「エルフナインはダインスレイフをシンフォギアに搭載するつもり、なんだよね？」

「はい……。そのつもりですが……。まさか?!」

「改良されたとしても出力上限は知られている……か」

雷は頷く。そしてエルフナインの瞳を覗きこみ、

「おおよそ間違っていないと思うけど、どうかな? キャロル?」

「え……?」

「どういうことだ雷君……」

二人は困惑を隠せない。なぜエルフナインに、さらに厳密に言えばその瞳にキャロルと呼びかけたのか? 雷はさも当然のように、

「こんな綿密な計画を練るような奴です。何らかの手段で監視をするはず。これが通常の人間相手であれば盗聴器などを使いますが、相手は錬金術師。最も確実に最も正確に相手方の様子をうかがうならば、目で情報を一方通行に得るでしょうから」



と言いつつ放った。

エルフナインは自分がしてきたこと、していることすべてがキャロルの手のひらの上であることを再認識し、目に涙を浮かべる。雷は彼女の頭に手を置き、撫でながら、

「恐らくは確認用だから気にする必要はないよ。君のやるべきことは、例えそれがキャロルの思惑通りだったとしても必要なことだから」

弦十郎は拳を手のひらに打ち付け、

「その後は俺たちに任せろッ！今までが計画通りだったとしても、それを凌駕し、彼女の目論見を阻止して見せるッ！」

それはエルフナインに言い聞かせるようにも、彼女の瞳からこちらをうかがうキャロルに宣言しているようにも見て取れた。弦十郎は不安を取り除くように豪快に笑う。そして雷もにっこりとほほ笑み、二人につられるようにエルフナインもぎこちなく笑顔を浮かべた。

「弦十郎さん、そろそろ行かないと……」

「それもそうだな。俺たちも向かうとしよう」

弦十郎が時計を確認すると結構な時間が立っていた。二人は廊下を歩きながら、

「しかし、良く気づいたな？」

「もし、彼女が計画を知ったのが自分から調べつくし、間違いはないと確信して逃げ出してきたのなら。もしくは昨夜の戦闘を経験していなければ、気のせい程度で済ませていたかもしれませんでした。全部が偶然の産物ですよ」

当たり前のように言っているが、普通は気づかないことだ。

これで逆に迷いなく動くことが出来る。向こうにこちらの情報が筒抜けなのが分かった以上、包み隠さず行動がとれるようになったのは大きい。情報を意図的に制限することもできるし、こちらの出方と向こうの出方を照らし合わせて今回のように推察することも可能だ。更に強化後の最大出力を知られているのも分かったため、もしもの時に身構えておける。

その時ふと彼女がフィーネの正体に行きついたときのことを思い出した。その時と同じように雷の頭を撫でる。

「わわっ。いきなりはやめてください！」

「ハハッ、すまんすまん！」

口ではそう言っているが嫌ではないようだ。大人に褒められ慣れていないというのもあるだろう。ほおが緩み、にやけたような表情を浮かべている。

二人はみんなの待つブリッジに向かって行った。

## 胸の中から消えた歌

ブリッジのメインモニターにエルフナインの身体情報が表示されている。響たちがそれを見上げているとドアが開き、雷と弦十郎が速足で入ってきた。六人は一声に振り向くが、またすぐにモニターへと視線を戻した。

雷は頬を上気させながら、

「すみません！遅れました！」

「すまない。説明を頼む」

弦十郎の指示に頷き、藤堯と友里が説明を始めた。

「エルフナインちゃんの検査結果です」

「念のために彼女の……ええ、彼女のメデイカルチェックを行ったところ……」

「身体機能や健康面に異常はなく、また、インプラントや高催眠と言った、怪しいところは見られなかったのですが……」

二人は言葉を濁す。

その原因はモニターを見れば明らかだ。何故ならエルフナインのメインデータには名前以外の何も、例えば性別や血液型と言った情報が存在していないのだ。

また、弦十郎は友里の言葉に顔を顰めた。雷によって彼女の見たものがキャロルのもとへと通じている——少なくともその可能性がある——のが発覚したが、こちらの技術では影も形もつかめない。改めて敵対する錬金術の力を痛感する。

先の続かない二人に響が、

「ですが……？」

「彼女……エルフナインちゃんに性別はなく、本人曰く、自分はただのホームクルスであり、決して怪しくはないと……」

「「あ、怪しすぎる」デース……」」

何人かの声が重なった。

○○○

陽気な太陽がリディアンに下校する雷たちを照らす。

すると未来が不意に口を開いた。

「私的には、付いてるとかついてないとかはあまり関係ないと思うんだけど……」

「ええええええ?!」

突然響が顔を赤らめ、驚きの声を上げた。エルフナインの性別の事と勘違いしたのだ。

当然そのことを知らない創世が、

「ビツキー何をそんなに?」

「へ?!だ、だって、ナニがどこについてるのかな。なんてそんな……」

「ツイてるツイてない確率のお話です。今日の授業の」

「まーたぼんやりしてたんでしょ?」

ろれつが回っておらず、しどろもどろになりながら答えた響だったが、当然ながらまったく見当違いだったようだ。詩織や弓美の言葉に我に返る。

「あ、あつははは。そうだったよね……」

「響って初心いね。そんなことであたふたするなんて」

悪戯っぽいニヤニヤとした笑みを浮かべながら雷が響の顔を覗き込んだ。響は顔を赤らめながらむっとして、

「な?!雷だっておんなじ位でしょ?!」

「いつしよにされちやこまるな〜」

雷は口元に手を当て、くるくると回りながら響をからかっていく。そんな彼女を見て、年頃の女子高生である創世たちは興味津々だ。未来は表情を曇らせているが、彼女たちは雷に詰め寄り、

「え?!雷って彼氏いたの?!いつ?!」

「え?聞きたい〜?」

創世たちは興奮気味に頷いた。雷の口からどのような恋物語が紡がれるのか、全く予想できないからこそ余計に耳を傾けたくなる。ワクワクとドキドキの入り混じった少女特有の感情で胸を躍らせるが、未来が何を言おうとしているのかに気づいた。彼女は底冷えするよくな冷たい声で笑顔を浮かべ、

「雷、冗談でそんなことを言うのなら……分かるよね?」

「ヒツ……。ご、ごめんなさい……」

「もう、雷の冗談は冗談にならないっていつも言ってるでしょ？」

未来の剣幕に雷は完全にしっぽを丸めてしまった。そして未来の反応で雷が何を言おうとしていたのかを理解した創世たちは「そりや怒られるよね〜」と苦笑いを浮かべた。正直なところ彼女の場合冗談じゃ済まされないのだが、最近未来の前では『明るい雷』で居れたため、少し調子に乗っていた。

雷としては過去を取り戻し、元々よく言っていたブラックジョーク―彼女が人を揶揄うのはここからきていると言っている―を今言っているだけなのだが、彼女の周りが過剰反応してそれを許さないのだ。

内心では、そのことを彼女は昔のようにジョークが言えなくなったのを悲しむと同時に、自分を大切に思ってくれることにうれしく思っている。

未来は流れを切り替えるようにパンつと手を叩き、

「この話はここでおしまい！でも、最近響つてずつとそんな感じ」

「いやあ、いろいろあつてさ……」

少し前、装者たちで集まって話し合いをしていた時の事。

雷は壁に背中を預け、どうすればキャロルたちを出し抜けるのか、彼女たちの目的は何なのか。様々なことに思考を回し、翼が自身の天羽々斬を破壊したアルカ・ノイズ、武者型ノイズの絵をクリスに見せていた。

「コイツが、ロンドンで天羽々斬を壊したアルカ・ノイズ……」

「我ながらうまく描けたと思う」

そこに描かれていたのは、ノイズの特徴が武者であるところしか合っていない、ただのサムライの絵だった。そして絵も大して上手くはない。

当然クリスは、

「なッ……。アバンギャルドが過ぎるだろ?!現代美術の方面でも世界進出するつもりかあ?!」

「問題は、アルカ・ノイズと戦えるシンフォギア装者が二人だけという

事実よ」

翼とクリスの掛け合いを制し、マリアが最年長としてこの場を仕切る。彼女の言葉に響は眉を顰め、

「戦わずに分かり合うことは……出来ないのでしょうか……」

「逃げているの？」

「逃げているつもりじゃありません！ だけど、適合して、ガングニールを自分の力だと実感して以来、この人助けの力で誰かを傷つけることが……すごく嫌なんです……！」

響は表情を苦悶にゆがめるが、マリアは一拍置き、

「それは……力を持つ者の傲慢だ！」

響の主張を両断した。

マリアからしてみれば今の自分では扱えぬ力、戦う力を持ちながらそれを振るわぬ響は傲慢に見えただろう。

(私は……そんなつもりじゃないのに……)

響の表情は暗い。未来もそれを見て眉を落とす。

すると詩織が悲鳴を上げた。それにつられて前を歩いた雷たちは慌てて振り返る。するとそこには、生気を吸い取られ、ミイラのようなになった複数の死体が転がっていた。

彼女たちの左側、即ち今まで正面を向いていた方向から嫌な気配が流れ込んでくる。戦う者である雷と響はすぐさまその気配と未来たちの間に遮るようになり並び立った。

そこには、

「聖杯に思い出は満たされて……いけにえの少女が現れる……」

青いワンピースを着たオートスコアラ。ガリイが木陰に立ち、目を瞑ったまま呟いた。

雷は鋭い視線で彼女の姿をみとめ、攻略のために思考を回し、胸元のペンダントを握る。臨戦態勢は整った。だが、響は彼女とは異なり、

「キャロルちゃんの仲間……だよな？」

「そしてあなたの戦うべき敵……」

「違うよ！ 私は人助けがしたいんだ！ だから、戦いたくなんかない

……」

オートスコアラアの名の通り、人形のように体を動かさず首だけを向けた。それを響は即座に否定する。そもそもその前提条件を戦うこととしているガリイは舌打ちを入れ、アルカ・ノイズを召喚するジェムを取り出す。そしてそれをカラコロと可愛らしい音を鳴らしながら地面へとばら撒いた。

地面とぶつかった際の衝撃でジェムが割れ、中から赤い発光体が錬金陣を展開する。陣の放つ輝きからアルカ・ノイズが召喚された。

ガリイはいやらしい笑みを浮かべ、

「あなたみたいなめんどくさいのを戦わせる方法はよく知ってるの」

「こいつ、性格悪っ!」

「アタシらの状況もよくないって!」

「このままじゃ……」

創世たちの混乱を背後に、雷はこの状況を打破するために思考を回す。

(私達の状況は最悪。未来たちを守りながらアルカ・ノイズを撃破し、どう動くかわからないオートスコアラアを警戒しなくちゃならない……。でも、一番の問題は……)

横目でチラリと響のほうを見る。感情とは別に動く彼女の研究者然とした合理的な頭脳は、即座に響を足手まといだと断定した。今の彼女は覚悟が決まっておらず、最悪の結果も予想される。

しかもアルカ・ノイズの発光器官に触ればギアは即座に分解される。それだけでなくオートスコアラアの口ぶりからして狙いは未来たち。彼女たちを守らなくては意味がない。舌打ちを一発入れた。

ガリイは、

「頭の中のお花畑を踏みにじってあげる」

歌うように言いながら指をパチンと弾いた。それを合図にアルカ・ノイズの群れは雷たちに向かって進行し始める。

「V o l t a t e r s   K e l a u n u s   T r o n」

雷が聖詠を歌い、稲妻と共にケラウノスを纏う。響も彼女に続いてペンダントを取り出し、ガングニールを起動させようとするが、

「……ッ?!……」

「響?」

「響?!早く!」

「歌えない……」

数回せき込んだ後、響がこぼした。ガリイはいら立ちを隠そうとせず、

「いい加減観念しなよ……」

「聖詠が……胸に浮かばない……」

「最悪だ……」

自身の思う最悪の展開に陥ってしまったことに雷は齒噛みする。一層鋭くアルカ・ノイズの群れを見据えた。

「ガングニールが、応えてくれないんだ……!」

最悪の結果である、状況でも響がギアを纏わない。……響がギアを纏えない状況に陥ってしまった。



## 漆黒の烈槍と黄金の神雷

基地の食堂で遅めの昼食をとっていたマリアは、かつてのナスターシャとの会話を思い返していた。昨夜響に言ったことが自分にはないものであることを痛感しているのだ。

車椅子に座ったナスターシャはセレナのシンフォギア、アガートラームをマリアに差し出した。マリアはそれを受け取り、

「これは、セレナのアガートラーム……」

「破損したシンフォギアを作戦行動に組み込むことはありません。持っていないさい。」

なぜ突然これを託されたのか、マリアは目を丸くしているとナスターシャは目を瞑り、

「これから、偽りを背負って戦わなければならないあなたに……、小さなお守りです……」

損傷したペンダントをマリアは握りしめる。自然と涙がこぼれてきた。彼女をそれを胸に当て、

「ありがとうママ……。大丈夫よ……。私……。セレナのように強く輝けるかな……。？」

その答えはいまだ見つかっていない。かちやりと音を立てて皿にフォークが突き立てられる。照明の光を反射してフォークが特有の鈍い輝きを放った。

「強く……。ツ?!」

マリアがそう呟いたとき、食堂にアルカ・ノイズ出現のアラートが鳴り響いた。机に手をつき、がたりとそのままの勢いで椅子をどかして立ち上がると、

「アルカ・ノイズ……。！」

そのまま出入り口のほうへと駆け出していった。

当然アルカ・ノイズの出現を検知していたブリッジは即座に出現位置の座標を絞り込む。

「アルカ・ノイズの出現を検知！座標絞り込みます！」

「エルフナインちゃんからの情報で、捕捉精度が格段に上がっている

……！」

絞り込んだ結果、アルカ・ノイズは雷たちの周囲に出現していた。モニターを見る限り、彼女はすでにケラウノスを身に纏っている。だが、状況から見て劣勢ということには変わりはない、弦十郎が歯噛みした。藤堯が、

「急ぎ装者たちに対応を……ッ」

「調ちゃんも切歌ちゃんのコンディションで戦闘行為は無謀です！使用可能なギアがない以上、翼さん、クリスちゃん、マリアさんだつて出せませんッ！」

そう、現状リンカーなしでまともな運用ができるのはガングニールとケラウノスの二基のみ。後手に回らざるを得ない立ち回りの状況的にも、戦力やその頭数的にも圧倒的に分が悪い。

「まともにギアを運用できるのは、響君と雷君のみ……」

そしてその頼みの綱であるギアを纏える装者のうちの一人、響はガングニールを起動できない状態であった。その情報は即座に司令部にも入ってくる。

「歌わないのではなく……」

「歌えないの……?」

この不測の事態に対応すべく、弦十郎は緒川に指示を飛ばした。

「緒川ッ！」

「心得ていますッ！」

これぞまさしくツーカーと言うのだろう。彼が何を言わんとしているのかを即座に察し、緒川は行動に移した。こういった場面においては弦十郎よりも緒川のほうが適任と言える。それを知っての指示だ。彼が司令部を飛び出そうとすると同時に、反対側からマリアが現れた。危うく正面衝突しそうになったが、お互いに立ち止まり、マリアが道を譲りながら、

「一体何がッ?!」

「響さん達の援護に向かいますッ！」

そう言つてすぐに駆け出していった。そしてマリアもその後をついていく。

〇〇〇

守るべき対象が増えたことで状況はさらに劣勢になった。現状においての最優先事項は響や未来たちの生存。その為、雷は何時でも防御に移れるようにユニットを展開した。だが、下手に相手を刺激してしまえば即座に攻撃を喰らうのもあり得る話。故に展開はしたものの稲妻は放出しない。

「なんで……聖詠が浮かばないんだ……」

響の言葉を聞き流しながら状況を打破する方法を考えるが、雷一人の身では難易度が高い。オートスコアラーだけならば兎角、アルカ・ノイズの存在はあまりにも大きい。最悪の場合ケラウノスまで分解され、全員が全員抵抗もできずに塵へと変えられてしまうだろう。

そんな彼女たちを見てガリイはあくどい笑みを浮かべながら、

（ギアを纏っているのはレイアが言っていたアイツのみ。マスターからアイツはルシフに相手をさせるって厳命されてるし……ここは試しに、仲良しこよしを粉と引いてみるべきか……？）

彼女にとって最優先破壊対象は GANG ニール。ならば響がギアを纏わざるを得ない状況へと持つていけばいい。アルカ・ノイズに指示を出そうとしたその時、

「あぁまどろっつこしいなあ……」

突然詩織が口を開いた。それも普段の彼女とはかけ離れた粗暴な口調でだ。思わず全員が詩織のほうを向いてしまう。彼女は数歩前へ踏み出し、

「アンタと立花たちがどんな関係か知らんけど、だらだらやんのならアタシら巻き込まないでくれる？」

「お前こいつらの仲間じゃないのか……？」

「じょーだん！ 偶々帰り道が同じだけ……。ホラ、道を開けなよ」

「ッ……」

ガリイは苛立ちながらアルカ・ノイズを後退させる。

その瞬間、雷は詩織の作戦を理解し、自身の策に組み込んだ。これでケラウノスを失ったとしても GANG ニールは残る。

ニヤリとほくそえみ、

「走って！」

「行くよ！」

彼女の言葉を合図に創世が未来の手を掴み、アルカ・ノイズの間を縫って走り出した。彼女たちを守るために雷が電磁波を飛ばしてレーダーにしながら最後尾を走る。

弓美が走りながら、

「アンタって、変なところで度胸あるわよね！」

「去年の学祭もテンション違ってたし！」

電光刑事バンのオープニングを歌った時の事だろう。あの時も詩織は謎のハイテンションで歌っていた。少々状況を掴めていない未来が、

「さっきのはお芝居?!」

「たまには私達が、ビツキーとライライを助けたっていいじゃない！」

「我ながら、ナイスな作戦でした！」

「ホント助かったよ！詩織のおかげで先に繋がられた！……ッ?!来るよッ！」

少しだけ表情を緩めていた雷だったが、展開したレーダーでアルカ・ノイズに動きがあったことを捉えた。あの性悪の事だ、逃げれたと思わせてから追い詰めるのつもりだったのだろうと見切りをつけた。雷の言葉に全員の気が引き締まる。

丁度後ろを向くとアルカ・ノイズが巻いていた腕の発光している解剖器官を伸ばしていた。周囲の街灯やベンチ、レンガの道を赤い粒子へと分解していく。ガリイはアルカ・ノイズの後を足元を錬金術で凍らせ、スケートのようについついて来ていた。

「上げて落とせば、いい加減戦うムードにでもなるんじゃないかしら?!」

「アニメじゃないんだからあ！」

雷が響に伸ばされた解剖器官を足に纏わせた斥力フィールドで迎撃する。この間の戦闘で分かったことだが、いくらエネルギーを含んだ万物を分解する力を持つと言えど、斥力と言う形無き反発力を分解することは出来ないようだ。

そんな時、ギアの通信機から、

『雷！立花響から GANG ニールを受け取ってッ！』

「マリアッ?!わ、わかった!……響! GANG ニール貸して!」

「う、うん!」

二人ともいきなりの事で面食らってしうが、速やかに指示通りに動く。すると横から黒色の車がすごいスピードで回転しながら突っ込んできた。

そこから緒川とマリアが飛び出し、

「雷!」

「マリア!」

阿吽の呼吸で雷が思いっきりペンダントをマリアにぶん投げた。

彼女は走りながらそれを片手で受け止め、

「Gran ziz el Bilfen Gungnir Zizz  
l」

響とは異なる漆黒の GANG ニールを身に纏う。彼女はダブルコントラクト、GANG ニールとアガートラムの二重適合者である。故にこのような芸当が可能なのだ。だが、リンカーを投与していない以上その負荷は重い。

だが、

「アルカ・ノイズは任せる。オートスコアラは私が」

「了解、マリア。マリアにはノイズなんて指一本触れさせない」

両の手甲を組み合わせて構築した大槍を構え、同じくユニットを展開した雷と並び立った。

自分にはないもの

雷とマリア、二人の歌が重なる。

彼女たちは敵対したことはあっても、二人だけで共闘したことはなかった。だが、二人の間には確固たる信頼関係がある。雷と響との組み合わせほどの爆発力はないが、圧倒的な安定性が雷たちを支えている。

雷がマリアの道を切り開くべく電光を纏いながら先行する。マリアの担当はガリイだが前で戦う彼女を無視するようなことはせず、適合係数の不足による負荷を考慮したうえで援護を入れた。

『HORIZON†SPEAR』

(戦える……この力さえあれば……！)

無力な現状を打破できるかもしれない……。そんな思いと共にガングニールの変形した穂先からエネルギーが放出され、先頭にいた無数のアルカ・ノイズが直撃を受け、爆散する。その爆炎の中から雷が速度を落とさず躍り出る。マリアの力量を理解していないとできない芸当だろう。

マリアのギアを見て響がつぶやいた。

「黒い……ガングニール……」

「でりゃあぁッ！」

鞭のようにしなる後続のアルカ・ノイズの解剖器官を流れるように回避し、その勢いのまま後ろ回し蹴りを放った。斥力によって空間から弾かれた左足。そこから迸る稲妻が三日月のような軌跡を描き、アルカ・ノイズの脇腹を切り裂いた。

『雷刃抜拳・滅神』

さらにその回し蹴りを放った足を踏み込みに利用し、目の前にいる複数のアルカ・ノイズに高速の乱打を叩きこんだ。あまりの速さに放たれた衝撃が遅れて直撃する。

『雷刃抜拳・神風』

彼女たちの戦闘をブリッジは捉えていた。

「緒川さん、マリアさん到着！」

「ケラウノス、ガングニールエンゲージ！」

「雷君ツ！マリア君ツ！発光する攻撃部位こそ解剖器官ツ！気を付けて立ち回れツ！」

弦十郎の通信を受けながら雷はマリアが接近するための道を切り開いていく。時には格闘で、時には雷撃で、見る見るうちにアルカ・ノイズを惨滅していった。

ガリイが余裕の表情で召喚ジエムを取り出しばら撒き、新たなアルカ・ノイズを召喚するが片っ端から撃破する。彼女との距離が縮まって来たからか、マリアも雷と共に前衛へと並んだ。それでも二人の連携、呼吸は崩れない。

「想定外に次ぐ想定外……。捨てておいたポンコツが、意外なくらいにやってくれるなんて」

ガリイは余裕を保ったまま言った。

マリアが槍を投擲し、アルカ・ノイズを貫くと同時に雷がそこに電撃を流し込んだ。槍を媒介として周囲に拡散した電流が放たれ、アルカ・ノイズを貫いていく。

#### 『DIFFUSION†LIGHTNING』

そして電撃を放ちアルカ・ノイズを撃破しながら槍へと雷が接近し、アルカ・ノイズもろとも柄の部分で蹴ることで槍は回転しながら彼女の手元に吸い込まれ、頭上に放り投げる。

「受け取ってッ！」

「ッ！」

そしてそれを高く跳躍したマリアが空中で受け取った。

「私のガングニールで……。マリアさんが戦っている……」

マリアが纏えて自分は纏えていない。その事実、現実が響に自分に問題があるのだと痛烈に突きつけてくる。

空中で槍を受け取ったマリアは落下する勢いを利用して穂先をガリイに向け、突き下ろした。だが、その息の合った連携はガリイの錬金術、水の力を変質させた氷の障壁によって阻まれてしまう。周囲に氷の塵が舞った。

「ッ?!」

冷気を放つ氷の壁は小さい。彼女の両手よりも少し大きいくらいだ。しかも薄く、紙一枚分ほどしかないだろう。しかし、その小ささ、薄さにもかかわらず突破することが出来ない。

「それでもッー！」

マリアは咄嗟に槍を三つに分解し、先端の二つを使って強引に割り開いた。壁、と言うより盾は両手で構築されているため、この方法でなら突破可能なのだ。大槍の中から小さな槍が出現し、それでガリイの胸元に突き刺した。

彼女はうなだれ、誰もが勝利を確信した。だが、マリアによって突き立てられたはずの槍は、その直前で阻まれていたのだ。

ガリイはにたあつと笑みを浮かべ、

「あたまでも冷しやあー！」

「マリアッ?!」

胸の障壁を基点に錬金術が展開され、彼女の操る水の奔流がマリアを弾き飛ばした。何とか地面に着地し、槍を地面に突き立ててブレーキを掛けた。ダメージはあまりなかったものの、ギアに限界が訪れていた。ギアのかける負荷にマリアの体も耐え切れなくなっている。立つのでさえもうギリギリだ。

「っ」

「決めた。ガリイの相手はあんたよ」

彼女は深くお辞儀をし、

「いただきますまあ〜すー！」

「不味いッー！」

地面を凍らせ、鋭角に滑って高速で接近する。雷が間に入ろうと動くが不意を突かれてしまったことで一步目が出遅れてしまった。必死に手を伸ばすが間に合わない。マリアも負荷が限界で反応が遅れた。

ガリイが右腕を凍らせて氷の刃を作り、コンバーターの破壊を狙う。だが、ついに限界が来た。ギアが砕け、マリアが膝をつく。顔から倒れかけるが、あわやと言うところで手をついた。呼吸は荒く、血涙と喀血が彼女の身にかかっていた負荷の高さを示していた。



雷の跳び蹴りをバックステップで回避し、氷の刃を解除しながら雷を指さし、

「それでもこの程度……。なによこれえ、まともに歌える奴がコイツしかないなんて！聞いてないんだけどお？」

悪態をつき、舌打ちを打ちながら取り出したテレポートジェムを地面に叩きつけた。

「クッソ面白くない」

捨て台詞を吐きながら、心底くだらないという表情でその場から姿を消した。

「空間移動……あれもまた、錬金術の……」

ブリッジでその一部始終を観測していた藤堯が思わずこぼした。丁度そのタイミングでエルフナインとほかの装者たちがやって来た。

エルフナインが、

「現代に新型ノイズを完成させるとは、位相空間に干渉する技術を用意しているということですよ」

藤堯の疑問に簡潔に答えた。服装は出会った時とは異なり日常的な恰好になっている。キャロルと自分がつながっている事実も受け止め、平静のまま行動していた。

クリスが友里に詰め寄り、

「んなことより、無事なのか?!」

「駆け付けたマリアさんが、ガングニールを纏って雷ちゃんと共に敵を退けてくれたわ」

切歌がそれに真つ先に反応する。

「二人がデスか?!」

「それってつまり……マリアは私達のように……」

調は目を下に向ける。声のトーンも落ちていた。彼女が言わんとしていることを翼は理解した。

「シンフォギアからのバックファイアに、自分をいじめながら……。無茶をしてくれる……」

血で汚れた顔を拭こうともせず、マリアはペンダントに戻ったガングニールを見つめている。

(もし私が……ガングニールを手放していなければ……いや、それは未練だな……)

「マリア……、肩、貸すよ」

「ありがとう。でも、大丈夫よ」

「無理しちゃだめだよ?」

ギアを解除し、心配そうな顔をしながら肩を貸そうとする雷に礼を言い、ふらつきながら彼女は一人で立つ。歩くのがおぼつかないほど体は限界だった。思わず体が動いた雷に軽く支えられながら響のほうへと歩みより、

「怪我はない……?」

どこからどう見てもマリアのほうが重症だが、それでも民間人である創世たちの心配をしている。

「はい。だけど、マリアさんが傷だらけで……」

「歌って戦ってボロボロになって……大丈夫なんですか?」

マリアは一度目を伏せ、

「君のガングニール……」

「私のガングニールですッ!」

「響ッ?!」

響が叫びながらマリアの手からペンダントを強引奪い取る。

「これは! 誰かを助けるために使う力! 私がもらった! 私のガングニールなんですッ!」

マリアと響、両者の間にしばしの沈黙が訪れた。先に口を開いたのは響だった。彼女は小さな声で俯きがちに、

「……ごめんなさい」

だが、言葉とは裏腹に彼女の表情は納得していない。不満や憤りを示していた。それを見てマリアは昨夜の会話を思い出した。そしてマリアは一步踏み出し、

「そうだ。ガングニールはお前の力だ。だから……目を背けるな!」

「目を……背けるな……」

自分にガングニールを託そうとしている彼女を見つめること——自分が背負わなければならないこと——に耐えきれなくなり、響は目をそ

ら  
し  
た。  
。

## Project IGNITE

キャロルの居城、チフォージユ・シャトー。ルシフを除くオートス  
コアラーの定位置である台座にテレポートジェムの錬金陣が現れ、先  
ほどまで雷とマリアと交戦していたガリイが帰還した。ジェムは転  
移する際にごく稀であるが異なる位相に飛ばされてしまう危険があ  
るため、キャロルはそれぞれのジェムに転移先を固定しておくことで  
この問題を回避している。

キャロルが独断で帰還したガリイに鋭い目を向ける。

「ガリイ……」

「そんな顔しないでくださいよお。ロクに歌えないのと、歌っても大  
したことない相手だったんですからあん。もう一人はルシフの担当  
だってマスターが決めてましたしい……。あんな歌をむしり取った  
ところでやくにたちませんって」

おどけるように言い訳を言う。キャロルは眉一つ動かさず、鋭い瞳  
を向けたまま、

「自分が作られた目的を忘れていないのならそれでいい……」

自身が初めて邂逅したシンフォギア装者、立花響。あの夜に彼女の  
言っていたことが頭を過る。

自分の精神を逆なでするような奴の言動。何も知らないくせにず  
かずかと心に踏み込もうとしてくる不躰さ。表情を変えはしないも  
のの、内心虫唾が走りまくっているのだろう。キャロルは立ち上  
がり、ガリイに厳命した。

「だが次こそ奴の歌を叩いて碎け、これ以上の遅延は計画が滞る」

「レイラインの解放……分かってますとも……。ガリイにお任せでい  
す！」

ガリイの無駄にきやぴきやぴした言動が虫唾の走りまくっている  
キャロルに溜息をつかせた。

今は歌えていないようだが響の爆発力は脅威。そして大体におい  
て彼女と共に雷が行動している。そのことは長年の観察で明らか  
だった。故に当てる戦力を増強する。

「お前に戦闘特化のミカとルシフをつける……。いいな？」

「いいゾ〜！」

「マスターの命令でしたら構いませんYO☆」

ミカが陽気に手を上げて返事し、ルシフは恭しくお辞儀をした。だが本来キャロルの問いに答えるべきなのはガリイである。当全彼女は二人に対し、

「そっちに言っつてんじやねえよ！」

今までのキャラとは異なる言い様で怒鳴った。こちらが彼女の本性、つまり猫かぶりである。

ガリイは舌打ちをしながら先ほどの戦闘を思い返す。

（せめてあの時、ハズレ装者のギアが解除されなければ……）

〇〇〇

夜。雷と響、未来の三人は二段ベッドの上段に三人そろって川の字になって寝ていた。何か抱えていそうな響を二人が挟み込んでいる。もうすっかり寝る時間だというのに響はまだ目を覚ましていた。今日のことがつつかえて眠れないのだ。そんな彼女に思わず未来が声をかける。

「眠れないの……？」

「ごめん……、気を遣わせちゃった……」

「今日の事を考えてるんだよね……？」

眠っている雷を起こさないように響が未来のほうを向く。最近雷の眠りが深くなっていった。先の読めないキャロルとの戦いに思考を回し、策を練り、どうやれば、どう動けば後手に回さずに済むかを必死に考えているためだ。

「戦えないんだ……。歌を歌って、この手で誰かを傷つけることが、とても怖くて……。私の弱さがみんなを危険に巻き込んだ。戦える雷に無駄な負担をかけた……」

響は拳を握り、瞼を閉じて自身の不甲斐なさに身を震わせる。そんな彼女の細い、震える拳を未来が包み込んだ。

思わず目を見開いた。

「私は知ってるよ……。響の歌が、誰かを傷つける歌じゃないことを」

「んム……?」

そう言つて響の手を自分のほうに引き寄せた。その拍子に体が当たったのだらう、雷がのつそりと寝ぼけ眼のまま起き上がった。そして猫のように二度三度顔をこすつた後、隣で寝転がっている響を見下ろした。響と未来の二人は苦笑いを浮かべ、

「起こしちゃった、かな?」

「あはは……ごめんね?」

「……」

まだ半分寝ているらしい。彼女は二人に答えようとはせず、ぼけーとした顔のまま響の頭を撫でた。

いつもの雰囲気とは異なるため、撫でられている響は不思議な気持ちになつてしまう。戦っている時や何かを思案している時のような凛とした雰囲気や、自傷や自殺をしようとしている時のような委縮した壊れてしまいそうな雰囲気ではなく、一緒に遊んだり笑ったりしている時のような朗らかな雰囲気でもない。

なんともいえぬ彼女の雰囲気に響は困惑半分、安らぎ半分のまま頭を撫でられていると、雷が寝ぼけた顔で、

「大丈夫……大丈夫だから……。響の手は……誰かを傷つける手じゃない……。私を……。未来を……。みんなを守る手なんだ……。よお……」

「わあ?!」

話している途中で体が前後に揺れはじめ、話し終えるギリギリのタイミングでベッド……というより響に倒れ込んだ。彼女たちの心配をよそに、雷はスヤスヤと寝息を立てている。自分たちの悩みや心配をよそに眠ってしまった彼女に二人はそろつて苦笑いを浮かべ、雷を定位置に戻すと、二人も目を閉じた。

○○○

今にも雨が降りそうな曇天の中、マリアと切歌、調、そして雷がナスターシャの墓参りに訪れていた。三人と比べて雷が彼女と一緒にいた時間は少ないが、それでも研究施設でもう一人の母親として接してくれた恩がある。後から聞いた話だったが、フロンティア事変の時も内心では気にかけていてくれたらしい。

マリアが静かに花束を墓前に添えた。

「ごめんねママ。遅くなっちゃった」

「ママの大好きな日本の味デス！」

「私達は反対したんだけど……」

「私は一緒にいた時間が短いし、常識人の切ちゃんがどうしてもって」  
切歌がお供え物にキクコーマンのしょうゆを置いた。

調と雷は反対したのだが、調は常識人を自称する切歌に押し切られ、雷は接していた時間が短く、幼少期のころの記憶しかないとため、疑りながらも彼女に任せてしまっていた。

「ママと一緒に帰ってきたフロンティアの一部や、月遺跡に関するデータは、各国が調査している最中だった」

「みんなと一緒に研究して、みんなのために役立てようとしてるデス！」

「ゆっくりだけど、ちよつとづつ世界は変わろうとしてるみたい」

「ナスターシャさん……ママのおかげで、少しだけど、先に進むことが出来る様になっただ」

家族の形見であるケラウノスを握る。血は繋がっていないけれど、自分の家族の一人だと心に刻みつける。

三人の言葉を聞いてマリアは目を閉じ、  
（変わろうと、進もうとしているのは世界だけじゃない。なのに、私だけ……、ネフィリムと対決したアガートラムも、再び纏ったガングニールも、窮地を切り抜けるのはいつも、自分のものではないか……）

その思いの一端を口からこぼす。

「私も変わりたい。本当の意味で強くなりたい」

思わず三人がマリアの顔を見上げた。思いの吐露は連鎖的に広がっていく。

「それはマリアだけじゃないよ……」

「あたし達だっておんなじデス……」

「雨だ……」

自身の抱える心の弱さ。方向性は違うものの変わりたいと思って

いる雷がつぶやいた。もしかしたら天がいろいろとたまったものを洗い流そうとしてくれていているのかもしれない。そう思うと、不思議と微笑みが漏れる。

そんな彼女を見てマリアも微笑み、

「昔のように、叱ってくれないのね……。……大丈夫よママ。答えは自分で探すわ」

「どうなるかわからないけど、道に迷いながら考えるよ」

「ここはママが遺してくれた世界デス」

「答えは全部あるはずだもの」

雨がだんだんと強くなっていく。

○○○

寄港したS・O・N・G基地内、そのブリッジにてエルフナインによる敵情報の開示が行われていた。彼女が知る範囲内でのことだが、それでも有用なことに変わりはない。これまでのオートスコアラーとの交戦データがモニターに表示される。

「先日響さんを強襲したガリイと、クリスさんと対決したレイア。これに、翼さんとロンドンでまみえたファラと、未だ姿を見せないミカ、ルシフの五体が、キャロルの率いるオートスコアラーになります」

「人形遊びに付き合わされてこの体たらくかよ……。！」

「その機械人形は、お姫様を取り巻く護衛の騎士、と言ったところでしょうか」

「スペックをはじめとする詳細な情報は、僕に記録されていません。ですが……」

「シンフォギアをも凌駕する戦闘力から見ても、間違いないだろう」

エルフナインが区切った言葉を翼が繋いだ。彼女の背後で弦十郎が、

「超常脅威への対抗こそ、俺たちの使命。この現状を打開するため、エルフナイン君より計画の立案があった」

オートスコアラー、引いては錬金術に対抗すべく、エルフナインは計画を立てていた。キャロルの監視を受けてはいるが、今は手のひらの上で踊っておく時期だ。計画開始時期も決定している。カウン



ターをかけるためにも、今は受けなければならぬ。それを弦十郎、エルフナイン、雷は理解している。モニターに計画名が表示される。

「Project IGNITEだ」

キャロル攻略のための計画、その第一段階がスタートした。

## ルシフの力

雨が降りしきる中、響と未来は傘を一つ差し、相合傘で帰宅していた。

普段ならここに雷が居るのだが、今回は調と切歌に連れられてナスターシヤの墓参りに行っていたため今回はいない。

雨が傘に当たるときや、水たまりを踏んだ時の音しかないほどの静寂が二人を包んでいたが、昨日から悩み続けている響に対し、未来が切り出した。

「やっぱりまだ……歌うのは怖いのは……?」

「え……うん……。雷はああ言ってくれたけど、誰かを傷つけちゃうんじゃないかって思うと……ね」

ずっと悩み続けて上の空だったようだ。響の返事が少し遅れて帰ってくる。

実は昨日の夜に雷が響の疑問に対する答えを言っていたのだが、彼女が寝ぼけていたことと、あまりにも纏っている雰囲気異なっていたために呆気にとられてしまい、響に引かかって入るものの呑み込み切れていない。

「響は、初めてシンフォギアを身に纏った時って、覚えてる?」

「どうだったかな……。無我夢中だったし……」

「その時の響は、誰かを傷つけたいと思って、歌を歌ったのかな……」  
「え……」

そんなわけない。そんなことあるはずがない。

自分の中では思ってるのに、ただそう思い込みただけなんじゃないか?という自己疑念が渦巻く。結局、響はこの質問に答えることが出来なかった。

○○○

本部ブリッジでは、エルフナインによるProject IGNITEの説明が行われていた。モニターにはこの計画の概要が表示されている。

すでにキャロルの計画内のこの計画だが、今は躍らせられるしかな

い。天羽々斬とイチイバルを失った今、現状打破を目論むには必要なことだ。うまくいけば、マリアの所有するアガートラームも復元できるかもしれない。その期待を背負ってるがゆえに翼とクリスは食い入るようにモニターを見つめている。

「イグナイトモジュール……。こんなことが、本当に可能なのですか？」

「錬金術を応用することで、理論上不可能ではありません」

緒川の問いにエルフナインは答えた。そして一呼吸おいて、

「リスクを背負うことで対価を勝ち取る……。その為の魔剣・ダインスレイフです」

エルフナインが二の句を紡いだ瞬間、ブリツジ内にアラートが響き渡る。即ちアルカ・ノイズが現れたことを意味していた。

藤堯達オペレーターチームが即座に状況の確認を行う。

「アルカ・ノイズの反応を検知！」

「位置特定！モニターに出します！」

アルカ・ノイズの反応パターン、周囲の拡大された地図と共にリアルタイムのカメラ映像が表示された。赤い髪のオートスコアラーターと未来を追いかけている映像が映る。

「ッ?!」

「んな?!」

「ついに……ミカまでも……」

エルフナインがモニターを見ながら呟いた。

○○○

工事現場の周囲を響と未来が走り抜ける。

その後ろを自らが召喚したアルカ・ノイズを引き連れながらキャロルの率いるオートスコアラーターが一体、ミカが追いかけていた。彼女の人の手をしていない、凶悪な両手を見れば、無知であろうと彼女がどのような目的で作られたかが一目でわかるだろう。

「逃げないで歌って欲しいゾ〜!あ、それとも、歌いやすいところに誘ってるのか〜?う〜ん……、おおう!それならそうと言って欲しいゾ!それ〜!」

右手を左手に打ち付け、一人合点すると無邪気にアルカ・ノイズを二人に向けて先行させた。

ヒルのような個体が道路を分解し、人型がその後を追う。明らかにコースを誘導しているが、ズレてしまえば即座に分解されてしまうだろう。どうすることもできず、響たちは工事現場の中へと駆けこんだ。

アルカ・ノイズ出現の報告はマリア達にも行われていた。

「敵の襲撃?!」

「でも、ここからでは……」

「間に合わないデス!」

「大丈夫! 私が間に合わせる!」

マリアの声を聞いて雷は即座に行動に移した。位置的に反対側にあつたが、機動力に優れるケラウノスなら間に合うと確信していたからだ。

雷がそう宣言すると同時にマリアが頷き、自身も頷き返す。

報告はこちらからですから早く迎え。そう意味が込められた頷きに違わぬように、威力を増していく雨の中を全力疾走しながらギアを纏う。灰色のシンフォギアを纏った雷は、金色の稲妻を放ちながら霊園を囲う林を一息で飛び越していった。

○○○

工事現場に駆け込んだ響たちであつたが、それは追い込まれていることを意味していた。立場上一般人である未来を先に逃がし、その後を響が走る。

響が階段を駆け上がり、上の階へと足を掛けようとした瞬間、アルカ・ノイズが階段を分解した。当然、上り切っていない響は下の階へと落下してしまう。

「響ッ——!」

「がッ?!」

落下の勢いは強く、端につけられていた手すりを破壊して地面に叩きつけられる。

強かに背中を打ち付けた響はぼやける視界で未来の姿を捕らえた。

「未来……!」

そんな響の視界にミカが割り込み、覗き込んできた。彼女は見降ろしながら、未来を異形の鋭い指で指さし、

「いい加減戦ってくれないと、君の大切なモノ解剖しちゃうゾ? トモダチバラバラでも戦わなければ、この町のニンゲンを、イヌをネコをみくんな解剖だゾ?!」

実に楽しそうに、実に無邪気に狂喜的で残忍なことを口走った。

そんなことはさせないと背中痛みをこらえながら立ち上がり、響は彼女と対峙する。そしてペンダントを取り出し、ギアを纏おうとするが歌を歌うことが出来ない。戦う覚悟が決まり切っていないのだ。

ミカは拍子抜けした、失望したような表情で、

「ふん……。本気にしてもらえないなら……」

ニヤリと笑ってアルカ・ノイズに未来を襲わせる指示を出した。彼女の一つ下の階にアルカ・ノイズが集まってくる。未来はすくみ上りそうな恐怖を押し殺し、未だ歌うことが出来ない響に向けて声を張る。雷が答えを出してくれたのだ、ならばあとの一押しは私しかないといと勇気を振り絞る。

「あのね、響ッ! 響の歌は誰かを傷つける歌じゃないよ! 伸ばしたその手も、誰かを傷つける手じゃないって私達は知ってる! 私だから知ってる! だって私は響と戦って、救われたんだよ?!」

響の胸の奥に昨夜の雷の言葉、未来の言葉がしみ込んでいく。まだ言い足りない未来は響に訴え続ける。

「私だけじゃないよ?! 響の歌に救われて、今日に繋がってる人はたくさんいるよ?! だから怖がらないでッ!」

「ばいなら〜!」

未来の言葉を遮るようにミカが指示を出し、アルカ・ノイズが飛び掛かる。そして彼女の足場を壊し、空中に身を投げ出されてしまった。

「うおおおおおッ!」

響は叫ぶ。魂の限り。

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro

nッ！」

彼女の魂の叫びにガングニールは、応えた。

落下し、響との思い出が描かれた走馬灯を見るが、それは背中に受けた優しい衝撃に酔って吹き飛ばされる。そしてガングニールを纏った少女は、未来を傷つけぬように衝撃を可能な限り殺して着地した。衝撃を逃がした先であるビルの天井が衝撃によって崩れ落ち、溜まっていた雨水が一気に落ちてくる。既に雨はやみ、太陽の光を反射していた。

「ゴメン……私、この力と責任から逃げ出してた……。だけでもう迷わない。だから聞いて、私の歌をッ！」

ガングニールの復活は本部のモニターにも映されていた。クリスは腰に手を当て、

「どうしようもねえバカだ」

不敵に微笑んだ。当然ビルを跳び越えている雷にも伝えられ、

「やったー！」

と小さくガッツポーズをして、そして彼女と合流するために急いで急行した。

ミカと相対する響は未来を下ろし、

「行ってくるー！」

「待ってる」

短く会話してから一気に踏み込み、歌った。その表情にさつきまでの迷いは見られない。完全に戦う目的を取り戻していた。

「うおりゃあ〜！」

ミカは両手いっぱいジエムをばら撒き、無数のアルカ・ノイズをまとめて召喚する。響はさらにブースターで距離を詰め、懐に入ってから格闘術で文字通り蹴散らしていく。バンカーユニットを伸ばし、地面に叩きつけることで衝撃波を地面に伝導させることで拡散、周囲一帯を吹き飛ばす。

アルカ・ノイズを殲滅し、残るはミカただ一体。彼女に向けて一気に拳を振りぬくがそこは戦闘特化型、手のひらから射出した赤熱化しているカーボンロッドでたやすく受け止められてしまう。火花が散

り、勢いで押し通そうとするが、

「ゴイツ、へし折りがいがあるゾ〜！」

ミカは余裕を崩さない。

本部ではエルフナインがモニターを見据えながら、

「これが、戦闘特化したオートスコアラーのスペック……！」

「それがどうした。相手が戦闘特化だとしても、立花が後れを取るなどありえない！」

翼が一蹴する。

響の拳を受け止めたミカは髪の毛をブースターのようにして押し返し、響を後退させる。が、彼女は直ぐ様アンカージャッキで反動を受け止めつつ力にし、弾き返りながら鳩尾に回転を加えた肘鉄を叩きこんだ。流石のミカも耐え切れなかったようだ、一気に後ろに弾き飛ばされてしまう。

響はさらに追撃のために加速し、拳を振りぬいた。が、その拳が貫いたのはミカではなく、ミカのように形作られた水の塊だった。当然、拳の威力によつて吹き飛ばされた水が宙を舞う。

「なッ?!」

驚愕が響を襲う。

揺れる視界。スローモーションで飛沫が舞う中、奥の柱に人影が見えた。水の錬金術を操るオートスコアラー、ガリイだ。彼女はバレエのようなポーズをとりながら呟いた。

「ざあんねん。それは水に移った幻……」

幸か不幸か彼女によつて、響の止まりかけていた思考が回りはじめた。ミカは何処にいるのか？ 損答は直ぐに出た。自身の下に凶悪な手のひらをこちらに向けて、満面の笑みを浮かべている。

その笑みのまま、ミカは響のギアのコンバーターユニットに向けてカーボンロッドを打ち込んだ。

思わず目を瞑ってしまうが、いつまでたつても衝撃が来ない。ゆっくりと目を開けると、雷によつてロッドが半分に叩き折られていた。

「間に、あつたあッ！」

「嘘でしょ?!」

ガリイは驚愕する。

雷はスライディングのようにして滑り込み、稲妻を纏った右足でコンバーターユニットに吸い込まれていくロッドを蹴り折る。そしてそのまま蹴った反動で立ち上がった。

そんな彼女に響は受け止められ、

「雷ッ?!」

「歌!取り戻したんだって?!」

「う、うん!」

響の答えを聞いて雷は一層強く抱きしめ、

「よし!今は未来の安全が最優先だ。響、彼女を任せていい?」

「分かった。相手は水を使ってくるから、気を付けて」

「大丈夫!雨に濡れてるから気づかないよ」

防御能力を持つ雷がしんがりを務め、響に未来を任せる。

この作戦を了承した響はガリイの錬金術を警告したが、さっきまで雨が降っていたのが幸いして当たっても気づかないようになっていた。少なくとも直撃を受けない限り大丈夫だろう。

雷は響を下ろし、背中合わせになりながらミカとガリイに向き合う。

そして、

「Ready?」

「何をたくらんでるのか分からないけどやらせないゾ!」

ミカが雷に向けてカーボンロッドを勢いよく撃ち込んだ。それを彼女は真正面から、斥力を纏った右腕一本で受け止め、

「GOッ!」

「ッ!」

受け止めると同時に合図を出し、響が駆け出した。

流れるように雷は『Assault・Force』を起動した。強大な斥力フィールドが彼女を包み込み、襟のユニットからはマフラーのようにはためく稲妻が放出される。そしてその圧倒的な防御能力と高まった破壊力でロッドを完全に受け止め、握りつぶした。

ガリイはこの光景を見て、



「ちよつと！どこが切れ者よ！冴えてるどころか脳筋の極みじゃない！」

「これは燃えるゾ〜！」

「ちよつとミカちゃん。アイツの相手はしちやだめよ」

「ええ〜」

露骨に肩を落とすミカだったが、

「まあ、先にやられたから仕返し……ぐらいならいいかもね？」

「おお〜流石ガリイ。頭がいいゾ〜」

「それに、近くまで来てるんだし」

うって変わって満面の笑みを浮かべたミカはロッドを取り出し、ブースターを吹かせて雷に一撃を叩きこんだ。

○○○

雷の作戦通り未来を離脱させることに成功した響だったが、予想外の事態に見舞われていた。

「何処へ行くんですKA☆？お嬢さんがTA☆」

「全力で行く……！」

道化師のような恰好をしたオートスコアラが、ジャグリングをしながら響の前に立ちふさがっていた。

本部でも未確認のオートスコアラの究明を急いでいた。唯一彼女たちを知るエルフナインが、

「駄目です響さん！ルシフとは戦わずに逃げて下さいッ！」

だが時はすでに遅い。既に響はバンカーユニットを全開にして拳を叩きこもうとしていた。ルシフは微笑みを絶やさず、ジャグリングをしながら右足をゆっくりと持ち上げた。

「どういうことだ?!」

「ルシフには絶対に勝てません……。何故なら……」

響の拳とルシフの持ち上げた右足が衝突する。だが、

「え……?」

響は愕然とした。

ルシフは何事もなかったかのようにジャグリングしながらそこに立っていた。戦闘特化であるはずのミカを吹き飛ばした一撃をその

身で受けながら、平然としている。しかも拳が受け止められている地点からピクリとも前に進まない。

愕然とする響をよそにボールを投げだしてにたあつと笑い、  
「撃った者は撃たれる……てNA☆」

ひよいとその場で空中前転し、響に踵落としを叩きこんだ。それは素人目から見ても威力のある踵落としには見えない。だが、それは響の反応によって一変する。

「がはッ?!」

「響ッ?!」

喰らった響だからこそ分かる。この威力は、自分の撃ち込んだ一撃が上乘せされていた。響の体は地面に叩きつけられてしまう。そしてルシフは倒れ込んだ響を蹴り転がし、胸のコンバーターを踏み壊した。ギアが崩壊し始め、一糸まとわぬ姿となってしまう。

未来が悲鳴を上げた。

「響iiiiiiiッー!」

目を疑うような光景がモニターに映される中、エルフナインは歯噛みしながら呟いた。

「ルシフの司る錬金術はエーテル……。彼女に対する攻撃は、全て彼女の力となるからです……!」

オートスコアラ―最後の一体、ルシフ。最強の墮天使の名を冠す通り、その力は、圧倒的だ。

## 悩み、考え

未来を抱えて戦線を離脱しようとしていた響だったが、そんな彼女のもとに現れた道化師のような恰好をしたオートスコアラ、ルシフ・バウアーズとの戦いに敗北し、ガングニールを破壊されてしまっていた。

モニターには、響への興味を無くしたルシフが地面に落としたボールを拾い、再び楽し気にジャグリングをしている彼女が写っている。アルカ・ノイズこそ従えていないものの、予測のつかない彼女の動きからどのように戦況が変化するか想像がつかない。

そしてルシフがガングニールを破壊した同じタイミングで、ミカ・ガリイコンビがテレポトジェムで姿を消した。それと連動するようルシフも姿を消す。

「オートスコアラの撤退を確認！」

「響ちゃんの救出を！」

「急行します！」

緒川がブリτζジを飛び出して行った。響がやられた、という報告は雷のもとにも通達されており、モニターに映る彼女も大急ぎで響のもとへ向かっている。響と未来の保護と周囲の安全確認、緒川との早急な合流が現在の彼女の任務だ。

遂に何の制限もなしに起動できるギアがケラウノスだけとなってしまった。誰に言われるでもなくそう認識した翼とクリスが、

「アタシならならやれる！だから、Project IGNITEを進めてくれ！」

「強化型シンフォギアの完成を！」

もとよりそのつもりだ。ガングニールかケラウノス、このどちらかが破壊されたならばすぐに実行に移れるよう、準備は進めている。エルフナインは振り返り、モニターに映るProject IGNITE Eによってなされる強化型シンフォギアの姿を見据えた。

傷ついた響を乗せたストレッチャーが本部の廊下を転がる。

彼女のそばにはドクターを除いて未来と雷、翼、クリスがいた。

未来は目を開けない響に必死に声をかける。

「響！目を開けて響！」

そんな彼女の声は届かず、ドクターたちはメディカルルームへと響を収容した。

「響……」

「私がおつと、早く着いていれば……！」

雷が自らの不甲斐なさに壁を殴りつける。その拍子に手のひらについていた傷口が開き、ガーゼに赤いシミを作り出した。そんな彼女たちの肩に、翼がそつと手を乗せる。

「大丈夫だ。立花ならきつと」

「たりめえだあ！あのバカが、こんなことで退場する者かよ……！」

「その通りだ……！私達とて、このままくすぶっていられるものか！」  
翼が拳を握りしめる。

響の先達として戦うことのできなかつた自分を不甲斐なく思う。声には静かな怒りがこもっていた。

○○○

テストの練習でピアノ伴奏をしている未来は、ピアノを弾きながら心ここにあらずと言う表情を浮かべていた。自分の親友たちのことが頭から離れないのだ。

響が敗北してから一週間がたっている。

（あれからもう一週間……。ずっと眠ったままの響、目が覚めて、胸の歌が壊されたことを知ったら、どう思うのだろう……）

そして未来は教室の中の一席、一週間ずっとあいたままの椅子を寂し気に見つめた。雷の席だ。

彼女は響の歌が壊されたのは自分の所為だと己を責め、本部の一室にこもってこれからの事を必死に思案していた。そのためノートやメモ帳にとどまらず、壁や床一面に呪詛のように、文字や計算式が書きなぐられている。またエルフナインと協力してProject I G N I T Eの理論構築をも行っていた。

（雷……。貴方がいなくなるのは、もう嫌だよ……。あんな悲しい思い、したくない……）

自分を閉ざし、過去の殻に閉じこもってしまった雷の姿を思い出す。

気持ちが沈み、ピアノを弾く指が止まってしまった。  
そんな未来を見て、

「心ここにあらず、と言ったところですね」

「あ……あ、いえ。……すみません……」

「小日向さんは、試験の日まで悩み事を解決しておくように。では、次の人」

担当の教師が優しく問題点―問題点と言うようなものではないが―を指摘し、交代させた。

○○○

寄港し、物資の補給やメンテナンスを行っている本部潜水艦のブリッジで、Project IGNITEの進捗や整備の進み具合が報告されていた。

「Project IGNITE。現在の進捗は89%。旧二課が保有していた第一号、および第二号聖遺物のデータと、エルフナインちゃん、雷ちゃんの頑張りのおかげで予定よりずっと早い進行です」  
「各動力部のメンテナンスと重なって、一時はどうなることかと思いましたが、作業や本部機能の維持に必要なエネルギーは、外部から供給できたのが幸いでした」  
「それにしても、シンフォギアの改修となれば機密の中枢に触れるということなのに」

緒川が当然の疑問を口にした。

雷と言う関係者がいるとはいえ、まったくの部外者であるエルフナインにシンフォギアシステムの全貌を公開することになるのだ。しかも、そのシステム内容はキャロルに筒抜けになっている。それでも、

「状況が状況だから……。それに、八紘兄貴の口利きもあつた」

「八紘兄貴って……。誰だ？」

突然出てきた人名にクリスがオウム返しに弦十郎に聞くが、それよりも先に翼が答えた。

「限りなく非合法に近い実行力を持って、安全保障を陰から支える政府要人の一人。超法規措置による対応のねじ込みなど、彼にとっては茶飯事であり……」

「とどのつまりが何なんだ?!」

あまりにも淡々とその人物の概要を述べるだけの翼に、業を煮やしたクリスが詰め寄った。翼はスツと視線を外す。

そしてそんな彼女が変わって緒川が二の句を紡いだ。

「内閣情報官、風鳴八紘。指令の兄上であり、翼さんの御父上です」

「だったらはじめっからそう言えよな! 蒟蒻問答が過ぎるんだよ!」

「私のS. O. N. G. 編入を後押ししてくれたのも、確かその人物なのだけど……、なるほど、やはり親族だったのね」

風鳴という名字がほとんどないため、マリアは翼や弦十郎の関係者なのではと疑っていたようだが、如何やらの射を射ていたようだ。

だが、父親の話をしているというのに翼の表情は芳しくない。

「どうしたの?」

マリアの声に翼は答えない。そんな彼女を見て弦十郎は頭をかけた。

背後でドアが開く音がすると、未来が歩いてきた。

「響と雷の様子を見てきました」

「響さんは生命維持装置に繋がれたままですが、大きな外傷もありません。雷さんのほうはマリアさん達の励ましもあって落ち着きましたし、ああ見えてしっかりと休息をとっているようなので心配ありませんよ」

響のほうも心配だったが、雷が体を壊さないのか心配だった未来は彼の報告を聞いて安堵した。如何やら食事はともかく休息、睡眠は年齢の割に少ない程度のようなのだ。

「ありがとうございます……」

未来は眉をハの字にし、少し寂しそうに言った。

○○○

試験管やフラスコが並ぶ木でできたテーブル、石でできた壁。地面に描かれた化学式や地面に転がる錬金術に使う材料。

中世ヨーロッパの時代。この家に今と変わらぬ姿の幼きキャロルと彼女の父、イザークが二人で住んでいた。

キャロルが分厚い本を読んでいると、イザークの悲鳴と共に小さな爆発音が聞こえてきた。思わず肩を跳ねさせ、驚いてしまう。

「パパ？」

「……爆発したぞお？」

「……ウフフフツツ」

顔を黒くしたイザークを見て、キャロルはおかしくなって吹き出してしまった。

本を片付け、テーブルに戻ってみると、目の前には焦げた肉のようなものとパン、スープが並べられていた。キャロルは恐る恐るフォークを刺し、ナイフで切り取った。

お世辞にも良いとは言えない肉の感触に、キャロルはイザークに「本当に食べれるの？」と言うように視線を向けた。苦笑いしか向けない彼の反応に意を決して口へと運ぶ。

「はむ……んう?!」

「っ……。うまいか……?」

「苦いし臭いし美味しくないし、零点としか言いようがないし」

キャロルはフォークで空中に零と書いた。覚悟はしていたが、娘の辛辣な返事に溜息をつき、背もたれに体を預けた。

「料理も錬金術も、レシピ通りに作れば間違いないはずなんだけどなあ……。どおしてママみたいにできないのか……」

イザークが天井を見上げていると、キャロルがにこやかな笑顔を浮かべて椅子から立ち上がった。彼女は腰に手を当て、無い胸を張ると、

「明日は私が作る！その方が絶対美味しいに決まってる！」

「コツでもあるのか……?」

「内緒。秘密はパパが解き明かして、錬金術師なんですよ？」

口元に指を立てて笑った。

そんな娘の言い様にイザークは一本取られたなと言うように頭を手を当て、

「アハハハ……、この命題は難題だ」

「問題が解けるまで、私がパパの料理を作つてあげる」

楽しそうにキャロルが笑う。

そんな光景はだんだんぼやけてきて、エルフナインは現実に戻された。うつすらと目を開ける。白い無機質な天井と、さつきまで自分が読んでいた本を読んでいる少女が目に入ってきた。体が近いことから、如何やら膝枕されているようだ。

「ん……夢……？数百年を経たキャロルの記憶……」

「あ、起きた？」

膝枕をしていた少女、雷が本をずらし、こちらに微笑みを向けてきた。彼女はエルフナインを手伝うためにこの部屋にやって来ている。目元にうつすらと隈があることから、少々無理をしているのだろう。

おもむろに視界を時計のほうへ動かすと、十分ほど眠っていたようだ。慌てて跳び起きる。当然、予想外のタイミングで起き上がったエルフナインを避けることが出来ず、下を向いていた雷は彼女と顔をぶつけてしまった。

「すみません！十分そこら寝落ちてました！……痛いツ?!」

「痛ったく……。十五分経ったら起こすつもりだったんだけど、大丈夫？！」

「こっちは大丈夫です、すみません。でも十分寝たんで、頭は冴えた筈です！ギアの改修を急がないと」

エルフナインは額を抑えながら起き上がり、修復中の天羽々斬と向き合った。雷も椅子を動かし、キャロルの行動予測と理論の精錬を凶る。

エルフナインは自身の記憶の中にあるキャロルの記憶がよみがえる。

（パパは何を告げようとしたのかな……。？その答えを知りたくて、僕はキャロルから世界を守ると決めて……。でも、どうしてキャロルは錬金術だけでなく、自分の思い出まで僕に転送複写したのだろうか……？）

エルフナインが答を探す一方で、雷はキャロルは何時動くのかを考



えていた。

ケラウノスを残して主力のギアが全て損傷した今、ガングニールを破壊したルシフと戦闘特化のミカで攻撃を仕掛けてくるであろうことは予測し、弦十郎に伝えていた。

（ダインスレイフをこちらに提供した以上、強化型シンフォギアの完成が目安となるのは確実。私なら稼働可能ギアの抵抗を含めて、慣らしもなしにぶっつけ本番にならざるを得ない今を選択するけど……）

そして今日この日が、彼女が最も襲撃確率の高いタイミングであると予測した日であった。

○○○

「頃合いだ、仕上げるぞ」

チフオージュ・シャトールの玉座に座するキャロルは、エルフナインから送られるギアの改修具合を見て、眩くように宣言した。

雷の予測が的中する。

本部のモニターにアルカ・ノイズ出現のアラートが鳴り響いた。

## 時を稼げ

本部ブリッジにアルカ・ノイズ出現のアラートが鳴り響く。

事前に予測出来ていたためにそこまでの混乱はなく、各スタッフが迅速に行動に着いた。

「アルカ・ノイズの反応を検知！」

「座標、絞り込みます！」

爆発による衝撃がブリッジを揺らす。

モニターに襲撃座標であるこの発電所が表示された。アルカ・ノイズの攻撃によって発電施設が分解されていく。

「やはり、敵の狙いは、我々が補給を受けている、この基地の発電施設……！」

「何が起きてるデスカ?!」

調と切歌がブリッジに駆け込んできた。ケラウノスを除けば稼働できるギアはシウルシャガナとイガリマのみ。それを分かっている彼女たちは力になるべく情報収集に来たのだ。

「アルカ・ノイズに、このドックの発電所が襲われてるの！」

「ここだけではありません！都内複数個所にて、同様の被害を確認！各地の電力供給率、大幅に低下しています！」

モニターには別の発電施設まで攻撃を受けている様子が映し出された。本部が停泊しているこの基地でさえ、稼働率の問題でシンフォギアで守ることが守ることが難しいというのに、他の施設の防衛は不可能と言っているだろう。

ともかく、何よりもギアの改修が最優先。翼が直近の懸念を口にする。

「本部への電力供給が断たれると、ギアの改修への影響は免れない！」

「内臓電源も、そう長くは持ちませんからね……！」

「それじゃあ、メデイカルルームも……！」

「私が行きますッ！」

突然、雷から通信が入ってきた。

如何やら走っているらしく、廊下を蹴る靴の音や、声も少しばかり

上気している。現状、問題なく稼働できるのは彼女の持つケラウノスのみ。迷うことはないだろう。

弦十郎は冷静に指示を出した

「雷君、知つての通り、今はギアの改修が最優先だ！よって、発電施設の防衛を最優先とする！」

『了解しました！』

少し走る速度を上げたようだ。廊下を蹴る音が少し大きくなってから通信が切れる。

雷の行動を聞いて、調がどこからともなく眼鏡を取り出す。かつてリディアンに潜入した際にかけていたものだ。再びそれを掛ける。

唐突な彼女の行動に切歌が思わず、

「ど、どうしたデス調……！」

「シー……」

「？」

二人は黙って気付かれないようにブリッジを抜け出した。

少し遠いが外から稲妻の音が聞こえてくる。雷が交戦を開始したのだろう。調は急がないと思いつながら走る速度を上げた。彼女の後ろを調がついてきている。彼女も眼鏡をかけていた。

「潜入美人捜査官メガネで飛び出して、いったい何をするつもりデスカ?!」

「時間稼ぎ……！」

「何デスと?!」

「今大切なのは、強化型シンフォギアの完成に必要な時間と、エネルギーを確保すること！」

「確かに姉ちゃんも言ってたデスが、まったくの無策じゃ何も……」

調の後についていきついた先は、メデイカルルームだった。彼女はそこへ至る廊下の前で立ち止まり、

「まったくの無策じゃないよ、切ちゃん」

「メデイカルルーム……?こんなところでギア改修までに時間稼ぎデスカ……?」

二人は響の眠っているメデイカルルームに飛び込んだ。如何やら

調はここにある何かを探しているらしい。辺りをキョロキョロ見回している。

「このままだと、メディカルルームの維持もできなくなる」

そう言って彼女は静かに響の顔を覗き込んだ。そんな調の様子に切歌は微笑ましさを感ずる。

「だったらだったで、助けたい人がいると言えればいいデスよ」

「ね、姉さんの大切な人だから助けたいだけ……」

「正直に言えばいいデスのに」

「恥ずかしい……。切ちゃん以外に私の恥ずかしい所見せたくないもの……」

「調〜!」

切歌は調の言葉に感激し、抱き着こうとするが、その直前に調は何も見つけたようだ。切歌の抱き着きは無情にも回避され、床に激突する。

切歌を鼻を抑えながら、

「全くなんデスカ、もう……」

「見つけた……!」

調はかがみこんで何かのロックを解除していた。目当ての物だったようで、顔に笑顔を浮かべている。彼女たちはこれを二本取り出して使用し、本部の外へと駆け出していった。

○○○

雷は基地の隊員たちと連携をとりながらアルカ・ノイズを迎撃していたが、いかにせん数が多く、救える隊員の命を救っているために戦況はなかなか好転していない。

位相差障壁は従来のノイズよりは弱まっているとはいえ、分解能力は凶悪になっており、さらに言えば今までであれば一対一のダメージレースだったのに対してアルカ・ノイズは分解後も平然と襲い掛かってくるようになっていた。

ダメージを与えられるようになったとはいえ、こちらの被害は増え行くばかり。こんな状況に雷は歯噛みしながら全周囲に稲妻を放射して数を減らしていく。彼女も一応の防御手段があるとは言え、少し

でも気を抜けば分解一直線であり、簡単に攻撃が通せるだけで彼らと状況は変わらない。

額の汗をぬぐっていると、

「行くデス！」

「Various Shul Shagana Tron」

「Zeios Igalima Raizen Tron」

「二人ともッ?!」

施設の屋根の上から、調と切歌のギアの起動聖詠が聞こえてきた。流石に予想外だったようで雷が驚きの声を上げる。

シウルシャガナを纏った調は、跳躍して展開したツインテール状のバインダーから無数の小型鋸を投射した。

『α式・百輪廻』

無数の小型鋸はアルカ・ノイズを切り裂いていく。イチイバルほどではないが多数の敵を殲滅するのに向いているギアだ。と雷は常々思う。調は落下と同時に蹴りを見舞うと新たに追加されたヨーヨーを振り回して突撃する。

同じくギアを纏った切歌は鎌の刃を三枚に分裂させ、振り回すことでブーメランのように刃を投擲した。

『切・呪りeツTお』

二人の抜群のコンビネーションでアルカ・ノイズが次々に倒されていく。

彼女たちはアルカ・ノイズを殴り抜いていく雷のもとへと駆け寄り、背中合わせに構えた。

「姉ちゃん！待たせたデス！」

「ちよ、二人とも……」

『お前達！何をやっているのかわかってるのかッ?!』

雷が叱る前に弦十郎が通信を入れた。声色からして結構怒っているようだ。

だが、切歌は明るい声で、

「もちろんデスとも！」

「今のうちに、強化型シンフォギアの完成をお願いします……!」

「ッ……い・弦十郎さん！今は……！」

清濁かませ呑むしかない。今はこれしか手段がないため、弦十郎は何とか納得する。

とりあえず今はお叱りをしのいだ三人はそれぞれの手段でアルカ・ノイズ殲滅のために動き始めた。雷は稲妻で、切歌は鎌で、調は鋸で。彼女たちは三者三様の方法で攻撃し、アルカ・ノイズはその数を減らし続けている。

切歌が跳躍し、鎌を振り下ろすが遠距離攻撃能力を持つアルカ・ノイズが上空にいる彼女に攻撃する。

「当たらなければあッ！」

だが、切歌は鎌を振り回すことによつて落下する軌道を変え、一気に切り裂いた。

調は脚部の小型鋸をローラーのようにしてアルカ・ノイズの群れの中に入り込み、スケートの要領で体を高速回転させ、スカートを変化させた鋸で切り裂いた。

『△式・艶殺アクセル』

雷も妹分に負けじと全身のユニットを展開し、放出した雷をヘッドギアの角に集め、圧縮して出力を引き上げた稲妻を放射した。

『天雷白毫』

雷を中心に稲妻の光線は薙ぎ払うように放たれ、解剖器官で受け止められようともそれ以上の攻撃範囲でもって強引に突破する。

そんな彼女たちを見下ろす二体のオートスコアラの影があった。

そのうちの一体、ミカは発電施設のパネルの上から身を乗り出し、

「ニコイチでもギリギリ？これはお先真っ暗だゾ」

「ミカの相手くらいそれぐらいで十分ってやつなんじゃなくI☆？」

「ルシフの言うことはいちいち腹立たしいゾ……」

にやにやとした笑みを浮かべ、ジャグリング―今回はボールではなくクラブ―をしながら煽った。彼女は思い出を採集、使用する能力を錬金術の特性上持っていないため、自身をオートスコアラとして劣った存在であると思っていた。

そして感情のベースとなつているキャロルの感情は『劣等感と優等

感』。それ故に他のオートスコアラ―に対して反動から自らの優等性を示すために煽るような言動をするのだ。

○○○

メデイカルルームに眠っていた響は、うつすらと涙を流しながら目を覚ました。現実の世界で、夢の世界ですら手を繋げなかった父親の姿を思い出し、自分の手のひらを見つめる。

(大切なモノを壊してばかりの私……。でも未来は、そんな私に救われたって励ましてくれた……)

気落ちしたまま行くと起き上がる。

「未来の気持ちに応えなきゃ」

胸に手を当てるがペンダントがない。ルシフによって拳が受け止められ、踏み壊されてしまった時の事を思い出す。

不甲斐なさに、体が震えた。

## 届かぬ一步、届いた一步

友里が調と切歌のバイタルを確認しているが、今までとは異なる点があった。

「シユルシヤガナとイガリマ、装者二人のバイタル安定……？ギアからのバックファイアが低く抑えられています」

「一体どういうことなんだ？」

共に戦っている正規適合者である雷はともかく、調と切歌はギアを纏うには適合係数が足りていないため、体に少なくない反動があった。かつてであればウエルの開発したリンカーで反動を抑制していたのだが、今はそんなものは無く、ここまで安定するのはあり得ないことだ。

当然、突然適合率が上がるなんてことはなく、後天的に正規適合者となった響でさえ、元々が融合症例であったからこそ成し得た例外中の例外なのだ。

心当たりのあつた緒川が口を開いた。

「さっきの警報……そういうことでしたか……」

「ああ……。アイツ等メデイカルルームからリンカーを持ち出しやがったツ……！」

「まさかmodel Kを……?!奏の残したリンカーを……」

model K。かつてのガングニール装者、天羽奏用に調整されたりんカー。ウエルの開発した物よりも旧式であるため、体への負担が大きく、危険度が高い。それを彼女たちは使用したのだ。

姉さんが知ったら怒るだろうな。と思いながら（実際、後回しにしているだけで、すでに雷はカンカンに怒っている）、それでも調達はこの危険度の高いりんカーを打ち込んだのだ。

「ギアの改修が終わるまで！」

「発電所は守って見せるデス！」

○○○

チフオージユ・シャトー城内で玉座に鎮座しながら、キャロルは各地の発電施設襲撃をモニターしていた。各地ではそれぞれオート



スコアラーが破壊任務に就いている。

レイアが、

「対象、派手に破壊完了……」

ガリイが、

「まるで積み木のお城。レイアちゃんの妹に手伝ってもらうまでもないわね」

ファアラが、各々の錬金術でもってして破壊の限りを尽くしていく。しかもそれに無駄な動きはなく、最小限の動きで最大限の被害をもたらしていた。

彼女が主であるキャロルに報告のため、錬金術による通信を繋いだ。

『該当エリアのエネルギー総量が低下中。まもなく目標数値に到達しますわ』

「レイラインの解放は任せる。オレは、最後に仕上げに取り掛かる」

キャロルが事を起こすために玉座から立ち上がる。

『いよいよ始まるんですね……』

「いよいよ終わるのだ。そして万象は、黙示録に記される」

本部の停泊している基地では、遂にミカが動いた。

カーボンロッドを携え、上空から切歌に殴りかかる。

「そくりや〜！」

「ッ?!」

その一撃こそ受け止めてしのいだものの、彼女の圧倒的な出力によつて上から抑え込まれてしまう。そしてそこに調が救援に入り込もうとしたが、それをミカが読んでいたのかも片方の腕からもロッドを取り出し、ゴルフのように切歌をぶつけた。

突然のことに防御姿勢も避けることもできず、二人はまとまって吹き飛ばされ、基地の外壁に叩きつけられてしまう。

突然のミカの強襲に雷も反応できず、

「切ちゃん?! しらちゃん?!」

「あ痛たたた……」

「簡単にはいかせてもらえない……!」

大したけがはないようだ。襲撃してきたオートスコアラ、ミカを雷が見据える。

彼女はさらにもう一本ロッドを取り出し、その上にやじろべえのように乗っていた。

「じやりんこ共々、あたしは強いゾ」

「私が相手になってやるッ……！」

ユニットを展開し構えるが、ミカはどこか不思議そうな表情を浮かべている。そしてとなりを見て誰もいないことを確認すると、不機嫌そうな声でさつきまで自分のいたところを見上げて言った。

「何してるんだルシフ〜！早く下りてくるんだゾ！」

「はいはー……☆。下りればいいんでしょ、下りれBA……☆」

「ルシフ……！」

ルシフはまたもジャグリングしながら、気だるげな雰囲気纏って勢い良く落下してきた。しかし、落下の衝撃を感じている様子はない。エルフナインの情報通り衝撃をエネルギーに変換しているようだ。彼女は平然とジャグリングを続けている。

「君の相手はボクNE〜☆どこからでもかかってきなさ〜I☆」

「切ちゃん、しらちゃん……。任せた」

「了解デス！」

「任せて……！」

彼女たちは向かい合い、さらに追加でリンカーを投与する。オーバードーズで鼻血が出ようとも、それでも彼女たちは償いのために戦うと決めたのだ。

切歌は鎌を二本取り出し、融合させることで三日月型の刃を両端につけた特殊な鎌を形成する。

『対鎌・螺Pうn痛エる』

調はツインテールのバインダーを変形させ、先端部分に高速回転する大型の鋸を回転させたアームへと形を変えた。

二人は並び立ち、ミカへと立ち向かう。

「お?!おもしろくしてくれるのか?!」

ミカは跳躍し、両手のロッドを投擲した。

調と切歌、二人の歌が重なり、フォニックゲインを上昇させてミカと激突する。

雷はユニットから稲妻を放出したまま、未だにジャグリングを続けているルシフと対峙する。彼女はニタニタと笑みを浮かべながら、

「じゃ、ミカも戦ってることですS I ☆こつちもやりますK A ☆!」  
「なッ?!」

そういうや否やルシフは投げていたクラブを放り捨て、着地の際に吸収した衝撃を利用して一気に詰め寄った。踏み込みの力と進んだ距離があまりにも違いすぎるため、雷の脳に混乱を生んだ。故に、反射的に拳を振り抜いてしまう。

だが、これは彼女にとつて悪手だ。

ルシフは指一本で雷の拳を受け止め、吸収した威力を自らの力へと転化する。そして流れるようにブレイクダンスのウインドミルのような動きで雷の足を払った。

が、簡単に倒れるような彼女ではない。払われる直前にバク転で距離をとると、ルシフの錬金術を攻略すべく思考を回す。

(エーテル……。アリストテレスの提唱した天体運航を司る永遠に回転し続ける物質……。恐らく受けた衝撃を、体内の器官で回転させることで反射しているはず。打撃はダメ……。なら雷の攻撃なら?)  
やってみるしかないだろう。

雷はバックステップで距離をとった後、全身のユニットから放たれる稲妻をヘッドギアに集約し、一気に放射した。

#### 『天雷白毫』

アルカ・ノイズの解剖器官ですら分解しきれないほどのエネルギー量を誇る一撃だ。これがだめなら稲妻だけの攻撃は全て無に帰すだろう。

だが、周囲が光り輝き、地面が熱で沸騰するほどの稲妻の奔流であろうとも、ルシフは健在だった。しかもただ健在というだけではない。放射されている稲妻を真正面から押し返していた。いや、彼女からすれば普通に歩くのと大差ないだろう。

ルシフは遂に雷の前に立ち、

「ざあんねんでしTA☆☆」

「嘘……でしょ……」

無造作に胸のコンバータユニットを掴みかかった。

咄嗟に腕を流したことで回避できたが、彼女の脳内に暗い影を落とす。

(打撃も駄目、雷も駄目……？どうすればいいの……)

すべての攻撃が無意味。それどころかこちらの首を絞めるだけ。解決できない問題が混乱を生み、混乱が理解不能を生み、理解不能が恐怖を生む。

この世は何がヒントになるのかわからないものだ。雷は混乱し、回転する問題そのものに答えを見出した。

(回転……、そうだ！それだ！)

「O☆？ついにやる気になっTA☆？」

「来なよ……！」

「じゃあ遠慮なKU☆！」

雷の放った稲妻のエネルギーを力にしたルシフは、その圧倒的な威力でもって雷に殴りかかった。雷はそれを避けようともせず、真正面から迎え撃つ。

通信機から藤堯達の声がうるさいほど聞こえてくる。

『駄目だ雷ちゃん！避けないと！』

『雷ちゃんの体が壊れてしまうわ！』

それでも避けない。

雷は迫りくる拳を右手で流し、左手でルシフのほうに向けて押し込んだ。本来ならあり得ない動きであるが、ルシフの拳が速かったため出来たことだ。ルシフは自らの拳を鳩尾に喰らってしまう。

「ぐっ?!……マスタア以外にダメージを与えられるとは思ってもみなかったYO……☆」

「やった……！」

ダメージは入ったようだ。

如何やら自分で放ったものは取り込むことが出来ないらしい。攻略の一手に見えたが、かなりギリギリの条件だ。自分が受け流せるだ

けの威力を持ちながら、ルシフが途中で攻撃をキャンセルできない程度の威力でなければならぬ。当然、彼女も対策をとつてくるだろう。

頬に汗が伝う。ルシフを見据えたまま深呼吸を入れた。

(集中を切らすなッ……！切れれば終わるッ……！)

自分に気合を入れる、その瞬間だった。突然、発電用のパネルが大爆発を起こした。丁度そこで調達とミカが交戦していたのだ。調と切歌が爆発で吹き飛ばされる。

「きやああああッ！」

「しらちゃん?!切ちゃん?!」

雷と言う少女は身内に対して非情になれない質だった。聞こえてきた彼女たちの悲鳴に思わず反応してしまう。

それが命取りとなった。

「よそ見してる場合かNA☆？」

「しまっ?!」

すでにルシフは目の前にやって来ていた。彼女の放つたつま先での蹴りを横から喉を貫くように喰らってしまい、頭から吹き飛ばされる。

「カハッ……」

「一発入れられちゃったけど、それだけだったNE……☆」

ルシフは無造作に雷の首を掴んで持ち上げ、歌えなくした。最後の手段である絶唱すら封じられてしまった雷は暴れるが、全てルシフの力になるだけだ。その証拠に、締め付ける力が強くなっている。

空いたもう片方の手でコンバーターユニットを掴んだ。

「ほらほRA☆、抵抗しないと壊れちゃうYO☆☆ま、抵抗したところで無駄なんだけどNE☆？」

ルシフは甦るように、ゆっくりとコンバーターを壊していく。

雷の意識が死で埋め尽くされ、混濁していく。

切歌のイガリマも、ミカによって破壊された。

本部ブリッジでは、未来が悲鳴を上げ、マリアが怒りに震えていた。メデイカルルームからやって来ていた響もこぶしを握り締めている。

「雷っ……」

「切歌！雷……私に力さえあれば……！」

弦十郎や緒川も助けに出たかったが、ミカが召喚した無数のアルカ・ノイズ。ルシフの錬金術によって手を出せないでいた。

友里が叫ぶ。

「雷ちゃんの意識レベル、急速に低下していますッ！」

「何だとツ?!まさか……」

「雷ちゃんのフォニックゲイン、意識レベルと反比例して急速に上昇していますッ！」

藤堯の言葉に本部が揺れた。

フォニックゲインの上昇を証明するように、雷の纏うギア、その灰色の部分が金色に発光し始める。すでに雷の意識はない。それでも、彼女の生存本能に反応してケラウノスの決戦機能『雷帝顕現』が発動しようとしていた。

だが、ケラウノスの放つ絶唱を軽く凌駕する膨大なフォニックゲインに、半壊したコンバーターが耐えきれなくなるわけがない。ギアとしての形を保つことが出来ず、崩壊し雷は一糸まとわぬ姿となってしまふ。「もうちよつと楽しませてくれると思っただけどNA☆☆」

変化を見せたケラウノスを見て、楽し気に目を輝かせていたルシフだったが、興味を無くしたのかほいつと雷の体を放り投げた。

雷の体が地面を転がる。

切歌のイガリマもミカによって破壊され、調のシウルシャガナはアルカ・ノイズの蹂躪によって分解されていた。

すべてが万事休すだった。

「誰か……調を……。誰かあああッ！」

適合係数の低さからターゲットにされた調に、アルカ・ノイズが触れようとした、その時だった。思わず目を瞑っていた切歌だったが、何時まで経っても調の悲鳴が聞こえてこない。恐る恐る目を開けると、アルカ・ノイズの解剖器官が切断され、ハチの巣になっていた。調も震えながら目を開けた。

「え……？」

「誰かだなんて、連れねえこと言ってくれるなよ」

見覚えのある剣が煌めき、安心させるようなクリスの声が聞こえてきた。

「剣……？」

「ああ、振り抜けば風が鳴る剣だッ！」

翼が剣をふるい、アルカ・ノイズが赤い粒子へと姿を変える。

強化型シンフォギアへの改修が完了した。三人の戦いは、無駄ではなかったのだ。

## 錬金術師のシンフォギア

少し肌寒さの残る山をキャロルとその父親、イザークが登っている。

山々の間にある平原には黄色い花が咲き乱れ、すんだ青い泉が大空を反射している。それらが自然の美しさと荘厳さを体現していた。

体に見合わぬ黒いとんがり帽子をかぶったキャロルが隣を歩くイザークに問うた。

「パパ、どこまで行くの？」

「この先にある、アルニムと言う薬草には高い薬効があるらしい。その成分を調べて、はやり病を治す薬を作るんだ」

イザークは心の優しい男だった。

普通の錬金術師であれば金を錬成し、巨万の富を得るようなところを、彼は錬金術を人々の幸福のために惜しみなく使っていた。

それには確固とした理由がある。

イザークはその目的を娘であるキャロルに聞かせるために、口を開いた。

「見てごらん」

「わああああ……！」

父親に促され、キャロルは大自然に直面し、感嘆の声を上げた。

そんな彼女を微笑ましく思いながら、

「パパはね、世界の全てが知りたいんだ。人が人と分かり合うためには、とても大切なことなんだよ。さあ、もう少しだ。行こう」

人と分かり合うためには、相手を知らなければならぬ。世界中の人と分かり合うならば、当然それ相応に知らなければならぬ。イザークはそれを知っていたのだ。

キャロルは世界を知るために、記憶の海から、自身の鎮座する玉座から立ち上がる。

「ああ行くとも。思い出を力と変えて……！万象黙示録の完成のために……！」

○○○



雷、調、切歌たちの奮戦もむなしく発電施設は破壊されてしまったものの、強化型シンフォギアの改修が間一髪で完了した。だが、それとトレードするように彼女たちのギアは破壊、分解されている。しかも彼女たち自身も傷ついている。雷は気を失い、調と切歌もリンカーの副作用もあるだろうが疲労困憊だ。

倒した雷から興味を無くしたルシフはミカと合流し、調と切歌との間に割って入っている翼とクリスの二人に興味を見せていた。

二体から調を庇うようににらみながらクリスが、

「さて、どうしてくれるセンパイ……!」

「反撃……程度では生ぬるいな。逆襲するぞッ!」

ミカは楽し気に、ルシフは品定めするように二人を見下ろした。

本部では一糸まとわぬ柔肌を晒している調が戦闘管制用カメラの範囲内に入ってしまったため、ブリッジのモニターにでかかど映し出されていた。

マリアは女性代表として叫ぶ。

「男どもは見るなッ!」

「ぬ」

「んぐっ」

「なっ?! なな何で私までえ?!」

「わ、ゴメン! つい勢いで……」

彼女の言葉に弦十郎と藤堯が正直に目を背け、何故か響の目を未来が塞いでいた。

大人として、男として言われるままに目を背けた藤堯だが、戦闘管制を担当している以上たまったものではない。職務遂行のため、恥を忍んで進言する。

「モニターから目を離れたままでは、戦闘管制が出来ません……!」

「なに?! その必死すぎるボヤキは!」

「調と切歌、雷が撤退するまでの間よ……。それに、今の翼とクリスなら、それくらい問題ないはず」

彼の進言は友里とマリアにすぎなく両断されてしまう。マリアには今の二人に戦闘管制などなくても大丈夫だという確信があった。

その確信を胸に、黙ってモニターを見つめた。

ミカとルシフがアルカ・ノイズを召喚し、翼とクリスに差し向ける。改修したシンフォギアにの前に、アルカ・ノイズなどおそるるに足らず。と言うように翼が剣を構えた。

「慣らし運転がてら片づけるぞッ！」

「綺麗に平らげてやるッ！」

二人はアルカ・ノイズの群れに突撃していく。

ギアは攻撃力をそのままに、アルカ・ノイズの解剖器官でも分解されないように防御力が高められていた。故に翼は分解を恐れることなく斬り進み、クリスは躊躇うことなく矢をばら撒いた。

召喚された無数のアルカ・ノイズだったが、二人の重ねた歌による爆発的な出力により瞬く間に数を減らしていった。

無事な調と切歌に運ばれる形で気を失っていた雷が撤退し、戦闘管制に戻った藤堯が翼たちの状況を報告する。

「天羽々斬、イチイバル共に、各部コンディショニンググリーン！」

「これが……強化型シンフォギア……？」

改修の大半を担当したエルフナインが友里の隣に歩みを進め、計画の詳細を解説し始めた。

「Project IGNITEは、破損したシンフォギア・システムの修復に留まるものではありません。出力を引き上げると同時に、解剖器官の分解効果を減衰するよう、バリアフィールドの調整を施しています」

彼女の言う通り、翼がアルカ・ノイズの解剖器官による攻撃を刀で受け止めたが分解されていない。それどころか逆に切り裂いている。計画は完全に成功していた。

「ここは二人に任せるデス！」

「私達が足手まといだから……！」

上からジャケットだけはおり、調と切歌が気を失った雷を二人がかかりで抱えて階段を駆け上がる。調の中に無念が募る。もしも自分たちがもつと強ければ、姉さんは敗れることなく、ギリギリの状態だったかもしれないがルシフを引きつけたまままで居れたかもしれない。

もしも、たられればの話ではあるが、そう思えばそう思うほど自分たちが弱いという現実を突きつけられてしまう。

そんな彼女の思いを体現している翼たちはアルカ・ノイズを遂に殲滅し、二人はミカとルシフへとターゲットを変えた。

翼が跳躍し、刀を大剣へと変形させる。クリスはガトリングの砲口をミカ達に向けた。さらに翼は大剣の中から太刀を抜刀し、十文字状に斬撃を放つ。

『蒼刃罰光斬』

放たれた斬撃を見てルシフは建物が受けきれないと判断して跳躍して避け、ミカもそれに追隨する。二人の着地地点を読んでいたクリスは二本の大型ロケットを発射した。

『MEGA DEATH FUGA』

「ふん。ちよせえ……！」

二体が爆炎に包まれるのを見てクリスは笑みを浮かべるが、緊張を崩しはしない。ルシフの戦闘力は目に見て理解している。この爆発のダメージを負うどころか力へと変えているだろう。

爆発で発生した煙が晴れる。

そこにいたのはミカとルシフだけではなかった。見慣れぬ錬金陣によって障壁が張られている。

「いや、待て……！」

「何……？」

そこにいたのはキャロルだった。彼女が二体の前に立ち、クリスの攻撃を防いだのだ。

ルシフたちはキャロルの影から出てきて、

「面目ないゾ」

「ボク達だけで十分だったのNI……☆」

「いや、手ずから凌いで分かった……。オレの出番だ」

変わらずキャロルがルシフたちの前に立ち、結論付けた。

クリスが不敵に笑い、翼が僥倖と言わんばかりに気を引き締める。

「ラスボスのお出ましとはなあ……」

「だが、決着を望むのはこちらと同じこと……！」

経験を積み、適合係数も高い二人を前にしても冷静に、淡々と二体に命令を告げる。

「すべてに優先されるのは計画の遂行……。ここはオレに任せてお前たちは戻れ……」

「分かったゾー！」

「了解でっSU☆！」

ミカは飛び跳ねて空中でレポートジエムを割り、ルシフは地面にポイツと投げ捨ててジエムを割った。二体が瞬時にシャトーへ転送される。

クリスは敵前逃亡した二体に苛立ちを募らせる。

「取んずらする気かよッ?!」

「案ずるな、この身一つでお前ら二人を相手するぐらい、造作もないこと」

「その風体でぬけぬけと吠える」

敵ではないと言われて噛みつくような翼ではない。刀を構え、戯言と受け流した上で挑発した。

だが、キャロルはその挑発にあえて乗り、

「なるほど。なりを理由に本気が出せなかったなどと言いつきされるわけにはいかないなあ……。ならば刮目せよッ！」

キャロルは自身の真横に錬金陣を構築し、そこから紫色のハープのようなものを取り出した。彼女の取り出した武器らしきものに翼とクリスが身構える。相手は錬金術師、どこからどうやって攻撃が来るかなど想像もつかないからだ。

キャロルは特に変わったこともせずハープを構え、その言をつま弾いた。美しい音色が鳴る。

この瞬間、本部ブリッジではある反応を捉えていた。

「アウフヴァアッヘン?! いえ、違います! ですが非常に近いエネルギーパターンです!」

「まさか……聖遺物起動?!」

「ダウルダブラのファウストローブ……!」

ファウストローブ。

シンフォギアとは似て非なる、いかなれば錬金術師のシンフォギアをキャロルは身に纏う。しかも、体を成長させることによって翼の挑発に真つ向から向かい合った。

キャロルと翼、クリスが激突する。

## ダインスレイフの闇

生身でもシンフォギアを防ぐほどの力を持つキャロルが錬金術師のシンフォギア、ファウストローブを纏ってしまえばどれほどの戦闘能力を持つのか。そんな事言うまでもないだろう。

急成長させた体に不具合はないかを確認するために自らの胸を揉みしだき、

「これくらいあれば不足はなからう？……らあッ！」

指先からハープの弦のようなものを伸長させ、翼とクリスを切り裂きにかかった。彼女たちは跳躍して避けるが、先ほどまで自分たちのいた地面がまるでゼリーのようになややく切断されるのを目撃した。

次いで翼めがけて横薙ぎに払われた弦を彼女は伏せることで回避する。切り裂いた所が燃料タンクであったために爆発が発生した。爆炎の中、翼は立ち上がり、

「大きくなったところぞッ！」

刀を携えてキャロルに突進し、

「張り合うのは望むところだッ！」

アームドギアでガトリング砲を形作ることで弾幕を展開した。

だがキャロルは二人の攻撃の芽をつぶすべくファウストローブの背部ユニットを展開し、そこに張られた弦を爪弾くことで水と炎の錬金陣を展開した。錬金陣から特大の火柱と水柱が二人に放たれ、光線のように一直線に打ち込まれる。

何のデメリットもなくこれほどのエネルギーを扱えるわけがない。そのことに疑問を持った藤堯が言葉をこぼした。

「歌うわけでもなく、こんなにも膨大なエネルギー……一体どこから……？」

「思い出の焼却です」

「思い出の？」

答えは直ぐに出た。キャロルの生み出したホムンクルスであり、彼女と同じ錬金術師であるエルフナインが応える。

「キャロルやルシフを除いたオートスコアラーの力は、思い出と言う

脳内の電気信号を変換錬成したモノ。作られて日の浅いものには力に変えるだけの思い出が無いので、他者から奪う必要があるのですが、数百年を長らえて、相応の思い出が蓄えられたキャロルは……」

「それだけ強大な力を秘めている……！」

戦闘状態でなければ今すぐにも雷のもとへと向かいたいマリアが結論を先回りした。だが、一つ疑問が残る。それを弦十郎はエルフナインに問う。

「力へと変えた思い出はどうなる？」

「燃え尽きて失われます。……キャロルは、この戦いで結果を出すつもりです……！」

キャロルの指先から延ばされる弦が縦横無尽に駆け回り、戦場を切り裂いていく。誘爆によって発生した爆風に巻き込まれ、翼が地面に叩きつけられた。キャロルはその隙を見逃さず、錬金陣からエーテルの光を放った。全弾が命中し、翼の体が炎に包まれる。

「センパイッ！」

「その程度の歌でオレを満たせるなどとッ！」

クリスのいた場所に弦を放つ。クリスは跳躍して避け、空中で反転してアームドギアから巨大な二本の矢を放つ。

### 『GIGA ZEPPELIN』

放たれた矢はクラスター弾のように空中で分散し、キャロルに向かって雨のように降りかかる。キャロルはそれを弦を高速回転させることすべて切り刻み、そのままドリルのようにしてから風の錬金術を纏わせてクリスに突き放った。

指向性を持った竜巻は地面をえぐりながらクリスへと襲い掛かる。回転する竜巻の中心は無風。故に拘束されてしまったクリスは回転する弦の突きを喰らい、竜巻に巻き込まれながら上空へと巻き上げられ、自由落下にて地面に叩きつけられた。同様に巻き上げられた瓦礫が翼とクリスに降りかかる。

二人はキャロルの前に膝をついていた。激痛を思考の外に押しやり、翼は立ち上がろうとする。

「まだよー…まだ立ち上がれるはずよー！」

「イグナイトモジュールの可能性はこれからです」

「イグナイト……」

『点火』をイメージさせるその単語に、響は言葉をこぼした。

翼とクリスは呼吸を荒げながら立ち上がる。追い詰められながらも、クリスは悪態をつくことを忘れない。

「くそつたれがあ……！」

「大丈夫か……？ 雪音……！」

「あれを試すくらいにやあ、ギリギリ大丈夫ってとこかな……！」

翼はクリスの身を案じるが、帰ってきたのはやれるという言葉。そんな二人をキャロルは見下しながら、

「フン。弾を隠しているなら見せて見ろ。俺はお前らの全ての希望をぶち砕いてやる！」

「付き合ってくれるよな？」

「無論、一人で行かせるものかッ！」

クリスはキャロルを正面で見据え、翼は彼女に応え、不敵に笑う。そして声を合わせ、叫んだ。

「イグナイトモジュールッ！ 抜剣ッ！」

二人は胸のモジュールのウイングスイッチを押し込み、取り外した。無機質な『ダインスレイブ』という音声が鳴り響き、取り外されたモジュールは空中で形を変え、モジュールから光の剣が展開される。それらは二人の胸を刺し貫き、ダインスレイブの漆黒の憎悪と呪いを彼女たちに注ぎ込んだ。痛みと悪意、恐怖が二人の心なかを暴れまわる。

「……ッ、腸を掻きまわすようなッ……、これがッ……この力がッ……」

翼の脳裏にこの呪いの力を知った日のことが蘇る。

エルフナインがProject IGNITEの概要を話し始めた。

「ご存じの通り、シンフォギア・システムにはいくつかの決戦機能が搭載されています」

「絶唱と……」



「エクストライブモードか……」

『雷帝顕現』も決戦機能ではあるが、ケラウノスにしか搭載されていない為例外とみていいだろう。

「とはいえ、絶唱は相打ち前提の肉弾。使用局面が限られてきます」

「そんなときやあエクストライブで……!」

クリスがならばと続けるが、それは緒川によってすげなく否定される。

「いえ、それには相当量のフォニックゲインが必要となります。奇跡を戦略に組み込むわけには……」

「役立たずみたく言ってくれるな!」

自分の意見が否定されたため、クリスが緒川にかみついた。そんな彼女たちを無視してエルフナインが第三の選択肢を提示する。

「シンフォギアにはもう一つの決戦機能があるのをお忘れですか?」

ケラウノスの『雷帝顕現』でないとするれば何か? 残る選択肢は一つ。

だが、それを認めるわけにはいかない。

「立花の『暴走』は、搭載機能などではないツ!」

「トンチキなこと考えてないだろうなツ?!」

クリスが感情のままにエルフナインの胸ぐらをつかみ上げる。だが、エルフナインは表情を崩すことなく、流石に息苦しさから声が震えていたが、冷静に答えを出した。

「暴走を制御することで、純粋な戦闘力へと変換錬成し、キャロルへの対抗手段とする……。これが、Project IGNITEの目指すところですよ……!」

本部モニターに呪いによって体が掻き筆られるような痛みに耐える二人が映し出される。

「モジュールのコアとなるダインスレイフは、伝承にある殺戮の魔剣。その呪いは、誰もが心の奥に眠らせる闇を増幅し、人為的に暴走状態を引き起こします」

「それでも、人の心と叡智が、破壊衝動をねじ伏せることが出来れば……!」

「シンフォギアは、キャロルの錬金術に打ち勝てます……!」

「心と……叡智で……！」

心を覆いつくさんとする黒き闇と呪いをねじ伏せようと二人は踏ん張り続ける。

（あのバカはずっとこんな衝動にさらされてきたのかあッ?!）

（気を抜けば、まるでッ……深い闇の底に……）

翼の心の闇。

大好きな歌を歌うステージ、だが、私を歌を聞くのは観客ではない。客席を覆うノイズの群れ。私の歌を聞いてくれるのは敵しかいない。本当は歌いたいのには、肉親である父親に認められたいがため、使命に追われ、その身を剣と鍛えたために夢を見ることすら許されない自分……。誰かを抱きしめることすら許されない自分……。

そんな自らの闇をまざまざと見せつけられ、急速にバイタルが乱れ始める。

「システムから逆流する負荷に、二人の精神が耐えられませんツ！」

「このままでは、翼さんとクリスちゃんがッ！」

「暴走……！」

弦十郎が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「やはり、ぶつつけ本番では……！」

雷によってあらかじめ予測されていたとはいえ、エルフナインを通して完成時期は傍受されているのだ。どれだけ計画を前倒ししようとその結果は避けられなかっただろう。だが、それでも、もしもを考えてしまう。

「だとしても信じてあげてください。翼さんと……クリスさんを……」

クリスの心の闇。

リディアンに通い、心の底から安心できる場所を見つけた筈なのに、違和感を感じてしまうアタシ。そんな場所に新しく後輩が入ってきて、先輩らしく胸を張ろうとした筈なのに、何一つ先輩らしいことが出来ないアタシ。残酷な現実がみんなを殺してしまう。それを呼び寄せるこんな自分が幸せを享受しちやいけなかった。

嫌だ。一人ぼっちになんてなりたくない。そんな思いを抱えて逃

げ出そうとするも、誰かがアタシの手を掴んだ。

「すまないな……。雪音の手でも握ってないと、底なしの縁に、飲み込まれてしまいそうなのだ……」

「フン……。おかげでこっちもいい気付けになったみたいだ……。危うくあの夢に溶けてしまいそうで……。！」

二人を光が包み込むが、ギアは変貌していない。息も絶え絶えになった彼女たちをキャロルは見降ろした。

「不発……?」

本部ブリッジにアラートが鳴り響く。

「不味いッ！」

「装者、モジュールの使用に失敗！」

「僕の錬金術では、キャロルを止めることは出来ない……」

落ち込むエルフナインに未来が歩み寄り、

「大丈夫……。可能性がすべて尽きたわけじゃないから」

未来はそう言って、握りしめた手のひらを優しく包んだ。響が歩み寄り、確認すると、手の中にはペンダントが握られていた。

「それって？」

答えを確信している響がエルフナインに問う。

「改修したガングニール……」

「ギアも可能性も、二度と壊させやしないから！」

響はエルフナインを見つめ、笑みを浮かべて力強く言い切った。

## 呪いの旋律を身に纏い

イグナイトが不発に終わった翼とクリスを焚きつけるため、キャロルが地に這いつくばる二人に向かって歩を進める。

「尽きたのか……あるいは折れたのか……、いずれにせよ立ち上がる力ぐらいはオレがくれてやる……!」

頭上にアルカ・ノイズを召喚するためのジエムをばら撒く。

彼女の行動は、イグナイトモジュールによって強化されたギアで倒されることを望むようであった。キャロルに投げられ、空中で割れたジエムから錬金陣が展開される。そこから四足歩行する動物のような母艦型のアルカ・ノイズが姿を現し、その足のような部分にある穴から無数の航空型アルカ・ノイズが飛び出してきた。

翼がこの光景を見て歯噛みする。

(くッ……い……ここにきて、アルカ・ノイズを……!)

航空型アルカ・ノイズは翼を回転させ、カッターのようにして街へと降り注いだ。

アルカ・ノイズによって分解された建物から赤い煙が巻き上がり、二次災害にて大爆発を引き起こす。翼たちは立ち上がることが出来ず、見ることしか出来ない。そんな二人をキャロルが煽る。

「いつまでも地べたに膝をついていては、市街の被害は抑えられまい……」

全身の痛みはまだ残っている。それでも、キャロルの攻撃から街を守るために歯を食いしばり、懸命に立ち上がる。

(手をつく力をッ……!)

(奴に突き立てる牙をッ……!)

何とか立ち上がった二人だが、戦えるような状態ではない。立っているだけでふらつき、痛みを堪えるのが精いっぱいだ。

そんな翼たちにとどめを刺さず、キャロルはさらに街に被害を加えることで焚きつける。

「歌えないのなら……、分解される者共の悲鳴をそこで聞けえッ!」

その言葉の通り、街へのアルカ・ノイズの攻撃はさらに苛烈になっ

ていく。市街は赤い煙と爆炎に包まれ、逃げ切れなかった人々の悲鳴がそこかしこで響く。

そんな中、クリスだけが背後から聞こえてくるミサイルの推進音に気づいた。後ろを向くと、本部潜水艦から五発のミサイルが放たれている。その中の一発に改修され、イグナイトモジュールを搭載して強化型シンフォギアとなったガングニールを身に纏い、サーフィンのようにミサイルを乗りこなす響の姿があった。

彼女は雄たけびを上げながら、ギアの腕部バンカーユニットを限界まで引き出し、ミサイルに乗りながら母艦型アルカ・ノイズを殴りつけた。ユニットによって発生した衝撃波がアルカ・ノイズを貫く。乗ってきたミサイルが破壊し、爆発する直前で響は飛び下りる。残りのミサイルは、母艦型を避けてほかの航空型アルカ・ノイズを巻き込んで爆発する。

「漸く揃うか……」

先ほどルシフによって破壊されたケラウノスを除き、これで主力のシンフォギア装者が全員揃った状態だ。

翼とクリスの目の前で響が着地する。

「すまないッ……！おかげで助かったッ……！」

「とんだ醜態を見せちまったけどよお……！」

「イグナイトモジュール……もう一度やってみましょう！」

響の提案した再抜剣に翼たちは苦い顔をする。

さっき失敗したばかりなのだ、不安になるのも仕方のないこと。それでも響は引くわけにはいかない。現状、キャロルを倒すにはそれしかないのだから。

「未来が教えてくれたんです！自分はシンフォギアの力に救われたって、この力が、本当に誰かを救う力なら、身に纏った私達だって、きつと救ってくれるはずッ！だから強く信じるんですッ！ダインスレイフの呪いを破るのは……！」

「いつも一緒だった、天羽々斬ッ……！」

「アタシを変えてくれた、イチイバルッ……！」

「そしてガングニールッ！」

三人は向き合い、決意を固める。

「信じようッ！胸の歌をッ！シンフォギアをッ！」

「フツ……、この馬鹿に乗せられたみたいでカッコつかないが……」

「もう一度行くぞッ……！」

「イグナイトモジュールッ！」

「二拔剣ッ！」

翼の声で装者三人がコンバーターのウイングスイッチをいれ、ギアから取り外して掲げる。掲げられたコンバーターが赤く輝き、モジュールが起動したことを示した。それを証明するように、コンバーターから無機質な『ダインスレイフ』と言う音声が届いてくる。

取り外されたコンバーターは空中で変形し、光の刃を装者たちに突きつけた。そしてそれは勢いよく彼女たちの胸を刺し貫き、ダインスレイフの漆黒の呪いが心に流れ込んでいく。響、翼、クリスの中を勢いよく駆け回る。

ブリッジはその様子をモニタリングしていた。

気を取り戻した雷が切歌と調の肩を借りながら、ゆつくりとした足取りでやって来た。

「このままではさっきのように……！」

友里の懸念はもつともだ。だが、

「呪いなど斬り裂けッ！」

「撃ち抜くんデスッ！」

「恐れずに碎けばきつとッ……！」

未来と雷は何も言わず、未来は黙ってモニターを見つめ、雷は静かに微笑んだ。響ならやってくれると、確信を持って。

響はダインスレイフの呪いに抗いながら、

（未来が教えてくれたんだ……！力の意味を……！背負う覚悟を……！だからこの衝動に塗りつぶされてッ……）

（（なるものかあッ——））

ついに彼女たちはダインスレイフの呪いをねじ伏せ、我が力へと変えた。

ギアの一部がはじけ飛び、全身を呪いの力が覆いつくす。そしてギ

アの所々が禍々しく鋭角的に変化し、黒く攻撃的なシンフォギアへと形を変えた。

三人は黒色の燐光を纏いながら、それぞれがアームドギアを構えて打つべき敵を見据える。

「モジュール稼働！セーフティダウンまでのカウント、開始します！」

藤堯の言葉通り、モニターに『999』カウントが表示された。

マリアが手のひらの損傷したアガートラームを握りしめ、念じる。

（悪を貫く強さを……！）

キャロルはバックジャンプで距離をとりながら無数のアルカ・ノイズを召喚した。

その総数、約三千。だが、今の響たちにとっては道端に転がる小石も同じ。勢いを落とすことなく、響はど真ん中に突進を仕掛ける。そして黒く染まったバンカーユニットを展開し、真っ向から殴り抜き、貫いた。

翼は通常よりも長大な刀を頭上に掲げる。すると刀身が展開し、中から青いエネルギーが放出された。そして翼は勢いよく振り下ろす。

『蒼ノ一閃』

放たれた一閃はアルカ・ノイズの群れをたやすく刈り取り、さらには大型のアルカ・ノイズまでも真っ二つに両断する。

クリスは腰部の小型ミサイルの装填されたアーマーを、さらには背部から四本の大型ミサイルを展開し、全弾正面のアルカ・ノイズに向けて解き放った。

『MEGA DEATH QUARTET』

この技は本来であればエネルギーチャージに時間がかかるのだが、イグナイトの力によって出力の高まっている今では発動することなど造作もない。その圧倒的な火力でもって地上だけでなく、大型ミサイルからばら撒かれた小型ミサイルによって空中に存在するアルカ・ノイズまでも消し飛ばした。

キャロルは『ダインスレイフ』の力を使いこなす響たちを見て歓喜し、

「臍下あたりがむず痒いッ！」

跳躍してアルカ・ノイズもろとも響を切り裂きにかかった。更にクリスにもエーテルの錬金術を撃ち放つ。

「強大なキャロルの錬金術……ですが、装者たちもまた、それに対抗できる力を……！」

確かに緒川の言う通り、今のところキャロルに対抗できる力を得ただろう。だが、すでに分かっているのだ。この力の限界を知られていくということ。それでも、現状を一つ打破出来たということには喜びを禁じ得ない。

未来と雷は戦う響を見つめながら、

（それでも響は、傷つけ傷つく痛み、隠れて泣いている。戦える雷と違って私は何もできないけれど、響の笑顔も、その裏にある涙も、拳に包んだ優しさも、全部抱きしめて見せる……！）

（私には響を抱きしめれないけど、戦えない未来の代わりに、響の隣に立つことは出来る。彼女の背負う痛みや悲しみを、少しでも受け止めて見せる……！）

（だからッ……！）

「負けるなッ——！」

彼女たちの思いが伝わったのか、響は腕に巻きつけられた弦を引っ張ることで逆にキャロルを手繰り寄せる。

「稲妻を喰らえッ——！」

ブリッジに弦十郎の声が響く。

それに呼応するように翼がキャロルに斬撃を、クリスが強大な矢を放った。キャロルは弦を束ねてそれらを粉碎するが、その隙について響が炎を纏い、火球となってキャロルに突撃した。

彼女は受け止めるが、イグナイトによって強化された出力差によって強引に押し込まれ、周囲の設備を巻き込みながら、鳩尾に拳を喰らったまま基地の外壁に叩きつけられた。ダウルダブラのファウストローブもダメージに耐えきれず、ボロボロになってしまっている。

響は追撃の手を止めず、空中から腕部と脚部のブースターを点火し、落下する速度も併せて飛び蹴りを放った。衝撃で大爆発が引き起こされ、煙が晴れる。そこには漆黒のギアを纏った響と、ファウスト



ローブを纏う前の幼い姿に戻り、腹部から血を流して瓦礫にもたれかかるキャロルがいた。

ブリッジで状況を確認してる調と切歌は笑顔で向かい合い、

「勝ったの……?」

「デスデス、デース！」

かわいらしい謎の雄たけびを上げた。

響は大粒の汗をかきながら肩で息をし、キャロルは息も絶え絶えだ。

「キャロル……」

エルフナインはこれがキャロルの計画の第一段階だと分かっている、それでも彼女の痛ましい姿に思わずごぼしてしまう。

響はキャロルに歩み寄り、手を差し伸べた。

「キャロルちゃん……。どうして、世界をバラバラにしようなんて……」

響が差し伸べた手は、すげなく払われてしまう。

「忘れたよ……。理由なんて……。思い出を焼却、戦う力と変えた時に……」

「……」

響は何も答えない。

キャロルは様々な感情がごちゃ混ぜになった瞳を響に向け、

「その呪われた旋律で誰かを救えるなどと思えばがるな……!」  
「っ」

その時、キャロルはニヤリと笑った後、奥歯をかみしめた。彼女の体がゆっくりと倒れ込む。

「キャロルちゃん?……キャロルちゃんツ?!」

そして地面に倒れ伏すと、キャロルの体は真っ黒に変色し、緑色の炎で焼却された。奥歯に毒を仕込んでいたのだ。

キャロルの死は、響に「呪われた旋律では誰も救えない」と言う彼女の言葉を残酷に突きつけた。響の悲痛な叫びが、空へと響く。

○○○

チフオージュ・シャトーでは主であるキャロルが死亡したことで、

計画が第二段階に移行していた。

レイア、ファラ、ガリイ、ミカ。四機のオートスコアラの頭上に各々が行使する錬金術に該当した布のようなものが垂れさがる。

響は燃えるキャロルの亡骸を見つめ、

「呪われた旋律……、誰も救えない……。そんなことない……。そんな風にはしないよ……。キャロルちゃん……」

薄暗い空に巻きあがる煙を見ながら、呟いた。

ブリッジでは、雷が調達の手を借りずに弦十郎の前に立っていた。彼女は正面から彼の瞳を見上げる。エルフナインと視覚がつながっているキャロルだが、彼女が死亡した今なら問題ないだろうと見切りをつけていた。そして彼女は一つ深呼吸を入れ、

「キャロルによる世界解剖計画。その対抗計画の概要を、説明します」

戦いは、まだ、終わらない。

## 夏の日差しの中で

イグナイトモジュール、ダンスレイフの呪いに打ち勝った響を見て、マリアは弱い自分に苦悩していた。レセプターチルドレンとして F. I. S. に来た時から、今の今まで運命に翻弄されてきた自分が不甲斐なく感じる。

（強くなりたい……。翻弄する運命にも、立ちはだかる脅威にも負けない負けたくない力が欲しくて……。ずっと……。もがいてきた……）

海の波が浜を行ったり来たりしている。暑い夏の太陽が照らし、海の青が光を反射してキラキラときらめいている。

マリアを水着を着た調達が、

「おーい。マリアー」

「何をやってるデスカー？」

悩みを抱え、沈んでいるマリアは同じく水着姿でサングラスをかけ、熱い太陽を見上げている。そしてなぜか笑みをたたえながらサングラスを外し、彼女たちに応えることなく、

（求める強さを手に入れるため、私は、ここに来たッ！）

今のこの意味不明な状況を説明するには、時を少し戻さなければならぬ。

○○○

雷、調、切歌の胸には各々のシンフォギア、そのペンダントが強化型シンフォギアと回収されて戻って来ていた。改修の理論構築を担当した雷は、実感として強化したという感覚が湧かないな、と思っていた。

彼女のケラウノスは幸いなことに、聖遺物をプロテクターとして固着させる部分の損傷だけで済んでいたため、他のギアと同時進行で回収することが可能だった。コアの部分がやられていたら、恐らくだがキャロルとの戦いには間に合わなかっただろう。

「壊されたケラウノスと……」

「切ちゃんのイガリマに……」

「シウルシャガナも改修完了デス！」

三人が喜び合う。

「機能向上に加え、イグナイトモジュールも組み込んでいます。そしてもちろん……」

「復活の……アガートラム……」

雷の顎の下でエルフナインが笑った。最近ずつとこんな感じなのだ。エルフナインは彼女に後ろから抱きしめられたままマリアのもとへと歩いて行く。調と切歌は理由が理由だけに口出しできず、少し悔しそうにしている。

エルフナインはワンピースのポケットから修理したアガートラムを取り出し、

「改修ではなく、コンバーター部分を新造しました。一度神経パスを通わせているので、身に纏えるはずですよ」

「パスを傷つけずに新造するための理論構築、大変だったんだよ……」

雷の顔は少しやつれていた。だが、やり切ったという達成感があふれ出ている。

雷の構築した理論はそれなりの時間と技術が必要なものであったが、エルフナインと言う技術担当を得た今、時間はかかっても確実にマリアがアガートラムを纏えるようにプランニングしたのだ。

マリアはペンダントに目を落とす。

「セレナのギアをもう一度……。この輝きで、強くなりたい……!」

「うむ。新たな力の投入に伴い、ここらで一つ特訓だッ!」

「『『『『特訓?!』』』』』」

「?」

装者たちの中で、響が目を輝かせ、クリスが嫌そうな顔をしていた。エルフナインはよくわかっていない様子だった。

○○○

そして今に至る。

水着に着替えた響が、一緒にやって来ていた未来とエルフナインに水をかけて笑顔を浮かべて遊んでいる。

弦十郎曰く、オートスコアラーと復活するであろうキャロルとの再

戦に向け、強化型シンフォギアとイグナイトモジュールを使いこなすことは急務である。つくばの聖遺物研究機構にて、調査結果の受領任務がある。諸君らはそこで、新進の鍛錬に励むといい……。とのことだ。響が特訓と言えばと言ってコーチ役を買って出たのだが、やっているのは遊びである。彼女に防人たる翼まで丸め込まれ、水着になっていた。

クリスが浮き輪に乗って波に揺られ、調と切歌は砂で城を作り、雷は日傘の下に敷いたレジャーシートの上で山のように本―錬金術や聖遺物関連の学術書や伝承、歴史などその他諸々―を積み、読書に耽っていた。

一方、緒川と藤堯はつくばの聖遺物研究機構にやって来ていた。

「これは……」

「ナスターシャがフロンティアに残したデータから構築したものです」

「光の……球体……?」

「そうですね。我々も便宜上、フォトスフィアと呼称しています。実際はもつと巨大なサイズとなり、これで約四千万分の一の大きさです」

フォトスフィアには地球儀のように陸地や海が表示されており、所々に配置されている点から線が伸び、球体中を網羅している。

「フォトスフィアとはいったい……」

調査結果の受領を終えた緒川は翼に通信を入れた。

「調査結果の受領、完了しました。そちらの特訓は進んでいますか?」

『くツ……! なかなかどうしてツ、タフなメニューの連続ですツ!』

「ん?」

『後でまた連絡しますツ! 詳しい話はその時にツ!』

通信が切られてしまった。

装者たちは特訓、の前に肩の力を抜くためのビーチバレーをしていた。他のみんなはレクリエーションであることを理解し、楽しんでいようだが、翼だけは特訓だと本気で思い込んでいる。

未来は隣に立つ響に声をかけた。

「翼さん……本気にしちゃってるよ……？」

「とりあえず肩の力を抜くためのレクリエーションなんだけどなあ……ははは……」

「ちやんとレクリエーションだって言わないから……」

響が肩を落とすし、雷はそんな彼女を見て苦笑いを浮かべた。因みに雷は包帯を巻いておらず、水着の上に長袖のジャケットを羽織り、ジッパーを限界まで引き上げている。

丁度エルフナインのサーブだ。クリスが威勢よく声を出す。

「おらおらあ！バッチコイ！」

「それっ……あれ？」

ボールを放り投げ、ジャンプサーブをしようとしたエルフナインだったが、空ぶってしまった。ボール共々浜に落下する。

「なんでだろう？強いサーブを打つための知識はあるのですが、実際やってみると全然違うんですね！」

「背伸びをして誰かの真似をしなくても大丈夫。下からこう、こんな感じに」

マリアはボールを持ってエルフナインのもとに歩み寄り、下からボールを打ち上げて手本を見せた。それをみてエルフナインは縮こまり、

「はう……ずびばせん……」

「弱く打つても大丈夫。大事なものは、自分らしく打つことだから」

マリアはエルフナインの視線に合わせ、優しく言う。そんな彼女に励まされ、エルフナインは笑顔を浮かべた。

「はい！頑張ります！」

マリアも笑顔で応える。

暫くビーチバレーを繰り返すと、装者たちの大半が疲れ果て、ビーチチェアに寝転がっていた。調が目を瞑りながら、

「気が付けば特訓になっていた……」

「何処のどいつだあ……？途中から本気になったのはあ……」

クリスは溶けるようにビーチチェアにへばりついている。因みに同じく体力のない雷も同じようになっていた。

そんな中エルフナインは脚を組み、太陽を見上げ、

「晴れてよかったですね！」

「昨日、台風が通り過ぎたおかげだよ」

「日ごろの行いデース！」

「ほーう？夏休みの宿題、自力で頑張るんだ？」

「て、手伝ってほしいデース！」

雷にジト目で煽られ、切歌が叫んだ。思わず笑い声が漏れる。そんな全員が笑い合う中、響が周りを見渡して、

「ところでみんな……、お腹がすきませんか？」

「だがここは、政府保有のビーチ……」

「一般の海水浴客がいないと、必然売店の類も見当たらない……」

そうなればやることは一つ。全員が起き上がり、一か所に集まる。

「」「」「コンビニ買い出しジャンケンポン！」「」「」「」

一瞬の静寂。

それを破ったのは響の笑い声だ。翼の手を見てお腹を抱えて笑っている。

「あはははは！翼さん変な直出して負けてるし！」

「変ではない！かっこいいチョコキだッ！」

「斬撃武器が……」

「軒並み負けたデース！」

翼と調、切歌の斬撃武器を扱う装者たちがチョコキ、他がグーだった。当然、三人の負けだ。マリアが負けた切歌と調に対し、

「好きな物ばかりじゃなくて、塩分とミネラルを補給できるものもね！」

「はい。いるかなと思って用意しといた。二つを補給できる食べ物、飲み物リストだよ」

「ありがとう。姉さん」

「いえいえ」

雷が調に塩分とミネラルの補給に最適な飲食品をリストアップしたメモを手渡した。

翼は負けたのが悔しかったのか、未だに彼女曰くかっこいいチョコキ

を難しい顔で見つめている。そんな彼女にマリアは自身のサンングラスを掛けてあげ、

「人気者なんだから、これ掛けていきなさい」

「母親のような顔になってるぞ。マリア」

そう言い残し、三人はコンビニに歩いて行った。



## 白銀の左腕は漆黒に染まる

コンビニへ買い出しに来ていた翼たち三人は、両手に好きなお菓子を詰め込んだレジ袋と、なぜか置いてあったスイカを抱えて退店した。

調はちゃんと雷のリストに書かれていたものを中心に買っていたのだが、それ以外の切歌が買ったものがそれらを覆いつくし、見えなくなってしまうている。

「切ちゃん自分の好きなのばかり……」

「こういうのを役得と言うのデースー！ちゃんとリストの物は買いましたし、姉ちゃんも許してくれるはずデースー！」

「もう……」

調は思った。切ちゃんは姉さんに一度叱られるべきなのではないかと。

翼はそんな二人のかわいらしいやり取りに頬を緩める。

しばらく歩いてみると、ぐちゃぐちゃに壊された社が見えてきた。

近隣住民が言うには恐らく機能の台風が原因。とのことだ。

しかし、三人には破壊された社が不自然に見えた。何故なら所々に氷の塊が突き刺さっているのだ。すぐに水や氷の錬金術を行使するオートスコアラーの一体、ガリイの姿が頭をよぎる。

雷と響、未来の三人は並んで青い海を見渡す。

「みんなと一緒に海に来るなんて、思ってもみなかった」

そんな彼女たちのそばにエルフナインが心配そうな顔で歩み寄ってきた。さつきから遊んでばかりで特訓をしていないことを懸念しているのだ。

「皆さん、特訓しなくて平気なんですか？」

「真面目だなあ、エルフナインちゃんは」

「私の計画も今は『待ち』だしね」

響は大丈夫だと笑顔で答え、雷は自分の計画は順調に進んでいると答えた。だが、エルフナインの不安は止まらない。

「暴走のメカニズムを応用したイグナイトモジュールは、三段階の

セーフティにて制御される、危険な機能でもあります！だから、自我を保つ特訓を……！」

エルフナインが言い切る前に、海面が急激に盛り上がり、勢いよく水柱がそびえたった。その頂点でガリイがバレエのようなポーズをとっている。

「ガリイ?!」

「っ」

即座に雷がジャケットの中からペンダントを取り出し、構える。彼女の顔色は悪い。水に恐怖心を持つ雷にとってガリイとの相性は最悪だ。

「夏の思い出作りは十分かしらあ？」

「んなわけねえだろっ！」

クリスが走り込んで雷たちとガリイの間に入り込み、起動聖詠を歌った。

「Killter Ichaiival Tron」

ギアを装着してすぐにアームドギアを展開、ガリイに向けて赤い光の矢を連射するが、彼女は意に返すことなくクリスに飛び掛かった。何発かが命中するが矢は彼女の体を通り抜け、水風船のように破裂した。

既にガリイはデコイとすり替わっており、本物の彼女が装者三人の背後にいきなり現れる。

「ぐあッ?!」

「ぐうッ！」

「ッあ?!マリア！」

「二人をお願いしますッ！」

未来とエルフナインをマリアに任せ、雷と響、クリスの三人が行かせまいとガリイの前に立ちはだかった。

「キャロルちゃんの命令で動いてるのッ?!」

「さくねく?」

そう言っただけでガリイはアルカ・ノイズの召喚ジェムをばら撒いた。響の問いかけには答えず、あくまで白を切るつもりだ。

ジエムは砂浜にぶつかって割れ、錬金陣が展開されると同時にアルカ・ノイズが出現する。

響は突進して乱打で打ち倒し、クリスが矢をまき散らしながら回転することで全周囲の敵に対して効力射を与える。更にアームドギアのボウガンを変形させて手数と威力を増やし、腰部アーマーから小型ミサイルを発射して航空型も吹き飛ばしていった。雷は稲妻を拳に纏わせながら放電し、目の前のアルカ・ノイズと周囲のアルカ・ノイズを同時に撃破していく。

海岸から発せられた雷光とミサイルの爆発を見て近隣住民がざわめき、コンビニに行っていた翼たちもそれを目撃していた。

翼がサングラスを外しながら、

「あれは?!」

「もしかすると、もしかするデスカ?!」

「行かなきゃ!」

「ここは危険です!子供たちを誘導して、安全なところにまでッ!」

調と切歌を先に向かわせ、翼は近くにいた大人に避難誘導の協力を要請する。が、

「冗談じゃない!どうして俺がそんなことを!」

そう言つてこの場にいた唯一の大人が我先にと逃げ出してしまった。翼は不快さを覚えたが顔には出さず、すぐに切り替えて子供たちと向き合った。

「大丈夫!慌てなければ危険はない!」

彼女の言葉に従つて不安そうな顔を浮かべながら子供たちが指示通りに避難する。避難誘導し終え、調達の後を追って海に向かっていた翼はあの我先にと逃げ出した大人に既視感を覚えていた。

雷がアルカ・ノイズを殴り抜き、周囲を見渡すとガリイの姿がない。

「不味い!オートスコアラーがない!」

「何イ?!」

「マリアのほうに行つたんだ!多分!」

「なら急がないとッ!」

マリアのもとには未来とエルフナインがいるのだ。悠長なことし

ていられない。雷は響と共に前衛を務め、クリスの援護射撃を受けながらマリアのほうへ走り出した。

マリアと未来、エルフナインの目の前にガリイが着地した。彼女たちの前にマリアが躍り出る。

「見つけたよ……ハズレ装者！」

「っ」

「さあ、何時までも逃げ回ってないで！」

錬金術で氷の刃を生み出し、マリアに突き立てようとする。彼女の事を前までと同じと甘く見てはいけない。それを見せるようにマリアがアガートラームの起動聖詠を歌った。

「Seilien Coffin Airget-Lamh Tro  
n」

そして冷気を放つガリイの手刀を紙一重で避け、

「ツ?!」

ガリイの顔面を勢いよく殴り抜いた。かなり強く拳を入れたため、彼女の体が吹っ飛んだ。そして突き出した拳から全身に向かって新生したアガートラームのギアが展開され、これを身に纏う。

(銀の……左腕……)

「マリアさん！それは……！」

「新生アガートラームです！」

顔面を殴り抜かれたにもかかわらず涼しい顔で体勢を立て直し、ギアを纏ったマリアとガリイは相対する。

「あの時みたく失望させないですよ？」

あくどい顔をして、ガリイは召喚ジェムをばら撒いた。即座に錬成陣からアルカ・ノイズが召喚される。

マリアは慌てることなく左腕のアーマーから無数の短剣を取り出し、手に持つ一本を除いてすべて射出した。

『INFINITE†CRIME』

それぞれがアルカ・ノイズへと突き刺さり、赤い塵へと姿を変える。そしてマリアは短剣を逆手持ちにして突撃し、真正面から切り捨てていく。その動きは長きにわたる鍛錬によって体にしみこんだ無駄の

ない動きであった。

(特訓用のリンカーは聞いている……！今のうちに！)

シンフォギアを纏えるとは言え、彼女が纏うにはリンカーが必要だった。効果が切れる前にガリイを倒すため、短期決戦へと持ち込む。

本部では弦十郎が緒川の報告に驚愕していた。

「オートスコアラアの強襲だとおツ?!」

『はい！装者は分断され、マリアさん一人でガリイに対応しています！』

「慣らしもなしにかツ……！イグナイトは諸刃の剣、あまり無茶をしてくれるなよツ……！」

弦十郎の心配をよそにマリアは戦闘を続ける。

マリアは周囲を囲うように現れたアルカ・ノイズに対して、短剣を蛇腹状に変化させ、多角的な斬撃で斬り裂いた。

『EMPRESS†REBELLION』

「ウワーアタシマケチャウカモー」

ガリイはあまりにも棒読みで行った後、体をのけぞらせて高笑いした。そんな隙だらけな彼女にマリアは斬りかかるが、ガリイは踊るようにそれを避けた。

「なんてね」

「ツ?!」

そしてガリイの展開した氷の柱で横から顔面を殴られ、地面を転がされてしまう。手から離れた短剣が地面に突き刺さる。

「強い……！だけど……！」

「聞かせてもらおうわあ……！」

胸のコンバーターを握りしめ、立ち上がる。

「この力で決めて見せる……！イグナイトモジュールツ！抜剣ツ！」

コンバーターのウイングスイッチを入れ、モジュールを起動して取り外し、天高く掲げた。起動したことを証明するように無機質な『ダインスレイフ』の音声が鳴る。そしてモジュールは宙を舞いながら変形し、光の刃をマリアに突き立てた。

呪いがマリアの心を襲う。

「弱い自分をツ……！殺すんだあツ！」

だが、マリアの心は呪いに耐えきれず、漆黒の破壊衝動にのまれてしまう。

「あれれ」

堕ちたマリアは衝動と本能を赴くままに、獣のようにその牙をむいて襲い掛かるがガリイはそれを難なく避ける。

「獣と落ちやがった……！」

ガリイが吐き捨てるように言う。

丁度そのタイミングで雷たちが到着した。

「マリア！」

「暴走……？」

「魔剣の呪いに飲み込まれてツ……！」

暴走したマリアはガリイに爪を突き立てようとするが、こともなげに避ける。まったく相手にされていないようだ。ガリイは面倒くさそうな顔をしながら、

「いやいや、こんな無理くりなんかでなく……歌ってみせなよ！アイドル大統領ツ！」

クロスカウンターの形で顔面を鷲掴みにし、振り上げて思いっきり地面に叩きつけた。あまりの衝撃で砂煙が舞い上がる。砂煙の中から光の柱が立ち上り、煙が晴れるとそこにはギアが解除され、水着のまま横たわるマリアの姿があった。

「ガリイッ！」

身内であり仲間であるマリアがやられるのを見て、じっとしてられるような雷ではなかった。雷光を纏いながら勢いを乗せてガリイに回し蹴りを喰らわせるべく接近する。が、彼女は木の上に飛び退いて回避すると、ポケットからハンカチを取り出してマリアを掴んだ手を拭き始めた。

「やけっぱちで強くなれるなどのぼせるなツ！」

雷に次いでクリスが矢を放つがそれを手で打ち払い、

「ハズレ装者にはがっかりだ……！」

ハンカチをしまつて今度はテレポトジエムを取り出し、地面に放り投げる。ジエムが割れて錬成陣が展開され、ガリイがため息とともに姿を消した。

雷は舌打ちを打ち、大急ぎで倒れたマリアのもとに駆け寄る。

「マリア！大丈夫?!マリアアツ！」

「おい！しつかりしろ！」

「マリアさん！……マリアさん！」

彼女のもとにクリスとエルフナインも駆け寄る。

するとマリアがゆっくりと目を開いた。

「勝てなかった……。私は何に負けたのだ……。？」  
うわごとのように、そう呟いた。

## 強さとは、自分らしくある事

チフォージユ・シャトー内、オートスコアラの並ぶ玉座の間。

ルシフを除いた彼女たちの定位置たる台座。その空いた一つから赤く淡い光が輝き、テレポトジエムで帰還したガリイが現れた。例によって彼女はバレリーナのようなポーズをとっている。

そんな彼女にレイアが、

「派手に立ち回ったな……」

「目的ついでにちよつと寄り道よ」

「自分だけペンダントを壊せなかったのを引きずってるみたいだゾ」

「うっさい！だからあのハズレ装者から一番にむしり取るって決めたのよッ！」

レイアの皮肉な問いに素っ気なく返したガリイだったが、ミカの核心をついた煽りに声を荒げてしまう。自分が戦つて一番気持ちがいい相手だからという理由でマリアを狙うのは、流石性根の腐っているガリイと言えた。

自分の任務を全力でこなそうとする彼女に、ファラは微笑ましさを感ずる。

「ホント、頑張り屋さんなんだから……。私もそろそろ動かないとね」

「結果出さないと頑張りなんて無意味なんだからNE☆」

「分かってるつうのー！」

結果が無ければ意味がない。と、承認欲求がどのオートスコアラよりも高いルシフが揶揄い交じりで言い、分かっていることを追撃で言われてしまったガリイが怒鳴る。ルシフは、おお怖、とあからさまに怯えたようなそぶりを見せるが、顔はニタニタと笑っていた。それを見てガリイは舌打ちを打ちながら自分の頭上にある四色の布を見上げた。

（一番乗りは譲れない……！）

○○○

日が海に沈みはじめ、青かった空がオレンジ色に変わっていく。ヒグラシが鳴き始めたころ、マリアを除いた装者全員が研究機構の一室



に集まっていた。話題はオートスコアラの行動と雷の計画との照らし合わせ、イグナイトモジュールの暴走によるマリアの変貌だ。

「轟、オートスコアラの行動は計画通りなのか？」

「はい、問題ありません。ただ……」

「イグナイトの制御、だね……」

雷の計画もキャロルの計画も、必ずイグナイトモジュールの使用によるオートスコアラの撃破がトリガーとなっている。そもそも、雷の計画はキャロルのカウンターなのだ。ある程度同じ道筋を行く必要があるのだ。

「そう言えば、マリアさんの様子も……」

「力の暴走に飲み込まれると、頭の中まで黒く塗りつぶされて、何もかも分からなくなってしまうんだ……」

イグナイトモジュールの呪いを経験した響、翼、クリスの三人はその通りだと言うように目を閉じ、まだ起動していない雷、調、切歌の三人の表情が暗くなる。特にこの中でも最も深いトラウマを負っているであろう雷の顔色は芳しくない。そんな彼女を心配して、未来が雷の手に優しく手を乗せる。未来の微笑みに雷は不安の残る、ぎこちない笑みで答えた。

頭に包帯を巻き、負傷したマリアが一人浜辺に出て、施設の外壁にもたれかかって立っていた。因みにこの包帯は捲きなれている雷が捲いたものである。この時、慣れてるから！と率先してマリアの手当てを担当した雷を、未来と響が何とも言えない表情で見ているのは別の話。

マリアはぼんやりと正面を見据えながら、

（人形に救われるとは情けない……。私が弱いばかりに、魔剣の呪いに抗えないなんて……）

自分の無力さをひしひしと感じ、握りしめたこぶしを見つめる。力むあまり、拳が震えていた。

（強くなりたい……っ？！）

そうやって悩む彼女の前を、黄色いバレーボールが転がってきた。そしてその後を追ってエルフナインがゆっくりと走ってくる。彼女

はマリアの前で立ち止まり、申し訳なきように謝ってくる。

「ごめんなさい……。皆さんの邪魔をしないよう持ってたのに……」

「邪魔だなんて……。練習、私も付き合おうわ」

「はい」

如何やら昼間のビーチバレーの練習をしているようだった。マリアはエルフナインに向き合う。今の自分の暗い気持ちを切り替えるためにも丁度良いと思ったからだ。

ぱんつとボールと手が当たる音が聞こえてくる。お世辞にもうまいとは言えないが、彼女なりに頑張っているのが見て取れた。

なかなか上手くならないとエルフナインは肩を落とし、

「それ……。……。おかしいなあ、上手くないなあ。やっぱり……」

「いろいろな知識に通じてるエルフナインなら、分かるのかな……」

「ん……。う？」

ボールを両手で持ったまま、エルフナインはマリアのほうに振り返る。

「だしたら教えてほしい。強いつて、どういうことかしら……。？」

「それは……。マリアさんが僕に教えてくれたじゃないですか」

「え？」

エルフナインが言った意味がてんで見当もつかず、聞き返そうとしたその時、マリアの背後で突然巨大な水柱が吹きあがった。こんなことが出来るのは現状、水の錬金術を操るガリイしかないない。

彼女は水柱の上で、

「お待ちせ、ハズレ装者あゝ」

「マリアさん……」

マリアはすぐさまエルフナインを庇うように立つ。そして彼女のすがるような声を背に受けながら、頭に捲かれた包帯をほどき、投げ捨てた。包帯が風に流されていく。

「今度こそ歌ってもらえるんでしょうね？」

「大丈夫です！マリアさんならできます！」

エルフナインの励ましを背負い、ペンダントを構えて起動聖詠を歌う。

「Seilien Coffin Airget-Lamh Tro  
n」

「ハズレでないのなら！戦いの中で示して見せてよッ！」

白銀のシンフォギア、アガートラムを身に纏ったマリアはアームドギアの左腕から短剣を抜き取り、逆手持ちで構える。そんな彼女の前に、ガリイによってアルカ・ノイズが召喚される。

先手はマリアがとった。目の前のアルカ・ノイズを切り裂き、次いで短剣を蛇腹状に変形させて複数を一気に仕留める。

彼女たちの戦いを口に赤いバラを銜えたフアラが見下ろしていたが、風の錬金術による光学迷彩で姿を消した。

そしてオートスコアラの召喚したアルカ・ノイズの反応を藤堯がとらえる。

「アルカ・ノイズの反応を検知！」

「マリア達がピンチデス！」

装者たちがぐさまマリアを援護するために部屋を飛び出して行くが、雷だけが残っていた。最後に響が部屋を飛び出すと同時に、わずかながら弱い風が部屋に吹き込んでくる。

その瞬間、雷はほくそ笑み、

「緒川さん、藤高さん」

「分かりました」

「既に完了してますよー！」

満足げに頷き、遅れて彼女もマリアの援護に飛び出して行った。

マリアは短剣を投擲し、狙いを違わすことなくアルカ・ノイズに命中させる。道は開かれた。真正面からガリイに突撃する。だが、容易く間合いを詰めらせるようなガリイではない。錬金術で巨大な水の塊を生成し、マリアに打ち放った。

マリアは短剣を三本放って逆三角形のバリアを構築し、直撃を防ぐ。が、ガリイは水の塊を自身の正面に移動させ、さらに高出力にした水の奔流を叩きつける。マリアも反応してバリアを移動させるが到底受けきれぬような大きさではなく、防ぎ切れない末端から凍結し始めた。

(強く……！強くならねば……！)

「マリアさん！」

「強くッ……！」

何とか氷を弾き飛ばすが、すでに満身創痍、膝を地面についてしま  
う。

「てんで弱すぎるッ！」

力を得るため、イグナイトモジュールを起動しようとするが、

「その力。弱いアンタに使えるの？」

「ッ?!……私はまだ弱いまま……どうしたら強くッ……！」

ガリイの言葉が胸に突き刺さる。

そんな時、マリアが強さを教えてくれたという、エルフナインの  
言ってくれた言葉を思い出した。

「私が……？」

「マリアさん！」

「?!」

ガリイを恐れず、エルフナインがマリアに思いを届けるために声を  
張る。マリアが自分に教えてくれたことを伝えるために。

「大事なのは！自分らしくあることです！」

その言葉を聞いて、ビーチバレーをしていた時に彼女に自身が言っ  
た言葉で思い出す。そうだ。確かに私が言ったのだ。ならば、自分で  
実行せねばならないと言うように、力強く立ち上がる。

「弱い……そうだ」

「ん？」

「強くなれない私に、エルフナインが気付かせてくれた。弱くても、自  
分らしくある事。それが……強さッ！エルフナインは戦えない身で  
ありながら、危険を顧みず勇気を持って行動を起こし、私達に希望を  
届けてくれた！」

「ふーん……」

「エルフナインッ！そこで聞いてほしいッ！君の勇気に応える歌  
だッ！……イグナイトモジュールッ！抜剣ッ！」

コンバーターのウイングスイッチを入れ、モジュールを起動させ

る。それを証明するように無機質な『ダンススレイフ』の音声が鳴り、宙を舞った。そして大きく形を変え、光の刃を展開。マリアの体を刺し貫いた。彼女の中を魔剣の呪いが駆け回る。

（うろたえるたび、偽りにすがってきた昨日までの私……。そうだし、らしくある事が強さであるならッ！」

「マリアさーんッ！」

「私は弱いままッ！この呪いに反逆して見せるッ！」

遂に、マリアの強い意志が魔剣の呪いをねじ伏せた。白銀が反転し、漆黒に染まる。

イグナイトモジュールをものにしたマリアにガリイは向かい合う。彼女は手のひらから召喚ジェムを取り出し、

「弱さが強さだなんて、頓智を聞かせすぎだつてえッ！」

悪態をつきながらばら撒いた。ジェムが砕け、アルカ・ノイズが召喚される。それに対し、マリアは短剣をアームドギアのガントレットの前方に連結させ、光の刃を弾丸のように連射、アルカ・ノイズを一掃する。

ガリイはスケートのように砂浜を滑走し、

「いいねいいねえー！」

短剣で胴体を両断されるが泡に変化して分裂する。マリアは再び光の刃を連射し、一気に泡を破裂させた。全部破裂させると、マリアの背後にひときわ大きな泡が現れ、割れると同時に中からガリイが出てきた。

「アタシが一番乗りなんだからッ！」

すぐさま距離を詰めてきたマリアの一撃を防壁を展開することで防ぐが、彼女の持つ短剣が光り輝き、強引に防壁を打ち破った。ガリイの顔が驚愕の色に染まる。そしてマリアは短剣をふるった反動を利用してガリイの顎にアッパーを叩きこむ。空中にガリイの体が吹き飛ばすや否や自身も跳躍し、短剣をガントレットの後部に連結させ、刃を巨大化させた。

腰のブースター、さらにはガントレットのブースターも点火し、勢いを乗せた斬撃ですれ違いざまに両断した。

ガリイは、

「一番乗りなんだからあゝッ！」

と言い残し、爆散した。

『SERE↑NADÉ』

「マリアさん！」

マリアは一息つくくと、走ってくる響たちのほうを向いた。膝をつくと同時にギアが解除される。そんな彼女の前に装者たちはやってくる、翼が口を開いた。

「オートスコアラを倒したのか？」

「どうにかこうにかね……」

「これがマリアさんの強さ……」

エルフナインは強さだというが、

「弱さかもしれない……」

「え？」

マリアはそれを否定する。だが、彼女の手にした本当の強さとは、私らしくある力だ。教えてくれてありがとう」

「はい！」

自分だけの強さを手に入れたマリアは、その強さを教え、教えられたエルフナインに感謝を述べる。そして彼女も、それを満面の笑みで受け止めた。

施設の屋上に、錬金術による光学迷彩を解除したファアラが現れる。

「お疲れ様、ガリイ。無事に私は目的を果たしました……」

彼女の長い舌には、ある情報が記録されたカードが張り付いていた。目的を果たしたファアラは自らの居城に帰還する。

彼女の手にした情報に、トラップが仕掛けられているとも知らずに……。

○○○

チフォージュ・シャトー、ガリイの台座から青い光が放たれ、彼女の頭上にあつた青い布に水の錬金術の化学式が記録される。

夜。装者たちは浜辺で花火に興じていた。

クリスが銃型の花火でロケット花火に点火したり、雷が起き型の噴

射花火を倒してしまったせいでも虚しい花火になってしまったりと、にぎやかに楽しんでいた。

調と切歌、雷は線香花火を見つめながら、

「マリアが元気になって、本当に良かった……」

「マリアは元気だと安心するもんねえ……」

「おかげで気持ちよく東京に帰れそうデスよ！……ありや」

切歌の火の玉が砂浜に落下した。

クリスが手持ち花火を束にして両手に持っているのと、翼が清々しい晴れやかな顔で腰に手を当て、

「うむ。充実した特訓であったな！」

「それ本気で言ってるんすか……？」

「充実も充実う！おかげでお腹もすいてきたと思いませんか?!」

「いつもお腹空いてるんですね……」

「だとすれば……やることは一つ！」

響の言い様にエルフナインが苦笑いを浮かべた。

マリアの音頭で全員が円陣を組み、

「コンビン買い出しジャンケンポンッ！」「コンビン」

響と雷がパーを出し、それ以外の全員がチョキを出した。翼は例によつてあの（自称）かつこいいチョキである。

「パートは実にお前らしいなあ」

「拳の可能性を疑ったばかりに……」

「姉ちゃんがジャンケンで負けるなんて珍しいデス！」

「うん。姉さんが負けるなんて珍しい……」

「やったッ！漸く雷に勝ったわッ！」

「そこまで喜ばなくても……」

涙目の響はクリスに煽られ、並外れた観察眼を持ったためジャンケンでほぼ負けなしの雷が負けたことで、ほとんど勝てなかったらしいマリアがあまりにも大袈裟なガッツポーズを決めていた。完全にガリイを撃破した時よりも喜んでいる。

「しようがない。付き合っただけ」

「ええ！いいのお?!」

「買い込むのも大変でしょ？」

未来が二人の同伴を名乗り出た。非力な雷とだと、あまり多く買い込めないだろう、という判断である。未来が二人の間に入り、手を取った。

コンビニまで歩いて行くと、未来は入り口に入ろうとしたが響と雷は外の自販機にくぎ付けになっていた。

「もう何やってるのー！」

「すごいよ未来！東京じゃお目にかかれないキノコのジューズがある！へ?!こつちはネギ塩納豆味?!鮫鱈汁ドリנקって?!」

「響！こつちには蒲焼ジューズがあるよ！わ?!ナニコレ……、さ、サルミアツキ味い?!誰が買ってるんだろう……?」

未来は真剣に奇妙なドリנקを眺めている―決して買おうとはしない―二人を呆れながらも眺めていると、いきなり声をかけられた。目の前には冴えない男性が立っている。しかも、その顔にはうつつすらと見覚えがあった。

「あれえ？確か君は……」

「？」

「未来ちゃん……。じゃなかったっけ？」

「へ？」

「ほら、昔うちの子と遊んでくれていた……」

「どうしたの？未来……」

横から響の声が聞こえてきた。チラリと横を見ると、すぐそばで男性のほうを向いていた。一方、雷はいまだに自販機のところにいたが、何かあったのかと顔をこちらに向けている。

男性は一度目を瞑った後、見開いて響のほうを向いた。

未来の中で確信に至る。彼は……。

「響……」

「おとう……さん……」

声が震えていた。

そして少しの間が空き、響は夜の闇に逃げ出していった。

「響ッー！」



「どうしたの響ッ！」  
親友たちの叫び声が闇へと吸い込まれていく。

## 贅沢な悩みと深刻な悩み

授業が終わり、教科書をカバンにしまっけていく響を、後ろからすでに帰り支度を済ませた雷と未来が見つめていた。東京に帰って来てから響の様子が変なのだ。

親友としてどうにか手助けしたいが深い事情を知らない雷としては、自身よりも前から関係性を持っていた未来が動かない以上、どうすることもできない。自分の不安定な心を落ち着かせるように、カバンの紐をぎゅつと握りしめる。今この状況で、自分が不安定になるのは最悪だと理解しているのだ。だが、それでも抑えきることが出来ず、雰囲気という形で漏れ出てしまう。

しかし、何時も助けてくれる響の力になれないことが、何よりも悔しかった。ギリつと自分の歯ぎしりの音が聞こえてくる。

それ以上に、父親が苦手だという感情が、雷には理解できないことも確かなのだ。彼女は家族を殺されたために肉親がおらず、自分の奥底に響の悩みを「贅沢な悩みだ」冷めきつた目で見る自分がいるのも理解していた。それを知っているからこそ、さらに自己嫌悪に陥っているのだが。

「私、余計なことしたかもしれない……」

「そんなことないよ。未来のおかげで、私も逃げずに向き合おうって決心がついた」

「本当？」

「ホントだつて。ありがと、未来」

「うん……分かった……」

未来がそう言ったのを聞いて、響は勢いよく教室を飛び出した。彼女は二人に手を振り、

「じゃあ、ちよーつと言ってくるから、先に帰っててー！」

玄関に向かって廊下を走り出した。

彼女がいなくなったのを見計らって、雷が未来に声をかけた。

「ねえ未来。響のお父さんってどんな人なの？」

「そっか、雷、知らないんだもんね」

未来は出来るだけわかりやすく、響の父親、立花洗がどのような人物かを伝えていく。未来も内心、雷からしてみればどんな形であれ、お父さん、と言うより肉親がいるだけで羨ましいことなんだろうな。と思っていた。実際、よくわからない、理解不能、というような表情を時折話を聞きながら浮かべているのだ。

未来は響の行く末を案じた。

街中の小さなカフェ、窓際のテーブル席の一つに響と、彼女と向かい合う形で洗が座っていた。テーブルには、注文したサンドウィッチが置かれている。彼はそのうちの一つを無造作にとり、自身の口に放り込んだ。今の今まで、彼女たちの間に会話は無い。

洗のあまりにもデカい態度に響の顔がムスツとなる。

彼は自身のグラスに刺さったストローを弄りながら、

「まえに、月が落ちる落ちないで騒いだ事件があっただろ。あの時のニュース映像に移って女の子が、お前によく似ててなあ……。以来お前のことが気になって、もう一度やり直せないかと考えてたんだ」

口ではそういうが、態度からはその気が全く感じられない。

「やり直す……？」

「勝手なのはわかってる……。でもあの環境でやっていくなんて、俺には耐えられなかったんだ。なあ、またみんなで一緒に……。母さんに俺の事伝えてもらえないか？」

「無理だよ……」

響の握りこぶしが震える。

響は自分の受けてきたもの以上の苦痛を、自分を殺してまで耐え抜いた少女を知っていたからこそ、さらに憤りが募る。何より、自分から改善したいと言っておきながら、自分で伝える勇気をもたない父親に心底呆れていた。

「一番欲しい時にいなくなったのは、お父さんじゃない……」

「やっぱ無理かあ。何とかなると思ったんだけどなあ。いい加減時間もたってるし。覚えてるか響、どうしようもないことをどうにかやり過ぎ魔法の言葉。小さいころ、お父さんが教えただろ？」

あつけらかんと諦めてしまった父親に、さらに拳が震える。そして

ついに耐えきれなくなり、勢いよく席を立った。店を出るために歩き始める。そんな彼女の背中から、洸が声をかけた。

「待ってくれ響ー！」  
「？」

響は振り向いた。淡い期待もあったのだ。もしかすれば、いなくなつてから結構経つ、距離感を掴もうとして失敗しただけかもしれない。本当は父親と言う関係に戻りたいんだという、淡い期待。

だが、彼が突き出してきたのはレシートだった。

「持ち合わせが心もとなくてなあ……」

「ッ！」

これが自分の父親かッ?!そんな激情を無理矢理抑え込み、レシートをひったくって走り出した。店員やほかの客が見ているが気にしない。

洸は悪びれもせず頭をかき、またサンドウィッチを口にした。

響は涙をぬぐいながら、逃げるように走り続けた。

○○○

マリアによつて撃破されたガリイの台座からは青い光の柱が伸び、ミカは任務のため別行動。よつて、ファアラとレイア、ルシフしかチフォージュ・シャトー内にはいない。先の戦果を見せるため、研究機構から盗み出したデータの入ったカードを口に含み、錬金術を応用して出力する。

彼女の手のひらに出されたソレは、小型化されたフォトスファイアよりもさらに小さいものだった。ファアラは手を広げ、玉座の間の天井に大きく展開する。

「つくばで地味に入手したらしいな？」

「強奪もありでしたが、防衛のためにデータを壊されては元も子もありません」

「フォトスファイア……綺麗だNA☆！」

大玉の上を転がりながら、ルシフがキラキラと紫色の瞳を輝かせながら見上げる。子供らしさを見せる彼女を見て、ファアラは微笑まじげに頬を緩めた。

だが彼女は直ぐにスフィアのほうを向き、球体に描かれた線を見ながら言った。

「一本一本が地球にめぐらされた血管のようなもの。かつてナスタールシャ教授は、このラインに沿わせてフォニックゲインをフロンティアへと収束させました……」

「これが、レイラインマップ……!」

「世界解剖に必要なメスは、ここ、チフォージユ・シャトーに揃っていますわ」

「これがバラバラに出来ると思うと、胸が高鳴るNE☆!」

「そうでなくては暴れたりないと、妹も言っている……」

○○○

調と切歌の二人は下校中に自販機でドリンクを買っていた。ガシヤンと言う落下音が聞こえてくる。調がりんごジュースを取り上げると、次いで切歌が正面に立った。

「今朝の計測数値なら、イグナイトモジュールを使えるかもしれないデース!」

彼女の話の聞きながら調はプルトップを開け、口に含んだ。切歌はいい調子だといっているが、調の表情は暗い。起動自体は出来るかもしれないが、問題はその先だ。

「あとは、ダインスレイフの衝動に抗える強さがあれば……。ねえ切ちゃん」

「ん〜……これデース!」

何とも言えない動きをした後、切歌は指を四本、一気に自販機のスイッチに突き立てた。因みに大体この場合、基本的に一番左の物から反応するようになっていいる。故に一番左にあつたコーヒーがガシヤンと音を立てて落下した。

「あー! 苦いコーヒーを選んじゃつたデースよお……!」

珍妙な踊りを踊っている切歌を後ろから真顔で調が見つめた。そして一度彼女を無視し、胸元のペンダントを手繰り寄せて取り出した。

「誰かの足を引っ張らないようにするには、どうしたらいいんだろう……」

紐で吊り下げられている赤いペンダントが揺れる。

切歌は悲しげな顔をしながらコーヒーのプルトップを開け、「きつと自分の選択を後悔しないよう、強い意志を持つことデスよー！」そう言っているが、顔が引きつっている。どれだけコーヒーが嫌なのだろうか。調は黙って彼女の手からコーヒーを抜き取り、自分のリングジュースと入れ替えた。

調がにっこりと笑い、

「私、ブラックでも平気なもの」

「ご、ごつつあんデス……」

切歌が受け取ったジュースを飲もうとした瞬間、本部から通信が入った。特に本部に行く予定もないことから、緊急の物であるということ在即座に理解する。そして、緊急であるということは、起こっているものの可能性は一つしかない。

『アルカ・ノイズの反応を検知した。場所は、地下六十八メートル、共同溝内であると思われる！』

「キョードーコー……？」

「何デスか？それは……」

聞きなれぬ単語を耳にし、二人は弦十郎に聞き返した。知らなくても仕方のないことだ。弦十郎は分かりやすく簡潔に、二人に伝える。

「電線をはじめとする、エネルギー経路を埋設した、地下溝だ！すぐ近くにエントランスが見えるだろう』

「お？」

「あれが……」

通信機から送られてくる指示通りに道を進んでいくと、小さな小屋のようなものが見えた。弦十郎の言う通り、それが共同溝のエントランスだった。

通信機から、弦十郎に加えてマリア、翼、クリスの声も聞こえてくる。

『本部は現場に向けて航行中』

『先んじて立花、轟を向かわせている』

『緊急事態だが、飛び込むのは馬鹿二人と合流してからだぞ！』

雷はたまたま近くの本屋にいたため、そこから本を置いて、駆け出している。因みに読んでいたのは『家族のよりを戻すための理想法』である。恐らく三分も待たずに到着するだろう。

響は洗とのかき引きずっており、小さな声で「平気へっちやら」と繰り返しながら、涙も拭かずに現場に向かっていた。

守りたいのに守られて、恩返ししたいのに守られて

「あーんこーデースー」

共同溝のエントランス前で、切歌が手を振っている。右側から雷が飛び出した。

雷はどうやら植林地を突っ切ってきたようだ。軽く息を荒げ、彼女の長い髪のことろどころに葉っぱが引っ付いている。雷の意外な行動に調と切歌は目を丸くしている。葉っぱを払い取っている彼女に調が取るのを手伝いながら、

「姉さんには珍しい大胆な行動……」

「いやあ、しらちゃん達の救援だからね。急いできたんだ」

「あ、ありがと……」

何時も優しく自分たちのことを考えてくれる雷の答えに、調は胸の奥が温かくなるのを感じる。

ついで響もこちらに正面から向かってきていた。

だが、響の様子がどう見ても様子がおかしい。涙をぬぐいながら三人の間を通り過ぎる。一瞬だけ見えたが、普段のようなみんなを照らすような笑顔ではなく、怒りや悲しみが入り混じった複雑な表情をしていた。

調が思わず「何かあったの？」と聞くと、響は肩を震わせながら「何でもない……」と声を震わせながら言った。何でもないことはないだろうと、切歌が、

「とてもそうは見えないデス……」

「三人には関係のないことだからッ！」

「ひッ?!」

響の怒鳴り声に完全に不意を突かれたため、雷が小さな悲鳴を上げた。肩を震わせながら身を縮めている。だんだんとマシになってきたとはいえ、未だに不意を突かれると委縮してしまうのだ。調は雷の肩や背中を撫でて「大丈夫だから」と声をかけることで安心させ、彼女を落ち着かせながら、

「確かに、私達では力になれないかもしれない。だけど……それでも



……」

「ごめん……。どうかしてた……」

「怒って……ない……?」

「うん……。もう、大丈夫……」

雷がたどたどしく響に聞くと、彼女はひどく落ち込んだような、不安げな声色で答えた。雷がよかったと呟きながらぎこちない笑みを浮かべる。そんな雷に申し訳なきような笑みを浮かべながら、響はエントランスの中へ入っていった。その後を雷たちもついていく。彼女は今、調と切歌と手を繋ぎながら歩いていた。

三人に背を向けながら、響は自分の握りこぶしを見つめる。

（拳でどうにかなることって、実は簡単な問題ばかりかもしれない……。だから、さっさと片づけちゃおうッ！）

進んでいくうちに、地下へと続く巨大な穴へと到達した。地上から底まで三本の太いケーブルが伝っている。あれの中に都市を運営するためのエネルギーが通っているのだ。あまりの大きさに、段々と元の調子に戻ってきた雷が「ほわ……」つと謎の声を上げている。

響が振り返り、

「行くよー三人とも……: Balwisyal Nescell  
Gungnir Tron」

ガングニール、ケラウノス、イガリマ、シユルシャガナを纏った装者たちは溝道内に飛び下りた。重力に従いながら、アルカ・ノイズの反応が検出された場所へと向かう。

調のシユルシャガナがローラースケートのように展開された小型鋸の地面を削る音を響かせ、切歌が鎌を構え、響がマフラーを、雷が腰のマントをはためかせながら溝道内を駆ける。するとすぐに、アルカ・ノイズを召喚する錬金陣特有の赤い輝きが溝道内を照らし、そこからアルカ・ノイズが現れた。四人を取り囲むように召喚されている。

梯子を上った上の作業台に錬金術でケーブルに記入しているミカがいた。彼女は右手をそのままケーブルに添えたまま、響たちのほうを向いた。

「来たなあ。だけど、今日はお前たちの相手をしてる場合じゃ……」

ミカが言い切る前に、響が跳び出して殴り掛かる。彼女の拳が外壁を貫く。ミカは間一髪で回避していた。尻もちをついた彼女は起き上がりながら苛立ちを隠そうともせず、

「まだ全部言い終わってないんだゾッ！」

右手いっぱい召喚ジェムを取り出し、ばら撒きながら後ろに飛び退いた。通路いっぱいアルカ・ノイズが召喚されるが、響は腰のブースターを点火して正面からなぎ倒していく。彼女の目から煌めくものが見えた。

「泣いてる……?」

「やっぱり様子がおかしいデス！」

「響！いったん落ち着いて！」

雷の声は響に届かなかったようだ。

単騎でミカに挑みかかった響は動きが荒く、自身の拳や蹴撃を力任せに振るうばかりにミカよりも共同溝内に被害をもたらしている。

一方、三人は息の合った抜群の連携で周囲を囲っていたアルカ・ノイズを倒していく。前衛、中衛、後衛をスイッチしながら、各々の戦闘スタイルが最大限の力を発揮できるよう絶妙に噛み合うようにそれぞれが動いていた。

洸との会話を引きずっている響は目に涙を貯めながら、

(なんでそんな簡単にやり直したいと言えるんだッ?!壊したのはお父さんの癖に！お父さんの癖に！)

「突っかかりすぎデス！」

切歌の指摘も今の響には届かない。

響は数体のアルカ・ノイズを天井に叩きつけ、バンカーユニットを引き出して外壁ごと殴り抜いた。

(お父さんの癖に！……違う。壊したのはきつと、私も同じだ……)

響の動きが止まる。自分の不幸をお父さんに押し付けているだけで、こうなってしまったすべての元凶は自分なのだといいるところに行きついてしまったのだ。

「しよんぼりだゾお！」

戦闘特化型オートスコアラであるミカが見逃すわけがない。彼女は髪のロール部分をブースターにして飛行しながら、響の動きが一瞬遅れた隙にカーボンロッドを手のひらから射出して叩きつけた。一瞬の隙を突かれてしまった響は防御や受け身をとることすらできず、溝道内を転がり、背後にあった足場に背中からぶつかってしまおう。「言わんこつちやないデス！」

響のもとに切歌が駆け寄り、防御能力を持つ雷と調が前に立ってアルカ・ノイズを鋸と電撃で撃破した。振り向くと、切歌が響を抱きかかえ、

「大丈夫デスカ……？」

心配そうに声をかけるが返事がない。気を失っているようだ。

ミカは手のひらを響たちに向け、

「歌わないのかあ？歌わないと……死んじやうゾお?！」

彼女の手のひらにある噴出孔から、猛烈な勢いの炎が放射された。迫りくる炎に切歌が目を瞑るが、熱は届くものの炎そのものが到達することはなかった。

切歌が目を開けると、調が大型化した鋸で物理的な障壁を作り、彼女の背後で雷が斥力フィールドと電磁バリアを同時に鋸の前に展開することで炎の進行を防御していた。だが熱は防ぎ切れず、熱で意識をもうろうとさせた調は膝をつく。さらに常に威力の高い部分を観察し、バリアとフィールドをあてがう高速思考を繰り返していた雷も熱にやられてオーバーヒートし、鼻血を流していた。地面に赤い染みを作っては炎の圧倒的な熱量によって蒸発していく。

二人の背中を呆然と切歌が見つめていると、

「切ちゃん……大丈夫……？」

「……」

「なわけないデス……！」

意識をもうろうとさせながらも自分たちの盾になっている二人に我慢がならず、眉を顰めながらきつく当たってしまう。

「切……ちゃん……？」

「大丈夫なわけ……無いデスッ……！」

調を守ろうといつも戦っているのに守られて、何時も優しくしてくれる姉ちゃんに恩返しするために戦っているのに守られている。不甲斐ない！情けない！そんな彼女の思いが、初めてオートスコアラ―と戦ったあの日の夜、クリス言ったの言葉の意味を理解する。

自然と胸のコンバーターに手が動いた。

「こうなったらイグナイトでッ……！」

「駄目ッ……！無茶をするのは、私が足手まといだから……？」

「二人ッ……ともッ……！」

二人の溝が深くなっていく。それに気づいた雷だったが、バリアとフィールドの演算に熱で浮かされている思考力のほとんどを回しているため、上手く言葉に出来ない。

笑みを深めるミカだったが、彼女の脳内にフアラが割り込んできた。

『道草は良くないわ』

「正論かもだけど……鼻につくゾッ！」

ミカはさらに火力を上げた。

遂に防ぎ切れなくなり、調、雷、切歌、響が吹き飛ばされ、外壁に叩きつけられる。そしてそのまま落下し、地面に倒れ伏した。

切歌が立ち上がろうとするが、ミカはけだるげに肩を落としながら、

「預けるゾー。だから、次は歌うんだゾー」

無造作に腕を持ち上げて振り下ろし、地面にレポートジエムをぶつけ割る。まばゆい光が彼女を包み込み、光が収まると、すでにそこにミカの姿はなかった。

「待つデス……よ……！」

「切……ちゃん……！」

装者全員が気を失ってしまった。

○○○

翼たちが到着したところにはすでに事が終わっており、四人は直ちに医療班によって搬送され、溝道は複数の黒服によって調査されている

た。

「押っ取り刀で駆け付けたのだが……」

「間に合わなければ意味がねえ……」

「人形は何を企てていたのか……」

「マリアのほうを翼が向く。」

彼女の言いたいことは分かっていた。ここの襲撃は雷の予測するキャロルの計画にはないことだ。当然、予測である以上確定ではないのだが、キャロルたちの技術力を前提に考えてもここに来る意味が見当たらなかった。それ故に対応が遅れてしまったのだ。

緒川がタブレットを持って周囲を見渡しながら、最初にミカがいた作業用の足場の上を歩いて行く。

「大きく破損した個所は、いずれも響さん達の攻撃ばかり……」

それはつまり、ミカはこの破壊活動を目的としていないことを意味していた。周りの観察を続けていると、ケーブルの操作パネルが起動していることに気づいた。

緒川の目が鋭くなる。

「これは……、オートスコアラの狙いは、まさかッ！急ぎ、指令に連絡をー！」

「ハッ！」

黒服の一人を呼び出し、気付いたことを弦十郎に伝えるべく指示を飛ばした。

〇〇〇

雷と響は並んで本部医務室のベッドに寝かされていた。二つのベッドの間に未来が座っている。エルフナインがカルテを持ちながら近づいてきた。

「検査の結果、響さんに大きなけがは見られませんでした。雷さんは脳細胞に異常はなく、主にミカの錬金術による熱で血管内に圧力がかかり、鼻から出血したものとみられます。二人とも大したけがはありませんでしたが、安静は必要です」

「良かった……」

「うん……」

「しらちゃん……切ちゃん……」

雷の目線は正面を向いていた。当然見ていてくれていた未来に感謝しているが、目の前で妹分が喧嘩しては気が気でない。切歌が「調が悪いんデス！」と言ってそっぽを向いた。

「切ちゃんが無茶するからでしょ！」

「調が後先考えずに飛び出すからデス！」

「そんなこと言ったら姉さんだってそうでしょ！それに、切ちゃんが私の事を足手まといに思ってるからでしょ！」そう言って調もそっぽを向く。

「姉ちゃんを引き合いに出すのはずるいデスよ！あたしは調のことを言ってるデス！」

ケンカしている二人を始めてみた未来が目を丸くし、

「二人がケンカだなんて……」

「昔は結構よくあったんだよ。最近じゃ私が二人と再会してから初めてかな……。それに、こんな剣呑なケンカ、はじめて……」

彼女たちを良く知る雷が心配そうに二人を見つめながら答えた。彼女からしてもここまでこじれたのを見るのは初めてらしい。マリアならばそうでもないかもしれないが、今ここにはいないため聞く方法がない。響はこのケンカの原因は自分だと理解しているのか、表情を曇らせる。

ケンカしている二人の間にエルフナインが割って入る。

「傷に触るからやめてください！そんな精神状態では、イグナイトモジュールを制御できませんよ?!」

その言葉を聞いて落ち込むが、お互いの顔が視界に入った瞬間、またそろって「ふん！」とそっぽを向いた。二人とも同じタイミングだったため、心の底にある仲の良さが隠しきれしていない。それを見て雷が「これなら二人で解決できるかな……」と呟いた。

気付くと響が二人の間に立ち、二人の手を取って重ねた。

「ごめん三人とも……。最初にペースを乱したのは、私だ……」

「さっきはどうしたデスか……?」

「うん……」

「上手く……行かなかったの……？」

切歌が聞いていいものかと不安げに切り出した。何があつたかを知っている雷も聞く。

「うん……。あれからまた、お父さんに会つたんだ……。ずっと昔の記憶だと、優しくてカッコよかったのね。すごく嫌な姿を見ちやつたんだ」

「嫌な姿……？」

響は目に涙をため、

「自分のしたことが分かつてないお父さん……。無責任でカッコ悪かった……。見たくなかった……。こんな思いをするなら……。二度と会いたくなかった……」

「私が悪いの……。私が……」

「違うよ……。未来は悪く無い……。悪いのはお父さんだ……。でも……」

響は未来に歩み寄り、肩に手を置いて儂げに笑った。

「平気へっちゃら。だから泣かないで、未来」

「うん……」

父親を知らない調と切歌、父親を失った雷は、言葉をかけることすらできなかつた。

## 責任を背負うとは

響と未来の悲壮な雰囲気になんて耐えきれず、比較的軽傷だった調と切歌はそろってメディカルルームを退室した。長く姉妹のように行動していた影響で、仲たがいでいても同じタイミングで動いてしまう。それを証明するように二人は同時に向き合い、また、同時に顔をそむけた。

そんな二人の後を、銃のような形をした圧力式注射器を二丁抱えたエルフナインが追ってきた。注射器には緑色の薬液が充填されている。

「これを、調さんと切歌さんに……」

調は「model | K……？」と呟きながら切歌と同時に一丁ずつ受け取る。これで二人は戦うための力を得たのだが、彼女たちの表情は暗い。

「オートスコアラアの再襲撃が予想されます。投与はくれぐれも慎重に。体への負担もそうですが、ここに残されたリンカーにも、限りがありますので」

二人は注射器の中のリンカーを、黙ったまま見つめた。

本部シャワー室。そこで共同溝の調査から帰投した翼、クリス、マリアの三人がシャワーを浴びていた。話題は荒れている響の様子のことだ。

シャワーを顔から浴びながらマリアが、

「やはり父親の一件だったのね」

「こういう時は、どんなふうにすればいいんだ……？」

クリスがこの中で最も一般家庭に近いであろう翼に答えを求め、

「どうしていいのかわからないのは、私も同じだ。一般的な家庭のあり方を知らぬまま、今日に至る私だから……」

家族を持たぬもの、家族を失ったもの、家族を知らぬもの。

装者たちは、響を除いて全員が家族という物を良く分かっている。故に、誰もが響の問題解決を手伝ってやりたいと思っていなが



ら、誰も手を貸すことが出来ない。響が自力で解決するのを、見るこ  
としか出来ないのだ。

一方、ブリッジでは、緒川からの調査報告を弦十郎が聞いていた。  
「敵の狙いは電気経路の調査だとお？」

『はい！発電施設の破壊によって、電力総量が低下した現在、政府の拠  
点には、優先的に電力が供給されています。ここをたどることにより  
……』

「表から見えない首都構造を探ることが、可能となるか……」

雷君の計画を早める必要があるかもしれない……。と、弦十郎は  
小さく呟いた。

○○○

チフオージユ・シャトー玉座の間。玉座に設置された洋服ダンスの  
ような箱に、パイプオルガンのような装置から光が流れ込んでいる。  
台座に立つミカが大きく腕を振り合上げ、「これで〜！どや〜！」と  
掛け声をかけて床一面に共同溝から奪取してきた電機経路図を大き  
く映し出した。自慢の大きな爪で自慢げに鼻をこすり、ミカは台座柄  
ぴよんと飛び下りる。

ルシフとレイアがミカの戦果を称賛した。

「やるじゃんミカ☆」

「派手にひん剥いたなあ……ん？」

「どこへ行くの？ミカ。まもなく思い出のインストールは完了すると  
いうのに……」

蟹股で玉座の間から出ていこうとするミカの行く先を、フアラが尋  
ねる。ミカは苛立ちで声を荒げながら答えた。

「自分の任務くらいわかってる！きちんと遂行してやるから、後は好  
きにさせてほしいゾ……！」

まるで子供のような反論ではあるが、きちんと任務は完遂している  
ため、誰も文句は言わない。静かになった玉座の間に、ルシフのジャ  
グリング玉のポムポムと言うかわいらしい音だけが響いていた。

○○○

日が傾き、ミンミンゼミが鳴く頃、少し小さめの広場の歩道を切歌

たちが歩いていった。いつもなら並んで帰っているのだが、今日は切歌が前、調が後ろだ。セミの鳴き声が聞こえてくるばかりで、彼女たちの間に会話は無い。

調が「私に言いたいこと、あるんでしょ……」と口を開いた。

切歌は脚を止め、調の目を見ながら言い返す。

「それは調のほうデス！」

「私は……」

調が目をそらした。そんな反応に切歌も二の句を告げることが出来ず、お互いに黙り込んでしまう。

そんな二人の横で、爆発が発生した。距離はそれなりにあるだろう。音のした方を向くと、空から赤く熱されたカーボンロッドが雨のように降り注いでいた。逃げ惑う人々の悲鳴が耳に入る。

「これは……」

唐突すぎる凄惨な状況に一瞬の見込めなくなるが、彼女たちの背後に落下したカーボンロッドの爆発がこの攻撃に何の意図があるのかを理解させる。

「あやし達を焚きつけるつもりデス！」

歪な気配を感じて見上げると、壊された鳥居の上にミカが立っていた。

「足手まといと……軽く見ているのならッ！」頬の絆創膏を引きはがしながら、自身に渴を入れ、シュルシャガナの起動詠唱を歌う。

「Various Shul Shagana Tron」

ピンク色のツインテールバインダーが特徴的なシンフォギア、シュルシャガナを身に纏う。そしてすぐにバインダーを展開し、そこから高速回転する無数の小型鋸を乱れ放つ。

『α式・百輪廻』

ミカはそれを避けることなく手のひらから普段の二倍ほどのロッドを取り出し、手首ごと回転させてすべて弾き飛ばした。すべて弾き飛ばすと、ミカはお気に入りの切歌に向かってロッドを射出した。調と同じくイガリマを構えた切歌がミカを自身の戦闘射程に入れるために距離を詰める。

ブリッジで状況を把握した弦十郎が指示を出す。

「今から応援をよこす！それまで持ちこたえ……ぬうツ?!」

突然、本部潜水艦を衝撃が襲った。こんなところに岩礁はなく、ぶつけるような操舵はしていないはずだ。何があつたのか？その答えは本部前方を映すモニターにあつた。

「海底に巨大な人影だとお?!」

その言葉の通り、海底にいた巨大な人影が正面から本部を掴んでいったのだ。けたたましくアラートが響き渡る。

「私と妹が地味に支援してやる……だから存分に暴れる、ミカ」海上にはオートスコアラ、レイアがいた。彼女は腕を組み、海底の巨人こと妹と共に、他の装者がミカの戦闘に介入するのを妨害していた。そのことを知ってか知らずかミカは調と切歌の二人を相手にして存分に暴れまわっている。手のひらの噴出孔からロッドを打ち放つた。調は左右の、切歌は上下の移動で回避しながら距離を詰めていく。そして調は高く跳躍し、体をスピンさせ、スカートそのものを鋸へと変える。

### 『△式・艶殺アクセル』

スカートの刃をロッドで受け止めたまま殴り飛ばし、追撃を掛けに来た切歌の鎌を回避して背後に回り、蹴り飛ばした。

調は絵馬掛所の屋根に着地し、切歌は鎌を振り回して強引に制動をとって着地する。ミカは鳥居から飛び下り、長いロッドを首にかけて両手を乗せ、つまらなそうに口を開いた。

「コレっぽちちい〜？これじゃギアを強化する前のほうが良かったですゾ……」

「そんなこと、あるもんかデスッ！」

「駄目ッ！」

調の静止も聞かず、ミカの挑発に乗った切歌は彼女に斬りかかる。ミカは跳躍して避けると、切歌もその後を追う。

空中で鎌を振りかぶり、刃を分裂させて振るときの勢いを利用してブーメランのように投擲した。

ミカがそれをロッドで受け止めるが、空中で爆発した。それを見て切歌が「どんなもんデス！」と歓声を上げたが、爆煙でよく見えない。煙が晴れると、紙のロールをブースターにして空中に停滞しているミカが、錬金術で展開した無数のロッドを「こんなもんだゾー！」と言いながら放った。ロッドが切歌の逃げ道を奪うように地面に突き刺さる。

「連携しないと無理だぞお〜？」

「躲せないなら……受け止めるだけデスッ！」

先の戦闘で発生したいぎこぎにまだ意固地になっているようだ。かたくなに調と連携しようとはせず、切歌は自分一人の力でこの窮地を脱しようとしている。まだまだロッドは残っていた。切歌のイガリマでは到底防げるようなものではない。

それらが直撃する寸前、調が切歌の前に割って入った。バインダーをアームに変形させ、四つの大型鋸で防御壁を形作る。

「何でッ?!後先考えずに庇うデスカッ?!」

また助けられた。あたしが調を守ら居ないといけないのに……。そんな思いが感謝よりも先行し、思わず調を突き飛ばしてしまう。

調はむっとして、

「やつぱり、私を足手まといと……!」

「違うデス!調が大好きだからデスッ!」

「え……?」

ミカを刈るために駆け出していた切歌の背中を、調が見つめる。鎌とロッドがぶつかり合い、火花が散る。ミカの至近距離で放たれたアンカーアームを躲し、後ろ回し蹴りを延髄に叩きこんだ。

「大好きな調だからッ……!傷だらけになることが許せなかったんデスッ!」

「じゃあ……私は……」

ミカのロッドを鎌の柄で受け止め、

「あたしがそう思えるのは……!あの時調に庇ってもらったからデス!みんながわたし達を怒るのは……、私達を大切に思ってくれている

からなん德斯！」

「私達を……大切に思ってくれる……優しい人たちが……」

拮抗を保っていた切歌とミカの鏢迫り合いだったが、ミカの放った炎に吹き飛ばされてしまう。吹き飛ばされた切歌を調が受け止める。

ミカは手首を回転させ、おどけるように「なんとなくて勝てる相手じゃないゾ！」とさらに焚きつける。

「ママが遺してくれたこの世界で……カッコ悪いまま終わりにたくない！二人の脳裏に無責任でカッコ悪い父親を見たと言った響の姿が浮かぶ。

「だったら、カッコよくなるしかない德斯！」

「自分のしたことに向き合う強さを……！イグナイトモジュールツ！」

「抜剣ツ！」デースツ！」

二人はコンバーターのウイングスイッチを入れ、モジュールを起動して掲げた。起動した証として、『ダインスレイフ』と無機質な音声が鳴る。モジュールは宙を舞い、空中で変形して光の刃を形成、二人の胸に突き刺さった。調と切歌、彼女たちの中をダインスレイフの呪いが駆け巡る。

強くなり、自分を満足させてくれる彼女たちにミカは昂りを覚える。

「底知れず、天井知らずに高まる力あ！」

昂り高まったミカの体を炎が包み込む。思い出の燃焼効率を最大まで引き上げ、全てを燃焼しきるまで四分間全能力をブーストするミカの決戦機能『バーニングハート・メカニクス』が起動した。

呪いに包まれる自分を律するため、調は切歌の、切歌は調の手を取った。

「ごめんね……！切ちゃん……！」

「いい德斯よ……！それよりもみんなに……」

「そうだ……。みんなに謝らないとツ……！そのために強くなるんだツ！」

二人の思いが魔剣の呪いをねじ伏せた。彼女たちは魔剣の呪いを

自らの力と変え、身に纏う。漆黒となったギアを纏った二人は、燐光を放ちながら全開出力のミカとの決戦を行う。

切歌がミカに斬りかかる。ミカはそれを弾き飛ばし、次いで放たれた調のヨーヨーによる切断攻撃を受け止め、力任せにぶん投げて逆にその勢いで調を投げ飛ばした。

「調ッー！」

「サイキョーのあたしには響かないゾ！もっと強く激しく歌うんだゾ！」

空中から切歌に向けてロッドを乱出した。切歌はそれらを全て斬り飛ばすが、目の前に着地したミカ本体の攻撃まで捌くことが出来ず、アンカーアームによる打撃を喰らってしまう。神社の外壁に背中を打ち付けた。ミカは追撃の手を休めることなくロッドで切歌を拘束し、目の前で手のひらの噴出孔を開いた。あの炎を喰らってしまう。ば防御手段のない切歌は跡形もなくなってしまっただろう。

そんなことは調が許さない。

「向き合うんだ！出ないと乗り越えられないッー！」

通常の何倍もの小型鋸をミカに向けてばら撒く。ミカはそれを髪を自在に操って叩き落とすと、空中に立って指を立てた手で頭上に大きな円を書き、炎の巨大な錬金陣を展開する。そしてそこから巨大なカーボンロッドをあめのように降らしていった。その間を縫うように切歌が離脱する。

「闇雲に逃げてたらじり貧だゾー！」今までで一番大きなロッドを放った。

「知ってるデスッー！」

走るのをやめようとしめない。背後からミカが襲い掛かっているのを察すると、鎌を大きく振ってロッドの一つに引っ掛けて強襲を回避する。

「ぞなもし?!」

ロッドから鎌を外し、肩のアーマーをアンカーのように発射。それはミカを通り過ぎ、彼女の背後にいた調のバインダーと接続される。さらに残りのアンカーがミカの体をからめとって地面に突き刺さり、

完全に拘束された。

切歌の鎌が、調の鋸が挟み込むようにミカに襲い掛かる。

『禁殺邪輪 Zあ破刃エクレイプSSSS』

「足りない出力をかけ合わせてえッ?!」

刈られる間際、撃破されるにもかかわらず、ミカは満面の笑みを浮かべて斬断される。戦闘特化型ゆえの大出力が大爆発を引き起こした。

〇〇〇

「こっちの気も知らないで!」

オートスコアラーを撃破したにもかかわらず、クリスに叱られて調と切歌は小さくなっていった。弦十郎は腕を組み、彼の隣でクリスは腰に手を当てている。

「たまには指示に従ったらどうだ?」

「独断が過ぎました……」

「これからは気を付けるデス……」

「んお?」

「お、おお……。珍しくしおらしいな……」

予想外の謝罪の言葉に、弦十郎たちも動揺を隠せない。

「私達が背伸びしないのでできるのは、受け止めて、受け入れること……」

「だから、ごめんなさいデス……」

「う、うむ……。わかれば、それでいい」

弦十郎の言葉を聞いて、とぼとぼとその場を後にした。弦十郎は顎に手を当てる。

「全く……」

「センパイが手を引かなくなたって、いっちょ前に歩いて行きやがる……」

(アタシとは、違うんだな……)

クリスは彼女たちの背中を静かに見つめた。

ゆつくりとした足取りで帰り路を歩いて行く。

「足手まといにならないこと……。それは強くなることだけじゃない

……。自分の行動に責任を伴わせることだったんだ」

「せきにん……。自らの義に正しくあること……」切歌が自身のタブレットで『責任』の意味を調べ、読み上げる。

「でも、それを正義と言ったら、調の嫌いな偽善っぽいデスか？」

かつての調が響に言い放った言葉が蘇る。『それこそが偽善……！』という言葉葉。

「ずっと謝りたかった。薄っぺらい言葉で、響さんを傷つけてしまったこと……」

「ごめんなさいの勇気を出すのは、調一人じゃないデスよ……」

切歌は調の肩に手を置き、額を彼女の額に当てる。

「調を守るのはあたしの役目デス！」そう言っただけで笑う。

「切ちゃん……。ありがとう……。いつも、全部本当だよ……。調もほんのり微笑んだ。」

○○○

ミカが撃破されたことで、彼女の頭上に会った布にも炎の錬金式が刻印される。それと同時に、玉座の洋服ダンスのような箱の扉が開いた。中から新しい躯体に前の体の記憶をインストールしたキャロルが現れる。彼女の前にファラ、レイア、ルシフの三機がひざまずく。

「お目覚めになりましたか」

「そうか……。ガリイとミカが……」

「派手に散りました」

「これからどうしますKA☆？マスタLA☆？」

「迷いなくキャロルは断言する。  
「言うまでもない。万象黙示録を完成させる……。この手で奇跡を皆殺すことこそ、数百年来の大願……」

故に……。

「ルシフ」

「了解でSU☆マスタLA☆総てを砕いて壊して皆壊して、あなたの力となりましょU☆……」

そう言っただけで大袈裟なまでに恭しく頭を下げる。金の光が渦巻くルシフの紫の瞳が、怪しくきらめいた。



## 自身の闇に、屈服し

「では、これよりオートスコアラーの対策会議を始めます」

本部ブリッジにタブレットを持ったエルフナインの声が響く。

現在、S. O. N. G. が撃破した敵勢力は首魁たる―復活が予測されているとはいえ―キャロル、マリアが撃破したガリイ、そして調と切歌が撃破したミカの一人と二機。残存勢力はフアラとレイア、ルシフの三機。前の二機はともかくとして、最後のルシフの対策が今回の主な議題だ。

風や水は正面からでも比較的なんとなかなるが、エーテルの特性が強力すぎる。正面からだけでなく、搦手すらも封じる彼女の力が圧倒的なのだ。現にルシフにダメージらしいダメージを負わせたのが、雷が彼女の攻撃を流し、逆に彼女に命中させた時しかないというのだから手に負えない。

「僕たちはキャロル、ガリイ、ミカを撃破し、相手の勢力は残すところフアラとレイア、ルシフの三機となりました。そこで、未だ攻略の目途が立っていないルシフの対策を、今回の議題とします」

そうやってエルフナインは、モニターにルシフとの交戦記録を投影した。まず一つは初戦である響との戦闘だ。この戦いで、ルシフの姿と能力が明らかになっている。

映像では、当時の響の最大威力と思われる拳が、ルシフの無造作に挙げられた右足に受け止められているところが写っていた。その時のことを思い出したのだろう。響がつばを飲み込んだ後、口を開いた。

「この時、凄く不気味だったんだ……。どれだけ力を入れても、全然前に進まない……。力が全部吸い取られたみたい……。そんな感覚だった……」

「それがルシフの錬金術、エーテルです」

「なあ……。前から思ってたんだけどよ、エーテルってなんだ？」

「ええ、それ私も聞きたかったわ。炎や水は分かるんだけど、エーテルとは何なの？初めて聞いたわ」

クリス、マリア両名の疑問に、エルフナインが頷く。

確かに炎や水などの他の四大元素と比べて、エーテルが何なのかと聞かれればすぐに答えられるものは少ないだろう。

エルフナインがタブレットをスライドし、ルシフのデータが、彼女の知る限り記録されたページが映し出される。画面いっぱいには紫色の道化師のような恰好をしたルシフが表示された。

「まずはエーテルについてお答えします。エーテルとは、かつてアリストテレスの提唱した元素のひとつ。主に星の天体運航を司り、その性質上、無限に回転し続ける存在です」

「星の天体運航とは……月が地球の周りをまわるようなアレか？また壮大な……」翼があごに手を当て、呟いた。

エルフナインは頷き、

「そう思ってもらって問題ありません。して、彼女が最も厄介な所以は、彼女の操るエーテルが、無限に回転し続けるという特性です」

「回転……デスカ……？」

「はい。相手の攻撃で発生する威力をエーテルの回転に引きずり込み、それを体内で加速して逆に放出する……。これが彼女の基本戦術です。その特性上、遠隔で発動する。ということが出来ない弱点があります。それを補って余りません」

静寂がブリッジを包み込む。当初こそアルカ・ノイズを装者が請け負い、弦十郎がルシフを相手取る。という案もありはしたのだが、容易く砕け散ってしまった。

クリスが小さく手を上げ、

「なあ、光線系で攻撃したらどうなるんだ？物理はそうかもしれないけど、イチイバルならいけるんじゃないか？」彼女の問いに、隣に立っていた雷が首を振ってこたえる。

「私のケラウノスが無理だったから、多分駄目だと思う。斬撃も、恐らく……」

「振る力が奪われるわけだからな、天羽々斬でも駄目だろう」

彼女たちの言葉に、再び全員が黙り込んだ。

天羽々斬が駄目なら、同じ斬撃特性のアガートラムやイガリマも

駄目だろう。シユルシヤガナは例外かもしれないが、そもそも鋸で押し切れるだけの猶予があるのか？という問題が発生してくる。敵は待つてはくれないのだ。

「むう……。どうすれば……」弦十郎が唸る。

「一つだけ、策はあります」エルフナインが人差し指を立てて言った。ブリッジにぎわめきが広がる。

「その策とは……？」

「イグナイトモジュールの発動による、七重奏の絶唱です」

「イグナイトモジュールを使った……」

「七重奏の絶唱……だと」

即ち、現状の最大出力。

響、雷の力でフォニックゲインを束ねて重ねることで増幅させ、アガートラムで制御、再配置することで放つS2CA・ヘピタコントロール。それをぶつけるというのだ。雷の絶唱特性によって、本来では手を繋がなければ発動できないS2CAを離れていても発動できるのが強みだ。

この特性こそが、ルシフ攻略のためのキーだ。

「雷さんの絶唱特性を利用して、同時に多方向から放たれる大出力のフォニックゲイン。これによって彼女の体内にある回転するエーテルと逆回転の力をぶつけることで相殺する……。これが、ルシフ突破の方法です」

「そしてイグナイトモジュールを使用することで……」

「絶唱の負荷を軽減しながら威力を高めるって事デスね！」

ようやく見えた光明。調と切歌は向き合って喜んだが、すぐに表情を暗くする。

イグナイトモジュールの起動。それは“彼女”を知るものに深い闇をもたらした。そう、雷である。彼女の過去を聞いたものは知っている。それだけでなく、憚られて言っていないもの、記憶の奥底に封印したものもあるだろう。故に、雷が本当はどれほどのものを抱えているのか、雷を含め誰も知らないのだ。

それほどの闇を抱えた彼女を、響たちが見つめた。そして、不安気

な顔をしながら、響が口を開こうとしたが、それよりも雷が先に言った。彼女は笑顔を湛え、

「大丈夫大丈夫！今までだって何とかして来たんだから、今回も大丈夫だって！」

「雷……」

全然大丈夫ではなかった。

冷静に、客観的に状況を把握し、感情論や精神論を可能性の範疇にしかとどめないほどの彼女が、それらに頼り切っている。この事実だけで相当無理していると判断できる。更に、膝が笑っているのだ。誰がどう見ても普段の雷とは言えなかった。

響は彼女の手を伸ばすが、途中で引つ込めてしまう。触れると壊れてしまう、そんな気がした。

そんな時だった、ブリッジにアラートが響き渡る。

藤堯が、

「アルカ・ノイズの反応を検知！」

「場所はッ?!」

「湾岸区域、石油コンビナートですッ！」

石油コンビナートを攻撃することで、さらに要所を絞るという魂胆だろう。その報告を聞いて、装者全員が一斉に動き出す。

本部である潜水艦も、コンビナートへ向けて舵を切った。

〇〇〇

石油コンビナートで、ルシフによって召喚された暴力的ともいえる数のアルカ・ノイズが、蹂躪の限りを尽くしていた。この攻撃から逃れた者もいるにはいるが、数は少ないだろう。所々で黒煙が上がり、ごうごうと炎が燃えていた。

地獄と形容できるこの場所に、装者たちが並び立つ。

ルシフが片足で大玉の上に乗りながら、

「O☆? 漸く来たのKA☆! 遅くて遅くてもう少しで帰ろうとしたところだったZO☆」

からからと笑いながらボールをどこからともなく取り出し、ジャグリングし始めた。完全になめてかかっている。これが彼女の性格だ

と全員が聞いているため、誰も感情を荒立てたりはしない。

雷が、ケラウノスの起動詠唱を歌う。

「Voltaters Kelaunus Tron」

灰と黄金のシンフォギア、ケラウノスを身に纏ったう。まずは雷がはじめに起動し、その後、様子を見て他の装者も起動する手はずになっている。長期戦になればなるほど不利になってく。故に、最初から全開だ。

「イグナイトモジュール！抜剣ツ……！」

雷がコンバーターのウイングスイッチを入れ、モジュールを取り外して掲げた。起動した証拠に、無機質な『ダインスレイフ』の音声か鳴り響く。

雷の頬を冷や汗が伝い、彼女はつばを飲み込んだ。

空中でモジュールが変形し、光の刃を形作る。そしてその刃は、雷の胸に突き刺さった。ここからが本番だ。

流れ込む魔剣の呪いが、彼女の心を蹂躪する。

「あッ……」

一瞬。一瞬だけだった。小さな叫び声が漏れる。

雷の心は耐えることも抗うこともできず、魔剣の呪い……いや、自身の闇に押しつぶされ、ねじ伏せられ、へし折られ、飲み込まれ、そして……屈した。屈服したのだ。負けたのだ。

雷を闇が、包み込む。

## 深き闇に差す光

本部ブリッジにて、ダインスレイフの呪いにのまれた雷の姿がモニターに、彼女の状況がバイタルとして表示される。あまり考えたくなかったとは言え、予めこうなることは覚悟していたが、改めて現実として直視すると来るものがある。

特に彼女のバイタルを確認している藤堯の反応が芳しくない。弦十郎が何度も報告しろと指示を出しているが、彼は肩を震わすだけで答えない。情報がないという焦りから、自ら雷のモニターを確認する。

そして、絶句した。

「まさか……この数値は……」

「はい……。このままいけば……。雷ちゃんは精神崩壊を引き起こしますッ……!」

すでに通信が装者にもつながっている。

藤高が言った言葉を聞いて、全員の中に激震が走った。弦十郎が「まさか、これほどだったとは……」と呟いた。

通信で響が、

『師匠ッ!』

「うむ……。響君、マリア君は雷君の救出!翼、他装者たちはルシフの足止め、及びアルカ・ノイズの撃破だ!」

『了解ッ!』

装者たちの声がそろろう。

弦十郎の指示通り響たちが闇にのまれた雷と、翼たちがルシフ及びアルカ・ノイズと相対した。響が拳を、マリアが短剣を構える。背後から翼たちの奮闘する声が聞こえてきた。

「雷を傷つけたくないのは私も同じよ。でも、今やらないと、あの子は二度と戻ってこない!」

「分かっていますッ!」

暴走しているにもかかわらず、その場から一歩たりとも動こうとしない雷に、響は右の拳を振りぬく。

狙うは顎。ここを揺らすことで脳震盪を引き起こし、出来るだけ傷つけずに戦闘不能にすることが狙いだ。確かな技量を持つて放たれたソレは、雷の顎に吸い込まれ、確実に脳を揺らす。誰もが、響すらそう思っていた。そう確信を抱いた。その瞬間、雷が動いた。顔を少しだけ、後ろに傾けたのだ。

「当然、響の拳は空振りに終わる。」

「ッ?!」

「……」

「不味いッ！早く避けなさいッ！」

マリアの悲鳴が聞こえてくるが、響には周囲の光景がスローに見えていた。危機的状況が、そう見せているのだ。

右の拳を振り抜き、そして躲されたのだから、当然右側はがら空きとなる。そして人体の右側には何があるのか？そう、肝臓である。ここにめがけて、雷の鋭い拳が突き刺さった。咄嗟に左側に跳んで衝撃を逃がし、ギアのプロテクターが致命打にはさせないが、それでも決して低くはないダメージが入る。

「ぐッ?!」

「こんな機械みたいな動き……、これが本当に暴走なの……?」

マリアの疑問はもつともだ。暴走しながら、暴れまわるのではなく、最小限の動きで最大限の効果を生み出す機械のような動き。

それは、雷の中にある『破壊』の捉え方の違いにある。彼女は、これを暴れまわることでものを壊すのではなく、少ない手数で確実に壊すことと捉えていた。故に、これほどまでに動きに差が出るのだ。

マリアも短剣を振りかざし、コンパクトに攻め入る。大振りで行けば、確実にカウンターを喰らうと見たからだ。

「はあッ！」

「……」

今度は避けず、マリアに向けて拳を突き出し、短剣を持つ手を殴り抜いた。いくら武器を持ってしようと、持つことが出来なければそれは武器成し得ない。マリアは短剣をとり落としてしまう。そして彼女の鳩尾にアッパーを放ち、体が軽く宙に浮いたところを回し蹴りが

強襲した。

「があッ?!」

マリアの体が吹き飛ばされ、地面の上を転がる。そんな彼女を、雷は上から見下ろしていた。

〇〇〇

私の闇が、私の心を塗りつぶしていく。

叔父さんの家に預けられた日。お正月とか、いろんな催し物で会った時は、優しい叔父さんだなんて思ってた。でも、実際は、プライドだけは高く、昔から頭の良かったお母さんと――勝手に――比べられてると思い込んで劣等感を募らせてたらしい。(警察から聞いた) そんな時に、家族が殺された私が、叔父さんのもとに転がり込んだんだ。

私の顔はお母さん似だから、絶対敵わなかった嫌いな姉が、絶対に歯向かえないようになったらと思っただけでいい。

叔母さんは、お母さんの同級生だったらしく、昔から頭もよく、男性人気も高かいうえにそれらを歯牙にもかけなかったお母さんを嫌ってた。たぶん、嫉妬なんだから。

暴力とか、傷ついたら心に罵倒を叩きつけるとか当たり前、殺されるかもしれないと思っただけは何度もあった。

お風呂の順番もいつも最後。その時には湯船のお湯は全部抜かれ、シャワーも湯を使うことは禁止されてた。夏場はともかく、冬場は凍傷になりながら、いつか凍え死ぬんじゃないかと怯えながらだった。

小学高学年になって、第二次性徴が始まったころ、私を見る叔父さんの目がすごく怖くなった。お母さん譲りで胸も大きかったからだと思う。

私の心が悲鳴を上げる。いやだ! 見たくない! 怖くて怖くて記憶の奥底に抑え込んだはずなのに……!

深夜、部屋の外鍵が外れる音がして、私は目を覚ました。薄目を開けると、下着姿の叔父さんが入ってきて、私の上のしかかってくる。叫び声を上げたり暴れるけど、大人と子供、しかもこちらは女だ。勝てるわけがない。

最初と二、三回は怖くて痛くて叫んだけど、途中から何も感じなく



なった。大事には至らなかつたけど、これは叔父さんたちが逮捕されるまで続いた。

吐き気がこみ上げてくる。吐けるものなんて何も入っていないのに。頭を抱えてうずくまる。それでも、私の闇は私を逃がしてはくれない。

小学校の時は心配してくれた同級生だったけど、中学校に進学すると初めて私を見た生徒の流れにのまれ、私を虐める側に回った。包帯まみれで怪我だらけの同級生なんて気味が悪かったんだと思う。

まだ残る幼児性から化け物退治と称して私を攻撃し、年齢を重ねたことによる意地汚さで先生に見つからないようにしてた。

でも、私は知ってる。先生も見て見ぬふりをしてたどころか、私を攻撃する側に回っていたことを。

机に花瓶とか、椅子と一緒に捨てられるとか、教科書や筆記用具、上履きを引き裂かれるとか、当たり前。トイレに入ってるときに頭から水を、教室に入った瞬間にチョークの粉をかけられたり、先生も知ってるはずなのに、授業中に私のせいにして掃除させたりした。

階段を歩いている時が一番怖かった。だって後ろから引つ張り倒されたり、前から押されたりして何度か落ちたことがあるから。

お母さんを真似て長くしてた髪を、散髪と称して勝手に切られたりもした。

まだ私も幼かったから、こんな時でも私を助けてくれる王子様みたいな人がいると思ってた。だから、クラスのカッコイイ男子が私を助けてくれた時は、本当に有頂天になってた。見え透いた罠だということにも気づかずに。

次の日、廊下中に張られた記事を見て、私はもう、自分以外信じなくなつた。

この日、私から感情が消えた。

私は泣いてすがる。

何でこんなもの見せるの？ 思い出さなくなつたのに……。何で？ なんで？ ナンデ？

ぐちゃぐちゃになっていく私に、闇はさらに突きつけてくる。



決着は、一瞬だった。

## シンカ

翼たちがルシフやアルカ・ノイズと戦闘し、苦戦を強いられる中、響とマリアは死ぬ物狂いで機械のように暴走する雷を止めようと全力を尽くしていた。

こちらから放つ攻撃は全て捌かれ、果てには打とうとする前に潰され、逆にカウンターを喰らう。呼吸を整えるために後ろへ下がれば漆黒の稲妻が飛んでくる……。まさに手の出しようがない。

肩で息をしている響が拳で汗をぬぐい、

「はあッ……はあッ……、これ以上は……翼さんたちがッ?!」

「立花響ッ!」

呪いに犯された雷が息をつく暇を許してくれるはずもなく、汗をぬぐうために下がっていた響の顔面に膝蹴りを叩きこむ。何とか腕をクロスして直撃は防いだものの、衝撃で後ろにのけぞってしまおうが、それで雷の攻撃がすむはずもなく、曲げていた膝を伸ばし、響の後頭部に足を引っかけて地面に叩きつけた。ぶつかった衝撃で地面にひびが入る

「があッ?!」

「……」

「くッ……!」

苦虫を噛み潰したような顔でマリアは短剣を蛇腹状に伸長し、雷を拘束しにかかるが、モーシヨンから技の発動を予測していた雷が一気に距離を詰める。そして短剣を持つ右腕を捻じり、捻じった方向と同じ方向に足を払う。マリアの体が自然と倒れ、その襟首をつかんで背から拳を振りかざしていた響にぶん投げた。

「マリアさんッ?!」

「かはッ……!」

空中で、しかも投げられたことで避けることが出来ず、響の拳がマリアに直撃する。当然響もほぼ振りぬいた状態で止めることが出来るはずもない。

最小限の動きで相手を仕留める……。そんな戦い方をしている雷

は平静としているが、響たちは疲労困憊だ。膝が笑っている。

「すみません……」

「謝ることではない……！今は……、あずまを止めることが先決だ……！」

「……」

雷がゆつくりと二人のほうを向き、余裕の足どりで歩を進める。その足取りはすでに響たちを敵とは見なしていないようだった。何故なら偶々翼たちの手前二人がいただけであって、響たちのほうを向いたわけではないからだ。

笑うひぎと己の心を鼓舞し、二人は雷の前に立ちあがる。目の前に戦闘可能な『敵』が現れたことで、雷の足も止まった。

響たちも分かったことがある。今まで伊達に殴られたり、蹴られていたりしたわけではないのだ。今までの戦闘から、雷は決して自発的に攻撃を行わない。こちらが攻撃的な行動をとった時のみ反応するのだ。

実際、後一撃でも喰らえばダウンするであろう二人に対し、一切の攻撃反応をとっていない。この事実が、響たちの仮説を裏付けていた。

（雷が教えてくれたんだ……！組打ちの時、相手をよく観察して、どうすれば攻略できるのかを考えるってッ……！）

「あれ、やりましょうッ！あれなら雷にも攻撃と認識されないはずですッ！」

「ぶつつけ本番よ？それに上手くいくかどうか……出来るの？」

「思い付きを数字で語れるものかよッ！」

マリアの懸念を響が一蹴する。

確かにこれ以外に手はないのは事実だ。しかし、それ以上にリスクが大きすぎる。失敗する可能性のほうが確実に高いだろう。

それでもマリアはS・O・N・Gの装者、マリア・カデンツァヴナ・イヴではなく、雷と共に居たいただのマリアとして選択した。

「その賭け、乗ったわッ！」

「マリアさん！」

「チャンスは一度！二度目はない！ならば一発で成功させればいいだけの事ッ！」

「はいッ！」

そう言つて二人は手をつなぐ。そして……、

「G a t r a n d i s B a b e l Z i g g u r a t E d e n  
a l E m u s t o l r o n z e n F i n e E l B a r a l  
Z i z z l G a t r a n d i s B a b e l Z i g g u r a  
t E d e n a l E m u s t o l r o n z e n F i n e E l  
Z i z z l ……」

絶唱した。膨大なエネルギーが迸り、翼たちやルシフも思わず響とマリアのほうを向いてしまう。翼が叫んだ。

「無茶だマリア！立花！土壇場でのS2CAなど！」

「マリアアッ！」

「響さんッ！」

調、切歌二人の声も届くが、それでも二人は止まらない。この一撃に賭けるしかないのだ。

「スパークソングッ！」

「コンビネーションアーツッ！」

「セツトツ！ハーモニクスッ！」

響の絶唱特性である『手を繋ぐ』で絶唱のフォニックゲインを束ね、マリアの絶唱特性、『ベクトルの操作』で乱れに乱れている束ねられたフォニックゲインを強引に制御することで、この土壇場でS2CAを完成させる。

その名も、S2CAツインブレイク type—H（ハンド）。心を闇に蝕まれ、閉ざされた雷を助け出す為だけの技！響とマリアだけが放つことが出来る、彼女を救うためだけの技！

左右のバンカーユニットを連結させ、響が構える。

「S2CAツインブレイクッ！」

そして腰のブースターを点火し、一気に突っ込んでいく。そんな彼女の背中を、ガントレットのブースターと腰のブースターでマリアが全力で後押しした。

「とどけえええッ！」

二人の全てを賭けた一撃。いや、一手は、闇にのまれた雷の胸に届く。

二人に攻撃する意思はない。ただ、もつと彼女と手を繋ぎたい……、笑い合いたい……、話し合いたい……。それだけの事だった。故に、この一手は、雷に届いたのだ。

〇〇〇

足元を見れば、私を犯した、壊した、傷つけた人たちのけ穢れた血。手には血まみれの、漆黒の魔剣。あと一人、あと一人だけ……。私をこんな地獄に追いやったやつを殺せば私は楽になれる。こんな地獄から解放される……。

雷の心はもう既に殺されかけていた。残った最後の一人が彼女によつて殺されてしまえば、雷の精神は跡形もなく崩壊するだろう。

ダインスレイフは、一度抜けば血を吸うまで鞘には収まらないという。なら、斬るものが無くなった場合はどうなるのか？ 答えは簡単、剣を抜いた者。即ち、自らを斬り殺すのだ。そして、魔剣の刃が最後の獲物の姿を捉え、雷がそれに従うように彼女の前に立った。彼女が斬り殺されれば、魔剣の凶刃は雷に向くだろう。

その時だった。明るい暖かな光が、血に濡れた、荒んでボロボロになった雷の心を照らす。響とマリアの思いが光となって雷を包み込んだのだ。

暖かい……。そうだ……。こんな気持ち、初めてじゃない……。私を最初に助けてくれた人……。私にぬくもりを、取り返してくれた人……。

ダインスレイフの――そもそも魔剣にそういう概念があるかは疑問だが――誤算。それは、雷が家族を殺されてから今までの事を全て心の闇として扱っていたことである。

彼女が虐待やいじめから解放されたのは、一人の新任教師の活躍があった。その時、雷はすでに心を閉ざしていたためよく覚えてはいないが、彼女の言った言葉は確かに深く雷の心に響き、ぬくもりを残していたのである。

スケッチブックを小脇に抱えた誰かが私の手を取って言った。

「先生が先生になったのはね、雷さんみたいな子を一人でも助けあげたいと思ったからなの。先生になれば、子供の変化にも気づいてあげられるかなってね」

そう言っつて『先生』は心を閉ざして何の反応もしない私に笑いかけしてくれる。

「そういう先生もね、虐待を受けて育ったから、雷さんの痛みや苦しみは全部じゃないけど、よくわかってるつもりなの。そんな同じ境遇の、あなたの人生の先輩から一言プレゼントします！じゃかじゃかじゃかじゃくじゃんっ！」

小脇に抱えたスケッチブックの表紙をぱつと開き、私に見せてくれた。

『どんなにつらい過去でも、全て明るい未来に続く道である！』

そつと『先生』が私を抱きしめてくれた。

「雷さんの受けた痛みがどれほどの物かは経験した雷さんにしかわからない……。でも、そんな過去を背負ったことで、本来はなかった出会いがあるかもしれない。二度と会えないと思つた人と会えるかもしれない。過去は一本しかないけれど、未来は何千、何万と可能性があるの」

私を抱きしめていた『先生』は体を離し、私の焦点の合わない目を見て、

「だからね？今までの幸せなこと、辛かったこと全部ひつくるめて、背負って生きていけばいいの。無限の未来は、背負ってきた物の分だけの、ハッピーエンドないろんな冒険を与えてくれるはずよ！」

そう言っつて、またにっこりと笑いかけてくれた。

私を照らしてくれた暖かい光が、闇の中にあつた暖かな記憶を思い出させてくれた。先生！私、もう逃げません！辛い物も幸せな物も全部ひつくるめて、背負って生きていきます！過去があつたから響や未来、翼さんにクリスマスに出会えたし、マリアに調に切歌にも再開できた！立派でなつてみたいと思える大人にも出会えた！



だからッ……私はッ！

○○○

本部ブリッジが、真っ先に雷の変化を捉えていた。

「雷ちゃん、ダインスレイフの呪いに打ち勝ちました！精神バイタルが安定域に入りました！」

「良かったあ……」

藤堯の報告にブリッジ中の職員の歓声が上がった。だが、ルシフとの決着はついていない。すぐに各々が持ち場に戻り、戦闘管制を続けている。だが、誰もがその喜びを隠しきれていない。エルフナインも、緊張による疲れからほつと息をついた。

丁度その時だった。雷とつながっている通信機から、聞き覚えのある旋律が聞こえ始めたのだ。その直後に、ケラウノスの様子を捉えていた友里が声を上げる。

「ケラウノスのフォニックゲイン、猛烈な速度で上昇していますッ！」

「まさか……雷臨……」

「いえ、ですが雷ちゃんのバイタル、非常に安定しています！」

「どういうことだ……？」

『雷帝顕現』が発動している。なら、雷は意識を失っているはずだ。だが、安定しているということは、そうではないということの意味している。

その結果が何を生むのか。全員が固唾をのんで、自らの仕事をこなしながらモニターを見つめた。

○○○

ルシフの前に翼たち装者四人が膝をついていた。

「これほどの物とはッ……」

「打つ手なしかよッ……！」

「あはははHA☆！もうおしまI☆？じや、全部吹き飛んじやE☆☆！」

ルシフは嘲る様に言った後、手のひらを頭上に突き出し、エーテルの大型錬金陣を展開した。金色の、回転するまばゆいエネルギーが周囲を照らす。

翼たちの背後にいる響とマリアも、その輝きに思わず目を瞑ってしまふ。

そしてそれを、装者たちに向けて、打ち放った。圧倒的な威力を持つエネルギーの光に、全員が飲み込まれ、全てが終わる……はずだった。

見えない壁のようなものに阻まれ、翼たちの前で光が消滅する。

いつまでたつても来ないエーテルの攻撃に、恐る恐る全員が目を開いた。何故攻撃が届かなかったのか？それは翼の前に展開された膨大なエネルギーを誇る斥力の壁に阻まれていたからだ。

こんなものを展開できるのは一人しかいない。そして、これほどのエネルギー量。通常では出せないはず。それを為す何かを知っている翼とクリスが慌てて振り返り、それにつられて調と切歌も振り向いた。

そこには……。

「この旋律は……『Apple』の……」

「あず……ま……？」

「大丈夫？みんな。心配かけてごめん。でも、もう大丈夫だから」

目を開け、意識を保ったまま、『雷帝顕現』を発現させた雷の姿があった。

ユニットは全開に展開され、インナースーツや装甲の灰色だった部分は黄金に輝き、腰のマントは金色に染まった後、稲妻そのものへと変化している。さらに、襟のユニットからは稲妻がマフラーのように伸びていた。

ただ異なるのは、イグナイトモジュールを完全に制御したことでギアが黒く、鋭角的になってきていることだ。

#### 『シンカ・雷帝顕現』

発動時に発生する強力な斥力を五本のティアラの角で制御し、装者に当たるのを回避して錬金術のみを防いだのだ。

「響！マリアー……ありがとうー！」

「思いつきりぶちかましてきなさいー！」

「行っちゃえ雷ー！」

「うん！」

元氣よく笑みを浮かべて答え、空間を割るような轟音と共に雷の姿が消える。そして雷は、主観的に時が止まったと感じるほどの速度でコンビナート中のアルカ・ノイズを全て殲滅すると、まだ投擲した後の格好のままのルシフの前に立った。

「エーテルの回転に攻撃が飲み込まれるなら、飲み込まれる前に攻撃を決めればいい」

ほぼ止まった時の中で、隙だらけな鳩尾に蹴りを叩きこむ。彼女の体が空中に吹き飛ばされ、これでどこにも逃げることは不可能となった。そもそも、『シンカ・雷帝顕現』を発動された時点で逃げ道はないのだが。雷はさらに跳躍し、空間に電磁の壁を作ることによって背後に回り、腰をひねって居合いの態勢をとった。

そして自身の背後に展開した電磁の壁を蹴って加速し、空間そのものをレールガンに見立てた居合切りでルシフの首を刈り取る。

『雷帝・武御雷』  
タケミカヅチ

雷が動きを止めたことで、彼女の主観的にほぼ止まっていた時間も正常に動き始める。

「HE……？」

そして、撃破されたことによりやく気付いたルシフは間抜けな声を上げた後、喜色満面の笑みを浮かべ、

「あA☆！これでやっと、ボクもオートスコアラーとしてTE……☆！」

切り口から膨大なエネルギーの稲妻が発生し、ルシフの体を分子レベルに電気分解した。彼女の体が跡形もなく消え去っていく。

戦いが終わり、ケラウノスの装甲やユニットが元に戻りはじめ、襟のユニットから勢いよく余剰分の稲妻が放出される。

ほっと一息をついて振り向くと、響と調、切歌が飛び掛かってきた。

「おかえり雷あ〜！」

「姉さんが帰って来てくれた！」

「姉ちゃんにまた会えたデスよお〜！」

「わわっ?!」

雷が飛び掛かってきた三人を何とか受け止めていると、背後にいた

クリスに拳骨を落とされてしまう。

「痛っ！」

「バツカ野郎！心配かけやがって」

それでも笑顔を浮かべている。彼女も帰ってきたことがうれしくて仕方がないのだ。

クリスの後を、ゆっくりとした足取りで翼とマリアがやってくる。

「あの切り口、私の教えた居合だろう。轟、見事にものにしたな。だが、それが見れたのも帰って来てくれたからだ。轟、よく帰ってきたな」

「全く、心配ばかりかけて……」

「ごめんなさい……」

翼は満足げに、マリアは怒りながら笑っていた。雷も笑いながら謝っている。そしてまた、響たちにもみくちやにされた。七人の笑い声が響く。

明るく、温かい夏の太陽が雷たちを照らした。

## キーピースの奪い合い

新たな躯体に記憶をインストールし、復活したキャロルは、普段通りに玉座に座していた。ふと、立ち上がると、体に激痛が走る。覚悟はしていたが、想像を絶する様な痛みだ。痛みを逃がすために背中を丸め、膝をつく。

「ぐううッ?!」

「マスター……」

「最後の予備躯体に不調ですか?」

「負荷を度外視した思い出の高速インストール……、さらに自分を殺した記憶が拒絶反応を起こしているようだ……」

自分を殺したはずなのに自分は生きている……。そんな思い出が自身の体を蝕んでいることを冷静に診断した。誰かに殺されたなら兎角、自分で殺しているのだから違和感も倍増だろう。

「いかなさいますか?」体を心配してか、レイアが口を開く。

「無論まかり通る……!歌女どもがそろっている……この瞬間を逃すわけにはいかぬのだ!」

大粒の汗を流しながら、キャロルが計画の続行を宣言した。

体の事もあるが、キャロルは焦っていた。それは、ルシフの役目が遂行されていないからである。

彼女の役目は、体内にある高速回転するエーテルに彼女自身が破壊されるほどのエネルギーをチャージさせ、撃破されるタイミングでシャトーにそのエネルギーを転送することであった。そして転送された膨大なエネルギーを使うことで、目的である世界解剖を即座に行うのだが、ここに完全なイレギュラーが起きてしまっていた。

それはエーテルの回転よりも速く撃破の一撃を喰らってしまったうえ、破壊ではなく分解されたことである。つまり、肝であるエーテルがエネルギーを捕らえきれず、そもそも彼女の中にあつたエーテルすらも分解されてしまえば意味がない。

よって、キャロルはプランをBに変更せざるを得ず、自らの体の事もあつて焦っているのだ。

〇〇〇

都内の病院の一室、そこに雷と響、未来の姿があつた。そこから響の気の抜けた声と、未来の彼女に世話を焼く声、二人よりも少し遅れて病室に入ってきた雷の楽しげな声が聞こえてきた。

「ふへえええ……、前が全然見えないよお、お先真つ暗だつて……」

「いいからほら、バンザイでして？バンザイ」

「ぶは……」

「どお？」

「いいなあ、私もしてもらいたいなく」患者衣を着慣れていたために一足先に着ていた雷が、未来に着させてもらっている響を見て指を銜え、じつとりとした目を向ける。

「雷は着慣れてるでしょ？」未来は楽しげに言った。

「くうっ……！病院通いだつた昔の自分が憎い！」ベッドの上で胡坐をかき、灰色の髪をワシワシと掻き毟った。

雷の性格は過去を背負う覚悟を決めたことで本来の性格へと戻っていた。最初はマリア達を除いた今までの雷しか知らなかつた響や未来たちはあまりの違いに戸惑っていたが、本質は変わっていないことにすぐ気づいたため、今まで通りの距離感の戻っている。

「もうただの検査入院なのに大騒ぎしすぎだよお」

「響のせいで大騒ぎしてるんでしょ」

「あれだけ攻撃喰らつといて検査入院で済むのもどうかと思う。まあやったの私なんだけど」

「暴走してたんだから仕方ないよ。それよりも戻つて来てくれたのが私はうれしいし！」

申し訳なきさそうに頭をかく雷に向けて、響がにっこりと笑つた。その笑顔を見て、雷の顔がかあつと赤くなる。未来はそんな二人のやり取りを微笑ましそうに見つめていた。

そんな時、響の携帯から着信音が聞こえてくる。それを手に取って画面を確認すると、『お父さん』と書かれていた。響は何も言わず、黙つて着信を切つた。

「検査、行かなきゃ」響は立ち上がる。

「響……」

「へいき……」

「へっちゃらじゃない！」 未来は立ち上がって声を張る。響が立ち止まった。

「未来がいる……雷がいる……みんなもいる。だからお父さんがいなくたってへっちゃら！」

「響」

響はドアのスイッチを押そうとしたが、背後から聞こえてきた雷の声動きを止めさせた。彼女の順番は響の次のため、念のため暇潰し用に持ってきていた青いブックカバー（二人からの誕生日プレゼント）付きの文庫本を膝に乗せ、少し躊躇いがちに言った。

「なに？雷」

「お父さんがいない私が言っつて、余計なお世話っつて思うかもしれないけれど、仲直りした方がいいと思う……」

「どうして……」

「だって響、携帯の履歴に『お父さん』っつてつけたままだもん……。それに、呼び捨てとかじゃなくて、お父さんっつて呼んでるし……」

「ッ」

相変わらず聡い雷に無意識に言っつていたことを突きつけられ、思わず息を呑んだ。そして黙っつてスイッチを押し、検査室に速足で向かっつて行つた。

そんな背中を未来は見つめ、雷は黙っつてしおりを挟んでいた文庫本のページを開く。未来の視線が雷のほうに向いた。どう言っつたらいいのかと躊躇っつていると、雷が本から視線を動かさず、先に口を開いた。

「もっつと別の言い方はないのかって、思っつたでしょ？」

「……」 未来は答えない。如何やら凶星だつたようだ。

「私ね、響と響のパパさんとの関係が、治つたらいいなっつて思っつてるんだよ。私に家族がないから、響にはいてほしいっつてもある」

「なら……」

「例えば、響がパパさんの事を何とも思っつていない、もしくは軽蔑して

るなら何も言わないよ。でも、響はパパさんの事を『お父さん』ってずっと呼んでるんだ。それにパパさんの方だってどうにかよりを戻したいって言うってたんでしょ？なら、元に戻って欲しいんだよ」

「私も……そうあって欲しいけど……」

未来が俯きながら言った。

雷は視線を本から未来に戻し、にっこりと笑いながら、  
「昔、お父さんが言ってたんだ。『男って言うのは子供が出来た時、何よりも大きな責任を負うんだ。それはどれだけ距離を置いても、どれだけ時間がたっても変わらない。子供を、家族を大切にし、守るって言う責任をね。呪いに見えるかもしれないけど、それは男にとって何よりも大きく、大切な祝福でもあるんだ』って、だから、響も、響のパパさんも、きつと大丈夫！」

「……そうだね！」  
雷は下手なお父さんの声マネをはさんで言った。未来も目を丸くするが、彼女は雷の隣に座り、同意する。文庫本のページをめくる音だけが病室にこだました。

○○○

歴史を感じる日本家屋、武家屋敷とも称せる館の前に、緒川が運転するマリアと翼を乗せた車が停車した。ミンミンゼミの鳴き声がうるさいほどに聞こえてくる。

「ここが？」

「風鳴八紘邸……。翼さんの生家です」

「十年ぶり……。まさか、こんな形で帰るとは思わなかったな……」

ここに来たのは、とある目的のためであった。時を少し遡る。

雷が病院に行く少し前の事。

「計測結果、出します」

「電力の優先供給地点になります」

モニターにオートスコアラーによって発電施設が破壊され、政府要所に絞られた電力供給図が表示される。

いくつか表示されるが、その中、海の中にひとときわ供給を受けている施設があった。



「こんなにあるデスカ?!」

「その中でも、ひときわ目立ってるのが……」

「深淵の竜宮……。異端技術に関連した、危険物や未解析品を封印した、絶対禁区……。秘匿レベルの高さから、俺にも詳細な情報が伏せられている。拠点中の拠点」

「うーん……。見事に釣れましたね」

「ここまでは予想通り……。ということか」

「ここを制するかどうかプランの分岐点！」

雷の計画にはプランが二つあった。そのプランを最終決定するピースがここ、深淵の竜宮にあるのだ。

キャロルを倒したときに聞いた計画を弦十郎が思い返していると、「ん？……そう言えば雷君！どうやって『あれ』がここにあると知ったツ?!」

弦十郎は納得しかけたが、途中でなぜ彼女が最重要機密事項を知っているのかを早口に問いただした。司令官である自分ですら中に何があるのかは細かく知らされていないのだ。それが何故、一隊員である雷が知っているのか？その答えは、すぐに分かった。

「それはあ、データをちよいちよいつて……」

「ハッキング……。したのか……」

国家最重要拠点のデータをハッキングして入手したのである。

世界を守るためとは言え、平然と犯罪行為を行った雷に対し、弦十郎は言ってくれば俺たちが何とかしたのに……。と額に手を当てた。

なお、藤堯は「すげえ……」と呟き、友里の視線に貫かれていた。

因みに雷が部屋にこもって書きなぐっていた計算式や文字の羅列の中に、このハッキング経路が隠れているのだが、彼らはまだ知らない。さらに言えば、彼女は痕跡を完全に抹消していたため、捕まえようにも証拠がない。実に悪質だ。

「ぬう……。ともかく、いや、ともかくでは済まないが、襲撃予測地点はもう一つある」地図の中の一点がマーキングされた。

「……って……!」

「気になる出来事があったので、調査部で独自に動いてみました。報

告によると、事故や事件による、神社や祠の損壊が頻発していき、いずれも明治政府帝都構想で靈的防衛を支えていた龍脈……レイラインのコントロールを担っていた、要所になります」

「なるほど、レイラインに沿って世界解剖を行うつもりなのか」立ち上がった雷が心底嫌そうな顔をしながら言った。それほどまでにネタ被りが嫌だったらしい。

「風鳴の屋敷には、要石がある。狙われる道理もあるという訳か……」  
「検査入院で響君と雷君が欠けるが、打って出る好機かもしれない……」

弦十郎はエルフナインに目配せする。彼女は頷き、走者たちのほうを向いて言った。

「キャロルの怨念を止めてください」

そこにいた全員が、分かっていると言うようにうなずいた。

## 剣を冠す者

翼、マリア、緒川の三人は、風鳴八紘の館、その門の前に立っていた。

弦十郎と通話していた緒川が通信を切る。

「分かりました……、クリスさん達も、まもなく深淵の竜宮に到着するそうです」

「こちらも伏魔殿に飲み込まれないように気を付けたいものだ」

翼がそう言い終えると同時に木で作られた両扉の門がゆつくりと開く。その様子は、まるで三人を巨大な怪物が飲み込まんとしているようだった。

翼が先陣を切る。玄関へと続く道を歩き始め、その途中で足を止めた。庭に鎮座する、巨大な石のほうを向く。

「要石……」

「あれが……」

「翼さん」

そして間を置かずに、着物を着た男。翼の父、八紘が黒服を引き連れてやって来た。緒川の言で二人は彼のほうを向く。

「お父様……」

「ご苦労だったな、慎次」八紘は翼に目も向けず、緒川にねぎらいの言葉を賭けた。声をかけられた緒川は黙ってうなずく。

「それにS. O. N. G. に編入された君の活躍も聞いている」次はマリアだ。

「は、はい……」

「アーネンエルベの神秘学部門より、アルカ・ノイズに関する報告書も届いている。後で、開示させよう」

「はい」

八紘が自分と顔を合わせないことに翼は俯く。八紘は結局翼に一声も掛けることなく、彼女に背を向けて自身の館へと戻っていった。

翼は思わず、

「ッ……お父様……!」

その声に八紘は脚を止めた。話を聞いてくれると思った翼は、続ける。

「沙汰もなく、申し訳ありませんでした……」

「……お前がいなくとも、風鳴の家に揺るぎはない……」

「ッ」

「務めを果たし次第、戦場に戻ればいいだろう」

その父親とは思えない言動にマリアの我慢の限界が来た。相手は政府の重鎮だということにもかかわらず、我慢ならんとマリアが啖呵を切る。

「待ちなさいッ！あなた翼のパパさんでしょ?! だったらもつと他にッ

……!」

「マリア！いいんだ……!」

「でもッ?!」

「いいんだ……!」

他でもない翼本人がいいといっているのだ、これ以上続けるわけにはいかない。八紘はもう話すことはないと言うように先ほどと変わらぬペースで屋敷の中に消えていった。

突然、庭の脇にある小さな池の前の大気が揺らめいた。その揺らめきに気づいた緒川は懐から即座に拳銃を取り出し、発砲する。が、放たれた弾丸は強力な風にかき消され、その風の中からオートスコアラが一体、風の錬金術を操るファラが姿を現した。

彼女はしとやかに、

「野暮ね。親子水入らずを邪魔するつもりなんてなかったのに」

「あの時のオートスコアラ?!」

緒川の他にも八紘の身を守る黒服も拳銃を構えた。効くことはいというのは分かっているが、主を守るためだ。

ファラはポーズをとるために頭上に挙げていた手を下ろし、

「レイラインの解放、やらせていただきますわ」

「やはり狙いは要石かッ!」

「ダンス・マカブル!」

フランス語で『死の舞踏』を意味する言葉を言いながら、周囲に召

喚ジエムをばら撒いた。それらは地面にぶつかって砕け、召喚陣を開。そこからアルカ・ノイズが姿を現す。

「ああ、付き合ってやるともッ！」

翼は不敵な笑みを浮かべ、ペンダントを握りしめてファアラの誘いに乗る。そして彼女のドレスコードである天羽々斬を身に纏うべく聖詠を歌った。

「Imyuteus Amenohabakiri Tron」

バグミュージックは『Beyond the BLADE』。蒼き剣のシンフォギアを身に纏い、剣の円舞をファアラと踊る前の前座としてアルカ・ノイズに一閃を走らせる。

同じくシンフォギア、アガートラムを身に纏ったマリアは、アームドギアの手甲から無数の短剣を取り出し、一気に投擲。アルカ・ノイズに突き立てた。次いで手に持つ短剣を蛇腹剣に変形させ、蛇のように波打つ刃で切り裂いていく。

「ここは私が！」

「うむ！務めを果たせ！」

そう言つて八紘は戦線を離脱する。彼に防人としてではなく、娘として声をかけられたかった翼は一瞬表情を暗くするが、それもつかの間、すぐに切り替えて倒すべき敵に刃先を向ける。

ファアラは足元に竜巻のように錬金術を展開し、

「さあ、捕まえてごらんなさい」

周囲を飛び回りながら翼を巻き込み引き倒そうと体当たりを仕掛けた。

地上にいる翼では攻撃が届かない。そこで彼女は罫を開けるために剣を大剣に変形させ、エネルギーの斬撃を斬り放った。

『蒼の一閃』

ファアラはその一撃をソードブレイカーの一振りでも相殺する。

が、そこは歴戦の防人である翼。一撃で済むとは端から思っていない彼女は着地後すぐに剣を上空に放り投げて自身も跳躍、さらに巨大な両刃の大剣へと変形させ、脚部のブースターを点火して落下の速度に上乘せしながら突き放つ。

「ふふ、何かしらあ？」

巨大で重く、鋭い一撃にファラはうろたえる様子すら見せず、携えたソードブレイカーの剣先でそつと振り来る大剣を受け止めた。すると閃光と共にソードブレイカーの刀身に紋様が走り、それと同時に受け止めた大剣が赤黒く変色していく。

「なにっ?!」

そして触れ合っている剣先から天羽々斬に亀裂が走り、砕け散った。

(剣がッ……砕かれていくッ……)

強大な光が周囲一帯を包み込んだ。

「うああッ?!」

「翼ッ!」

衝撃に弾き飛ばされ、翼は地面に叩きつけられた。

共に戦う彼女の身を案じ、マリアが声をかける。翼は地面に横たわっていた。

この状況を引き起こしたファラは何食わぬ顔でその場に立ち、

「私のソードブレイカーは、『剣』と定義される物であれば強度も硬度も問わずかみ砕く哲学兵装……。さ、いかがいたしますか？」

ソードブレイカー。その名の通り相手振るう刃を受け止め、峰に備え付けられた櫛のような部分を利用してこの原理で剣を手折る剣殺しの剣。ファラはその名を冠した哲学兵装を、己を文字通り『剣』としている翼に指し向けた。

「強化型シンフォギアでも敵わないのか……?!」

「ぜああああッ!」

「無駄よ……?」

ソードブレイカーを振るい、その剣筋に捉えられた瞬間マリアが投擲した短剣は残らず砕け散った。威力が衰えず、自身に迫る一撃をマリアは間一髪で回避するが、その射線上にあった要石に攻撃が直撃し、砕け散った。

「あら?アガートラムも剣と定義されてたかしらあ?」

「哲学兵装……。概念や呪いに干渉するゲツシユに近いのか……?」

「ごめんなさい? あなたの歌には興味が無いの」

フアラは旋風を巻き起こし、

「剣ちゃんに伝えてくれる? 目が覚めたら改めてあなたの歌を聞きに伺いますって」

そう言い残し、目の前に吹き荒れる旋風は周囲に霧散した。そこにはフアラの姿はない。

雨が降り始めた。

○○○

本部潜水艦は、深淵の竜宮に向かうべく、海中を潜航していた。

緒川から通信が入る。

『要石の防衛に失敗しました。申し訳ありません……』

「二点を同時に責められるとは……」

『二点? まさか……!』

「ああ、深淵の竜宮にも侵入者だ! セキュリティが奴らを補足している」

カメラには、監視システムがとらえた先を歩くレイアと、復活したキャロルが嚴重な警備を難なく突破しているところが映し出されていた。

「キャロル……」

「ツ閻魔様に土下座して蘇ったのか?」

「先に行かれたのは小癩だが、ヤントラ・サルヴァスパを先に取られるわけにはいくまい……。クリス君は、調君と切歌君と、一緒に言ってくれ」

「応よッ!」

弦十郎の指令にクリスが威勢よく答える。ここからはスピード勝負。ここをどう制するかによって、カウンター計画の作戦行動と難易度に変化するのだ。

モニターに映るレイアが、監視カメラをコインで撃ち抜いた。

## 計画の分水嶺

本部潜水艦から発艦した小型潜水艇に乗り、クリスと切歌、調の三人は深淵の竜宮に乗り込んでいた。彼女たちの責任は重大だ。何故なら、ここにある聖遺物、ヤントラ・サルヴァスパをどちらが制するか、そして、ここに居るある人物をどうするかによってキャロルの計画を阻止するための、雷のカウンター計画の難易度と精度が変わってくるのだ。

深淵の竜宮のピットに潜水艇を止め、

「ここが深淵の竜宮？」

「だだっ広いデエス」

「ピクニックじゃねえんだ。ここがアタシ等の計画の分水嶺だ、行くぞ」

「は、はいデス！」

年長のクリスを先頭に、その後ろを調と切歌がついていく。

彼女たちが行動している間に、それをサポートする大人たちが情報をできる限り集めていた。

「施設構造データ、取得しました」

「侵入者の搜索急げ！」

「キャロルの目的は世界の解剖。それを阻止するには、ここに納められた聖遺物、ヤントラ・サルヴァスパを先に手に入れるしかありません」

弦十郎は雷の提示したカウンター計画を思い浮かべ、唸った。

それと同時に、風鳴八紘亭の畳の上に敷いた布団で眠っていた翼が、軽く唸ってから目を覚ました。そして場所を確認するように周囲を見渡し、ゆっくりと起き上がる。

「ハア……、そうか……私はフアラと戦って……」

彼女の中に歌女ではなく、防人としての自分を選択した時の光景がフラッシュバックする。

（身に余る夢を捨ててなお、私では届かないのか……）

「大丈夫？翼」



内心打ちひしがれていると、障子の向こうからマリアが話しかけてきた。日の光の関係上、翼には影が見えている。

優しい彼女の事だ、翼の心境を察して障子を開けないでいるのだろう。翼は出来る限りマリアに心配をかけないように気丈に振舞い、

「すまない。不覚をとった……」

「動けるなら来てほしい。翼のパパさんが呼んでいるわ」

「……わかった」

マリアはそう言うが、お父様は私を娘と見てくれないのだ。と内心思いながら、返事をし、服を着替えた。

呼び出されたのは八紘の書斎であった。彼の机の上に、無数の書類が山のように置かれている。二人はその内の一つづつ手に取って開く。

「これは……?」

「アルカ・ノイズの攻撃によって生じる赤い粒子を、アーネンエルベに調査依頼していました。これはその報告書になります」緒川の説明を聞きいた翼が、

「アーネンエルベ……シンフォギアの開発にかかわりの深い、独国政府の研究機関……」

「報告によると、赤い物質は『プリマ・マテリア』。万能の溶媒、アルカ・ヘストによって分解・還元された、物質の根源要素らしい」

八紘の言葉に引っかかるところを覚えたマリアは問うた。

「物質の根源? 分解による?」

「計画を提示されたときに雷さんも言っていました。錬金術とは分解と解析、そこからの構築によって成り立つ、異端技術の理論体系とあります」

「キャロルは世界を分解した後、何を構築しようとしているのかしら?」

雷の計画はキャロルの世界解剖、即ち分解を阻止するための物であって、それ以降の構築の事は一切触れられていない。マリアはその先の『構築』が気になっていた。

「翼」

「はい……」

ここに居る間声をかけられることはないだろうと思っていた翼だったが、八紘の自身を呼ぶ声に素早く、しかし自信なさげに返答し、顔を上げた。

「傷の具合は？」

「あ……はい……！痛みは殺せます」

「ならばここを発ち、然るべき施設にて、これらの情報の解析を進める  
といい。お前が守るべき要石は、もう無いのだ」

「分かりました」

はじめは父に、娘として声をかけられたのだと思っていた翼だったが、彼が政府の役人として国を守る防人である自分に掛けられた言葉であると知り、内心落ち込んでいるのをおくびにも出さずに答えた。  
が、そこにマリアが割って入る。

「それを合理的というのかもしれないけど、傷ついた自分の娘にかけ  
る言葉にしては、冷たすぎるんじゃないかしら？」

「いいんだマリア」

「翼」

しばしの静寂が部屋に満ち、「いいんだ……」と諦めるように翼は言葉  
をこぼす。

話が終わって外に出てみると、すでに日は傾き、ヒグラシが鳴いて  
いる。

マリアは肩を怒らせ、廊下を歩いて行く。機嫌が悪いのは、八紘の  
言葉に戦っている娘に心配の一つもないということについてだった。  
怪我の事について聞いてはいるが、それは『娘』ではなく『防人』の  
翼に対してだ。問題外である。

「あれは何だ?!安全保障のスペシャリストかもしれないが、家族のつ  
ながりを蔑ろにしてッ！」

「すまない。だがあれが、私達の在り方なのだ」

そう言って廊下を歩いて行くと、とある一室のふすまの前に到着し  
た。

「ここが、子供時分の私の部屋だ。話の続きは中でしよう」

「ッ?!敵襲?!また人形が?!」マリアが咄嗟に構える。

「いや、あ、その……私の不徳だ……」

翼の部屋は、今も昔も何者かに内部を荒らされたと勘繰るほどの散らかり具合らしい。前にもこんなことがあったなと思いつつ同時に、流石に恥辱を覚えて翼は頬を赤く染める。

だが、そんな汚部屋製造機である翼にすら引つ掛かるところがある。

「だからって、十年間そのままにしておくなんて……。幼いころにはこの部屋で、お父様に流行歌を聞かせた思い出があるのに……」

それは、かつての汚れた状態のまま、手付かずであることだった。

マリアは翼の部屋の中心に立ち、

「それにしても、この部屋は……昔からの?」

「私が片づけられない女って事?!」いそいそと衣服を畳んでしまっていた手を止め、マリアのほうを向く。実際その通りであるのだが。

「そうじゃない。パパさんの事だ」マリアの言葉に翼は目を瞑り、

「私のおじい様……現当主の風鳴不動は、老齡の域に差し掛かると、跡継ぎを考えるようになった。候補者は、嫡男である父、八紘と、その弟の弦十郎叔父様」

「風鳴指令か」

「だが、おじい様に任命されたのは、お父様や叔父様を差し置いて、生まれただけの私だった」

「翼を?」

「理由は聞いていない。だが今日まで生きていると、うかがい知るところもある。どうやら私には、お父様の血が流れていないらしい……」

「何?!」

マリアも子供ではない。その言葉が意味することを、彼女は知っている。だが、理性が一瞬、それを理解することを拒んだ。

「風鳴の血を濃く、絶やさぬよう、おじい様がお母様の腹より産ませたのが、私だ」

「風鳴不動は……人の道を外れたかッ……!」

翼はかつて、八紘に自分の娘ではない事、汚れた風鳴の道具でしか

ないことを言われた日の事を思い返す。その衝撃は、今でも鮮明に思い返すことのできるほどだ。

「以来私は、お父様に少しでも受け入れられたくて、この身を人ではなく、道具として、剣として研鑽してきたのだ」

翼は自身の手のひらを虚しい瞳で見つめ、

「なのに、この体たらくでは……、ますますもって鬼子と疎まれてしま  
うな」

○○○

ところ変わって深淵の竜宮のデータを閲覧してキャロルが欲し、自分たちも手に入れようとしているヤントラ・サルヴァスパがどこにあるのかを探していた。

「竜宮の管理システムと、リンク完了しました」

「……止めてください！」

高速でスクロールされるデータの中から、ヤントラ・サルヴァスパのデータをエルフナインは見つけ出した。

S・O・N・G・メンバーは優秀だ。リンクが確立されてすぐに管理区域を特定している。

「ここからはスピード勝負だ！急いでクリス君たちを急行させるんだ  
！」

「ここが勝負の分かれ目だ。」

## 翼は風を鳴らして夢へ飛ぶ

幼少期に使っていた翼の部屋にいた翼とマリアだったが、外から聞こえてきた破壊音を耳にし、音の元凶のもとに駆け出していく。そこには、屋根の一部が破壊され、そこにはオートスコアラー・ファアラがソードブレイカーを携えて悠然と立っていた。

しかし奇妙な点があった。少なくとも、ここを襲撃する目的は要石の破壊。そして、それはすでになされている。にもかかわらず、ファアラがこうしてやって来たのかが分からなかった。

故に翼が問いたです。

「要石が破壊した今、貴様に何の目的があるッ?!」

「ふふふ、私は歌が聞きたいだけ……」

「Seilien Coffin Airgetl—Lamh Tro  
n」

返ってきた答えは全く答えとして成立していない。聞くだけ無駄と判断したマリアは、即座に自身のアガートラムの起動聖詠を歌う。

翼も共にギアを纏い、二人がかりでファアラに斬ってかかった。マリアが短剣を投擲するがファアラは跳躍して避け、二人は屋根を足場にして彼女を追う。

風の錬金術によって構築された竜巻がマリア達の間割って入り、連携を分断した。が、その程度で怯むような彼女たちではない。マリアはガントレットから短剣を抜刀し、引き抜くと同時に蛇腹剣に変形させて斬りかかった。

### 『EMPRESS†REBELLION』

しかし剣である以上はファアラのソードブレイカーの餌食となってしまう。ファアラは風を纏わせながら振り下ろし、ソードブレイカーの哲学を纏わせた風で蛇腹剣を粉碎した。しかもその程度では勢いは止まらず、マリアもろとも吹き飛ばしてしまう。

「うあああッ?!」

「マリアッ?!……くッ、この身は剣、切り開くまでッ!」

自分までやられるわけにはいかぬと刀を構えなおし、駆け出す。が、ファアは自然体を崩さずに切っ先を翼に向け、

「その身が剣であるなら、哲学が凌辱しましょう」

そのまま振り上げる。その振り上げによって放たれた哲学の奔流が翼を飲み込む。剣を壊すという哲学によって、携えた刀だけでなくギアも、そして本来ではありえない、翼の肉体そのものまでもが砕かれ始める。翼自身が自らの肉体を『剣』と定義してしまっているため、通常以上のダメージを負っているのだ。

「砕かれてしまう……剣と鍛えた、この身も……誇りも……ああああっ！」

哲学の奔流を受け止めきれず、翼は、いや、翼という名の剣は吹き飛ばされてしまった。

同時刻、本部モニターが、深淵の竜宮とリンクしたカメラ映像を映し出している。そこには、こちらも狙っている聖遺物、ヤントラ・サルヴァスパがすでにキャロルの手に落ちたことを証明する映像であった。

しかし、まだキャロルたちは撤退していない。であるならば、まだこのキーピースを奪い返すことも出来るはずだ。

物は聞かされていても外見を知らない弦十郎が、

「あれは……」

「ヤントラ・サルヴァスパです」

「クリスちゃん達が現着！」

すでにギアを纏ったクリス、調、切歌の三人がキャロルと、彼女の護衛であるレイアの間立ちに立ちはだかった。

○○○

己が身を剣と定義しているがゆえに通常以上のダメージを受けている翼が、地面に這いつくばる。痛みによる体の震えを感じながら、「夢に破れ……それでもすがった誇りで戦ってみたものの……くっ……どこまで無力なのだ、私は……」

「翼！」

「翼さん！」

ともに歌うマリアの声も、後ろから支えてきた緒川の声も翼には届かない。だが、そんな時、一人の男の声が夜の風鳴亭にこだました。

「翼！」

「っ……お父様……」

その声の主は翼の父、八紘の物であった。オートスコアラールと交戦しているという命を懸けた状況の中、彼は怯えも見せず、厳格な立ち姿で翼に声をかけた。

「歌え翼ッ！」

「……ですが私では、風鳴の道具にも、剣にも……」

「ならなくていいッ！」

「お父様……？」

未だに自らを道具としてあろうとする馬鹿娘に、八紘は他の誰でもない、彼女の父親として発破をかける。

「夢を見続けることを恐れるなッ！」

「私の……夢……」

「そうだ！翼の部屋、十年間そのまんまなんかじゃない！散らかっていても、塵一つなかったッ！お前との思い出を無くさないよう、そのままに保たれていたのがあの部屋だッ！娘を疎んだ父親のすることではないッ！いい加減に気付け馬鹿娘ッ！」

あの部屋の光景が翼の中によみがえる。

確かに、あの部屋にはマイクの上やCDデッキ、ランドセルに机のプリントにまで塵一つなかった。父親の思い。それを翼は心に受け、自然と涙がこぼれ出る。

「まさかお父様は……私が夢をわずかでも追いかけられるよう……風鳴の家より遠ざけてきた……？」

八紘は目を閉じたまま、何も答えない。

「それが、お父様の望みならば……私はもう一度、夢を見てもいいのですかッ?!」

声は打ち震え、涙は目尻よりあふれ出す。

親の心、子知らず。ようやく自らの真意に気づいた馬鹿娘の問いに、父親は何も言わず、頷きでもって答えた。

翼は父親に背中を押され、防人ではなく娘として立ち上がる。

「ならば聞いてください！ツ！イグナイトモジュール……抜剣ツ！」

スイッチを押してモジュールを起動し、魔剣の力を身に受けてシンフォギアが変質。漆黒へと変化し、鋭角的なシルエットを形作る。そして通常よりも長大になった刀を抜刀し、突撃した。

「味見させていただきます」

ソードブレイカーを差し向けるフアラに向かって跳躍し、背中に沿うほどに振り上げた刀を両手で勢いよく振り下ろした。

フアラに回避されてしまうも、返しの刃で追撃をかける。

刀が中央から割れ、そこからエネルギーの刃が放たれる。

『蒼ノ一閃』

その一刀はソードブレイカーによって流されてしまうが、夢を追いかけると決めた翼は終わらない。さらにエネルギーを巨大化させ、再び構えた。

同じくして、クリス達も交戦状態に突入していた。

「こうなりややむなしだ！プランBに移行することも覚悟しろよツ！」

「分かってる」

「了解デース！」

クリスの展開した小型ミサイルがキャロルを捉えるが、彼女はエーテルによる全天周防御陣を展開してコースをそらす。

きりしらコンビは単体に相手に秀でた切歌が鎌を振り回してレイアを、調が『非常型式・禁月輪』を用いてアルカ・ノイズを刈りつくす。

ついで調は空中で禁月輪を解除し、バインダーから無数の小型鋸を放った。それらはクリスのミサイルと同じく弾かれてしまう。が、その瞬間、キャロルは拒絶反応から錬金陣を解除してしまう。襲い掛かってきたうちの一発がヤントラ・サルヴァspaを彼女の手から弾き飛ばし、もう一発が空中で真つ二つに鋸によって斬り裂かれた。

「ヤントラ・サルヴァspaがツ?!」

「タダでやるよか万倍マシだあツ！」



『MEGA DEATH QUARTET』

「地味に窮地！」

ギアそのものを砲台と化し、大小無数のミサイルで好機となった今を見逃さずに撃ち尽くす。しかし護衛を務めるレイアがそうはさせまいとコインをマシンガンのように連射して撃ち落としていくが、ミサイルのほうが多い。誘爆も含めてかなりの数を迎撃したものの、最後の一つ。しかも、最も巨大なミサイルを打ち漏らしてしまった。

滅多に焦りを見せないレイアが叫ぶ。

「マスターッ！」

キャロルの眼前にミサイルが迫る。

翼は天高く跳躍し、虚空からエネルギーの刃を雨のように降り注がせる。

『千ノ落涙』

「いくら出力を増したところで！」

放つ技は全てソードブレイカーの一振りによって碎かれてしまう。剣と定義されている以上かみ砕かれるのだから、天羽々斬を纏う翼とは絶望的に相性が悪い。

ファラはもう一振りのソードブレイカーを取り出し、

「その存在が剣である以上、私には毛ほどの傷すら負わせることは敵わない」

両のソードブレイカーを振るい、二つの竜巻を発生させる。そしてその二つの間から、剣を翼に向けたファラが突撃してきた。

自らの天敵から避けることもせず、父親からの言葉を胸に受けて真っ向から迎え撃つ。

「剣にあらずッ！」

脚部ブレードを展開し、逆さになって回転した。ソードブレイカーと脚部ブレードがぶつかり合い、砕けたのは、ソードブレイカーであった。

折れたソードブレイカーを見つめ、

「あり得ない……。哲学の牙が何故?!」

「貴様はこれを剣と呼ぶのか?!否っ!これは、夢に向かってはばたく『翼』ッ!」

両足の『翼』に炎を纏わせ、『翼』と定義した二刀を両手に携え、夢に向かって飛翔する。

「貴様の哲学にッ!翼は折れぬと心得よおッ!」

自分だけではない、父親も、支えてくれる大人も、友も『剣』ではなく『翼』と定義するのだ。どこに恐れを抱く必要があるか?ありはしない。

翼は体ごと回転させ、炎の翼となってファラに向かって斬りかかる。彼女はソードブレイカーで受け止めようとするが、すでにこれは『翼』なのだ。止められる道理は有りはしない。彼女の体ごと、真つ二つに両断した。

### 『羅刹・零ノ型』

夜空にファラの高笑いが響く。

「お前ら覚悟しろ……。プランB……。それもルート2だ……」

「薄々覚悟してはいたデスけど……」

クリスの放ったミサイルが爆発せずに止まっている光景を見て、彼女達は思わずこぼした。ミサイルの放つ煙の中から、聞き覚えのある下卑た男の笑い声が聞こえてくる。

その男はネフィリムの左腕でイチイバルのミサイルを受け止め、喰らう。

「久方ぶりの聖遺物……。この味は甘くそろおけて癖にならううう

←

「……」

クリス達が来るならもう少し遅くに来いよと思っていると、ミサイルを全て吸収しきったウエルが前髪を払い、

「反応が薄いねえ? 真実の人が来たというのにい? このお……ドクター……ウエルがああああ!」

目を点にしているキャロルを背後に、謎のポーズを決めて自らの名を名乗った。

## 虫籠の中で蝶は舞う

深淵の竜宮内にある様々な文字の羅列や図形、計算式が部屋一面に書きなぐられたとある一室。そこに、一人の男の姿があった。

彼の名はウエル。かつてフロンティア事変を引き起こした犯罪者であり、その身に聖遺物、ネフィリムを宿した人でありながら聖遺物……という存在である。

そんな彼の牢獄をクリスが引き起こした爆発の衝撃波が襲う。ウエルは一切うろたえることなく、穏やかな声色で、

「花火が上がった……。クククツ、騒乱が近い……。ならば、求められるのは……。英雄だッ！」

彼の名はウエル。人であり聖遺物。そして、英雄になろうとする者。

そんな彼の部屋をふさいでいた牢が二度目の爆発で吹き飛ばされ、丁度飛んできていたミサイルをネフィリムの左腕で受け止め、吸収した。

ウエルは腰に手を当ててふんぞり返り、

「へへーん。旧世代のリンカーぶっこんで、騙し騙しのギア運用という訳ね」

「くツ……！」

「うえく……！」

クリスはプランがB、しかも最悪のルート2を視野に入れなければならぬことに苛立ちを覚え、実行担当になるかもしれないことと、普通にウエルに苦手意識を持つ調と切歌は湿り気のある視線を向けた。

そんな視線を向けられていることを気にせず、ウエルは言葉を垂れ流し続ける。

「優しさでできたリンカーは、僕が作った物だけえく！そんなので戦わされてるなんてエ……。不憫すぎて笑いが止まらあアアん！」

「不憫の一等賞が何を言うデス！」

「アタシの一発を止めてくれたなア……。！」

切歌がウエルの物言いに反論するが、クリスの様子がおかしいことに気づいた。

(後輩の前でかかされた恥は、百万倍にして返してくれるッ!)

彼女は焦っていた。何時ものクリスであれば、冷静に調と切歌に指示を出し、自身も動くということが出来たはずだ。だが、彼女は背後にいる後輩に良い格好をしなければならぬという一種の強迫観念に駆られており、まともな判断がつかなくなっているのだ。

さらに相手がウエルであることが、彼女の頭の中から計画の事を喪失させている。錬金術で受け止められるなら兎角、最も大嫌いな人間に受け止められてしまった故に頭に血が上り、冷静さを欠かせている。

「待つデスよ!」

「ドクターを傷つけるのは……」

「何言ってやがるッ?!」クリスが怒鳴る。

「だって、リンカーを作れるのは……」

「それに、今ならルート1にまで軌道修正できるかも……」

調と切歌の二人が弱気になったのを好機と見たのか、ウエルがいつもの英雄らしくない増長を見せる。

「そうとも! 僕に何かあったら、リンカーは永遠に失われてしまうぞお?!」

「ぽつと出が、話を勝手に進めるな」

いきなり現れたウエルに命を助けられたにもかかわらず、礼も言わずにノイズ召喚ジェムを地面にばらまいた。ジェムが砕け、中の赤いコアから召喚陣が展開、アルカ・ノイズが姿を現す。

「二人が戦えなくとも、あたしがあッ!」

両腕のアームドギアを変形させたガトリング砲で無数のアルカ・ノイズを迎え撃つ。放たれる弾丸の射線上にキャロルがいるのだが、彼女は防御陣を展開。ウエルはさっきまでの尊大な態度をかなぐり捨て、情けなくも素早い身のこなしでキャロルの展開した陣の後ろに身を隠した。

レイアは機械的に、

「その男の識別不能。マスター、指示をお願いします」

「敵でも味方でもない……英雄だッ！」

「だったら英雄様に……さつきよりもでかいのまとめてくれてやるッ！」

先ほど放った技は数で圧倒するタイプであつたが、今回は数こそ少ないものの威力は絶大だ。二本の超大型ミサイルを背部から展開し、キャロルたちに向ける。

が、ウエルが怒鳴った。

「このおつちよこちよい！」

「っ」

「何のつもりかは知らないが、そんなの使えば、施設も！僕も！海の藻屑だぞお！……なんてね？」

体だけをキャロルのほうに戻し、軽くおどけてみせる。

キャロルは全く反応を見せず、

「レイア、この罫を開けて見せろ」

「即時、遂行」

レイアは跳躍し、超大型ミサイルを格納したクリスと再度交戦を開始する。彼女はクリスの銃撃を前転で回避し、ターゲットを散らしていく。

（後輩なんかには任せてられるかア！ここはセンパイの……あたしがあッ！）

レイアの動きは攪乱に挑発も兼ねていた。乱射による硝煙で煙幕が出来上がり、頭に血が上ったことによる体の鈍りから照準が徐々にズレてきている。

「ばら撒きではとらえられない！」

「落ち着くデスよお！」

二人の声は全くクリスの耳に届かない。それどころか、彼女の放つガトリングの砲門が調のほうを向いた。が、それを切歌が許すはずがない。ノータイムで鎌を振るい、調に向きかけていたガトリングを上につけ上げる。

思わずクリスがトリガーから指を外した。

切歌は鎌でガトリングを持ち上げながら、

「もろともに、巻き込むつもりデスか……!」

「ツ……!……あいつらはツ?!どこに消えたツ?!」

周囲には硝煙と、アルカ・ノイズが撃破されたことを示す赤いプリマ・マテリアしか漂っていない。そんな中、調が一つの大穴を見つけた。

「きつと、ここから……」

「逃がしちまったのか……」

「ごめんなさい……ウエルに何かあれば、姉さんの計画がルート2で確定しちゃうし、リンカーが作れなくなると思って……」

「でも、もう惑わされないデス!あたしたち三人が力を合わせれば今度こそ……!」

気合を入れ直し、次は失敗しないと意気込んで切歌はクリスに近づくが、彼女は右手で切歌を突っぱねた。

「後輩の力なんてあてにしない!お手手つないで仲良しごっこじゃねえんだ。アタシ一人でやって見せるツ!」

クリスの必死の形相に二人は何も言うことが出来ない。

(一人でやり遂げなければ、センパイとして後輩に示しがつかねえんだよ……!)

戦闘管制を行っている本部潜水艦ブリッジでも、キャロル一行の動向を消失していた。

「侵入者ロスト……。大きな動きがない限り、ここからでは捕捉できません……」

「これでほぼ確定してしまった……か」弦十郎は計画のことを気にしている。

「ドクターウエル。雷ちゃんのおかげでいるのは分かっていたとはいえ、このタイミングで出てくるなんて……」

「ネフィリムの力が健在というだけでよかったと思うべきか、悪かったと思うべきか……」

「追跡の再開、急げ!」

落ちていく士気を引き上げるため、弦十郎が厳格に指示を飛ばし

た。そんな中、エルフナインが真つ二つに切断されたヤントラ・サルヴァスパをモニター越しに見つめている。

「ヤントラ・サルヴァスパが失われたことで、チフォージュ・シャトールの完成を阻止できました。なのに、キャロルはまだ……」

エルフナインはキャロルに情報が筒抜けと言うことを鑑みて、計画の詳細をまったく知らされていない。故に、ヤントラ・サルヴァスパが破壊されたとしても、賭けにこそなるがチフォージュ・シャトールを完成させることが可能であることを知らないのだ。

エルフナインは、キャロルの計画を知った時のことを思い出していた。自分たちの父、イザークは世界を解剖することなど望んでいないのだと訴えかけた。だが、キャロルは断固として聞き入れない。だから贗作躯体の癖に正規躯体である自分にたてついたエルフナインを、キャロルはシャトール建造の任から解任したのだ。

「つ……オレは、堕ちていたのか……?」

「またしても拒絶反応です。撤退の途中で意識を……」

夢の途中、キャロルは目を覚ました。気絶している間に抱きかかえてくれていたレイアから離れ、一人で立ち上がる。

マスターであるキャロルを心配するレイアは続ける。

「高レベルフォニックゲイナーが複数揃う僥倖に、はやるのは理解できませんが……」

「杞憂だ」

キャロルは手を見つめ、閉じたり開いたりしながら体の状態を確認する。そして、背後に立つウエルに声をかけた。

「……知っているぞ、ドクターウエル。フロンティア事変関係者の一人、そんなお前が何故ここに……」

「わが身可愛さの連中が、フロンティア事変も、僕の活躍も、寄つてたかって無かったことにしてくれたあツ！人権も存在も失った僕は、『人』ではなく『モノ』。回収されたネフィリムの一部として、放り込まれていたのさー！」

そう言つて融合した左腕を人型から活動状態にし、また人型に戻した。キャロルは左腕に表情を変えることなく少くない興味を見せ

る。

「その左腕が……」

「イチイバルの砲撃も、腕の力で受け止めたんじゃない。接触の一瞬にネフィリムが喰らって同化！体の一部として推進力を制御したまでの事！」

つまり受け止めているように見せていたのは完全なパフォーマンスということになる。そんな彼の説明を聞き、頭はいいかもしれないが大馬鹿だ。と断じたキャロルは、

「面白い男だ、よし、付いてこい」

「ここから僕を連れ出すつもりかあい？だったら騒乱の只中に案内してくれえ」

「騒乱の只中？」

ウエルは大袈裟なポーズをとりながら、

「英雄の立つところだア……ん？」

そういうウエルにキャロルは黙って左手を差し出した。ウエルは白衣で左手を拭き、その手を握る。

「ネフィリムの左腕、その力の詳細は、追っ手をまきつつ聞かせてもらおう」

「脱失を急がなくてもいいのかい？」

「奴らの把握済み、時間稼ぎなぞ造作もない」

キャロルは慢心からか鼻を鳴らしてにたりと笑う。

彼女の考えが、すでに読まれ切っていることも知らずに。すでに踊るための舞台と楽曲の決定権が、その手のひらの上にないことも分らずに……。



## 既に制された毒

深淵の竜宮内にある通信システムを使い、クリス達は本部ブリッジにいる弦十郎に次の行動を聞いたところ、彼から大目玉を喰らっていた。

弦十郎の怒鳴り声が艦橋に響き、思わず藤堯と友里が肩をすくめる。

『力を使うなど言ってるんじゃないッ！その使い方を考えろと言っているんだッ！』

「新しくなったシンフォギアは、キャロルの錬金術に対抗する力だッ！使いどころは今を置いて他にねえッ！眠てえぞおっさんッ！」

クリスのセンパイとしての見栄。敵の首魁たるキャロルが目の前にいるという好機。この二つが彼女から冷静さを失わせていた。当然、雷の計画のことなぞすっかり忘却されている。

が、それ以上に、

『ここが深海の施設だと忘れるなど言っているッ！』

そう、深海の竜宮は読んで字のごとく深海にあるのだ。他はともかく、ミサイルや弾丸と言った、壁を破壊、及び貫通できる兵装を持つイチイバルを、その高い爆発力をさらに高めるイグナイトでの運用など出来るはずもない。もしできたとしたらそれは普段のクリスであればの話。今のクリスの心理状態では火の元に爆弾を置いておくようなものだ。危険きわまる。

それを当然クリスも分かっていた。故に彼女は厚底の靴で壁を蹴る。

「正論で超常と渡り合えるかッ?！」

『念のため、各ブロックの隔壁や、パージスイッチの確認をお願い』言っても聞かないクリスの注文で、友里は隔壁やスイッチの場所が表されたマップデータを転送する。

あまりに膨大なその数に、切歌が泣きごとをこぼすが、

「ね、姉ちゃんじゃないんデスから、こんなにいっぺんに覚えられないデスよお」

「じゃあ切ちゃん。覚えるのは二人で半分こにしよう？」

調がすぐさまサポートした。

二人が頑張つてマップを覚えているそんな時、藤堯の焦った声が通信で聞こえてきた。

『セキユリテイシステムに侵入者の痕跡を発見！』

「そういう知らせを待っていたッ！」

クリスが歓喜に叫ぶ。その目からは完全に冷静さが失われていた。

○○○

フアラを見事撃破した翼たちは、彼女によつて破壊された要石の前にいた。そこには、

「これは……先ほどの！」

「ええ、翼さんが退けた、オートスコアラーの残骸です」

四肢をもがれ、機能停止したフアラが横たわっていた。あまりに精巧に作られているからか、人形、しかも人の命を奪っていると分かっていながらも、痛々しさを感じさせる。

「この状態で、稼働するの？」

マリアが疑問を投げかけたたん、ぎよろりと撃破されたはずのフアラの瞳が動き、

「いつか、しよぼいだなんて言つて、ごめんなさい。剣ちゃんの歌、本当に素晴らしかったわ……」

「私の……歌……」

「アハハハハハハ！まるで体がバツサリ二つになるくらい、素晴らしく呪われた旋律だったわ！アハハハハハ！」

気がふれたように―オートスコアラ―にそう言った概念があるのかは不明だが―フアラが笑う。翼はマリアと顔を見合わせた後、再びフアラを見下ろして、

「呪われた旋律は以前に、キャロルも言っていた……」

「答えてもらおうわ！」

『呪われた旋律』とは何なのか？それを聞き出すべく、マリアは問い詰める。

深淵の竜宮内では、発見したキャロルの反応を手掛かりに、クリス

達が走っていた。焦っているクリスが後輩二人を置いて先を急ぐ。

切歌は息を切らしながら叫んだ。

「何処まで行けばいいデスカ?!……お?」

ピコンツとメールが各通信機に送信される音が聞こえてきた。クリス達は、各々メールを走りながら転ばないように確認する。そこには、キャロル陣営と向かい合う最短ルートが表示されていた。

調が喜びの声を上げる。

「このルート通りに進めば!」

「ああ、連中とかち合えるってことだあ!」

クリスが勇んで速度を上げる。

これは、既にエルフナインから情報を収集していると掴んでいると知っていた弦十郎たちが、ブリτζジに表示されているマップとは別に、友里の画面に個別表示されている情報から割り出したものだ。ブリτζジのマップに映っている偽の映像は、藤堯がリアルタイムで細工を施している。エルフナインも自身が情報を送っていることを知っているため、ワザと大画面のマップを見続けているのだ。彼らの間で交わされる会話も、当然演技である。

すでにキャロルは、虫かごの中で飛ぶしかないのだ。

○○○

深夜の病院。

響は同じ病室で眠っている雷を起こさないように、未来に電話を繋いでいた。

「ごめんね、こんな夜中に。色々考えてたら、眠れなくなっちゃって……」

『ううん。気にしないで』

「ありがとう。未来が聞いてくれたことと、雷が私の知らない本音を教えてくれたおかげで、もう一度だけ、お父さんと話してみる決心がついた」

『うん』

未来の優しい返事が返ってくる。

それでも、響の不安はぬぐえない。

「だけどね、ほんとはまだ少し怖い。どうなるのか不安でしょうがないよ。こんな時、雷の頭と心を切り離せるところが羨ましく感じちゃう……」美点であり汚点でもある雷の科学者と言う種族的な性質を響は少しだけ欲していた。何せ、怖いと思っただけでも、頭ではどうすればいいのか考えることが出来るのだから。

未来は、そんな響をたしなめるように、

「響は響でしょ？平気へっちゃら」

「うえ？」

『響の口癖だよ？』

「わっはは……。いつから口癖になったのかは忘れたけど、どんな辛いことがあっても何とかかなりそうになる魔法の言葉なんだ」

『ホント単純なんだから』

「前向きだと言ってくれたまえよ」

未来の揶揄いに響はかわいらしく反論する。響の胸にあつた不安は、ほとんど拭い去られているようだ。深夜、雷が寝ているとはいえ、彼女の調子はいつも通りに戻りつつある。

電話越しに二人の笑い声がこだまする。

さんざん笑った響はベッドから立ち上がり、

「おつかしいのお」

『元氣出たね！魔法の言葉に感謝しないと』

「うん！そうだね！」

窓に反射する自分の顔を見て、響は気合を入れた。

○○○

八紘亭の要石前で無残に転がるファラはその口を動かしていた。

「知らず毒は仕込まれて、知るころには手の施しようがないまま、確実な死をもたらしますわ」

すでに毒は発見され、血清として使われていることも知らず、ファラは自分たちの優位性は崩れることが無いとこう説を垂れ続ける。

同じくキャロルも偉そうぶって悠然と語っている。弦十郎たちは驚き、驚愕してするように見えるが、彼らの内心は、エルフナインを含めて「だ……駄目だ。まだ笑うな……。こらえるんだ……。し……し

かし……。状態であった。

ファアラの言葉を緒川が追及する。

「あなたの言う毒とは、いったい何を意味しているのですか?!」

「マスターが世界を分解するために、どうしても必要なものがいくつかありましたの」

もうほとんど壊れているようだ。ファアラは右目の自由が利かないことも気にせずに続ける。

「その一つが、魔剣の欠片が奏でる呪われた旋律……。それを装者に歌わせ、体に刻んで収集することが、私たちオートスコアラの使命！」

彼女の口から告げられた事実は、流石の雷も読み切れていないところであった。まあ、と言うよりも彼女はキャロルの計画を――彼女の精神の――根本から叩き潰す予定であったため、そもそも予測する必要すらなかったというのが正しいのだが。彼女からしてみれば「自分が使えるか不安はあるけどタダで強化アイテムもらったラッキー」程度の物である。

完全な自己満足感を得るべく、全てを語ったファアラは自身を爆破処理した。その衝撃から装者たちを守るべく、緒川が風呂敷で遮る。周囲にはキラキラとチャフのようなものが待っていた。恐らくレイアを撃破しようとしている装者に伝えないようにしているのだろう。

「呪われた旋律が何かと思えば、轟の計画がひっくり返るようなものではなかったな」

夜を明るく照らす炎から上がる煙を見上げながら、翼が口角を上げて嗤った。

## BYH

水の錬金術でエルフナインを通してブリッジに現れたキャロルだったが、弦十郎たちのエルフナインを庇うという予想外の事―そもそもすでにバレている―に舌打ちを打ち、錬金陣を解除する。

錬金陣の残滓が舞う中、自身を見つめるウエルの存在に気が付いた。彼は顎に手を当て、何やら値踏みするような視線をキャロルに向けている。

その視線を煩わしく思ったキャロルは、鋭い目つきで彼を睨み、「何を見ている……?」

「いやあなに、僕が英雄になる算段を考えているだけですよ」

「フン……。勝手に考えていろ……。……使われる道具の分際で……」

そして顔を体と同じ方向に向け、自身の手中から離れたエルフナインに腹立たしい苛立ちを吐露した。道具として廃棄したはずなのに、『人間』という枠組みにいる彼女のが気に食わないのだ。

そうしていると、背後から複数の足音が迫って来っていた。装者たちは足を止めていなくとも雷の策略によって追いつけている。どちらかと言えば足を止めた所為で予想のコースを外れ、クリス達がコース変更を余儀なくされたところだ。

走りながら装者の一人、調が口を開く。

「ここまでよーキャロル、ドクターー！」

「さつきみたいにはいくもんかデス！」

「だがすでに、シャトー完成に必要な最後のパーツの代わりは入手している」

キャロルは余裕の表情を崩すことなく、ゆっくりと振り返りながらノイズ召喚ジェムをばら撒いた。最後のパーツとはつまり、ネフィリムの左腕を持つウエルの事だ。彼の腕ならばシャトー内の複数の聖遺物と同化することで掌握し、ヤントラ・サルヴァスパと同じように扱うことが出来るからだ。

ジエムが割れ、赤い輝きと共にアルカ・ノイズが召喚される。  
ウエルが装者たちを煽るように、

「子供に好かれる英雄も悪く無いが、生憎僕はケツカツティンでね?!」  
「誰がお前なんか!」

切歌がキレル。

そうこうしている間に、無数のアルカ・ノイズが完全に召喚され、  
キャロル達とクリス達の間並んだ。戦闘開始の合図として、切歌が  
イガリマの起動聖詠を歌う。

「Zeios Igalima Raizen Tron」

そしてそのまま彼女の体躯に似合わぬ大鎌を振るい、アルカ・ノイズを真つ二つに両断した。同じくシンフォギア・シウルシャガナを纏った調は跳躍して高さを取り、ツインテールバインダーから無数の小型鋸を打ち放つ。

『α式・百輪廻』

跳躍したことで上から降るように放たれた鋸が、召喚された無数のアルカ・ノイズを次々に斬り裂いていく。クリスはアームドギアのボウガンをもピストル型に変形させてノイズの群れの中に降り立ち、自身を中心にして周囲一帯に存在するノイズに風穴を開けていった。

これ以上好きにはさせないとレイアはコインを錬金術でトンファーに形作り、ターゲットと見定めていたクリスに接近する。彼女はトンファーと長い脚を武器とし、クリスの放つピストルを弾くことで攻撃をかわしながら自身のリーチへと侵入する。

クリスも歴戦の装者。距離を詰められた程度では狼狽えたりはしない。バックジャンプで距離をとりながらピストルを連射する。が、レイアはそのさらに上を行く。踊るようなステップで銃撃をかいくぐり、クリスの足元の地面にコインを数枚ばら撒いた。

そこを基点に土の錬金術が発動し、巨大な岩石が油断していたクリスの足元から隆起する。

「がはッ?!」

「あとは私と、まもなく到着する妹で対処します」

「オートスコアラアの務めを……」

「派手に果たして見せましょう……」

オートスコアラアの務め。自身にダインスレイフの呪いの旋律を刻み、喜びの感情を得ること。即ち自身の死を意味するその務めを果たすため、キャロルの言葉にレイアは笑いながら返す。

キャロルがこの場から離脱するためにテレポトジエムを地面に放り投げ、転送用の錬金陣が彼女とウエルの足元で輝く。

ウエルが手を振り、

「ぼっははっい」

白衣のポケットから何やらメモのようなものを落としながら、その姿を消した。

「待ちやがれッ！」

クリスは彼女たちを追いかけようとするが、行く手をレイアに阻まれ、隙だらけとなった顔面をトンファーで殴打されてしまう。彼女の体は殴られた衝撃で宙に浮き、地面に叩きつけられた。

ウエルの落としたメモに目ざとく気づいた切歌はそれを回収しながら、

「不味いですッ！ 大火力が使えないのにまともに飛び出すのはッ?!」

「駄目ッ！ 流れがよどむッ！」

追撃を仕掛けるための布石としてレイアはコインを空中にばらまき、ばら撒かれたコインがマシンガンのように放たれた。切歌は何とか踏ん張って耐えるが、空中にいた調はコインの弾丸をまともに喰らってしまい、切歌に受け止められる。そこを好機と踏んだレイアは二つのコインを大型化し、それらで調と切歌をはさみ、押しつぶした。そしてコインが霧散し、押しつぶされた二人は地面へと崩れ落ちる。そんな時、地面に倒れ伏していたクリスがゆっくりと目を開けた。その瞳の中に、崩れ落ちた調と切歌の姿がうつる。自分の不甲斐なさのせいでこうなってしまった。と、勝手に自分自身を追い詰めてしまい、クリスの目に涙がたまる。

「二人ぼっちが……仲間とか友達とか、先輩とか後輩なんて求めちゃいけないんだ……。でない……でないとお……残酷な世界がみんなを殺しちまってえ……本当の一人ぼっちになってしまっ……」



なんで……世界はこんなにも残酷なのに……パパとママは歌で救おうとしたんだ……」

悲しみのあまり声がかすれる。

が、このような状況を敵であるレイアが許すはずもない。

「滂沱のいとまがあれば、歌えッ！」

レイアは跳躍し、落下の勢いをつけたトンファーをクリスに振るう。その一撃がクリスに振り下ろされんとするその時、倒れていたはずの調がバインダーから延ばしたアームで、切歌が大鎌で彼女の一撃を防いだ。

「なッ?!」

驚愕するクリスを背にして顔だけで振り返り、

「一人じゃないデスよ！」

「未熟者で……半人前の私達だけど……! そばにいれば、誰かを一人ぼっちにさせないくらいはッ……!」

「ッ！」

「うわああッ?!」

「二人とも……」

レイアがさらに力を籠め、元々满身創痕だった二人の体は地面に倒れ伏した。だが、それでもめげない。

「後輩を求めちゃいけないとか言われたら、ちよつとショックデスよ……」

「私達は、先輩が先輩でいてくれること……頼りにしてるのにッ……!」

「あ……そつか……私みたいなのでも先輩やれるとするならば、お前達みたいな後輩がいてやれるからなんだな！」

空気が変わった。それを感知したレイアは構えをとる。

再起したクリスは立ち上がり、

「もう怖くない! イグナイトモジュールッ! 抜剣ッ！」

ウイングスイッチを押しながらコンバーターを引き抜き、光の刃を展開したモジュールが宙を舞う。そしてその刃が、クリスの胸を貫いた。彼女の中を呪いと闇が駆け巡る。

一人では耐えられないかもしれない。だが、今は調と切歌の二人がいる。

(あいつらがッ……あたしをギリギリ先輩にしてくれるッ……！それに答えられないなんてエ……他のだれかが許してもッ……アタシ様が許せねえってんだアアッ！)

そしてクリスは呪いをねじ伏せ、その身に纏う力と変える。ギアの装甲の一部がはじけ飛び、黒く鋭角的の物へと変化した。まさに攻撃的。と形容するのが正しいだろう。

イグナイトモジュールを乗りこなすクリスは、ボウガンから放たれる矢をレイアに向けて発射した。だがそこはレイア、トンファーを回転させ、盾代わりにしてやを次々と叩き落していく。聞かないとなれば弾速と手数上げるまでと言わんばかりにクリスはボウガンをピストルに変え、接近戦を挑んでくるレイアと正面から組み合う。銃で接近戦を行うすべは弦十郎から教わっていた。

攻撃をかわし、トリガーを引きながらクリスは思う。

(失うことの怖さから……せつかく掴んだ強さも暖かさも全部、手放そうとしていたアタシを止めてくれたのは……)

背後に立つ後輩たちをチラリと振り向かずに見る。レイアの虚を突くためにバックジャンプで距離をとり、ピストルを組み合わせてロングライフルを形作った。

接近戦をしているのにライフルを取り出したクリスに対してレイアは困惑の色を浮かべ、

「ライフルで……？」

「殴るんだよおッ！」

『RED HOT BLAZE』

銃身を握り、銃底をハンマーのようにしてレイアの側頭部を殴打する。

(先輩と後輩。この絆は、世界がくれたもの……！世界は大切なモノを奪うけれど、大切なモノをくれたりもする！そうか……！パパとママは、少しでももらえるものを多くするため、歌で平和をッ……！) せつかく掴んだ好機、見逃す手はない。クリスは即座に大型ミサイ

ルを作り出し、点火した。

『MEGA DEATH FUGA』

猛烈な速度で放たれる二つのうちの一つをレイアは殴り壊し、爆発させる。その爆炎に巻かれながら、

「もろともに巻き込むつもりで……?!」

そしてその爆炎の中を、もう一発のミサイルに乗ったクリスが肉薄する。レイアも迎撃のためにコインを乱射するが、それを読んでいたクリスがガトリング砲で相殺している。破壊することは不可能と即座に断じ、跳躍して爆発から逃れようとするが、クリスがミサイルの起動を変える。跳んだことが仇となった。空中に逃げ場はない。

「ミサイルを曲げてッ?!」

このままではクリスも爆発に巻き込まれてしまう。だが、今の彼女は一人ではないのだ。切歌の放ったアンカーを空中で受け取り、戦線から離脱する。

クリスの乗っていたミサイルはそのままレイアのほうへ向かい、彼女は笑みを浮かべて直撃を喰らう。そして調が爆発が始まる前にバインダーを展開し、

「スイッチの位置は覚えてるッ!」

小型の鋸がスイッチを撃ち抜き、隔壁が閉じる。もう少しで完全に閉じ切ろうとする直前で、クリスが回収された。

上手くいったことに切歌がガッツポーズを決め、

「やったデス!」

「即興のコンビネーションで、まったくもって無茶苦茶……」

「その無茶は、たのつもしろい後輩がいてくれてこそだ」

クリスは調達の手を取り、

「ありがとな」

調達はその言葉に笑顔を浮かべる。そしてすぐに切歌は何かを思い出したかのような顔をして、

「そ、そう言えば!」

「どうしたの?」

「ドクターがこんなものを落としていったデスよ!」

「なんだこれ？暗号か？」

「……姉さんならわかるかな？」

切歌が取り出したメモを、クリス達がのぞき込む。そこには……

『BYH』

と、記されていた。

## 計画始動

クリス達がウエルの落としたメモの意味に頭を悩ませていると、深淵の竜宮が大きく揺れ始めた。危険を知らせるアラートが鳴り響いている。そしてそんな一刻を争う事態に陥った時に限ってクリス以外のギアが解除された。リンカーの制限時間が切れたのだ。

本部では、大人たちが冷静に対処を開始する。

「深淵の竜宮、被害拡大！クリスちゃん達の位置付近より、圧壊しつつあります！」

「この海域に接近する巨大な物体を確認！」

深淵の竜宮だけでなく、ここ本部潜水艦のアラートもなり始めた。藤堯が正体不明部隊が接近して来たことを弦十郎に伝え、メインモニターにとらえた映像を投影する。

「これは……！」

「いつかの人型兵器か！」

そう、あの時は何とか振り切ったものの、今回も上手くいくとは限らない。何故ならクリス達の小型潜水艇を回収した後、脱出しなければならぬからだ。彼女たちを待ってる間にも、人型兵器『レイアの妹』がだんだんと近づいてくる。

「走者たちの脱出状況はッ?！」

ギアが解除された調と切歌を肩に担ぎ、クリスがエレベーターシャフトの壁を蹴って潜水艇を停泊していたハッチまで急行する。

調が担がれたまま、

「駄目、間に合わない……！」

「さっきの連携は、無駄だったデスか……?！」

「まだまだ！諦めるなッ！」

何とか崩壊までに潜水艇に間に合ったクリスは、ギアを纏っていない後輩二人を先に乗り込ませた後、自身も乗り込んだ。

レイアの妹に取り付かれる前に潜水艦に帰投する。

「潜水艇の着艦を確認！」

「緊急浮上！油圧を気にせず、振り切るんだッ！」

可能な限りの速さで潜水艦が浮上をはじめ、これを沈めるためにレイアの妹が猛追を開始する。もしもの時を考え、弦十郎は友里に指示を飛ばした。

「総員をブリッジに集め、衝撃に備えろ！急げ友里ッ！」

素早く、しかし焦りを見せずに友里がコンソールを弾く。

丁度太陽が昇り始める。響が病院から太陽を見つめた。

「決戦の朝だ……」

職員全員がブリッジに集まり、捉えられる前に完全に浮上しきる。が、すぐ後にレイアの妹が海面から現れ、本部潜水艦を真っ二つに叩き割った。大爆発が起きる。

発生した爆発と衝撃で、友里の頭上に会った照明が落下した。

「危ない！」

エルフナインが彼女を助けるために飛び掛かる。

ギリギリのタイミングでブリッジを潜水艦から切り離し、イグナイトを維持したままのクリスを搭載したミサイルは発射した。ミサイルの外装がパージされ、中からクリスが躍り出る。彼女は空中でアームドギアを弓の形に変形させ、取り出した矢をつがえ、打ち放った。

『ARTHEMIS SPIRAL』

放たれた矢は弦の反発で圧倒的な初速を得、矢そのものがロケット弾でもあるため後部ブースターでの加速も相まってとてつもない速度でレイアの妹の腹部を穿ち貫いた。遅れてレイアの妹が爆発する。爆発の衝撃で発生した波が切り離れたブリッジを襲うが、転覆するような様子はない。揺れるブリッジにクリスが着地した。

「本部が……。連中は、何もかもをまとめてぶっ飛ばすつもりで……！」

ブリッジ内は崩壊、とまではいかなかったが、凄惨な状態だった。天井の一部が崩れ落ち、照明も非常電源になっているせいも薄暗い。友里が目を覚ました。

「う、うう……。?!エルフナインちゃん?!」

自分の体にエルフナインが力の抜けたまま覆いかぶさっている。そのことに気づいた彼女はすぐさま声をかけた。エルフナインは、力

を振り絞るように口を開く。

「僕は……誰に操られたんじゃない……」

「エルフナインちゃん?!」

とだけ言っつて、力なく友里に崩れ落ちた。角度的に見えていなかったが、腹部を見れば白いワンピースが鮮血で赤く染まっている。すると彼女たちのそばに、調と切歌が駆け寄ってきた。如何やら彼女たちには怪我はないようだ。

「大丈夫デスか?!」

「早く手当しないと!」

「目を開けて!エルフナインちゃん!エルフナインちゃん……!」

だいぶ血を流しているようだ。友里の呼びかけもむなしく、エルフナインは目を閉じたままだ。

○○○

「悪いな……腹、減ってたんだ」

「うん……」

響は自分たち家族を捨てた父、洸と再び会うために、前も来た喫茶店で顔を合わせていた。初手から父親に食事を奢っているが、思い返してみれば今の彼が定職についておらず、国連で働いている自分のほうが所得が多いため、仕方がないといえれば仕方がない。前なら文句の一つや二つ言っていただろうが、雷と未来、二人に説得された今なら大丈夫だと響は思う。

響は応援メッセージ代わりに受け取った二人からの『へいき、へっちゃら』が表示されたスマホ画面をチラリと盗み見る。まだ不安は残るが、頑張れる気がしてきた。

響は腹をくくり、

「あのね、お父さん……」

「どうした?」

「本当に、お母さんとやり直すつもり……?」

「ホントだとも、お前が口添えしてくれたら、きつとお母さんも……」  
「だったら!はじめの一步は、お父さんが踏み出して……。逃げ出したのはお父さんなんだよ?帰ってくるのも、お父さんからじゃないと

……」

洗は浮かせていた腰を落とし、

「そいつは嫌だなあ……。だって、怖いだろ……。？」

洗は困惑する響の目を見つめ、

「何より俺には、男のプライドがある」

「私、もう一度やり直したくて……。勇気を出して会いに来たんだよ

……。？」

「響……」

「だからお父さんも、勇気を出してよ！」

「だけど……。やっぱり、俺一人では……」

いつまでも情けない父親の姿に、響は失望の色を見せる。

「お父さんはもうお父さんじゃない。一度壊れた家族は、元に戻らない……。」

洗は何か声をかけようとするが、書ける言葉が見当たらず、思わず窓の外を見てしまう。そこには、小さな子供とそのこと手を繋ぐ母親の姿があつた。そのあとすぐに子供が転び、その拍子に握っていた赤い風船を手放してしまい、泣きじゃくっている。赤い風船が空に上がっていく。風船を目で追って空を見上げると、あまりに異常な事態が発生した。空が割れたのだ。そして空が割れるのと同じタイミングで響の通信機が鳴る。

『響君聞こえるかッ?! キャロルの進攻が開始されたッ!』

「キャロルの?!」

なぜすぐさま探知できたのか?

それはフォトスファイアがファラに強奪される前、藤堯が雷の頼みで追跡用プログラムをスファイアにインストールしていたからだ。普段、キャロルの居城は異空間にあるために探知不能だが、少しでもこちらに現れたならすぐさま探知できるように仕組んだものだ。先をとれない今、後の先だけは取って見せるという雷の計略の一つだ。

響は通信機を耳に当てたまま、喫茶店を飛び出した。彼女の後を洗が追う。

○○○



シャトー内部、ワールドデストラクターのシステムを起動させるため、ウエルはコンソールにネフィリムの左腕を突っ込んでいた。

「ワールドデストラクターシステムをセットアップ。シャトーの全機能をオートドライブモードに固定……」

すべての工程を完遂した証として、ウエルは左腕を引き抜いた。そして彼はそのまま下卑た笑みを浮かべ、

「どうだ！僕の左腕は！トリガーパーツなど必要としない！僕とつながった聖遺物は、全て意のままに動くのDA！」

「オートスコアラーによつて、呪われた旋律はすべてそろつた……。これで世界はバラバラにかみ砕かれる」

「ああん？世界を……かみ砕くう？」

高笑いしていたウエルが、拍子抜けしたとも、想定していたとも取れるような声を上げる。彼の言にキャロルは頷いた。

「父親に託された命題だ」彼女の中で父、イザークの言葉が蘇る。そして彼女は、かつての『キャロル』のようなかわいらしい、不気味な声で、

「分かつてるって！世界をバラバラにするの！解剖して分析すれば、万象の全てを理解できるわ！」

「つまり至高の叡智！ならばレディは、その知をもって何を求めるう？」

「何もしない……」

「ああん？」

ウエルは膝を曲げ、キャロルと視線を合わせた。

「父親に託された命題とは、世界を解き明かすこと……。それ以上も以下もない」

「oh……レディに夢はないのかあ……？英雄とはあくなき夢を見、誰かに夢を見せる者！託されたものなんかで満足したら、底も天辺もたかが知れるッ！」

ウエルの言葉が、キャロルの怒りの事先に触れた。彼女はウエルを睨みつけ、

「なんか……といったか？」

「僕の選択は正解だったか……」

殺意を向ける彼女に対し、場違いなほどにウエルの表情は穏やかだった。

## 父と娘

通信によりエルフナインの負傷、確認できるすべての情報が伝えられ、雷の立案した計画に沿って装者たちがそれぞれ行動を開始する。クリス、調、切歌は弦十郎たちと共に切り離した潜水艦で東京に急行。翼、マリアは緒川の運転する車に乗って同じく東京に急行していた。雷も未来を安全なところに避難させ、走って響のもとに向かっている。

ケラウノスを纏って向かってもよかつたのだが、今この状況でギアを纏えば市民に圧迫感を与えてしまうという考えから今は生身だ。

彼女は避難誘導をしながら響のほうに向かっていると、切歌から通信が入った。

『姉ちゃん！今大丈夫デスカ?!』

「避難誘導しながらで良ければ！」

『問題ないデス！姉ちゃんは『BYH』って知ってるデスカ?!』

「それ、どこで知ったの?!」

雷がいきなり叫んだため切歌は驚いたようだ。スピーカー越しに軽くひっくり返ったような音が聞こえる。慌てた様子で切歌が再び通信機を耳に当て、

『ど、ドクターがメモに書いてた暗号デス！姉ちゃんなら意味が分かるかなって……』

「ッ……！ありがとう切ちゃん！弦十郎さんに伝えて！この戦い、勝ったよ！」

『そ、それってどういう……』

興奮のあまり切歌が何かを言いかけていたが、通信を切ってしまった。雷は通信機をポケットに滑り込ませ、状況に似合わぬ意気揚々とした表情で再び走り始めた。

潜水艦にいた切歌が、

「き、切れちやったデス……」

「切ちゃん。姉さん、なんて言ってた？」

「……わかんないデス。でも、勝ったって……」

取り合えず切歌は雷の言ったことを弦十郎に報告し、その後、エルフナインの応急処置を行いながらなぜ彼女が勝ったと断言したのか。そのことに、首をそろって傾げた。

○○○

キャロルは、自身の父親から託された命題をウエルに馬鹿にされたことにはらわたを煮え練り返していた。ウエルからすれば、最高の叡智を手に入れるにもかかわらず、それだけで終わらせてしまう彼女のことだ。理解できないのだろう。彼は、決して表には出さずに心底自分の選択が間違えていないことを喜んでいた。

そんなウエルの内心を知らず、キャロルは怒声を上げる。

「託されたものを、『なんか』とお前は切って捨てたかッ?!」

「ほかしたともさーハッ！レデイがそんなこんなでは、その命題とやらも解き明かせるのか疑わしいものだア！」

「何……?」

怒りの沸点が急速に下がる。人間、怒りが限界を超えればいったん冷静になるものだ。それは、厳密にはもつとも本物のキャロルに近いホムンクルスである彼女も同じだったようだ。

ウエルは計画の通り、さらにキャロルを煽る。

「至高の叡智を手にする等、天荒を破れるのは英雄だけッ！英雄の器が小学生サイズのレデイには、荷が勝ちすぎるうッ！」

「チッ」キャロルは舌打ちを打った。

「やはり世界に英雄は僕一人ぼっち……。二人と並ぶものは無いッ！やはり僕だあ！僕が英雄となつて……！」ウエルがハイテンションな一人演説を続ける中、キャロルは小さく呟いた。

「どうするつもりだあ……」キャロルの手元で転送用の錬金陣が展開される。

「無論人類のためえ！善悪を超越した僕が！チフォージユ・シャトーを制御してえ……！」

キャロルに背後を向けたのが間違いだった。キャロルはダウルダブラの先端でウエルの体を刺し貫いた。彼は自身の体からダウルダブラの先端が突き抜けていることを認識する。

キャロルはウエルを刺し貫きながら、

「支離にして滅裂。貴様みたいな左巻きが英雄になれるものか……」

そう言つてキャロルは、ウエルの体からダウルダブラを引き抜いた。そしてすぐに風の錬金陣を展開し、足元のおぼつかない彼の体を端まで吹き飛ばした。背中をしたたかに打ち付けたウエルは欄干にもたれかかる。

ウエルは腹部の出血を確認し、

「駄目じゃないか……、楽器を、そんな事に使つちやあ……」

キャロルはダウルダブラを抱えたまま、満身創痍になりながらも笑みを消さないウエルのもとに歩を進める。

「シャトーは起動し、世界分解のプログラムは自律制御されている……。ご苦労だったな、ドクターウエル。……餞別代りに、お前の命乞いぐらい聞いてやろう」

ダウルダブラを振り上げ、完全に見下した目をキャロルはウエルに向けた。ウエルは汗でへばりついた髪をかき上げ、嘲るような笑みを浮かべて言った。

「レディは舞台の支配者になって満足しているようだが……君はもう支配者なんかじゃない……！君はすでにただ『悪役』を演じる役者の一人に成り下がっていることを自覚するがいい！」

「いうにことかいてまだオレを挑発するか……！」

キャロルの怒りが限界を超えた。

彼女は振り下ろしてウエルを突き落とそうとするが、彼が予想外の行動に出た。自分から飛び下りたのだ。

よつてキャロルは、怒りをどこにも向けることが出来ず、ウエルの残した意味深な発言に思考を締め上げられ、さらにその上から拒絶反応によつて身も、思考も、心にもダメージを負うこととなった。

複数の痛みにも体を蝕まれたキャロルは、欄干によりかかつて無い胸を抑え、

「立ち止まれるものか……！計画の障害は、例外なく排除するのだ！オレは支配者なのだから……！」

錬金術で外の様子を把握する。そこには、自らの父、洗と口論をし

ている響の姿があった。

シャトーをカメラに収め、その映像をテレビ局に売ろうとしていた洗はそれをポケットにしまい、頭をかいた。

「やっぱ不味いよな……」

「いい加減にしてお父さん！」

「ほう……そいつがお前の父親か……」

「響！空から人が！」

上空から降りてきたキャロルの姿を、彼女と相對する形となっていた洗が真つ先に反応する。彼の声で響は振り返り、キャロルを正面に捉えた。

「キャロルちゃん……」

「終焉の手始めに、お前の悲鳴を聞きたいと、馴染まぬ体が急かすのでな……」

「あれはやっぱり、キャロルちゃんのか？」響はキャロルの背後にあるシャトーを見て言った。

「いかにも。オレの城、チフォージュ・シャトー……。アルカ・ノイズを発展応用した、世界をバラバラにする解剖器官でもある」

シャトーの中から複数の機械音が反響して聞こえてきた。

「世界を……。あの時もそう言ってたよね？」

「あの時、お前は戦えないと寝言を繰り返していたが、今もそうなのかあ？」

一瞬動きを止めてしまおうが、今の自分は違うのだ。この拳は誰かを守るための拳だと理解しているからこそ、響はペンダントを掲げようとする。が、それをキャロルが妨害した。

錬金術で発生した小型の竜巻がペンダントを撃ち抜き、吊り下げていた紐が切断される。

赤いペンダントが宙を舞った。これでは、ギアを纏うことが出来ない。

「ギアがッ?!」

「ッ」

「もはやギアを纏わせるつもりは毛ほどもないのでなア！」

キャロルはさらに錬金陣を展開する。

ギアを纏えなくても拳があれば戦えると言うように響は構えをとった。キャロルは錬金陣を展開したまま、

「オレは、父親から託された命題を胸に、世界へと立ちはだかるッ！」

「お父さんから……託された……」

「誰にだってあるはずだ……」

「私は何も……託されていない……」

父親から何も託されていない。その事実が、響の体から力を抜けさせる。だがキャロルは止まらない。

「何もなければ耐えられまいてえッ！」

響は動くことが出来ない。このままでは錬金術が直撃してしまう。その直前だった。突然、背後から洗に掴まれて横っ飛びに回避してしまう。洗は響の上に覆いかぶさり、彼女の体を破片から守る。

「響！おい！響！」必死に声をかけるが、キャロルがエーテルの錬金術を彼に向けた。

「世界の前に分解してくれる……」

「うわあああああ！」

洗は錬金術を向けられ、情けなく走り出した。響は倒れながら、走り出した父親を見上げ、

「お父さん……う？」

「助けてくれえええ！こんなの、どうかしていやがる……！」

洗は彼女の視線を背に受けながら、なぜか足を止め、周辺を見渡しながら悲鳴を上げた。

父親に見捨てられた響は、悲痛な顔を彼に向ける。彼女の脳内で、家族を捨てた彼の光景がフラッシュバックした。自然と涙がこぼれ出る。

洗をわざと走らせるように、少し後ろに錬金術を撃ちこむ。

「ハハッ！逃げたぞ！娘をほおりだして、身軽な男が駆けていきおる！」

遂に追い詰められた洗は尻もちをつき、恐怖に怯え、後ずさった。そして手近にあった小石をキャロルに投げつけ、来るな来るなと惨

めつたらしく喚きながら立ち上がって走り出した。

父親の痴態を見て立ち上がる気力もわからない響に対し、キャロルは洗で遊びながら、

「大した男だなア、お前の父親は。オレの父親は、最後まで逃げなかった！」

「ひびきッ！今のうちに逃げろ！壊れた家族を元に戻すには！そこに響もいなくちゃ駄目なんだ！」

洗はキャロルの錬金術を避けながら精いっぱい叫ぶが、遂に彼女の放った一発が彼の足元に着弾した。爆発が起き、洗は吹き飛ばされる。

響は思わず、

「お父さんッ?!お父さん……!お父さんッ！」

叫んだ。

娘の声に、洗は痛みを堪えて何とか立ち上がる。情けない姿かもしれない。娘に胸を張れるような父の姿ではないかもしれない。自分が傷つかねば娘を守れないくらい分かっている。だけど—だから—、「これくらい……へいき、へっちゃらだ……」

「っ」  
洗の言った自分の口癖。それを聞いて、幼かったころの思い出が蘇る。

彼は、どんな時でも、どんな痛い事、嫌なことがあっても、響の前で「へいき、へっちゃら」と言って笑ってみせた。そしてそれを言われた彼女も、自然と笑顔になる。これは、笑顔をつくる。そんな魔法の言葉だったのだ。

響は、託されたものの正体に気づく。

(そっか……。あれはいつも、お父さんが言っていた……)

父はゆつくりと、娘の笑顔を守るために、絆をもう一度紡ぐために立ち上がる。

「逃げたのではなかったのか？」

「逃げたさ……。だけど、どこまで逃げても!この子の父親であることには逃げられないんだ！」



「お父さん……」

洗はキャロルと相対し、

「俺は生中だったかもしれないが、それでも娘は本気で、壊れた家族を元に戻そうとツ……！」

足元にあつた石を彼女に投げつける。が、ノーコンなのか、それらは一向に当たる気配がない。当たったとしても、それは防御壁に阻まれるであろう。故にキャロルは、それらを意に介さず、無駄な抵抗と決めつけていた。

響は気力を振り絞って立ち上がる。

洗は石を投げ続けながら、

「勇気を出して向き合ってくれたあツ……！だから俺も……なけなしの勇気を振り絞ると決めたんだあツ……！」

響が完全に立ち上がり、父、洗を正面から見つめる。その視線を受けた洗は光り輝く石を手に、

「響ッ！受けとれええええッ！」

「ッ?!」

キャロルが驚愕する。何故なら石などではないからだ。それは……

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro  
n」

父の勇気と意志を胸に、響はガングニールの聖詠を歌い、そうはさせじとキャロルが錬金術を撃ち放った。

その光景を見て洗は膝をつき、悲痛にくれた声で、

「響！」

「へいき、へっちゃら」

「響……」

「私、お父さんから大切なモノを受け取ったよ……。受け取っていたよ！」

煙が晴れ、その中からガングニールを纏った響が現れる。

彼女の胸には、「へいき、へっちゃら」どんな辛い時にも、苦しい時にも耐えられる、笑顔になれる、魔法の言葉。

「お父さんは、何時だってくじけそうになる私を支えてくれていた……。ずっと、守ってくれていたんだ！」

「響……」

父親の呟きに、響は頷いて返す。今度は自分が頑張る番だ。成長した自分を見せるために、響はキャロルを見据え、歌を歌う。

## チエツクメイトを打つ者は

作戦開始の少し前。

マリアは緒川の運転する車に乗りながら、あごに手を当て、何やら考え事をしているようだった。その内容は、初めてキャロルを撃破した時に聞いた、雷の計画についてだった。

あの時、雷はキャロルが撃破されたとはいえ、エルフナインの五感共有が切れているのかいなのか不確定だったため、別室に移動させてから弦十郎、ひいてはほかの職員たちに言った。

「まず第一に、私の計画はキャロルを撃破するのではなく、キャロルの計画を破壊するための計画だということを念頭に置いておいてください」

「ああ。第一目標は計画の阻止であって、撃破ではないからな」

弦十郎が雷の言うことに理解を示し、そのことに彼女が安堵する。

しかし、他の装者、職員は気が気でなかった。早く雷の口から語られる計画を聞きたくて聞きたくて仕方がないのだ。思わず作業の手を止めている者もいる。

「私の計画は、三つに枝分かれます」

「三つか……」

「はい。まずはプランA」

弦十郎のつぶやきに雷は頷き、指を一本立てて言った。

「話を聞く限りキャロルの居城、チフォージュ・シャトーは聖遺物。もしくはそれに類するものの集合体でできています。そこで、深淵の竜宮内にある全ての機械のマスターキーとして扱える聖遺物、ヤントラ・サルヴァスパを用いて外部から強引に制御権を奪うという物です」

「制御権の奪取……か」

弦十郎はあごに手を当て、唸った。普段ならなぜ彼女が深淵の竜宮内にあるものを把握しているのかを聞いたところだが、彼女の考案した作戦のほうに集中していたため気にしている様子はない。因みに雷はハッキングして情報を手に入れている。

雷はもう一本指を立て、

「次にプランBなのですが、これは状況によって切り替わるのでルートが二つあります。そもそもプランBはキャロルが同じヤントラ・サルヴァスバを狙っていた、もしくはそれを破壊した、された場合の案ですので、予備案ですね。で、ルート1です」

おほんと咳ばらいを入れ、

「深淵の竜宮には、とある人物が収容されています」

「とある人物……？」　マリアがオウム返しに聞いた。

「うん。その人物の名はウエル。ネフィリムの左腕を持ち、聖遺物と同化することで自由自在に操ることが出来る英雄モドキ」

ウエルの名が出た瞬間、彼を知るものが――ほぼ全員が――顔を顰めた。彼への心象はとてもじゃないがいいものではない。だがそれを雷は気にも留めず、話を続ける。

「まあ言ってしまうえば、彼を味方に引き入れるのがルート1。キャロルに渡った場合は彼に接触し、英雄願望をそそのかして協力させるのがルート2ですね」

一気に指を三本にし、にこやかに笑いながら言い切った。そしてすぐに彼女はマリア、調、切歌のほうを向いた。

鋭いマリアは雷の言いたいことを即座に理解してしまう。

「まさかとは思うけど、私達に接触しろって言ってる……？」

「そのまさか」

「そんな！嘘だと言ってよ姉さん！」

「ドクターと面と向かうのはもう嫌デスよう！」

「だって、ウエルの事を良く知ってて、当たり障りなく接触できそうなのがマリア達しかいないんだもの」

「「うっ……」」

調と切歌が悲痛に訴えるが、雷はサラッと事実を言い切ってしまう。彼女はうなだれる三人のもとに歩み寄ってポンポンと肩を叩いて励ますように、

「大丈夫大丈夫。絶対にウエルは味方になってくれるから」

そう言って彼女は笑った。

マリアは、今になって強烈な違和感を抱いていた。なぜそこまであの偏屈を信じる事が出来るのだろうか。それが気になって気になって仕方がない。まるですでに計画に組み込まれているとしか言いようがない。そうでなければ説明がつかないほどに、あの英雄嫌いの雷はウエルの事を信じていた。

「どうかしたか？」

「いえ、何でもないわ」

難しい顔をしているマリアを気遣ってか、翼が声をかけた。これから決戦なのだ。不確定要素は出来る限り排しておきたいということだろう。

マリアは考えすぎだと頭を振り、決戦に向けて気持ちを整える。

○○○

ガングニールを身に纏い、父の声援を胸にキャロルを圧倒する響だったが、一瞬の隙をつかれて洗のそばにアルカ・ノイズを召喚されてしまった。父が力の源なら、それを引き裂いてしまおうというキャロルの魂胆である。

「お父さんッ！」

響は叫ぶが、距離的に間に合いそうにない。アルカ・ノイズの解剖器官が洗に触れようとしていた。その時だった。洗の周囲を半球状の電磁バリアが覆い、上からクラスター弾のように分裂した無数の矢が雨のように降り注いだ。

矢はアルカ・ノイズを一体も残らず殲滅し、電磁バリアが降り注ぐ矢から洗を守る。赤い煙の中、響は彼のもとに駆け寄った。そんな二人を守るように、腰のマントをはためかせながら雷が立ちふさがる。

キャロルは追撃をかけようと走り出そうとするが、目の前に巨大な剣が降って来たこと思わず足を止める。見上げると、ギアを纏った翼が腕を組み、剣の上からキャロルを見下ろしていた。彼女達だけではない、装者全員が、シンフォギアを纏って並んでいる。

響と雷が追加で現れたアルカ・ノイズを相手している間に、緒川が洗を戦線から離脱させた。

キャロルがダウルダブラと共に宙を舞う。

響、雷のもとに全員が集まった。

「もうやめよう！キャロルちゃん！」

「本懐を遂げようとしているのだ！今更辞められるものか！思い出も……何もかもを焼却してでもッ！」

そう叫び、キャロルはダウルダブラの弦を爪弾く。ハープの美しくも禍々しい音色が奏でられ、キャロルはその身を急成長させてダウルダブラを錬金術師のシンフォギア、ファウストローブとして身に纏う。

その威容にマリアが、

「ダウルダブラのファウストローブ……。その輝きは、まるでシンフォギアを思わせるが……」

「輝きだけではないと、覚えてもらおうかあッ！」

そしてなんと、歌い始めた。それと同時に展開していた錬金術の出力も跳ね上がる。

港湾部に停泊している本部ブリッジは、この圧倒的なエネルギーの源を感知していた。

「交戦地点でのエネルギー圧、急上昇！」

「照合完了！この波形パターンは……!!」

「フォニックゲイン……だと?!」

「これは……キャロルの……」

キャロルは歌に力で錬金術の出力を上げ続け、背部の弦を展開して共振効果によってさらに引き上げる。そして圧倒的な威力のそれを、装者たちは間一髪で直撃を回避した。

「この威力……まるでッ！」

「すつとぼけが利くものかッ！こいつは絶唱だッ！」翼、クリスはさらに来る追撃を回避する。

「絶唱を不可もなく口にする……!!」

「しかもこの威力、一人で放てるようなものじゃないッ！」

「錬金術ってのは何でもありデスカ?!」雷は電磁操作の応用で、切歌は肩のブースターで、調は鋸をプロペラのようにして飛行し、彼女達も何とか攻撃を避けた。

「だったらS2CAでッ！」

「よせっ！この威力、立花と轟の体が持たないッ！」

二人でやれば負荷も半分に分割できるが、それでも耐えきることが出来ないだろう。たとえできたとしても、戦闘続行できるかどうかに不安が残る。

装者たちは全員が集まり、雷が正面に立って電磁バリアを展開して身を守る。錬金術の威力が更に跳ね上がった。

「翼！あれを！」

「ッ?!……明滅、鼓動、共振?!」

「おい不味いぞ！早くしねえとッ！」

クリスがマリア達を急かすが、彼女達は身動きが取れない。潜入する隙が全く無いのだ。そうこうしている合間にも、シャトーはエネルギーを増幅し始める。装者たちの顔に焦りが見える。

だが、その中で唯一、雷だけが余裕の笑みを浮かべていた。

遂に、限界まで溜まったエネルギーが放たれ、雷の計画もむなしく世界解剖が果たされる。そのはずだった。増幅された光は、シャトー内部に向けて放たれた。

勝ち誇っていたキャロルの表情が絶望の色に染まる。

「なッ?!どういう事だッ?!」

「私の勝ちだ！キャロルッ！」

雷が計画の破壊が成功したと、高らかに宣言する。そしてキャロルが絶望に打ちのめされているうちに、マリア、調、切歌がシャトーに向かう。

「雷ッ！向かっていいのよねッ?!」

「行ってマリア！後はマリアが私の計画を完成させて！」

「分かった！」

「行ってくるデース！」

「頑張る」

彼女たちは危険を承知でシャトーに乗り込み、アルカ・ノイズの障害を打ち払いながらウエルと接触にかかる。

雷の計画が、チエツクメイトを打った。

## 英雄の名

ウエルと接触すべくシャトー内に侵入したマリア達であったが、内部の防衛システムに行く手を阻まれていた。目の前に壁が進路をふさぐように落下してくるのだ。

「時間がないって言うのに！」

「でも、今は迂回するしか……！」

「とつてもとつても、畏っぽいデスよお！」

世界解剖の光がシャトーの中へ放たれたことで、この事件に関係する全員の計算が狂わされていた。あのキャロルが自身の計画を失敗するなど考えられない。雷の計画ではマリア達が乗り込んでからのはずだが、それでは時間的につじつまが合わない。だが、立案者である彼女はキャロルに勝ちを宣言している。

彼らの中で最も混乱していたエルフナインが腹部の傷を抑えながら、

「あのキャロルが計画にミスを……？」だが出血がひどいせいもか足元がふらつく。それを背後から娘から目をそらさないためにブリッジにやって来ていた洗が受け止める。

「ひどい怪我じゃないか……！」

「キャロルを止めることがボクの戦い……。だけど、こんなものって……」

雷の計画、それは、二段構えで構築されている。誰も、もう一つの計画には気づけないでいた。

○○○

キャロルの計画の阻止と彼女の撃破は別の事。故に雷たちはキャロルとの交戦に入った。これには、マリア達が戻ってくるまでの時間稼ぎも兼ねている。

今まで長きにわたって建造してきたシャトーが一瞬にして崩されてしまったという絶望の所為か、彼女の動作は鈍く、荒い。だが、それでも錬金術とフォニックゲインを重ね合わせたゴリゴリの力押しは強大だった。



クリスが悪態をつく。

「何で、錬金術師が歌っていやがる……！」

「七つの惑星と七つの音階……。錬金術の深奥たる宇宙の調和は音楽の調和。ハーモニーより通ずる絶対心理……！」怒りと絶望に喉を震わせながらも答える。

「どういうことだッ！」翼が剣を杖にしながら問うた。

「その成り立ちが同じである以上、おかしいことではないと言っているッ！」

「親戚同士だから仲がいいってかよ……！」

雷が分かりやすくまとめた。内心、仲の悪い親戚だったらいいのに。とか思っていたが、無いものねだりは意味がない。ニヒルに笑いながら視線をキャロルに向けた。

計画を破壊した張本人であるからか、先ほどからキャロルの攻撃は雷に寄っているように見える。ケラウノスの高い防御性能と機動力、即座に最適解を探し出す彼女の頭脳が無ければ跡形もなかっただろう。

キャロルは続ける。

「先史文明期、バラルの呪詛が引き起こした相互理解の不全を克服するため、人類は新たな手段を探し求めたという……。万象を知ることを通じ、世界と調和するのが錬金術ならば、言葉を超えて、世界とつながろうと試みたのが……！」

「歌……！」

「錬金術も歌も、失われた統一言語を想像するために生まれたのだ！」

「「まさか！」」

「フイーネか……！」

雷の中に統一言語を取り戻すために月を破壊しようとした女の事を思い返す。そして彼女の一言で、響たち全員の脳裏にも蘇った。マリア達はウエルを探すためのシャトー内を走り続けていた。

「罨なら、仕掛けてきてもおかしくない頃合いなのデスが……！」

「ッ罨以下の罨……！」

見慣れた白衣を着た男、ターゲットでもあるウエルの姿が見えたと

たん、姉と慕う雷の願いを知りながら思わず調は悪態をついてしま  
う。

「もしかして、あたし達を誘導していたのは……!」

「御覧のありさまでねえ……。血が足りずシャトーの機能を完全掌握  
することもままならないから難儀したよ……。さあ、英雄となった僕  
を湛えるがいい!」

「英雄……となった……?」

マリアが首をかしげる。彼女からすれば敵となった彼が何故いき  
なり世界を救ったような口をしているのか理解できなかった。

ウエルが腹部を抑えながら眉を顰める。

「ああん?あの英雄嫌いから何も聞いていないのかあ?!」

「英雄嫌いつて、姉さんの事?」

ウエルは左手でやれやれとジェスターをしながら首を振り、

「何も聞いていないようだなあ?!この僕が英雄となる計画の事を!」

時は遡って雷が弦十郎に計画の事を話す前の事。

雷はハッキングで竜宮内に侵入し、ヤントラ・サルヴァスパの存在  
を把握していた。だが、それだけならば弦十郎。もしくは彼を通して  
八紘なりなんなりから聞けばいいだけの事。彼女の本来の目的は、犯  
罪者として、聖遺物として隔離されているウエルとの接触にあった。

与えられた部屋は防音であったため、音を気にする必要はない。緊  
急事態でない限りこの部屋には誰も入れないようにしている。それ  
を再度確認してから、雷はウエルの同部屋のスピーカーにアクセスした。

「あーあー。英雄モドキ、聞こえてる?」

『モドキではない!僕は本物の英雄だ!……その声は、僕の邪魔をし  
た英雄嫌いか!』

『大正解。で、その英雄嫌いから提案なんだけど、ウエル、英雄になり  
たくはない?』

「英雄だあ?ヘン!僕はもう英雄なんだ!すでに becoming するものに誰  
が……」

『違う違う、ただの英雄じゃなくて、世界を救った英雄だよ』

ただの英雄ではなく世界を救った英雄。たったそれだけのことだ

が、ウエルは雷の提案に食いついた。

「……聞くだけ聞いてやろうじゃないか」

『ありがとう』

そう言つて雷は、キャロルの世界解剖計画の大まかな概要を話した。音声でしかわからないが、声色的にはかなり乗り気なようだ。そもそも、世界を救うと聞いて乗る気にならないようでは英雄たりえない。雷はその心理をついていた。

「なるほど……、で、僕に何をしてほしいんだい？英雄の僕に、してほしいことの一つや二つあるんだろう?!」

『ああ、あるとも。まず一つは、キャロルの味方になって欲しい』

「ああん?!」

ウエルが怒声を上げる。英雄になる気はないかと聞かれてイエスと言えば敵になれと帰つてきたのだ。腹の一つは立つだろう。

怒る有ウエルとは反対に、雷は冷静に続ける。

『トロイアの木馬だよウエル。味方になったと見せかけて内側から崩すんだ。悪くはないだろう?』

「オデュッセウスもしたことだ。いいだろう。君たちをうまく焚きつけて騙してやるよ。で、その後は?」

『ノリいいね……。後は簡単さ。ネフィリムを使って解剖のターゲットを地球からシャトーに変更してほしい』

「僕はその後どうなる?!英雄を見殺しにする気かあ?!」

『もちろんそんなつもりはないよ。マリア達を君のところへ送る。その時にリンカーのデータを渡してほしい……これで終わりさ』

雷は自身の計画を伝えたが、さつきまでノリのよかったウエルのレスポンスが返つてこない。黙って待っていると、やけに落ち着いた彼の声が返ってきた。

「ひとつ聞きたい」

『なんだい?』

「何故君は英雄が嫌いなんだ。レデイの事は良く分からないが、白馬の王子様ぐらい夢想したりはするだろう?」少しの沈黙の後、雷が答えを返した。

『私は中学の真ん中まで、虐待といじめを受けていた。死にたくて死にたくてたまらなくなるほどのね。誰も助けてはくれなかった。どんなに手を伸ばしても、叫んでも、誰も来てはくれなかった……』

「だから英雄が信じられないってかあ?!」  
ウエルはしんみりとした空気を打ち破るように、さつきまでと同じく気の振れたような喋り口で、マリアに言った。

「だから僕は言っちゃったんだ!あの英雄嫌いに!」  
Your Hero” ってなあ!」  
Your Hero” ってなあ!」

”Become Your Hero”。その意味は、  
「お前の英雄になってやる」……」  
マリアがつぶやいた。

「ああ!メモに書いてた『BYH』って……」

「その頭文字だったんデスかあ?!」

残したメモに真意に二人が気付いた。そう、ウエルは最初から味方だったのだ。そして彼は全てを打ち明けた後、白衣からメモリーチップを取り出して、マリアに投げ渡し言った。

「何故、自己中心なお前が……」

「愛、ですよ……!」

「何故そこで愛?!」

マリアはウエルを抱え、調と切歌と共に光が内部まで満ち始めているシャトーから脱出するために走り出す。シャトー崩壊はすぐそこだ。

## 奇跡、降臨

遂にシャトー内部から光が漏れ始め、脆くなったところから切り離されるように分解され、地面へと落ちていく。ウエルはもちろん、マリア達が脱出したという報告は、今のところない。だが、雷をはじめ、響に翼、クリスもマリア達が死んだなどとは微塵も思っていない。根拠こそないが、そういう確信があった。

無残な姿となったシャトーをキャロルは呆然自失な状態で見上げていた。計画が破壊されたという事実を再度目の当たりにし、謔言の様に「託された命題が……」と呟いている。

翼はこちらの勝利を確信すると、携えていた剣を道路に突き刺し、「投降の勧告だッ！ 貴様が描いた未来は、もう瓦礫と果てて崩れ落ちたッ！」

「未来……？」

『もう、やめよう……』 キャロルの脳内でエルフナインの声が響く。

「お願い、キャロル……。こんなこと、僕達のパパはきつと望んでいない……。火あぶりにされながら、世界を知れと言ったのは……僕たちにこんなことをさせるためじゃないッ……！」

「そんなの分かっているッ！」 キャロルが叫ぶ。「だけど、殺されたパパの無念はどう晴らせばいい?! パパを殺された私達の悲しみは、どう晴らせばいいんだッ?!……パパは命題を出しただけで、その答えは教えてくれなかったじゃないかッ?!」

「それは……」

「君たちのお父さんは、何か大事なことを伝えたかったんじゃないか？ 命がけの瞬間に出るのは、一番伝えたい言葉だと思っただが……」

キャロルの問い、父の問いをこたえるべきかと悩むエルフナインを、父として彼女の父親、イザークの気持ちたちが最も理解できる洗が助け舟を出す。今の彼は力がなく、情けないながらも、響を見守るといふ、立派に彼女の父親をやっているからこそ言えた言葉だ。

彼の言葉に後押しされ、エルフナインは痛みと出血で意識をもうろうとさせながら、イザークの命題の答えを回答する。

「錬金術師であるパパが、一番伝えたかった事……」彼女の中からキャロルの幻影が現れる。

『ならば真理以外ありえない……』

「錬金術の到達点は、万象を知ることを通じ、世界と調和する……こと……」

『ッ。調和だと……?! パパを拒絶した世界を受け入れろというのか?! 言っていない! パパがそんなこと言うものかッ!』

キャロルはかたくなに、意固地なまでに、子供の我が儘の様に受け入れない。だが、エルフナインは知っている。弱くても戦うことが出来るということを知ってくれた、得体のしれない自分と一緒に笑ってくれた、自分と同じような境遇でありながらそれを背負って生きていくことを決めた、みんなの事を。世界を知ったからこそ言える。

「だったら代わりに回答するッ……!」

「ッ」父の思い、イザークの命題の答え。それは、

「命題の答えは……赦し……! 世界の仕打ちを赦せと……パパは僕たちに伝えていたんだ……!」

「君?!」

自身の力の最後の一滴まで絞りつくし、限界まで命を燃やした限界が来た。彼女をは口元を抑え、血を吐き出してしまふ。その小さな体を、洗が受け止めた。

光と共に消えていくシャトーを見上げ、キャロルは涙を流しながら、

「チフォージュ・シャトーは大破し、万象黙示録の完成という未来は潰えた……。フフ……。ならば! 過去を捨て、今を蹂躪してくれるッ!」

「クソガキが……」

ここまでされて、答えを教えられても受け入れることが出来ないキャロルを雷が吐き捨てる。

宙に浮いていたキャロルがこちらを向き、錬金術の燐光が彼女を淡く輝かせた。装者たちが臨戦体勢に入る。

エルフナインが叫ぶ。

『駄目だよ！そんなことをしては、パパとの思い出も燃え尽きてしま  
う！』

「ありったけの思い出を焼却し、戦う力へと練成しようというのかッ  
?!』

キャロルの雄たけびと共にエネルギーが上昇していくのが肌で感  
じられる。

「キャロルちゃん何を?!」

「復讐だッ！」

キャロルが腕を振るい、指先から延ばされた高出力の弦が響たちを  
薙ぎ払う。全員がビルの外壁や道路に叩きつけられた。

「……もはや復讐しかありえない」

「復讐の炎は……すべての思い出を燃やすまで、消えないのかッ?!」

「何で世界を見ようとしな……目を向けようとしな……ッ?!」

「エルフナインは、復讐なんて望んじやいねえッ……!!」

「うん……!エルフナインちゃんの望みはッ……!!」

響が立ち上がり、エルフナインから託されたイグナイトモジュール  
に手をかける。それを見てクリスが驚きに目を見開く。

「イグナイトって、本気かッ?!」

「相手に限界を知られてる、分の悪すぎる賭けだけど……」

「だが嫌ではない……。この状況ではなおの事ッ……!!」

イグナイトの全開出力がキャロルに知られているのは承知の上。  
だが、彼女の力押しで疲労困憊の今、大出力の攻撃を減衰させて受け  
るダメージを減らし、堕ちた火力を底上げするにはこの手しかない。  
まだ手が無いといえば嘘になるが、今はこれが最善手だ。

だが、それでも不安は残る。その不安を、響が振り切った。

「この力は、エルフナインちゃんくれた力だ!だから疑うものかッ  
!イグナイトモジュールッ!」

「!!ダブル抜剣ッ!!」

ダブル抜剣。それは、モジュール起動のウイングスイッチを二回連  
続で押し、三つあるシステムのセーフティを二段階解除することで  
ある。起動の証として、『ダインスレイフ』のシステム音声が二つ重ね

てなった。

白の燐光を身に纏い、全員のギアが黒く染まる。

響が一番槍を突きつけるが、キャロルはそれを防御陣で受け止め、いなす。クリスがその隙をついてガトリングで弾をばら撒くが、指先からは伸ばされる弦がそれを弾いた。クリスの弾幕を注視して空いた背中を翼が斬りかかった。しかし、キャロルは即座に防御陣を展開してしのぎ、逆に弾き飛ばす。雷は展開された防御陣に電光の速度で肉薄。ゼロ距離で稲妻の槍をあさつての方向に放ち、曲げて側面を狙うというフェイントをかけるももう一枚張られた防御壁に受け止められてしまう。

本部ではイグナイトモジュールの稼働限界を示すカウントダウンが始まっていた。二段階解除、ニグレドからアルベドへとシフトしている。そのおかげでカウントダウンが加速している。

響の乱打が、クリスの弾幕が、翼の斬撃が、雷の稲妻がキャロルに向けて四方向から放たれるも、彼女はそれを冷静に対処する。吹っ切れたおかげでさつきよりも精密性が上がっていた。

「フン……。力押し、実にらしいし可愛らしい……」

さつきまでの自分に突き刺さる言葉を吐きながら、攻撃をすべて弾き飛ばした。最も接近していた響が吹き飛ばすも、翼がすぐに受け止める。

雷が額から稲妻の放出をやめ、

「やっぱり限界が知られてるとキツイか……!」

「次はこちらが歌うぞッ……!」

歌と共に鍊金陣が、それも極大のものが展開される。余波だけで周囲一帯を吹き飛ばしそうなほどだ。

翼が驚愕する。

「さらに出力を?!」

「一体どれだけのフォニックゲインなんだよ?!」

「ッ?!響ッ!」

何か通信を拾った雷が叫び、響が頷く。彼女の瞳を見て、勝ちの二の手が見えたことを確信した響が更にモジュールに手をかける。



「待っていたのはこの瞬間ッ！」

「抜剣ッ！オールセーフティーツ！」雷と響の声が重なる。

「リリースッ！」

さらにもう一つのセーフティを外し、全開出力で四つの絶唱を重ねて東ね、キャロルの絶唱とぶつける。だが、三段階目、ルベドへと移行したことで更にカウントは加速し、その表示も乱れている。

四つの絶唱、S2CA・ペンタストライクで抑え込むも、じりじりと押されていく。

「まだだ！もう少しッ……！」

「ただの一人で七十億を超えるオレの絶唱！たった四人ぽっちで越えられると思うなッ！」

「四人ではないッ！七人だッ！」

「来たッ！響！」

「何とか……持たせる……！」

押されていた四人だったが、遠方から聞こえてきた声に雷が反応し、一時的にトライバーストへとS2CAを変更する。そしてそのあとすぐに、マリア、調、切歌の三人の絶唱が続いた。

それを聞いて雷が胸に手を当て、叫ぶ。

「チェンジセプテットッ！オーバーライズッ！」

雷の叫びと共にケラウノスがフォニックゲインの光を放ち、バラバラだった七つの絶唱が七重奏となり、共振して出力が引きあがる。彼女の絶唱特性である『感情の伝播』を応用し、想いを一つとすることでバラバラだった旋律を一つに調和させ、七重奏へと昇華させたのだ。

七つの旋律が束ねられる中、マリアはウエルの事を思い返していた。

シャトーが光に飲み込まれる直前、ウエルを背負っていたマリアは解剖の光に飲み込まれようとしていたのだ。彼を捨て置けば助かることが出来る。だが、雷のことを思うマリアは、彼女の願いを受けて英雄となったウエルを捨てることが出来なかった。

「マリアッ！」

「早くしないと間に合わないデスよお！」

「ッ」

調と切歌が急かすが、どう考えても間に合いそうにない。光はすぐ後ろまで来ているのだ。

諦めかけていた、その時だった。突然、背中が軽くなった。何が起きたかは分かっている。ウエルが落ちたのだ。それも、自分から。

「ウエル?!」

「早く行けよッ！僕の英雄的行いを無駄にしたいのかッ?!」彼は荒い息を吐きながら床に座り込み、左腕でシャトーを掌握して防壁を作り上げた。いずれ分解されるだろうが、時間稼ぎにはなる。

「だがッ……」マリアが二の句を告げる前に、ウエルが割って入った。彼は優しい声で、

「マリア……僕はあの子の英雄になれたかな……?」

「ああ、お前はあの子の……」

その次の言葉を、ウエルに聞かせることは出来なかった。彼は自身とマリアの間に壁を作り、分断したのだ。光に飲み込まれる直前、ウエルは上を向き、独りごちた。

「こういう終わりも悪く無い……か」

そのつぶやきは、誰にも聞かれることはなかった。

七つの旋律が雷によって奏へと変化する。その力は、キャロルの放つ七十億のフォニックゲインにも伝播した。七十億の旋律が、雷の為した七重奏に組み込まれる。

絶唱を束ねる響が叫んだ。

「S2CA・ヘピタコントラクトッ！七つと七十億の絶唱をガングニールで束ねッ！」

「ケラウノスで重ね、調和ッ！共振増幅しッ！」

「アガートラームで制御ッ！再配置するッ！」

響と雷、マリアのギアが変形、それぞれの役割に最適化した形となる。響のマフラーが七色へと輝きはじめ、装者全員を包み込む。ルベドへと移行したイグナイトモジュールの限界が近い。これが切れてしまえば、ギアが膨大なフォニックゲインに耐えきることが出来ず、

全ては水泡に帰してしまうだろう。

エルフナインが手を伸ばす。

「最後の、奇跡を……」

「まさか……オレのぶっ放したフォニックゲインを使って……?!」

七色の輝きが限界まで膨れ上がる。

響が叫んだ。

「うおおおおああッ!」

「ジエネレイトオオオッ!」

「エクスウツ! ドラアアアアイブツ!」

その拳を天に向かって突き上げ、七色に輝く七つと七十億の絶唱が竜巻の様に天へと昇る。その旋風は雲を突き抜けた。

キャロルが驚愕した。

「そ、そんなっ……?!」

「これが……奇跡のカタチ……」

エルフナインは奇跡を目撃し、力尽きる。

絶唱の嵐が止み、天に空いた雲の穴から太陽の光と共に七人の純白の戦姫が降臨する。

手を伸ばせ

奇跡のカタチを見届け、エルフナインの呼吸が荒くなる。もう体が限界に近いのだ。彼女を抱きかかえる洗が声をかけ続ける。

「君！大丈夫か?! ツ……涙?」

エルフナインはその目じりから、一筋の涙を流していた。

七と七十億の絶唱を力と変え、エクストライブへと移行した装者たちの前に、キャロルが浮遊して向かい合う。

「単騎対七騎……」

「錬金術師であるならば、彼我の戦力差を指折る必要もないであろう?!」

「おまけにとどめのエクストライブ! これ以上はもうしまいだあッ!」

一目見ただけでも分かるこの戦力差。誰もがこちらの勝ちを確信していた。だが、キャロルの余裕は崩れない。彼女は鼻で笑って一蹴し、

「奇跡を身に纏ったくらいでオレをどうにかできるつもりか?」

「みんなで紡いだこの力を!」

「奇跡の一言で片づけるデスか?!」

「片づけるともッ!」

調、切歌が反論するが、キャロルが怒号をもって正面からねじ伏せる。未来を諦め、過去を燃やし、現在を蹂躪すると決めた彼女にとって、この程度は奇跡の産物でしかない。

「奇跡など、あの日、蔓延する疫病より村を救った俺の父親は、衆愚によって研鑽を奇跡へとすり替えられた。そればかりか資格無き奇跡の代行者として、刎頸の煤とされたのだ……!」エルフナインに命題の答えを教えられた今も、父親を殺した人々への恨みは消えない。

「万象に存在する摂理と術理。それらを隠す覆いを外し、チフォー・ジュ・シャトーに記すことがオレの使命! 即ち万象黙示録の完成だった……! だったのに……!」

キャロルは恨みがこもった憎悪の瞳でその計画を破壊した張本人、

雷を睨みつける。だが彼女は、答を教えられた今も間違いにすぎる彼女を憐憫を込めた瞳で睨み返した。

雷に向けて断言する。

「奇跡とは、蔓延る病魔に似た害悪だッ！故に俺は殺すと誓ったッ！」  
「違うッ！奇跡とは、重ねた研鑽の上に立つ努力の結晶だッ！君が奇跡を殺せば、君のパパさんの研鑽を殺すことになるんだぞ！」

両親の奇跡の、努力の結晶たるケラウノスを纏う雷が、否定させるものかと言い切った。それを反論することが出来ず、一度は動きを止めたキャロルだったが、怒りと共に続ける。

「知ったような口をきくなッ！オレは、奇跡を纏うものだけには負けれんのだあッ！」

キャロルはそう叫び、数多のアルカ・ノイズ召喚ジェムをばら撒いた。それに展開された強大な召喚陣から輸送型の大型アルカ・ノイズが現れ、地上からはビルと同等の大きさのものが姿を現した。それらの足元や体内から、さらに小型のアルカ・ノイズまでが出現する。

リーダーにはノイズの存在を示す点があり得ない速度で増加していた。

この状況に友里、藤堯が驚愕する。

「まだ、キャロルは……」

「これほどまでのアルカ・ノイズを……」

「チフォージュ・シャトーを失ったとしても、世界を分解するだけなら不足はないということかッ?!」

「この状況で、僕達に出来るのは……」

「響……。響ッ！」

「その声、お父さん?!」

洗が叫び、通信を伝わって響のもとに声が届く。

『響！泣いている子が、ここに居る！』  
「ッ」

響はキャロルの目を正面から見つめる。彼女の目尻には、涙がたまっていた。響は構えていた拳を下ろし、

「泣いている子には、手を差し伸べなくちゃね！」

「何もかも、壊れてしまえばアツ！」

キャロルの叫びと共に、アルカ・ノイズが一齐に動きだした。周囲の建物を分解し、破壊していく。響が並び立つ翼に声をかける。

「翼さんッ！」

「分かっている、立花！」鞘から刀を抜刀する。

「スクリューボールに付き合うのは、初めてじゃねえからな！」アームドギアを変形させ、まさに武器庫となった。

「やっぱりいつものだね！」全身のユニットを展開し、電光を身に纏う。

「そのためにも散開しつつ、アルカ・ノイズを各個に打ち破る！」胸から剣を抜き出し、正面で構えた。

響がアームユニットを槍へと変形させ、正面から突撃。腕を振るって殲滅する。

「あの子も、私達と同じだったんデスね……」

『踏みにじられて、翻弄されて……だけど、何とかしたいともがき続けて……！』

調と切歌はアームドギアを合体させ、鋸の回転と鎌を利用したギロチンで地上の小型アルカ・ノイズを刈り取っていく。

マリアの剣筋に沿って光が伸び、その光に沿って複製された剣が大型アルカ・ノイズを両断する。

『違っていたのは、一人だったこと……ただそれだけッ！』

『いわば、みんなに出会えなかった私達……』

雷が電光と共に加速し、エクストライブとケラウノスそのもののみ出す圧倒的速さが残像を生み出し、複数の大型アルカ・ノイズを蹴りぬいた。

クリスが両腕のビーム砲で巨大な航空型を複数撃ち抜き、さらに砲身を展開して拡散ビームをばら撒き、大小問わず撃ち抜いた。

『救ってあげなきゃな……。何せアタシも救われた身だ！』

『その為であれば！奇跡を纏い、何度だって立ち上がって見せる！』

翼は鞘を振り回してもう一刀の刀へと変形させ、両足ブレードを大型化させて急降下、真下にいた母艦型を斬り裂く。

『そのために私達は！この戦いの空に、歌を歌うッ！』

天にこぶしを突き上げ、一気に刺し貫く。

マリアの振るった両手の件から何本もの剣が射出され、ビットの様に彼女の思考に従って飛び回り、光線を放って焼き尽くす。調と切歌も合体技で大型アルカ・ノイズを斬り刻み、雷が天に指を突き立て、空から招来した落雷で焼き尽くす。

七つの光が輝き、召喚されたアルカ・ノイズを全て殲滅した。

キャロルは装者たちがアルカ・ノイズと戦っている間、各属性の錬金陣を多重同時展開し、エネルギーを増幅する。

「さっきのアルカ・ノイズは時間稼ぎ?!」

「もう全部やり切っちゃたみたいだねえ……!」

「残った思い出丸ごと焼却するつもりなのか?!」

キャロルの目からは涙を通り過ぎ、怒りのままに血の涙を流していた。

「何もかも壊れてしまえ……。世界も、奇跡も、オレの思い出もおツ!」

咆哮と共に今までの中で最も巨大な錬金陣から極光が放たれる。そしてそこから放たれる風圧が装者たちを襲った。その威力は圧倒的。これほどの光の中から何が生まれるのか、想像もつかない。

このまま好きにはさせないと翼とマリアが飛ぶ。

「救うと誓ったッ!」

「おおとも！共にかけるぞマリアッ!」

二人は重なり、六本の剣を束ねて回転を加えることでドリルの様に突き進む。が、キャロルの防御陣が防ぎ、弾き飛ばした。

「センパイッ!」

「マリアッ!」

「何、あれ……!」

そしてキャロルの背部から弦が伸び、塊となって装甲を形作る。それは緑の外装に金色の角、爪を持った獅子のカタチをしていた。

碧の獅子機。それは、カオスの原物質にしてその口から放たれる炎は万物の完成、即ち終焉をもたらす存在である。それを、キャロルは

全ての記憶と引き換えに召喚したのだ。

キャロルは獅子機の中で、

『すべてを無に帰す……。なんだかどうでもよくなってきたが、そうでもしなければ臍の下の疼きが収まらない……。！』

「仕掛けてくるぞッ！」

天を割る雷と共に獅子機が咆哮し、口から炎を吐き出す。その炎は圧倒的で、直撃したビルを跡形もなく消し飛ばした。しかもそれは一つだけではない、湾岸部まで炎は浸食していた。

「あの威力……。何処まで……。！」

「だったらやられる前に！」

「やるだけデス！」

「無策だ行くなッ！」

調と切歌が突っ込むが、さしたるダメージを与えることもできずに吹き飛ばされる。飛ばされた彼女たちを雷がその身とアンカーで受け止め、戦線離脱を阻止した。

体勢を整えたマリアが言う。

「あの鉄壁は金城。散発を繰り返すばかりでは突破できないッ！」

「ならば！アームドギアにエクストライブの全エネルギーを収束し、鎧通すまでッ！」

「そのエネルギーは私が重ねる！共振増幅したエネルギーならッ！」

「身を捨てて拾う、瞬間最大火力ッ！」

「ついでにその攻撃も同時収束デスッ！」

「御託は後だッ！マシマシが来るぞ！」

獅子機の口内から光が輝く。それに対し、響を除いた装者たちは各々のアームドギアを構えた。放たれた光の雨を、響の槍が受け止めた。

「私が受け止めている間にッ……。！」

「やるぞッ！」

「チェンジセプトツツ！オーバーライズッ！」

雷が叫び、装者たちは装甲をエネルギーへと変換した。共振増幅されたエネルギーを打ち放ち、獅子機の放った光線を斬り裂きながら直



撃させた。額の装甲を撃ち抜き、キャロルのいるコアを露出させたものの、撃破には至らない。

キャロルは冷や汗を流しながらも笑みを湛え、

「アームドギアが一振り足りなかったな……ッ?!」

キャロルは目の前の光景に驚愕する。何故なら、響の槍に光が集まっているからだ。

なぜ六重奏ではなく七重奏だったのか。それは、一発目でキャロルの壁を粉碎し、二発目で響の手をとどかせるためだ。想いを繋ぐ、力によって。

キャロルは拒絶の意を示す。

「奇跡は殺す！皆殺す！オレは奇跡の殺戮者にイイツ！」

その拒絶は光線となって放たれ、響に直撃する。だが、響はもらったエネルギーを誇大な腕へと変化させ、キャロルの拒絶を受け止めていた。

「ッ?!」

「繋ぐこの手が、私のアームドギアだッ！当たると痛いこの拳……。だけど未来は、誰かを傷付けるだけじゃないって教えてくれたッ！」  
「枕をつぶすッ！ッ?!こんな時に、拒絶反応?!違う……！これは、オレを止めようとするパパの思いでえッ……！」イザークがキャロルに微笑んだ暖かいかの日の記憶がよみがえり、暴走する彼女をさいなませる。だが、それでもキャロルは止まらない、認めない。「認めるかッ！認めるものかッ！オレを否定する思い出などいらぬうッ！全部燃やして力と変われエッ！」

駄々をこね続けるキャロルは、自身を止める最後の扉だったイザークの記憶すら焼却してしまう。記憶を錬成したことで、さらなる威力を持つ光が獅子機に満ちる。だが、響も引き下がらない。東から思いを託され、繋ぐと決めたのだ。一度アームドギアを分解し、巨大な拳へと組み替える。

そして獅子機の放った光線と、響の拳が激突する。

「ウオアアアアッ！」

「ウオオオオッ！」

だが、キャロルのほうが力が強い。押し負けそうになる響だったが、彼女にはいるのだ。背を押してくれる仲間が。

「私達の思い、全部もってけ！ケラウノスッ！」

「天羽々斬ッ！」

「イチイバルッ！」

「シウルシヤガナッ！」

「イガリマッ！」

「アガートラムッ！」

七つのアウフヴァアツヘン波形が重なり、一つとなる。そしてそれを受けた響の拳は、遂に拳をキャロルへと届かせた。

「ッ?!」

「ガングニーイイルッ！」最後の一振りも、響が叫ぶ。

### 『Glorious Break』

だが、獅子機の中に満ちる膨大なエネルギーが暴走し、太陽としてすべてを焼却せんと空へと上昇する。

本部が状況を通達する。

「行き場を失ったエネルギーが、暴走を始めていますッ！」

「被害予測、開始しますッ！」

「エネルギー臨界到達まで、あと六十秒ッ！」

「このままでは、半径十二キロが爆心地となり、三キロまでの建造物は深刻な被害に見舞われますッ！」

「ぬうううっ！」弦十郎が唸る。

「まるで、小型の太陽……」

これはキャロルの、最後のあがきだった。歌では何も救えないと響に刻み付けるために。

「お前に見せて刻んでやる……。歌では何も救えない世界の心理を……」

「諦めないッ……！奇跡だつて手繰って見せるッ！」手を伸ばそうとするが、キャロルが弦で拘束しているために身動きが取れない。

「奇跡は呪いだ、すぎるものを取り殺すッ！」背後で爆発が起きる。暴発まであと二十秒、限界はすぐそこまで近づいていた。翼たちも動き

たかったが、ギアをエネルギーとして打ち放った今、纏うことが出来ない。

爆発の衝撃でキャロルの髪がちぎれ、空へと投げ出される。すぐに動き出そうとした響だったが、爆発によって弦が更に複雑に絡み合う。

「どうすればッ……!」

「響イイツー!」

「雷ッ?!」

誰よりも早くギアを再装着した雷が宙を飛翔し、腰に手を当て、居合の形をとる。そして稲妻の刀で弦を焼き切り裂いた。

『武御雷』

出遅れた響の背中を最大速度で押し、発破をかける。

「手を伸ばすんだ響ッ! キャロルを救うためにッ!」

「うんっ!」

レールガンの様に雷に打ち出された響が、キャロルに手を伸ばす。だが、それでも響自身に限界が近いためか、思うように速度が出ない。キャロルに手を取る気がないというのもあった。

響は全力で手を伸ばす。

「手を取るんだッ!」

「お前の歌で救えるものか……誰も救えるものかよおッ!」

「それでも救うッ!」モジュールに手を伸ばし、起動する。「抜剣ッ!」エルフナインの思いをのせたダインスレイフの力で純白のエクストライブが漆黒に染まる。そんな何よりも優しい黒を身に纏い、響はさらに手を伸ばした。

『キャロルッ!』思いが見せるエルフナインの手。そして、もう一つ。

『キャロル。世界を知るんだ』父、イザークの手。

「パパ……!」自分が否定したはずの父親が自分に手を伸ばすことに驚愕する。だが、父親とはそういう物だ。どれだけ拒絶されようと、泣いている娘に手を伸ばすものだから。

『いつか人と人が分かり合うことこそ、僕達に与えられた命題なんだ』  
「うん……!」

『賢いキャロルにはわかるよね……？そしてそのためにもどうすればいいのかも……』

「パパアアアツ！」

キャロルは涙と叫びと共に手を伸ばし、その手を響はとった。爆発が二人を包み込む。

明日へ

キャロルとの決戦を終え、碧の獅子機が爆発する際に発生した小型の太陽とも呼べる膨大なエネルギーによって壊滅した都心部で、緒川の他、黒服たちが行方不明となったキャロルの捜索に当たっている。が、一向に進展がないまま時間が過ぎるばかりだ。

現状を緒川が新造された本部潜水艦ブリッジにいる弦十郎に報告する。

『すでに決着から七十二時間経過しています。これ以上の捜索は……』

「分かった。捜索を打ち切り、帰投してくれ」

『了解しました』

「保護された響ちゃんが無事だったことから、生存していると考えられますが……」

キャロルの手を取った響は、炎に飲み込まれる直前、雷の放った斥力フィールドによって軽傷で済んでいた。そのおかげでファウストローブを纏っていないかったキャロルも無事だとは誰もが思っているのだが、影も形も見つからないことに不安を覚えていた。敵であったとは言え、最後は響の手を取ったのだ。それに、境遇からも装者たちと同じく他人で見ることが出来ないでいた。

それに、他にも問題はある。

「気がかりなのは、キャロルの行方ばかりではありません」

藤堯が言う気がかりなこととは、腹部から出血し、意識を失っていたエルフナインの事だ。今、彼女の元には装者たちと未来が集まっている。

エルフナインは病室のベッドに横たわっていた。

弱々しい声で彼女は、

「来てくれてうれしいです……毎日、すみません……」

「夏休みに入ったから大丈夫」

「夏休み……?」

「楽しいんだって、夏休み……!」

「あたし達も初めてデス！」

調と切歌は初めての夏休みにウキウキと楽しそうにしている。

響が頬に絆創膏を張った顔を笑顔でエルフナインに向け、

「早起きしなくていいし、夜更かしもし放題なんだよ？」

「それは響のライフスタイル……」

「あんなヘンなことを吹き込むじゃねえぞ？」

響は未来とクリスの言葉をわざと無視し、エルフナインに夏休みの良さを説き続ける。

「夏休みはねえ、商店街でお祭りもあるんだ！焼きそば、綿あめ、たこ焼き、焼きイカ！ここだけの話、盛り上がり上がってくるとマリアさんのギアから盆踊りの曲が流れるんだよ！」

「因みに盆踊りが流れてくると翼さんがどこからか持ち出した太鼓をたたき始めます」

爆心地に近かったため、重症なエルフナインよりもさらに見た目が重症な雷がノリに乗る。今回の一件でいろいろ吹っ切れた彼女だったが、流石に大爆発を喰らうのはどうしようもなかったようだ。しっかりと防御を固めたうえでこれだったのだ。雷帝を使えば無事だっただろうが時間がなく、発動できなかったのだから仕方がない。

他のみんなも助けようとした結果こうなった。と、割り切っている。

響にからかわれたマリアは顔を赤くして、

「そんなわけないでしょう?!だいたいそういうのは翼のギアから流れてセルフでやるのがお似合いよ！」

マリアの流れるようなツツコミとボケに病室が笑いで包まれる。

だが、面白くないのは笑われている翼だ。彼女は頬を引きつらせ、

「なるほどなるほど……?皆が天羽々斬についてどう認識しているか、よくわかった……」

笑いすぎて目に涙を浮かべたエルフナインは指でそれを拭き、

「僕にはまだ知らないことがたくさんあるんですね……!世界や、皆さんについてもっと知ることが出来たら、今よりずっと仲良くなるますでしようか?」

「なれるよ！」響が真を開けずに彼女の手を取る。「だから早く元気にならなくっちゃ！ね！」

装者たちと未来はエルフナインに挨拶してから病室を出た。

「私、ちよつとトイレにー！」

そう言つて響は走り出した。切歌たちが待とうとするが、マリアや翼、クリスがそれをたしなめ、引つ張つていく。雷と未来は、響の背中を見つめ、すぐに彼女の後を追った。

彼女がトイレに走つた理由は一つ。泣き顔を見せたくないのだ。エルフナインはもう長くない。何とか延命しているものの、そう長くは持たないだろう。

手洗い場で涙を流す響の背中を二人は見つめる。

鼻の詰まった声で響が、

「ゴメン、私が泣いてたら、元気になるはずのエルフナインちゃんも、元気になれないよね……？世の中、拳でどうにかなることって、簡単な問題ばかりだ……。自分に出来るのが些細なことばかりで、ホントに悔しい……！」

「そうかもしれない」未来が歩み寄り、涙を流す響の手に自身の手を重ねる。「けどどね？響が正しいと思つて握つた拳は、特別だよ？」

「特別……？」

「世界でいちばんやさしい拳だもの、いつかきつと、嫌なことを全部解決してくれるんだから」

「そのいつかの日が来るまで、私が、私達が頭でも手でもなんでも貸してあげる。響の手は、握るだけじゃないんですよ？」壁にもたれて腕を組んでいた雷が笑つて言う。

「未来……雷……」

響が涙と共に未来に抱き着いた。それを見た雷が襟に指をかけて豊満な胸に風を送りながら、「おっお熱いこつて」と呟くと、響が右手でこつちに来て。のジェスチャーをした。仕方ないと言うように雷が笑いながら響たちのほうに向かって行く。

「ありがとう……。やっぱり二人は、私の陽だまりだ……」

いつも間にか雷も響の陽だまりになっていたようだ。因みに響と

未来の二人は内心、雷の事はいろんな事を教え、実現させる（実らせる）ことから『稲妻』だと思っっているのだが、口にするると小恥ずかしいので言わないのだ。後、陽だまりと並べるとなんとなく物騒と言うイメージもある。

洗面台に張られた水に、波紋が三つ、広がった。

〇〇〇

夜、誰もが寝静まり、エルフナインも例外なく眠っていた。命の終わりが近づいているのか、呼吸音が荒い。そんな彼女の病室のドアが開いた。面会時間はとっくに過ぎてている。そんなあり得ない時間帯に来訪者が現れた。キャロルだ。

空気の抜ける音と足音で目を覚ましたエルフナインは、顔だけをキャロルのほうに向ける。

「キャロル……」

「キャロル……それがオレの名前……」

「記憶障害……。思い出のほとんどを焼却したばかりに……」

記憶のほとんどを失ったキャロルは、記憶の断片を頼りに病室にやって来たのだ。彼女はベッドのそばまで近寄って言う。

「すべてが断片的で、霞がかったように輪郭が定まらない……。オレは、いったい何者なのだ……。？目を閉じると瞼に浮かぶお前なら、オレのことを知っていると思いいここに来た……」

「君は……もう一人のボク……」

「オレは、もう一人のお前……？」

「ええ……二人で、パパの残した言葉を追いかけてきたんです……」

「つ……パパの言葉……そんな大切なこともオレは忘れて……」

父親の言葉すら焼却してしまったキャロルはそれが何だったのかを思い出せず、狼狽える。そして跪き、自身の知らない父親の言葉を知るエルフナインに乞う。

「教えてくれ！こうしている間にも、オレは、どんどん……！」だが、その瞬間、エルフナインはせき込み、抑えた指の間からは赤い飛沫が飛ぶ。「お前！」心配そうにキャロルが声をかけた。

さらに弱々しい声で、



「順を追うとね……、一言では伝えられないです……。ボクの体も、こんなだから……」

「俺だけじゃなく、お前も消えかけているんだな……」  
「……うん……」

悲し気な返事が病室の虚空にこだまする。

「世界を守るなら……消えてもいいと思ってた……」彼女の目から涙が零れ落ちる。「でも……！今はここから消えたくありません……！」いくらそう思っても、願っても、自身の体はホムンクルス。再生機能など搭載されていない。故に彼女は届かぬ願いに涙する。

そしてその涙を見て、キャロルは決断する。

「ならば、もう一度二人で……！」

キャロルはエルフナインと口づけを交わした。指を絡めさせ、強く握る。記憶の光が輝き始めるとともに、命を示す心電図が平坦となった。

エルフナインが死亡した。その報告を聞いた響たちは跳び起きて服を着替え、病室へとかける。ドアを開けるとそこには、月光の中にキャロルが立っていた。エルフナインの姿はない。

「キャロル……ちゃん……」響が思わずこぼす。

キャロルはゆっくりと首を振り、彼女達の方を振り向いた。

「ボクは……！」

エルフナインが言う。響が真つ先に抱き着き、未来が涙を流し、雷は調と切歌に抱き着かれて抱き着き返し、クリスが笑い、翼とマリアが微笑み合った。

○○○

響が洗と仲直りに向かっていて、少し広くなった部屋の中、雷はテーブルにのしかかり、頬杖をついて浮かぬ顔をしていた。

向かいに座る未来がマグカップをテーブルにおいて、  
「もう。いつまでそんな顔をしてるの？」

「だってえ、何が悪かったのか分かんないんだもん……」

頬杖をついていない逆の手でテーブルに『の』の字を書く。実は少し前まで調と切歌の宿題を見ていたのだが、突然、切歌が慌てた様子

で「クリス先輩のところに行くデス！」と言って残りたそうにして  
いた調を連れて出て行ってしまったのだ。

それからずっとこの調子なのである。

「集中できる環境づくりも考えられる限り完璧だったし、実際にレベ  
ルアップしてたのに……何がいけなかったのかなあ……」がつくりと  
額をテーブルに着ける。

未来はちよつとうらやましそうにした後、落ち込む雷をカメラで映  
しながら、あははと笑った。

一方、雷たちのところから脱出した切歌と、名残惜しそうにしてい  
た調はクリスの家で宿題をしていた。クリスはソファアーにの転がり、  
アイスを食べながら、

「お前ら、あのバカ二号のところに住たんじゃなかったのか……？」

「いやあ、実際はかどつてたし、頭にすらすらと入っていったんデスけ  
ど……。環境が快適すぎたんデス！」

「いや、悪いよりかいいいじゃねえか……」ソレの何が悪いんだと言うよ  
うにうつ伏せになって首をかしげる。

「いいってレベルじゃないんデスよ！何かこう……人間性と引き換え  
に学力を手に入れてる様な……」「切ちゃん」……何デスか調？「切歌  
の魂の訴えを調が遮る。」

「私は……ダメになりたかった……」真顔のまま恍惚とした表情を浮  
かべている。そんな調の肩を切歌が掴んで揺すり、「クリス先輩！調  
を叱って正気に戻してほしいデス！」

「お、おう！」

クリスが何とか調を引き戻し、調は何とか人間性を喪失することな  
く宿題に取り組み始めた。

翼とマリアはロンドンへと戻り、弦十郎と八紘は今回の『魔法少女  
事変』の見解を出し、エルフナインを新たにメンバーに入れたS・O・  
N・G・はウエルから受け継いだデータチップの解析に当たる。

まだまだ課題は山積みだが、それでも一歩一歩、まえ未来へと進むのだ。

h  
e  
d  
  
t  
h  
u  
n  
d  
e  
r  
)

完

# XMH | 666

型式番号XMH | 666 躯体名ルシフ・バウアーズ

名前の由来

墮天使ルシフェル（彼女の錬金術の特性と天使の性質から）＋トランプのジョーカー（ジョーカーはかつてバウアーと呼ばれており、それが複数枚あったことから複数形）

モチーフのアルカナはジョーカーであるため『愚者』

おもな任務 戦闘

概要

キャロルから与えられた性格は劣等感であり、自身と他者を比べて錬金術による反転から優越感を得ようとする。

使用する錬金術はエーテル。彼女はエーテルの回転を体内に宿し、常時展開しているため錬成陣を展開することはめったにない。展開する時は体内で発生したエネルギーを外部に放出するときくらいである。

また、躯体強度は低い。その強度は全オートスコアラーの中でも最弱で、エーテルの展開をやめると子供でも破壊可能なほどの強度に低下する。これは、彼女がエーテルの制御に最適化された躯体であるためであり、常に錬金術を発動し続けることを前提として開発されているため。その為エネルギーをエーテルの無限回転からくみ上げており、起動にも運用にも思い出が必要ないというローコストを実現している。

戦闘スタイル

錬金術を使用した徒手空拳。最も彼女の錬金術を最大限活用できる方法であり最適解。一度攻撃を受けてから攻撃を仕掛ける防御を捨てた戦い方。エネルギーだろうが物理だろうが全てをエーテルの回転に巻き込み、体内で加速をかけて相手に撃ち返す。大体これで事足りるため、錬金術を放つことはまれ。精々が一对複数の時ぐらい。

弱点

体内で回転するエーテルよりも速い攻撃か、逆回転のエーテルによ

る攻撃、もしくは同時複数からの大威力の攻撃には弱い。が、どれも錬金術師でなければ難易度は高い。

#### 容姿

トランプの絵柄にあるような紫色の道化師の格好をしている。頬には右は水色で星を、左はピンク色でハートが描かれている。

よく玉乗りしたりジャグリングしているのにも理由があり、玉乗りは惑星の回転。ジャグリングは惑星の天体運航とどちらもエーテルに関する事。

#### 彼女の目的

彼女は他と異なり、イグナイトによる呪われた旋律を刻むことが目的ではない。

自身を破壊するほどのエネルギー（彼女の破壊自体はイグナイトを起動した装者七人の絶唱で可能）をうけ、そのエネルギーをシャトーの動力部に転送することで世界解剖を瞬時に行うという物である。

だが、復活した雷による『シンカ・雷帝顕現』によって破壊されるも、そのまま分解されてしまうという想定外の出来事が起きたことによつてその目的は果たされることはなかった。

## I F 雷とウエル

無機質的な白い廊下を、大きな胸の上で赤い石柱のようなペンダントを揺らす、高校生と見て取れる一人の少女が歩いていった。彼女は体のサイズよりも少し大きな白衣を着ている。数冊の分厚い本と様々な研究資料が織り込まれたバインダーを手に、彼女は目的の研究室へと向かう。

彼女の名は轟雷。別の世界ではシンフォギア装者として様々な脅威と戦っている彼女であったが、この世界では違う。少し異なった歴史を歩んだ少女だ。

彼女はロックのかけられた部屋の前に立ち、  
「ウエル。入るぞ」

この研究室の主の名を呼び、返事も聞かずに彼用に高さが設定されている自身より少し高い位置にある網膜スキャナーに軽くジャンプして網膜を読み込ませ、ドアロックを解除する。

そう、彼女はウエルの助手としてここで中学生ながら働いているのだ。

本来の世界では誰にも手を差し伸べられず、自分を殺すことはいじめや虐待をやり過ぎしてたのだが、この世界では彼女の頭脳（境遇的にも彼の夢のためには無視できない）に目を止めたウエルが手を差し伸べ、彼女を助け出した世界だ。

腕の中の本を整え、まるで自室の様にウエルの研究室へと入っている。まあ、しよつちゅう入り浸っているため自室と言っても過言ではないのだが。

電気も付けられず、研究資料でほぼ足場のない床を慣れた足どりで進んで行き、毛布にくるまったウエルの元へと到達する。彼の枕元に本とバインダーをどさつと置き、眠った彼の顔に自身の顔を近づける。

「ウエル。もう朝、早く起きて」

「やあレディ……。何時も起こしてもらってすまないね……」大きなあくびをしながらウエルがのぞき込む雷のほうに顔を向けた。雷は

微笑み、「研究に没頭するのはいいけど、シツカリと食事はとる事。あと、出来るだけ研究結果は早くこつちに回して。ウエルの報告が遅いと纏めるこつちまで遅くなるんだから」頬を思いつきりつねった。

「善処する……」ウエルは目を合わせず答えた。  
(するつもりが無いな……)

雷はため息をしながらつねるのをやめ、早く起きろと急かす。彼はゆっくりと起き上がって伸びをし、雷に毛布をひん剥かれてようやく完全に目を覚ました。

「ハイハイ！起きたら顔を洗うかシャワーを浴びる！せつかくいい顔してるんだからもっとシャキつとして！」

「分かった、分かったからー背中を押すな！」

小柄な体でグイグイと背中を押す雷を、苦笑いを浮かべながらウエルが追い払う。彼女は腰に手を当て、頬を膨らませて言った。

「早くしてよ？これから改良したリンカーの学会報告に行くんだから」

「そう言えば今日だったか……。これで僕も英雄に……」

「英雄様はちゃんと身だしなみも整えてくださいな」

「分かったよ……」

そう言って彼は部屋のシャワー室へと歩いて行き、シャワーを浴び始めた。一人残された雷はと言うと少し顔を赤らめ、忍び足でシャワー室の脱衣所まで歩いて行き、そこに置かれたウエルのメガネを手にとった。そして彼女はつばを飲み込み、緊張の面持ちで眼鏡を自分に掛ける。更に彼の白衣を手に取り、ムフフともニヤニヤとも取れる奇妙な笑顔を浮かべながらそれを抱きしめた。

(ウエル……私の英雄……。本当は私だけの英雄でいてほしいけど、ウエルはすごいんだぞ！って知らしめたい自分もいる……。ハア、悩ましい……)

雷はウエルに恋していた。あの地獄から自分を救ってくれただけでなく、衣食住を全て与えてくれたのだ。さらに自分のような存在を助手としてそばにおいてくれている。恋に落ちない方がおかしいだろう。彼は英雄に恋しているため叶わぬ思いだとは分かっている。

でも、それならと彼の夢を叶えたいと思っている。

シャワーの音が止んだ。

雷ははつとした顔をして白衣と眼鏡を戻し、そばに持ってきていた新しい服と彼の脱いだ服を取り換える。そして気付かれないように脱衣所を出た。

「ふう……。では、向かうとしようか、レディ？」

「朝食はもう作ってあるから、それを食べてから」目を瞑り、指を一本立てて言った。

「分かってる。……とところで、『例の計画』はどうなってる？」研究室を出、廊下を歩きながらウエルが言った。

「問題ないよ。所在もばっちり確認してるし、それを開けるのにも操るのにも必要な鍵の場所も掴んでる。ウエルがGOサインを出したらすぐに出来るよ」研究資料をまとめたバインダーとノートパソコンを抱え、彼の隣を歩く雷が答えた。

ウエルが満面の笑みを浮かべる。計画が順調に進んでうれしいのだろう。そんな彼が笑う姿を見て、彼に恋する雷もうれしくなった。

彼は小躍りしそうな足どりで進み、

「これで僕も、英雄さ〜！」

「先に学会への報告が先だよ、ウエル」

「おっふ?!」

小さな体を彼の横っ腹にぶつけた。調子に乗ったウエルをたしなめるのも彼女の仕事の一つだ。軽くよろめくが、ウエルはすぐに立ち直る。そんな彼の体に自身の体を預け、顔を赤くして、

「でも、期待してるよ？私の英雄……」

「ああ、期待してくれよ。僕は君の英雄なんだから！」

英雄を目指す男、ウエル。彼に恋し、その頭脳を回転させる少女、雷。少し前に発生したルナアタックによつて落下する月から人々を守るための『フロンティア計画』。ウエルを英雄にするための計画の成功を夢想しながら、二人は寄り添い合つて白い廊下を進んで行った。



戦姫絶唱シンフォギアDENOVA      AXZ編  
バルベルデ

夏の夕暮れの日差しが差し込む教室で、響は力なく机に伏していた。この日は登校日。この日が期限の宿題や、日々の生活の報告と言った、ありていに言えば学生にとって面倒極まりない日である。

響はぼやく。

「夏休みの登校日って、もつとこう……テキトーだったはずだよねえ……。なのにこの疲労感……お説教の満漢全席とは思わなかったよお……。ほへえ、気持ちく」未来が差し出した冷たいりんごジュースを額に当てられ、情けないダレた声を出す。

「全く……今日が期限の課題が終わってないんだから、当たり前でしょ？」

「私が出来たか出来たかって何度も聞いたのに、返事だけはいっちょ前なんだから」

未来が呆れ、雷が珍しく一つ結びにした髪を揺らしながら腰に手を当ててため息をついた。この日は特に気温が高く、自傷や自殺衝動はなくなったとはいえ古傷の有る肌を隠す目的で包帯を巻いている彼女には特にきつい。その為、少しでも涼しくするために髪をまとめているのだ。

未来が響に呆れながらも雷のおさげを下からポンポンと持ち上げて遊んでいる。

そうしているうちに響が机に手をついてゆっくりと起き上がった。

「何とか始業式まで伸ばしてもらったけど、お願い二人とも！手伝わえー！出ないと終わらない、間に合わない！」二人のほうを向いて両手を合わせ、頭を下げる。

「確かにこのままだと……」

「間に合わないよねえ……」

「いいよ、手伝ったげる」未来が手伝うことを響に伝え、隣で何やら指折り数えていた雷が、「このままだと響の誕生日までもつれ込みそう

だもんね。夏休み明けにテストもあるし、突貫工事で行くよ！」拳をグツと握りしめて宣言した。

そんな二人に響は跳んで抱き着く。

「ほんとおっ?! やっぱ二人は心のアミーゴだよお！」

響が言った途端、窓の外にS・O・N・G・所有のヘリが接近した。スライド式のドアが開き、中からクリス、調、切歌が顔を出した。何か言っているようだが、ヘリのローター音でかき消され、何を言っているのか分からない。

『続きは家でやれ!』

『本部から緊急招集!』

「え?! なんていつてるの?!」

『デスデスデース!』

「言ってること全然……」とにかく行くよ!」う、うん!」

何の生産性もないやり取りに耐えきれず、雷が響の手を引っ張って校庭に出る。その後を未来が追った。

「未来! ちよつと行ってくるけど、心配しないで! 課題も任務も、どっちも頑張る!」

「私が見ておくから、心配しないでね!」

「うん! 頼りにしてる!」

二人はヘリに乗り込み、ヘリはローターの回転数を上げて飛翔する。窓から未来に手を振りながら、本部へと向かった。

○○○

ここは南米、バルベルデ共和国。

非常に不安定な軍事政権国家であり、小国でありながら常に強大な危機・脅威が発生する住みたくない国トップランカーである。

そんな国のジャングルで、直進で発生する爆発が起きた。バイクの駆動音が大地をかける。

それを旧式のパソコンが並ぶ駐屯地で、軍服を着たいかにもな軍人がとらえていた。

「高速で接近する車両を確認!」

「対空砲を避けるために陸路を強行してきた? だが浅薄だ、通常兵装

で我々に太刀打ちできるものか」グラサンをかけた上官が余裕を見せる。

地面に設置された先ほどのパソコンとはいくつもの世代差があるマシンが起動し、中から石のようなものを吐き出す。その石の正体はアルカ・ノイズを召喚するジェム。この国の軍の余裕の根源であり、国連が自分たちの軍だけでなくS・O・N・Gの出動を要請した原因である。

ジェムが割れ、中から無数のアルカ・ノイズが出現する。だが、バイクは止まらない。設置されたカメラに映る。

「接近車両モニターで捕捉！」

「こいつは……！」余裕がものの数秒で碎け散る。何故なら敵は、

「敵は……シンフォギアです！」これらの敵に対処するために存在する、S・O・N・G。なのだから。

バイクにまたがる天羽々斬の装者、翼は一切の速度を緩めることなく突進し、バイクの前方に展開したブレードで斬り裂いていく。

グラサン上官が叫ぶ。

「対空砲には近づかせるなアツ！」

だが、彼の叫びもむなしく翼はたやすく対空砲の元へと到達し、バイクを回転させ、ブレードを前後に展開して伐採した。

『騎刃ノ一閃・旋』

舞台は整った。翼が叫ぶ。

「緒川さんッ！」

緒川はタコを使って空を舞い、彼の両脇にはギアを纏った響とクリスがいた。雷は電磁操作の応用で自力で飛んでいる。

装甲車からの機銃掃射を受けるも、雷が真っ先に降下して超広範囲に電磁パルスを照射、EMPで戦車の駆動部や自動装填機、その他電氣を使うすべてのものを破壊する。

それを確認した緒川たちはタコから跳び降り、彼の投げた煙玉の我上げる煙の中に向かってクリスが矢を降らせる。その隙間を、響と雷が駆け、殴り抜いた。

緒川はムササビの術で一度落下の速度を殺し、高速移動と手刀によ

る当身によって装者たちが対処しづらい武装した人間を処理している。

雷の雷撃と蹴りが、響の拳が、クリスの矢が、翼の剣がアルカ・ノイズによって支えられていた戦線を一瞬にして瓦解させる。

銃弾も砲弾も効かず、特に戦車は雷のEMPによってほぼ鉄の棺桶と化している。装者三人はほぼ使い物にならない戦車の破壊やアルカ・ノイズの撃破。雷は特にためらいがないので対人においても電磁波を利用して兵士たちの意識を刈り取っていく。

本部は戦況を確認する。

「敵戦力の損耗率、七十四パーセント！」主な損耗は電子機器である。

「雷ちゃんの放ったEMPの効果が覷面です！」

「国連軍の上陸は十五分後！それまでに迎撃施設を無力化するんだ！」

電子機器を破壊されようと、手動で使えるものはいくらでもある。次はその無力化が任務だ。

軍駐屯地では戦況を判断する方法がないため、下っ端の軍人は残っているものの、グラサン上官は我先にと逃げ出していた。

「隊長?!どちらに行かれるんですか隊長ツ?!」

装者たちが一か所に集まる。

すると突然地面から光が宙へと放たれ、大型召喚陣が展開される。そこから紫電と共に現れたのは、最新鋭技術の塊、巨大航空戦艦であった。

「フィクションから抜け出してきたのかな?!」

「空に、あんなのが……!」

「本丸のお出ましか!」

『あなた達!ぐずぐずしないで、追うわよ!』

マリアが操縦するヘリとその他二機が響たちの目の前に現れた。雷は例によって自力飛翔である。

「ふうん!ヘリか!ならば直上からの攻撃をしのげまい!」

グラサン上官はスイッチを押し、船体下部に搭載された爆弾を投下する。ヘリの真上で爆発したのをモニターで確認し歓喜に叫んだ。

「やったぜ狂い咲きイツ！……ツ?!」

巨大な爆発音が船体を大きく揺らし、段々と高度が落ちていく。何が起きたかを確認すると、電光を迸らせる巨大な竜がメインエンジンを喰い破った。

『雷竜降顎撃』

雷はへりに乗っていない事、電磁操作をしていた事。この二つによってリーダーが捕捉できず、致命打を与えることが出来たのだ。

さらに放った爆弾もクリスのガトリング砲に破壊され、三機とも健在である。

グラサン上官は焦りながらも軍人らしく最後まで抵抗する。スイッチを破壊するように叩き、ミサイルハッチをオープンさせて発射。

クリスがガトリングで撃墜している内に、

「立花ッ！しんがりは雪音に任せるんだッ！」

「うええ?!」

ミサイルの上を走り、航空戦艦へ向かう。が、クリスの破壊速度のほうが速く、背後に爆発が迫ってきた。

「こっちで抑えてるうちにい！ほかの二機はさっさと戦域を離脱してくれえ！」

応えるように二機が離脱するが一発がそちらに向かつて行ってしまった。フレアを撒くも効果はなく、真っ直ぐにこちらに向かつてきている。パイロットが、

「駄目だ！間に合わないッ！」

だが、シンフォギア装者は諦めない。

「行くよ！切ちゃん！」

「がつてんデエスッ！」

調と切歌は同時にドアを開け、その間をミサイルが通過する。そして通過したミサイルをクリスが撃墜した。

「やればできる」

「あたしたちデエス！」

二人はそろってサムズアップした。

翼が遂に戦艦に到達した。雷の一撃によつて高度の落ちた戦艦の正面に構え、剣を巨大化させる。

「初手より奥義にて仕る……!」

戦艦とほぼ同等サイズになった大剣を振り下ろし、ブリッジの直前まで切り裂いた。グラサンが真っ二つに割れる。そして斬り裂いた隙間に響きが降り立ち、バンカーユニットを變形、回転させ、ドリルの様にしてブースターを点火しながら割れたグラサン上官の襟をつかみ、装甲を内部からぶち破つて離脱した。

すべてのミサイルを撃墜したクリスが背部から十二基の大型ミサイルを構築し、航空戦艦に打ち放った。

『MEGA DEATH INFINITY』

大小問わず大威力のミサイルが直撃し、跡形もなく爆散する。

空中に飛び出したはいいもの、跳ぶことが出来ない響を飛翔する雷が受け止めた。

「響、怪我はない?」

「うん!ひとまず任務は完了だね!」

「そうだね!後は国連に任せようか!」

横を見ると、国連所属のヘリが向かっているのを確認した。二人と割れたグラサン上官はゆっくりと地表に降りていく。

## 欧州の闇

装者たちの制圧の後、国連軍がテントを立て、そこで疲弊した国民たちに水や食事、毛布と言った簡単なアイテムを配り、負傷したものを治療しているのを雷と響、翼、クリスはフェンス越しに見ていた。配給所には多くの人々が並び、親を負傷した子の泣く声や逆にこの無事を天に祈る親の姿が見える。

S. O. N. G. の隊服を着た響が対応が速かったことに安堵する。

「良かった……国連軍の対応が速くて……」

「そうだな……」翼も同意した。

「……大丈夫、クリス？」

雷がフェンスを力強く握り、悔し気に歯噛みするクリスを気に掛けた。だが、クリスは声をかけた後すぐにそっぽを向き、「いや、何でもねえよ……」と、答えた。その表情はどう考えても何垢ある物だった。しかし、自分から話そうとしないものを問い詰めてもお互いに不快なだけだ。故に雷は問い詰めなかった。

そんな彼女達の背後に、マリアが運転し、荷台に調と切歌を乗せた車が止まる。

切歌は荷台で立ち上がり、啓礼のポーズを言う。

「市街の巡回完了デース！」

「乗って。本部に戻るわよ」

マリアが運転席から雷たちに声をかけた。

車は何もない荒野のような場所にある唯一舗装された道を走る。荷台に座っているため、走った際に発生する風を受けながら、

「私達を苦しめた、アルカ・ノイズ……錬金術の断片が、武器として、軍事政権にわたっているなんて……」

「錬金術師が関わっているのが厄介だよねえ……」

雷が自身の考えを口にした。

この紛争にも姿を確認しているわけではないし、協力が、それとも所属していたのかは知る由もないが、少なからずパヴァリア光明結社

の錬金術師、もしくはそれに類するものが関わっているだろう。ただの人間がアルカ・ノイズを製造できるわけがないからだ。

「パヴァリア光明結社……」

響がつぶやき、その名を聞いたときのことを思い返す。

少し前、ここに来る前のブリーフィングの時の事。

制服姿の響たちがブリッジに到着した。

「遅くなりましたー!」

「揃ったな、早速ブリーフィングを始めるぞ!」

「センパイ!」

「マリア……そっちで、何かあったの?」

弦十郎が言うと同時にモニターにテレビ通信が繋がった。画面には緒川に翼、マリアが写っている。調の問いかけを、全員に向けて答えた。

『翼のパパさんの特命でね、S. O. N. G. のエージェントとして、

『魔法少女事変』のバググラウンドを探っていたの』

『私も知らされていなかったので、てつきり寂しくなったマリアが、勝手についてきたとばかり……』

マリアが顔を赤くして叫んだ。『だから!そんなわけないでしょ?!』話の続きを聞きたい雷が目を見とーつと半目にして、「いちやつきを見せるのは終わってからにしてくださいませんか?」と、こぼした。

苦笑いを浮かべた緒川が仕切り治す。

『マリアさんの捜査で、一つの組織の名が浮上してきました。それが、パヴァリア光明結社です』

パヴァリア光明結社。それは、キャロルのシャトー建造を裏から支援し、ヨーロッパを裏から暗黒大陸と言わしめる要因ともされている。しかもその手はF. I. Sにまで伸びていたらしく、端的に言えば『フロンティア事変』と『魔法少女事変』。二つの戦いを裏から手を引いていた組織ということになる。

しかも厄介なことに、存在を掴むことは出来てもしつぽを掴むことが出来ないでいた。

だが、ここに進展があったのだ。



『マリアさんが掴んだ情報をもとに、調査部も動いてみたところ……』  
緒川が一つの画像を表示させる。響が真っ先に反応した。

「アルカ・ノイズ?!」

「この建物の感じ……南米のバルベルデか……」

「バルベルデ?!」

雷があごに手を当てて答えた。クリスが過剰に反応し叫ぶ。

如何やらあたっていたようだ。緒川は頷き、続ける。

『雷さんの言う通り、撮影されたのは政情不安定な軍事政権国家、バルベルデ共和国』

「装者達は現地合流後、作戦行動に移ってもらう」

アルカ・ノイズがいるとなれば行動するほかない。弦十郎の指示のもと、彼女達は行動を起こした。

響には、その時クリスが見せた反応が何よりも気になっていた。

そうこうしているうちに、港湾部に接岸している本部に到着した。車を降りた後、砂ぼこり舞う戦場にいたため汚れたからだをシャワーで洗う。

温かいお湯が彼女達の柔肌を伝っていく。

「S・O・N・G. が国連直轄の組織だとしても、本来であれば、武力での干渉は許されない……」

「だが、異端技術を行使する相手であれば、見過ごすわけにはいかないからな」

「アルカ・ノイズの軍事利用……」

「ノイズが元々兵器だったんだから、その派生であるアルカ・ノイズもありえなくはないと思ってたけど……」

「リンカーの数が十分にあれば、私達だって、もっと……!」

「ラスト一発の虎の子デス。そう簡単に使うわけには……」

シャワーを浴び終え、頭をタオルで拭きながら出てきた切歌に響が駆け寄り、その手を握る。因みにお互いシャワーを浴びた直後なので全裸だ。

「大丈夫だよ!何かをするのに、リンカーやギアが不可欠ってわけじゃないんだよ?!さっきだってヘリを守ってくれた!ありがとう!」

「な、なんだか照れ臭いデスよ〜！」顔を上下させながら、切歌が頬を赤くする。

「じー……」そんな彼女を、同じく浴び終えた調が湿っぽい視線を向けて睨んでいた。

「コラ響！せめて体を隠せ！」

「おぶっ?!」

雷が響にタオルを投げつけ、仁王立ちで叱る。因みにそういう彼女は例によつて全裸だ。そんな彼女を見て、三人はそろつて同じことを考えていた。

(大きい……) (でっかいデース……) (いいなあ……) 「?」

自身の胸を見つめる三人(調なんかは自身の平坦な胸を恨めしそうに見ている)の思惑に気づかず、小首をかしげる。因みに彼女のサイズは装者全体で上から三番目、身長比で見れば二番目だ。サイズ差は五センチもない。

響は普段から一緒に入浴しているため見慣れていたと思つていたが、ここまでまじまじと見とくことは無かつたこと。切歌は身長が同じくらいなのに大きさが違うこと。調は少し背が小さいだけでこまで違うこと。それらのおかげで雷のお叱りは右から左に流れていくが、その目は彼女の一部分を凝視していた。

姦しい彼女たちに背を向け、クリスが深刻そうな顔をする。

「くそつたれな思い出ばかりが、領空侵犯してきやがるツ……!」

かつての記憶が彼女を苛んでいた。だが、そんな思考を強制的に振り切らねばならない事態が発生する。ブリツジから招集がかけられた。常に運用できる装者である雷と響、翼、クリスは素早く、しかし丁寧に水滴をふき取り、隊服に着替えてブリツジへと向かった。

「新たな軍事拠点が判明した。次の任務を傳達するぞ。目標は、化学兵器を生産するプラント。川を遡上して、上流の軍事施設へ進攻する。」周辺への被害拡大を抑えつつ、制圧を行うんだ!」

「了解!」

四人は緒川の操作する小型ボートに乗り込み、目的地へと急行す

る。

クリスはかつて、ここに住んでいた時のことを思い出していた。両親が死に、炎の中で泣き叫ぶ自分。そんな記憶が脳裏を埋め尽くしているのを対面に座る翼が見抜いた。

「昔の事か？」

「ッ?!……ああ！昔の事だ！だから気にすんな！」

「詮索はしない。だが今は前だけを見る。でない……」

二の句を告げることは出来なかった。

不意に側面から探照灯がまばゆい光を放ち、光の発生源である装甲車から機銃が放たれる。練度不足から今のところ命中弾はないが、下手な鉄砲も数撃ちや当たるもの。いずれは当たるだろう。

そうはいかないと緒川が舵を取り、宣言する。

「状況！開始ッ！」

「一番槍、突貫しますッ！Balwisyall Nescell  
Gungnir Tron」

ボートを背面飛びで離脱し、ガングニールの聖詠を歌うことでギアを纏う。

響の拳が装甲車の側面に突き刺さり、吹き飛ばす。その音に気が付いたのか、施設の照明が点灯、周囲を明るく照らす。そして地面の装置が起動し、アルカ・ノイズが召喚された。だが、召喚された隙をつき、

「Vollaters Keilaunus Tron」

ケラウノスを纏った雷が召喚されてすぐのアルカ・ノイズを天羽々斬を纏った翼と共に撃破した。同じくイチイバルを纏っているクリスが放つ弾丸がハチの巣にしていく。八尾の稲妻の龍が地表を蹂躪し、刃が兵士のライフルを斬り刻み、矢がミサイルがごとき弾速で撃ち抜く。

戦闘の衝撃で施設の一部が破壊され、少年が押しつぶされそうになったが響が間一髪で助け出した。

「ええい！こうなったらもろともに吹き飛ばしてくれ！」

この施設の所長がテーブルの上にあった金色のスイッチを押し、超

大型アルカ・ノイズが召喚された。

「電磁波の乱れ……！超大型か！」

だが、電磁波の乱れをすぐさま把握した雷が宙を飛翔し、アルカ・ノイズの頭部をマーキング、脚部ユニットを展開し、高速回転しながら踵落としを決める。

「でやああああッ！」

『稲玉落とし』

踵から落とされた雷が脳天から真下までを一気に貫く。さらに地表を蹂躪していた雷の使役する八尾の龍が一斉に喰らいつき、数を増やそうとしていたアルカ・ノイズは即座に消滅する。

だが、召喚された超大型アルカ・ノイズは一体だけではなかった。工場の上空にももう一体いたのだ。あれが落下すればあたり一面汚染されるだろう。

「何とかしないとー！」

響がバンカーユニットを変形させ、マフラーに光をたなびかせながら跳躍、ミサイルのように落下してくるアルカ・ノイズの鼻っ柱に拳を叩きつけ、ユニットの内部機関が回転、パイルバンカーの要領で衝撃波を打ち込んだ。

宙に真っ赤な花が咲いた。

## パヴァリアの錬金術師たち

バルベルデ共和国某所、とあるオペラハウスにこの国の軍事政権のトップとその周囲を囲う者たちが集っていた。彼らはここにオペラを見に来ているわけではない。ボロボロの赤い垂れ幕が見えるステージから最も近い場所に、トップの男が座していた。彼らは亡命の事について話しているのだ。

軍服を着た側近の男が言う。

「閣下、念のため、エスカロン空港にダミーの特別機を手配しておきました」

「無用だ」 閣下と呼ばれた男が一蹴する。「亡命将校の遺産『ディー・シュピネの結界』が張られている以上、この地こそが一番安全なのだ」  
ディー・シュピネの結界。それは、人の意識と機械の信号をそらし、存在しないように見せかけることのできる不可視の結界。

それは逆説的にいうところの、

「つまり、本当に守るべきものはここに隠されている」

ということだ。しかも、その声は女性のものであり、彼らの中に女性はいない。即ち、侵入者。「何者だ?!」と一人が声のした方を向く。光の差し込む三つのガラス張りの大きな窓。そこに三人の人影が見えた。見たところ全員女性だ。

向かって一番右端、恐らくリーダー格であろう19世紀ごろの男性帰属の着るような服を着て、その上から白衣を羽織った男装の麗人が口を開く。

「主だった軍事施設を探しても見つけれなかったけど……」

隣、中央にいる一番何もかもが小さい、奇妙なカエルのぬいぐるみを抱いてメガネをかけた少女が、

「S. O. N. G. を誘導して、秘密の花園を暴く作戦は上手くいったワケだ」

右端、最も淫靡な肉体を持ち、服装も露出の多い頭の軽そうな女性がターンして、

「慌てふためいて、自分たちで案内してくれるなんて、可愛い大統領

」

何故か一つのセリフを三つに分割させて言った。

如何やら大統領は見覚えがあるようで、慌てて客席を立ち上がる。

「サンジェルマン・プレラーティ・カリオストロ！」

右から順に彼女たちの名前を呼んだ。

だが、彼女達は彼に反応せず、プレラーティがカエルのぬいぐるみを顔の前に持ってきて、めんどくさそうに言った。

「せっかくだから、最後にもう一仕事してもらおうケダね……」

その声に続き、サンジェルマン達が歌い始める。

急に歌い始めた彼女たちに戸惑い、そして大統領だけが知っている人物であることが気になって、側近の一人が大統領に何者かを問う。

「あの者たちは……」

「パヴァリア光明結社が遣わせた錬金術師……」

「あれが異端技術の提供者たち……！」

そう、国連軍を一網打尽にし、シンフォギア装者たちによって一網打尽にされてしまった原因であるアルカ・ノイズ。そのほか、様々な錬金術の提供元が、パヴァリアの錬金術師である彼女たちなのだ。

大統領が歌を歌い続ける彼女たちに襟に留められた、蜷局を巻く蛇の意匠が特徴的なバッジを見せる。

「同盟の証がある者には、手を貸す約定となつている！国連軍がすぐそこにまで迫っているのだ！奴らを撃退してくれえ！」

大統領は同盟者として要望を叫ぶが、帰ってきたのはカリオストロの投げキッスだけだ。彼は困惑のあまり頬を引きつけさせる。そうしているうちに、サンジェルマン達が歌を歌い切った。それに呼応するように、大統領の襟に留められたバッジが光を放つ。

その光は大統領が味方だと認識している者たちの体からも放たれ始め、彼らは体中を掻き毟って悲鳴を上げ、光の粒子となって消滅していく。粒子は劇場を飛び回り、天井付近の一か所で渦を巻いて集合した。

体を包み込む光は大統領にも例外なく発現し、異常なまでの痒みに襲われながら消えて言った者たちと同じく体中を掻き毟る。

「痒い！痒い！でも……ちよつと気持ちいい……」

少し背中にミミズがのたくりそうな辞世の句を吐き、大統領も側近と同じく粒子となって消滅した。その光の粒子は天井付近で集合していた粒子と合わさってサンジェルマンが掲げた右手のひらに集まり、白く輝く球体となった。

その球体を彼女は見つめ、

「七万三千七百八十八……」

と、数字を呟いた。状況から見て、恐らくこのように光にした者たちの人数だろう。

彼女たちは劇場の床を開け、地下へと続く階段を進んで行った。

○○○

雷たちが制圧した軍事施設だったが、ここの指揮官はすでにドロロンしていたようだ。どこを探しても――それもケラウノスのレーダーを使用しても――見つけることが出来なかった。雷は今も屋根の上に立ち、ギアを纏ったままレーダーによる搜索を続けている。

指令室とみられる場所に翼が立つ。

「如何やら指揮官には逐電されてしまったようだな……」

そんなことを呟いていると、ドアの前に響とクリスが一人の現地民とみられる少年と立っていた。

「翼さん、この子が」

「俺、見たんだ！工場長が来るまで逃げていくのを――もしかしたら、この先の村に身を擧めたのかも……」

「君は……？」

「俺はステファン！俺たちは無理矢理、村からプラントに連れてこられたんだ！」

翼の問いにステファンと名乗った少年は間髪入れずに答え、クリスは手のひらに拳を打ち付ける。

響が通信を雷に繋いだ。

「雷！今の話聞こえてた？」

『聞こえてた。この先の村だね、了解』

落雷のような音が聞こえた後、通信が途切れる。雷が向かって行っ

たのだ。

一方、調査部と友里、藤堯はある場所の地下室に来ていた。ある場所とはオペラハウス。つまり、サンジェルマンがいた場所だ。

彼らは信号波形を妨害している。つまりそこは探知できないという違和感からこの場所を逆探知し、何かがあるとみて中に潜入していたのだ。そして案の定、何かがあった。

（プリント制圧を陽動に乗り込んでみたが、とんだ拠点のようだ……）

藤堯が芸城内にしかけてあった隠しカメラの映像を見ながら思う。

すると頭上で何かがずれる音と、階段を下りるような複数人の足音が聞こえてきた。友里がハンドサインで合図し、拳銃を携えて足音を立てずに移動を開始した。

「ちよ、ちよつと……いー」

藤堯の静止は無視される。

○○○

オペラハウスの地下。この場に似つかわしくないモノが数多に置かれた所にサンジェルマン達があった。様々なものが置かれているが、彼女らの目的は一つだけ。それはぼろ布をかけられた、何かの塊のようだった。

サンジェルマンがぼろ布を取り払うと、オレンジ色の水晶の中に眠る、一つ目のヘッドギアを付けた子供の人形の姿があった。恐らくオートスコアラードだろう。

そんな彼女達の様子を、友里が特殊双眼鏡越しに捉えていた。

だが、この状況は一瞬にして崩れ去る。藤堯が持っていたタブレット、この場所のスキヤニングが完了したことを報告するアラームが鳴り響いたのだ。

「なあ?!」

一番驚いたのは藤堯である。しかし、そのけたたましいアラームが物音一つなかった地下倉庫に響き渡り、近くにいた友里はもちろん、サンジェルマン、プレラーティ、そしてカリオストロにも気付かれます。しまう。

三十六計逃げるに如かず。であれば打つ手は一つ。



「撤収準備！」

友里の号令と共に調査部の面々が拳銃を打つが、相手は錬金術師。防御陣によって容易く防がれてしまう。

だが、この場は足止めさえできればいいのだ。彼らの動きは迅速であり、すぐに撤収を完了させる。

「会ってすぐとはせっかちなえ……え？」

カリオストロが手のひらに水の錬金陣を展開しようとしたが、サンジェルマンに止められてしまった。彼女は横にあった置物のほうを向き、

「実験にはちょうどいい……。ついでに、大統領閣下の願いも叶えましょう……」

と言って器のように展開された錬金陣と、その中央で輝く白い球体を手のひらに浮かべ、

「生贄より抽出されたエネルギーに、荒魂の概念を付与させる……」

竜のような置物にそれを近づけると、白く輝く球体からそれを真似たような小さな竜が出現した。しかも竜は即座に巨大化し、天井を突き破って地面を喰い破り、撤退した友里たちを追いかける。

バックミラーにその異様を確認し、

「何なのアレ……！」

「本部！応答してください！本部！」

『友里さん！藤堯さん！』

藤堯の叫びはエルフナインのもとに通じた。

「装者は作戦行動中だ！死んでも振り切れ！」

『死んだら振り切れません！』

藤堯は泣き言を言うが、通信している内にも三台あった車両の内、二台が喰われてしまっている。最後の一台となり、何とか回避し続けているものの、竜は車両の前方に狙いを定めた。

絶体絶命の窮地だったが、

「軌道計算……暗算でえッ！」

藤堯がサイドブレーキを引き切り、強引に速度を落として間一髪で回避した。

「やり過ぎさせた……うわあ?！」

「ッ?!」

安堵したのもつかの間、躲された竜は地面に潜り込み、逆にしたから車両を突き上げたのだ。車は吹き飛び、真つ逆さまに地面にぶつかる。

その様子を岸壁の上からサンジェルマンは眺めていた。

「あなた達で七万三千七百九十四……。その命、世界革命の礎と使わせていただきます」

「革命……?！」

何とか抜け出した友里と藤堯だが、絶対的窮地であることには変わらない。むしろ悪化している。錬金術師が三人に謎の竜が一体。

打つ手なし。ではなかった。

「Seilien Coffin Airget-Lamh Tro  
n」

「っ」

「歌……?」

「何処から……」

聞こえてくるはマリアの聖詠。近づいてくるは一台の車両。その車は竜へと突撃し、爆発した。

友里、藤堯。二人の窮地を救う装者たち。シンフォギアを纏ったマリア、調、切歌が立ちはだかった。

○○○

大西洋上、とある豪華客船のテラスにて一人の人影があった。

そんな人物の近くに、この船に見合うドレスを着た一人の女性が頬を赤らめながら近づいていく。

「ここ、よろしいですか?」

「ええ、かまいませんよ」

その人影は女性であった。彼女は『科学の結婚』と記された本を閉じてそれを黒いトレンチコートの中へと仕舞い、白い羽がつけられた黒いノーブルハットの中から緑色の双眸をのぞかせる。

女性が彼女の事を男と見間違えるのは無理がない。何故なら男装

をしているからだ。ドレスの女性は彼女の美しさを見てそれが女性でも構わないと思った。

「すみません。吾輩は女でして……」

「いえ、かまいませんわ。それに謝らないでください。先に声をかけたのはこちらです」

「そう言っていただけだと幸いです」

彼女は帽子を胸に当て、白髪に赤いメッシュの入った髪をさらけ出し、微笑みをドレスの女性に向ける。その所作はキザであったが厭味つたらしくなく、かなり決まっていた。

ドレスの女性はその微笑みにやられ、顔を真っ赤にしながら聞く。

「あ、あの、あなたは、ど、どちらに向かわれるのですか？」

「バルベルデへ向かうつもりです」

「なぜ、そんな危険なところに？」

ドレスの女性はその理由を聞いた。

男装の女性は帽子をかぶり直し、白い絹の手袋を顎に当て、足を組む。そして少し考えたような間を開け、言った。

「……人に、合うためですね」

「それは恋人……ですか……？」「おっかなびっくりと、ドレスの女性はそうであってほしくないと思いつつ問う。だが、答は、

「さあ、どうでしょう？」

男装の女性はクスリと笑った後、コートの内側から金色の懐中時計の扉を開け、時間を確認した後、足元に置いてあった茶色い革のトランクケースを持って立ち上がった。

一方、ドレスの女性は落ち込んでいる。これほどに美しい人だ。彼女にはバルベルデと言う危険な場所に向かうと決意できるほどの思い人がいるのだ。付け入る隙などないではないか。と沈みこんでいた。

そんな彼女を見て男装の女性はかぶっていた帽子を手で押さえ、

「そろそろいい時間です。風邪をひく前に船内へと入るのがよろしいでしょう。あともう少しでコンサートが開かれるようですから、私が降りるまで一緒にしませんか？」

そう言つて微笑んだ。

ドレスの女性はこれを聞いて落ち込み、沈み切っていた顔を喜色満面へと変え、立ち上がつて彼女の腕をとる。

腕をとつた後、彼女は名前を聞いていないことを思い出した。礼節を知らない自分が恥ずかしくなり、顔を真っ赤にしながら、

「失礼ながら、まだ貴女の名前を聞いていませんでした。何というのですか？」

「ヨハン。ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ。それが吾輩の名です」

「ヨハン……男性のようなお名前ですね」ドレスの女性がクスリと笑う。

「ええ、吾輩もそう思いますよ」

彼女は微笑みながら女性をエスコートする。

ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ。

彼女こそ、パヴァリア光明結社に所属する錬金術師の幹部であり騎士。そして、サンジェルマンに錬金術を教授した人物である。

## 取り返しのつかないミス

軍事施設の所長が逃げたとされる村に雷は到着していた。ケラウノスのヘッドギア、ティアラのような部分で微弱な電磁波を照射、反射してきたものを受信することで状況を確認する。このリーダーは特殊なもので、電磁波の種類を調節することで建物を透過し、人体にのみ反射する物を放っていた。

建物の影から状況を確認していた雷は、

(複数の村人が一か所に……アルカ・ノイズが囲っているとみて間違いない。恐らく所長とみられる奴が誰かを抱いている……反応から見て要救助者。……行けるな)

ヘッドギアに搭載された通信からはマリア達が謎の竜に錬金術師と交戦していることが入ってきたが、自分にとって今はこちらが最優先だと決めて思考の外側に追いやる。適合係数が低い以外は総合的に能力が高いため、心配する必要はないだろう。少なくとも、生きて必ず帰ってくる。

響たちがこちらに向かってきていることも確認し、行動に移した。

雷は乾いていた唇をぺろりとなめて湿らせ、両腕部ユニットを展開、左腕で発生させた雷球を右手で殴って打ち上げる。球体はさまざまじい速度で宙を進み、強烈な閃光と共に村人を囲っていたアルカ・ノイズを落雷が貫いた。

### 『雷轟招来』

「なっ?!なんだっ?!」

「セイヤアアッ!」

「ぐはっ?!」

まばゆい閃光の中、雷は跳躍して屋根を跳び越え、所長を跳び蹴りで蹴り飛ばした。

「怪我はない?!」

「は、はいー!」

そして着地した雷は彼が人質としていた少女の無事を確認した後、いまだ健在のアルカ・ノイズに向かって突っ込んでいく。

回し蹴りに踵落とし、最小限かつ最大限の効果をj得る彼女の新たな戦闘スタイル……いや、本来のスタイルに戻ったというべきだろう。イグナイトの暴走に飲み込まれたときに見せた戦い方こそ、雷が最も得意とする戦い方だった。

アルカ・ノイズの撃破に集中しすぎて村人を危険にさらすような愚行を雷はしない。戦いながら斥力による防御フィールドを展開し、もしもの時に備えていた。

確認出来る限りのアルカ・ノイズを殲滅した雷をヘッドライトの明かりが照らした。

「轟！状況は……聞くまでもないな」翼が真っ先に降りてきた後、雷の周りを見てフツと息を吐いた。

「問題ありません。周囲にいる確認出来る限りの敵性はすべて排除したので」

「だが、油断は禁物だ。管理者を捕縛した後、本部に連絡だ」

「はいー」

翼と雷が任務報告をしている間に、響とクリス、ステファンは村人の解放と負傷者等の確認にあたっていた。怪我をしている者はおらず、雷によって放たれた閃光によって目がくらんでいる者もいるが、少し経てば回復するだろう。

だが、一つの誤算があった。

それは、雷がレーダーに使っていた電磁波は生物にこそ反射するが無生物は透過するということだ。アルカ・ノイズは無生物。死角から現れたソレはたまたま近くにいた少年、ステファンの足にその解剖器官を伸ばしていた。

「うあああああッ?!」

「ステファンー！」

「?!」

「しまっ……い！」

ステファンに右足が分解されていく。真っ先に気づいて声を上げた女性にクリスが反応した。既に敵性を排除したと思っていたため、最初から纏っていた雷と、外部から近づく敵性に対して遠距離攻

撃能力を持つクリスしか纏っていない。

雷が焦った表情で稲妻の矢を放って分解しようとしていたアルカ・ノイズを撃ち抜き、

「くそつたれがアアつ……!」

「——ッ!」

既に分解され、無事なところを侵食していく膝から下をクリスが撃ち抜いた。ステファンは足を撃ち抜かれる痛みにならない叫びをあげる。その叫びは、夜の闇を斬り裂いた。

翼が状況を本部に報告する。雷、クリスの二人はギアを解除していた。

「プラントの管理者を確保。ですが、民間人に負傷者を出してしまいました……!」

木で組まれた担架に足から血を流すステファンが横たわり、うなされていた。雷が手慣れた様子で包帯を巻いているが出血が止まらない。彼の横では一人の女性が、

「ステファン!ステファン……!」

と、彼の名を呼び続けていた。

誰よりも責任を感じている雷が額の汗をぬぐい、包帯では罅が明かないと判断してか一度ほどき、今この場に用意できる有り合わせのもので止血を開始する。

雷は自傷の経験からどこをどうすればどのくらいの出血するのか、そしてどう処置すればいいのかも知っていた。だが、足を切断されるのを処置するのは初めてだ。結果、民家にあつた清潔なロープで足を縛り上げ、強引に止血することとなった。

両手をつき、荒い息を吐く雷の横で、彼の名前を世に続けていた女性が、

「どうしてこんな……」

「ソーニャ……」

「ツ?!……クリス……。あなたが弟を……。あなたがステファンの足を……!」

「違うっ!クリスは悪く無い!……私の責任なんだ!」

雷が自分の所為だと主張するが、ソーニヤと呼ばれた女性はクリスのほうを向き続け、クリスは彼女の怒りを肅々と受け入れる。実際、ステファンの足を撃ち抜いたのは彼女だ。そもそもは雷の探知ミスなのだが、いくらケラウノスと言えど建物だけを透過してアルカ・ノイズを補足するなど不可能。

その事情を知っているがゆえに、撃ち抜いたのは自分だという事実がクリスを襲う。

雷はクリスは悪く無いと息も絶え絶えに主張するが、クリスは彼女を遮り、

「ああ……。撃つたのは、このアタシだ……」

「クリス……！」

その罪を自らのものとした。

○○○

どれほどダメージを与えてもそれを無かったものとしてしまう無敵の竜から何とか逃走を成功させ、藤堯と友里、マリア達は本部へ帰還していた。

「観測任務より帰還しました！」

「ご苦労だった」

「ふう……。やっぱり本部が一番だ……。安心できる……」

藤堯が心の底から縛りだしたかのように言った。弦十郎がそんな彼に楽しそうにくぎを刺す。

「だが今夜は眠れそうにないぞお！」

「ええ、死ぬ思いをして、手に入れたデータサンプルもありますしね。そのつもりです！」

「それにつけても、無敵の怪物の出現か……。パヴァリア光明結社を舞台に引きづりだせたものの、一筋縄ではいかないようだ」

因みに無敵の怪物ことヨナルデパズトリーの無敵性の解析にはエルフナインと雷が当たることとなっている。さも当然の様に深夜シフトに強制的に、しかも知らぬ間にぶち込まれる彼女である。もっとも、彼女は無敵性の解析を喜んで取り掛かることだろう。

ダインスレイフの呪いを克服した際に彼女の深層心理も正常化し



たとはいえ、今回の一件は彼女の心に深い傷跡を残すだろう。だが、雷が喜びそうな―組織としては喜ばしくないが―事象を研究させることで、メンタルを癒そうとしているのが弦十郎の狙いだ。大事な参謀役を機能不全に陥らせるわけにはいかない。

弦十郎の不安を調が一蹴しようとする。

「心配ない」

「そうデス―次があれば必ず……」

「……」

「あ」

「ごめんなさい……。リンカーが十分にそろっていれば、次の機会なんていくらでも作れるのに……」

そう、ウエルのレシピが解析できていない今、彼女達に合ったリンカーを製造することが出来ないのだ。この解析にも雷は組み込まれている。

切歌は落ち込むエルフナインの誤解を解こうとする。

「あ、あう、そ、そう言うつもりじゃなくてデスね……」

「やっぱりボクにレシピの解析は……わ、何をするんですかあ?!」

切歌の言葉は右から左へと流れている。そんな落ち込む彼女の頬をマリアは引っ張った。餅のようにによくと伸びる。突然の事に反応が遅れたが、彼女は頬を赤らめながらその指から逃れ、頬を手で押さえる。

マリアは妹のような彼女に視線を合わせ優しく諭す。

「ボロボロで帰還しても、まだ負けたとは思ってない。誰も悪く無いんだから、エルフナインが謝る必要はないわ」

「そうね。私達はまだ、諦めてないもの」

「ごめんなさいよりも応援が欲しい年ごろなのデス―!」

切歌が両手を腰につき、胸をそらす。

「ごめんなさいより欲しい……?」

「そう……」

優しく微笑み、エルフナインの頭を撫でた。

エルフナインは顔を俯かせ、少し悩んだ顔をする。答えを見つける

のはもう少し先のようだ。

## 少女たちは諦めない

人形、恐らくオートスコアラ、少なくとも同系統の存在が封じ込められている橙色の水晶の塊のようなものをサンジェルマンたちは見つめていた。

彼女達、特にリーダー格のサンジェルマンはこの人形と相まみえるのは四百年ぶりだ。サンジェルマンはその時のことを思い出す。

はるか昔、フィーネが遺した異端技術を収斂させ、独自に錬金術を編みだしてきたパヴァリア光明結社だったが、それ故に異端技術を独占し、優位を保とうとするフィーネとの激突は避けられなかった。

彼女を凌駕するためにサンジェルマン達のボス、統制局長アダムは、神の力を形とする計画を進めていた。しかし、その計画の要である目の前の人形、ティキを失ってしまい、計画は水泡に帰したどころか歴史の裏側へと追いやられてしまったのだ。

「四百年の時を経て、フィーネは消滅した。そして米国政府を失墜させた私達は、遂に、回天の機会を繰り寄せた……」

「あとはこのお人形をお持ち帰りすれば、目的達成ってワケダ」  
「それはそれで面白くないわ……」

カリオストロが先の戦いでマリアによって負わされた怪我の上に張った絆創膏を撫で、恨みがましそうに言った。

その言葉をサンジェルマンは受け止めつつ、話を続ける。

「天体運航観測機であるティキの奪還は、結社の計画遂行に不可欠。何より……」

「この星に、正しく人の歴史を紡ぐのに必要なワケダ……。そうだよね、サンジェルマン」

「人は誰でも支配されるべきではないわ……」

「じゃあ、ティキの回収はサンジェルマンにお任せして、あーしは頼ったのお礼参りにでも洒落こもうかしら」

カリオストロは持たれていた柱から体を起こし、地上へと続く階段の方向を見つめる。そんな彼女をサンジェルマンが咎める。

「ラピスの完成と、ヨハンさんの到着を前にして、シンフォギア装者と

の決着を求めるつもり？」

「勝手な行動をするワケダ……」

パヴァリアに所属する錬金術師の幹部、その最後の一人であるヨハンの到着は、もうすぐだと手紙として現れた彼女のテレパス能力によつて伝えられている。

それでも、カリオストロは止まらずに階段へと向かう。

「それでも、ヨナルデパズトリーがあれば、造作もない事でしょ？今ままでさんざつばら嘘をついてきたからね。せめてこれからは、自分の心には嘘をつきたくないの……」

内に秘めた熱い決意を声に出し、やられた分はやり返すと地下倉庫の中を進んで行った。

○○○

雷たちは負傷したステファンと彼の姉であるソーニヤを響たちが来た時に乗っていた車の荷台に乗せ、運転を担当する翼以外も荷台に乗り込んで都市部の病院にへと戻っていた。

任務自体は完了したが、全員の表情は暗い。何せ間に合わなかったならともかく、目の前にいて助けることが出来なかったのだ。

落ち込む雷を、響がそつと撫でる。そんな彼女の顔も明るいわけではなかった。

クリスはどうやらソーニヤと顔見知りのようだった。装者たちの中でも一番気まずそうにしている。それもそのはず、彼女はクリスが両親と夢を叶えるためにここに住んでいた時、その夢に賛同し、まだ小さかったクリスの面倒を見ていたからだ。

クリスはソーニヤに言われた「私はあなたが許せない」という言葉を思い出し、正しい選択をしたにもかかわらず彼女の心はどんよりと曇っていく。

だが、足を失い、息を荒くしている一番つらいはずのステファンが、思い詰めるクリスの足に手を添えた。安心させようとしているのだ。その思いを組んだクリスは、彼に触れるかどうかを躊躇いながらもゆっくりとその手を握った。

運転席にいた翼は、本部から来た通信を繋ぐ。相手は弦十郎だ。

「翼です」

『エスカロン空港にて、アルカ・ノイズの反応を検知した！現場にはマリア君たちを向かわせている』

「マリアさん達は、リンカーの効果時間内で決着させるつもりです！』  
『了解です。都市部の病院に負傷者を搬送後、私達も救援に向かいます』

ところ変わってエスカロン空港。そこは、アルカ・ノイズによって炎が燃え盛る地獄と化していた。駐在していた軍人たちが突然味方だった超常の存在が敵となったことで、混乱しながら抵抗するもあつけなく分解される。

そんな惨状を、滑走路にある倉庫の上からカリオストロが見下ろしていた。

「派手に暴れて装者たちを引きずり出すワケダ」彼女の横にプレラーティイが並び立つ。

「アラ、手伝ってくれるの？」

「私は楽しい事優先……。ティキの回収はサンジェルマンに押し付けたワケダ……？」

プレラーティイは目を閉じ、そして上空から聞こえてきたヘリのローター音を聞いて気だるげに目を開ける。

見上げるとヘリの中にマリアと調、切歌の姿が見える。カリオストロはウインクし、

「待ち人来たり」

落下する三人の到着を待った。

マリア達が降下し、それぞれギアを纏うための聖詠を口にする。

「Seilien Coffin Airgetl Lamh Tro  
n」

マリア達はアームドギアを振るい、ブースターを点火してマリアが錬金術師と交戦、切歌、調がアルカ・ノイズの殲滅に当たる。遠距離攻撃技を多く所有する調は空中でバインダーを展開し、そこから小型の鋸を乱射した。

『α式・百輪廻』

放たれた無数の鋸がアルカ・ノイズを斬り裂き、塵へと変える。

マリアは効果の勢いを殺すことなく踵落としを敢行するが、カリオストロはバツクジャンプ、プレラーティは隣の倉庫に飛び移ることで回避した。

プレラーティはジャンプした拍子に手を離れたカエルのぬいぐるみを頭に乗せ、

「のっけからおっぴろげなワケダア……ならば早速う！」

手をかざして錬金陣を器のように展開、その中に白く輝く球体を乗せてヨナルデパズトリーを召喚しようとするが、回り込んでいた切歌が背後から肩部アーマーのアンカーを飛ばし、召喚前に彼女を後ろ手に拘束する。

「早速捕まえたデエス！」

「もう！何やってるのよう……ああん！」

カリオストロが速攻で掴まっているプレラーティに呆れるが、マリアが減らず口を叩くなど言うように斬りかかった。カリオストロは相対するマリアと向き合い、ジャンプしながら腕を振るって光弾を発射した。マリアが雨のように降りしきる光弾をダツシュでかいくぐりながら距離を詰める。

本部でも彼女たちの様子を捉えていた。

「アガートラーム！シウルシャガナ！イガリマ！敵と交戦！」

「適合係数、安定しています」

「皆さん……」

バックステップで距離をとろうとするカリオストロをマリアは加速することで逆に距離を詰める。

「今度はこっちで、無敵のヨナルデパズトリーを！」

プレラーティと同じく召喚しようとしたが、マリアの左の拳が顔面に突き刺さった。彼女の顔が無様なまでにひん曲がる。

握った拳に力を籠め、

「攻撃の無効化！鉄壁の防御！だけどあなたは無敵じゃないッ！」

振り切った。カリオストロは吹き飛び、地面に叩きつけられる。

一方、切歌に拘束されているプレラーティは一切の焦りを見せずに

目を閉じる。すると彼女の体が発光し、錬金陣を展開して拘束を引きちぎった。

更に手のひらに防御陣を展開し、正面からくる調のバインダーをアームに変形させた大型鋸による連撃と、ブースターの加速によって素早い動きで背中をとる切歌の鎌を受け止める。

一度吹き飛ばされて本調子にはいったのか今度は距離をとることなく、マリアの短剣による高速斬撃を捌いていく。

(繰り出す手数で、あの怪物の召喚さえ押さえてしまえばッ……!)

マリアが力づくだがカリオストロの防御陣を粉碎する。もう一手を打ち込もうとしたその時だった。装者三人の体を激痛が貫いた。適合係数が低下し、ギアが彼女達に牙をむいたのだ。

「適合係数急激に低下! まもなくリンカーの有効時間を超過します!」

「ッ?! 指令! シュルシャガナとイガリマの交戦地点に、滑走中の!」

「航空機だとお?!」

彼女たちの真正面からジャンボジェット機が滑走していた。サブパイロットが戦う彼女たちを見てメインパイロットに報告する。

「人が! 割とかわいい子たちが……!」

「構うな! 止まったらこっちが死ぬんだぞ!」

そう、彼らも追われているのだ。ジェット機の後方を見ると、タイヤのように転がるアルカ・ノイズが赤いプリマ・マテリアを巻き上げながら接近してきている。

正面にいる切歌が調に提案する。

「調!」

「切ちゃんの思うところはお見通し!」

「行きなさい! 後は私に任せて!」

「了解デスッ!」

マリアがカリオストロたちを抑え込むと宣言し、彼女を信じて切歌がプレラーティを引きはがして調と共にジェット機の離陸を支援する。

プレラーティは地面に落ちたぬいぐるみの腹を掴み、

「あの二人でどうにかなると思っっているワケダ……」

「でもこの二人をどうにかできるかしら？」

カリオストロ、プレイヤーティ。二人の錬金術師にマリアが単身立ちはだかる。勝利条件は倒すことではなく足止めと、召喚をさせない事だ。

切歌と調はマリアを信じ、ジェット機を追うアルカ・ノイズに攻撃を撃ちこむ。見る見るうちに数は減っていくが、その中から二体が攻撃をかくぐり、タイヤを分解した。このままではバランスを崩してしまう。が、調が脚部の鋸を高速回転させ、切歌はスキーのように足裏にブレードを展開して肩のブースターで加速することで下から機体を支えることで解決した。

本部からモニター越しに、何時ギアが解除されるかわからないにもかかわらず行動に移す彼女たちを見て、エルフナインは感銘を受ける。

(諦めない心……あれはッ！)

そして足止めを担当しているマリアに淡い輝きを視た。マリアは額に汗を流したが、エルフナインから繋がった通信に耳を傾ける。

『皆さんーもう一瞬だけ踏みとどまってください！その一瞬は、僕がきつと永遠に見せませす！僕もまだリンカーのレシピア解析を諦めていませんっ！だから……諦めないでッ！』

エルフナインの叫びに彼女たちは答ええない。だが、領き合い、心で通じ合っているからこそ分かる。調は切歌に支えるのを任せ、加速して前へ進む。切歌がアーマーを変形させてジャッキのようにして支え、鎌の柄を前にいる調に伸ばす。調は脚部鋸を大型化させてタイヤのようにし、後ろから伸びてきた鎌の柄を肩越しに掴む。

そしてタイヤにスパイクを形成して強引にブレーキを掛け、切歌はさらに加速して強引に持ち上げて目の前にあつた管制塔を飛び越した。

マリアは短剣をガントレットの後部に接続し、変形させて砲台を作り出す。



光線が発射され、カリオストロたちを飲み込んで爆発した。爆炎が黙々と昇っていく。

「流石です、皆さん……」

エルフナインが感嘆した。

それとほぼ同タイミングでマリア達のギアも解除される。マリアは荒い息を吐くが、眼前で起きたことに驚愕した。

確実に直撃のはずだったのだ。それにもかかわらず、二人の錬金術師は健在。しかも傷一つない。カリオストロは「ちつつち」と指を振っている。

「まだ戦えるデスカ?!」

「でも、こっちはもう……」

リンカーがない以上、三人は戦うことが出来ない。そしてそれは即ち、カリオストロたちに無敵の竜、ヨナルデパズトリーの召喚を許すことを意味していた。

カリオストロが手を伸ばす。

「おいでませー！無敵のヨナルデパズトリー！」

手のひらから現れた白き球体から竜の姿が天に昇り、まばゆい光と共に体の透けた、しかし前回に現れたソレと同じ力を持つ竜が出現した。

「時限式ではここまでなのツ?!」

「うおおああッ！」

暗い絶望がマリア達を襲う。筈だった。暗き夜の闇から二つの叫びと一つの炎、一つの電光が二つの光跡を描きながらヨナルデパズトリーに直撃する。光跡の正体はガングニールを纏った響と、ケラウノスを纏った雷だ。

無駄な一撃だとプレラーティはあざ笑う。

「ふふん。効かないワケダ……」

だが、響の拳と雷の蹴りが突き刺さったところは修復の兆しを見せない。破壊のエネルギーが膨れ上がる。

「ッ?!」

「なあ?!」

無敵性を打ち破られた錬金術師たちは驚愕し、

「それでも無理を貫けば！」

「道理なんてぶち抜けるデス！」

「はあああッ！」

「でやあああッ！」

響の拳が。雷の蹴りが。錬金術師が誇る無敵の竜を貫き、粉々に粉碎、破壊した。装者たちは歓声を上げる。

「どういうワケダ……」

「もう！無敵はどこ行ったのよう！」

プレラーティは破壊されたという現実を受け止めきれず、カリオストロは体をくねらせてふぎけたように疑問を口にした。

二人が着地し、並び立ち、響は構える。雷はノーガードで脱力した状態だ。

「だけど私は、ここに居るッ！」

「今の私はすこぶる虫の居所が悪いんだ……！」

雷と響、二人の双眸が錬金術師たちを正面からとらえた。

## 回り始める歯車

バルベルデから帰還した雷たちは、リディアンの講堂で始業式をしていた。調と切歌も最初のような遠慮やためらいがなく、今ではすっかりリディアンの一員だ。

響の夏休みの宿題は雷と未来が全力を尽くしたものの、バルベルデの一件でただでさえ無かった時間を圧迫され、終わらせることが出来なかったようだ。響は先生に頭を下げ、未来が頭を抱え、雷は机に額を押し付けている。

なお、その後にあつた水泳の授業では響はかなりの好成績を出していた。雷は例によって見学である。過去の闇は取り払うことは出来たものの、流石にトラウマを克服するのは一朝一夕ではどうにもならない。

授業が終わった後、雷にリボンを結われながら響の髪をすく未来が言った。

「大変だったのね。急に飛び出して行つたと思つたら、地球の反対側でそんなことが……」

「うん……。そこでまた、錬金術師に出会つたんだ……」

「連中の所為で私達が駆り出されることになつちやてねえ……」

響が落ち込み、雷がため息をこぼす。二人は、エスカロン空港でのことを思い出していた。

雷たちはヨナルデパズトリーを破壊した後、カリオストロとプレラーティの二人の錬金術師と相対していた。少しのきっかけで激突する。そんな剣呑な空気が二組の間に満たされ、緊張の糸が張り詰めていく。だが、その糸を切つたのは空中から現れたサンジェルマンだった。

彼女の姿を確認しカリオストロが、

「サンジェルマン！」

「てことは、ティキの回収は完了したというワケダ」

「ああ……ッ?!」

完全にキレている雷がその隙をつかないはずがない。彼女は音も

なく雷光の速度で接近し、稲妻を纏った回し蹴りでサンジェルマンの首を刈り取ろうとする。その速さは稲妻の残光が弧を描き、目視で光の跡を確認できるほどだ。直撃は免れない。

いくら身体を強化している錬金術師であろうとも、生命維持において重要な部分である首を攻撃されてはひとたまりもないだろう。

「よつと」

「なッ?!」

だが、その一撃は、柔らかなサーベルの切っ先によって逸らされた。雷の体が蹴りの勢いに従って空中を踊る。いわば、ライフルの玉を切らずに弾道だけをそらすような絶技を、突如現れた人物がなしたのだ。その姿は白い羽を刺した黒のノーブルハット、黒い外套に黒いスーツ、茶色い革のトランクケースを片手に携えた男装の麗人であった。

「無事かい？サンジェルマン」

「ヨハンさん……」

「ふふ、いくら幹部と言えど相手から視線を外すようでは、いつか手痛い怪我を負うことになるよ？」サーベルを雷に向けたまま、ヨハンは楽しげに笑う。

「私もまだまだですな」

自身の師匠であるヨハンにサンジェルマンは目を伏せて微笑む。

厳密に言えばヨハンが彼女に教えたのは基礎中の基礎。指先に炎を灯したり、文字の読めなかった彼女に読み書きを教えた程度で、今や錬金術そのものの実力においてはヨハンよりもサンジェルマンのほうが上だった。

だが、錬金術の道具開発、サーベルによる剣技と錬金術を組み合わせた戦闘や錬金術の根幹の一つ、『等価交換』による置換錬金において彼女の右に出るものはいない。故に年下の上司のような関係であるサンジェルマンは今でもヨハンの事を尊敬しているのだ。

ヨハンがサーベルをしまつて胸の横にまで持ち上げたトランクケースをポンポンと叩き、

「目的の物は用意してある」

「ありがとうございます」

感謝の念をサンジェルマンは彼女に伝えた後、表情を引き締めて響の元に戻った雷。遅れて到着した翼、クリスと相対した。

「フィーネの残滓、シンフォギア！だけどその力では、人類を未来に解き放つことは出来ない！」

「フィーネを知っている……？それに、人類を解き放つて……」

「まるで、了子さんと同じ……バラルの呪詛から解放するって事……?!」

「まさか、それがお前たちの目的なのか?!」

「ならばなぜ、無辜の人々を傷つける！」

翼たちの疑問、雷の怒りにサンジェルマンは答えない。彼女は正面を向いたまま、

「カリオストロ。プレラーティ。ここは引くわよ。ヨハンさんも」

「ヨナルデパズトリーがやられたものねえ」

「体勢を立て直すワケダ」

「来てすぐに撤退とは……仕方がない」

「未来を、人の手に取り戻すため。私達は時間も命も費やしてきた

……。この歩みは誰にも止めさせやしない」

「未来を人の手にとって……待って！」

取り出したテレポトジェムを地面へ投げ落とし、転送用の錬金陣が彼女達の足元で発光し始め、響の問いかけを最後まで聞くことなく姿を消した。

その時の話を聞き終え、リボンの形を調節されながら未来は口を開く。

「目的が了子さんと同じだとしたら……」

「そうしなければならぬ理由があるのかも知れない……。だけど、その為にたくさんの人を傷つけていいことにはならないよ……」

後ろを向いた響に雷は無言で頷いた。

脳裏に足を失ったステファンのことが蘇る。悲しみ、怒る彼の姉、ソーニャ。そして彼を助けるために足を撃ち抜いたためにソーニャに罵倒され、苦しむクリス。

「ハア……」

響は思わずため息をついた。それが気になった未来が、

「響、他にも何か心配事があるんじゃない?」

「え?! ああああ! うん! 翼さんとマリアさんが現地に残って調査を続けることになったんだ! リディアンのは戻ると言ってるから、もう帰ってくるはずなんだけど……!」

「雷は心配事、ない?」

響が何かを隠しているのはわかった。だが同じ現場にいた筈の雷にも聞いた。さっきまで彼女は背後にいたのだ。表情の変化が分からない以上聞かれないだろう。

雷は二度三度口を開閉させ、そっぽを向いた。そんな二人を、正面から未来は見つめる。根負けした二人は、

「ちよつと聞いてくれるかな……」

二人の声が重なった。

バルベルデから帰国している翼とマリアを乗せたプライベートジェットが空を飛ぶ。機内ではマリアが雑誌を広げ、翼は窓から空を見ていた。彼女の足元には大きく、嚴重なロツクがかけられたケースが立てかけられていた。

○○○

ここは海辺のあるどこか、そこに建てられた屋敷の一室。その一室のベットに水晶のようなものから取り出されたティキが横たわっていた。

サンジェルマンは彼女に手をかざし、錬金術でティキのコアユニットを格納する胸部カバーを取り外す。

(ティキは、惑星の運航を製図と記録するために作られたオートスコアラ―)

サンジェルマンの前にあるテーブルにヨハンがトランクケースを置き、それを開けて中から石化した歯車のような物体を取り出した。サンジェルマンは歯車を錬金術で浮かせ、石の部分だけを破壊し、元の道具としての姿『アンティキティラの歯車』としえ復活する。

(機密保持のために休眠状態となっても、『アンティキティラの歯

車』によつて再起動し、ここに目覚める)

エーテルの回転を受けてひとりでに回転し始めた歯車をテイキの胸部に埋め込み、胸部カバーを元に戻した。再起動の証明として顔の上半分を覆うバイザーのような部分が発光し、浮遊、埋め込まれた球体が輝き、プラネタリウムのように星を投影した。そしてそれが元に戻ると、四百年間機能停止状態だったためぎこちない動きであるが、再起動したテイキが起き上がった。顔を覆うバイザーを取り外す。

「ふう……」

「久しぶりね、テイキ」

「やあ、おはよう」

サンジェルマンが厳格に、ヨハンは気さくに声をかけた。テイキの顔が二人のほうを向く。彼女は症状をぱあつと明るくして、

「サンジェルマンとヨハン?! ああ〜! よんひやくねんちかくけいかしでも、ふたりはふたりのままなのね?!」

「そうよ。時は移ろうとも、何も変わってないわ」

「つまり、いまもまだじんるいをしはいのくびきからときはなつためとかなんとか、しんきくさいことをくりかえしているのね? よかつた! げんきそうで!」 ティキは踊っている。

「テイキは変わらないな」

ヨハンは苦笑いを浮かべ、頬を搔いた。

突然テイキが周囲を見渡すようにして誰かを探している。その答えはヨハンたちからすれば一目瞭然だ。

「うーん?! うーん?! ところでアダムは?! だいすきなアダムがいないと、あたしはあたしでいられないい〜!」

統制局長アダム。オートスコアラーであるテイキの思い人。彼を探して自らの体を抱き、身をよじる。彼女が探しているのを知っているのか、テラスの窓が開き、そこにはダイヤル式の固定電話がぽつねんと置かれていた。ベルがジリジリとなっている。

電話の持ち主は、彼女達の上司。統制局長アダムだ。

## 無敵破りの証明

統制局長アダムのテレパス能力が実体化したダイヤル式固定電話をサンジェルマンが取る。錬金術師として上位になると普通なら脳内で行うテレパスを実体として発現させることが出来るのだ。それによってテレパス能力を持たない非錬金術師でも同等の事が行える。

ヨハンもテレパスを手紙という形で発現させることが出来るが、アダムは電話だ。それだけでアダムはどれほど錬金術師として上位にいるかが分かるだろう。

サンジェルマンは少し煩わしそうに受話器を耳に当てた。

「局長……」

「え?!それなに?!もしかしてアダムとつながってるの?!」

「あ……」

だが、横からいきなり現れたティキがサンジェルマンの手から受話器を横取りした。サンジェルマンとヨハンは組織人としてここに居るが、ティキは完全に彼女らの組織のトップに恋する小娘であり、遊びに来て厄介ごとを増やす面倒な子供だ。

電話という物が良く分かっていないにもかかわらず、ティキは取り上げた受話器を上下逆さに耳に当てる。

「アダムー!いるのー?!」

『久しぶりに聞いたよ、その声を』

「やっぱりアダムだ!あたしだよ!アダムのためならなんでもできるティキだよ!」ティキは受話器を正しい向きに持ち替える。

『姦しいなあ、相変わらず。だけど後にしようか?積もる話は』

アダムのしゃべり口は独特で、倒置法を使って話している。

自分本位な感情を最優先するティキをサンジェルマンとヨハンは非常にめんどくさそうな目で見降ろす。彼女は四百年ぶりに愛する人と会話出来て有頂天になっていた。

「アダムのいけずう!つれないんだからあ!そんなところもすきだけどね!」

話の相手が自分でないと分かったティキはもう用はないと言うよ



うに素っ気なくサンジェルマンに受話器を返した。

サンジェルマンがそれを受け取る。

「申し訳ありません、局長。神の力の構成実験には成功しましたが、維持にかなわず喪失してしまいました」

『やはり忌々しいものだな、フィーネの忘れ形見、シンフォギア……』

「疑似神とも言わしめる不可逆の無敵性を覆す一撃。そのメカニズムの解明に時間を割く必要がありますが……」

『無用だよ、理由の解明は。シンプルに壊せば解決だ。シンフォギアをね……』

「了解です……。カリオストロとプレラーティが先行して討伐作戦を進めています。私達も急ぎ合流します」

サンジェルマンの申し出はすげなく却下された。

アダムは錬金術師としては異端であり、錬金術の基礎の一つである『解明』を行おうとせず、自身の恵まれた能力で上から破壊しようとすることが多い。逆に彼女の師匠であるヨハンはそこを最優先する質だった。

ヨハンの得意とする『置換錬金』は存在の価値を理解せねば十全な強さを発揮しない。錬金術師としてサンジェルマンが彼女を尊敬しているのはここだ。今は自分が能力差で上に立っているが、彼女は幹部になっても基礎の基礎を怠るようなことはしない。

故にアダムによって原因究明は無駄とされた今でも、彼女は無敵性が破壊された要因を思考している。

サンジェルマンはテラスから戻り、ソファアで寝そべっている彼女に声をかけた。

「ヨハンさん。あの神を殺す一撃、何かわかりましたか？」

「いんや、何にも。まさしく迷宮入りさ。あの二人のうちどちらか、もしくは両方が神を殺すような力、ないしそれに類する力を持っているとしか言いようがないね」ヨハンは起き上がり、顔にかぶせていたノーブルハットを頭にかぶりなおす。

「報告によればあれはガングニールとケラウノスのシンフォギア。聖遺物由来のものという可能性は……」

ヨハンが顎に手を当て、

「うーん。ガングニールに神を殺したなんて話はないし、ケラウノスは巨人ならまだしも竜だからねえ……。世界を破壊する！なんて逸話もあるけど、それは完全なケラウノスと一体化したゼウスが使えばの話。シンフォギアと言う欠片で、しかも神ではなく人間がそんなことすれば逆に焼き尽くされるよ」

「ヨハンさんも同じ答えですか……」

一応、サンジェルマンも無敵破りの証明を進めて行き詰っており、おおよそ五十年長く生きるヨハンなら何かわかるかもと思っていたのだが、流石の彼女もお手上げのようだった。

「ま、とにかくにも情報も少なすぎる。後は現地収集しかないね」

ヨハンが茶色い革のトランクケースを手には立ち上がる。二人の錬金術師の間を海風が吹き抜けていった。

〇〇〇

帰国のためにプライベートジェットに乗っていた翼とマリアであったが、着陸の直前にアルカ・ノイズの襲撃を受けていた。召喚したのはもちろん、先行していたカリオストロとプレラーティだ。彼女たちは管制塔の上に立ち、羽から赤いプリマ・マテリアを出しながら高度を落としていくジェット機を眺めている。

「うふふふ！命中命中。さて、攻撃の二段三段と行きましようか！」

「出迎えの花火は、派手で大きいほど喜ばれるワケだねえ」

彼女たちの思惑に呼応するようにアルカ・ノイズがコクピットを攻撃し、パイロットたちが分解される。客室でマリア達が立ち上がった。

「着陸直前の無防備な瞬間を狙われるなんて……！」

「日本まで追って来たということか……！」

アルカ・ノイズの一体が機体側面を分解し、爆発。爆発によって発生した亀裂から彼女たちが持ち帰ったケースが外に飛び出していく。

それに気づいて反応するが、翼は間に合わないとみてマリアが飛び掛かった。

「ケースがッ?!」

「はああっ！」

だがギリギリで間に合わなかった。マリアはケースの取っ手を掴んだもののそのまま外に頼りだされてしまったのだ。生身で助けに行くのは不可能。ならばと翼は天羽々斬の起動聖詠を口にする。

「Imyuteus Amenohabakiri Tron」

遂にアルカ・ノイズの群れが機体全体を破壊した。だが、間一髪で間に合った翼は爆炎の中から飛び出すと手に携えた二振りの剣を組み合わせて大剣に変形させ、大振りの一閃を放った。

『蒼ノ一閃』

空を裂く一閃はマリアを襲おうと飛んできていたアルカ・ノイズを切り伏せ、翼はさらに大剣の振りを基点に空中を踊るように駆け、斬撃を飛ばしながらアルカ・ノイズの数を減らしていく。だが、下は海。このままではシンフォギアを纏っている翼はともかく、生身のマリアは海面に叩きつけられるだろう。

そんな時、本部からの通信が入る。

『翼ア！マリア君をキャッチし、着水時の衝撃に備えるんだ！』

「そうはさせないワケダ……」

「たたまかけちゃうんだからー！」

背後から攻撃を加えてくるアルカ・ノイズを斬り裂いていく翼だったが、数体を取り逃がし、マリアのほうに向かわせてしまった。冷静に彼女だけを避けて斬撃を放つが、それでも残った者たちがマリアに群がっていく。

『マリアさん！』

『加速してやり過ぎすんだッ！』

大の字に体を広げて落下速度を落としていたマリアだったが、弦十郎の指示に合わせて体を真っ直ぐにし、空気抵抗を落として落下速度を上げる。速度を上げたおかげでアルカ・ノイズの攻撃を間一髪でやり過ぎすことが出来た。履いていたハイヒールのヒール部分が分解される。

その隙について脚部ブレードに備わったブラスターを点火してマリアを抱え、空に大剣の切っ先を掲げる。すると蒼き閃光と共に無数

のエネルギーで構成された剣が雨のように降りしきり、残存するアルカ・ノイズを全て斬り裂いた。

『千ノ落涙』

何とかすべての攻撃をかくぐった翼たちは海面に着水し、ホバークラフトの要領で海岸へと向かう。

その光景をプレラーティがつまらなそうにつぶやいた。

「流星にしぶといワケダ」

「癪だけど、続きはサンジェルマンが合流してからねえ」

お姫様だつこの状態で翼に抱かれているマリアが、

「手厚い歓迎を受けてしまったわね……」

「果たして、連中の狙いは私達装者か、それとも……」

マリアが今所持している、持ち帰ったケースの中身か、だ。

本部に帰還した二人にリディアンにいた残りの走者たちが駆け寄る。

「センパイ！」

「翼さん！」

「翼さん！マリア！」

「マリア！」

「デス！デス！デース！」

一番最後に入ってきた切歌がマリアに抱き着いた。マリアは彼女を首から下げたまま、

「大騒ぎしなくても大丈夫。バルベルデ政府が保有していた資料は、この通りピンシヤンしてるわよ」マリアは平気そうにケースを見せるが、彼女達が心配しているのはそっちではない。

「そうじゃなくて！敵に襲われたんですよね……？ホントに無事ではなかった……」

「帰国早々心配かけてすまない。気遣ってくれてありがとう」

「だが、安心してばかりじゃいられないのが現状だ。これを見てほしい」

弦十郎が親指で背後のモニターを指し、そこに友里たちが見つけた水晶と仲に眠る人形、テイキが映される。

「これは……？」

「私達がバルベルデ政府に潜入した際に記録した、人形の映像よ」

「ついでに言うとおートスコアラ」解析に加わっていた雷が情報を追加する。

「前大戦時、ドイツは、化石燃料に代替するエネルギーとして、多くの聖遺物を収集したという。そのいくつかは、研究目的で当時の同盟国である日本にも持ち込まれたのだが……」

「私の纏うガングニール……」

それを聞いて、雷の中に電流が流れた。彼女の脳内で一つの仮説が組みあがっていく。恐らくは、錬金術師たちの現時点での切り札。ヨナルデパズトリーを、神の持つ不可逆の無敵性を完全に殺すことのできる仮説。この仮説が立証されたとすれば、あの時に無敵性を無効化した理由に証明がつく。

（かの独裁者はキリストを刺した槍『ロンギヌスの槍』を欲したという……。それをすでに彼が手に入れていて、もしも、万か億かに一つの確立だけど……）

「……注意を怠らないで欲しい。……雷君」

「は、はいー」

思考に夢中で全く話を聞いていなかった雷は、肩を跳ねさせて返事をした。緊張状態だったメンバーの間にあつた糸が程よく緩む。

ちよつと困った顔をした弦十郎は苦笑いを浮かべ、

「全く、君の頭の回転の速さと思慮深さ、それに対する集中力は称賛に値するものだが、話は最後まで聞くべきだぞ」

「はい……」

弦十郎に叱られた雷ががっくりと肩を落とした。

## 亜空間の檻

スマホを見ている未来の背中に、会議を終えた響が駆け寄って声をかけた。そんな彼女の後を、眉を☒の字にして珍妙な表情で唸っている雷が歩いてきた。

「未来——お待たせ！」

「翼さん達は大丈夫だった？……どうしたの雷」

「いや……さっきまで何かとても重要なことを考えてたはずなんだけど……」

雷は腕を組み、顔を右へ左へ傾けながらさっきまで考えていたことを必死に思い出そうとしている。が、考えていたことの一かけらも思い出すことが出来ないでいた。うんうんと唸っている。

そんな雷を見て、響がニヒヒっと悪戯っぽく笑う。

「実はね未来。雷ってば考え事のし過ぎで話聞いてなくて、師匠に怒られちゃったんだよ」

「もう、考え事するのはいいけど、人の話は最後まで聞いたほうがいいよ？」

「それ、弦十郎さんにも言われた……」

呆れながらも笑う未来に弦十郎と同じことを言われ、がつくりと肩を落とす。

三人が集合したのはこれから行くところがあるからだ。肩を落とす雷は気を取り直し、忘れたものはまたいずれ思い出すと見切りをつけて、目的とカフェへと向かった。

カフェについた三人は、雷が宇治抹茶、未来が苺のかき氷、響がお茶を注文する。ここに来た理由は一つ。未来に今朝の相談事を聞いてもらうためだ。未来の対面に響と雷が並んで座る。

未来がかき氷の山を軽く突き崩し、

「それで？今朝のの続きを聞かせて？」

「うん……。バルベルデのこと、話したでしょ……」

「私のミスで、現地の男の子が足を無くしたってやつ……」

雷は闇を背負うことで悪いことを自分の所為だと決めつけず、自罰

行為をしなくなっただけはいるのだが、今回は流石に責任を感じていた。自分がしっかりとアルカ・ノイズを殲滅できていれば、ステファンは足を失わず、ソーニャは悲しまず、クリスは落ち込まなかった。

ぐるぐると回り、熱くなっていく思考を雷はかき氷をかきこむことで冷却する。キーンと頭は痛くなったが、今はそれが心地いい。

響が先を続ける。

「クリスちゃん、あれから落ち込んでるんだ……。何とか元気づけてあげたいんだけど……」

「大きなお世話だ!」

「うええっ?!」突然背後から現れたクリスに二人は驚愕する。驚きのあまり雷は白玉を一つ落としてしまった。それに気付いた彼女は肩を落として落胆する。

「その言い草はないだろう、雪音。三人はお前を案じているんだ」

「うえー?!翼さんもいるー!」

「私達だけでなく、みんなが雪音のことを心配している」

クリスはちゃんと席に着き、テーブルに肘をついた。

「分かっている!けど、ほっといてくれ!あたしなら大丈夫だ!ステファンの事はああするしかなかったし、同じ状況になれば、あたしは何度でも同じ選択をする!」

「それが雪音にとつての、正義の選択というわけか」

「ああ……。だからバカ二号も気にすることねえぞ!お前がいくら天才だからって、人間である以上失敗はするんだからな!」

「……分かった」

クリスは目を伏せて後ろに座る雷に言った。雷は少し困ったようにしていたが、納得して頷く。響は背もたれから身を出し、気になったワードをオウム返しに聞いた。

「正義の……選択?」

「そっぴやお前、まだ夏休みの宿題を提出してないらしいな?」

クリスの言葉が場の空気を変えた。響は女の子が出してはいけないような声を出して未来と雷に向かって手を合わせて懇願する。

「そおだったあ……!どうしよう未来う雷あ……」

「頑張るしかないね」掬った宇治抹茶をぱくりと食べる。

「誕生日までに終わらせないと」

「立花の誕生日は近いのか？」

「はい！十三日です」

「はぁーん？あと二週間もないじゃねえか。このままだと、誕生日も宿題に追われッ……」

クリスの言葉を通信機から鳴るアラートが遮った。全員が素早くポケットから取り出し、耳に当てる。案の定、アルカ・ノイズが出現したのだ。即ちそれは、錬金術師たちが行動しているということ在意味する。

「はい！響ですー」

『アルカ・ノイズが現れた！位置は第十九区域、北西Aポイント！そこから近いはずだ！急行してくれ！』

指示の通りに向かうと、そこにはすでにあたり一面を埋め尽くさんとするほどのアルカ・ノイズが召喚されていた。響はペンダントを掲げ、ガングニールを起動させる。

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro  
n」

雷たちも続き、シンフォギアを身に纏う。

彼女たちにとってアルカ・ノイズなど道端に生える雑草と同じ、たわいもない相手だ。その証左に見る見るうちに数を減らしていく。

四人の歌が戦場を貫いていくのを、近くのビルの上からカリオストロとプレラーティが見下ろしていた。彼女たちの背後にテレポートの転送用錬金陣が展開され、そこからサンジェルマンとヨハンが現れる。

「漸く到着と言うワケダ」

「首尾は？」

「まだ誘い出したところよ」

「ほら、これ」

ヨハンがトランクの中から巻物のような、ダイヤルが組み込まれたものをサンジェルマンに手渡す。



「試作に終わった機能特化型だ。今が使いどころだろう」

中身はアルカ・ノイズだ。全てヨハンが設計、製作したモノであり、あまりに使いどころが限られるために試作止まりになったモノだった。

サンジェルマンはそれを黙って受け取り、ダイヤルロックを解除して中から三つのアルカ・ノイズを封じ込めた石を取り出した。彼女は真ん中のものを選択する。

「その力、見せてもらいましょう」

手に取ったそれを戦闘区画に放り投げた。

落下地点からはこれまでとは比較にならない赤い輝きが装者たちを照らす。

「あれはアルカ・ノイズか？」

「新手のお出ましみたいだな！」

それと同時に巨大なアルカ・ノイズが出現し、プラネタリウムの様に星々を投影。そして投影した空間に装者たちを閉じ込めてしまった。

本部でもその様子がとらえられ、カメラで状況を確認できず、ギアに搭載された收音機で何とか状況を把握している状態だ。

想像を絶するアルカ・ノイズの手法に装者たちはうろたえる。

「さつきまで街中だったのに……」

「結界を張ったのか……？」

そんな装者たちの横っ腹から無数のアルカ・ノイズが接近してきていた。どこであろうとアルカ・ノイズを殲滅するという任務は変わらない。翼は防人故に一切うろたえることなく二振りの剣で斬り裂いた。だが、アルカ・ノイズは撃破されず、切り口から接合して復活した。響の打撃も雷の稲妻もクリスの弾幕も一切効果がない。

本部でもその原因を究明しているが、アンチリンカーと言う適合率を下げるようなアイテムは使われていない以上、こちらの攻撃力を下げることなく守りを固めているということだ。

『四人とも！聞こえるか！』

「おっさん！どうなってやがる！」

弦十郎が解析した情報を装者たちに通達する。

『そこはアルカ・ノイズが作り出した、亜空間の檻と見て間違いない！』

「亜空間の檻……ですか……？」

「そうか！最初に現れた奴を撃破すれば！」

「だったら最大威力でぶち抜くだけ！」

「呪いの剣、抜きどころだ！」

「二「イグナイトモジュール！抜剣ッ！」」

四人は背中合わせで一か所に集まり、イグナイトモジュールのウィングスイッチを押し、モジュールを起動させる。

それと同時に、本部からエルフラインの通信が入った。彼女はこの空間の仕組みを解明したのだ。

『皆さん！そこから空間の中心地点を探れますか?!こちらで観測した空間の形状は半球！であれば、制御期間は中心にある可能性が高いと思われれます！』

「クリス！」

「ああ！」クリスが回転しながらガトリングで弾丸をばら撒いていく。

「クリスちゃん?!闇雲に撃つてもッ！」

「歌い続ける！ばら撒いたのは、マイクユニットと錬づするスピーカードッ！」

「空間内に反響する歌声は私が拾って計算するッ！」

「そうか！ソナーの要領で、私達の配置と空間内の形状を把握できればッ！」

四人は歌い、戦闘を再開する。これによってマイクユニットが拾った歌声がスピーカーから流れはじめ、雷のテイアラが反響する歌声を拾い、彼女の高速演算によって隠れていたアルカ・ノイズの居場所を割り出した。

雷がクリスに指示を出す。

「クリス！七時方向ッ！」

「おおよッ！」

クリスは指示通りに振り返り、腰部アーマーを展開して小型ミサイ

ルを投射した。弾頭は不可視の存在を視認できるようにするためのペイント弾だ。

『MEGA DEATH PARTY』

人型から胴体部分を切り抜いてくつつけたような、奇妙な形のアルカ・ノイズが可視化する。こいつがこの空間を展開したあるかノイズだ。ならばやることは一つ。

「立花ッ！乗れッ！」

「はいッ！」

翼は剣の上に響を乗せて両刃の大剣へと変形させ、カタパルトを成型。クリスが翼の背後に立ち、大剣に横に大型ミサイルを装填した。雷は地面を踏み割るようにして広域に電磁力場を展開し、アルカ・ノイズの侵入を拒みつつ一番最後尾で構えた。響がクラウチングスタートの体勢に入る。

『QUATERNITY RESONANCE』

「勝機一瞬ッ！この一撃に全てを賭けるッ！」

翼の号令を受けて、雷はクリスの背中に両手で掌底を叩きこむ。それによって地面に展開されていた力場が収束し、レールガンの要領で装者三人を弾丸のようにアルカ・ノイズに打ち込んだ。一直線に加速し、猛烈な速度の中、クリスが優れたバランス感覚でブースターを操作し、水平を保つ。

さらに響がカタパルトを使って前方に飛び出し、跳び蹴りでアルカ・ノイズを貫き、その後を翼の大剣が斬り裂いた。

この亜空間を展開していたアルカ・ノイズが撃破されたことで元の場所に戻り、残党をクリスと雷が狩りつくす。

本部でもその様子を捉えていた。ブリッジでは調と切歌が手を繋いで笑顔で飛び跳ね、アルカ・ノイズ撃破の立役者の一人であるエルフナインの肩にマリアがポンと手を乗せた。

「マリアさん！皆さんからもらった諦めない心は、僕の中にもありません！だからきつと、リンカーを完成させて見せます！」エルフナインは小さな手をグツと握りしめ、意気込みをマリアに示す。

「待っているわ」

マリアはエルフナインの意気込みを受け、待つことを決めた。

ビルの上で戦況を眺めていた錬金術師たちは面白く無さげな表情をしているようだった。そもそも、試作品止まりのアルカ・ノイズにそこまで期待していないのだが、

「あわよくば、と思つてたけど仕方ないわね。でも、目的は果たせたわ」

「ふーん？ そんなにのんきでいいの？」

「テイキ。アジトに残るよう言つたはずよ」

命令を無視して現場に来ているテイキに向ける顔色は良くない。サンジェルマンたちにとってテイキは計画達成に必要なアイテムである。決して彼女たちは子供の御守りをするためにいるのではない。

テイキは自分優先の考えを口にする。

「だつてえ、アダムにあえるかとおもつてえ。でもおこらないで？ いいことがわかつちやつたの！」

「何？」

くるくると回る。プレラーティなんかは今にも飛び掛かりそうなほどに頭に来ているようだ。テイキに向ける視線が異常に鋭い。

だが、天体運航を観測するオートスコアラであるテイキの言つた言葉は、計画をさらに進めるものであつた。

「なんとー……ここはわたしたちがかみさまにけんかうるのにい、ぐあいがよさそうなところよ！ これいじょうないつてくらいにね？」

テイキの瞳に観測した星の運航がうつる。

ヨハンは彼女の話をしつかりと聞きながら、下にいる装者たちの一人を楽し気に見つめていた。

## 人よりも国を

サンジェルマンは、力のない、ただ蹂躪されるだけだった過去を思い出していた。

ここはヨハンの研究室。怪しい光が揺らめき、幾本のチューブが部屋中を駆け回っている。そのチューブは全て机の上にある装置に繋がれており、その装置の中でハート形の宝石が四つ浮かんでいる。宝石の名は『ラピス・フィロソフィカス』。俗に賢者の石と呼ばれているものである。

部屋の主は外の空気を吸いに出ている。サンジェルマンはヨハンの技術の粋を極めたそれを見て、

「ラピス……。錬金の技術は、支配に満ちた世の理を、正すために……」

胸の中には、もう二度と、誰かを自分と同じような目に遭わせないという熱い志が燃えていた。

○○○

錬金術師たちの姿は、街中にある超高級ホテルの一室にあった。

窓の外から景色を眺めていたカリオストロは、背後から聞こえてきたティキの声に振り返る。彼女はベッドに寝そべり、最新の恋愛と言うのはどういうものかを研究すべく少女漫画を開いていた。だが、彼女の顔には『退屈』の二文字がでかかと貼られている。

「たいくついたらたいくつ！いいかげんアダムがきてくれないと、たいくつにくびりころされちやうかもお！」

枕に顔をうずめ、足をバタバタとばたつかせるティキに、ソファで優雅に紅茶を楽しんでいたプレラーティが「殺されればいいのに」と言わんばかりの視線を向ける。彼女はティキの事が苦手を通り越して嫌いなのだ。計画のキーピースでなければ即刻破壊しているだろう。

ばたつくティキをふんと鼻で笑ってティーカップを持ち上げた瞬間、カリオストロが声をかけてきた。視線をそちらに向ける。

「ねえ、サンジェルマンは？」

「ヨハンと共に私達のファウストローブの最終調整雄なワケダ。踊るキャロルのおかげで、ずいぶんと捗らせてもらったワケダ。後は……どこに行こうとしているワケダ？」

飲むのを止められたため、目を閉じて香りを楽しみながら質問に答えるプレラーティの横を、カリオストロはすたすたと歩いて行つた。如何やら外に出るらしい。プレラーティはティーカップとソーサーを持ったままソファから立ち上がり、カリオストロの背中を見つめる。

「もしかしてもしかしたらあ！まさかのぬけがけ?!」

「ファウストローブ完成まで待機できないワケダ……」プレラーティが呆れたように言う。

「ローブ越しつてのがもどかしいのよねえ。あの子たちは直接触れて、組みしきたあいの！」カリオストロは振り返り、身を抱いて楽しそうに言った。

「ちよくせつふれたいって、まるでこいのようなしゅうしんじやない！あー！わたしもアダムにふれてみたい！むしろさんざんばらふれたおきたい！」

ティキが身をよじらせ、ベッドに倒れ込んだ。それだけにとどまらず、ベッドの上を右へ左へ転げまわっている。

プレラーティが深くため息をついた。

〇〇〇

S・O・N・G 指令である弦十郎と主要メンバー、装者は認は装甲車に乗って松代にあるとある場所に向かつていた。その場所は『風鳴機関』。前大戦末期、旧陸軍が大本営移設場所にと選んだ場所である松代にある、聖遺物を用いた戦況打開法を研究する機関である。これはS・O・N・Gの前身である特異災害対策機動部二科のさらに前進であった。

風鳴と言う弦十郎、そして翼の名字が出てきた瞬間、思わず雷と響、クリスが彼女のほうを向いた。俯いていた翼が顔を上げる。

「そこで研究されていたのが天羽々斬と、同盟国ドイツからもたらされたネフシユタンとイチイバル。そしてガングニール……」

「バルベルデで入手した資料は、かつてドイツ軍が採用した方式で暗号化されていました。そのため、ここに備わっている解読器に掛ける必要が出てきたのです」

「暗号解読期の使用に当たり、最高レベルの警備態勢を敷くのは理解できます。ですが、退去命令で、この地に暮らす人々に無理を強いるというのは……」

「守るべきは人ではなく……国」

「塵の積もった考え方だな」

雷が壁にもたれ、弦十郎の言った論を嘲る。普段の彼女からは考えられないほどに視線は鋭く、冷淡な口調だった。

そんなことを言われるのは予想の範疇だったのか、弦十郎は一切取り乱すことなく続ける。

「そうでなくとも、鎌倉の意思はそういう事らしい」

風鳴機関の研究所内で複数の機械が稼働し、入手した資料の解析に当たっている。聖遺物と言う使い方によっては現代兵器を超越するような劇物をまとめた資料だ。解読完了にはそれ相応の時間がかかるだろう。弦十郎は翼のほうを向くと、彼女は間髪入れずに答えた。

「ブリーフィング後、雪音、立花を伴って周辺地区へ待機。警戒任務にあたります」

「……あれ？私は？」

さっきまでの人を刺し貫くほどの鋭い顔つきをしていた雷が目丸くし、自分を指さす。リンカーなしでシンフォギアを纏うことのできる雷だったが、警戒任務から外されたのにはケラウノスと言うギアの特性が関係していた。

弦十郎が雷のほうを向く。

「雷君はマリア君たちと共に避難に遅れた住民たちの捜索にあたってもらう」

「姉ちゃんにあたし達と違ってギアを纏えるデスよ?!」切歌が物申した。

「ここは精密機械を多数扱っている。雷君は問題なくケラウノスの稲妻を操るだろうが、この所長が戦闘時になれば信用ならんとうるさ

くてな」

ケラウノスは稲妻、即ち電気を武器にしているため、もしもの時に機械群が壊れてしまうかもしれないという危惧があったのだ。S・O・N・G・メンバーは雷の事を信用しているが、初対面のこの所長からしたらどうなるかわからず、溜まったものではない。

その結果が、マリアや切歌、調達と一緒に避難に遅れた住民の捜索である。双眼鏡を持って周囲を見渡す調と切歌の後ろを、マリアと並んでついていく。

「まあ、こつちの方が楽しいんだけどさ」

「九時方向異常なし!」

「十二時方向も……ああー!」突然切歌が大声を上げた。雷たちが切歌の向いている方を向く。彼女は農園を指さし、「あそこにいるデス! 252! レッツラゴーデス!」案山子を見て走り出していった。

「切ちゃん! それは……」雷が呼び止めたが切歌は止まらない。

「早くここから離れて……て怖?! 人じゃないデスよう!」

「最近の案山子はよくできてるから……」

調が呆れながら切歌に近づいていった。

二人は楽しそうだが、大人であるマリアの表情は暗い。

「リンカーの補助がない私達に、出来る仕事はこのくらい……」

「おつとお? それは私に対する当てこすりかなあ?」ニヤリと雷が笑った。

「そ、そんなこと……!」

「分かってる。茶化しただけ」

雷はリンカーなしでギアを纏えるにもかかわらず、ギアの特性から警戒任務を外されている。彼女は暗に相性と時間の問題だといっているのだ。遠まわしで分かりづらい励ましたが、今のマリアにはそれがありがたかった。少し表情が柔らかくなっている。

少し離れている調と切歌にも届くように声を張った。

「切ちゃんもしらちゃんも、あまり力みすぎないようにねー!」

「分かってるデス! よし! 任務再開するデース!」

頬をぺちぺちと叩き、気合を入れなおした切歌は、前を見ずに走り



出した。丁度そのタイミングで、トマト畑の中から人影が飛び出してくる。しかも、丁度切歌のすぐ前だ。

「あー！」

「切ちゃん！後ろー！」

「言ったそばから……」

「大丈夫ですか?!」

マリアと雷が切歌とぶつかった人影。恰好から見てもこの畑の主であろうおばあちゃんのもとに向かう。地面にはかごの中から転げ落ちた真っ赤に熟れたトマトがいくつかが転がっている。調と切歌が膝をつく。

「ごめんなさいデスー！」

「いやいや、こつちこそすまないねえ」おばあちゃんは温和に答えた。

「政府からの退去指示が出ています。急いでここを離れてください」

「はいはい。そうじゃねえ。けど、トマトが最後の収穫の時期を迎えていてね?」

おばあちゃんは両手に真っ赤なトマトを握って見せた。

調と切歌が目を輝かせる。雷も興味をトマトに向けた。

「ずいぶん真っ赤ですねえ」

「わあー！」

「美味しそうデスー！」

「美味しいよお。食べてごらん」

二人はおばあちゃんから受け取ったトマトにかぶりついた。サツパリとした酸味とほのかな甘みが口いっぱいに広がっていく。

「美味しいデス！調も食べるデスよお！」

「いただきます……。はむ……。ほんとだ！近所のスーパーのとは違う！二人は向かい合い、満面の笑みを浮かべ合う。雷もそれを食べ、どんな調理が合うかを少し思案していた。

「そうじゃろう。丹精込めて育てたトマトじゃからなあ」

「あ、あのねお母さん……」

「きやはーん！みいつつけた！」

山間なのにやたら露出の追い恰好をしているカリオストロが現れ

た。おばあちゃんをマリアの後ろにし、調と切歌の前に雷が立った。

## トマトの味

マリアと調、切歌をおばあちゃんのそばに移動させ、カリオストロの前にこの場で唯一シンフォギアを纏うことのできる雷が立ちふさがる。既にペンダントとは彼女の手の中にあり、何時でも起動するこ  
とが出来る状態だ。

カリオストロは四人に目をやってから呆れたように首を振る。

「あらら。まともなのは一人だけで後はいろいろザンネンな三色団子  
ちゃんかあ」

「三?!」

「色?!」

「団子とはどういう事デスカ?!」

三人は憤慨する。因みにマリアのアガートラムが白。切歌のイ  
ガリマが緑。調のシユルシャガナが桃色だ。家族を馬鹿にされた雷  
が眉を顰める。

「見た感じよ?怒った?」

「これで怒ってないように見えるならね……」

「あらあら、たった一人で大丈夫なのかしら?」

カリオストロの挑発にカチンと来ているのは事実だが、今彼女が冷  
静さを失ってしまえば事態は深刻になるだろう。彼女は自身に苛立  
ちの表情を見せることでカリオストロの視線を誘導し、後ろに回した  
右手でマリア達にハンドサインを出した。マリアの応答を知ること  
は出来ないが、彼女ならば確実に理解してくれるだろう。

カリオストロは手のひらいっぱいノイズ召喚ジェムを取り出し、  
周囲一帯にばらまいた。赤い陣が展開され、アルカ・ノイズが召喚さ  
れる。

すぐさま雷がペンダントを天高く放り投げ、起動聖詠を口ずさん  
だ。

「Voltaters Keilaunus Tron」

回転する紅いペンダントが彼女の目の前で光を放ち、その光の中か  
らケラウノスのギアを纏った雷が現れた。彼女は正面からアルカ・ノ

イズを見据えたまま、背後にいるマリアに叫ぶ。

「マリアー！」

「ええー！」

まさにツーカー。おばあちゃんを案ずる声と共に四人分の草を踏む足音が遠ざかっていった。しかし、流石の雷と言えど錬金術師にアルカ・ノイズを相手するのは骨が折れる。『シンカ・雷帝顕現』を使えば簡単に片付くだろうが、あれはそれほど容易に使っていないものではない。

だが、彼女は一人ではないのだ。

マリア達の後を追わせまいと雷がアルカ・ノイズを相手にしているところに、空の彼方から轟音と共にミサイルが飛来してきた。

「待たせたなあー！」

「雷をお願い！……行きましょー！」

クリスがミサイルに乗ったままボウガンから弾幕を張り、地上にいるアルカ・ノイズを蹂躪していく。

他の装者たちの招集。これがマリアに出したハンドサインの正体だ。マリアはハンドサインの意味を理解した後、カリオストロの視線が雷に集中しているうちに仮設本部に小声で通信を回していたのだ。

マリアはクリスに雷を頼んだ後、おばあちゃんを背負って戦線を離脱した。

本部でもその様子を捉えている。

「クリスちゃん現着ー！」

「雷ちゃんと合流し、交戦状態へと移行！」

「錬金術士は破格の脅威だ！雷君と連携して翼たちの到着を……！」

『それも……言ったられなさそうだッ！』

ミサイルで空を飛翔するクリスに向かってカリオストロの光弾が襲い掛かる。如何やら彼女はクリスを好敵手として見ているようだ。カリオストロの妨害にクリスは集中せざるを得なくなり、雷が単騎で未だ多く存在しているアルカ・ノイズを相手取る。さして脅威でもない相手だが、いかんせん数が多く、クリスの援護に回ることが出来ない。

カリオストロが気を良くして光弾を投げ続ける。

「会いたかったわ！ああん！めぐる女性ホルモンが煮えたぎりそうよッ！」

クリスがボウガンを放って光弾を相殺していくが、カリオストロが投げた最後の一発がミサイルの噴射部分を撃ち抜き、爆発した。爆発によって足場を失ったクリスは落下するも即座に着地し、ばら撒かれる光弾を回避する。

カリオストロは歓喜し、

「やつと近くに来てくれたあ！」

と自身の周りに無数の錬金陣を展開し、大出力の光線を放った。クリスがバク転で距離をとって回避している間に、アルカ・ノイズを殲滅し終えた雷がカリオストロの無防備な横っ腹から強襲を仕掛ける。

### 『Assault・Force』

乱れ撃たれる光線の中を身に纏ったフィールドで強引に突破し、肉体の電気信号を強引に加速させてパワーと速度を引き上げたボディブローを思いっきり叩きこんだ。ギリギリで防御陣を展開して直撃は防いだようだったが、斥力とは反発する力の事。ダメージこそ削られてしまったが、カリオストロの体が弾き飛ばされる。

「ぐう?!」

「鴨撃ちよりも簡単だ」

クリスが弓矢を展開し、力いっぱい張った弦の反発でロケットのようになっている矢を放ち、ブースターによってさらに加速し空中で身動きが取れないカリオストロを狙う。

これも彼女は両手で強固な防御陣を展開することで凌いだものの、爆炎を割りながら響が肉薄し、力強い踏み込みからの肘打ちが完全に無防備となった彼女の鳩尾を貫いた。

「せえやッ！」

装者三人の息の合った連携にカリオストロは吹き飛ばされ、地面の上を転がる。

響は残心をとったまま、

「内なる三合、外三合より勁を発す。これなる拳は六合大槍ッ！映画

は何でも教えてくれるッ！」

「くッ……！」

カリオスト口は近くにあった壁に手をつき、連携によって自身を吹き飛ばした三人に歯噛みする。そして、こんな開けた場所に壁があることに不信を抱き、目を向けると、その壁は鏡のように自分の姿を映していた。

思わず疑問を口にする。

「壁……？」

「壁呼ばわりとは不躰なッ！ 剣だッ！」 両刃の巨大な大剣の上から翼が見下ろす。

「信号機共がチカチカと……！」

因みに響と翼、クリスがランプで雷は信号機そのものだ。

さらに光線を続けようとするカリオスト口の脳内に、サンジェルマンからのテレパスが届いた。

『私の指示を無視して遊ぶのはここまでよ』

「チッ……！」 舌打ちを打ち、テレポトジエムを足元に投げ捨てる。

「次の舞踏会は、新調したおべべで参加するわ。楽しみにしてなさい。ばあああ〜い」

光の中で手を振りながら、彼女はその姿を消した。

○○○

太陽が傾き、空に赤みが差してきたころ。おばあちゃんを連れて避難していたマリア達は退避場所である小学校に来ていた。

トマトが入っている籠を背負ったままのおばあちゃんを背負っていたマリアが彼女を下す。

「ありがとね」

「いえ……」

「お水もらってくるデスよ！」

「待って切ちゃん！ 私も一緒に」

物資を運んできていた自衛隊のもとに切歌が向かい、その後を調が追う。そんな彼女達を、おばあちゃんは孫を見るような優しい目で見送る。

「ほほ、元気じゃのう」

「お母さん、お怪我はありませんか？」さつきまで戦場にいたのだ。マリアがおばあちゃんに問う。

「大丈夫じゃよ。むしろあんたらのほうが疲れたじゃろうに……。わしがぐずぐずしていたばかりに迷惑をかけてしまったねえ……」

「いえ……私達に守る力があれば、お母さんをこんな目には……」

リンカーが無ければ戦うことの出来ない自分に腹が立ち、表情を暗くして俯く。そんな時、おばあちゃんが何かを思いついたようにして、楽しげにかごの中からトマトを一つ取り出した。

「そうじゃ！せつかくだから……このトマト、あんたも食べておくれ」  
「わ、私、トマトはあんまり……」

マリアはトマトが苦手であった。やんわりと断ろうとしたが、おばあちゃんの有無を言わさぬような優しい微笑みの前に断り切れずに受け取ってしまう。

「では……ちよつとだけ頂きます」

黙ってトマトを見つめる。少したつてから目を瞑り、意を決して（小さく）一口齧った。だが、

「甘い……?!フルーツみたい!」

口の中に野菜特有の青臭さが広がらず、甘さとすつきりとした酸味が口の中で広がっていくのを感じる。驚きのあまり目を見開いた。

「トマトを美味しくするコツは、厳しい環境においてあげること。ギリギリまで水を与えずにおくと、自然と甘みを蓄えてくれるもんじやよ」

「厳しさに、枯れたりしないのですか？」自分の齧ったトマトをマリアが見つめる。

「むしろ甘やかしすぎるとダメになってしまう。大いなる実りは、厳しさを耐えた先にこそじゃよ」

「厳しさを耐えた先にこそ……」

道が分からない子供に道を指し示すことこそ大人の、先人の務めだと言うようにマリアの悩む顔をおばあちゃんは満足げに見つめる。答えは見つかっていないようだが、道筋は見えたようだ。少なくとも

も、おばあちゃんにはそう見えている。

彼女はマリアの膝に手を添えた。

「トマトも人間も、きつと同じじゃ」

○○○

仮設本部にて遠隔で解析を続ける弦十郎たちであったが、どうも難航しているようだ。進行具合が芳しくない。ウエルのデータ解析に当たっているエルフナインが背後の弦十郎のほうを向き、

「解析は難航していますね……」

「ぬう……」

「指令……。鎌倉からの入電です」

「直接来たか……。繋いでくれ」

「はい……」

「？」

「出します」

鎌倉……「人よりも国」という思想を持つS・O・N・G. 指揮官、風鳴弦十郎と内閣情報官、風鳴八紘の父であり、シンフォギア装者である風鳴翼の祖父（血縁的には父親）である風鳴訃堂を首魁とするこの国の防衛と政治を裏から操る組織である。

その組織の存在を全く知らないエルフナインは首を傾げ、彼女以外の大人たちは緊張の面持ちでモニターを見つめる。

映されたモニターには、簾で姿を隠す筋肉質な老人の姿があった。

『無様な……。閉鎖区域への侵入を許すばかりか、仕留めそこなうとは！』厳格で力強い声が聞こえてくる。

「いずれこちらの詰め甘さ、申し開きは出来ません」

『機関本部の使用は、国連へ貸しを作るための特措だ。だが、その為に国土安全保障の要を危険にさらすなどまかりならん！』

「無論です……！」

『異国の者を八島防衛、出所も分からぬ聖遺物の使用を特例で許可しているのだ。これ以上夷狄に、八島を踏み荒らさせるな』

訃堂は言うだけ言って通信を切った。彼の息子である弦十郎は深く息を吐いた。翼と同じで彼も訃堂の事が苦手なのだろう。



「流石にお冠だったな……」

「それにしても指令。ここ松代まで追ってきた敵の狙いは、一体……」

「狙いは、バルベルデドキュメント。または装者との決着。あるいは……」

あまりにピースが少ないために対策を練ることも作戦を立てることもできない。受け身に回るしかなかった。

## 破滅の極光

夜も更けてきて友里がバルベルデドキュメントの解析の補助に回り、エルフナインと雷がウエルの残したリンカーのデータ解析に当たっていた。雷は手当たり次第に彼に関するワードをベースにして解析してはやり直しを繰り返し、エルフナインはウエルがかつて務めていたF・I・S・でフィーネの遺伝子を持つとされていたレシピターチルドレンから共通項を見つけ出そうと検索を続けている。

そんな彼女達、友里のもとに湯気だったコーヒーを調達が運んでくる。

「友里さん」

「？」

「温かいもの、どうぞ」

「デース」

「温かいもの、どうも。なんだかいつもとあべこべね」

友里はそう言つて苦笑いした。

勿論友里だけではなく、雷とエルフナインにもマリアがコーヒーを運んできた。彼女たちの間にある台座にカップを置く。

「あなた達にも」

「ありがとうございます」

「……」

集中しているのか、雷にはマリアが見えていないようだ。少し悩んではキーボードを叩き、また悩んでをひたすら繰り返し返している。一心不乱と言う言葉がぴったりとあてはまっていた。

マリアはそんな彼女に呆れながらも、頑張る妹を見つめる姉のようになまなざしを向け、

「無茶はしないでね」と小さく呟いてエルフナインのほうを向いて「調べもの？順調かしら」と声をかけた。エルフナインはしょんぼりと俯く。

「……」

「……?!これ……もしかして……」

エルフナインの閲覧していたデータを見てマリアが驚愕する。

無理もない、マリアも同じレセプターチルドレン。自分と同じ、いや、あの時は幼かったが今ならわかる。認定から外れ、シンフォギアの適合率を上昇させる研究に未成熟な体がついて行けず、脱落した少女たちの顔写真がモニターいっぱいに並んでいた。

「はい……。少しでも早くリンカーの完成が求められている今、必要だと思って……」

「私達の忌まわしい思い出ね……。ファイネの器と認定されなかったばかりに、適合係数の上昇実験にあてがわれた孤児たちの記録……」

重い空気が漂う中、雷のタイプ音だけが装甲車の中にこだまする。

マリアはネフィリムの暴走から命を捨ててみんなを守ったセレナのようになるべく、苦痛に耐えきれなくなりそうな体に鞭打ってギアを纏い、適合率の低さから激痛と共に失敗を重ねていた自分を思い出していた。

「ママ……」

厳しくも優しい、足の不自由な母親の名前を呟く。そんな時、突然アラートが沈んだ空気を切り裂いた。流石の雷もキーボードを叩くのを止めている。

友里が状況を報告した。

「多数のアルカ・ノイズ反応！場所は……松代第三小学校付近から風鳴機関本部へ進攻中！」

「トマトおばあちゃんを連れて行った所デス！」

「マリア！」

「ええ！」

「待ってみんな！私も……！」雷が装者として前線に出ようと腰を浮かしたが、「雷はデータの解析を続けて！」とマリアに止められてしまった。

「でも……！」

「私達は避難誘導に当たるだけだから！響さん達なら大丈夫！」

「無茶なことはいないデスよ！」

なおも食いだ下がったが、調にも止められ、切歌にも命にかかわるよ

うなことはしないという追い打ちを喰らい、渋々腰を下ろした。少し悩んだような顔で俯いた後、真剣な表情で顔を上げて言った。

「……分かった。でも、危なくなったらすぐに呼んでね」

リンカーの完成は何よりも重要だ。エルフナインと共に完成への重要な要員である雷を出来る限りその任から遠ざけるわけにはいかない。渋々ながら了承したのを確認したマリアは頷き、装甲車から飛び出そうとする。

丁度そのタイミングで弦十郎が戻ってきた。

「何処へ行く?」

「敵は翼たちに任せるわ! 私達は民間人への避難誘導を」

「分かった。無茶はするなよ」

「ええ」

指令である弦十郎の承認も得、正式にマリア達は小学校へと走り出した。

動くことのできる力を持ちながら動けない雷は唇をかみ、拳を握る。拳が力みすぎて震えていた。そんな彼女の手をエルフナインがそつと握る。

「っ」

「マリアさん達を信じましょう。僕たちは僕たちにしか出来ないことを」

「……そうだね」

力強いエルフナインのまなざしと励ましを受け、表情を柔らかくした雷が再びモニターに向かって解析を再開する。しばらくするうちにまた集中状態へ突入していた。

○○○

アルカ・ノイズの群れに響、翼、クリスが相対し、時間をかけるわけにもいかない彼女たちは速攻で攻める戦法にシフトした。

「イグナイトモジュールッ!」

「「抜剣ッ!」」

響の声かけで装者たちはイグナイトモジュールを起動し、白が基調だったギアを漆黒のギアへと変貌させる。制限時間こそつくものの、

暴走状態の高出力を發揮できるようにした今ならこの程度のアルカ・ノイズを片付けるのは容易だ。

だが、魔剣を抜くのを待っていた者たちがいた。

「抜剣……待ってました」

「流石イグナイト……すごいワケダ」

「騎士道に反するが……計画のためだ」

「その通りです。だからこそこの手には、赤く輝く勝機がある」

錬金術師四人はハート形の宝石、ラピス・フィロソフィカスがはめ込まれたアイテムを取り出す。

プレラーティが玉の部分に宝石がはめ込まれたけん玉を、カリオストロは指輪を、ヨハンが柄と刀身の間にはめ込まれた直刀のサーベルを抜刀して顔の前で構え、サンジェルマンが受け皿の部分に宝石をはめ込んだフリントロック式の拳銃を頭上に掲げる。そして、サンジェルマンがラピスに撃鉄を落とした。するとはめ込まれた宝石が赤く輝き始める。他の三人も同様だ。

装者たちの中で、翼が真っ先にサンジェルマン達に気づいた。

翼は正面から彼女たちに向かって跳躍し、刃に炎を纏わせて飛翔する。

### 『炎鳥極翔斬』

「押ししまいるは風鳴る翼ツ！この羽ばたきは、何人たりとも止められまあいッ！」

青き炎を纏わせた二振りの黒刀を錬金術師たちに振るったが、彼女達を覆う赤い半球状の結界に止められてしまった。それどころか、結界にふれた瞬間ギアが粒子へと変換され始め、さらにそちらに気を取られた瞬間に押し負け、吹き飛ばされてしまった。

「翼さんッ！」

しかも吹き飛ばされただけならまだいい。いつの間にかギアから漆黒が失われ、通常状態へと戻っていた。それに加えてただはじき返されただけなのに翼が立ち上がれぬほどのダメージを負っている。

響が錬金術師たちのほうを向く。

彼女たちは月をバックに装者たちを見下ろしていた。ただ恰好だ

けが異なっており、ボディースーツとアーマーを纏っていた。響は似たようなものを目にした事がある。キャロルが使っていたダウルダブラのソレだ。

響はその名を口にする。

「まさか……ファウストローブ……！」

「よくもセンパイをおおっ！」

クリスが小型ミサイルを彼女たちに発射した。

それをプレラータイが武装のけん玉を巨大化させて振り、光の意図で繋がれた巨大な球が空中で投げ出されて高速回転し、フィールドを展開してすべて防いだ。そしてその煙の中から、拳に光を溜めたカリオストロとサーベルを構えたヨハンが飛び出してくる。

カリオストロが拳から殴るように光線をクリスに向けて照射した。彼女はそれをリフレクターで受け止める。

「このくらい……ッ?!」

「ふふ」

クリスのギアも粒子へと変換され、漆黒を失って通常形態へと戻る。衝撃を殺しきれず、背後の建物に激突した。ぶつかった衝撃以外のダメージがクリスを襲う。

「イグ……ナイトが……」

「クリスちゃん……！」

「正々堂々と戦いたいのだが、すまない……！」  
「ッ?!」

ヨハンの目にもとまらぬ突きを突き刺さるギリギリで受け止めたが、突きの速度と受け止められた衝撃を彼女が高速置換錬成し、同価値の爆発へと変化させた。

爆発が夜の闇を照らし、響も同じくギアが通常状態へと戻っており、あり得ないほどの激痛が体中を駆け巡った。

倒れた響のもとにサンジェルマンがやって来た。

「ラピス・フィロソフィカスの、ファウストローブ。錬金技術の秘奥。賢者の石と、人は言う……」

「その錬成には、チフォージュ・シャトーにて解析した世界構造のデー

夕を利用。もとい、応用させてもらったワケダ……」

「あなたがその力で、人を苦しめると言うのなら……私は……」痛みで起き上がることが出来ず、仰向けのまま言った。

「誰かを苦しめる……？慮外な。積年の大願は、人類の解放。支配のくびきから解き放つことに他ならない」

「人類の解放……？だったら、ちゃんと理由を聞かせてよ……。それが誰かのためならば、私達、きっと……手を取り合える……」

「手を取り合う？」

「サンジェルマン。さつさと……？ツ?!あの光ツ?!」

「統制局長アダム・ヴァイスハウプト!どうしてここに……」

問答を続けるサンジェルマンにしびれを切らしたカリオストロだったが、夜にもかかわらず光を発し始めた空を見上げた。落ち着いた表情を浮かべていた彼女は輝きを確認した瞬間に驚愕へと変わる。サンジェルマンも同じく見上げ、彼の名を告げた。

彼女達の上司。パヴァリア光明結社の首魁。最高位の錬金術師。統制局長アダム・ヴァイスハウプトが極光を右の手のひらに乗せ、空中を浮遊していた。

彼はかぶっていた帽子を投げ捨て、

「フツ」極光が更に輝きを増し、その熱で服が焼却され、遮るものなくなつた肉体を晒す。

「ナニを見せてくれるワケダツ!」

「金を錬成するんだ、決まってるだろう?錬金術師だからね、僕達は！」

極光の塊を頭上に掲げ、錬金陣と共にさらに大型化させる。常温核融合による黄金錬成。即ち、小型の太陽を顕現させているのだ。

この超常的な輝きは、S. O. N. G. 仮設本部でも確認されていた。エルフナインが解析に当たっている。

「まさか……錬金術を用いて常温下での……雷さんツ?!」

「くツ……ぐううツ?!痛ツ……!」

「雷君!」

アダムの黄金錬成を目撃した瞬間、いきなり雷が心臓を押さえ、苦

痛に表情を歪めながら倒れ込んだ。思わずエルフナインと弦十郎が駆け寄る。友里と藤堯は任を放棄するわけにはいかず、気に掛けながらも解析に当たっていた。

「雷君?! どうした雷君?!」

「雷さん?!」

弦十郎が雷を抱きかかえ、エルフナインと声をかけ続けるが彼女はうめき声を上げるだけだ。それだけではない、状況は動くことが出来ない響たちを救うべく、リンカーのない状態でマリア達がイグナイトを起動させて救援に入っていた。

黄金鍊成の破壊力はツングースカ級。破壊力は絶大と称するのも過小だろう。弦十郎の意識が報告に向いた瞬間、雷のうめき声が止み、熱に浮かされたように装甲車の外に出ていた。

「駄目です雷さん!」

「今外に出るのは危険だッ! 早く戻れッ!」

叫び声は雷に届かない。そして、彼女は、

「――」

起動聖詠を口にし、モニターに映る太陽の輝きに勝るとも劣らない雷光を輝かせながら消失した。

「消え……た……?」

「ッ! 雷君を探せえッ!」

「は、はい!」

消失した雷の信号を友里、藤堯の二人は搜索し、即座に発見する。その場所は投射された太陽のすぐそばだった。

○○○

響たちを背負ったマリア達が戦線を全速で離脱する。だが、すぐ背後には太陽が照らしていた。それでも諦めずに走る。

「たとえこの身が、砕けてもおおッ!」

その叫びが届いたのか、淡い燐光がマリアを包むと同時に、彼女達に迫っていた太陽が破壊された。無限の輝きを放つと思われた極光が砕かれる。

「「ッ?!」」



破滅の雷光がマリアの頭上を切り裂いた。

○○○

黄金鍊成によつて蒸発し、抉れ、ガラス化した下界を見下ろしながら握っていた右手を開く。その中にはビー玉ほどのものと小指の先ほどの大きさの小さな金が転がっていた。

「ほう……っ？」手のひらの中で輝く小さな金を見下し、

「ハハハハッハハーびたーか！安いものだなあ！命の価値は！」

再び高笑いしようとした瞬間、背後を自身の放った黄金鍊成を同等以上の雷光の輝きが照らした。その輝きに思わずアダムは口を閉じ、驚愕と共に冷や汗を浮かべる。

そして後ろを向き、口調が崩れるほどに叫んだ。

「何なんだ……その輝きはッ！」

雷光は答えない。その鉄槌が振り下ろされる前にアダムはテレポートジェムで逃げるように撤退した。

輝きは消失し、再び闇が夜を支配する。

## 賢者の闇払い

アダムの黄金鍊成の破壊力は圧倒的だった。地面は蒸発し、底の方はまだ赤熱化していた。ガラス化した地面がどれほどの高温であったかを示している。しかも、蒸発させられた場所以外は被害が全くないことから、彼が圧倒的なエネルギー制御能力を持っているのかは一目瞭然だ。

単独での破壊力ならば、これを上回るのはフロンティア事変においてバビロニアの宝物庫内で交戦したネフィリム・ノヴァレベルだろう。

その黄金鍊成の範囲からギリギリ離れたところに響達がいた。気を失っていたクリスが何とか立ち上がる。

「何が……一体どうなって……」

「風鳴機関本部が、跡形もなく……」

「ッ……！・マリアさん達は?!」

響が自分たちを逃がしてくれたマリア達のことを思い出し、周囲を見渡す。

丁度そのタイミングで大きな瓦礫がゆっくりと持ち上がった。瓦礫の下から緑のギアと金髪が見えてくる。イガリマを纏った切歌だ。

彼女はイグナイトを使用した後、適合係数の低い体に鞭打って上から覆いかぶさっていた瓦礫を押しつけたのだ。

「デエス……！」

「切歌ちゃん！」

響が声をかけた。

彼女の背後には同じくギアを纏ったマリアと調もいる。怪我はなく、全員無事だ。だが、マリアの疲労は誰よりも大きいようだった。

しかし、マリアには何よりも最優先すべきことがあった。目の前で太陽を破壊し、命からがら離脱する手伝いをしてくれた雷の存在だ。

「マリア……」

「私よりも……早く、雷を……」

マリアのつぶやきは上空から聞こえてきたヘリのローター音で遮

られてしまう。まばゆいライトが装者たちを照らした。その綱領に  
マリアは思わず目を閉じ、顔を背ける。

○○○

アダムの襲撃から一夜明け、装者たちは仮設本部の装甲車に集合し  
ていた。

指令である弦十郎が腕を組み、言った。

「敗北だ。完膚なきまでに」

「ついに現れた、パヴァリア光明結社統制局長、アダム・ヴァイスハウ  
プト」

モニターいっぱいには黄金錬成によって発生した小型の太陽を頭上  
に掲げる『全裸』のアダムが映し出された。それに次いでファウスト  
ローブを纏った四人の錬金術師が映る。

「錬金術師共のファウストローブ……」

「打ち合った瞬間に、イグナイトの力を無理矢理引きはがされたよう  
な、あの衝撃は……」

翼たちの疑問に同じ錬金術師であるエルフナインが応える。

「ラピス・フィロソフィカス。賢者の石の力だと思われま……」

「賢者の石……確かに言っていた……」

「完全を追い求める錬金思想の到達点にして、その結晶体。病をはじ  
めとする不浄を正し、焼き尽くす作用をもつて浄化する特性に、イグ  
ナイトモジュールのコアとなるダインスレイフの魔力は、為すすべも  
ありませんでした……」

ダインスレイフの呪いによって能力をブーストするイグナイトモ  
ジュールにとって、原動力となる呪いを引きはがし、さらには焼き尽  
くすことによってダメージを与えることが出来るラピス・フィロソ  
フィカスのファウストローブはまさに天敵と言えた。

翼が拳を握る。

「どこのつまりは、イグナイトの天敵……！この身を引き裂かんばか  
りの衝撃は、強制解除によるもの！」

「決戦仕様であるはずが、こっちの泣き所になっちまうのか?!」

「東京に搬送された雷たちは、大丈夫でしょうか？」この場にはない親

友たちを響が案じる。

「精密検査の結果次第だけど、奇跡的に大きなけがはないそうよ。雷ちゃんは一度倒れたけどその後は問題なく救援に向かっていたし、今のところ雷臨状態への移行によるバックファイア以外に目立ったところはないわ」

雷は瓦礫の下で気絶しているのを発見され、病院へ救急搬送されていた。

後でわかったことだが、突然倒れたため集中的に検査したがどこにも異常は見当たらず、『シンカ・雷帝顕現』の発動によって負った火傷の治療を受けている。黄金鍊成を正面から迎え撃った弊害か、どうも今回は今までのよりもひどいらしい。

儒教証拠によるものだが、胸の痛みは医者によるとエコノミークラス症候群ということだそうだ。

解析に当たるためずっと椅子に座っていた彼女が仲間の危機に急に立ち上がるうとしたからだろう。という報告を受けている。本来なら命にかかわることだが、ケラウノスの稼働によって血の塊が破壊され、健康体に戻ったのだという。

マリア達はギアの限界使用によって気を失い、最も黄金鍊成の火の近くにいたため同じく治療を受けていた。

仲間の危機にさらに不安が募るが、エルフナインがそれを払しよくする。

「きつと、無事です」

「そうだね……。大丈夫……。絶対……！」

（リンカーを介さないギアの運用。ましてやイグナイトによる体への負荷……。絶唱級のバックファイアを受けてもおかしくなかったはず。なのに……）

エルフナインはマリア達が無事であった原因を考察する。マリアが纏っていた淡い燐光がヒントなのは分かっているのだが、それが何なのか見当もつかなかった。

沈む空気に逆らうように弦十郎が声を張る。

「風鳴機関本部は、現時点での破棄が決定した。各自、撤収準備に入っ

てくれ」

得るはずだったものを根底からすべて崩されたことに、藤堯がたられれば言う。

「バルベルデドキュメントが解析できていれば、状況打開の手がかりがあつたのかな……」

「……」

データとして存在していれば、回復した雷がハッキングなりなんなりで引つ張り出してくるだろうが、そんなデータはなく、全て紙だったために今しがた焼却されたばかりだ。魔法少女事変のようにはいかないだろう。

まあ、そうであつたとしても彼女であれば、想像もしないような奇策妙策怪策でもってして状況をひっくり返すぐらいしてくるのでは？というちよつとした期待も無きにしも非ずなのだが。

と、そんなことを考えていると、緒川の通信機が鳴り始めた。内ポケットからそれを取り出すと、鎌倉のシグナルが点滅している。少しだけ驚いと表情を浮かべた。それに気づいたのは翼だけだ。

緒川は弦十郎のそばに向かい耳打ちする。

「指令……、鎌倉への招致がかかりました」

「しぼられるどころじゃ済まなさそうだ……」

既に腹をくくつているのか、弦十郎は笑ってみせる。

○○○

都内の高級ホテルの一室に統制局長アダムを加えたパヴァリア光明結社の錬金術師たちの姿があつた。

愛する人に出会えたのが相当にうれしいようで、テイキが子猫のようにベッドで読書をしているアダムに歩を摺り寄せていた。

窓際でサンジェルマンが腕を組んで結果を報告する。彼女の視線はアダムを刺すようなものだが、彼は一向に意に介さない。

「ラピスの輝きは、イグナイトの闇を圧倒。勝利は約束されていた……。それを……」

「下手こいちやうとあーしたち、こんがり、サクジュワーだったわよ」  
「しかもその上、仕留めそこなつていたというワケダ」

プレラーティイがかざしたその先に、車に乗り込む装者たちの姿が映し出されている。これは彼女の使役しているカエルの視界から送られてくるものだ。

「アダムに苦言を言う中、彼を愛するティキが反論する。」

「みんな！せっかくアダムがきてくれたんだよ？ギスギスするより、キラキラしようよ！」

使命を果たすためにここにきている錬金術師たちは、アダムが来たから仲良くしようとか言う気はさらさらない。むしろ逆だ。

現にヨハンはアダムとティキがそろっている場にいるのが苦手なのか、街へと繰り出していた。名目上は敵情視察となっているが、錬金術師や騎士である以前に作家でもある彼女は、現代日本の文学巡りをしているのだろう。

まったく返事のないサンジェルマン達にティキは叫ぶ。

「みくくくな〜！」

「どうどうティキ。だけでもともだねえ、サンジェルマン達の言い分は。いいところ見せようと加勢したつもりだったんだ、出てきたついでにね」雷の『シンカ・雷帝顕現』に驚愕していた事実は部下の手前一切見せていない。彼は脱いでいた帽子をかぶり「でもやっぱり、君たちに任せるとしよう、シンフォギア共の相手は」

そう言つてアダムはベッドから降り、ティキが腕に抱き着くのを気にせずに玄関に向けて歩き出した。

そんな彼の背中からサンジェルマンが声をかける。

「統制局長、どちらへ？」

「教えてくれたのさ、星の巡りを讀んだティキが……。ね？」

「うん！」

「成功したんだろう？実験は。なら次は本格的に行こうじゃないか、神の力の具現化を」

アダムは怪し気に輝く瞳を、肩越しにサンジェルマンに向けた。

## 到達まであと一步

人っ子一人いない街のど真ん中で、大小様々な数がいるアルカ・ノイズの前に復調したばかりの調と切歌がいた。この場には適合係数を補うリンカーなしで戦える響たちの姿はなく、当然彼女たちの使うリンカーもない。だが、それでもここを戦い抜かねばとリンカーの補助なしでシンフォギアを纏う。

切歌がイガリマの起動聖詠を口にした。

「Zeios Igalima Raizen Tron」

緑の鎌を武器とするシンフォギア、イガリマを纏い、相棒の調もピンの鋸を武器とするシユルシャガナを身に纏った。この二つは元々一人の女神ザババが使用していたもの。この特性によつて雷無しでもフォニックゲインを重ねることが出来るため、二人のフォニックゲインの高まりによる爆発力は装者随一だ。

ギアを纏つてすぐに跳躍した切歌は鎌を大振りに振りかぶり、三つに分割した刃をブーメランのように投擲した。高速回転する刃はアルカ・ノイズを真つ二つに切断していく。

ついでもう一本の鎌を取り出し、携える二振りを融合させ、対称的に配置された三日月型の刃が特徴的な鎌を形作る。

『対鎌・螺Pうn痛エる』

調はツインテールバインダーをアーム上に変形させ、先端に搭載された大型の鋸を手足の様に振り回し、蹂躪していく。

(シユルシャガナの刃は、全てを切り開く無限軌道ツ！目の前の障害もツ！私達の、明日もツ……！)

リンカーなしのため騙し騙し戦っているが、やはり適合係数の低さから負荷の発生がひどいようだ。ギアからは拒絶反応による放電が発生し、歌声からも辛さがにじみ出ている。

それでも調は足を止めず、プリマ・マテリアの中を突っ走り、アルカ・ノイズの群れのど真ん中でスケートのように高速回転し、鋸に変化させたスカートで斬り裂いた。

『△式・艶殺アクセル』

調べに負荷がかかっているということは、同タイミングでギアを纏った切歌にも負荷がかかっているということだ。それでも彼女は迷うことなく鎌を振るう。

(絶対鋭利のイガリマはその気になったらッ！幽霊だつてッ！神様だつてッ！真つ二つデスッ！)

そして二人が交戦を続けてる中、まだ回復しきつてはいないとはいえ彼女たちの事が心配なマリアと、全身を包帯でぐるぐる巻きにした雷が包帯を引きずりながら本部潜水艦の通路を走っていた。

「あの子達、無茶を重ねてッ！」

「病み上がりだつていうのにもう！」

「マリアさん！雷さん！」

「もういいのか?!そつちだつて大変だつたんだろ?!」

雷たちの後をエルフナインと響、クリスが追う。

切歌たちも大詰めだ。バナナのような大型アルカ・ノイズにかたから打ち出したアンカーを巻き付けて拘束し、両足の刃を接続して作り出したギロチンで斬り裂こうとする。が、ついに限界が来たようで、両足のギロチンが砕け散った。彼女は真つ逆さまに地面に激突する。「切ちゃん！」

慌てて調が切歌に駆け寄った。

それと同時にアルカ・ノイズのホログラムが消失する。今までの事は実戦ではなくホログラム投影による戦闘訓練だったのだ。目的は当然リンカーなしでの戦闘の熟練である。

うづくまる切歌に心配そうに調が声をかける。

「大丈夫……?」

「しらちゃん！切ちゃん！」丁度そのタイミングで雷たちがシミュレーションルームに入ってきた。

「リンカーもないのに、どうして……」

マリアの心配も当然といえる。

状況が状況なら、アルカ・ノイズに分解されてしまうこともありうるし、拒絶反応の激化によって体が耐えきれなくなってしまうこともありうるからだ。



マリアの問いに調が応える。

「私達が、リンカーに頼らなくても戦えていれば……あんな……」

調の思いも尤もだ。

自分たちが戦えていれば、響達と共に錬金術師を打倒できたかもしれないし、アダムの妨害をできたかもしれない。そうなれば雷が前線に来ることなく、リンカーの解析に集中することが出来、もしかしたらリンカー製造に一步近づいたかもしれない。

答えられないマリアの代わりに、クリスが一步前に出た。

「だからって……!」

「平気!」

「ッ」

「それより、訓練の続行を……」

「リンカーに頼らなくてもいいように、適合係数を上昇させなきゃダメ……」

「駄目だよ。そんな事、私が絶対に許さない」

「姉さん……!」

走ったことでほどけかけた包帯を巻きなおしながら、雷が断固たる態度で言い切った。いつも自分たちの事を気にかけてくれていた雷が(だからこそ)反論したことに、調は驚愕した後になぜわかつてくれないのかと鋭い目を向ける。

それがショックだったのか、調は彼女に辛らつな言葉を投げかけてしまう。

「私達と違って、何もなしにギアを使えるからそんなことが言えるんだよ……」だが、そんなことを言われても引き下がるような雷ではない。二人のことが好きだからこそ、彼女は正面から向かい合う。

「私が消えそうだった時、二人はどうだった……?それと同じくらい、私は二人にもしものことがあつたらなんて考えたくない。そんな目に遭って欲しくないから、私はリンカーの解析を続けてるんだ」

「でも……いつまでも味噌つかす扱いは、死ななくたって、死ぬほどつらくて、死にそうデス……!」

沈黙が彼女達の間を満たす。

何としても役に立ちたい調と切歌。命を失うような目に遭って欲しくない雷。両方ともお互いがどれほどの思いを向けているのか理解している。しているからこそ、引けないのだ。

だからその沈黙を、マリアが斬り裂いた。

「やらせてあげて」雷の肩に手を乗せる。

「でもマリア……」悲痛な目をマリアに向けた。

「二人がやりすぎないように、私も一緒に訓練に付き合うから……ね？」

「適合係数じゃなく、この場のバカ率を引き上げてどうする?!」

「いつかきつとリンカーは完成する。だけど、そのいつかを待ち続けるほど、私達の盤面に余裕はないわ」

マリアの言葉に、まだ完成のめどが立てることが出来ていないエルフナインが顔を俯かせた。

大切な妹分だけでなく、マリアにも雷が食って掛かった。マリアの襟をつかみ、額を彼女の腹部に押し付ける。

「だったら！私とその盤面に余裕を作って見せるから！だから……！」

「雷はもう解析に任に任についてるでしょう？あなたをこれ以上酷使させるわけにはいかないわ」

「……方法はあります！」

必死の懇願をマリアが受け止めていると、同じくリンカーの解析に当たっているエルフナインが割って入った。

「リンカーの完成を手繰り寄せる、最後のピースを埋めるかもしれない方法が……」

「最後のピース……」

「本当デスか?!」ようやく見えた光明に調と切歌が立ち上がる。

「ウエル博士に渡されたリンカーのレシピで、唯一解析できていない部分。それは、リンカーがシンフォギアを、装者を脳のどの領域に接続し、負荷を抑制しているか……です。フィーネやF・I・S.の支援があったとはいえ、一からリンカーを作り上げたウエル博士は、いろいろはともかく、本当に素晴らしい生化学者だったとは言えます」

「素晴らしい……ぞつとしない話ね」最も近くで彼を見ていたマリアが納得する。

「あ、あの、難しい話は早送りにして、最後のピースのどこまで飛ばしてよ……」

話を理解できていない響がエルフナインに提案する。雷が少し残念な目を彼女に向けていた。

エルフナインは提案通り、最後のピースのところまで省略する。

「鍵は、マリアさんの纏うアガートラームです」

「白銀の……私のギアに?!」いきなり自分のギアの名が出たことにマリアは驚きを隠せない。

「アガートラームの特性の一つに、『エネルギーベクトルの制御』があります。土壇場にたびたび見られた発光現象……。あれは、脳とシンフォギアを行き来する電気信号が、アガートラームの特性によって可視化、そればかりか、ギアからの負荷をも緩和したのではないかと、ボクは推論します」

「確かに、アガートラームの特性を鑑みれば、あり得ないことはないか……」

エルフナインの推論を聞いて、その推論の整合性を思案していた雷も同調した。彼女たちは共同で解析に当たっていたものの、最後のピースを探す方法はお互いが別ベクトルでアプローチしていたため、雷もエルフナインの推論を聞くのは初めてだったのだ。因みに得意分野からのアプローチであり、雷が科学方面から、エルフナインが錬金術方面からである。

同業者の納得に頷き、一層確信を強めたエルフナインは続ける。

「これまでずっと、任務の間に繰り返し返してきた訓練によって、マリアさん達の適合係数は少しずつ上昇してきました。……恐らくは、その結果だと思われまます」

「マリアの適合係数は、私達の中で一番高い数値。それが……!」

「今までの頑張り、無駄ではなかったというわけデスか?!」切歌が期待に目を輝かせる。

「ええ!マリアさんの脳内に残された電気信号の痕跡をたどっていけ

ば」

「リンカーの作用している場所が解明する……。だけど、そんなのどうやって?」

そう。一番の問題はその電気信号をどうやってたどっていくかだ。最新鋭の医療技術があるS・O・N・Gでも、そんなことが出来るものは存在しない。だが、思い当たる、それどころかもろに携わっていた雷は理解していた。

「ついて来てください」

エルフナインは真剣な表情で歩き出した。向かった先は、エルフナインの研究室だ。

## 人とギアとを繋ぐもの

リンカー完成に至る最後のピース。それを見つげるための物はエルフナインのラボにあった。エルフナインに先導されて、雷たちはラボに向かう。ラボには雷もよく利用していたため、そこに何かあるのかを理解していた。それどころか、開発・改良に携わっている。

ラボの中に入るとヘッドギアのような装置がケーブルに接続されていた。どこかで見たことがある外見をしていたそれが何なのか、マリアはエルフナインに聞いた。

「それは？」

「ウエル博士の置き土産、ダイレクトフィードバックシステムを、錬金技術を応用し、再現してみました」

ダイレクトフィードバックシステム。未来がF・I・Sに洗脳されたときに纏っていたギア、神獣鏡に搭載されていたものだ。星の数ほどある戦闘データの中から最適解を算出し、それを使用者の脳に直接伝達することでデータ通りに肉体を動かし、戦闘経験が皆無の未来でも融合症例で高いフォニックゲインを誇る響と互角に立ち回ることのできるようにするシステムである。

そんなシステムを、エルフナインは再び作り出したのだ。今回は戦闘目的ではなく、研究における最後の手段としてだが。

エルフナインが続ける。

「対象の脳内に電気信号化した他者の意識を割り込ませることで、観測を行います」

「つまり、そいつで頭の中を覗けるって事か？」

「理論上は……ですが、人の脳内は意識が複雑に入り組んだ迷宮。最悪の場合、観測者と被験者の意識は溶け合い、廃人となる恐れもありました」

「ありましたってことは、今は大丈夫なの？」

過去形で言い切られたエルフナインの言葉に、マリアが疑問を持った。

ありましたということ、もうすでにその問題は解決していること

を意味しているからだ。エルフナインが自信満々の表情を向ける。

「今までこの装置を使用していなかったのは、ボクの推論が不確定だったことと、先ほど申し上げた危険性があったからです。ですが、雷さんが組み立ててくれた理論を使うことによって最大の問題点であった『意識の融合による廃人化』を取り除くことに成功したのです」  
「理論って。病床に就いていた時に何を書いているのかと思つたら、そんなことしてたの?!」

「うん。エルフナインが悩んでたみたいだったからね？装置のシステムを聞いて、何とかかなりそうだったから」

隣のベッドで雷がものすごい数の紙に何かを書いているのを見ていたマリアが驚愕し、雷が胸元からケラウノスを取り出しながらへへと頭をかいて笑う。

「要は使用者と他者の意識。即ち電気信号が絡み合わなければいいだけだから、生体電流をもコントロールできるケラウノスを使えばいいんだよ。こつちも、F・I・Sのエアキャリアが神獣鏡の力を使ってステルス能力を得ていたのと同じ理屈でね。ケラウノスをシステムの間際に繋いで、脳内の電気信号が絡み合わないように識別制御すれば、廃人化のリスクはシステム自体の故障と言う完全な想定外さえなければあり得なくなる」

ケラウノスが変化した赤い石柱のようなペンダントをくるくるとペン回しのように回す。マリアをはじめ、この場にいる全員が期待に目を輝かせた。そしてそれを手で掴んで回転を止め、にっかりと笑う。

「最初に二人の電気信号を機械に登録すれば、あとは寝てるだけでいい。しかもありがたいことに電気信号を一度機械に通してるからどこに何があるか把握できると来た。成功率もぐんと跳ね上がりさ」

「ありがとう雷。……やるわよ、エルフナイン」

「はい！マリアさんの中で最後のピースを見つけることこそ、ボクに出来る戦いです！」

○○○

鎌倉にある巨大な武家屋敷、風鳴訃堂の屋敷に、彼の息子であるS・

O・N・G 指令、風鳴弦十郎と内閣情報官風鳴八紘。そして続柄は孫だが血縁的には娘に当たる天羽々斬装者、風鳴翼が招集されていた。

八紘と弦十郎だけが訃堂と面会し、翼は障子の外にある縁側に座している。

息子たちと訃堂の距離は遠く、その間には剣呑な空気が漂っている。主に訃堂によるものだ。

「して、夷狄による蹂躪を許したと……？」

「結果、松代にある風鳴機関本部は壊滅。大戦時より所蔵してきた、機密のほとんどを失うこととなりました」

「外患の誘致、及び撃ち退けることの叶わなかったのは、こちらの落ち度にほかならず、全くもって申し開ッ……！」

「聞くに堪えん」

我が息子ながらあまりにも不甲斐ないと言うように訃堂は二人の言を切って捨て、立ち上がって座敷の障子の前に立つ。

「分かっておろうな……？」

「国土防衛に関する例の法案の採決を、急がせますッ……！」

「有事に手ぬるいッ！即時施行せよッ！」

訃堂が言い切ったのを見計らったように障子が開いた。外にいた翼が開けたのだ。訃堂がそこを通る。縁側をある程度進んだ後、翼に背中を向けたまま彼は告げた。

「まるで不肖の防人よ。風鳴の血が流れておきながら、嘆かわしい」

「我らを防人たらしめるは血にあらず、その心意気だと信じております」

「フン……」

訃堂はそれ以上何も言わず、雨が降りしきる中縁側を歩き、その姿を消した。

一方、システムにケラウノスを接続したことで、安全性と成功率が格段に上昇したダイレクトファイードバックシステムを応用したマリアの思考への突入が行われようとしている。

雷がキーボードをタイプし、システム間を流れる思考の電気信号を

識別、融合と乖離の境界線を限界まで薄くしていく。そして誤差が極限まで薄まった状態をケラウノスで固定し、エルフナインとマリアの意識を接続するのだ。

スタートキーに雷が手を添え、

「行くよ?」

「ええ」

「お願いしますー!」

ポンつとキーを弾いた。二人が深い眠りに落ち、エルフナインの意識がマリアの深層に突入する。

「さて、こつちも本腰を入れなきゃね」

ケラウノスを介してモニターに表示されるマリアの深層意識の中を駆け巡り、たった一つ、マリアの深層領域に記憶として確かに存在していないながらも、彼女が認識できていない領域を見つけ出した。そのたった一つの、零にして一の領域にマリアとエルフナインの意識を送り込む。

丁度その時、アルカ・ノイズの出現を知らせるアラートが鳴り響いた。だが、雷はそれに耳を傾けるそぶりすら見せない。何故なら、(弦十郎さんには怪我の治療に専念しているって言われてるし、もしそうでなかったとしても無断出撃で命令違反してるからねえ)

という理由があるからだ。

しかも、ケラウノスをシステムに繋いだ影響で安定性と成功率の大幅な上昇を達成したものの、そのせいで汎用性を大きく欠いてしまっている。雷がエルフナインでなければ制御できなくなってしまっているのだ。

雷は二人の意識がしっかりと目的の領域に送り込んだのを確認し、二人の意識の安定のために再びキーボードを叩き始めた。

そしてリンカーがないためにギアを纏うことが出来ない切歌と調が雷のもとに到着した。

「どうデスか?!二人の様子は……」

「全然問題ないよ。たぶん……」

「たぶん……?あ、来る途中に友里さんから、温かいもの、どうぞ」



「おお、温かいもの、どうも」

調からコーヒーを受け取り、モニターを眺めている雷が苦笑いを浮かべた。そう、モニターの中にはマリア達が見ている光景、つまり、目の前にウエルがいるのが見えているのだ。苦笑いを浮かべるのも仕方がない。

〇〇〇

マリアとエルフナインの目の前で死んだはずのウエルがすごく楽しそうに高笑いしていた。

「これもアレもきつと多分、あれですよ、あれ。マリアの中心で叫べるなんて超々サイコ〜！」

「あんな言動、私の記憶にないはずよ……？」

「だとすると、ウエル博士に対する印象や、別の記憶をもとに投影されたイメージ、ということになるのでしょうか……」

「自分の記憶を叱りたい……！」

マリアが頭を抱え、エルフナインが推論を述べ、ウエルがメガネをクイツと上げる。

こんななのだが、雷が指し示した以上、何かあるはずなのだ。それを理解しているからこそ、この場にウエルがいることに頭を抱えているのだが。

「かつてのアガートラームの装者であるセレナさんやナスターシャ教授ではなく、ウエル博士がいるということは、彼から直接想起されるモノ……だとするならば……」

「生化学者にして英雄！・定食屋のチャレンジメニューもかくやと言う盛りすぎ設定ツ！そうとも！いつだって僕ははつきりと伝えてきた！はぐらかしなんてするものか！」

「だったら……！」

一向に答えを教えず、ただただやかましいだけのウエルに、マリアがもったいぶらずに早く教えろと意思表示する。

だが、彼も学者。ヒントを教えるのはやぶさかではないが、問題を解こうとしない生徒に答えを教えるのはナンセンス。そう言うように、

「忘れているのなら手を伸ばし、自分の力で拾い上げなきゃ。記憶の底の、底の底！そこには確かに転がっている！」

周囲に濃い霧のようなものが満ちてきていた。雷が外部から制御しているとはいえ、心理的な不安を取り除くために二人は手を握り、離れないようにする。霧が晴れると、あたり一面星のような輝きに満ち溢れていた。マリアの内的宇宙だ。

彼女の内的宇宙がマリア自身を追い詰めにかかる。だが、彼女はもうそんなもの怖くはないのだ。魔剣の呪いにのまれ、自我が破壊されかけていた雷を救うために響と手を取り、彼女に伸ばした今のマリアならば。

「大丈夫よ、行きましよう」

マリアはエルフナインの手を取り、さらに奥深くへと沈んでいく。沈んでいくさなか、どこからともなくウエルの声が心のうちに聞こえてきた。

(シンフォギアとの適合率に、奇跡という物は介在しない。その力、自分のものとしたいなら、手を伸ばし続ければいい)

マリアはエルフナインとつないだ逆の手を伸ばし、小さな小さな一つの輝きを掴んだ。指の間から光があふれ出る。

その光が止むと、今度はF. I. S. の白い孤児院と呼ばれていた場所にいた。もちろん、エルフナインもそばにいる。

「ここは、F. I. S. の……」

「ここも連続で飛ばされても何の影響もないとは……流星ですね、雷さんは」

そこでふと、マリアは幼い少女の声に気が付いた。ここに居た頃の自分とセレナの声だった。彼女たちの前には車椅子はおろか眼帯すらつけていないナスターシャと、研究員としてここに来ていた灰色の髪が特徴的な雷の母親、轟瞳の姿があった。

瞳は体がかがめ、マリアたちに手を伸ばす。その手を取ろうとしたマリアの手を、ナスターシャが鞭でひっぱたいた。

彼女は厳しい声で、

「今日からあなた達には戦闘訓練を行ってもらいます！フィーネの器

となれなかったレセプターチルドレンは、涙より血を流すことで組織に貢献するのです！

(本当にそうなのかい？(本当に、私の(君の)記憶はママへの恐れだけだったの……？)

ここで初めて、マリアはナスターシヤの顔に目を向けた。その顔は、本当はこんなことしたくないというような顔をしているのだ。

(そうだ……恐れと痛みから、記憶に蓋をしていた……。いつだってママは、私を打った後悲しそうな顔をして……。そうだ……。私達にどれほど過酷な訓練や実験を課したとしても、ママはただの一人も脱落させなかった。それだけじゃない、私達が決起することで、存在が明るみに出たレセプターチルドレンは、全員保護されている……。全ては、私達を生かすために……。いつも自分を殺して……。)

トマトのおばあちゃんの言っていた、厳しくしてやることで甘みを蓄えさせる。ナスターシヤは、それを実践していたのだ。

「大いなる実りは、厳しさを耐えた先にこそ。優しさばかりでは、今日まで生きてこられなかった……。私達に生きる強さを授けてくれた、ママの厳しさ……。その裏にあるのは……」

(ナスターシヤにも、マリアにも、何時だって伝えてきた……。そう、人とシンフォギアを繋ぐのは……)

「可視化された電気信号が示す此処は、ギアとつながる脳領域……。誰かを想いやる、熱くて深い感情を司る此処に、リンカーを作用させることが出来れば……！」

○○○

「はっ?!」

エルフナインがヘッドギアをかぶったまま跳び起きた。

「エルフナイン?!」

「どうなったデスか?!」

「もうひと踏ん張り、その後は、お願いします!」

「がんばってえ。私はもう休む……」

「わ?!姉さん!」

「あとはしっかりと休むデスよ!」

少し間違えれば二人を廃人にすると言う針の穴に糸を通し続けるようなことを長時間休みなくしていたのだ。疲労がたまるのも無理はない。雷はべちやつと床に横たわり、すぐに寝息を立て始めた。「て、寝るならベッドで寝るデスよ?!」と切歌が雷の両脇に手を通し、さっきまでエルフナインが眠っていたベッドに寝かせた。

「マリアー!」

丁度そのタイミングでマリアも目を覚ましたようだ。彼女は目じりにたまった涙をふき取り、

「ありがとう……マム……」

リンカー完成に至る最後のピースが、カチリと音を立てて、填まった。

## 消耗戦の先に

雷たちがリンカーの最後にピースを探している間、特にすることが無く、暇を持て余していた響たちは大きな公園の中で開催されていた出店の並ぶオープンマーケットにやって来ていた。

途中で未来も合流、切歌がピース探しの成功を祈願してチョコ明太子味のクレープなるものを購入し、それを手に取って見つめているうちに買ったことを若干後悔し始めていた。何故かクリスも同じものを手にしている。

「うええええええ……」

「切ちゃん、何でそんなの買っちゃったの……?」

「お、思わず目についちちゃったんデス!……うぐぐ」

「チョコ明太子味なんて大冒険するから……」

と言つて大きくかぶりついた。明太子の辛さとチョコの甘みが口の中で暴力的に広がる。

そんな彼女を見てクリスは呆れながら、

「アタシのおごりを残すなよ、常識人。……ん?美味しいじゃねえか」

「これが……美味しい……?」

クリスに味覚にはうまくはまったようだ。調がこの名前からしてハズレ感が漂うクレープを美味いと言ったクリスを信じられないようなものを見る目で見ている。因みに調はチョコバナナと安牌だ。

そんな三人を隣のテーブルに響と並んで座っている未来が見つめ、微笑んだ。そして響のほうに顔を戻すと、ソフトクリームを手にしたままどこか上の空な彼女が映る。

「響……ねえ響……」

「え?何……?」

「溶けちゃってるけど?」

「うわああ?!」

クリームが溶け、コーンの部分に垂れ下がっているのを未来が指摘した。指摘された響は慌ててクリームを口にする。当然口よりもクリームのほうが大きいので口の周りがべとべとになっていた。未来

はポケットからハンカチを取り出し、響の口の周りをぬぐう。

「話を聞いたり、溶けたアイスをぬぐうぐらいはしてあげる。だから、何かあるときは頼ってよね？」

「ありがとう未来。やっぱり未来は私の陽だまりだ」

そんな時、近くにあつた巨大なモニターから聞き覚えのある名前が聞こえてきた。響、クリスがモニターに顔を向ける。するとそこには、車椅子に乗って日本へとやって来ていた少年、アルカ・ノイズによって足を失ってしまったステファンの姿があつた。如何やら最新の義足をつけるべく、日本で手術を受けるらしい。

真剣な眼差しでモニターを見つめるクリスに、響が言う。

「良かったね、あの子。またサッカーできるようになるんだね」

「だどいいんだけどな……」

「……」

「悩んで下した決断が、いつも正しいわけじゃない。それどころか、はじめっから正解がないなんてこともザラにある」

○○○

本部ブリッジでは、雷とエルフナイン、マリアがピース探しをしているところ、東京湾にアルカ・ノイズの反応を検知していた。それは八岐大蛇のような首が何本にも分かれたドラゴン型であり、サイズも超大型とほぼ同じくらいだろう。

「空間を切り取るタイプに続き、またしても新たな形状……。しかもかなり巨大なタイプの様です……。！」

「まかり通らせるわけには……。行きますッ！」

翼がブリッジから離脱する。

そしてドラゴン型のアルカ・ノイズの後方、光学迷彩によって姿を隠したバルベルデと同型の航空戦艦の甲板に、ドラゴンの頭を模した杖を携える錬金術師たちがいた。

杖を所持するカリオストロが腰に手を当て、

「オペラハウスの地下には、テイキ以外にも面白いものがごろごろ転がっていたのよねえ」

「もったいぶってなんていられないワケダ」

「そう。我らパヴァリア光明結社は神の力をもつてして、世の理をあるべき形へと修正する……」

そう言ったサンジェルマンの脳裏に響との会話が蘇る。まだ踏み切りがついていない彼女であったが、それをおくびにも出さない。だが、彼女の師匠であるヨハンだけは、サンジェルマンの中にある迷いに気づいていた。しかし、例え彼女の中に迷いがあつたとしても、彼女自身が表に出さなければ意味がない。これはサンジェルマンの願いなのだ。ヨハンが口を出すわけにはいかない。

一度切り替えるためにサンジェルマンは目を伏せ、開くことで世界を切り替える。

「大義は……いや、正義は我らにこそあるわ。行く道を振り返るものか！たとえ一人で駆けたとしても！」

「二人じゃない」  
「っ」

「一人になんてさせないワケダ」

「サンジェルマンのおかげで、あー！私たちはここに居る」

「師匠が弟子よりも先に倒れてたまるか。錬金術を授けた以上、君の大願が成就するまで見届けてやる」

三人に言葉で背中を押され、サンジェルマンは真っ直ぐに正面を見つめる。

一方、アルカ・ノイズの出現と対応を本部から指令を受けた響たちが行動を起こす。

「分かりました！すぐへりの降下地点に向かいます！」

「もたもたは後だ！行くぞ！」

「私達は本部に！」

「マリア達の様子が気になるデス！」残っていたクレープを一口で食べきり、調と共に本部へ向かった。

「未来も、学校のシエルターに避難してて！」

「響ー！」

響は未来にそう言ってすぐにクリスの後を追う。

だが、後ろから未来に声をかけられた。響が足を止めて振り向かず

に言う。

「……誰だって、譲れない思いを抱えてる。だからって、勝てない理由になんてならない……」

「勝たなくてもいいよ」

「へ……？」未来から聞こえてきた予想外の言葉に、思わず響が振り返る。

「だけど絶対に、負けないで……」

続いた未来の言葉は響の胸に深く響き、うれしきから頬が赤くなつて涙が目尻にたまる。すると今まで心の中にあつた自分たちが勝つことで相手の思いを踏みにじってしまうのではないかという悩みがスツと消え、暖かな思いが込みあがってきた。

響は胸をどんとたたく。

「私の胸には歌がある！」

未来からもらった自信を胸に、響は再び指令通りにヘリの降下地点へと駆け出した。

〇〇〇

サンジェルマンが航空戦艦の甲板の上で宣言する。

「人類が、この星の完全なる霊長となるためには、支配される存在であつてはならない。完全を希求する錬金の理念。シンフォギアなどに、阻まれるわけにはいかない！」

ドラゴン型アルカ・ノイズの口と脚部から小型のアルカ・ノイズが生み出され、進撃を開始する。

そしてそんなことはさせまいと本部からやって来たヘリに響とクリスが乗り込んで翼と合流、プロペラの回転数が上がり、あつという間に上空の指定されたポイントに到着した。響がドアを開けて飛び下り、ガングニールを起動させる。

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro  
n」

同じく天羽々斬を起動させた翼と共に、イチイバルを纏ったクリスによって発射されたミサイルの上に乗る。

ミサイルの上で剣を構えた翼が、



「気になるのは錬金術師の出方だ。抜剣を控え、イグナイト抜きで迎え撃つぞ！」

「何のつもりか知らねえが、たくらんだ相手に遅れはとらねえッ！」

『BILLION MAIDEN』

クリスがアームドギアを四門の三連ガトリング砲へと変形させ、展開される弾幕によって航空型を撃破していく。この弾幕を抜けきったアルカ・ノイズを響の振りぬいた拳が粉碎する。

「この身を防人たらしめるのは！血よりも熱き心意気いッ！」

騎乗するミサイルを母艦型に向けて突撃させ、激突する直前でジャンプして回避すると、空中で脚部ブレードに搭載されたスラストターボを点火、高速回転しながらブレードでアルカ・ノイズを切断する。

『逆羅刹』

まだミサイルが生きているクリスと、翼を後ろに乗せた響は今のところの大トリであるドラゴン型のところに向かった。子のアルカ・ノイズを基点にわらわらと小型のアルカ・ノイズが放出されている。

「こうも奴らをうじやつかせてるのは、あいつの仕業かッ！」

「つまりは狙いどころ……！」

「ぶっ放すタイミングはこっちでッ！トリガーは翼さんにッ！」

二人はミサイルから飛び下り、翼は剣を大剣に変形させ、響は右のバンカーユニットを最大展開して内部機構を高速回転させることで螺旋の破壊エネルギーを生み出す。

「目にももの見せるッ！」

二人の息の合った連撃は巨大なドラゴン型アルカ・ノイズを四分割にした。しかし、それだけでは終わらない。

「そしてあたしは、片づけられる女だアアッ！」

『MEGA DEATH INFINITY』

十二機もの大型ミサイルが一気に展開され、それらがすべてドラゴン型に向けて発射された。ドラゴン型は爆炎の中で悲鳴を上げ、後には赤いプリマ・マテリアだけが残る。……筈だった。ドラゴン型は破壊された箇所から再生し始め、一体が三分の一のサイズになったドラゴン型が三体になった。

その光景に翼が驚愕する。

「まさか?! 仕損じたのか?!」

今回のアルカ・ノイズは驚異的な再生能力を付与されたもので、装者たちの分断が目的として課せられているようだ。幸いなことに数は増え、分断されてしまったもののサイズは少しばかり小さくなっており、一対一での対応が可能だ。それっそれが後を追う。

「これ以上、みんなを巻き込むわけにはツ!」

響の追った個体は空港の滑走路にアルカ・ノイズを吐き出ししていた。そうはさせじと響は跳躍し、腰部ブースターで拳と蹴りを見舞うことで首の一つを飛ばすことには成功したものの、空中では碌に防衛も取れず残っていた首の攻撃によって吹き飛ばされてしまった。

響の体が滑走路を転がる。そうしている間にも、ドラゴン型はまたアルカ・ノイズを吐き出した。

「キリがない……!」

翼の追った個体は工場地帯へと進んでいた。

彼女は大剣を振るい、跳躍後空中で加速して首を一閃した。だが、先ほどと同じく一体が今度は二体に分裂し、数を増やす。

「くッ! やはり、さらなる分裂ッ……!」

クリスの物は翼を槍のように変形させ、すさまじい速度で彼女に襲い掛かる。それをクリスは横移動とジャンプで回避すると、腰部アーマーから小型ミサイルを展開し、発射した。一か所に向けて放たれたソレは狙いを外すことなく命中し、アルカ・ノイズを真っ二つに破断する。

だが、他と同じく二体に分裂し、口から放った光線でクリスを攻撃した。爆風に吹き飛ばされるも大したダメージにはならなかったようだ。クリスは直ぐに立ち上がる。

「何処まで頑張らせるつもりだ……!」

疲れを知る装者たちに消耗戦を仕掛けてきている。ドラゴン型は首が最後に一本になればそれ以上分裂することはないが、そうこうしている間にアルカ・ノイズは生み出され、数は増え、ドラゴン型を倒すだけで疲労困憊の装者たちに追い打ちをかける。

最後の一体を響が仕留めにかかる。

「分裂したってッ！増殖したってッ！はあッ！」

伸びてきた首を蹴り上げ、バンカーユニットを展開した。当然威力は最大だ。

「何度だってえ！叩き潰すッ！」

ユニットに搭載されたスラスタで加速し、一気に殴り抜いた。最後の首が消し飛び、本体ごと爆散する。しかし、どこまでも往生際が悪いのか、尻尾を切り離して首に変え、蛇のようにのたうちながら戦闘区域から離れていった。

「何度だって……！」

疲れから膝が抜けるも、すぐに立ち上がって最後の一首を追い、何とか追いついたがその最後の一匹も生き汚かった。小型化したため機動力の上がったドラゴン型が更に分裂し、プラナリアの様に数を増やすのだ。

「分裂したってえッ！……しまったッ?!」

突進してきた個体を響は受け止め、アンカージャッキを地面に突き刺して体を固定、地面に投げ捨てる。投げ捨てた後に頭部を思いつきりジャッキを起動させて踏み抜き、逃げた個体のほうを向く。

だが、響の頭上を影が覆った。空を見上げると、光学迷彩を解除した航空母艦が現れる。それは翼たちも観測していた。

「今逃げた奴を追いかけなきゃ……あれは、バルベルデで墜とした……」

戦艦の上でカリオストロが杖の頭を撫でる。

「いくらシンフォギアが堅固でも」カリオストロが杖にキスをし、

「装者の心はたやすく折れるワケだ」プレラーティがカエルのぬいぐるみの首を絞め、

「……」ヨハンが外していたサーベルを携える。

「総力戦を仕掛けるわ」サンジェルマンの指揮により、母艦型アルカ・ノイズが召喚される。

『アルカ・ノイズ、第十九区域方面へ進攻ッ！』

「それって……リディアンのほうじゃ……！」

響のもとに届いた報告は衝撃的なものだった。

クリスがガトリング砲で弾幕を敷き、アルカ・ノイズを迎え撃ちながら、

『ぼさっとしてねえでそっちへ向かえッ!』

「クリスちゃん?!』

「空のデカブツは、あたしと先輩で何とかするッ!』

『で、でも、それじゃあ……!』

「アタシ等に抱えられるもんなんてたかが知れているッ!今ここで行かねえと、本部で頑張ってるバカ二号になんて言われるか分かんねえぞッ?!』

クリスの叱責を受け、響の中で未来の笑顔が蘇った。

『お前はお前の正義を信じて握りしめろッ!せめて、自分の最善を選んでくれッ!』

「ありがとう、クリスちゃん……。だけど、私……!』

「待っていたのは、この瞬間!』

響がイグナイトモジュールの起動スイッチに手を添えたのを見て、サンジエルマンが笑みと共にラピスの嵌められたピストルを構える。

「イグナイトモジュール……!』

『その無茶は後に取っとくデス!』

『我が儘なのは、響さん一人じゃないからッ!』

調と切歌の声が割って入った。轟音と共に本部が使用要請をしていたハリヤーが空を斬り裂き、航空戦艦の頭上で二人が脱出、降下した。

調がシウルシャガナを起動させる。

「Variable Shul Shagana Tron」

切歌のイガリマと共に戦線に加わる。二人からはシンフォギアを纏うことよって発生する負荷が見えない。つまり、リンカーが完成したのだ。

## 絆が繋ぐ愛の力

シウルシャガナを纏った調が降下しながら両手のヨーヨーを遠投してその直線上に存在するアルカ・ノイズを切り裂いた。さらにツインテールバインダーを展開、中から無数の小型鋸を発射し、鋸を雨のように降らしていく。

『α式・百輪廻』

同じくイガリマを纏った切歌が空中で鎌を振り回し、分裂した二枚の刃をブーメランの要領で投擲した。回転する刃が空を駆け、シウルシャガナの鋸と同じく飛行型を両断する。

『切・呪りeツTお』

二人は同タイミングでパヴァリアの錬金術師が運用している航空戦艦の上に着地した。二人の様子からシンフォギアからのバックファイアは確認できない。つまりリンカーが完成し、調と切歌、そしてマリアの装者としての安定した運用が可能になったということだ。

「シウルシャガナとイガリマ！エンゲージ！」

「協力してもらった人間の方々には、感謝してもしきれないですね」

「バイタル安定……。シンフォギアからのバックファイアは、規定値内に抑えられています」

「こつちもよく間に合わせてくれた。感謝するぞ、エルフナイン君！雷君！」

「ふう……」

マリアの広大な脳領域から特定の領域を見つけ出し、エルフナインの電気信号を寸分狂わずそこに送り込むという演算処理能力に優れた雷をもってしても体力の限界がきてしまい、実験室のエルフナインとマリアが眠っていたベッドで泥のように眠っている。あと半日は目を覚まさないと言言できるほど深い眠りだった。

共にリンカー完成に尽力したエルフナインは自身のラボで一息ついていた。テーブルの上にはさつきまでリンカーの製造に使っていた器具が転がっている。モニターにはリンカーの原子配列を立体的にしたものが映し出されていた。彼女はそれを眺めている。

(リンカー完成に必要なだったのは、ギアと装者の間を繋ぐ脳領域を突き止めること。その部位が司るのは……自分を殺してでも、誰かを守りたい一生の思い)

エルフナインは自身の手のひらを胸に当てる。

「それを一言で言うのならばー！」

「愛よッ！」

調達と同じく完成した新型リンカーを投与したことで、安定してアガートラームを纏えるようになったマリアが友里の報告でリディアに先回りし、短剣を抜刀して待ち構える。報告通り、こちらに飛翔してきていたドラゴン型の一匹が目の前にやって来た。

マリアは叫びと共に跳躍し、短剣を蛇腹状に変形させ、リーチを伸ばすことで真つ二つに両断する。

### 『EMPRESS†REBELLIION』

響たちのような爆発力こそないものの、適合係数を除いて翼以上の練度を誇る彼女がギアを安定運用できるようになり、雷の使うケラウノスと同じく全領域にアガートラームは対応しているため、装者たちの戦術の幅が広がった。

アルカ・ノイズを両断し、変形させていた短剣を元に戻してマリアは別の錬の屋根の上に着地する。

「最高……なんて言わないわ」

マリアがゆっくりと立ち上がる。

(あなたは最低の最低よ。ドクターウエル……)

航空戦艦に着地した切歌は一度鎌を大きく振り回して巨大化させ、刃を二枚追加する。

「アースッ！」

そして目の前にいる母艦型に向かって肩のブースターを吹かせて肉薄し、真つ二つに斬り裂いた。切断後、発生した爆発によって飛び散った肉片を足場にして甲板に帰還する。

調もバインダーをアームのように変形させて先端の大型鋸を高速回転させながら母艦型に投げ放つ。真つ直ぐに飛んでいった鋸はアルカ・ノイズを喰い破るように切り裂き、爆散した。

そんな調の足元に火炎弾が撃ち込まれるも、彼女はジャンプして回避した。

ここは錬金術師の所有する航空戦艦の上。つまり、錬金術師たちが迎撃にやっつてこない理由はない。調に火炎弾を放った張本人であるプレラーティが両腕に火を灯し、ボールのように投げつけた。

調はバインダーから放った鋸で迎え撃ち、視線が彼女のほうに向いているうちに切歌が鎌を振り下ろす。プレラーティはそれをギリギリで回避するが、切歌が追撃を仕掛けてきた。

だが、錬金術師も一人ではない。カリオストロが光弾を発射して切歌の足を止め、掌底を放つが切歌はそれを柄で受け止める。鏝迫り合のような状態だ。

「結局、お葉頼りのくせして」

「リンカーを、ただの薬と思わないで欲しいデスッ！」

「みんなの思いが完成させた絆でッ！」

調が回転で威力を引き上げたヨーヨーをプレラーティに投擲する。彼女はカエルのぬいぐるみを通して防御陣を展開することでヨーヨーを弾き飛ばし、五つ展開した水の錬金術による氷の槍を放った。調は槍を踊るように回避しながらプレラーティに接近し、スカートを鋸に変化させる。

『△式・艶殺アクセル』

プレラーティは難なく防御陣で受け止める。だが、反応こそできたものかなり攻撃が重いようだ。こめかみを冷や汗が伝い、防御陣が耐えきれず破壊された。

カリオストロも攻撃を押し返され、切歌が肩アーマーをアンカーのように飛ばした攻撃に咄嗟に防御陣を展開するも破壊され、吹き飛ばされてプレラーティと背中がぶつかってしまう。

「ッ」

「きつと勝利をッ！」

「むしり取るデスッ！」

調と切歌はジャンプした後調は脚部から高速回転する鋸を、切歌は先の鋭い三日月形の鎌を展開し、跳び蹴りをプレラーティ達に放つ

た。やらせるわけにはいかないとサンジェルマンが両者の間で防御陣を広げ、ヨハンがサンジェルマンの背後にいる二人を抱え離脱した。

「離脱しろサンジェルマンッ！」

「ですがッ?!」

「優先順位を忘れるなッ！」

ここで失ってはならないのはこの戦艦ではなく自分たち。ヨハンに諭されてそれを思い出したサンジェルマンは防御陣を閉じて離脱する。

遮るものなくなった調と切歌の蹴りは艦首の部分を貫通し、そこから連鎖的に大爆発を引き起こした。爆炎の中から勢いよく二人が飛び出し、地面に土煙を巻き上げながら着地する。

「アイツ等は何処デスか?!」

土煙で見えない中を切歌はキョロキョロとあたりを見回して探す。すると突然煙の向こう側から銃声が聞こえてきた。錬金術師たちはファウストローブを纏い、サンジェルマンの放った弾丸が切歌に向かって真つすぐに飛来する。

「その命、革命の礎に……!」

「切ちゃんッ?!」

切歌は反応できなかつたが、体力を回復した響が弾丸の前に立ちはだかり、手のひらで受け止めた。威力を失った弾丸が地面に落下した。

「何……?」

「響さん！」

「間違ってる……。命を礎だなんて!間違ってるよ!」

「四対三なのに……」

「吾輩は出んぞ」

数的優位を誇るカリオストロだったが、それを良しとしないヨハンに遮られてしまった。咳払いをする。

「……気を取り直して、三対三になったからって」

「気持ちが大きくなってるワケダ……」



「ッ?!」

「フム、撤回する。吾輩も戦列に加わろう」

上から接近してくる気配に気づいた。四人は跳躍して避けると、さっきまでいた場所に紅い光の矢が降り注いだ。

響たちが後ろを向くと、クリスと翼、マリアと頼りになる先輩たちがやって来ていた。

「いいや!これで六対四だ!」

「翼さん!クリスちゃん!」

「マリア!」

「ッ」

近距離担当である翼と全距離対応しているマリアが先に降りてきた。次いでクリスも降りてくる。

翼が錬金術師たちに切っ先を向ける。

「いい加減聞かせてもらおうか、パヴァリア光明結社。その目的を!」  
「人を支配から解放するっていたあなた達は、一体何と戦っているの?!あなた達が何を望んでいるのかを教えて!本当に誰かのために戦っているのなら、私達は手を取り合えるッ!」

「手を取るだと?傲慢な」

サンジェルマンは響の叫びを両断した。

「我らは神の力をもってして、バラルの呪詛を解き放つッ!」

「神の力で……バラルの呪詛をだど?!」

「月の遺跡を掌握するッ!」

サンジェルマンが顔の前で拳を力強く握る。それは、彼女の大願に対する力強い意志の表れだった。

## 明日を開くは何方の拳か

サンジェルマンの口から出た言葉は、フロンティア事変を経験した響達には衝撃的なものだった。

「月にある……遺跡を……？」

ナスターシヤが身を没した月遺跡が出たことよってマリアが反応する。

「人を人が力で蹂躪する不完全な世界秩序は、魂に刻まれたバラルの呪詛に起因する不和がもたらす結果だ」

「不完全を改め、完全とただすことこそ、サンジェルマンの理想であり、パヴァリア光明結社の掲げる思想なのよ」

「月遺跡の管理権限を上書いて人の手で制御するには、『神』と呼ばれた旧支配者に並ぶ力が必要なワケだ」

「しかし『神』と呼ばれし者たちの位階は吾輩たち人間よりもはるかに上……。故に人の魂を集めることで自らの位階を押し上げなければならぬ」

「だとしても！誰かを犠牲にしているいい理由にはならない！」

サンジェルマン達思想は人に災禍をもたらす人間の魂を犠牲にして不和からの脱却を目指すモノ。響の想いはどんな犠牲も払わずに不和を取り除くモノ。小を削って大を救う考えと、小だの大だの考えにすべてを救う考え。

倫理や人情という面では間違っているかもしれないが、どの様な革命にも犠牲はつきものだ。この二つを見比べると、現実的なのはサンジェルマンの思想だ。

これらの違いには大人と子供というのがあるのだろう。しかし、だからこそ子供である響は自分の想いを曲げないのだ。子供の強さは、自分の思い描いた考えを何が何でも押し通そうとする気力にある。

だが、大人であるサンジェルマンは思いという曖昧なものではなく、自分たちの思想の言い訳にも聞こえる正当性を叩きつける。

彼女は響に銃口を向け、

「犠牲ではない！流れた血も失われた命も、革命の礎だッ！」

トリガーを引いた。

装者たちは散開し、これを回避する。

上空に剣を放り投げた翼は回避と同時に跳躍し、両刃の超大型の大剣に変形させ、スラスターを吹かせることで落下速度を上げて突撃する。

### 『天ノ逆鱗』

サンジェルマン達は回避したものの、赤いバラの意匠を持つファウストローブを纏ったヨハンは避けず、真っ向から激突する。彼女は振ってくる大質量に余裕を崩さず、むしろ不敵な笑みを浮かべた。

「騎士对待……。一つ勝負と行こうじゃないか……。フツ！」

携えたサーベルを素早く抜刀し、「この世のどの宝石よりも美しい」と称された剣技でもってして迎え撃った。細身のサーベルと極大な大剣の切っ先がぶつかり合う。

「剣技置換……。分解！」

「なに?!」

すぐさまヨハンは錬金術の基礎の一つである『分解』を自らの剣技を置換錬成することでブーストし、翼の大剣を分解した。大剣が光の粒子となって消滅する。

「ぐあッ！」

急に足場でもあつた大剣が消滅したことでバランスを崩し、翼が地面へ墜落した。それをサンジェルマンが追撃しようと銃口を向けるが、そうはさせじと響が肉薄した。

響の接近を察知したサンジェルマンは銃口の向きを変え、トリガーを引く。放たれた弾丸は錬金陣を通って加速し、地面に着弾。弾丸の着弾地点から巨大な岩石の塊が咲いた。咄嗟に響が横っ飛びで避けるもサンジェルマンの弾丸は避け続ける響の後ろを追ってくる。

「近づけないッ！」

カリオストロの放つ光弾をマリアは加速することで回避し、短剣を抜刀して蛇腹剣に変形させて振るうも光弾を線にして自身の周りを覆うことで弾き返した。

「ッ?!」

「これならどうだあッ！」

マリアとペアを組むクリスがボウガンの矢を放つも、同じくはじき返される。

「いつぞやのお返しなんだからあッ！」

カリオストロは線が凝縮して点となった巨大な光弾を二人に向けてぶん投げる。速度は遅いものの圧倒的な破壊力を持つ光の塊がクリス達に直撃する。

「でかッ……！」

光の塊を喰らって吹き飛ばされた。

プレラーティの相手は切歌と調だ。プレラーティは巨大なけん玉を振り回して玉を飛ばし、避けた二人のうちジャンプして避けた逃げ場のない調を狙う。彼女は帰ってきた玉を柄を使ってハンマーのように叩いて加速させて叩きこんだ。

「調ッ！」

「ッ！」

再び帰ってきた玉を叩き、今度は切歌を狙うも直前で回避される。玉が勢いよく地面をめぐりながら進んだ。だが緊急の回避だったためか切歌は着地地点を誤ってしまい、崩れやすい斜面に着地してしまった。

当然バランスを崩し、斜面を滑り落ちる。

撃墜された調が地面に手をつき、立ち上がる。

「このままでは……！」

「だったらやるデスよ！調！イグナイトモジュールッ！」

「抜剣ッ！」デース！」

「待てえええいッ！」

「ッ?!」

「チッ……！」

突然後ろから聞こえてきた聞き覚えのある声に咄嗟にコンバーターのスイッチを押す指を止める。二人の目の前に腰のマントを翻しながらケラウノスを纏った雷が降り立った。

「姉さん?!」

「姉ちゃん?!」

「対策のないままイグナイトはダメだ!……ああクツソ!頭がガンガンする!」

拮抗状態にある現状を打破するために、雷は弦十郎の指示を受けた緒川に叩き起こされていたのだ。その為非常に不機嫌であり、起こした相手が物腰の低い緒川でなければキレ散らかしていた事だろう。

雷は自分の叫びに苛立っていた。

プレラーティは巨大なけん玉を振りかぶる。

「一人増えたところで変わらないワケダアツ!」

「それは……どうかなアツ!」

プレラーティの放った玉から展開される錬金術由来のエネルギーフィールドと、雷を中心に展開される斥力フィールドが激突する。

二つのフィールドが激突している一方、サンジェルマンは銃型のスperlキヤスターに新しく弾丸を装填していた。

「未来のために、私の銃弾は躊躇わないわ」

「何故?!どうして?!」

「分かるまい……。だがそれこそがバラルの呪詛!人を支配する軛!」

銃口を響に向ける。記憶の中に力を持ってなかった故に死した母親の姿が蘇る。

「だとしても、人の手は誰かを傷つけるためではなく、取り合うために……!」

「取り合うだと……?!いわれなき理由に、踏みにじられた事の無いものが言うことだツ!」

響の訴えがサンジェルマンの逆鱗に触れた。

サンジェルマンはトリガーを引き、込めたエネルギーのほとんどを使つて蒼いオオカミを疾駆させる。響はそれを避けることなく、バンカーユニットを最大展開して真正面から迎え撃つ。

「言ってることをお……全然わかりませんツ!」

「何ツ?!……うあつ?!」

激突したことで光の奔流が炸裂し、サンジェルマンが後退する。そ

して閃光の後の土煙の中、響の拳がサンジェルマンの目の前で止まっていた。

響がサンジェルマンが何を背負っているかを知らないように、サンジェルマンも響が何を背負ってここに居るかを知らない。だからこそ、何故目の前の我が儘なだけの小娘がここまでの力が出せるのか分からなかった。

「だとしても……あなたの思い、私達にもきつと理解できる……。今日のだれかを踏みにじるやり方では、明日のだれも踏みにじらない世界なんて作れません！」

すると突然、マリアが弾いたカリオストロの攻撃が二人に襲い掛かった。

「あらやだー！」

「こつちー！」

「ツー！」

翼を相手取っていたヨハンと、寝起きのテンションのためプレラァティと交戦している調と切歌の援護に回っていた雷が同時に動いた。

響とサンジェルマンは二人そろってダイブすることで回避し、雷とヨハンは肩を並べて光弾を全て稲妻の拳で叩き落とし、サーベルで斬った後、分解していた。

雷とヨハンはそろって振り返る。

「大丈夫、響ッ?!」

「無事か、サンジェルマンッ?!」

「大、丈夫……」

「無事……です」

土煙の中でサンジェルマンが起き上がる。

「私達は……ともに天を頂けない筈……」

響も起き上がり、サンジェルマンに手を差し伸べた。

「だとしても、です……」

「思いあがるなッー！」

差し伸べられた響の手を、サンジェルマンは勢いよく振り払った。

サンジェルマンは立ち上がり、響を見下ろす。

「未来を開く手は！……いつだって怒りに握った拳だけだッ！」

サンジェルマンの言葉は正しい。歴史上に起きた革命は、弾圧や圧倒的な力に苦しめられた力なき者たちが握った拳が起こしたものだ。それが成功したか失敗したかはともかく、響のような開いた拳で何とか出来た。など本来はあり得ないのだ。

サンジェルマンからすれば、次も、その次も上手くいくと考えている楽観的な響が理解できないのだ。

「これ以上は無用な問答……！預けるぞ、シンフォギア」

足元にレポートジェムを投げ捨てて姿を消す。

プレラーティが彼女の行動に疑問を持った。

「……ここで任務放棄って……？ どういうワケだ、サンジェルマン」

「あーしの所為?! だったらメンゴ、鬼メンゴ！」

同じく彼女たちも――カリオストロは謝った後謎のポーズをとって姿を消した。あと残っている錬金術師たちはヨハンだけだ。

ヨハンは隣に立つ雷を上からジイツと見下ろしている。

それを眠気で不機嫌な雷が睨み返す。

「……何？」

「……いいや、何にも」

フツと目を閉じて微笑んだ後、サーベルを納刀して同じくレポートジェムでサンジェルマン達と同じく消失する。

何とも言えない空気が戦域に満ちていた。

## 二つの一歩一歩

S・O・N・G が基地とする潜水艦のブリッジにて、大人たちによる情報の整理、説明が行われていた。先の戦闘で勝負はつかなく、勝利を収めることが出来なかった装者たちの落ち込みはあるものの、相手の目的を知ることが出来たのは組織としてうれしいことだ。「パヴァリア光明結社の目的は、月遺跡の掌握……」

「そのために必要とされる、通称神の力を、生命エネルギーにより練成しようとしていると……」

モニターにはバルベルデでサンジェルマン達が使役したヨナルデパズトリーが映されている。あの時は響、雷の顕現前に打ちこまれた一撃によつて無敵性を突破することが出来たが、二度三度同じ手が通じるか、また、打たせてくれるかわからない。

「仮にそうだとしても、響君と雷君の一撃で分解するほどの規模ではいくまい……。恐らくは、もつと巨大で強大な……」

「その規模の生命エネルギー……いったいどこからどうやって……」

「まさかレイラインでは?!」

「何?!」

友里が大規模の生命エネルギーと聞いて、少し前の魔法少女事変の事を思い出していた。

あの時は雷の―味方に言うような言葉ではないが―悪魔の策と称されるほどの作戦によつて事前に防がれたものの、レイラインは世界中に血管のように張り巡らせており、文字通り地球の血管、生命エネルギーの流れる場所といつて差し支えない。

それをパヴァリアは利用するつもりではないかと友里は推察したのだ。

「キャロルが世界の分解・解析に利用しようとしたレイライン。巡る地脈から、星の命をエネルギーとして取り出すことが出来れば……!」

「パヴァリア光明結社は、チフォージュ・シャトーの建造にかかわっていた……。関連性は大きいにありそうですよ」



「取り急ぎ、神社本庁を通じて各地のレイライン観測所を仰ぎます」  
やはり弦十郎の右腕、緒川は有能だ。何の指示を出す必要もなく、彼は素早く次の行動をとった。

「うむ……。あとは、装者たちの状況だな。リンカーは問題なく作用したらしいが……」

そう、錬金術師たちが持つ賢者の石、ラピス・フィロソフィカスの存在が非常に厄介だった。

装者たちが自由に使うことのできるシンフォギアのブースト機能、イグナイトの使用が禁じられ、それどころか手痛いダメージを受けてしまうというのがあまりにも痛い。唯一雷のケラウノスが独自に持つ決戦機構『シンカ・雷帝顕現』は自由意思で発動できて強力だが、彼女の肉体にスリップダメージが入る上に三分の制限時間をオーバーするとギアが一定期間使用不可能となるのだ。

任意解除が出来るようになったとはいえ、錬金術師が発動後ノートアイムで戦線を離脱という手を取ってきた場合、雷の肉体にダメージが蓄積していくだけの機能と化してしまう。しかもアダムもいるのだ。三分間で五連戦にアルカ・ノイズ殲滅も加えるときついものがある。

そしてそれは、危うくイグナイトを起動しようとしていた調と切歌が一番良く分かっていた。雷が割って入ったことで不発に終わったものの、もしもを考えると気が重くなる。

「もっと強くなりたいデス……」

「あの時は姉さんの姿に安心と頼もしさを感じていたけど、今は疲労困憊の姉さんにもものすごく無理させてたんだと思うと……」

そもそも自分たちがリンカーなしで戦うことが出来ればよかったのだという考えが二人の仲で渦巻く。

「戦う事とさえできればどうにかなると考えてたけど、甘かったわ……」

「クソッ！なんなんだよッ……！」

マリアの横でクリスが拳を自販機に叩きつける。翼は外、即ち海中を黙って眺めていた。

エルフナインが賢者の石攻略のためにラボにこもり、雷はメデイカ  
ルルームで無理を押ししての出撃だったため休息をとっていた。

装者たちの心象は、まだ荒れている。

○○○

雷は目を覚まし、S・O・N・G・本部から下船した後、響に「新  
発売の本を買いたい」といつて本屋に駆けていた。相変わらず本が好  
きだねえと呆れられたが、好きなものは仕方がない。

町で一番大きな本屋に駆けこみ、目的の新発売のもの以外に目につ  
いた面白そうな本を両手いっぱい積み上げていく。そろそろ胸の  
高さを超してきたころ、両手が塞がっているために新しく取ることが  
出来ないことにやきもきしているとスーツを着た女性がその本を掴  
み、一番上に乗せた。

「これでいいかな？」

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ、ケラウノスの装者さん？」

そう呼ばれて初めて女性の顔を見た。白髪に赤のメツシユが特徴  
的なパヴァリアの錬金術師の一人、ヨハンだった。

にっこりと笑ったヨハンは雷の両手に積まれた本の上にそのまま  
手を置き、少しだけ力を籠める。雷は彼女から距離を取ることが出来  
なくなった。

動くことが出来ない雷は目の前で微笑むヨハンを睨みつける。

「何のつもり……？」

「いえ特に。ただ吾輩も読書家なものでね。面白そうな本を探してい  
るだけさ。ただまあ、貴女に少し興味があるのは確か。これからお茶  
でもいかがかな？」

雷は舌打ちを打った後、周りに目を向ける。人でごった返してい  
た。要はここに居る人全員を人質に取られたようなものだ。雷に拒  
否権はない。

「……わかった」

「ありがとう」

彼女たちはレジをすました後、ヨハンの案内で知る人ぞ知るような

喫茶店に入っていた。二人はテーブル席に着き、おすすめのコーヒーをヨハンが勝手に注文した。

「そんなに緊張しないで、この味を楽しんでくれたまえ。ここに来てから吾輩の行きつけの店なんだ」

「敵同士で茶を楽しむ趣味は生憎なくてね」

「おやおや……じゃあ、君が吾輩たちの味方にならないかい？」  
「っ」

ヨハンを一蹴した雷が受けた返しは衝撃的なものだった。

言葉に詰まっていると、両腕を机の上に乗せ、手の甲に顎を乗せて蠱惑的に微笑む。

「君の頭脳は錬金術師に向いている。今は錬金術のれの字も知らないだろうが、吾輩が師事すれば必ず高位の錬金術師となれるだろう。戦闘の腕も申し分ない。ケラウノスをファウストローブにすれば今よりもさらに強くなれる。サンジェルマンの大願を成就させるために手を貸してほしい」

「……」

「もちろん、君にも利益はあるよ？ 吾輩の権限でパヴァリアが所有する貴重な書物は閲覧し放題だし、君の体を綺麗することを約束しよう。……どうかな？」

楽しげに語るヨハンだったが、届いたコーヒーを雷が一口飲む。そしてホッと一息つき、目を細めて答えを待ち望むヨハンを見つめた。「少し前の、私が嫌いだった私ならすんなりと付いて行ったと思う。でも今は、みんなと一緒にいるこの私が好きだし、この体の傷も、一生治らない傷も、今の私に至るためだと受け入れることが出来た。だから……この話は丁重にお断りだ」

「神の力もあるよ？」

「もう結構。この話はここで終わりだ」

「あ、そう」

それを聞いてヨハン小さく笑い、残念そうなそぶりを一切見せず、逆にうれしそうな表情を浮かべた。その表情に雷は面食らってしまふ。

「良かったよ。これで味方になるような君なら期待外れだ。面白くない。……と、この話はここまで。ここからは純粹に読書好きの同志として語り明かそうじゃないか」

雷が何とも言えない表情を浮かべる。敵に連れてこられて何されるかと身構えていたら「趣味について語り合おう」である。

そしてどうも目の前に座る錬金術師は敵対の意思を見せていないので、雷もそれはそれとして熱く語り合った。

○○○

弦十郎は異端技術に関する資料をありつただけかき集めてエルフナインの元に届けていた。荷台に山のように積まれている。

「異端技術に関する、資料らしい資料は、かき集めてきたつもりだ。他にも、必要なものがあつたら何でも言つて欲しい」

「はい……ありがとう……うわっ」

「大丈夫か?!根を詰めすぎちゃいないか……?」

疲労がたたり、エルフナインが倒れてしまった。そのせいで資料の一部が山から崩れ落ちる。

「ご、ごめんなさい……。でも、キャロルから貰った体です。二人で一人。だから二人分頑張らないと……ッ!」

エルフナインに崩れた資料の中の一ページが目に入った。何かを感じた彼女は床に散らばった資料の中からそれを引っ張り出し、まじまじと見つめる。

「どうした?」

「これは……」

資料の中には、響の顔写真と未知の鉱石が映されていた。これこそが、賢者の石を突破する一手だった。

○○○

街一番のホテルの中にある巨大なジャグジーに、シャンパン片手に浸かっているアダムの姿があった。因みに帽子だけかぶったままだ。テイキも同じく入っており、サンジェルマン達は傍らで立っている。相変わらずヨハンは不在だ。

「確かに言つたはずだよ。僕は。シンフォギアの破壊をね」

「申し訳ありません」

「フン。前はいいところで邪魔したくせに」

「いけ好かないワケダ」

「きこえてるわよ！さんきゅうれんきんじゅつしども！アダムのわるくちなんてゆるさないんだから！」

自分に向けられた悪口を聞き流し、シャンパンをグイッと煽る。そして空になったグラスを脇に置いた。

「アスペクトは遂に示された……、テイキが描いたホロスコープにね」  
「ならば、祭壇設置の儀式を……」

「この手で掴もうか、神の力を」

自らの計画に必要な場所を示したテイキをアダムが持ち上げる。愛する人に持ち上げられたテイキは無邪気な子供の様に笑った。

「やーん！テイキとんでつちやーう！」

「完全世界の実現のために……」

テイキを肩に乗せ、ジャグジーから上がったアダムの後姿をサンジェルマン達は見ていた。カリオストロが愚痴る。

「嫌味な奴。あんなのが結社を統べる局長ってんだから、やり切れないね」

「そうだね。だけど私達が付いて行くのは、アイツでも結社でもないワケダ」

そう言ってカリオストロとプレラーティは隣に立つサンジェルマンを見上げた。サンジェルマンも彼女たちのほうを向き、嬉しそうに微笑む。

「二人とも……」

「吾輩も、サンジェルマンの大願のために付いて行くよ」

「ヨハンさん……」

いつの間にか帰還していたヨハンも混じっていた。

「サンジェルマンは祭壇設置の任務がある以上、シンフォギアは吾輩たちに任せてくれたまえ」

「ありがとうございます。して、貴女は先ほどまで何方に？」

「いや、ちよつと……ね？」

唇の前で指を一本立てた。相変わらずキザなふるまいが似合う人だとサンジェルマンは思う。

雷たちが一歩進むたびに、サンジェルマン達も一歩進んでいた。

## 賢者に対する愚者

賢者の石攻略の手を見つけたというエルフナインの報告を受けて、装者たちはS・O・N・G・本部に集合していた。当然、弦十郎をはじめとする大人たちも集まっている。彼女のラボのモニターには響の顔写真と金色の謎の鉱石が映されていた。

マリアがエルフナインに問う。

「これは……？」

「以前ガングニールと融合し、いわば生体核融合炉と化していた響さんより錬成された、ガーベツジです」

「あ〜！あの時のかさぶたあ?!」

「こんな鉱石みたいなかさぶたがあつてたまるか」

「えへへ〜」

雷は響がこの何処からどう見ても石にしか見えないものをかさぶたと認識していたことに呆れていた。

「とは言え、これにさしたる力はなかったと聞いているが……」

「世界を一つの大きな命に見立てて作られた賢者の石に対して、このガーベツジは、響さんという小さな命より生み出されています。つまり、その成り立ちは正反対といえます。今回立案するシンフォギア強化計画では、ガーベツジが備える真逆の特性をぶつけることで、賢者の石の力を相殺する狙いがあります」

「つまりは、対消滅バリアコーティング！」

ようやく見えた突破の光明に、藤堯が興奮を隠せないでいる。彼は戦線に立つことが出来ない分、後方から見ることしか出来ないことやきもきしていたのだ。もちろん、後方支援という必要かつ重大な仕事を担っていることは実感しているが、それでも装者たちが手も足も出ず、そんな時に協力することが出来ないというのに腹が立っていた。

故に、藤堯は人一倍喜んでいるのだ。

「そうです。錬金思想の基本である、マクロコスモスとミクロコスモスの照応によって導き出された回答です」

「問題があるとすれば、対消滅時に発生する不和をどこにやるかなんだが……」

雷の指摘は対消滅する際に発生するバランスの崩れをどうやって処理するかだった。わかりやすく言えば、酸性の塩酸とアルカリ性の水酸化ナトリウムを中和した際に発生する『塩』である塩化ナトリウムをどこにやるか。である。細かく言えば違うだろうが、要はそういう事だ。

雷はその瞳をエルフナインに向けるが、彼女は見つめ返すばかりだ。

その目を見て、雷はだよねと思う

「そうだった、理論構築は私の仕事だった。任せてよ」

「流石にボクも初めての試みですから、何回か回数を重ねて完成させましょう」

「出来るだけ少なくね」

「……そういや向こうには『賢者の石』って名前があるんだ。これはこの馬鹿から生み出されたんだ、さしずめ『愚者の石』ってとこだな」  
「愚者はひどいよクリスちゃん……」

響はそんなことを言っているが、雷、調、切歌は口元を抑えて笑っている。発言者のクリスの他、翼、マリアは腕を組んで「うんうん」と頷いて納得していた。

「うむ！賢者の石に対抗する、愚者の石！」

「ちよ?!師匠までえ?!」

弦十郎がクリスのネーミングに納得する。彼の場合は、存在の正反対さがちょうどよかったから。というのが納得した理由だ。

「それで、その石は何処に？」

「深淵の竜宮……。こんな時に必要になるとは……」

かつて魔法少女事変で作戦の分岐点となった深淵の竜宮にしまわれていたガーベツジこと愚者の石だったが、性質が全く使い物にならなかったため秘匿性の低いエリアに入れていたのだが、ここなら別いいだろうと雷が戦闘区域に選定していたのだ。

つまり今頃海底に沈んでいるということである。



S・O・N・G は海面に浮かぶ作業船に乗り込み、沈んだ無象不要の聖遺物がある程度纏めて引っぱり上げていた。瓦礫の撤去のために作業用潜水艇にマリア達が乗り込んでいる。

「愚者の石の捜索は、まさに泥の中から一粒の砂金をさらう作業だ。長丁場になるが頼んだぞ！」

『了解！』

一方、クリス達は作業船の海底カメラを使って状況を確認していた。マリア達が至近距離で見ているものを、クリス達が全体で見ているのだ。

「あちゃー……」

「思っていた以上に……」

「ぺちゃんこですよ……」

調と切歌の言葉をよそに、クリスはレイア戦を思い出していた。雷の策ではあったとはいえ、彼女はここまでしてしまったのは自分の所為だと思っていた。

マリアが潜水艇のアームからくみ上げた残骸から探知機を使ってクリス達が愚者の石を探していると、同じくそれを探していた男性職員員の悲鳴が聞こえてきた。

アルカ・ノイズが出現したのだ。

すぐさま切歌がシンフォギアを起動させる。

「Zeios Igalima Raizen Tron」

同じくギアを起動させたクリス、調と共にアルカ・ノイズを蹴散らし、非戦闘員の避難を促す。

「大丈夫デス！早く非難を！」

「ふふふ！大丈夫なんて、簡単に言ってくれるじゃない?!このお気楽系女子！」

するとファウストローブを纏ったカリオストロが強襲してきた。

カリオストロはターゲットを切歌にしたようだ。

「誰がお気楽デスとお?!」

「きまつてるでしょ?!」

カリオストロの放った光線を屈んで避けるが、目的は後ろの非戦闘

員だった。光線は彼らの胸を貫き、光に変える。

「あらら、誰のせいかしら？」

切歌は肉薄しようとするも光線に弾き飛ばされ、後方にいたクリスごと吹き飛ばす。

「切ちゃん！クリスさ……ッ！」

プレラーティも参戦し、けん玉の巨大な玉を調に叩きこんだ。光の意図でつながれた玉を巻き戻して剣に刺し、不敵な笑みを浮かべる。

「ダインスレイフを抜剣出来ないシンフォギアなんて、チヨロすぎるワケダ」

「ここでぶち壊されちゃいなさい」

「連中の狙いはシンフォギアの破壊？」

「愚者の石ではないのデスカ?!」

となるとつまり、彼女達は自らの有利を相殺されてしまう愚者の石の存在を知らないということだ。であれば問題はない。

「だったら派手にいくぜえ！」

目くらましを兼ねてクリスがミサイルをばら撒く。

一方、海中にいるため、錬金術師の襲撃を受けていないマリア達の情報伝わる。

「海上施設が攻撃を受けている?!」

「何だと?!」

「すぐ浮上します！」

『そのまま作業を続けてください！』

加勢に加わろうとする響達だったが、友里がそれを止める。

「奴らは愚者の石の事は知らないようだ。回収作業のことが知られれば、邪魔されかねない」

『でも……賢者の石の力が相手では……!』

「ユニゾンです。切歌さんと調さんの歌を重ねれば……」

「抜剣せずとも対抗できるッ！」

「だったら罅をこじ開ける！」

クリスはアームドギアをガトリング砲に変形させ、カリオストロに一声発射した後、全速で距離を詰めていく。

カリオストロは水のベールを展開して弾丸を止めたものの、防御可能領域よりも内側に来られ始めたため、ベールが砕かれてしまった。

「ふんー！」

目の前で向けられていたガトリング砲が真ん中から割れ、威力重視の弓と矢に変化する。

（ベーゼ可能なゼロレンジ！だけど、あーしの唇は安くない……）

問題なく避けたカリオストロだったが、目の前を赤の矢だけでなく緑の鎌が通り過ぎるのを目撃する。そう、クリス達の本当の狙いは切歌を調のもとに飛ばしてユニゾンを狙うことだったのだ。

「ドツキンハート?!」

ロケットのような矢に鎌を引っかけて切歌が飛翔する。そして倒れた調に追撃をかけようとするプレラーティの目の前に着弾し、彼女を退かせた。煙の中から、切歌が調に手を伸ばす。

「さーて！いっちょよらかすデスよー！」

「切ちゃんー！」

調は笑顔でその手を取った。

プレラーティが立ち上がる前に肉薄し、鎌を振り回してコマのように回る。

『災輪・TいN渦あBエル』

プレラーティは防御陣で押し返すが、その死角から調がヨーヨーを投擲した。二つのヨーヨーは空中で合体し、一つの巨大な二枚刃の鋸となってプレラーティを追尾する。

彼女はそれをけん玉の柄で軌道をそらすのが、切歌が飛ばした刃を避けるために無理に移動し、バランスを崩してしまう。

ユニゾンによってフォニックゲインが上昇していき、イグナイトなしてプレラーティを圧倒していく。

「うだつの上がない詐欺師まがいだった私達に！完全な肉体と真の叡智！そして理想を授けてくれたのはサンジェルマンなワケダツ！だからッ！彼女のために負けられないわけだァッ！」

「プレラーティッ?!」

装者たちにも戦う理由があるように、錬金術師たちにも戦う理由が

ある。プレラーティはそれを叫び、倒れる自身を鼓舞した。

「カリオストロが苦戦する彼女に駆け寄ろうとするが、クリスの矢によって分断されてしまう。

「楽しいこと気持ちいい事だけではッ！理想には近づけないワケダあッ！」

たとえそのような思いがあっても、装者たちも背負っているものがある以上負けられない。調と切歌は跳躍し、二人のアームドギアを合体させて刃のついた車輪を形作った。

『禁合β式・Zあ破刃惨無ううNN』

二人は手を繋ぎ、スラスターを全力でふかして突撃する。

「理想のためにッ！」

プレラーティも玉を飛ばして迎え撃った。

「な……にッ……?!うアアッ！」

二つの力が拮抗し合うが、徐々にプレラーティが押され始め、ぶつかり合っていた玉は三つに両断された。

あまりの威力に吹き飛ばされ、海中に落下する。光の柱が上がった。

それを確認したカリオストロが引き際を見誤らずに、

「ここまでにしてあげるわ！」

跳躍した後、テレポトジエムで姿を消した。

夕日が装者たちを照らす。

調と切歌が手を取り合った。

「重ね合ったこの手は……」

「絶対に離さないデス！」

「そういう事は家でやれ……」

潜水艦内では、ひとまず見えた所為かに緒川が珍しくガッツポーズをした。

「やってくれましたね！」

「ああ、今日のところはな……」

指令として、こんな時にこそ緊張感を緩めない弦十郎は先を見据える。

それが正しいと示すように、パウアリア光明結社のアジトには余裕があった。特に、統制局長アダムの余裕が。

プラネタリウムのように星空を投影するティキをしり目に彼がシャンパンを傾ける。そばにはサンジェルマンとヨハンがいた。

「順調に言っているようだね？祭壇の設置は」

「はい。ですが、中枢制御に必要な大祭壇の設置に必要な生命エネルギーが不足しています」

「じゃあ生贄を使えばいいんじゃないかな？」

「え……」

「あの二人のどちらかを……。十分に足りるはずさ、祭壇設置の不足分だってねえ……。完全な肉体より錬成される生命エネルギーならば……」

「局長ツ……！あなたは、どこまで人でなしなのかッ……！」

「選択してもらおうか、君の正義を……」

黙って二人の会話を聞いていたヨハンだったが、彼女はこの世で最もサンジェルマンを知っている人物だ。サンジェルマンがどうするかなんて手に取るようにわかる。

そして知ってるがゆえに、ヨハンはアダムに向けて目を細め、冷やかな視線を浴びせた。

ピンチを招かぬように

カリオストロとプレラーティを追い払った装者たちとS. O. N. G. の面々は引き上げた残骸や泥の中からガーベツジ、患者の石をタブレットを使って搜索するというはたから見れば少しシユールな、彼女達からしたら真剣な作業に取り組んでいた。

タブレットとにらめっこをしていた切歌が唸る。持っていたタブレットから発見を知らせる電子音が聞こえてきたのだ。そしてそのまま小躍りし始める。

「よし切ちゃん。とりあえず落ち着こう」

「おっひょ〜……デースー！」

そして調の静止も聞かずに引き上げた物に手を勢いよく突っ込み、泥をはね上げながら患者の石をつまんで空高く掲げた。その顔には満面の笑みを浮かべている。石が太陽の光を受けて煌めいた。その影で自分の大切な相棒である調が泥を顔に浮けてしまったなど知る由もない。

切歌の歓声を聞いてエルフナインが小走りで駆け寄ってきた。

「見せて下さ……あぁっ?！」

「……こつちは見てらんない……」

が、そんな彼女は泥に足を取られて顔からダイブした。そばにいた響が顔に手を当てる。

エルフナインは体の半分にわたる泥を付着させたまま、患者の石を手にとった。彼女が石をまじまじと見つめる。

「そうです！コレが賢者の石に抗う、ボク達の切り札！患者の石です！」

『こつちも報告！。患者の石を組み込む理論の試作型が完成したから、すぐにでも行けるよ』

その場にいた全員が患者の石を発見したこと、同時に本部内で理論構築を行っていた雷からの報告に喜びをあらわにした。

「すつかり……患者の石で定着しちゃったねえ……」

その中の響だけが、患者の石という名前が定着したことに落ち込ん

でいた。

名前の出所はともかく、賢者に対抗する存在で愚者というのは言い得て妙であったため、定着したのは仕方がない。

〇〇〇

「くああ〜！五臓六腑にしみわたる〜」デース！」

「流石石の発見者は言う事が違う」

こもりつきりで理論構築に励んでいた雷と、愚者の石を発見した切歌はシャワーを浴びながら同じことを言った。泥を引っかけられたためか、調は少し切歌に辛辣だ。

「そう言えば、エルフナインちゃんは？」

この場にエルフナインがいないことに疑問を持った。何故なら彼女が一番汚れていたからだ。

「マツパでまっはな鳥の行水だ」

「泥でまみれた奇跡を、輝かせるために……」

「対抗手段……対消滅バリア……愚者の石の特性で、賢者の石を無効化すれば……」

「雷、そのあたりどうなの？」

体にタオルを巻かず、素っ裸で髪を拭いている雷にマリアの視線が向いた。いつの間にか仲直りした調が切歌にドライヤーをかけていた。それでも二人の視線は雷のほうを向いている。

雷が拭いていたタオルを肩にかける。相変わらず隠さない。

「反動は出来る限り減らしたけど、それでも実際にやらないとどうかは分からないから今は何とも。でも、確実に勝利が近づくのは確かかな」

「……取り合えず体は隠しなさい……」

お互いに真剣な顔をしていた雷とマリアだったが、話している間ずっと素っ裸な彼女にマリアが苦笑いを浮かべ、彼女は雷に「ぼんざーい」させて雷の体にくるくるとタオルを巻きつける。

少しだけ和んだ空気だったが、有効打を打てるかと知った少女たちの胸が高鳴っているのは確かだ。だが、その中で一人、響だけが胸の前で握りこぶしを作った。

(だとしても、まず……)

「あ、クリスちゃん宛に外務省経由で連絡がきていたわよ」

シャワーを浴びにやって来た友里がさつき受けた連絡事項をクリスに伝える。

「連絡？アタシに？」

「バルベルデのあの姉弟が、帰国前に面会を求めてるんだけど……」

「わりい、それなしで頼む」

クリスの答えには迷いが見える。

「あ、でも……」

「バルベルデ……」

調がつぶやき、雷の目がスツと据わる。

全員の中にあの時の光景がよみがえった。私服に着替えた彼女たちは廊下を歩いて行く。クリスなんかは肩で風を切っていた。

「クリスちゃん……」

「過去は過去……選択の結果は覆らない……」

「だからとて、目を背け続けては、今なすべきことすらおざなりになってしまうぞ？」

「それが大変なことなのは分かるけどね」

雷がそう言ってペラリと自分の書いた書類のコピーをめくった。

「でも、そうしないと前に進めないのも事実。後はタイミングかな」

「ご忠節が痛み入るね」

クリスの心配に対するぶつきらぼうな物言いに翼が「雪音、お前は……」と言うが、そこに弦十郎が割って入った。

「うむ、そろっているな」

装者たちが足を止める。休憩所に彼が座っているのは失礼だがかなりシニールだ。

「師匠？なんですかあ藪から棒に」

響の問いには答えず、弦十郎がすくつと立ち上がる。

「全員、トレーニングルームに集合だ！」

「」「」「はあ……？」「」「」

装者全員の疑問符が重なる。それほどに弦十郎の提案が突然の事



だったのだ。

クリスがいつものようにツツコミを入れる。

「トレーニングって……おっさん！愚者の石が見つかった今、今更が過ぎんぞ！」

「これが映画だったら、たかだか石ころでハッピーエンドになるはずがなからう！」

クリスが「何だよ……それ」と呆れるが、同時に雷が「一理ある」と呟いていた。その時、全員が同時に雷が脳筋でもあることを思い出し、そしてそれ以上に彼女は反動が除去し切れず、それがどれほどの影響を与える物か懸念していることを理解していた。

弦十郎が拳を手のひらに打ち付ける。

「御託は、ひと暴れしてからだあッ！」

○○○

錬金術師たちのアジトとしているホテルの一室。先の戦闘で傷き、包帯でぐるぐる巻きにされた痛ましい姿のプレラーティをカリオストロとヨハンが水の錬金術で治療していた。深かった彼女の傷が見る見るうちに消えていく。

錬金術の輝きだけがこの暗い部屋を淡く照らす。

カリオストロが思考する。自分たちの中から一人生贄を出さなければならぬ事。そして、ヨハンの個人的な見解ながら納得がいく、サンジェルマンが自ら生贄となる可能性。そしてそれをなんてことなく言っただけのけるアダムに対する元から積もっていた不信感と猜疑心。

話題のサンジェルマンが部屋に入ってきた。

「プレラーティの修復は？」

さつきまでの暗さなどおくびにも出さずヨハンが「吾輩は君の師匠だよ？」と不敵に笑い、カリオストロが「順調よ、時間は少しかかるけど」と素直な経過を告げた。

「同じ未来を夢見た仲間を……」

サンジェルマンがプレラーティに毛布を掛ける。

「そうね、仲間を傷つける奴は許さない……。あーしも腹を括ったわ

……」

「奇遇だね、吾輩もさ。大切な弟子と、その仲間を傷つける奴を許すつもりはない」

帽子を深くかぶりなおす。

○○○

広いトレーニングルームにギアを纏った装者たちが集合し、そこに街が投影される。友里の操作を受けてアルカ・ノイズの映像を機械が投影した。

切歌、調が真っ先に突っ込み、流れるような武器捌きで斬り裂いていく。響の拳が武者型の腹部を突き破り、翼の放った振り来る光の剣が貫く。クリスのボウガンが重なるように銃口を増やし、三倍の発射量でもってアルカ・ノイズを乱れ撃つ。

「私と切ちゃん！二つの歌を重ねれば！」

「ザババの刃は、斬る相手を選ばないのデス！」

「だからって大人げない……！」

「雷帝使つちや駄目かなあ……？」

雷とマリアのコンビネーションがアルカ・ノイズを破壊すると同時に二人が同じ方向を向いた。それにつられて翼と響も向く。

そこにはジャージに身を包み、ストレッチをしている弦十郎がいた。真正面の戦闘でフィーネを叩き潰し、落下する巨大な岩を拳で粉砕し、憲法に抵触する男が目の前で、しかもやる気満々でいるのだ。

「今回は特別に、オレが訓練をつけてやる！遠慮はいらんぞお！」

クリスがげんなりとする。

「こちらも遠慮なしで行くッ！」

すさまじい速度でそばにいたマリアに接近し、乱打を喰らわせた後、後ろに後退させる。何とか踏ん張って吹き飛ばされるのを耐えた。雷は咄嗟に入れ替わるように前進していたため回避していた。

「ど、どうすればいいのッ……?!」

巻き上がった土煙の中を弦十郎が滑るように移動し、マリアに蹴りを叩きこんだ。防御をしたものの、その上から吹き飛ばした。マリアの体が雑木林に落下する。

「わあああああッ?!」

「ま、マリア!」

「人間相手の攻撃に躊躇しちゃうけれど……」

「相手が人間かどうかは疑わしいのデス!」

もつともである。

そんな中、響が「師匠! 対打をお願いしますッ!」と勢いよく突っ込んでいった。

「張り切るな特訓バカ!」

クリスの制止を振り切つて響が拳を振るうが、弦十郎が難なくそれを受け止める。

「あれは手を合わせ、心を合わせることで私達に何かを伝えようとしているッ?!」

翼がそうこう言っているうちに弦十郎が響の拳を掴んだ。その時、それを好機と見た雷が雷速で接近し、彼の背後から回し蹴りを繰り出す。

が、読んでいたのかそれも受け止められ、掴まれて振り回された後放り投げられる。

「ほいよつと」

「え?……きやあああッ!」

「うわああああッ!」

「ぐはっ」

二人そろって放り投げられた後、落下地点にいたマリアと衝突した。彼女の短いうめきが聞こえる。

さつきまで重要なことを言っていた翼が剣を構える。どうも戦う者としての本能が抑えられないらしい。

「だがその前に、私の中の跳ね馬が踊り昂るッ……!」

翼の一閃を紙一重で避け、それ以降も他愛もなく回避していく。そして大きく振りかぶった振り下ろしを指に本での白羽取りで受け止めた。

「お見事ッ……!」

「ふん……」

受け止めた刀を引つ張り寄せて翼を自らの懐に引つ張り込み、鉄山靠をぶつける。あまりの威力に翼の体が宙を舞う。

クリスが間髪入れずに腰部アーマーから小型ミサイルを発射したが、弦十郎の信管を起動させずに掴むという馬鹿げた技ですべて投げ返されてしまった。

「嘘だろおツ?!……うぐあぁっ!」

爆発の衝撃で後ろに飛ばされ、背後にあったビルの外壁に叩きつけられた。そのまま崩れ落ちる。

弦十郎が一喝する。

「数をばら撒いても、重ねなければ積みあがらないツ!心と意を合わせろツ!爆進ツ!」

そう言つて弦十郎は地面を踏み抜き、衝撃波を調と切歌に飛ばした。その威力で地面がめくりあがり、衝撃波が走ったことで破碎された瓦礫が飛ぶ。

調と切歌は戦わずしてダウンした。

「忘れるなツ!愚者の石は、あくまで賢者の石を無効化する手段にすぎんツ!さあ、準備運動は終わりだあツ!」

「え、じゃあ今のは……?」

「本番は、ここからだツ!」

どこからか取り出したカセットを再生し、音楽を流す。特訓が始まった。

## 乙女のゲンコツ、漢の矜持

夜も更けたころ、パヴァリアの錬金術師たちは神の力を得るために必要な星の門を開けるべく、レイラインの重要地点となる神社に訪れていた。

ティキが夜空を見上げ、自身が観測した星空を投影する。万歳するように両手を上げた。

「ななつのわくせいと、ななつのおんかい……ほしぞらは、まるでおんがくをかなでるふめんのようね！」

「始めようか、開闢の儀式を……」

サンジェルマンが一歩進み、服をはだけさせて背中をあらわにする。彼女の真つ白な背中に、アダムが手をかざした。

彼の手のひらが光を放つ。サンジェルマン白門の表情を浮かべて痛みをかみ殺す。傷一つなかったサンジェルマンの背中に円状の紋章が出来る。そこからは赤い血が垂れていた。

そんな彼女をヨハンとカリオストロが悲痛な目で見ていた。

アダムがサンジェルマンの肩越しに彼女の顔を覗き見る。

「そろそろ選ばなくてはね……、捧げる命はどれなのか……」

「ッ」

「フツ……」

アダムは誰にも聞こえないように小さく囁き、顔を引つ込めて帽子をかぶりなおす。

「さてシンフォギアだよ、気になるのは」

「あーしが出るわ。儀式で動けない人と負傷者には、任せられないじゃない?」

「プレラーティは任せておけ」

「あるのかなあ?何か考えでも」

自分から動くといい、厭味つたらしい言動をダイレクトにぶつけてくるカリオストロにアダムが不審な目を向けた。

だがカリオストロはそれをさらりと受け流す。

「相手はお肌が悪いほどの強敵、もう嘘はつきたくなかったけど、搦手

で行かせてもらおうわ！」

そう言つてどこからともなく試作止まりだったアルカ・ノイズのジエムが入った筒を取り出した。

〇〇〇

改修が完了したシンフォギアのペンダントが五本載ったトレイをエルフナインが差し出す。装者たちは各々自分のギアを手に取つて眺めている。確かに改修されているらしいが見た目に変化はない。

「これが……」

「はい。急ごしらえですが、対消滅バリアシステムを組み込みました」「見た目に変化はないけれど……」

「これで賢者の石には負けないのデス！」

「あとは反動汚染がどれほどの物か……かな」

「ところで、翼とクリスは……?」

マリアが二人がいない事、そしてペンダントも二本足りないことに気づいた。

エルフナインが笑顔で答える。

「お二人には先に渡しておきました。お知り合いに……会いに行くそ  
うなので……」

彼女たちは——特にクリスの——お知り合い……バルベルデで足を失ったステファンと、かつてクリスの姉代わりだったソーニャと東京駅で会っていた。

最新式の義足を装着し、車椅子に乗った彼らとクリス達がカフェでコーヒーを飲んでいた。

ステファンは顔を合わせようとしないうクリスに「今日の夕方の便で帰るんだ。でもその前に、このことを伝えたかった」と言った。

義足の無機質な輝きがクリスの目に映る。

「ああ……」

「術後の経過もいいから、すぐにリハビリも始められるって」

「そうか……」

クリスがしよぼくれているのが当たり前障りのない返事に見て取れた。

それとは反対にステファンの声色は明るい。

「内戦のない国つてのをもう少し見ていたかったけれど、姉ちゃんの帰りを待っている子たちも多いからさ」

「？」

「彼女は雪音のご両親の遺志を継ぎ、家や家族を失った子供たちを支援しているそうだ」

彼の言っている事の意味が分からないクリスは頭の上にはてなマークを浮かべていたが、翼が補足した。

クリスが驚いた顔をソーニャに向ける。

「え……」思わず声が漏れる。

（パパとママの遺志を継いで……。分かった、ソーニャお姉ちゃん  
の所為じゃないって……。だけど……。なのに……）

クリスが何かを言おうと口を開こうとした瞬間、爆発が発生した。窓ガラスが吹き飛び、そこからアルカ・ノイズが侵入してくる。

「取り込み中だぞッ！」

「アルカ・ノイズッ……！二人は早く非難をッ！」

「むしゃくしゃのぶつけどころだッ！」

本部からの通信で雷たちも現場に向かってきていることがわかった。翼たちも即座に状況に対応する。

クリスがイチイバルを起動させる。

「Killter Ichaiival Tron」

正面からの線制圧ではなく、跳躍して射角を取ってからの面制圧で矢をばら撒き、一気に数を減らしていく。

「すごい……」

クリス達の活躍にソーニャたちは足を止めてしまった。爆発とアルカ・ノイズによる分解によって脆くなった屋根が崩落する。しかも、屋根は彼女たちの頭上にあつた物だ。

翼たちは内部にアルカ・ノイズを入れないように戦場を外に移していた。すると突然空からうねりながら狙いを変わらずに彼女たちに飛来する光弾を視認する。翼が直撃弾のみを最小限の動きで防ぐ。

煙が晴れるとファウストローブを纏ったカリオストロがやって来ていた。

「のこのこと誘き出されたわね？」

今回は複数ではなく単騎。そのことにS・O・N・G・内で混乱が広がる。

カリオストロの放った光弾を二手に分かれて避ける。

「雪音！建物に敵を近づけさせるなッ！逃げ遅れた人たちがまだッ……！」

「わあつてるッ！」

威勢よく返事したクリスは足を止めてカリオストロに矢を打ち込んでいくが、彼女はクルクルと踊るように回避した。そして跳躍したと思うとクリスの背後に回る。

すぐ後ろを向いて銃口を向けるが、すでにカリオストロは距離を取っていた。

「ちよこまかとおー！」

「口調ほど悪い子じゃないのね？」

「なッ」

カリオストロの擲楯いにクリスの頬が赤くなる。

その隙について右腕を彼女に向け、四門の砲口から光線を放った。四本の光がクリスを襲う。

「雪音ッ！」

翼が救援に向かおうとするがアルカ・ノイズによって道を塞がれ、分断されてしまう。地面を転がるクリスをカリオストロは見下ろしながら悠々と近づいてくる。

「嫌いじゃないけど殺しちゃうお……ッ?!」

その瞬間、彼女に向かつて蛇腹の剣が振り下ろされた。カリオストロは咄嗟に跳躍して回避する。

「大丈夫?!クリスちゃん！」

「おせえんだよ馬鹿……！」

『α式・百輪廻』

『切・呪りeツTお』



『雷乱神楽』

調の小型の鋸、切歌の鎌の刃、雷の稲妻の矢が翼とクリスを分断していたアルカ・ノイズを殲滅する。

「すまないッ！轟、月読、暁ッ……………」

「いいって事ですよ！」

「たまには、私達だつて！」

「そうデス！ここからが逆転劇デス！」

「そうねえ！ここからよねえッ！」

カリオストロが試作型アルカ・ノイズのジエムを二つ取り出し、雷と響、切歌、そして翼と調を二手に分かれさせて亜空間に閉じ込めた。

「翼さん?!」

「調?!」

「しらちゃん?!」

二組の姿がこの世界から消失する。この場にクリスとマリアだけが残った。

これではザババのユニゾンは使えない。

「なにを?!」

「うふふ、紅刃シユルシヤガナと、碧刃イガリマのユニゾン……………。プレラーティイが身をもって教えてくれたの……………。気を付けるべきはこの二人つて」

「そりやまたずいぶんと……………」

「私達もなめられたものね……………」

カリオストロが両腕の四門の砲口、計八門を二人に向ける。クリスがそれらを打ち落とす、煙の中からマリアが飛び出した。手には短剣を構えている。

「この距離なら飛び道具は……………」

「フッ！」

マリアの振った斬撃を両腕を顔の前で構えるピーカブースタイルに移行した後屈んで避け、右の拳に備わった赤い宝石のナツクルダスターにエネルギーを込める。そしてマリアのから空きな腹部にアツパーカットを叩きこんだ。

「まさかの武闘派アアアッ！」

こぶしを叩きこまれたマリアの体が上に飛ぶ。

「マリアッ！」

クリスが吹き飛んだマリアのほうを向いた隙を見逃さず、素早い身のこなしで懐に入り込む。そして反撃のタイミングを与えずに全体重を乗せたボディーブローを打ち込んだ。

クリスの体がくの字に曲がり、駅の外壁を貫通する。

「ガッツポーズ！」

カリオストロが笑顔で拳を掲げる。

カリオストロの戦闘スタイルは光線や光弾による砲撃戦ではない。ピーカブースタイルから放たれる鋭いパンチこそ、彼女本来のスタイルなのだ。

「閉じ込められたデス！」

「これって、あの時と同じッ！」

「探知役がないけどね……！」

「故に中心の制御機関を探れない以上、力任せに突破するしかあるまいッ！」

「さっきの、特訓……！」

頭脳はあつても目と耳がないため廻すことが出来ない以上、手当たり次第に行くしかない。閉じ込められた組が体当たりでぶつかっていく。

外壁を突き破って中に入ってしまったクリスが起き上がると、目の前には車椅子が挟まって立ち往生したステファンたちがいた。

「まだこんなところに……！」

「ステファンの……車椅子がッ……！」

「ごめんね？巻き込んだじゃって」

煙の中からカリオストロが余裕いっぱい現れた。両のナツクルダスターに光が集まる。

「すぐにまとめて始末してあげるから……！」

「そうはさせ……ッ」

想像以上にダメージをもらっていたらしく、立ち上がろうとしてい

たクリスが膝をつく。

勝利を確信したカリオストロが獰猛な笑みを浮かべた。だが、勝負とは最後までわからないものだ。ステファンは気合の雄たけびと共に立ち上がり、転がっていた金属パイプをカリオストロに向けてけり込んだ。

「自棄のやつぱちツ?!」

パイプはカリオストロの顔面激突コースをまっすぐ進んで行き、彼女の攻撃体勢を崩させる。

その隙についてクリスが矢を放った。カリオストロを離脱させることに成功する。そしていきなり戦いに入り込んできたステファンに怒鳴った。

「何のつもりだツ?!」

ステファンがソーニヤの助けを借りてクリスと向かい合う。

「クリスがあの時助けてくれたから!俺も今、クリスを助けられたツ!  
!」

「ツ」

「なくした脚は……過去はどうしたって変えられない!だけどこの瞬間は変えられるツ!きつと未来だつてツ!」

「ステファン……」

「姉ちゃんもクリスも!変えられない過去に囚われてばかりだツ!」

叫びと共に支えられていたソーニヤの手を振りほどき、自立する。

「俺はこの足で踏みだしたツ!姉ちゃんとクリスはツ?!」

彼の男として、未来を生きようとする者としての叫びに心が震えたクリスとソーニヤが車椅子に置かれた彼の手に手を重ねる。

「これだけ発破かけられて、何時までも足をすくませてるわけにはいかねえじゃねえかツ!」

外ではマリアがカリオストロの鋭く放たれるパンチを喰らって地面にダウンしていた。

「とどめよーッ?!」

ステップを踏んで最後の一撃を叩きこもうとするカリオストロを赤い矢が妨害した。彼女は拳で矢を全て叩き落す。

「遅いッ！だけどいい顔してるから許すッ！」

さつきまでとは打って変わって自身に満ち溢れたクリスの顔を見た。それだけですべてを許す。取り返すことが出来ると確信があるからだ。

「さつきのアレ、この本番にぶつけられるか?!」

「いいわよー！そういうの嫌いじゃない！」

「何をごちゃごちゃとおおお、そおおりやッ！」

大きなハートを指で引いた線で作り、投げキッスを投げた後、思いつき振りかぶった拳を叩きつけて打ち出す。

ハートの弾丸がクリス達に直撃し、炎で包まれた。カリオストロが笑みを浮かべる。が、煙が晴れると、ラピス相手には使えないはずのイグナイトを起動し、攻撃をしのぎ切ったクリスとマリアの姿があった。

カリオストロが当然驚愕する。

「イグナイト……?!ラピス・フィロソフィカスの輝きを受けて、どうしてッ?!」

「昨日までのシンフォギアと思うなよッ?!」

ナックルダスターをグローブ状に変化させ、ジャブに合わせて光線を放つ。だが、イグナイトによって強化された機動性によって二人に躲される。

クリスとマリア、二人の歌がユニゾンし、出力が上昇する。マリアが蛇腹剣を振った。カリオストロがグローブで受け流す。

（これってユニゾンッ?!ザババの刃だけじゃないのッ?!）

彼女は驚きを隠せない。イグナイトを使用可能にしただけではなく、フォニックゲインを爆発的に引き上げるユニゾンまで使われているのだ。余裕を見せていられない。

弦十郎の特訓の成果だ。『あの』準備運動の後、調と切歌の分断が予想されるため、いかなる組み合わせでもユニゾンできるようにしていたのだ。

努力が結実したわけである。

（ラピスの輝きを封じたうえでユニゾンッ……!こんなの、サンジエ

ルマン達にやらせるわけにはッ！)

クリスの弾幕を拳を打ち合わせて生み出したハート形のバリアで受け止め、指向性を持った爆炎をカウンターで打ち放つ。

「やらせるわけにはアアアアッ！」

両の拳を腰だめに構え、蒼いエネルギーを迸らせる。

「高質量のエネルギー……まさか、相打ち覚悟でッ……！」

「あーしの魅力は……爆発寸前ッ！」

グローブを一つに合体させ、エネルギーを地面に打ち込んで空へ飛ぶ。飛翔する彼女を追いかけるため、クリスとマリアはアームドギアとアーマーを変化させ、戦闘機を形作る。

『Change †he Future』

突貫してくるカリオストロを迎え撃つためにブースターを点火し、正面から激突する。赤と蒼、二つの光跡が夕日の空を駆け巡り、ぶつかり合う。

「うおおおアアアッ！」

最後の激突を両者同時に敢行する。膨大なエネルギーが空に放たれた。だが、装者たちには背中を押す者たちがいる。

ステファンが叫ぶ。

「今を超えるッ……！」

ソーニヤも叫ぶ。

「力をおッ！」

二人の声援を受けて、クリスが更に出力を上げた。

「うあアアアッ！」

カリオストロの断末魔が夕日に響く。大爆発が発生した。

合体を解除したクリス達が地上に降り立った。が、力を振り絞った所為で膝から崩れ落ちる。

「やったわね……」

「ああ……」

暫くして亜空間の檻から分断された雷たちが帰還した。

「クリスちゃん！」

「マリア！」

「無事だったか、みんな！」

「ま、何とかな」

「……」

調は一人落ち込んだ表情だ。

「姉さん……」

「……」

いつの間にか調の隣にいた雷が黙って彼女の頭に手を乗せて撫でた。

その日の夜、バルベルデへ帰国するステファンたちをクリスマス達装者全員で見送った。

ステファンとソーニャが飛行機の窓から彼女たちを見つめる。

（クリス……）

（また、何時か……）

（また今度、絶対に……）

クリスの顔に憂いは見えない。もう吹っ切れたようだ。

飛行機が夜の闇に消えていく。

○○○

また別の祠で、サンジェルマンの体にアダムが紋章を刻んでいく。

「やーられちゃったー、きえちゃったー！カリオストロはあ、おほしさまになられたのよ？ちくん」

彼女が苦痛に耐える中、テイキが報告の内容とはあまりにもかけ離れたかわいらしい声で言った思わずサンジェルマンが立ち上がる。

「そんな、カリオストロが……」

「選びやすくなったね？選択肢が一つ減った」

「ッ」

「贅とささげるはプレラーティ？ヨハン？このどちらかだ。丁度いいね、怪我をしてる方か、伸びしろがない方か」

「あなたは、どこまでもッ！」

振り下ろされる手刀をアダムは容易く受け止め止める。

「ああ人でなしさあ！まったくもって正しいね、君の見立ては」

掴まれていた手を振り払われ、サンジェルマンが地面に転がる。

「アダムのひとでなしーろくでなしー！わるいおところはいつもおんあのこにもてもてなのよね！」

「旧支配者に並ぶ力だよ？神の力は。手に入らないよ、人でなしぐらいじゃないと」

少し離れた木の裏で、ヨハンが気を静めるためにサーベルの柄を力強く握る。そして柄から手を離れた後、消えるように姿を消した。

## 独りよがりな戦い方

カリオスト口との戦闘の後、クリスとマリア、弦十郎たちはシミュレーションルームの待合室でエルフナインに頭を下げられていた。頭を下げる彼女の傍らではペンダントを二つ手のひらに乗せた雷が恥ずかしそうに頭をかいている。

「ごめんなさい！対消滅の際に生じる反動の所為でギアのメンテナンスになつてしまつて……」

「出来る限り少なくしたつもりだったけど、ここまでとは思わなかつたや……」

「気にしないの。むしろ急ごしらえでよくやつてくれたわ。ありがとう」と

「おかげで、抱え込まなくていい蟠りもスッキリ出来たしなあ」

使用者であるクリスとマリアの反応で二人は安堵する。すると二人の頭にクリスが手を乗せた。雷の方が彼女よりも少し背が高いため撫でづらそうにしている。

「頼もしいちびっこ後輩だ！」

「クリスさんだつて……」

「そう言つてくれると助かる」

エルフナインがクリスも小さいという主張を「アタシは大きいぞ」と楽し気に一蹴する。雷がアハハと笑つた。

そんな朗らかな空間が広がっている待合室と異なり、目下ユニゾンの特訓が行われているシミュレーションルーム内では少々良くない空気が流れていた。

翼が二刀流にスタイルを変え、調も両手にヨーヨーを掴んで投影されたアルカ・ノイズと相對する。

二人の間に打ち込まれた攻撃を二手に分かれて回避し、体当たりしてきたアルカ・ノイズを翼が蹴ることで調のほうに打ち出す。

「呼吸を合わせろ……月読ッ！」

「は、速いッ?!」

が、どうも二人のスピード感やタイミングが合わないらしく、さつ



きからしよつちゆうこのようなことが起きているのだ。

倒れた調に翼が歩み寄る。

「大丈夫か？」

「切ちゃんとなら……合わせられるのに……」

「調君は、翼のリードでも合わせられずか……」

進展のない両者の現状を見て弦十郎がつぶやく。

見る限り調には切歌ではないとユニゾンすることが不可能と考えているらしく、その思い込みが彼女と翼の間に不和をもたらしめている。彼女と関係の深いマリアや雷なら切歌以外にも合わせる事が出来るだろうが、これでは真にユニゾンできるとは言えない。

結局、目の前のアルカ・ノイズは調の発射した小型鋸に斬り裂かれた。

「こんな課題、続けていても……は?!」

突然背後につむじ風が発生し、そこからいきなり緒川が姿を現した。印を結んでいることから忍術を使ったのであろう。

「緒川さん……?」

「微力ながら、お手伝いいたしますよ」

「そのワザマエは、飛騨忍軍の流れをくんでいる!力を合わせねば、影さえ捉えられないぞ!」

実際、まだギアの出力が低かった時とは言え雷でも彼を攻撃射程に入れるのに時間がかかったのだ。

高機動能力の低いシウルシャガナで、翼とのユニゾンに対する不信感のある状態では翼の言う通り影もつかめないだろう。

丁度響とのユニゾン特訓を行っている切歌がビルの上から調を応援する。

「調!無限軌道で市中引き回しデスよ!」

「うん!」

「出来れば、お手柔らかに」

調は元氣よく答え、バインダーをアーム上に変形させる。どの口が言っているのか分からないが、眉を☒の字にした緒川がゆっくりと構えを取った。真っ直ぐに彼を見つめる。

歌と共に振るわれる大型の鋸を、緒川は軽やかに避けていく。

「隙だらけッ！」

着地の際の隙をつき、跳躍していた調が脚部から展開した大型鋸を飛び蹴りの要領で緒川に突き立てる。が、彼は前後にゆさぶりをかけた瞬間移動で文字通り消えるようにこれも回避した。蹴りの威力で地面が崩れる。

「嘘ッ?!」

「僕はここに」

緒川は調の背後にある街灯の上に立っていた。いつでも背後から攻撃が出来るという証左である。

後ろにヨーヨーを投げ放つが、すでにそこに緒川はいない。道路の上を消えたり現れたりしている。

「追いかけてばかりでは、追いつけませんよ?」

「はやるな月読!」

翼が焦れば相手の思うつぼだと忠告する。

(切ちゃんはやれてる。誰と組んでも……。だけど私は、切ちゃんできなきや……。!)

調の耳には届かなかった。自分には切歌しかいないという思い込みで雁字搦めになっている。表情が更に力む。

(一人でも、戦えなきや!)

一人で緒川を捕まえるためにヨーヨーを投擲する。

周りが見えていない調に翼が並走する。

「連携だ月読!動きを封じるために……!」

「だったら面で制圧!逃がさないッ!」

跳躍することで三次元攻撃を可能とし、バインダーを展開して小型鋸を雨のように発射した。

切歌が焦る。

「駄目!ズス調ッ!むしろ逃がさないと!」

遂に事故が起きる。鋸の一つが緒川の体を両断した。調と翼、待合室のマリアとクリス、雷が驚愕する。雷の隣で見ているエルフナインは手で目を覆っていた。

「どえらい事故デス……っ」

するとポンという煙と共に両断された緒川が太い木と入れ替わり、スーツの上着だけが残されていた。

「思わず空蟬を使ってしまった」

声の聞こえる方に調は驚きの表情を浮かべたまま振り向く。彼は調の背後におり、無事だ。傷一つない。

「力があります。後はその使い方です」

「っ……」

調がそのままへたり込んだ。シミュレーションが終了し、少し離れた場所にいた切歌と響が慌てて駆け寄る。

「調ちゃん！」

「調、大丈夫デスか？」

（あれは……何時かの私だ……）

翼には、調の姿が奏を失ってから自分の自分が重なって見えていた。

待合室にいた面々はブリッジに戻っている。

「これで、各装者のユニゾンパターンを試したことになりますが……」

「調さんだけが、連携によるフォニックゲインの引き上げに失敗しています」

「思わぬ落とし穴だったな……」

普段冷静な調が最もユニゾン適性が低いとは誰も想像できなかった。特に切歌とよくユニゾンによって出力上昇を行っている分、そっち方面には一日の長だと考えていたのだが、逆に切歌とでないという固定概念が出来ていたようだ。

彼女と異なり切歌は誰とでも平均以上の数値を出している。意外と彼女の方が柔軟だったらしい。

そんなことを悩んでいると、通信を知らせるコールが響いた。

「指令。内閣府からの入電です」

「繋いでくれ」

メインモニターに八紘の顔が映し出される。

「八紘兄貴、何かあったのか？」

『ああ、神社本庁を通じて情報の提供だ』

「神社本庁といえば、」

「各地のレイライン観測の件かもしれない」

重要そうな単語に雷が耳を傾ける。

『曰く、「神出ずる門の伝承」……』

「神……パヴァリア光明結社が求める力……」

いきなりの重要ワードに全員が沈黙する。

『詳細については、直接聞いてほしい。必要な資料は送付しておく』

それだけ伝えて通信が切られてしまった。

弦十郎がイスに深く腰掛け治す。

「どうしますか、指令？」

シミュレーションルームを映すモニターに見える落ち込んだ調の

顔。それを見て、弦十郎は決めた。

「気分転換も、必用かもしれんな」

○○○

オレンジの光で照らされたトンネルの中を、マリアが運転するS.

O.N.G. 所有の車が走る。

後部座席に座る響が身を乗り出し、クリスの持つタブレットのモニ

ターに映るエルフナインに質問した。

「埼玉県の……調神社？そこに何かあるの？」

『多くの神社はレイライン上にあり、その神社も例外ではありません。

更に、神出ずる門の伝承があるとすれば……』

「つまり、指し手の筋を探ることで、逆転の一手を打とうとしているわ

けね？」

マリアが将棋で例える。

すると後部座席から何やら袋菓子を開ける音が聞こえてきた。不

思議に思ったクリスが後ろを向くと、切歌が嬉しそうにポテトチップ

を口に運んでいる。

「つか特訓直後だったのに元気だなあ？」

「もちろんデスよおゝ褒め殺すつもりデスか？」

「どういう理屈でそうなる?！」

特訓でうまくいかなかった調が夕暮れの外の景色を見つめている。

彼女は昔、レセプター・チルドレンとして集められた時のことを思い出していた。あの時初めて声をかけてくれたのが切歌だったのだ。

思い出に浸っていると、横から切歌に声をかけられたことで現実に戻ってくる。

「どうしたデスか調？ 鋸じゃないから車酔いデスか？」

「ううん……。 何でもない……。」

雷をバイクの後ろに乗せた翼が窓越しに調を見つめた後、並走して目的地に向かって行った。

## 女の勘

調神社に到着した装者一行、特に切歌が狛犬が兎に変わっているのを見て興奮を隠すことが出来なかった。彼女は「およー?!」と謎の鳴き声を上げている。

手を頭にくつつけて兎の真似をする。

「ごっ、狛犬じゃなくて兎がいるのデスー……お？」

装者たちがそれぞれ兎に興味を示している中、調だけが浮かぬ顔をしていることに気づいた。いつも一緒にいた切歌もつられて浮かぬ顔になる。

雷たちは目的のために本殿に向かって行くと、至る所に兎や月の意匠が込められたところが見える。

「兎さんがあちこちに……！可愛いッ！」

「今のマリアが一番かわいい」

可愛いものに囲まれてハイテンションなマリアをニヤーつと雷が横目で揶揄う。マリアの顔が少し照れで赤くなった。最近雷にかかわれることが多くなったと思うマリアである。

「話には伺ってましたが、イヤー皆さん、お若くていらつしやる」

いきなり背後から声をかけられた。

振り向くと眼鏡をかけた白髪の男性が立っていた。服装から見て恐らく彼がこの神社の宮司なのだろう。温和そうな笑みを浮かべている。

「もしかして、ごこの宮司さん？」

「はっ」

如何やら当たりだったようだ。

「皆さんを見てみると、事故で無くした、娘夫婦の孫を思い出しますよ」

突然の重い話に何とも言えない顔になる。

「生きていれば、丁度皆さんと同じくらいの年頃でしてなあ」

「ん？」

クリスが違和感に気づいた。

「オイオイ、アタシら上から下まで割とばらけた年齢差だぞ？ いいかげんな事ぬかしやがって！」

「冗談ですとも！ 単なる小粋な神社ジョーク！ 円滑な人付き合いに不可欠な作法です」

ぽんと頭を叩いて笑顔を作る宮司。それに気にして損したというような装者たち。とは言え、そのジョークの内容はあまりにも現実的で具体的だった。

まあ、だからこそ一瞬騙されたのだが。

「初対面ではありませんが、これですっかり打ち解けたのではないかと」「むしろ不信感が万里の長城築くつてのはどういうこった……」

クリスががっくりと肩を落とした。

しかし宮司はそんな彼女達に対して生き生きと先導する。

「では早速、本題に入りましょうか」

先を歩く宮司だったが、突然足を止めて振り向いた。

「ところで皆さんは、氷川神社群……。というのをご存じですか？」  
客間に通された奏者たちの囲う机の上に、折りたたまれた古い地図が広げられた。その中に赤い点と線で繋がられたオリオン座が描かれているのが目立つ。

マリアが真つ先に言及した。

「これは……オリオン座？」

「正しくは、ここ調神社を含む周辺七つの氷川神社によって描かれた鏡写しのオリオン座……。とでも言いましょうか」

確かに宮司の言う通り、正座のオリオン座とは鏡写しになっている。

「受け継がれる伝承において、鼓星の神門。この門より、神の力が出づるとされています」

「憶測と推論に過ぎないが、それでもパヴァリア光明結社の目的と合致する部分は多く、無視はできない」

「神出づる門……お?!」

神秘的な空気が流れる中、響の腹の虫が主張を始めた。全員の「なんでこのタイミングで？」という視線が一世に響に向けられる。

「けたたましいのデス……」

「わ、私はいたって真面目なのですが……！私の中に獣がいますてですね……」

「では、晩御飯の支度をしましょうか。私の焼いたキツシユは絶品ですぞ」

まさかの洋食である。

「そこは和食だろ。神社らしく」

「ご厚意はありがたいのですが……」

翼がそこまでしてもらおうわけにはと言おうとしたが、宮司がそれを遮った。

「ここにある古文書。全て目を通すには、お腹いっぱいにして、元気でないと。それに、穴が開きそうなほど見つめている子もいるのですから」

全員が宮司の視線の先を向くと、食い入るようにあごに手を当ててぶつぶつと呟いている雷の姿があった。その視線に気づいた雷が「え？」と、顔を上げてきよとんとしているのを見て、装者と宮司に微笑みが広がった。

○○○

夜。パヴァリアの錬金術師たちが隠れ蓑に使っているホテルの一室で、二つのワイングラスの片方にワイン、もう片方に牛乳を怪我から回復したプレラーティが注いでいた。

彼女は牛乳を注ぎながら悪態をつく。

「あのオタンチン……。詐欺師が一人でカツコつけるからこうなったワケだ……」

そして牛乳の入ったワイングラスを手に取り、テーブルに置かれたワインの入った方にチンと乾杯する。そうしていると、カリオスト口から治療を受けている時の事を思い出した。

彼女は仲間に犠牲を強いること、何かを隠しているはずだと言っていた。彼女のそばにいたヨハンもそれに同意を示し、そして私達の中からサンジェルマンが生贄を選べるのかと疑問を口にしていった。

プレラーティは夜景の見える窓辺に立つ。



「女の勘ねえ？……フン。生物学的に完全な肉体を得るため、後から女となったくせに、いっちゃ前なことを吠えるワケダ……」

グイツと牛乳の入ったワイングラスを煽る。

「だけど……確かめる価値はあるワケダ……」

同じ月が照らす神社の縁側に、開いたノートを四つん這いになって唸りながら眺めている雷が居た。無意識なのか、ペンのお尻でぷにぷにと唇を突っついていいる。

彼女と同じようにこの時間起きているのは、本部へと状況報告を行っている翼と、昼間の訓練の事をまだ引きずっている調くらの物だろう。

彼女の中にあるとある違和感を解消すべく、思考を回しているのだが、なかなかうまくいかない。

「……でも、何で来なかつたんだろう……？」

「眠れないのか？」

「翼さん……いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

「？ならどうしたんだ？」

報告から帰ってきた翼が雷に声をかけた。

そこで今は二人だが、三人寄れば何とやら。というのを思い出し、口にしてみることにした。

「翼さんは、何で錬金術師との総力戦になった時にアダムが来なかつたんだと思います？」

「装者全員とパヴァリアの錬金術師が全員揃った時の事か？」

「はい。あの時、アダムが現れて黄金錬成を使われていれば、空間転移といった移動手段を持たない私達は全滅してたはずなんです」

「確かにそうだな……」

翼が相槌を打つ。

「翼さんは悪く思うかもしれませんが、正直なところ風鳴機関よりも、直接対抗できるシンフォギアを消した方がいいと思うんですけど……」

当然あの絶大な力を持つ錬金術師だ。増長や慢心から気まぐれと  
いうのもあるだろう。

だが、イグナイトをピンポイントで狙い撃つようなメタを張る連中のボスが、シンフォギアをすべて破壊する絶好の機会をみすみす見逃すだろうか？そこが雷の疑念だった。

確実に何かある……女の勘がそう囁いていた。

「己の力を見せつけるため……っていうのも別にあの時じやなくてもいいはずだし……」

「あるとすれば、バルベルデドキュメント……だな」

「え？……あ……！」

翼の他愛もなさそうに言った言葉が、雷の脳内に電撃のように突き刺さる。もしそうだと仮定するならば、と考えると、全てのパズルが一つの芸術のように組み合わさった。

ポカーンと口を開け、月を見上げていた雷に翼が首をかしげる。

そして彼女は翼の肩を掴む。

「解けた……」

「どうした、轟？」

「解けました！今までののが全部！ああどうして私は気づかなかったんだろうー！」

「わかった！わかったから！少し落ち着くんだ！」

結構な力で翼は前後に肩を掴まれて揺すられていた。

解けなかった問題がようやく解けたのだ。雷は目をランランと輝かせている。

すると、突然通信機からコールが鳴った。翼が出る。

「錬金術師が?!」

『新川越バイクパスを、猛スピードで北上中!』

『付近への被害甚大!このまま住宅地へ差し掛かるようなことがあれば!』

「了解しました！轟は解けたといったものをまとめておくんだ！」  
「はいー！」

翼がバイクにまたがり、ギアを纏って錬金術師を追う。そして彼女よりも早く調べが追いかけていた。高機動型のギアならへりなしでも追いつけると踏んだのだろうか。

「決断が速いのはしらちゃんの美点なんだけどなあ……」

苦笑いを浮かべた後、興奮冷めやらぬ顔で勢いよく「ふひひ」とか「ぬふふ」とか気色の悪い笑い声を上げながらノートに記していく。全てをひっくり返す一手が打たれようとしていた。

## 心の壁を越えて

月が輝く夜、なかなか寝付けなかった調は神社の敷地内にある池を覗き込んでいた。別段何かあるわけではないが、流れ出てくる水の波紋を見ているだけでなんとなく心が救われる気がする。

そんな彼女の横から宮司が声をかけた。

「おやおや。何か、悩み事ですか？」

「一人で何とかできます」

ところが調は彼女の長所であり短所である「一人で問題を解決すること」にこだわり、囚われていた。だが、職業柄か、それとも年の功か、宮司は朗らかに続ける。

「それでも、口に出すと楽になりますぞ。誰も一人では生きられませんが」

「そんなの分かってるツーでも……私は……」

分かっていることを口に出された調が叫ぶ。

寝間着の前で重ねた手に力が入る。

「何を隠そうここは神社。困った時の何とやらには、ことかかないと思いますか？」

宮司の言葉には説得力があった。

調は乗り気ではなかったが彼の後を付いて行く。すると調神社の本殿に到着した。そして宮司は本殿の前で二度のお辞儀、二回の拍手、そしてもう一度お辞儀した。ずっとF・I・Sの施設で育った上に、昨今の若者はそのようなことをしているのを見たことが無かった調は困惑している。

不思議そうに見ている調のほうを宮司が向いた。

「若い方には、馴染みない作法ですか？」

「うん……。なんか、めんどくさい……」

「これはこれは」

「しきたりや決まり事、誰かや何かに合わせなきゃいけないって、良く分からない……」

と、言いつつも調も宮司と同じように二礼二拍手一礼をする。

宮司と同じ行動をしたうえで、調が悩みを打ち明ける。

「会わせたくつても上手くいかない。狭い世界での関係性しか、私にはわからない……。引け目が築いた心の壁が、大切な人達を遠ざけている……。いつかきつと……。親友までも……」

調の脳裏に切歌の安らかな寝顔が想起された。

悩みを打ち明けたところで宮司に冷たい人間だ。もしくはそれに類することを言われると思っていた。だが、帰ってきた言葉は全く予想外の物だった。

「あなたはいいい人だ」

「いい人?! だったらどうして私の中に壁があるの?!」

返ってきた「いい人」と自分の姿が調の中で合致せず、思わず問い返してしまう。

「壁を崩して打ち解けることは、大切なことかもしれませんが。ですが壁とは、拒絶のためだけにあるのではない。私はそう思いますよ?」

宮司の言っていることは、調には難しかった。

○○○

ホテルのジャグジーに浸かっているアダムとティキのもとに、何かを隠しているのではないかと踏んだプレラーティが突撃していた。

そしてその目星はビンゴであり、自分たち錬金術師を生贄にしてアダムだけが力を手に入れる算段だったようだ。

プレラーティがアダムを問い詰める。

「その話、詳しく聞きたいワケダ」

「繰り返してきたはずだよ君たちだって……」

アダムが面倒極まりないという口調でジャグジーから立ち上がった。ティキがいやらしくプレラーティを見つめる。

「言わせないよ? 知らないなんて。計画遂行の感情に入っていたのさ、最初から。君の命も、ヨハンの命も、サンジェルマンの命も……」  
「そんなの聞いてないワケダあッ!」

叫びと共にカエルのぬいぐるみを横に引っ張り、水の錬金陣を同時に展開してそこから氷塊を打ち出す。だが、放たれた三つの氷塊はアダムの指パッチンによって切断され、威力をそのままにプレラーティ

に襲い掛かった。

何とか屈んで避けたプレラーティだったが、実力差は歴然だ。

「ほかに何を隠しているッ！何を目的としているワケダッ！」

「人形の見た夢にこそ、神の力は……」

（人形……？）

人形と聞いて唯一該当するティキのほうを向いたプレラーティだったが、その隙に再び指パッチンから放たれる風のカッターを打ち込まれる。

「ッ」

何とか避けたものの視線をそらしていたために反応が遅れ、ぬいぐるみの半分が斬り飛ばされてしまった。プレラーティは手すりに体をぶつけて強引に停止し、ぬいぐるみの口に手を突っ込んだ。そしてそのまま外に向かつて走り出す。

斬られたぬいぐるみの半分を投げ捨て、その口からラピスの嵌められたけん玉を取り出した。そして輝きと共にファウストローブを纏い、けん玉にまたがって巨大化させることでバイクとセグウェイを合体させたような乗り物に変え、夜の道路を疾走する。

アダムが服を一切着ることなく逃走するプレラーティを見下ろす。

「にげたーきつとサンジェルマンにチクるつもりだろう。どうしよう！」

焦るティキと異なり、腕を組んでいるアダムは冷静だ。

「駆り立てるのは任せるとしよう、シンフォギアに」

逃走するプレラーティはサンジェルマンにテレパス能力による接続を試みるが、妨害されていて思うようにいかない。

目の前の障害を排除しながら、プレラーティはどんどん速度を上げていく。

当然、彼女の出現はS・O・N・Gに捕捉されていた。高機動型である調と翼が猛追する。

（シウルシャガナでなら、追いつけるー！）

「高機動を誇るのは、お前ひとりではないぞー！」

調の後を翼がバイクにまたがって追いかけて追いついていた。

プレラーティが走る本線と合流する。

「何をたくらみ、何処に向かうツ?!」

「お呼びでないワケダあッ!」

炎の錬金術が放たれたが、翼が減速、調が加速することで二手に分かれて回避する。

プレラーティは追撃を振り切るためにローラーを下り線との仕切りにぶつけて破壊し、路線を変えた。

「お構いなしと来たか……! ユニゾンだ月読! イグナイトとのダブルブーストマニユーバでまくり上げるぞッ!」

息巻く翼と異なり、調の表情が沈む。

「ユニゾンは……できません……」

「月読……」

「切ちゃんは……やれてる。誰と組んでも……。だけど私は、切ちゃんとでなきゃッ……! 人との接し方を知らない私は、一人で強くなるしかないんですッ! 一人でッ!」

「心に壁を持つているのだな? 月読は」

「壁……」

調はさつき宮司に言われたことを思い出した。少し長く翼の方が生きているからだろうか? 自分の悩みにすぐ思い至るのは。

「っ」

目の前に再びプレラーティが仕切りを破碎して戻ってきた。

「私もかつて、亡き友を想い、これ以上失うものかと誓った心が壁となり、目をふさいだことがある」

「天羽、奏さんの……」

かつてツヴァイウイングだったころの翼の相棒。彼女を失った時に翼も調と同じようになつたのだという。そんな彼女だからこそ、今の調の事を理解してやれる。

「月読の壁も、ただ相手を隔てる壁ではない。相手を想ってこそその距離感だ」

「想ってこそその距離感……」

脳裏に切歌の笑顔が蘇る。

「それはきつと、月読の優しさなのだろうな……」

「優しさ……」

悩みが吹っ切れたのか、調の表情がきりつと鋭くなる。

後ろ向きに放たれたプレラーティの氷塊をスライド移動で避ける。

翼と調が並走した。

「優しいのは私じゃなく、周りのみんなです！だからこうして気遣ってくれる」

ようやくわかったかと言うように翼が凜々しい笑みを浮かべた。

「私はみんなの優しさに答えたいッ！」

「ごちゃつくなッ！いいかげん付け回すのをやめるワケダッ！」

追跡を煩わしく思ったプレラーティは全力で炎の錬金術を発動し、トンネルに備え付けられたジェットファンを撃ち抜いた。台風並みの速度で空気が流れるファンに炎が撃ち込まれ、空気を飲み込んだ炎が爆発的に燃え上がる。

トンネル内が火の海になり、プレラーティがそこから加速して抜け出した。

「ぐうの音も……！」

勝利を確信した瞬間、『ダインスレイフ』の音声と共にイグナイトを起動した翼と調が強化されたギアの防御力でもってして突破してきた。

「わ、ケダ……?!」

翼が標識を見上げた。

「このままいくと、住宅地にツ?!……いぎ、尋常にツ！」

翼が加速し、プレラーティと並走、バイクからブレードを伸ばして走行を妨害する。

「邪魔だてをッ！」

氷の錬金術で追い払おうとするが、逆サイドから接近していた調の鋸にバランスを崩され、不発に終わる。

「動きに合わせてきたワケダッ！」

「神の力ッ！そんなものは作らせないッ！」



「それもこちらは同じなワケダツ！」

翼はプレラーティの言葉に疑問を持ったが、今は不要だと一時的に排斥する。

すると彼女は柄の先端部分に立ち、水の錬金術で大水流を作り出した。高速道路いっぱいを水流が襲う。翼たちはこの大水流を越えねば彼女を追うことは出来ない。

「歌女どもには、激流がお似合いなワケダアツ！」

「行く道を閉ざすかッ?!」

「そんなのは、切り開けばいいッ！」

バインダーから自身を覆うように鋸を展開したまま、小型の鋸を発射して水流の向こう側にある仕切りを破壊した。破壊された瓦礫は空中で鋸に打たれることで軌道を変え、ジャンプ台のように重なる。

翼たちは加速してジャンプ台を利用した大ジャンプで大水流を超えた。

「なんとおッ！」

プレラーティは柄を掴んで玉の部分に乗り、剣を引っこ抜いてハンマーのように自身に向かって振ってくる翼たちをいなした。

翼と調はプレラーティの前方に着地し、一度ブレーキを掛けて相対する。

「駆け抜けるぞおッ！」

翼の号令でプレラーティに向けて加速した。

二人のギアが変形・合体し、ドラッグマシンのような形状に変化する。

『風月ノ疾双』

「サンジェルマンに、告げなくてはいけないワケダツ！アダムは危険だと、サンジェルマンに伝えなければならぬワケダツ！」

叫びと共に剣を玉に突き刺す。そして大型化させ、同じくドラッグマシンのような形状となったけん玉と、翼と調が激突する。

「サンジェルマンツ……サンジェルマアアンツ！」

衝撃波が走り、プレラーティを飲み込んだ。

大爆発の中から、分離した調と翼が飛び出し、高速道路の上を転が

る。そしてゆつくりと身を起こした。

「勝てたの……?」

「ああ、二人で掴んだ勝利だッ!」

二人は向かい合い、微笑んだ。

〇〇〇

プレラーティの目的だったサンジェルマンは大祭壇の準備のため目的の社の一つに来ていた。彼女の傍らにはヨハンもおり、主に準備している間の護衛を担当している。

すると、いきなり固定電話のベル音が聞こえてきた。

「?」

「アダム……」

サンジェルマンが受話器を取り、耳に当てる。

『プレラーティはカエルのようにひきこころされたよ?おにあいだよ!』

「え?!」

「ッ」

電話に出たのはアダムではなくティキだった。アダムしか目に映らない子娘の弾むような声がやたらと二人の耳に残る。

『いけにえにもならないなんてむだじにだよね?ざまあないよね!』

『報告に間違いはない。残念ながら……』

「一人で……飛び出したの……?」

震える声で問うた問いかけは、答えられなかった。

『急ぎ帰投したまえ、シンフォギアに、儀式を気取られる前に……』

「カリオストロに続き、プレラーティまでもが……。くッ……!」

仲間を失った悔しさにサンジェルマンが歯噛みする。そんな彼女の少し離れたところで、ヨハンは帽子をかぶりなおした。

「カリオストロ、プレラーティ……。後は任せた……。そして、後は任せろ……」

アダムの気まぐれで弟子であるサンジェルマンがを生贄になるさまを彼女の師匠のヨハンに見せつけるため、彼女は生贄の任から外されていた。何故そうする理由があるのかは定かではない。本当に、彼

の神の力を手に入れる前のお遊びで、余興なのだ。その為、彼女はサンジェルマンの護衛なのである。

だが、アダムの思惑とは別に、彼女達も表面化で動いていた。彼の気まぐれが、後々牙をむくとも知らずに。

〇〇〇

朝を迎え、調神社から帰るときの事。運転席に座るマリアと、ライダースーツを着た翼、ヘルメットを小脇に抱えた雷が弦十郎とタブレットによる通信を行っていた。

「では、あの錬金術師の向かう先には……」

『鏡写しのオリオン座を形成する神社、レイポイントの一角が存在している』

「これで雷の仮説の一つが事実だと証明できたわけね……」

「翼のパパさんに概要書類は届けてくれましたか？」

昨日の深夜に雷が書いた神の力召喚阻止作戦の事だ。その名も、

『ティマイオス作戦……確かに届けている。後は承認を待つのみだ』

「もう一つの補助作戦のほうはどうですか？」

補助作戦とは、ゴルゴダ作戦の名付けられたもう一つの作戦の事だ。もしも神の召喚を許してしまった際に発動される緊急プラン。こちらの方は確証がないため有耶無耶だが、状況証拠からほぼ確実と  
いっている。

「ゴルゴダ作戦のほうは確証はないが、アダムの行動から見て雷君の推察通りと見ていいだろう。もちろん、イチかバチかなんてない方がいいし、油断は禁物だがな』

因みに両方とも弦十郎、その他S・O・N・G・職員がつけた名前前である。雷の命名はもつと堅っ苦しい。

一方、この冗談好きの宮司は、また神社ジヨークを飛ばしていた。「良かったら、調神社にまたいらっしやい。この老いぼれが生きている間に」

「神社ジヨーク……笑えない……」

フルスロットルな宮司の神社ジヨークにすらべが眉を顰めた。そしてそんな顔をしている調の手のひらに、彼は兎が描かれたお守りを

乗せた。

調が紐をつまんで持ち上げ、微笑む。

「二」ありがとうございます！」「二」

響、クリス、調、切歌がお礼をして神社を去ろうとする。

すると切歌が足を止め、神社の名前を見上げた。

「うくん……。やっぱり不思議デース……。こんな月なんて絶対読めないデスよ……」

「切ちやーん！置いてっちやうよー？」

「わ、分かってるデスよ！」

調と呼ばれ、切歌が駆け出す。

神社の名前は調神社。『調』と書いて『月』と読む神社だ。

## テイマイオス作戦

ビル風が吹きすさぶ夜の街。その街の中にある建物の屋上に一人、サンジェルマンがいた。

彼女は二本の百合の花を屋上から落とす、落下によつて花卉が風に攫われて見えなくなるのを見届ける。

「七万三千八百……七万三千八百……」

これは今まで自身の願いのために糧としてきた人々の魂の数だ。そしてその中に、仲間であり友であったカリオストロとプレラーティの数が加えられた。今、真に仲間であり友と呼べるのは、自らの師匠であるヨハン一人となった。

目を瞑り、黙祷をささげる。

「母を亡くしたあの日から、置いて行かれるのは慣れている……。それでもすぐにまた会える……。私の命も、その為にあるのだから……」

(置いていくのが、これほど辛いこととはな……)

サンジェルマンは置いていくのには慣れていたが、置いて行ってしまう事には慣れていなかった。その相手が年上で自分の師であるとは言え、初めてであることに変わりはない。

だが、そんな感傷を能天気な拍手がかき消した。この状況でそんなことが出来るのは一人いや、一体しかおらず、彼女がいるということ。は彼もいるということだ。

サンジェルマンの背後に、アダムとティキがいた。

二人の背後には、帽子を目深にかぶつて表情を見せないが、サーベルを腰に携え、せめて騎士としての役割を果たさんとしているヨハンが立っている。

「ありやまく〜！しぬのがこわくないのかなあ？」

「理想に殉じる覚悟など済ませてある。それに……、誰かを犠牲にするよりずっと……」

「我が弟子……」

ヨハンは普段サンジェルマンの仲間であり友であり続けたが、この

時だけは師匠という立場に戻っていた。

何故ならサンジェルマンの言った言葉は、ヨハンが彼女の修業時代に教えた心構えの一つだったからだ。

『友を盾にするよりも己が盾となれ。真の友なら共に立ち、共に戦う己の最強の矛であり、盾となってくれるだろう』。

ほかにもいくつかあるが、最もサンジェルマンの根底に根強く残った考え方がこれだった。

テイキがその思いをあざ笑う。

「ヒヒヒヒ！なにそれ?!それがほんしん?!」

「だから君は数えてきたのか……、自分が背負うべき罪の数を……。おためごかしだな……」

「人でなしには分かるまい……!」

何を言われようとサンジェルマンの思いは変わらない。

○○○

雷たちはリディアンにいた。日はすっかり傾き、外はオレンジ色に染まっている。

本来ならこんな時間まで残る必要は全くないのだが、響の残った夏休みの課題を片付けるために残ることになったのだ。

「終わったー!」

雷と未来。二人の手を借りて課題を全て終わらせた響が机にへばりつく。

「終わるとは思ってた……」

「お疲れ様」

「今度は手伝わないよ」

響の隣に座っていた未来が立ち上がってノートを抱え、向かいの席に座っている雷が響の机で頬杖しながらニヤツと笑う。

「ありがとう、響」

突然、ノートを胸に抱えた未来が響に礼をした。

「ありがとうは課題を手伝ってもらったこっちだよ。なんでえ?」

「課題も任務も、頑張るって約束、守ってくれた」

「私はきつと、ラクチンな方に流されてるだけ……。賢くどちらかを

選択するなんてできないから、結局我が儘なんだよね」

「うん。ひびきらしいかも」

未来が首を傾けて言った。

「ホント、好きだねえ……」

雷がお手上げだとアメリカンなジエスチャーをすると、未来に「雷もだよ」と言われてしまった。雷が頬杖を崩し、机の上で腕を組んでそこに顔をうずめる。

「響が間違わないのは、雷がしっかりと道を指し示してるから。でしよ？」

「そう！そうだよ！」

「そうなんデス！」

響が雷に詰め寄ったタイミングで、黒板の方から切歌の大声が聞こえてきた。

彼女がバン！と黒板を勢い良くたたたく。そこには『9・13』と数字が書かれていた。

「近いのデス！」

「そう！あと二日！」

「あと二日で、響さんの誕生びっ！はあらら？」

息巻く切歌の頭に黒板消しが投げられた。あれは結構痛い。そしてそんなことをするのは当然クリスマスしかない。

投げつけられた黒板消しで書いた数字を消し、響の席の周りに集まった。

「ど、どうしたのみんな？」

「クリスマスから聞いたのデス！」

「響の誕生日を？よく覚えてたね」

雷の揶揄いにクリスマスが顔を赤くする。響が嬉しそうに笑った。

「覚えててくれたんだあ！」

「偶々だ！偶々！」

「それにしても、そわそわしてた」

「そうそう！分かりやすさが爆発してたデス！」

クリスマスの顔が茹蟄のようになり、遂に爆発した。

「はしやぐな二人ともお！そろそろ本部に行かないといけない時間だぞ！」

装者たちは、S. O. N. G. 本部ブリッジに集合した。

弦十郎が全員揃っていることを確認する。

「では報告ブリーフィングを始める。……映像を頼む」

「はい」

友里がキーボードをタイプし、メインモニターに映像を映した。それは、調神社で見せてもらった古い地図で、赤の点と線が描かれた、あれだ。

「調神社所蔵の古文書と伝承、錬金術師との交戦から、敵の次なる作戦は、大地に描かれた、鏡写しのオリオン座、神出づる門より神の力を創造することとして、間違いないだろう」

「現在、神社本庁と連携し、拠点警備を強化するとともに、周辺地域の疎開を急がせています」

緒川が黒いメモを取り出し、確認しながら発言した。

「これに対し、我々は雷君の立案した作戦で抵抗する。雷君」

「はい」

装者たちの中から雷が前に進み、手にしたタブレットを操作してメインモニターと画面映像を同期させた。

鏡写しのオリオン座の周辺に、蒼い円が描かれた。

「作戦コード、ティマイオス。要は神の力の召喚阻止作戦です。作戦規模ではなく、どちらかといえば戦略規模なのですが、半分はこちらに関係しているので説明します。簡単に言えば流れ込む星の命をせき止めるという物ですが、成功すれば召喚を阻止することが出来ます。こちらは風鳴八紘さんに協力を要請しています」

「なら、失敗すれば……」

マリアに雷が頷いた。

「失敗した場合……というのは、相手が裏技を使ってきた場合の事です」

「裏技……」

「裏技とは、マクロコスモスの利用。つまり、この地球の命をミクロコ



スモスとし、空に浮かぶ星々の命をマクロコスモスにして、そこからエネルギーを集める。という物です」

「そんなことできるのかよ？」

クリスが疑念を口にする。

「常温核融合を生身で行うような錬金術師ならやりかねないかなつて。まあ、こつちとしてもはやらないでくれると嬉しいけど。……話を戻します」

切り替えるためにおほんと咳払いした。

「それはつまり、何光年も離れた星の命を抽出すること。そんなことをすれば、アダムの魔力消費も少くない筈。黄金錬成の妨げになれば、という希望的観測はしてみます」

アダムの黄金錬成の威力を知る装者たちの顔が明るくなった。あくまでも推定だが、それでも彼の魔力が激減するのはうれしいことだ。神の力への対抗に集中できる。

「でも神を殺すのはどうするのデスか？」

「うん、じり貧は免れないと思う……」

「大丈夫。その為のゴルゴダ作戦だから！」

「ゴルゴダ……」

「作戦……？」

ゴルゴダ。神の処刑場となった丘の名を冠する作戦。その名からもみんなの期待を一身に受けた雷だったが、手のひらをひらひらと動かした。

「でもまだ早いかな。後ろがあると下がっちゃうでしょ？油断が生まれるでしょ？もしかしたら私の気休めかもしれないよ？」

「目の前のことを先にしてから……というわけか」

翼が面白いと言うようにニヤリと笑った。

何千、何万もの検証を繰り返した結果、すでに神殺しの力は手中にあることに気づいたのだ。雷が響を見つめた。

○○○

もう夜も遅いため、雷たちは本部の食堂で夕食を取ることとなった。

響が雷のトレーに乗せられた料理の量を見て楽しげに言う。

「前から思ってたんだけど、雷って食べる量多くなったよね」

響の言う通り、確かに量が多くなっている。大体魔法少女事変でルシフを倒したときあたりから段々と量が増え始め、今では年頃の女子の好む寮よりも少し多いくらいになっていた。

それはつまり、雷の内臓の力が元に戻っていることを意味しているため、喜ばしい事だった。

「そっか……。今まで気付かなかったけど、私、いっぱい食べれるようになったんだ……」

本人はいまいち気付いてなかったらしく、雷が一番驚き、嬉しそうに笑った。

一方、年長組は神殺しが何なのかを考えていた。

「雷は気づいているのかしら……。神殺しがどこにあつて、何なのか」

「あの口ぶりからして、そうだろうな」

「ま、アタシらに出来るのは待つことだけだ。ギアの反動汚染が除去されるまではな」

だが、すぐに考えるのはやめた。

これは思考停止したわけではなく、自分のできることを精一杯すると決めたからだ。それを証明するように、マリアと翼、クリスの表情は晴れやかだ。

するとクリスの目の前に、切歌が身を乗り出してきた。

「デースー！」

「うぐお?!」

思わずのけぞる。

切歌が傾けていた体を元に戻し、提案する。

「皆さんに提案デースー！二日後の十三日、響さんのお誕生日会を開きませんか?!」

「なあー！今言う?!今言うのお?!」

「もしかして、迷惑だった?」

「そういうのサプライズでするものだよ、二人とも」

雷がフオローを入れるが、そういう事ではない。彼女はどこか抜け

ていた。

「そういうわけじゃなくて！今はこんな状況で、戦えるのも、私と雷、切歌ちゃんだけだからさ」

「響が真面目なこと言ってる……」

「せっかくのお誕生日デスよ?!」

「そうだけど……」

「ちゃんとした誕生日だから、お祝いしないとデスね！」

「困らせるな。お気樂が過ぎるぞ」

切歌は自分の本当の誕生日を知らない分、誰かの誕生日というのに敏感だった。身を乗り出して主張する切歌だったが、クリスマスに遮られた。

「お氣樂……」

切歌は愚者の石を探してる際のカリオストロとの戦いで彼女にも「お氣樂系女子」といわれていたことを気にしていた。

「あたしのお氣樂で、困らせちゃったデスか……?」

「うえ?!そんなことないよ!ありがとう!」

響の励ましは、切歌にとって取り繕っているように聞こえた。

## 戦姫と錬金術師の共同戦線

サンジェルマンが神出づる門を完成させるため、鏡写しのオリオン座の中心地点の神社に訪れていた。ここの防衛を任されている黒服のエージェントを錬金術で撃ち倒し、魂を贄と変えながら歩みを進める。

一人撃つたびに今まで数えてきたカウントが一つづつ上昇していく。

「七万三千八百八……七万三千八百九……七万三千八百十……七万三千八百十一……」

ひたひたと裸足のまま石畳の上を歩いて行く。彼女は儀式の邪魔となる衣服を着ておらず、裸の上からコートを羽織ってボタンを留めているだけだ。

黒服がいるという状況に、テイキが口を出す。

「うぞうむぞうがいもあらいつてことは、こっちのけいかくがもろバレってことじゃない？どーするのよサンジェルマン！」

「どうもこうもないよ、吾輩の弟子ならね」

儀式の間、彼女を守る騎士として来ていたヨハンが咎める。

その顔は自慢げではなく、申し訳なさが見え隠れしていた。

サンジェルマンはもちろんと言うようにうなずき、コートのボタンをはずして脱いだ。コートが石畳の上に落下する。

彼女は本殿の前で立ち止まる。

「今日までに収集した生命エネルギーで、中枢制御の大祭壇を設置する」

サンジェルマンが神出づる門を開く前準備として、大祭壇を設置するための呪文を口にした。

すると彼女の足元から命の輝きがあふれ出し、背中に刻まれたオリオン座が錬金陣で囲われ、対応する神社に向けてあふれ出した命の輝きが伸びていき、直撃した。

「それでも、門の開闢に足りないエネルギーは、第七光の達人たる私の命を燃やして……うッ?!」

背中に描かれた星座がつながった。

当然、これほどの大儀式がS・O・N・Gに捕捉されない筈もなく、一時帰宅していた装者たちにすぐさま伝達された。

寮のベッドで眠っていた雷と響が目覚めます。彼女たちの隣では未来はまだ寝息を立てていた。

「はい……はい……はい。わかりました」

「了解です。急ぎます」  
「？」

未来を起こさないように彼女たちは出来る限り小声で受け答えしていたが、流石に距離が近かったため起こしてしまったようだ。未来がゆっくりと瞼を開ける。

「響？雷？」

「行かなきゃ」

「行ってくる」

「待って！あ……ごめん……」

響、雷の順でベッドの梯子を下りていく。が、雷が降りようとした瞬間に呼び止められた。彼女は二人の手を掴もうとしたが、引き留めるわけにはいかないと出した手を引っ込めようとする。

だが、引っ込められかけたその手を雷が梯子の途中で、響は降りきっていたが手を伸ばして未来の手を掴む。

「大丈夫。誕生日だって近いから」

「響の誕生日、みんなで祝わなきゃだからね」

「すぐに帰ってくる」

「だから少しだけ、待ってて」

二人の真っ直ぐな目に見つめられ、不安が吹き飛んだ未来が微笑みを浮かべて頷いた。

「うん……待ってる」

二人はパジャマを脱いで私服に着替え、寮室を飛び出して行った。空が不吉の予兆を示すように雷が鳴り、荒れていた。

サンジェルマンは自身の命をささげて神出づる門を開こうとしていた。自身の命を削っているためか、周囲一帯に彼女の絶叫が響く。

「サンジェルマン……」

ヨハンは見ていることしか出来ない自分が悔しかった。直ぐにでも変わってやりたかった。だが、サンジェルマンと比べれば、自分ではここまでうまく出来なかっただろう。弟子に重荷を背負わせてしまふ自分が堪らなく情けなく感じる。

そんな彼女とは異なり、自分が愛する人のために役に立てるといふ感情しか持ちえないティキは満足そうに眼の前の輝きを眺めていた。すると、突然アダムのテレパスである固定電話のベルが聞こえてきた。ティキが儀式そっこのけで受話器を取る。

『順調のようだね？すべては』

「ほんと、サンジェルマンのおかげだよね！」

受話器を耳に当てたまま、ティキは星空を眺める。

「てんちのオリオンぎが、ぎしきにさだめられたアスペクトでむかいあうとき、ホロスコープに、もんがえがかれる。そのときといちをわりだすのが、わたしのやくめ！そして……」

彼女の機械仕掛けの目が、空に輝くオリオン座の瞬きを捉えた。

○○○

本部メインモニターでは、レイラインを流れる星の命を観測していた。このままいけばもう少しで鏡写しのオリオン座に星の命が流れ込むだろう。

そんな時、八紘が通信を入れてきた。

「お父様?!」

『こちらの準備は出来ている。何時でも行けるぞ』

雷立案のティマイオス作戦が許可され、何時でも発動できることを意味していた。作戦実行には問題がない。あるとすれば、シンフォギアの反動汚染の除去を担っているエルフナインの方だった。

もう少しで作戦が展開されることを知ったエルフナインが焦る。

「急がないと！パヴァリア光明結社と雷さんの作戦に、ボクの手が追いついていないッ……!!」

儀式を進めるサンジェルマンの脳裏に、散って言った仲間たちと、この世に自分を生み出してくれた母親の顔が蘇る。

(カリオストロ……プレラーティ……二人の犠牲は無駄にしない……。そしてお母さん……。全ての支配を革命するために、私は……私……！)

星の命の輝きが、レイラインに沿って地面からオーロラのように伸びる。その輝きはこの光に膨大なエネルギーが宿っていることを示しているようだった。それぞれの光が鏡写しのオリオン座に対応する神社に収束する。

「ひらいた！かみいづるもん！」

「レイラインより抽出された星の命に、従順にして盲目なる、恋乙女の概念を付与させる……！」

サンジェルマンが手を伸ばし、ティキが光の柱に吸い込まれ、天へと上る。そして上空で、彼女の中に神の力が流れ込んだ。

現場に雷と響、切歌の戦闘可能な装者を乗せたヘリが急行する。

「見るデスよ！すごいことになってるデス！」

「え……あれが……?!」

「鏡写しのオリオン座デス！」

「ティマイオス作戦なら……大丈夫！」

本物の儀式を目にし、立案していた雷自身も若干不安になっているようだったが、裏技以外に抜け道がないことを頭の中で再確認し、深く頷く。

「レイラインを通じて、観測地点にエネルギーが収束中ツ！」

「このままでは、門を超えて、神の力が顕現しますツ！」

『合わせろ弦ツ！』

「おおとも兄貴いツ！」

弦十郎と八絃が承認用のキーを取り出し、備え付けられたカギ穴に差し込む。

「決議ツ！」

「二執行ツ！」

二つの場所で同時に鍵が回された。ティマイオス作戦が発動し、鏡写しのオリオン座を囲う神社に配置された要石により遮断。封印を解かれた要石は赤く閃光を放ち、レイラインから流れ込む星の命をせ

き止める。

「各地のレイポイント上に配置された要石の一斉軌道を確認ッ！」

「ティマイオス作戦！成功ですッ！」

「手の内を見せすぎたな、錬金術士。お役所仕事もバカに出来まい！」  
この作戦は、八紘の政治的手腕があつてこそ成り立つもの。確かに立案したのは雷だが、この戦略規模の作戦を実現させたのは彼のおかげだ。

星の命の流れが妨げられ、門が閉じられたことで宙に浮いていたティキが落下し、儀式に失敗したサンジェルマンの体から力が抜けた。

「サンジェルマン！」

地面に倒れ込む直前で、ヨハンが彼女を受け止める。弟子の大願が妨げられたにもかかわらず、彼女のかをは何処か晴れやかだったが、すぐにサンジェルマンを石畳にゆっくりと下ろし、サーベルを抜刀して上空から聞こえてきたローター音に向かって跳躍した。

ラピスが輝き、ファウストローブを纏う。

「サンジェルマンを救ってくれて感謝する！だが、それとこれとは話が別だッ！」

「?!」

「V o l t a t e r s   K e l a u n u s   T r o n」

「雷?!」

「姉ちゃん?!」

雷はすぐさまギアを起動させ、ヨハンの振るったサーベルを下から蹴り上げることで防ぐ。振るわれた刃の直線上から斬撃が飛翔した。プロペラのギリギリを通り過ぎる。

「二人はサンジェルマンをッ！こっちは私が足止めするッ！」

「二分かった」デス！」

「君が吾輩の相手かッ！」

雷がヨハンの腕をつかみ、虚空に電磁波の足場を形成、それを蹴つて森の中に降下した。夜の闇に雷光の光跡だけが残る。が、それもすぐに霧散した。



本部では装者三人が交戦状態に入ったことを報告する。

「ガングニール、イガリマ、ケラウノス。交戦状態に入りました！」

「響ちゃん、切歌ちゃんはユニゾンによるフォニックゲインの上昇を確認ツ！ですが、雷ちゃんは単騎ですツ！」

だが、そんなことは本人が重々承知だった、故に、一つの策を持っていた。

迫りくる地面にヨハンの体を叩きつけ、雷は落下の衝撃を受け流しながら地面を転がり、すぐさま構えない構えを取る。だが、相対するヨハンも衝撃を逃がし、サーベルを構えた。

連続で放たれる炎や水、風の斬撃を避け、迎え撃ち、蹴り壊しながら相対する。

「君とは、立場が違えば良き友となれたと、今更ながら思うよ」

「同感……ツ?!」

急接近してきたヨハンの振り下ろしを紙一重で避け、下ろされた腕を掴んで円の動きで受け流す。ヨハンの体が勢いのままに跳んでいた。彼女は空中で反転して着地する。

「そう思うなら、取引をしないか？」

「取引……？」

「ああ、サンジェルマンが勝てば、私はあなたの仲間になる」

「なるほど、ガングニールの装者が勝てば、吾輩が君たちの仲間になれる……と言う事かな？」

面白い。と、ヨハンが笑った。

策と呼べるようなものではないかもしれないが、単騎であつて勝ちが確定出ない以上、響と切歌との信頼に賭けるしかない。当然、勝ちを捨てたわけではない。

これは、意識を誘導するための物でもあつた。

「交渉成立ツ！」

「ツ！」

雷がイグナイトを抜剣した。ギアが黒く、鋭角的で攻撃的な姿となる。

ヨハンがノーモーションで虚空から放たれた雷撃をサーベルの突

きで置換分解しようとする。が、その直前に雷撃が閃光に変化し、目をくらまされてしまい、サーベルを携える右側への接近を許してしま  
う。

完全に不意打ちであったために完璧な対応が出来ず、咄嗟に刃を振  
るってしまった。

「しまっ?!」

「らあッ!」

振るわれる刃を体を後ろに大きく仰け反ることでかわし、仰け反つ  
た反動で足を思いつき振り上げた。優雅かつ鋭い雷の蹴り上げを、  
不意打ちで無くなったために対応が追いついたヨハンが最小限の動  
きでかわした。

そして逆に無防備となった雷の背中に突きを放つ。が、彼女はバク  
転の要領で突きを回避するも着地の瞬間に突きを置換錬金して威力  
の底上げをした後ろ回し蹴りが雷の顎を撃ち抜いた。

脳が激烈に揺さぶられ、足元がふらつく。

「がッ?!」

「ほう……イグナイトをアルベドの二段階開放することで防御を底上  
げ、意識が飛ぶのを防いだか……。だが、気絶を防いだだけで、脳が  
揺れたことに変わりはないだろう?」

ヨハンの言う通り、ギアが白い燐光を纏っていた。直撃の寸前で二  
段解除したのだ。だが、脳は揺れたため膝がぐくぐくと震え、立つこ  
ともままならなくなる。地面に膝から崩れ落ちた。

「ま、まだ……!」

「投降してくれないか? 吾輩は無抵抗な君を殺したくない」

戦いの中でならともかく、戦闘継続能力のないものを攻撃するのは  
ヨハンの矜持が許さなかった。だが、雷はそれを聞き入れず、近くに  
あった木によりかかりながら体を起こす。

「そうか……。君とは友でありたかったよ……」

今までで最も鋭い突きが雷に向かって撃ち込まれ、突き刺さる。

本部でも悲鳴が上がる。が、雷のイグナイト稼働時間を示すタイ  
マーにノイズが走った。見ると、ギアから迸る燐光が白から赤に変

わっている。

ふらついていた足がしっかりと地面を掴む。アルベドからルベドへと移行することで強引にギアに剛性を持たせ、これからタイムアツプまでの束の間だけまともに戦えるようにしたのだ。

「吾輩を、射程範囲に誘導してツ?!」

放たれた突きは雷が体を半身にしたことによつて躲され、背後の木に深く突き刺さっていた。直ぐに抜こうとする。

が、雷はギアの全ユニットをフル稼働させて直後に肘撃ちによつてサーベルをより深く刺し込まれ、同時に放たれた横蹴りによつて強引に引きはがされる。

「ぐうツ?!」

「でやあああッ!」

横蹴りからヨハンの体内に全ユニットから集められたプラスの稲妻が叩きこまれた。

「まだ……だアアアッ!」

さらに引きはがされて怯んだ懐に入り込まれ、鳩尾に右ストレートを喰らってしまう。

この拳からは同じく全ユニットから集められたマイナスの稲妻を打ち込まれ、ヨハンの体内でプラスとマイナスの膨大な稲妻が融合。衝撃波と熱エネルギーがヨハンの体内で暴れまわった。

「がアアアアッツ?!?!」

『雷轟散閃大千世界』

体内で炸裂する圧倒的な威力にヨハンのファウストローブが解除され、使用限界が来た雷のシンフォギアが通常形態にシフトダウンする。

雷がその場にへたり込んだ。ヨハンも地面に倒れている。

暫くして、ヨハンが口を開いた。

「君……サンジェルマンがガングニールの装者の手を取った場合は、どうするか決めてなかったな……」

ヨハンが何とか寝返りを打ち、夜空を見上げながら言った。向こうも決着がついたのだ。サンジェルマンが響の手を取るといふ形で。

「吾輩たちも、そうするべきか？」

「私は響と共に居たい。あなたはサンジェルマンを守りたい……。共に立つのに障害は……?」

「無いな」

ヨハンがフツと笑い、錬金術で自身の体を修復、雷の脳震盪を回復させていく。双方とも少くないダメージを負ったため、回復には時間がかかる。だが、その瞬間、遠方から男の声が聞こえてきた。ヨハンの表情が歪む。

「そこまでだよ」

「来たか、アダム……!」

「ツ」

雷もテイアラから放たれる電磁波でアダムと思わしき人物の出現を感知していた。その反応が現れると同時に天のオリオン座が光り輝き、宙から天の星々の命が流れ込む。

「裏技を使ってきたか……!」

本来ならば絶体絶命の危機だろう。だが、雷、ひいてはS. O. N. G. メンバーに驚きはない。既に裏ワザとしてあり得ると予見されていたからだ。

再び神出づる門が開いたことで、器たるテイキの体が宙に浮かぶ。

『超高エネルギーキますッ!』

「止めて見せるッ!」

響が殴りかかったが、アダムの帽子により迎撃され、撃ち落とされた。

地面に落下した響にサンジェルマンが駆け寄る。

「おいお前!……教えてください統制局長!この力で本当に、人類は支配の軛より解き放たれるのですかッ?!」

アダムが投擲し、帰ってきた帽子を受け取め、かぶった。

「出来る……んじやないかなあ?ただ、僕にはそうするつもりがないのさ、最初からね」

「くツ……。謀ったのかッ?!カリオストロを!プレーヤーテイを!革命の礎となったすべての命を!」

「用済みだな、君も……」

アダムの指パツチンが聞こえてきた。

「離れろ！早くッ！」

雷が通信機越しに叫ぶが、もう遅い。

テイキの口から、不完全ながらも、圧倒的な威力のレーザーが発射された。大爆発が響たちを包み込む。雷とヨハンも近くにいたのだが、雷が最大展開した斥力フィールドによって防いでいる。

アダムがニヤリと満足げに嗤った

「この威力ッ……！」

無事では済まない。全員がそう思っていた。が、爆炎の中から聞こえてきた終わりの歌を聴く。

「切ちゃんッ！」

「行くなッ！まだ回復しきっていない体で、爆心地のエネルギーに耐えられるわけがないッ！」

「でもッ！」

「絶唱をしていない君が、あの子よりも耐えられると思うのかッ?!」

「ッ……！」

切歌の絶唱だ。雷はすぐにでも助けに行きたかったが、完全に治療を終えていないためヨハンに止められてしまう。雷は動けない自分に歯噛みした。

切歌は絶唱で鎌を巨大化させ、刃を高速回転させることで盾としていた。

光の中、彼女は叫ぶ。

「確かにあたしはお気楽デス！だけど！一人くらい何も背負っていないお気楽ものがないと！もしもの時に重荷を肩代わりできないじゃないデスカッ！」

ギアが体に負荷をかけ、血涙が流れる。

「絶唱……」

『駄目えッ！』

レーザーの照射が止み、それと同時に限界を迎えた切歌の鎌が砕け散った。彼女の体が宙を舞い、真つ逆さまに落下した。

「切歌ちゃんッ！絶唱で受け止めるなんて無茶を……！」

血涙を流し、朦朧とする意識の中、切歌はその瞳で響を見つめる。

「響さんはもうすぐお誕生日デス……。誕生日は、重ねていくことが大事なのデス……」

「こんな時にそんなことは……！」

「あたしは、本当の誕生日を知らないから……」

「あつ……」

「誰かの誕生日だけは……大切にしたいのデス……」

切歌はレセプターCHILDレンだ。本当の誕生日を知らない。だから本当の誕生日を迎える響を守った。その事実が、響にのしかかり、目に涙がたまる。

すると、地面を空の瓶が転がった。

「リンカー……？」

本部にいるエルフナインが食い入るようにモニターを見つめる。

「過剰投与で絶唱の負荷を最小限に?! だけど体への薬害が……！」

「直ちに切歌君を回収するんだ！ 救護班の手配を急げ！ 体内洗浄の準備もだッ！」

「はいー！」

ブリッジで調の悲痛な叫びがこだまする。

切歌を抱える響の前に、サンジェルマンが立ちはだかった。

「二人には手を出させない……！」

「ほう？それが答かね？君が選択した」

「神の力、その占有を求めるのであれば、貴様こそが私の前に立ちはだかる支配者だ」

「サンジェルマンがアダムを敵と判断した。」

「実にかたくなだねえ君は。忌々しいのはだからこそ。しかし間もなく完成する、神の力は……。そうなると叶わないよ？君に止めることなど」

サンジェルマンの横に響が並び立った。共通の敵であるアダムを見据える。

「私達は互いに正義を握り合い、終生分かり合えぬ敵同士だ」

「だけど今は、同じ方向を見て、同じ相手を見えています！」

するとサンジェルマンの足元に短距離レポートの錬金陣が展開され、そこからヨハンが現れた。

「吾輩も混ぜてもらおうかな？サンジェルマン」

「師匠……」

「もちろん、吾輩だけじゃないがね」

森の中から何層もの電磁フィールドによる門が展開され、その中をすさまじい速度で光が飛翔した。その門はアダムの背後に回るように展開され、その中を光がとおり、光の正体である雷がアダムに跳び蹴りをかました。

「ッ」

「雷！」

容易く避けられてしまうが響の横に並び立つ。しゃがんでいた状態から立ち上がり、マントを翻しながら正面を向いた。

「やるよ響」

「うん……」

雷の声は鋭かった。

サンジェルマンが叫ぶ。

「敵は強大、圧倒的。ならばどうする?!立花響！」

「何時だって、貫き抗う言葉は一つ！」

「二「だとしてもッ！」」

二人の戦姫、二人の錬金術師の共同戦線が、ここに張られた。

敵は、神だ。

## 顕現する神の力

本部にて待機しているメンバーが固唾をのんで雷たちの戦いを見守る中、サブモニターに絶唱に加え、リンカーの過剰投与によって体に多大な負担をかけた切歌が、緒川が指揮する救護班の担架に乗せられていた映像が映し出された。

ひとまず、懸念材料の一つが解消される。

「救護班、切歌ちゃんの改修を完了しましたッ！」

「よかった……」

親友である調が深く安堵の息を吐く。

先輩としてクリスが彼女の肩に手を置いた。

次は、顕現するであろう神との戦いだ。弦十郎が予想戦闘区画の確認を行う。

「付近住民の避難はッ?!」

「まもなくです!急がせています!」

迅速な対応によって避難完了まであと少しだ。

翼が拳を強く握る。

「あんなものが……神を冠する力だということのかッ……!」

翼は破壊兵器としか言いようがない目の前で見せられた力を神と称していることに憤っていた。

「間に合わないのッ?!」

「心配するなよ。あのバカ二号が自信満々に打ち出した作戦があるんだ。アタシたちが慌ててどうする」

「ゴルゴダ作戦か……」

検証のためにS・O・N・G職員には知らされているゴルゴダ作戦の概要だが、そもその目的である神の力の召喚を阻止するティマイオス作戦に集中させるために装者には詳細が知らされていない。

だが、フロンティア事変におけるフロンティアの制御権の剥奪。魔法少女事変のキャロルのカウンター作戦という実績が、一瞬にして喧騒を打ち消した。

もちろん、頼りきりではないけなが、雷の作戦なら何とかなる。そ



んな安心感が広がっていた。

○○○

サンジェルマンがライフル型のスペルキャスターをアダムに向ける。

「神の力は、人類の未来のためにあるべきだ。ただの一人が占有していいものではない！」

「未来？人類の？」

銃口を向けられているにもかかわらず、余裕綽々と言った様子でアダムが帽子を手に取った。

「くだらないッ！」

彼はそう吐き捨て、帽子をフリスビーのように回転させて投擲した。錬金術によつて帽子の縁が発火する。

サンジェルマンが銃弾を的確に帽子に当てていくが、威力は減衰の兆しを見せない。響が拳を振るい、はじき返した。破壊されなかったが、アダムの元へと戻っていく。

「我が儘だねえ……」

大事な妹分である切歌を傷つけられ、怒りが一周回つて冷静になった雷が口角を上げて呟いた。

共同戦線を張ったとはいえ、敵は敵。サンジェルマンは響の行動に困惑する。

「何故私を……?!」

「我が儘だと、親友は言ってくれました」

「我が儘……?」

響は後ろから支えてくれる未来だけでなく、共に並び立つ雷にも「我が儘」だと言われ、自分の我を押し通すことに絶対の折れない自信を持つていた。

アダムが炎を雨のように降らせる。

「群れるなよ弱い者同士があッ！」

四人はそれぞれ跳躍して回避する。

着地と同時にサンジェルマンがアダムに向けて全弾発砲するが、空中を自由に浮遊する彼にかすりもしない。サンジェルマンが肩から

射出した弾倉を交換している隙をカバーするように、ヨハンが突きを置換錬金したつららの一撃を放った。アダムがそれをたやすく受け流す。

「ッ」

再び銃口をアダムに向けるサンジェルマンの背後で、響と雷が並んでいた。雷は常に視線をテイキの方に向けている。

「誰かの力に、潰されそうになってたあの頃。支配に抗う人に助けられたら、何かが変わったのかもしれない。そう考えたら、サンジェルマンさんとは、戦うのではなく話し合いたいと、体が勝手に動いてました!」

「少し違えば、私達はあなた達の手を取っていたかもしれない。逆もまたそう。だったら、今だけでも、手を取ることとは不可能ではないでしょう?」

サンジェルマンが息を呑み、正面を向いた。

「立花響、轟雷。お前たちが狙うは、テイキ……。神の力へと至ろうとしている、人形だッ……。器を碎けば、神の力は完成しない!この共闘はなれ合いではない!私の我が儘だッ……。!」

「我が儘だったら仕方ありませんね!」

「ここには我が儘しかないのか」

二人はどこかうれしそうだ。

「誰かのために、サンジェルマンさんの力を貸してくださいッ!」

「ヨハン!あなたの力、借りるぞ!」

一歩前に出ているサンジェルマンの横に、サーベル型スペルキャスターを抜いたヨハンが並び立つ。

弟子の成長を見て、彼女もうれしそうだ。

「良き友を持ったな、サンジェルマン」

「はい……。師匠」

一番槍を響の拳が、雷の蹴りが担う。アダムはそれらをたやすく躲し、サンジェルマンの銃撃もヨハンの飛翔する斬撃も全て躲す。

「思いあがったか?四人でなら」

接近戦を担当している装者たちの攻撃を足だけでさばっていく。

「これを思い上がりで嗤うなら、それこそが思い上がりだよ。アダム」  
響がブースターを点火し、吶喊。アダムに大きな隙を作ると、彼に向かつて雷が超電磁の嵐を叩きつけた。

「せいッー」

「ぬ？」

一瞬だけ動きが遅れ、バンカーユニットを最大限引き延ばした響の拳が鳩尾に突き刺さる。

かつてネフシユタンの防御力すら貫通した一撃だ。背後の木ごと吹き飛ばした。して、その吹き飛ばした先にはスペルキャスターをライフル型からサーベル型に変形させたサンジェルマンと、ヨハンの師弟の一撃が待ち構えていた。

痛烈な一撃がアダムに直撃する。

アダムがひるんだ隙に、サンジェルマンが響の、ヨハンが雷のテイキに通ずる足場を錬金術で作り出した。二人はそこを駆け上がり、テイキを破壊すべく一撃を繰り出そうとする。

「させはしない、好きにー」

が、予想よりも早く戻ってきたアダムが響を風の錬金術で撃墜し、次いで雷を帽子の投擲で叩き落した。

「僕だけなんだよ触れていいのはーテイキのあちこちにー」

「メロリンズツキューンー」

「ッ」

「気色悪ッー」

落下した響をヨハンが、雷をサンジェルマンが受け止めた。

「このままじゃー」

「焦ることはないよ、響」

「え？」

神の力が完成しつつあるテイキを前にして焦る響だったが、逆に雷は全く問題ないと余裕そうな、人の悪い笑みを浮かべている。

「アダムが黄金錬成を使わないのは、私の策に嵌ったからなんだ」

指を口元に立てる。雷とは反対に、アダムの表情が歪む。

「何光年も離れている天のレイラインからエネルギーを吸いあげたん

だ。あのバカ火力分のエネルギーは残ってないんだろう？どつちに転んでも私達に利がある……それがティマイオス作戦だよ。これが真の策という物さ」

「嫌われるぞ？賢しすぎると」

サンジェルマンが弾倉に込められた魔力をすべて使って蒼き炎の狼をアダムに打ち込んだ。それを帽子で迎撃する彼だったが、直前に狼が閃光へと変わる。ヨハンが炎と同価値の閃光へと錬成したのだ。その閃光の中をバンカーユニットを最大出力モードに切り替えた響が突き抜けてきた。

アダムはそれを左手で受け止めるも、がら空きとなった左側から稲妻の速度で雷が斬り込んだ。腰のユニットに手を添え、居合切りの要領で右腕に斬撃を加える。

『武御雷』

「ぬぐあッ?!」

初めて明確なダメージがアダムに入った。傷口をもう片方の手のひらで抑える。

「今だ！立花響！轟雷！ティキが神の力へと至る前にッ！」

「ッ」

着地した装者たちと錬金術師たちの前に、アダムが舞い降りる。

「なッ?!」

雷が斬り裂いた左腕からは、出血が見られなかった。

その代わりに、機械のようなものと、それにダメージが入ったことを知らせるスパークが散っていた。

アダムが恨みのこもった瞳を四人に向ける。

「錬金術師を統べるパヴァリア光明結社の局長が……まさか……」

「人間ではなく人形だった。とはね……」

「人形だと……？人形だとおおッ?!」

今まで薄っぺらい笑みばかり張り付けていたアダムの表情が、苦痛と絶叫に歪む。彼の怒りにティキが呼応した。

「ゆるさない！アダムをよくもッ！いたくさせるなんてえええッ！」

ティキの叫びと共に、輝きが増した。

「何がッ?!」

「光がッ!……生まれる……!」

小さかったテイキの影が光に包まれ、その姿を大きくしていく。極大の閃光が視界を覆いつくした。

その光が消失する。響、サンジエルマン、ヨハンがそれを見上げ、驚愕した。

巨大な人と魚を合体させたような存在が宙に浮いていた。

胸元にあるテイキが封じられたコアパーツ。その傍らでアダムが笑う。

「神力顕現……。持ち帰るだけのつもりだったんだけどね、今日のところは」

「ゴメンナサイ……。アダジ、アダムガヒドイコトサレテタカラ……。ツイ……」

申し訳なさそうに言うテイキを、アダムは許す。

「仕方ないよ、済んだことは。けどせっかくだから、知らしめようか! 完成した神の力、デイバインウエポンの恐怖を!」

アダムの宣言と共に、肩に配置された水晶体のようなものから光が放たれ、大爆発が発生する。四人は吹き飛ばされ、建造物が破壊される。

響が倒れ込み、彼女を庇うように斥力フィールドを展開しながら、雷が高笑いした。目の前に広がる惨劇よりも、急変した親友に目が引き寄せられる。

「アハハハハハ! この戦い、我々の勝ちが確定したッ!」

「本当なの?! 雷!」

正気を失ったのかと思えばまさかの勝利宣言。響が笑顔を浮かべて雷の肩を掴む。思いのほかそばにいたヨハンとサンジエルマンも、驚きに目を見開いた。

彼女達とは異なり、アダムだけが苦悶の表情を浮かべている。

「ああ! まさかの大きくなるとは! 神の力といえど所詮は贋作! だけどまず……。目の前をどうするかだ」

笑みを引つ込め、正面を見据える。アダムが降りてきたのだ。

「サンジェルマンは人でなしと呼び続けていたね？僕を。そうとも、人でなしさ、僕は。何しろ人ですらないのだから」

自分が人形であることの事実を、意趣返しとしてサンジェルマンにぶつけていく。

「アダム・ヴァイスハウプト……。貴様は一体?!」

「僕は創られた……。彼らの代行者として」

「彼ら……?」

響がオウム返しに聞き、雷が鋭く目を細める。

「だけど廃棄されたのさ、試作体のまま。完全すぎると理不尽きわまる理由をつけられて！あり得ない……。完全が不完全に劣るなどと……」

心底分らないと言うように声が沈んでいた。

「そんな歪みは正してやる！完全が不完全を統べることでねえッ！」

アダムが右手を振り上げ、それに応じてティキが口にエネルギーを貯めていく。自分の身の上話という餌で雷たちを釣り上げたのだ。この一撃のために。

「さつきみたいのを撃たせるわけにはッ！」

響がブースターを点火し、大ジャンプで一気にティキの顔面にまで肉薄し、拳を振るって顔の向きを強引に変えた。

「ティキ?!」

光線そのまま放たれ、雲を割り、成層圏を飛び越えて人工衛星に直撃した。光の奔流に飲み込まれた衛星が爆発する。響を叩き落とすために振るわれたティキの腕を、雷が稲妻を纏った蹴りで叩き落とし、響を抱きかかえて着地する。

ヨハンが驚愕した。

「こんな力のために、カリオストロは、プレラーティは……!」

響を抱きかかえた雷は彼女を立たせ、笑ってみせる。

「響」

「ッ」

「神を、殺すぞッ!」

神を処刑し、神を羞恥の目に晒し、神を殺すゴルゴダ作戦が、ここ

に発動された。

## 神殺しと雷帝

災禍によって紅く染まる夜空を、神の力をその身に宿したテイキが破壊した人工衛星が大気圏に墜ちたことを示す赤い光となりながら落下する。

二人の親友がああ紅く燃えている街のすぐ近くで戦っている。抗っている。

それを知る未来は、二人の無事を祈った。

S・O・N・G 本部は、装者が戦闘に介入できない今、人工衛星墜落の詳細を受け取っていた。

「シエルジェ自治領から通達……。放たれた指向性エネルギーらは、米国保有の軍事衛星に命中……。蒸発させたと……」

「響君たちの状況は……?!」

「周辺のカメラはダウンしたままです。ですが、ダウンする直前に、雷ちゃんやんが響ちゃんを受け止めていた事と、『神を殺す』と、マイクが拾っています」

これで、少なくとも防御能力に長けるケラウノスを使用している雷は無事で、彼女に受け止められたことから、響は戦闘続行に問題のない程度のダメージで済んでいるだろう。

それはゴルゴダ作戦の発動を雷が決めたことから明らかだ。

弦十郎がひとまず胸をなでおろすもつかの間、友里が切羽詰まった様子で報告してきた。

「指令！各省庁からの問い合わせが殺到しています！」

だが、いまは神の力に対抗すべく、ゴルゴダ作戦のサポートこそが最優先。故にほかの事は全て二の次三の次だ。

「すべて後回しだッ！放って……」

『どうなっている？』

「ッ」

突如としてモニターに映された弦十郎の父、訃堂の問いに詰まる。マリアと調が彼らの間から退いた。

『どうなっているのかと聞いておる』



「これより、神の力に対抗する作戦を発動……」

『愚かなり！』

今のところ唯一の手である作戦を、訃堂は斬って捨てた。向こうモニターに映らぬように、雷がどれほど考えに考えてこの作戦を作ったかを理解している職員や装者たちは強く、震えるほどに拳を握った。相手がどれほど偉いかを知っている。知っているからこそ、余計に腹が立った。

『たかだか小娘が考えた計画なぞ、人形で遊ぶ遊技となんら変わらぬッ！浅はかな！片腹痛いわッ！』

「ですがッ……い！」

訃堂はそれ以上の言い訳など聞きとうないわ。と言うように通信を切った。彼は深くいすに腰掛ける。

「やはり、この国を守護せしめるは、真の防人たる我をおいて他になし！」

訃堂が登場したことで、本部の緊張状態も跳ね上がっていた。

「今の通信って……」

「この戦いに、風鳴宗家が動くということだ……」

娘である翼が言うのだから間違いないだろう。

「モニターでますッ！」

藤堯が叫んだ。如何やらカメラが回復したようだ。撮られた映像が映される。

そこには地面に膝をつき、何時でも動けるように前かがみになった響と、彼女のそばで堂々と仁王立ちをかまし、不敵な笑みを浮かべる雷の姿があった。

「頼んだぞ、二人とも……い！」

誰かは分からなかった。だが、確かに、二人の勝利を願う声が聞こえてきた。

○○○

未だに諦めを見せず、逆に一発かまさないと気が済まないというように二人の頭上をディバインウエポンとなったテイキが浮遊している。

「ア、アダム……。テイギ、ガンバツタ……。？ホ、ホメテエ、エ、エ？」  
「いい子だね、テイキはやつぱり」

アダムがテイキの顔のそばに浮遊する。優しい声をかける彼だったが、声色とは真逆の嫌なものを見る目を二人に向けていた。

それに気づかない、気づけない、気づこうとしないテイキは、アダムに褒美をねだる。

「ダツタラ、ハグヂテヨ……。ダキヂメテクレナイト……。ヅダワラナイヨ……」

「山々だよ、そうしたいのは。だけどできないんだ、手に余るそのサイズではね」

「イケズウ……。ソコモマダ、ツキナンダケドネ？」

そんなことを言うテイキに、複数発の高威力の弾丸と、様々な属性を纏った斬撃が撃ち込まれた。ヨハンとサンジェルマンが、何か策のあるらしい装者たちから気をそらすべく、攻撃しているのだ。

「全力の銃弾でツ！」

「時間稼ぎ位でできればいいが……。！」

だが、全ては無駄だ。

ダメージは全て平行世界に押し付けられる。神の力の前には無力に等しい。

反抗の炎を瞳と心に灯しながら、二人は銃とサーベルを落ろす。

「それでもか……」

「気にすらしていない……」

「え?!それだけでいいの?!」

響のすつとんきような声が、シリアスな雰囲気破壊した。この場にいるもののみならず、カメラ越しに状況を確認している本部の面々も含めて一瞬思考が止まる。

ただ二人、全てを把握していた雷と、真実を知るアダムだけが動いた。

「ツ君たちは特に気に食わない。手ずから僕が始末しよう!君たちだけは入念に……」

アダムが雷たちの前に降下する。

だが、その瞬間、雷も同時に動いた。

「ヨハンツ！サンジェルマンツ！」

彼女の声を聞き届け、短い間の共闘だが既に戦友としての勘が芽生えていたヨハンとサンジェルマンが、何をすればいいかと問うまでもなくアダムと装者たちの間に割って入る。

そうすることで、しゃがんでいた響の姿が、アダムの視界から消えた。

「うおおおおおッ！」

響が咆哮を上げ、クラウチングスタートの体勢からまるでロケットのように駆け出した。当然、脚部のアンカージャッキをフル稼働させたロケットスタートだ。

「何ッ?!」

アダムが反応するが、もう遅い。既に響は彼の脇を駆け抜け、テイキの元へと向かっている。彼をその場に縛り付けるのは錬金術師たちの戦いだ。

「あなたを行かせるわけにはいかないッ！」

胸にAppleの旋律を浮かべながら、雷が口を開く。

「何故アダムが黄金鍊成を直接戦闘する装者が集合した時でなく、直接は無害な風鳴機関に打ち込んだのか？それは、そこにあつたバルベルデドキュメントに『神殺しの力』が記載されていたからに他ならない……」

クラウノスの灰色だったボディースーツが金色に染まっていく。

「でも、ただ記載されていた程度ではそんなことはしなくてもいい。何故なら、聖遺物は世界中に散らばっていて、そこには贗作もあるからだ……」

各部ユニットが完全に展開され、彼女の周囲に大出力の斥力が放たれる。危険を察知したテイキが光線を放ったが、フィールドに弾かれてしまった。

「でも、お前はそうしなかった。何故なら、すでに私達の手はその力があるのだから！」

雷の予想だにしなかった一言に、検証目的で知らされていた職員以

外の全員。つまり、装者たちが驚愕する。

襟のユニットから稲妻がマフラーのように伸びる。

「その聖遺物の名は『ロンギヌスの槍』。二千年の時を超え、神を殺したという人々の思いが積層して得た力を持つ槍。かつて、ドイツ軍が徴集していたモノ……」

「まさか、それはッ！」

腰のマントが稲妻に変化する。雷光が形となった。

『シンカ・雷帝顕現』

空間を斬り裂くような速度で雷が飛翔。そして告げた。

「またの名をッ……！」

「テイキッ！」

「アダジ、ガンバル……！」

錬金術師と交戦しているアダムが焦りを見せながらテイキに命令した。神殺しを殺せと。当然、彼女は命令通りに光線を照射する。

響がテイキによって破壊され、宙を舞う瓦礫の上を駆けながら叫ぶ。全ての思いを背負った魂の叫びを。

「撃槍ッ！ガングニイイイルッ！」

「行かせるものかッ！神殺しッ！」

高速で跳躍し、ヨハンとサンジェルマンを振り切ったアダムが響に向かつて帽子を投擲した。が、雷帝となった雷の稲妻が貫き、焼き尽くす。

「やらせない」

「またその輝きかッ……！神殺しとその力……。どおしていつもッ！」

そして空中にいる彼は雷の踵落としによって撃墜され、地面に叩きつけられる。そして替えの帽子をかぶり、撃墜された衝撃でちぎれた左腕を剣のようにした。文字通りの手刀である。

ヨハンとサンジェルマンがアダムと切り結ぶ。

「潰えて消えろッ！理想を夢想したままでえッ！」

（行けッ！行けッ！）

「そのまま行けッ！立花響ッ！」

雷が響の道筋を妨げる光線を叩き落とし、彼女は瓦礫の上を駆けて肉薄していく。

「乗りすぎだッ！調子にッ！……ッ」

よそ見をしていたアダムにサンジェルマンが斬り込んだ。

「私は進むッ……！前に前にッ！ここで怯めば、取り戻せないことに後ずさるッ！」

アクロバティックな動きでアダムをほんろうしながら剣戟を見せていたサンジェルマンと、ヨハンがスイッチした。師弟関係ならではの、戦友とはまた違う息の合い方だ。

「先に生きるものとして、若者たちの道を切り開くッ！今だッ！」

斬撃に分解能力を付与することでアダムの防御力を削りながら隙を作った。

「屈するわけにはアアッ！」

「ぐうううッ?!」

ヨハンのおかげですべてのエネルギーを込めた全力の砲撃をアダムに放った。防御力を崩らされていただけでなく、ほぼ無防備で攻撃を受けてしまったために後方へ吹き飛んだ。

そして響も、テイキの目前にまで迫っていた。テイキが自己防衛のために拳を振るう。

「アダムヲコマラセルナアアアッ！」

テイキの拳と、バンカーユニットを全力稼働させた響の拳がぶつかり合った。神殺しの力が、テイキの拳を粉碎する。腕を粉碎された彼女は醜い悲鳴を上げた。

再生能力を発動させるも、まったく元に戻らない。

「ディバインウェポン復元されず！」

友里の報告は、喜びよりも驚きが上回った。

「効いてるわ……」

「……おい待て。ゴルゴダ作戦つてまさか……！」

薄々気が付いてきた常識人クリスが、油を刺していないロボットのような動きで背後の弦十郎の方を向いた。

彼は腕を組み、肯定するように笑みを浮かべている。

「その通りッ！響君！思いつきりぶん殴れッ！」

『はいッ！』

威勢のいい響の返答が返ってくる。クリスは何とも言えない顔になったが、らしいと笑みを浮かべる。

ドアが開き、治療を終えた切歌が戻ってきた。

「切ちゃん！」

「姉ちゃん！響さん！あたしの分まで行っちゃうデス！」

『うん！』

『ああ！』

ここまで繋いだ立役者である切歌の声援を受け、雷と響。神殺しと雷帝。二人の装者が前へと進む。

最後の抵抗に暴れまわるティキだったが、超電磁の嵐と鎖によって空間に縫い付けられ、身動きすら取れなくなる。

『超電磁トルネード&超電磁アンカー』

それだけでなく、稲妻を受けたところが破壊され、動けば動くほど継続的なダメージも与えていた。拘束とスリップダメージ。二つの要素がティキの動きを完全に封じ込める。

響がアンカージャツキで空間を蹴って加速し、バンカーユニットを変形させてドリルのように突き進む。

アダムが叫ぶ。

「神殺しとまれエッ！」

ユニットの回転数が引きあがる。

「八方極遠に達するのはこの拳ッ！いかなる門も打開は容易いッ！」

サンジェルマンとヨハンが事の行く末を見つめる。

するとアダムが機転を利かせた。

「！ハグだよ、ティキ！さあ、飛び込んでおいで！神の力を手放してッ！」

「アダムウダイスキイイッ！」

「響ッ！敵のコアを滅ぼせえッ！」

「うおおおッ！」

だが、もう遅い。さらに放たれた超電磁の鎖によって空間に固定さ

れ、響が雄たけびを上げながら貫いた。テイキの体を包むコアは粉々に砕け散り、コアを失ったダイバインウエポンは光となって消えていく。

錬金術師たちは成し遂げたことに感嘆した。

「ここ一番でやっぱり！」

「ぼつちり決めてくれるのデス！」

本部では調と切歌が喜びをあらわにしている。

一方、躯体を半分に切断され、ほとんどの機能を失っているテイキだったが、この状態になってもアダムにハグを要求し、手を伸ばし続けている。

だが、アダムはガラクタを見るような目でソレを見降ろした。

「恋愛脳め……いちいちが癪に障る……。だが間に合ったよ」

アダムが空を見上げた。テイキから分離した神の力が宙を漂っている。

「間一髪……。人形を、神の力を付与させるための……」

足元に転がる喋るガラクタを蹴り飛ばした。そして、切断され、手刀として振り回した自身の左腕を見つめ、歪んだ笑みをこぼした。

「断然役に立つ！こつちの方が！」

神の力を左手に付与させるべく、アダムはたかだかと持ち上げる。

「付与させるッ！この腕にッ！その時こそ僕は至る！アダム・ヴァイスハウプトを経た、アダムカダモンッ！新世界のひな型へとッ！」

高らかに宣言するが、神の力はアダムを通り抜けた。

「どういうことだ……？」

アダムは愕然とし、神の力が流れていった後ろを向く。そこにいるのは……、

「何……これ……」

「何で……私達のところに……」

響と雷、二人のシンフォギア装者だった。

力を宿した粒子が二人の中に入り込み、響が叫んだ。

「うあああああッ?!」

「響ッ?!」

光の中から、光のすじが伸び、近くにあったビルとビルの上に光の塊が固定される。その光は鼓動し、胎動していた。

その下には、金色に光り輝く二メートルほどになる巨大な結晶が稲妻を放ちながら生えていた。

「宿せない筈……汚れ無き魂でなければ神の力をツ……！」

「生まれながらに、原罪を背負った人類に宿ることなど……！」

「本来はあり得ないはず……！」

だが、それでも、目の前に起きたのだ。鼓動とも胎動ともとれる音と光の明滅。稲妻を放ち続ける巨大な結晶。

化け物を殺せば化物に近づく。それは、神であっても変わらないようだった。



## 友を守りし防人として

テイキから剥離した神の力が、雷と響、二人の周囲を浮遊し、絶叫と輝きの中で彼女たちの姿が変わる。響はビルの間に糸を伸ばし、宙をぶら下がって鼓動、もしくは胎動する繭に、雷は体中から金色の結晶が生え、その体を包み込むようにして、二メートルほどの地面へと根付いた花のつぼみのように変容していた。

自身が宿すはずだった力を、根こそぎ奪われてしまったアダムは呆然とする。

「台無しだあ……僕の千年計画が……。それでも……神の力をこの手にッ……!」

切り離れた左手を持ったまま、かぶった帽子の位置を整え、足元から光となってこの場から離脱する。

サンジェルマンとヨハンは彼の後を追わない。二人は、短い間であったが戦友という芽生えた感情を胸に、変わり果てた二人の姿を見つめていた。

(立花響、轟雷……。お前たちは一体……?!)

「少し、考える必要がありそうだな。吾輩らも離脱しよう。吾輩たちらしいやり方で、彼女たちを元に戻す方法はあるはずだ。レッスン1だよ、サンジェルマン」

レッスン1。解析・分解・構築。即ち、錬金術の基礎を思い出せと、彼女は言っているのだ。

帽子を目深にかぶるヨハンの意見に、サンジェルマンは頷きで答えた。

○○○

神の力を取り込んでしまった響と雷が変容してから、四十八時間が経過した。この日は響の誕生日であり、用意された誕生日会用のジュースやお菓子、部屋を彩る飾りが虚しさを誘う。

八紘が弦十郎に状況を傳達する。

『立花響、轟雷の両名が『神の力』と称されるエネルギーに取り込まれてから、四十八時間が超過。国連での協議は最終段階……。まもな

く、日本への武力介入が決議される見込みだ。そうなるとお前たち S. O. N. G. は、国連指示のもと、先陣を斬らねばならないだろう』

「やはりそうなってしまうのか……！」

『さらに状況が状況であるため、事態の收拾のため、反応兵器への使用も考えられる』

「反応兵器?! だが、あの中には響君たちがッ！」

「反応兵器。その威力は百メガトンを優に超え、爆発すれば関東圏を焦土へと変えるのみならず、周辺地域にも甚大な被害をもたらすという代物だ。」

それを、変容した二人に打ち込もうというのだ。当然、八紘はそのことを理解している。

『無論、そんな暴挙を許すつもりはない。だが、世界規模の災害に発展しかねない異常事態に、米政府の鼻息は荒い』

「ぬう……。消し飛ばされた軍事衛星が、口実を与えてしまったのかッ……！」

ティキが破壊した米国保有の軍事衛星の破壊。それもあるだろうが、今や失墜したアメリカの『世界の警察たる、強く、自由で正義の国』というプライドと栄光を取り戻そうと躍起になっているところが大きいだろう。

そうでなければ、ノータイムでの人類最終兵器たる反応兵器の使用を踏み切る必要はないのだから。

『引き続き、事態の收拾に尽力してほしい。それがこちらの交渉カードになりうるのだ』

「分かった。すまない兄貴……」

それを最後に、通信が切れる。向こうが全力で動けるように、こちらも全力で動かねばならない。

「国連決議による武力介入……。ほんの少し前のバルベルデと同じ状況に、今度は我々がなってしまうなんて……」

「あのさなぎ状の物体内部に響さん。つぼみのような物体内部に雷さんの生体反応を確認しています。恐らくは神殺しの力と、膨大な斥力

が神の力の融合を食い止めていると思われませんが……」

エルフナインが現状の解析結果を報告する。

神殺しを持つ響の融合が遅れているのは理解できたが、そんな力を持つていないにも関わらず、雷が同等のことが出来ているのを疑問に思っていた。そこでエルフナインは、『シンカ・雷帝顕現』のエネルギーが結晶化の影響で固定化されているのであれば可能だろう、と何度も検証を重ねたうえで仮説を立てていた。

「それもいつまで持つか……」

「時間が稼げてるうちに対策を！」

いくら食い止めていたとしても、いずれ破られるだろう。

翼は弦十郎に進言するが、もう打てるだけの対策は打ってある。

「ああ！そのための彼女達だ！」

「彼女……達……？」

クリスが疑問を口にするとはほぼ同時に、ブリッジと廊下を繋ぐ扉が開いた。そこから、雷と響、二人の親友である未来が現れる。

「響と雷があの中にいるんですね?!二人は無事なんですか……？」

「もちろんだ。その為に君を呼んでいる。……マリア君たちに繋いでくれ」

「はい……」

弦十郎の指示で、メインモニターの脇に小さなウィンドウが開き、そこにはマリアと切調、切歌が写っていた。

マリアが口を開く。

『こちらの準備は出来てるわ』

『どうやったら、二人を助けられるんですか?』

『これを使います!』

エルフナインが、白衣のポケットから薬液の充填された圧力式の拳銃型注射器を取り出した。

見覚えのあるその薬品に、調が気付く。

『リンカー……?違う、あれは……』

『アンチリンカーデス!』

「リンカーとアンチリンカーは表裏一体。リンカーを完成させた今、

アンチリンカーもまた生成可能です」

『でも、適合係数を低下させるアンチリンカーを使って、どうやって……?』

ここに雷が居れば、すぐに気付いて教えてくれる。いや、逆にアンチリンカーを使うことを提案すらしているだろうが、彼女はいいない。

そのため、少しエルフナインは寂しげな表情を浮かべながらもアンチリンカーを使う根拠を説明する。メインモニターに、これまで神の力が付与されてきた存在の画像が映る。

「ヨナルデパストーリと、デイベインウエポン……。どちらも依り代にエネルギーを纏って固着させたもの。まるで、シンフォギアと同じメカニズムだと思いませんか?!」

「ッ」

装者たちはエルフナインが何を言わんとしているのか、それを即座に理解する。

「響君と雷君を取り込んだエネルギーと、ギアを形成する聖遺物のエネルギーの性質が近いものだとするならば……」

「アンチリンカーで、ポンポンスーにひん剥けるかもしれないんだな?!」

「はい。その為に……」

「コンバーターユニット!それでは……!」

そうやってエルフナインは、ポケットの中から五つのコンバーターユニットを取り出した。

つまり、

「反動汚染の除去は完了。いつでも作戦に投入可能です!」

これで今打てるすべての手を打ったことになる。

そこで気になるのが、何故未来をこの場に呼んだのかだ。彼女も不思議に思っていたようで、未来が弦十郎にどうすればいいかを聞く。

「あの……私にも、出来ることがあれば……」

「君はこの作戦の、エースインザホール……。切り札だ!」

「私が?!」

自分に指をさし、驚く。

何せ戦う力を持たないのだ。自分が戦場に立つ力を持たないのは分かっている。だからこそ、弦十郎が切り札だと言ったことがわからない。

だが、未来という存在が、二人を連れ戻すのに何としても必要なのだ。

エルフナインが真剣な顔つきになる。

「危険を承知でお願いします」

「……わかりました！」

何かやれることがあるなら全力です。それが、未来のスタンスだった。

「そして、もう二人……」

その二人とは、ヨハンとサンジェルマンだった。サンジェルマンは銃で囲まれながらも真剣な瞳を正面に向けているが、ヨハンのほうはおどけた様子で両腕を上げている。だが、彼女の瞳は、サンジェルマンと同じで真剣そのものだった。

「協力者に失礼だ！銃を下げろ！」

「ですが、しかし……」

黒服は食い下がるが、

「何かあったとしても、俺が動きずらくなるだけだ」

圧倒的な説得力に、黒服たちは黙って銃を下げる。そもそも、彼女達が戦う意志を持っていれば、銃器など玩具にも等しいため、向けてもさほど意味はないのだが。

「情報は役に立ったかな？お嬢さん」

椰揄い交じりにヨハンがエルフナインに問う。

彼女は笑って提供された情報の映るタブレットを見せた。

「賢者の石に感ずる技術無くして、この短期間に汚染の除去は出来ませんでした。ありがとうございます！」

「何よりだ」

ヨハンが微笑みを浮かべる。師匠が感謝、尊敬されてうれしいのか、サンジェルマンも微笑んでいた。

「それで、我々への協力についてだが……」

「それでも、手は取り合えない……」

サンジェルマンが顔を背けて答えた。

アラートが聞こえてくる。

「どうした!」

『指令! 鎌倉から、直接ツ!』

モニターいっぱいには不動の顔が映る。

『護国災害派遣法を適用した……』

「なあ?!」

「護国う?」

「まさか立花と轟を、第二種特異災害へと認定したのですか?!」

クリスは良く分かっているようだったが、風鳴の一族である弦十郎と翼はその意味を理解していたようだ。声色からして、よくない知らせだろうことは理解できる。

『聖遺物起因の災害に対し、無制限に火器を投入可能だ。対象を速やかに、殺傷分せよツ!』

「ですが現在、救助手段を講じており……!」

『夢きかな』

弦十郎が反論するが、訃堂はそれを一蹴する。

『国連介入を赦すつもりか?! そのその攻手は反応兵器! 国が燃えるぞ』

訃堂はさらに圧力をかけるが、未来が一步前が出る。

「待ってください! 響と雷は特異災害なんかじゃありませんツ! 私の……友達ですツ!」

「国を守るのが風鳴ならば、鬼子の私は友を! 人を防人ますツ!」

未来を矢面に立たせるのは、防人たる翼が許さなかった。彼女も前に出、訃堂に正面から相対する。

翼の物言いに、訃堂は体をワナワナと怒りに震えさせた。

『翼ツ! その身になるる血を知らぬかツ?!』

「知るものかツ! 私に流れているのは、天羽奏という、一人の少女の生きざまだけだツ!」

今度は訃堂の言を、翼が斬って捨てる。

再びアラートが鳴り響き、友里が焦ったように報告する。

『指令！響ちゃんやんと雷ちゃん周辺の、攻撃部隊の展開を確認！』

『作戦開始は二時間後……。我が選択した正義は覆さん』

それだけ言い残し、訃堂が通信を切る。弦十郎の答えが何であれ、最初から実行する気でいたのだ。そうでなければ、このタイミングで攻撃部隊をそろえるなど出来るはずがない。

サンジェルマンが、真つ黒なモニターを睨む。

「あれもまた、支配を強いるもの……」

彼女は小さく呟いた。

○○○

現場では、何も知らされていない攻撃隊員たちが、響の変容した繭と、雷の変容したつぼみに対して砲撃を行っていた。響の方には全弾命中しているが、雷の方には放たれた砲弾が結晶から放出される稲妻によって破壊され、有効打にはなっていない。

遂に、響の変容した繭に亀裂が入った。中から光が漏れる。

映像を見ながら、藤堯が啞然とする。

「彼らは知らされていないのか?!あの中に人が取り込まれているんだぞー!」

「このままでは、響ちゃんが……!」

だが、遂に恐れていた事態が起きた。眉に入った亀裂が広がっていき、それが全体にいきわたると、光を放ちながら落下、というよりもゆっくりと下りてきた。

そして、そのなかから、巨大な人型が姿を現す。人型のそれは、口と思われし器官から唸り声をあげていた。その直後、口から、大出力の光線を発射した。が、それが着弾することはなかった。

繭から人型が現れたその直後に、結晶のつぼみが開花し、中から等身大の、ただ真つ白な布一枚を体に巻き付けただけの少女が現れた。揺蕩う長髪には赤い燐光が舞い、開かれた瞳は蒼く輝いている。

つぼみから生まれた少女が、人型の放った光線を正面から受け止めたのだ。

自身を攻撃してきた戦車隊にも、人型は光線を放った。その光線

は、マリアがエネルギーシールドを展開して逸らすが、圧倒的な威力に後ろに弾き飛ばされる。

調と切歌がマリアを受け止めた。

「大丈夫?!マリア!」

「あのでたらめな強さは、なんだかとっても響さんデスよ!」

「姉さんなんて、目と髪以外はそっくりそのままだよ!」

「この戦場はこちらで預かるツ!撤退されよツ!」

「国連直轄の先遣隊か!こちらは日本政府の指揮下にある!撤退命令は受けていない!」

攻撃隊の隊長は管轄違いを理由にこの場に残ろうとするが、二つの斬撃が方針を両断した。ファウストローブを纏ったサンジェルマンとヨハンだ。

「理由が必要ならば、くれてあげる」

「それくらいならば、問題ないだろう」

「力を貸してくれるのか?!」

さつきまで敵だった二人がこちらに得となる行動をしている。そのことに翼は目を丸くした。

「これは共闘ではない。私の戦いだ……」

「全く、素直じゃないんだから」

攻撃能力を失った攻撃隊が後退し、入れ替わるようにS・O・N・

G・保有の特殊車両隊が到着する。

「特殊車両隊現着!指令!いつでも行けます!」

響と雷、二人の救出作戦が開始される。

「ようし!響君のバースデーパーティを始めるぞツ!」

タイムリミットは二時間だ。



## 命を懸けた、想いの炎

暴れ狂うヒビキと、静かに浮遊し、振るわれる破壊の暴力を的確に受け止め、弾いていくアズマ。ヒビキが本能的に暴れているのに対し、アズマは理性的に対処していく。それはどこか知性を感じさせる動きだった。

慣れている。と形容しても間違いないだろう。

「……」

意識を自身の方へと逸らしたアズマは、無言のまま、剛腕を振るうヒビキの攻撃を体を電子に変換して透過させ、再集結させることで回避する。先ほどから多彩な能力で戦っているアズマだが、防御した結果ヒビキがダメージを負うことは有れど、自分からダメージを与えることは一切していない。

そのことに気づいたマリアは、指揮権を預けられている翼に問いかける。

「どうするの翼？どうも雷は、暴れているとは少し違うみたいだけど」  
「ふむ……」

翼は一瞬だけ間を開けた後、即座に決断した。

「よし。現状においては轟と協力し、彼女が立花の気を逸らせている内に拘束する！」

翼の決断に全員が頷いた。行動を開始する。

拘束技を持っているのはこの中で影縫いを使える翼と、幅広い応用性を誇るアガートラムを纏っているマリアだけだ。

「マリアー！立花の拘束を頼むッ！恐らくだが、対人戦技である影縫いでは効果が薄いだらうッ！」

「分かったわ！」

マリアはガントレットから三本、短剣を取り出して宙に投げた。短剣は三角形に配置された後、それぞれを頂点にしてバリアを展開。マリアはそのうちの二つを手で掴んだまま走ること、走ったコースにそってバリアを引き延ばしていった。

「ふッ！」

雷光の速度で宙を縦横無尽に飛び回るアズマに気を取られていたヒビキは、マリアの伸ばしたバリアシートに巻き取られ、動きを封じられてしまう。

「止まれエエエッ！」

ようやく気付いたヒビキだったが、なかなかバリアが強力なため、もがいてももがいても緩む気配がない。

「ガアアアアッ！」

「……」

耐えきれずに口から光線を発射するヒビキだったが、アズマが放った稲妻によって空中で拮抗し、霧散する。

再度吠える。が、それでも体を締め付けるバリアは緩むことなく、逆に暴れるたびに強く締め上げる。

しかしバリアは強靱であるが、それを押さえつける人はそうでもない。地上に着地し、踏ん張るマリアだったが苦悶の声を上げている。

「う、ぐうううっ！」

確かに一人では耐えられないだろう。だが、マリアには仲間がいるのだ。

「マリア！ 私達の力を！」

「束ねるデス！」

まず、今まで共に生きてきた調と切歌が自身の力をマリアと束ねた。

「ウオオアオアオアアッ！」

引っ張る力を強めたマリア達であったが、ヒビキが咆哮し、バリアの隙間から腕を外に出し、力を籠める。

「……」

力任せにバリアをこじ開けようとしていたヒビキだったが、力の限り持ち上げようとしていた腕が空間で静止する。上空では、アズマが強力な電磁波を展開し、彼女の脱出を妨害していた。

「一人ではないッ！」

「みんなでアイツを助けるんだッ！」

アズマが時間を稼いでいる今のうちにと翼、クリスがマリアの援護

に加わる。マリアの展開したバリア、アズマの放った電磁波がヒビキの動きを完全に留めるのを翼が確認し、控えさせていた特殊車両隊の指揮を執る緒川に叫んだ。

「今ですッ！緒川さんッ！」

「心得てますッ！」

すでに緒川は動いていた。配備されていた特殊車両の上部にはアンチリンカーが充填されているアンカーが装備されており、そのアンカーを勢いよくヒビキに向けて射出した。ロケットブーストで飛翔し、響の胸元に配備されていた三つのアンカーが撃ち込まれる。

アンカーは注射器のようになっており、充填されているアンチリンカーをヒビキの体に流し込んだ。かなりの苦痛なのか、バリアに巻き取られ、電磁波によって空間に固定されていながらも暴れまわっている。

念には念をと言うように、さらに二本、アンカーが響の背部に打ち込まれた。

本部が高速で作戦の結果を計測する。

「アンチリンカー命中！注入を開始！」

「対象より計測される適合係数！急速低下！」

メインモニターに八紘が映る。

『弦、まもなく国連の協議が終了する。結果は日本の、立花響の状況次第だ！』

当初はそこに雷も加えられていたのだが、彼女のあまりにも理性的かつこちらの意図を汲んだ動きに国連から例外とするようにされていたのだ。

流石に弦十郎も焦りを見せているようだ、こめかみを汗が伝う。

「人事は尽くす！尽くしているッ！」

『趨勢は圧倒的に不利ッ！個人を標的に、反応兵器の投下が承認されてしまいかねないッ！』

「響君ッ……い！」

通信が切れる。

アンチリンカーを大量投与され、一時は沈静化していたヒビキだっ

だが、頭部から青い炎を噴射しながら再び暴れ始めた。自身を拘束していたバリアを力任せに引きちぎり、それを抑え込んでいた装者たちが吹き飛ぶ。

「雷ッ?!」

吹き飛ばされたマリア達だったが、上空にいた筈のアズマが彼女達を受け止め、静かに地面に下ろした。そこに、ヒビキが光線を発射する。

光が迫る。

「つないだ手を振り払うのが、お前のやりたかったことかッ?! 立花響ッ!」

サンジェルマンが防御陣で光線を正面から受け止め、受け止めた結果分散したエネルギーをヨハンが魔力に置換、サンジェルマンに譲渡することで防御能力を引き上げる。

彼女の叫びが届いたのか、光線の照射が止まる。

「ここにきて、低下していた適合係数の上昇を確認!」

「神の力に備わる防御機構……。アンチリンカーの理を、リアルタイムに書き換えてッ……!」

「適合係数、数値反転! 急上昇します!」

「ああ、底までの予測はついているッ! だからッ……!」

「ッ?! 姉さん!」

調が叫ぶ。アズマが微笑んだ気がした。

着地していたアズマが、再び飛翔する。彼女を中心に、ヒビキや特殊車両を包み込むほどのフィールドが展開される。

『響いいいッ!』

特殊車両に乗り込んでいた未来が、マイクに向かって思いっきり叫んだ。親友の、たった一つの名前を呼ぶ声。それだけで、暴走の限りを尽くしていたヒビキの動きが止まる。蒼い炎の噴出が止まった。

しかも叫んだだけでは、アズマの展開したフィールドが直接、未来の声をヒビキの元に届けたのだ。

「響ちゃんの活動、止まりました!」

「適合係数の上昇によって、融合深度が増している今ならば、電気信号

化された未来さんの声は、依り代となった響さんにねじ込まれるはず  
ですッ！」

『今日は響の誕生日なんだよ？なのに……』

フィールドを展開し続けるアズマを含め、全員が動向をを静観す  
る。

響の胸の赤く鼓動する突起。その輝きがだんだんと増していく。

『なのに響きがないなんて、おかしいよ……！』

(早く起きよう？ 私達の陽だまりを、悲しませるわけにはいかないよ  
……)

(呼んでいる……この声……)

雷が響の目の前に降り立つ。

外からは未来の声、内側からは同じく自身の声を電気信号化した雷  
の声が響の元に届く。彼女はゆっくりと目を開いた。

『響、お誕生日おめでとう……。ううん、きっとこの気持ちは、ありが  
とう……。かな？響が同じ世界に生まれてきてくれたから、私は、誰か  
と並んで走れるようになったんだよ？』

「未来……？」

「誰かとなら、一人では届かないゴールにだって届くって気づかせて  
くれた……」

(ようやく起きた)

響が目を覚ます。

「ありがとう、雷。行ってくる！」

(あっちだよ、間違わないようにね)

雷に促され、彼女の指さす方へと飛び込んでいく。そこには、暖か  
な陽だまりがあった。

「未来！私の陽だまり！」

「響！私のお日さま！」

二人の手が触れ合った。その時、外界ではヒビキの体がひび割れ、  
頭から光へ、神の力へと還元されていく。そして胸のコアとみられる  
ところから、響の体が飛び出してくる。落下する彼女の体を、アズマ  
が素早く受け止め、共に地面に降り立った。

「響！信じてた！」

未来が反射的に車両の外に飛び出し、響を抱いたままのアズマの元に駆け寄った。そして彼女の体から光が失われ、元の姿、雷へと戻る。そして未来は元に戻った雷も一緒に響を抱きしめる。

「ありがとう雷……。響を響じゃなくさせないでいてくれて……」

「いや、未来のおかげだよ。未来がいたから、響が元に戻ったんだ」  
涙を流して感謝する未来だったが、雷は謙遜しているのか控えめだ。「ばか」と、未来が小さく呟いた。

「響ちゃんは無事です！生きてます！」

「雷ちゃんの生存も確認！」

二つの朗報がブリッジ全体に安堵をもたらす。

『こちらのでも状況を確認している。国連による武力介入は、先ほど否決された！』

「八紘兄貴……」

曰く、これまでのS・O・N・G.の功績、そして、斯波田事務次官の蕎麦のようなコシの強さで交渉を続けてくれたおかげだという。「人は繋がる……一つになれる……」

『そうだ。反応兵器は使われない』

全員が安堵していたその時、海面からすさまじい速度で何かが飛翔した。ブリッジにアラートがけたたましく鳴り響く。

藤堯が焦りながら報告する。

「太平洋沖より発射された、高速度飛翔体を確認ッ！これはッ……！」

『撃つたのか?!』

八紘も驚きを隠せない。何故ならそれは、アメリカが独断で発射した反応兵器だからだ。

大統領が、複数のSPに守られながら、発射承認ボタンから指を離す。

「そも、我が国の成り立ちは、人が神秘に満ちた時代からの独立に端を発している。この鉄槌は、人類の人類による人類のための、新秩序の構築のために……」

スイッチを押す指は軽いかもれないが、撃たれた側はそんな簡単

にいくようなものではないのだ。ただのミサイルなら兎角、今向かってきているのは反応兵器。ただのミサイルではない。

「迎撃準備！」

「この距離では間に合いません！着弾まで、推定三百三十秒！」

弦十郎が指示を飛ばすが、あまりにも時間がなさすぎる。空に弾頭が煌めいた。

「だったらこっちで斬り飛ばすデス！」

「だめ！」

勇む切歌だったが、調が引き留める。

「下手に爆発させたら、あたり一面が焦土に！向こう永遠に汚されてしまおう！」

「くッ……………」

翼が歯噛みする。

だが、突然背後から声が聞こえてきた。

「……………私はこの瞬間のために、生きながらえてきたのかもしれない……………」

「何を言って……………」

サンジェルマンとヨハンが風の錬金陣を展開し、宙に浮かぶ。空中に浮かびながら、ヨハンが笑いかけた。それは、優しくも、寂しい笑みだった。

「……………いいのかい？サンジェルマン」

「はい、師匠。私は、彼女達と、彼女達の住むこの町を守りたい。……………そう思いました。貴女の弟子として、最後で最高の錬金術をお見せします」

「弟子の決めたことだ。吾輩も、師匠として最後にして最高の錬金術を見せようじゃないか」

二人の胸のラピス・フィロソフィカスが輝き、二人は歌う。そこに、一つずつ、輝きと歌が並んだ。

「カリオストロ?!」

「遅かったじゃないか、二人とも」

「知っていたのですか?!……………二人？」

死んだと思っていたカリオストロが並んでいることに驚くサンジェルマン。反応から見てヨハンはすでに知っていたようだ。しかも、もう一人いるという。

だとすればそれは……歌と輝きが、もう一つ追加された。

「プレラーティ……」

四人の歌が響き合い、向かい来る破滅の炎に立ち向かう。

「師匠！なぜ黙って……」

「こういうのは、サプライズが定番だろう？」

「サプライズ」

「成功なワケダ」

揶揄うように言ったヨハンと、楽しげに笑ってみせるカリオストロとプレラーティ。彼女らが生きていた事、そのことにうれし涙を流しながら正面を向く。

（女の勘で局長を疑ったあーしは、死んだふりなんて搦手で、姿を隠していたの）

（そんなカリオストロに救われた私は、一矢報いるための錬成をこっそり進めてきたワケダ）

（そこで用意したのが、吾輩の最高傑作。騎士としての役割で吾輩自身が錬成することは出来なかったが、君の信じた彼女達ならばできると信じて託しておいた）

サンジェルマンが拳銃型スペルキャスターを構え、プレラーティがヨハンの最高傑作である弾丸を一つ手渡した。

歌と想いと共に弾丸を装填する。

そして厄災を振りまく悪魔に向けて、トリガーを引いた。弾丸は錬金陣を通して加速し、弾頭に直撃する。

「反応兵器、起爆！」

「衝撃の到達予測……これは！」

「これも……ラピス・フィロソフィカス……」

ヨハンの最高傑作。それは、最高純度のラピス・フィロソフィカスの弾丸。錬金術師たちは、打ち込んだラピスと自らの胸のラピスを共振させ、反応兵器を抑え込む。



(いい輝きだプレラーティ。吾輩の設計以上のものを用意してくれた！)

(お褒めに預かり光栄なワケダ！現時点で最高純度の輝き！つまりは私の最高傑作なワケダ！)

(呪詛の解呪より始まったラピスの研究開発が、やっと誰かのために……)

(本音言うと、局長にぶち込みたい未練はあるけどね?)

全員が全面的に同意する。が、それはそれ。今は魂の全てを賭けて歌う。

(でも驚いた。いつの間にあのコたちと手を取り合ったの?)

(取り合ってなどいないわ……)

最後までらい取り合ってもよかつたと思うのだが。と、ヨハンは思っていたのだが、サンジェルマンが認めない以上、そういう事だ。頑固なのが困り者だな。と小さく笑った。

「エネルギー内圧、さらに増大！」

「このままでは、持ちこたえられませんッ！」

「ぬうッ」

四人は全力で抑え込んでいるが、それでも反応兵器の威力は桁が違った。エネルギーがだんだんと凌駕され始める。

だとしても、彼女達は諦めない。

(完全なる、命の命の焼却をッ！)

(ラピスに通じる輝きなワケダッ！)

(我らの魂の輝きの元にッ！)

ヨハンがサーベルを頭上に掲げ、四人の魂、歌、想い、全てを魔力に置換し、ラピス同士の共鳴でサンジェルマンのスペルキャスターへ流していく。

(あの子たちと手を取り合ってたなどいない……。取り合えぬものか……。死を灯すことでしかわかり合えなかった、私にはあああッ！)

スペルキャスターを変化させ、受け取ったエネルギーを全て発射した。全て込めた一射は直撃し、抑え込んでいた悪魔が光の粒子へと変化する。

「付き合わせてしまったわね……」

「いいものが見られたから、気にしていないワケダ……」

「いいもの？」

「ああ、確かにいいものだ」

「サンジェルマン、笑ってる」

三人の言う通り、サンジェルマンは満足げな、やり切ったような笑みを浮かべていた。

「まったく、そんな笑顔、吾輩初めて見たぞ」

「……死にたくないと思ったのは、いつ以来だろう……」

サンジェルマンとヨハンの手から、二つのスペルキヤスターが零れ落ちる。

カリオストロが手を振り、プレラーティが笑い、ヨハンが腕を組んで消滅する。

(ね、お母さん)

サンジェルマンも、最後に母親の事を思い返し、光へと消えた。

暗い雲に覆われた空の下に、温かい輝きが灯されている。それは命の輝きだった。

装者たちが、それを見上げている。

「錬金術士……理想を追い求めるもの……」

「あとは、分離した神の力を……ッ?!」

「ッ?!」

調の言葉に、切歌が頷いた。そして後ろを振り向くと、空間が割れ、そこに切断された左腕が浮かんでいた。神の力がその腕に流れ込んでいる。二人が驚愕した。

「しなければね、君たちに感謝を……」

浮かんでいた左腕を空間に空いた孔から右腕が伸びてきてそれを掴み、さらに大きな孔をあけてアダムが出現した。

「アダム・ヴァイスハウプト! またしても神の力を!」

アダムがニヤリと嗤う。そして左腕を宙に投げ上げた。腕に神の力が更に流れ込む。

「僕の手に、今度こそッ!」

「止めるぞッ！」

「もうさせないよ、邪魔だては！」

翼たちは止めようとするが、撃ち込まれた錬金術による水の渦に阻まれてしまう。更に撃ち込まれたもう一発によって水が凍結し、完全に拘束されてしまった。

「だとしてもッ！」

ケラウノスとガングニールを纏い、戦線に復帰した雷と響が腕を破壊すべく跳躍する。だが、アダムは彼女たちを特に警戒していた。

「近づけないよ、君たちだけは……ッ?!」

「アダムノイケズ……。ダイテクレナイカラ、ワタシガダイチャウ……。」

黄金錬成を発動しようとする。が、上半身だけとなった今も起動しているテイキが、アダムの足に抱き着いた。そのおかげでバランスを崩して倒れ込む。

そのため、雷と響を近づけさせてしまった。

「うおおおおッ！」

「でやあああッ！」

響がバンカーユニットを全開稼働させ、雷も稲妻を右腕に集中させて振りかぶる。

アダムが発狂したようにわめきたてる。

「やめろお！都合のいい神殺しなものかその力は！二千年の思いが呪いと積層した哲学兵装！使えば背負う！呪いをその身にいつ！人間が使えていい物じゃないんだその輝きはあッ！」

「二私は歌で、ぶん殴るッ！」

響のバンカーユニットのブースターが点火し、雷が斥力によって弾かれて加速、バンカーと隙間という隙間を引きちぎるエネルギーが流し込まれ、アダムの神へと変容していた左腕が貫かれ、粉々に粉碎、破壊された。

大爆発が、空を彩る。

## 完全神造生命アダム

雷と響、二人の拳によってアダムの神の力を吸収し、変容した左腕は完全に破壊された。破壊されたことによって内包していた神の力は霧散し、それを欲するアダムは情けない声を上げながら必死にかき集めようとするが、その指は空を切るばかりだ。

アダムが神の力に気をやっていた影響か、装者たちを拘束していた氷が砕け散る。その様子は、役目を終えて本部へと帰投している特殊車両隊も確認していた。

雷、響の二人が着地する。響は地面に膝をついていた。

（サンジェルマンさんの歌は、胸に届いていた……。だけど……。何もできなかったツ……。私はまたツ……。！」

地面に叩きつけられようとした響の拳を、雷が優しく受け止める。驚いた顔で、雷の顔を見上げる。その顔は、優しく、悲しげに笑っていた。

「サンジェルマンの歌が響に届いたように、響の歌がサンジェルマンに届いていたんだ。君が彼女を変えたんだ」

そう言って、未だ魂の輝きを見せる空を見上げた。彼女の頬に、うつすらと涙が伝う。その悲しみは、友を失った悲しみだった。

響もまた、涙を流した。

○○○

藤堯が反応兵器の顛末を報告する。

「フォールアウト、EMPともに確認できません……」

「あらゆる不浄を払う、ラピス・フィロソフィカスの力……！」

「ファウストローブだけでなく、命までも賢者の石に見立てて、反応兵器の被害を……。ですがその代償としてツ……。！」

「ああ……。この国を守ったのは、理想に殉じた錬金術士だ……」

彼女達は、命を賭して守ってくれた。その絆に報いるべく、響は立ち上がる。そして雷と同じく、空を見上げた。

「ありがとう……。サンジェルマンさん……。……。だけど、望んだのはこんな結末じゃない……。！もつと話したかった、分かり合いたかったツ

……！」

「分かり合えたと思うよ、響なら。確証はないけど、胸の中に歌がある限り」

「雷……」

「分かり合いたかったあ……う？」

胸に手を当て、微笑む彼女に響の胸が温かくなった。だが、そんな二人に横槍を入れるものがある。千年の計画を完全に破壊されたアダムが、彼の左足に抱き着く、上半身だけとなったテイキを引きずりながらやって来た。

「ア、アダム、ワタシハダキ……ムシロダキアイタイヨ……アダム、ム……。ダイスキ……」

まだそんな恋娘の戯言を繰り返すテイキが煩わしくなったのか、アダムは彼女を背中から踏み砕く。これによって、テイキは完全に機能を停止した。

テイキを踏み砕いたアダムが、二人のほうに向きなおる。

「分かり合えるものか！ バラルの呪詛がある限り。呪詛を施したカストディアン、アヌンナキを超えられぬ限りいッ！」

「だとしても……いッ！」

響が小さく震える心の声を呟き、雷の目が見開かれ、彼女の胸が高鳴りを上げる。雷自身が発生させる静電気が、彼女の髪を持ちあがらせた。

アダムが指を立てて告げる。

「だが一つになれば話は別だ。統率者を得ること……無秩序な群体は完全体へとおッ！」

「だとしてもッ！」

響の叫びがアダムの持論を切り裂く。

「分かり合うために手を伸ばし続けたこと！ 無意味ではなかったッ！」

「何も知らぬ奴が吠えるなッ！ 貴様に叩きこんでやる、私達の想いをッ！」

背中を合わせ、アダムに反論する二人の元に、一人ではないと翼と

クリスがやってくる。二人だけではない。マリア、調、切歌。装者全員が集結した。

「ああ！この馬鹿どもの言う通りだッ！」

「お前が語ったように、私達の出来は良くないッ！」

「だから！なんちゃらの一つ覚えで、何度だって立ち上がってきたデスッ！」

「諦めずに、何度でもッ！そう繰り返すことで、一歩ずつ踏み出してきたのだからッ！」

「たかだか完全を気取る程度で……！」

翼が切っ先をアダムに向けて締める。

「私達不完全を、上から支配できるなどと思うてくれるなッ！」

「どおしてそこまで言える？大きなことを、大きな顔で！」

アダムが残っている右腕でアルカ・ノイズ召喚ジェムをばら撒いた。ばら撒かれたジェムは地面にぶつかって砕け、召喚陣が展開されてそこから無数のアルカ・ノイズが姿を現す。

「人でなしには分からないッ！」

響が叫びながら拳をアルカ・ノイズに叩きつけ、アンカージャッキを地面に打ち込んで体を固定して地面を殴り抜いた。撃ち込まれた拳を中心に衝撃波が走り、アルカ・ノイズが砕け散る。

雷が八尾の龍を召喚し、それぞれアルカ・ノイズを喰い破らせながら斥力を利用した高速の連打で複数を一瞬にして灰燼と帰させた。

『八卦乃雷電龍』

翼は二刀の刃を連結し、忍術を使って炎を刃に纏わせながら回転させ、脚部ブースターを点火して加速することによって一気に斬滅する。

『風輪火斬・月煌』

クリスはアームドギアを二丁拳銃に変化させ、至近距離での銃撃戦でアルカ・ノイズを撃ち抜いていく。

マリアが携える短剣を蛇腹状に、さらにそれを節々で切り離して複数の短剣に変え、高速回転させたそれで竜巻を起こしながらアルカ・ノイズに突撃する。

調は空中で一回転して自身を覆う鋸を展開して鎌を横に構えた切

歌を乗せ、鎌のブースターで縦と横の高速回転でアルカ・ノイズをみじん切りにする。

「どうしてこんなにも、争いが続くのデスか?!」

「何時だっていつだって、信念と信念のぶつかり合い!」

「正義の選択が、争いの原因だともいうのかよッ!」

「安易な答えに、歩みを止めたくはないッ!だがッ!」

翼と調、切歌が斬り裂き、響が殴り、クリスが乱射し、雷とマリアが大砲撃を発射する。大小を問わず、凄まじい速度でアルカ・ノイズが殲滅されていく。

「装者七人によるユニゾンで、フォニックゲイン上昇!」

「だけど、エクストライブを起動させるにはまだほど遠く!」

「ぬう……!」

マリアが短剣を振るう。

「それもこれも、相互理解を阻むバラルの呪詛!」

下から気配を感じたマリアが跳躍する。その感覚通り、地面をドリルのようにアルカ・ノイズが掘り進んできた。その大型を、雷が横合いから回し蹴りで碎き折る。そしてそのまま脚部から雷光を放ち、地面を踏み抜いて加速した。

「だとしてもですッ!」

アルカ・ノイズを殴り抜いた響はアダムに肉薄する。が、流星は完成された存在と言うべきか、響の攻撃を全て余裕をもって回避している。

「使わないのかい? エクストライブを。いや、使えまい。ここにはないからね、奇跡を纏えるだけのフォニックゲインがッ!」

アダムの放つ光弾を避け、弾き、響が一発叩きこもうと振りぬく。しかしアダムはその拳を掴み、彼女を空中に放り投げた。

「乗るなよ? 調子に!」

空中にいる響に光弾を発射する。彼女はバンカーユニットとアンカージャッキの衝撃で空を蹴って回避していく。だが、アダムは響の方に気をやりすぎている。

腕のない左側から雷が斥力で加速した拳を振るう。アダムがこれ

を防ぐために体を反転させ、防御陣を張った。彼に決定的な隙が生まれる。

響が空中で両腕のバンカーユニットを最大展開して加速、アダムも手のひらを向けるも完全な防御陣の展開は不可能。現状における全力の一撃が叩きこまれ、大爆発が発生した。

本部でも確認している。

「届いた！でも……！」

「ああ、敵は統制局長。アダム・ヴァイスハウプトだ！」

爆炎が消え、響の拳は受け止められていた。それも切断されていたはずの左腕で。

「左腕ツ?!うあつ！」

「響ッ!ぐッ?!」

響はそのまま殴り飛ばされ、そのまま横に薙ぎ払うようにして雷を横から殴り飛ばす。不意打ちではあったが二人は歴戦の装者、空中でバランスを取り、地面に着地する。

自分たちを殴り飛ばしたアダムのほうを向くと、彼のなかったはずの左腕が生えていた。

しかも生えていたただけではない。左腕だけが、肉の塊のように醜くうごめいていた。

「そうさ。力を失っているのさ、僕は。だから、保ってられないのさ、僕は……。僕の完成された美形をおおッ！」

叫びと共にアダムが纏っていた服がはじけ飛び、赤と紫の炎に包まれる。そして内部から人の姿を破壊するように巨大な人型が出現した。「知られたくなかったあ、人形だと……。見せたくなかったあ、こんな姿を……。!だけど頭に角を頂くしかないじゃないかッ!僕も同じさあ負けれられないのはッ！」

「みんなッ！」

デイバインウエポンを思わせるような異形へと変化したアダムは、周囲一体に赤い稲妻と衝撃波を放ち、自らが召喚したアルカ・ノイズを消し去り、装者たちを退けさせる。

雷も対抗して出力全開で斥力フィールドを放ち、ヘッドギアのティ



アラで操作して全員を対象にして包み込んだ。

そして放射が止み、フィールドが解除される。

変容、いや、真の姿をさらしたアダムと装者七人が対峙する。

「人の姿を捨て去ってまで……!」

「何をしでかすつもりデスか……!」

頭部と思われる位置にある複数の目をぎよろつかせ、静かな怒りと共に口にする。

「勤まるものか、創られた端末風情が……。わからせてやる……。より完全な僕こそ支配者だと……。その為に必要だったのさ、彼らと並び立てる神の力は……」

アダムの姿が消え、彼の計画をへし折った響の目の前に出現した。彼女の鳩尾に拳を叩きこもうとする。が、それよりも雷が響とアダムの間に割って入り、その拳を受け止める。

殺意を全開にし、見開いたその瞳で、アダムを正面から見つめる。

「完全に先はない……。だから捨てられたんだよ、貴様は」

「気に食わないんだよ、君の存在が。初めて目にした、その時からね……」

もう片方の腕で雷を殴り飛ばし、返す拳で響を殴り抜いた。二人が吹き飛ばされる。

翼は連打を身をかがめ、ジャンプして避けていくが角による鋭い頭突きを腹部に喰らってしまう。

「巨体に似合わないスピードでツ!!」

調が予想外のアダムの速度に驚愕する。すると突然、背後で電話の呼び鈴がなった。

二人は思わず振り返る。

「何でこんなところに電話がツ?!」

それに気を取られた瞬間、アダムによって切歌と調がまとめて殴り飛ばされた。

アダムが咆哮を上げる。

「おまけに、悪辣さはそのままデス……!」

地面に這いつくばったまま、切歌が言った。

「くそつたれええッ！」

「よくもッ！」

クリスがガトリングを発射するが固い皮膚に弾丸は弾かれ、背後から斬りかかったマリアだったが、アダムの長い尻尾に巻き取られてクリスのほうに投げ飛ばされる。

クリスはマリアを受け止め、抱きかかえるが、自由な身動きを封じられ、そのまま横殴りに飛ばされた。

響と雷が地面に這いつくばる。

「力負けている……！」

（ままだっ！立花響ッ！）

（吾輩が認めたものが、この程度なわけがないだろう？）

「ヨハン……？」

サンジェルマンとヨハン、二人の声が聞こえた気がした。二人はその声の聞こえた方を向くと、壊れた二つのスペルキャスターが落ちていた。

立ち上がって拾いに行こうとする雷と響だったが、先にアダムに拾われてしまう。

彼は拾い上げた二つのスペルキャスターを握りつぶした。

「何をするつもりだったのかなあ？サンジェルマンとヨハンのスペルキャスターでええッ！」

握る部したスペルキャスターから抽出したエネルギーを、二人に向かって発射した。発射されたエネルギーを響が正面から受け止め、後退する彼女の体を雷が支える。

「ファウストローブを形成するエネルギーを使ってッ?!」

「やはり、エクストライブでない……！」

絶望が広がる。しかし、それを二つの絶唱が斬り裂いた。

「この歌はッ?!」

雷の隣にマリアも並び、三つのアームドギアが変形してフォニックゲインを束ねる形へと最適化される。さらに翼、クリス、切歌に調も加わって七つの絶唱が行われた。

「S2CA・ヘピタコントラクトを！」

「応用するってんなら！」

「その賭けに……！」

「乗ってみる価値はあるのデスッ！」

思いと手がつながり、絶唱が共振し、互いに増幅し合う七重奏へと変化する。

「無茶だっ！フォニックゲイン由来の力じゃないんだぞッ！」

「このままではギアが耐えられず、爆発しかねませんッ！」

この土壇場でエルフナインが、ギアの爆発を回避する方法を考案、実行する。

「その負荷は、バイパスを繋いでダインスレイフに肩代わり、触媒として焼却させますッ！」

「それだけでは抑え込むことは出来ないぞ?!」

「なら、本部の全エネルギーを使ってヨハンさんのスペルキヤスターにはめ込まれたラピスにアクセスし、フォニックゲインに置換しますッ！」

サンジェルマンから受け取っていたラピスの設計図を使い、シンフォギアにアクセスすると同様にヨハンのスペルキヤスターアクセスするというのだ。

彼女たちと一時期共闘態勢をとっていたからこそその裏技だ。

「それしかないならやって見せるッ！それが銃後の守りよッ！」

「四の五の言う余裕もなさそうだッ！」

本部の演算能力をフルで使い、ダインスレイフを介するバイパスの形成と、ラピスへのアクセスを同時に敢行する。どちらかが失敗すれば、敗北は免れないだろう。

だが、それをやり遂げるのが大人というものだ。

「本部バックアップによる変換とコンバートシステムを確立ッ！響さんッ！」

「バリアコーティングううッ！リリイイイスッ！」

バリアコーティングが解除され、ダインスレイフ由来の呪いによるエネルギーに包まれる。呪いからくる激痛に、叫び声を上げながらも耐え続ける。

「何をしようトツ……?!」

「抜剣ツ！」

「」「」「ラストイグニツションツ！」」「」「」

その身を包む呪いに亀裂が走る。

「ほどがある悪あがきにツ！受け入れろ完全をツ！」

宙にアダムが浮遊し、大錬金陣を展開して黄金錬成を発動する。

そして手のひらに展開された小型の太陽を装者たちに投擲した。

大爆発が発生し、焼き尽くされた街をさらに焼き尽くす。

「補って来たあ錬金術で……！いつか完全に届くために、超えるためにツ！」

「だとしてもおおおツ！」

雷と響、二人が叫び、七人の装者たちがミサイルに乗って太陽から脱出する。彼女たちの纏うギアは変化していた。

純白のエクストライブではない。ダインスレイフの最後の炎。その炎によって精錬し、打ち直した新たななるギアへとリビルドした。

逆襲が、開始される。

全ての想いを背負ってここに

リビルドしたことで各々のギアの形状や色彩が変化している。

燃焼しているダインスレイフの力によって、エクストドライブに匹敵するほどのフォニックゲインを獲得した。

それを証明するように、ギア外部部に篝火のごとく輝くオーラが放たれている。

翼とマリアが携えた刃を大型化させ、ミサイルから飛び下りる。

「生意気に……人類ごときがアアアッ！」

怒りと共にアダムが両腕を伸ばし、翼とマリアを迎え撃つ。

二人は振るわれる両腕を切り払い、翼が脚部ブレードを展開して回転しながら、マリアが変形させた長剣で両腕を切断する。

今までとは比較にならない力を実感するが、その力は揺れる炎のように歪なものだ。この炎が消えた時、燃焼するダインスレイフが消失したことを示し、今までの出力を出すことは出来ない。

いわば時限式の限界出力だ。それをマリアが実感する。

「ギアが軋む！悲鳴を上げているッ……！」

「この無理すじは、長くは持たないッ！」

「引き上げたのかあ?!出力を?!」

アダムは即座に斬られた両腕を再生させる。が、再生させたそばから調の巨大なヨーヨーが彼の体をからめとった。

「つまる場所はッ！」

「シンフォギアのリビルドをこの土壇場でッ！」

「一気に決めれば問題ないデスッ！」

切歌が鎌を四枚刃に変形、高速回転させ、風車のようにした鎌を鎖でアダムにぶつける。その横合いからクリスが超大型ミサイルを遙かに超えるミサイルを展開していた。

「エクストドライブが無くてモッ！」

ミサイルに火が入り、圧倒的の速度と大質量がアダムの体に叩きつけられる。

「アアアアアアアッ?!」

ミサイルの威力はアダムの巨体を軽々と押しつけていき、さいたまスーパーアリーナに激突。大爆発した。だが、アダムは無事だ。そこに、バンカーユニットをドリルのように回転させた響と、ユニットから稲妻を放出している雷が猛スピードで降下する。

「ラァアアッ！」

「オオオオッ！」

だが、コンバーターユニットが拒絶反応を起こし、出力が一気に低下する。

空中でバランスを崩し、二人の体が落下した。地面に激突し、叩きつけられる。

「まさか、反動汚染ッ?!」

「このタイミングでッ?!」

「そうだ……！雷さんと響さんのギアは、汚染の除去がまだッ……！」

「響ッ?!雷ッ?!」

自身の神経を逆なで続けた二人がはいつくばっている。アダムはそれだけで愉悦の笑い声をあげた。

「動けないようだな、神殺し、雷帝……。ここまでだよ、いい気になれるのは……」

アダムの体の所々が青く輝き、嘴のような口が開かれ、光球が出現する。

二人は悲鳴を上げながらも立ち上がろうとする。が、エネルギーが足りない。しかし、彼女達は二人だけではないのだ。装者たちが、雷と響にギアのエネルギーを分け与える。

「手を伸ばせッ！」

「終わりだあ！これでッ……！」

光球から光線が二人の元に発射された。モニター越しに未来が叫ぶ。爆発が二人を包み込んだ。

アダムが高笑いするが、発生した大熱量を稲妻が斬り裂き、斥力が弾き飛ばした。

『シンカ・雷帝顕現』

それだけではない、三角形に張られたエネルギーバリアも見える。

響のギアは、銀に変化していた。

「まさか……私の……！」

マリアが驚愕する。響のつかったそれは、アガートラムの技だからだ。雷と響に五人のフォニックゲインのエネルギーが分け与えられた。

「この力……みんなのツ……！」

「みんなの手と、想いの力ツ……！」

「いいってもんじゃないぞお！ハチャメチャすればあツ！」

アダムの体が巨大化する。そしてその大質量を前面に押し出して、両腕で二人を圧殺しにかかる。

「だつたらアアツ！」

響は脚部にブレードを展開してブーメランのように蹴りで飛ばし、雷は腕に稲妻の鎌を発生させ、それを掴んでブーメランのように投擲する。

「あたしの呪りeツTおデスツ！」

「借りますツ！」

「背負うツ！」

残った腕を響は手刀を放ち、その軌跡に沿って蒼き刃が飛んだ。雷は蹴りの軌道に稲妻の刃を発生させ、アダムの腕を切断する。

「蒼の一閃ツ?!」

「否定させないツ！この僕を誰にもツ！」

「みんなのアームドギアをツ！」

「みんなの想いをツ！」

アダムは地面に手のひらを当て、切断された腕から自身の分身を生み出す。が、完全に出現しきる前に主観的に時間が停止するほどの速度で雷に稲妻の鋸で焼き尽くされ、マフラーを鋸に変形させた響によって切断される。

「私の禁月輪?! 私達の技を……ううん、あれもまた繋ぎ重なる力、姉さんと響さんのアームドギアツ！」

しかし、アダムに掴まれ、鋸を粉碎され捉えられてしまう。雷も咄嗟の事で反応が遅れる。

「響ッ！」

「してる場合じゃないんだあ、こんなことを、こんなところでえッ！降臨はすぐそこだ……カストディアン……。それまでに手にしななければならぬ！アヌンナキに対抗し、超えるだけの力をおッ！」

響を握る手に力を籠め、締め上げる。

「なのにお前たちはアアアッ！」

アダムの叫びは、もはや悲鳴だった。

彼の腕を雷が居合いで切り落とす。だが、掴む力が強く、響が脱出できていない。

「ぶっ飛ばせ！アーマーパージだッ！」

響はアーマーを弾き飛ばし、ギアを解除すると斬り飛ばされた腕に飛び乗り、空間に広げられた電磁波の足場を踏んでアダムの体に飛び移る。

そしてペンダントに発破をかける。

「無理させてごめん、 GANG ニールッ！みんなの想いを束ねてアイツにッ！」

(借りを返せるワケダッ！)

(利子付けて、のしつけてッ！)

(吾輩らの想いも背負ってッ！)

(支配に反逆する、革命の咆哮を此処にッ！)

理想に殉じた錬金術師達の想いも背に、響は GANG ニールを起動させる。

「Balwisyall……！Nescell……！Gunnir……！Tronnッ！」

アダムは歌わせまいと握り潰したが、黄金の閃光が弾き飛ばす。光の中から、黄金の GANG ニールを纏った響が跳び出した。

「黄金錬成だとおッ?!錬金術師でもないものがアアアッ！」

響に手を伸ばそうとするアダムだったが、全てが一瞬で焼き尽くされ、破壊される。雷の目にも映らぬ攻撃は、そのあまりの熱量に元からそうであったかのように再生することが出来ない。

「再生できないッ?!」



アダムへの道が、真つ直ぐに開いた。

「最短で！」

雷が開いた道を、響が突撃する。

「最速に！」

最後の露を払いきつた。

「真つ直ぐに！」

響の拳がアダムを捉えた。雷が地面に着地し、エネルギーをチャージする。

響が黄金のバンカーユニットを大型化、展開し、その拳を叩きつける。しかも一発ではない。アダムが倒れるまで、何度でもだ。そして、地面を割るほどの威力で踏み込んだ雷が、体を回転させて彼の巨体をはるか上空に蹴り上げる。

「一直線にイイツ！」

その隙に、響は両腕のバンカーを最大展開、爆発的な速度で肉薄する。雷が自身と響の前に複数の門を展開し、通過するたびに二人は加速していく。

そして響の両の拳と雷の右足がアダムに突き刺さり、バンカーの内部機構が高速回転して発生したエネルギーを叩きこんで貫き、雷の稲妻が生み出した大熱量が彼の肉体を焼き尽くす。

### 『TESTAMENT』

#### 『ISHKUR』

大熱量によって肉体が昇華されゆく中、アダムは遺言を残す。

「砕かれたのさ、希望は今日に……絶望しろ明日に！未来に！」

そう言い残して高笑いし、完全に肉体が昇滅した。

しかし昇華されたものの内包していたエネルギーの一部が爆発し、雷と響が空中に投げ出された。響は翼とマリアが受け止め、雷は調と切歌、クリスが受け止める。

二人のギアが解除された。

藤堯が安堵の笑みを浮かべる。

「これでアダムは……！パヴァリア光明結社の思惑は……！」

「ああ、俺たちの勝利だ……！」

訪れた勝利は、安心をもたらした。

## ベランダの語らい

エルフナインが今まで行われたパヴァリア光明結社との戦闘で気になったところを調べていると、藤堯が横からに湯気だつ熱いコーヒーを差し出してきた。

彼は手に持つカップをエルフナインのサイドデスクに置く。

「はい」

「あ……」

「事件終息からもう三日。相変わらず頑張りすぎじゃないかな？」

戦いが終わっても休もうと、少なくともひと段落も入れないエルフナインに、先輩としての助言を入れる。上手い気の抜き方が出来るものこそ、組織人として有能な証拠だ。

友里も普段は藤堯の尻を叩くような人だが、そこは全面的に同意している。

彼女は自分の席に座る。

「響ちゃんと雷ちゃんのギアの反動汚染も除去できたんだし、少しは休まない」と

「ありがとうございますー！ですが、一連の経緯をおさらいしないと、気になっているので」

気になったことが良く分からない友里と藤堯が顔を見合わせる。

彼女のデスクの上には、反動汚染が残っているうえに酷使したため、調整と確認のために預かったガンングニールとケラウノスが置かれていた。

エルフナインが気になっているのは、最高位の錬金術師二人と、その二人を遥かに超える錬金術師が解明できなかったほどの事。何故、雷と響は神の力をその身に宿すことが出来たのか。これに尽きる。(だとしたら響さんと雷さんは……。そもそも原罪とは一体……?)

エルフナインが思考を回している間にも、物事は進んで行く。通信を知らせるコールがなった。

「指令。ロンドンの緒川さんからです」

「繋いでくれ」

メインモニターに緒川が映る。彼は今、トップを失ったパヴァリアの残党の捕獲任務にあたっていた。

「そっちはどうなっている?」

『各国の諜報機関と連携し、パヴァリア光明結社の末端……その残党の摘発は、順調に行われていきます』

「だが、結社と言う枷が無くなった分、地下に潜伏し、これまで以上に実態がつかめなくなる恐れがある」

弦十郎が腕を組み、起こりうる可能性を緒川に確認の意味を込めて伝える。が、流石は彼の右腕、言わなくても分かっていたようだ。直ぐに答えが返ってくる。

『引き続き、捜査を続けます』

緒川との通信が切れる。

今の弦十郎の中には、パヴァリアの残党と共に、アダムが口にしたものの名前が引っかかっていた。

「加えて、カストディアン。アヌンナキの脅威……か」

新たななる、そしてあのアダムが警戒するほどの強大な敵。その侵略に備えなければならぬ。

ところ変わって夕暮れ時の風鳴宗家。現当主、風鳴訃堂の屋敷に、彼の息子である風鳴八紘が訪れていた。やって来た目的は、今回、米国が反応兵器の無断使用を行ったことに対する報告だ。

二人の男が畳三畳分の間を開けて向かい合う。

「米国は、安全保障の観点からミサイル発射の正当性を主張して来たか」

「国連決議を蔑ろにする独断に対し、各国は非難を表明しつつ、それでも、強く対応できないのは……」

「ううむ……」

訃堂がうなり、差し込んでくる夕日のほうを向いた。各国が強くなるのが液ない理由はすでに分かっている。

「神を冠する、あまりにも強大すぎる力を、目の当たりにしてしまったが故……」

デイバインウエポンが猛威を振るったあの夜の事がすぐ直前の事

のように思い出せる。

「八紘……あの力が我らにあれば、夷狄による国土蹂躪も、特異災害による被害も、防げるとは思わぬか？」

「ッ」

八紘は息を呑む。

計動の脳裏には、まっとうな護国の想いでありながら、歪んだ考えが渦巻いていた。

〇〇〇

この日の夜、響と雷、未来が暮らす寮室で、三日遅れの響の誕生日会が行われようとしていた。さらに言えば、三日も遅れてしまった分を取り返すため、終わった後はお泊り会が開かれる予定だ。

未来と雷が開始の音頭を取る。

「「それでは改めて……」」

「「「「「ハッピーバースデー！（デース）」」」」」

軽快なラツカーの破裂音が次々となり、紙吹雪やリボンが宙を舞う。

響が嬉しそうに笑い、リボンや紙吹雪が彼女の頭に乗った。彼女がこの日の主役の証拠だ。

「十七歳おめでとう。響」

「ありがとう！とんだ誕生日だったよ！でも、みんなのおかげでこうしてお祝いできたことが、本当にうれしい！」

「三日遅れな分、盛大に祝うからね！」

「さあさあ！前置きはここまでデスよ！主役はこちらにデス！」

横からやって来た切歌が響の背中を押し、料理の並ぶテーブルの前まで押していった。そこには、色とりどりの野菜で作られた料理が所狭しと並んでいた。

目の前に広がる料理の数々に響が目を輝かせる。

「うおおお?! すっごーい! どうしたの?!」

「はい。調が頑張ってくれました！」

マリアが料理を担当した調の肩を優しく押す。照れと恥ずかしさが混ざり合い、調は頬を赤くしていた。

響が驚嘆する。

「これ、調ちゃんがあ?!」

「違う違う!みんなで一緒に……………」

「調……………」

手を振って否定しようとするが、マリアにたしなめられた。

「だって、松代で出会ったおばあちゃんから、夏野菜をたくさんいただいたから……………」

「でも、中心になって作ったのは調でしょ?」

「ね、姉さん!」

調の隣で揶揄う雷に、彼女はさつき以上に恥ずかしさで顔を赤くする。そんな調の頭を、雷がわしゃわしゃとなでた。

そんな時、翼が胸を張っていった。

「月読が作り、立花が平らげるのなら、後片付けは私が受け持つとしよう!」

「いやあセンパイ?出来もしない事を胸張って言うと、後で泣きを見ますって……………」

「な、私を見くびってもらっては……………」

「はいはい、喧嘩しないの。ホラ……………」

どこから出てきたのか分からない自信にクリスがツツコミ、翼がみつこうとする。が、そこは装者たちのお母さんポジションを務めるマリア。料理を乗せた皿を手に翼のもとに現れ、フォークでそれを翼の口に運ぶ。

翼は反射的に咀嚼し、味をかみしめる。

「なにこれ?!まさか、トマトなの?!こんなに甘い初めて食べたわ!」

「驚きに 我を失う 美味しさです」

この反応はあの時にトマトを食べた全員がした反応だ。その美味さ、甘さは折り紙付きである。

翼の反応を合図に、全員が皿をもって立食形式で気になった料理に手を付けていく。昔なら疎外感を感じていたであろう雷だったが、今では楽しく料理にばくついている。

料理を食べた後は、ゲーム大会が開かれた。

最初はほのぼのとした雰囲気で行われていたのだが、

「フハハハハ！その程度のテクニクで我に勝てると思うなあ！」

「え?!なにそれ?!」

「右と左で違うゲームやってんじゃねえか……?」

雷が別次元のコントローラー捌きで出禁を喰らってしまった。

クリス宛に届いたステファンのリハビリの写真とつづられた手紙に喜び、翼が皿をどうやったのか全く分からない積み方で皿を積み上げていた。

ベランダで涼んでいる響に、未来が冷たい麦茶を差し出した。

響はそれを笑顔で受け取る。

「さっすが未来！気が利くっいたらありやしない！」

未来もベランダにもたれかかった。

「エルフナインちゃんも来られたらよかったのにね？」

「そうだね……」

「誘ったんだけど、気になることがあるって梃子でも動かなくて」  
片づけがひと段落付いた雷も、ベランダに涼みに来た。

「残念」

「うん……」

少しの間が開く。

響が口を開いた。

「例えば……さっ？」

「ん？」

「どつたの？」

未来と雷が彼女のほうを向く。

「どこかの悪いやつが、誰かを困らせているのなら、きつとこの拳で何とか出来る……。だけど、お互いがお互いの正義を信じて拳を握りしめている戦いは、簡単に解決なんてできない……」

「響……」

雷は目を閉じ、静かに聞き入っている。

響が自分の手のひらを見つめた。

「昨日までは出来た……。でも明日に私は、正義を信じて、握りしめら

れるのかな……?」

「人間なんだから、考えだつて変わるし、信じたいものだつて変わる。明日がどうか、そんなの、神様でもなければわからないよ」

「雷……」

未来が、響の手を両手で掴んだ。陽だまりの暖かみが、響の手と心を温める。

「響が自分を信じられなくても、私達は響とつないだ手は離さない……ね?」

「当然だよ。意地でも離すもんか」

「ッ」

響が息を呑む。

「何があつても、握りしめているから!」

三人、一番の親友同士で笑い合う。響の悩みは、ただ数回のやり取りだけで吹き飛んでしまった。

「二人がそう言ってくれるなら……!」

そして未来は片手を響の手から離し、雷の手を取った。いきなりの事に彼女はきよとんとした顔をしている。

「響だけじゃないよ。私が手を離さないのは」

「うん……。ありがとう、未来」

雷がはにかんで笑った。

未来が手を離し、一足先に室内へと戻る。

そして入り口の手前で振り返り、

「おかえりなさい、響!雷!」

「ただいま、未来!」

すると部屋の中から切歌と調が飛び出してきた。

「トランプ始めるデスよ〜!あ、姉ちゃんはいカサマ禁止デス!」

「これ以上お菓子を取られるのキツイ……」

響と雷は向かい合つてクスリと笑いあつた。

「うん!」

「しょうがない!真剣勝負で相手しよう!」

みんながいる場所へと、二人は戻つていった。



○○○

エルフナインが何故響が神の力の依り代たり得たのかを解明し、その原因が神獣鏡の輝きにあると突き止め、そして依り代になる可能性が未来にもあることは分かった。

「だがエルフナイン君。なら何故、神獣鏡の輝きを浴びなかつた雷君が、神の力の依り代たり得たのだ？」

何故神獣鏡の輝きを浴びていない雷までもが神の力の依り代たり得たのか、何故響と異なり等身大のままだったのか、そして、彼女の神の力は何処に行つたのか？

「櫻井理論とは異なる理論で作られたケラウノスに鍵があると、僕は思います……きました！」

二通のメールが届く。それは、ケラウノスを受け取つた際の聖遺物の詳細と、ラボで解析していたケラウノスの解析データだった。

「メールか？」

「はい。一つは、ギリシヤにから受け取つた際の聖遺物情報。もう一つが、ラボで行つていた解析データです」

「それで、何が書かれている……？」

もつともイレギュラーな存在であるケラウノスの情報に、弦十郎が身を乗り出す。

「まずは受け取つた際の情報から」

高速でスクロールしていき、違和感のある所を探していく。

「発掘場所……」

そしてそれは見つかった。

「発掘場所がギリシヤではなく、イラクになっていて、その形や性質からケラウノスと断定され、ギリシヤに運び込まれた……が、正しい入手経路の様です」

「つまり、本当の名前はケラウノスではない可能性がある……ということか？」

「そうなります」

エルフナインの答えに、弦十郎があごに手を当て、唸った。

「もう一つはどうなんだ？」

「確認しています」

ひとまず頭を切り替え、もう一つの、ケラウノスの解析結果の報告を促す。がいつまでたつてもエルフナインからの報告が来ない。弦十郎が彼女の顔を覗き込むと、エルフナインは真っ青になっていた。「どうした?!」

「一秒間に二千兆回……プロテクト改変……偏り……」

「しつかりするんだッ！エルフナイン君ッ！」

エルフナインの顔色が蒼白になっていく。そして彼女は自身を揺らす弦十郎の袖をつかみ、おかしくなりそうな頭を何とか振り絞つて、震える声で事実を伝える。

「ケラウノスは一秒間に二千兆回以上プロテクトを変更し、そのプロテクトに偏りが見られます……！」

「それは……つまり……」

弦十郎の顔からも血の気が引いた。その言葉が意味することを知っているからだ。

エルフナインが叫ぶ。

「ケラウノスにはッ……！意図がありますッ！」

二人の頭の中に、何故雷が依り代たり得たのかはすっかり抜け落ちていた。何故なら、彼らの体を貫いた衝撃は、今までうけた何よりも大きかったからだ。

○○○

夜。響の誕生日会を終え、集まった全員が思い思いの方法で睡眠をとる中、一人の少女が静かにベランダに出てきて、欄干に背中から体を預けた。少女は、雲によって月が隠された空を見上げる。

「貴様の言っていたことが今なら良く分かる……。素晴らしいな、人間という物は。今まで二千年以上、様々な人類の汚点や醜悪さを見てきたが、それを含めても美点が勝る。貴様にも見せてやりたいが……雲が邪魔だな」

少女はフツと微笑みを浮かべ、手のひらで空を仰いだ。すると、その手の動きの通りに雲が動き、月が顔を出す。月光の中、笑みを浮かべたまま目を閉じ、俯いた。

「ああ、分かっているとも。貴様の愛した人類を守るのが私の使命だ。安心しろ、貴様ほどではないが私も人間を愛しているからな」

少し恥ずかしそうに頬を掻いた。そして、少女は深く息を吸い、胸を張る。

「私の力は知っているだろうか？任せておくがいい。なあ？我が友、エ・ンキよ……」

月光が青い瞳の少女を照らす。

赤みがかかった髪をかき上げ、月を見上げた雷が、優しく微笑んだ。

## XV編

### 極点のタイムカプセル

とある場所。かつてナスターシャが月と地球を接続した遺跡に似た場所に、二人の青年がいた。二人とも人型だが、肌の色や身に纏うもので人間ではないことがわかる。

石板のようなコンソールを操作する青年は髪が青く、精悍な顔つきをしており、胸からはおびただしいほどの血を流していた。

今にもこと切れそうな彼は、もう一人の、塔のような建造物に背中を預けた青年に声をかけられた。その青年は、青い瞳を持つ赤髪の、彼よりも厳格な顔つきをしている。

「本当にいいのか？」

「ああ……この役目を果たせるのは君しかいない……」

コンソールを操作する青年は息も絶え絶えだ。

だが、塔にもたれかかっている青年はそういう事じゃないと首を横に振り、目つきを鋭くする。

「我は最愛の女に別れの言葉ぐらないのかと聞いている」

「伝える言葉も、猶予も、残されてはいない……」

「そうか……。ああ、我はお前に言い残したことがある」  
「……」

最終設定を済ませた青年が遺跡のシステムを起動させ、水晶に流れる光の輝きが増し、建造物がうなりを上げる。

そのうなりを上げる建造物によりかかった青年の体が透け始め、膨大なエネルギーの雷が迸った。建造物はエネルギーを寄り掛かった青年から得ているのだ。

「貴様とファイネ。最初はあ奴らと恋に落ちるなどと気に食わなかったが、ああいうのも悪く無いと、我も認めよう……」

「そう……か……」

青髪の青年が倒れ、こと切れた。

赤髪の青年も体が完全に消滅し、建造物の天辺からすべてを破壊す

る雷が放たれる。それと同時に月面に紋章が描かれた。

この日、人類はバラルの塔を天から降り注いだ雷によって破壊され、統一言語を失った。後に、人類は統一言語を破壊した雷霆に対し、こう名付けた。

『バラルの呪詛』と……。

〇〇〇

国連直轄組織、S・O・N・G。彼らが本部として運用している潜水艦は、極寒の地、南極にあった。

目的の場所にかじを取る潜水艦だが、情報を集めている藤堯が変化を報告する。

「到達不能極までの持続密度、フラクタル二千位！脅威レベル、三から四に引き上げ！」

「算出予測よりも大幅にアドバンス！装者たちの現着と、ほぼ同タイミングと思われれます！」

緒川が弦十郎に進言した。

「情報と観測データを照合する限り、棺とは、やはり先史文明期の遺跡と推察されますが……」

「ううむ……」

「ポストーク氷底湖内のエネルギー反応飛躍！数値の上昇止まりません！」

エルフナインが如何やら『棺』と称されるものの反応を捉えたようだ。棺はエネルギーをすさまじい速度で上昇させているようで、このことから『起動』したことがわかる。

「来るか！……総員、棺の浮上に備えるんだッ！」

弦十郎が指示を出し、それと同時に上空のヘリに待機していた装者たちがヘリの扉を開ける。雷、響、翼とクリスがS・O・N・Gの隊服を着て現れた。向かいのヘリには、マリア、調と切歌が乗っている。

そんな彼女達を、極寒の吹雪が襲う。

「さっむう〜！凍れるうー！どこの誰だよお！南半球は夏真っ盛りだっって言ってたのはあ！」

「デースッ！」

「いくら南半球でもここまで来ればねえ……」

体を縮こませて震える響と切歌を見て、彼女達に「南半球は日本と季節が逆だから今は夏」と教えた雷が苦笑いした。流星に南極まで来て南半云々に文句をつけられるとは思っていなかったらしい。

「夏だって寒いのが結局南極だ。ギアを纏えば、断熱フィールドでこのくらい……」

クリスのツツコミが響に刺さる直前、ぶ厚い氷を貫いて赤い光線が下から天に昇った。同様に空を覆う曇天に風穴を開けた。南極にあるまじき青空が見える。

「なかなかどうして……心胆寒からしめてくれる……」

そして光線の発生源である湖の中から、まるでロボットのような棺が浮上した。あれがS・O・N・G.のターゲットだ。

「棺とは一体……私の中で棺の定義が壊れそうだ……」

「切ちゃん！棺ってなんだけ?!」

「姉ちゃんが分からないものを聞かないで欲しいデースッ！」

「何時だって想定外なぞ想定内！行くわよ！」

F・I・S.三姉妹の漫才を母親役のマリアが締め、装者たちが降下する。起動聖詠を口し、ギアを起動、装着する。

「V o l t a t e r s   K e l a u n u s   T r o n」

ギアが起動したことで特殊なフィールドが展開され、その中で純白のワンピース姿となった雷は、稲妻を体に纏わせながら体をターンして空高く上っていく。そして閃光が煌めき、その中からリビルドし、アゾースギアとなったシンフォギアを纏う彼女が残光と共に現れた。同じくアゾースギアへと変化したシンフォギアを纏う装者たち。その中で一番の爆発力を持つ響が、腰のブースターを点火して棺に拳を振りぬいた。

棺は図体に似合わぬ反応で響の拳を迎撃する。

はじき返された響が雷たちの元に並び立った。

「互角?!でも、気持ちで負けてないッ！」

間髪入れずに棺が光線を放った。装者たちは回避するが、着弾地点

から緑色の光が伸び、凍結した。

クリスが驚愕する。

「何なんだよあのデタラメは！どうする?!」

「どうもこうも……止めるしかないじゃないッ！」

「散開しつつ距離を詰める！観測基地には近づけさせなッ！」

響が走り、調と切歌が氷上を滑る。そんな彼女達を超速度で雷が追い抜いて行った。雷の後ろで調がバインダーを展開し、切歌も鎌の刃を増やす。

『α式・百輪廻』

『切・呪りeツTお』

ザババの二つの刃は棺の足を狙って放たれ、棺は体を振り子のように揺らしてその反動で跳躍し、回避する。が、それは雷たちのコンビネーションであり、氷と棺の間を潜り抜けた彼女は大ジャンプで棺を飛び越え、天地逆さまの状態で体をひねってオーバーヘッドを打ち込み、下から響が雷とは逆方向に拳を叩きこんだ。

これによつて棺がひっくり返り、氷上に叩きつけられた。

そこを、クリスの小型ミサイルが襲い掛かる。

『MEGA DEATH PARTY』

ミサイルの全弾直撃を喰らった棺だったが、爆煙の中から顔を出し、すぐに光線を発射して反撃した。

「聞かないのかよッ……！」

光線をジャンプで避けるクリスだったが、まったく手ごたえのない相手に歯噛みする。

本部では緒川が冷静に対象の状況を把握していた。

「接近する対象を苛烈に排撃……こんなものを、はたして棺と呼ぶべきでしょうか？」

「攻撃ではなく防衛……不埒な盗掘者を寄せ付けないための機能だとしたら、どうしようもなく棺というより他あるまい」

(だとすれば、棺に眠るのは、本当に……)

アダムの一件以降、様々な疑問疑念が発生しているが、そのうちの一つがあの中にあるのだろう。弦十郎はそう目星をつけた。

「指令！棺に新たな動きが！」

友里の一声で、思案の中から現実に取り戻される。

棺は全体からとげのようなものを作り出し、発射。ミサイルのように飛翔すると下は空中で変形し、光線を発射するビットとなった。

響が光線を弾きながら跳躍し、両足のアンカージャッキで宙を蹴ってマフラーを振り回して撃墜し、切歌がフィギュアスケートのごとく調を持ち上げ、バインダーを変形させた大型鋸付きのアームで斬り刻む。

「こちらの動きを封じるためにッ！」

「しやらくさいのデスッ！」

「群れ雀なんぞに構いすぎるなッ！」

クリスがガトリング砲を放ち、撃ち落としていく。

雷が電磁波を利用した高速移動で空を舞い、すれ違いざまに稲妻で焼き落とした。

「だけど、いかんせん数がなッ……！」

「ならば、行く道をッ！」

翼が空から剣を落とし、棺への道を開く。

その道を響とマリアが駆ける。響のバンカーユニットと、マリアの銀腕が変形し、跳躍する。

「最速でッ！最短でッ！」

「真っ直ぐにッ！一直線にッ！」

変形した腕部装甲がドリルのように回転し、棺の胸に嵌められていた結晶体を破壊した。が、翼は油断しない。

「効いている！それだけだッ！」

その巨体に似合わぬ俊敏さで棺が跳ね、腕と思わしき部分で響とマリアを叩き落とした。二人が氷にぶつかる直前で雷が踵でブレーキを掛けながら滑り込み、受け止める。

「いっただあいッ！」

二人分の重さに落下の速度、そして滑り込む際についた氷の硬さも相まって、ギアで守られているので大した痛みはないはずだったが反射的に声が出た。



地面に固まっている三人をカバーするために、調と切歌が響とマリ  
アを抱き起し、翼が前に立った。

見ると棺が光線をチャージしている。二人いる防御能力を持つて  
いる装者のうちの雷は動くことが出来ず、もう一人のクリスが全力疾  
走する。

「来るぞッ！」

「間に合えええッ！」

ギリギリ間に合ったクリスは翼の前で腰部バインダーを全開し、リ  
フレクターを展開する。

光線とリフレクターがぶつかり合い、大爆発が起きる。四本の氷柱  
が光と共に現れた。

「リフレクターによるダメージの軽減を確認ッ！」

「棺からの砲撃、解析完了！マイナス五千百度の指向性エネルギー波  
……って、何よこれ?!」

「埤外物理学による……世界法則の干渉……。こんなもの、現在のギア  
搭載フィールドでは、何度もしのげませんッ……！」

世界法則を超える埤外物理学。ならば、目には目を歯には歯を、埤  
外物理学には埤外物理学を。同じ埤外物理学を正面から叩きこむの  
みである。

君が誰かを傷つけるなら

夕焼けがりディーンの校舎をオレンジ色に染め上げる。

生徒たちは各々友達と共に下校したり、部活動に励んだりと様々な日常を送る中、ピアノの美しい旋律に乗り、響がりディーンの校歌を歌っていた。ピアノの奏者は未来だ。

雷は創世たちと共にドアの隙間から中の様子を見つめている。

響が歌い終わると、その歌を聴いていた先生が深く息を吐き、もたれかかっていた壁から体をはがした。彼女はパンツと手を叩き、

「はい。合格です」

「ホントですかあ?! やったああー!」

「良かった……」

ピアノを弾いていた未来に響は何度もピースサインを向ける。そしてドアの方を向き、雷にもピースサインを向けた。雷もピースサインを返す。

そんな上機嫌の響に、先生がくぎを刺す。

「立花さん?! 調子に乗らないの。合格とは言いましたが、学ばなければならぬ技術はまだまだ多あつくさんあります!」

「面目……次第も……ごいません……」

響がしよぼくれる。

「ですが、聞き入ってしまう歌声です。きっと立花さんは、心で、歌っているからなのでしょうね……」

「心……胸の歌……先生!」

先生は目を瞑り、自分の胸に手を当てる。たしなめることもそうだが、ほめて伸ばすことも教師の仕事だ。

しかし、それで再び調子に乗ってしまうのが響である。彼女はうれしさのあまり先生に抱き着こうとした。が、彼女は上手く体を翻して響を回避する。

「はい。これにて居残りテストは終了。色々あるとは言え、次の試験はすつぽかさないうように」

居残りテストの対象は響だけだ。何故なら、このテストは前後半に

分かれて行われ、運良く雷は後半部分。即ち任務のあった日である響のテストの日とは別日で行われていたからだ。

響の居残りテストが終わった雷、響、未来は、三人そろって自分たちの家へと帰っていく。が、今回は特別だ。帰路につく前に大型ショッピングモールに足を運ぶ。

「誕生日プレゼント、いいのが見つかってよかった」

「クリスマスちゃん喜んでくれるかなあ？」

「喜んでくれるよ、きつと」

もうそろそろでクリスマスの誕生日会が開かれるのだ。三人はそのためのプレゼントを購入し、笑い合いながらモールの中を歩いて行く。すると、通路にあるテレビモニターに気になるニュースが流れていた。

それは、日米共同で行われる宇宙開発プロジェクトの事だ。その目的の地は、月。装者である雷と響とは切って切り離せないものだ。

響がモニターを見上げてボソツと呟く。

「月へ……」

雷が懐かしいものを見るように月の映像を見上げた。

いつの間にか立ち止まっていた二人に対し、未来が少し離れたところで声を張る。

「遅ーい！もうどうしたの？」

「うわぁゴメン！」

「すぐ行くから！」

大急ぎで未来のところに向かう。何時もの、少女たちの会話に戻っていた。

響のおごりでたい焼きを買い、三人は観覧車に乗って食べながら夜景と語らいを楽しんでいた。

「それにしても、胸の歌には何度助けられたかわからないよ」

「ほんとほんと」

「今度は助けてくれないかもしれないよ？」

「にや〜ツと雷が笑っていたい焼きを口に運んだ。因みに雷は尻尾から先に食べる派だ。」

「ええ?!それは困る!……でも、なんだか最近、特別なぐらい普通の毎日。普通って幸せなんだって実感するよ……」

「しばらく任務続きだったものねえ……」

「去年まではそれが日常だったのにねえ……。響を除いては」

「そうだよ!響ってば、困っている人がいればあつという間に飛び出してばかり」

未来が響を見つめ、恥ずかしくなった彼女は頭をかいた。そんな響を見て未来が悪戯っぽく笑う。

「私が困っている時も助けに来てくれるのかしら?」

「そんなの当たり前だよ!未来だったら、超特急で行くよ!」

「じゃあ、私が誰かを困らせたなら響はどうするの?」

「え?」

響は直ぐに答えることが出来なかった。だが、彼女の代わりにたい焼きを全て平らげた雷が、唇の食べかすを親指でふき取った後、答える。

「そこは私が何とかするよ。私と響の想いを、どうやってでも未来に届けて改心させて見せるから!」

「雷あ!」

なかなか答えが出せなかった自分と違ってスツと返答できる雷に響が抱き着いた。その勢いでゴンドラが大きく揺れる。

「ちよつと響!」

「あはは!ごめ……ッ?!」

「何事?!」

そんな姦しい彼女達の背後で爆発音が聞こえてきた。慌てて音のした方を向くと、大きな船が爆発、炎上していた。

「響……雷……」

「うん……!」

三人はゴンドラから降り、階段を駆け下りていくと、目の前で緒川の乗ったS・O・N・G.の車が停車した。

「響さん!雷さん!乗ってください!未来さんも一緒に!」

雷たちを乗せた車は港に停泊しているS・O・N・G.本部潜水

艦に向かって走り出した。

本部ブリッジには他の装者たちも集合しており、モニターにはさつき爆発していた船の消火活動の映像が映されていた。

「大型船舶に偽装したS・O・N・Gの研究施設にて、事故が発生した。」

「海上の研究施設……デスか？」

「もしかして、街中では扱えないような危険物を対象に？」

如何やらあの船は、S・O・N・G 所有の物だったようだ。

「ああ、そこでは先だつて回収した、オートスコアラアの残骸を調査していたのだ」

弦十郎の言っているオートスコアラアとは、アダムが保有し、デイバインウエポンとして運用されたティキの事だ。

「破壊されたアンティキティラの歯車と、オートスコアラアの構造物からは、パヴァリア光明結社、ひいては、アダム・ヴァイスハウプトの目的を探る解析が行われていたの……」

「先ほどの爆発事故は、機密の眠る最深奥に触れたための、セーフティーと考えられますが……」

「ティキと呼ばれたあのオートスコアラアには、惑星の運航を観測し、記録したデータをもとに様々な記録したデータをもとに様々な現象を割り出す機能もあつたようです」

友里、緒川、エルフナインの説明を受け、装者たちが何が行われていたのかを飲み込んでいく。

モニターには地球の3Dモデルが映され、ティキが割り出した目的地の座標が映された。

「これは……南極大陸」

「爆発の直前、最後にサルベージしたデータが南極の一地点を知らせる座標でした」

南極に該当する場所に赤いマークが付けられる。

「ここは南極大陸でも有数の湖、ボストーク湖。付近に位置するのはロシアの観測基地となります」

「湖つてどれえ？一面の雪景色なんですけど？」

「雪どころか氷だよ。そもそもその辺に映ってるのほとんどがボストーク湖だよ、つまり氷の下」

なぜこんなことも知らないんだ……。と少し呆れながらも、雷はまるで先生のように響に教えた。

「地球の環境は一定ではなく、たびたび大きな変化を見せてきました。特に近年その変動は著しく極冠の氷の多くが失われています」

「まさか、氷の下から何かが出てきたってわけじゃないよな？」

クリスがフラグを立てる。

大体、こういう時の予感当たるものだ。つまり、あたりという訳だ。

「そのまさかよ。先日ボストーク観測基地の近くで発見されたのが、この氷漬けのサソリです」

「照合の結果、数千年前の中東周辺に存在していた種と判明。現在では絶滅していると聞いています」

明らかに引つ掛かりを覚えるサソリの生息地に、真つ先にマリアが反応した。

「何故そんなものが南極に？」

「詳細は目下調査中……。ですが、額面通りに受け止めるなら、先史文明期に、何らかの方法で中東より持ち込まれたのではないのでしょうか？」

「……つまり、何も分かっていないと？」

「言わないでくれないか……」

雷の物言いに藤堯が渋い顔をする。要は今絶滅した中東のサソリが南極にて発見されたが、何故ここに居るのか分からないということだ。

ついで緒川が情報部が集めたことを報告する。

「それだけではありません。情報ぶは瓦解後に、地下へと潜ったパヴァリア光明結社の残党摘発に務め、さらなる捜査を進めてきました……」

モニターの画像が氷漬けのサソリから、情報部の集めたパヴァリアの残党にかかわるものに切り替わる。

「得られた情報によると、アダムは、専有した神の力をもって、遂げようとした目的があつたようだな」

「アヌンナキを超えるとは言つてたけど……」

「この星の支配者となるため、時の彼方より浮上する棺を破壊……」

「何デスとツ?!」

「でも……時の彼方からの浮上って、南極とサソリと符合するようで  
気味が悪い……」

調が言うように確かに気味が悪い。知的探求心が抑えきれない一人を除けばだが。

一通りの報告を終えた弦十郎がイスから立ち上がる。

「次なる作戦は、南極での調査活動だ。ネタの出所に結社残党が絡む以上、この情報自体が罠という可能性もある！作戦開始までの1週間、各員は準備を怠らないでほしい！」

「了解（デス）！」

装者たちの声がそろろう。

雷と響の中に、昇滅していくアダムの残した言葉が蘇った。

「砕かれたのさ、希望は今日に……。絶望しろ明日に！未来に！」

雷が憎々し気に舌打ちを打った。

故に今、雷たちは南極で棺と交戦しているのだ。

## 七色の弾丸

装者たちが絶対零度すら下回る極極低温の氷漬けになっている姿を、遠方から二つの人影が手を望遠鏡のようにして観察していた。二人はコートで体全体を覆っているため、どの様な姿かは全く分からない。ただ、少女である。ということだけが辛うじて理解できた。

「うーむ……。これは……。あっけなく、やられちゃったでありますか？」

手を望遠鏡のようにして観察している少女の隣、髪にメツシユの入ったもう一人の少女が、寒そうに鼻をすすする。

「ウチらじやまるで敵いっこないデカブツが相手とは言え、もうちよつと踏ん張ってもらいたいものだけエ……」

少女が悪態をついた。如何やら彼女たちも棺の中身を欲しているようだ。棺をあいてに自分たちの勝ち目がないからこそ、装者たちに倒してもらおうという魂胆らしい。

『6522650922 (もしもーし)』

「ん?」

脳内に直接言葉が送り込まれた。テレパシーで送られたその言葉は言語という体を為しておらず、ただの数字の羅列だった。しかし、彼女達は普通全く理解できないはずの数字の羅列の意味を理解し、言語として捉えている。

二人は脳内で聞こえる声に耳を傾ける。

テレパシーの送り主の少女と、彼女達のリーダー格とみられる女性は、オープンカーに乗ってとある施設へと向かっていた。

「どう? そっちは順調かしら?」

『棺の浮上を確認したところだぜ』

落ち着いた喋り口の少女が、棺の動向を観察しながら、首をかしげる。

「本当に局長は、あんなものの……棺の復活を阻止して、この星の支配者になろうとしたのでありますか?」

『64021102330322993346522346283?』



(冥界通信でもしてみる?)」

「おう……。それは流石に遠慮しておくぜ……」

「221994499……(残念……)」

先ほどから数字しかしゃべらない少女が体を滑らせ、シートからずり落ちた。運転席に座る褐色の肌をした女性がふふつと頬を綻ばせ、「今となっては昔の事だけど、少なくとも、私達の目的は局長とは違う……」

「039100?!(うわっ?!)」

数字を喋る少女は彼女の言に表情を暗くしたが、直後に発生したドリフトターンによる停車によって振り落とされる。あまりの回転に吹っ飛びかけたヘッドホンを両手で抑え、過激なハンドルさばきを見せたリーダー格の女性をジト目で睨みつける。

女性は舌を出し、謝る気を全く見せない素振りをした後、足をドアの上に乗せる。如何やら目的地に着いたようだ。

「私達の目的は、棺の破壊ではなく……その活用だもの……。そう、これは、未来を奪還する戦い……。だから、絶対に果たさなければならぬわ」

シートに座ったまま数字を喋る少女が女性を見上げた。彼女は、現実から耳をふさぐようにヘッドホンで耳を覆い、流れてくる音楽を聞き入ることにした。流れてくる音楽はクラシック。タイトルは交響曲第5番 ハ短調 作品67……通称、『運命』。

○○○

装者たちはいまだ氷から脱出できずにいた。意識も狩り取られ、ギアを纏っていようと低体温症による死は免れないだろう。

「装者七人、未だ昏睡状態……このままでは……!」

友里の報告に、腕を組んでいた弦十郎がブリッジの外に向かおうとする。

そんな彼を、右腕である緒川が引き留めた。

「指令!」

「案ずるな、ステテコ重ねた二枚履き、凍える前にはかたをつける!」  
「そうではなく……!」

「ッ?!指令ッ!」

「どうしたッ?!」

南極の寒さなど問題ない。問題になる前に片づけると言い切る弦十郎は、緒川の呼び止めを意にも介さない。だが、装者のバイタルチェックを行っている友里の悲鳴にも近い声を聞いて振り返った。

「雷ちゃんの脈拍急上昇!」

「上昇だとお?!低下ではなくか?!」

「はいッ!百……百五十……二百?!どんどん上昇していきますッ!」

本来、低体温に陥れば血圧が低下して脈拍が少なくなり、いずれ心臓が停止する。だが、雷の身に起きたことはその逆、逆に心臓の鼓動が早まり、体温が急上昇しているのだ。

「何が……起きているんだ……」

ほかの職員もその様子を見ていたようだ。どこからともなく、そんな声が上がった。

氷漬けにされた雷が、目を見開く。一瞬だけ蒼くなっていた瞳は直ぐに元の金色に戻った。四肢は氷によつて動かないが体は無事だ。頭を振って気をしっかりと保つ。

「みんな?!……っ」

すると頭上がパツと明るくなった。

南極基地の職員が照明弾を上げ、棺の気を引いているようだ。目障りに思ったのか、棺が発射元の基地に向かって光線を放つ。

「不味い!」

自由に稼働する肩と腰のユニットから稲妻を放射して自由を奪う氷を溶かし、大ジャンプで光線と基地の間に割つて入った。斥力フィールドを全開にして光線を逸らす。そらした先は氷漬けにされた仲間のところだ。光線はフィールドに直撃して歪曲し、狙い通り装者たちのところに直撃する。荒治療だが、確実に氷を溶かしきるだけの熱量はある。いい気付けにもなるだろう。

「どっへえ?!」

「あつぶねえなオイ!」

「ああ、だが助かったッ!」

「何処も問題はないわね？」

「あるとすれば……」

「さっきのが結構痛かったぐらいデース！」

響たちは口々に言いながらも、溶けた氷の中から全員脱出した。クリスがお返しとばかりに大型ミサイルをを数発発射し、棺を後退させた。

復活した七人の装者が並び立つ。

その瞬間、エルフナインから通信が入った。

『皆さん！ボクは……ボクの戦いを頑張ります！……だから！』

「みんなが背中を押してくれるッ！」

棺は再び全身からビットを展開した。

今度は単発ではなく、数体を連結させてジャベリンのようにしている。雷と響は蹴りと拳でいなし、棺に肉薄する。

いなされたビットはぶ厚い氷を突き破り、水中から急上昇して下からの攻撃を仕掛けてくる。翼がサーフボードのように水面を滑りながらそれを避け、ブレードを体ごと高速回転させ空中にいるビットを両断していく。

ビットから放たれる光線をクリスは腰部アーマーを展開して防ぎ、ボウガンバリスタに変形させ、四本の巨大な矢を放つ。矢は空中でバラバラになり、雨のように落下エネルギーで加速して降り注いだ。

### 『GIGA ZEPPELIN』

マリアも広範囲攻撃では引けを取らない。彼女は短剣を蛇腹状に変化させて伸長し、新体操のような柔軟かつ軽やかな動きでビットを刃にからめとり、切断する。

### 『SILVER†GOSPEL』

逃げ遅れた研究員がビットの攻撃を喰らいかけたが、スケートのように自在な滑りで接近した調がヨーヨーで撃ち落とす。残りのビットもバインダーに展開した大型鋸をスピンドルで振り回して撃墜、さらにはそれらを打ち出して一気に複数対象を殲滅する。ビット複数のビットが集まって収束させた光線を鋸を盾にして防御する。が、流れ弾が女性職員の背後で爆発した。響がそれを受け止め、上空で集まっ

ていたビットを切歌が鎌を振り回して斬り刻む。

「大丈夫ですか?!」

響が女性職員の安否を確認するが、背後には複数のビット。正面には光線のエネルギーチャージ行う棺と、挟み撃ちとなってしまう。職員がいる以上、無理な軌道は出来ず、かといって放置することもできない。どうすればいいかと逡巡する響だったが、

『ぶん殴ってくださいッ!』

「言ってることお……全然わかりませんッ!」

エルフナインの指示で言われるままに体を動かした。アンカージャッキで体を固定し、発射された光線を真正面から殴りつける。すると光線は拳にぶつかって逸れ、背後から攻撃を仕掛けてきたビットに命中した。

藤堯が状況を報告する。雷のバイタルも正常値に戻っていた。不安は残るものの、今は目の前の状況に対処する。この作戦が終われば雷はメデイカルルーム送りだ。

「拳の防御フィールドをアジャスト!」

「即席ですが、エルフナインちゃんに合わせてくれました!」

「うん!」

弦十郎も緒川も満足げだ。

「雷さんのを再現しました!解析からの再構築は、錬金術の原理原則!これがボクの戦い方ですッ!」

こぶしを握る。

雷が光線を発射し続ける棺に飛び蹴りを放った。放たれていた光線が上に逸れ、響が職員を抱えてその隙に離脱する。雷が蹴った反動で再び空中に戻った。

装者たちの全身全霊の攻撃が棺に集中する。前線に戻ってきた響は勢いそのままバンカーユニットを全力展開して殴り抜いた。雷は空中に展開した電磁フィールドを蹴り、展開した門の中を通過して加速してから跳び蹴りを打ち込む。

攻撃の威力に棺は倒れたが、ダンゴムシのように体を丸め、着地した雷、響に向かって突撃してきた。スパイクも付いているというおま

けつきだ。

「させないッ！」

「行かせないッ！」

雷と響の稲妻を纏い、衝撃波を放つ拳が真つ向から激突する。突撃を食い止めたはいいものの、響が棺と共に海底への落下に巻き込まれてしまった。

が、そこは最速を誇るケラウノス。即座に空中機動で響のところに向かい、回収する。

「助かったよ雷！」

「問題なしなら問題ないッ！」

響を氷の上に下ろし、再び空中に上昇、全身のユニットを展開して超電磁の嵐と錨を沈みゆく棺に向けて撃ち込んだ。

『超電磁トルネード＋超電磁アンカー』

水中を潜行する棺が超電磁の檻に捕らえられる。

「でえりやあああッ！」

空中で雷が思いつきり体をひねり、ぶ厚い氷を貫き抜いて棺を空中に打ち上げる。超電磁の檻に捕らえられているがゆえに空間に固定され、棺は落下することも身動きを取ることができなくなる。出力が上がっていたとはいえ、デイバインウエポンすら拘束する代物なのだ。これくらい容易といえるだろう。

雷が響の元に着地し、翼たち他の装者も集結する。

「拘束したとはいえ時間の問題ッ！」

「狙うべきはのど元の破損箇所、ギアの全エネルギーを一点収束ッ！」

「決戦機能ならば行けるかもッ！」

「だとすれば後はやるのみデスよッ！」

「狙いをつけるのはスナイパーの仕事だ、タイミングはアタシが取るッ！」

「いくぞ、みんなッ！」

拘束時間はおおよそ三十秒。それまでに決めなければならぬ。みんなの心、想いは一つとなった。

「」「」「ギアブラストッ！」」「」「」

インナースーツを残してアーマーがすべてエネルギーへと変化し、少女たちの元に収束する。ビットが棺の元に集合し、リフレクターになろうとするが、拘束する電磁波の影響でジャミングが発生し、組織立った動きが出来ないでいる。拘束が解けるまでまであと二十秒。「リフレクター気取りかよッ！」

クリスの左目にスコープが展開された。あと十秒。ビットは防ぐことは出来ないという理解したのか、光線を放ち、妨害に終始している。距離は千五百。

光線の衝撃で安定しない足場の中、響が気分をやわらげる目的で、

「クリスちゃん！もうすぐ誕生日！この戦いが終わったら……」

「そう言うのフラグはお前ひとり建てろってんだよ……！」

「まだデスか?!まだデスか?!」

「このままだと、拘束が……！」

あと五秒。光線の雨が激しく降り注ぐ。

(焦るな……焦らせるな……)

あと一秒。ついにクリスが足場の揺れも全て計算に入れたうえで棺をロックオンする。

「今だあッ！」

「」「」「G3FAッ！へピタリボルバァッ！」「」「」

ギアが変換された七色のエネルギーが装者たちから放たれ、収束し、棺の胸部にある破損箇所を直撃する。放たれたエネルギーは衝撃を逃がせない棺を貫通し、爆散した。空を覆う曇り空を爆発の衝撃でかき消した。

〇〇〇

装者たちの任務は完了した。

棺は大破し、今は国連主導の調査を行っている。

雷はメデイカルルームから異常なしと、疑問が残るものの解放され、響達と共に調査の様子を見守っていた。すると、棺が白い蒸気を吐きながらその扉を開帳する。

「あれがカストディアン……。神と呼ばれた、アヌンナキの遺体……」

「つまりは聖骸……という訳ですね……」

棺の中には、真新しい金の腕輪を付けた、干からびたミイラが安置されていた。

何時もならここで未知なる発見に大はしやぎしている雷だったが、今はどこか上の空だ。雷は今、全く別の事を考えていた。

## かの日の歌

南極でのミッションを終了し、日本に帰国した時の事。

「ちよつと雷！なによこれ！」

「あ、受け取ってくれたんだ」

「受け取ってくれたんだ……じゃないわよ！」

雷と響、未来が共同で暮らす寮室の前に、大小様々な大きさの段ボールが山のように積まれていた。未来が玄関の前でエプロンを巻き、お玉を片手にカンカンに怒っている。

雷はそんな彼女を気にしない気にしないと宥めながら、一番玄関から遠い段ボールをもって未来の脇を通って様々な蔵書が積まれた自室へと運び込んだ。響は頼まれていないにもかかわらず、なんとなくで運ぶのを手伝っている。

運び込んではまだ外に出て、を繰り返す二人に、未来は遂に地震が発生したのではないかと勘繰るほどの大声で叫んだ。

「今度は何を買ったの?!ただでさえ雷の部屋は本で溢れかえってるのに!響も!何となしで手伝わないで!」

「ごめん未来。でも、数が多いしき。雷だけにやらせるのは忍びなくて……」

「雷が勝手に買ってきた物でしょ!」

「それを言われちゃうと……」

「で、何を買ったの?!」

未来が雷に向きなおる。

未来は如何やら相談もなしに散財しているのが気に食わないようであった。恐らくは相談の一つでもあれば態度は全く違ったであろう。

雷は玄関先にあった段ボールをすべて運び終えた後、

「今から教えるよ」

と言つて中くらいの段ボールを開ける。その中には、木目の美しいギターが一本、入っていた。雷はそれを取り出し、じゃーんと未来と響に見せつける。



「こんなの買いました」

「ギター？」

「もしかしてほかの段ボールの中身って……」

未来の鋭い眼光が雷に突き刺さる。だが雷はほんのりと笑って、言った。

「そ、全部いろんな楽器が入ってる」

「わ！ホントだ！こっちにはドラムが入ってる！」

「……」

響が一番大きな段ボール箱を開けて驚いていた。未来は雷が自分で稼いできたお金とは言え、いきなりこんな散財をしている事に耐えられなくなり、目を手のひらで覆った。とは言え買ってしまった物は仕方がないと何とか自分を言い聞かせ、すでにギターのチューニングを行ってている雷に聞いた。

「何でこんなに買っちゃったの……？」

雷がチューニングの手を止めて真正面から、真剣な表情で未来を見つめ返した。

「私、歌を作ろうと思うんだ」

「歌？」

響が首を傾げた。

「うん。お父さんやお母さんが私にこれを託してくれたみたいに、私も何か託せるものが作りたいなあって」

胸元のペンダント、ケラウノスを見せる。両親と同じように、自分も何かを後世に残したいということだ。

「南極で珍しく興奮してないなって思ったら、そんなこと考えてたんだ……」

「そ。あのミイラ見て、そう思った」

響が合点がいったとポンと手を叩いた。

未来は半分納得した。故に納得していないもう半分を聞く。

「買った目的は分かった。私は雷が夢を持てたことはいれしいし、心の底から応援する。でも、これだけ楽器を買う必要はないんじゃないの？パソコンだけでいいんじゃない？」

「私知識としては知ってるけど、楽器はあんまりひかないから。もつと理解した方がいいかなって思ってる」

未来はしっかりと目的をもって雷が買い物をしていた事を理解した。だが、無断で散財したという事実は変わらない。

「でも、私に内緒で散財したことは事実なので、今後通帳は私が預かります」

「あ……」

「そう言えば言われてたね……」

それはそれ、これはこれだ。

雷は次、散財すれば、未来に貯金通帳を渡すことを約束していた。すっかり忘れていたことを思い出し、肩をがっくりと落とした。

○○○

雷が歌を作ることを夢にしたというのは、装者たちの間に瞬く間に広まった。

世界的な歌手であるマリアに、日本を代表する歌女の翼、音楽家を両親に持つクリス。それに加えてただ姉に会いに来た調と切歌とが、一斉に雷の部屋に集まっている。

ただでさえ本の山で狭い部屋が楽器で圧迫され、そこに装者たちと未来が集合しているわけだからすし詰め状態だ。だが、彼女達はそんな状況を楽しんでいる。

何せ、少し前まで死ぬことを生きる価値としていた少女が、自分の生み出したものを残したいとまでになったのだ。マリアにいたっては感極まって涙を流している。

クリスが雷の弾くヴァイオリンに耳を傾ける。

「へえ、結構様になってるな。どういう弾き方をすればどんな音が出るのかを理解してる感じだ」

「クリスにそう言ってもらえると嬉しくなるよ。本物を聞いたことがある人に言ってもらえると、自分でもどれくらいかがわかるから」

そう言っただけで雷はヴァイオリンをケースの中にしまい、今度はエレキギターを取り出した。

何度か弾いてはチューニングを繰り返しながら、

「……早くしないと……。時間がないから……」

いつになく真剣に雷がつぶやいた。

それを聞いた調と切歌が首をかしげる。

「時間がない?」

「何かあるんデスか?」

チューニングに集中している雷の代わりに、涙を漸く拭き終えたマリアが答えた。

「ああ、大手レコード会社の作詞作曲した曲の募集締め切りが一月後なの。雷はそれを目安にしてるんだと思うわ」

「……うん、そのつもり」

集中していたのか少し遅れて雷が返事した。

その返答を聞いて翼が腕を組み、

「そんなことをしなくとも、いい歌だと判断すれば、私かマリアが歌つてやるのに」

「雷の歌なら喜んで歌ってあげるわよ?」

「いや、身内のコネはちよつとね。自分の力で残したいからさ」

「そうか」

翼が短く納得した。

「なら、歌を良く知るものとして、先輩がレクチャーしてやろうではないか」

だからせめてと手伝うことにした。今後歌をつくることで飯を食っていくつもりなら、自分専属の作詞作曲家になってもらおうという少し買いかぶり気味の考えもあるが、音楽方面の先達として後発を育てたいという思いがほとんどだ。

「そうね。それがいいと思うわ」

「おお! 二大スターの指導を受けれるなんて、レアだよレア!」

響が一番大興奮している。

雷は真剣な眼差しで、静かに二人を見つめた。二人はその意気や良しと頷き、

「まずはどういったコンセプトなのかだな」

「雷の実体験をもとに、どういうふうな曲にしたいのかのイメージと

かあるかしら？」

雷は顎に手を当てて俯き、一瞬だけ思案した後、パツと顔を上げて答えた。

「イグナイトを克服して、みんなのところに帰ってこれたとき……かな」

「なるほど……。なかなかいいと思う。なら、二番に私達サイドの、轟が返って来てくれてよかった。という意図を込めることが出来れば完璧だ」

「でも、そこはあくまで出来ればだから、まずは雷の言った方で進めましょう」

二大スターによる指導は、日が暮れるまで続き、彼女達はお礼代わりにと雷の手料理をそろって食べることにした。

その心、ここにあらざ

クリスは自宅にある、両親の仏壇の前に立ち、手を合わせていた。この仏壇を買った時はまだS・O・N・G・ではなく、特異災害対策機動部二課だった時であり、その時の初任給で買ったものだ。

近づくものに噛みつく様な狂犬じみていた昔とは異なり、彼女の表情は年頃の少女と何ら変わらない。

手を合わせ終えたクリスは優しいまなざしを両親の遺影に向け、「それじゃ、ガッコに行つてきます」と、告げて玄関に歩き出した。

仏壇のそばには、少し前にあった自身の誕生日会の時に撮った集合写真が飾られている。最初はぶつかり合った響と雷。初めてできた友達として支えてくれた未来。面倒の見がいのある後輩と尊敬する先輩。そして、その真ん中で赤くなる、仲間を知った自分。

その写真はクリスにとって、かけがえのない宝物だ。

「えつくしぶー！」

クリスは通学路を歩きながら、かわいらしいクシヤミをした。冬の制服に学校指定のコート、赤い手袋に同色のマフラーと完全装備だが、それでも寒いらしい。

かじかむ指先を口元に当て、呼気で温める。

「この寒さはプチ氷河期どころじゃないぞお……」

「クーリスちゃんー！」

「おはよう」

「寒そうだねえ」

クリスの背後から、響、未来、雷が顔を出した。三人ともイメージにぴったりと合う色のマフラーを巻いている。

めんどくさいやつが来た……。と、言いたげなクリスのそばに、ニヨニヨと頬の緩み切った笑顔を浮かべた響が近づいた。

「寒いよねえ、でも温かいよねえ。お似合いの手袋ー！」

「ッー！」

「おっと、昨日も見た光景」

昨日と寸分狂わず同じことをしている響。とくれば返ってくるレスポンスも昨日と同じだ。

クリスがバッグで響の頭を思いつき叩く。

「毎朝毎朝押しつけがましいんだよ馬鹿アツ！」

「調子に乗りすぎ、はしやぎすぎ」

「だってさ、一緒に選んだあの手袋、クリスちゃんに喜んでもらってるみたいだから！」

「はう?!」

未来にたしなめられても響の嬉しさは留まるところを知らない。その嬉しさから放たれる感情の右ストレートが、クリスに鋭く突き刺さった。

凶星をつかれて顔を赤くしたクリスがそっぽを向く。

「手袋して休まず登校してくれるし！」

「言われて見れば、推薦で進学も決まってるのにね」

「おやおやあ、その顔の赤さは寒さのせいではありませんなあ」

雷が押揃う。

クリスが反論しようと勢い良く振り向いた。

「う、うるさいなあ！アタシは！みんなより学校に行ってないから、その分をだなあ……」

勢いづいて反論していたクリスだったが、一瞬で真剣な表情に切り替わる。

「だけど、そろそろ暢気に学校に通っているわけには、行かないのかもしれないな……」

○○○

海沿いのアリーナで今度行われるライブの練習を行っている翼だったが、引つ掛かるところがあるのか、あまり調子が良くない。今だって、現場監督からの評価がよくなり、首を横に振らせてしまっている。

そんな彼女を、マネージャーである眼鏡をかけた緒川と、なぜかスーツを着てサングラスを掛けたマリアが見下ろしていた。

「何かに、心を奪われているのですね……」

「ん?!そ、そうね。任務の合間に陣中見舞いしてみればこの体たらく……。凱旋ライブの本番は三日後だというのに」

如何やら翼だけではないようだ。

マリアは慌ててサングラスの位置を調整し、自分の事は棚に上げて翼に厳しく当たる。緒川はそれが優しさからくるものだということを知っているため何も言わない。ただ、「マリアさんも同じように何かに心を奪われているのに、素直じゃない」と、苦笑いを浮かべた。こつこつと、近づいてくる足音が聞こえてきた。翼だ。

緒川がねぎらいの声をかける。

「お疲れさまでした」

「世界に再び脅威が迫る中、気持ちは分かるけどね?でも、ステージの上だってあなたの戦う場所でしょ」

マリアがサングラスに隠れて見えないが、真剣な眼差しを翼に向ける。

翼もそのことは分かっていた。だが、それでも、思わず目をそらしてしまう。

「それはそうだが、南極からの帰還途中で、あんなことが起きたのに、果たしてここは、私の立つところなのだろうか……」

南極からの帰還途中、洋上で起きたことが記憶の中から蘇る。

アラートが艦内に鳴り響く中、翼、マリア、クリス、響、そして雷がブリッジに駆け込んだ。

リーダーである翼が、

「状況は?!」

「洋上にアルカ・ノイズの反応を検知ッ!」

「米国空母、トーマス・ホイットモアが襲撃を受けています!」

「ボスの狙いなら部下も狙うよね」

「回収された遺骸を狙って?!」

「こつちの申し出を無下にしやがるから……!」

クリスがパンツと手のひらをに拳を打ち付けた。

「警戒待機していた調と切歌は?」

「先行しています」

マリアは一番の年長らしく、冷静に情報を聞き出す。彼女たちは他にもに認める最も爆発力のあるコンビだ。キャロルやアダムといった規格外でなければ大抵の相手と渡り合えるだろう。

そんな二人が、ロケットに乗り込んで炎上する空母に飛翔した。

ロケットの外装が割れ、中から調と切歌が現れた。高高度から空母に向かって落下する。

調が切歌に向けて、リンカーを二本あるうちの一本、突き出した。

「リンカーを忘れるなんて！」

「よく気が付いたデス！早速このポカを返上するデスよ！」

二人は空中で引き寄せ合い、抱き合って調が切歌、歌が調とお互いの首筋にリンカーが充填された注射器を押し当てる。

そして二人は抱き合ったまま、シンフォギアを起動した。

「Zeios Igalima Raizen Tron」

緑の鎌のシンフォギア、イガリマを起動した切歌は降下しながら鎌を振り回し、引つ掛けるようにして刃で斬り裂く。そしてそのまま着地した彼女は大きく振りかぶり、ブーメランのように三枚に増えた刃のうちに二枚を投擲する。

『切・呪りeツTお』

高速回転する二枚の刃はノイズの群れを一気に刈り取っていき、リーチの長い得物でありながらそれを器用に振り回し、攻撃を避けながら鎌を突き立てる。

同じくギアを纏った調はシウルシャガナの無限軌道で縦横無尽に甲板を滑り、バインダーが変形したアームに備わった鋸を、脚部鋸の回転を生かした連続ターンで振り回す。そして敵陣深くに切り込んでいき、ファイギュアスケートの要領でスピンを決め、スカート鋸のようにして一気に切り裂いた。

『△式・艶殺アクセル』

切歌が甲板で暴れまわり、縦回転で迫ってくるアルカ・ノイズを空に打ち上げ、そこを跳躍していた調が横回転で空中からの落下速度も併せて切断した。息の合った、見事なコンビネーションだ。

「アルカ・ノイズが相手であれば、調さんと切歌さんの敵ではありません



ん」

「ああ。だとすれば……」

近くにアルカ・ノイズを召喚した錬金術師がいるということだ。

「調の射出した小型鋸はアルカ・ノイズを的確にとらえ、応戦していた米兵に掠ることなく命中させる。切歌も刃と石突を利用して倒すと、海中から巨大なアルカ・ノイズが出現した。」

超大型アルカ・ノイズは腕を振り、艦橋を破壊する。その崩落に切歌が巻き込まれたが、鎌を振り回してコマのように回転して空中へ脱出。超大型の腕から放たれる光線を肩のブースターで避け、二発目を鎌に乗ってサーフィンするように乗り切り、腕を切りつつジャンプ。刃を足に装着してエネルギーを纏わせ、ブースターを点火して急降下した。

『断突・怒Rあ苦ゆラ』

超大型のどてつばらに大穴を開けて貫いた。

背中に爆発の熱を感じ、着地した切歌だったが、横合いから何かの直撃を喰らった。不意打ちであったため、踏ん張ることもできずに容易に吹き飛ばされる。

「切ちゃん?!」

二人は攻撃が来た方に視線を向けると、どことなく狼を彷彿とさせる容姿をした少女がいた。切歌に攻撃を加えたアームのようなものが、彼女の持つトランクに消えていくのが確認できた。

「あれが……アルカ・ノイズを召喚した……」

「」「錬金術士ッ!」「」

「やはり出てきましたね……」

「ああ、この一連を裏回しする、パヴァリア光明結社の残党だ!」

ヨーロッパを中心に、世界中に根を張る秘密結社、パヴァリア光明結社。その根は、想像以上に深く、広く、強い。

## 遺骸をめぐって

桃色の髪をした、どこことなく狼を彷彿とさせる中くらいのスーツケースを持った少女は、見た目のワイルドさとは異なる丁寧な言葉使いで調と切歌に宣戦布告した。

「わたくしめが相手であります」

そう言っただけで彼女は、切歌に奇襲を仕掛けたようにスーツケースから何かを取り出すようなそぶりすら見せず、背後にあった、爆発によって発生した亀裂の中に飛び込んでいった。

「やらいでかー……デースー！」

「切ちゃん！もつと常識人らしくツッ！」

一度奇襲を喰らっているからか、挑発されたにも拘らず向かってこないからか、切歌は少女の後を追って亀裂の中に飛び込み、艦内に逃げた少女を追いかける。

切歌を単独行動にさせるわけにはいかないと、調も後を追って飛び込んだ。

調が少し遅れてしまったため、通路によって迷路のようになっていく艦内で分断されてしまう。これにより、二人の真骨頂であるユニゾンの爆発力と連携が断たれてしまった。相手の実力が分からない今、切り札を切ることが出来ないのはかなりの痛手だ。

調が頭を振って周囲を索敵していると、背後から何者かの走る足音が聞こえてきた。咄嗟に振り返ると、少なくとも切歌ではない人影が目の前を横切る。

「鬼ごっこなら、シウルシャガナで！」

確認した人影を追うと、やはり錬金術師の少女だった。

調は少女と相対する。すると、背後からのアルカ・ノイズの足音が聞こえてきた。慌てて振り向くがアルカ・ノイズの攻撃のほうが多く、先に倒すことも防御姿勢も取ることもできず、攻撃をまともに喰らってしまった。シンフォギアも強化されているが、不意打ちをまともに喰らってしまえばギアはともかく装者である調へのダメージは大きい。

調は悲鳴を上げて吹き飛ばされた。

それを想定していた少女が叫ぶ。

「アタッチメントツ！ネイルツ！ぶち抜くでありますッ！」

音声認識なのか少女の声にスーツケースが反応し、口を開けると、そこからロープのようなものが伸びて少女の尾てい骨にあたる部分とつながった。するとケースの中から鋭利な爪を持つ手が現れ、まるで尻尾のように自在に操って調にその爪を突き立てた。

「かはっ?!」

調の体が床にめり込む。

その威力は大きな音となり、遠くにいた切歌の耳にも届いた。

「調ー……ッ?!」

音のする方に向かおうとするが、横合いから壁を突き破つてのアルカ・ノイズの群れがなだれ込んできた。

すぐにでも調の元に向かいたい切歌が鎌を振りかぶる。

「今更ノイズが何体来たところであ……わあ？デエースッ！」

鎌の刃が天井を通るパイプに引っかかった。

狭い艦内で長大な鎌を振り回せば必ず何かに引っかかる。少女はこれを狙って艦内に飛び込んだのだ。アルカ・ノイズが切歌の方に向かう。

「デエース?!」

切歌の情けない声がこだました。

少女が床に埋まる調を見下ろす。

「他愛無いであります。完全なる命を砕いたシンフォギアが、この程度なんて」

少女は慢心していた。

そんな彼女の足元に、調のアームドギアであるヨーヨーがカラコロと虚しく転がってくる。勝ちを確信した少女だったが、突如ヨーヨーが鋸となって高速回転し、一瞬にして二体のアルカ・ノイズを切り裂いた。赤いプリマ・マテリアが煙のように視界を覆った。

「まさかッ?!」

「私を変えてくれた人がいる……。私を強くしてくれた人がいる……

！」  
バインダーから伸びる大型鋸を盾にして自身を押しさえつける手を弾き飛ばした。

「簡単には負けられないッ！」

そしてバインダーを伸ばしたまま、小型鋸を全力投射した。

狭い場所に誘い込んだのは長物を振り回す切歌の戦闘力を奪ったが、面攻撃な可能な調の戦闘力を引き上げてしまった。

通路全面を小型の鋸が埋め尽くす。回避は出来ないため、少女は尻尾を引き戻し、堅牢な爪を使って何とか防ぎ切る。

が、足は止められ、視界は奪われてしまった。調は脚部の鋸を高速回転させ、自分の放った鋸の間を縫うような三次元機動で少女の背後を一瞬にして取った。空中で反転し、バインダーの大型鋸を発射する。

少女は機敏に反応し、尻尾の手を使って柱を掴んで回避した後、即座に肉薄。そのまま尻尾を操って拳を調にぶつけるが、彼女はバインダーを盾代わりにして攻撃を防ぐ。

ターンが変わる。

調がヨーヨーを投擲、少女はまるで獣のようなすさまじい反射神経で狭い空間を立体的に動き回るヨーヨーを回避していく。更に調はもう片方も投げ、体を回転させて足に伸びる光の糸を巻き取った。すると二つのヨーヨーは不規則に跳ね、駆け回り、避ける隙間も潰していく。

### 『β式・獄糸乱舞』

一方、長物故に最初は苦戦していた切歌だったが、鎌を小型化して二刀流にすることで手数を増やし、最後のアルカ・ノイズを切り捌いた。

手こずってしまった分、大急ぎで調の元に向かう。

「ダウンサイズしてしまえば、狭くたって問題はないのデスッ！」

そしてついに調と合流した。調の攻撃を避けるためにバックステップで交代する少女を挟撃する形だ。

「調！」

その声に呼応して二つのヨーヨーを連結して一つにし、綺麗なサイドスローで勢いよく投げ放った。

「そんな大雑把な攻撃が、当たるわけが……!」  
投げる動きが分かる分、同避ければいいのかもわかる。少女は容易くそれを避けるが、本命はこれを直撃させることではない。

背後で待ち構えていた切歌が鎌を大きくバットでボールを打つように振り、鎌の刃で巨大なヨーヨーを引っかけた。

「嘘でありますッ?!」

少女は振り返って切歌の妨害を図るが、調がそうはさせじと即座に攻撃を加えていく。

そうしているうちに鎌と鋸が凶悪な形へと変形し、射出された。そしてこれは元は二つのヨーヨー。糸を伝って調の意のままに操作される。

二つのヨーヨーは遂に少女を捉え、大爆発でを引き起こした。その爆発が空母の装甲に大穴を開ける。

「やったね!切ちゃん!」

「今夜はハンバーグなのデース!」

防衛に成功したことに二人は嬉しそうに笑い合う。切歌が鎌を大きくスイングした。

が、瓦礫の山が触つてもいないのに浮遊し始め、その中からさつきまで戦っていた少女の他にもう一人、ヘッドホンを付けた、金髪の眠そうな目をした少女が現れた。

もう一人の少女は振り返り、

「0483221、443222? (エルザ、無事?)」

「数字?」

と、言語ではなく数字の羅列を口にした。

当然ながら調と切歌にはただの数字にしか聞こえなかったが、さつきまで戦っていた少女は意味が理解できるようだ。

エルザは立ち上がる。

「大丈夫であります、フランカ。わたくしめは問題無いであります」  
戦闘を続行しようとするエルザだったが、その肩を眠たげな少女、

フランカに止められた。

「22310241993433503334650202。048  
32211112223331311381024181、313  
11191410255031116122。11048503

(死体なんてどうでもいい。エルザが傷つくぐらいなら、戦わない方がまし。帰ろう)」

「ッ?!が、ガンス。帰投であります」

優しくされなれていないのか、フランカの要望にエルザが答えた。

彼女はレポートジェムを割り、姿を消した。そしてフランカもかけていたヘッドホンを首に下ろし、

「020203313310031。91312242651599  
3351211243444 (いい歌だった。私にも今度聞かせてね)」

と、笑ってジェムを割らずに姿を消した。

いきなり現れ、しかも数字の羅列を喋り、いきなり消えフランカに呆気にとられながらも、撃退に成功したことで調と切歌は武器を下した。

「何とか……勝てた?」

「少なくとも、あの気味悪いミイラは守れたのデス」

急襲をしのいだS・O・N・G。司令官、弦十郎が指示を出す。

「直ちに救護班を向かわせろ!」

「世界に敵対する、新たな脅威……」

翼がつぶやいた。

「我々S・O・N・G。も、極冠にて回収した遺骸の警護に当たるべきではないでしょうか」

「気持ちには分かるわ。でも、遺骸の調査、扱いは、米国主導で行うと、各国機関の取り決めだから仕方ないじゃない」

翼の言っていることはベストだが、マリアの意見は現実的だ。

「日本政府やS・O・N・G。に、これ以上聖遺物と関わらせたくない国も少くないですからね」

聖遺物は古代のオーバーテクノロジー。ノイズに対する対抗手段

である以前に、使いようによっては強大な兵器へとなりうる。要は米  
国やほかの国々はその力を喉から手が出るほどに欲しているのだ。

それでも翼は申し出る。

「せめて、私達が警護に当たれば、被害を抑えられ……あいたっ?!」  
突然マリアのデコピンを額に喰らってしまった。

「今やることとやれることに集中するの」

結構痛むのか、翼は額を抑えている。

「ステージに立つのは、貴女の大切な役目のはずでしょ?」

「不承不承ながら、了承しよう……。だが、それには一つ、条件がある」  
翼のステージのはずなのだが、なぜか一つ条件が追加されてしまっ  
た。

そう言つて翼は、マリアのかけていたサングラスを手を取った。

「は?」

マリアには理解できない。

翼が不敵に、そして楽し気に笑みを浮かべた。

## 手折られる刃

鎌倉からS・O・N・G・に通信が届く。如何やらアヌンナキの遺骸が日本ではなく、米国の手中にあることに訃堂は怒り心頭のものであった。

彼は、世界が怖じるほどの力を見せつけたディバインウエポン、その力の根源である神の力の源が自国にないというのが気に食わないのだ。

訃堂が弦十郎に怒鳴る。

『報告書には目を通した、政治介入があったとはいえ、先史文明期の貴重なサンプルの調査権を米国にかすめ取られてしまうとは、何たる無様ッ!』

「反応兵器の使用をはじめ、今日までの騒乱に様々な横槍を入れてきた米国に対し、一層の注意を払うべきでした……!」

『さらには、パヴァリア光明結社の残党をのさばらせおってッ!』

アダム亡き後のパヴァリアの残党の拿捕を主導していたS・O・N・G・の痛いところをつかれてしまった。結構な期間がありながら、まだ残党が残っており、しかもそれがシンフォギアに対抗しうる存在だったともなると、返す言葉もない。

「それについても対応中であり……!」

『お前にも流れる防人の血を辱めるなッ!』

弦十郎の言い分を聞こうともせず、一方的に訃堂が通信を切った。言い訳など聞きとうない。結果で示せ。ということなのだろう。

弦十郎は通信が切れた後、椅子に深く腰掛けて息を吐いた。流れるようにネクタイを緩める。

そのタイミングを見計らって、友里がカップに注がれた湯気立つ暖かいコーヒーを差し入れた。

「指令。温かいもの、どうぞ」

「ああ。温かいものどうも。すまないな」

弦十郎はカップを受け取り、友里に礼を言う。

「鎌倉からのお叱り。今まではほとんどなかったのに、ずいぶん頻



度が増えましたね……」

「うむ……。そうだな……」

藤堯の言葉に同意を示し、弦十郎は静かにカップを傾けた。

○○○

夕暮れに染まる街の道路はおびただしい数の車に埋め尽くされていた。

それもそのはず、今日は翼のライブの日。アリーナへと向かう車で長蛇の列が出来ているのだ。この調子なら、いつそのこと歩いて行つたほうが速いだろう。しかし悲しいかな。歩いて行けば確実に間に合わず、ライブを「観る」という観点からすれば、車内で生中継を見る方が得策なのだ。

そんな状況であるため、大の翼ファンである響が嘆く。

「久々のライブだよ?!翼さんの凱旋公演だよ?!だけどこんなんじや間に合わないよう!」

「だからVIPチケット貰おうって言ったのに……」

「どうしようもないだろ!道路が混雑してんだから!」

クリスと調、切歌の乗った車が響と雷、未来の乗った車と横並びになる。

響の言った通り翼の久々のライブ。確実に混雑するのは目に見えていたため、雷は翼にVIPチケットをもらおうとしたのだが、響が一ファンの意地として断っていたのだ。今更になって、響は何故断つてしまったのかと、過去の自分が恨めしくなっていた。

響の嘆きをよそに、調が切歌と顔を合わせる。

「マリアも急に来られなくなるなんて……」

「ツイてないときは何処までもダメダメなのデス……」

「いや、そうでもないかもよ」

ここに居ないマリアを憐れむ二人だったが、窓と道路越しに雷が話しかけてきた。調と切歌はクリスに場所を変わってもらい、窓から顔を出す。

「どういう事?」

「いや、ここにマリアが居ないのなら、居るところは一つだけですよ」

「??」

二人してかわいらしく首を傾げた。如何やらわからないようだ。そんな彼女達を、雷は窓枠に腕を、その上に顎を寄せ、微笑ましく眺めていた。

○○○

響達の想いをよそに、翼のライブは予定通りに進行する。

席は当然満席であり、観客の歓声のアリーナいっぱい広がる。そしてその大きさは、次の瞬間もう一段跳ねあがることとなった。

何故なら、翼のライブに、スペシャルゲストとしてマリアが参戦したからだ。

「そんなこと無理よ！出来ないわ！」

「いつか、私と歌い明かしたいといったな？」

「でも、私には……」

マリアが翼の練習を見に来たあの日、「マリアも一緒に歌う」という翼の突飛な提案を彼女は受けていた。

マリアは自分にはそんな資格がないとそっぽを向く。

「私は歌が好きだ。マリアはどうだ？」

マリアも歌が好きだ。だから、翼の提案を承諾した。

少ない練習時間でありながらも、マリアは翼に追いつき、元々一人で行うはずだった演出を二人の物に昇華させた。

歌声と完全に調和した近未来的な光の演出が、翼とマリアの魅力を数倍にも引き上げる。

マリアのサプライズ出演に加え、翼とマリアの歌う完璧な一曲目に観客のボルテージは上がりっぱなしだ。

マリアは観客に手を振りながら、この何度感じても飽きない感情を思う。

(アーティストとオーディエンスが一つにつながる、溶け合ったような感覚……！まるであの日に、故郷の歌が起こした奇跡のような……)

アリーナが歓声に包まれる。だがそれは、後に絶望の悲鳴へと変わった。

歌と光に包まれた楽園が、悲鳴と血で染まる地獄と化す。空一面に、アルカ・ノイズを召喚する召喚陣が展開された。

観客たちはまだ気づいていないが、装者である翼とマリアが真っ先に気づいた。

「これは……?!」

翼の中に、奏を失ったあの日のライブが思い出される。そしてついに、アルカ・ノイズが姿を現し、大型が客席に小型のアルカ・ノイズを産み落とした。

「やめろおッ！」

翼の叫ぶ。が、それを踏みにじるようにアルカ・ノイズは観客に攻撃を開始し、次々と分解していく。赤いプリマ・マテリアが血のように宙を舞う。

アリーナが悲鳴に包まれる。その中を翼とマリアが駆けた。

「Imyuteus Amenohabakiri Tron」

天羽々斬とアガートラムを纏った彼女達は並走して正面のアルカ・ノイズを切り捌いた後、二手に分かれて行動を開始する。だが、それでも数が足らず、翼たちがアルカ・ノイズを倒すよりも早く、逃げまどう観客たちが分解されてしまう。

「皆さん落ち着いてください！こちらの指示に従って！」

緒川が女性を守りながら我先に逃げようとして逃げられなくなっている観客に声を張るが、その声が届くことはなく、まとめてアルカ・ノイズに分解された。

「パヴァリアの……残党……」

流星の緒川もアルカ・ノイズ相手では手も足も出ない。

アルカ・ノイズの出現は響達にも通達された。

「スタジアムにアルカ・ノイズって……、だつてそこは翼さんの?!」

『はい！ピックアップ用のヘリをそちらに向かつて飛ばしています！装者の皆さんは到着したヘリに搭乗後、直ちに現場に急行してくださいー！』

「エルフナイン！私は単独で先行する！」

『任せます！』

飛行能力を持ち、最も機動力に長けたケラウノスを持つ雷が響の耳元からタブレットを引き寄せ、一言告げてから車を飛び降りた。出来るだけ人目のつかないところに走りながら、

「ライブを襲撃するなんて、遺骸へ急襲といい、一体何が狙いだ?!」

次なる敵の目的を掴むべく、現状の証拠から思考を回し始めた。

翼は刃を振るうがそれでも一向にアルカ・ノイズの数が減らない。ついにアリーナのタワーが崩落し、そこから場違いな笑い声が聞こえてきた。

笑い声の主はライトに照らされ、コウモリの羽のようなもので空を飛ぶ、吸血鬼を思わせる少女だった。

「アハハハ！恐れよ！怖じよ！ウチが来たぜえ?!ここからが始まり、首尾よくやって見せるぜッ！」

地上から翼の蒼い斬撃が放たれるが、少女はこれを躲し、同じ地面に着地する。

「ウチの標的はお前だぜ?!風鳴翼ア！」

「パヴァリアの残党……！歌を血で……汚すなアッ！」

一直線に猛スピードで接近する。

少女は背中の羽根を腕に纏わせて剛腕に変え、振るわれた刃を受け止めた。

「大人しくにじらせてもらえると助かるぜ……！」

「戯れるなッ！」

少女の言葉を切って捨て、押し切る。少女は斬られる直前で後ろに後退した。

「翼！深く追いつぎないでッ！」

マリアが警告するが、過去のトラウマに蝕まれている翼の耳には届かない。

コウモリの羽で三次元攻撃を行う少女と翼の刃が火花を散らす。が、実力は翼の方が上のようだ。すれ違いざまの一瞬で斬撃を加え、少女は飛んでいた勢いそのままに瓦礫に激突する。

翼は追撃をかけ、とどめを刺すべく舞い上がった土煙の中を突っ切るが、目の前に現れた、逃げ遅れた少女を盾にされてしまった。切っ

先が寸前で止まる。

「何?!」

「やっってくれるぜ風鳴翼ア。弱く不完全なうちらではかなわないぜ」  
「弱い……?」

この場でもつとも弱きもを盾にしているものの言いぐさかと翼の目つきが鋭くなる。

「そう、弱い……。だからこんなことをしたって、恥ずかしくないんだぜエツ?!」

少女の振りかぶられた腕が金縛りのように止まる。少女はそれに抗おうとしているのか腕が震え、冷や汗が頬を伝った。

「やめるんだぜ……。こうでもしないと、ウチは家族を守れないんだぜ……!」

通常の腕では足りないと見たのか羽を巻き付けて剛腕にし、硬直を強引に振り切つて盾にしていた観客の少女を貫いた。

翼の目の前で、胴に大穴が空き、顔を血で濡らした少女が崩れ落ちた。彼女の体を中心に血の海が広がっていく。

翼は目の間で起きたことに耐えきれなくなった。

「う、うああああああッ!」

「刻印、侵略ッ!」

少女の瞳のステンドグラスが翼の目にも映る。

「貴様アアアッ!」

怒りのままに吠え、刀を振るうが精細さを欠いたその刃が少女に当たるとはなかった。

「総毛立つ!流石にここまでだぜ!」

「そのその不埒ッ!搔つ捌かずにはいられようかアッ!」

「落ち着きなさいッ!……ここにはまだ、逃げ遅れた者がいるのよッ?!」

闇雲に刃を振るい、周りが見えなくなつた翼をマリアが抑える。

宙に舞つた少女はアルカ・ノイズに背を向け、

「そろそろしまいにしようぜエ?」

指パツチンを合図に背後のアルカ・ノイズがロケットのように地面に向かって加速、落下した。いくつかは空を飛んで現着した雷によつ

て撃墜されたが、それでも数の方が多い。

アリーナが、崩壊した。

「錬金術士の追跡……不能……」

「十万人を収容した会場が……崩壊……。生命反応は……」

言葉が、続かない。

弦十郎は何も言わず、机に拳を振り下ろした。

ようやく、響達を乗せたヘリが到着した。だが、もう遅い。

（守れなかった……。大切なモノばかり……。この手からすり抜けていく……）

防人が、刀を地面に落とした。剣が、手折られる。

## 裏側に潜むもの

翼のライブの出来事は新聞の一面を飾り、報道番組でもメインに組み込まれるなどですと報道され続けている。ただ、流石にアルカ・ノイズの事を言うわけにはいかないため、報道管制によってこの事件は「ステージに仕掛けられた爆発物」によるものだとされた。

被害者は七万人越えと、サンジェルマンが長きにわたって集めた命を一夜にして超えてしまっている。

未来は何度も見た映像に見る気無くし、テレビの電源を切った。

「……」

未来は左右に目をやる。

左側では、ソファアに寝転がり、腕を枕にして、これほどの大事件を起こした理由を今までに起きた少ない事例をもとに、ぎっくりとだが敵の目的を推察する雷が。右を向けば響がタブレットに耳を当て、「うん、そうだよ」

「あ……」

「私は全然！平気へっちゃら！ホントだってば！……また今度アパートにも顔出すから、心配しないで」

彼女の父、冼と電話をしていた。

彼も父親としての矜持を取り戻したようで、まだ親同士の関係修復とまで入っていないものの、娘である響との関係は良好だった。

響が通話を切ると同時に、未来が声をかけた。

「おじさんとおばさんたち、結局、まだ一緒に暮らしてないの？」

「時々一緒、大体別々って感じかな」

響が振り向いて言った。

「何年もほったらかしにしてきた蟠りは簡単にはなくならないし、お互い、上手く伝えられない思いもあるみたいだし……」

「うん、あるかもね……。上手く伝えられない思いつて……。誰にでも……」

「まあ、子は鎺っていうし、響がいるなら時間の問題だと思うよ？」

少し空気が沈む中、雷がゆっくりと起き上がった。

二人の間に亀裂があっても、何かのきっかけで何とかなる。彼女はそう言っているのだ。その言葉にはかつて離れ離れになり、敵対していたF・I・S・との関係から強い説得力があった。

「そう……だといいな……」

「上手くいくよ。きつと……」

雷は片膝を立て、それを腕で抱えるようにして顔を傾けた。未来と響は、彼女に触れると消えてしまいそうな、儂い雰囲気を纏っているように感じられた。

少したつてから、雷と響は本部メデイカルルームに足を運んでいた。雷の小脇にはバインダーが抱えられており、その中には雷と響が神の力に取り込まれていた間の通信記録が収められている。当然、その内容も記録されていた。

オートでスライドドアが開き、足を運び入れると、装者たちが全員集合しており、マリアも点滴を打ってはいるが座れるほどに回復している。

「マリア！」

「もういんですか?!」

「私はピンシャン！」大丈夫だと言うようにウインクをした。しかしすぐに表情を暗くし、「それよりも……」向かい側にまだ眠ったままの翼に目をやった。

「翼さん……」

翼はあれからずっと眠ったままだった。

この状態は雷がかつて鎮静剤を打った時の逆で、起きるのを拒んでいる。そういう状態だった。

あの惨劇の中で当然のように無傷な緒川が容態を説明する。

「脳波に乱れがあるものの、身体機能に異常は見られません……。です……」

「悪夢を超える現実には、まるで意識が目覚めることを拒んでるみたいだ……」

「無理もないデス……。だって、あんな……」

この場にいた全員の脳裏にミラアルクの凶行が蘇った。目の前で



罪のない少女の命を、しかも背中から胸を貫くといった凄惨性の高く、シヨツクの大きい方法で奪ったのだ。否が応でも記憶に刻み込まれるだろう。

それを間近で見ていたマリアは、点滴をぶら下げている支えを強く握った。

調が敵の状態と事件の規模から疑問を口にする。

「解体された結社残党の仕業というには、規模も被害も大きすぎないかな……？」

「何者かの手引き……。例えば強力な支援組織の可能性も……あるいは……」

「姉さんは何かわかった？」

さつきからバインダーをぱらぱらとめくり続けている雷に、調が聞いた。何時ものように相手が何者なのか、いるとすればその背後にいるのは何なのかを、既に彼女は気づいているのではないかと期待を込めていた。

雷が開いていたバインダーをパタンと閉じて顔を上げる。そして首を、横に振った。

「まだ……分からないかな」

「まだ。というと、ある程度推察はついているのですか？」

緒川がくいついたが、雷は頭に手を当ててはにかむ。そして一瞬だけ、誰にも気づかれないうように翼の方に目をやった。

「情報が少なすぎてまだ何とも。ある程度はつかんできますけど、それ以上となると相手が尻尾を出していないので難しいです。まだ待たないといけないとしか……」

「そう、ですか……」

○○○

とある場所。遺骸を強奪すべく襲撃し、ライブの惨劇を生み出したパヴァリア残党、ノーブルレッドのアジト。そこでは金髪の少女フランクが、ライブを血の海に変えたミラアルクに怒りと悲しみの混じった形相で詰め寄っていた。

彼女は目に涙をため、痛ましいほどに叫ぶ。

「335032234019941153522319933423  
11?! (どうしてあんなことしたんですか?!)」

「ああしないとみんなを守れないからだぜ……」

ミラアルクは真つ直ぐにフランカを見つめる。だが、フランカはそんな彼女が気に食わなかった。

あの時、ミラアルクの体が一瞬硬直した原因はフランカにあった。彼女は元々人が傷つくことを嫌う優しい少女だ。

ただでさえアルカ・ノイズによって引き起こされた惨劇で身を引き裂かれるような思いをしていたというのに、家族が血に手を染めることに耐えきれなかった彼女は、サイコキネシスで強引に動きを止めさせたのだ。しかし、ミラアルクのパワーで突破されてしまい、結局彼女は手を血で汚すことになってしまった。

フランカの超能力は脳に埋め込まれた装置『ブレインズ・ジョウント』によって行使されるのだが、人を傷つけることが大嫌いな彼女が対人で存分に使いこなせるわけもなく、ミラアルクを止めることが出来なかったことを悔いているのだ。

「33465…… (でも……)」

「フランカちゃんも大人になればわかるわ」

「00310440021…… (ヴァネッサ……)」

ヴァネッサと呼ばれたリーダー格の女性がうつらうつらとし始めたフランカを抱きとめる。耳ではヘッドホンから大音量の音楽が流れているものの、まったく眠気が阻害できていない。そしてそのまま目を閉じ、彼女の体から力が抜ける。ヴァネッサはだらんと脱力したフランカを支えた。

ヴァネッサは悲しい目でフランカを見つめ、エルザとミラアルクに指示を出した。

「そろそろ時間ね……。お願いしてもいいかしら」

「ガンス……!」

「分かったぜ」

指示、というよりもお願いを受けた二人は、目的の場所である港に向かつて行った。

そして到着した二人は、すでにそこにいた黒服の男たちからトランクケースを受け取る。

エルザが中身を確認し、ミラアルクに確かに目的の物だと合図した。

ミラアルクはピースサインををして手の甲を相手に向け、指で自分の顎を挟む独特のポーズを取った。

「アザマース！」

「確かに受け取ったであります。受領のサインは必要でありますか？」

取引ということなので誠意をもって応答しているエルザとミラアルクだったが、男たちは如何やら化け物然とした二人を気味悪がっているようだ。

「いや、上からの指示はここまでだ……。俺たちもすぐに戻らなければ……！」

「別に生まれた時から怪物ってわけじゃないんだぜエ？取って食ったりなんてするもんか」

「こんな体でもわたくしめらは人間……。過度に怯える必要は……ツ?!ガルルル……！」

突然、隠していたエルザの狼のような耳がツンと立ち、威嚇の唸り声を上げた。彼女のテリトリーに部外者が入り込んでいた。

見られた以上は生かして返すわけにはいかないとすぐさま二人は部外者の走り屋を追跡する。完全に始末すべく、アルカ・ノイズを召喚した。

本部では、アルカ・ノイズ出現の反応を検知していた。

指令室に切歌と調、マリアが駆け込んできた。

「状況はどうなっているデスか?!」

「湾岸埠頭付近に、アルカ・ノイズの反応を検知！」

「防犯カメラからの映像に、パヴァリア光明結社からの残党も確認しています」

セグウェイに乗ったアルカ・ノイズに、走り屋の二人が分解された。「人的被害、なおも拡大中！」

「急がないと！」

「すでに現場には、響君とクリス君を向かわせている！」

「二人とも、頼んだわよ！」

装者三人を乗せたヘリが現場に急行していた。

何とか逃げていた走り屋だったが、命のかかっていることに対する緊張と恐怖からハンドル操作を誤ってしまい、勢いよく転倒してしまった。

エルザとミラアルクが走り屋の前に立つ。

「お前らが仲間を……！」

「気合の入った運転技術でありました」

「だけど、赤旗振らせてもらうぜエ？」

「いやだあ！神様あ！天使様あ！」

万事休すかに思われたその時、上空から歌が聞こえてきた。

「Killter Ichaiival Tron」

イチイバルを纏ったクリスが降下しながら二丁のマグナムを発射し、的確にアルカ・ノイズを撃ち抜いていく。

弦十郎から借りた映画の影響で拳銃を使つての近接戦闘はお茶の子さいさいだ。幾何学的に配置されたアルカ・ノイズに対して一撃で、的確なタイミングで弾丸を撃つ。

弾切れを起こしても素早くリロードし、弾幕が途切れることはない。リロードタイムに放たれたエルザのしっぽを使った噛みつき攻撃を難なくバックジャンプで回避する。着地先にいたアルカ・ノイズを撃破し、エルザの方へ視線を向けたが、死角から航空型アルカ・ノイズが強襲してきた。

しかし、クリスは避けるそぶりすら見せない。

何故なら彼女には信頼できる仲間がいるからだ。響が真下からアルカ・ノイズを蹴り上げ、撃破する。そして二人は言葉を交わすことなく頷き合い、お互いが倒すべき相手へと向かって行った。

## 血を求めめる者たち

九死に一生を得た走り屋は胡坐をかき、思わず手を合わせた。

「天使だ……ここは地獄で極楽だあ！」

しかし喜ぶのもつかの間、背後にセグウェイに乗ったようなアルカ・ノイズが迫ってきている。あともう少してノイズの解剖器官が走り屋に触れる寸前で響の正拳が突き刺さり、アルカ・ノイズを赤いプリマ・マテリアへと帰した。

「そう言うのいいから！はやく逃げて！」

響に逃げろと言われてからも、走り屋の男は手を合わせている。が、最後まで様子見終えたようだ。満足げに立ち上がり、そそくさとその場から走り去って控えていたエージェントに保護された。

空を飛んでいたミラアルクが響をターゲットに定め、急降下でドロップキックを繰り出した。改造によって取り付けられたバイオブーステッドユニット『カイロプテラ』を両足に纏わせ、剛脚化することで破壊力を高める。

「邪魔はさせないぜエ！」

急降下によって高い威力を持ったミラアルクのドロップキックを響がクロスガードで受け止めた。受け止めた衝撃が走り、響の背後のアスファルトがひび割れが入る。

「イチイバルとガングニール、一名の救助に成功！」

「付近住民の避難を急ぎます！」

何とか一名を助け出すことが出来た。

つまり三人のうちの二人を助け出すことが出来なかったということだが、それでもゼロ人よりははるかにましだ。それに加えて生存者がいるということは、何故、彼らが敵対組織に追われているのかを知ることが出来るということだ。確定をすることは出来ないが、ある程度の推察をすることは出来る。

ミラアルクがカイロプテラを腕に纏わせた。全力ではないとはいえ、フランカのサイコキネシスを振り切るほどの力で同じくパワー自慢の響と取っ組み合いを繰り広げる。

響の心中にないものねだりが募る。

(正面切つての力比べ……こんな時ッ……!)

「分かるぜエ?今イグナイトモジュールがあればって考えてるんだろ  
う?」

「なッ?!」

心に思っていたことを覗かれ、不意を突かれたことで一瞬だけ力が  
抜ける。ミラアルクはその隙について力を強め、抑え込み始めた。

「決戦機能を失って、戦力ダウンしたって調べはついてるんだぜエ?」  
「くうッ!だからって負けるわけにはッ……!」

ミラアルクの煽りに対して響は力み、力づくで押し返す。響の心理  
がミラアルクの手中に乗った。

吸血鬼の魅了の目を模した不浄なる視線『ステインドグラス』の  
怪しい輝きが響の瞳に入り込む。だが響には効果が薄いのか、彼女は  
かぶりを振ってそれを振り払い、さらに力を込めた。

そして一瞬だけ抜くことでミラアルクを前のめりにさせて彼女の  
腕を振り払い、回し蹴りを繰り出した。しかしミラアルクは腕を払わ  
れた瞬間に跳躍し、カイロプテラを翼に戻して空中に離脱した。

響が瞬きを繰り返し、違和感を再度認識する。

「な、なに?!いまのは?!」

「流石に虚を突かないと、目くらまし程度か!……エルザ!ヴァネッ  
サが戻るまでは無茶は禁物!フランカが動けない以上即座のテレ  
ポートは出来ない!アジトで落ち合うぜ!」

「ガンスッ……!ここは一つ、撤退でありますッ!」

撤退するべくエルザは懐からテレポートジェムを取り出したが、こ  
こで仕留めるつもりのカリスの放った矢が彼女の手からジェムを叩  
き落とした。

「ッ?!」

「エルザッ!」

ミラアルクが片方のカイロプテラを腕に纏わせ、カリスの真上に  
あつた柱を殴り砕き、彼女に瓦礫を降り注がせた。

なんとか直撃は避けたものの、巨大な瓦礫によって射線を断たれて

しまった。遠距離攻撃を持たない響では逃走する二人を追撃できないためクリスがやらなければならない。

そこで響が機転を利かせ、バレーのレシーブのような体勢をとった。

「クリスちゃん！」

クリスは直ぐにその意図を汲み、響に向かって駆け出した後彼女の両腕に足を掛けた。すると響が勢いよく腕を振り上げ、その勢いを利用してクリスが跳躍する。二丁のボウガンを連結してロングライフルにし、ヘッドギアをスコープに変形させて空中で構えた。

クリスの瞳が道路を疾走するエルザを捉える。

『RED HOT BLAZE』

赤い高エネルギーを内包した弾丸がエルザに放たれた。

弾丸は着弾した瞬間に大爆発を引き起こす。煙が晴れた後、クレターに残っていたのは何かが入ったアタッシュケースだけだった。クリス達は、敵対組織を取り逃がしてしまったようだ。

アタッシュケースは本部に回収され、解析されている。

「回収したアタッシュケースの解析完了！」

「結果をモニターに回します」

モニターにはに映されたケースの中には、複数の保冷剤と四袋ほどの赤い液体が充填された袋が入っていた。

「まさかの……ケチャップ?！」

「この季節にバーベキューパーティーとは、敵もさるもの引っ掻くものデス！」

調と切歌が何やら素っ頓狂なことを言っているが、当然答えは違う。特に雷は、かつて病院通いだっただけで見慣れたものだ。成分輸血が主流になっている昨今だが、かつて手首を切って自殺しようとした際に成分輸血では全く足りないため使ったことがあるのだ。

「何言ってるの二人とも。あれは全血清剤だよ。最近では成分輸血が主流だからあまり見ないけど」

「それ以上に気になるのは、その種類です」

エルフナインが振り返った。

「Rhソイル式……。百四十万人に一人という、稀血の判明していません」

「まさか……輸血を必要としていると言っても言うの?」

雷が顎に手を当て、これまでの出来事と今現在起きたことを総括して推察を進める。

そうしていると、生存した走り屋から聞き取り調査を終えた緒川がブリッジにやって来た。

「被害者からの聞き取りが終わりました。埠頭にて、少女たちと黒づくめ男の二人組を目撃し、麻薬の取引現場だと思ったようです」

「つまり、パヴァリア光明結社の残党を、支援している者がいるということか」

「考えられるのは、これまで幾度となく干渉してきた米国政府……」

「それはない」

藤堯の意見を、雷が真っ先に斬って捨てた。彼的にはそれなりに考えて出した意見なのだが、それはすでに雷が通った道だ。

「その根拠は?」

「まず一に、残党が米国に雇われているなら、米国空母を襲撃する理由がない事。その二、基本的に海外から血液を輸入しない事。その三、米国は神を殺すために反応兵器を撃つたこと。……つまり、支援者は国内で。Rhソイル式という稀血を取引材料に出来るほどの量を持ち。神の力の威力を知り。そして神の力を研究、運用できる大組織に限られます」

「確かに……言われて見ればそうだ」

これが雷が現時点で導き出した答えだった。

そしてすぐに、米国が雇い主ではないことを証明する報告が本部に届く。

「米国、ロスアラモス研究所が、パヴァリア光明結社の残党と思わしき敵性体に襲撃されたとの知らせです!」

「これで、雷君の言う通り米国が支援者という線は消えたか……」

残された監視カメラに向かって、褐色肌の、ライダースーツを着た女性、ヴァネッサが怪しく微笑んでいた。



〇〇〇

ノーブルレッドのアジトでは、先の戦闘で負傷したエルザと、ソイル式血液の不足から意識を失ったフランカが横たわっていた。エルザの呼吸は荒く、逆にフランカの呼吸は最低限の回数にとどまっている。

フランカは改造部位が脳であるため、ソイル式血液でないと脳に酸素と栄養を送り込めず、不足すると自動的に意識を失うことで休眠するようになっていた。

ミラアルクが彼女らの隣に立つ。

「わたくしめの不始末であります……。あの時、死んでもケースを手放さなければ……」

エルザが隣のベッドで眠るフランカの方を向いた。

ミラアルクは少しフランカの方を向いた後、エルザの方を向く。

「何言ってるんだ、死んでら元も子もないんだぜ？」

「ですが、血液を必要としているのは、ミラアルクだって同じことです。それ以上に、これ以上血液が不足していると、フランカが本当に死んでしまうであります……」

「戦わなければ、しばらく力も持つはずだ。それにフランカも、後二、三日は持つってヴァネッサが言ってたろ？それまでには何とかしてみせるぜ」

安心させるためにミラアルクはエルザの頭を撫でてあげた。普段は最年少のフランカに姉ぶっているエルザだったが、今回ばかりは別だ。うれしそうに頬を綻ばせている。

その顔を見て、ミラアルクは固めていた決意をさらに強くする。

（ウチはどんな手を使ってでも、フランカとエルザ、ヴァネッサを……！）

〇〇〇

今だ療養中の翼を除いた装者たちは全員集合し、政治的な意見を聞くべく弦十郎の兄、八紘と通信を繋いでいた。

「昨日の入電から丸一日、目立った動きはなさそうだが兄貴はどう見てる？」

『ロスアラモス研究所は、米国の先端技術の発信地点。同時に異端技術の研究拠点でもある。米国を一連の事件の黒幕と想像するにはやはり無理がありそうだ』

「米国の異端技術って……」

調が反応した。米国の異端技術を研究しているといえば、あそこしかない。マリア、調、切歌。そして雷にかかわりの深い場所だ。

「ああ。断言はできないが、ロスアラモス研究所は、かつてF・I・S. が所在したと目されている場所だ」

『かつての新エネルギー、原子力の他エシユロンといった先端技術も、ロスアラモスでの研究で実現したと聞いている』

「そんな所を襲ったってことは、やはり何か大事なものを狙ってデスカ?!」

切歌の問いに八紘が電話越しに応える。

『伝えられてる情報ではさしたる力もないいくつかの聖遺物、そして……』

「これって……! やっぱそうくるのか!」

八紘のパソコンに映された画像が、リンクしていた本部のメインモニターにも映される。

モニターに映された画像には少し前の任務で米国に移送された、アヌナキのミイラが腕につけていた腕輪が機械に繋がれているものだった。

現時点で解明していることを八紘が伝える。

『極冠にて回収された先史文明期の遺産。腕輪に刻まれた紋様を、楔形文字に照らし合わせると『シエム・ハ』と解読できる箇所があるそうだ』

「シエム・ハ……。シエム・ハの腕輪……?」

「つて、もろ最重要アイテムじゃないですか?!」

しっかりと聞いていた雷だったが、最も重要な聖遺物が奪われていることに突っ込んでしまった。

そのことをしっかりと把握している八紘は「その通りだ」と短く返事し、当面の行動方針を伝える。

『君たちの任務は当面、腕輪の奪還と残党の拿捕になりそうだ。私は事件解決に向け、米国政府には引き続き協力を要請していく。これが私の戦いだ』

「恩に着る！八紘兄貴！」

八紘との通信が切れた直後、ドアが開き、奥から復調した翼が現れた。

## 卑しき赤と売国奴

日が傾き、空がオレンジ色になったころ。

切歌と調は家路につく前に寄り道して小さな公園でブランコを漕いでいた。しかし二人の表情は楽し気ではなく、すこぶる暗い。切歌の乗るブランコのチェーンが虚しくキイキイとこすれる音がした。

調が俯きがちに口を開く。

「翼さん……とつても大丈夫には見えなかつたね……」

「復活の直後に、あのどんでん返しは無いデスよ……」

あれは翼が指令室やって来た直後の事だった。

ようやくの目覚めにメンバーたちの間で安堵が広がる。翼も心機一転と何時もの凛々しい顔つきに戻っていた。

「心配をかけてすまない……。だが、もう大丈夫だ！」

翼がそう言い切った瞬間、指令室の電源が急に落ちる。モニターはついたままのため、電力が落ちたわけではないことは分かった。何か作為的なものを感じながら、この場にいる全員がモニターを見つめる。

すると突然、今までS・O・N・Gのエンブレムが写っていたメインモニターに、鎌倉の紋章が映し出された。

その瞬間、雷が眉を顰め、舌打ちを打つ。

『大丈夫とは、何を指しての言葉であるか？』

「ッ……！おじい様……」

鎌倉の紋章の前に革の椅子に座った訃堂が現れる。

彼と彼をトップとする組織、鎌倉は雷が最も危険視する組織であった。彼女の推察の全てに合致する組織がほかにない以上、警戒するのは当然だ。訃堂を値踏みするように睨みつける。

『夷狄による国土蹂躪を赦してしまった先の一件。忘れたとは言わせぬぞ翼！』

「無論忘れてはけません！あの惨劇は、忘れてはならぬ光景であり、私が背負うべき宿業そのもの！」

翼は前に出、忘れるわけにはいかないと胸の前で拳を握る。

『真の防人たり得ぬお前に、全ての命を守ることなど、夢のまた夢と覚えるがいい!』

「ツ?!……今の私では……守れない……?」

訃堂の言葉が翼に突き刺さった。

驚愕のあまり翼は顔を上げ、目を見開く。その頬を冷や汗が伝った。その一瞬、訃堂の表情が少しだけ満足げに変わったことを雷だけが見抜いていた。瞬きの間のほどの短い時間であったが、その一瞬だけ明らかに表情が違ったのだ。

その変化と今までの推察をすり合わせるため、わずかの間俯いた彼女に訃堂の目が向いた。その様子を見るに、どうやら訃堂は雷の癖を把握しているようだった。

訃堂は雷が再び顔を上げる前に翼に視線を戻す。

『歌で、世界は守れないということだ!』

「歌で……世界は……」

『お前にまだ、防人の血が流れていることを期待しておるぞ』

言うだけ言って訃堂は姿を消した。

散々な言われようだが装者、そしてS・O・N・G・メンバーは今までの実績から訃堂の言が偽りであることを知っている。しかし、翼はそうではないようだった。

ただでさえすり減っていた心に追撃を喰らってしまったのだ。最後の否定は心底響いただろう。

「翼さん……」

「案ずるな立花……。可愛げのない剣が……。簡単に折れたりするものか……」

それは、明らかな強がりだった。

いつも明るい響ですら、まともに声をかけることが出来なかった。ほとんど日は沈み、空はオレンジを通り越して紫色になっている。

「あーらよつとー……。暁選手!見事な着地で金メダルデス!」

切歌はブランコを勢い良く漕ぎ、その反動で大きくジャンプした。綺麗な着地を決めた切歌は振り返り、調の方を向く。彼女は笑ってみせるが、調の表情は暗いままだ。

「姉さんでも分からない、敵の正体……」

「ッ」

切歌としても、雷がいまだに敵情を把握できていないというのはなかなかキツイものがある。それでも、切歌は調を不安にさせないように明るく振舞ってみせる。

「それにしても、血を欲しがるとはなんて今度の相手は本当に吸血鬼みたいデス……って、およよー！」

「どうしたの切ちゃん?!」

いきなり変な声を上げた切歌に思わず調が顔を上げる。すると切歌がパタパタと駆け寄ってきて、ひざを折ってブランコに座ったままの調と顔の高さを合わせる。

「分かったデスよ！常識人的に考えて、次に狙われるのは血がいつばいあるところ！例えば！献血センターとか！」

そう言っただけで近くにある病院を指さす。かなり大きな病院であるため、ソイル式血液も少なからずあるだろう。

「ああいうおつきな病院に違いないデス！」

「そんな単純なものじゃあ……」

調が呆れつつも優しくそれはないと言おうとしたところ、病院のサーチライトに、コウモリの羽の生えた人型のシルエットが浮かび上がった。何というかあからさまである。

「ああー！」

二人は頬がくっつくほどに密着して驚きの声を上げた。

大慌てで捕獲するべく病院に駆け込む。それと同時に友里へ報告を入れた。看護師の引き留める声が聞こえたが、今はそれどころではないため無視を決める。

『こちらからでも確認できたわ。でも危険よ。雷ちゃんが今向かってるから二人とも先走らないで』

「姉ちゃんか?!でもそうも言っただけで状況なのデス！」

「到着するまで持ちこたえて見せます！現場に一番近い私達に任せてください！通信終わり！突撃開始！」

二人はリンカーの充填された注射器をポケットから取り出し、屋上

へ向かうためにエレベーターに飛び乗った。

屋上ではミラアルクが苦痛に耐えかねて口元を抑える。

(こっちもそろそろ限界かもだぜ……)

講堂に映ろうとした瞬間、エレベーターの到着を知らせるベルが鳴った。慌てて振り返ると、そこには切歌と調がいた。

「待つのデス！ことと次第によつては、荒事上等なあたし達ですが……」

「その前に、貴女の所属と目的を聞かせてください！」

「そんな悠長……コレっぽっちもないんだぜ！」

振り向きざまにミラアルクは手のひらいっぱいアルカ・ノイズ召喚ジェムをばら撒いた。ジェムは屋上の床にぶつかって割れ、召喚陣から大量のアルカ・ノイズが出現する。

調がペンダントを取り出し、シウルシャガナを起動させる。

「Various Shul Shagana Tron」

ギアを装着すると同時に脚部から鋸を展開し、踵落としの要領でノイズを真っ二つに斬り裂く。切歌はイガリマを纏うと肩のブースターを点火し、すれ違いざまに鎌に引つ掛けて斬り飛ばしていく。そこにケラウノスを纏った雷も到着した。

夜空から稲妻と共に降下してきた彼女は病院の精密機械にダメージを負わせないよう、足技を主体に巧みに相手取っていく。

「雷ちゃん現着！敵の狙いはやはり、Rhソイル式の全血清剤！」

「だとしたら好機。行動予測が立てやすい今、一気に切り崩せれば！」

切歌が鎌を水平に構え、前後反対に向けた方のブースターを点火し、その勢いを利用してコマのように回転しながら斬り刻む。

『災輪・TいN渦あBエル』

刃は多数のアルカ・ノイズを粉微塵にしたが、ミラアルクは跳躍し、後ろに大きく後退することで攻撃を免れる。そして入れ替わるようにバナナのようなアルカ・ノイズが二体現れた。

「切ちゃん！」

「姉ちゃん！」

同じく切歌とスイッチした雷によつて二体とも蹴り上げられた。

上空で彼女の召喚した稲妻に打たれ、焼却される。

「あなたの行動は、護国ナントカ法に抵触する違法行為デス！これ以上の抵抗はやめるのデス！」

「馴れない御託が耳に障るぜ！」

切歌が投降を勧告する。が、ミラアルクはそれを攻撃をもって反故にした。死角からの強襲であつたが、戦いなれている切歌は慌てることなく鎌を屋上に突き刺し、柄を支点にして大きく回転、ミラアルクの顎を蹴り飛ばした。

ミラアルクは羽根で体を覆つてボールのようになり、屋上の端まで転がつてそのまま空に飛びあがつた。

「調！ザババの刃を重ねるデス！姉ちゃんはアルカ・ノイズを任せるデス！」

「れでい！」  
「任せて」

雷がアルカ・ノイズを殲滅している間に切歌は鎌を二本に分離して地面に突き刺し、それを発射台にして調が鋸を飛行機のようにしたものを打ち出した。

はじき出された上にブースターで加速したソレはミラアルクを正面からとらえたが、彼女は上体を逸らせることで紙一重で回避する。回避したぞと笑うミラアルクであつたが、飛翔する鋸は空中を旋回して再び彼女を補足した。再度避けようとしたが、アルカ・ノイズとの戦闘の真つ最中でありながらノールックで放たれた雷の超電磁の鎖がその場から動くことを許さなかつた。

真正面から直撃を喰らつたミラアルクは撃墜され、屋上に叩きつけられた。

「やったの？」

「むしろ、やりすぎてしまったかもデス……」

「いや、流石に中途半端すぎてギリギリで逃げられた。まだ来るよ」

アルカ・ノイズを殲滅し終えた雷が調と切歌と共に並んだ。曰く、直撃こそしたが致命打にはならなかつたとのことだ。

その証拠に、土煙の中から負傷したミラアルクが現れる。



「負けないぜ……負けられないぜ！ウチは守る……三人を……家族をおおおッ！」

「家族……？」

「家族だなんて、ちよつとくすぐったいけれど、悪くはないわね。ありがと」

「ッ」

雷はティアラから展開されるレーダーで敵の増援を感知したが、一歩間に合わなかった。上空に打ち上げられた弾頭は閃光を迸らせ、周囲の電力を麻痺させる。

「EMP?!」

「照明が?!何も見えないデス！」

「切ちゃん！落ち着いて……」

不審な音が背後から聞こえてきた。思わず振り返るとロケットのように空を飛ぶ拳が迫って来ていたが、レーダーによって暗くても認識できる雷によって一発が払われ、もう一発が受け止められた。受け止めた腕を投げ捨て、指さして叫んだ。

「サイボーグ？お前は何者だッ！」

「付近一帯のシステムをダウンさせました。早くしないと、病院には命にかかわる人も少なくないでしょうね？」

いきなり不意打ちをかけてきた女性、ヴァネッサは射出した両腕を巻き戻し、問いに答えず髪をかき上げた。

「入院患者を人質に?!」

「アイツは……？」

「来てくれたのか！ヴァネッサ！」

ミラアルクは嬉しそうに彼女の名を呼んだ。そしてもう一人、増援がいる。レーダーには今まで映っていなかったことを鑑みると、座標を重ねることで誤認させたようだ。

「駆け付けたのは、ヴァネッサだけではありません……。それに、お目当ての物も、騒動の隙に獲得済みであります」

そう言っつてエルザは自身の座るスーツケースを踵で叩いた。

「うわあああッ！ヴァネッサ、エルザ！ダイダロスエンドだぜッ！」

三人そろつた今、最大出力で……あ……」

歡喜のあまり叫び、調達に向きなおるミラアルクだったが、突然の脱力感に膝を地面についた。悔し気に歯噛みする彼女の隣にヴァネッサが並んだ。

「それはまた次の機会に。消耗が激しいミラアルクちゃんとエルザちゃんに、無理はさせられません。フランカちゃんも危険な状況ですからね。ここは引きましよう？お姉ちゃん判断です」

「あなた達は……」

「ノーブルレッド。きつとまた、お目にかかりましよう？」

そう言つて彼女はテレポトジェムを地面に落とした。

「逃がすもんかデス！」

「駄目ッ！切ちゃん、今は患者さんたちを……！」

「私が持ちこたえさせるけど、長くは持たないよ……！」

逃がすわけにはいかないと切歌が追撃するが、調と雷によって止められる。

ケラウノスの電力を病院に遠隔接続してはいるものの、長くは持たないだろう。雷が倒れるよりも前に、命にかかわる患者を避難させなければならぬ。それと同時に病院の電力復旧も早急にしなければいけない。

「デエスッ……！」

弱者を人質に取り、姿を消したノーブルレッドへの怒りから、切歌は鎌を思いつきり振り下ろして突き立てた。

○○○

アジトに帰還したノーブルレッドは、真つ先にソイル式血液を命の危険が迫っているフランカに打ち、その後エルザとミラアルクも輸血して横たわった。

因みにフランカの『ブレインズ・ジョウント』はソイル式血液の消耗が激しく、他の二人の二倍以上使用する。

三人がベッドに横たわり、寝息を立て始めたころ。ヴァネッサはパソコンを立ち上げ、テレビ電話を開始した。

「御所望の物はこちらに……。シエム・ハの腕輪でございます」

彼女は会話の相手に見える様、カメラに映るように腕輪を持ち上げた。

『そうだ。七度生まれ変わろうとも神州・日本に報いるために必要な……神の力だ』

護国を行う者、風鳴訃堂。彼こそが夷狄を裏から操り、数万人の無辜の民を殺戮した外道。人ではなく、神の力に護国を売った売国奴である。

## 腕輪の起動

とある研究施設。同時に、ノーブルレッドのアジトとなっているこの場所で、やつとの思いで奪取したソイル式血液を使って彼女たちは各々回復していた。

調と切歌の二人のザババの刃に斬られた左腕を抑えるミラアルクがベッドに横たわったままのエルザを見つめる。

「力を使えば、血中のパナケイア流体が濁り淀む……。怪物と恐れられても、所詮はこの程度……。情けないぜ……」

眠るエルザの額に、濡れたタオルをフランカが載せた。直接回復に効果があるわけではないが、少しでも苦痛を緩和できればと思つての事だ。

外傷の無く、パナケイア流体の淀みから脳に取り付けられた『ブレインズ・ジョウント』へのエネルギー供給低下によって眠っていたフランカは目を覚ましていた。逆に外傷もひどく、流体も濁りに濁っているエルザの方が今は重症だ。

最も、フランカはパナケイア流体を消費する装置が脳にあるため、力を使わずとも淀んでいくという明らかな欠陥を抱えている。その為ソイル式血液が安定的に補充できない今、いつだれが倒れてもおかしくない綱渡りの状態なのだ。

自分に腹を立てているミラアルクの元に、ヴァネッサがやって来た。

「左腕の具合はどう？ミラアルクちゃん」

「ザババの刃……。物質的、靈的に作用するってのは本当らしい……。フランカに手伝ってもらっても治りが遅いからな……」

「そう……」

フランカは自分のパナケイア流体がよどむにも拘らず、ミラアルクの細胞の修復を超能力で補助していた。ヴァネッサやミラアルク本人にも止められたのだが、彼女はそれを押し切って治療している。フランカはエルザの濡れたタオルを取り換えながら、額から流れる汗をぬぐった。

ヴァネッサはそんな彼女を一瞥してからアタッシユケースの中にあるシエム・ハの腕輪を手を取った。金色に輝くそれを見下すように見つめる。

「利用する者される者。それを蜜月と呼ぶのなら、一体いつまで続けられるのかしら、ね……」

それは、どうしようもない現状を嘆いているようだった。

○○○

雷と響、未来は、食堂で昼食をとっていた。三人の前にはサンドウィッチがきれいに積まれ、響と未来のカップには紅茶が、雷にはコーヒーが注がれていた。

雷は響の隣で楽譜の前に、サンドウィッチを片手にうんうん唸っている。キャロルの計画を逆手に取り、アダムの宿願を粉碎した雷の頭脳をもってしても歌を作るとはそう上手くいかないものだ。締め切りまで半月を過ぎている。

紅茶の波紋を眺めている響に、未来が心配そうに声をかけた。

「放課後、また本部に行くの……？」

「うん……。困っている人たちがいるから……」

「響らしい。でもね……」

「でも！」

未来の言葉を響が遮った。結構な大声だったため、食堂に声が反響する。

「本音言うところ……と休みたい！遊びに行きたい！今日この頃お年頃！」

そう言っただけ目の前にはあるサンドウィッチをぺろりと平らげてもった。

すると、先ほどまで凄まじい集中力を見せていた雷がいきなりカップのコーヒーを一気に飲み、ダンとテーブルに叩き下ろした。そしてそのままふにやっと崩れ込む。崩れ込んだ先にあったサンドウィッチは響が間髪で取り上げている。

「だあめえだあああ……！」

「大丈夫……？」

崩れ込んだ雷を心配そうに未来が見つめる。彼女はテーブルに頭をこすりつけていた。

「もう何も思いつかないよお……!」

「……!じゃあさ!時間が取れたら気分転換に遊びに行かない?!カラオケとかさあ」

「……うん……そうする……」

「じゃあ、前見たく翼さんとか思い切って誘っちゃおつか!」

「そうだね!翼さんにも元気になってもらいたいもんね」

未来の提案に響が乗った。そろそろ昼からの授業だ。時間もないので、テーブルに顔を寄せ、食べさせろと催促している雷に響が食べさせている。

少女たちの、ほのぼのとした時間が流れていく。

○○○

夕方、S・O・N・Gの招集に応じて雷と響は本部にいた。

招集の内容は今後の相手への対応についてだ。

「新たな敵。パヴァリア光明結社の残党、ノーブルレッドか……。その狙いは一体……」

「一連の事件をきっかけに、Rhソイル式の全血清剤は一か所に集められて警護されることになったそうです」

「短期決戦を余儀なくしたか……」

ノーブルレッドがRhソイル式の全血清剤が無ければ活動できないと知った今、先の出来事で奪われた分以上の長期戦は不可能だ。一人につきどれだけの量を、どれだけのサイクルで消費するのが分からないのがネックだが、奪われた絶対数が少ない以上そう長くは持たないだろう。

クリスが手のひらに拳を打ち付ける。

「しかし、残党相手にこうも苦戦を強いられるとは、思ってもみなかったな……」

「確かに……。幹部級四人の方がずっと手強かった……。なのに何故……」

サンジェルマン、プレラーティ、カリオストロ、ヨハン。四人の強

さは装者がユニゾンしてようやく互角というほどの強さを持つていた。しかし、ノーブルレッドはそれほどの力を持ってない。どれほど過大評価しても幹部級一人と拮抗するかどうかというレベルだ。にもかかわらず、装者たちは苦戦を強いられていた。

「なりふり構わないやり方に惑わされただけデスとも！」

「だよね。サンジェルマンさん達の想いが宿ったこのギアで負けるなんて、ありえない」

「私達は……ね」

切歌の意見に響が同調したが、雷が真剣な表情でくぎを刺した。

視線が彼女の方に一斉に集まる。

「連中は弱い。だけど、だからこそ人質とかも平気でとる。なんだつてする。それだけは警戒しておかないと」

「そこだけは、気を付けないとね……」

あの惨状を間近で見っていたマリアにはその意味が痛いほど伝わった。響も少し油断していた気を引き締める。

雷が言い切る前に、翼が指令室から退室した。

マリアが声をかける。

「ちよつと翼……どこに行くの」

翼は足を止め、振り返った。

「鍛錬場だ。相手が手練手管を用いるのなら、それを突き崩すだけの技を磨けばいいだけの事」

そんな鞘のない刀のような、初めてあったころの翼に戻った彼女を響と雷が追いかける。

「翼さん！今度、時間が出来たらみんなでカラオケに行こうって……」

だから、翼さんも……」

「すまないが、他を当たってもらえないか」

「柔軟性のない剣は簡単に叩き折られるぞ？」

そう切って捨て、また鍛錬場に行こうとする翼の背中に向かって雷が忠告した。思う節があったのか翼はその場で立ち止まり、

「検討はしよう」

とだけ言って去っていった。

響は、自分以外を信じない、昔のようになってしまった翼の背中を悲し気に見つめた。一方雷は青い瞳を向け、厄介な息を吐いた。

○○○

ノーブルレッドにアジトに、彼女らの雇い主である風鳴訃堂が現れた。

すでにエルザも復調しており、メンバー全員が活動できる状態だ。ノーブルレッドのリーダー格であるヴァネッサが応接する。

「お早い到着。せっかちですね?」

「腕輪の起動、間もなくだな」

彼の目的はシエム・ハの腕輪。ノーブルレッドなどに興味はなかった。そんな訃堂をフランカが苛立たし気な目で見つめている。自分の手を汚さず、家族に人殺しをさせるような男に雇い主といえど幼い彼女が真顔でいられるわけがなかった。その苛立ちは、そんな奴の下につかないと満足に生きることができない自分たちにも向けられている。

ヴァネッサはそんなフランカを無言で咎め、腕輪を起動するに必要な装置を操作する。

「聖遺物の軌道手段は、フォニックゲインだけではありません。七つの音階に照応するのは七つの惑星、その瞬き」

装置の七つの球体が光り輝き、中央のひとときわ大きな球体にエネルギーを照射した。

「音楽と錬金術は成り立ちこそ違えど、共にハーモニクスの中に真理を見出す技術体系」

そのひとときわ大きな球体からケーブルにエネルギーが伝わり、ケーブルの先にあるシエム・ハの腕輪に流し込まれる。

「この日、この時の星図にて覚醒の鼓動はここにあり!」

すると腕輪が光を放ち、覆っていたカバーを破碎した。その後さらに輝きを強め、アジトいっぱい広がった後、かき消すように消えた。変化が見られないため、元パヴァリアの研究者であったヴァネッサも懐疑的だ。

「起動完了……なのよね?」



ミラアルクが確認のために前に進み出て腕輪に触れようとした瞬間、後ろから訃堂によつてその手を止められてしまった。

「ッ」

そしてそのまま腕を捻じりあげられてしまう。振り払おうとするがびくともしない。

(なんだ?!ジジイの力とは思えないぜ?!)

「お前の役目は他にある」

すると奥から背中に銃を突きつけられ、腕を頭の後ろに回した黒服が二人、現れた。

その二人に、エルザとミラアルクは見覚えがあった。

「あの時の人達で……ありますか……?」

「片づけよ。使いも果たせぬ木っ端だ!」

そう言つてミラアルクの手を離れた。

彼女は痛むのか少しだけ手首を撫で、殺意に満ちた目を黒服に向けた。

「許せとは、言わないぜ……」

「00?!(ッ?!)」

「やめるであります!」

「33165! (でも!)」

彼女は鋭い爪で黒服の一人の頸動脈を切断した。

フランカはサイコキネシスで止めようとしたが、エルザによつて遮られてしまう。カイロプテラを使つていないとはいえ、ミラアルクを抑え込むほど力を訃堂は持っている。もし、彼の機嫌を損ねるようなことがあればただでは済まない。と、エルザは理解していた。

喉から血を噴出しながら、黒服は倒れ、緑色の炎に焼却された。

もう一人の黒服が半狂乱に陥る。

「怪物共めえッ?!」

彼は走り出し、銃弾を何とか避けながら装置に取り付けられたままの腕輪を奪い取った。驚愕するノーブルレッドだったが、極近未来を予知することが出来るフランカの顔から一気に血の気が引いた。

腕輪を奪った黒服は立ち止まり、

「このまま殺されてなるものかッ！殺されるくらいならこいつでーッ！」

「3316440404000！（だめえええッ！）」

予知した未来があまりに衝撃的なものであったため、反応が追いつかず、フランカは出力調整をせずにサイコキネシスを放ってしまった。

彼女のサイコキネシスが黒服の肘関節部分を切断する。が、間に合わなかった。

「この音は?!」

腕輪は謎の音を発しながら、黒服の切り離された腕と体を内側から破裂させるように爆発させた。拒絶反応が起きたようだ。

爆発の規模はかなり大きく、アジト全体を火の海へと変えていく。起動は失敗とみていいだろう。だが、雇い主である訃堂は満足げだ。

「神の力、簡単には扱わせぬか。だが次の手は既に打っておる！」

助けられる可能性を握っておきながら、叶わなかったフランカは膝から崩れ落ちた。まあ、あそこで助けられたとしても殺されることに変わりはないのだが。それでも何とかしたかった彼女は、無念から土下座するように額を地面につけ、自分を抱くようにして震えている。

「1156499412102……1156499412102……」

（ごめんなさい……ごめんなさい……）

「ディー・シュピネの結界が?!」

震えるフランカをミラアルクがわきに抱える。

「連中が駆け付けてくるぜ?!」

「提案があります！」

エルザが、炎の中アルカ・ノイズ召喚ジエムを取り出した。

知っている不協和音

S. O. N. G. 本部の鍛錬場。座敷のような形をしたこの場所にて、袴にその身を包んだ翼は日本刀を脇に刺し、炎を灯した蠟燭を周囲に立てていた。蠟燭しか光源がない中、彼女はその中心で目を閉じ、正座で精神を集中させる。

そして一瞬の動作で抜刀し、炎を灯す糸の先端だけを一閃した。炎が消え、煙が揺蕩うが、捉えきれていなかったのか再び炎がともった。翼の瞳に揺れる蠟燭の炎が反射する。先ほどの祖父、訃堂の言が頭の中によみがえった。

「歌では何も……守れない……」

だがその心になだれ込んだ闇をアルカ・ノイズ出現を知らせるアラートが一時的にかき消した。翼は反射的に立ち上がる。

『アルカ・ノイズの反応を検知!』

指令室にエルフラインが駆け込んできた。つい先ほどまで雷とあるものを開発し、マリアにそれを手渡した後すぐに向かってきたのだ。友里が弦十郎に響とマリア、装者二名をすでに現場に向かわせていると報告する。

アルカ・ノイズの発生地点はとある研究施設。そこでノイズは研究所の外壁を執拗に攻撃している。

その破壊工作を、殿として残ったヴァネッサがため息をつきながら見届けている。上空から聞こえたヘリのローター音に気づき、呆れたように空を見上げた。

「こちらもお早い到着だこと……」

S. O. N. G. 保有のヘリから響とマリアが降下した。

マリアがアガートラムを起動させる。

「Seilien Coffin Airgetl—Lamh Tro  
n」

ギアを纏うと同時に左腕から逆手持ちに抜剣した短剣を着地すると同時に振るい、アルカ・ノイズを真っ二つに両断する。更に彼女は隙を作ることなく剣の舞と形容できる足運びと剣技で次々と斬り裂

いていく。

そして空中で反転し、アームドギアである左腕の先端部分に短剣を連結させ、変形させてキャノン砲を構築した。展開されたりフレクターにエネルギーを集約させる。

『HORIZON†CANNON』

大型アルカ・ノイズが発射を阻止しようと押しつぶしにかかるが、それよりも早く砲口から光線が放たれた。しかもただ直線的に打ち込むのではなく、上に振り上げることで確実に撃破する。

マリアがアルカ・ノイズを殲滅している一方、響はヴァネッサと交戦していた。

ヴァネッサの指先から放たれるマシンガンのような弾雨を響は高速で蛇行することで左右に散らし、射程範囲に入った瞬間一気に踏み込んだ。

「てやっー！」

まずは右足で腕を蹴り上げて発砲を防ぎ、左の蹴りで防御を崩してから再び左から回し蹴りを叩きこむ。的確に防御を崩してから放たれた蹴りは、ヴァネッサの体を大きく後退させる。

攻撃の手を止めさせることに成功した響は説得に当たる。

「……目的を、聞かせてくれませんか」

「……降参するわ」

少しの間の後、ヴァネッサはお手上げのジエスチャーをする。

「まともによっても勝てそうにないしね。わかりあいまししょう?」

「え?!そこまでわかりあうつもりは……」

煽情的なヴァネッサの動きに初心な響はあたふただ。常日頃同程度かそれ以上の物をナマで見ているはずなのだが、いきなり来られるとテンパってまともな思考が出来なくなってしまう。

彼女は豊満な胸を包んだライダースーツのファスナーを下ろす。響は自分の目を手で覆った。いや、隙間でちやつかりと見ようとしている。

「なんてね?」

ヴァネッサが不敵に笑った。

フアスナーが降りきると胸のカバーが開き、中から弾頭ミサイルが二本、響に向かつて飛翔した。やはり胸から出すものといえば古今東西ミサイルである。

「なッ?!」

不意打ちを響は喰らってしまいが、流石に通常兵器の域を出ていないのか大したダメージではなかった。拳を振って煙を吹き飛ばす。

ヴァネツサは不意打ちを売ったことに悪びれもせず、フアスナーを上げて今更ながら響の問いに答える。

「私達の目的は……そうね。普通の女の子に戻ってみんなと仲良くしたいじゃ……駄目かしら?」

そう言って手首を外し、関節部に仕込んだ発射口から小型の高威力ミサイルを発射した。響はクロスガードで防御姿勢を取るが、アルカ・ノイズを殲滅したマリアが射線に飛び込み、三本の短剣で三角形のバリアを展開する。

「あっちゃあ……」

煙が晴れ、完全に無傷であることを確認したヴァネツサがつぶやいた。

その隙についてマリアはアスファルトの地面を砕くほどの力で踏み込み、一気に距離を詰めた。彼女の攻撃をヴァネツサはのりりくらしとかわし、バク転で距離を取った。

「ヤバいかな?ヤバいかもね?」

事前に予定していた逃走経路に走りながら拳をロケットで飛ばす。マリアは短剣を蛇腹状に変化させて迎撃し、そのまま弾き飛ばしてバランスを崩した。更にそのまま蛇腹剣で十文字を切って左腕部アーマーを爪状に変形させる。そしてそれを突きだし、無数の十字がヴァネツサに逃げ出す隙間を与えずに襲い掛かった。

### 『DIVINE†CALLIBER』

爆炎の中、彼女は無傷であった。が、目立ったダメージを負ってないにもかかわらず、ヴァネツサの様子がおかしい。何やら焦っているようだ。

「フランカちゃん?!無暗に力を使ってはダメっていつも言ってるで

しよ?!」

「3 1 2 3 1 4 8 3 3 1 6 4 4 2 1 2 3 1。 3 3 1 1 1 8 1 6 3 7 1  
6 2 2 2 2 6 0 4 1 0 2 (助けるために来た。だから無暗じゃない)」  
「数字?」

マリアはいきなり現れたヘッドホンの少女、フランカの口にする数字の羅列に首を傾げた。外見上では今まで確認されたノーブルレツドのだれよりも人間に近い外見をしている。が、彼女の口にした言語が外見との乖離から異質さを際立たせていた。

ヴァネッサは頭を抱えて首を振る。

「お説教は後です……。フランカちゃんが出来たって事は、そういう事ね?」

「……」

フランカは何も言わずに頷いた。

すでに保護対象は戦域を離脱したということだ。最初はテレパシーだけの予定だったが、予想以上に押されてしまったため未来予知で危機を感じ取ったフランカがテレポートで飛んできたのだ。

ヴァネッサを信じてないわけではない。十三歳の幼い少女が目の前で自分の力が及ばず、命を助けられなかつたために今度こそはと躍起になっているのだ。ヴァネッサもそれを理解している。

手を繋いでテレポートしようとする二人に、響が叫んだ。

「待ってください! やっぱり話しても無駄ですか? わかりあえないんですか?!」

「わかりあえないわ。だって人は、異質な存在を拒み隔てるものどもの」

そう断言した後、目から閃光を放ち、かき消すように二人は姿を消した。テレポートで飛んだのだ。

「拒み……隔てる……」

ヴァネッサの言葉は深く響の心に突き刺さった。

○○○

闘争を成功させたヴァネッサたちは、廃棄所を次のアジトにしていた。アジトというよりは、次の場所が決まるまでのテント生活と言っ

た方が正確かもしれない。

その中の一番きれいな、全員が雑魚寝できるほどの大きさの車に四人が並んでいた。既に夜遅くであり、フランカは眠気に耐えきれずエルザに抱き着く形で眠っている。

「アジトを失うって、テレポートの帰還ポイントを失うだけでなく、雨風をしのぐ天井と壁を失うって事なのね……。お姉ちゃんまた一つ賢くなりました」

「おかげで次のねぐらが見繕われるまでまさかの車中泊。世間の風は、やっぱうちらに冷たいぜ」

エルザが気持ちよさそうに眠っているフランカの頭を撫でながら拗ねる。彼女はフランカを除けば一番の年下であるため、お姉さんぶっているのだ。

とは言え、フランカが眠った今、エルザが一番年下だ。

「あの時は仕方なかったであります。アルカ・ノイズの反応を追って、S・O・N・G. が急行してくるのは分かっていたであります。それでも、足がつく証拠や、起動実験の痕跡をそのまま残しておくわけには……ッ?!」

落ち込むエルザだったが、急にヴァネッサが抱きしめた。

「心配ナイナイ。何とかなるなる。だってエルザちゃん、しっかり者だもの……」

突然エルザの耳がピンと立った。抱いていたフランカから体を離し、ブランケットの中に潜り込む。

「ちよっ?!どうしたのったらどうしたの?!エルザちゃん?!」

ブランケットの中からエルザが何かをつまんで顔を出した。それは、発信機だった。

○○○

カプセルで療養していたヒビキが指令室にやって来たことでメンバーが全員揃った。

これより、ブリーフィングが開始される。

「これを見てください」

エルフナインがモニターに幾何学的な模様を映し出した。その模

様は装者には見慣れたものだ。

「これは……アウフヴァツヘン波形?!」

「それも、アタシ等とは別の……て、まさか!」

「ああ。奪われた腕輪が起動したとみて、間違いないだろう」

その一言で、雷の目が一層鋭くなった。モニターに映る波形をまるで射殺さんとするばかりだ。

「アルカ・ノイズの反応に紛れ、見落としかねないほどの微弱なパターンでしたが、かろうじて観測できました」

「恐らくは、強固な結界の向こうでの儀式だったはず……。例えば、バルベルデでのオペラハウスのような……」

「そして、観測されたのもう一つ!」

アウフヴァツヘン波形以外にも収穫があつたようだ。今度は音声データに近いものであるらしい。

耳を澄ませると、音として捉えるには連続性があり、曲として捉えるにはあまりにも不協和音なものだった。

「何……これ……音楽?」

「だとしたら、デタラメが過ぎるデス!」

(聞いたことのない音の羅列……だけど私はどこかで?)

(懐かしい曲だ……)

各々が耳を傾け、不快さを示し、考えを巡らせる中、雷が突然胸を抑え、うめき声を上げながら倒れ込んだ。突然の事に対応が遅れてしまう。が、真っ先に動いた弦十郎が体を丸める彼女を抱きかかえ、叫ぶ。

「メデイカルルームに連絡しろ!」

「はい!」

「僕が診ます!」

応急判断なら自分でもできるとエルフナインが再生を止めて駆け寄った。するとさっきまでの苦しみ用はどこへやら。けろつとした様子で雷が立ち上がった。

「お、おい!雷君?!」

「痛く……ない……?」



「……本当に何にもないんですか……？」

「何にも……全然……」

エルフナインが目を丸くする。しかし、油断は禁物だ。彼女は先に精密検査を受けさせてから地祇の作戦に当たらせるべきだと弦十郎は判断した。

エルフナインは席に戻り、咳ばらいを入れてから話を再会する。

「音楽の正体については、目下のところ調査中。ですが、これらの情報を総合的に判断して、ノーブルレッドに大きな動きがあったと予測します」

「やはり、こちらから打って出るべき頃合いだな……」

「でも、打って出るってどうやってですか……？」

「マリア君！」

モニターが地図を映した。赤い点が点滅している。マリアが前に進み出た。

「さっきの戦いで、発振器を取り付けさせてもらったのよ」

そうやって小さな発信機をつまんで見せた。エルフナインと雷が渡っていたのはこれだったのだ。

「ノーブルレッド……。弱い相手とは戦い慣れていないみたいね？」

次の作戦行動は、雷の精密検査の結果が出る一時間後に指定された。

## 明日に咲く黄金の華

一時間後きっかりに装者たちを乗せたS・O・N・Gのヘリは発信機が発する信号を追って四方を崖に囲まれたくぼ地へとやって来ていた。

問題の雷の精密検査であったが、まったく異常は見られなかった。しかし、何が原因で起きたかはわからないので、常に警戒しておくようにとのことだ。彼女自身はあれ以来何ともないので、逆に不思議に思っている。この作戦が終わり次第、原因を探るつもりでいるらしい。

ヘリのサーチライトが地面に立つノーブルレッドのメンバーを照らした。数字でしゃべる少女、フランカの姿は確認できない。

ヴァネツサたちからすれば強力な反面、ただ立っているだけでパナケイア流体が濁ってしまう彼女を戦線に立たせたくないのだ。眠っていたら脳内の『ブレインズ・ジウونت』は起動せず、まだ幼い彼女を内外問わず傷つけたくないという判断だ。直ぐに戻れるようにレポートの帰還ポイントは彼女のそばに指定している。

翼がヘリから身を乗り出す。

「迎え撃つとは殊勝な！」

「行きますッ！」

真っ先に響がヘリから飛び下りた。雷たちも彼女の後に続く。

「B a l w i s y a l l   N e s c e l l   G u n g n i r   T r o  
n」

響がガングニールを纏うと同様に全員が各々のギアを起動させ、着地しようとした瞬間、突如地面が大爆発した。地雷だ。一つでは装者にとって大したものではないが、流石に何十個も同時起爆されてしまえば怯み、歌も止まる。

「何だとお?！」

弦十郎にとっても読めない奇策だった。ノーブルレッドはすでに安全地帯であろう場所に避難していた。

「あえてこちらの姿を晒すことで降下地点を限定させるであります。

あととはそこを中心に、地雷原とするだけで……」

「他愛無いぜ」

これは発信機をしかけられ、逃げ出すアジトがない以上迎え撃つしかない彼女たちが打った策であった。更に控えている秘策に必要な最低人数と、その後に必要となる全血清剤がそろっているからこそ打てた乾坤一擲のものだ。

威力は大きいとはいえ通常兵器。ダメージは負ったもののそのままで酷いものではなかったため、装者たちは立ち上がる。

「あたり一面地雷原なら……!」

「姉ちゃんが誤作動させればいいだけデス……!」

「いや、無理だ」

雷が断言する。

ヘッドギアに搭載された管制システムであるティアアラで地雷原の配置と地雷の種類を把握したところ、電磁波では誤作動しない接触地雷であった。地雷の信管は確実性がウリである。まず誤作動しないだろう。

当然、ギアの情報を掴んでいるノーブルレッドがケラウノス対策で用意した地雷だ。

「でも、一度爆発した所に地雷は埋まってないのデス!」

一度爆発した着地点に雷たちが集結する。が、この時点でノーブルレッドの手の内に入っていた。

「それもまた予測の範疇であります!」

エルザたちは散開し、装者たちを三角形で囲うような位置に移動した。

「行くぜエッー!」

三人は装者たちに向かって手を掲げる。すると、中心に複数の立方体が出現し、地面に落下した。そしてその立方体は隙間を無めるように組みあがっていく。

「フォーメーションを崩させれば!」

雷が電磁操作を応用して飛翔し、脱出を試みるが頭上にいきなり立方体が出現し、その落下に合わせて地面に叩きつけられた。立方体

の出現からして、空から脱出することも不可能らしい。

「ぐツ?!」

「雷ッ?!」

「させるかよおッ!」

『MEGA DEATH PARTY』

クリスが腰部アーマーから小型ミサイルを一斉発射したが、この水色の立方体はかなり頑丈なのか傷一つついていない。

「馬鹿な?!雪音の火力で砕けぬとは!」

「そう、あれかし……」

落下の速度が速まり、あっという間に周囲を囲まれてしまった。更に響達の意識が遠くなる。

体感的にはアツというまだったが、装者たちはまるで迷路のようなところに閉じ込められていた。しかも一か所に集まっていたにもかかわらず、分断されてしまっている。

「レーダーも通信も効かない?!」

特殊な空間であるためか通信も繋がらず、レーダーによる探知も不可能となっていた。これでは雷の特性を利用した遠隔ユニゾンが使えない。

調が叫ぶ。

「切ちゃん!姉さん!みんな!どこにいるの?!」

声は壁に吸収されてしまっているようで、響いていないために他の場所に届くことはなかった。

切歌が鎌を隙間に向かって振り下ろすが、衝撃が刃に返ってくるだけではんの少しも通らない。

「刃が通らない…:簡単には抜け出せないということデスか!」

本部でもこの不可思議なものが解明できていないようだ。外側から見れば、巨大なピラミッドの中に響達は閉じ込められている。

雷たちは己の信ずるほうへと走り出したが、何処まで行っても壁、壁、壁。脱出口などそういった物が全く見当たらない。

「名称・ダイダロスの真髄をここに……。怪物が蠢くは迷宮……。神話や伝承、果ては数多の創作物による積層認識が、そうあれかしと引き

起こした事象の改変、哲学兵装」

「怪物と蔑まれた私めら三人が形成する、全長38万kmを超える哲学の迷宮は、捉えた獲物を逃がさないであります！」

「それだけじゃないんだぜエ?!」

ヴァネッサたちはさらに力を籠める。

すると装者たちの背後に光が満ち、まるで彼女たちを追い立てるように迫ってきた。その進行速度はかなり早く、速度を上げる。

「な、なにこれええッ?!」

「あ、あなた達?!」

すると複数の通路が集まった場所にたどり着いた。誰もがこれのほかのところに逃げられると思ったのもつかの間、それぞれの通路から光に追い立てられた他の装者たちが現れたのだ。

「来るぞ！ 衝撃はだッ！」

「私の周りにッ！」

逃げることは不可能なため、耐えきることに集中する。

雷が周囲に最大出力の斥力フィールドを展開し、彼女の周りに響達を防御姿勢で衝撃に備える。

「二「ダイダロス・エンドッ！」」

四方八方からのエネルギーが、一か所に集まり、高まった圧力がピラミッドの隙間から光を漏れ出させる。

発動したヴァネッサたちもかなり体力を使ったのか、肩で息をしている状態だ。

「行き場のない閉鎖空間にてエネルギーを圧縮、炸裂させれば……」

「私めらのような弱い力でも、相乗的に威力を高め、窮鼠だって猫を噛むであります！」

「だが……敵はさすがのシンフォギア。簡単にはいかないみたいだぜ！」

斥力フィールドによって何とか防ぎ切ることは出来たが、あまりの威力だったため全員が倒れ伏している。最大出力でコレなのだ。しかも、もうフィールドを展開することは出来ない。

「なら、もう一撃にて！」

ならばと追撃を仕掛ける。もう雷たちに防ぐ手立てはない。絶体絶命のピンチだ。

追い込まれた響の深層心理が弱音を吐く。

「勝てない……どうして……？サンジェルマンさん達の想いの籠ったこのギアで……」

「勝てない？ならば問おう。お前は何に負けたのだ？」

「サンジェルマンさん……！」

いきなり現れたサンジェルマンに驚き、その身を起こす。

「誰に負けた？立花響」

「そうだ……負けたのは自分自身に……勝てないと抗い続ける事を忘れた私にッ！」

「私が手を貸す。だから忘れるな立花響！想いを通すために握る拳をッ！」

自分が折れていなければ負けはないと、ようやく自分の強さに気が付いた響にサンジェルマンが手を伸ばす。

そして響は己を鼓舞し、立ち上がる。

「忘れない……すれ違った想いを繋ぐために拳を開くことを！そしてッ！信じた正義を握りしめることをッ！」

戦友となり、想いと願いを乗せたサンジェルマンの手を響はとる。

「ダイダロス・エンドッ！フルスロットル！であります！」

「今度は迷宮ごとぶっ飛ばすぜ！」

「この威力でなら……！」

内部に照射されたエネルギーの出力と圧力に迷宮が耐えきれず、爆散する。核爆弾の原理に近いそれは、とてつもない破壊力を生み出した。

煙が晴れ、そこには何も残っていない……はずだった。

朝日を背負い、金の粒子の中に響は立っていた。手の甲に黄金の華を刻んで。

「だとしてもおおおッ！」

彼女だけではない。雷たち全員が無事だ。

「黄金の……バリアフィールド……」

「これは……一体……？」

ギアが変化し、装甲が無くなってインナースーツだけとなった。  
た。

疑問を浮かべる翼に響が振り返る。

「サンジエルマンさんが手を繋いでくれました！」

「なに?!」

「力を貸してくれたんです！」

再びダイダロスの迷宮を展開しようとするノーブルレッドだったが、響は拳を手のひらに打ち付け、甲に描かれた花を展開する。そしてその花卉を殴り碎き、肩に巨大な剛腕として展開した。

迫りくる立方体を一撃で粉碎する。

エルフナインがこの力を解析する。

「賢者の石によってリビルドしたシンフォギアに秘められた力……ギアを構築するエネルギーを解き放ち、高密度のバリアを形成……」

もう同じ手は通用しないと悟ったミラアルクはカイロプテラをブーメランのように変化させ、大きく振りかぶって投擲した。

「ダイナミックッ！」

だが、響は黄金の拳で正面から受け流す。

エルザが『テール・アタッチメント』を装着し、響に殴りかかったが彼女はそれを正面から受け止めた。そしてもう片方の腕でアタッチメントを掴み、ロケットパンチのように発射する。

「不味いですー！」

動物的な勘で気付いたエルザは尻尾を切り離した。すると、しばらく拳は空を飛んだあと、空中で爆発した。

飛翔した拳は響の肩にあるアームに戻ってくる。

「さらにエネルギーの大半を攻撃へと転化することで可能とする不転機能！それは！シンフォギアとファウストローブの融合症例、アマルガム！」

エルザはスーツケースから新たなアタッチメントを接続し、半球のようなもので体を覆って高速回転しながら突撃する。

「こんな所で諦めるわけにはいきませんー！」

「その通り！・うちらはここで退くわけにはいかないんだぜ！」

ミラアルクはカイロプテラを右腕に纏わせた。

エルザの突撃はドリルのように拳を回転させた響にはじき返され、ミラアルクの拳は掴まれ、がら空きの腹部にボディーブローをもらってしまおう。

しかし彼女はその衝撃を利用して飛翔し、カイロプテラを両足に纏わせてドロップキックを繰り出すも迎撃され、殴り飛ばされてしまった。

「エルザちゃん?!ミラアルクちゃん?!」

ヴァネッサは歯噛みする。そして崖から飛び下り、響の前に立った。

「それでも私達は神の力を求め欲する！神の力でもう一度人の体と戻るためにツー！」

腕や足からミサイルポッドを展開し、一斉発射した。だが、響とサンジェルマンは止まらない。

「だとしてもツ！貫けええツ！」

爆炎を殴り抜いて突破し、ヴァネッサの顔面に拳を振るう。

ヴァネッサは反射的に目を瞑った。だが、響の拳はいつまでたっても来ることはなかった。

恐る恐る開けると、黄金の拳は当たる直前で止まっていた。

「どうして……」

「ほんとか嘘かはわかりません。だけどみんなと仲良くしたいと聞きました。だから……」

響は黄金の腕を下ろし、自分の手を差し出した。その時、突然アラートが鳴り響いた。

『現時刻を以て装者全員の作戦行動を中止とする。日本政府からの通達だ！』

「先手を打たれたツ……!」

雷が悔し気に歯を食いしばった。

クリスが不満をぶちまける。

『どうということだおっさん?!』



本部は銃を持った特殊部隊に占拠されてしまっていた。いくら弦一郎でも人質を取られては動けない。指示に従う他になかった。

## 狙いすました介入

ノーブルレッドとの全面衝突の末、日本政府の介入を受けたS・O・N・Gは彼女たちをあと一歩のところまで取り逃がしてしまう。手を取り合い、分かり合うことのできる可能性。彼女たちが贖罪し、人として罪を背負うことが出来る可能性。それらがすべてあと一歩のところまで摘み取られてしまった。

ヴァネッサが飛行能力を持たないエルザを小脇に抱え、足裏からのジェット噴射で空を飛び、ミラアルクがカイロプテラで羽ばたく。

「預けるであります。シンフォギア！」

「離脱するぜ、ヴァネッサ！」

ヴァネッサの目は、名残惜しそうな、そんな目をしていた。

○○○

ギアを解除した装者たちは、日本政府が介入したというブリッジにいた。そしてそこで、制圧されたことが張ったりではなく事実であったことを知る。

「まさか……本当に……」

「本部が制圧されるなんて……」

「制圧とは不躰な。言葉を知らぬのか？」

「銃を突き付けて制圧ではないと？」

髭の生えた、見るからに悪人面の査察官は雷の物言いをあえて無視した。

制圧されたS・O・N・Gの指令である弦十郎が彼らが何故国際機関であるここに介入できたのかを口にする。

「護国災害派遣法第六条。日本政府は、日本国内におけるあらゆる特異災害に対して優先的に介入することができる、だったな」

査察官は下卑た笑みを浮かべながら護国災害派遣法第六条に関する書類を取り出した。

これは風鳴訃堂の後押しによってつくられた法律である。被害と混乱を最小限にとどめるものであるとは言えかなり乱暴で、引き金となった聖遺物を国際間ではなく風鳴機関。即ち、風鳴訃堂個人が保有

することが出来るという物だ。

通称護災法と呼ばれるこの法律だが、訃堂自身が暴力的とも取れる権力を自由に振るえるようにあらかじめ拡大解釈の余地を大きく残している。

査察官、訃堂の尖兵が法を盾に要求する。

「そうだ。我々が日本政府の代表としてS・O・N・Gに査察を申し込んでいる。威力による制圧と同じに扱ってもらっては困る。世論がざわつとするとするから本当に困る！」

「どう見ても同じなだけど……」

「あの手合いを刺激しないの……！」

因みにこの法律が可決されてから野党の反対が大きくなっている。この国をどこぞやらに売ろうとするような動きが目立つ連中であるが、流石にこればかりはと国民からも反対の意見が出ている。最も、護国の鬼を自称する訃堂が決めた法律だ。否決されることはないだろう。

「国連直轄の特殊部隊が、野放図に威力行使できるのはあらかじめその詳細を開示し、日本政府に認可されている部分が大きい！違うかな？」

「やられたッ……！」

「まさか、アマルガムを?!」

雷が歯ぎしりする。その意味にエルフナインが気付いた。

アマルガムと名付けられた先の戦いで初めて発現した決戦機能。この機能は前回の報告の際には存在しておらず、開示されていない情報として扱われる。そこを付け込まれてしまったのだ。

査察官は気分がいいのか気持ちよさそうな顔をしている。

「ッ！」

「風鳴指令……。ここは政府からの要求を受け入れるべきかと」

「そうデスとも……って、え。えー?!」

「切ちゃん、今難しい話をしているから……」

調のさらつとした毒が切歌を襲う。

一方、それならば話は早いと錬金術師兼研究者であるエルフナイン

と、装者兼研究者の雷が無言でうなずき合い、二人してブリッジを飛び出して行った。

査察官はニヤニヤと笑いながら要求をのませようとする。

「後ろ暗さを抱えてなければ、素直に査察を受け入れてもらいましうか？」

「ぬう……。いいだろう……。だが条件がある。装者の自由と、ギアコンバータの携行許可。今は戦時故、不測の事態への備えくらいはさせてもらう！」

「折り合いの付け所か……。ただし！あの不明武装については、認可が下りるまで使用禁止とさせてもらおう！」

「ッ！勝手にしろッ！」

「では、勝手を開始する」

意外と交渉が通じるいあてではあつたが、それでもアマルガムが封じられてしまうのがかなり痛手だ。まあ、それを可能な限り軽減するために雷とエルフナインの二人は動いたのだが。

「あれは……。不明武装なんかじゃない……。！拳を開く勇氣なのに……！」

響にとつてはそうかもしれない。だが、繋ぐのも手であれば、敵を殺すのも手なのだ。対外的に見れば、あれは敵を撃滅する正体不明の兵器でしかなかった。

○○○

激闘を終え、新たなアジトをあてがわれたノーブルレッドだったが、その場所は意外なところだった。

「灯台下暗しなのであります……」

「まさかここをあてがわれるとは思ってもみなかったぜ……」

「01821113503（ありがとう）」

「あんなこと言われたら、ノーとは言えないじゃない」

車の中で眠っていたフランカも合流している。ヴァネッサは彼女をS・O・N・G・預けようとしたのだが、どうしてもと言って聞かなかったので仕方なくつれてきたのだ。

今まで誰も手にかけていないフランカには、これ以上血に濡れた自

分たちのそばにいてほしくなかった。しかし、いつかは人間に戻り、フランカの家族を探し出してみんな彼女の書いた音楽を聴く。この夢をかなえたいと真剣な目で言う彼女を無下には出来なかった。

「護災法の適用以来、国内における特異災害の後処理は全て儂の管理下にある。裏を返せば、ここは誰も簡単に手を出せぬ聖域に他ならぬ」

闇の中から黒服を連れて彼女たちの雇い主、訃堂が現れた。誰かを傷つけ、自分だけは生き残ろうとするどす黒い心を読んだフランカは彼の事が大嫌いだ。鋭い視線を向けるが、その視線をヴァネッサが遮った。

彼女は上っ面だけの笑顔を作る。

「つまり、アジトとするにはうってつけという訳ですわね？」

「計画の最終段階に着手してもらおう。神の力を、防人が振るう一振りに仕立て上げるのだ。ここには、その為の環境を整えてある」

黒服の一人がシエム・ハの腕輪がしまわれたアタツシユケースを差し出し、エルザがそれを受け取った。

「設備稼働に必要なエネルギーも事前に説明してある通り。手筈はすでに進めておる」

もう一人の黒服の持ったアタツシユケースの中には、大量の輸血パックが冷却用の氷と共に入っていた。何かを察したフランカが更に顔を顰める。

血液パックの中の一つを訃堂は取り出した。

「だが、儂きかな……」

手に取ったそれを地面に叩きつけて踏み潰した。辺り一面に血の水たまりが広がっていく。目の前で食料よりも必要優先度の高いR hソイル式の全血清剤をつぶされたヴァネッサたちは驚愕する。

「ろくに役目をこなせぬものがあると聞く。おかげで儂の周辺で狗が嗅ぎまわるようになっているとも」

「それは……いぐツ……」

『狗』と呼ばれたことで、ヴァネッサたちの中でパヴァリア光明結社で蔑まれていた時のことを思い出していた。

四人とも全員は普通の人間だったが、理不尽と不条理に飲み込まれ、人ならざるものとされてしまった者たちだ。いつ折れてもおかしくなかった。それでもヴァネッサが折れなかったのは、共に居るエルザとミラアルク。そして、怖くても、痛くても、それでも夢を諦めようとしないうフランカがいたからこそだった。

そしてアダムの死という地獄の終わりを知り、逃げ出した彼女達だったが、ソイル式の血液がなければ生きられない体となっていた。そこに現れたのが風鳴訃堂という男だった。

血液の提供とただの人間に戻るといふ願いの成就のために彼の計画への参加を受け入れたのだ。

その彼が厳命する。

「怪物ならば、怪物なりに務めを果たしてもらおうぞノーブルレッド！」  
ケースを持った黒服に顎で指示し、投げ渡させる。受け止めたミラアルクが舌打ちを打った。

「計画は走り出したのだ……。最早、何人たりとも止めさせぬ」

新たなアジトの場所は、チフォージュ・シャトー跡。かつて世界を解剖しようとした錬金術師、キャロルの居城であった。

## いえない言葉

風鳴翼の父、風鳴八紘の元に一本の電話が入る。

その電話は彼の部屋に備え付けられている固定電話からではなく、ポケットに入っている電話からだ。つまりこれは、公務的なものではなく私的なものであると分かる。

八紘は画面を一瞥した後、ためらうことなく通話ボタンを押した。

「そろそろだと思っただけだが、盗聴は大丈夫か？」

『御用牙時分から昵懇の情報屋回線を使わせてもらっている』

電話の相手は弟でありS. O. N. G. 指令の弦十郎だった。

彼は日本政府の査察を許している間にこの事件の裏側を八紘と協力して探っているのだ。足を掴まれないように公衆電話から特殊回線を使うという二重の守りだ。

「もちろん、念の入れようは十重に二十重だ」

この二重の守り以外の他にも様々な守りを施してはいる。

そのことに安心した八紘は深く息を吐き、座っている椅子に深くもたれかかった。息を吐いたのは、この事件の裏に潜む者が当たって欲しくない弦十郎の予想が当たっていたことが関係してもいる。

「お前の読み通りだ。今回の一件、正式な手続きの査察ではあるが、担当職員の中に不明瞭な経歴の物が含まれているようだ」

『そうか……』

「そして、巧妙に秘匿されてはいるが、『鎌倉』の思惑と思しき痕跡が見受けられるな」

『ッ』

弦十郎からすれば事前の雷の予測を知らされていたとはいえず、事実であると突きつけられれば怯みもする。

対外的には彼自身の予測となっているのは、雷という少女が神の力と融合し、制御下に置いていたという要因からだ。それ以外にも様々な裏事情が彼女にはある。つまるところ、これ以上、訃堂に目をつけられるのは不味いという判断だ。

「こちらも米国と例の交渉が佳境だった故、後手に回らざるをえな

かったのだが……」

「兄貴……結社残党のノーブルレットを擁しているのは、やっぱり……」

『早まるな弦』

矢面に立つ組織であるS. O. N. G. を率いているうえで敵対するであろう『鎌倉』に対する性急さに八紘がくぎを刺す。八紘としても分からなくはないが、政治に関わっている以上そういう早とちりは手痛いしっぺ返しとして返ってくるという経験則だ。

「全てがつまびらかとなるまでは疑うな。私とて信じたいのだ。風鳴訃堂は曲がりなりにもこの国の防人。何より私達の父親ではないか」  
『ああ、だがしかし……』

しっぺ返しもある。だがそれ以上に、父親である訃堂をできれば疑いたくはないという情があった。

先を急ぐ弦十郎を引き留め、八紘は立ち上がる。

「私は人を信じている。最終的に信じ抜く覚悟だからこそ、いかなる手段の行使すらもいとわない！」

「八紘兄貴……」

「だから私は、政治を自らの戦場としているのだ」

八紘は信じている。この事件の首謀者である疑いはないと。だが、だからこそ、見える見えざるを関係なしに隅々まで調べ尽くすのだ。

雪が深々と降る街が見える窓辺に立った。

「今は関係悪化している米国とも協力体制を必ず実現してみせる。ふ……月遺跡共同調査の提案も、その膳立てにすぎん。なおも拗れるなら、我が国への反応兵器発射事実を切り札に国際社会からの孤立を恫喝させてもらうさい』

『そいつは応える。やっぱすげえな、八紘兄貴は。兄貴の中でも一番おっかない』

そういう弦十郎だが、笑を隠しきれてはいなかった。そのおっかない兄貴が味方となっているのだ、これほど心強いことはない。

「前線は託すぞ弦。計画が綻びを見せるのは、いつだって走り始めてからだ。この先にチラつく尻尾を逃さず掴めば、必ず真実は明らかに



なる。疑うのはそれからでも遅くない」

「ああ……ありがとう、ばあちゃん」

「またいつでもおいで」

弦十郎は公衆電話の受話器を下した。

そして刺していた特殊回線への鍵となるデバイスを抜き取り、元スパイの情報屋であるタバコ屋のおばあちゃんに返却した。

〇〇〇

久々の休みをもらった雷と響は日々の疲れを癒すべく未来と風呂に入っていた。

響が潜っていた湯から顔を出し、雷は長く、少し癖のある髪をいつもより丁寧に洗っていた。その為、雷の頭は泡だらけになり、まるで爆発したかのようなアフロになっている。

「せっかくお休みをもらったのに、しょんぼりな感じね……」

「うん……。色々ありすぎてさあ……」

未来が二人の表情を目ざとく気づいた。

響が湯船にもたれかかった。雷は頭から湯をかぶって一気に泡を洗い流し、髪の毛から水を絞って巻き付けてタオルで固定した。

査察が入っている間、装者たちは特別待機という名の厄介払いにあっていた。彼女たちは先にバーカウンタに座り、ノートパソコンのキーボードを叩いていた雷とエルフナインの隣に座っていく。

雷たちは今回の査察の原因であるアマルガムの情報を今分かっている範囲だけはあるが、開示できるようにまとめているのだ。

「一部を除く関係者に特別待機……」

「物は言い様ってやつだ！とどのつまりは、査察の邪魔をするなっ事だろ！」

「ますますもって気に入らない！」

「一番気に入らないのは私達だよ！さっき初めて見た、ほとんど情報が無いのを開示しろだなんて……」

雷がモニターを見たまま、ぶつぶつと愚痴をこぼした。自主的にやっているとはいえ、やれと命令されてやっているのほとんど変わらない状態なのだ。やる気の度合いが異なる。

「だが、それが正式な申し入れであるならば、私達に拒否権がないのも文民統制の原則だ。致し方あるまい……」

「というかタイミングが良すぎる！何でアマルガムが発現した丁度にくれたんだ……？」

「雷さん！」

「ああ、ゴメン」

タイプする手を止め、天井を見上げて考えていた雷だったが、今はまとめるのが先だとエルフナインに咎められ、作業に戻る。分からないものをまとめるというのは結構な重労働なのだ。

調が頬に手をついたまま呟く。

「休息をとるのは悪い事じゃないと思うけど……」

「だからって、はしやぐようなお気楽者はここには誰一人いないのデス！」

と言つて、切歌はカウンターを『冬旅行』と書かれた雑誌でバンバンと叩いた。翼を除いた装者とエルフナインの視線が彼女に突き刺さる。

切歌が慌てて弁明した。

「違うのデス！この本はたまたまそこにあっただけで……まったくもって無関係デス！」

「ふう……何とか終わりました……」

「あとは私がしとくから、エルフナインは先に休んでて」

「分かりました。雷さんの分も入れときますね」

「アリが十匹」

雷とエルフナインの作業が終わったようだ。アマルガムは錬金術寄りの機能のため、エルフナインに負担をかけていたと思つた雷が先に休憩を促す。

彼女はマグカップに雷に暖かいコーヒーを淹れた後、自分用にココアを淹れ、ほっと一息をついていた。

「エルフナインちゃんってお休みはいつも何してるの？」

「お休みの日は気晴らししてます」

休みということदैいつ休んでいるのか分からないエルフナインに

響が聞いた。彼女はカップから口を離し、天井を見上げる。

「ダイレクトフィードバックシステムを応用して、脳領域の思い出を電気信号と見立てる事で……」

「あゝ！今はやめてとめてやめてとめて！」

エルフナインの気晴らしとは言えない気晴らしに響が待ったをかけた。

「それは気晴らしじゃなくて割としっかりめのお仕事か何かだよ多分！」

「なんと！だったら僕は、お休みの日に何をしたいかわからないがっかりめの錬金術師か何かです。多分……」

「だったらぼくは……じゃないだら全く。そういう事なら、暇潰しにしてくれるうってつけにくつついて数日過ぎいな」

エルフナインと翼を除いた全員の視線が今度は響に集中した。

「うってつけて、私いゝ?!」

と、いうことがあったのだ。

そのことで響が悩んでいると、急に少し冷めた湯が顔面にかかった。

「ちよせえ！ちよせえいちよせえい！」

「もってけダブルだあ！」

「わ?!どうした?!無体なあ?!」

いきなり未来が水鉄砲で響に湯を発射した。いつの間にか雷が未来の隣で湯につかっており、彼女も便乗して両手で使う用の水鉄砲を響に向けて発射する。

「クリスの真似！」

二人は銃を構えてどや顔でキメる。響が顔を拭いた。

「そうだったけえ?クリスちゃんてそんなんだっけ?」

そして響がニヒツと笑い、雷と未来の二人に突撃してくすぐりだした。響もクリスの真似をしている。彼女が聞いたらどのような顔をするだろうか。

ひとしきりはしやいだ後、未来が響に聞いた。

「で、せっかくのお休み、どうする?」

「どうって、どうしよ……」

響が湯船に体を預ける。

そこで雷が指を一本立てて提案した。

「この間言ってたあれでいいんじゃない？」

「あれ……？あー！」

次の日、響と雷、未来、翼に本日の主役、エルフナインを呼んで街へ繰り出していった。四人は全力で楽しんでいるが、やはりというべきか翼の表情は暗い。

そして本日のメインディッシュであるカラオケに入り、熱唱するエルフナインに雷が満面の笑顔でタンバリンを振っていた。曲に合わない気がしなくてもないが気にしてはいけない。

しかし、一方で一向に暗い表情のままの翼を未来が気に掛ける。

「響、何がどうなってるの……？」

「可笑しいなあ……。最近しよげてる翼さんを盛り上げるつもりだったのに……」

「すまない……。突然予定が空いたが故、立花の申し出を受け入れてはみたが……。私に余裕がないのだろうな。今は歌を楽しむよりも、防人の技前を磨くべきだと心が逸る。焦るんだ……」

「翼さん……」

内心を吐露する翼だが、その後ろではエルフナインの歌がサビを迎え、雷のテンションも最高潮になっていた。

「あの日以来、震えが止まらない……。弱き人を守れなかった、自分の無力さに……。全てが自分の所為なのだ……」

「わー！かつこいいよー！エルフナインー！」

「楽しいですー！これもまた休日の過ごし方ー！たまにはいいですねーこういうのもー！」

残念なことにエルフナインと雷は翼の話を全く聞いていなかった。そもそも二人はこういったところにほとんど来たことが無いため、ハマりすぎていたのだ。

「響は勝手すぎるよッ！」

「何もそんないい方しなくても……」

「何事お?!」

未来が響に叫んだ。雷のテンションが高い。

「つて……あれ……」

「おいおい、どうして二人が……」

流石の翼も慌てている。自分の話をしていたのに、いきなり未来が響を怒鳴りだしたのだからこうもなろう。因みにエルフナインと雷は全くついでに行けていない。

「翼さんの事私にも相談くらいしてくれてもよかったじゃない! それにもっと別の方法だつて……」

「私だつて私なりに考えて……」

「私なりにじゃなくて、翼さんの事も考えたの?! 雷もだよ! どうして私に相談してくれないの?!」

「わ、私は……焦つても何も生まないから、一度立ち止まろうつて……」

「じゃあ未来は、翼さんの気持ちがわかるの?!」

「響?!」

売り言葉に買い言葉。未来に否定されてしまった響は冷静さを失い、雷が説明していたにもかかわらず怒鳴ってしまった。

未来が押し黙り、心の底から吐き出すように言葉をこぼす。

「分かるよ……。だつて私、ずっと自分がライブに誘ったせいで好きな人を危険な目に遭わせたと後悔してた……。それからずっと危険な目に遭わせ続けている自分を許せずにいるんだよ? ごめんって言葉……ずっと隠してきた。それがきつと、その人を困らせてしまうとわかつてたから……」

「未来……何で……」

突然、本部からコールがかかってきた。

響はバッグから通信機を取り出す。

「響です。雷、翼さんとエルフナインちゃんも一緒です」

『現在、査察継続中につき、戦闘指令は、査察官代行である私から通達します』

「へえ?! どちら様ですか?!」

コールに出ると、聞き知らぬ女性の声が聞こえてきた。曰く査察官だそうだが、響は状況を完全に失念していた。

『第32区域にアルカ・ノイズの反応検知。現在、当該箇所より最も近くに位置するSG―00、SG―01とSG―03、はただちに現場へと急行し、対象を駆逐せよ』

五人は大急ぎでカラオケ屋を出る。そしてアルカ・ノイズの存在を目視し、雷が避難を促す。

「二人は安全なところへ！」

「うん！行こう！エルフナインちゃん！」

「未来！」

未来がエルフナインを連れて避難しようとするのを響が呼び止めた。

「また、後で……」

「うん……。響も、気を付けてね。雷も、嫌な予感がするから……」

二人は無言で頷いた。

「行くぞ立花！轟！」刃の曇りは、戦場にて払わせてもらう！」

「はい！」

巨大な航空型アルカ・ノイズが小型のアルカ・ノイズを投下した。装者たちがこれを迎撃に向かう。

これが畏であるともわからずに……。

## 曇天に響く叫び

アルカ・ノイズ殲滅の指令を受けた翼と響、雷は、ペンダントを手にしてシンフォギアを起動させる。

「Imyuteus Ameno habakiri Tron」

翼はアゾースギアとなった天羽々斬を身に纏い、抜刀してすれ違いざまに斬り捌いていく。まとまったアルカ・ノイズには脚部スラストアを吹かし、一気に加速して一閃した。

ビルの上から砲撃型の砲弾が降り注いだが、翼はこれを素早く回避した。発射台となっているビルを回り込んでその場にいたアルカ・ノイズを両断しつつ、外壁を蹴って屋上まで跳び上がる。

刃を振るい、その剣筋に沿って幾本ものエネルギーの剣が生み出され、放たれた。

『千ノ落涙』

放たれた剣は願いを違わずにアルカ・ノイズを串刺しにしていく。ガングニールとケラウノスの装者である響と雷はたがい背中合わせとなり、響がバンカーユニットをスクリューのように回転させ、そのまま大きく振り上げた。

「ぶつとべえッ！」

そしてそれと同時に雷が電撃を放ち、高速回転する竜巻に稲妻が合わさる。周囲一帯にいるアルカ・ノイズを稲妻がからめとり、刃のよな風を放つ竜巻がそれを飲み込んだ。合図すらない阿吽の呼吸。息の合ったコンビプレーに二人は拳をこつんと打ち付ける。

そんないい雰囲気、無粋な通信が壊す。

『SG-00並びにSG-01、SG-03、に通告。不明武装の認可はまだ降りていません。くれぐれも使用は控えたし』

「まだ私達のレポートは読んでないのかい？それより、周囲の策敵をしっかりとしてほしいものだね」

雷のギア、ケラウノスはリーダーによる探知能力があるが、特定条件下を除いて本部との通信がしっかりつながっている場合は使う必要がない。戦闘をしながらでは精度が下がるのが当たり前のこと、

使うよりも先に友里や藤堯から報告が来るからだ。

しかし、今は自分でレーダーを展開し、代行官に索敵しろと要求している。暗に貴様は無能だと言っているのだ。

「本部！付近一帯の調査をお願いします！アルカ・ノイズがただ暴れてるなんてことおかしいです！きつと！」

響はアルカ・ノイズが暴れていながら錬金術師がないことを懸念する。ただのノイズならともかく、召喚者が必要なアルカ・ノイズでこれはおかしい。

だが、この無能な代行官からの報告は答えに達するものではない。

『現在、装者周辺にアルカ・ノイズ以外の敵性反応は見られません。SG-r03, はこちらの指示に従ってアルカ・ノイズの掃討に専念されたし』

「ツ?!雷!」

「とつくの昔にやってる」

戦闘が始まるよりも前に使っていた雷は響に戦闘を任せ、レーダーの感度を引き上げた。

自前でやることに決めた雷たちの元に翼がやって来た。

「立花！避難誘導が完了するまでは本部からの管制に従うのだ！」

「でもッ……！」

「探知完了。今のところ錬金術師の反応はないから、多分探知エリアの外か、出すだけ出して消えたかのどちらか。ノイズ自体は東側の方が多いけど、生みだしてくる大型航空型がまだまだいる」

管制がロクでもないからやっていると翼の指示を言外に切り捨て、今のところ識別できた情報を伝える。

それが気に食わないのは代行官だ。

「SG-00並びにSG-03,。これ以上指示に従わない場合は行動権を凍結し、拘束されることに……！」

本部ブリッジの扉が開き、そこから弦十郎たちS・O・N・G.の正規メンバーがやって来た。

弦十郎が持っていた令状をつきつける。この令状は八紘から受け取ったものだ。



「査察は中止だ！令状はここにある！」

緒川が拳銃を構え、ブリッジ全体を見渡した。

「該当査察官、見当たりませんか！」

「ッ………鼻が利く………」

経歴が後ろ暗い連中の一人である下卑た査察官はいないようだ。

しかしそれはそれ。オペレーター席に友里と藤堯が座った。

『戦闘管制引き継ぎます！雷ちゃん、もうレーダーはいいわよ』

『天羽々斬、敵中心部へと呐喊！』

脚部ブレードを展開し、逆立ちの状態でコマのように回転しながら斬り進む。

翼の胸の中にはやはりあの時のことが蘇っていた。

「剣たる者には使命がある！弱き人を守るべき強い力を備えている！もう二度とあのような惨劇を……！」

アルカ・ノイズを全て斬り倒し、正面を見つめると、残存しているアルカ・ノイズの中にミラアルクの姿があった。ミラアルクがニヤリと残忍に笑い、翼の目に殺意の輝きがともる。

「そこにいたかッ………貴様アアッ！」

刀を大剣に変形させ、蒼いエネルギーの斬撃を放つ。それは周囲のアルカ・ノイズごとミラアルクを両断し、そのまま背後にあった車まで切断した。

「翼さん?!」

その光景を見てしまった雷が驚愕する。例の一件で精神状態が不安定だったとはいえ、たかだかアルカ・ノイズ程度にあの威力はあまりに過剰だ。何時もの翼ならば、後ろの車まで破壊するような真似はしない。

とするならば、ノーブルレッドの存在だ。雷は瞬間的にレーダーを展開する。しかし、どこを探してもそれらしい反応は見つからなかった。少なくとも、翼の周りには影も形も見当たらない。

そして再び翼の方を向くと、アルカ・ノイズ一体に大剣を大振りに構えていた。あれでは目の前のビルを破壊してしまう。

「翼さん！それは偽物です！」

「ハアアッ！」

錯乱に近い状態の翼には雷の音が届かなかった。

彼女はそのまま大剣を振り下ろし、ビルごとアルカ・ノイズを切り捨てた。今度は周囲に出現したアルカ・ノイズに対して刃を振るっているが、その太刀筋は荒い。

「このままじゃ……！」

このままでは周りの被害が甚大だと判断した雷は躊躇いなく行動に移す。腰だめに構え、体をひねって居合い抜き of 体勢をとる。そして一気に踏み込んで瞬く間に翼との間合いを詰めた。そのまま稲妻を刀の形に形成して振り抜き、的確に首を狙う。

### 『武御雷』

一切の躊躇なく抜かれた電光の刃は翼の首に吸い込まれ、そのまま彼女の意識を刈り取った。

「がッ?!」

「翼さんは錯乱状態にあり！回収後、メデイカルチェックをお願いします！」

『なんですって?!わ、分かりました!』

この戦いは、アルカ・ノイズよりも、装者である翼による被害の方が大きかった。

最後の一体を倒した響はギアを解除し、別れた未来に電話を入れる。が、一向に電話がつかない。呼び出し音が何度も繰り返されるばかりだ。一向に繋がらない電話に響の焦りが募る。

「何で……?!何でつながらないの?!」

○○○

未来は今、電話に出られるような状態では到底なかった。彼女はエルフナインの手を引きながら、後を追ってくる本物のミラアルクを振り切ろうとする。しかし、当然の事ながらミラアルクのほうが速い。彼女は監視カメラを一つづつ潰しながら後を追う。

「あっ?!」

「エルフナインちゃん?!大丈夫?!」

角を曲がったところでエルフナインが躓いて転んでしまい、ついに追いつかれてしまった。

「エルフナインってのは、そっちのどんくさい方だろうか？そうちよこまかと逃げ回ってくれたもんだぜ……！」

「ツ！友達には手を出させない！」

未来がミラアルクの前に両手を広げて立ちふさがった。

「駄目です！未来さん！」

エルフナインが叫ぶ。

すると、ミラアルクの背後から聞き覚えのある男の笑い声が聞こえてきた。

「クツクツク、こうも簡単に本部の外に連れ出せるとはなあ？」

「何であなたが……！」

その男は査察官その男であった。彼女たちは知る由もないが、八絃が足を掴み、弦十郎たちが捕縛しようとしている男である。

「確保を命じられたのはエルフナインただ一人。さくて、あんたの扱いはうち一人決めあぐねるぜ」

『ピンポンパンポン。ミラアルクちゃんに連絡です』

「ヴァネッサ」

フランカを介していないということは、彼女が通すことを拒むような血に汚れたことである。その隙に未来が背後のエルフナインに呼び掛ける。

「逃げて！エルフナインちゃん！」

「未来さん、いけません！」

何故か立ち上がりとうとしないエルフナインと何故か彼女を引っ張り起こさない未来である。

そんな隙にミラアルクとヴァネッサの通信が終わってしまった。

「ああ、了解したぜ……悪く思わないで欲しいぜ！」

「エルフナインちゃん！」

「未来さん逃げてください！」

ミラアルクは爪の一本を鋭利に伸ばし、振り上げた。

彼女の隣では査察官が気色悪く身じろぎしている。見たくもない

顔色を見るにかなり興奮しているようだ。

「うくん！テレビではすつかりお目にかかれなくなったシーンに私！あちこちの昂ぶりを抑えきれない！」

「未来さん逃げて！」

ミラアルクの爪が振り下ろされ、噴水のように真っ赤な血が噴きあがった。

○○○○

何度も未来をコールしている響の元に、本部からの通信が入った。

『不自然に監視カメラが破壊されてるの！今からルートを送るから、それに沿って追ってください！』

「了解しました！」

響はルートに沿って駆け出す。もしかしたら未来とエルフナインが何者かに追われているかもしれない。そうであるならば、とさらに走る速度を上げる。

「未来ー！どっ？！未来ー！」

あと少しで最後だ。無事でいてと何度も祈る。

だが、目の前は行き止まり。そして道路に広がる真っ赤な血だまり。響の呼吸が荒くなり、目の前が真っ暗になる。

「未来……？未来うううッ！」

響の叫びが曇天に吸い込まれていった。

## 大人の仕事

血だまりが出来、最後に監視カメラの破損が確認された場所にはすぐさまテープによるバリケードが張られた。

現場に落ちていた未来の物と思われるスマホは破壊され、彼女が直前まで身に着けていたバッグは血に濡れている。

その凄惨な現場を、響は呆然と見降ろしていた。

「まさか……未来とエルフナインちゃんが……」

「ッ！」

雷が近くの塀に拳を目いっぱい打ち付けた。装者の中で彼女は唯一探知能力を持っている。そうでありながら、未来とエルフナインを助け出せなかったことを悔いているのだ。

雷は錯乱した翼を気絶させ、戦線を離脱させてしまっていた。二人分の戦闘領域を受け持ってしまったため、レーダーを張る暇などなかったのだが、責任感の強い彼女がそれを許せるはずがない。

今は二人とも、血だまりが未来やエルフナインの物でないことを祈るばかりだ。彼女たちの目には呆然ややりきれない怒りの中に懇願の色が混じっていた。

ともかく、先ほど一戦終えたばかりの響たちを帰還させる。ここからは大人の仕事だ。

現場を取り仕切る緒川の元に、部下であるエージェントがやって来た。

「現場周辺から遺体発見の報告ありません」

「近隣の病院に負傷者が運び込まれた記録もありません。ですが、あの出血では……」

「ふむ……。捜査範囲の、さらなる拡大をお願いします」

「了解です」

緒川の指示にすぐ返事を返し、行動に移す。彼は壊された監視カメラを見上げた。

（手口は周到……入念に……）

丁寧の一つ一つ破壊されている監視カメラ。丁寧すぎたために逆

探知することが出来たが、その前にあまりに広域に展開されたアルカ・ノイズに気を取られ、気付くことが出来なかった。恐らく、あの査察も仕組まれたことだろう。あれの所為で対応の初速が遅くなっていた。

弦十郎に通信を繋ぐ。

『恐らく、偶発的に巻き込まれてしまったのではなく……』

「ああ、敵の仕組んだ罠にかかってしまったと考えるべきだな……」

『保護レベル、最高位指定の二人がそろって』

「錬金術によるバックアップスタッフと神の力の依代足りうると仮説される少女……」

錬金術の技術と知識を持つエルフナインは言わずもがな。未来は響と同じく神獣鏡の輝きを浴びたもの。つまり、バラルの呪詛が解呪されているのだ。

『調査部にて警護に努めてきましたが、査察による機能不全の隙をつかれてしまいました』

「敵の狙いは未来君、またはエルフナイン君。あるいは……」

『その両方という線も考えられますね』

「いずれにせよ今必要なのは情報だ。状況打開のためにも引き続きの捜査を頼む」

『まもなく鑑識の結果も出ます。調査部の全力をかけて、必ず』

緒川との通信が切れる。彼の声には、必ず状況打開に必要な情報を掴んで見せるという強い意気込みが感じられた。

「二人とも……無事でいてくれ……」

弦十郎の声には切実な思いが込められていた。

○○○

装者たちの控室。

ここではヒビキが自分のスマホを両手で握って見つめていた。

雷は背もたれにもたれて目を腕で覆い隠し、あの時どうすればよかったかを何度も思考し続けている。が、翼を放置しておくぐらいしか転換点が無かった。つまり、翼による街の破壊を許すか、今の現状かしかなかったのだ。思考の中では何度も未来の救出に向かおうと

するのだが、現実で選択した結果が組織としてなにも間違っではないのが苦痛だった。

そんな思い悩む二人の頭にポンツと手がのせられた。

「？」

「え？」

二人はその手の持ち主の方を見る。クリスだ。

彼女は何も言わず、無言でうなずく。その彼女の気づかいに、二人の心が少しだけ軽くなった。

「ありがとう、クリスちゃん……」

「少しだけ、楽になった」

そう言っただけでクリスに向けて微笑んだ。

「それにしても……まさかというよりやっぱりの陽動だったデス！」

「あの時管制指示を振り切ってさえいれば……」

「月詠と暁は、私の状況判断が誤っていたとでも言いたいのか」

響、雷よりも厄介なことになっているのが翼だ。

そもそも状況判断といえるかどうか怪しいあの判断に、拳句の果てには街を破壊しかけて雷に気絶させられたのだ。彼女のプライドはズタズタである。

今の翼はキレイなナイフのようなものだ。何気ない調と切歌の一言にも噛みついてしまう。

「え?! ええと、そうじゃなくてデスね……」

「ならばどういう……!」

何とか弁明しようとする切歌に翼がなおも噛みつく。だが、それはマリアの声に遮られた。

「いい加減にしてー!」

「誰よりも取り乱しそうなこいつ等が! 自分の成すべきことに向き合おうと努めてるんだ! 頼むよ先輩ツ……!」

「翼さん……」

「……」

ここまで言われてしまえば翼は押し黙るしかない。しかし、憤懣やるかたないという感情を隠しきれていなかった。翼の反応が気に

なったマリアが彼女に詰め寄る。

「どうしたの？らしくもない……」

しかし、マリアの差し出した手を、翼は無意識に払ってしまった。そしてすぐに、自分のしてしまったことを理解する。

「待ちなさい！話はまだ……」

マリアの呼び止めも聞かず、翼は彼女の脇を通り、退室した。

その後ろ姿を誰も呼び止めることが出来ず、見送るだけとなってしまふ。

「何だか様子が……」

「ギザギザハートになってるデス……」

「そうね……でもこれ以上責めないであげて。翼自身わかってるはずよ」

「んな事言われなくなつてな！」

クリスがテーブルを叩き、歯噛みした。フロンティア事変のおりに翼に救われた身として、今度は自分がと思いたいが、現実にも出来ないことが悔しくてたまらなかつた。

○○○

ノーブルレットの新たなアジトとなったチフォージュ・シャトーの中枢部で、ヴァネッサとフランカは儀式の準備を進めていた。

機械の中央部にはシエム・ハの腕輪がはめ込まれ、その周囲をルー文字が囲っている。

（腕輪から抽出した無軌道なエネルギーを、拘束具にて制御……これで私達は……）

手に持ったデバイスで調整しながら確認する。

「フランカちゃん。それはこっちにお願いなね」

「510902！（はいー！）」

フランカがヴァネッサの指示に元気よく返事し、結構な重量をほこる機器類をサイコネシスで軽々と持ち上げて配置する。

その姿を微笑ましく見つめていたヴァネッサにエルザからテレパスが入る。

『ヴァネッサ。ミラアルクの帰還を確認。お客様も一緒であります』



「ご苦勞様。こちらの準備も順調よ。早速取り掛かりましょう」

『ガンス！』

「神の力は、私達の未来を奪還するために……！フランカちゃん、お客様の案内をお願いできる？」

フランカは大きく頷いた。錬金術の知識がない分、何かしらの形で役立てるのがうれしいのだ。お客様、つまり未来の事は、儀式の開始に必要なはあるが、命を取るわけではないとだけ聞かされていた。つまり、彼女にとって未来は、人間になってからのお友達第一号になる人なのだ。

フランカは出来るだけパナケイア流体の濁りを抑えるべく、どんな人かなあと頬を緩ませながら彼女はトテトテと走り出した。

そこまで遠くはなかったので、フランカは直ぐに目的の場所に到着した。

「05126013216151?（お客様は?）」

「彼女ですよ、フランカ」

目をきらめかせるフランカにエルザは気絶した未来を指さした。

そして彼女はウキウキとした足取りで未来の元に駆け寄り、じつくと顔立ちや髪型、背格好を観察した後、嬉しそうにテレポートで姿を消した。どうも嬉しさが勝って未来の状態を上手く把握できていないようだ。大方、眠っていると思っただけだろう。

フランカは脳に機械があるため、起きているだけで流体が濁ってしまう。能力を使えばなおさらだ。

それでも能力を使ったフランカに、ミラアルクが呆れる。

「全く、ただでさえ濁るのが速いってのに……」

「でも、人間に戻る上に新しい友達もできると考えれば、その気持ちもわかるでありますよ」

「だなーあんなに小さいんじや仕方ないってもんだぜ」

二人は笑い合うが、すぐに表情を引き締める。

まだ幼いフランカには見せられない、見せたくないところだ。あの子には、あの子だけは幸せになって欲しいという願い。その為に二人は、心を鬼にする。

## 罪なき者たち

精神的に追い詰められ、冷静な判断が出来なくなっていた翼は響達の元から離れ、趣味であるバイクの整備をしていた。いつもいつも何かしらで爆発しているバイクだが、防人の愛馬だ。いつだって整備は怠らない。常に最高のコンディションを維持している。

そしてこれは翼の精神の安定にもつながっていた。真っ黒になったバイクのオイルを抜く。

（わかってている……悪いのはこの私だ。皆に当たるのも、弱き者を守れないのも……）

そんな思い悩む翼の元に、通信機のコールがかかった。

モニターに映った相手は祖父、風鳴訃堂だった。翼は真剣な表情で呼び出しに応じる。

「翼です」

『聞いたぞ？失態であったな』

「言葉ありません……。ですが、次こそは必ず防人の務めを果たしてみせます！」

範囲は狭かったとはいえ街を勢い余って破壊し、それによって後輩に意識を刈り取られたのだ。失態と言われても無理はないと翼は思った。しかし、次は上手くやって見せると、彼女は先の失態をばねにして再び立ち上がろうとしている。

あれ以上街を壊していればそう簡単には立ち直れなかっただろう。

『刻印、掌握！』

「?!」

突然訃堂が意味の分からないことを言い出した。だが、その言葉の後、翼は頭の中に訃堂の言葉がスツと遮られることなく入っていくのを感じた。

『翼。はたしてそこはお前の戦場か？そこにいて何を守る？何を守り切れる！』

「ッ」

『道に迷うことならば、何時でも尋ねよ。お前は風鳴を継ぐ者であり、

天羽々斬は国難を退ける剣であること、ゆめ忘れるな!」

そう言つて訃堂は通信を切った。

翼には「そこはお前の戦場か?」という言葉が引つかかつて仕方がない。耳に当ててていた通信機に目を落とす。

「ここではない……私の戦場……」

視界が歪む。いつの間にか涙が目にとまっていた。翼はオイルが染みた軍手で乱暴に涙をぬぐう。頬に黒いすすがついた。

「奏……」

かつて共に戦場を駆け抜けた戦友にして親友の名を口にす。

しかし、そんな弱音はブリッジからの呼び出しがかき消した。

『緊急の対策会議を行います。装者たちは、至急発令所に集合をお願いします』

繋ぎから隊服に着替え、走ってブリッジに駆け込む。ドアの目の前で止まり、まだ頭の中に色々と引掛かっているもの一旦深呼吸してから入室する。

「遅くなりました!」

「翼、何をしていたんだ?」

「すみません……」

他はもう全員揃っている。ひときわ遅れてきていた翼に、弦十郎が聞いた。翼の答えは芳しくなかったが、彼は深く追求しない。代わりに MARIA が鋭い視線を向ける。翼に何か違和感を感じているようだが、今は置いておくと決めたのか、彼女は小さくため息をついた。

対策会議を始めるために弦十郎は腕を組み、現状分かったことを伝えていく。

「これより未来君と、エルフナイン君の失踪について、最新の調査報告を基に緊急対策会議を行う」

「鑑識の結果、現場に残された血痕は未来さん並びにエルフナインさんのものではないと判明しました」

「それじゃあ、未来とエルフナインちゃんは……!」

「うむ。遺体発見の報告がない以上、殺害ではなく、敵による略取であると俺たちは考えている」

「まだ何とか出来るかもしれない！」

緒川からの報告によって沈んでいた装者たちの空気が軽くなる。雷と響は向かい合い、目じりに涙をためて喜び、抱き合った。そして喜びをあらわにした後は、今度は表情を引き締め、未来を救出するために最善を尽くす意を示した。

喜んでいるのは二人だけではない。マリアも喜びの涙を指でふき取っていた。

「まだ一概に喜べない……。それでも希望を繋ぐことはできたわね……」

「だけどよ……ブチ撒けられたあの血だまりは、一体誰の物だったんだ？」

ならあの血だまりは誰のものだったのか、クリスが誰もが気になっていることを聞いた。

「引き続き調査中です」

緒川の答えはシンプルだった。確かに、あの血だまりはたまたま居合わせてしまった一般人かもしれないし、自分たちが追っている査察官、もしくはそれ以外の者かもしれない。あまりに数が多いのだから、まだ答えが見つからないのは装者たちの中ですんなりと腑に落ちた。

「これより今後の方針を二人の奪還作戦に切り替え……」

「あ、あの……一ついいですか？略取って錬金術を扱うエルフナインはわかります。ですがどうして未来さんまでが……」

調の質問は弦十郎たちが殺害ではなく略取であると考えた理由への質問だった。

ここまで来て隠す必要はないと、弦十郎は一度雷に気づかれないうに目をやってから口を開いた。

「今回の一件、何故未来くんが巻き込まれつつも害されず、攫われてしまったのか……。その仮説を聞いてもらうには、いい頃合いかもしれないな……」

○○○

所々に散らばったドールの残骸が目立つ場所でエルフナインは目

を覚ました。そしてすぐに、彼女がここは何処かを理解する。

「まさか……ここは！」

自分の生まれた場所であるチフォージュ・シャトーの中であるとすぐさま気付いたエルフナインは、奥からやって来たミラアルクとエルザに目を向けた。

ミラアルクは容器にスカートの端を掴み、

「おかえりなさいませ〜ご主人サマア？」

「あなた達……ッ」

あまり様になつていないメイド風のお辞儀をした後、何かを言おうとしたエルフナインの頬を両手で挟み、口をふさいで目を見つめる。

「ははは！日本に来たのなら一度言ってみたかつたんだぜ〜」

「ほほはシフオーシユシヤフオー……」

「よつと」

頬が引つ張られ、口の端が伸びているのでうまく発音できない。両頬を掴んでいるミラアルクは、そのままエルフナインを放り投げた。

それをエルザが咎める。

「いけないであります！客人は丁重に扱わないと……」

「次からはそうさせてもらうぜ」

「フランカに嫌われても知らないであります」

「そ、それは困るぜ……」

末っ子であるフランカに嫌われるのは家族を大事にするミラアルクには辛いところであった。いや、嫌われるだけならまだいい。もし超能力を使わしてしまったら、彼女のただでさえ常に濁っていつているパナケイア流体の濁りを加速させてしまう。それだけは避けねばならない。

投げ飛ばされたエルフナインは、どうすればこの状況を打破できるのかと思考を回す。

（考えなきや……。今何が起きてるかを……。ここに連れて来られるまでに何が起きたかを……）

あの時、ミラアルクが突如として隣にいた査察官の首を斬り裂いて殺害。突然目の前で人が惨殺されたことで未来とエルフナインは気

を失い、ここに連れ込まれたのだ。

そこで近くに未来がないことを思い出した。

「そうだ……未来さん！未来さんはどこにいるんですか?!」

「用済みと判断された彼とは異なり、彼女はまだ生きている。生かしててであります」

エルザが錬金術を使って気絶したままの未来を映し出した。何やらベッドのようなところに寝かされており、その周りをフランカがドンドコドンドコと謎の舞を踊りながらぐるぐると回っている。曰く、友達の舞というらしいが、彼女自身良く分かっていない。

「まさか……バラルの呪詛から解き放たれた未来さんを使って……！」

「そのままかだぜ。そしてやってもらうことはお前にもあるんだぜ？」

「今はあなたが使ってるキャロルの体を使って、起動して欲しいものがあります」

エルフナインにはすぐにピンときた。キャロルの体が起動に必要なものなどこの世に一つしかない。

「キャロル……まさか！チフオージユ・シャトーを?!それは無理です！たとえ起動できたとして機能の大部分に加えてヤントラ・サルヴァスパもネフィリムの左腕も失われた今、自在に制御することなど絶対に！」

そう、チフオージユ・シャトーは複数の聖遺物が組み合わさって生まれたパッチワーク。それ故にヤントラ・サルヴァスパか、ウエルのネフィリムの左腕でなければ動かすことが出来ない。そも、解剖の光を内部放射したことで機能の大部分が消失している。

キャロルほどシャトーを熟知していないエルフナインでは、満足に起動することすらできないだろう。

「落ち着けて。そうじゃないんだぜ」

「あなたに起動してもらいたいのはこちらであります」

どうやら違ったようだ。エルザが指を鳴らし、それを合図にライトアップされていく。

ライトに照らされて現れたのは、棺のようなものが接続されたジェネレーターのようなものだった。思わず学者的な興味からエルフナインが近づいていく。

「まるで何かのジェネレーター？こ、これは?!」

棺の中には、未完成、もしくは失敗作とみなされたオートスコアラの残骸が入れられていた。見る限りその棺が数えきれないほど接続されている。

エルフナインは思わず絶句した。

「あなた達は、一体何をたくらんで……」

○○○

真つ暗な闇の中を、未来の意識が沈んでいく。

(どこまで……落ちていくのだろうか……。なんとかしないと……二人に心配かけちゃう……。そうだ！私は響と仲直りしなきゃいけないんだ……)

沈んでいく暗闇の底で、金色の腕輪をはめた光輝く両腕が迎え入れるように未来に手を伸ばした。

(あなたは……)

未来の意識が、暗闇の底の輝きに墜ちていく。

○○○

マリアがサンドバックに拳を打ち込んでいく。翼が頼りにならない。今、彼女の分もマリアが背負わなければならない。段々と鋭さが増していく。

(非戦闘員の仲間を巻き込んだ今回の一件、衝撃は大きかったはず……。まさか、あの時神獣鏡の光を受けた二人が、原罪を解かれた人間……神の依代に成り得る存在だなんて……。それを誰もが受け止め、強い心で乗り越えようと努めている……)

マリアの拳がサンドバックに突き刺さったまま止まった。彼女の脳裏に翼の暗い表情が蘇る。

「駄目だな私は……。苛立つ翼に差し伸べる手すら持っていない……」

思わず首から下げたアガートフレームのペンダントを持ち上げた。

「仲たがいぐらい、セレナとだつてしたことがあるのに……」

F・I・S・にいたころ、喧嘩したセレナと仲直りする時は、何時だつて歌があつた。マリアと他の誰かを繋げる歌、Apple。雷と敵対していた時も、暴走していた時も、あの歌が繋げてくれていた。「仲直りするのに言葉なんていらなかつたわね……」

思わずAppleのフレーズを口ずさむ。その時、何か引つかかるものを覚えた。

「このフレーズ、最近どこかで聞いたような……？それに雷、あの子は神獣鏡の光を受けていない筈……。なのに何故、あの時神の力の依り代たり得たの……？」

マリアの中に、あまり信じたくない想像が生まれた。それはいくら忘れようとしても、留まるところを知らないようにあふれ出てきていた。



## 変革の予兆

アタツシユケースの中に、一つの聖遺物が収められていた。

その聖遺物の名はアンテキティラの齒車。かつてパヴァリア光明結社統制局長、アダムのそばにいた、ダイヴアインウエボンとなつたオートスコアラ、テキキが体内に埋め込んでいたものである。

少し前、ヴァネッサと彼女の召喚したアルカ・ノイズとの研究施設での戦闘後、瓦礫の山の中から緒川が発見したものだ。少しばかり欠けていたが、貴重な情報源であるため、調査のためにS・O・N・Gが信頼する機関に預けてあったのだ。

調査員がケースの中身を緒川に見せた後、確認を終えたとして閉じ、ロックをかける。

「調査結果はこの中に納めています」

「確かに受領いたしました」

複数の部下のエージェントを連れた緒川はそれを受け取り、本部へと帰還すべく車に乗り込んだ。

それを上空から、カメラやマイクのような物体が緒川たちを捉え、観察している。しかし、いくら忍者である緒川といえど、空高くにある飛翔物体に気づくことは出来なかつた。

緒川は弦十郎に音声通信を繋ぐ。

「証拠物品と共に、これより帰投します」

簡潔に報告した後、発進した。カモフラージュのための複数台の車もそのすぐ後に続く。

その会話をはるか遠くから盗撮しているものがいた。ノーブルレッドのリーダー格、ヴァネッサだ。彼女は盗聴器であつた飛翔物体から情報を収集している。

(疑いはまだしも、証拠となるものを持ち帰られるのはまずいかもね)

盗み聞いた情報を即座に統合し、答えを導き出す。そして彼女はミラルクとエルザにテレパシーを繋ぐ。こういう荒事の場合、彼女達はフランカを参加させない。彼女の手を血で染めるわけにはいかなからだ。

「二人とも。聞こえて？警戒監視網にてS・O・N・G.の動きを捉えちやつた。私達と風鳴機関の繋がりもバレたみたいだけど、どうしよう？」

即座に返答が返ってきた。二人は丁度、エルフナインを強引に説得しようとしていたところだったが、その役目をミラアルクに任せ、エルザが通信に出る。

『位置は把握してありますね?!だったら迷うことはありません』  
「やっぱそうよね。ここはお姉ちゃんとして強襲しかないわね!」

ヴァネッサはチフオージュ・シャトーを支える鉄骨の上にいる。彼女は地面に背を向けて飛び下り、空中で足裏のブースターを点火して反転、飛翔した。

その間にミラアルクから続きのテレパシーが届く。

『神の力の具現化はうちらで進めとく。そっちは任せませ』

自分たちと訃堂を繋ぐ証拠を抹消すべく、ヴァネッサは空を飛ぶ。  
『間違いないのだな?』

そんな時、緒川は弦十郎に今の状況で伝えられる可能な限りのことを通信で報告していた。今回はかなり身内に踏み込んだ調査情報だ。間違いが許されないだけに弦十郎の動きは慎重だ。

しかし緒川の得た情報は確実なものだった。

「はい。技研による解析の結果、廃棄物処理場で回収した物品は119.6%の確率でアンティキラの歯車とのことです」

『冤罪ロジック構築可能な数値で、本物と立証されてしまったか……』  
「先立つての事故で失われたはずの聖遺物が、敵のアジトにて発見される……」

百パーセントを超える数値。つまり、様々な可能性を鑑みても、確実に本物ということである。しかも歯車は、元々S・O・N・G.の研究施設で調査していたものだ。

『あの件に関して保管物品強奪の報せは受けていない。遺失を装い、横流しされたと考えるならば……』

「護災法施行後、国内の聖遺物管理は風鳴機関に一括。指令の懸念通り、やはり鎌倉とノーブルレッドには何らかの繋がりがあると見て

……ッ!」

緒川が急に言葉を詰まらせる。

『どうしたッ?!』

「敵襲です！恐らくは、証拠物品を狙ってと思われれますッ！」

ライトで照らされた道路の先にヴァネッサが立っていた。

彼女は妖艶な動きでジャケットのフアスナーを下ろし、胸部に格納された二連ミサイルランチャーを露出させ、発射した。三台いた車のうち、緒川の乗っていたものと一台が回避に成功する。しかし、最後尾を走る三台目が反応に遅れ、直撃を喰らって爆発した。

回避に成功した二台がヴァネッサの脇を通り抜ける。

彼女はフアスナーを上げながら振り向いた。

「せっかく誘ったのにつれないわ」

脚部をホバー移動用に変形させ、道路を高速で疾走する。そして指先の機関砲を展開し、追撃した。緒川の車はよけることが出来たが、後ろを走っている車はまともに銃撃を受けてしまい、タイヤが破裂した。そのままハンドル操作を受け付けずにスリップし、ひっくり返ってエンジンが破裂した。

ヴァネッサの後ろから爆発音が聞こえ、炎によって明るくなる。

最後の一台となった。彼女は完全に破壊するため、両肘からミサイルを発射する。しかし、直線には飛ばないため、緒川のテクニクで避けられてしまった。お代わりと言うように両ひざからも発射するが、今度はガードレールを使った曲芸のような操作でひっくり返った車の頭上をミサイルが通過する。

ミサイルで駄目なら今度は体ごとだ。ヴァネッサは跳躍し、緒川の運転する車を眼下に見据える。

「行かせない……！スイッチ・オン！コレダー！」

ヴァネッサの掛け声と共に左足が槍のように変形し、外装が展開して電撃を放つスパイクが三本展開された。そして右足を曲げて上に向け、ブースタによる加速で急降下蹴りを打ち込む。

回避は不能。そう思われた。が、確実に直撃するはずの攻撃は当たらなかった。緒川車が突如分身したのだ。

『忍法 車分身』

足を通常の状態に戻し、着地する。

「どういう事?!」

まさか忍法で車ごと分身するとは思うまい。しばらく走った後、分身が解け、一つに戻った。ヴァネッサには追撃の意志よりも驚きの色が強かった。

「現代忍法……?」

驚きのあまり足を止めている間に、呼ばれていた応援に追いつかれてしまった。背後からやって来た眩い明りに向かってロケットパンチを打ち込む。

その明りの中から雷とマリア。装者二人が飛び出した。

雷が跳躍しながらケラウノスを起動させる。

「Vol t a t e r s K e l a u n u s T r o n」

マリアと共にシンフォギアを纏った雷は腕部ユニットから稲妻をボウガン状に展開し、雷の矢を連続で発射する。

『雷乱神楽』

ヴァネッサはそれを全速後退することで回避したが、ティアラによる電磁操作を受けて地面へ着弾する直前で方向転換し、彼女に向かってホーミングし始めた。

「何ですって?!」

このままでは避けてもきりがないと判断し、それを電磁バリアで受け流す。

「隙だらけッ!」

バリアの展開によって動作が止まってしまった隙をマリアが突くべく肉薄する。が、その背後では先ほど飛ばした両腕が機関砲の指先をマリアに向けていた。ワザと隙を作り、隙をつこうとしているのだ。

しかし、そうは問屋が卸さない。

「せいやッ!」

雷とマリア、二人のコンビネーションはもつともバランスと連携に優れている。マリアが突撃し、その隙を雷が埋めた。マリアの背後を

狙う両腕を蹴り上げ、その勢いで反転して蹴り落とした。

「読まれてた?！」

「であッ！」

「ッ！」

マリアの短剣による振り下ろしがバリアによって動けないヴァネッサに直撃し、大きく後退させる。後退しながら彼女はアルカ・ノイズ召喚ジェムをばら撒いた。

無数のアルカ・ノイズを召喚するが、二人にはとるに足らない相手だ。

マリアが短剣を蛇腹剣に変形させる。そして鞭のようになやかに操ると、その剣の上を雷が雷速で駆け抜けた。稲妻が檻のように展開した剣の間を駆け巡り、ノイズを焼き尽くしていく。

『Silver Lollipop Prison』

前衛と後衛が阿吽の呼吸で切り替わり、今度は雷が肉薄する。が、ヴァネッサは腕を頭上の高速を走るトラックに腕を発射し、ギリギリのところまで離脱した。

本部から報告が入る。如何やら緒川の安全圏への離脱が確認できたようだ。

トラックの上に乗りながら、ヴァネッサは一人呟いた。

「証拠隠滅は失敗……。こうなったら装者の足止めくらいしておかないとね」

ヴァネッサの後をマリアが車伝いに、雷が走って道路を駆け抜けて彼女のすぐ後ろの車のルーフに着地した。

「また一般人を巻き込むつもり?」

「ご名答」

「そうは……させないッ！」

マリアの声には怒りが込められていた。ヴァネッサは躊躇うことなく指先の機関砲を発射する。マリアは短剣を蛇腹状に変形させ、放たれた弾丸を全て斬り飛ばす。

「それが、アガートラムとケラウノス? 妹共々あなた達、よくもまあその輝きを疑いもせず纏えるわね?」

「どういう意味?!」

「託された輝きを疑うものかッ!」

突然、ヴァネッサの口から放たれた言葉は二人の足を止めるのに十分だった。言葉の意味が気になり、思わず二人は聞き入ってしまう。

「アガートラム……。イラク戦争の折、米軍が接収した聖遺物の一つ。シウルシャガナやイガリマと異なり、出自不明故に便宜上の呼称を与えられた得体のしれない謎のギア……。ケラウノス……。同じくイラクから出土した出自不明の聖遺物。その在り方ゆえに便宜上の呼称を与えることで制御下に置いた、本来存在しないギア……」

「ッ」

「なんてね?」

初めて聞く事実に世迷言と断じれず、一瞬の硬直を生んだ。その隙をついてヴァネッサが両肘からミサイルを発射する。

二人に直撃し、吹き飛んだ。

「きやあぁッ?!」

「わあぁッ?!」

吹き飛ばされるも二人はお互いの手を取っていた。雷が何とか電磁操作による空中制動でマリアを受け止め、真下にいた車の上に着地する。

「搦手に引つかかっちゃった……。マリアッ!」

「ええ……。これ以上好きにはさせないッ!」

「世界のは手を見せてくれッ!」

如何やらこの車の運転手もなかなか覚悟が決まっているようだ。

しかし、だいぶ距離を置かれてしまった。これでは何をされても対応に時間がかかってしまううえ、阻止にかかるのも難しい。

「それじゃあ、こういうのはどうかしら?」

ヴァネッサはトラックから飛び下り、両肘両ひざからミサイルを四発、高速道路に向けて撃ち込んだ。道路が破壊され、寸断される。

雷はマリアにオーダーする。

「相手任せる!」

「相手任された!」

マリアが跳躍してヴァネッサの方に飛び移り、弾雨を避けながら距離を詰める。雷たちの乗っていた車は落ちてしまったが、他の車はギリギリで止まれたようだ。

マリアが短剣を振るうが、ヴァネッサはジェット噴射で上空に逃げる。彼女は余裕しやくしやくといった様子だ。

「あなた達が不甲斐ないから、余計な被害者出ちやつたかも？」

「残念でしたあッー！」

突然破壊された所から雷が竜と共に飛び出し、空中で体をひねって跳び蹴りの体勢を整え、竜の罅と共にレールガンの要領でヴァネッサに蹴りを喰らわせた。不意打ちである上に圧倒的な速度。避けることも防御することもできない。

「があッ?!」

### 『雷竜降罅撃』

痛烈な一撃をもらったヴァネッサは吹き飛び、防音壁に叩きつけられた。片腕が完全に使い物にならなくなっている。

落下した車はと言うと、超電磁の竜巻によつて空間に固定され、運転手は無事だ。車も細心の注意を払って固定したため、ある程度のパーツ交換ですぐに元通りだろう。

「チエックだー！」

「未来とエルフナイン、連れ去った二人の居場所を教えてもらおうわ！」

ヴァネッサを追い詰めた二人だったが、突然、夜であるというのに太陽のような輝きが照らした。更に研究施設で採取された不協和音も流れてくる。

「チフオージュ・シャトー?!」

「マテリアライズ……? だけど……早すぎる!」

「やっぱりこの歌……私の胸にはアップルのようにも聞こえて……」

マリアとヴァネッサが思案を巡らせる中、雷が胸を、心臓を抑えようづくまっつた。

「アアアアアアアッ?!」

「雷ッ?!」

マリアが思わず駆け寄り、崩れ落ちるように倒れ込んだ彼女を受け

止める。そして、眉を顰めた。

(体が熱い……。まるで、熱した鉄のように……)

「本部！雷の様子がおかしい！至急……」

『バイタルの変調は確認しているッ！すでに救援を手配したッ！』

雷の体は異常なまでに体温が上昇していた。マリアはすぐさま本部に救援を要請したが、すでに手配されていた。彼らの行動は迅速だ。しばらくすれば到着するだろう。

ギアが解除された。

雷を回復体位で寝かせ、マリアはヴァネッサに注視する。出来ることなら到着まで安心させるために抱き締めていたかったが、目の前のことを解決することを先決した。

道路に横たわりながら、雷の意識が朦朧としてくる。

(からだ……。とける……。いたい……。あつい……。きもちいい……)

心臓の音は爆発するような巨大な音を立て、全身が溶けるような感覚に陥っていた。最初は燃えるように熱く、痛かったが、段々と心地よくなってきた。

そしてぼんやりとした表情の雷は、眠るように意識を失った。その瞬間、輝きの中心から、銀色の繭のようなものが出現した。



## 復活の前触れ

無数の棺桶の中に入れられた、廃棄されたオートスコアラアの残骸。

一見ジェネレーターのようなのだが、エルフナインでも見当がつかない。

「あなた達は、一体何をたくらんで……ツア?!」

エルフナインが振り返ったところを、ミラアルクが首を掴んで持ち上げた。反射的につかんでいる腕をつかみ返したものの、パワー不足でびくともしない。持ち上げられたことで気道が圧迫され、呼吸が出来なくなった。空気を求めて喘ぐが、吸い込んだ空気が肺にいきわたることはない。

ミラアルクがエルフナインの瞳を見つめた。吸血鬼の魅了の目を原型とした、ミラアルクの『不浄なる視線』がエルフナインに刻み込まれる。

刻印を刻み込まれたエルフナインは反抗する力を失ってしまった。

「バイオパターン照合……」

ミラアルクはつかんでいた手をパツと離れた。支えられるものが無くなったエルフナインは重力に従って地面に落ち、両足で立ち上がる。

そしてはつきりとしめない意識のまま、不可思議なジェネレーターを起動させるためのコントロールパネルへと歩みを進めた。

「さあ、認証を突破してもらおうぜエ? マスター」

エルフナインがパネルの前に立った途端、画面全てに文字が表示された。それは隙間がないほどに書き詰め込まれている。

彼女はぼんやりとしたまま、起動のための言葉を詠唱した。

「その庭に咲き誇るは、ケントの花……。知恵の実結ぶ、デインハイムの証なり……」

詠唱を終えると、棺からはエネルギーが迸り、それらに接続されたジェネレーターがうなりを上げる。膨大なエネルギーの奔流が、上階の祭壇へと送り込まれた。

「稼働は順調。廃棄されたとはいえ高密度のエネルギー体。これを利用しない手はないであります！」

「そしてコイツの利用価値はここまでだぜ」

ミラアルクは吐き捨てるように言った後、ぼんやりとしたままのエルフナインの肩を掴み、乱雑に振り向かせる。

再びミラアルクとエルフナインの目が合った。

「あとは心を破壊して……！」

彼女の心に刻み込んだ刻印を破壊すれば、刻み込まれた心も破壊される。ミラアルクが『不浄なる視線』の出力を上げた、その時だった。(これ以上オレを覗き込むなッ！)

エルフナインと同じ姿の、別の誰かがミラアルクの刻印を弾き返した。撃ち込んだはずが逆に喰らってしまい、ミラアルクは頭を押さえようづくまる。

いつもと違うその様子に、心配したエルザが慌てて駆け寄った。

「大丈夫でありますか?!」

「コイツ……何を……?!」

驚愕の面持ちでエルフナインを見つめる二人だったが、気を失ったのか彼女はぼったりと倒れてしまった。

それと同時に、ジエネレーターが不審な音を立て始めた。エルザが慌ててモニターを確認すると。祭壇の制御が不能になっている。腕輪から抽出されるエネルギー量が膨大すぎるのだ。

この出力で周囲が破損していないのは、暴れ出るエネルギーをサイコキネシスでフランカが抑え込んでいるからだろう。画面の端で、フランカが歯を食いしばって踏ん張っていた。

ただでさえパナケイア流体が濁っていくのだ。そんな自陣営最高火力であり最も幼い少女に、簡単に能力を使わせるわけにはいかない。

「制御不能！腕輪から抽出されるエネルギーが抑えられないであります！フランカ、すぐにこちらに来てください！」

「91110031！（分かった！）」

その言葉通りにミラアルクとエルザの元にフランカがテレポート

でやって来た。そして、このままではシャトーごと押しつぶされると判断したエルザは、外壁をパージし、強引にエネルギーに逃げ場を作り出した。

空に向かって光が放出され、その中に繭が生み出される。

○○○

繭が出現したと同時に流れ出る不協和音によって雷が倒れ、意識を失ってしまった。そして彼女を回復体位で寝かせていたマリリアだったが、その隙にヴァネッサの自由を許してしまう。

「逃がさないッ！」

「フンガーッ！」

ヴァネッサ自身もマリリアを突破しないと脱出できないと理解しているからか、一直線に最短距離で追撃してくるマリリアの真っ向から突撃する。

そしてマリリアの短剣に向かって動かない腕を体の稼働で振り下ろす。短剣で受け止めたマリリアだったが、肩関節から腕が外れ、爆発した。

煙幕の特性を持っていたのか、周囲一帯に煙が充満し、目の前すらも上手く見えなくなる。

マリリアは倒れた雷を守るため、記憶を頼りに彼女の元に駆け寄って構えた。

「何処まで奔放なのッ?!」

「びっくりさせちゃった? だけどこちらも同じくらい驚いているのよ?」

煙の中からヴァネッサの声が聞こえてくる。元々ここからの離脱が目的の彼女のことだ、滅多なことが無い限り攻撃してくることはないだろうが、警戒を厳にする。

すると煙の中から何かが割れる音が聞こえた。恐らくはテレポータージェムだろう。煙が晴れると、周囲にはマリリア自信と雷を除いて誰もいなかった。

それと丁度のタイミングで、本部からやって来た回収班のヘリが到着する。当然、要請通り医療班も載っていた。

「雷をお願い」

「任せてください」

信頼のおける彼らに雷を任せ、自分は指令室に繋げる。

「本部！状況を教えて！」

『先日観測した、同パターンのアウフヴァッヘン波形を確認！』

『腕輪の起動によるものだと思います！』

現状分かっていることはそれだけだ。その為、それだけをマリアに報告する。

繭を見つめる弦十郎がつぶやいた。

「これがシエム・ハ……。アダムの予言した、復活のアナンヌキ……。シャトーの上に誕生した繭は、頭のような場所にある突起からレーザーを発射し、周囲を焼き払った。本部が言うには、今翼やクリス達がああ繭の元へ向かっているという。

マリアも彼女たちに合流するため、雷のみを案じながらも急行した。

○○○

翼たち残存組がヘリに乗って現場上空にやって来ていた。

繭の放ったレーザーがヘリの脇をかすめ、衝撃波に掴まる場所がなかった翼以外の四人が倒れ込む。翼が相手の姿を睨んだ。

「敵は大筒・国崩し！ヘリで詰められる間合いには限りがある！」

「それでも、ここまで来られたら……！」

「十分デス！」

装者たちはヘリから飛び下りる。切歌がイガリマを起動させた。

「Zeios Igalima Raizen Tron」

同じく全員がギアを纏った。戦域に入ったことで繭が敵対存在と認識したのか、頭のような部位を持ち上げ、見上げるようにしてレーザーを発射した。一すじのレーザーは複数本に枝分かれし、各装者を狙い撃ちする。しかし、狙いが正確であるため、防ぐことは容易い。

調はツインテールバインダーを展開し、先端の大型鋸を二枚重ねにして防ぎ、切歌は鎌を振り回していなした。翼が真つ二つに斬り飛ばし、響は拳で真つ向から対抗する。クリスはロケットをブースター代

わりにして空中を高速機動で回避した。

すると繭はレーザーでは埒が明かないと認識したのか、体中に巻き付いていた触手を高速で伸ばす。翼とクリス、響は触手の上を波乗りのように滑っていく。

「ッ?!」

三人の間をもう一本の触手が潜り抜け、調へと一直線に向かって行った。調は反射的にガードするが、当たる直前で間に切歌が割って入り、鎌を回転させて受け流した。

後ろから帰ってくるが、今度はブースターを吹かして回避し、鎌を振るって四方八方からやってくる触手を宙を踊るように捌いていく。

翼たちは先に地面に到達していた。

響が触手を相手にしている二人に叫ぶ。

「調ちゃん!切歌ちゃん!」

「機動性においては、こちらに分があるッ!雪音ッ!」

「おおよ!」

翼が先陣を切り、視覚外から伸びてくる触手は彼女を追うようにして走るクリスが砲撃で対応する。

「まずは距離を取りつつの威力偵察だッ!行けるなッ?!」

「……はい!」

「デエスッ!」

少し前までの翼とはちよつと違っていた。何かが吹っ切れている。だからこそ驚きを隠せなかった調達は一瞬顔を見合わせたか、すぐに応えた。

背後から触手が伸びてきていたが、調が足裏の小型鋸を回転させて距離を取り、切歌が鎌の曲線を利用して受け流す。調のスケートのよな動きは受け流しに最適だ。

本部でもその様子を確認している。

「装者応戦!ですが……」

「高次元の存在相手に有効な一撃を見舞えていません!」

触手を切歌は柄の長い鎌による反動を利用していただけでなく、体の動きも対応させてチャンスを見出していく。這うように突き進ん

できた触手を棒高跳びの要領で回避し、鎌を一本追加した。

そして二つの刃を十字に重ね合わせ、風車のような鎌を構築する。

高速回転する刃を鎖のように変化した柄で振り回し、勢いをつけて触手に叩きこむ。

『凶鎖・スタァ魔忍イイ』

高速回転する刃は鋸のように押し切り裂いたが、相手は神の力を使う高次存在。神殺し、もしくはそれに類するの力を持たぬ猪狩までは即座に再生されてしまう。

触手は何事もなかったかのように切歌を地面に叩きつけた。

「切ちゃん?!」

しかし、神を殺す力は一振り、存在する。

切歌を圧殺しようと押しつぶしにかかった触手を、バンカーユニットを全開にした響が上空から落下し、真っ向から粉碎した。

響の救援に切歌は笑みを浮かべるが、それは直ぐに驚愕に変わる。

「響さんー……ッ」

「なッ?!」

一本で破壊されるなら、複数本でと言うように十数本の触手が一斉に響のもとに集まり、彼女を縛り上げて膨大なエネルギーを流した。

収束したエネルギーはとてつもない破壊力を生み出す。その全てが響に集中していた。

響は足掻く。自分にはやらなければならないことがあるからと。

「負けられないッ……! 私は未来をッ……! 未来にもう一度ッ……!」

絞り出せるだけの力を発揮し、触手による拘束を何とか脱出する。が、同時に響の力も出し尽くしてしまったため、切り札であるガンダニールが解除されてしまった。

倒れ込んだ響のそばに調がやって来た。

「平気……!」

「分かっている。だから今は無茶できない……」

「へっちゃら……」

響は力なく倒れてしまう。そんな時にマリアが到着した。

「大丈夫?!」

「マリア! 姉さんは?!」

「雷のことは後! 今は……!」

翼がギアを纏っていない響の盾になる。

「切り札たる立花を失えば、それだけ後れを取ることとなる! ここは撤退し、態勢を整えなければ!」

「立てるか? 本部に戻るぞ!」

クリスが前線から後退し、響に肩を貸した。彼女と交代する形でマリアが前衛に回る。

繭のような存在は、まるで赤ん坊のような姿形をしていた。

## オートスコアラ―全機再起動

今はノーブルレッドのアジトとなっているチフォージユ・シャトー。

そこにある彼女たちが建造した、オートスコアラ―を利用したジェネレータールームにフランカ、エルザ、ミラアルクがそろっていた。彼女たちの背後から、コツコツと足音が聞こえてくる。今ここに帰ってくると思えば、リーダーであるヴァネッサしかいない。三人は直ぐに振り向いた。

「ヴァネッサ、帰還したでありますか」

「6211203334、33102228003443? (右腕、大丈夫?)」

「大丈夫よ、フランカちゃん。早速でごめんね。状況を教えて」

右腕を丸々一本失っているヴァネッサにフランカが心配そうに聞いた。が、彼女はサイボーグだ。意図的に痛覚を遮断することもできるし、切り離すこともできる。それは彼女も知っていたが、それでも心配してしまうのだ。

ヴァネッサの問いに、ミラアルクが答える。

「神の力は固着を開始。だけど、想定以上の質量に城外へと緊急パージしたのがこの体たらくだぜ」

「対応が間に合わず、時間稼ぎにフランカのパナケイア流体を濁らせてしまったであります……」

「12422234410275、0483221 (気にしてないよ、エルザ)」

「わたくしめらは気にするであります!」

大したことないと笑ってみせるフランカだったが、顔に流れる血液が紫色になっていた。そのおかげで顔に紫色の血管がうつすらと浮かび上がっている。

かなり息苦しいはずだが、彼女はそんなそぶりを見せない。訃堂から受け取ったソイル式血液も使わず、濁りで若干青くなった顔で笑顔を作っで見せる。



だからこそエルザはフランカの肩を掴み、叫んだのだ。

ヴァネッサが悲しそうな目を二人に向けた。

「遊びなしのいきなりすぎる展開はそういう……」

「遠からずこの場所は突き止められていたはずだ。むしろ神の力の顕現でシンフォギアを退けられたのは僥倖でだったってわけだぜ」

「そうだといいんだけど……」

未だ言い争いをしているエルザとフランカをよそに、真剣な表情でミアアルクが怪我の功名だと言う。

ヴァネッサは話を聞きながら、何故フランカが訃堂から受け取ったソイル式血液を補給したからなのか疑問に思っていた。とり合えず彼女をこのままにするのは危ないと思い、まだ残っていた二つの血液を補給させることに決めた。フランカは一人で二つ分の全血清剤を使うのだ。

「決戦となると、お荷物の処分は早めにすましておきたいところだぜ……」

ミアアルクが、後ろにいる倒れたままのエルフナインを見つめた。

○○○

先の戦闘で負傷した響と雷がメディカルルームのベッドで寝っていた。

「見た目以上に響君のダメージは深刻……。しかし、それ以上に……」

雷の方が深刻であった。言葉を濁したとはいえ、そのことを聞かされていたマリア達の表情は暗い。最年少であり、彼女を姉と慕う調や切歌は蒼白だ。

雷は今、脈拍が二百を超え、体温が七十度と、人間が耐えきれぬ基準をはるかに上回っている。普通は細（必要な改行？）

胞が死滅し、命の危険があるはずなのだが、彼女の表情は非常に穏やかだ。まるで深い眠りについていると言われても見分けがつかないほどだった。

それ以上に不可解なのが、雷の鼓動に合わせてケラウノスが明滅を繰り返しているということだ。これ以上はエルフナインでなければわからないため、今のところは経過観察することしか出来ない。

弦十郎は気持ちを切り替え、今動ける戦力でどうするかを考える。「だが響君は、翼の撤退判断が早くて最悪の事態は免れたようだ」「いえ、弱きを守るのは防人の務め。きつと奏だつてそうしたはずですよ」

翼は迷いを振り切つたように笑みを浮かべ、ほめられたことに照れて表情を赤くしていたが、そのことに弦十郎は違和感を覚えた。

そんな時、友里が呼び掛けた。

「指令！ マリアさんから提案のあつたデータの検証、完了しました」

「データの検証？」

「何デスか？ それ」

いつまでも沈んでいちゃいけないと調達も切り替えたようだ。二人は向かい合つた後、名前の出てきたマリアに顔を向けた。

マリアは腕を組む。雷に対して何もできない現状に自分に腹を立てているようだ。少しだけ声が荒立っている。

「腕輪から検知される不協和音に、思うところがあつてね……」

「あの音に、経年や伝播距離による言語の変遷パターンを当てはめて、予測変換したものになります」

「言語の変遷パターンを？」

藤堯がスピーカーにあの音を流した。

最初は聞くに聞けない不協和音だった旋律からノイズが取り除かれ、洗練されていくとどこかで聞いたような音が聞こえてきた。

特にそれを知っている調が聞き入り、切歌は耳に手を当ててすましている。

「この曲……確か姉さんが……」

「いつかにマリアが歌つてたデスよ！」

「知ってるのか？」

その曲を知らないクリスがマリアに聞いた。マリアは曲に耳を傾けながら口を開く。

「歌の名は『Appie』。大規模な発電所事故で、遠く住む所を追われた父祖が唯一持ち出せたわらべ歌。そしてなぜか、雷も知っていた歌」

雷自身は母親から教わったと思っているが、実は違う。マリアは雷の母親に『Apple』を聞かせていないし、当然雷にも聞かせていない。しかし、マリアとセレナが歌っていた時に現れた彼女が、突然歌を合わせ始めたのだ。

当初は他にも知っている人がいたと純粹に喜んでいただけだったが、大人となった今は疑問に思っている。

だが、マリアは頭を振ってその疑問を追い払い、目の前のことに集中する。

「変質変容こそしていますが、大本となるのは、マリアさんの歌と同じであると推察されます」

「アヌンナキが口ずさむ歌とマリアの父祖の土地の歌。そして、何故か二つと無関係の轟も知っている歌か……」

「フロンティア事変においてみられた共鳴現象……。それを奇跡と片付けるのは容易いが、マリア君の歌が引き金となっている事実を鑑みるに、何かしらの秘密が隠されているのかもしれないな」

弦十郎は顎に手を当て、装者たちは息を呑んだ。

「敵の全貌は、未だ謎に包まれたまま。それでも、根城は判明した。俺達は俺達の出来る事を進めよう！おそらくはそこに未来君とエルフナイン君も囚われてるに違いない！」

「「了解！」「」」

「アス！」

装者たちの意気込みは十分だ。

○○○

「すまない。突然のことだった故、そなたの体にいらぬ負担をかけてしまった」

暗闇の中、私に誰かが声をかけてきた。その声は男性のもので、厳しさの中に優しさのこもった声色をしていた。

「そろそろだとは思っていたが、これほどまでに早まるとは思ってもよらなかったのな。重ねて言おう、本当にすまなかった」

普通なら怒るところなのだろうが、なぜか私は怒る気になれなかった。私自身、いつか来ると思っていたから。根拠はないけれど。

「かねてからの約束通り、そなたの力を借りたい。そのことは知っているはずだ」

そんな約束はしたことはないし、記憶にも残っていない。でも、心は、魂は知っている。ずっと昔から、生まれた時から。ずっと。

「そなたの要求にもできる限り応えよう。ことが終わればすべて返す。ただ、あまりに予測できぬことがあった故な、完全ではないだろうが……全力を尽くさせてもらう。でなければ彼らに面目が立たぬし、武人としての恥だ」

暗闇の中に、光が迫ってきた。そしてその輝きは、私の体を暖かく包み込んだ。

○○○

ミラアルクが気を失ったままのエルフナインに向かって歩を進めた。そして鋭い、鋭利な赤い爪をすつと伸ばす。

フランカはソイル式血液の輸血のため、別室に運ばれていた。眠っている時ならテレパシーやサイコキネシスによる妨害が入らないため、こういう荒事をするなら今だ。彼女らの殺した死体は残らないため、証拠隠滅も簡単に出来る。よほどのことが無ければ気付かれないだろう。もつとも、隠し事をしなければならぬという心苦しきはあるが。

失った右腕を新しいものに取り換えたヴァネツサはミラアルクの肩をポンと叩く。

「新調した右手の具合を確かめなくちゃ。たまにはお姉ちゃんらしいところも見せないかね?」

ヴァネツサの右手が高速で振動を始めた。文字通りの手刀となり、拘束振動による切断力はなかなかの物だろう。

「神の力を神そのものへと完成するまでには、もうしばらくの時間が必要。フランカちゃんには悪いけど、それを邪魔する要因は小さくても取り除かなくちゃ」

「ッ」

エルフナインへと手刀を突き立てる。

が、すでに目を覚ましていたエルフナインは地面を転がってその一

撃を避ける。

「コイツ?!」

「気づいていたでありますか?!」

かなりギリギリのタイミングだったのだろう。エルフナインは肩で息をしていた。

「あら？自分が原因で世界に仇なしてしまった以上、生きているのも辛くないかしら?」

息を整えながら、エルフナインはゆっくりと立ち上がる。

「確かに昔の僕ならば……世界を守るために消えていいとさえ思っていました……。だけど……この体は大切な人からの預かりものです！今はここから消えたくありません!」

ヴァネッサがパナケイア流体を濁らせないために切っていた手刀を再び高速振動させる。そしてエルフナインに今度こそ引導を渡すために歩を進める。

「そう。だけどそれは聞けない相談ね」

「どうすれば……だけど僕では……!」

「次は外さないわ」ヴァネッサはすでに目の前に迫っており、後は手刀を振り下ろすだけとなった。

「誰かッ!」

エルフナインの叫びは誰にも聞き届けられず、ヴァネッサの手刀で命を散らす……はずだった。

ハイヒールが地面を叩く音と共に、硬質な金属が振り下ろすのを妨げていた。

突然の横入りにヴァネッサだけでなくエルフナインも驚愕する。

「な、なんなのツ?!」

「ソードブレイカー……。そのひと振りを、貴女が剣と想うなら!」

否、金属ではなく剣。哲学兵装。剣を破壊する剣。ソードブレイカー。そしてそれを操るは風のオートスコアラ、ファアラ。

ファアラは振り下ろしをはじき返し、ヴァネッサは思わず後退した。そして彼女が拘束振動する手刀を剣と定義していたことにより、爆散する。

「日に二度もツ?!」

「しつかりするであります!」

フアラの目覚めに呼応するように四つの棺桶が黄色、赤、青、紫と光を放ち、煙の中から影が飛び出した。

「先手必勝! 派手に行くツ!」

煙の中から現れた土のオートスコアラ、レイアがコインを指の間に作り出し、一気に投擲した。

放たれたコインはヴァネッサたちを後退させ、そこに最強の炎のオートスコアラ、ミカが追撃をかける。

「あはははは! ちゃぶ台をひっくり返すのはいつだって最強のあたしなんだゾ!」

カーボンロッドを思いつきり振りかぶったミカは体も回転させ、エルザとヴァネッサに叩きつけ、吹き飛ばした。最も戦闘慣れしていて何とか回避することが出来たミラルクが『カイロプテラ』を腕に巻き付け、剛腕をミカに叩きこもうとする。

「調子にツ……?!」

「こんなの、玉乗りする方が難しいYO☆」

『カイロプテラ』で強化したはずの剛腕を、足一本で受け止められている。ミラルクは力の限り踏ん張るが、びくともしない。

最恐のエーテルのオートスコアラ、ルシフが嘲るような声色で、にたあつと笑っていた。そして受け止めていた足を何事もなかったように下ろし、そのまま後ろ回し蹴りを理解が追いついていないミラルクに叩きこんだ。

速くもなく、力が入っていない蹴り。しかし、その威力は先ほど打ち込んだ剛腕の一撃が上乘せされているものだった。ミラルクの体がボールのようにヴァネッサたちのところにはね飛んでいく。

大量の煙がまい、その中から五体のオートスコアラと水のオートスコアラ、ガリイに抱きかかえられたエルフナインが現れる。

「あなた達は……炉心に連結されていた廃棄躯体の……」

「スクラップにスペアボディ? 呼び方はいろいろあるけれど、再起動してくれたからにはやれるだけのことはやりますわよ!」

「マスターのようでマスターでない、少しマスターっぽい誰かだけど、マスターのために働くことが私達の使命なんだゾ！」

「この身に蓄えられた残存メモリーを、エネルギーに利用しようと思論んだようですがそうは参りません」

「ほとんどのエネルギーを賄ったボクに感謝してよNE☆！あれ、ボクがいなけりやメモリーなんてあつという間になくなるんだかRA☆！」

「さてマスター。今後の指示を頼む。このまま地味に脱出するもよし。無論派手に逆襲するも……」

「だったら、やりたいことがありますッ！」

たとえばのような無理難題であろうとも、マスターのオーダーに應えるのが騎士たちの務めだ。マスターの願いをかなえるべく、壊れた騎士たちは命の限り力を尽くす。

## 奇跡の殺戮者

突如本部に、外部からの通信が入ってきた。専用回線であるため、この通信を繋いできたものは関係者ということになる。

友里が報告した。

「司令！外部より専用回線にアクセスです！」

「専用回線だと……？モニターに回せるか？」

「はい！」

関係者だということは分かるが、このタイミングで誰が通信を繋いでくるのが分からなかったため弦十郎はいぶかし気だ。

八紘なら普通に繋いでくるだろう。訃堂ならコールすらなく強引に来る。そもそも、通信機があるのだから外部から専用回線へつながり必要などないはずだ。

弦十郎は警戒しつつ、モニターに繋げと指示する。

するとメインモニターいっぱいになり、ガリイとレイアの顔が大きく映し出された。倒したはずのオートスコアラーがいるという、あまりに突然のことだったため、藤堯が思わず椅子から飛び退いて悲鳴を上げる。

すると二体のオートスコアラーを押しつけてエルフナインが顔を出した。

『ごめんなさい！僕です！』

「エルフナイン君?!」

エルフナインはチフォージユ・シャトーにある外部から持ち込まれたコンソールを利用し、無事とこれからの事を伝えるためにS・O・N・G・へ通信を繋いだのだ。

メモリー消費の激しいミカは一時稼働を停止し、そんな彼女の目の前で大玉に乗って暇をつぶしながら周囲を警戒しているルシフを背に、エルフナインは用件を伝える。

「通信を行った以上、捕捉される可能性があるため要点だけ手短に！現在地点は、チフォージユ・シャトー内部！僕と未来さんはここにいます！」



『未来さんも……そこに……!』

『つたりめーだあ! そう信じていたから無茶してきてんだ! あたしらも……あの馬鹿共も!』

クリスが未来が無事であることに安堵し、こぼれてきた涙を乱暴に拭った。

『これからオートスコアラー達の助けを借りて、未来さんの救出に向かいます。神そのものへと完成していない今なら、まだ間に合います!』

「君が?! 無茶だ!」

『そう、無茶ですッ!』

エルフナインに戦闘技能などない。そんな彼女が敵の本拠地で敵の目的を何とかしようとしている。あまりにも無茶無謀であるため弦十郎は引き留めようとしたが、エルフナインがそれを力強く突っばねる。

捨て鉢になったからではない、彼女の瞳には覚悟の炎が宿っていた。その覚悟と熱意が、弦十郎をたじろがせる。

『だからッ! 応援をお願いしますッ!』

そろそろ行動開始だと流れを読んだルシフがミカを再び再起動させ、すぐに動けるようにスタンバイする。

「ここは敵の只中です。どうしたって危険が伴うのであれば戦うしかありませんッ!」

『ッ』

弦十郎が一瞬逡巡するが、深く息を吐き、決断する。エルフナインは非戦闘員だ。しかし、彼女が最も状況打開に近い以上、この道しかない。

この場に神を殺すことが出来る響と、神に匹敵する力を持つ雷が居ない。決め手に欠けている以上、錬金術の知識があるエルフナインに賭けるしかなかった。

『……こちらも負傷で神殺しと雷帝を欠いた状態にある。救出に向かうまで何とか持ちこたえてほしい。頼んだぞ!』

「この局面に響さんと雷さんは……」

『救出に向かうまで、何とか持ちこたえてほしい……！頼んだぞ！』  
「はいッ！」

「三名様ご案なあI☆……！」

周囲の警戒を担当していたルシフの声に全員が振り向いた。そこにはヴァネッサ、エルザ、ミラアルクの三人がそろっている。

レイアがエルフナインを庇うように前に立つ。

「地味に窮地……。今度は流石に不意をつけそうにないかと」

『テール・アタッチメント』を取り付けたエルザが巨大な牙を持つ尻尾で第一打を加える。衝撃に土煙が舞った。

「二人とも！」

しかしフアラがソードブレイカーで受け止め、それをレイアが補助している。完全躯体ならば余裕だったのだろうが、今の彼女達は廃棄躯体。フルパワーを出すことが出来ないため、二人でないと受け止めきれないのだ。

「ここは私達に。ガリイにはマスターのエスコートをお願いするわ」

「任せて。目的地までの道のりは、ここに叩きこんであるから」

ガリイの体から可愛らしいカラコロという音が鳴った。

それを確認すると、フアラが風の錬金術を発動し、その風圧でエルザを押し返す。

「エルザちゃん！」

「エルザ！」

そんな彼女のそばに、ヴァネッサとミラアルクが駆け寄った。

レイアとフアラは全力が出せないながらも正面から相対し、顔を向けることなく言う。

「ミカとルシフも一緒に！」

「お前たちがついていれば、私もフアラも憂いがない！」

「元氣印の役割は心得てるゾ！」

「お任せあRE☆！」

ミカが異形の爪を持ち上げて元氣よく応え、ルシフが軽快に大玉から飛び下りて着地した。

ミカはカーボンロッドの生成数に限界があり、全力稼働のバーニン

グハート・メカニクスが使えない。ルシフはエーテルサーキットが試作型であるため安定性にかけて、受けきれぬエネルギー量に限界がある。と、完全躯体でないため不安を抱えているが、それでも彼女たちは最強で最恐なのだ。

そんな彼女達と共に、ガリイに手を取られたエルフナインは目的地に向かって走り出す。

「マスター！今のうちに！」

「ごめん……違う！ありがとう！ファラ！レイア！」

ありがとう。そんな初めていわれた言葉に、二人は頬を綻ばせ、騎士としての役割を全うする。

「行かせないぜ！」

真つ先に切り込んだミラアルクの進路を、ファラの風の錬金術が道を妨げる。彼女は思わず後退した。そして竜巻のような風の中からコインをトンファーに錬成したレイアが強襲する。

「ッ！」

ミラアルクの防御をトンファーの強打が打ち破る。ファラのフラメンコのようなステップにレイアが合わせ、背中合わせに並び立つ。ソードブレイカーを主の敵に突きつけ、トンファーを構えた。

「この道は通行止めです。他を当たっていただきましょう！」

「ああ。行かせるわけにはいかないな」

ファラとレイアを残し、祭壇へと向かっているエルフナインたちは上階へと昇るべくエレベーターに乗り込んでいた。

完全躯体ではない二人を残していったことにエルフナインの顔色は不安げだ。

「ファラとレイアなら……きつと大丈夫ですよね？」

「……」

同じく完全躯体ではないガリイとミカ、ルシフの三体の反応は芳しくない。しかし、それでも主の心配を少しでも和らげればとガリイが強がって見せる。

「不足はいろいろありますが、それでも全力を尽くしています。だからマスターも全力で信じてあげてくださいいな」

「あ！A☆ー！マスターを笑顔にするのは道化であるボクの役目なのNI☆ー！」

「早い者勝ちです」

軽口を叩き合う二人だったが、ガリイの腕はまともに動いておらず、サーキットからのエネルギー供給が不安定なのかルシフは時々動きがぎこちない。それでも、笑顔を作っていた。主であるエルフナインを不安がらせないように。

すると急にエレベーターが止まった。ミカが腕を広げ、三人を守る盾となる。

エレベーターの扉がへこみ、ひしゃげ、『カイロプテラ』で強化された剛腕が扉を強引にこじ開けた。

「待たせたなあー！お仕置きの時間だぜー！」

「ぞなもしー！」

ミカがクロスガードで受け止めようとしますが、腕を掴まれて投げられてしまった。勢いで扉が吹き飛ぶ。

ガリイが両手をお手上げだと上げる。しかし、諦めてはいない。

「あくもくー！しつちやかめつちやかく」

その証拠に、すぐにエルフナインの手を取って目的地に向かっていく。そして彼女の背後を守るためにルシフがしんがりを受け持った。移動中に停止したため中途半端なところに止まってしまったエレベーターから飛び下り、エルフナインを傷つけないように抱えて着地した後、駆け出した。

「させないぜー！」

ミラアルクが妨害するために飛び掛かったが、横合いからのミカの突撃を喰らって地面を転がり、抑え込まれる。廃棄躯体とは言え、高出力から成るパワーがオートスコアラ―随一なのは健在だ。

「こ、このおー！」

「マスターを頼んだゾ。そんな楽しい任務ほんとはあたしがしたいけど、この手じゃマスターの手を引くことなんてできないから。残念だゾ」

「ミカ……」

「わかってる！あんたの分まであたしに任せて！」

「本当の最強はどっちか、まだ決めたないんだからNA☆！全部終わってからの楽しみだZO☆！」

「分かってるゾ！」

ミカの気持ちを受け取った二体は、エルフナインを守りながら先へと進む。

エルフナインは引つ張られながら、

「ミカ！だけど……かっこいいです！ミカのその手、大好きです！」

異形の手を褒められる。初めて言われた言葉にミカは笑みを浮かべた。その隙に拘束を振りほどかれ、殴り飛ばされたが、今のミカには痛くもかゆくもない。

「褒められたゾ！照れくさいゾ！」

「廃棄躯体がなめてくれるぜ！」

「こうなったら照れ隠しに邪魔者をぶっ飛ばしちゃうゾ！」

先へ進んだエルフナインたちの目の前に、高速でミサイルが飛翔して来た。ガリイは氷で盾を作ろうとしたが、それよりも速くルシフの前に立ち、右腕で受け止める。接触したことで信管が反応し、爆発した。

「ッ！」

「流石はエーテルってどこかしら？」

暗闇からヴァネッサが現れる。

しかし、エーテルサーキットの不完全さからエネルギー吸収が完全ではなく、受け止めた右手の指が二本吹き飛んでいる。一瞬だけ表情を歪め、しかしすぐに道化のように笑みを浮かべた。

「ここはボクに任せRO☆〜！」

「ルシフ！」

エネルギー供給が不十分であるため、ぎくしゃくした動きのままにたあつと笑ってみせる。くるつとその場で逆立ちして、上下逆さまにエルフナインに顔を向けた。

「道化は道化らしく、大袈裟にふざけて見せるSA☆！」

次いで放たれた二発目のミサイルを、逆立ちからブレイクダンスに

移行して蹴りで軌道を逸らす。

足止めをルシフに任せ、エルフナインはガリイに引つ張られて先に進む。

「最高のショーを期待してるわよ！」

「ルシフ！ルシフの芸は世界で一番です！ずっとずっと見ていたいです！」

「当然だYO！ボクは世界一なんだかRA☆！」

認められる。初めて誰かに認められたルシフは二人から顔をそむけ、当たり前前だと口にしたが、声が上がって満面の笑みを浮かべているのがまるわかりだ。

ガリイがエルフナインを抱きかかえて錬金術でスケートのように滑り、ふらつきながらも祭壇の前まで到達した。

「あそこです！」

「あの向こうに、未来さんが！」

「ッ！」

「何を?!」

突然ガリイがエルフナインを放り投げた。そして彼女にロケットパンチが突き刺さり、内部機構を粉碎されながら吹き飛ばされる。

「ガリイ！」

「やつと追いつけたわ……」

そこにはヴァネッサとミラルク、エルザがいた。つまり、オートスコアラーは全機破壊されたのだ。ファラとレイアはかみ砕かれ、ミカは粉碎され、ルシフは内部から破裂した様に破壊されている。

そして最後に残ったガリイの腹部にはロケットパンチが突き刺さったままになっている。

エルフナインはガリイに駆け寄り、抱き上げた。

「ガリイ……僕を守るために……」

「いやですよマスター。性根の腐ったあたしが、そんなことするはずないじゃないですか……」

普段通りに振舞おうとするが、その声に力がない。

エルフナインは耐えきれず、涙をこぼす。

「だけど……!」

「もつと凜としてくださいまし。あたし達のマスターはいつだって、そうだったじゃないですか……」

「キャロルは……」

こんな芝居に付き合う気はないのだと、ヴァネッサがガリイを蹴り飛ばした。ガリイの体は力なく宙を舞う。彼女の体に突き刺さった自身の腕を回収した。

「手に余るから、足で失礼しちやいます」

「ガリイ……みんな……」

「手間を取らせやがるぜ」

「みんなは僕のために……」

「だけど、それもここまでであります!」

「じゃあ僕はみんなのために何を……」

「あなたにできることは……!最早一つ!」

ヴァネッサは跳躍し、エルフナインに向けて飛び蹴りを繰り出した。そして脚部の装甲が展開し、中から電撃が迸る。

蹴りがエルフナインに直撃する。その直前だった。

「みんなのために僕はッ!」

涙のきらめきを散らしながら、右てを突き出した。そして右腕を中心に特大の防御陣が展開される。ヴァネッサの蹴り程度ではびくともせず、逆に弾き飛ばした。

「何なの?!」

ヴァネッサたちは驚愕するが、エルフナインは自然な動作で左手を横に突き出し、転送用の錬金陣を構築。そこから紫色のハープ。そして“彼女”は静かに、その弦を爪弾いた。

ハープが変形し、伸びた弦がボディースーツを形成、ハープ本体は変形してバックパックとなる。

「それですよマスター……あたし達が欲しかったのは……」

「この土壇場でデタラメな奇跡を!」

ガリイが完全に機能を停止する。

「奇跡だど?」

彼女から放たれる圧倒的な覇気にノーブルレッドはたじろぐ。

そのハープの名はダウルダヴラ。ケルト神話の主神、ダグザが用いたとされる豎琴の聖遺物。錬金術師のシンフォギア、ファウストロブ。そしてその持ち主は……！

「冗談じゃない！俺は奇跡の殺戮者だッ！」

彼女の名はキャロル・マールス・デインハイム。かつての強敵。四大元素を自在に操る最強の錬金術師。奇跡の殺戮者が、ここに復活した。



## 鎧袖一触

ダウルダヴラの起動は、アウフヴァツヘン波形となって本部でも観測された。

「チフオージユ・シャトー内部にて、新たなるエネルギーを検知！」

「これは……アウフヴァツヘン波形！」

「ダウルダブラ……だとお?！」

弦十郎が身を乗り出して驚愕する。

その反応も当然と言える。何せ、ダウルダヴラはキャロルが魔法少女事変で身に纏っていたモノ。そしてそれは、碧の獅子機と共にエクストライブを発現させた装者たちによって破壊されていたはずだ。しかし、波形だけでその存在を目視していないとはいえ、現実として復活しているのだ。

シャトー内部で復活したキャロルはしばし物思いにふけた後、目の前にいる敵を認識する。

「思えば……不要無用と切り捨ててきたものに救われてばかりだな……」

キャロルの脳裏に、エルフナイン越しに見てきたオートスコアラたちの姿が蘇る。廃棄躯体というまともに動くことが出来ない体であるにもかかわらず、彼女達は主であるキャロルとエルフナインの願いをかなえるべく全力を尽くしたのだ。

例えその結果が自分たちの完全な機能停止であろうとも。

「ありが……」

「似合わないことにひたらせないぜ！」

ミラアルクがキャロルの感傷に踏み入った。

『カイロプテラ』によって強化された剛腕だが、響の全力攻撃すら真正面で受けきって見せたキャロルにとってこれを防ぐなど造作もない。むしろ歌によるブーストがない分はるかに容易い。

目の前の存在が模造品でないことにヴァネッサたちは驚愕する。

「声音を模したわけでなく、あれは……!」

「衰退したキャロルでありますか?!」

力による突破は無駄だと判断したミラアルクは後退する。

キャロルはけだるそうに、しかし静かな怒りを声に込めて吐き捨てる。

「俺の感傷に踏み込んできたのだ。それなりの覚悟はあってだろうな！」

「あああッ！」

エルザとミラアルクが接近戦のために距離を詰め、ヴァネッサが指の機関砲を連射する。しかし、たかだか機関砲ごときがキャロルに効くわけもなく、防御陣でたやすく受け止められる。

ミラアルクが背後から接近したが、キャロルは顔を向けることすらせずに腕だけで弦を操作して拳を受け止め、回し蹴りも弦でからめとって放り投げる。

エルザが頭上から『テール・アタッチメント』でかみ砕きにかかるが、こちらもさして気にしたそぶりも見せずに弦を操作し、その反発を用いてはじき返す。

エクストライブの七人がかりでようやく拮抗するのだ。記憶の焼却が出来ないため当時よりも出力は落ちているだろうが、それでもその戦闘能力は圧倒的だ。

「バレルフルオープン！お姉ちゃんも出し惜しみしてらんない！」

ヴァネッサは体中の砲門という砲門を開き、今打てるだけのミサイルを大小問わずに打ち尽くす。それは避けようとしてもしないキャロルに着弾し、爆炎と共に真っ黒な煙が巻き上がって見えなくなる。

「やったぜ！」

「まだ歌が聞こえるでありますよー！」

全弾命中したことにミラアルクが歓喜するが、エルザの言う通り歌は途切れていない。その歌声に一切の乱れはなく、一つも有効打になっっていないことがわかる。

煙が晴れると、そこには防御陣を全周囲展開して平然としているキャロルがいた。そして役目を終えた防御陣を閉じ、四大元素全ての鍊金陣を展開し、一斉発射する。あまりの威力に地面がえぐられる。

「同時階差の四大元素を?！」

普通の錬金術師が出来る芸当ではない。パヴァリア光明結社最高幹部ですら不可能なことを、キャロルはいとも簡単にやってのける。一斉に発射された四大元素がノーブルレッドに襲い掛かる。

三人は身を寄せ合い、エルザの尻尾をシエルターにして何とかやり過ごす。

「さすが……たった一人で世界と敵対しただけのことはあります……！」

固まっているならまとめとめて、貫通力を引き上げた攻撃をキャロルが放ったが、三人はそれを何とか分散して回避した。

シャトー内部ではキャロルが猛威を振るっているが、S. O. N. G. 内部は混乱を極めていた。

「状況の確認、急いでください！」

「そんなことよかさつさとあたしらが直接乗り込んで……」

「分かっている！だが無策のままに仕掛けていい相手ではない！」

「とはいえだなあ……！」

クリスがここにきて焦りを見せていた。

弦十郎もそんなことは重々承知なのだ。しかし、相手の手中には神の力がある。そう簡単にゴーサインを出すわけにはいかないのだ。

「焦らないで！チャンスはきつとあるはずだから」

「俺たち銃後もその瞬間を信じている！」

何とか分散して一斉撃破を回避しようとするノーブルレッドだが、それをキャロルが許すわけがない。彼女は弦を振るって退路を断ち、一か所に集中させる。

一か所に集まったことを確認したキャロルはバックパックを展開し、重力子を圧縮、小型のブラックホールを生み出した。

「まさか……超重力子の塊を……?!」

「高くつくぞ……オレの歌はアアアッ！」

「逃げて！」

準備段階ですら肌に感じる圧倒的、暴力的な威力。脳裏に免れぬ死という現実を叩きつけられつつも、動物的な生存本能で逃げようとするが間に合わない。三人が完全に死を受け入れかけたその時、体を突

然な浮遊感が襲った。

キャロルがバックパックを閉じ、自身が生み出した目の前のクレターを見下ろす。

「破壊力が仇に……だが逃がすものか！」

（キャロル！待ってください！）

「ん？」

完全に滅殺しようとする追撃をしかけようとしたキャロルだったが、それをエルフナインが引き留めた。

「何だ?!」

（今は彼女達を追うよりも、未来さんを救出するのが先です!）

「ツ……。正論を……。だが聞いてやる」

（あ、あと!）

「何だまだあるのか?!」

要件は言い切っただろうとキャロルがめんどくさそうに言った。しかし、エルフナインはどこかうれしそうだ。

（キャロルには感謝しないと。おかげで助かりました）

「こ、この体は俺の物だ!お前を助けたわけではない。礼など不要!」  
不要といっているが、露骨に狼狽えている。その証拠に少しでも早口になっていた。復讐を誓ってから今まで、始めた感謝されたのだから当然だ。エルフナインがにつこりと笑った。

「それでも……」

キャロルはそばにいる、完全に機能停止したガリイへと視線を向けた。

「アイツ等には手向けてやってくれないか?きっとそれは、悪党が口にするには不似合いな言葉だ」

（うん……。レイア、ファラ、ミカ、ルシフ、ガリイ……。ありがとう……）

役目を終えた騎士たちは、主を守り切ったのだ。そしてその主から感謝される。騎士としてこれ以上の誉れはないだろう。

ガリイたちの表情は壊れたにもかかわらず、どこか満足げだった。

○○○

混乱を極めていたS・O・N・G.だったが、ようやくすべての準備が整い、落ち着きを見せていた。

「ヘリの発艦準備は完了です。いつでも……」

「ああ。だが……」

「ツ?!」

急に外部から専用回線で通信が入った。メインモニターに思わず目を向けると、そこにはダウルダヴラを纏ったエルフナインがいた。

「その姿は……」

『久しいな……とは言っても俺はお前達の事は見ていたがな』

その声色と口調から、相手が経緯や手段は不明だが、復活したキャラクターであるとすぐに推察する。

そしてその通りなのか、弦十郎がキャロルに問うた。

「本当に……キャロル・マールス・デインハイムなのか？ 一体、どうやって……」

『脳内ストレージをおかしな機械で観測してた奴がいてだな。そいつが拾い集めた思い出の断片を、コピペの繰り返しで強度ある疑似人格と、錬金的に再構築しただけだ』

「だけ……なんだ……」

「コピペ……。最先端な錬金術デスね……」

さりとて言っているが、キャロルの体である自分の頭の中を覗き、その中から焼却した彼女自身の思い出を抽出して形にする。簡単にできるものではない。こんな事、圧倒的な集中力と能力を強化した最高質のホムンクルスにしか出来ないことだ。

しかし問題はそこではない。元はキャロルの体とは言え、エルフナインの意識はどうなっているのかだ。

「エルフナイン君はどうなっている？」

『安心しろ。今の主人格はこの俺だが、必要であればあいつに譲ることは不可能ではない。エルフナインたつての頼みだ。脱出までの駄賃に小日向未来を奪還する。その為にお前達の暇そうな手と轟雷のプランを貸してもらおうぞ』

「すまないが……雷君の手は借りられない……。彼女は今、意識を

失っている」

『何?!……奴なら何か考えがあると踏んだのだが……まあいい。お前達だけでいい』

「その物言いに物言いなのだが……」

翼が物申そうとしたが、マリアが手で彼女の口をふさぎ、マリアが代わりに口を開いた。

「私達に手伝えることなの?」

雷を名指しで指名するほどの事の代わりが務まるのか、マリアが気になっているのはそこだった。

『お前たちに頭脳労働など期待していない』

そう言つてキーボードをタイプし始めた。モニターに映る映像が切り替わり、赤子のように形を変えた繭が映る。

『このデカブツを破壊してもらおう』

「それが出来ればアタシらも!」

『出来る』

苦労はないと続けようとしたクリスに対し、さも当然のようにキャロルが断言した。その根拠と自信は、キャロルのいる場所が場所だからだ。

「ここはチフォージユ・シャトー。その気になれば世界だって解剖可能なワールドデストラクターだ」

(確かに僕は聞きました!)

気絶していたふりをしていた時にヴァネッサが言っていた。神の力が神そのものへと完成するまで時間がかかると。

「残された猶予に全てを懸ける必要がある。お前達は神の力、シエム・ハの破壊を。そして俺たちは、力の器たる依代の少女を救い出す。二段に構えるぞ!」

かつての強敵こそが今の仲間。これほど頼もしいことはない。

## フオニツクゲイン

死を覚悟したヴァネッサたちだったが、何時まで経ってもその瞬間が来ない。恐る恐る周囲を見渡すと、ここは全血清剤を打つために使っているベッドがあつた。

「14111514102? (怪我はない?)」

「フランカ……」

そのベッドに、輸血を行っていたはずのフランカが腰かけていた。腕には赤いソイル式血液の流れるチューブがつながれており、今も輸血をしているようだ。少し前よりも顔色がよくなっていることから、もうそろそろ終わるころだろう。

「助かったぜ……」

「助かったであります」

「335030231222612233 (どういたしまして)」

につこりとフランカが笑う。

それにつられて頬がほころんだヴァネッサだったが、今は事態が事態だ。気を引き締めて、気乗りしないが報告のために訃堂に通信を繋ぐために、そばに置いてあつたコンソールに歩を進めた。そのことにテレパシーで気付いたフランカは不機嫌そうに眉を顰める。

通信を繋ぐとすぐに訃堂が出てきた。そしてあらかたのことを報告すると、何時も不機嫌な顔をしている訃堂が更に眉根を寄せた。

『儂きかな』

「ツ……!平らかにお願いしますわ……」

ヴァネッサも取引の都合で仕方なくしているようで、彼と顔を合わせることは出来る限りしたくないようだ。視線をわざと逸らしている。

「多少の想定外があつたとはいえ、顕現の力は順調……いふなれば、ここが正念場です。全霊にて邪魔者を排除してみせましょう」

『無論である。その為にお前たちには稀血を用意してきたのだ!』

「心得ております。ですから何卒、神の力の入手の暁には私達の望みである人間の……」

訃堂は自分の用件だけ伝えたと、ヴァネッサとの通信を一方的に終了した。そのことに彼女は舌打ちを打ち、悪態をつく。

「クソジジイめ……!」

「こうなったら、やってやるであります!」

「ああ!うちらだつて正面突破できること、見せつけてやるぜ!」

エルザが息まき、ミラアルクが決意する。彼女達にフランカが前々から持ってきていたアタツシケースから全血清剤を三つ取り出し、手渡した。少し足取りがおぼつかないようだが、目が覚めたばかりで能力を使ったのだから致し方ない。

「5102, 1584 (はい、これ)」

「ありがとうございます」

「目が覚めたばかりだったのに、すまないぜ」

「ごめんね、フランカちゃん……」

「020245020245。91312265、41421122

31021181 (いいのいいの。私も、何かしたいから)」

彼女は深く息を吐き、笑ってみせた。

通信が切れた後、鎌倉にいる訃堂は自らの計画の完遂が間近であることに悦に浸る。

「遠からず神の力は我が物となり、危惧すべき神殺しの対抗策のみ。フフフ……フハハハハハ!」

その姿に、国を守りし防人の姿は何処にもなかった。あるのは、力ですべてを我が物にしようとする悪鬼の姿であった。

○○○

日が傾き、オレンジ色に染まった海辺で響と未来は向かい合っていた。

「やっぱり私、響の友達じゃられない……」

未来はそう言つて、響の前から離れていく。響は全力で追いかけるが、何処まで行つても追いつけず、逆に距離は伸びていくばかりだ。未来に向かつて手を伸ばす。

「行っちゃ駄目だ!行かないで!未来!」

「響……」



「雷！未来が……遠くに……」

いつの間にか背後に立っていた雷に響が振り向き、消え入りそうな声で彼女に手を伸ばした。あの時言った、自分だけじゃダメなときは頭でもなんでも貸してあげるとい言葉信じて。

伸ばした手が雷に届く。その瞬間だった。

「ごめん……」

「え……？」

響の伸ばした手が空を切る。

雷の金の瞳は青色に変わっていて、髪からは赤い燐光が舞っている。周囲には光の粒子が漂っていた。雷は微笑み、響の前から粒子となくなって姿を消した。

○○○

キャロルは冷静に未来と神の力との切り離しを行っていた。かつて自分の計画を逆手に取って攻略して見せた雷が居れば、彼女のプランと自身のプランをすり合わせて最適なもの出せた筈だ。しかし、意識を失っているのなら仕方がないと、悪態と妥協の想いを抱きながら準備を着々と進める。

粗方の解析が完了し、錬金術で外に出ている赤ん坊のような繭に目をやった。

「どうやら城外の不細工は巨大なエネルギーの塊であり、そいつをこの依代に宿すことが儀式のあらましのようだな」

（祭壇から無理に引きはがしてしまうと、未来さんを壊してしまいかねません……）

「面倒だが、手順に沿って儀式を中断させるほかになさそうだ」

キャロルがそう口にする、エルフナインは驚いたような顔をしている。どうしたと振り向くと、何故かエルフナインは笑顔を浮かべていた。

（意外だなと思って。僕はまだ、キャロルのことを全然知らないんですね）

一瞬キャロルの思考が停止する。そして言っている意味を漸く理解した。

「……そうじゃない！ 気に入らない連中に貸しを押し付けるチャンスなだけだ！」

(はいー)

照れ隠しなことを見抜いているエルフナインは朗らかに返事していた。

そしてそれはさておきと、ようやくやって来た装者たちのへりを確認する。ここからが正念場だ。

「さて……連中もおっとり刀で駆けつけてきたようだな。こちらも取り掛かるぞ！」

繭の元へと到着した翼たちは既にシンフォギアを纏っており、へりから飛び下りて並び立つ。

『各員、チフォージュ・シャトーに取り付き成功！』

『これより作戦行動を開始します！』

『完成したリンカーと昨日までの訓練は……！』

「きつと今日のためにあったのデス！」

キャロルによって未来を助け出すための計画が説明される。

『古来より人は、世界の在り方に神を感じ、しばしば両者を同一のものと奉ってきた。その概念にメスを入れるチフォージュ・シャトーであれば攻略も可能だ』

「これも一種の哲学兵装……ですが今のシャトーにそれだけの機能と出力を賄うことは……」

神の誕生は自然崇拜によって生まれたもの。それならば自然が生まれる場所である地球を分解することが出来るシャトーならば可能という訳だ。

しかし、それには懸念材料があった。シャトーを起動させるためのエネルギーと、かつての作戦で内部に解剖の光が照射されているということだ。前者はともかく、後者は作戦において致命的となる。

『無理であろうな。だが、チフォージュ・シャトーは様々な聖遺物が複合するメガストラクチャー。であれば他に動かす手段は想像に難くなかろう』

「フオニックゲイン……」

『想定外の運用故に動作の保証はできかねるが……。安心しろ、機能自体は理論上稼働する。もともと世界解剖の光を放つことが出来るのだ、メインシステムが耐えきれなくてどうする』

要は本来の運用方法なら問題なく動かせるが、今提示した運用方法では起動を保証できないということだ。

しかし、イチかバチかとは言え光明が見えたのだ。乗らないわけがない。

「やれる……。やって見せる！」

「あの頃より強くなつた私達を見せつけてやるデスよ！」

「それでもこれだけ巨大な聖遺物の起動となると、五人がかりでも骨が折れそうだ……」

今は響と雷という、フォニックゲイン束ね重ねて増幅することが出来る者が欠けているため、全開出力であつても最大値には至らない。しかし、彼女達は命を懸けることで限界を超えようとする。

「ああ。だが私達には、命の危険と引き換えにフォニックゲインを引き上げる術がある」

「絶唱がある」

翼とマリアが頷き合つた。

二人がいらないため絶唱のバックファイアをもらに受けてしまうことになるが、背に腹は代えられない。

「準備は出来ているな？行くぞー！」

五人の絶唱が戦域に響き渡る。

S2CAでもなければ、オーバーライズでもない。ただの絶唱。しかし、彼女達は自分たちの歌に全てを賭ける。文字通りの『命を絶する唱』。

膨大なフォニックゲインが迸る。旋律がバラバラで、足並みすら揃っていないフォニックゲインは暴れまわり、エネルギーが拡散していく。それ故にばらつきが生まれ、シャッター起動にまで至らない。

「上昇した適合係数が……。バックファイアを軽減してくれているがツ……！」

「それでも長くは持たないわよッ！」

「なぜ……なぜ反応しないチフォージユ・シャトーツ……！ 私達の最大出力をもつてしても、応えるに当たらずとも言うのか?!」

体にも限界が近づいており、血を吐き、血涙を流す。その様子をキャロルは冷静に眺めていた。

（連中のフォニックゲインが俺程でなくとも、仲間と相乗することで膨れ上がるはず……。だのになぜ二人が欠けているだけで……）  
（もしかーそれはー）

キャロルの疑問に長らく後ろから見てきたエルフナインが気付いた。しかし、その気づきをキャロルに伝えるのを背後で起きた爆発が遮った。

キャロルが煩わしそうに振り返る。

「こつちはこつちで……たかだか一人増えた程度で、そのまま逃げていればいいものを。そつちからやってきたということは余程の理由があるのか。戦う力を手に入れたか」

今度はフランカも一緒にいるが、彼女はヴァネッサの後ろに隠れている。彼女は体自体は十三歳の少女のままであるため、真つ向勝負が出来ないのだ。

ヴァネッサの両腕の機関砲をキャロルが防御陣で防ぐ。キャロルは呆れたように、

「何を仕掛けてくるかと思えば芸のない奴等だ」

「うちらは強くない！弱くちっぽけな怪物だぜ！」

ミラアルクが『カイロプテラ』を右足に纏わせ、急降下して飛び蹴りを喰らわせた。しかしそれも当然のように防がれる。

「それでもッ！弱さを理由に明日の全てを手放したくないのであります！」

エルザが『テール・アタッチメント』を打ち出したが、弦によってからめとられ、斬り刻まれる。

キャロルは三つに分散した彼女たちの相手をするのが面倒になったのか、四大元素を三つづつ展開して一掃しようとしたが、途中で体の動きを止められた。

「何ッ?!」

フランカがサイコキネシスで体の自由を奪ったのだ。  
「捕まえたであります！」

三人はキャロルを中心に三角形の頂点の位置に立ち、両手を掲げる。

「哲学のおおッ！」

「「迷宮へえええッ！」」

「これは……！」

キャロルがダイダロスの迷宮。ピラミッドへ閉じ込められる。

外ではフォニックゲインの膨れ上がりにシエム・ハの繭が反応した。

「シエム・ハの防衛反応が……」

「チフォージュ・シャトーを動かす前に気取られるなんて……！」

レーザーが横薙ぎに照射され、装者たちを吹き飛ばした。高まったフォニックゲインが消失する。

直撃は免れたが、繭はもう一射、打ち込もうとする。

「神の力の完成は何人たりとも邪魔させ……ッ?!」

「351128431……（途切れた……）」

ダイダロスの迷宮にキャロルを封じ込めたヴァネッサは、冷や汗をかきながらも勝利を確信する。しかし、迷宮は内部からの圧倒的かつ暴力的なエネルギーによって破壊された。

「あれは一体、何でありますか?!」

「ヤバいぜー……いつはッ！」

迷宮を突き破った光は空高く伸びていく。

爆発の影響で吹き飛ばされたヴァネッサは、フランカを守るように覆いかぶさっていた。

「どうやって……哲学の迷宮を……」

「ふん。オレはただ歌っただけだ」

「歌で……ありますか……?」

さも当然のように吐き捨てる。しかし、ただ歌った程度で哲学の迷宮が破壊できるわけがない。

そう、『ただの歌』程度なら。

「ああ……俺の歌はただの一人で70億の絶唱を凌駕する……フオニツクゲインだッ！」

流石に負担が大きかったのか、キャロルも膝をつく。

しかし、キャロルの七十億のフオニツクゲインは、かの日の奇跡をもう一度、必然として手繰り寄せた。

雲を突き破り、夜空の元にエクストライブが舞い降りる。

## DEA NOVA

奇跡の殺戮によって奇跡を必然へと変え、エクストライブとなった五人の装者が舞い降りる。

七十億の絶唱は流石に負担が大きかったのか、ダウルダヴラのファウストローブが消失し、キャロルの意識が変わってエルフナインの意識が前に出る。

「キャロルに……何が……」

（金縛りを振りほどくのにリソースを裂きすぎたか……！今のはさすがに消耗した……後はお前の力で……）

「キャロル！……そうだ！今は未来さんを！」

「行かせないぜ……！」

「フランカちゃん?!フランカちゃん?!」

ミラアルクとエルザが立ち上がり、エルフナインを追撃しようとしたが、それをヴァネッサの悲痛な叫び声が引き留めた。

ヴァネッサの方に二人が慌てて駆け寄るとフランカはおびただし量の血を吐きながら彼女の腕に抱かれていた。体の末端は痙攣し、視線は揺らいでいる。

「この不調……まさか！」

フランカは訃堂から受け取った全血清剤を嫌がったため、病院から奪ってきたものを使っていたはずだ。そして、自分たちはフランカから手渡された、訃堂から受け取った方を使っているはず。

もしも、フランカは途中で付け替えていたとしたら？テレパシーで訃堂の目論見を見破り、自分たちを守るために嫌がっていた彼から受け取った方を使っているとしたら？それならば足取りがおぼつかなかったのも説明が行く。

いや、そうでなければこの現状に説明がつかなかった。

「そうだ。悉く夷狄の蹂躪よりこの国を守るのが、防人たる風鳴の務めよ」

ヴァネッサは怒りに肩を震わせながら瀕死のフランカに生命維持装置を繋ぎ、抱きしめて叫んだ。

「訃堂おおおおッ！」

ミラアルクとエルザは大慌てで飛び出して行き、使い切った全血清剤のパックを集め始めた。ほんの少しだけでもと、怒りと悲しみをあらわにしながらかわわずに残った血をかき集める。

これだけで助かるだなんて思っていない。気休めにもならないかもしれない。だけど、それでも、生きていけばチャンスはあるのだと。誰かの血で汚れていない、誰よりも人間に戻る資格がある彼女を死なせたくなかった。ほんの少しもない希望に賭けたかった。

○○○

シエム・ハの繭が、上空にいる装者たちにレーザーを照射した。

翼を得た彼女たちは三次元を自在に動き回ることによってレーザーを回避し、攻撃に転じる。

「チフオージュ・シャトーは動かせなかったデスけれどッ！」

切歌が繭の下部へと潜り込み、へその緒のような器官を大振りの鎌で切断する。後を追う触手を振り切り、調とスイッチした。

「形と掴んだこの輝きがあればッ！」

ヨーヨーを大型化させて頭部と思わしき部位に投擲、へその緒がつながっていないことでバランスを崩したのか、そのまま転倒する。

翼が繭を真正面に見据えながら剣で円を描き、その円を一刀に両断した。すると剣閃が煌めき、四方八方に伸ばしていた触手が一斉に斬り刻まれる。

クリスとマリアはアームドギアであるボウガンと短剣を大型化した後分割し、合体させて超大型の砲台を作り出した。彼女たちは向かい合って手を繋ぎ、極太の光線を発射する。光線は繭に直撃し、光の壁のようなもので一部は逸らされてしまったものの、頭部と思わしき部位を損壊させる。

しかし、相手は神の力。これだけのダメージを別の次元に押し付けることで無傷の状態となった。反撃のレーザーがクリスとマリアに直撃する。

「雪音！マリア！」

『それでも…きつと訪れる一瞬を！』



『俺達銃後は疑ってない！だから！』

しかし諦めない。本部は戦場に出れない分、バックアップに全力を尽くして切り札を切る。本部から一基のミサイルが発射された。これこそが、S・O・N・Gが、人類が用意できる切り札。

繭が防衛反応によりレーザーでミサイルを撃墜する。

そして、その煙から飛び出したのは……！

「人類の切り札ツ！神殺しの拳だツ！」

神殺しの撃槍。ガングニール。そしてそれを纏いし装者、立花響が戦列に加わる。

響の中に絶対に未来を助け出す決意が蘇る。

「このままだと親友が……未来が遠くに行っちゃうんです！」

「無茶だ！負傷の癒えてない君では……」

弦十郎は司令官として負傷者を出すわけにはいかない判断する。しかし、それを聞くような響ではない。

隣で眠ったままの雷に視線を向ける。眠っている間に見た夢が現実になる。未来と雷がどこかに行ってしまうかもしれない。しかし、今は雷がとりにいることに安堵し、この場にはいない未来のことを最優先にする。

雷のことは、彼女が起きたら未来と一緒に考えようと。今度は一人だけで背負わない、二人で大切なことを分かち合おうと。だから、響は言い切る。

「平気です！へっちゃらです！友達一人救えなくて……私は何のためにシンフォギアやってるんですかツ?!」

マリアが叫ぶ。

「ガングニールツ！」

「はあああッ！」

ガングニールはエクストライブでないが故に空を飛べない。だからこそ、一直線に未来の元に駆け抜ける。

繭がガングニールの危険性を理解しているのか、四本のレーザーを一斉に発射した。響は落下の速度と体の操作でかくぐるが、それも限界が来る。響の顔面に直撃しようとした、その時だった。

翼が間に割って入り、剣でレーザーを切り落とし、最後の使命を伝達する。

「立花の援護だッ！命を盾とし希望を防人れッ！」

「行くわよみんなッ！」

翼とマリアの後には少女たちが続く。五つの光が響の元に集った。

乱れ撃たれるレーザーは着実にガングニールを削っていく。しかし、それでも致命打だけは与えまいと翼が切り落とし、触手に弾き飛ばされた。切歌と調がターゲットを肩代わりして上空に離脱し、追いつかれてしまい爆発する。自分の身を盾にしても響を守り抜く。

触手の包囲をマリアの操作するブレードが切り開くが、不意を突かれて撃墜された。

「ッ?!」

繭が輝き、触手の攻撃を喰らって速度を落とした響の周りに光がばらまかれ、彼女の元に収束する。しかし、爆発の中からクリスが響を乗せて離脱し、触手の檻とレーザーの嵐の中をかいくぐる。それでも二人に放たれたレーザーを喰らい、アームドギアが半壊してしまつた。しかし、チャンスがやってくる。

触手は全て伸び切っている。ここで決めねば次はない。

「行けよ馬鹿あッ！」

響がクリスを足場にして飛び下りた。ついにクリスも撃墜される。

繭が真正面に極太のレーザーを照射した。回避法はなく、仲間も盾となり得ない。故に使えるのは後禁じ手の一手のみ。

ギアのエネルギーの大部分が黄金の防御フィールドとして展開され、照射されたレーザーを弾き消した。

「使用が禁止されているアマルガムを?!」

「この際だ！謹慎程度で済ませてやれ！」

禁じ手を切ったということは、これ以上後がないということ。だからこそ、翼は叫ぶ。

「勝機をこぼすなッ！」

繭は頭部と思わしき部位を展開し、口を開いたかのようにこれまでの比ではない超高密度かつ広範囲のレーザーを照射した。

「うあああッ！」

フィールドを解除し、黄金の華を花開かせる。そしてそれは巨大な二つのアームとなり、響の肩に装備された。

「はアアアッ！」

響は雄たけびを上げ、アームの両手を組み合わせて突撃する。繭が発射したレーザーを真正面から突き破る。一人では足りない。だとしても、彼女には仲間がついている。仲間の声が力を与える。

「最速でッ！」 調と切歌が。

「最短でッ！」 マリアとクリスが。

「真っ直ぐにッ！」 翼が。

「一直線にいいッ！」

響が叫ぶ。

その思いに呼応するように出力が跳ね上がり、アームが発射されてレーザーを押し返した。繭を突き破り、銀色の花が咲く。

その瞬間、シャトー内部にある祭壇。そこに眠る未来と腕輪が光となつて昇つていく。エルフナインは愕然と呟いた。

「違う……。依代となった未来さんに力を宿してるんじゃない……。大きな力が未来さんを取り込むことで……。！」

花に突き刺さった拳に、響が世界で一番優しい拳を突き立てる。

「未来ううううッ！……。ッ?!」

希望を繋ぎ、花を貫き、繭の内部へと侵入する。しかし、そこにはさらなる絶望が待っていた。

「何で……。そこに……。」

未来が、赤い瞳を響に向ける。そしてペンダントが銀色に輝き、神獣鏡を身に纏った。

それと同時に本部で異変が発生する。

雷の様子を観測していたオペレーターが発狂したように叫んだ。

「あ、雷ちゃんが……。消失しましたッ?!」

「何だとッ?! 緒川ッ！」

「はいッ！」

弦十郎が思わず振り向き、緒川をメディカルルームに向かわせた。

だが、結果は雷の消失に揺らがなかった。

響が未来に手を伸ばす。

「未来ッ！」

「遺憾である。わが名はシエム・ハ。人が仰ぎ見るこの星の神が我と覚えよ……」

「行つちや駄目だ……遠くに……未来ううッ！」

空を飛ばない響は未来の手を掴むことが出来ず、自由落下を開始する。しかし、この浮遊感は途中で消失する。

「え……う？」

「大事はないか？」

「あず……ま……ま……う？」

ギアを纏うことすらなく、空中で響を雷は受け止めていた。その身には患者衣ではなく、大きな襟を持つ金の意匠が施された蒼いローブのようなものを纏っている。雷の声を聞いて響は顔を向けたが、彼女の金色の目は蒼く輝き、灰色の髪は赤い燐光が舞っていた。

様々な感情が入り混じったままの響をよそに、シエム・ハが笑みを浮かべる。しかし、目は笑っていない。

「待望である。やはり、われにその目を向けるか」

「ああ。貴様に向ける目はただ一つ。当たり前的事だろうか？」

「相違ない」

雷は笑みを返すが、やはり目は笑っていない。その表情は真剣そのものとなる。そして抱いている響を離すが、響の体は重力に引かれて落下せず、小型の竜巻が発生して緩やかに地面に下ろした。

「雷ああああッ！」

響は必死に手を伸ばすが、どれだけ伸ばそうとその手は届かなかった。

雷の金色の、円盤状のペンダントは黄金の輝きを放つ。その輝きによりいくつもの竜巻と稲妻が雷の体を取り囲むように発生し、彼女に重なるように一つとなる。そして周囲に暴風と稲妻を天変地異と見まがうようなほどにまき散らしながら、その姿を現した。

「何なの……」

「ケラウノスでは、ないのか……?」

「姉……さん……?」

「でも、全然雰囲気が違うデスよ?!」

「どうなってやがんだよ……!」

それはケラウノスではなかった。

ボディスーツは金色となり、面積が減って胸の下から臍下まで肌を晒している。腰部の稲妻のマントが翻り、両脚にはユニットの代わりにヴァジュラのような黄金の装甲。土踏まず以外は裸足で、両腕は真っ黒になり、常に電光を放って手のひらの部分が赤く赤熱化していた。

胸元にはコンバーターユニットの他に、五つの光輝く円盤状の稲妻の結晶でできた首飾りをつけ、同じく稲妻の結晶の耳飾りをつけている。ヘッドギアのティアラはそのままに髪型がポニーテールに結ばれる。

純白のヒマティオンを纏っているため、一見では肌の露出は変化していないように見える。

臍下の丹田に当たる部分に紅い印が刻まれた。

彼女は閉じていた目をゆっくりと開き、自らの存在を告げる。

「我が名はアダド。この星の<sup>だいくう</sup>大空を統べし神。天空のアヌンナキである」

纏うはデノヴァギア。新たなる女神の鎧。シンフォギアシステムの雛型。神の力が形を持ったもの。

そして雷の……真の姿。

## 造られた命

竜巻がふんわりと響を下す。

何時も後ろから見守ってくれていた未来と、何時もとなり立って一緒にいてくれた雷が人知を超え、想像を絶する姿へと変わってしまった。そのことにより響のキャパシティを超えてしまい、彼女は意識を失ってしまった。

上空では、未だにアダドと名乗った雷とシエム・ハと名乗った未来が向かい合い、にらみを利かせ合っている。金と銀の光が雲の切れ間から見える星空に相對した。アダドの背中に魔法陣のような紋章が展開された。

一瞬だけ、アダドが口角を上げて地面で眠っている響に視線をやった後、またすぐに不敵に笑ってその蒼い瞳にシエム・ハを映す。

シエム・ハが両腕を広げたながら地上へと降下し始めた。アダドもそれと共に降下する。

「笑止である。われの前に復活したはいいが、かつての一分も力を出し切れておらぬではないか。やはり造られた身体とは言え人間。それでわれを打倒するつもりか？」

「貴様こそ笑わせるな。我はアヌナキ最強の武人である。例えこの身が人であろうと、貴様を打倒するなど問題はない」

アダドの背中に展開されていた紋章が消失し、彼女達を囲うようにエクストライブの装者たちが降り立った。しかし、装者たちも未来だけでなく雷も変わってしまったことに驚きを隠せず、口を開くか開くまいかと困惑している。

アダドは振り向くことすらなく、背後に立つマリアに「銀腕」と声をかけた。マリアは家族と同様の親しみを持っている雷から名前ではなく聖遺物の名称で呼ばれたことに戸惑いを隠せなかった。しかし、呼ばれたからには返答する。

「な、なに……？」

「神殺しを保護せよ。彼女こそ彼女の願いをかなえるに必要なものだ」

それだけを告げた。

マリアは黙って頷き、響を抱き抱える。するとシエム・ハが空に浮かぶ月を見上げた。

「後は……忌々しき月の……ッ?!」

「シエム・ハ?!」

突然頭を抱えて苦しみ始めたシエム・ハに思わずアダドが叫んだ。そして一瞬手を伸ばしかけ、すぐに拳を握って引っ込める。

そしてシエム・ハ。いや、未来が纏っているそれにクリスが気付いた。

「身に纏うそいつは……まさかあの時と同じッ……!」

『そして……刻印、起動!』

翼の天羽々斬から突然訃堂の声が聞こえてきた。そしてそれと同時にシエム・ハが苦しみながら右手をアダドに向け、右手から銀色の光が放たれた。その光が止むと、そこには人型の異形の存在が出現する。

すると翼がいきなり動かなくなったシエム・ハを抱えて空に飛びあがる。

「センパイ?!」

クリスが後を追って飛び上がろうとしたが、シエム・ハによって召喚された人型生命によって叩き落される。その一撃はエクストライブの防御力を貫通する代物だった。

上空で翼は身を翻し、剣を空高く掲げる。

「すべては……この国のためにッ!」

「愚かな……」

アダドは小さく呟いた瞬間に、夜空から光でできた剣の雨が降り注いだ。降り注いだ剣は人型生命を避け、アダドと装者たちに向かって放たれる。アダドは体を電子化して動くことなく回避し、マリア達は飛びのいて回避した。

何時もの翼らしくない戦法に調と切歌が困惑する。

「ただ面で制圧するなんて……」

「らしくないばらまき……おようっ」

切歌が飛び立とうとしたが体が地面に縫い付けられたように動かない。そう、この降り注いだ一本一本が影に突き刺さり、影縫いの役割を果たしているのだ。

アダドの影にも突き刺さっていたが、猪口才など体を発光させて影を消滅させ、地面に刺さっていた剣を蹴り折った。

響を抱えたマリアが叫ぶ。

「翼ッー！」

翼は剣を下ろし、

「私は、この国の防人なのだッ！」

そう言って飛び去って行った。

そして、唯一動きを見せたアダドに、自由に動くことが出来る人型生命が攻撃を仕掛ける。アダドはそれを難なく回避して振り返ることなく腕を掴み、逆に握り断った。

人型生命は神の力で生み出された存在。故にダメージ別の次元に押し付ける力を持つのだが、同じ神であり能力によって一方的に破壊することが出来るアダドに与えられたダメージは再生が不可能なのだ。ダメージが無くならなかったことでまだ手に残る腕を放り捨て、肩越しに振り返ってマリア達に指示する。

「ここから離脱しろ。この出来損ないはシエム・ハによって造られた神造生命だ。エクストライブ程度で相手になるものではない。聞きたいことは帰って聞かせてもらう。我にはそれに答える義務と責任がある」

そして体から電光を放ち、影を消すことで装者たちを自由にした。動けるようになった彼女たちは空に飛びあがる。

「問わせてもらうわよッー！」

マリアは声を張り、そしてクリス達を連れて本部に帰還した。アダドはそれを気配で感知した後、

「準備運動にもならないな」

と言ってシエム・ハの生み出した人型生命を一方的に破壊していく。防御は意味をなさずに上から叩き潰され、攻撃は撃たれる前に潰される。戦闘ではなく暴力が振るわれた後、人型生命は塵のように消



滅した。

○○○

響の療養の間に、アダドについての取り調べが始まる。

本部の一室。そこにある椅子にデノヴァギアを解除し、金の意匠がある青色のローブを纏ったアダドが金色の円盤状のペンダントを首にかけ、腕と脚を組んで尊大に腰掛けていた。時折指をもてあそんでいる。

そんな彼女の正面に弦十郎が険しい表情で向かい合い、緒川は警戒を解かずにいる。マリアとクリスはアダドを睨みつけ、切歌と調、エルフナインは不安げだ。

完全にアウエーな状況でもアダドは尊大な態度と余裕を崩さず、口を開く。

「改めて名乗ろう。我が名はアダド。この星の天空を統べる神。天空のアヌンナキだ。して、聞きたいことは何かな？」

「では聞かせてもらおう」

弦十郎が誰も聞いたことが無いほどの声を発した。

その程度の覇気など問題にもならないとアダドの余裕が崩れない。

「何なりと聞き給え。答えられる質問にはすべて答えよう」

「雷君は無事なのか？」

「無事……というのは間違いだ。我は元々、それも雷が生まれた時からこの体の中にいる。今の主人格は我だがな」

「僕とキャロルと同じようなものですか？」

エルフナインがおずおずと手を挙げ、アダドが彼女に目を向けた。そして彼女のたとえによって雷が無事であることがわかり、張り詰めた空気がいくらか軟化する。

「お前とキャロルの状態を見ていないから何とも言えぬが、そう感じただのであればそう捉えてもらって構わない」

「まって、生まれた時からってどういう事？ずっといたって……赤ちゃんの時から？」

マリアが疑問を口にする。生まれた時から雷の中にいたとはどういうことなのか。同じアヌンナキであるシエム・ハがほんの少し前に

復活しているのだ。アダドはそれ以前、少なくとも十七年前には復活していることになる。

そして人が神の力を宿すには神獣鏡の光でバラルの呪詛を失う必要がある。一連のことをどうやって、どの様な経緯で行ったのかを聞き出そうとする。

とたん、アダドが俯いた。一言一句を聞き逃すまいとこの場にいる全員が前のめりになるが、いきなりアダドが大笑いし始めた。

「ハハハハハハ！なんだ、気付いてなかったのか?!……雷は人間ではないぞ?」

「なッ?!」

大笑いした後、急に声のトーンを落とした。部屋一帯が驚愕に染まる。

弦十郎が「どういうことだ」と聞こうとしたが、それよりも先にアダドが口を開く。

「何故、雷の出生記録は存在しない?何故、戦闘訓練もしていないのに長く前線に立っていた翼と並んで戦えた?何故、筋肉が断裂したにもかかわらず、一日で修復できるほどに回復していた?……他にも山ほどあるぞ?」

出生記録。レセプターチルドレンであるならばないのも納得できているが、雷には両親が存在している。であるならば、この記録は存在しているはずなのだ。しかし、フィーネが見つけることが出来ず、雷の存在を直接目にするまで彼女のことを知らなかった。

異様な戦闘能力の高さは旧二課でも確認していたが、センスがあったという理屈で解決していた。

怪我の修復速度の速さもケラウノスの電磁操作の応用で修復を促進していたのではないかと結論付けていた。

もし、アダドの言う通り、雷が人間ではないとしたら?

「まさか……」

一同が絶句する。

「そのまさかだ。……雷は彼女の両親、轟斗真と轟瞳が自らの遺伝子进行操作して造り上げた人造人間だ。その体に、私の魂は宿っている。

お前たちが今まで雷と呼んで接してきたのは私の魂ではなく、元々体に存在していた魂だ」

「何かマッドなのデース……」

思わず切歌がこぼしてしまった。

それを耳にしたアダドは先ほどまでの余裕と尊大さをかなぐり捨て、怒鳴る。

「貴様ツ！彼らを愚弄するかツ！彼らは私の話を聞き、人道に反しながらもやり遂げてくれたのだ。我は斗真と瞳に敬意を表している。彼らを愚弄する資格は我が魂を宿すことになってしまった雷にしか存在しないツ！」

アダドの剣幕に、切歌はマリアの後ろに逃げてしまった。

空気が静まりかえるが、またもエルフナインがおずおずと手を挙げて質問した。

「あのシンフォギアはケラウノスですよね？どうしてあのような以上に？」

アダドはおほんと咳払いして、余裕を取り戻した。

「あれはシンフォギアではなくデノヴァギア。シンフォギアの雛型だ。そしてケラウノスではない。我が力を『ケラウノス』という哲学によって封じ、聖遺物にダウングレードしたものだ。故に元々の持ち主である我と、私の魂を持つ雷にしかあのギアは使えんし、我が力の限定解放である『雷帝顕現』も機能せん」

そもそもシンフォギアとしての根幹が同じなのだから当然だ。かつての響は暴走することがあったが、それはガングニールだからではなく、響が融合症例であったからこそ起きたことだ。

つまり、『雷帝顕現』も、響の融合症例と同種のものだったのだ。

アダドが「聞きたいことは終わりか？」といったが、問題が山積み  
のS・O・N・G.としては雷の無事が確認だけでも大収穫だった。

アダドは主人格を雷に返す。瞳が蒼から元の金色に変わり、赤い燐光は消失した。

## 強き者と弱き者

雷、というより彼女の中のアダドとの取り調べも終わり、彼女達は食堂のテーブルを囲っていた。

すでに響にも説明を終え、彼女は精神的な療養とアマルガムの使用によって謹慎の命を与えられている。そしてその説明の時にひと悶着あったことで、テーブルのお誕生日席に座っている雷が俯いていた。

雷は切歌の方を向き、申し訳なさそうに口を開く。

「ごめんね、切ちゃん……。怖かった……。よね？」

それを聞いて切歌は慌てて手を振り、何でもないかと否定する。

「姉ちゃんが謝る必要ないデス！あたしだって自分の尊敬する、大切な人を馬鹿にされたら怒るデスよ！」

「そう言ってくれると嬉しい……。あと、私の事、怖くない……？」

両手でコーヒーの入ったコップを掴み、視線を落とす。雷は響に説明した時のことをトラウマに持っていた。今まで親友だと思っていた雷が実は人間でないと知った響は、未来とのことも相まって拒絶してしまったのだ。

追い打ちをかける形となってしまうため頭では理解できるのだが、初めて拒絶されてしまったことを恐れている。

雷が肩を震わせていると、マリアが優しい口調で言った。

「そんなことないわよ……」

「マリア……」

「あなたのことを怖がるのなら、エルフナインが仲間として受け入れられることはないわ」

雷の真反対に座っているエルフナインに目を向けた。

事実、雷が造られた存在であると分かった今でもS・O・N・G.の職員たちの反応は変わらなかった。当然今までの組織への貢献という積み重ねもあるが、似たような存在であるエルフナインという前例があったのも大きかった。逆にそうやって造られた存在であると知ったため、どこか納得したような職員もいる。が、おおむね好意的

とみて問題ないだろう。

「ああ、あのバカだって今は混乱してるだけだ。落ち着いて話し合えばいつもの調子に戻るさ」

クリスが励ますように俯く雷の頭をわしやわしやとなでる。雷は嬉しさに頬を赤くさせ、撫でられてぼさぼさになった髪を上から触った。

話がひと段落付いたところで、調が次の話題を切り出した。

「でも、一連の事件を操っていたのが風鳴機関だなんて……」

「確かに、信じたくはないデスよ……」

程よく緩んでいた空気が一瞬で冷え込む。

日本を守る最高組織が自分たちの敵なのだ。そしてその風鳴機関に、自分たちの仲間で彼女たちの実質的なリーダーである翼までも敵に回っているのだ。冷え込むのも無理はない。

しかし、翼は何か事情があって敵対しているのだと装者たちは信じていた。

「それでもあたしは信じてる。不器用なあの人に、裏切りなんて真似できるものか」

「私だって疑ってないッ！」

「翼さんは、大切な仲間デス！」

「恐らくは、あの魔眼に……」

エルフナインは顎に手を当てる。翼が裏切った理由は、自分も受けたことから恐らくはミラルクの魔眼、もしくはそれに類する何かであると推察する。

すると、雷とマリアの通信機にだけメールが届いた。二人は確認すると、モニターに発令所までの招集が通達された。

（私達だけ？）

二人は疑問に思いながらも、カップのコーヒーを飲み干し、そろって発令所に向かって行った。

○○○

鎌倉の地下にある風鳴機関電算室の通路で全ての元凶である訃堂と、天羽々斬装者の翼が歩いていた。

目の前の自動扉が開き、中に入ると、そこにはシエム・ハとなった未来がいる。しかし、彼女はバイタルを表示するカプセルのようなものに閉じ込められ、眠っていた。

「小日向……」

「否！我が国に相応しき神の力である！ダイレクトフィードバックシステムによる精神制御は、間もなく完了する」

ウエルの作ったダイレクトフィードバックシステムにより、神であるシエム・ハの意識は支配できずとも、人間の未来を支配することでその肉体をコントロールするという腹積もりなのだ。

訃堂は喜びのあまりこぶしを握り締める。

「その時こそ、次世代抑止力の誕生よ」

「しかし……桜井女史亡き今、どうやって新たなシンフォギアを？」

「シンフォギアに非ず！神獣鏡のファウストローブよ！だがそれを作った者も、どこぞで果ててしまっておるがな」

口角を上げ、下卑た笑い声をあげる。

翼はこれが防人の姿かと疑問に思いつつも、自分を信じる事が出来ない翼は訃堂に付いて行くしか出来なかった。

（そうしなければならぬと囁かれ、あの時は疑いもせず行動した……。なれど……本当にそれが正しかったのか？私は……）

「翼！」

嫌悪のあまり目に涙をため、吐き気から口を押える。しかしそれを、訃堂が声をかけて断ち切る。

「何故、連中にとどめを刺さなんだ？我ら以外が神の力を持つなど、言語道断！」

「そ、それは……」

「まあ良い……。だが惑うな。そのように脆弱な心ではやがては折れてしまう。護国のために鬼となれ。歌では世界を救えぬのだ！」

「はい……」

これまで何度も歌で世界を救ってきた事実があろうとも、翼は屈してしまふ。自分の歌を、心の底から信じる事が出来なくなっていた。

〇〇〇

マリアと雷が発令所に到着した。

「お呼びでしょうか？」

マリアが先陣に立ち、その後を雷が付いて行く。目の前に広がるメインモニターには八紘の顔がいつぱいに映されていた。

中央では腕を組んだ弦十郎と緒川が待っていた。

弦十郎が詫びを入れる。

「すまないな、急に呼び出して」

『早速だが君達に新たな任務の通達だ』

この任務の主導は八紘であるらしく、彼が口を開く。そしてその任務の概要を緒川が説明する。

「かねてより進めていた内偵と政治手段により、風鳴宗家への強制捜査の準備が整いました。間もなく執行となります」

「風鳴宗家って事は……」

「そうだ。最早一刻の猶予もない」

いかに相手が自分たちの家であろうとも、敵となり、犯罪に手を染めたとなれば容赦はないということだろう。弦十郎と八紘の顔に一切の迷いが無い。

『風鳴訃堂自らが推し進めた護国災害派遣法違反により、日本政府からの逮捕依頼だ。状況によっては……殺害の許可も下りている』

「殺害って……それは翼に対しても?！」

「落ち着いてマリア。そんな状況に陥らせなければ、殺害なんてしなくたっていい」

「だけど……!」

仲間を殺せないと主張するマリアに、状況によるという現場の判断が優先されるため、殺さなくてもよくすれればいいと雷が主張する。

緒川がマリアを選抜した理由を説明した。

「服務規程違反によって謹慎中の響さん、並びに未成年スタッフに任せるわけにはいかないと判断しました。そこでマリアさんに……」

「私が選ばれた理由は分かったわ……。だけど、それならどうして雷が選ばれたの?」

成人している自分が選ばれた理由は理解できたが、未成年である雷が呼ばれたのは理解できない。説明のために、弦十郎が口を開いた。「雷君には神の力を使い、同じ力であるシエム・ハ。及び未来くんの確保を頼みたい。相手が常識外の力を持つている以上、こちらも同等の力でなければならぬからだ。頼まれてくれるか？」

（アダド、構わない？）

（シエム・ハを追うことこそ我が使命。そうでなくとも、そなたが望むのであればいくらでも力を貸そう）

雷が自分の心の中にあるアダドの魂に語りかけた。

そして、アダドの了承を得た後に弦十郎を真っ直ぐに見つめた。

「分かりました！私が未来を取り返します！」

響を悲しませた責任は自分でとる。その決意の炎が彼女の心にうごうと燃えていた。

○○○

風鳴宗家。その邸宅の門の前にすでにアガートラムとデノヴァギアを纏っているマリアと雷を先頭に、拳銃を構えた黒服。そして弦十郎と緒川、八紘が並んでいる。相手が錬金術師を従えていた以上、アルカ・ノイズを使役している可能性があるため、それを倒すことが出来る装者たちを先頭に行っているのだ。

八紘が門の前に立ち、交際認証でロックを解除する。

「開門！」

それと同時にマリアと雷が飛び出した。やはり待ち構えていたアルカ・ノイズを装者二人が相手取る。

アダドの意識が表層化していなくともデノヴァギアは扱える。しかし、出力は少しばかり落ちてきているものの、それでもエクストライブを上回っていることに変わりがなかった。

とは言え当然短所、つまり人間であるが故のうかつさが出るため、そこをマリアとの連携でカバーする。

「ここは私達が！」

「私の及ぶ権限のセキュリティは解除可能だ！速やかに風鳴訃堂並びに帯同者の逮捕拘束を！」



「了解ッ！」

雷とマリアが道を開いている間に、八紘と黒服が先に進む。その後を進む弦十郎がマリアに釘を刺した。

「いいかマリア君！アマルガムは……」

「わかってる！私だって謹慎は御免よ！」

「頼むぞ！これ以上の横紙破りはS・O・N・Gの国外退去に繋がりにかねないのだ」

八紘の指示で家宅捜査を開始する。そして弦十郎が訃堂と相対し、マリアに翼が向き合う。そして雷は全ての黒服が安全圏である屋敷の中に侵入したのを確認した後、未来のいる地下電算室に向かって行った。

「未来！どこ?!未来！」

(焦るな。そなたの頭脳であれば見つけられる)

まるで迷路のような通路を駆け巡りながら、レーダーを利用して探し始める。

一方そのころ、息も絶え絶えなフランカを抱えてノーブルレッドが同じく地下電算室に潜入していた。怒りで冷静になっっている彼女たちはヴァネッサの力を使い、最も動力が使われている場所を逆探知してシエム・ハの居場所を突き止めた。

「奴等が派手にやり合ってる今こそうちのターンだぜ！」

「どうするでありますか？」

エルザとミラアルクの声が怒りに震えている。

ヴァネッサは抱きかかえたフランカを彼女たちに任せ、メインコンソールをタイプし始める。

「神の力の管理者権限をこちらに移し替えるの。私達を簡単に切り捨てた風鳴訃堂には、相応の報いを受けてもらわないとね……」

システムを切り替えるため、機能が一時ダウンする。

「よし。これでダイレクトフィードバックシステムを……」

しかし、一瞬でも手綱を話したことが運のつきだった。エルザが野生の本能で気付いたものの、もう遅い。シエム・ハは目を覚まし、腕輪からカッターのような光線を放った。光線はフランカごとエルザ

を貫き、横に払われたことでミラアルクの体が真つ二つに切断される。

「エルザちゃん?!ミラアルクちゃん?!フランカちゃん?!」

ヴァネツサは駆け寄り、機関砲を構えるがそれよりも速くシエム・ハに切断された。

自由を取り戻し、邪魔者を始末したシエム・ハは、この大規模な電算室の掌握を開始する。丁度その時、雷が飛び込んできた。

「未来……否、シエム・ハ!」

雷の人格がアダドへと切り替わる。瞳が蒼くなり、髪に赤い燐光が舞った。彼の方を向いてシエム・ハが嬉しそうに口角を上げた。

「やはり来たか、アダド。だが遅かったな。もうじきユグドラシルが起動する……」

「何ツ?!」

「いいのか?ここに居ては、地上の道具どもを守れぬぞ?」

「その前に貴様を止めるだけの事!」

こぶしを握り、シエム・ハに飛び掛かったアダドだったが、いきなり地上へと飛ばされてしまった。レポートのようなものを受けたアダドは、記憶の中に超能力者がいたことを思い出す。その力の持ち主は死んでいたはずだったが、シエム・ハの力を知っている彼は驚きもしない。

「使者を生者へと再構築したか……。ほう?ハハハ!不可能を可能にしようとする強き人間か、いいだろう。……ぬ?」

轟音がなった方に目をやると、アマルガムを起動した翼が、怒りのままに訃堂に刃を振り下ろそうとしていた。

「この国に必要なのは防人でなく護国の鬼!儂は死んで護国の鬼とならんツ!そしてお前も、護国の鬼よお!」

その一言が、アダドの逆鱗に触れた。翼の振り下ろしは弦十郎が受け止め、訃堂には地を蹴って瞬時に距離を詰めたアダドが回し蹴りを打ち込んだ。

訃堂の体は吹き飛び、塀に叩きつけられる。

「儂きかな。生まれて二千年も経っていない小童が大層な口を叩く。

己の力だけで国を護ることが出来ぬものが、護国の鬼などとぬかすな。貴様に華々しい死が来るなどと思うな。冷たい牢獄の中、一人寂しく惨めに死に絶えるがいい」

この星の命の創造主の一柱であるアダドは基本的に上から目線であるものの、人類を愛していた。それが人間が犬猫に向ける愛情なのかもしれないが、ともあれ大切に思っている。

しかしその愛情は、人間は不可能を自らの力で可能に変えていく強さに由来するもの。故には彼は、訃堂のような人間の力で国を護るために戦わぬ弱く、卑しき者が心の底から大嫌いなのだ。

アダドは汚物を見るような目で訃堂を見下ろし、彼の予想よりも速い地面の揺れを感じるや否や叫んだ。

「予想よりも速い！お前達！この場から離れろ！」

すると突然地中から赤い光が伸びた。あまりにも超常的な現象だったため、誰もが呆気にとられ、動くことが出来ない。

○○○

謹慎を受けていた響は父である洗のアパートに転がり込んでいた。そして彼と相談し、精神を落ち着かせて雷のことで未だ悩みながらも正面から受け止められるほどになっていた。雷とすっかり話し合えばわかり合うことが出来ると信じている。

そんな時、通信機がなった。

「はい！はい！でも私の謹慎は……わかりました！本部に向かいます！」

「行くのか？」

「行かないきゃ……」

炬燵でミカンの皮をむいていた洗が響に問うた。響は頷いて答える。

「なあ……響。へいき、へっちゃらだ」

「え？」

響が荷物をまとめる手を止めて振り向いた。

洗は立ち上がり、立てかけてあった家族写真を手に取って眺める。

「何もしてやれない駄目な父親が、娘にかけてやれる唯一の言葉だ。

同じ言葉でも根性無しの俺にはいつしか呪いへと変わっていった……。だけどお前は違うだろう？」

「お父さん……」

「物事を呪いと取るか祝福と取るかなんて気の持ちよう一つだ！」

響は自分の拳を見つめる。

「呪い……うん。そうだね！」

「それにほら……なんだ。呪いも祝福も漢字で書くとよく似てるだろう？裏と表で……んお？俺の言ってる事もあながち間違いじゃないかもな！」

「何それ！」

「来年の今頃にはきつと名言だ！」

「けだし名言だよ！」

父親に背中を押され、元気をもらった響は階段を飛び降りて駆け出した。

「行けー響！お母さんのことは任せろ！」

「ありがとー！お父さん！ラーメンおいしかった！」

祝福を受け、響は走って行く。未来を取り戻すために。

## 舞い戻る翼

地中から伸びる赤い光の柱に、額から血を流した弦十郎が驚愕する。彼の背後に立つアダドは舌打ちを打ちながら振り向いた。

「なんなんだ、こいつはッ?!」

「ユグドラシルだ」

「ユグドラシル?」

弦十郎は振り返り、アダドの発した単語をオウム返しに聞いた。彼は光の柱を鋭く見つめながら、煩わしそうにしている。

「説明は後だ。今はここから避難しろ」

「分かった」

弦十郎は頷き、撤退の指示を出そうとしたが、光の柱が登った場所からまるで木の幹のような物体がせりあがた。その天辺にシエム・ハが立っていた。

再度撤退の指示を飛ばし、黒服たちが動き回っている中、それを見下し、残念がるようにシエム・ハは言葉を口にする。

「わが前から引き下がるのか?アダド」

「こいつらを生存させるのが今必要な一手故な」

「らしくない。いくつもの文明を破壊したお前が、道具を大切にするなど」

シエム・ハはアダドと人間の協力関係を断ち切ろうとしたが、マリア達はアダドが天空の支配者であることを知っているため、必然的にかつて台風や日照りなどを起こしていたことを推察している。しかし、彼女達にとって重要なのはそこではない。

シエム・ハが口にした『道具』の意味だ。

「道具!? 僕達の事を?」

「じれったい。道具の用いる不完全な言語では全てを伝えるのもままならない。なぜお前は……」

「どういうことだ?!」

「……最早分かり合えぬということだ。ああ…それこそが忌々しきバラルの呪詛であったな」

途中で思考を遮られたことに苛立ちを覚えたのか、少し言動が荒くなっている。そして夜空に浮かぶ月を憎々しげに見上げた。

そしてシエム・ハは手のひらに光球を作り出し、弦十郎たちに発射した。アダドが射線に割り込み、手のひらで受け止めて握り潰す。

「Seilien Coffin Airget-Lamh Tro  
n」

その隙にマリアがギアを起動し、短剣をシエム・ハに向かって投擲した。シエム・ハはそれを再び光球を放ち、迎撃する。

「ここは私達に任せて！司令達は容疑者とパパさんを！」

「マリア！轟！」

「翼！ここは引くぞー！」

弦十郎は扉に叩きつけられて気絶した訃堂を背負い、翼は自分を庇うために銃で撃たれた八紘を支え、緒川と共に撤退する。

アダドは隣に立つマリアに警告する。

「今は引くことが先決だ。無理だけはするな」

「優しいのね」

「我は強い人間が好きなのだ」

マリアが走って、アダドは空を飛んでシエム・ハとの距離を詰める。

シエム・ハの両手から放たれる光球を弾き、避け、攻撃を加えるが、どれも有効打にはならない。

シエム・ハの肉体は未来の物、つまり、人質を取られているようなものなのだ。アダドも本来なら気にする必要はないのだが、雷の願いをなすだけ聞き届けたい彼もためらいを持っている。

「笑止、そして残念だ。この身を傷付けまいと矛盾思考に刃が訛っているぞ？謀るに能わず。全力で来い！」

「不味い！」

腕輪が銀色に輝き、紋章が展開された。それが何かを知っているアダドは狙われているマリアの目の前に降り立ち、拳に竜巻と稲妻を発生させて発射された銀色の光線を殴り抜いた。

光線と拳がぶつかり合い、光線が砕け散った。破壊された銀色の光線は四方八方に飛び散り、それが直撃した物体は全て銀に書き換えら

れた。

あまりに常識外な力がぶつかり合う。

「銀の……輝きッ?!」

物質置換ではなく、物質の存在そのものを書き換える力。埒外物理学。そしてその埒外を、真つ向から迎撃することが出来る埒外。ありとあらゆる万象を破壊する絶対破壊の力。

シエム・ハは再び光線を放とうとしたが、紋章がかき消える。

手のひらを見つめ、

「消魂である。今の馴染みではこの程度。それとも……ユグドラシルの起動に力を使いすぎたか？」

シエム・ハが動きを止めた。その隙をついて短剣を蛇腹状に変化させ、腕を巻き取る。彼女は腕に巻き付いた刃を見て目を見開き、驚愕した。

「その左腕……驚愕だ。貴様面白いものを身に纏ってるな。エンキの末に当たる存在か」

どうでもいい対象だ思っていたマリアのことに少しだけシエム・ハが興味を持った。そして拘束された右腕で力任せに引っ張り返す。

「ユグドラシルとかエンキとか……さつきからわけのわからないことを！」

光の波動に吹き飛ばされるが体勢を整えたマリアはもう一手踏み込もうとアマルガムの起動を決意する。

しかし、その瞬間に跳び蹴りと二つの拳、一つの罅が四方を囲む。

「なッ?!」

「舌を噛むぞ」

避けることは出来ず、受け止めるしかないと覚悟したマリアだったが、とてつもない速度で背後現れたアダドに抱きかかえられ、その場を離脱する。

「やはり復活させていたか」

アダドはマリアを抱きかかえながら攻撃が放たれた方に目を向ける。するとそこに、シエム・ハを囲うようにノーブルレッドが現れた。彼女の額にシエム・ハの紋章が浮かび上がる。

そんな時、本部から弦十郎たちの撤退が完了したことを通達された。

「遅いぞ。我らも撤退する」

そう言つてアダドは空へ飛びあがり、戦線を離脱した。

「追わないでありますか？」

「理解に苦しむ。世界樹・ユグドラシルシステムが屹立した今、何処に向かおうと人類に逃げ場などありはしないというのに……」

世界樹に相応しい巨大幹が、風鳴の屋敷を粉碎してそびえたつた。

〇〇〇

アダドはマリアを連れて帰還してすぐ、人格を雷に返し、デノヴァギアを解除した。汗を流すべく一度シャワーを浴びようと通路を歩いていると、コートを着た響とばったり出くわす。

二人は向かい合う形となった。

「ごめん！」

二度三度目をぱちくりし、状況を理解した二人は思わず後ろに飛び退いてそろつて頭を下げる。そして同じくそろつて顔を上げ、おかしくなつて笑い出した。

響はシャワーから雷が上がってくるのを少し待ち、上がってきたタイミングで牛乳を手渡す。渡すときの動きは少しぎこちなかったが。

響が話を切り出す。

「私、二人のことで頭が混乱しててさ。拒絶なんかしちゃって……ほんとにごめん」

「いいよ、そんなこと。私だつて長年一緒にいた親友が人間じゃなかったとか、どれだけ仲が良くても距離を取りたくなるよ」

雷はストローから口を離し、笑つてみせた。それにつられて響も笑う。

「それに、謝るのなら私の方だよ。さっきの作戦で未来を助け出せなかったんだから」

「じゃあ今度は二人で未来を助け出そう！一人で駄目なら二人で！」

響が雷の手を両手で握つた。そして二人は心で願う。このぬくもりが、未来にも届きますようにと。



〇〇〇

風鳴宗家での一件からしばらくして、訃堂は牢屋に叩きこまれ、翼の拘束も解除された。しかし、いい報告だけではなかった。翼を庇って訃堂の凶弾に倒れた八紘は、治療の甲斐なく命を落としたのだ。

「全ての調査、聞き取りは完了した。現時刻を持って行動制限は解除となる」

「調査と、聞き取りだけ……？アマルガムの不許可使用についての処断は……」

翼は訃堂との戦闘でアマルガムを使用していた。そのことを響と同様に咎められるべきと考えているのだが、その心配はない。

「翼さんが発動させる直前使用許可が下りています。八紘氏がかねてより進めて来られていたのです」

「お父様が?!」

「兄貴の葬儀に間に合わせられなかったこと……本当にすまなかった」

「敵に付け入られた不徳です。何より手錠をかけられたままでは、合わせる顔がないと申し出たのは私です……」

「そうか……」

指令としてではなく一人の大人として、そして翼の親族として弦十郎は彼女に頭を下げる。しかし、翼は弦十郎に非はなく、全て自分の責任として背負っている。とは言え、彼女の表情に迷いはなく、本当の強さというものを知ったようだ。

「翼さんー」

そこに響達装者全員とエルフナインが駆け込んできた。思わず翼は振り返る。

「立花……私は……」

「全部聞きました！未来のこと、翼さんのお父さんのことも……。正直今はまだ頭の中ぐちゃぐちゃで混乱しています……。だけど一つだけはっきりしてるのは、翼さんが帰ってきてくれて本当によかった。嬉しかった」

「立花……」

「わからないことはこれから考えていきたいです。だから明日や明後日、その先のこれからをまた一緒に」

響は翼に手を差し出す。その行動に翼がうろたえた。

「あなたと私……また一緒に……？」

「翼先輩！」

「翼さん！」

「翼」

「アタシら全員このバカと手を繋いできたんだ。センパイだけなしだなんて許さねーからな！」

「翼さんを悪く言う人なんて、誰もいませんよ！」

事情があつたとはいえ、敵対してきた自分を快く受け入れてくれる仲間がいることに翼は感極まって涙を流す。

「一緒に戦ってください……」

翼はおずおずと手を伸ばし、しかし、怖気づいて伸ばしかけた手を引っ込めてしまう。そんな彼女の手を雷が横合いから掴み、響が歩み寄って掴んだ。

「私だって受け入れられたんです。翼さんも、一緒に」

二人が笑顔で翼を見つめる。彼女は照れから頬を赤くした。

「わく……おかえりなさい！翼さん！」

これで装者は全員揃うことになった。

## 最後の戦いの始まりの始まり

まるで巨大な幹のような柱が出現してからしばらくたち、S. O. N. G. の調査部は血眼になってシエム・ハ、及びノーブルレッドを捜索していた。

しかし、あの夜に姿を現してから今まで影も形も見せず、難航していた。

「半径2 km以内にてノーブルレッドの発見ならずとの報告！」

「捜査範囲を広げろ！連中の逃走速度より早く！」

「了解！」

黒服たちは矢面に立って戦う事のできぬ自分たちに出来るのは戦う者たちへのサポートだと自覚している。少しでも足どりを掴もうと奮闘していた。

しかし現実は無情だ。どれだけ捜索範囲を広げようと意味はない。彼らの努力をあざ笑うように、シエム・ハたちの根城は巨大な幹の真下にあった。

巨大な幹、ユグドラシルシステムと呼ばれるそれは、風鳴機関の巨大な地下電算室に根を張り巡らしていた。シエム・ハは自身を縛るはずのダイレクトフィードバックシステムを逆手に取り、自身を逆流させることで掌握。言語こそ違えどプログラムは言葉で綴られる。言の葉を力として操るシエム・ハにはこの程度のことは造作もない事であった。

「それは……？」

「面白かろう？我を拘束せしめた戒めより私の断片を逆流させている。我は言葉であり故に全てを統治する」

「これもまた……シエム・ハの力……。あの時確かに私達は殺されたはず……現代に解き放たれた超抜の存在に……」

あの時、ノーブルレッドはシエム・ハによって抗うことすらできずに瞬殺され、その身を人のまがい物から正真正銘のバケモノに書き換えられた。

出血は体内に逆流し、損壊した部位は再生していた。

超常の力を見せるシエム・ハだったが、彼女からすればこれでもかつてほどの力はないらしく不満気だ。

「遺憾よの。我が力、かつての万分の一にも満たぬとは……」

「ふざけたこと……言わせないぜエツ！何?!」

「ミラアルクちゃん?!」

怒りに任せてミラアルクが立ち上がり、腕力を強化するために『カイロプテラ』を纏う。もともと持っていた力のはずだが、彼女は驚愕した。本来は羽根の枚数、即ち二か所しか強化できなかったのだが、背中の羽は残ったまま、四肢の全てが強化されている。

ミラアルクは強化された剛腕を見て、怖れに声を震わせた。

「一体……どういう訳だぜ……?体になぎるこの力……まるで本物の！」

「まるで本物の怪物とでも?ああそうさな。歪な形であったお前達を完全な怪物へと完成させたのだ。我の力の一つまみよ」

「完全と……完成……」

「まさかそれって……もう人間には戻れないって事なのか?!」

「愚問である。完成させるとはそういうことだ」

シエム・ハは彼女たちが成し遂げたかった願を真っ向から切り捨てる。エルザとミラアルクは絶望し、膝から崩れ落ちた。希望が断たれたことで今までの心の支えが崩壊し、しゃくりあげながら涙を流す。フランカも俯き、肩を震わせた。

「人の群れから疎外される恐怖と孤独は最早癒されることはなく……ああ……怪物はどうとうどこまでも異物に……」

リーダーであるヴァネッサも心が折れていた。

「気鬱たる。ならば我に仕えよ。この星の孤独も阻害も全て我が根絶やしにしてくれるわ」

「神よ……」

シエム・ハの言葉に絶望しきり、自暴自棄となっていたヴァネッサは彼女に頭を垂れる。

しかし、一人だけ絶望していなかった。幼いが故、夢を追いかけてい、叶えたいがためだけに絶対に折れない少女がいた。

彼女は叫ぶ。

「いやだッー！」

「ッ?!」

その声の持ち主は数字の羅列ではなく、人の言葉を取り戻したフランカだった。完全にされてしまったがため、不完全だった言語野が修復されたことで人の言葉を離すことが出来るようになったのだ。

すげれば楽になれると諦めきっていたヴァネッサは、隣で肩を震わせていた原因が絶望や悲しみではなく、怒りだったことを此処に来て初めて理解する。

「私は絶対にあきらめない！絶対に人間に戻ることをやめたりしない！私の命が尽きるまで、絶対に絶対に家族の元に帰るんだ！」

確かに力は化物になったかもしれない。しかし、稀血は必要としくなつたし、彼女限定ではあるが普通の言葉も話すことが出来るようになった。

ここまでこれたのだから、何かもう一押しがあれば人間に戻る事が出来る。現実的な根拠はないが、その思いがフランカの原動力となつていた。

シエム・ハは一瞬驚いた様子を見せ、にたりと笑った。

だが、フランカの叫びはすでに心が折れきつているヴァネッサたちに届くことはなかった。エルザも、ミラアルクもシエム・ハの元に膝まづいている。

現に今も、敵対的な視線を向けているのはフランカだけだ。

「で、神様はどうやってうちら怪物の孤独や疎外感を拭ってくれるんだぜ？」

「知れたこと。この星の在り方を5000年前の形に戻すのだ」

「5000年前……？そいつは先史文明期ゾツコン期だぜ……」

あまりに桁外れなスケールの大きさにミラアルクが呆気にとられる。

「申しつけたものはどうなっている？」

「これで……ありますか？」

エルザはおずおずとレポートジエムをシエム・ハに手渡した。

ジエムを持ってこいと言われてはいたが、これらが何に必要なのかが全く理解できなかった。

受け取ったシエム・ハはジエムを手で握る。すると、ピンク色だったジエムは黄金色に輝き、色も黄金色に変化した。

ノーブルレッドに顔を向ける。

「傾聴せよ怪物ども。これより使命を授ける」

フランカは憎々し気にシエム・ハを睨む。その視線を受け、彼女はほんのり口角を上げた。

○○○

潜水艦であるS・O・N・G。本部は、とある場所と計画のために海中を航行していた。

「現在本部は鹿児島県種子島に向けて航行中」

「種子島だあ?!」

クリスが素っ頓狂な声を上げた。

種子島と来れば、十中八九目的地はあそこだ。アダドによって授けられた事前知識も相まって、雷は目的の場所を知っている。

「種子島宇宙センター……」

「先だって風鳴邸に出現した巨大構造物・ユグドラシルと呼応するかのように、月遺跡よりシグナルが発信されているのが確認されました。それに、アダドさんからの情報提供によって関係性が確定しています」

「まさか私達に……」

「月遺跡の調査に行けというのデスか?!」

「検討段階ではそういった話もありました。ですが、今回月に向かうのは特別に編成された米国特殊部隊となります」

切歌と調の疑問に緒川が答えた。

シンフォギアであれば生身でも宇宙空間で活動できるし、もしものことがあっても強固な防御力が命を守ってくれる。しかし、いくら武器や鎧がすごくても、それを扱う装者たちは無重力での行動をしたことがほとんどない。過去に何度かあったが、それは空を自由に飛べるエクストライブありきであり、通常状態での経験は全くない。

その点、米国特殊部隊はNASAで疑似的な無重力下での訓練を繰り返した精鋭たちだ。環境が影響する物事において、経験に勝るものはあり得ない。

「確かに、あのユグドラシルを放ってはおけないものね」

「だからって……こうも簡単に都合つけられるものなのか？ 探査ロケットって……」

『ミスター八紘の置き土産だ』

突然照明が暗くなり、米国大統領からビデオ通話が開始された。

父親の名が出たことで、翼が真っ先に反応する。

「お父様の……？」

「プレジデントの判断と対応には感謝に堪えません」

『先の反応兵器発射による国際社会からの非難を躲けたのは、ミスター八紘が提案した日米の協調姿勢によるところが大きい。その象徴であった月ロケットを活用することにどうもこうもあるものか。』

いくら超常の存在が出現したとはいえ、あの時の米国は明らかに急ぎ過ぎていた。状況を見れば、あと五分でも待てば円満に解決していたところだったのだ。しかも発射したのが反応兵器となれば、いかなる米国とも各国からの批判は免れない。それを調停したのが翼の父、風鳴八紘なのだ。

被害者である日本側から提案されたソレは周囲の国々を納得させるに十分であり、批判を全て一発で回避するために米国はその提案に調印することにした。

そして米国は今、命を落とした八紘に対して珍しくも恩返しという形で応えたのだ。

翼は感極まって静かに涙を流す。

『だがこれで借りは帰した。後はせいぜい派手に貸し付けてやるつもりだから、そう思っていてくれたまえ』

ある種の照れ隠しも取れる言葉を最後に、大統領は通信を切る。

弦十郎は一つ息を吐いた。

「諸君らの任務は三日後に発射が迫る月遺跡探査ロケットの警護である！ 敵の襲撃は十分に予想される！ 各員準備を怠るなよ！」

「「「「「はいッ！」「デス！」「「「「「  
すでに敵が来ることは予測されるため、島民の避難は始まっている。  
最後の戦いの始まりが、始まろうとしていた。



## 人類神話

S・O・N・G はかねてからの作戦通りに種子島に到着し、装者たちは分散して守備配置についた。

基本的に最もユニゾン率の高い二人でコンビを組み、エクストライブ以上の出力を持つデノヴァギアを有する雷は単独だ。雷、と言うより彼女の中にいるアダドが自ら主張したところだが、様々な戦略を見通してもこの判断がベストであるため、採用されたということだ。

四つに分かれているため、マリア・翼組が南側の湾岸部を、響・クリス組が東側の施設帯を、調・切歌組がロケット発射台の周囲を、そして雷が北側の管制施設の防衛を担当していた。

定時報告の時間になり、通信機からは各々の報告が聞こえてくる。

『定時報告。こちら異常なし』

『こちらにも異常ありません』

『発射予定時刻まであと24時間。引き続き警戒に当たります』

「……こちらにも異常なし」

確かに異常はない。

ただ、目の前にアルカ・ノイズを召喚せず、戦う気が全く見えないフランカがいるのを除けばだが。

雷はフランカから警戒の視線を外すことなく、ゆつくりと通信機をポケットにしまう。警戒し、観察していると、やはり彼女の表情からはこれから戦うという意志は見られない。それよりも、どちらかといえば何をどうすればいいかという初対面の人にどうすれば話しかけられるかと悩んでいるように感じる。

「本当にいいの？ アダド。目の前の事、報告しなくて」

（ああ、構わん。小童のところの地下から地上に飛ばされたことがあったであろう？ あれをしたのがこの娘だ。それと同時に受けたテレパシーはそなたも聞いたはずだ）

「聞いたけどさ……」

雷が受けたテレパシー。

いや、テレパシーですらない、ただ思いが能力と共に雷の中に流れ

込んだだけと言った方が正確だろう。しかし、その想いは絶対に人間に戻る。戻って私の音楽を世界中に届けて見せるという夢と希望、そして化け物から人間に戻るといふ不可能を可能にしようとする不屈の意志を持っていた。

アダドはこの意志に興味を持ち、フランカにまだその意志があるのなら平和的に相対するつもりでいた。もつとも、少しでも敵対意識を持っているのならば即座にかたをつけることに変わりはないが。

雷は腰に手を当てて正面からフランカの方を向く。

「君、名前は？」

「名前はフランカ・ド・フリース、十三歳！誕生日は十二月二十六日で、血液型はA型！身長は百四十七センチで体重は言えません！趣味は音楽鑑賞で好きなものは良く分かりません！」

「お、おう……」

早口でまくし立てるように言われてしまったため混乱したが、雷は彼女を響の同類とみなした。どうもかなり勇気を出したようだ。肩は緊張と恐怖に震えている。

彼女から感じ取れる恐怖は敵と相対しているからではなく、敵に、雷と中のアダドに自分が受け入れてもらえるかどうか。という恐怖が大きく見える。

そして通信機からは他のメンバーがノーブルレッドとの交戦に入ったとの報告が入った。しかし、雷はフランカとの受け答えこそが自分の戦いだと判断した。その判断基準は報告を雷が受けた瞬間フランカの表情が悲痛に歪んで見えたからだ。

「で、フランカは何のために来たの？答えようによっては、ここで君を倒す」

「ッ……」

フランカは言葉に詰まった。

とはいえ、自分たちのしてきたことを理解し、そう上手く受け入れられることはないんだと真摯に受け止めた彼女はしっかりと答える。

「ヴァネッサを、みんなを、止めてもらうためです！」

「止める？」

雷は首を傾げた。

「ヴァネッサたちは絶望しちゃってるんです。歯向かってても神様には勝てないし、壊れたものが完全に治ることが無いことを知ってるから……。だけど私はまだやれることがあるのに諦めたくない！私の命をかけます。この命に価値がない事だってわかってます！……。だけど……。……。……！」

最後の方は言葉になっていなかった。顔は自身の無力さへの怒りと壊されてしまった自分への悲しみの涙でぐずぐずになっていた。鼻水もたれ、それを両手で乱暴に拭っているからさらにぐちゃぐちゃだ。

雷はフランカの気持ちを、想いを知っていた。

彼女は私だ。必死で変わろうと、元に戻ろうとしても傷が深すぎる故に簡単に変われない、戻れない自分への怒りと壊されてしまったが故の悲しみが同居した感情だと。

だからこそ、雷はフランカと真正面から受け止められる。

「たとえば人間に戻れたとして、これまでできてきた行いで裁かれるよ」  
「構いません。人間として、人間のルールで裁かれるなら……。私はそれを甘んじて受け入れます」

フランカの顔を見る。

鼻を吸り、涙で目元が赤くはれているが、目だけは決意の炎が燃えている。

地球の光ほしがその瞳の中に輝いた。

「私は君たちを人間に戻す手段は持ってないし、知りもしない」  
「……」

「だけど、連中を止める手伝いはしてあげる。ただし、手伝うだけ。止められるかは君の説得次第だよ」

「承知の上です！」

雷の中ではアダドが満足そうな顔を浮かべている。そのことをしっかりと認識している雷は深く息をつき、フランカの方を向いた。

通信機で本部に通信を繋ぐ。

「聞いてました？弦十郎さん」

『ああ、聞いていたとも。彼女の投降を認めよう』

「だって、よかったね。フランカ」

「ツ……いよかった……よかったよお……」

まずは一步。自分たちのような存在は、そう言った存在に対処するところに認められてから始まると考えていたフランカは、安堵と歡喜が入り混じった奇妙な表情を浮かべている。

背後で巨大な爆発音と振動が響き、素早く振り向くと炎と煙が巻き上がっていた。ロケットの防衛に失敗したということだ。しかし、焦りは見られない。

何故なら相手の目的地も月であることをシエム・ハと同じアヌナキであるアダドは知っているからだ。そしてこちらの手段を封じるということは、向こうにはその手段があるということ。恐らくはテレポトジエムだろう。響達なら転送までの隙について妨害や、乗り込むこともできると確信していた。

しかし、問題は自分たちだ。

その危惧通りの声が通信機に入ってくる。

『ギアからの信号、検知できません！』

『スキヤニングエリア拡大中！……ですがツ！』

『世界からの消失……？まさか……そんなことが……』

信号が検知できなくなつた。ということはテレポトジエムに割って入って共に月へ行ったということだろう。

落ち着き払って雷はフランカに向きなおる。

「で、私達はこのまま地球に置き去りにされてるわけだけど……」

「流石に私のテレポトでも無理です。ですが、まだ方法があります！」

「で、あろうな」

雷の瞳が蒼色に、髪に赤い燐光が舞う。

通信機を耳に当てる。

「そ奴らは先に月に向かった。地球上を探しても見当たらんぞ」  
『何?!』

「そしてフランカと共に、我らも月へ向かう」

『彼女なら、月へ行けるといふのだな?』

フランカが駆け寄り、アダドの腕を掴んで代わりに答える。

「捕虜なのに勝手な行動を許してください! だけど……」

「今はアダドだが、雷でよい」

「雷さんと一緒に月へ行つて、ヴァネッサたちを止めます! その後のことは……お任せします」

「ということだ。後は任せろ」

『ああ、頼む……』

アダドは通信を切り、ポケットにしまった。

フランカは自分に喝を入れるように頬を叩く。

「して、その方法は? 我一人なら行けぬことはないが、これはお主のしたいこと。ならば、お主の力でやって見せるがよい」

「はい!」

意気よく頷き、フランカは懐からテレポルトジェムを取り出した。

そしてそれを両手で握り、歯を食いしばって自身の超能力を全開にする。

「ほう? テレポルトジェムの座標をテレパシーの応用で書き換えるか……」

月遺跡の座標が分かっているのなら、それをテレポルトジェムの登録している座標と書き換えればいい。言うだけなら簡単であるが、それはシエム・ハだからこそ成し得れること。つまり、神域の不可能を可能にしなければならぬのだ。

能力が強化されたとはいえ、それでも額からは脂汗が浮かび、呼吸が荒くなっている。更には早く書き換えねばならないという焦りの表れから腕に力が入り、震えている。

そして、その時は来た。

ジェムが黄金色に輝き、月遺跡の座標が登録される。緊張の糸が切れ、フランカは肩で息をしながら地面にどさりと座り込んだ。

「はあ……はあ……で、出来た……!」

「よくやった。ではいくぞ」

「は……はいッ!」

アダドにフランカを休ませるつもりはない。すぐに彼女を立ちあげさせ、ジエムを地面で割って月遺跡に向かう。

厳しさを見せるアダドだったが、その口角は上がっていた。

シエム・ハの神域である不可能を可能にする。それは、艱難辛苦を乗り越える人類神話の象徴。未来へ進む種族である人間にしか出来ない事。

今ここで、フランカは自身が人間であるということを証明したのだ。

## 月遺跡への侵入

月夜の大地に、白と緑の光が尾を引きながら激突する。

その激突も一度ではなく、何度も何度もぶつかり合い、火花を散らした。常人の目にはぶつかり合う瞬間に何があったかを認識することもできず、ただ空に浮かぶ光跡しか映ることはないだろう。

緑の光は実体剣を持つ青年、エンキ。白の光はレーザーのような剣を振るう女、シエム・ハ。二柱は鏢迫り合った。エンキには言葉がある限り再生する力が、シエム・ハには彼との戦闘能力の差があるため、どちらもとどめを刺すことが出来なかった。

衝撃波と共に両者の距離は離れ、怯んだエンキの隙をついてシエム・ハが手刀を振り下ろした。

「ふッー！」

「ッ」

白煙の中からの奇襲であったため、一瞬遅れたエンキだが間一髪で回避する。それによって手刀から放たれた弧を描く光は背後の岩山に直撃し、周囲を飲み込むほどの大爆発を引き起こす。

これが人とは隔絶した存在同士の戦い。アヌンナキ同士の、神々の戦いだ。

爆炎の中からエンキが剣を構えながら現れる。

「シエム・ハ！ 盟友アダドによってお前の創造生命は絶滅し、目論見は潰えた！ これ以上の抵抗は無意味だあッー！」

同時刻、人類に向かって放たれたシエム・ハの創り出した神造生命がアダドによって殲滅され、絶滅していた。この戦いは凄惨を極め、後に「シユメールの洪水神話」と語られる出来事となる。

加速して距離を詰め、シエム・ハの迎撃を予測していたエンキは急停止と方向転換を組み合わせることで残像を生み出すほどの速度で背後に回り込み、剣を振り下ろして彼女を地面に叩きつける。

あまりの速度で地表に叩きつけられたため、土煙がエンキの頭を超えるほどに巻きあがる。

地面に這いつくばったシエム・ハは、四つん這いになりながら起き

上がる。

「業腹な……！だがエンキ……貴様の言う通りかもしれんな……」

「ならばッ！」

「故に……であるッ！」

シエム・ハは振り向きざまに紋章を展開し、銀色の光線を発射する。勝ちを確信し、一瞬だけ気を緩めていたエンキの隙を完全についた。

エンキの回避行動は間に合わず、咄嗟に左腕でその光線を防ぐ。防壁によって数秒は持ったものの、踏ん張らねば防げないため避けられなかったのだ。

遂に防壁は砕け、エンキが叫び声を上げる。

「うあああッ！」

「快哉だ……！行く道を悉く阻む貴様だけはこの手で屠らねば溜飲が下がらぬ！」

今の間にもエンキの左腕が銀化していく。

「このままではッ……！」

体が銀へと書き変わってしまう。最悪の事態を恐れたエンキは躊躇ったものの、決断し、右腕に携えた剣で自らの銀となった左腕を切り落とした。

荒廃した大地に銀の左腕が落下する。

「腕を捨てて命を拾うかッ……！ついに来たッ！」

シエム・ハは歓喜に表情を歪め、金色の閃光が煌めいた西の空を見上げる。自身やエンキ以上の速度で接近する光は戦闘空間に静止し、おびただしい量の血を流している彼のそばに近寄った。

その光の正体は、紅い髪に蒼い瞳、金色の鎧を纏ったアダドであった。アダドはエンキの傷口に手をかざし、痛覚の麻痺の後に筋肉を操作して締め上げ、出血量を軽減する。

「アダド……すまない」

「いや、構わん」

そして空中で振り返り、明確な殺意を込めて地面のシエム・ハを見下ろした。

シエム・ハは再び銀化光線を放つが、アダドの拳によって迎撃され、



四方に散らばっていく。アダドとエンキには単純な戦闘能力の差はほとんどないが、その身に宿す神性からアダドの方が一步勝っていた。

歓喜に歪んでいたシエム・ハの顔が怒りに変わる。

「その目を何故われに向けるツ?! そのような目で見降ろすでないツ！」

「お前がそうだからだ……」

彼女に唯一とどめを刺せるアダドは雷光の速度で接近し、反撃の暇を与えずにシエム・ハの胸を貫手で貫いた。もう片方の手で後頭部を支える。

まるでその様は、死にゆく想い人を抱きしめるかのようなだった。

死にゆくシエム・ハは小さく告げる。

「お前が答をくれるまで、われは未来に繋ぎ続ける……。さらばだ……」

「……」

アダドはしばし目を閉じ、腕を抜いて同じく地表に降りていたエンキの方を向く。エンキは何か声をかけようとしたが言葉が見つからず、口の中で反芻するだけになってしまう。

そんな盟友の姿を可笑しく思ったアダドは、少し無理をしたように笑ってみせた。

「気にするな。我にしか出来ぬことだ……」

「……そうだな」

「あとはネットワークジャマーを作動させるだけだ」

「ああ、すまない。ファイネ……」

アダドは振り返ることなく、エンキは人間の想い人への言えぬ謝罪を胸に秘めて歩き始めた。

「ツ?!」

そこでマリアの目が覚める。

今まで見ていたのはマリアの夢であり、彼女は翼と共にノーブルレッドと月へと飛んだため、月遺跡の中にいた。

「今のは……? 嘘ッ……」

あまりにも現実的な精度の夢を見ていたことで混乱したまま、マリアは体をひっくり返してのそりと立ち上がる。そして地球を見下ろしたことにより、初めてここが月遺跡であることを実感した。

ついで翼も呻きながら起き上がる。

「ッ……………」

「翼！翼！」

一方地球では、同じく月に飛んだアダドの言葉により、月に装者たちがいることが確認される。

「アダドさんの言葉通り、月面、おそらくは月遺跡にてギアのシグナルを検知しました」

「錬金術師達の転移の術式によって運ばれたとすれば……………」

「いや、だとすれば今考えるべきは……………」

エルフナインが移動した方法を考えようとしたが、藤堯が遮る。

それが尤もだと判断した緒川は藤堯の意見に賛同する。

「皆さんを地球に帰還させる方法ですね」

スタッフを総動員し、月へ行つた装者たちをどうやつて帰還させるか、その方法を模索し始めた。タイムリミットは、シエム・ハが行動を開始するまでだ。それまでに、方法を発見しなければならぬ。

○○○

月遺跡で目を覚ましたマリアは、口で大きく息を吸い込んだ。新鮮な空気が流れ込み、肺を満たす。

「空気はある。むしろおいしい」

率直な感想ではあるが、恐らくもう地球上では味わえないのでは？と感じるほどの澄んだ空気の味だった。

さらにマリアは軽くタップを踏んでみる。月の重力は地球の六分の一と聞くと、先ほどから地球とさほど変わらない感覚で動くことが出来る。

「地球並の重力。これは制御されていると考えるべきかしら？」

人間が問題なく活動できる程度はあると判断したマリアだったが、翼の方を向くと、彼女はどこか落ち込んだまま俯いていた。普段なら母親のような包容力で励ますところだが、今は事態が事態、故に少し

キツめにいく。

「無鉄砲なんてらしくないわね」

「マリア……。私はどうすればよかったんだ？わからないんだ……」

「そうね。勇気かしら」

「勇気……？」

マリアが迷うことなく断言した。

思わず翼はオウム返しに聞きなおす。

「差し出した手を握ってもらえなかった時、あの子はきつと心細かったはず。それでもあの子は勇気を出して自分から握ってきた。それに雷もそう。きつと今、誰よりも人と繋がっていたはず。だから、差し伸べられるのを待つのではなく、自分から掴みに行った」

「立花……。轟……」

「あの子達の勇気に今度はあなたが応える番だと思う」

「そうか……。私は、土道不覚悟にも立花と轟の勇気から逃げだした

……。あいつたあツ！」

不意にマリアが翼にデコピンを喰らわせた。

かなりの威力だったのか、翼は思わず後ろによろめいてしまう。

「まったく。とんだぶきつちよさんね。兎にも角にも、はぐれた仲間を探しましょう……。何?！」

突然マリアのシンフォギア、アガートラームが発光した。光線が空中に放たれて屈折し、頑丈に閉じ切った扉に直撃。複雑に光が走った後、ゆっくりと開き始めた。

「導いてる……。？アガートラームが?！」

「行ってみよう！」

気を持ち直した翼の提案にマリアも頷き、アガートラームの光が指し示した方へ二人は走り出した。

○○○

シエム・ハから受け取った月から帰還するためのレポートジェムは砕け散っていた。恐らく過剰な人数を転送したことによる負荷は一つだけでは耐えきれず、帰還用のこちらにも負荷が伝播してしまつたと考えるのが妥当だが、ヴァネッサはもう一つの可能性を考えてい

た。

「帰還用ジェムの損傷が著しい……とても扱えないわね」

(シンフォギア装者を巻き込んだ、想定を超える転送負荷が過干渉したのか……。それとも……)

シエム・ハは元々自分たちを帰還させるつもりなど更々なかったのか。

しかし、それならばフランカを連れていけなかったのは幸運といえる。フランカは誰も傷つけておらず、姿を映されたカメラにも武器だけを破壊して無力化し、安全圏にレポートさせている映像が映っているはずだ。そしてフランカはおそらくS・O・N・G・に保護されている。ホムンクルスであるエルフナインがいるのだから受け入れられるだろうと考えていた。

そんな時、背後で物音が聞こえた。

「誰ッ?!」

素早く振り返ると、調と切歌との戦闘で深い怪我を負ったエルザがトランクケースに座ってやって来た。息は荒く、まともに歩くことが出来ないのだろう。

「エルザちゃん?!無事だったのね!」

家族の身がひとまず無事であると確認したヴァネッサは、エルザに駆け寄る。エルザは力の入らない足でケースから降り、支えにして何とか立ち上がる。

「ですが……脚下のニューロンコネクトが焼き切れたであります……。おそらくテールアタッチメントの使用はもう……」

「うん……」

それでも、無事に生きていることがうれしいヴァネッサはエルザを優しく抱きしめた。

「でもよかった。一緒にミラアルクちゃんを探しましょう」

「ガンス……」

親愛が心の底から嬉しいエルザは悲観しそうだった心を持ち直した。すると、部屋中が真っ赤になり、アラートが鳴り響いた。

「警報でありますか?!」

壁の至る所から針のようなものが出現する。

ヴァネッサが戦えないエルザを体の影に入れ、気を巡らせる。

「これは内部に侵入した私達を排除しようとする遺跡の意志ね……」

現れた針はすさまじい速度で飛び出した。ヴァネッサは、かつて極冠の棺を守るように飛び交っていたビットと同型であると認識する。

同じく響とクリスも、遺跡の防衛機構であるビットに追いかけて回されていった。

「あの形！南極で見た！」

「ああ！ここに間違いなく先史文明の……！」

走って角を曲がると、その先にもビットが群体を作って道を阻んでいた。

このままではらちが明かないと判断し、二人は戦闘を決断する。

「逃げ回るのは終いだ！」

「ぶち抜くよ！クリスちゃんツ！」

響がペンダントを握り、構えた。

## 革命の音楽

ペンダントを構えた響・クリスの二人は突如として現れた遺跡の防衛機構を相手取るためにシンフォギアを装着する。

この遺跡が先史文明期の超技術で建造されたものであるため、どのような行動で何が起きるかが全く分からない以上振るう力を慎重にせねばならない。遠距離系で爆発物を多く使うクリスは特に気を付けなければならないといけなかった。

防衛機構であるビットはまさに網のように光線を照射し、攻撃を叩きこむために肉薄する響を迎撃するも遺跡を破壊しないように威力が抑えられているためかアームガードで容易に防がれ、彼女を止めるには至らない。響は腰のブースターを点火し、一時的に飛行して円の動きを利用した乱打でビットを叩き落としていく。

クリスも自身の攻撃で遺跡の破損がおきる可能性を理解しているからか、ビットを破壊する最小限の火力であるマグナムを両手に握る。幾何学模様配置されたビットを攻撃行動に入ったモノから高速で撃ち落としていった。

月と地球の距離であろうとも、S・O・N・Gのレーダーはガングニールとイチイバルの起動を正確に探知していた。

「再度ガングニールの反応を月遺跡にて検知！次いでイチイバルも！」

「調ちゃんとお切歌ちゃんのギア反応も確認！ですが、こちらからの呼びかけに応答はありません！」

「皆さん……」

エルフナインの心配も尤もだ。

探知こそ出来るものの通信が届かず、映像も同様だ。確認できるのはアウフヴァツヘン波形のみで、それ以外の情報はすべて遮断されている。波形は探知できてそれ以外は不可能なことから、月遺跡の特性とみて間違いないだろう。

「おそらくは月遺跡での交戦。そして気になるのは……」

「遺跡を使用していたとされるアダドの魂を宿す雷さん達はともか

く、翼さんとマリアさんの反応が見られない事……ですね」

もともとの遺跡を使っていたアダド。その魂を身に宿す雷と彼女が帯同しているフランカが交戦していないのは理解できるが、指し手条件が他と変わらないはずの翼とマリアの反応が全くない。

あまり考えたくはないが、未知の環境だ。どれだけ警戒していてもギアを纏う前に攻撃を受けてしまえばひとたまりもない。

「呼びかけは続ける！各国機関への救援要請もだ！一秒でも早く月へ向かう手はずを整えるんだ！」

弦十郎は彼女たちの安否情報の確保を最優先しつつ、帰還させるために世界中に要請し続けるよう厳命した。

響・クリス組とは異なる場所で、調と切歌が同じく防衛機構であるビットを相手にしていた。調はツインテールバインダーに大型鋸を展開し、ヨーヨーの要領でコントロールしながら宙に浮かぶビットの群れを撃墜する。切歌もリーチの長い鎌を振り回し、まるで糸を束ねるようにしてひっかけてまとめて斬り捌いた。

二人は背を預けながら全方位に警戒を向ける。

「月遺跡……。やって来たのが私達でよかった！」

「こんなのがいるんじや、特殊部隊ではきつと相手にできなかつたデス！」

確かにいくら特殊訓練を積んでいたところで通常兵装ではかすり傷一つ負わせることすら不可能だろう。特殊部隊ではなく装者たちが来たことにはある意味で幸運といえた。

ノーブルレッドも、完全な化物へと変化したことによる幸運を彼女たちの心理は置いておくとしても享受していた。ヴァネッサは負傷したエルザを庇いながら背部からアームユニットを展開し、光線を乱射して撃ち落としていく。

「遺跡構造のデータはシエム・ハからこの身にダウンロードされている……。だけど、防衛機構の対策までは！」

シエム・ハの思惑は完全にノーブルレッドに月遺跡を掌握させることだった。その為に遺跡の構造をダウンロードさせ、遺跡を守る防衛機構を攻略できるほどの火力を搭載させたのだ。

その思惑を知りながらも、ねじ曲がってしまった自信の理想を叶えるためにヴァネツサは傀儡となる。彼女は逆立ちし、太ももの砲門を露出させて光線を発射。様々な方向に照射された光線は宙に浮くビットをまとめて捉え、一気に撃墜する。

「人類を呪いから解き放つって、思った以上に難しいのね……」

一方、響とクリスはビットを撃墜しながら活路を切り開いていた。しかし、ここにきてクリスが一つの思慮に駆られてしまう。

(バラルの呪詛の解除……。本当に人と人がつながってわかりあえるのなら、正しい事を成そうとしてるのは……)

「クリスちゃんッ!」

いつだって自分の意志を貫き通せないのはクリスの悪い癖だった。しかも、その癖が戦場で発露してしまったために響の声に反応するのが遅れて隙をつかれ、背後からの攻撃を許してしまう。背中から感じた質量的に、ぶつかって来たのはビットではなかった。何とか地面と衝突した際の反動を利用して着地し、ぶつかってきた敵を認識すると南極で見た棺桶を小型化したものだった。

「こいつら……南極にいた奴の量産型かよッ!」

だが、サイズが小さくなっているためか防御力や攻撃能力が低く、一撃で沈黙させることが可能な代物だった。

その証拠に、響の拳が小型の棺桶を貫き、機能停止させている。しかしながらやたらめったらに数がいるため、面倒に思ったのか響は力強く踏み込み、ブースターを点火、マフラーにエネルギーを貯め込んでドリルのように呐喊する。

「うわッ?!」

クリスのすぐ横を猛スピードで通り抜け、その進路上にいたビットと棺桶を一息に全滅させた。その一撃は壁に拳が突き刺さったことでようやく静止する。

響は突き刺さった拳を引き抜き、クリスの方に振り向いてガッツポーズを決めた。

「ぶち抜いたよ!クリスちゃん!」

「かつこよすぎるんだよ……馬鹿力!」



それに対するクリスの反応は、どちらかといえば呆れの方が強いものだった。

○○○

風鳴宗家地下電算室にてシエム・ハは満足げに体を揺らしながら笑い声をあげていた。

「ふふふ……愉悦に震える……」

すべてが自身の思惑通りに進んでいる。後は予定通りに自身の傀儡であるノーブルレッドが遺跡のメインシステムを掌握するだけだった。

フランカがノーブルレッドから離脱したが、さして問題はないだろう。それよりも、シエム・ハはアダドがフランカに手を差し伸べたことが非常に気に食わなかった。しかし、この感情は不要なものだと自らの中から破棄することにした。

「ユグドラシルの根は、既に地球中心各域に到達。そして怪物共がその使命を果たせば、我の……」

偶然下を向いたとき、右腕が小さく震えていることに気づいた。恐らく不可解な感情を抱いたときに隙について足掻いたのだろう。

「よくも足掻く……。強い想いがなせる奇跡か……」

まだ依り代である未来が完全に取り込まれていないことに呆れ、軽く驚きながらも、これを奇跡と断じた。奇跡とは、起こり得ぬ不可能が偶然に偶然を重ねた確率で可能になるからこそ奇跡と呼ばれるのだ。

シエム・ハは今度こそ完全に未来を取り込むために自身の中に目を向ける。

「だって！私はまだ響にー！」

「腑に落ちぬ。そも、われを受け入れたのはお前であろうに……」

「えっ?!」

この期に及んで何をぬかしているのかと言うようにシエム・ハが未来の心を折りにかかる。

「繋がりたい。想いを届けたいともがいていたのは誰であったか……」

「違う！あれは！私は！」

涙ながらに未来は反論しようとするが、彼女の口から出るのは子供のような駄々ばかりだ。反論にすらなっていない口答えに、シエム・ハは事実を理路整然と展開していく。そして歩み寄り、肉体だけでなく精神、心からの同化を図る。

「身も心も捧げよ。先んじて呪詛より放たれし依代の少女よ……」

真の姿を未来に明かし、その手を彼女の頬に添えた。

「我はシエム・ハ。来るべき星の未来……。お前の名もそのような意味を持つのであろう？」

その一言で、完全に依り代である未来を掌握した。それに呼応するように、ユグドラシルにめぐる血管のようなものが発光し始める。

月では、全く異なる経緯で、しかし同じくアヌンナキをその身に宿す雷がシエム・ハ、そして未来の身に起きたことを察知していた。

「未来ッ！」

（待て雷！今はこちらを対処するのが先だ！）

「でもッ……！」

無力感に雷の声が震える。

エクストライブすら超える圧倒的な力を宿していても、その力で大切な親友を守ることが出来なければ意味がない。未来の想いを響に伝えること。それが、今の雷の願いだった。

（気持ちには分かる。しかし、冷静になれ。我らが動いたところでシエム・ハを殺しても依り代の少女も死ぬだけだ。それは最終手段。打てる手がある以上、そちらを取れ）

「雷………さん？」

「ッ………何？」

悔しさに歯噛みしていた雷に、すぐ近くを歩いていたフランカが心配そうに声をかけた。その声にこたえるために雷は一度頭を振って冷静さを取り戻す。

しかしフランカは慌てて手を振った。

「い、いえ、大したことはないんです。ただ、何か辛そうだなって思ってます……」

「テレパシーを使えばわかるんじゃないの？」

内心を隠すために、雷はワザと意地悪する。しかしフランカはそれを意地悪と思っていないのか、はにかみながら素直に答えた。

「確かにテレパシーを使えば考えてることも分かります。でも、その力を持つているのは……あ、他にもいるかもしれませんが、私だけです。そんな一方通行なモノ、私はあまり頼りたくありません」

「ふうん……。じゃあ、何なら頼りたいの？」

雷の問いに、フランカは恥ずかしそうに答えた。

「音楽……でしようか」

「音楽？」

フランカは「はい」と答えて首に書いていたヘッドホンを雷の耳に掛けた。そして曲を流す。曲名はフレデリック・シヨパンの練習曲ハ短調作品10-12。『革命のエチュード』と呼ばれる曲だ。

「シヨパン……」

「はい、そうです。言葉には言語の壁や聞き違い、発音などで意味が変わり、いさかいが起きます。歌も同様に言葉で歌っている以上それがあります。しかし、音楽は違う。ただの音、それだけです。だからこそ誰もが聞き入り、理解することが出来る……私はそう考えます。だって、音楽は耳で聞くモノじゃなく、心で聞くものですから！」

「……理解できない人もいるんじゃないの？」

「そ、それは……今、誰もが心から聞くことが出来る音楽を研究中です……」

「そっか」

歌で世界を救ってきた雷たち装者であるが、納得がいく考えだ。今、それが見つからなくても、いずれ見つかればいいと思う。

少しだけ気分がよくなった雷は、ヘッドホンから流れる音楽に耳を傾けながら再び駆け出した。フランカもその後を追う。

暴走したフランカの家族、ノーブルレッドを止めるために。

地球をユグドラシルによって赤く染めた神に、『革命』を叩きこむために。

## 恩返しへの勇気と人類の叡智

S・O・N・G は装者たちが月遺跡を攻略している間、全力をもってユグドラシルの攻略を開始する。直ぐに戦う事になるであろうシエム・ハとの決戦のためにも、ユグドラシルが何であるのかを解明することは必須だからだ。

しかし、ここにきてユグドラシルはこれまでとは真逆の動きを取った。

「ユグドラシルの稼働確認！地球中心各域に向かって潜行中！」

下から樹のように生えてきたユグドラシルだが、今度は沈みこむように地球の中心へと沈み始めた。その在り方は、ボーリングマシンと形容するのが正しいだろう。

「みんなの頑張りでバラルの呪詛は死守できているのに、なぜユグドラシルが……」

「やっぱり、こいつの仕業だろうな……」

カメラをズームし、ユグドラシルの天辺に立つ人影、シエム・ハを視認する。

その姿を捉え、弦十郎が腕組みを解いてこの場を後にしようとする。この世界の現状最高戦力が自らシエム・ハを撃破しようとしているのだ。

そんな彼を緒川が呼び止める。

「司令！どちらへ！」

「装者不在の今、あの神話級の超常に対抗できるのは……」

「待ってください！」

弦十郎は足を止め、対抗できるのは自分しかないと言おうとしたが、それをエルフナインが遮った。

「対抗するって……どうするつもりですか？……僕に考えがあります！」

弦十郎からは答えが返ってこない。そこを機と見たのか、エルフナインは自分の考えを展開する。

〇〇〇

邪魔者はおらず、後は配下の化け物たちがバラルの呪詛を解呪するだけとなったシエム・ハは、実に満足げだ。

「生生流転……まもなくである。われとこの星の迷いを断ち、わが力へと改造した後には彼方へと去った同胞の喉元へと攻め入ってやろうぞ」

そう言つてにたりと笑う。

それはそうとして事態がすべて手の内で進んでいることが満足げなシエム・ハは胸の高鳴りが抑えられない。シエム・ハと敵対する者たちの内心とは異なり、彼女自身は実に楽し気だ。

「高鳴りが抑えられぬ……。ああ……。そうさな。人間共はこういう時に歌の一つでも口ずさむのであったな……。ん？」

気配を感じて視線を落とすと、一つの人影が見えた。

少々やぼったい服装に白衣から見るに、エルフナインとやらであろうと未来の記憶から該当人物を参照する。

「果ての荒野に一人立つ者がいようとは……」

果たしてそれは勇気かそれとも蛮勇か。それを確かめることを余興にしようかとシエム・ハはエルフナインの元へと飛行する。

エルフナインの中では、キャロルがこれからこの星の神と相對する彼女を案じていた。

(怖いかな?)

「あまりの怖さに腰が抜けそうです！だけど……」

未来が自身が攫われそうになった時、恐怖を殺して盾になってくれた日のことを思い出す。未来の勇気が、エルフナインに勇気を与える。

「あの時未来さんは逃げなかった。だから僕も怖くたって逃げたくありません！それに！今の僕は一人じゃありません！」

(フツ……！)

ともにキャロルがいてくれる。それだけでエルフナインの力になつていた。

そしてこころの中のキャロルは、分かっているならそれでいいとエルフナインにこれ以上言及することはなかった。

目の前にシエム・ハが降臨する。

「向こう見ずな。我に齒向かう鈍付くがまだいようとは……」

「僕もそう思います……それでも！俺の錬金術をナメてくれるなッ！」

エルフナインの目が吊り上がり、人格がキャロルのものと交代する。

その意気込みにシエム・ハも一瞬気おされる。そしてキャロルは召喚陣を構築し、その中からダウルダヴラを取り出して弦を爪弾いた。ハープの音色が響き渡り、変形してファウストローブへと姿を変え、キャロルがそれを身に纏う。

最強の錬金術師が創造神と激突する。

キャロルは指先から弦を伸長して固め、毛糸玉のようにしてシエム・ハにばらまいた。しかし、その一つも命中せず、土煙が舞い上がるだけとなった。

「粗忽だぞ。どこを狙っている？……ッ」

土煙が晴れた時、相対しているはずのキャロルの姿は何処にもなかった。見失ったシエム・ハだったが、歌の聞こえる方に耳を傾け、その方を向くとキャロルはユグドラシルへと進んでいるようだった。

最初からシエム・ハを相手取るつもりなどなかったのだ。

「悪くない考えた。我でなく直接ユグドラシル主幹を狙うとは」

シエム・ハは浮遊し、キャロル以上の速度で彼女を追う。そして彼女の背後から腕輪のレーザーブレードで斬りかかるが、それを予期していたキャロルは直前で避け、再び糸球を斉射する。いくつかは命中して爆発したが、やはりそのほとんどは外れて地面に落下する。

「バラ撒けば躲せぬとでも踏んだか？なれど人の業では撃ち落とせぬ！」

少しはダメージを負わせることが出来たが、やはり響の神殺しか雷、アダドの神性でなければ有効打にはならない。神の無敵性によってダメージが無かったことにされてしまった。

知っていたことだが、流石のキャロルもこれには怯んだようだ。

その隙を見逃すようなシエム・ハではなく、指先に光球を展開して

投擲した。キャロルは防御陣で防いだが、それ以上に威力が高く、地面に叩きつけられる。

その醜態をシエム・ハが見下ろす。

「無意味だ……。だがそれ以上に……。目障りだあッ！」

再びレーザーブレードを展開し、急降下でとどめを刺すべく接近するがそれこそがキャロル、ひいてはエルフナインの策だった。

「高くつくぞ……。オレの歌はあぁッ！」

キャロルの錬金術に反応して落ちたはずの糸球がほどけ、超硬質の弦がシエム・ハを縛り上げ、拘束する。

「動けぬ……。鉄砲に緊縛するか……」

「恐るべきは埒外の物理法則によるダメージの無効化。だが拘束に対してはどうだ?!」

シエム・ハは予想の上をいかれたことに憎々し気な目を向ける。

このままでキャロル達の策は終わりではない。まだ最後の一手が残っている。

「アルカ・ヘスタッ！」

四大元素と星の運航を司るエーテルの錬金陣を展開し、チフォー・ジュ・シャトーの世界解剖の光を個人に限定して展開する。オリジナルとの違いは対象のサイズが異なることと、外部放射と内部放射の違いだ。

このままでは未来ごとシエム・ハは解剖されてしまうが、キャロルとエルフナインにそんなつもりはさらさらない。

「人の概念などとうに解析済み！ならば、それ以外の不純物を神と定めて分解するまで。俺の錬金術をナメてくれるなッ！」

モノを理解し、分解し、構築する。錬金術の基本にして鉄則。ただそれを実行するまで。しかし、エーテルによる無限の循環が可能とは言え、意志を持つ存在に対してそれを実行するためには膨大なエネルギーが必要。その調達先はただ一つ。

（思い出の焼却ッ！足りない分は僕の思い出も一緒に燃やしてーッ！）

「うあああああッ?!」

光が極点にまで達し、シエム・ハが悲鳴を上げた。そして人神解剖の光が収束し、大爆発が発生する。発生した衝撃が、キャロルを再び地面に叩きつけた。

しかしキャロル達は忘れていた。シエム・ハにはもう一つの手があることを。その手の名は神獣鏡。討堂が神を支配下に置くために用意した拘束具が、全ての障害を払う最恐の神器となってしまったのだ。

「まさか……神獣鏡の凶払いで俺の錬金術を?!」

「とどめ……は刺さずに捨て置いてやろう。神に肉薄した褒美だ。星の命が改造される様を特等の席で御覧じろ」

そしてシエム・ハは浮かび上がり、ネットワークの海にばらまいた自身とアクセスする。

キャロルは打つ手が無くなったことで思わず叫んでしまう。

「くツ……さっさと帰ってきやがれ……シンフォギアーツ!」

「頃合いだ、いきり立てツ!」

ネットワークを掌握したことにより、バラルの呪詛の解呪を待たずしてユグドラシルの展開を為したのだ。

これが発生したのは、翼・マリアコンビが不死鳥のフランメをユニゾンし、アマルガムを発動したことでミラアルクを撃破した直後の事だった。S・O・N・G・本部である潜水艦は海中を航行していたが、突如として海底からユグドラシルが出現し、船体を大きく抉ったのだ。

しかもユグドラシルは風鳴宗家のモノと今出現したこれとは別にも、世界各国様々な場所から大地を割って出現した。

「外部からの攻撃に左舷の一部が損傷!浸水が始まっています!」

「ユグドラシルがあちこちに!鎌倉の一本じゃない!世界中に……ユグドラシルが!」

まさしく世界樹。世界中に生えたソレは全てがシエム・ハのネットワークの支配下に置かれている。

この元凶であり、現状で唯一反抗できたであろうキャロルを撃破した支配者であるシエム・ハは両手を広げる。



「ふふふふ……胸躍るッ！さあ！ユグドラシルにて全ての在り方を改造しよう」

指先から糸のようにデータ化した自身をユグドラシルと接続し、マリオネットのように操り始める。地中から伸びたユグドラシルは他のものと繋がり合い、ネットワークを形成。そして接続した枝から赤い霧のようなものを生成した。それによって発生する地球の変容は、月からも観測できた。

メインコンピュータ・マルドゥークに向かっていた響が変貌した地球を指さす。

「クリスちゃんアレ！」

「アタシ達の……帰る場所がッ……！」

青い星であるはずの地球が、紅く染まっている。

そして柱の影から、負傷したエルザを連れたヴァネッサが現れる。

「始まった……」

「始まらせないッ！」

「フランカ?!」

ヴァネッサの言葉をフランカが遮り、地球に残っていると思っていた彼女が現れたことにエルザが驚愕した。彼女の隣に、雷は居なかった。

フランカがヴァネッサと接触すると同時に、地球では強大な電磁波の乱れと稲妻の紋章が確認された。

## 私達の帰る場所

通路の向こうから息を切らしながら走ってきたフランカは、響とクリスの前に背中を向けてヴァネッサと向かい合った。更には手を広げ、まるで庇うように立ちはだかる。

いきなり現れたフランカに、響達は首を傾げた。

「君は……」

「私はフランカ！ヴァネッサたちの家族で、雷さんと一緒にここに来ました！」

「あのバカも来てたのか?！」

肩越しに返事をするフランカに、クリスが詰め寄った。それもそうだ。一緒に来たと言っているが、その雷の姿がちつとも見えない。しかし、彼女は雷がどこにいるのかを理解している。

フランカは天井、そしてその先にある地球を指さした。

「先に地球に帰還しました。皆さんが返ってくるまでの時間稼ぎのため」

「確かに……嘘は言っていないみたいだな……」

月面からでもしっかり目視で確認できるほどの巨大な稲妻でできた紋章が展開されている。そしてさつきから肌に感じていた静電気が走る感覚。これらのことを統合して、体を電子化して地球に帰還したのであろうと推察する。

しかし、それ以上に問題なのが、ノーブルレッドに所属するはずのフランカがヴァネッサたちと敵対していることだ。

末の妹の立ち位置にいたフランカが自身と敵対していることに、ヴァネッサが嘆く。

「フランカちゃん……どうして……」

「ヴァネッサ、もうやめよう?こんなことしたって何の意味もないよ……」

「意味はあるわ。奪われた未来を取り戻す為よ」

化け物として生きようと、全てを投げ捨てようとしているヴァネッサ。化け物になり果てようと、人間として今を生きようとするフラン

カ。初めは同じ志を持ち、しかし袖を分かってしまった二人の意志がぶつかり合う。

「だからって、無関係な人達の未来を奪っていいわけがないよ」

「無関係じゃないわ。私達を見れば、彼らは石をもって迫害するのよ。フランカちゃんもよく知っているでしょう」

「ッ」

フランカの言っていることは理想だが、ヴァネッサの言っていることは経験則からくる現実だ。そのことをフランカもよく理解しているため、一瞬言葉が詰まる。

「で、でも……全員がそうじゃないよ!」

「化物の私達に、手を差し伸べる人がいるわけない」

「じゃあ何で、この人は……雷さんは……手を差し伸べたの?!」

ここで触れんかは後ろに立つ響の方を向いた。そしてシエム・ハを止めるために一足先に戻った、地球にいる雷の方を向く。

ノーブルレッドが化物として完成する前の決戦の時、フランカはあの場にいなかった。しかし、ロケットの破壊任務の時、響がヴァネッサに何度も手を差し伸べ、それを振り払っていたのに気づいていたのだ。

フランカの叫びに、ヴァネッサは何も言い返せなくなる。

「何時だって差し伸べられた手を振り払ってたのは私達なんだよ?! 見ようとしてなかっただけで、少ないかもしれないけれど、石を投げないで守ってくれていた人だっていたかもしれない……」

「フランカ……。ッ!」

切歌と調との戦いで分かり合うことが出来るかもしれないと知ったエルザは決意する。神経がやられてしまったために満足に動かない足で立ち、フランカの横に並んだ。

「エルザちゃん……」

「エルザ!」

「わたくしめも……フランカの意見に賛成であります……! この身は怪物に墜ちたとしても、心まで怪物にする必要は無いであります! ……あッ」

トランクケースを支えにしているが、エルザの足はがくがくと震えている。そしてついに彼女はバランスを崩してしまった。フランカが慌てて駆け寄って支えになろうとしたが、それよりも先に後ろにいたクリス手を差し伸べ、エルザの腕を自身の肩に回して支えた。エルザは驚いた様子だが、クリスがぶつきらぼうに言った。

「どうして……」

「迫害される気持ちなら、アタシ等は良く分かっている」

そう言ってクリスは頬を少しだけ赤くした。そして「それに……」と続ける。

「本当に今よりここより先に進むもうと願うのなら、なおのこと帰る場所ってのが大切なんだ。あたしは考え過ぎるから……きつとまた迷ったりするかもしれない。だけど！帰る場所があるから立ち直って先に進んでいける。それはあんただって……」

「だけど……私達には……」

帰る場所なんてない。そう続けようとしたが、柱の影から小さな影が飛び出した。それは、翼とマリアのコンビと戦い、負傷して小さくなってしまったミラアルクだった。

ミラアルクがヴァネッサの胸に飛び込んだ。

「ウチらがいるぜ、ヴァネッサ！」

「ミラアルクちゃん?!」

「そうであります！帰る場所がないというのなら、わたくしめらがヴァネッサの帰る場所であります！」

「それにまだ、私の家族に会うって約束がある！私達でも足りないなら、本当の家族になろうよ！」

ノーブルレツドの夢は、人間に戻り、フランカの家族を探して彼女の音楽を聴きながら一緒に暮らすこと。人間に戻るのはまだ先のこともかもしれないけれど、一緒に暮らすことはまだあきらめなくてもいい。いや、ソイル式血液がいなくなったことと、フランカが普通に話せるようになったことで難易度は下がっているはずだ。

潰えたと思っていた希望を前に、ヴァネッサの目から涙がこぼれる。そして彼女は、フランカとエルザをミラアルクも一緒に抱きしめ

た。

そして顔を上げ、響を見上げる。

「神殺し……いえ、貴女の名前は？」

「響……。立花、響」

「ありがとう、響……。私達に手を伸ばし続けてくれて」

感謝の言葉を口にし、涙をぬぐって立ち上がった。そして拭った手のひらを見つめて、私って涙を流せたのね。と、化物には決してできない、人間だからこそ流れるものが自分にもあることに少し驚き、その後当たり前かとほほ笑んだ。心が化物でない限り、人間として生きることが出来るのだから。

○○○

地面に倒れているキャロルと、それを見下ろしているシエム・ハ。そして二人の頭上に巨大な稲妻の紋章が展開される。紋章の大きさは月から観測できるほどに巨大だ。その紋章を見て、シエム・ハは満足げに微笑んだ。

「来ると思っていたぞ、アダド」

「来ざるを得んき、シエム・ハ」

紋章から電子が流れ込み、それが人型へと再構築されてキャロルとシエム・ハの間に着地した。

雷の髪は赤い粒子が漂い、蒼い瞳に変化していることで今の人格はアダドのものであると分かる。更にデノヴァギアを纏い、完全に戦闘態勢は整っていた。

そしてアダドは一瞬にしてシエム・ハに肉薄し、烈風を纏った回し蹴りを叩きこむ。しかし、シエム・ハはそれをゆうに避け、再び距離を取った。

「当然か、われは貴様の依り代の友を依り代としているのだ。いわば人質のようなもの。貴様の力でわれごと破壊してしまうわけにはいかんよなあ？」

「知っている。故に私の目的は時間稼ぎ。フランカを信じているからこそ、我は貴様と相対しているのだ」

はた目からすれば超常の力同士の激突だが、よく見れば確かにアダ

ドの攻撃は直撃コースを避けている。しかしそれでもシエム・ハが回避に徹さねばならないほどの威力をほこっていた。

時間稼ぎをされ、手ごまのノーブルレットも使えないにもかかわらず、シエム・ハの余裕が崩れない。彼女はニヤリと嗤って言った。

「しかし残念だったな」

「何？」

「いや、貴様の動きは当然にして最善の事、仕方がないことだ。しかし癪だな？ われが障害一つで滞ってしまふようなものと思われているとは……だが、茶番は終わり。ここまでだ」

シエム・ハは紅い雲の向こうの月を見上げ、念じた。

## Star Teardrop

ヴァネッサたちノーブルレッドは化物ではなく人間として生きることを決め、自分たちの行いで大きな傷を負わせてしまった翼とマリアに謝罪するべくメインコンピュータールームに足を運んだ。

誰一人傷つけていないフランカはともかく、今までさんざん敵対してきたのだから許されるとは少しも思っていない。翼が自分たちの命で償わせようとするならば喜んでささげるつもりだ。人間として人間の法で裁かれるならそれでもいい。ヴァネッサたちはそう考えていた。

扉が開き、響とクリスを先頭にノーブルレッドも中に入る。

「貴様……！」

「翼、言いたいことがあるだろうけど、まずは向こうの話を聴きましょう」

翼は怒りの形相を見せ、詰め寄ろうとしたがそれをマリアが制止した。マリア自身も相応の恨みつらみはあるが、それよりも彼女達から敵意を感じないことが気になっているようだ。

ヴァネッサがノーブルレッドを代表し、響とクリスの横を通り抜けて翼とマリアの前に立った。

「ライブの時の事、訃堂に逆らえなかったとは言え私達は許されないことをした……。貴女が望むなら、私はここで命を持って償います」  
「ッ……！」

翼は怒りに駆られてヴァネッサの胸ぐらをつかみかかりそうになったが、一步踏み込んでから冷静になる。そして、ある意味自分も彼女達と同じだったのだと理解した。人を殺した、殺していないの差は有れどどちらも訃堂に弱みに付け込まれたからこそ起こったことだと。実際、未来が攫われたとき、雷の強引な制止が無ければ街を破壊していたかもしれなかった。

立場が違えば自身が人を殺していたのかもしれないと。

だからこそ拳を力強く握り、真正面からヴァネッサを見返す。

「ああ、私に許す権利はない。だからこそ地球に帰り、お前たちに被害

者全員に誠意をもって頭を下げてこい。それから訃堂の顔面を思いつきり殴れ。話はその後だ」

「……ええ、分かったわ。それより先に、死刑台に送られちやいそうだけど」

「させるものか。送るのは頭を下げさせてからだ。それより今は、シエム・ハを止めることが先だ。まず私達への罪滅ぼしとして、協力してもらおうか?」

まだ怒りは完全に捨てきれないが、一時的な共闘の証を示すために翼は手を差し出した。それに応えるために、ヴァネッサも手を出したその時だった。

「なに?!」

突如としてヴァネッサはジェット噴射で空中に浮かびあがった。いきなりのことで全員が驚愕するが、誰よりもその反応が大きかったのはヴァネッサだった。そしていきなり言葉を発した。彼女の表情は驚きと困惑の色を見せているが、声色は冷淡そのものだ。その様子から見るに、彼女の意志とは関係なく体が動いているようだった。

「忌々しきネットワークジャマーも手ずから葬らせてもらう」

『まさか、シエム・ハか!』

メインコンピュータ・マルドゥークにあるエンキの疑似人格が出現し、ヴァネッサの中にいるシエム・ハに問うた。その問いにヴァネッサの体内にデータ化して忍び込んだシエム・ハが応える。

「この者を完全怪物と再生させた際にわれの一部を滑り込ませていたのだ」

しかし人間として生きることを決めたヴァネッサはその意地を見せる。体の自由こそは効かないが、意識の自由を取り戻し、神を殺すことが出来る響に懇願する。

「くっ……た……頼む……響……! その拳で、シエム・ハを撃て……!」

「そんなことしたら、ヴァネッサさんまで……!」

「私はもう……誰にも……利用されたくないッ……!」

響がためらいを見せる今も、ヴァネッサの体に乗ったシエム・



ハは自身を縛るバラルの呪詛を解呪するためにマルドゥークに接触にかかる。

「頼むぜ……！」

「頼むで……ありますッ！」

「お願いしますッ……！」

ミラアルクとエルザ、フランカも同様に涙ながらに響に懇願する。出来ることなら自ら止めに行きたい。しかし神殺しの力がないためにヴァネッサを止めることは出来ても、彼女の中に潜むシエム・ハを止めることが出来なかった。

完全に破壊したとしてもまるでゾンビのように死に体のまま動き、ヴァネッサを余計に苦しめるだけだった。それを誰よりもヴァネッサが理解していた。

「響……頼むッ！」

「……うああああああッ！バルウイシャルツ！ネスケルツ！」

「ガングニールトロオオンツ！」

やるせなさからくる怒りの咆哮と共に隊服を破り捨て、神殺しのシンフォギアであるガングニールを高速で身に纏う。しかし、怒りを込めた渾身の拳がヴァネッサに突き刺さるよりも前に、彼女の口ケツトアームがマルドゥークに触れてしまった。

プログラムとなったシエム・ハ自身が流れ込む。

『くツ……ウイルスプログラム！シエム・ハの断章を直接打ち込まれたかッ！』

「恐ろしきかな、神殺しの拳……。だが……その躊躇がもたらす未来がこれだ」

再びヴァネッサの意志とは異なる言葉を口にした。そしてヴァネッサを支えていたシエム・ハが殺されたことによって内部から崩壊し、彼女は悲鳴を上げながら体の節々から血が噴きだした。

推力を失ったヴァネッサの体が床に叩きつけられる。

「『ヴァネッサッ！』」

「ヴァネッサさん！」

「情けない顔しないの……。あなたは守ったのよ……」

「え……」

ヴァネツサの言葉は響の思っていたこととは全く異なることだった。思わず呆気にとられてしまう。ヴァネツサはフランカに抱き起されながら、ズタボロの体で響と向き合った。

「呪われた拳で私達の誇りを守ってくれた……」

しかし、感傷に浸っている間もなく遺跡内にアラートが響き渡った。この場で唯一マルドゥークへのアクセス権を持つマリアがエンキの疑似人格に問いかける。

「教えて、何が起きているの?!」

『このままではここマルドゥークが、新たなシエム・ハと再生!』

突如としてエンキのホログラムにノイズが走る。そしてその姿はエンキのものからシエム・ハのものへと変化した。

『このようにな。万謝するぞ人間。1年前のあの日、刹那に人が一つに繋がったことでわれは蘇り、メガラニカからの浮上を果たさせた……』

「一年前……ッ!」

マリアには思い当たる節があった。いや、この場にいる装者全員が何のこともかを理解する。

「月の落下を止めるために、世界中の人類がAppleに繋がれたから?!じゃあ、父祖の地のあの歌は一体……」

『形を変えて現代に残る統一言語の断片。その成れの果てだ』

この瞬間、バラルの呪詛とは何だったのかを理解する。

「人は……一つに繋がれないのではなく……」

「繋がっては……いけなかったッ……!」

『だが真実を知った所で、お前達は月遺跡ごと吹き飛ばされる運命ッ!』

遺跡の自爆プログラムが起動し、様々な場所から炎が噴きあがって通路を侵食する。これによって帰還の時を待つという手段が取れず、地球に先に帰還したアダドによる時間稼ぎも全て無駄になってしまふ。

その上今の装者たちに冷静に思考する余裕はなく、この状況を何と

かやり過ぎすだけででんやわんやだった。

「このままじゃ地球に帰るところか宇宙の藻屑だぞ?!」

「ギアを!ギアを纏うデスよ!」

「ギアを纏ったってどうしようも……」

しかし、遂に時間は来てしまう。明確な方法は何一つ見つからず、月遺跡は大爆発を起こした。

地球では、アダドとシエム・ハが激突していたが、彼女は勝利の笑みを浮かべる。

「爽快である。忌々しきは全て塵芥。怪物共は実に役立ってくれた。後は月食に合わせて……」

「残念だったな、シエム・ハ。人間たちの力を舐めるなよ?」

「これが貴様が人類に味方する理由か……!」

生きるという力。特に人間のそれは悔れないものだ。シエム・ハは勝利の笑みを浮かべていたが、それはアダドの理解できていなかったところが分かったという納得の笑みに変わる。

月面にいる装者たちとノーブルレットは、ダイダロスの迷宮を直線にして地球まで繋ぐという荒業で生存していた。

「こ、これは……?!」

「ダイダロスの迷宮……だけど!」

錬金術の使えないフランカを残し、ヴァネッサとエルザ、ミラアルクは自分たちの命を燃やしてこの迷宮を顕現させていた。

彼女たちの体は不可に耐えきれず、光の粒子となってほどけていく。

「響、ありがとう。私達を……人間として見てくれて……。私達は戻れなかったけど、依り代になった子を……。戻してあげて……。それと……ごめんなさいね……。罪を償うって約束、守れそうにないわ……」

「うん……。あなた達の祝福、私の拳に乗せて未来に届けるよ」

「お前たちはもう罪を償っている。これから今の地球に生きる人々と、これから生まれる命を私達が守るのだからな」

「そう言ってもらえると……悔いはないわ……」

「私を……おいて行かないでよ……！」

姿がもうほとんど見えない三人に、唯一取り残されたフランカが涙ながらに慟哭した。ヴァネッサたちは意識が薄れながらも、彼女に最後の言葉を残していく。

「フランカ……あなたの音楽、絶対、生まれ変わって聞きに行くであります……」

「楽しみに……してるんだぜ……」

エルザとミラアルクの姿が消えた。

「エルザ！ミラアルク！」

「フランカ……」

顔を抑えて泣きじゃくるフランカのそばに、もうほとんど消えかかっているヴァネッサが寄り添って抱きしめた。

「ヴァネッサ……」

「私達の間まで……生きて……」

そして彼女はフランカのそばから離れた。

「ヴァネッサ！」

「ありがとう……」

フランカはヴァネッサに手を伸ばす。彼女の手に触れようとした瞬間、ヴァネッサの体は光となって消えた。

伸ばした手をフランカは握りしめ、涙と共に決意した。

「生まれ変わるまでなんて待たせない！今ここで聞かせて見せる！私の音楽をッ！」

テレパシーを自らの中にあるシエム・ハの因子でカモフラージュし、マルドゥークにいるシエム・ハにハッキング。さらにそこから世界中のスピーカーにアクセスする。

フランカは再び神域の不可能を可能にして見せた。自身の頭の中に流れる旋律を、世界中に流す。

「これが……私の音楽ッ！」

誰も聞いたことが無い旋律。しかし、誰もが聞いたことのある音だった。それは心臓の鼓動の音。風の吹く音。地球の音だった。

その旋律は地球で諦めずに抗い続ける人々に安心と勇気を与え、神

に反逆することが出来るという活力を与えた。そしてその活力は意志となり、意志が光となって世界中からフランカの手の中に集まってい

く。手の中に集まった光は棒状に、いや、タクトの形に変化した。

「光が……タクトに……」

「これが私の音楽……私の操る星の演奏！」

フランカが握るのは『星の涙』。

涙とは、感情がきわまった時に現れるもの。星の流す涙こそがこの聖遺物であり、人類が不可能を可能にする力を見せる限り完成しない未完成聖遺物。それ即ち、人類神話の聖遺物。

一つの意志と一つの音楽の元、世界が一つに繋がる事が出来ることを証明する。

「繋がれぬ運命を背負いながらそれでも人は……世界は繋がっていく……。ああ……防人が人を守るのは、弱いからではなく、その勇氣……果て鳴き強さが尊いからなのです……。お父様……」

「みんな！エクストライブだ！」

「だけど、可能とするだけのフォニックゲインを……！」

「信じよう！私達の胸の歌を！フランカちゃんの星の演奏を！シンフォギアを！行こう！フランカちゃん！」

「はいッ！」

装者たちとフランカは、小さな希望にかけて絶唱する。

星の演奏と絶唱が重なり合い、命の歌となる。そして歌と共に、大気圏へと突入した。

しかし、突入角は絶望的、ギアを纏っていないフランカは当然として、アマルガムのコクーンであっても突破は不可能だ。しかし、『星の涙』の性質は、不可能を可能にする力。

シエム・ハの前に立つアダドの人格が雷に変わった。

「信じてたよ、みんな！」

「流れ星、堕ちて、燃えて、尽きて……！」

雷とシエム・ハの言葉が重なる。しかし、その意味合いは全く異なるものだ。

「そしてえええええッ！」

七つの流れ星は七色の流れ星となってターンし、ユグドラシルを叩き折りながら雷と並んで大地に降り立った。そして、復活したキャロルも並び立つ。

雷の神話の残証であるデノヴァギア。キャロルの叡錬金術の叡智の結晶たるファウストローブ。フランカの可能性の象徴『星の涙』のステラギア。そして響たちの神器一体のバーニング・エクストライブST。

人が神を超えるための、最終決戦が幕を開ける。

## 未来を奪還

シエム・ハの前に九人の戦姫が集結した。

人の可能性の象徴、フランカ・ド・フリース。星を知り、人を知り尽くした錬金術師、キャロル・マールス・デインハイム。人の未来を切り開きし者たち、響達の六人の装者。そして、神の使命を継ぎし者、轟雷。

彼女達は未来を取り戻すため、未来を取り戻すために神への反逆を開始する。

「間に合ったのかッ?!」

『間に合わせたのだ。我々が！人類が！神の野放図に抗って！人類の力で！』

米国大統領の言う通り、これは、装者たちの起こした奇跡ではない。全ての人が一つのことを成し遂げようとする不可能を星の奏でる故郷の音楽のもと可能にしたことによつて成し遂げた、必然なのだ。

響が横に並ぶキャロルに問う。

「キャロルちゃんとエルフラインちゃんなんだよねッ?!」

「ああ！だが色々は後回しだッ!」

「ゴメン、雷……。少し遅れた……。いてっ」

「ありがとうでしょ、そこは。取り戻すよ、未来を」

となり立つ雷に申し訳なきそうな目をする響を、彼女は眉間を指先でつついてかき消した。ふざけているわけではない。未来を取り戻すという希望の確信があるからこそその笑顔だ。

二人はそろって頷き、顔と気を引き締めて拳を握り、シエム・ハと向かい合う。

「呪われた拳、神殺し。われの依代たる友の体を前に何とする?」

響と雷の脳裏に、観覧車でのやり取りが蘇った。

あの時、未来の問いに雷は「自分と響の想いを、何としても未来に届ける」と宣言していた。しかし、その問いに響はまだ答えていない。

だからこそ、シエム・ハは響に問うているのだ。

しかし、今の響はその答えを見つけている。

「誰かを困らせる誰かがいるのなら、私は止めるッ！この拳でッ！」  
響はギュツと拳を強く握る。

これが響の答え。世界一やさしい拳を持つ少女が見つけた答えだ。

「神の力と人類の可能性、俺達七人の歌が揃った今なら神の摂理を覆せるッ！共に行くぞッ！」

キャロルが叫び、それに合わせてシエム・ハが光弾を発射した。

戦闘慣れしている装者たちとキャロルは即座に飛び立ったが、そうではないフランカは一瞬遅れてしまう。しかし、それを予測していた雷は回し蹴りと後ろ回し蹴りで光弾を叩き落とし、フランカの手を取って飛びあがった。

「あ、ありがとうございます！」

「礼なら後！自分の信じる人の可能性を信じる限り、そのギアは答えてくれるッ！」

「はいッ！」

再び二人に向かってきた光線を手を離して回避する。二人の間を光線が通り抜け、雷の続いてフランカも自由に空を飛びまわっていた。装者たちと比べると劣っているが、それでもこの戦いを切り抜けるには十分以上だ。

雷もフランカの姿に問題ないと判断し、腕に弓を形作ってキャロルの四大元素と共に稲妻の矢を放った。

シエム・ハは防ぐべく神獣鏡でシールドを展開する。しかし、厄払いの光の力で四大元素を減衰させることは出来ても、万物を破壊する雷の稲妻は防げない。シールドは碎け散り、シエム・ハが咄嗟に展開したシールドで直撃こそ防いだものの、四大元素の威力を受けてしまった。

減衰したとはいえ強力なキャロルの四大元素は神獣鏡のファウストローブを損傷させる。

「くッ！声を重ねて力を増したか。だがッ！……まさかッ！」

神には不条理の執行という無敵性がある。それは、本来ならばシエム・ハの体は響の神殺しと、雷とアダドが持つ万物を破壊する権能が



無ければ突破されない。

しかし。

「不条理の執行に、無力化されないッ?!」

そう、それは本来ならばの話。

今の装者たちが纏うのは、不可能を可能にする力を宿したエクストライブ。そして歌うは星の歌。人の力が神の摂理に負ける道理はない。

だが、今は考えている暇はない。シエム・ハを倒し、未来を取り戻すことこそが九人の戦姫のすべきこと。

それを理解している調はチャクラムを、切歌は鎌のブレードを投擲し、シエム・ハの防御を崩しにかかる。しかし、シエム・ハもブレードを展開して二連撃を捌き、上段から振り下ろされる翼の炎の一刀を防いだ。

だがこれも組み込まれた連携の一つ。翼がシエム・ハを防御に徹させている隙にキャロルが弦で彼女を拘束、再び翼が上段から振り下ろす。

絶体絶命にもかかわらず、シエム・ハは不気味に口角を釣り上げた。

その笑みの正体は余裕。背後からビットが飛び出し、振り下ろされる翼の刃に光線を打ち込んだ。その光線は神獣鏡の光。その輝きに翼の刀は消滅しそうになるが、それを唯一知っている者がいた。

「たあッ!」

一瞬の先しか見えぬフランカの未来予知だが、この高速戦闘ではそれでも十分だ。既に知っていたフランカはビットに対してサイコキネシスを叩きこみ、完全に刀が消滅する前に粉碎する。

「感謝するッ!」

「私達の未来を厄だなんて言わせませんッ!」

それに領いた翼と共にフランカはクリスの射線から離脱した。

彼女達の背後からクリスがマグナムのトリガーを引き、幾本もの光線が発射される。放たれた光線はシエム・ハを追尾し、ついには追いついて彼女にシールドを展開させ、足を止めさせた。

「はああああッ!」

「でやあああッ！」

雷とマリアの二人が爆炎の中から飛び出し、空を切り裂くほどの風を纏った手刀とエンキの物のようなブレードを振るってシールドを砕き、大地に叩きつけた。

神に抗うことが出来ていることにクリスが驚く。

「ほんとに効いてやがる！これってエクストライブの力なのか？」

「違う……だけどまるで、位相差障壁を突破するかのように！」

（来るぞ雷！）

「分かってる！」

アダドの言葉通り、地面が割れて紫色の光が天に伸びた。そしてその光はだんだんと太くなっていく。

本部からの通信で顕現する存在の巨大さが届く。

『検知エネルギー、振り切れました！』

『周辺脅威レベル増大！神話級特異災害、開闢します！』

光の中から生命の箱舟が顕現する。

「未来さんを依代とするシエム・ハはッ！」

「ここからが本気みたいデスよッ！」

（言うなればシエム・ハ決戦体！まさしくデウス・エクス・マキナと  
なっ……）

「我が欲したのは権威や力などではない……。その先にある未来だッ  
！」

箱舟の後部からプラネタリウムのようなパーツが命を投影し、シエム・ハの紋章と共に神造生命を大量に鏡に映しだした。それを現実に  
召喚する。

アダドが復活した時の物の完成体。しかもそれが隙間なく出現し  
た。彼の記憶を受け継いでいる雷が叫ぶ。

「誰よりも未来を信じたあなたが、何故人類の未来を信じようとしな  
いッ?!」

「我らであっても独立した個を備える以上、擦過して激突する……。  
それでは完全たる存在とは言えぬ！」

響が放たれた光線を拳で弾き、両手足のユニットを全開にして炎と

共に突撃。翼は刀の炎を極大にし、一刀のもとに切り捨てる。

「神とはちゃんちゃら……」

クリスがマグナムを構えてトリガーを引き、それと連動するように巨大なレーザー砲が発射されて大型を撃ち抜いた。

フランカはマリアの投擲した無数の短剣をテレポートで神造生命の体内に転送し、転送した短剣を内部から炸裂させる。

「故に我は、この実験場にて個の統合を試み、夢と見た」

「あの時笑顔で我に語ってくれた夢は、そんなものじゃなかったはずだあッ！」

箱舟のリフレクターを起動したシエム・ハは光を収束させ、照射した。それに対して紋章を展開して全開出力状態の雷が飛び出し、太陽のエネルギーを纏った拳を叩きつけて相殺した。しかし両者ともエネルギー量が絶大なため大爆発を起こした。

爆光によって前線に殴りこんでいた響からは見えなくなる。

「みんなッ！……ッ?!」

エネルギーシールドを展開したシエム・ハの箱舟が響に体当たりを仕掛ける。いくらエクストライブといえど質量差に押しやられてしまう。

「誰もが痛み<sup>に</sup>傷付き、分かり合えぬ夜に涙しない未来のために！」

「未来ッ！」

別れてしまった時、言えなかった言葉、聞けなかった言葉、今までずっと考えてきた。後悔してきた。なぜあの時言えなかったのかと、聞けなかったのかと。だからこそ響は叫ぶ。

「今度はちゃんと言葉にしたいッ！」

「分かり合うことすらまなぬ不完全な言葉にか？その言葉で伝えられぬお前たちへの同じ想いを秘めていたからこそ、この依代は刹那に我を受け入れたというのに！」

シエム・ハの目から一筋の涙が流れる。それが彼女の物か、それとも未来の物かは分からなかった。

だが、その一言は響を動揺させるに十分だ。

「未来がッ……うぐあッ！」

加速していく箱舟を天から降りしきる大剣と響を避けるようにして放たれたフランカの衝撃波が強引に停止させ、反動で飛ばされた響を雷が受け止める。

体勢を立て直すべく調が両手の光で作られた輪が繋がったチャクラムを投擲し、切歌も緑色の鎌を発射、それに続いてマリアが銀色の炎を纏わせた短剣を投げ放った。投擲された三つのアームドギアは空中で合体、変形してロボットとなって体当たりを仕掛けて爆発した。

その隙を雷とキャロルは見逃さない。

「今が好機だッ！」

「「「「オーバードレイズッ！」「」「」」」

装者とフランカはギアの出力を跳ね上げ、炎のようなエネルギーを纏って出力を跳ね上げて突撃する。虹色の螺旋となった彼女たちはシエム・ハの箱舟に拳を叩きつける。キャロルは錬金陣で、フランカは衝撃波で張られたシールドを突破しにかかった。

シエム・ハの形相が怒りに歪み、箱舟は衝撃に耐えられなくなつて爆発が所々で起こっている。しかしそれは戦姫たちも同様で、デノヴァギア以外のギアからも爆発が発生している。

シエム・ハに拳が届く。その寸でのところだった。

「呪われた拳で私を殺すの？」

「ッ?!」

(雷、代われっ！)

「おあああッ！」

シエム・ハが未来の顔で、未来の声で情に訴えかけ、響達は力を思わず抜いてしまう。だが、アダドが一時的に強引に意識を交代し、戦姫たちに向かって放たれた指向性の爆発を拡散したことで最悪の展開を回避した。

それでも発生した衝撃は巨大なもので、響達は岸壁に叩きつけられ、地面に落下した。何とか立ち上がるが、目の前に広がるのは渦巻く銀色の輝き。

「無粋に足掻く！だが散り際は、白銀に煌めくがいいッ！」

銀色の輝きが放たれる瞬間、雷の意識が深き深淵に落ちた。

○○○

まるで水の中のような場所で、雷とアダドが向かい合う。アダドは悔しそうな顔をしていた。

「すまない、雷。これ以上は……人類が危険だ」

雷は黙ったまま、アダドの目を見つめる。

「最後のタイミングだった。あれを逃したら、もう次はない」

「……」

雷は答えない。

アダドは拳を握った。

「そなたの意思は尊重し、可能な限り最善を打ってきた……。だが、これ以上は……」

「……我が儘を、言わせてください……」

「何……？」

雷が遂に口を開く。その口から出た我が儘という言葉に、アダドは思わず視線を開けた。雷の目は、まだ諦めてはいなかった。

「私達を……人類を、最後まで信じてください」

「……。フツ、いいだろう。これが最後だぞ」

アダドはあつけにとられた後、納得して笑った。彼の顔は晴れやかだ。いや、きつと雷なら言うだろうという納得すらあった。

雷の意識が浮上する。

○○○

雷の意識が覚醒した。地面にはエルフナインとフランカが倒れている。

空中では散らばったすべてを統合したシエム・ハとその軛から解放されている響がぶつかり合っている。

「能わず！その拳は呪いの積層・神殺し！撃てばこの身を殺して殺す！」

「殺さないッ！」

「ッ！」

「お父さんが教えてくれたッ！呪いと祝福は裏表ッ！あり方なんてど

うとでも変えられるッ！変えてみせるッ！」

シエム・ハの攻撃を右腕一本でさばいていく。全てはこの拳を未来に届けるために。

「断章の全てをこの身に集めたのだ！人に遅れる道理などありはしないッ！」

「届かないッ！」

しかしシエム・ハの攻撃は捌ききれない速度、密度へとなっていく。そして神獣鏡の光が響の周囲を檻のように囲み、逃げ場を失った彼女に向かって照射された。

その輝きは響を貫き、シエム・ハの勝利に終わる……はずがなかった。

「何ッ?!」

「響一人で届かないのなら、私が頭でもなんでも貸してあげるッ！届かせてみせるッ！」

「雷ッ！」

雷が響の手を取り、逃げ道のないと思われた檻の中を目にもとまらぬ速さで上空に離脱した。雷は響の手をしっかりと握り、シエム・ハが放つ輝きを全て避ける。

光速で動き回りながら、響が拳を振りかぶる。

「私の想い！未来への気持ち！2000年の呪いよりもちっぽけだと誰が決めたああッ！」

雷の胸に世界中から光が集まり、それは手を繋いだ響に伝播して彼女の拳に集中する。

「ッ?!」

シエム・ハが驚愕する。

そして雷が接続を乗っ取ったことで、シエム・ハの支配からすべての人類が開放された。

「取り戻す……取り戻す……」

「未来を……」

「私達の……」

「明日を……」

「この星の……明日を！」

世界中の思いが雷を通じて響の拳に流れ込む。

「ネットワークに障害が?!なれど……」

後は人類と神、何方の思いのたけが上かの勝負。意志と意志、想いと想いのぶつかり合いだ。

「きつと、取り戻すんだ……!」

「それはとつても大切な……!」

「本能が求め叫んでる……!」

「誰にも等しくあるために……!」

「その手に重ね、束ねるんだ立花、轟……。お父様が見せてくれた人の価値を！輝きをッ！」

集まった未来を信じる人の光は渦を巻き、加速してさらに輝きを増していく。

雷が叫んだ。

「ラルルの呪詛が消えた今！隔たりなく繋がれるのは神だけじゃないッ！」

「束ねているのは人の……想いッ?!」

「神殺しなんかじゃない！繋ぐこの手は私のアームドギアだッ！お願い、雷ッ！私を、未来のところにッ……!」

まだシエム・ハマまでの距離は遠い。しかし、二人で手を繋げば距離なんて関係ない。

「響の想いは必ず届くッ！届けてみせるッ！だから、手を伸ばすんだッ！」

響は雷の右足に乗り、雷が響を乗せたまま雷速の回し蹴りをシエム・ハに向けて放った。その瞬間に響は脚部ユニットを全開にして跳躍し、さらにその衝撃を斥力によって推力に変える。

そして響は、握っていた拳を開いた。

「「「未来をッ！」」」」

「「「未来をッ！」」」」

「「「「奪還するためにいいいいッ！」」」」」

「まさかッ?!本当に呪いを上書いてッ?!」

圧倒的な速度にシエム・ハは響を拒むことが出来なかった。  
一瞬にして到達した響が未来を抱きしめる。

『METANOIA』

シエム・ハは悲鳴を上げ、未来の体から消滅する。それを示すように右腕の腕輪が真つ二つに割れ、粉々になった。

元に戻った未来を、響がお姫様だっここで抱く。彼女たちのそばに、雷が寄り添った。

「そして。花咲く勇気で。私たちの大好きを、二度と手放さないために……」

響と雷は、未来を中心にして笑顔を浮かべた。



## 黎明

シエム・ハを倒し、未来を取り戻した雷たちだったが、これだけでは終わらない。まだまだやることは残っている。シエム・ハが出現させたユグドラシルを破壊しなければならぬ。

そのために、S・O・N・Gは比較的安全な場所に仮設の前線基地を作り、そこでユグドラシル攻略の算段を立てている。気を失った未来とエルフナイン、フランカもここに収容された。

職員たちが情報を収集する中、眠っているエルフナインは深層心理でキャロルと向かい合った。

キャロルは不機嫌に悪態をついている。

「全く、世界を壊すはずの歌で似合わない事をした……。あのまま消えるはずが、あの小娘の所為で残ることになるうとは……」

フランカがキャロルに託した可能性の力。力を託したことでステラギアが解除され、フランカは戦闘不能になったがエルフナインの願いによってエネルギーに形を変えていた。これにより、記憶をすべて焼却するはずだった黄金錬成に必要なエネルギーが賄われてしまい、自身の記憶をすべて焼却してエルフナインを生かそうとしたキャロルの思惑を壊してしまつたのだ。

このことでキャロルは不機嫌だが、エルフナインは上機嫌だ。

「はい！フランカさんには感謝しかありませんね！」

「バカ！そうじゃない！……つたく、結局消えたのは上澄みだけか……」

舞い上がるエルフナインを傍目にキャロルが前髪を掻き筆る。

「上澄み」という言葉が引っかけたエルフナインはキャロルに問うた。

「上澄み……とは？」

「あまり思い出したくないことだ！」

「ならよかったです！」

「良くない！普通あのままカツコよく、そして切なく退場するところだろう?！」

「未来は不可能を可能にすることで作られます！」  
「うるさい！」

ニコニコ満面の笑みを浮かべるエルフナインにキャロルが大口を開けて怒鳴った。しかし、怒鳴られているエルフナインは「きゃー！」と楽しそうに叫んでいる。事実、怒鳴っているのは声だけで、キャロルもまんざらではなさそうだった。

そしてキャロルは呆れたように息を吐いて額を抑え、しかし口角に隠しきれない喜びを湛えながらエルフナインに言った。

「……さて、まだまだやることはたくさんあるぞ？オレはしばし休むとする。後はお前の仕事だ、エルフナイン」

「分かっています。後はボクに任せてください！キャロル！」

ふんすとエルフナインが意気込む。少しの間休むために意識の奥底に沈み込んだキャロルがポツリとこぼした。

「頑張れ……」

「何か言いましたか？」

「言つてない！早く行け！」

エルフナインは振り返って聞き返した。何か言ったのは聞こえたが、それが何なのかは分かっていないようだった。

それに焦り、安堵したキャロルはエルフナインの背中を叩いて送り出した。

その拍子にエルフナインは目を覚ます。それと同時に地響きが発生した。如何やら一時的に停止していたユグドラシルが再起動を始めたようだ。

情報を集めている藤堯と友里に焦りが見える。

「惑星環境の改造速度、元に戻ってる！」

「状況の報告お願いします！」

友里はユグドラシルの上空にいる装者たちに伝えた。

木のように見えたユグドラシルは実際には筒のようになっていて、それは地球の奥深くにまで続いているようだった。

マリアと翼が友里に応答する。

「目視にて状況確認」

「本部。シエム・ハが倒れてもユグドラシルはまだ生きています！」  
『なんだとお?!』

生きていることを証明するように、米国のエシユロンをはじめとした世界各国のコンピュータによる論理防壁を突破していることが伝えられた。全ての防壁が突破されるまであと七分もない。

この事態を解決すべく、弦十郎が指示を出す。

『潜航したユグドラシルをメインシャフトと仮定！中樞部を破壊して、惑星環境の改造を食い止めるのだッ!』

「ユグドラシル……!」

「行くぞ！何とかなる!」

「クリスちゃん!」

響のそばにクリスが近づき、肩に手を置いて安心させた。

「到達するまでに障害はあるけど!」

「中樞部を叩いて砕く!それで各地のユグドラシルは、機能停止となるはずだ!」

「行くわよ!」

装者たちがユグドラシルの中へ突入する。

シエム・ハとの決戦で装備と体力をかなり持っていかれたが、ユグドラシルの中樞を破壊できるのは彼女達だけだ。まだまだ障害が残っていることに一抹の不安が残るものの、それを乗り越えることが出来ると信じて降下する。

深度一万を超えたところで、シエム・ハの生み出した神造生命が視界を覆いつくすほどの数が現れる。

障害があることは覚悟していたが、これほどの数があるとは想像もつかなかった。

「しゃらくさいのが雁首揃えてッ!」

「だけど今のコンデイションでは……!」

現状、武装的にはまともに戦闘が出来るのは雷だけだ。しかし、先の戦闘の疲労は残っているため、これほどの数を相手するのは不可能に近い。アダドに変わって無理矢理動くこともできるが、ここは人類だけでやり遂げねばならないという雷の意地が許さなかった。

「流石にこの数は……」

「もたもたしてたら、この地球は……!」

「知らない星に作り替えられちゃうのデス!」

「装者たちの中に絶望が広がる中、頭上から聞こえた一つの歌声と光の雨がそれを打ち消した。その歌声は、誰もが聞き覚えのあるものだった。」

「Rei Shen Shou Jing Rei Zizzl」

「歌声と共に降り注ぐ雨のような光は、ユグドラシルの中に巣食っていた神造生命を片っ端から貫き、消滅させていく。視界を覆うほどの数がいたが、それらは一瞬にして消え去った。」

「雷と響が振り返る。」

「『未来?!』」

「私、これ以上響と雷の背中を見たくない!二人の見るものを一緒に並んで見ていきたいの!だからッ!」

『間に合いました!』

「無事なの?エルフナイン!」

「応援に駆け付けたのは未来だけではなかった。仮設本部の通信機から、目を覚ましたエルフナインの声が聞こえてくる。」

『はい!ボクも未来さんも問題ありません!』

「キャロルちゃんは……?」

『今頃僕の中で悪態つきながら休んでいます!フランカさんはまだ眠ってます!』

「良かった!」

『キャロルから皆さんに言伝があります』

「その言葉の続きを未来が請け負った。」

「この先にある中枢部を壊しても、増殖したユグドラシルのいずれかが管制機能を獲得し、稼働は止められないみたいなの」

「つまり新たなメインシャフトが誕生し、そいつがどれかわからなくなるのか!」

『なので、ここがメインシャフトと仮定できる今、中枢をフォニックゲインで制御し、雷さんの権能で全ての幹を同時に爆破伐採するしかあ

りません!』

つまりは七つの絶唱によるフォニックゲインで中枢ユニットを制御し、雷の万物を破壊する権能をフォニックゲインに乗せて制御下に置いてすべてを破壊するという物だ。

しかし、これには一つ懸念がある。

「フォニックゲインで?だが私達は、一度チフォーージュ・シャトーの起動にも失敗して……」

今は響と雷が居るとはいえ、上手くいくかどうかの不安が残る。ましてや雷のギアはシンフォギアではない。フォニックゲインは必要が無くなっているため、扱うことが出来ない。

勿論キャロルはそのことを予測に入れて行動していた。

『だからキャロルは未来さんを救おうとしていたのです。七つの惑星と七つの音階、世界と調和する音の波動こそが統一言語。七人の歌が揃って踏み込める神の摂理。世界を知れというパパからの命題に対するキャロルなりの回答です!』

「そうか!キャロルと私達の攻撃がシエム・ハの埒外物理を突破したのは、そういう事だったのか!」

キャロルが見つけ出した回答を証明させるべく、メインシャフトの中枢部に装者たちが到達する。

雷が前に進み、中枢ユニットに自らの手をかざした。それを合図に、響が口を開く。

「だったら何も迷わない!信じよう!胸の歌を!」

「私も響と!みんなと一緒に!」

七つの歌声が一つの歌となり、増幅したフォニックゲインが中枢ユニットに流れ込む。

歌が響く中、未来は一人思う。

(バラルの呪詛……繋がり隔着る呪いさえなくなれば、この胸の想いは全部伝わると思ってた。だけど……それだけじゃ足りないんだ)

フォニックゲインは際限なく高まり、可視化できるほどの密度となつて光となる。地球の中枢と接続しているユニットとフォニックゲインが干渉し、全ての魂が可視化する。

手の取り合えなかったエンキとフィーネが手を取り合い、マリア達の前にナスターシヤが現れ、その背後で背を向けたウエルが顔を向けずに手を振った。ノーブルレッドもパヴァリアの四幹部も笑顔浮かべている。

翼の前に彼女の父である八紘と目標である奏が、マリアの元にセレナが姿を現す。

そして雷のそばにも、斗真と瞳、そして出海がやって来た。雷の涙腺が決壊して大粒の涙を流し、彼女の頭を三人が優しく「がんばったね」と言うように撫でた。

「七人の歌で」

「みんなの歌で」

「この奇跡は、私達の軌跡だ」

「繋いだ手だけが紡ぐもの」

「強く、尊く、儂いもの」

「未来に響き渡らせるために！」

七つの歌声、一つの歌が、クライマックスに突入する。七つの絶唱のメロディーが重なった。

中枢ユニットを制御する七つのクリスタルが虹色に輝き、その歌の終わりと共に、最後のアメンナキである雷が人類の独立を宣言するように拳を叩きつける。

「これが私達のおツ！」

「「「「絶唱だあああッ！」「「「「「」」」」」」

雷の権能は増幅したフォニックゲインにのり、全てのユグドラシルへと伝播した。中枢ユニットは大爆発を起こし、八人は崩壊から逃れべく地上へと飛翔する。

万物を破壊する権能を受けたユグドラシルは崩壊をはじめ、世界各地でも呼応するように同時に進行する。

高速で離脱しようとする装者たちも、損傷によってギアが耐え切れなくなっていた。

「このままじゃギアが！」

「持ちそうもないのデス！」

最悪の事態は立て続けに起きるものだ。

下から迫りくる崩壊の爆炎の中から、シエム・ハの怨霊とで言うべき存在が出現した。そしてそれは、装者たちに手を伸ばし、掴みかかる。

「まさかあれは!?!」

「シエム・ハなのかよツ?!」

「なるほど……」

ただ一人納得したような顔の雷以外が振り切ろうと加速するもついにギアが耐えきれなくなり、粒子となって霧散した。そしてシエム・ハの両手が響たちを包み込み、爆炎の中へと沈んでいった。

赤黒い炎がユグドラシルから吹き上がる。

暗闇の中、シエム・ハと響、未来が向かい合った。

「答えよ。なぜ一つに溶け合うことを拒むのか」

「私達は簡単に分かり合えないからこそ、誰かを大切に想い、好きになることができる。その気持ちは誰にも塗りつぶされたくはない!」

「それが原因で未来にまた傷付き苦しむことになってるもか?」

未来の答えにシエム・ハが反論し、答えられなくなってしまった彼女の手を響がとった。

「だとしても。私達は傷付きながらも自分の足で歩いて行ける。神様も知らないヒカリで歴史を創っていけるから」

「ならば責務を果たせよ。お前達がこれからの未来を司るのだ……」

シエム・ハは満足そうに笑い、体から放つ光りで響と未来を送り返した。

そんな満足げなシエム・ハの背後に、髪に赤い粒子を纏わせ、蒼い瞳の雷が現れる。

「いいだろう? 人間という物は」

「確かに、いいものだ。貴方がその子の体から出てくればな」

「おっと、確かにそうだ」

目を瞑ってシエム・ハがいい、思い出したように雷の体からアダドが分離した。そして分離したアダドに、シエム・ハが言った。

「全く、人間の娘に乗り移ってまでわれを追ってくるとはな? 正直驚

愕だ」

「愛する女が暴れてる。感情で真正面からぶつかるのが愛情表現だ。そのせいですれ違いが起きてしまったが……」

「なッ?!」

シエム・ハが顔を赤くした。雷が揶揄うように言う。

「シエム・ハさんも隠しきれれてないんですから。両想いですよ、二人とも」

「こ、この小娘は……!まったく、誰に似たのか……」

「我かな?」

「こ奴はほおっておくとしてだ、雷。そなたはこれからどうする? 我らと共に来るか?」

シエム・ハはアダドにチョップをかましながら雷に手を差し伸べた。しかし雷は首を横に振って断る。

「いえ、私は人としての道を歩みます」

「その先がなくともか?」

「はい」

アダドが覚醒し、その使命を知った時から分かっていたことだ。悲しいが、覚悟は決まっている。

「そうか……分かった」

納得したシエム・ハは雷の頭に手を乗せた。彼女の手のひらからは母親のような優しさと暖かみを感じることが出来た。

シエム・ハは雷を覗き込むようにしゃがむ。

「これは選別だ。アダドの力に打ち勝つには時間がかかるだろうがな」

「ありがとうございます」

「ではな」

「さらばだ、雷。達者でな」

そして雷の体を優しく抱きしめた後、彼女に別れを告げてシエム・ハとアダドの姿は光の中に消えた。雷もしばらくして光の中に消える。



時を同じくして、赤黒い炎の中から手が飛び出し、その手の中から装者たちが下ろされた。腕は砂のように崩れて消えた。

S・O・N・G も到着し、弦十郎が響の前に駆け寄った。

「大丈夫か、響君」

「師匠……。シエム・ハさんが……。繋ぐ大きな手が私達を……」

「ああ。みんなが繋いだ明日の世界だ！」

夜明けの太陽が響を、未来を、雷を照らす。

アヌンナキを脱却し、人類が独立する。それはつまり……。

雷が、どさりと倒れた。明日の太陽の輝きを最後に、彼女が目覚めますことはなかった。

## 私の居場所

私、月読調は大親友である切ちゃんと一緒に姉さんが入院している病室に足を踏み入れた。

バイタルや呼吸こそ安定しているが、まだ一向に姉さんは目を覚ましそうにない。もう、あの日から五年がたった。姉さんの病室に入るたびにあの時の姉さんにすがって泣きじやくる未来さんと、悔しそうな顔で泣くのを我慢している響さんの姿が脳裏をよぎる。

誰もが分かっていたはずだった。そのうえで、私も含めて考えないようにしていたんだと思う。

姉さんの命は『シエム・ハを打倒するアダドの魂の器』。その為だけに作られたんだから、中身を埋める魂が無くなれば空っぽになるのは当たり前前の事なのに。

切ちゃんが明るい声で眠り続けている姉さんに声をかけた。

「ジャーシー・今度のアリーナのチケットデース！しかも特別席デースよ！目を覚ましたらぜひぜひ見に来て欲しいのデース！あたし達の初めてのアリーナを見てもらいたいのデース！」

そう、今私達は二人でバンドを組んでいる。

マリアや翼さんの伝手もあつただけで、それじゃ何時までも立ちできないと思って自力でここまで来た。厳密には切ちゃんとの二人立ちなんだけど。

切ちゃんが握っていたチケットをベッドわきの棚の上に置き、二、三歩下がって私の隣に来た。やっぱりカラ元気だったようで、目じりに涙が溜まってる。

何時も来るたびにいっぱいいいっぱいで、何も言うことが出来なかったんだけど今回は言わなければならぬと思う。

「姉さん、絶対に来てね……！約束だからね……！」

姉さんは私達の約束を破ったことが無い。だから、こうすれば絶対に来てくれる。何の根拠もないただの願掛けみたいののだけど、そ

れに縋り付いていたかった。

多分、最後の方は上ずってうまく言えてなかったと思うけど、絶対に届いたと思う。

「行くデスよ、調……」

「うん……」

切ちゃんが私を優しく抱きしめてくれた。切ちゃんだって同じくらい辛いはずなのにね。

私達はそろって病室の外に出た。

〇〇〇

アタシ、雪音クリスは数か月ぶりに日本に帰国し、そのままずっと眠ったままのバカのところに行って来ていた。

センパイやマリアに及ばないまでも、海外で歌っていることが多いアタシにはなかなかここにやってくる時間がない。そのことに少し申し訳ないながら、ベッドわきの椅子を引っ張り寄せ、前後逆にして座った。

こうやって見ると、今にもこのバカが目を覚ますんじゃないかって錯覚に陥る。そんなこと、もうあるはずがないのにな。

今思えば、アタシが『みんな』の中で笑ってられるのはもう一人とこのバカのお陰なんだよな。何でも知ってて、何時も頼りになった。時々脳筋だったけど。

背もたれに肘をつき、頬杖をしながら見下ろしてみる。

「怪我……もう無いんだな……」

体中にあつた裂傷や怪我の跡が残っていない。

アタシたちの中で一番の劇物だったよな。と小さく呟いてみる。いつもどこか怪我をしていて、何かあるとすぐに不安定になって自爆する。そんなところがどこか昔のアタシに似ていて、このバカが受け入れられるならアタシも……なんてよく思ってたよ。

ふと腕に巻いた時計を確認すると、もう予定の時刻を少しばかり過ぎていた。慌ててアタシは立ち上がる。

「やっべー！出来ればもう少し居たかったんだが、これ以上はな。起きたら連絡くれよな！」

少し大きめの病室に響くくらいの、それでもって他の病室には聞こえない程度の音量で声をかけてからアタシは病室から出て行った。

〇〇〇

ボク、エルフナインはボクの中にいるキャロルと、保護観察中のフランカさんを連れて雷さんの病室にやってきました。

ボクは大きく成長してしまったため、あの時は大きく見えた雷さんが小さく見えます。

フランカさんはノーブルレッドの犯行にほとんど関与していない事、世界を一つにしたことと装者の皆さんと共にシエム・ハと戦ったことが認められ、S. O. N. G. の保護下にあることが前提としてではありませんが自由が与えられました。今では世界を繋いだ音楽家として教科書にも載り、さらには家族とも再開して、自分たちのような子供を増やさないように孤児院を開いているそうです。

フランカさんが雷さんのそばに歩み寄りました。

「雷さん、あなたが私を認めてくれたおかげで今を生きることが出来、家族とも再開しました。私達みたいな子供を増やさないように、今は孤児院をやっています。今は三人がいます。お姉さんのようにふるまう褐色の子と仲間想いの子、少し大人しめだけど、聡明な子です。ふふ、誰かに似てると思いませんか？」

フランカさんはくすくすと笑いながら近況報告を続けている。

それに続いてボクも自分の報告をします。

「実はですね、国際的な異端技術研究機関が開設されることになったんです。その所長にボクとキャロルが選ばれたんですよ！雷さんの席もちゃんと残してあります」

続けようとしたら、キャロルの意識が表に出てきてしまいました。「さっさと起きて、オレを超えた頭脳の働きをもっと見せろ！……キャロルがすみません。ですが、ボクも見たいのは一緒ですから！」雷さんの体の中にすごいエネルギーが流れているのを感じながら、僕たちは病室を後にしました。

〇〇〇

ワールドライブツアーを終えた私、翼とマリアは轟の病室に訪れて

いた。

私としては真つ先にお父様のお墓に行きたかったのだが、空港から病室の方が近かったこととマリアの圧。……だがまあ、そうでなくともお父様もこちらに先に行けと言いつつ、そんな気がしたので轟の方が先だ。

病室に入ったとたんマリアがベッドに向かって駆け込み、問題が無いように速度を落とすつつ、しかし勢いよく轟に倒れ込んだ。

本来なら説教すべきなのだろうが、マリアは妹であるセレナを失ったのだ。この行動も無理はない。

暫く顔を轟に向けてうずめていたマリアだったが、ガバツと起き上がった。

「よつし！雷二ウム補充完了！これで大丈夫だわ！」

「何が大丈夫なのかさっぱりわからんが……。そうだ轟。マリアがこの間一緒に暮らすためにとか言いながら家を買っていたぞ。しかも結構大きいやつ」

「当たり前じゃない！私と雷、切歌に調が一緒に暮らすのは小さいころからの約束よ！だから早く起きなさいね！」

眠っていてもわかるだろうか？マリアはかなり無理をしている。

私としてもマリアにこれ以上何かを失って欲しくないんだ。

私達は心地よい空気の流れを感じつつ、病室を後にした。

〇〇〇

私、響と未来は、二人そろって雷の病室に足を運んだ。

今は二人で世界中を飛び回って困っている人を助ける活動をしている。お見舞い用の花束を抱えた未来がドアに指をかけた。丁度そのタイミングで私達は後ろから声をかけられた。

「アレ？響さん達じゃないデスか?!」

「お久しぶりです」

「調ちゃんに切歌ちゃんも来たの?!」

「珍しいね、かぶるなんて」

「いや、お前達だけではないぞ?」

またまた背後から声をかけられて振り返ると、そこには翼さんとマ

リアさん、クリスちゃんにエルフナインちゃんとフランカちゃんもいた。

全員がそろるのは何年ぶりだろうか？

「全員がそろうなんて四年と五か月ぶりね」

「覚えてるのかよ……」

「あら、当然よ」

当然なんだ……。とりあえず気を取り直して、私達は八人全員で病室に入っていた。病室は少し広いから、まだまだ余裕がある。

とは言え大人数で来たこと自体が久しぶり過ぎて、どうしたらいいのか分からないかって全員が黙ったままになってしまった。

そこでふとあることを思い出し、私はパンと手を叩いた。

「そう言えば、雷の部屋から歌が見つかったんだよ！」

「……あの時に書いていたもの？」

「多分そうだと思う」

五年前、南極から帰ってきた雷が書いていた歌。それがこの歌なんだと思う。今日の朝、ここに来る前にたまたま見つけたものだったんだけど、歌ってあげようかなって思って持ってきてきたんだよね。

「これを、みんなで歌いませんか?！」

その答えは全員賛成。

「ちよつとコピーしてくる！」

「お願い！」

未来が花束を私に渡し、歌の書かれた紙をもって近くのコンビニに健脚で駆けこんでいった。そして五分もたたずに戻ってくる。

「はいこれ、みんなの分」

「音楽は私に任せてください」

そう言ってフランカちゃんが超能力を使って音楽を奏でていく。その音は、とても落ち着く、安らかなものだった。

みんなが揃って歌を歌い、病室いっぱいになり歌が広がる。それはまるで、あの時の再現のようだった。九つの歌声が一つの歌になっている。

歌い終わり、リアさんが首を傾げた。

「いい歌だけど、タイトルがないわね？」

「確かに……」

「どんなタイトルだったんデスかね？」

確かに、タイトルを書くところに何も書いてない何だろうと首をか  
しげていると、

「なあ、一つ聞きたいことがあるんだけどよ……」

クリスちゃんが口を開いた。

「一人多くなかったか？」

「「「「「え？」「「「「「」」」」」」」」

私を含めた全員がゆっくりと雷の方を向いた。

雷は身を起こし、にこやかな笑みを浮かべて手を振っていた。

病室いっぱい、今度は驚きと歓喜の音が響き渡る。雷にこの歌の  
タイトルを聞くと、

「私の居場所」

と、彼女は笑顔で答えた。

戦姫絶唱シンフォギアXD 世界を壊す瞳 ST

〈AfterStory〉

プロローグ

俺の母親は、水槽だった。

俺の姉妹は、何百人といた。それも、同じ顔の姉妹たち。

そして、姉妹の死体を何百回と見てきた。

一番耳にこびりついている音は、燃え盛る炎の音と姉妹たちの絶叫。命の叫び。生きたいという心からの叫び。そして、そんな仕打ちを無常に見逃す世界への、憎悪の叫び。

煌びやかに輝く、たった一つの成功体験の影に在るべきそこない。それが俺達。

俺は、彼女達の中の、唯一の生き残り。

私は五年前に誘拐された。

私の周りには、年下から年上まで何百人と同じように囚われた少女たちがいた。

そして、彼女達が一人一人扉の向こうに消えていくのを見てきた。

一番耳にこびりついている音は、己の心が碎けていく音。その引き金は、重い鉄の扉の向こうから聞こえてくる、肉を裂く金属と少女の絶叫。やって来ては、満足げに去っていく見たことある偉い大人たち。

また一人、また一人と消えていく、少女たち。

私は、彼女達の中の、唯一の生き残り。

わたしは五年前に光を失った。

わたしは音楽と光の中にいた。そして、熱く赤い液体と叫びの中にもいた。

そして、両親もその中にいた。

一番耳にこびりついている音は、自分だけが助かろうとする醜い叫び。他者を蹴落としてでも、弱者を踏みつけてでも自分だけが、という汚れた命の鼓動。弱者は全て、強者の血肉になった。



弱者の居場所は一つだけ、強者の血肉。日本で出来たたくさんの方達も、みんな目の前で血肉にされた。

わたしは、彼女達の中の、唯一の生き残り。

何故お前達は生きています？ のうのと、命の危険もなく生きています？ 全力で今を生きることすらできない者たちがいるというのに。そんな世界を作ったやつがいる。

どうしてお前たちは生きています？ のうのと、命の危険もなく生きています？ 悪意によって人生を奪われ、壊され、誰かの慰み者になつていくというのに。何の権利でそれを生み出し、隠そうとする？ そんな社会を作ったやつがいる。

何であなたは生きていますの？ のうのと、命の危険もなく生きていますの？ そんな弱者は知らない間に潰されて、喰われて、強者の血肉になつていくというのに。

弱者を守らない強者がいる。

俺は死なない、死ねない、世界を燃やし尽くすまでは。

私は許さない、許せない、奴らを同じ目に合わせるまでは。

わたしは負けない、負けられない、強者を血肉にするまでは。

だから俺は、私は、わたしは、

「世界に、宣戦布告する」

戦姫絶唱シンフォギアXD 世界を壊す瞳

ST\AfterStory\

## 新たなる戦いの序曲

世界最南端の大地、南極。

そこに建造されたエルフナイン及びキャロルを所長とする、日本の三種の神器などの古くから国家に密接にかかわってきた聖遺物を除いたすべてを収集し、解析、研究することで人類のさらなる発展を模索することを目的とした国連直轄の聖遺物研究施設、通称『ミュニアース』。

その中央広場に灰色の長髪を白いリボンで結んだ雷の姿があった。ミュニアースは南極に存在しているが、聖遺物の研究によりもたらされた復活応用技術リペアードにより、常に過ごしやすい温暖な気温にセツトされている。最も、人間の生体バランスを崩さないように、という理由で四季までもある程度再現されているのだが、これは所属している研究員が日本の四季を体感したいという謎の圧力があつたからという経緯がある。

そのおかげで中央広場は春の陽気に包まれており、室内とは思えぬ緑の草原が広がり、草木は花を咲かせているのだ。

広場に設置されているベンチに白衣を纏った雷は腰かけ、タブレットを眺めていた。

彼女は聖遺物を用いて同じ聖遺物が引き起こす騒動を解決する国連直轄の実働部隊S・O・N・Gからの派遣研究員——とはいえ普通の人間になり戦闘能力を失ったためほとんどこちらがメインになつている——として日夜研究の日々を送っていた。

因みに派遣ではあるが、その聖遺物に関する知見の広さから副所長に任命されている。曰く、エルフナインとキャロルに強引に座らされたらしいのだが、それに見合った結果を出しているので職員からは反対意見が出ることはなかったという。

タブレットに映る仲間たちの近況報告に頬を緩ませていると、背後から声をかけられた。

「せんぱーい。何見てるんですか？」

その声に雷は振り向く。

声の主はもじやもじやの茶髪で目を隠した、言うところの両メカクレの女性であった。深緑の縦縞セーターで豊満な身を包み、実にどんくさそうな様子でこちらに走って来ていた。

そんな彼女に、雷は少し苦笑いを浮かべた。

「やめてよルイス。私よりも君の方が十五も、眠ってた分の五年を足しても十歳も年上なんだからさ。この年の差で先輩呼ばわりは流石にキツイよ」

「でも先輩のほうがここに所属するのは先でしたし、さらに言えば上司ですもん。目上の人には先輩というのがニッポンの文化ですよね！」

サイズの合わない袖に余った白衣を腰に当て、ルイスはむんつと胸を張った。その拍子に雷のものと勝るとも劣らないサイズのそれが大きく揺れ、その上にある彼女の身に着けている十の輪をチェーンでつないだネックレスが飛び跳ねた。

雷は彼女のそれを偶然見かけた男性研究員の「でっか……」という小さな独り言を聞き逃さなかった。

雷は額に手を当てる。

「それちよつと違う。……それより自分の研究はどうしたの？ 私はひと段落付いたから休憩だけどさ」

現在、雷は完全聖遺物ギヤラルホルンによってつながった平行世界——如何やらギヤラルホルンがある世界がオリジナルの世界で、ここは分岐した世界というらしい——から眠っている間にもたらされた技術、デュオレリックをはじめとする強化型ギア、オーバーテクノロジーであるエレクトライト、竜の骨を用いた鎧メックヴァラヌス・デヴァステイター、存在はしていたが失われたラピス・フィロソフィカス。これらの解析、研究に当たっていた。

それがひと段落付いたからここにいるのだが、ルイスはどうなのだろうかと聞くと、彼女はふふんと鼻を鳴らす。

「私もひと段落付いたからですよ。あ、隣座ってもいいですか？」  
「どうぞ」

雷は右に一つ移動し、ルイスの座る場所を明けた。

彼女はありがとうございませうと言いながら前に回り、ゆっくりと腰かける。そして足をプラプラと揺らし、雷の方を向いてえへへとはにかんだ。

「何笑ってるのよ」

雷が眉をひそませながら聞くと、ルイスは一層笑みを深くした。

「いやー、雷さんも人間らしいところがあるんだなあって思いましたね?」

「と、いうと?」

「タブレットの映像、ご友人の近況報告ですよ? すごくいい笑顔だったんですよ。所長以外が無暗に近づくと蹴り飛ばしてくる女だとか、突然数式を書き出しては部屋にこもり、二三日後にまたいきなり現れて成果を出す変人だとか言われている雷さんでもあんな顔をするんだなあって」

「え……私、そんなふうに使われてたの?」

「そうですね? 知らなかったんですか?」

「初耳。青天の霹靂」

前者は嘘、後者は本当である。

雷は額に手を当てて俯き、今後の態度改善を思案していると、ルイスが肩をツンツンとつついてきた。

「で、ご友人は何と?」

「エジプトに行くんだってさ」

今度エルフナインとキャロルに相談することを決めた雷はふうと息を吐いて響達の次の活動場所を告げた。

ルイスが胸の前で両手をパンと合わせた。彼女は声を弾ませる。

「エジプトですか! いいですよ、有名どころのピラミッドやスフィンクス! 世界遺産誕生の決め手となったアブシンベル神殿なんかもいいですよ! どこをめぐるかは聞いていますか?」

「シナイ半島」

「え?」

雷は淡々と答えた。

そのことにルイスは首をかしげる。

出てきた場所の名前は到底観光には向かない場所だ。アラブの春以降今でも戦闘状態にあるという危ない場所である。五年前の神話事変の際、世界は一つにつながる事が出来た。しかし、その一瞬だけでこれまで何百年と積層した紛争が止むはずもなく、今でも世界の各地で戦闘が起きていた。

シナイ半島もその一つである。

「そこって……紛争地帯ですよね？」

「そうだけど」

「あの……到底旅行に向いた場所じゃないと思うんですけど……」

彼女の頬を大量の汗が伝う。

雷がニヤリと笑った。

「だって旅行じゃないもの。……パヴァリアの残党を潰しに行ったんだよ」

「……私、自分の研究に戻りますね」

「頑張つて〜」

雷はひらひらと手を振り、おぼつかない足取りで研究室に戻っていくルイスを見送った。そして再び手に持っていたタブレットに視線を落とす。

「ケラウノスが使えればな……」

胸の赤い石柱状のペンダントを弄りながら、小さく呟いた。

〇〇〇

雷のタブレットに映像が送られる少し前のこと。

S. O. N. G. 本部である潜水艦は、地中海を航行していた。艦橋に未来を含めた響達装者全員が集められ、ブリーフィングが開かれていた。

引き続き司令を務める弦十郎が一同を見渡し、問題なく行動できる状態であることを確認する。

そして満足げに一つ頷き、状況を報告した。

「うむ。久しぶりに全員がそろったな。この映像を見てくれ」

友里がコンソールを操作し、メインモニターに映像を映し出した。画面いっぱいには砂だらけの大地が映る。

二つ括りを解き、ゆるくウェーブのかかった髪を揺らしながらクリスが首を傾げた。

「砂漠か？ おっさん」

「ああ、見ての通り砂漠だ。我々は今、地中海を航行しエジプトに向かっている」

「あのスフィンクスとかピラミッドとかがある……」

「そこに何かあるんデスか？」

バトルスタイルの都合上ツインテールのままの調と、肩口まで髪を伸ばした切歌がエジプトに向かっていている理由を問うた。

それに応えるように映像が切り替わり、今度は神殿のような、石で出来た美しい建造物が映し出された。

「この神殿は見かけは古いが、他の情報と組み合わせると調べても発見することが出来なかったものだ」

「つまり新たに発見された神殿……という事ですか」

「でもここは紛争地帯、いくらなんでも傷一つないなんて変よ」

「マリア君の言う通り、これは普通の神殿ではない」

見た目はさほど変わっていないが大人の落ち着きを身に纏った翼と、長髪を一つくりにしたマリアの疑問に彼は答えた。

「カメラ越しではあるものの撮影された映像をミュニアースにいるエルフナイン君に鑑定してもらったところ、錬金術によつて構築された可能性が高いことが判明した。キャロル君や雷君も同様の答えを出している。その為、我々S・O・N・G.はこの建造物がパヴァリア光明結社残党のものであると仮定し、調査を進めることになった」

「もし本当にパヴァリアの残党のものだったとしたら……」

「アルカ・ノイズが出てくる。だから私達がッ」

学生時代は捲いていたりボンを外した未来が戦うための覚悟を決め、少しばかり奏のように髪を伸ばした響が拳をぎゅつと握りしめた。

全員のコンディションに問題がないことを弦十郎は確認すると弦十郎が今回の作戦概要を傳達する。

「我々の任務は紛争の休戦及びパヴァリア残党のものと思われる神殿

の調査だ！」  
「「「「はいッ（デース）！」「」」」」

## PROJECT・B

五年前に発生した神話事変。

人類存亡をかけた戦いの裏側で世界中の戦闘行為はかつて起きた奇跡の一つ、第一次世界大戦で起きたクリスマス休戦のようにすべて休戦状態に入り、フランカが成し遂げた星の音楽によって対話が進められたように見えた。しかし、全てがそう上手くいくわけがなかったのだ。

それまで積み上げた憎悪の歴史、譲ることの出来ぬ意地、友や家族を失ったことに対する怒り……。

時間が解決していた問題を星の音楽は目覚めさせてしまったのだった。

その事実を人類の代表として日本と、S・O・N・G・とともに神と戦った米国は深く受け止め、いま世界中で起きている戦闘行為は人類が次のステップへ進む……真なる意味で神との決別を果たすための試練であると国連で発言し、米国は、世界は紛争問題解決へと本格的に目を向けることになったのだ。

シナイ半島も宗教的な——宗教問題はシエム・ハとアダドという文字通りの神が現れてしまったため、根底が揺らぎ民族問題よりも激化の一途をたどっていた——紛争地帯であるため国連軍は、情報収集のためにミュニアースにリペアードされた映像撮影技術を実践投入し、戦場を撮影するとこれまでは発見できなかった神殿型の遺跡を発見。

その映像をミュニアース所長エルフナイン、キャロル。彼女が右腕に据える雷が識別した結果錬金術由来の技術によって作られたものであることが判明した。

国連は国連軍の投入を一時中断し、現代科学では解決法がない遺跡の調査を優先することを決定した。

「で、私達にお鉢が回って来たという……」

「あんなことがあってもまだ戦いは続くんだね」

エアキャリア内部で待機していた調がつぶやき、響が少し悲しそうに拳を握った。



響としてはシエム・ハとの約束を守ることが出来なかったという事が重く心にのしかかっているのだ。

世界はそこまで甘くはない。

分かっていたことだが、それでも何とかなるのではないかと信じていたのだ。

響の握った拳を隣に座っていた未来が優しく包み込む。

「未来……」

「神様と別れるまで二千年もかかったんだもの、だから響が思いつめる必要はないよ」

「でも」

「大丈夫。シエム・ハさんとも私達は分かり合うことが出来たんだから」

「……そうだね。くよくよしてても始まらないし、小さなことからコツコツと、だよね！」

未来の励ましに響は今度は勇気と決意を込めて彼女の手を握り返す。何時もの響の調子に戻ったことで未来も笑顔を浮かべた。

空気が元通りになったところで、同じくエアキヤリアに空挺班として同乗していた切歌が両手を勢いよく広げる。

「そうデス！ 今度イギリスであたしたちのライブイベントがあるんです。響さん達はどうデスカ？」

切歌と調のバンドユニット『Z A B A B A』の次のライブの開催地が、かつて翼とマリアが魔法少女事変前夜のライブが行われたアリーナに決まったのだ。

あまりに唐突な話題だが、この元に戻った雰囲気維持するのに最適だった。

「それっていつなの？」

「一応今月末の予定デス！」

「うーん……その日はクリスマスちゃんの手伝いにアメリカに行く予定なんだ、ごめんね？」

「ガーン！」

「こういうのは早い者勝ちだから仕方ないよ切ちゃん」

オーバーリアクションで落ち込む切歌を調がなだめる。

彼女の脳裏には「はーはっはっは！」と謎のテンションで高笑いするクリスの姿が浮かんでいた。クリスはそんな笑い方はしないが。

「でも姉ちゃんも来れないし響さんも未来さんも駄目なのは少し寂しいデス……」

「それはそうだけどね」

「今月だけでも調ちゃんと切歌ちゃんはイギリス、クリスはアメリカ、翼さんとマリアさんはロシアだもんね。私と響は定期的にいろいろなボランティアに行ってるし、雷とエルフナインちゃん、キャロルちゃんは南極で聖遺物の研究。フランカちゃんは実家の孤児院。……こうやって見ると結構いろんなことやってるね、私達」

未来が指折り自分たちの状況を確認した。リディアンにいたころは想像もできなかったほど世界中を飛び回っている。

フランカはまだ学生であるため、基本的に故郷オランダで彼女の家族が開いた孤児院の手伝いをしているが、有事になればS・O・N・G.の隊員として招集されることになっていた。

「そろそろ目的地上空です！ 装者の皆さんは準備を！」

「了解ッ！」

エアキャリアのパイロットから通信越しに声が届く。

それまでの姦しい会話はぴたりとやみ、各々ペンダントを手に握ってハッチの方に移動する。そして少しの揺れを伴ってエアキャリアは空中で停止し、降下用の後部ハッチが開いた。

入り込んでくる風が彼女達の髪を揺らす。

お互いに頷き合い、空へと飛び出した。

未来が銀色のペンダントを胸に当てる。つぼみのようなだったそれは花開くように展開し、背後に円盤状の光が生み出される。そこから光の帯が四肢に巻き付いて鎧を形成、ファウストローブ・神獣鏡へと形を変えた。

同時に三人も進化したシンフォギア『シンフォギアST』を身に纏う。胸部と四肢に搭載された虹色のクリスタルが燦燦と照り付ける太陽のもと輝いた。

そして未来が響の手を取り、調がツインテールバインダーから展開した鋸をプロペラのようにして切歌の手を取って神殿まで降下した。「うツわあ……流石は翼さんにクリスちゃんにマリアさん、三人で軍隊と戦ってる……」

「まあ、私達よりも一対多向きだからね。私や調ちゃんもどちらかといえはそつちだけど、それじゃ飛べないし」

「響さんはもしもの時に神殺し役として必要ですし……」

「私がこつちに居るって事は最もかみ合わせのいい切ちゃんと組むのが最善だもんね……」

誰と組んでもユニゾンが出来るようにしているとはいえ、最も出力の出る組み合わせがるといふのは事実。特に理由がない限りはその組み合わせで行動するのは戦術的に間違いではない。

地上で大立ち回りを演じる三人に呆気にとられながらも降下していると、不意に神殿で大爆発が起こった。

四人が一斉に振り向き、降下速度を上げる。

「「ツ?!」「」」

「急ごうツ!」

「うんツ!」

「行くよ切ちゃんツ!」

「はいデースツ!」

神殿はごうごうと燃え上がり、黒煙が雲一つない大空へと立ち上っていた。そして紅い炎の中からアルカ・ノイズが出現する。数は多くない。

何かが爆発したのを察知した翼が響に通信を開いた。

『何があったツ?!』

「神殿が爆発しましたツ!」

『なんですつてツ?!』

『お前ら無事か!』

「私含めて全員無事です!それとアルカ・ノイズの出現を確認しました!」

『増援は?!』

「数が少なく、翼さん達とも距離は離れているので必要ありません！  
これから突入します！」

『任せたぞー！』

通信を終了し、四人は頷き合う。

そして未来が鏡のようなビットから放つ光線で、調に掴まった切歌が鎌を振り回しブーメランのように放つことで上空からアルカ・ノイズの殲滅にあたる。

流石に地上からは距離があり、砂漠であるため装者といえどこの高さから自由落下による着地の際の影響が分からないため、降下速度こそ上げるものの落ちるとい判断はとらなかつた。

しかし人類にとっては脅威でも所詮はノイズ。装者にとっては大した問題にはならなかつた。

着地した時にはすでにアルカ・ノイズは倒されつくしていた。

しかし一番の問題は突然起きた謎の爆発である。

神殺しである響が先頭に立ち、魂切りの力を持つイガリマが最後尾を警戒した。

「煙と炎で視界が悪いけど……」

「私が照らすよ。煙ぐらいいは晴れさせれるから」

「ありがとう、未来」

視界が悪い中、四人は奥へ奥へと進んで行くが何も見当たらない。いや、厳密に言えば何百もの小部屋などは有ったりするのだが、それが何なのかを突き止める証拠が一切焼却されているのだ。

そういうしている内に、一番奥の扉までたどり着いてしまった。

「行くよ」

「「……」」

響が勢いよく扉を開ける。

そして拳を構えるが、そこにも何も存在していなかつた。

炎も酸素を使われつくしているのかそこまで強くなく、何かあるのではと思案する出来る程度のものになっていた。

火に火をぶつけて消火する方法がある――。

姉さんがそんなことを言っていたことがあつたと調が思い出して

いた。

最後尾だった切歌が前三人の肩越しに部屋の中を覗きこんだ。

「およ？ 何にもないデスね。こういつてはなんデスが、少しばかりドラゴンとかでないかなと期待してたんデスが……」

「何にも、無いみたいだね切歌ちゃん」

「まあでも切ちゃん、怪我をするよりは何倍もいいと思うよ」

「それはそうデスけど……」

「私はドラゴンとか期待する気持ちわかるけどね！」

響が便乗した。

未来の視界の端に何か映った。それは、上から降ってきたものだった。

(羽根?)

そう思つて手に取ろうとするが、少しばかり大きな火の粉であることに気付いた。

羽根と火の粉をどうして見間違えたんだろう――。

考えていると、その思考は響の声にかき消された。

「みんな！」

「どうしたの響?」

「何か見つかったデスか?」

「紙の束……?」

響の手に持っていたモノ。

それは複数枚の紙を束ねて作られた報告書のようなものだった。しかし、接着部と表紙が辛うじて燃え残っているだけで全容は焼失しており、燃え残っていた表紙も重要な部分は燃え尽きてしまっていた。

その燃え残った表紙にはこう書かれていた。

『PROJECT・B』  
と――。

## ミュニアースの朝

ミュニアース副所長にして聖遺物部主任の雷の朝は一杯のコーヒーから始まる。もちろん、砂糖ミルク一切なしのブラックだ。

シャワーで独特な癖のある長い灰色の髪を丁寧に洗い、寝汗を落として着替え、白衣を翻して身に纏う。最後に未来から譲り受けた白いリボンで髪を一つくりにすれば準備完了だ。

インスタントではなく世界各地から取り寄せた焙煎された豆をその日の気分で選択して挽き、丁寧にドリッップする。この工程で脳のスイッチを入れ、目を覚ます。

そして抽出したコーヒーをサーバーに入れ、愛用のカップを片手にそのまま食堂に向かう。途中にある売店で新聞を入手することも忘れない。

薫り高いコーヒーをもって研究所内を練り歩くという事は、その薫りを散布していることに他ならない。それらは道中にある職員たちの自室の中へと入り込み、彼等の鼻こうをくすぐる。

雷が誰一人いない食堂にあるテーブル、窓際の左端という彼女の定位置に座り、サーバーからカップにコーヒーを注ぐ。そして新聞のページ目を開く頃には道中の職員たちもぞろぞろと顔を出してきていた。

同じ聖遺物の研究を担当している男性職員が自前のコーヒーカップを手に雷の傍に立っていた。

「おはようございます、副所長」

「ん、おはよう」

雷は顔を上げず、コーヒーサーバーで彼のカップにコーヒーを注ぐ。そんな彼は嬉しそうな笑みを浮かべ、軽やかな離れていった。よく見ると彼の後ろにも多くの人間がカップを片手に並んでおり、雷は同じように顔を上げることなく注いでいる。

これはミュニアースの朝の定番の光景で『雷のコーヒー』と呼ばれている。もしくは副所長のコーヒーとも。何時から始まったのかは定かではないが、雷が毎朝食堂でコーヒーを飲むことと、彼女が誰か

に振る舞い、それが美味であると広めたためにいつの間にかこうなつた——とされている。

しかしその列は最後の一杯分を残して途切れてしまう。これを最後に飲む人間は決まっていた。

コツコツと長い金髪の三つ編みを揺らしながら、その人物は雷の正面に座る。

「おはようございます雷さん！」

「おはよう、エルフナイン、キャロル」

「はい、何時もの最後の一杯」

「ありがとうございます」

そう言つてエルフナインはずいっと自分のマグカップを差し出してくる。それには新聞をたたんで応じ、最後の一杯をゆつくりと注いだ。

別に雷はエルフナインたちにひいきしているのではなく、何時も丁度新聞を読み終えるタイミングに現れるから必然的にこうなつてしまう。

他の職員たちもそのことは重々承知である。

故に最後の一杯分になるまでに列に並ぶという静かな競争が起きていた。飲むことが出来た者はその日一日研究の調子がいいという謎のジンクスまである。

そのことを雷は知る由もない。

エルフナインは両手でカップを掴み、

「雷さんは今日は何をするんです？ やっぱりパラレルテクノロジーの解析ですか？」

と言つた。

平行技術パラレルテクノロジー。文字通り平行世界よりもたらされた技術の解析が、現在の雷の主な仕事であった。

「うん、そのつもり。私が寝ている間にあんなのがやって来てたとはねえ」

「ボクもびつくりしましたよ。世界は広いと言いますが、まさか平行世界まで存在するとは思ひもありませんでした」

「知ってはいたけど、実在するとは思わないよねえ」

「物語の中の話と思いますもんね、普通」

「その物語に登場する聖遺物とかを研究したり、神様と戦った私達が言うのも少し可笑しいけどさ」

「ですよね」

二人はくすくすと笑い合った。

するとふいに雷がテーブルに額をぶつけた。ドスンという音が食堂に響き渡る。

職員は何事かと雷の方を向いたが、すぐに自分たちがしていた事の続きにもどった。

つまり——いつもの光景ということだ。

雷が叫ぶ。

「誰だよエレクライトなんて作った大馬鹿野郎は！ どうしてあの程度の電力で平行世界移動が出来るんだ?! メックヴァラヌスもファウストローブも理解できるけど、あれだけは理解できない!」

「ニコラ・テスラさん……って聞きたいことはそういう事ではないですよ。……強力な電磁気力で局所的に重力の孔をあけて移動するというのは違いますもんね」

「そんなことできたらケラウノスでとづくにやってる。……たぶんできたと思うけど」

「設計図さえあれば何とかなつたんですけどね……」

「完成品だけポンツと渡されてもどうしようもないよ。だって私聖遺物が専門なんだから！ 純粋な超科学は本気でやめていただきたい」

二人そろって頭を悩ませる。

パラレルテクノロジーCASE3エレクライトは純粋な科学によつて成立している。そして二人は聖遺物担当と錬金術担当。つまり、純粋に専門外だった。

「聖遺物とか錬金術とかのリペアードを使えば何とかなるだろうけどさ、なんだか負けた気がしてならないんだよね」

「必要に迫られた人間ってあんなものを開発できてしまうんですね……」



「あの弦楽器みたいなウイングバインダー？　が最高にかっこいいのが最高にむかつく。……というか確認する限り全エレクトライトの共通機構っぽいからあれが平行世界移動の鍵だと思うんだよ」

「……それはオレも同じ結論に達した。形や色は違えど同じ機構のものだろう。……最も、それを裏付けるのは記録映像しかないわけだが」

エルフナインからキャロルに人格が切り替わる。

三人の結論が平行世界移動の秘密がああウイングバインダーにある——譲渡されたものがウイング状だっただけで、同一の形状ではないのだが、便宜上言いやすいのでそう言っている——と結論付けた。「だとするとあの弦楽器、もしくはピアノの中身のような見た目をしているのが重要なのだろうか」

「だったらその方面でアタックしてみるかなつと。キャロルは？」

「オレはラピス・フィロソフィカスの複製だ。あれは純粋なエネルギー源だが、今できるものは純度が低い。もっと高純度でなければ実用段階にはならんだろう」

そう言つて二人は立ち上がり、朝食を受け取るためにカウンターに向かおうとする。

丁度そのタイミングで、横合いからほやほやとした女性の声がした。ルイスだ。

「所長に先輩！　今から朝食ですか？」

「そのつもりだが？」

「あ、今日はキャロルさんなんですね！」

「お前はオレ達が入れ替わつても変わらず対応してくれるから楽だ。まあ、最近は他の奴らも慣れてきてはいるがな」

「最初はすごかったもんね。エルフナインからキャロルに変わるたびにみんなびつくりしてたから。……というかルイスのソレ、本当に完全聖遺物じゃないの？　どこからどう見てもソロモンの十の指輪にしか見えないんだけど」

雷がルイスの胸元にある輪が十個つながったネックレスを見た。

しかし、それは彼女がここに入所してからすぐに検査を終えてい

る。

「先輩、これはちゃんと検査して、同じ材質のレプリカだって解析済みじゃないですか。でも先輩にも本物のように見られるってソロモンファンの私としてはうれしい限りですね！」

「しっかりと十個を検査機にかけているが、そのどれも聖遺物としての反応を示さなかった。そんなことは分かっている。分かっているのだが、本当にそうかと疑わずにはいられなかった。それほどまでにこのレプリカは精巧だった。

多くの聖遺物を見てきた雷を欺くほどに。

「今日は先輩は何をするんですか？」

「CASE3の平行世界移動能力の解析」

「じゃあ私も手伝いますね」

「じゃあって、自分の研究は……」

「昨日のうちに終わらせましたとも。少なくとも現状出せるだけの成果は出せてます！」

「ならいいけど……、雷は少し釈然としなかった。

## 紅蓮の炎

雷は、初めて耳にした単語に首を傾げた。

「ファウストギア？」

「はい！」

雷は朝食を取った後、ルイスと共に自分のラボに向かい、エレクライトの根幹の能力といえる平行世界移動能力の解析に当たっていた。本世界より受け取ったエレクライトが起動している映像と、これが発しているフォニックゲインを比較し、どの様な効果を生み出しているのかを調べている。シンフォギアとのデュオレリック……シンフォニック・ドライブが成立している以上、フォニックゲインが何かしらの作用を促しているのには違いが無かった。

もしかすれば、シンフォギア装者しか出来ないと言われているギヤラルホルンによる平行世界移動にも何か進展をもたらすことが出来る。

平行世界も含めた人類の新たななる発展に一步踏み出すことが出来る——雷はそう考えていた。

そんな彼女に、不意にルイスがよこした話題が「ファウストギア」というものだった。

雷はモニターから視線を動かすことなく聞いた。

「どういうもの？」

「シンフォギアとファウストローブってあるじゃないですか」

「元装者の私に聞く？ それ」

「まあ、はい」

雷の皮肉にルイスは苦笑いを浮かべた。それを視界の端で捉える。流石に悪い冗談だったか。

その謝罪の意味を込めて、雷は椅子を回転させてルイスのほうを向いた。

彼女は雷の反応に少しばかりほっとしていた。

「えっとですね。シンフォギアは歌で起動して、その歌による爆発力がウリじゃないですか」

「まあ、基本的には」

「だけど歌が無くなればとたんに出力が下がってしまう。で、ファウストローブは爆発力でこそシンフォギアに劣るものの、使用者の何かしらで起動している分安定性はあるじゃないですか」

「キャラルとかいう例外中の例外は置いておいて、確かにパウアリアの四幹部はそうだったかな。安定性がある分、ユニゾンの出力強化みたいな芸当はしてなかったし」

「反応兵器にしていたユニゾンも、出力アップというよりはラピス・フィロソフィカスを燃焼するための触媒としての効果が大きいですし」

あの場にいた雷はそう言われると何となく釈然としない気持ちになったが、研究者という視点で見ればそう思ってしまったも仕方がない。

むしろ筋は通っている。

「で、そのファウストギアっていうのは？」

「シンフォギアの爆発力と、ファウストローブの安定性を足したギアって事です！」

「起動と出力アップは歌、維持は使用者のなにがしかって事？」

「そういう事です。平行世界の存在によって外から何かが来る可能性もありますし、こういう備えはあってもいいかと」

雷は腕を組んで考える。

黎明を迎え、今の世界には新たななる戦力増強はそこまで推奨されるものではない。

しかし、平行世界から脅威がやってくるというのならば別だ。本世界の話では、他の平行世界にも被害をもたらした危機があったのだという。

そして装者であった彼女としても、歌がない時のシンフォギアの出力の低さには思うところがあった。

だからこそ。

「いいよ、やっても。エルフナインとキャラルには私が話しておくから」

「やりました!」

ルイスは思わずガツポーズした。

考えたことを漸く形に出来るからだろう。雷はそんな彼女に暖かい視線を向けた。

が、その視線は即座に冷え切ることになる。

「ありがとうございますございます先輩! 実はもう原型自体は完成してるんですよー!」

「は?」雷の声は地を這うようだった。

「これで所長に怒られずに済みます!」

「……ちよおとついで来てもらえるかな?」

「え、ちよ」

ルイスの首根っこをむんずと掴み、暴れる彼女をずりずりと引きずって所長室に向かう。いや、いまなら研究室かもしれない。しかしエルフナインとキャロルのところに向かう事実は変わらない。

「は、離してくださいよせんぱーい!」

「ここでの研究は未知の技術を扱う以上、対策を事前に用意するため先に研究内容をレポートにまとめるのが規則なのは知ってるよね?」

雷がルイスに笑顔で言った。

しかし、額には青筋が何本も浮かんでおり、目は笑っていない。

それを見て冷や汗を滝のように流すルイスは必死に弁明する。

もはや初見ではどちらが年上なのか誰にもわからないだろう。

「い、いやでも! 先輩もはやる気持ちを抑えきれずにつて事ありますよねえ?!」

「ない」雷は断言した。「だからこつてりと絞られてこい」

「い、いやああああああ!」

ルイスの情けない叫び声がユニアース全体に響き、その後それを超えるキャロルの怒号がユニアースそのものを文字通り揺らしたという。

○○○

米国、バージニア州で行われたクリスのリサイタルは大成功を収め

た。

クリスの頼みで会場の準備を手伝っていた響と未来は観客席に座り、全ての演目を終えた彼女に対して他の観客と同じように立ち上がって拍手している。

今ではクリスも翼やマリアと同じように、世界を股にかけるスターの一人となっていた。

クリスは私服に着替えた後、響と未来に迎えられて会場を後にする。

バージニア州は高層ビルが立ち並びながらも少し外れば緑の自然があふれる空気の澄んだ場所だった。

「いやー、やっぱりクリスちゃんの歌は綺麗だねえー」

「サンキュー。すまねえな、会場の準備なんて頼んでさ」

「ううん、クリスの歌をただで聞けるんだから。十分おつりがくるぐらいよ」

「だったらよかった」

クリスが笑みを浮かべた。そしてそのまま夜空を見上げて眩く。

「センパイとマリアはモスクワ。調と切歌はイギリス。んで、バカ二号は南極……か、ずいぶんとバラバラになっちゃったなあ」

その横顔は少し寂しそうだった。口にすれば顔を真っ赤にして否定されるから決して言わないが。それに響と未来も、クリスと同じような思いを抱いていた。

「全員揃う事なんてもうほとんどないからね……」

「まあ、アタシ等がそろって事はいろいろと問題があるって事なんだが」

夜空にふうつと息を吐き、クリスは正面を向いた。

まばゆい流れ星が空を横切る。

「さてと、リサystalの成功を祝して今夜はぱあつと行こうぜ！」

「やったあ！ クリスちゃん太っ腹あ！」

「ふふ、よかったね」

響が年甲斐もなく飛び跳ね、それをクリスが呆れながら、未来が微笑みながら見つめる。

その瞬間だった。

何の前触れもなく、それはやってくる。

彼女達の背後の森の奥が大炎上し、遅れて爆発の衝撃波が走った。それは物理的なものだけでなく、精神的なものでもあった。

「「なッ?!」」

瞬時に響達の表情が焦燥に切り替わる。

なぜならその方角は——アメリカ合衆国連邦政府の対外情報機関、中央情報局。つまりCIA本部のある場所だからだ。

米国のリーダー網に感知されることなく突破し、大打撃を与える方法は一つしかない。

——テロ。それも聖遺物を用いた。

その結論を三人が導き出した瞬間、弾かれたように現場に急行する。それと同時に米国政府からの緊急回線が開いた。

『聖遺物を用いたテロの可能性。S・O・N・G.に出動要請を求む』

如何やら政府も同じ結論に達したらしい。確定とはい切れないが、もしもに備えるのは重要なことだ。もし別の要因だったとしても、そのまま救助活動に当たればいい。

響がガングニールの起動聖詠を歌う。

「Balwisyall Nescell Gungnir Tro  
n」

彼女の体をインナースーツが包み込み、ガントレットとバンカー付きのブーツ型アーマーを装着する。襟首の装甲からマフラーが飛び出した。そして七色の光が胸部と四肢に結晶化、アーマーと一体化した。

同じくギアを纏ったクリスと共にファウストローブを纏った未来と手を繋ぎ、神獣鏡の飛行能力で一直線に向かって言った。

上空に出てみれば、炎はごうごうと燃え上がり、夜闇の中でも目を引く黒煙を巻き上げている。その光景は美しい夜明けのようで、しかし命を奪う禍々しいものだった。

「急ごうッー」

「うんッ！」

未来が速度を上げ、クリスがバイザーを下ろしてスコープを展開した。

すでに負傷者は大勢出ており、何人無事なのか想像もつかなかった。

この場の最年長として、クリスが指示を出す。

「負傷者を何とかするのがこの場合の鉄則だが、今回は状況が状況だ。先にテロリストの制圧に動く」

「でも、怪我した人はッ?!」

「もちろん救出する。しかし優先度の問題だ！　すでに救助部隊が動いているはず。だからアタシ等は迅速かつ安全に動けるよう、先に制圧をするって事だ」

「ッ……分かったッ！」

クリスの言葉に響が真剣に頷く。

見捨てるわけではない。助けることが出来る人は助ける。だけど、自分たちしか何とかすることが出来ないものを解決する。

そうこうしている内に、響達は現場に到着した。

響は近くに倒れていた職員を抱き起し、彼に意識があり、軽傷であることを確認してから、

「何があっただんですか?!」

と、聞いた。

彼は軽く呻いた後、少しばかりの疲労感をにじませながらしっかりと答える。

「炎の塊が……突然降ってきて……俺たちの仲間を焼き尽くした……！　炎の中に……君たちのような鎧を纏った人影があった……！」

「場所は?!」

「あそこだッ……！」

震える腕で本部の中央棟を指さした。

それを確認した響たちは力強く頷き、男の目を見る。

「すぐに救援が来ます。ですから安静にしてください」

彼は安心したかのように穏やかな笑みを湛え、ゆっくりと手を下し



た。

響は彼の体を地面に寝かせ、最も燃え盛っている中央棟に視線を向ける。

「行こうッ！」

「ああッ！」

「うんッ！」

炎の海となった中央広場を飛び越え、燃え盛る中央とうの中でも最も火の手が強い局長室のあるフロアまで一気に跳躍した。クリスがアームドギアを変形させた拳銃で特殊加工ガラスを破壊し、中へと滑り込む。

そして向かおうとすると、背筋に凄まじい怖気が走った。

戦場で培われた勘

咄嗟にしゃがむと、頭上を炎の柱……いや、刃が通り抜ける。

あまりの熱量に壁が燃えるのではなく、溶解していた。

響が拳を構え、未来が扇子を向け、クリスが拳銃を突き付ける。

そして黒煙の中から、シンフォギアのようなものを纏った少女がゆつくりと、無造作に、まるで自分の命に価値などないように現れる。

そして、その姿に三人は驚愕した。

「オイオイ嘘だろ……？」

「え……？」

「あず……まっ？」

紅蓮を纏った大剣で煙を薙ぎ払い、それを肩に担いだ。シンフォギアのような鎧は炎を噴出している。炎が生み出す光と気流が少女の褐色の肌を嚙猛に照らし、赤いグラデーシヨンのかかったオレンジ色の髪が暴れ狂ったように揺れている。

そして、彼女の姿は雷に、それこそ双子といっても分からないほどに瓜二つだった。

## 紺碧の海

米国のCIA本部が襲撃され、響達が救援に入った丁度その時、それと同様の出来事が世界で二つ同時に発生していた。

モスクワの市街を一台の車が走っていた。

その車に乗っているのは翼とマリア。

彼女達はライブを終え、自分たちが寝泊まりしているホテルに向かっていているところだった。

雪の降るモスクワのレトロな街並みをマリアが運転する車が穏やかに駆け抜ける。その様は走りながらついでに観光しようというドライブもかねてのことだ。

ただ、観光に熱中しすぎて少々時間が遅くなってしまったのは彼女たちの名誉にかけて黙っておくとしよう。緒川がいればこんなことはなかっただろうが、今は二人だけだ。

彼はマネージャモードで次のアルバムの交渉に向かっていた。

美しく白く飾り付けられた街並みを眺めながら、翼は少し不機嫌気味のマリアに声をかけた。

「そう拗ねるな、マリア。轟だつて忙しいのは分かっているだろう？」

「忙しいのが分かっているから拗ねてるのよ」

「そう頬を膨らませるな。美人な顔が台無しだぞ」

「下手な慰めは結構」

ハアとため息をついたマリアが可笑しかったのか、翼が笑い声をあげた。

窓枠に片肘をつき、頬杖をついた。

その表情はどこかふてくされているようだ。

「これでまた私のプランが遠のいたわ……」

「プランって、あのことか？ マリア、轟、月読、暁の四人で一緒に暮らすとかいう」

「そうよ」

翼がフツと笑みを浮かべた。

「……それがしたくて色々したくらいなのにな」

「……そのことは忘れて。いや、私達は忘れちゃダメだけど」

「だが大丈夫だろう。そう遠くないうちに、その願いはかなうはずだ」  
翼はマリアの方に優しい目を向けた。

連邦政府庁舎の傍を通りかかる。

改修はされているがデザインは維持されており、まるで高級ホテルのような見た目が目を引いた。

翼たちの他に車はいない。恐らく彼女たちのライブの余韻に浸って帰るのが遅れているか、もしくは逆にさっさと帰ったかのどちらかだろう。

「他に誰もいないなんて、これはこれでゆっくりできていいわね」

マリアが穏やかに呟く。

すると突然、目の前に連邦政府庁舎のそばを流れるモスクワ川が目の前にあった。

「マリアッー」

「ッー」

あまりに現実離れた状況にマリアは一瞬のみ込まれかけるも、ハンドルを握っていない分冷静だった翼の声に思考を取り戻した。

咄嗟にブレーキをかける。

そこまでスピードを出していなかったため簡単に止めることが出来たものの、もしもブレーキが間に合わなかったら川に転落し、凍えて震えていたことだろう。

何があった……？

そんなことを考えている内に、S・O・N・Gの通信機に通信がつながる。

『聖遺物使用者の襲撃を受けた。至急救援を求む』

その一報を受け、二人は素早くシートベルトを外す。

——そして、既にシンフォギアを身に纏った状態で庁舎前にある階段を駆け上がっていた。

「なッ?!」

「どういう事?!」

再び発生したあまりにも不可解な事象に翼たちの動きは硬直した。

起動聖詠を歌うことなくシンフォギアを身に纏い、いつの間にか連邦政府庁舎の敷地内に入っている。そしてそのことに、今の今まで気づくことが出来なかった。

何か妙なことが起きている。

こうなれば慎重に行動することが定石だが、今は緊急事態。何があつたとしても、シンフォギアを纏っている以上、生身よりは頑丈だ。

「急ぐぞー！」

「ええー。事象の究明はあとにしましょう！」

玄関は開いていない。

しかし、鍵が開くことは期待できないため、天羽々斬で両断して中に飛び込んだ。

庁舎の中は凄惨極まりない状態だった。

生存者はいるものの、背中から血を流し、絶命した者もいた。

「無事ですか?!」

マリアがスーツを血で濡らした女性職員に駆け寄る。すぐそばにはすでに息絶えた男性職員がいた。彼女たちの位置からしてすれ違ったタイミングで襲撃されたのだろう。

翼が周囲を経過している。

「何があつたんですか?」

「か、彼が正面から歩いてきたからえ、会釈して通り過ぎようとしたら……いつのまにか彼を通り過ぎてて……そ、それで何か心配がして……う、後ろを向いたら血を流して倒れていたの……」

あまりに超常的なことを身近に感じてしまったせいであらう。少し混乱しているようだ。しかし、彼女が陥った現象と自分たちも感じた現象が同一の出来事である可能性が高くなった。

「そこには誰かいましたか?」

「う、ウェットスーツみたいな鎧を着た……三又の槍を持った女性が……」

マリア女性から更なる情報を聞き出そうとした次の瞬間、彼女は庁舎二階の廊下を駆けていた。

「また?!」

そばには女性職員はもちろん、翼もない。

すぐさま翼に通信を入れる。すると翼も同じことを考えていたようだ。

『マリア！ 無事か?!』

「ええ、何とか。……もう訳が分からないわ。翼は今どこ？」

『恐ろくだが……三階だ』

翼も同様にこの現象に巻き込まれたらしい。が、如何やら無事なようだ。ひとまず翼が無事であることに安堵する。

「私は二階。相手の聖遺物というのはどこかに飛ばす力でもあるのかしら」

『いや……ただの勘だが、それだけではない気がする。だから気を付け——』

翼が言い切る前にまた状況が切り替わる。

いつの間にか通信を終了しており、まだ息がある負傷した職員を抱き起こしていた。マリアは混乱するが、目の前の状況に対処する。

しかし出血がひどく、恐らくもう長くはない。

——もう助からない。

その事実を受け止めた瞬間、また場所が変わった。

今度は目の前に死体の山が積みあがっていた。廊下一帯は血で赤く染め上げられ、地獄のようになっている。

予測不可能な不可思議な現象と唐突に見せつけられる光景にころが摩耗していく。

するとマリアの立つ場所とは正反対の位置に翼が現れた。

「マリア！」

「翼！」

翼にも焦りが見えている。マリアと同じように精神的な負担がかかっていたのだろう。

ようやく会えた。

時間にして五分もたっていないにもかかわらず、彼女達には何十時間もの別れに感じられた事だろう。それほどのまでに、今起きている出来事は異常だった。

無事に再開した喜びと安どはさておき、今の状況を飲み込む。

死体が山のように積まれているこの血に染まった廊下だが、とある部屋の前には特に死体がある。

「その部屋に襲撃犯がいるようだな……」

翼は呟いた。

扉には国防大臣室と記されていた。

扉を蹴破り、刀と短剣を構えて内部に飛び込む。

そこには、机の上に立ち、国防大臣の胸を三又の槍で貫いた女性がいた。後姿で顔は見えないが、ウェットスーツのようなシンフォギアに類似する鎧を身に纏った、群青色の髪をポニーテールでまとめているマリアと同年代ぐらいの女性であるということがわかった。

大臣を助けることが出来なかったことに翼は舌を打ち、切っ先を突き付ける。

「何者だッ！」

「……」

女性は答えない。そして、小さくため息をついた。

すると、次の瞬間には翼たちの目の前から消失していた。

「ッ」

「何時の間にッ?!」

「ふッ！」

背後から鋭く深い殺気を感じ、咄嗟に前に跳躍する。するとさつきまで立っていた場所に槍が振り下ろされていた。三又の槍が床を砕く。その破壊力はまるで津波のようだ。

しかも槍を振り下ろした場所以外は傷一つない。それは彼女が威力を一点に集中することが出来る、高い実力を持っていることの証左だった。

能力頼りの相手ではないことを、翼とマリアは直ぐに理解した。

彼女の体がかすかに濡れているのか、無傷だった周りの絨毯には水を吸ったような跡が残っていた。

右手で槍を一度振るい、柄を床に突き立てる。

ずれた眼鏡を調整し、鋭い切れ目で翼とマリアの二人を見つめた。

瞳は赤く、彼女の身に纏う紺碧の鎧とは正反対だった。

## 飛翔する光／宣戦布告

そして同じくもう一つ、襲撃を受けた場所があった。

その場所こそはイギリス。調と切歌によるロックバンドZABA  
BAがライブを行っている国だ。

二人は、ステージの上のライトアップされた中で、笑顔で客席に向か  
って手を振っていた。掻いた汗が光を反射し、まるでスパンコール  
のように二人を輝かせている。

「みんなー！ 応援ありがとうデース！」

「夜はまだ始まったばかりです！ もっともっと盛り上がっていきま  
しゅー！」

二人の声にさらに客席が盛り上がりを見せる。

暗闇の中、緑とピンクのペンライトが揺れていた。

歌を歌えば歌うほどアリーナの熱量が増していく。

そして二人には、この上がりに上がった熱量を限界突破させるよう  
な、さらなるサプライズを用意していた。

ちょうど中間地点に差し掛かったタイミングで、調が声を張り上げ  
る。

「皆さんに、スペシャルなサプライズがあります！」

客席にどよめきが走る。しかしそれは不安によるものではなく、期  
待からくるものであった。サプライズがどのようなものか、観客は続  
く言葉を今か今かと待ち望んでいるのが肌で感じる事が出来る。

その緊張感の高まりが極限に達した瞬間、切歌が声を張り上げた。  
「何とデスね！ 大手レコーディング社のオーナーにして、この国の  
外務大臣を務めるジャックさんがあたし達の曲を売りたいというお  
電話があつたんデース！」

「しかも今日！ このアリーナに来てもらっています！」

アリーナが声援で揺れる。

日本から応援に駆け付けた古参ファンも、イギリスにライブに来る  
のを今か今かと待ち続けていた現地ファンもこの発表には興奮を隠  
せない。特に現地のファンは、自分たちの国のレコード会社がZABA



A B Aをさらに広めるといふ事に大いに感動していた。中には喜びのあまり涙を流している者もいる。

そしてその歓声の中、件の人物であるジャックが手を振りながらステージまで上がってきた。そして交互に、切歌と調に握手を求めた。彼女達も、それに応じる。

「これからは私にも、君たちの手伝いをさせてはくれないだろうか？」

「はい！」

「もちろんデース！」

短いやり取りではあるが、それだけで十分だった。

客席から聞こえてくるファンの歓声。

そしてそんな時、まばゆい輝きと共に一人の少女がステージに降り立った。

糸目の少女は内側にカールしたショートカットの金髪を揺らし、ジャックのほうを向く。その動作に、金色のアクセントが目を引き銀のドレスの裾が翻った。

少女の周囲を漂っている金のワイヤーのようなものがベルの音色を奏でている。

手には金色の長剣を持っていた。

そんな彼女の登場に、今までサプライズをしかけていた側のジャックが驚いてみせる。

「おっと、サプライズをしかけていたと思っていたら逆に仕掛けられていたとは！　彼女はZ A B A B Aの新しいメンバーかな？」

はははと笑いながら切歌と調を交互に見やる。

しかし、彼女の登場に一番驚愕しているのは二人だ。突如として現れた正体不明の少女に目を見開き、それと同時に彼女が持っている金の長剣に警戒していた。

不測の事態に対応できるよう、切歌と調はペンダントを握り、ジャックの壁になるように立ちふさがる。

二人の様子からただ事ではないと感じたジャックは、彼女達をかき分けて少女の正面に立った。先ほどまで興奮のあまり震えていた観客たちも、今はそれが動揺と困惑に変わっていた。

彼のこの選択は、自身の寿命を五秒ほど縮めることになる。

「おい！ 君は一体何者なんだッ?!」

「……」

少女は一切の反応を示さない。

閉じているのか、開いているのかすら分からない目を彼のほうに向けている。

そしてその瞬間、金色の長剣がまばゆい光を放ち、空いている反対の手を横に振るった。

「ッー」

咄嗟に目を庇った調と切歌は、それまでの経験から非常にまずいことが起きるといふ事を察知し、咄嗟に要人であるジャックの体を突き飛ばした。

そして自分たちもその勢いのまま、庇うように倒れ伏す。

すると先ほどまで彼が立っていた場所を銀色の飛翔する何かがり裂いた。

——それは、短剣だった。

浮遊するそれはジャックの影を切り裂いた後、円を描くような軌道で少女の傍らに停滞した。

そこで調が気づいた。

ジャックの体はこちらにある。しかし、彼の影は何故か先ほどまで立っていた場所に留まったままだ。そして銀色の短剣が切り裂いた軌道と同じ形に、影もすっぱりと切り裂かれている。

切歌も遅れて気付いたようだ。

「ジャックさん?! ジャックさんッ?!」

声をかけながら体を揺すっているが、一向に返事がない。ピクリとも動かない。

ゆつくりと、とどまっていた影が吸い込まれるように彼の体と繋がる。すると、切り裂かれた影の形が肉体に反映されたかのように、赤い水たまりがステージに広がっていった。

すでに体は冷たくなっていた。

「あなたは一体……」

「ッ……」

最前列でその惨劇を目撃した観客は狂乱しながらここから脱出しようと暴れ始め、それがだんだんと広がっていく。我先にと出口へ逃げ出そうとする。

そのことに少女は表情を歪め、金色の長剣を頭上に放り投げた。そしてそれはさつきと同じく眩い光を放つ。その光は、逃げまどう観客そのものの動きを停止させた。

少女は放り投げた剣を掴み、二人のほうを向いた。

○○○

その時、世界中の電波がジャックされた。

画面には、紅蓮の炎の中で燃え盛る大剣を肩でかつぐ少女。槍を床に突き立てた海の中にいるかのように髪を揺蕩わせる女性。そして、両手に金と銀の剣を持ち、光に形を与えたかのようなドレスを身に纏う少女。

どうやって電波をジャックしているのか、何処から撮影しているのか分からない。放送を中止することすらできない。

——これは聖遺物によって引き起こされている。

そう考えなければ、説明がつかない出来事だった。

光の少女が告げる。

『わたし達は強者を滅し、弱者を救うもの』

海の女性が告げる。

『私達は闇を隠す社会を破壊するもの』

炎の少女が告げる。

『俺達は墮落した者たちを焼き尽くすもの』

『強者は怖じなさい。弱者は手を取り合い、立ち上がりましょう！』

『すでに一部は解放された。ロシアの弾圧に苦しんでいた者たちよ、イギリスの嘘に踊らされていた者たちよ、もう恐れることはない！』

『そして今、争いを続けている中東の国々よ！ すべてのきつかけはアメリカにある！ これがその証拠だッ！』

炎の少女は紙の束を突き付けた。

そこには、確かに争いのきつかけがアメリカにあることを突き付け

る決定的な証拠が書かれていた。更にはロシアによつて存亡の危機に立たされていた小国の国境から軍が撤退していく映像が映り、続いて光の少女が殺害した外務大臣が映されることで、これ以降嘘に踊らされることなくった。

少なくとも、後釜が見つかるまではこの状態が続くだろう。

この映像を見た各先進国の代表たちは明日は我が身と怯えを見せ、逆に彼らの顔色をうかがつてきた国々は代表も国民も全てが歓喜していた。

もう戦渦に巻き込まれなくていいのだと、世界中に散らばる難民たちは安堵した。

学校に行くことが出来る、偶然ラジオ放送で聞いていた貧しい子供たちははしゃぎまわった。

弱者をかさに着て利権を啜る者たちは震えあがった。

弱者をむさぼり、悦に浸る者たちは自分の財産を手逃げ出した。

少女たちは声を合わせる。

『我らは「ファイ」。強者どもよ、かかつてこい。弱者を代表して相手になってやる』

一拍置いて、彼女達は宣言した。

『世界に、宣戦布告する』

暗き闇の中、一人の女がその宣言に笑みを浮かべた。

世界の勢力図が、一変する。

それは正義か悪か

クリスはアームドギアを変化させた拳銃を炎の少女に向けた。表情からは苛立ちが見て取れる。

「宣戦布告だあ？ ふざけるのも大概にしとけよッ！」

「……俺はふざけてなんかいない。それに俺から言わせてみれば、世界を救って天狗になって、歌を歌ってれば平和になるなんてふざけてんのか」

少女は肩にかついだ炎の大剣をゆっくりと下ろし、正直失望した、というように赤い目を三人に向けた。

その声はやはりというか、見た目のように雷のものと似ていた。いや、もはや同一といつてもいいだろう。彼女は持っていたアメリカの秘密情報をくるくると丸め、肩にかけていたバッグの中に放り込んだ。

視線は響達から完全に外しており、相手にする気など更々ないという意思表示をしていた。

その様子に、戦争に対して深い憎悪を抱いているクリスが歯を食いしばった。

「生憎とアンタを逃がすわけにもいかないんでなあ。大人しくお縄につけよッ！」

「……はあ、今撃つべきは俺じゃないだろう」

「クリス落ち着いてッ！」

「うるせえ！」

「クリスちゃんッ！」

未来や響の制止も聞かず、クリスが六回トリガーを引いた。リボルバーに装弾されている弾丸を全て、少女を行動不能にするに足りる箇所にはなっている。

しかし、少女は大剣を一薙ぎして飛来する弾丸を全て溶断せしめた。

弾丸を一瞬にして溶かしつくす熱量を、彼女の剣は持っているのだ。

反撃は、ない。

「分からなかったみたいだから声に出していつておくが、俺はお前達と戦う気なんかはなっから無い。むしろこつちを手伝うべきだと俺は思うがね?」

「宣戦布告した奴らなんかと手が組めるかよッ!」

「だが、俺達のした行動と、お前達に協力を要請した連中の裏側。どちらが正しいのか、火を見るより明らかかなはずだが」

クリスの頭には完全に血が上っていた。周囲の熱もあつてか、冷静さを欠いている。

だからこそ響が一步前に立ち、手を差し伸べる。

「やっぱり響は変わらないね」その行動に未来がつぶやいた。

「確かにそうかもしれない……だからさ、話し合おうよ。私達と、ファイのみんなで、一緒に! クリスちゃんも落ち着いて、ね?」

「ッ! ……ああ、確かに……その通りだな」

クリスもすっかり絆されてしまっているようだ。

話だけでもしてもいいかもしれない。無料なんだしな。

後は炎の少女が手を取れば丸く収まる。協力するべきと言っていたのだから、とらない理由はない。

そのはずだった。

「……話すだけ無駄だったな」

「え?」

響の思考が困惑で一杯になる。

その瞬間、少女は背後から炎を翼のように発射し、発生した火柱が天井を突き破って天まで続く大穴を開ける。そして背中の羽で羽ばたき、ふわりと浮き上がった。

爆炎が廊下の形に沿って広がっていき、フロア全体を炎で埋め尽くす。

装者たちは咄嗟に顔を庇ったが、足が止まってしまった。

少女は吐き捨てるように言った。

「俺の名はミア。立花響、その話、仲間の前でしてみろ。お前の浅はかさを知る羽目になるからな」

「待つて！ 浅はかって……どういう事……？」

「自分の頭で考えろ」

そのままミアは体を炎で包み込み、夜空に向かって飛翔した。その姿は、まるで彗星のようにも、鳥のようにも見えた。

装者たちは呆然と立ち尽くす。

この襲撃での被害者に、民間人は含まれていなかった。

そして、中東で起きた紛争問題が一つ、金と銀のオツドアイの女性の手によって解決に向かっていった。ミアの行動が、解決の糸口になったのだ。

○○○

ロシア軍が国境線を離れていった事実を確認した女性は、突き立てていた槍を引き抜いて一度振り回し、穂先を下に向けた。

そして眼鏡のガラス越しに、鋭い視線を翼たちに向けた。

「確認した通り、これでこの国に脅かされていた、隣接した多くの国に安寧がもたらされた。これで今回の私の任務は終了した。では、帰らせてもらうよ」

「ただで帰らせると思ってるの？」

「お前たちの思惑は、ベッドの上で聞かせてもらおうか」

ミアアが短剣を、翼が刀を構える。

それに女性は応じず、ふっと笑みを浮かべた。嘲るような笑みだ。

「私達は世界のためにやってるんだ。君たちが許されて、私達が許されないわけないだろう？ なあ、F. I. S.」

「ッ！ ……その贖罪は十分にしたわッ！」

「そう」

「マリアッ?!」

「なッ?!」

痛いところを突かれたマリアは一步踏み出し、逆手持ちにした短剣で目のまえの『翼』に一撃を加える。

翼は咄嗟に刀で受け止めた。

致命打にはならなかったが、なかなか重い一撃が入る。

翼の位置は変わっていない。マリアが翼の方向に向かって攻撃を

加えたのだ。この現象を引き起こしたのであろう女性は大抵のテールに足を組んで座っていた。

味方からの不意打ちを受けた翼は叫ぶ。

「どういうつもりだマリアアッ！」

「どうして翼が?!」

「それはこっちの物言いだッ！ マリアがわたしに向かって飛び掛かって来たんだらう?!」

「違うわ！……いえ、起きたことは事実ね。ごめんなさい」

翼とマリアは距離を取り、武器を構えて女性を捉える。

その視線を受けて彼女は立ち上がった。

「おっと、そういうえば名前を言っていないかったね。これは社会人失格だな。私はエルナ・ミニスター。以後よろしく」

「以後はないっ！」

「待って翼ッ！」

これが彼女の素なのか、エルナは少し軽薄な言動で名前を名乗った。

そんな彼女に、翼は蒼ノ一閃を放つ。そしてその一撃は、さっきまで真横にいたマリアに向かっていった。

マリアは逆三角形のバリアを貼って一閃を受け止めるが、強化されたシンフォギアが生み出す火力が高く、受け止めきれず弾かれてしまう。

エルナはその様子を見て溜息をついた。

「君達は私達の行いに迷いを持っている。だから、今みたいに混乱する。そんな状態じゃ勝ち目がないだろう。私は帰らせてもらうよ。……そうそう、私が殺したのは全員軍の関係者だ。それ以外の人間には少なくとも身体的外傷を負わせていない」

それだけ言って、エルナはこの場から消失した。

その後救急隊が駆け付けたが、死亡しているのは全て軍人と諜報員だった。彼女の言っていたことは、事実だった。

翼とマリアは、何が正しいのか分からなくなっていた。

○○○



イガリマとシウルシヤガナを身に纏い、目を瞑ったドレスの少女と相対する。彼女の年齢は見たところ雷の外見年齢とさほど変わらなないように見えた。

切歌が鎌を、調が大型の鋸を少女に向ける。

「あなた達の言うことが事実なら、観客たちは無関係のはず。だから……」

「観客を開放しなさい……でしょ？ 安心して、もうしてるから」

「減っているようには見えないデス！」

「全員一度に逃がしたら怪我をしたり、死んじやつたりする人が出るかもでしょう？ だからゆっくり、つまらない程度に開放しているわ」

事実、ステージからは見えづらいが、出口付近から順々に拘束から解放され、スムーズに逃げ出すことが出来ている。少なくとも今のところ、負傷者は出ていなかった。

人を殺しておきながら、命を大切にしているという矛盾。

そのことが調の脳裏に引っかかった。

「そこまで命を大切に出来るのに、どうして彼を殺したの」

「この人は発展途上国に本当は安いワクチンを異常に高く売りつけ、多くの人を病死させた。……亡くなった人の全員が病が原因だとは言い切れませんが、それがきっかけになったのは事実です。そしてそれで得たお金は全て自分のポケットに入れていた。……お金で命を弄んだ人間を殺して何が悪いんですか？」

少女はこてんと首を傾げた。

自身の行いが正しいことと確信しており、しかもその言い分に何も問題はなかった。二人には言い返すことが出来ない。

彼女はしとやかに告げる。

「ちなみに私は今は逃げるつもりはありません。観客全員を無事に逃がしてから、私はここを去ります。何時、強者たちが自分の身を守るために私のような存在を生み出すか分かりませんので」

「だったらッ……！」

「それまでにあなたを捕まえるデエスッ！」

切歌が鎌を振りかぶり、横薙ぎに少女に切りかかる。

それを浮遊していた銀色の短剣が受け止め、上に弾き上げた。

その隙にローラーダッシュで背後に回っていた調がツインテールバインダーを展開し、無数の小型の鋸を一斉に発射する。切歌には着弾しないように調整していた。

背後からの攻撃だったが、少女は顔を向けることなく黄金の長剣を頭上に掲げ、

「光あれ」

と、唱える。

すると剣がまばゆい光を放ち、彼女の体が影の中に消えた。空中に剣だけが浮遊している。

「なッ?!」

「私はこっちですよ」

「ぐうッ!」

振り返ると、そこには剣を持っていない少女の姿があった。

そして彼女は淑女然とした容姿とは裏腹にまるで獣のような速度で調に接近し、超至近距離での格闘戦を仕掛けてきた。

この間合いでは調は思うように戦うことが出来ない。

「調ッ!」

切歌が銀の短剣を払いのけ、調の救援に回ろうとする。

「もう一本を忘れてはいませんか? 光あれ」

「うおお?! 影が生えてきたデス!」

宙に浮かんでいた黄金の長剣が再度光を放つ。すると少女そつくりの影が剣の影から出現し、切歌の行く手を阻んだ。更に銀の短剣も挟み込むような形で戻ってくる。

何とか猛獣のような連撃を凌いでいた調だが、不意に攻撃が止んだ。切歌を相手にしていた二本の剣も、いつの間にか調と距離を取っていた少女のもとにあった。

連撃を何とか耐え忍んだ調がステージに膝をついた。切歌も、何とか立っているが肩で息をしている。

「全員の避難が完了したので、私は帰らせてもらいますね。何とか追

手が来る前に終わって助かりました。わたし、ミハル・スタインベツクといいます。負わせてしまった怪我は直しておきますね。では……」

「逃がさないデスッ！」

「光あれ」

切歌が突撃するが、ミハルの持つ長剣が放った光が視界を覆いつくす。

その光が止むころにはミハルの姿は何処にもなく、二人が負った傷や疲労が完全に治り切っていた。

軍のヘリがサーチライトでステージを照らすが、すでに遅かった。

後日、全世界に汚職を行った事実を流されたイギリスは、自国の大臣の行いを認め、違法に巻き上げた資金を返却し、ワクチンの無料提供を開始した。

かの発展途上国では、何者かの口添えがあつたのかしばらくの間税金がなくなつたという。

## 戦う理由

世界に対して宣戦布告したミア、エルナ、ミハルの三人はテレポー  
トジェムを使用して自分たちの隠れ家へと帰還していた。

此処は異空間に存在する彼女たちの活動拠点『オムニファス』。  
そこで三人はシンフォギアのような特殊な鎧をそれぞれ解除する。

ミアのものは炎を封じ込めたかのような手のひらサイズの透明な  
立方体に変化する。エルナのもものは青い宝石のようなパーツが目  
引く銀色のピアスに、そしてミハルのものは銀色に鈍く輝くベルが胸  
元に、金色に輝くブレスレットが右腕に装着された。

ミアは鎧が変化したキューブをホルダーに入れ、カラビナを通して  
ベルトに吊り下げる。

「よし、ひとまず第一段階は完了だな」

「ええ、まず一つ。私達の理想に一步近づいたかと」

「S. O. N. G. の皆さんとも対面しましたし、どちらの正義が正  
しいかを証明し合うだけですな」

ミハルの言葉に二人が頷く。

宣戦布告こそしたが、これは戦争ではない。別に敵対するすべてを  
破壊して回ろうという蛮族的な思考を彼女たちは持たない。

すべきことは競争。

自分たちの掲げる弱きを助け、強きを挫くという正義。S. O.

N. G. 他、世界が掲げる大多数のための正義。その両者のどちらが  
正しいのかを競うのだ。

相手がそれを認識しているかは分からない。大方は過激なテロリ  
ストと認識しているだろう。

しかし、彼女達の行動によって一つの紛争が終結し、複数の小国は  
恐怖から解放され、いくつかの貧困国は病から救われている。

無論、そのことにまだ禍根を残してはいるだろうが、その根源は  
断っている。どれだけかかるかは分からないが、解決は時間の問題と  
いえた。

「もちろん、俺達だけの功績という訳ではないけどな」

「おおっと、ミアが褒めてくれるなんて珍しいこともあるもんだね」  
暗闇から袖がぶかぶかに余った白衣を羽織った女性が現れる。

長い前髪によって右目が覆われているが、銀の左目が大きな丸眼鏡越しに三人を見つめていた。その瞳の輝きは、世界の全てを見通すかのような叡智の光を帯びているかのようだ。

エルナが腰に手を当てて彼女のほうを向く。

「忘れるわけにはいかないさクラリス。君のお陰で停戦合意が結ばれ、国境から軍が撤退し、ワクチンが行き渡ったんだ。まったく、素晴らしい手腕と言わざるを得ないよ」

「いや〜そう言ってもらえるのはうれしいけど……ってそんなことより、ファウストギアの調子はどう？ 実戦使用するのは今回が初めてだし、不具合とか無かった？」

袖の中にある手でメガのを持ち上げる。

彼女達の纏うシンフォギアのような鎧、ファウストギアは、これまで何度も試験を重ねてきた。しかし、実戦は試験による用意された環境とは違う。特に彼女たちは世界にケンカを売った以上、油断が何を生むかは分からない。

ミアが腰に吊り下げているキューブを指ではじきながら答える。

「俺のは全く問題ないね。というか、そこまでガチンコにぶつかってないからなあ……。だからアレとうまく対応するかは分からないが、俺の炎との親和性は高かったから多分大丈夫のはずだ」

「ミアのはそこが課題だね。エルナは？」

「私のも同様だ。固有能力も問題ないし、そのせいでかかる負荷もそれまでと何ら変わりはない。もっとも、今後の戦いでは能力を連続使用することもあり得るが……それは私自身の問題だ。気にしないでもいいよ」

「了解。こつちでも負荷を軽減できるように試してみるよ。ミハルはどうだった？」

「問題なかったです。適性があったとはいえ実戦時の二つ同時稼働の負担は心配でしたが、杞憂で済みました。わたしは二人と違って本格的に戦いましたが、問題なく相手できたかと」

「ミハルも問題なし……と」

クラリスが手元のタブレットに記録をまとめていく。

少なくとも今回は全く問題ないようだ。

できることといえばエルナのギアの固有能力の負荷軽減くらいだが、今現在でも可能な限り軽減しているため、本当に誤差程度の修正だろう。

「うん、大した損傷もないし、後は自由時間にしよう」

そう言っただけで彼女はオムニファース深部にある自身の研究室に戻っていった。

その背中を見届けた後、ミアは二人に聞いた。

「なあ、成功体はいたか？」

「私は見えていない。ミハルは？」

「わたしも……。ミアはずっと探してるけど、成功体が見つかるとうなるの？」

ミハルがずっと目を閉じたまま首を傾げた。

その仕草は彼女の服装と相まって世間を知らない純真無垢なお嬢様のように見えた。

——もつとも、彼女は物理的に世間を知ることが出来なかったし、世界の黒い部分の被害者なのだが。

その問いにミアは恥ずかし気に紅蓮の髪を掻きながら答える。

「俺もよく分かってないんだけど……そいつと合うとなんかわかるような……そんな気がするんだよ」

「何かって何だい？」

「それもまだよくわかってない。……ここんところには引っ掛かってるだけだな」

そう言っただけで指先で胸を叩いた。

自分でも問題の「何か」は分からないが、彼女の言う成功体と合えば「何か」とその答えが分かるというらしい。

ミハルがパンと手を叩いた。

「早く会えるといいですね！ その人に！」

「……うん」

ミアは頷く。

次の作戦行動まで少し時間がある。

彼女達は自室に戻り、思い思いの時間を過ごした。

○○○

潜水艦であるS・O・N・G・本部基地の艦橋部。

指令室であるこの場所の空気は非常に悪い。

その理由は新たに登場した組織、"ファイ"にあった

彼女達を完全なる敵として認識できないでいるのだ。

「CIAを、ロシア軍上層部を壊滅させ、イギリス外交部の闇を暴いた謎の組織、ファイ……。人を殺してこそいるが、行っていることは弱者の解放……」

弦十郎は顎に手を当て、呟いた。

彼女達のとつた行動は間違いなくテロ行為だ。しかし、彼女達は宣戦布告したうえで行動に対して結果を出している。

それに襲撃を受けたすべての組織の無関係な——軍部に所属していない——人間は全員無事だという。

その事実が彼等から戦うという意志をそいでいく。

ファイという組織が間違いであると断言できないのだ。

変化した世界情勢をまとめている藤堯が悪態をつく。

「過程はともかく、やっていることは間違いではない……なんて、凄く厄介ですよ」

「米国をはじめとしてロシア、英国は彼女たちの迅速な排除を要請してきています。相手が聖遺物がらみだからって、私達にすべてを押し付けようとしていますね」

「見方によっては俺たちの方が悪……か」

「失礼しますー!」

丁度そのタイミングで、装者たち全員がブリッジにやってきた。

今回は事情が事情のため、大型モニターを二分割し、ミニニアースから雷、エルフナイン、キャロル、そして彼女達と共同で研究しているルイスがブリーフィングに参加した。もう半分のモニターには、オランダの実家の孤児院からフランカが映し出されている。

不慣れなのか、カメラに大きく寄ったフランカが言った。

『テレパシーで情報を掴みました。イギリスとは距離が近いですからね、私の能力で少し弄ればすぐにわかりますよ』

「それで、どうだったんデスか？」

『結論から言うと、外務省の汚職は事実ですね。ちよつとひっくり返るぐらいのお金を着服していたようです』

「という事は……」

「彼女たちの結果には間違いがない。という事ね」

『そうなりますね』

S. O. N. G. メンバー、特に響が表情を暗くする。

「雷君、彼女達が纏っていたシンフォオギアだが……あれはどういうものなんだ？」

『それは……』

『私の方から説明しますね！』

弦十郎の問いに雷が応えようとしたが、そこにルイスが割って入った。

キャロルがそのことを咎めようとしたが、ここは彼女が適任だとエルフナインに諫められる。

「君は？」

『私は雷先輩の後輩、ルイスです！』

「後輩……？」

未来が首を傾げた。彼女はどう考えても雷より確実に年上に見えるからだ。事実、そうなのだが。

ルイスは未来の言葉を無視をして話を続ける。

『あれはファウストギア。ファウストローブの安定性とシンフォオギアの爆発力を兼ね備えた新開発のギアです。ただ、あれはまだプロトタイプが一基ミニユニアースにあるだけで他にはないはずなんです……』

「それって内通者が居るって事じゃねえのか？」

『いや、それはしないで雪音クリス。ファウストギアの存在は、まだここにいるオレ達しか知らない。それにオレがエルフナインに使った視



覚共有も確認できないからな』

「じゃあそのルイスが……」

『私はずっと雷先輩のところに行きましたので!』

「ッ」

『クリス。宣戦布告っていう君の地雷に直撃のワードが出て苛立つのは分かるけど、いったん冷静になった方がいい。たぶんだけど、それが彼女達の目的じゃないと思うから』

宣戦布告をしておきながら、戦争が目的ではない。

その矛盾した雷の発言に、響達は首を傾げた。

自分らしく

ミュニアース所長室で、雷たちはS・O・N・G・本部の会議に参加していた。

ルイスは本来S・O・N・G・所属ではないのだが、武装組織ファイの用いていた装備が彼女が考案した技術、ファウストギアであったため、緊急で参加している。

画面の向こう側ではなマークを浮かべる響達に、自らの所見を告げる。

「彼女たちの目的が世界と戦争する訳じゃないと考える根拠は、響達に殺意を向けてなかったところだよ」

『殺意だあ?』

「うん。……普通に考えて、聖遺物を用いている彼女たちの敵は、同じく聖遺物を使う私達ぐらい。だから、初めて接敵した時にシンフォギア装者を殺しにかからないのはあまりにも不自然なんだよ。たぶん他に目的がある」

『その目的というのは?』

「……競争だ」

「キャロル」

「遮って悪かったな。だが、オレも同じ結論に達した」

自分専用の机にキャロルが頬杖をつき、呟いた。

馬鹿げてると思うかもしれないが———そう言外に含ませて。

「競争だよ。正義と正義のな」

『なるほど。彼女たちの勧善懲悪の正義とのぶつかり合い……という訳ね』

「そういう事だ」

『視点の違いか。私達からすれば国の重鎮を殺害した犯罪者だが、救われた国々からすれば英雄……と。弱者たちのための正義、そのこと自体には嘘偽りはないようだ』

翼が納得し、頷いている。

信念に沿って行動している彼女たちに、敵対者でありながらある種

の尊敬の念を抱いていた。

そして分かった。過程こそ異なるものの、目指す場所は一緒であることを。もしかすれば、話し合いで解決することが出来るかもしれないと希望を抱いた。

そのことに響は笑顔を浮かべる。

『つて事は、あの人達と分かり合うことが出来るかもしれないって事?!』

『でもあの時……』

未来の言葉に響は炎の中でのミアとのやり取りを思い返していた。話すだけ無駄だった……あれはどんな意味を持つのだろうか。

雷はそのことを知らなかった。どのような状況だったかは情報が届いていたが、流石に個々人のやり取りまでは記録されていない。

だからこそ、雷は首を傾げた。

『どういう事? 未来』

『実は——』

未来は雷にその時の会話をできる限り正確に伝えた。

「響の浅はかさ……ね。なるほど」

『何かわかった?』

「いや、まだ何とも言えない。……だけど響、念のためにそういったやり取りは控えておこう」

『どういう事?』

「……何と言うか、私達と彼女達で “話し合い” に対してすさまじい齟齬がある気がする。それが何かって言われると困るけど、響がシヨックを受ける可能性が高い」

『……』

響は黙り、自分の握った拳を眺めていた。

雷は内心、あれは納得してい顔だな、と思うと同時に、止めれたらそれはそれで響じゃないんだよなあ、とも思っていた。そんな御しやすい性格だったら、ここまで自分を貫けなかっただろう。

また響は何かで傷つくかもしれない。だとしても、彼女は止まらな  
いだろう。

響が目指す場所へ導く——それが自分の在り方だ。

「どうするか。最終判断は響に任せるよ。未来、後はお願い」

『任せて、私が何とかしておくから』

「助かる」

現状における相手の状況は把握した。

次は、武装組織ファイの戦力についてだ。

彼女達の武装は新開発のファウストギアであるため、現在ミュニアースでその研究を行っているルイスが画面の正面に座る。

彼女は何か気になっていることがあるようだ。

相変わらず前髪で顔がよく見えない。

「えっと、先ほど自己紹介しましたが、もう一度。ファウストギアの開発を担当してるルイスです。一つ聞きたいことがあるんですが、よろしいでしょうか？」

『聞きたいことだど?』

「あなたが弦十郎さんですね? はい。本来のファウストギアには、装者の皆さんが各々経験した特殊な現象を発動させる機能は存在しません。見た目自体はシンフォギアやファウストローブと大した差異はないんです。という事は、皆さんのギアとは異なりつつ、ファイのギアに共通する何かがあるはずなんです。そこを教えてくださいませんか」

資料を受け取った時、ルイスは一人疑問を抱いていた。

自分の技術が流出していることに驚きこそしたが、そこはそれ。それ以上に気になっていることがあった。

それこそが、ファイのファウストギアに搭載された特殊能力だ。

ファウストギアは、あくまでもシンフォギアとファウストローブの融合技術でしかない。その為、彼女達が発現させた特殊能力は本来あり得ないものだ。

全世界に映像で宣戦布告した際にギアは映っていた。しかし炎や返り血、光の反射などで見えない部分もあったうえに何かしら映像に編集の手が加えられていた可能性もある。

だからこそ、目で見た情報がほしかった。

装者たちは情報を出し合い、一つの共通項を見つけ出した。

翼が代表してルイスに伝える。

『これがそうなのかは分からないが、一つだけ共通点があった。ラインだ』

「ライン……ですか」

『ああ。太さや色、本数、配置されている場所にこそ違いはあるが、コンバーターユニットとみられる場所を中心に四肢に伸びている事だけは共通していた』

「なるほど……わかりました。ありがとうございます。では、オペレーターの皆様はそのラインを中心に情報収集お願いします」

この質問を最後に、会議が終了することとなった。

○○○

雷たちは自分たちが使用しているラボに戻りながら、肩を落としているルイスを慰めていた。

「いっちょ前に聞いておきながらぜんぜんわからないですよねえ〜！」

「ラインがあるって分かってても、それが何なのかが分からないもんねえ」

「今回ばかりは先輩もお手上げですか……？」

「お手上げだよ。全く分からない。……ところでさつきからエルフナインはどうしたの？」

「え？ 僕ですか？」

「いや、さつきからなんか考えてるみたいだし、何かわかった？」

さつきからずつと何かを考えているエルフナインを雷が見上げた。

いや、考えているというよりも、思い出そうとしている、といった方が正しいだろう。

「そのですね、一つだけ心当たりがあるんです」

「まじっ？」

「まじです。その……オリハルコンっていうんですけど」

「先輩、聞いたことありますか？」

「ううん。オリハルコンは知ってるけど、それがあるのは知らない」

エルフナインは苦笑いを浮かべて頬を掻いた。

今の今まで彼女自身も忘れていたようだ。

「雷さんが眠っていた時の出来事ですから、知らないのも無理ないですよ」

「でもデータベースにはなかったよね？」

「開発したはしたんですが、とある理由で実物とデータを丸ごと破棄することになったんです。データはバラバラになって電子の海の中ですし、実物は南極の冷たい海の底です。知らないのも無理ありません。……ですので僕の記憶の中にしかなかったので、今やつと思いい出しました」

エルフナインはラボの鍵を開け、各自の研究を再開する前に、彼女からオリハルコンについて聞きだすことにした。

「で、エルフナイン。オリハルコンってどうなの？」

「オリハルコンとは現在、地球上でもっとも固く、頑丈な金属です。そして相転移制御能力を持ち、高いエネルギー伝達率を誇ります」

「夢の金属すぎる……」

「はは……本当にそうだったんです。ですがそのせいで世界各国の企業が難色を示しまして……研究は永久凍結されることになりました」

「その研究をした人、うかばれないですね……」

「はい……本当に……」

人類の夢をかなえようとした結果、その人類に夢を潰されるなんて何とも言えない話だ。

そのことを悔いているのか、エルフナインは少し暗い表情を浮かべた。

しかし、今の問題はそこではない。

なぜオリハルコンが関係している可能性があるのかだ。

「で、何でオリハルコンが出てくるの？」

「は、話が脱線しましたね！ すみません！ えっと、流石にそこまで研究してなかったので仮定の話になりますが、オリハルコンでフォニックゲインを効率よく全身にいきわたらせているのではないかと」

「確かに、フォニックゲインをコンバーターから円形に放射するより

も、その方が出力も高まるし、安定する」

「そのおかげでシンフォギアやファウストローブでは不可能だった、聖遺物の本来の力を引き出すことが出来るようになった……という訳ですね？」

「うん。その可能性は高いと思う」

「まあでも、後は追加報告待ちですね」

「一応、本部にはオリハルコンのことを送っておくよ」

「ありがとうございます！ では、私達は自分たちのすべきことをしまししょう！」

「おー！」

三人は拳を突き上げた。

最も、あと二、三時間もすれば分からないことが多すぎて値を上げることになるのだが。

それはまた別のお話。

## エレクライト解析完了

ファイという新たな脅威がやって来ても、今の雷の仕事は研究だった。

彼女は今、目の前にあるパラレルテクノロジーCASE3エレクライト、その試作機を目の前にしてその技術の解析を続けている。試作機といっても性能自体は完成機とさして変わらず、戦闘用の機構が存在しない程度の差だった。

平行世界から、テスラが開発していたエレクライト試作型の三基のうち一基を譲り受けた雷は、メインテクノロジーである平行世界移動能力をどうにかして再現しようとしていた。

ピアノの内部構造のようなバインダーに目を付けたはいいものの、それ以上の発見が一切なかった。

自分用の椅子に勢い良く座りこむ。その衝撃で椅子が後ろに動き、背後にいたエルフナインの椅子の背もたれにぶつかかった。

「うわあ?! どうしたんですか?」

「いやー。あのね、ここが根幹だつてのは分かるんだけど……そこから先がさ……。って、エルフナインは何してるの? ……ダウルダヴラ?」

ぐりんと雷は体の向きを変え、エルフナインの肩に顎を乗せる。

エルフナインのモニターにはキャロルのファウストローブ、ダウルダヴラが——厳密にはその内部機構が——映っていた。

「はい! 今後の研究のために内部のエーテルサーキットは他にもあった方がいいかなと思ひまして、その複製をですな」

「ああ、あの。……そういえばダウルダヴラにもエレクライトみたいなバインダーがあるんだよね」

「確かにそうですね。普段は格納していますが、開放状態ならあります。それがどうかしましたか?」

「いや、何というか……何であれを開放したら火力が上がるのかなって思ってます」

——なんだ、そういう事ですか。



雷を肩に乗せたまま、エルフナインは彼女のほうを向いた。鼻と鼻がぶつかりそうなほど二人の距離は近い。

「あれで焼却で発生したエネルギーを共振させてるんですよ。それに火力だけでなく、精度も格段に上がりますよ」

「ふーん……共振ねえ……」

雷はそう呟いて床を蹴り、元の位置に戻っていく。そしてそのままくるりと回転し、背もたれ越しにエレクライトのバインダーを眺めた。

彼女の中に少しばかりの閃きが浮かんだ。

「ねえエルフナイン」

「なんですか？ 雷さん」

エルフナインが椅子を回転させ、雷の方を向いた。彼女の背中を見つめる。

「地球にも何かしらの波形ってあると思う？」

「どうでしょう……。ですが、レイラインのエネルギーには波形があるかもしれませんが……つてもしかして！」

「うん。そのもしかして。これが多分、エレクライトの平行世界移動の鍵だと思う」

地球には、それぞれ独自のレイラインのエネルギー波形がある。

その波形をバインダーで共振・調律することで移動したい地球のエネルギー波形に変更する。すると、その場で一時的に向こう側の世界が展開される。ゲートのように開いた世界の壁を通して平行世界を移動する。

これが、エレクライトの平行世界移動能力の正体だ。

恐らくだが、笛の完全聖遺物であるギャラルホルンも同様のシステムの可能性がある。もつとも、あれには弦がないが、聖遺物であるためそこらへんはそれ相応の不思議パワーで何とかしているのだろうが、装者だけが移動できるのは、恐らく聖遺物のアウフヴァッヘン波形はこの世界でも同じものだからだろうか。そうでないものは、壁を超える際に異物として弾き飛ばされてしまうのだろう。

そして推察するに、実際にギャラルホルンの存在する位相は世界の

壁と壁の狭間にある。半分だけ本世界にあるから見ることはできるが、何物の干渉を受け付けられない。

だが、この技術を応用すればギャラルホルンに干渉できるかもしれない。

「あとは何かしらで実験が出来ればいいんだけど……どうしたの？」  
「……」

エルフナインの纏う温和な雰囲気、キャロルのものに切り替わる。

何か大変な事が起こったに違いない。

「雷、国連からの通達だ」

キャロルが真剣な表情で雷の方を向く。

それに対して雷も正面から見つめ返す。

「オレ、雷、フランカは現時刻をもってS・O・N・Gに復帰、世界に宣戦布告したファイと戦う事になる」

「そのためのギアとファウストローブは？」

「猶予は一か月。それまでに新型を用意する。雷は当然ケラウノス。オレはラピス・フィロソフィカスだ。フランカにも何か与えたやつの方がいいだろう。また、S・O・N・Gに対して超法規的措置による越権行為が認可された。適合の問題もさつき解決したからな」

「了解。タイミングが良くて助かった。だったら凍結されたオリハルコンの開発技術を解凍し、ルイスのファウストギアに組み込む。パラルテクノロジーも可能な限り全投入する」

「いいだろう。オレはこれから全職員にそのことを通達する。ここの全力で挑めば一か月で何とかなるだろうしな」

これにより、新型ギア開発計画がスタートした。

雷のものには『ケラウノス+』。キャロルのものには『ラピス・フィロソフィカス』。フランカのものには『ラピス・フィロソフィカス type-N』と名付けられた。

○○○

オランダ、ユトレヒト郊外。

フランカは、そこにある自宅で家族とともに孤児院を運営してい

た。彼女の兄たちはすでに家庭をもつて自立しており、今は家族三人と孤児が三人の六人家族だ。

褐色肌でお姉ちゃん気質のヴァネッサ。悪戯っぽいが家族思いなミラアルク。賢くしつかりものなエルザ。そんな三人に、フランカはどこか運命的な、奇跡的なものを感じていた。

「みんなー、ご飯だよー」

「分かりました。はい、今日の勉強はここまで。ご飯食べよう」

「はい」

「もう少しで……出来たであります！」

一番年上のヴァネッサが少し勉強が苦手なミラアルクに宿題を教え、その横で最年少のエルザが切のいいところまで終わらせた。

学校の宿題をしていた三人は、フランカの声でそれぞれテーブルに並ぶ。

今日は両親の仕事が遅く、家にはフランカたち四人だけだ。

一番の大食いであるミラアルクがテーブルに並べられた夕食に目を輝かせている。そんなミラアルクをお姉さん気質のヴァネッサが必死に引き止めていた。

「フランカさん早くー！」

「うん。ではいただきます」

「いただきますーすー！」

そういうな否やミラアルクは自分の好きな肉料理を口いっぱい頬張る。そしてそれ以降ずっとそればかりを食べ、野菜やパンなどには一切手を付けていない。

エルザが パンを小さくちぎりながら彼女に口を出す。

「ミラアルク、行儀が悪いでありますよ」

「そうだよ？ ゆっくりとよく噛んでね」

「はい……」

ミラアルクは少ししよんぼりしながらフランカの言うことをしっかりと聞いた。ちよつとばかり感情のところがあがるが、家族の言うことはちゃんと聞いていた。

「そんなに落ち込まないの。別に怒ってるわけじゃないんだから。」

……はいこれ、私の分だけど、少し多いからミラアルクにあげる」

「いいのかヴァネッサ?!」

「うん」

ヴァネッサの分の肉を少し受け取り、ミラアルクのテンションが元に戻る。

「よかったのヴァネッサ?」

「うん。だってミラアルクは落ち込んでるよりも、笑ってくれてる方が楽しいもの」

「うーん……時々私よりもヴァネッサのほうが年上なんじゃないかと思うときがあるよ」

「あら、お姉ちゃんって呼んでくれてもいいのよ?」

「あはは……」

ヴァネッサは悪戯っぽい笑みを浮かべて胸を張った。こういうところを見ると、彼女もまだ子供なんだな。と少しばかり安心する。

変に大人っぽくなって損をするよりも、彼女達が年相応に楽しんでいる方がフランカにとってはうれしかった。自分が経験できなかったから……というのも大きい。

すると、横に座っていたエルザがフランカの袖を引っ張った。

「どうかした?」

「携帯震えていますよ?」

「ああ、ありがとう」

クッションの上ののせてて気づかなかったが、確かにフランカのスマホが着信を告げていた。フランカは一言断って席を立ち、スマホを拾い上げて廊下に出る。

画面に雷と表示されていたからだ。

「どうしました?」

『ファイのことだね。私達のS・O・N・G・復帰が決まった』

「そうですか……」

『装備のこととかいろいろあるから、私達のところに来て欲しいの。もちろん、今すぐじゃなくて、親とか学校に話を付けてきてからでいいから』

「分かりました。では、明後日までにはそちらに到着しておきます」  
『ありがとう。……ごめんね、無理言っちゃって』

「いえいえ。では……」

「そう言って通話を終了する。」

その後フランカは両親と学校に事情を説明し、テレポートでミュニクスへと跳んだ。

## 煉獄への入り口

高層ビルが立ち並ぶ中国の街並みを、翼を先頭に響と未来が進んでいた。

最新デザインのビルは彼女たちのその威容をまざまざと見せつけるが、それは見かけだけであり、目に見えるだけでも全体の七割のビルはもぬけの殻になっている。

十数年前の国营企業の倒産をきっかけに始まった起きたバブル崩壊からいまだに立ち直っておらず、その上この国を牛耳る政党はその圧力を強めたことでその事実は国民に流布されていない。都市部から離れた地方から成功を夢見て上京してきた若者を食いつぶす魔窟となっていた。

いわば国全体が巨大なブラック企業の体を為しており、広告には常に成功している——と見せかけた——事だけが知らされて新入社員は他を選ぶことが出来ず、その上入社すれば馬車馬のように働かされ、使い潰されて捨てられるのだ。

上を見上げれば輝かしい人類の発展を、下を見下ろせばこの世の地獄を。

煉獄のような場所と形容すればいいだろうか。もともと、ここは清めることが出来るような場所ではないのだが。

空気も淀み、どこか薄暗い。ほんのりとだが、どこかから腐臭も漂ってくる。

ビルとビルの間で何かがどきりと倒れる音がした。

「きゃッ……?!」

「未来」

思わず未来は響に抱き着いた。そんな彼女の肩を響は優しく包み込む。

その暗闇の奥底を響はじっと見つめる。

ほとんど見ることはできないが、ボロボロの服を着た男性が段ボールの上で横たわっていた。倒れたのはおそらく彼だろう。

そのさらに奥で、何か光るものが二つあった。

恐らくは……野良犬の類。それも人の味を覚えた。

「待て、立花」

「でも……」

「不用意に優しさを向けるな。向けた瞬間、お前はここにいてはならない。そしてそれは不可能だ」

「ッ……」

反射的に体を向けていたらしい。

暗がりに向かって動き出そうとしていた響を、翼が振り向くことなく制止した。

翼は歯噛みし、その顔色には苛立ちが浮かんでいる。

——このありさま、ファイが誕生するのも無理がないではないか！

中国の現状に、内心毒を吐く。

翼たちがここに来た理由は、ファイから送りつけられた一つの声明から始まる。

○○○

「指令！ファイからの声明が全世界に届いています！」

友里が驚き交じりに弦十郎の方を向く。

突発的な攻撃ではなく、次の攻撃場所を指定するという少数の陣営の定石であるゲリラ的な戦い方を真つ向から放棄していた。

弱者が虐げられることのない世界を創る。

私達はその正義のために戦っているのだと声高に叫んでいるようだ。しかし、この叫びはただの声ではなく力のあるもの。口だけの正義を振りかざす者とは違う。

「読んでみる」

「読み上げます。次のターゲットは中国。次のターゲットは中国。何故かは理解しているはず。我らファイは弱きを助け、強きを挫く存在……とのことです」

「中国といえば国家運営のために人を喰いものになっているって話があるくらいですから、ファイが狙うのも無理ないですね」

「うむ……各国の動きはどうだ？」

「中国は迎撃要請を。他数国は静観を決めています。水面下での戦い

が浮き彫りになっていきますね。……ただ中国の国民は襲撃を心待ちにしているように見えます」

これまでファイが民間人に攻撃をしたという事実は存在しない。これまではそうだったが、次からはどう出るか。

しかし、今までの言動から見ると、少なくとも彼女たちの目に見える場所で直接的な原因で民間人が被害を被ることはあり得ないだろう。

それが出来るからこそ、彼女達は世界に宣戦布告したのだから。

しかしS・O・N・Gは国連の組織。

ファイと戦う事を国連が選んだ以上、S・O・N・Gもまた戦わざるを得ない。

例えばそれが、自国の暗部を隠すための戦いであってもだ。

「翼、響君、未来くんを呼んでくれ」

「分かりました」

弦十郎は一瞬だけ思案した。

ファイには分かっているだけで三人——少なくとも戦う事のできる——メンバーがいる。

三人まとめてくる可能性と一人、もしくは二人だけでやってくる可能性。その二つを鑑みて、彼は後者と見当をつけた。弦十郎の長年の勘がそう告げた。

そして次に、何人で向かわせるか。

相手が三人全員で来るならともかく、そうでないならば全員で相対させた場合、どこか別のところに対して攻撃を受けた時に即座に行動することは不可能に近い。

愚策かもしれないが、今回ばかりは戦力の逐次投入が最善手だと考えた。

これならばもし総力を賭けてくるならばミサイルによる輸送で対応できる。現場の装者たちも問題なく対応できるはずだ。

もしそうでなかったとしても、出勤していない数人は万全の体勢で次に備えることが出来る。

ならばメンバーをどうするか。



これは直ぐに決まった。

お互いを知った上での初遭遇、まずは対話を試みるべきだとしても、しもの時のために神殺しの力を持つ響、どの様な聖遺物でも無力化することのできる未来、彼女達とかかわりが深く、引き締めることのできる翼を現場に向かわせることを決定する。

クリスはまだ冷静さを取り戻せていない。弦十郎が見るに、表向きは大人しいが対面すれば爆発するだろう。

マリアは翼に比べれば甘いところが見られるため、響を引き留める役割には向かない。

切歌と調は最も高いユニゾン係数を自ら分断するわけにはいかず、力量的には問題ないが、能力面から見ても第一陣での対応力に一枚劣るため第一陣での投入は見送られた。

「失礼します！」

翼を先頭に、響、未来が指令室にやってきた。

相手が相手であるために、表情が硬い。

「そう肩に力を入れるな……と、言いたいところだが、そうもいかない。恐らくすでに知っているだろうが、ファイの次のターゲットは中国。君たちには首都北京に向かってもらう」

「北京……ですか。中国は問題の多い国です。彼女たちの理念にも反していない。少なくとも、宣言した志は本物の様ですね」

「ああ、今回の状況は初遭遇にも等しい。だからこそ説得・交渉を第一に考えることのできる君たちを組織した。翼、響君たちの引き締めを頼むぞ」

「分かりました。立花は思うようにやってくれ。何かあれば、私が引き締める」

「はい！」

「小日向は相手がどのような聖遺物を使っているかが分からない以上、何か不審な動きがあればすぐに行動しろ」

「分かりました！ 懐の守りはお願いします」

「ああ、任せておけ」

本部潜水艦は北京へと舵を切った。

〇〇〇

ミハルはクッション。曰く、人を駄目にするクッションから滑り落ちるように立ち上がった。

育ちが良かったのか、ゆつくりと脚を折りたたみ、はしたなさが全く見えない。彼女の柔和な顔つきも相まって、柔らかな清楚さが感じられた。

「では、そろそろ向かうとしますね」

「行ってらっしゃい」

「ええ、行ってきます」

「ちえ、俺が行きたかったんだけどなあ」

エルナはいつものようにクールに応答してくれるが、ミアはそうではなかった。戦いの時はクレバーなどところを見せるが、そうでないときは何方かといえば子供だ。

今回も少しばかりの駄々をこねた。

「ミアさん。あなたでは守るべき人も被害を受けてしまうでしょう？ わたしなら傷ついた人を癒しながら戦えます。向き不向きですよ」

「それはそうだけどさあ……」

「まあ、全部焼き尽くしたい気持ちには痛いほどわかりますが」

それまでの温かさを持った声色から一変、凍てつくような冷淡なものになる。冷たい怒りが、彼女の内心で煮えたぎっていた。

「だったら難民キャンプにでも顔を出して来ればいいじゃないか。一緒に遊んでやればきつと子供たちも喜ぶさ」

「……いや、俺もすぐにやることがある。残念だけどな」

別に忘れていたわけでも、やる気がないわけでもない。

ただ、次の攻撃目標よりも優先したくなるほど、かの国は彼女たちの敵だった。

「私もやるべきところがあるからね。クラリスにお使いを頼まれたんだ。提案しておいて残念だが、私も行けない」

エルナは長い足を振り上げ、反動で椅子から立ち上がった。

普通に立ち上がればいいはずだが、彼女の所作があまりにも様に

なっていて、違和感が全くない。

寝転がっていたミアも、腕を使って跳ね起きた。その衝撃でミハルのベルがリンと鳴った。

ミハルが目をつむったまま、たおやかに二人のほうに顔を向ける。

「では、各々頑張りましょう」

おー！ とこぶしを突き上げるミハルを、エルナは微笑ましく見つ

め、ミアは獰猛な笑みを浮かべた。

## ミハルの目

ミハルは中国の街並みをゆっくりとした足取りで進んでいた。

一歩一歩進むたびに胸元の鈍い銀色のベルが揺れ、リンリンと軽やかな美しい音が鳴っている。レモン色のロングスカートとケープは風に揺れており、手に持つ杖も相まってどこか——いい意味で——前時代的な、一線をがした雰囲気を漂わせている。

天国と地獄の狭間、煉獄のようなこの地で、彼女はあまりにも場違いな存在だった。

そこでふと、彼女は足を止めた。ご機嫌に音を鳴らしていたベルも止まる。

ミハルの止まった場所は広い大通り。

ここには空っぽのビジネスビルぐらいしかなく、コンビニすらない。かといって露店販売の店があるのかといえば、そういう訳でもない。

ただただ、本当に何も無い場所で急に歩みを止めた。

かすかな腐臭を漂わせるビル風がミハルの内側にカールした金髪を撫でた。

ゆったりとした所作で彼女は振り向いた。

何も無いはずの右側のビルの陰を目を明けずに見つめる。

「そんなに警戒しなくても、わたしは逃げも隠れもしませんよ。ああ、撤退する時は別ですが」

「気付いていたのか」

「ええ、あんなに大きな足音を立てていれば、すぐに」

「緒川さん仕込みの忍び足なのだがな……」

「そこにいるお二人も、出てきてもらって構いませんよ」

「……」

声と共に右手側のビルの陰から翼が、左手側のビルの陰から響と未来が現れる。

即座に行動に移せるように、全員がギアとローブを纏っていた。

普通の忍び足で接近していた響や未来の方を先に見つけ出すので

はなく、緒川……即ち忍者の歩法を習得している翼を先に認識しているあたり、ミハルの言動がハツタリでも何でもないことがわかる。

翼自身、緒川レベルまで習得しているわけではないと自覚しているが、とはいえ下手な忍者よりは実力があるはずだと自負し、緒川もその評価に太鼓判を押していた。

つまり、ミハルの認識能力はそれを識別できるほど高いということだった。

「出てきてほしいと言ったとはいえ、流石にこの状況で丸腰……という訳にはいきませぬね」

ミハルは杖をしゃがんで傍らに置き、微笑みを湛えながら自身のファウストギアの起動聖詠を唱える。

「Clau Fragarach Solas Tron」

胸元にある銀色のベルと腕に巻いた金色のブレスレットが光り輝き、粒子となって彼女の体を包み込む。

来ていた服は分解され、代わりに銀色をメインカラーとし、紫を差し色にしたレオタードタイプのボディーツに身を包んだ。

そこに水色の細身の肩部アーマーと脚部アーマーが装着され、体を一回転させれば腰回りから紫の腰部アーマーが出現した。両側面と背面の腰部アーマーの延長上に銀のドレスタイプのスカートが伸びる。

そして各アーマーに金色の追加装甲が合体。金のアーマー同士を同色のライン状のフォニックゲイン共振経路——オリハルコンストリーム——が繋ぎ、それとは別に宙に細いワイヤーが揺蕩っている。

刀身が金色の長剣を掴み、浮遊する銀色の短剣を左手の延長上に配置した。

ギアを纏ったミハルを翼は警戒する。

話し合えることが目的にあるとはいえ、どんな状況にも対応できるように、警戒するに越したことはない。

「では、戦いますか？ わたしとしては先にやることを済ませてからのほうが嬉しいのですが……そういう訳にもいきませんよね」

「待ってー！」

金の長剣を構えたミハルに対し、響は手を横に大きく広げ、戦う意志はないことを示しつつ前に一步踏み出した。

「その声は、立花響さん……でしたっけ？」

「うん！ 私達はミハルちゃん達と話をしに来たんだ！」

「お話……ですか？」

ミハルは目を閉じたままこてんと首を傾げ、響がうん、と頷く。

「私達の大切な親友が教えてくれたんだ。私達とファイのみんななどでは何か齟齬があるって。だから話し合おうよ。そうすればその齟齬を何とかすることが出来て、お互いが目指す正しいことが出来ると思うんだ！」

「……」

響が言った後、静寂が場を支配する。

これまでの戦いで響の「話し合い」は初手の段階では一度も成功したことがない。だからこそ、成功を信じつつも未来は扇を展開してミハルに向け、翼は未来の懐を守るように刃を構える。

するとミハルは構えていた長剣を道路に突き刺し、まばゆいばかりの笑顔で響に向けた。

「確かにそうですね響さん！ 私達は道は違えど正しい世界を創りたい、守りたいと考える同志。分かり合うことが出来るのかもしれない！」

「ホント?!」

分かり合うことが出来る。少なくとも、その可能性がある。その事実には響は満面の笑顔を浮かべる。

ならば、次にするべきは手を取り合う事。握手だ。

響は一步、ミハルの方に進む。

だが、響は……いや、この場にいる全員が知ることになる。

自分たちが無意識にしていた過ちを。

「はい！ では……両目をくりぬいてもらえませんか？」

「え……？」

彼女の発言に響は思わず硬直する。それは構えを解いていた未来と翼も同様だった。

——両目を……くりぬく？

いったいどういう事なのか分からない。そんな思考が頭の中をループし始める。

それほどまでにミハルの発言は突拍子もないものだった。

硬直する三人をよそに、ミハルは説明不足でしたねと付け足した。「つて、いきなりそんなことを言われてもびっくりですよ。ええとですね。話し合いつて本来、対等なもの同士で発生する物事じゃないですか。なのでわたし達も対等にすべきだと思っんですよ。一対三という人数差はまあ、わたしの方がギアの性能差的に有利ですので不問としましょう。……そこで検討すべきなのは身体的な都合です。実はですね、わたし、目が見えないんですよ。ですので対等になるために、皆さんには同じように目を見えなくなってもらおうかなと」

「そんな暴論まかり通つてなるものか！ ふざけ——」

「ふざけているのはそっちでしょう？ 風鳴」

ミハルの言動に翼が激高するが、ミハルの底冷えするような声がそれを抑え込む。

落ち着いているように聞こえるが、その奥底には煮えたぎるばかりの怒気が含まれていた。

「私の目を潰したのはあなた達ですよ？ 私の家族も、日本で出来たお友達も、全て風鳴が奪つたんですから」

「何……？」

「まだ分かりませんか？ えつとですね、確か……『アハハハ！ 恐れよ！ 怖じよ！ ウチが来たぜえ?!』ここからが始まり、首尾よくやって見せるぜツ！』……でしたっけ」

「その台詞は……！」

そう、かつてパヴァリア残党のノーブルレッドが引き起こしたライブ襲撃、その際に攻撃を行ったミラアルクが初めて発した台詞である。

つまり彼女は、あのライブの数少ない——ほとんど唯一といってもいい——生き残りだった。

「わたし、翼さんの歌が大好きで、家族に無理言つて日本へやって来て

たんです。なかなか難しいタイミングだったらいいんですけど、お父さんのお友達が自分たちは行けなくなっただけからって譲ってくれたんです。そこで日本のお友達もたくさんできました。同じ人を憧れるもの同士、心が通じ合っただけです。短い時間でしたが、わたしはたくさんのお友達と一緒にライブを今か今かと待ち望んでいました。しかし……あの事件が起きました」

二度と光を見ることのない目を閉じたまま、翼を睨みつける。

「お友達は目の前で赤い塵になり、逃げまどう人たちに押しつぶされ、主犯の人に胸を貫かれました。お父さんとお母さんはわたしを守るために瓦礫の下敷きになりました。わたしは運よく生き残ったんです。目が見えなくなっただけ、逃げていた内に負った怪我が原因だとお医者さんから教しえてもらいました。ニユースでは爆発物によるテロだと連日連夜流れていました。わたしも、それが事実だと考えるようになっていた……だけど、本当は違った。そうでしょう？ 風鳴」

「ッ……」

「あの事件はあなたの祖父……いえ、父親である風鳴訃堂が主導したものだ。そしてその理由はあなたを自らの手中に収めたいという身勝手なもの。そして私の目も、風鳴の息のかかった医者が目撃者を消すために視神経を傷つけたためです」

風鳴訃堂の存在は逮捕、禁固されたときに世間に知れ渡っており、理由を知ったのは裏の世界に身を置いてからだろう。

手術の内容も恐らくそうだ。

「わたしは風鳴の身勝手な理由でお友達も、家族も、人生も奪われたんです。だからわたしは、二度とわたしと同じ想いをする子供が生まれてこないように、子を亡くした親が失意にのまれないうちに、戦うんです」

ミハルは毅然とした態度で言い切った。



## 否定する重圧と定めた決意

ミハルの話を聞いた響達は絶句する。

そしてその後に感じたのは、圧倒的な覚悟の違い、意志の重さだった。

ただ漠然と世界を平和にしたい、争いを無くしたいと考えていた響達にとって、例えば命を奪うことになろうとも悲しむ人間を一人でも少なくしたいという意志と覚悟はあまりに重かった。

ミハルは道路に突き刺していた黄金の長剣を引き抜き、呆然としている響の首元に突きつける。それは最後通告を意味していた。

「あなた達にも願いや意志があることは理解しています。わたし達は世界に対して命を懸けることで目的を果たそうとしています。立花響さん……あなたに……あなた達に、わたし達の覚悟を折ることが出来るだけの『何か』はありますかツ?!」

「ツ……!」

響は答えない。いや、答えることが出来ない。

今の世界にとってみれば彼女達——ファイの面々のやっていることとは限りなく悪だろう。しかし、それは上に立つものの視線だ。事実として、強国の周囲にある力の無い国や、それにすぎらなければ生きていけない国からは彼女たちを英雄視しているところもある。

ファイは別の視点から見れば善の存在だった。

つまり、彼女達は自分たちの命だけでなく、多くの人々の願いも背負って立っているという事だ。

その見えない願いの圧に響は押しつぶされ、返答することが出来なかった。

ミハルが落胆の表情を浮かべる。

「ハア——失望しましたよ、立花響さん。所詮あなたも、強者だったという訳ですね……!」

「小日向ツ!」

「はいツ!」

『——閃光——』

ミハルが響の喉笛を切り裂こうとした瞬間だった。

動揺と驚愕から避ける動作を一切見せない響を守るため、事前の作戦通りに未来が響には当たらないようにミハルを光でのみ込みにかかると。

展開された扇から放たれる破邪の光が直撃するその瞬間だった。

——光あれ！

ミハルの叫びと共に攻撃を止め、眼前に構えられた黄金の長剣、クラウ・ソラスのアームドギアが光を発した神獣鏡の閃光を文字通りかき消した。

大通りを光が覆いつくす。

咄嗟に未来たちは腕で目を覆った。

神獣鏡の輝きは物理的な——それでも相当の強度のある——障壁でもない限り防ぐことはほぼ不可能と言われている。特に対聖遺物に関しては無敵といってもいい。

それを彼女は、聖遺物由来の力で真っ向から打ち消したのだった。

この事実には翼と未来は思わず目を疑った。

「どういう事だッ?!」

「えッ?!」

「クラウ・ソラスが放つのは奇跡の光。傷を癒し、呪いを打ち消し、魂を見出す光です。同種の光をぶつけあえば相殺されるのは当然でしょう? さらに言ってしまうえば、わたしは打ち消す程度の出力しか出していないので」

「まだ上があるという事なの……」

「ならば、剣でもって相対するまでッ! 小日向ッ! 立花は任せたッ!」

「はいッ!」

翼が脚部のスラストでミハルとの距離を一気に詰める。

そしてその推力を利用してミハルに一撃を叩きこもうとするが、推進音で翼の位置を認識し、空気の流れをギアから揺蕩っている金の糸で把握した彼女に容易く受け止められてしまう。

しかし、流石に威力を全て受け止めきることは出来なかったよう

で、吹き飛ばされて後ろによるめいてしまった。

「響ッー！」

「未来……」

「ッ……癩に障りますが流石の威力ですね、風鳴。タイプが違うので比べるのもアレですが、イギリスの二人、暁切歌さんと月読調さんは重さが違う……」

その隙を見て未来は響を抱き上げて間合いを取るが、響からは覇気が感じられない。

彼女はミハルとの問答で覚悟の違いを見せつけられ、自分の正義に迷いが生まれていた。

何時もの響であればそれでもと奮起することが出来ただろうが、神々との決別で誓ったことを未だ守れていないという自責の念が彼女を押しつぶしている。

未来も同じ思いに駆られていたが、頭を振って響を離脱させることを最優先にした。そして同時に、雷が響に対して覚悟がいると言っていたのはこのことだったのかと理解した。

一方、鏢迫り合いを続ける翼とミハルの実力は拮抗していた。

ミハルは目が見えないがゆえに、この一合に全力を注いでいた。それを察知した翼は剣を引き、右に避けて彼女の体勢を崩しにかかる。

しかし、バランスを崩して前に倒れかけるミハルだったが、野性的な反応で翼の右脇腹に左手で握撃をしかけた。

金色の腕部アーマーから指に沿って光の剣が伸び、翼の腹部を抉りにかかる。

『——ミズキ——』

しかし翼も歴戦の防人、ただでやられるわけにはいかない。

逆羅刹の応用で右側の脚部スラスタを伸長し、骨を斬るために肉を差し出した。

それを察知したのだろう、ミハルの眉がピクリとわずかに動いたが、そのまま一步踏み出し、その踏み込みの勢いも乗せて一撃を見舞う。

指から伸びる光の刃がスラスタをズタズタに引き裂き、完全に破

壊した。だが、翼にとってそれは想定内。これで怯み、動きは一瞬と  
はいえ止まるはずだ。無力化のため、骨を断とうと上から刃を振り下  
ろした。

しかし――。

「なッ?!」

「片腹貫きますッ!」

「がッ」

彼女は握りつぶした手でそのまま翼の脇腹を殴りぬいた。

目が見えないがゆえにミハルは野生動物のようにがむしやらかな戦  
い方をする。達人同士の戦い方をしてきた翼には予想することが出  
来ない、完全に想定外の出来事だった。

……いや、調と切歌の情報から想定はしていたのだろう。しかし、  
頭でわかっているのと体が動くのは別だ。翼は、ミハルが倒れかけな  
がらも攻撃を仕掛けてくるという普通では考えられない行動に対処  
するため、咄嗟に普段と同じように行動してしまった。

だからこそ、わき腹に痛烈な一撃を見舞われてしまった。

軽くない衝撃に表情を歪ませ、膝をつきそうになるが、歯を食いし  
ばって足に力を入れてこらえる。

「ぐうッ!」

「風鳴のような達人には考えられない戦い方でしょう?」

「くッ……まるで野獣のような戦闘法だなッ……」

「ええ、目が見えませんが。手当たり次第に攻撃するしかないので  
す」

「ところでですが、あなた達の任務って何ですか?」

「なに?」

「わたしの白銀の短剣、何処に行ったのでしょうか?」

そう言われて翼は周囲を目だけで見渡すが、ミハルのもう一つの武  
器である浮遊し、彼女の意思のままに動くフラガラッハのアームドギ  
ア、白銀の短剣がどこにも見当たらない。

少し前までは彼女の腕の延長上に浮遊していたはずだ。しかし、今  
は影も形も見当たらない。

少なくとも、ミハルと未来の光がぶつかり合う直前まではあつたはずだ。

——ぶつかり合う直前まで？

その事実を理解した時、翼は驚愕した。

「……まさかッ?!」

「はい、そのままかです」

「立花ッ！ 小日向ッ！」

「今頃行ってももう遅いですよ？ すでに血の海が広がっていますので」

くいと左手を動かせば、血によって紅く染まった白銀の短剣が勢いよく飛んできてミハルの腕の延長上で急停止した。剣の状態を見れば、すでに何があつたのかを想像するに難くない。

彼女は空中で剣を振り、まとわりついた血を払った。

「この剣はわたしの思考とリンクしていますので、向こうに誰がいて、何があつたのかは完全に把握しています。報告しておきますと、完全に無関係な人を除いたすべての強者の首を刎ねました」

「首を……刎ねただと？」

「はい、首を。……やはり革命といえは首切りでしょう？ これからこの国は国民のための国になるんです。少々時間はかかるでしょうが……この国を変えたいと熱意を持っていたがゆえに、投獄された政治家は意外といますからね」

そういうとミハルは突然路地裏のほうを向いた。

——少々失礼します。

そう言つて路地裏の暗闇の中に入っていくと、そこには足を怪我した少年が倒れていた。恐らく翼たちの戦闘が気になって近づいた方がいいものの、見入ってしまった足元がおろそかになり、足の裏を割れた瓶か何かで切ってしまったのだろう。

この煉獄で足の裏を怪我するという事は、破傷風で死ぬこととほぼ同義といつていい。

痛みと絶望に泣きじゃくる少年の前に、泣き声を聞いたミハルは微笑みを浮かべ、両膝について身をかがめた。

「何をやる気だッ！」

「静かにしてもらってもいいでしょうか？」

翼は少年に何かしようとしているミハルを引き留めにかかるが、真剣な表情をした彼女に一周されてしまう。

翼に対する底冷えするような声ではなく、安心させるような温かい声をかけ、少年の頭を撫でる。汚れており、臭いもかなりきついはずなのだが、ミハルは眉一つ動かさない。

「大丈夫です。泣かないでください」

「お姉ちゃん……でも……」

「大丈夫ですよ。お姉ちゃんは魔法使いですので。こんな怪我ぐらいちよちよいのちよいです。少し目を瞑っててもらえますか？」

「う、うん」

「目は瞑りましたか？　では——光あれ」

少年が目を瞑ったのを音で確認すると、長剣から光が放たれた。

放たれた光は傷口を優しく照らし、瞬く間にふさいでしまった。

「もう開けても大丈夫ですよ」

「え……わっ！　怪我が治ってる！」

「はい！　怪我は直しておきました。これで死んじやうようなことはないですよ」

「ありがとうございます！　魔法使いのお姉ちゃん！」

「いえいえ、感謝されるようなものではないですよ。ところでですが、あなたのまわりに信頼できる大人はいますか？」

「うん！　一緒に暮らしてる兄ちゃんたちがいるよ！　みんなで協力して生きてるんだ！」

「そうですか、それはよかったです。では、そのお兄ちゃんたちにこう伝えてください。　フアイは来た。この国は変わる　って」

「分かった！　ありがとうございます！」

「はい」

少年は大きく手を振って路地裏の闇へと消えていった。

ミハルは小さく手を振ってそれを聞き届けた後、ゆつくりと立ち上がって翼の方に振り向いた。

翼は切っ先をミハルに向けるが、彼女はそれを気にもしていない。「では、わたしはこれで。もうやることはやりましたし、帰らせてもらいますね。それに、今頃はフランスにエルナが向かっている事でしょうし」

「待てッ！」

「待てと言われて待つわけないでしょう？——光あれ」

光が視界を覆いつくし、それが消えるころにはすでにミハルの姿はそこに無かった。

翼はギリギリと剣の柄を強く握る。

煉獄のようなこの国を革命したファイと、守ろうとしたS・O・

N・G。この国に足を踏み入れて、翼は何方が正しいのか全く分からなくなってしまう。

しかし、たとえ迷っていいようとも、何としてでもなさねばならない事が生まれた。

「風鳴の犯した罪であるミハルを救う……。これだけは、何としてでもなさねばならない！」

翼は決意を新たにす。

「その前に立花を何とかせねばな……」

そんな時、本部から通信が入ってきた。

ファイによる次のターゲットは——フランスだ。

## 不思議な同盟

今現在、マリアは残っていた仲間たちを連れて巧妙に下水道に偽装された地下通路を進んでいた。

そして、彼女達がそんなところにいる原因となっているのが、明りをもってマリアの前に立ち、先導するように歩いている目下の敵。ファイのエルナだった。

ギアを纏っているマリア達に対し、エルナはただのスーツだ。

そんな状況にありながら、エルナは軽く後ろを振り向いて言った。

「いやあすまないね。お手を煩わせちゃってさ」

「あの条件で承諾するなんて、本当に嘘じゃなかったのね」

「本当じゃなかったらあそこで大人しくお縄についてるさ」

はっはっはと芝居じみた笑い方をする。

こんな頓智気な状況になってしまったのは、今からほんの一時間ほど前のことだ。

○○○

マリアはファイがフランスに対して攻撃を行うと宣言したことにより、S. O. N. G.に残っていた切歌と調、クリスを連れ、現場の指揮権を一任されてフランスに入国していた。

これまでの傾向から、ファイの狙いは政治家とあたりを付けた彼女たちは、それぞれ分担してパリ周辺の警戒に当たっていた。

途中、切歌が美味しそうなフランス料理に気を取られてしまうというハプニングはあったものの、特に怪しいところはなく、やって来たフランス軍に監視任務を譲渡することになった。

「我々では満足に戦う事は出来ませんが、支援することは出来ます。我が国の重鎮を守るのですから、せめて監視体制の譲渡をお願いしたいのですが」

「……そうね、お願いするわ。国会に続く道は限られているとはいえ、それでも広すぎるくらいだったもの。渡りに船、と思わせてもらおうわ」

「では、怪しい者を発見次第、通信にて報告を。それまで待機してもら



うのものなんですので、せっかく花の都まで来てもらったのです。パトロールついでに観光でもいかがでしょうか?」

「観光デスか?!」

「切ちゃん、パトロールが主目的だよ」

喜ぶ切歌を、調がたしなめる。しかし、そんな彼女の頬も楽しみにしているのを隠しきれず、頬が若干ゆるんでしまっている。

だが、クリスはその提案に反対した。

「そんな悠長なこととしてられっかよ! アタシ等が動いて、連中をぶっ潰さねえと……」

「落ち着きなさいクリス」

「マリア!」

「そうやって逸つて、とんでもない失敗を犯したらどうするの。重要なのは確実性。一度心を落ち着かせて、余裕を持って対処するのが一番よ」

「だけだよ……」

「クリス、あなたの気持ちもよくわかるわ。だけど余裕がないと、何かあった時にすぐ対応できないのも事実なのよ」

「——わあつたよ……」

マリアの説得によってクリスも提案を飲み込み、マリアとクリス、調と切歌の二組に分かれてパリを散策することになった。

それまではS・O・N・Gの隊服だったが、私服にした方が街中で目立ちにくく、都合がいいという事で全員私服だ。

調達と別れ、シャンゼリゼ通りを歩いていたマリア達だったが、通りにある少し洒落たオープンカフェでエルナが脚を組み、優雅に紅茶を飲みながら仏字新聞を読んでいるのを目撃した。

「ふむ……あそこの家具屋が閉店してしまったのか。落ち着いた色合いで私は好きだったのだが……」

「なッ?!」

「し! 静かに! 今二人を呼ぶわ」

あまりにも堂々としているその態度に思わずクリスが叫びそうになるが、マリアが大慌てで口を押えて黙らせ、調と切歌を呼んだ。

この真昼間の人通りの多いシャンゼリゼ通りで戦闘を行うわけにはいかないため、出来る限り慎重に動かねばならない。

並木の陰に隠れて暫くすると、二人が走ってきた。

「ファイがいたって本当なの？」

「ああ、そこで優雅に茶をしばいてやがる」

「よ、余裕デスね……」

「でもこの状況はチャンスよ。ファイは一般人には手を出さない……。だから行くなら今」

調と切歌の到着を待っていたのは、不測の事態にも対応できるようにするためだ。エルナのギアには何か特殊な機能がある。それをけいはいしてのものでもあった。

マリアはメンバーを代表してエルナのもとに向かう。クリス達も、視界に二人を収めることが出来つつ、即座に行動できる席に着いた。

「相席、良いかしら？」

「どうぞ」

「ありがとう」

さも他に席が無かったからと雰囲気を使い、新聞から顔を上げないエルナの向かい側に座った。だが恐らくすでに声で把握されているだろう。

「あなた、ファイのエルナ・ミニスターでしょう？」

「そういう君は、マリア・カデンツアヴナ・イヴだろう？　それがどうかしたかい？」

「ここでならあなたは戦えない……。だったら、ここで捕縛した方がいいでしょう？」

——いい考えだ。

そんな思考が見え透いた微笑みを浮かべ、新聞をたたんで眼鏡のレンズ越しにマリアの目を見た。脚を組みなおしたせいで銀色のイヤリングが揺れる。

スーツの着こなすとスタイルの良さ。

それを見てマリアはエルナに対し、モデルに向いているわねと少々場違いなことが頭の片隅に一瞬だけ浮かんだ。

「確かにそうだ。ここでなら私は下手な抵抗は出来ない。捕縛するも殺すも好きにするといい……だが、一つだけ、確実にやっておきたいことがあるんだ。これは、君達S・O・N・G. にとっても悪くない話だと私は考えている」

「話だけ聞いわ。その後の判断は話次第だけど」  
「感謝する」

そうやって彼女は手元に合った紅茶を飲み干し、代金とチップをテーブルの上に置いた。これは、例えどのように転んでも後腐れなくここをされるようにという彼女の意思表示だ。

その意志をくみ取ったマリアは、心なしか真剣に耳を傾ける。

「私がここに来たのは政治家の暗殺とかそういうものではない。この国は自力でひっくり返すことが出来る力のある国だからね」

「なら、それ以外の目的が？」

「ああ、そうとも。私がこの国にやって来た目的はただ一つ。子供をさららい、人身売買を行うパヴアリア残党のグループである『ミノタウロス』を殲滅しに来たんだ」

『『ミノタウロス』？ ああ、迷路の中にいる？』

「その認識で構わない。まさしく連中は下水道に巧妙に偽装した地下通路を根城としているからね。まさしく、迷宮の中に住まう怪物さ。……これを見たまえ」

そうやってエルナは先ほどまで読んでいた新聞の一ページをマリアの前に置いた。

マリアは情報を共有するべく、別の席にいたクリス達も呼び寄せる。仲間がいるという事は遅かれ早かれバレるのだから別にいいだろうという判断だ。

「ふ、フランス語……！」

「ああ、すまない。記事の見出しには『また一人！ 今月だけで七人の子供が被害に！』と書いてある」

「嘘じゃないだろうな？」

「本当だとも」

クリスはいくらか落ち着いているように見えた。

観光によるリラックスで余裕が出来たのか、それともエルナの持ちかけた話が有益な話だったからなのかは分からないが、少なくとも嫌な緊張と苛立ちは見られない。

「それに、例え嘘だったとしてもここは私達にとってみれば敵地でもある。罨を貼ることなんて不可能だし、逆について来た君たちがそのまま私を捕縛してもらって構わない。戦闘が起きるまで、私はギアを使用しないことを約束しよう」

「それで？ 本当だったとして、戦闘後にはそのまま離脱するってか？」

「まあ、そうなるね」

「話しぶりからは嘘だとは思えない」

「もし本当だとしたらデスが、放っておくわけにはいかないデス！」

「マリアはしばし思案するが、メリットとデメリットを比べて、メリットが大きいと判断した。」

だが、念には念を入れるため、一つだけ条件を付けくわえる。

「私達はあなたの言うことを全て本当だと信じるわけにはいかない。だからこそ、一つだけ条件があるわ」

「どうぞ」

「私達が最初からギアを纏っている事……それが条件よ」

「いいだろう。もしも何か私が不審な動きをしたら、すぐにでも捕縛するといい。流星に装者が動くより早く起動することは出来ないからね」

ここに、S・O・N・G. とファイの一時的ながらも不思議な同盟が結ばれることになった。

## ミノタウロスの迷宮

下水道に偽装された、まるで迷宮のような地下通路をエルナを先頭に進んで行く。

地面や外壁は煉瓦でつくられており、所々苔生している。煉瓦の状態から見たところ、数百年前から使われていたようだ。少なくともここ十年以内に来たものではないだろう。

また一部は彫刻のようになっており、まるで縄のような模様が見える。

そして何よりも不思議なのは、エルナはここを進むことに一瞬たりとも迷いを見せていないという事だ。

普通の人間ならば、この地下通路に入ったところで出口に出ることも、入り口に戻ることも不可能だろう。事実、時々視界の端の方に人間の白骨死体が転がっている。

もし例え慣れていたとしても、地図のようなものがない限り絶対に遭難し、同じ末路をたどってしまうはずだ。

にもかかわらず、エルナはずんずんと先に進んで行く。何の明りも持たずに——だ。

不安になった切歌が彼女に聞いた。

「本当にこの道であつてるんデスか?! さつきから同じようにしか見えませんが!」

「ん……ああ、間違いなく合っているとも」

「でも、同じところをぐるぐる回っているようにしか……」

「まあ、君たちには同じようにしか見えないだろうねえ」

「……どういう事?」

何故か常に彫刻の上を歩いていたエルナがぐるりと後ろを向き、ニヤリと軽く口角を上げた。

軽くつま先でタップするようにして、地面に掘られた彫刻を叩く。

そして踏んでいる縄のような模様を指さして言った。

「この彫刻を踏んでみなよ」

「彫刻?」

「そう、まるで縄のようなのをね」

エルナに言われた通り、装者たちは縄の彫刻の上に立った。

そして数秒後、見えていたものが一変する。

「それで何か変わるのかよ……は？」

「嘘でしょ……」

「これがさつきまで歩いてきたところデスか?!」

「なるほどね……ミノタウロス、こういう事……」

さつきまで見ていた薄汚れ、苔生した煉瓦の通路とは異なり、まるで無菌室のような真っ白な通路が真っ直ぐ、一本道に伸びていた。地面にある彫刻は赤いラインに変化し、真っ直ぐに伸びている。そして所々、矢印のような形の三角形がラインの上にあった。

迷宮のような分かれ道や十字路の一切が消失し、ただただ真っ直ぐな道が伸びている。

どこか近代的で、しかしあまりにも場違いな空間が、一直線に広がっている。

「伝説の通りだ。面白いだろう？ ……どちらが先かは知らないがね。因みに偶然踏んだとしてもこうはならない。計ったことはないが、数秒間この上に立たなければ見ることはできない」

「なら、ここから出られなかった人は……」

「気付くことが出来なかったんだろうね。まあ、常識的に考えれば奇跡でもない限り迷わず進むのは不可能だよ」

一瞬悲しげに笑った後、またくるりと反転し、軽快な足どりで一本道を進んで行く。

そのリズムのまま鼻歌を歌いだした。それはまるで海のような、深みのある音色だった。

そんなエルナに違和感を抱いたクリスが早歩きで彼女の前に立ち、真っ直ぐに見つめた。

思わずエルナも鼻歌をやめ、立ち止まる。

「なあ」

「何だい？」

「何でお前はこの通路のことを知っていたんだ」

「――事前に調べた……では、ご不満かな？」

「ああ、ご不満だね。さつきお前が一瞬だけ見せた顔、あれはそんな軽い言葉で片づけていい表情なわけねえ。……アタシもしたことのあの顔だ。だからわかる」

静寂が場を支配する。

元々静かな場所なだけあって、余計、際立っていた。流れる空気の声でさえも、今はうるさく感じる。

「――言わなきや駄目かい？」

「知ることがわかり合う第一歩……あのバカと、バカ二号ならそう言うはずだ」

いや、バカ一号は分かかってないだろうし、二号はもうちよつと現実的だな――と、頭の中で訂正した。

如何やらクリスも、これまでの付き合いでかなり絆されてきていたようだ。

「イメージがぶれるから言いたくなかったんだがなあ……。はあ、まあいい。私は昔、ここにいたんだ」

「ここって……ミノタウロスに、組織の一員として？」

「いいや、違うよマリア。私は、奴隷としてここにいたんだ」

「奴隷……」

装者たちは絶句する。

今のご時世、奴隷というのは過去のもので、労働者はいても奴隷はいないというのが社会常識だった。

そのことをエルナは当然知っていたので、少しばかり付け加える。

「もちろん、ただの奴隷じゃない。嗜好品……おもちゃ、玩具としての奴隷だよ」

「そんな……」

「ここに引きづり込まれた人間は男女問わず、そう言った扱いを受ける。私もそのうちの一人さ。ついでに言えばこの地下通路はフランスだけじゃない、欧州全土にまるで蜘蛛の巣のように広がっている。ドイツの伝承『ハーメルンの笛吹き男』、あるだろう？ あれは実話でね、連れられた子供たちは全員ここに引きづり込まれたのさ」

「笛吹き男の話は千二百八十四年。そんな昔からここはあったのね」  
「ああ。もつとも、もつと昔からあったのかもしれないがね。……私は古郷イタリアから、十五年前にここに連れてこられたんだ」

エルナは軽く目を瞑り、当時のことを思い返す。

当時と違つて力をつけ、トラウマを克服した。だからもう、昔のようには怖くはない。

「私の他にもつれてこられた子は多くいた。小さな子供ら大人まで……中には真新しい指輪を薬指にしていたご婦人もいたかな。まずは買い手が自分好みの人間を誘拐させ、そこからオーダーに合わせた教育が始まるんだ。性的なものも当然あるし、生きたまま皮を？がれる、手足を切られる……なんてものもあったね。この世に存在する薬物を全て投与されるなんてのもあったかな？ 因みに私は音だけが聞こえる真つ暗な部屋に拘束され、扉の向こうから聞こえてくる悲鳴や嬌声、断末魔を延々と聞かされるというものだった。……後で知つたことだが、私の購入者は私の精神を崩壊させるオーダーを出していたそうだ」

淡々と内容が語られるが、装者たちからすればそう簡単に受け止められるものではない。

自分たちも、普通とはかなり異なる人生を歩んできてはいるが、それを人から聞かされるのはまた別だった。

スポーツをするのは好きだが、スポーツを見るのは苦手な人がいるだろう。その感覚に近い。

そして自分たちも似たような出来事を体験しているからこそ、常人よりも鮮明に理解してしまった。

「もつとも、私は精神が崩壊するギリギリで助けられたんだが、他には誰もいなかった。連れていかれたか、死んでしまったかのどちらかだろうね。……これが、私がミノタウロスを潰す理由さ」

「——ええ、その理由はよくわかったわ。あなたが世界に宣戦布告した理由もね」

「ほづつ」

「この組織が財界の人間や、メディアの人間のために存在しているか



らでしょう。例え誘拐されたことを報道しても、その後の報道はないし、それが捜査されることもない。そんな人たちが許せないから……これがあなたの戦う理由」

「少し足りないな。知ることが出来る、知っている立場にありながら、何とかしようと呼びかけを起さなかった者も許されない。もちろん、ミアやミハルの考えも含めてだけどね」

エルナが白骨死体に見せた悲しげな表情は、この組織の実態を暴こうとした正しき人達が力及ばずに倒れた成れの果てだったからだ。

エルナは腰に手を当て、話を切り替える。

「さて、私の過去話はここまでだ。実はそろそろ組織の中枢部が近くてね、それに備えてギアを使いたいんだが……いいかな？」

「——お前の信念はよくわかった。だから組織壊滅は協力してやる。その後は、お前をとっ捕まえてやる」

「感謝する」

クリスの言葉にエルナは深く頷き、自身のギアを起動した。

## 海流の時間

頷きと同時にエルナのピアスが揺れ、彼女は自身のギアを起動するための聖詠を唱えた。

近代的な通路に、彼女の透き通った歌声が響く。

「Ocean Traina Deep Tron」

彼女のピアスが光り輝き、まるで水流のような青の粒子が体を包み込んだ。

かつちりと身を固めていたスーツは分解され、黒と群青色をベースにした肩と太ももの外側を露出した、ウェットスーツタイプのインナーが彼女の身を包む。

そして腕部と脚部に銀をベースにした青の装甲が装着され、そこから三本の黄色いオリハルコンストリームが胸部のコンバーターに向かって伸びていく。

彼女のギアにはフォニックゲインを伝達するオリハルコンストリームが三本あるため、他のファウストギアよりも出力が高い。ただし、その分扱いが難しく、ファウストギアの三倍、通常のシンフォギア及びファウストローブの六倍ははじやじや馬だ。これをたやすく扱うエルナの技量と精神力の高さがうかがえる。

ヘッドギアが装着され、目を赤い半透明なバイザーが覆い、三又に分かれた槍が王冠のようになり、腰に白い布が巻かれた。

そしてエルナの手元で細長い渦潮が発生し、その中から三又の槍、トライデントが出現し、それを掴むと同時に渦潮が消滅する。

彼女はそれを二度三度振り回し、柄のほうを地面に突き立て、腰に手を当てた。

「これが私のファウストギア、トリアイナだ」

「あの時の……」

「ああ、マリアはすでに見ていたね」

「何かあるの？ マリア」

「見た感じ普通のギアとあまり変わらないデスが……」

「そこは見てからのお楽しみにおいてくれ。……まあ、見えない

「ただけ」

「マリアは翼と共にエルナと戦っていたが、彼女のギア、トリアイナの持つ特殊な能力に翻弄され、一撃すら入れることが出来なかった。

あの空間転移能力は自身の位置や相手の位置、向きなど、操作できるものの幅が広く、対策を打たなければ手も足も出ずに敗北することだっただけだ。

エルナはトライデントを持ち上げた後、粗先を下にして構え、暗闇の向こう側を見つめる。

「暗闇の向こう側、すぐ近くに中枢部への扉がある。流石の私でも扉の向こう側に何人敵がいて、何が存在しているのかは把握しきれない。だから奇襲を仕掛け、相手に準備の暇を与えることなくたたくのが最善だと考えるが……どうだ？」

「構わねえよ。ていうか、アタシらはミノタウロスって存在も知らなかったんだ、少なくとも、ことが片付くまではアンタの指示に従うさ」  
「感謝する。——彼女が教えてくれれば助かったんだが……居場所を教えてくださいただけでも御の字か」

「ん？ 何か言ったデスか？」

「いや、何でもない。ただの独り言さ……じゃあ行こうか。まずは誘拐された人たちの救出が最優先。それが済み次第好きにやってくれて構わない。出来れば大暴れしてくれ」

確認されている要救助者は七名。もしかすればもつと数がいるかもしれない。ただ、エルナの話聞いた限り、無事に救助することが出来るのも何人いるかは分からない。

「だけれど、最善を尽くしてこそそのシンフォギア装者。」

「救助者はどこに避難させるんだ？」

「正直な話、結構前のことだから内部構造は私も臆気だね、この通路に避難させよう。その手段は君たちに任せる」

「あなたはどうするの？」

「私は顧客リストが処分される前に奪取してくるよ。では……行くぞッ！」

エルナは扉に向かって突進し、トライデントで切り裂いて道を開け

た後、その能力で姿を消した。

その力を初めて見たマリア以外の全員が一瞬呆気にとられるが、この好機を逃せば事態が好転することがないことを知っている装者たちはすぐさま行動を開始する。

確認できるだけで敵は三十人弱。その内パヴァリアの錬金術師と思わしき人間は六人ほど。

彼女達の胸部や四肢に搭載されたクリスタルが輝く。

「RSCCA……発動！」

RSCA——Reserve Song Combination Artsとは、発生するフォニックゲインをクリスタルで他の装者と同調することにより、一か所に集中させて一人の力を強化したり、弱ったメンバーに分け与えて穴を埋めることが出来るという、シンフォギアが進化したことにより可能になった戦闘技術だ。

その為、一部のフォニックゲインをためておくことが可能になっており、継戦能力の大幅アップにつながっている。

「各自散らばって要救助者の搜索！ 倒すのはそのついででいいわ、今は救助が最優先よッ！」

「了解ッ！」

「何者ッ?!」

「黙ってなさいッ！」

近くにいた男の顎を殴り抜き、一撃で沈黙させる。

クリスは拳銃にバヨネットと閉所での近接戦に特化した武装で突入し切歌は二振りの小さな鎌で環境に対応、調はツインテールバイナダーを使わず、ヨーヨーだけで戦闘している。

「要救助者見つけたデース！」

「場所は?!」

「入ってきたところの右手側デース！」

「何人そこにいる！」

「えつと……十三人！」

「十三人……なら何とかなるわね。よし、いったん切歌のところ集合、その後通路に下がるわよ！」

中枢部とはいえそこまで広くなかったようだ。人質は一番年上で高校生程度、下は小学生だろうか、すくなくとも、手段行動において問題ないと判断できた。

錬金術師がアルカ・ノイズを召喚するが、その程度は馴れたもので人質を傷つけることなく撃破、脱出に成功した。

遠距離攻撃持ちのクリスに三人がプールしておいたフォニックゲインを譲渡し、即座に大型ミサイルを四発展開して錬金術師たちに発射した。

○○○

エルナはミノタウロスのメンバーが混乱し、統率が取れていない状況の中を悠々と歩いていく。何故か周囲の動きはまるで深海にいる生物のように遅く動いている。そしてすぐ後ろを見れば、マリア達と同じような場所で戦っているエルナ自身がいた。

これが、トリアイナの能力だ。

本来、どの聖遺物にもある種の特殊機能が搭載されている。しかし、これは絶唱レベルのフォニックゲインがあつて初めて発動するものだ。

本来なら発動できないのだが、オリハルコンストリームによって通常の六倍の出力を持つトリアイナは、扱いづらさと引き換えに絶唱なしで能力が使えるようになっていく。

その能力は時間の流れが違う特殊領域に潜行し、本来潜行していなければ自身が取っていた行動と周囲の状況を把握しながら移動する……というものだ。

潜行中は基本的に本来の時間軸に干渉できないが、向こうはそれを認識することすらできないという無敵の能力であり、浮上した瞬間に本来の時間軸にあるエルナは消失し、周囲の存在はそれまで取っていた行動の記憶をすべて失つてしまう。

この能力を使って誰にも認識されずに——本来の時間軸のエルナは認識されているが——彼女は目当ての顧客リストの入手に成功した。

「やはりな、ヨーロッパ中の大物政治家、放送局員の名前が書いてあ

る」

彼女はバイザーを上げ、周囲を見渡した。

「昔は強大で手も足も出ないような組織だと思っていたが……今思うと呆気なかったな。助け出し、力をくれたクラリスに感謝しなければ」

リストを小脇に抱え、もう一度特殊領域に潜行する。

突入した扉の方に向かう。そこには人質を解放した装者たちが、大型のミサイルで一網打尽にしようとしているところだった。

「ふむ……クラリスの提案通り後で一切合切全部破壊する予定だったが……手間が省けたな」

目の前でミサイルがゆっくりとこちらに飛んできているのが見える。

通り過ぎるそれを横目で眺めながら、エルナは装者たちの真横で浮上した。

## 守るものの価値

ミサイルが飛翔し、人身売買組織ミノタウロスのアジトの中で爆発する。

しかし、瞬く間に広がったソレは、アジトの中にある器具や書類などを焼き尽くすようなものではなかった。もちろん、当然のことだが人を焼き尽くすものでもなかった。

空気を燃やし、肌を焦がすようなちりちりとした感覚が全くない。どちらかといえば、肌よりも目にそのような感覚がある。

——催涙弾か。

エルナは心の中で呟いた。

煙は装者達の方にも流れ込んでいるが、ギアによって守られている彼女たちは多少の感覚はあるものの、特に影響はなかった。救助された人質も、調がツインテールバインダーから展開した大型鋸を扇風機のように変形させ、煙が来ないようにしているため無事だ。

煙の中では構成員が嗚咽を吐きながらもんどりうっている。

本来なら煙が晴れるまで待つ必要があるが、ギアを纏っている装者にはその必要がない。

マリアが指示を出す。

「切歌、調、その子たちを頼むわね。私達はミノタウロスの捕縛にかか  
るわ」

「了解」

「分かったデース」

「一応、一本道とはいえ隠し通路がないとは限らない。それにパヴァ  
リアの息がかかった組織だ、何も無いところから現れる可能性だって  
あるからな」

「捕縛だなんて……ずいぶんと残酷な真似をするんだな」

「残酷だと？ どういう意味だ」

エルナの物言いにクリスが突っかかる。

まるでそのまま殺した方がいいと言いたげな憐れんだ表情をして  
いる。

国連で国際テロリスト集団と認定されたファイを除き、基本的に S.O.N.G. に人を殺す権限は存在しない。捕縛した後、彼等は犯罪者として国に引き渡される。

エルナは、そのことを知ったうえで言った。

クリスに入手した顧客リストを手渡す。

「これを見るといい。私の言った意味が分かるはずだ」

「何だこれ？」

「組織の顧客リストだ」

「私も見ていいかしら」

「構わないとも」

マリアがクリスの肩越しに顧客リストを見下ろした。

身長的にマリアのほうが背が高いため、特に苦はない。

エルナの言葉の意味は直ぐに分かった。リストのページのページをめくるまでもなく、一枚目からとんでもない名前が記されていたからだ。

「これって……大統領の名前じゃない！」

「それもフランスだけじゃねえ、ヨーロッパ中の要人の名前が書かれてやがる……」

大統領だけじゃない。

各国の大臣や外交官、大企業の社長、果てには現ローマ法王の名前が、「商品」の注文と共にびっしりとリスト埋めている。

これを見せたエルナの意図は直ぐに察することが出来た。

「もし連中を捕まえて引き渡したとして、法の下で素直に裁かれると思うか？ それはあり得ない。口封じのために問答無用で死刑になり、このリストは闇に葬られる。もしくは全くの別人が代わりに罰せられ、連中は野に解き放たれて同じことを繰り返す……このどちらかだ」

エルナは一度救助された人質たちを見た後、怒りを宿した瞳でアジトのほうを向いた。今なお催涙弾の効果でミノタウロスの構成員はのたうち回っている。

「私が行ったのは連中に対してじゃない。闇に葬り去られる過去に壊されていった子たちと、罪を着せられるかもしれない無辜の民に対し



てだ」

「……だとしても、私達にその権限はないわ」

「だろうね」

エルナは肩をすくめた。

そしてトライデントを軽く振り下ろし、構成員の上に三又の穂先を落として胴と手足を地面に縫い付ける。

「ホラ、これで逃げられる必要はない」

「殺さないのね」

「君達に君たちが守るものの愚かさを教えてあげようと思っただけ。……さてと、これで用事は済んだし、私は帰らせてもらうよ」

「馬鹿言え、それとこれとは話が別だ。そうは問屋が卸さないぜ？」

「切歌、調。あなた達はこれを持って子供たちを連れて地上に出なさい。帰り方は分かるでしょう。そのリストは然るべき機関に渡して」  
クリスはエルナに拳銃を向ける。

マリアは短剣を構えながら、二人にリストを投げ渡し、子供たちの避難指示を出した。

二人分の視線がエルナに突き刺さるが、彼女は普段通りの態度のまま。まだ。

切歌と調、子供たちの走る足音が響いてくる。それが十分に離れたのを認識してから、双方がほぼ同時に動く。

戦闘が開始した。

「フッ……」

マリアの短剣が蛇腹状に変化しまるで鞭のようにエルナのトライデントに、右腕にまとわりつく。それと同時にヒールを深く地面に突き刺し、体を固定する。エルナの潜行能力の正体を知らない彼女が現状最も有効に撃てる策だ。

武器を引きはがすという目論みこそトリアイナの高い出力によって阻止されたものの、動きを止めることには成功した。

しかし、それはマリアにとって薄氷の上で踏ん張っているようなもの。

エルナが力いっぱい引つ張れば簡単に振りほどかれてしまう。実

際、エルナにそこまで力を入れている様子は見られないが、マリアはこの状態を維持し続けているだけで手いっぱいだ。

だからこそ――。

「アタシが動くってえわけだッ！」

「チッ！」

拳銃がガトリングガンに変形し、その砲門がエルナの方を向く。

思わずエルナは舌打ちした。

本来なら潜行してしまえば射線上から逃れることは容易なのだが、マリアが彼女に触れているために一緒に潜行してしまう。潜行空間ではマリアは身動き一つとることが出来ないのだが、何かの拍子でトリアイナの秘密を察知されてしまう可能性がある。

力任せにマリアの拘束を引きはがすのも手だったが、それでは間に合わないだろう。

その為、今この状況はエルナにとってかなり面倒なことになっていった。

「動きさえ止めることが出来れば、種も仕掛けも関係ないッ！」

「百里ある！」

「もってけよおッ！」

「ッ！」

だからこそ、エルナは引つ張るのではなく、引つ張られることを選択をした。

拮抗状態が崩れ、エルナの体がマリアの方に引つ張られる。

無数の弾丸が、さつきまで彼女がいたところの壁に穴をあける。

「なッ?!」

その勢いで蛇腹剣の拘束が緩み、エルナに自由が生まれた。

潜行する。

ゆつくりと流れる外界の様子を、エルナは潜行空間の中から見つめていた。いくら自由に移動できるとはいえ、脱出できるまでこの空間内にいることはできない。

移動したとしても、通路は一本道。切歌たち移動してからそんなに時間がたっていない以上、必ずどこかで鉢合わせる。目の前で浮上し

てしまう事すらあり得るし、そうなった場合子供たちが危ない。

外界では潜行していない時間軸のエルナを、クリスがガトリングガンで攻撃していた。それを彼女はトライデントを自由の利く左手に投げ渡し、回転させて弾いている。

その様子を見ながら、クリスの背後に移動した。

浮上。

この瞬間にエルナが潜行してから浮上するまでの、本来の時間軸での行動の記憶がなかったものになる。

浮上と同時にクリスの背に穂先を振り下ろす。

「消えた?!」

「あの時と同じ……後ろよッ!」

「ッ!」

「この位置だと背後を取る意味がないか」

「その出力で言えたことかよッ!」

クリスは即座にガトリングガンを銃剣付きの拳銃に変形させ、振り返って背後からの一撃を受け止める。

しかし、トリアイナの出力の方が高いため、鏝迫り合いのまま下に抑え込まれてしまう。

マリアが踏み込み、逆手持ちにした短剣で突撃する。が、一瞬だけ刀身を浮かせ、再度潜行する。

通常の時間軸ではエルナがクリスを抑え込みながら、長いトライデントの柄でマリアの一撃を受け止めた。その瞬間、隙についてクリスが離脱し、エルナに向かって発砲した。

自分に向かって飛翔する弾丸をしり目に、エルナはマリアの背後に回って浮上する。

それまでの記憶が二人から消え、本来のエルナと鏝ぜり合っていたマリアはバランスを崩し、しかし弾丸は彼女のいた場所に……つまりマリアのいる場所に放たれている。

「またッ!」

「マリアッ!」

「ッ!」

弾丸自体はガントレットで咄嗟に防いだが、その背後から刃が振り下ろされる。

それを順手持ちに切り替えた短剣で受け流し、膝蹴りを叩きこもうとするが手のひらで受け止められた。

エルナの戦闘センスはトリアイナの潜行能力を抜きに考えてもマリアと互角だ。

調からの通信が入る。

『マリア！ 脱出に成功した。私達も戻って合流する！』

「ええ！ そうしてくれると助かるわ！」

「脱出したか、なら長居する理由はないッ！」

マリアの言動から人質だった子供たちが全員脱出したことを把握したエルナは、前蹴りでマリアを蹴り飛ばし、三度潜行した。

調達が戻ってきたころには、すでにエルナは脱出に成功していた。

## フランカの覚悟

フランス、ひいてはヨーロッパ中を混乱に陥れていた人身売買組織、『ミノタウロス』の一斉摘発から一週間が経過していた。

関係者は全員死刑となり、調達が提出した顧客リストは表向きの政治的混乱が見られない以上、闇に葬られてしまったと考えるのが妥当だった。

現在は——クラッキングすれば可能だろうが——それ以上の情報は入手することが出来ず、上手く隠蔽している政府側が一枚上手だった……という訳だろう。

その事実にはマリア達はショックを受けていたようだが、逆に言ってしまうばすでにルートは断たれてしまっているのです、これ以上の腐敗は起きづらいともいえた。

——それでも考えないとやってられんよなあ。

雷はコーヒーを啜りながら脳内で呟いた。

今のご時世ならファイの革命を煽るでまかせだといいい逃れることが可能だ。

一般に人間にはこれだけでいい。発展途上国なら一気に爆発していただろうが、先進国である以上、何よりもその国民は自らの安定がひっくり返ることを恐れる。被害者の家族はそうは望まないだろうが、ヨーロッパの全人口の数パーセント程度、どう考えてもひっくり返るには至らない。

「マリアから聞いたけど、この攻撃、捕縛よりもこっちがメインに見えるんだよな」

雷がパソコンに映された画像データを見ながら呟く。

そこにはアジトの中にあつた書類や機械類の上に三又の槍が突き刺さっており、水浸しな上に原形をとどめないほどに破壊しつくされていた。

突き刺さっている槍は捕縛の時に落としたもの。水浸しなのは、エルナのギアがトリアイナであることから、その力で水流を生み出して破壊したのだと考えられた。

そして少し前に届けられた録音機の中の音声を再生する。

「ノーブルレッドの時といい、マリア……手癖が悪すぎない？」  
思わず苦笑してしまう。

エルナの正体不明の能力を鑑みて、盗聴器ではなく録音機を採用したのはいいのだが、マリアはいつの間にかこれを取り付け、さらに回収したというのか。

言うては何だが、スリ師として十分やっていけるだろう。……もちろん、雷としては顔見知りか犯罪者になるのはごめんだというのが本音だが。

「空間転移が能力っぽいけど……ん？　音が消えた……それにこれは……ソナー音？　約十秒ほどで音が戻って……クラリスって誰だ？

もしかして……」

再生を一度止め、手元にあるピースで結論を組み上げていく。

しかし、不確定要素があまりにも多く、組みあがった結論は結論とはいえないものだった。

——八方塞がりだな、このままでは。

そんな雷の思考の中にドアを叩くノックの音が聞こえてきた。

「はーい」そう返事したものの、一向にドアの前の人物は入ってくる気が配がない。自動ドアだからすぐに開くはずだがと、変に思っただけを上げてみると、その答えをその人物が教えてくれた。

「あの一、鍵、開けてくれませんか？」

「あ、ごめんごめん」

扉の前に立っていたフランカに言われ、大慌てでロックを解除する。

集中するために鍵をかけていたことをすっかり失念していた。

フランカはキッチンで作ったのであろうベイクトチーズケーキと、温かい紅茶の入ったティーセットをお盆に乗せ、少しばかり頬を膨らませて入ってきた。

適当に返事されたことが少々立腹のようだった。

「もう、閉じこもって集中するのはいいですけど、来客があった時は直ぐに鍵を開けてください！」

「すみません……」

「全く、雷さんもいい大人なんですから、そのところ、しっかりとしてくださいね?」

「はい……」

「反省したならこれ、食べてもいいです。いい集中にはいい糖分。カフェテリアのキッチンで作ったレモンのチーズケーキです。雷さんって紅茶大丈夫でしたよね?」

「全然平気。むしろケーキ系には紅茶が合うから大当たり」

「それならよかったです!」

そう言ってフランカは長方形のケーキを二人分に切り分け、紅茶を二つのカップに注いだ。お盆をサイコキネシスで空中に固定し、即席のテーブルにしている。かなりしつかりと固定されていた。

雷は彼女をベッドに座らせ、向かい合う形になる。

チーズケーキはフォークの通りがよく、チーズの濃い味の後にレモンのサツパリとした味が来る、とても美味しいものだ。

フランカが言うには初めて作ったらしいが、そうとは思えない仕上がりがりだった。機材の違いによる焦げ目があるとのことだが、一部の焼き目が少し濃い程度で、あまりそういうのを気にしない雷にはピンとこないところだ。

紅茶も薫り高く、後引く口の中をリセットするのにちょうどいい塩梅だった。

ほっと一息をついていると、フランカがおずおずと聞いた。

「最近……その、根を詰めすぎじゃないですか?」

「……バレてた?」

「テレパスを使わなくても分かりますよ。目の下のくまが濃くなっていますし」

「えっ嘘?!」

大慌てで手鏡で顔を確認する。雷もそのあたりは気にしてしまうようだ。やっぱり雷さんも女の人なんだなあ、とフランカは失礼ながらそう思った。

その寝不足の原因が自分にあることは理解していたが。

「私のギアのことですよね」

「え？」

だからこそと思い切って切り出してみたが、雷はまたも不意打ちを喰らってきよとんとしている。

「私のギア……ううん、私が戦う事にまだ悩んでるんですよ？」

「……うん。正直、まだ悩んでる」

雷は膝に肘を寄せ、指を組んで俯いた。

フランカが身を乗り出して聞く。

「どうしてですか？」

「フランカは私達と違って帰るべき場所がある。……もちろん、私達にもあるけど、君はまだ未成年だ。それに、自らの意思で参加したんじゃないくて、呼び出されたからここにいる。キャロルは割り切ってるけど、家族を失った私からすれば、今からでも家族のところに帰って欲しいと思ってるよ」

雷の精神年齢は実質五年前のままだ。大人びていたかもしれないが、それでも女子高生の範疇に収まっている。それに比べれば、キャロルやエルフナインはホームクルスとしてはあるが、彼女に比べてはるかに長い時を生きている。

雷にしてみれば、フランカはほとんど同い年、いや、今では年上ですらあった。

そんな彼女に、命を落とす危険性がある戦場に立つてほしくないと思うことが、雷にストレスをかけていた。

「雷さん」

「……？」

フランカに真剣な声色で呼びかけられ、思わず顔を上げる。見つめた彼女の目は、覚悟の色で満ち満ちていた。

「五年前のあの日。雷さんと、雷さんの中にいたアダドさんに初めて出会った時から、私は決めていました。たとえ相手がどの誰で何であろうと、自分の考えで、心で決めると。ですので、ここに来たきっかけは招集があったからですけど、来ると決めたのは私の心です。雷さんは気にしないでください」



「でも……」

「私はあなたに会って、奴隷でもなく怪物でもない、フランカという人間になれたんです。……今、私の胸の中にある未来の聖遺物、星の涙。これが告げてるんです。この戦いは、人類が次のステップに進む戦いだって……なんとなくわかるんです。だから、その、私に恩返しをさせてくれませんか？」

雷は逡巡する。

フランカの想いと願い、そして、彼女が持つ星の涙……それらを受け止め、どうするべきか。

彼女の願い出を拒否することが出来るのが大人なのだろう。このまま家族の元に帰ってもらう、これが最善のはずだ。

しかし、人として、いや、雷として、フランカの想いを無下にすることは出来なかった。

「わかった。あなたのこととて悩むのは止める」

「ホントですか?!」

「うん。だけど、私が駄目だと判断したら何が何でも離脱してもらうから。フランカを預かってる以上、あなたの家族のところは無事に帰ってもらわないといけないからね」

「ありがとうございます！」

フランカが感無量といった様子の笑顔で勢いよく頭を下げた、その瞬間だった。

ミュニアースが激震した。

## ミュニニアース襲撃

ミアの自室の扉を何者かがノックする。

もつとも、ファイのメンバーは彼女を除けば三人しかおらず、そのうち二人は任務に出ているため一人だけだ。

ノックに気付いたミアは腹筋のためにぶら下がっていた鉄骨から足を外し、まるで猫のように身を翻して着地した。

炎のような、赤みがかったオレンジの髪についた汗をそばに置いてあつたタオルでふき取り、首にかける。

味の薄いスポドリを飲みながら返事をして招き入れれば、大きな丸眼鏡とぶかぶかの白衣が特徴的な女性、クラリスが現れた。

彼女はファイのトップで、ミア達の戦うための武器であるファウストギアを開発した研究者だ。また、ミアの親代わりでもあつた。

そんな彼女に対し、ミアはどこかぶつきらぼうに問いかける。

「何か用か？」

「いやあちよつと、ミアちゃんに頼みごとがあつてね」

「それはいいが、いくら親代わりだからってミアちゃんは止めろ」

「ええ〜可愛いのに……まあそれはさておき」

「さておくなよ」

ジト目でクラリスを睨みつけるミアだったが、彼女はそれを全く気にせずに話を続ける。分かっていたことだが、クラリスは少しばかり自分本位なところがあつた。

それを理解しているミアは、肩でまあいいや、というジェスチャーをして、続きを促した。

「ミアにはね、お使いを頼みたいんだよ」

「お使い？」

ミアは首を傾げた。言葉使いは荒つぽいが、こういう細かい仕草が雷によく似ている。

「君、これからミュニニアースを襲撃するだろう？ そのついでにあるものを取って来て欲しいんだ。……いや、今後のことを思えば、攫ってきてくれ、と言った方がいいかな」

「攫って来いって……誰をだ？」

「私を、だよ」

「はあ？」

思わず顔をゆがめてしまう。

そもそもただの異端技術研究機関であるミニニアースを襲撃する理由が彼女にはよくわかっていないのだ。精々が敵対する可能性のある組織を先手を打って潰すくらいのことしかわかっていない。

しかしながら、ミアの反応に対して何の返答もないことから、クラリスは冗談を言っているわけではないようだった。

「大丈夫、行けば分かるよ」

「行けばってオイ……はあ、分かったよ」

そう言ってミアは首にかけたタオルを適当に放り投げ、飾りっ気のないベッドの上に投げ出されたノースリーブの革ジャンに素早く袖を通し、クラリスを残して部屋から出ていった。

そんな彼女の背中を、クラリスの金の瞳が怪しく見つめていた。

○○○

それはほんの数分前のことだった。

研究機関のため、大した戦闘能力を持たないミニニアースだったが、貴重な異端技術を扱っている以上、その守りは強固だ。

特に察知能力が秀でており、リペアードを応用したレーダーは周囲百キロ圏内に存在する小鳥すら見逃さない精度を誇っている。そして錬金術を応用した識別システムによって、ミニニアースに害を与えそうな存在を判別するという二重の目を持っているのだが、その目が鳥のように小さく、しかし戦闘機並みの熱量を持つ飛翔体を捉えたのだ。

その情報が所長であるエルフナインのもとに届く。

「それはミサイルではありませんか?！」

『いえ、ミサイルが照射している電波も、無人機が受信している電波も感知できていません』

「それは確かですか?」

『間違いありません。ここのレーダーが感知できないのであれば、世

界のどこも捉えられませんよ』

「そうですね……。ではバリアを……」

『安心してください。もう既に張っていますよ』

錬金術を応用したバリアがすでに展開されていることをデータで確認する。このバリアは生半可な——戦術反応兵器程度の——攻撃では傷一つつかない。それと同時に防衛システム担当の所員が有能なことに、エルフナインは内心拍手した。

これまでミュニアースが狙われたことは一度もなく、たるんでいても仕方のない部署なのだが、今という有事の際でも慌てず的確に仕事をこなしている。

これは彼らのボーナスをよくするべきかなと考えていた、その時だった。

防衛部署からの緊急通信が入る。

「何があった?!」

『キャロル所長！ バリアが突破されましたッ！』その声色からは多分の焦りが見える。

「突破されただど?! どういうことだッ！」

『バリアが焼き払われ……いえ、両断されたんですッ！』

「両断……だど?」

バリアが両断された。それが示すことは一つ。

——ファイか！

バリアを突破すること、そしてそれ以上に両断するなど通常の軍事兵器では不可能だ。そして現在敵対しているそれが可能な存在はファウストギアを所有するファイ以外ありえない。

キャロルは即座に指示を出す。

「データの保護を急げ！ 特に関発中のギア三つとアレの守りを最優先だッ！ 侵入者がどこに向かっているか……ッ?!」

ミュニアース全体が揺れ、思わずキャロルはバランスを崩してしまふ。丁度その時、防衛部署からの情報が届く。

『攻撃を受けたのは錬金術区画！』

キャロルは舌を打ちながら立ち上がり、襲撃を受けた錬金術区画に

向かう。

報告を聞いたのだろう、フランカがテレパシーで思考に介入してきた。

(フランカです！ いったい何があったんですか?!)

(すでに知っているかもしれないが、ファイからの襲撃を受けた！)

(今向っているが反対側の区画だ、テレポートでオレを跳ばせるか?)

(任せてください！ 雷さんも一緒に……)

(待て！)

フランカは雷も一緒にテレポートでジャンプしようとしたが、キャロルがそれを制止した。予想外の返答だったのか、フランカの思念には戸惑いが見える。

(オレには錬金術、フランカには超能力があるが、雷は戦うための術をもたない。連れていくのは逆に危険を伴うぞ)

(でも……)

(でもじゃない！ 早く跳ばせ！)

(は、はいッ！)

少しの間が空いた後、キャロルは襲撃を受けた錬金術区画へと跳んだ。

○○○

フランカと部屋にいた雷は、揺れがもう起きないことを確認するとすぐさま立ち上がり、自室のパソコンから研究所中の監視カメラにアクセスした。

少なくとも監視カメラで見える範囲に怪我人はおらず、研究中の資料の安全が保たれていることを把握する。錬金術の区画の映像が途絶していることから、ここに何者かが侵入したのだ。現在最優先で開発が進められているギア三種と、同時並行で建造されているマシンに被害は全くなかったことに、雷は胸をなでおろした。

しかしカメラ越しでは外見しか分からない。揺れによるショックで内部がどうなっているか分からない以上、現場に行くしかなかった。

雷は画面から目を離し、後ろにいるフランカに声をかける。

「フランカ！ 私をギアのところに……？」

「……」

「どうしたの？」

彼女の顔を見て、思わず拍子抜けてしまった。

フランカは今にも泣きそうな目で雷のことを見つめていたのだ。

彼女は思った。本当に戦ってはいけないのは、私ではなく雷ではないのかと。神と戦う事を宿命づけられ、その後五年間眠り続けてようやく人としての幸せを謳歌できるようになった彼女を、戦場にとどめるのは間違いなのではないかと。

雷の金の瞳がフランカを見上げる。

身長も、年齢もいつの間にか抜いてしまった彼女。

そんなふうなことを考えていると、雷がふつと微笑んだ。

あの時と変わらない微笑みだ。

「フランカが何を考えているのか、私には分からない。だけど、私はここにいたいんだ。誰がどうかじゃなくて、私がここにいたいから、私がしたいことを……ただ、それだけ」

「……分かっているじゃないですかあ……」

涙が頬を伝う。しかし、それを乱暴に拭い去って正面から雷を見つめた。

「私はキャロルさんと一緒に襲撃にあつた錬金術の区画に跳びます。雷さんもお気を付けて」

「うん」

フランカのテレポートで、二人は目的地へと跳んだ。

## 不死鳥の少女

上空一万メートルを赤い鳥が超高速で飛翔している。

それは風に揺られながらも、決して消えることのない炎の赤。まさしく火の鳥といえた。

火の鳥に心臓部に当たる場所で、その炎を形作る少女、ミアが耳に当てているインカム越しにクラリスの指示を仰ぐ。

「で？ そのターゲットはどこにいるんだ？」

『今のところはその角度でOK。そのまま真っ直ぐに進んでくれたまえ。それに、動きがあればこちらから伝えるとも』

「りよーかい」

火の鳥は大きく翼を羽ばたかせ、更に速度を上げる。現在の速度は時速換算でおよそ三千七百キロ。これはマツハ三に相当する。つまり、超音速機とほぼ直角の速度だ。

彼女はこれを、ギアすら纏っていない生身で平然と行っている。

しかし、ミアにとってはそんなことは些末なこと。人間が走ったりすることと何ら変わらない。

彼女にとっては、クラリスがターゲットの居場所を観測できることが一番の疑問であった。

（俺たちに明かしていない内通者でもいるのか？ それとも、錬金術か何かしらで観測を……いや、向こうは異端技術研究の最高峰、余程高レベルのものでもない限りすぐに逆探知されるかもしれない。だったらどうやって……）

そこでミアは自分の頬を叩いた。

気になることは気になるが、今重要なのはなぜなのかを考えるのではなく、確実に任務を遂行することだ。クラリスの言うターゲットを攫えば何が起きるのかなんて全然分らないが、今考えても仕方のないことだ。——そう割り切って、氷の大地の真ん中、南極点にある研究施設ミュニアースを捉える。

すると、施設全体を光の壁のようなものが覆った。

恐らくだが、あれが錬金術を応用したバリアだろう。聞く限りで

は、低威力の反応兵器程度では周囲の環境はともかくとして突破できないらしい。

ミアはニヤリと口角を上げる。

あんなもの、彼女にとつてみれば障子紙ときして変わらない。

それより彼女にとつて重要なのはターゲットの居場所だ。そのことを考えた瞬間、クラリスが回答した。

『幸いなことに動きはなかった。そのまま真っ直ぐ、一番近くにある研究棟に突入してくれたまえ。そこに入りさえすれば後は誤差だ。探していればいずれ見つかるさ。では、頼むよ。あ、そうそう、エルナとミハルが帰還したよ』

彼女は言うだけ言つてすぐに通信を切ってしまった。

二人が帰還したという報告もどこか雑だ。いや、今は俺の任務に集中しているのだろう、とミアは考えてオレンジ色の瞳を細めてバリアを見据える。

残り百メートルに差し掛かったところで体を起こし、右足を大きく振りあげた。そして風を体全体で受けて減速しつつ、バリアに向かって炎の爪を纏わせた回し蹴りを叩きこみ、バーナーで切断するように切り裂いた。

そしてその勢いを利用し、外壁を破壊しつつミニアース内部に突入した。

「さて、ターゲットはどこにいるのかなつと」

警報が鳴り響く中、壁を破壊した際についた粉塵や吹き込んでくる雪を払いながら周囲を見渡した。

「このあたりにいるらしいが……手がかりがクラリスに似てるっただけなんだよな……ん？」

ミアは瓦礫の山のすぐそばにいた、尻もちをついて足を震えさせている研究員を見つけた。神がもじやもじやの茶髪でどこかどんくさそうだが、纏っている雰囲気はクラリスと一切変わらない。

「私を探せってそういう事かよ……」

フツと息を吐きながら、瓦礫の上から跳び降りて研究員の目の前で着地する。



彼女は、ひいひい！と後ろに下がったが、それよりも早くミアが間合いを詰めた。

「すまないがお前をさらえって任務でな？ 大人しく攫われて……ツ?!」

「オレの目が黒いうちにそんなことさせると思ったか！」

「チツ、何時の間に……なるほど、テレポートか」

キャロルが錬金術で生成した光弾に腕を弾かれたミアは、彼女の隣に立つフランカを見て突然現れた理由を悟った。

弾かれた腕を炎で包み、それを振り払って二人と対峙する。

それを見たキャロルは眉をひそめた。

(さっき確実に腕を吹き飛ばしたはずだ……なのにどうして……)

キャロルは腕を弾いたのではなく、吹き飛ばしたのだ。しかし、炎を灯し、そしてそれが消えたころには腕は何もなかったようになってしまっている。

そもそも、錬金術を使うそぶりすらなかったのに、さも当然のように炎をコントロールしていること自体が異常だとキャロルは思った。

しかし、その思考とは別にフランカに指示を出す。

「フランカ、ルイスをテレポートさせることはできるか？」

「……すみません！ 相手との距離が近くて一緒に跳んでしまう可能性があります！」

キャロルは聞こえないように口の中で舌を打った。

「ならサイコキネシスで奴の体を拘束してくれ。その間にオレがルイスを救出する！」

「分かりました！」

「ツ！」

強力なサイコキネシスがミアの体の自由を奪い、その際にキャロルが駆け出す。キャロルの伸ばした手がルイスを掴む、その瞬間だった。

「Burned Down Laegjarn Tron」

「なツ?!」

ミアの体から炎が噴き出し、それを覆い隠すように黒とオレンジの

ボディースーツ、四肢に鱗のような装甲、牙のようなヘッドギアが装着された。その姿は、機械的なパーツが牙や鱗のような生物のようなものに置き換わってこそいるが、雷のシンフォギア、ケラウノスに形がよく似ていた。

見た目だけでなく、特性こそ違えどギアまでが雷とうり二つ。

そのことにキャロルは驚愕すると同時にルイスとの間に立ち、防御陣を展開する。

ミアはフランカのサイコキネシスによる拘束を力づくで振り切り、炎で生み出した大剣をキャロルに向かって振り下ろす。が、それよりも速く何者かの手によってミアの首が刎ね跳んだ。

空間内に迸る稲妻の残滓。

キャロルが吠える。

「雷！ どうして来た！」

「キャロルが今、記憶を消費する錬金術を使えない以上私も出張るしかないでしょ！ 大丈夫。全部無事だったし、〝これ〟も武器としてなら問題なく使えるし」

そう言つて刀身のない剣の柄をくるりと回した。これはケラウノス+の待機状態だ。今の状態ではギアとして使うことはできないが、稲妻を刀身のようにすることで身に纏わずとも戦えるようになってる。フォニツクゲインがなくとも扱えるように、雷自身が設計したものだ。

「そういう問題じゃないだろう！」

「まあまあ、ところでルイス、立てる？」

「は、はい！」

「なら早く離れた方がいい」

ルイスは首を傾げた。

「え？ でも、雷さんが今倒したんじゃない？」

「いや、この子はそんな単純じゃないよ。……私だからわかる」

その言葉通りに炎がミアを中心に渦を巻き、刎ね跳ばしたはずの首から頭が復活した。

「やっぱり……」

「チツ！ ルイス！ さっさと距離を取れ！」

「あわわわわ！」

キャロルはここでは強力な錬金術を使うことが出来ないことを恨みながら、ルイスの腕を取って引きずりながら距離を取る。

フランカの背後にルイスを放り投げた。そもそもなぜルイスが狙われているのか全く分からないが、少なくともテレポートですぐに離脱できるようにしておくのが吉だと考えてのことだ。

炎の中でミアが雷に問いかける。

「なるほど、会ってみてようやくわかった。アンタが成功体か……どうして俺の秘密がわかった」

「最初から引つ掛かってたさ。響に私のそっくりさんがいると聞いたときからね。……私は人工的に作られた命だ。そっくりさんがいるとすれば何かしらの研究に使われたと察しはつく。どうやって遺伝子情報が抜かれたのかは知らんがね？ そして撤退時に鳥のようになっていたという未来の証言と、カメラ越しに別角度からだが、さつき見せた炎による頭と腕の修復……」

雷がミアを真つ直ぐ見つめる。

「これは断定できないが、シナイ半島の神殿を焼き尽くしたのも君だろうか？ そこに運良く燃え残っていた研究資料に『PROJECT・B』と記されていたようだ。仮設ありきの推察になるが、『B』の意味は恐らく『Bennu』。エジプト神話に登場する不死の鳥……つまりミア、君は不死鳥の哲学をその身に宿している。違うかな？」

ミアは目を細め、喜びを隠しきれなかったように口角を上げた。